

---

# ディレイドマスカークレイド 仮面ライダー ディケイド外伝 仮面ライダー ディレイド

鉄槻 緋色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ディレイドマスカークレイド 仮面ライダー ディケイド外伝  
仮面ライダー ディレイド

### 【Nコード】

N8037H

### 【作者名】

鉄槻 緋色

### 【あらすじ】

多元宇宙の接触崩壊の危機回避に奔走するディケイド・ディエンド。彼らによって九つの世界は各々の滅びを回避できたが、彼らが通過した後の世界では巻き込まれた後遺症とも言うべき異常が起きていた。そんな世界救済の後始末に現れたその者の名は『ディレイド』。並行世界の危機は、ディケイドらの通りすがりの干渉により、吹き抜けた風に乱された砂絵のように逆方向のマーブル模様を描き出し、時間差で巡る万華鏡は全ての仮面を巻き込んで新たなヴィジ

ヨンを紡ぎ出す。九つの世界を横断し、その瞳は何を見るのか。  
挿絵・同・鉄槻緋色

## track・i プロローグ (前書き)

こちらは、基本的に鉄槻オリジナルキャラクターで構成される『仮面ライダー デイクイド』の外伝的ストーリーです。

「九つの世界とライダー」は流用されますが、世界観に若干のズレがあるほか、原作のメインキャラクターはほとんど出てきませんので御注意下さい。

## t r a c k · i プロローグ

私、神楽見 瞳子の人生は、二十歳を以て突然の世界の終焉と共に終わりを告げようとしていた。

ライトノベルとかゲームのイラストレーターを目指してイラストレーションの専門学校に入ったはいいけれど、別に卒業資格を得たからって即なにかでデビューできるわけでもないという、そんな当たり前のことにも気付かずに思い描いていた自分の夢が本当に夢物語に過ぎないのだという現実を知ったのが、ついこないだのこと。

じき専門学校の卒業を控えたこの時期に至って、その後の人生の宛を全く考えていなかったことに気付いた私は、アパートでひとり、途方に暮れていたところだった。

顔もスタイルも十人、いや百人並。特にファッションとかには興味もないし、我ながら野暮つたいメガネのせいで男から評価されたことなど一度もない。別に評価して欲しくもないけど。

頭だつて、とりたてて良いということもない。高校までの学力は平均値やや下という有様。私の成績はみんなの頑張りに反して平均から上になつたり下になつたりするのだ。

資格も特に持ち合わせておらず、一人暮らし特有の横着な簡単料理しかまともにできない私の唯一の取り柄と言ったら、絵を描くことだけ。

それで食っていく見通しが立たない今、もうそれだけでいずれ死ぬ、イコール人生が、世界が終わるも同然の絶望感に包まれた。

だけど、そんなものとは比べ物にならないくらい凄まじい「世界の終焉」がやってきたんだ。

窓枠を激しく打ちつけた轟音に驚いてアパートの外に飛び出した私は、そこら中にとんでもないものがウヨウヨしているのを目撃して

しまった。

どこことなく原住民族めいた、変に発展途上風味の装飾を身につけた、人ならざる人型の異形と。

いま頭上の光輪から物騒な鈍器を抜き出した、ちっちゃい羽を生やした二足歩行する獣と。

鏡から吹き出すように大量に出現し、宙を埋め尽くしているでっかい魔獣の群と。

うごめく石像のような灰色の怪物と。

いつちよまえに豪華なバツクルのついたベルトを巻いた、動物とヒトを掛け合わせたような存在と。

おとぎ話にしか現れないはずの、大小様々な魑魅魍魎の群と。

瞬く間に位置を変更する外骨格の昆虫めいた化け物と。

砂が寄り集まって現れた怪人の集団と。

ステンドグラスのような、色とりどりの硬皮を持つ、悪意の魔神と。

おおまかに分けてそんな九種類に大別される無数のそいつらが、町中を闊歩して人々を襲いビルをよじ登り破壊を撒き散らしていた。

「な、なんなのよこれ？」

そこら中をたくさんの人々が悲鳴をあげて逃げまどっている。

大きな影が頭上をかすめた次の瞬間、空を飛ぶ巨大な怪物がその民家の屋根を抉って吹き飛ばした。

「ひゃあああああ！？」

> i33345—538<

頭を抱えて飛散する瓦礫から避難し怪物から逃げる。大勢の人たちと一緒に一瞥になつて一目散に走り出した。

交差点に差し掛かる度、別方面から逃げてきた人たちと合流したり、はたまた別の化け物とはち合わせては何人かを犠牲に回れ右したり、はぐれたり。

「なんなのよもおおお！？」

そんなことを何度繰り返したろう。

だけど私は訳が分からないまま必死に目の前の恐怖から逃げ続ける

だけ。

対策なんて考えられようはずもない。

つい先ほど、屈強なお巡りさんがあっけなく怪物に吹き飛ばされたことで頼りになる希望は潰えたのだ。

もうどうしようもない。いずれ怪物に捕まって殺されちゃうんだ。

「やだ……死にたくない……死ぬのやだ……」

顔が涙でぐちゃぐちゃなのにも構ってられない。私は形振り構わずひたすら走り続けていた。

そうしたら、いつの間にか辺りは私ひとりになっていた。

他には誰もいない。怪物も、近くにはいないようだ。

「……………」

でも、なにも楽観視なんてできやしない。

「……なんなの……」

僅かに拓けた、煉瓦敷きの小さい広場から見る遠くの光景に目を奪われて、呆然と佇む。

市の開発計画によって大きく切り拓かれた広大な大地の向こうに、林立するビル群が見える。

そのビル群が、件の魑魅魍魎に取り付かれ、化け物に埋め尽くされて見えなくなっていたのだ。

まるで化け物の山。

「……なんなのよ……なんだって言うのよ!？」

口をつく叫びは止めどなく。

「なによ!終わらせたいなら、早く終わらせればいいでしょう!？」  
自分でもよく分からない。

だけど溢れ出る叫びを止める方法も分からない。

「終わらせなさいよ!どうせ私なんて何もできやしない!バカにしてんでしよう!？」  
分かってんのよ!ホラ!終わらせてみなさいよ!

悔しかった。なんだか無性に悔しかった。

ヤケクソ?開き直り?

言われなくても分かってる。

でも、死を前にしてんだから、言いたいこと言っただって、いいじゃない!?

ホラ。化け物たちが、ここで喚いている矮小な人間に気付いたみたい。いつそ苛つくほどゆっくりと、大量のモンスターがこっちへ飛んでくるのが見える。

「はは。来た。……あはは……」  
意味なんて分からない。

どうせ死ぬのだ。

「ははは……」

どうせ、わたしは……。

> i 3 3 4 6 | 5 3 8 <



track・2 瞳子の世界

はっ、と、唐突に我に返った。

「あ……あれ？」

変な感じがした。まるで長い夢から醒めたような。

そんなはずはない。目の前の光景は何一つ変わることなく、遠くからこちらに向かって飛んでくる化け物たちは、今だってああして私のことを殺そうと迫ってきている最中なのだ。

「あれ？ ……え？」

だけど、私は目に映る光景に違和感を覚えた。  
なにかがおかしい。

「え？ なに？」

私は、程なくその違和感の正体に気付いた。

「動いて……ない？」

翼のない化け物がいったいどうやって飛んでいるのかはもうこの際考えないことにして、問題は、翼を持つ化け物が、羽ばたきをやめ、翼を不自然な角度で止めているのだ。

翼を持たない、細長い蛇みたいなやつにしても、体をうねらせていたかと思っただけ、こいつも宙で体を固定させている。

違和感の正体。みんな、止まっているのだ。

「え？ なんて？」

遠くのビルに群がる化け物たちも、まったく動いていないように見える。

「なんなの……」

そうして、視線を僅かに下げたその時。

目の前にある物に気付いた。

「？」

黄色い、透明の四角い棒。

一メートル程の黄色のカラーアクリルの棒みたいなのが、本当にす

ぐ目の前、真っ直ぐとそこにあった。

「え？」

その棒が、どこから現れたのか、目線を下げて棒を辿ったら、私の胸の真ん中から生えていた。

「！！！！？」

> i 3 3 5 1 — 5 3 8 <

体の中をそれが通っている異物感が、ある。

感触とバランスで、なんとなく背中にまで突き抜けているだろうと感じる。

痛くない。痛くないけど、こんな太い角材を突き刺されたショックで混乱しない訳がない。

「あつ？ ああああああ！？」

そして状況は私の理解をまったく待たない。

混乱する私の頭の中に、私以外の「九人の私」の記憶が現れた。

「あああああなつ、なつ、なにっ、なにこれっ！？」

イラストレーターを目指していた私の人生は一度だけのはずなのに、同時に勉強して警察官になってたり、様々な事件に首突っ込んで雑誌の記事を書いたり、自由奔放に旅人してたりとか、様々な人生を歩む私自身の記憶が、合計十個も出てきたんだ。

「う、うそ！？ 私そんなことしてないよ！？」

私は頭を抱えて座り込んだ。

胸に黄色い棒を刺したまま。

「もう！なんなのよこれ！？ ワケ分かんないよ！」

気持ち悪いから引き抜いてやろうと、掴もうとしたけど、なんとそいつは触れない。手がすり抜けてしまった。

「へ？」

胸を通る感触はあるのに、何度やっても手だけすり抜けてしまう。

「ああもう！」

『無駄だ。脆弱な三次元人にそのライドピラーは触れない。』

突然後ろからかけられた男の声に、私は慌てて振り向いた。

「ひっ!？」

そこにいたのは、人間かと思いきや、黄色い人型の化け物だった。『確かに、的確な定義をお前は持っていないな。』

化け物と思っただけ、襲いかかってくるでもなく、比較的人間くさい態度で話しかけてくるそいつを、つい無遠慮に観察してしまう。よく見れば、それはボディスーツを着た人間のようにも見えた。まるで先鋭的なスポーツ用品メーカーのデザインのような、黄と白と黒に彩られたスーツ。

だけどそのボディスーツとは完全に不釣り合いなベルトを腰に巻いている。バツクル部分に複雑な機械・まるで古くさいラジオを裏返しにしたような武骨な機械の集合体みたいなものが張り付いている。

胸や肩には、ボディスーツのデザインラインに添ったプロテクターのようなものが包み込んでいる。……なんでベルトだけこんなゴツいんだろ。

頭を包むヘルメットは完全に顎も首も隙間なく覆い（中身が人間だったら、だけど）、その表面には不規則なドットパターンが描かれている。

顔の四隅に四角を配したドットパターンのそれに、何か見覚えを感じて少し考えた私は、それを携帯電話のカメラ機能で情報を読み込む記号「QRコード」だと連想した。

そこまで考えたところで、そいつの顔面のドットパターンの中の巨大な複眼みたいな青い目が、こちらをじっと見ているのに気付いた。『観察はそれくらいいいか？ 落ち着いたなら、俺の話を書いてくれ。』

「え？」

> i 3 3 5 2 — 5 3 8 <

言われて改めて気付く。

十人分の記憶のことも、胸に刺さった黄色い棒のことも、今はそれ

ほど心を乱していない。

それどころか胸に刺さっていた黄色い棒が、いつの間にか消えてなくなっている。

「あれ？」

『ライドプレイヤーによってお前は俺と接続状態になった。インスタールが完了したからライドプレイヤーは消えた。脆弱な三次元人ない概念による現象を、だからお前は受け入れることができている。お前の恐慌が解消したのは、それが理由だ。』

「はあ。」

いや。そうは言われてもあんたの言っていることが分からないよ。

『……なんとなく分かった気になった、ということだ。』

「へえ。 つつて、いま、私の考え!？」

こいつ、いま私の思考に対して返事した!？」

『音声のみが伝達の手段ではない。表層の意識もちゃんと聴こえているぞ。』

「ちゃんと聴こえるなそんなもん!？」

『そして俺からお前に伝達するには音声を介しなければならぬことも分かっている。ゆえに俺の話の聞け。』

「はあ。」

確かに。さっきまで狂乱して逃げ回っていたのがバカらしくなるくらい今は落ち着いている。

「えと、じゃあ、説明して。」

『うむ。……その前にお前の訝しい気配が邪魔だな。』

「そりゃそうでしょ!？」

さっきからずっと「なにその格好」と考え続けていたんだから。

『まずは話しやすくしましょう。』

言つとそいつはどこからともなくでっかい機械じみた剣を取り出した。

水平に構えると、空いた手を剣の峰の部分に添えて持った。

剣の峰には、拳銃の上の部分みたいなスライドカバーがついている。

そいつは両手を内側方向に力を込め、スライドカバーを柄側に移動させた。

そして片手を翻すと、まるで手品みたいにカードが一枚現れた。そのカードを、スライドカバーの下にあったスリットに投げ込み、刀身の中に挿入した。

続いてまた剣を両手で持ち、スライドカバーを元の位置に戻す。

その動作だけみれば、まるで刀の「納刀・抜刀」の動作だ。

《カメンライドウ・デイ・デイスガイズ!》

複数の声が僅かにぶれて重なったかのような電子音声認証を答えると、そいつはその剣で虚空を切り裂いた。

すると、剣の軌跡を追って光のベールが現れ、そこにそいつの顔面と同じドットパターンのマークが描かれた。

> i 3 3 5 4 — 5 3 8 <

同時にそいつ自身に変化が起きた。

黄色いその姿がぼやけ、モザイク柄のノイズが走ったかと思うと、代わってそこに若い人間の男の姿が現れた。

「ふん。こんなものか。……お前の名前は、神楽見 瞳子、か。なら……」

握ったり開いたりしてる自分の手を見下ろしてたそいつは、名乗りもしてない私の名前を持ち出してこちらを向くと、またとんでもないことを言い出した。

「俺の名はデイレイドと言う。だがこれからはこの姿の時は神楽見透と名乗ろう。これでお前も呼びかけやすくなったろう?」

「いや。待つてよ。」

なんかいろいろ見透かされているせいで、こいつは話が早いと思っ  
ているんだろうけど、私はそうはいかないんだって。

「よく分かんないんだけど? なんで私の名字なのよ?」

「名の根拠については、選んだのがお前だったということ以外、特  
にないな。下の名については、まあこれからあちこち通り抜けるこ  
とになりそうだからな。それに近親者ということにしておけば周

困への対策もしやすい。」

「は？」

だからなんで私なのかとかそもそもこの状況はいつたいたいなんなのかとか、あとそういうことに付随する疑問に思った言葉にならないあれこれが一瞬で頭を埋め尽くす。

ホント、こういうたくさんのイメージが、そのまま相手に頭突きかなにかで伝わったらとっても楽なのに。

「だから俺の話を聞けと言っている。お前の疑問はだいたい分かったから、いいから俺に話をさせる。」

「ういや!？」

またも思考に返事され奇声をあげてしまう。

だが、確かにこいつの通りだ。

今の私なら分かる。

これで恐らく、いや、確実にこいつは私の疑問をひとつ残らず解消してくれるだろうことを。

「……とまあ、こんなところか。」

「……………うん。」

そいつ。いや、ディレイド、じゃなくって『透』は話を締めくくった。

透の話は確かに澱みなく、むしろ鮮やかに私を完全納得に収めてみせた。

曰く。

私が今いる世界の他に、九つの世界があること。

その、合計十の世界がなぜか互いに急接近して接触崩壊しようとしていること。

そして、それを回避するために、『デイケイド』『デイエンド』なる存在が世界救済に動いていること。

この『透』こと『ディレイド』も、そいつらに遅れて世界救済に現れたこと。

「別に遅刻してきたわけじゃない。むしろあいつらがやったことの後始末をする必要性のために俺が来たんだ。」  
別にどうでもいい。

とにかく、あそこにいる化け物どもは、その異世界のどこかの住人で、世界が接触崩壊しそうなせいでこうして本来存在しないはずの私たちの世界に現れた、よその世界でも混乱が起きている、それを収拾させるために現れた救世主、ということだ。

そんで、なんで「私」なのかと問えば、

「俺は単独でも次元間跳躍ワールドスライド自体は可能だが、ある程度行き先の目印があつたほうが効率がいい。異世界で起きている異変全ての事象に一番近い場所にいるのが、お前だったというだけのことだ。」

異世界の「私」たちがたまたま目的地の近くにいたから、道案内にされただけ、らしい。

「それだけじゃない。いろいろと手伝ってもらうぞ。」

「なんでよ!?!」

透の言葉に伸び上がって抗議する。

「自慢じゃないけど、私なんかんの役にも立たないよ!?!」

「この世界のお前の役目は俺の基点となることではぼ終了している。あとはそれぞれの世界のお前に協力してもらおうさ。」

なにそれ。面白い言いくさ。

「俺の言ったことを正確に理解してくれれば、そんなクサることな  
んかないんだぞ?」

「なによ。つてか頭ン中のことにいちいち答えてくれなくていいつて。気持ち悪い」

でも透は歪んだところのないフラットな笑みで答えてくる。

「役に立たないだなんてことはない。この世界のお前は俺に接続され基点になるという役目を果たした。役に立ったぞ。……こう言えば分かりやすいか。」

ん〜。まあ確かに言われてほっとしちゃってる自分がいるけど、どうも言いくるめられた感じが拭えない。

だいたい、頼まれて自分からどうこうしたワケじゃないし、なんか「条件に合うのがたまたま私だった」だなんて、自分の力で成したことじゃないみたいだし。

「確かにたまたまお前だったけどな。運も当人の実力のうちだぞ。」

「いや、お前は良い運命だと言うのが正確か。」

「いや、そこは言い直さないでよ。なおさらワケ分かんなくなるから。」

まあいい。透の物言いは、慰める気のなさが聞こえを良くしてるところがあるのがなんとなく分かった。

変に同情したりせず、押し付けがましさが無い。

……あとは私の納得だけか……。

> i33353—538 <

「よし。だいたい分かってもらえたなら、俺はそろそろ行く。」

突然、透がそう言っただけで居住まいを正した。

「最後にひとつ言っておく。あまり直接関係ないことだが、この世界が崩壊を免れるために静止してから、客観的には数ヶ月経っている。」

「へ!？」

「お前が世界の静止に気付いた時、一瞬前後の脈絡に違和感を感じただろう。あの瞬間に、宇宙の外側からすれば数ヶ月経過していたということだ。」

世界が止まって見えてから、何ヶ月もたってる……?」

「まあ、当の世界の住人に言っても仕方ない情報だがな。止まっているんだから時間経過もへったくれもない。」

「はあ。あの?」

「他の宇宙では既に状況が進んでいる、ということだけ理解してくれ。お前と、ほかの九つの世界のお前とで齟齬があるとちよつとだけ面倒だからな。」

ふうん。

「それと、俺がこの世界から離脱した瞬間、俺の制御から離れたお



前も再び静止する。次にここにいるお前が気がつくのは全てが片付いた後だな。」

「は？」

「この世界のお前と会うのは、たぶんこれが最後だということだ。じゃあな。また別の世界で会おう、瞳子。」

「え？ちよ、ちよつと待って」

そうして、透は実に一方的に目の前から消え去った。

t r a c k . 3 クウガの世界

白昼の街中。

大勢の人々が行き交う雑踏の只中。

その瞬間そこに存在する全ての人間の視界の及ばぬ所、全ての人間の「死角」からデイレイドこと神楽見 透が現れた。

《ワールドスライド》の瞬間を見切れる人間は存在しない。ゆえに雑踏の只中に突然人間がひとり増えたことを、ここにいる誰もが気付けない。

透も、何事もないように雑踏に紛れて歩みを進める。

遠くにそびえる灯溶山にも目をくれず、一直線に目的の方角へ突き進む透。

やがて交差点に差し掛かった透は、通行人を躲しながら交差路から走ってきた自転車に乗った女性警察官の襟首を、すれ違いざまにいきなり掴み上げた。

「んぎゃ!?!」

潰れたカエルのような声をあげた女性警察官の身体が一瞬浮き、足の間からすつぽ抜けた自転車だけがとろとろと走り去ってゆく。

> i 3 4 4 3 — 5 3 8 <

尻餅をついた女性警察官は、襟元を整えて咳き込むと、透目掛けて怒鳴りつけてきた。

「いきなりナニするんですかっ!?!」

「よう。瞳子。」

「あ!?!」

しれっと挨拶をされてキョトンとしているその女性警察官は、すなわちこの世界に存在する「神楽見 瞳子」であった。

「透!?!」

「うむ。さっきぶりだ。というわけで、さっそくだが協力してもらっぞ。」

「その前に、公務執行妨害と暴行傷害罪でクサイメシでも御馳走してあげます。」

瞳子はしかめっ面で透の右手を掴むと手錠を振り降ろした。

「悪いが宇宙規模の超越権限で遠慮させてもらおう。」

台詞と同時に透がひょいと右手を引くと、振り降ろされた手錠はそこにあつた瞳子自身の左手首に噛み付いた。

「あれ？」

続いて透が瞳子の左手を軽く振ると、手首の手錠が一回転し、右手首にまではめ込まれた。

「あれ？」

「さあ。きりきり歩け。」

両手を拘束された瞳子は、手錠のチェーンを引っ張られ、成す術無く透に連行されていった。

「……と言っわけで、未確認生命体四号と十号の活躍によって、未曾有の大惨事は免れたんだけど、事態の収束と同時にその未確認生命体四号と十号が二体とも姿を眩ましちゃったの。」

「ふむ。」

雑草まみれの公園のベンチで座るふたり。

透はこの世界の事情を瞳子から聞いていた。

「って言うか、「私」が近くにいた「異変」って、このこと!?!?」

「まあな。お前が目撃したその「未確認生命体」とやらの、人間を守っていたうちの赤いほうがこの世界の守護者で、もう片方のマゼンダのほうが『ディケイド』だ。」

「「守護者」って?」

「総じて「仮面ライダー」と呼称されている。各々、世界の異変を鎮圧する存在だ。「異変」と「仮面ライダー」はだいたいワンセットになっっているはずだ。俺もディケイドも「仮面ライダー」ということになる。」

「うええ。だったら私、て言うか「私」みんな、それっぽいの見て

るよ。」

しかめっ面で吐き出すマネをしながら言う瞳子。

「私みんな」って言い方、変な感じ。あんたの言ったこと、今ならよく分かるよ。警察やつてる私の他に、別世界の私がいるってのが、分かる。自分のことみたいに。」

「そういうことだ。あの瞬間、ライドピラーは九つの世界全てのお前を同時に貫いていた。並行存在を疑似的にひとつにする。俺の手伝いが円滑に遂行できるわけだ。」

「ううう。せめて事前にひとこと欲しかったなあ……」

より深く事情を理解した瞳子は、ますます深く悲嘆に暮れていた。だが透は一切頓着しないようだ。

「なにを言っている。破滅も救済も事後承諾が基本だ。」

「それは問答無用って言うのよ。」

「受け容れる側に諦めの気持ちがあつたわけがないだろう？ 諦めたのなら承諾したも同然だ。」

「ちよつと……それは女性には受け容れがたい屁理屈なんだけど……？」

さすがに瞳子の気配が怒りに染まるが、透の態度は変わらない。

「反抗心でも構わない。人間ならば、意志ある限り戦い続けるべきだ。すなわち、状況を受け容れたということになる。どちらでも同じことだ。とにかく簡単に言えば、「なつたものは仕方がないんだから、四の五の言わずに協力しろ」ということだ。」

「ああもう。そんな理論的な我が儘初めて聞いたよ。」

こめかみを抑えてうめく瞳子。

「ここのお前の言い草もずいぶん理論的だぞ。「絵描きの瞳子」とは大違いだな。あの瞳子になにか言っておきたいことはないか？」

「うるさい。「なんでもいいから働け」って言いたい。……あああ自分に自分でお説教なんて本当ワケ分かんないよ……」

瞳子は頭を抱え、その場で沈没してゆく。

大違い呼ばわりされた「絵描きの瞳子」も今では瞳子自身も同然だ

から怒りもするが、「自分でありながら他人」にして「他人でありながら自分」という複雑な自己を、瞳子はまだ整理できていなかった。

「さて。そろそろ本題だ。 なにか「異変」に心当たりはないか？」

「え？」

瞳子はきょとんと透を見返した。

なぜなら、たった今その「異変」が終わったという話をしたばかりだったから。

それなのになぜ、そんな問いを訊くのだろうか？

「未確認生命体四号と十号が片付けた異変」はもう終わった。俺が聞きたいのは、その次の「異変」だ。」

「ヒトの頭の中読まないでよ！ もうそんな変な事件なんて起きてないよ？ 私が関わったのもフツの万引きや引ったくりくらいで。」

そう言っただけで瞳子はメモ帳と携帯電話を開いて自分の仕事を確認する。

「あ。 そうだ。」

突然瞳子はイタズラめいた笑みを浮かべると、携帯電話の画像を透の目前にかざした。

「行方不明の「尋ね人」の情報 coming の。 あんたもこの人見かけたら連絡ちょうだい？」

それくらいついでに手伝ってくれてもいいでしょ、という瞳子の思惑を聴き流しながら、透はその画像の人物を一瞥して立ち上がった。

「あ！？ ちょっと！？ ちゃんと見てよ！？」

「もう覚えた。だが、そいつはもういないかもしれないぞ。」

「え！？」

透の言葉の意味を察知した瞳子の表情が一瞬で陰に沈む。

「ちょっと待って。それってどういう……？」

困惑する瞳子の顔を、感情の見えない表情で見下ろした透が、なんでもなさそうな声音で応えを告げた。

「「異変」だ。」

「へ!？」

瞳子の理解を待たずに、透は公園の出口へと歩き出した。

「ついて来い。お前は本部に連絡して行方不明者の情報をいくつか集める。」

「ちよつ、待つてよ!？ どういうこと!？ それについて行くんだか連絡するんだかどっちかにしてよ!？」

慌てて駆け寄る瞳子に採りあわず、透は公園入口のフェンスに立て掛けてあつた瞳子の自転車の前に立つと、巨大な機械めいた剣を喚び出して構えた。

両手で握り、刀身のスライドカバーを納刀の動作で開放すると、翻した左手に手品のように一枚のカードが現れる。

透はそれを刀身のスリットに投げ込むと再び剣を両手で持ち、抜刀の動作でスライドカバーを閉じた。

《アタックライドウ・マシンドレイダー!》

複数の声が僅かにぶれて重なったかのような音声が認証を答えると、透は無造作に剣を振るっていきなり瞳子の自転車を叩き斬った。

「ちよつとお!？」

瞳子の悲鳴があがる。

だがその自転車は真つ二つにはならず、モザイク柄のノイズに包まれるとその姿を二回りも三回りも大きく拡張させ、色を、形を変えてゆく。

やがて自転車は、一台の巨大なバイクに変移した。

黄色と白を基調に、黒のドットパターンが特徴的に全体にちりばめられている、デイレイドの高速移動手段にして拡張機能である『マシンドレイダー』である。

「ちよつと借りるぞ。さつさと後ろに乗れ。」

当たり前のようにバイクに跨がった透が、背後を親指で示しながら促した。

「これなら」ついてきて連絡する「こともできるだろう?」

「……………あ、わ、わたしの自転車は……………？」

瞳子が青い顔で問う。

「だから借りると言っただろう。用が済んだら元に戻る。分かったらさっさと乗れ。」

「あんたって……………、あんたって……………」

引き攣った顔で睨みつけるも、澄まし顔の透に対しては「のれんに腕押し」であった。

> i3444 — 538 <

## t r a c k . 4 クウガの世界

近代的な高層建築物の群を抜け、昼だというのに人気の少ないビル街のとある一角へ、黄色と白のバイク「マシンドレイダー」に跨った透と瞳子がやってきた。

パソコンのハードディスクのような回転音しかない異常に静粛なバイクを見下ろして、タンDEMシートに座る瞳子は青い顔をして呟いた。

「……ねえ。エコブームは理解してるし、電動が静かなのはいいんだけど、あんまり静かって言うか無音で走っていると、そのうちヒト撥ねかねないんじゃない？」

実際、ここに来るまでに何度も交差路からぎよっとした通行人が顔をのけぞらせているのを見ている。

どれも、あと一瞬タイミングが違ったらどうなっていたことかという恐々の連続であった。

「問題ない。」

だが透は全く一切気にしたふうもなく、あっさりと返答する。

「視界の通らない場所だろうと、俺は近距離にいる人間の所在を察知できる。ミリ秒単位で何者とも接触せずに通過できる速度・ルートを選択しているから、俺の運転で人間と事故を起こすことなどありえない。」

「ミリとか言っていないで、せめて秒単位以上のゆとりは持ちなさいよ！ギリギリぶつけないでケガはなくても心臓に悪いわよ！」

しれっと続けた透に絶叫する瞳子。  
すると突然、透が上体をねじって背後を振り向き、瞳子の顔をまじまじと覗き込んできた。

「な、なによ」

特に感情の籠もらない眼差しでただ目に映るものを見るような目つきに、トキメキなどカケラも湧いてこない瞳子はだからただ透の凝



視をいぶかしんだ。

「、ねえ」

「いや。今ざつとお前のバイタルチェックをしたんだが、特に死に繋がる異常は見当たらなかったぞ。心配し過ぎだ、瞳子。」

「はあ!？」

瞳子は、言われた内容を理解するのに数秒の時間を要した。

「だから、俺の運転がお前の心臓に深刻な影響を及ぼす可能性はないと言っている。安心しろ。」

そこまで言われた時、瞳子は自分の内側からブチンという音を聞いた気がした。

「あー!ー!」

とうとう瞳子は透の首を両手で掴んで振り回し始めた。

「だあかあらあ!あたしはちょっとでもびっくりするのモイヤだから、今度からギリギリはやめなさいっ!」

「さて。情報によると、行方不明者のうち三人がここから二百メートル圏内で消息を断っているわけだが。」

すぐ横を歩きながら透は、割と容赦なく首を絞めてやったというのに咳払いのひとつもせず話をはじめた。

「だからなんだって言うの?」

マシンディレイダーに座ったまま、恨めしそうな顔で問う瞳子。

「状況分析と捜査は警察でちゃんとやってるの。いまさらこんな所に来てどうするの?」

「人間による犯罪のほかに、この現象を説明できる根拠を俺は知っている。」

「え?」

表情を怪訝に切り替えて見上げた瞳子の目線の先で、透はなにやら指折り数え始めた。

「ふたつ……みつつ目は、少し違うな。死体が残らない「異常」。」  
その時、透の耳に、微かに甲高いノイズ音が聴こえてきた。

「……なに……この音」

それは瞳子の耳にも聴こえていた。

「気を付ける。この音は適性のある者と俺たちにしか聴こえない。」  
透が、やや真剣な面もちで辺りを見回しながら警告した。

「ミラーモンスターか。瞳子、鏡やガラスに注意しろ。いや、そこに居ろ。」

「え？」

腰を浮かしかけた瞳子の返事を待たずに、透はあらぬ方を見回しながらバイクに向かって指を振った。すると、マシンディレイダーのバックミラーが色を落とし、真っ黒になってしまった。

「バイクの横に伏せておけ。」

「え？なんなの？」

意味が分からない瞳子は、バイクから降りたものの困惑するばかり。そこに突然、どこからか鋭く飛来した光条が瞳子に襲いかかり、それを寸前で透が剣で弾き返した。

「きゃあ！？」

「伏せている！」

見上げれば、瞳子に襲いかかったそれはささくれたロープみたいなもので、それはなんと鏡面加工を施されたビルの壁面から生え伸びていた。

「な、なにあれ！？」

そして鏡の壁の中から、突き抜けるように奇怪なものが顔を出した。壁に穴が開いている訳でもないのに、そいつは壁面を境にその向こうから這い出てくる。

やがてずるりと全身を引きずり出して着地したそれは、自動車ほどもある巨大な蜘蛛だった。

「きゃああああ！？」

「ふん。この世界の仮面ライダーはどこぞをほつつき歩いてて不在なんだったな。」

瞳子を庇う位置に立ちはだかった透は、剣を構えて呟いた。

「まあ。そのために来たんだが。……さて。仕事だ。」

デイレイドライバー・カレイドブレイド。  
それがこの剣の名。

デイレイドの変身ツールにして武器にして、そしてあらゆる物体を  
万華鏡の色紙のように切り裂いて変移させる、剣。

それを透は水平に構え、片手を刀身の峰のスライドカバーに添えた。  
まるで刀を鞘に納めるようにカバーをスライドさせると、スライド  
カバーの下に刀身の中へ続くスリットが現れる。

続いて透が離れた左手を翻すとそこに、まるで手品のように一枚の  
カードが現れた。

そこには、QRコードを模したデイレイド自身の顔が描かれている。  
「変身！」

叫ぶと、指先のみでくると回したカードをデイレイドライバーの  
刀身のスリットへ差し込んだ。

すぐさま剣を両手で構え、スライドカバーを掴むとまるで刀を鞘か  
ら抜き放つように閉塞した。

《カメンライドウ・デイ・デイレイドウ！》  
多重にぶれて重なった音声認証を応え、透はその剣で虚空を切り  
裂いた。

すると、その斬撃の軌跡に沿って光のベールが現れる。そこには、  
デイレイドの顔面を模したQRコードのようなマークが出現し、そ  
して透の姿に変化が起きた。

ドット柄のノイズに包まれた透を中心に、全抱囲から現れた光の人  
影が十体ほど集まってきて重なった。

同時にその姿をグレーの異形に変化させる透。

続いて地平の彼方から飛来してきた幾本のも黄色い四角柱・ライド  
ピラーが前後、左右から透の頭部を貫いて収まった。

そしてその身をイエローに染めて、変化は終了したようだった。

一連の変化を促進した余剰エネルギーが辺りに放射され、青いデイ

メンションヴィジョンがぎらりと光を放った。  
これが、世界救済の後始末に現れた次元戦士、仮面ライダー・デイレイド。

『ミラーモンスターには、こいつでなければ対処できない。』  
呟いたデイレイドは、デイレイドライバーのスライドカバーを展開してから左手を翻すと、一枚のカードを取り出した。

そこには、まるで西洋の甲冑の兜の面貌のような、水平のスリットが幾本も入った仮面を纏った者が描かれていた。

それを刀身のスリットに挿し込み、抜刀の動作でスライドカバーと閉じた。

『カメンライドウ・リュ・リュウキ!』

認証後、すぐさま虚空を切り裂いた。

剣の軌跡に、菱形に意匠化された龍の頭部のような紋章が現れた。

デイレイドベルト・カレイドサーキット。

デイレイドの腰に巻かれた、まるで無数の機械を寄せ集めて圧縮したかのような無骨なカタマリをバックルに設置したベルトの、それが名である。

デイレイドの拡張装置であるところのカレイドサーキットは、カレイドブレイドからの「カメンライド」の指令を受け、その形状を変移させてゆく。

ドット柄のノイズに包まれたそれは、その身を収束させ、やがて楕円形のバックルに姿を変えて現れた。

変移を完了したベルトは、形を変えたバックルの中心から、黒い板状の物を左側に半分ほどはみ出させた状態で据え付けていた。ちょっと押し込めば、バックルの中心に設置できそうだ。

その黒い板の中央には、先ほど現れた龍のマークが金色で描かれている。

『変身。』

デイレイドは、再びそう言っただけで半分はみ出した黒い板を、左手でややぞんざいに押し込んだ。

同時に、四方八方から出現したデイレイドの半透明のヴィジョンがデイレイド自身に殺到して重なった。

現れた姿は……やはりデイレイドのままであつたが。

デイレイドベルト・カレイドサーキットは、既定の仮面ライダーのベルトに形状・構造・組成を变移し、該当する仮面ライダーの能力をデイレイドに与える。

いまやデイレイドは、姿こそデイレイドのままだが、その能力は「鏡の中に存在する異世界を戦場に戦いを繰り広げる戦士」仮面ライダー龍騎のものだ。

『瞳子。バイクから離れるな。』

言つてデイレイドは、デイレイドライバーのスライドカバーを開いてからベルトバックルの黒い板、「龍騎の世界」では「カードデッキ」と呼ばれていたその中から一枚のカードを引き抜いた。

デイレイドの所有するカードとはまた異なる内容のその表面には、湾曲したサーベルが描かれている。

デイレイドはそのカードをデイレイドライバーのスリットに押し込みカバーを閉じた。

《ソードベント。》

本来のデイレイドライバーのものとは違う音声が認証を応え、カレイドブレイドがぼう、と赤い光を帯びた。

『はあああ！』

裂帛の声をあげ、巨大な蜘蛛型ミラーモンスター「デイスパイダー」に躍りかかるデイレイド。

いまやミラーワールドの物理法則を付与されたカレイドブレイドの仮借ない斬撃が一撃、二撃とデイスパイダーを襲う。

その巨体にもよらず圧されてゆくデイスパイダーに、デイレイドはさらに蹴りを入れて大きく後退させ、まるでバットのように構えたカレイドブレイドのフルスイングでデイスパイダーの巨体を、出て

きた鏡面の壁めがけて吹き飛ばした。

大きく飛ばされたディスプレイパイダーは、壁に激突するかと思いきや、まるですり抜けるかのように壁の中に消えてしまった。

「な、なんなの？あれ」

『ミラーモンスターだ！あとで説明する！』

瞳子の困惑の声に応え、ディレイドもその鏡面の壁に向け駆けだした。

『はああ！』

そして激突する勢いで跳躍したディレイドも、同様に壁の中に吸い込まれるように消えていった。

次元の壁を越え、鏡の壁から飛び出したディレイドは、地面を一回転してから迅速に立ち上がった。

『ふん。バカデカいのに姿が見えないな。』

ざっと見回した辺りには、先ほど吹き飛ばしたディスプレイパイダーの姿がない。あれほどの巨体が隠れる場所もないというのに。

だから透は前方に向かって飛び込むように跳躍した。

その一瞬後、今までディレイドが立っていた地点をささくれた太いロープが袂り飛ばした。

すなわち、出てきた鏡面の壁に張り付き真上で待ち伏せしていたディスプレイパイダーに向き直ったディレイドは、バツクルのカードデッキからカードを抜き放ち、ディレイドライバーのスライドを開けて挿し込むと、カバーを再び閉じた。

《ストライクベント。》

認証の音声と同時に、どこからともなく飛来した、赤い龍の首のような手甲を右手に装着する。

『浅薄で助かるな。とりあえずそこから降りてこい。』

言いざまに、その龍の手甲から火球を射出しディスプレイパイダーを撃ち抜いた。

苦悶に身をよじりながら、あえなく落下してくるディスプレイパイダーの

巨体。

『よし。いい角度だ。できるだけビルの壁を壊したくないんでな。』  
言ってディレイドは、三度バツクルからカードを引き抜き、ディレイドライバーに装填した。

《ファイナルベント。》

スライドカバーの閉塞と同時に音声が終末のキーワードを告げると、このミラーワールドの同じ地点に、停車していたマシンディレイダーがノイズと共に出現し、無人のまま急発進して大きく跳躍した。  
『はああ！』

軌道を合わせて同様に跳躍したディレイド。

マシンディレイダーから放たれた強力な波動を背中に受け、跳び蹴りの姿勢に移行したディレイドの身体はまるで砲弾の発射のように加速した。

『でああああ！』

これこそ、仮面ライダー龍騎の必殺技「ドラゴンライダーキック」。本来は、龍騎自身と契約モンスターであるドラグレッダーの二体による連携技であったが、そもそも契約モンスターを持たないディレイドは、このように各種ツールを代用してその技を再現する。

『あああああ！』

そして、ディレイドの渾身の蹴りがデイスパイダーに突き刺さり、モンスターを爆砕させた。

くすぶる炎の中立ち上がったディレイドは、戦闘終了になんら感慨も抱かず、辺りをゆっくりと見回した。

『…………ふむ。』

振り返り、鏡の壁面を向くと、そちらへ歩いてゆく。

飛び込んでいった時と同様に、唐突に壁からディレイドが飛び出してきた。

鏡面の壁から現実世界に帰還したディレイドは、ディレイドライバーにカードを装填すると、透の姿に変移した。

《カメンライドウ・デイ・デイスガイズ!》

「片付けたぞ。」

「ねえ!? ちょっと!? そばにいろって言われたのに、バイクのほうで勝手に走り出したんだけど!？」

そこへ、ばたばたと半泣きの瞳子が駆け寄ってきて喚いた。

「ああ。他に危険がないと分かったんで、勝手に借りて動かした。」  
しれっと応える透。

「言って!? お願いだから先にひとこと言って!？」

「留意するが、状況によつては不可能だ。それより」

言つと、透は瞳子の肩に手を乗せた。

「ミラーモンスターはまだいる。ミラーモンスターというのは、今見たようなやつだ。鏡の向こうの世界に生息している。片付けてやりたいが、他の世界でも異常が起きているだろうから、俺は行かねばならない。」

「へ? ちょ、じゃあどうすんのよ!？」

慌てる瞳子を肩に乗せたままの手に力を籠めて押し留め、言葉を続ける。

「聞け。今のモンスターは別の世界の異常の産物だ。だからこれからその仮面ライダーをここに連れてくる。」

「え?」

「九つの世界の接触融合は、ディケイドの干渉により解消されながらも若干の後遺症を起こしているのは最初に話したな。これがその一例だ。別の世界の住人がよその世界に紛れ込んでいる。それをなんとかしなくてはならない。」

透は瞳子の目をしっかりと見つめながら説明を続ける。

「だからできる対策をして待っている。警察に働きかけ、鏡を全て隠せ。鏡面効果のある物に近寄らせるな。早く戻るようにする。」

「あ、う、うん。」

瞳子は、ようやくうなずいた。

半ば引き摺られるようにして見せ付けられた異常だが、そもそもこ



の瞳子は、誰かを守りたくて警察官の道を志したのだ。  
たとえ相手が超常の存在だろうと、齒向かえなろうと、人々を守  
る。

やりようはあるのだと、この瞳子は知っているのだ。

「よし。また会おう、瞳子。」

瞳子の理解を確認した透は、良く見なければ分からないほど微かに  
笑むと、振り向く動作と共に姿を消した。

ふと、瞳子が背後を見ると、離れた所に、瞳子の自転車が元の姿で  
立っていた。

重厚な木目の壁に四方を囲まれた広大なその部屋の中は、高い天井付近に立ちこめる煙草の煙のような重苦しい雰囲気に含まれていた。巨大な円形のテーブルを囲んで座る十数人のスーツ姿の男女。年齢もまちまちな彼らがそれぞれ個性溢れるしかめっ面で一様に見つめているその先には、唯一円卓の縁に立つ異形の姿があった。

「……い、いま、なんと……？」

ようやく、開きっぱなしだった口に意識を繋いだ一人の男が震えながら己の感情を表明した。  
なぜ、というあまりにも不可解な疑問を。

この場にいる全ての人間の思いはまさにそこに集約されていることは、全ての顔に等しく現れた強い眼差しが物語っている。

十数の眼光にさらされたその異形は、そんな他人の感情などないもののごとく声を発する。

『インペラー、こと佐々野は、消滅した。すなわち、死亡した。』

まるで黄金の翼のような装飾の仮面から、くぐもった声がゆつたりと告げる。

「……だ、だが、ライダーバトルでは、危険はないと、敗北しても元通りに帰還できると言っていたではないか!？」

「ミラーモンスターも、契約モンスターも、おとなしくしているはずだったろう!？」

「そうだ!だから我々は協力したんだ!それなのになぜ!？」  
口々に抗議を唱える出席者たち。

黄金の鎧を身に纏ったその異形は、腕組みし不動のまま。

『事情が変わったんだよ。』

そこに、新たな声が割り込んだ。

全員が振り向いたその先。壁の中心に据え付けられた巨大な鏡に映る円卓の真ん中に、若い男の姿があった。

だが、現実のテーブルの上には何者もおらず、振り返る者も誰一人いない。

「神鳥、士郎……」

誰かが、鏡の中のみ存在するその男の名をうわごとのように呟いた。

「のんびりとやってる場合じゃなくなった。これからは命懸けでやつてもらおう。そのためにすべきことは……分かるよな？」

鏡の中の男・神鳥 士郎は陰気な顔つきの中、目だけぎらぎらさせて宣告した。

「し、しかし、死ぬ気で戦えだなんて、そんな無茶な……」

「万能の力」が欲しいんだらう！？」

抗弁しかけた男を神鳥 士郎が一喝した。

「そのために司法まで乗っ取ったんだらうが！ これまでの仮面ライダー裁判で、どれだけの人間が破滅したかな。いまさら後に退けると思ってたのか！？」

抗弁した男だけでなく、部屋にいるほとんどの人間がその恫喝に萎縮する。

「分かってんのか？ 「万能の力」に必要なのは、人間が持つ、より強い欲望だ。」

神鳥 士郎が舐めるように全員を睨め回して続ける。

「被告だの容疑者だのなんて生ぬるい！ もっと強い欲望を持ったやつをライダーバトルに放り込め！」

怒鳴り散らす神鳥 士郎のまわりに、どこからか怪物がゆっくりと集まってきた。

「ひっ！？」

誰かの引きつった悲鳴が響く。

怪物は、鏡の中にしかないのに。

「急げよ。チンタラしていると、この場の誰かが一人ずつ消えてくぞ。」

円卓から飛び降りた神鳥 士郎は、怪物を引き連れて鏡の中の部屋

を去ってゆく。

『オーデイン、お前も来い。』

去り際の声に応え、円卓の縁に立っていた黄金の鎧・仮面ライダ  
ー オーデインもまた、ゆったりとした足取りで部屋を出ていった。

「……………」

支配者が去った後も、部屋は重苦しい沈黙に包まれていた。

議長にあたる男は青い顔のまま震えるのみで、幾人かが目配せを交  
わしながら、この空気からの脱出を消極的に模索している。

かちゃん！

「あっ」

「!!!??」

軽い落下音と声に、その場にいたほとんどの人間がもの凄い勢いで  
振り向き凝視した。

見れば、壁際に立っていたどこかの弁護士の連れの若い女性が、ペ  
ンを落としただけのようだった。

「す、すみません……………」

大勢に睨み付けられ、尻すぼみに謝罪するその女性。

あちこちにぺこぺこ頭を下げながら、彼女はしゃがみ込んでペ  
ンを拾おうとした。

「あ。」

その時は既に出席者同士で何事か話が始まっていたため、彼女の小  
声は聞き咎められることはなかったが、それでも彼女は口元を押さ  
え辺りを見回して警戒しながら、しゃがみこんで目線が下がったこ  
とで発見したそれに驚愕していた。

（よう。）

そんな台詞が聞こえてきそうな片手を上げたポーズで、巨大なテー  
ブルの下の奥に寝そべっている透の姿に、この世界の神楽見 瞳子  
は心底呆れ果てていた。



track・6 龍騎の世界(前書き)

御注意・付記

・基本的に、ここで語られる「九つの世界」の出来事は、それぞれTV本編のその後を鉄槻が勝手に妄想して描いています。

「いや、大変なことになっちゃったねえ」

「もー！ 北尾先生はどーしてそんなに楽観的なんですかあ!？」

瞳子は隣を歩く先輩弁護士 北尾きたお・しゅいち 秀一に呆れ声を返した。

「本当に大変なのは「仮面ライダー」だからだよ。僕が戦うわけじゃないしい。」

北尾は、女性に評判の甘いマスクを朗らかに弛緩させ、あくまでも気楽にその手の緑色の板・「ゾルダのカードデッキ」を手の中でくるくると弄ぶ。

「もー！ 今度は事情が違っちゃってるじゃないですかあ！今度は負けたら死んじゃうんですよお!？ 裁判制度の変更とかその後のことだつてぜんぜん決まってるじゃないし。」

ふんすかと文句を並べ立てる瞳子。

だが北尾は一切意に介さない。

「何度も言ってるだろう? 「シンプル・イズ・ベスト」! 何事もシンプルに行動してこそ、道は拓ける。」

両手を広げて北尾は瞳子を振り向いて言う。

後ろ向きで歩きながら、

「最重要事項を間違えるなよ? 自分がいなくなっちゃったら、元も子もないんだから。」

カードデッキを指し向けながら宣う北尾に、それでも瞳子は反論しようとする。

「弁護士は!」

「弁護士は、依頼人を無罪にすることが仕事だ!」

だが瞳子を遮って、北尾がさらに言った。

「たとえ黒でも白にする! さもなければ意味がない。」

北尾は、瞳子にウインクをして見せ、

「それに、この件は弁護士だからとか関係ないよ。僕は、これを誰

かに適当に渡してそれつきり。あとのことは誰かが勝手に決めてくれるさ。」

カードデッキをひらひらと振った北尾は、くるりと振り向くと再び前を向いて歩き出した。

「だからもう僕たちには関係のない話だよ。これつきりもうあそこからは抜けるし。」

「え？」

北尾に追いついた瞳子は、その台詞を聞いて軽く驚きの声をあげる。「抜ける、ん、ですか？」

「ああ。ホントはもちつと早く縁を切りたかつたんだけどね。僕の人生最大級の汚点だな。あーあ。」

北尾は、大きくのびをする。

「で、でも、あとの人はどうするんです？戦わされることになった人たちは？」

瞳子は、慌てて北尾に問いかけた。

だが、北尾の歩調はまったく乱れない。

「知らないよ。さつきも言ったけど僕にはもう関係のないことだからね。それに弁護士の仕事に「悪の秘密組織の退治」は入ってないし。」

「だからって！」

瞳子は、とうとう立ち止まって遠ざかる背中に声を張り上げた。

「だからって！間違ってる人を、危ない目に遭う人を、放っておいていいわけないじゃないですかあ！」

北尾の足が、止まった。

振り向かずに、そのまま答えを返す。

「完全な情報収集が裁判戦の基本中の基本だって、前に言ったよね。負けると分かかって戦いを挑むのは馬鹿のすることだ、とも。」

この世界の瞳子が、弁護士の資格を得たばかりの頃、師匠である北尾に当時からよく言われていたことだ。

「あんなやつらに死ぬまで付き合う義理もない。瞳子くん！」



北尾が、改めて振り向いた。

「僕が黒だと言うのなら！君が白だと言うのなら！それを証明してごらん！」

「先生……」

まるで、何かを決定づける啓示めいた宣告のようだったが、北尾の顔は、いつもと同じ軽薄な笑顔だった。

それからしばらく、二人は無言のまま歩き続け、やがて駅に続く交差点に差し掛かった。

「さて。今日はこれでおしまいだし、僕が事務所の後始末をしてくるから、瞳子くんはここで帰っていいよ。」

「え？でしたら、私が、」

駅の方を指さして言う北尾に、瞳子が慌てて遠慮するが、北尾はからからと笑って断った。

「いいって。僕もあつちに用事あるし。」

「でも、」

「瞳子。」

なおも瞳子が言い募ったそこに突然、男の声がかげられた。

振り向いた二人が見たそこにいたのは長身の男、瞳子の知った人物。すなわち、透だった。

「ちよ、透！？」

「うむ。」

思わず駆け寄った瞳子だったが、あの会議室のテーブルの下から一体どうやってここまで来たのかと多くのツツ込み所がここでは口に出すのが憚られることに気づき、口をばくばくさせるのみ。

「……瞳子くん？そちらさんは、どなたかな？」

「あ！」

北尾に呼びかけられ、はたと現状に気付いた瞳子は、だがまだ軽い混乱から抜け出せないでいた。

「あ、あの」

「瞳子の兄で、神楽見 透という。瞳子が世話になっている。」

「ああ。瞳子くんのお兄さんでいらっしやる。」

「ちよつと!?!?」

その間に透が勝手に話を進めてしまう。

北尾にまで了承されてしまい、瞳子の文句は封殺された。

「それじゃあ、お迎えをお待たせしちや申し訳ない。瞳子くん。また明日。」

じゃ、と北尾はとつと道を別れて立ち去って行ってしまった。

「ああ……」

「さて瞳子。話を聞かせてもらおうか。」

ぼん、と逡巡に困惑する瞳子の肩を透が無神経に叩いた。

「……ていつ!」

いろいろ無視された腹いせに透のつま先を思い切り踏みつけてやったが、透の鉄面皮はまるで小揺るぎもしなかった。

「仮面ライダー裁判制度」という制度があった。

事件の関係者と検事、弁護士らにカードデッキなるものが渡される。カードデッキによって顕現されるパワードスーツを身に纏い、彼らのみが立ち入れるミラーワールドという鏡の中の異世界を舞台に、己の主張を賭けて戦い合い、勝ち残った者の主張が判決として採用される。

そうした戦いに参加する者を、「仮面ライダー」と呼んだ。

無関係な人間に害は及ばず、全員がほぼ同じ条件のもと、己の信じられる力を戦う力に変えてぶつかり合う。

強い者が、すなわち強い思いが判決を下す、誠に合理的な裁判制度なのである。

しかも死なない、怪我もしない安全設計。

「……と、いうわけなのよ。」

「最後のほうの論法がおかしい。それは合理的な裁判とは言わない。」

「

「分かってんのよ!? 今なら分かる! 他の私がみんな「おかしい」  
って言ってるもの!」

透の指摘に抱えた頭を振り回して絶叫する瞳子。

ここは線路が通る橋の下。

まばらな通行人が瞳子を哀れんだ目で見て通り過ぎていった。

「まあいい。話を続ける。」

だがその「仮面ライダー裁判制度」には黒幕と裏の目的があった。

神鳥 士郎なる者がもたらした「カードデッキ」は、人間の欲望からなるパワーを集める効果を持っていた。

そのパワーを集めると、いかなる望みであろうと叶えることができる「万能の力」が手に入ると言う。

「万能の力」に目が眩んだ権力者たちは神鳥 士郎に言われるがまま国の司法を乗っ取り、制度を施行させたのだ。

「人生を賭けた強い思い」をパワーに変えるために。  
だがある日、事件が起きた。

十四基あるカードデッキのうち、「龍騎」のカードデッキが突然消失してしまったのだ。

そしてそれから数日と経たずに起き始めた連続行方不明事件と、無数の目撃例が報告された「鏡の中の怪物」の群。

十四騎のライダーが揃わなければ、仮面ライダー裁判は執行できない。  
い。

司法は混乱した。

そこで先ほどの神鳥 士郎の命令である。

「ウチの北尾先生も超・優秀なもんだから、いろいろ繋がりのあるお偉い様のお引き立てで、その仮面ライダー裁判を執り仕切る組織に参加されたんだけど、先生は後悔してるみたい。もう辞めるって。」

ふう。と溜め息をつく瞳子。

「ふむ。龍騎は行方不明か。大変な事になったな。」

「なにが?」

それほど大変そうでもない透の顔を見上げて瞳子は聞き返した。

「「警察官の瞳子」がいる世界に、ここの仮面ライダーを連れていかねばならないだろう。」

「ああああ!？」

瞳子が気付き、絶叫した。

「ど、どど、どうすんのよ!? そ、そうだ、先生がデッキひとつ持つてるから、それ借りて……」

異世界の問題を我が事のように思い出して慌てた瞳子は携帯電話を探してカバンをまさぐり始める。

「落ち着け。だいたい、カードデッキを借りたとして、誰が変身して戦うんだ?」

「へ? そりゃあ……あ。」

言われたことを考え始めたところで、すぐにその無茶に思い当たったらしい。瞳子の目が力なく泳いだ。

「死ぬ気で戦えるやつは、いないんだろう? どうせ死なないからってことで戦っていたやつらばかりではな。」

「あゝ、あのゝ、……あんたは?」

瞳子が、恐る恐る期待の眼差しで透を見上げるが、透の返事はにべもない。

「他の世界にも行かなきゃならんからこの世界に来たんだと言うに。」

「ああ……」

落胆に肩を落とす瞳子。

「それに、俺が用があるのは龍騎だ。」

「へ?」

瞳子は透の顔を見上げた。

「な、なんで? だつてさっき、戦えるやつはいないって」

「デイケイドからの情報だ。それによると、「龍騎」は世界崩壊を回避させるほどの影響力を持っているらしい。俺のカードに登録される程にな。」

言って、手品のように翻した指先に現れたカードは、「クウガの世  
界」でディスプレイを倒した時に使用したカード。  
そこには間違いなく「仮面ライダー龍騎」が描かれていた。  
「なんとかして、こいつを探し出さなくてはならないな。」

「いかなる黒でも白にする」と、あまりよろしくない方向で大絶賛のスーパー弁護士・北尾 秀一の事務所に、翌日、妙な珍客が現れた。

「どうも！俺、「Atasishジャーナル」って情報誌のカメラマンやってます、「辰巳 真司」って言います！で、こっちは「羽黒蓮」

「勝手にヒトの紹介までするな。と言うかライターの俺よりカメラマンがしゃしゃり出てどうする。」

「俺」なんだか「アタシ」なんだかどっちだよ、と思いつつ、瞳子は最近覚えた社交用の半笑いを浮かべていた。

「はあ。……はは。」

対応に出た瞳子の前に突き出された名刺には、所属の名称と職業の次になぜか片仮名で「タツミ シンジ」と大きく書かれており、漢字の名はその下に小さく書かれている。

「変わってるでしょ？これだとイッパツで読みやすいし、覚えやすいし。」

ラフな格好の辰巳 真司は、にこにこ人懐っこい笑顔で解説する。「失礼しました。「Atasishジャーナル」でライターやってます、羽黒 蓮と申します。」

こちらは、フランクな相方とは対照的な、黒で統一された服装がよく似合う落ち着いた雰囲気のお客だった。

そして名刺は普通の名刺だった。

「で、突然お伺いして申し訳ありませんが、北尾先生はいらっしゃいますか？」

羽黒 蓮が続けて用件を告げる。

「いえ……」

瞳子は言い淀んだ。

評判になればなるほど、「こつこつ」「招かれざる客」が増えるものがある。

仕方のないこととはいえ、瞳子もこつこつという客の対応は苦手であった。「お約束は……されてません、よ、ね？　先生は生憎と外出しておりますが……」

「そうですね。」

羽黒が特に残念そうな様子もなくうなずいた。

「それでは、また後ほど伺いします。先生には来たことだけお伝え願えますか」

まっぴら御免だ、二度と来るなと瞳子は思ったが、一応マニュアルな返事をする。

「かしこまりました。」

どうせ北尾先生の悪い噂でも拾いに来たゴシップ誌の輩だろうとは思えない瞳子の心中は非常に穏やかでない。

下げた頭の下では、思いつ切り渋面を作っていた。

「よう。」

そこへ、雑誌記者ふたりの背後、事務所の外から透がやって来た。

「透!？」

「それなら、特別に俺の独占インタビューでもさせてやろう。」

透はふたりの目の前まで来るなり、そう言いつつもなぜかカメラマンの辰巳の方の袖を掴んで強引に引っ張って行ってしまった。

「え？あの？ちよつと?」

「お前、少し顔を貸せ。」

「ちよつと！透!？」

瞳子の制止も聞かず、透は辰巳を引きずって去ってゆく。

残された瞳子と羽黒は事務所の玄関で呆然と見送るのみ。

「って、ちよつと、なんすか!？　離してっ!？」

真司は強引な闖入者に抵抗を試みるも、なぜだか手を振りほどけない。

殺風景なビルの裏手、人目に付かない所まで来たところで、透は真司の袖を解放した。

「あなた、なんなんですかいきなり!?」

「お前、「龍騎」だな?」

透は一切を無視していきなり断定した。

「!?!」

「うむ。「龍騎」に間違いないようだな。」

透は改めて確証を得たことにならずいた。

「誤魔化そうとしても無駄だ。俺は自分と接続した者の表層の思考が読める。」

「はあ!? あなた、なんなんだ!?!」

真司は、今度は「そのつもりで」問いかけた。

「なんでそれを知っている?他に知ってるやつがいるはずがない。」

「その、お前の正体を唯一知る者の同族だ。」

真司の問いに、透は翻した指先に手品のようにカードを取り出して示し、言う。

それはダイレイドのカメンライドカード。

「似たものを見たことがあるだろう?俺は、ダイケイドと似たような出自の者だ。」

「あなた……」

真司は、それを見てわずかに警戒を緩めた。

「だとしたら、なんでここにいるんだ? もうあなたらの問題は済んだんじゃないのか?」

「……この世界には、時空震の痕跡があるな。時間か空間を改竄した跡だ。お前か?」

透は、真司の問いかけをも無視して訊ねた。

「、そうだよ。ってか、なんで分かんたそんなこと?」

「俺がそういう生き物だからだ。安心しろ。お前のことを、この世界の他の誰にもばらしたりはしない。」

「!?!」



真司は、ここで一番の懸念を指摘され息を飲んだ。

「あんだ……本当に俺の考えを……」

「そういうことだ。そして、デイケイドが用件を済ましたのなら、俺自身にはこの世界をどうこうするつもりはないし、この世界の事件にも興味はない。この世界の人間が片づけることだからな。」

透は、カードをしまいながら居住まいを正した。

「さて。俺の用件だが。お前に協力して欲しいことがある。」

「俺に？あんだが？」

真司は心底意外そうな顔をした。

「土といい、なんかあんだらつて、勝手に用件を済ましちまうタイプだろ？なんで俺なんかに？」

「お前でなければ解決できない問題だからだ。」

間髪入れずに答える透。

「この世界の他に九つの世界が存在することとその問題については、デイケイドから既に聞いているな？」

「……ああ。」

それはかつて聞かされたことである。真司はうなずいた。

「その各世界の問題は片づいたんだが、デイケイドが干渉したことによる後遺症とも言つべき異常が各宇宙で起きている。」

「はあ！？」

「最近のこの世界で起きている異常は知っているだろう？おとなしかったはずのミラーモンスターが現れ出した。それはあくまでもこの世界の問題だが、そのミラーモンスターが別の世界にも現れた。これは由々しき事態だ。よって、お前には、俺に代わってそれを始末してもらいたい。」

「え、と、ちよっと待ってくれ」

当惑し、手を振って口を挟む真司。

「確か、他の世界にも、こういつなんか特殊なチカラを持った「仮面ライダー」がいるんだよな？そいつらは何してんだよ？」

「その世界のライダーはどこぞの世界に連れ去られて行方不明だ。」

だが居たとしても何の役にも立たない。なぜならミラーワールドに手出しできるのは、お前たちのような『ディメンションダイバー』だけだからだ。」

「でいめ……なに？」

聞き覚えのない単語に、目を白黒させる真司。

「俺の中での仮面ライダーの種別だ。気にするな。とにかく、例えどんなに強い力を持っていようと、届かなければ意味がない。ミラーモンスターに対抗できるのは、この世界でも全宇宙でもお前たちだけだ。ゆえに、協力してくれ。」

「うん。」

真司は、腕を組んで逡巡した。

「いや、大変だったのは分かっただし、手伝うのもやぶさかじゃないんだけど、こつちの世界が大丈夫かな、って……どうしょ。」

「大丈夫だろう。」

だが、透は簡単にうなずいてみせた。

「何しろあと十三人も仮面ライダーがいるのだからな。世のため人のために戦わないライダーでも、契約モンスターに飯を喰わせないといけないのだろう？結果的に被害は抑えられる。」

「……。」

頭を掻く手を止め、真司は軽く請け負う透を見つめた。

「……俺、ああいうのが、なんかおかしいなって思って、なんとかしようと思ってたんだけど……。」

ポケットから取り出した「龍騎」のカードデッキを見下ろし、

「こないだ、士たちが絡んだ事件で、タイムベントのカードで過去に遡った時、本来なら裁判所に出出されないともらえないはずのカードデッキがそのまま俺の手の中に残ってたからさ。あの裁判、なんかおかしいって思って。これで、やめさせようって、思ってた。」

透は、黙ってそれを聞いている。

んてモンの手伝いを、俺に頼んでいいのか？」

真司は、真っ直ぐに透を見て尋ねた。

「当然だ。」

透の返事は淀みない。

「と言つよりも他に適任がない。デイケイドのことを承知の上で首を突っ込める人間は、お前くらいしかいない。」

ぷっ、と真司が噴き出し屈託なく笑い出した。

「はは。良く言われるよ。「祭りを取材しに行つて御輿担いでるタイプだ」って。」

「うむ。だから、お前の目的は一時置いておいて欲しい。」

「分かった。」

真司は快活にうなずいた。

「なんとかしてやるから、連れてつてくれ！」

「真司！」

その裏路地に、蓮と瞳子がやってきた。

「……まあ、心配してなかったが、なかなか戻らないんでな。見にきた。」

言いつつも、透を見る蓮の眼差しは警戒に満ちている。

「透！なんなのいったい？」

「後でほかの瞳子に説明する。」

蓮の怪訝な目を無視して、詰め寄る瞳子にあっさりと返す透。

蓮も、すぐに真司に顔を向けた。

「話は終わったのか？」

「ああ。蓮、俺、ちっと遠くに取材に行くことにしたから。」

「なに？」

真司からまた突拍子もないことを言われ、蓮は控え目に驚愕した。何かを吹き込まれたのかと、透と真司を交互に見ながら問い返す。

「なんだ。本当に独占インタビューでもするつもりか。」

「まあ、そんなもん。編集長に言つといてよ。」

「仕方ないやつだ。お前は。」

いつもの様子で言う真司の顔を見た蓮は、結局相棒の意図を理解し、慣れた様子で溜め息をつく。

「お前のことだ。馬鹿なこととはしても、駄目なことはすまい。」

「なんだよそれ。」

「分かった。行ってこい。」

「おう！」

「透っ!?!」

真司が快活に返事をしたその時、瞳子が彼方を見て悲鳴をあげた。

全員が瞳子の指す方向を見ると、この路地の入り口に異形の人影が立っていた。

「なに、あれ!?!」

禍々しい馬を人型に練り直したかのような異形。オリエンタル風味な装飾を身につけたそれが今、頭上に現れた光の輪の中に両手を突っ込み、そこから凶悪な形状の鈍器を引き抜いて構えた。

こちらへの明らかな害意が見てとれる。

途端に真司が身構えるが、そのさらに前に透が立ちはだかった。

「あれはミラーモンスターではない。よっってお前たちデイメンションダイバーでは対応できない。」

透は巨大な機械剣デイレイドライバーとカードを引き抜いて構えた。

「あれには、専用の属性条件の攻撃がいちばん効果的だが、通常兵器でもしこたま叩き込んでやれば滅ぼせる。変身！」

透は、デイレイドライバーにカードを挿し入れ、スライドカバーを抜刀の動作で閉塞した。

『カメンライドウ・デイ・デイレイド!』

透にグレーのヴィジョンが重なり、彼方から飛来した黄色のライドピラーがその異形を撥ね飛ばして透の頭部に前後左右から突き刺さって収まった。

迅速にその身をイエローに染め、変化が完了した。

『そしてこの世界なら他にも倒す手段がある！よく見ておけ！』  
叫んで駆け出したデイレイドは、そのゼブラロード「エクウス・ノクティス」が繰り出したハンマーをかくくつてタツクルをかける  
と、そのまま路地を抜け表通りまで押し出した。

エクウス・ノクティスを勢いで転倒させた隙にカードを引き抜いた  
デイレイドは、デイレイドライバーにカードを挿し入れカバーを閉  
じた。

『アタックライドウ・マイト！』

『うおおお！』

カードの効果により増強した腕力で、再びエクウス・ノクティスに  
掴みかかると、デイレイドは相撲のように力任せに持ち上げ、近く  
のビルの玄関の窓ガラス目掛けて飛び込んでいった。

「透！？」

瞳子の悲鳴を聞き流しながら、二つの身体はガラスに激突すること  
なくその向こうへ突入してゆく。

すなわち、ミラーワールドへ。

『ーーーー！？』

異世界の地面へと転がり込むデイレイドとエクウス・ノクティス。  
次元戦士たるデイレイドは次元間跳躍能力を持ち、実は龍騎にカメ  
ンライドせずともミラーワールドに突入・離脱すること自体は可能  
だ。

ただし、ミラーワールドの物理法則に干渉する機能がないため、そ  
のままでは通常人と同じようにいずれ消滅してしまう。

エラ呼吸できない人間が、水には入れるがそのまま居座れないのと  
同じだ。

やがてミラーワールドの物理法則に抗しきれず、デイレイドとエク  
ウス・ノクティスの身体が末端から粒子化し、消滅しようとする。

『くつ、』

『ーーーー！？』

苦悶の声を漏らすデイレイドとエクウス・ノクティス。

物理法則の異なるミラーワールドでは、ただ立ち上がるだけでも困難となる。

デイレイドは、「マイト」の効果でようやく苦勞して起き上がり、入ってきたビルの玄関に近づくと、倒れ込むように飛び込んだ。ゼブラロードをそこに残して。

現実世界に転び出て帰還するデイレイド。

瞳子らが見つめる前で、ガラスに映るミラーワールドの中に取り残されたエクウス・ノクティスが、のたうち回りながら粒子化に浸食され、やがて完全に消滅していった。

『火力ばかりが強さではない。以上、レクチャー終わりだ。』

疲勞困憊な様子で後ろ手に足を投げ出して座り込んだまま、デイレイドがしれっと告げた。

「用意はいいか？」

「ああ！」

適当なところで合流した橋の下で、透の確認に真司が元気良く返答した。

その応えにうなずくと、透はデイレイドライバー・カレイドブレイドを抜き放ち、青眼に構えると、目前の空間を一閃した。

すると、宙に剣の軌跡に沿った黒い線が一本現れた。

否。それは宙に描かれた線ではなく、切り裂かれた空間の断裂。

やがてアーモンド型に割れ広がった「それ」を前に、透は一步踏み出した。

「いいか。これが別の宇宙に通じる道だ。はぐれないように付いて来い。」

「おう！」

言いざまにその「空間の断裂」に飛び込んだ透に続き、真司も共に飛び込み姿を消した。

神楽見 瞳子巡査が自転車で走り回るこの街の光景は、異様なことになっていた。

あらゆる建物の窓という窓が全て紙や布などで覆い尽くされ、道路の反射鏡は例外なく袋を被せられ、自動車のボディなどツヤのある素材もことごとく隠されていた。

それもこれも、「鏡の中をうろつく怪物」から市民を守るため。

ある日突然現れたヤツらは、鏡の中から人々に襲いかかり、ある怪物などは現実世界に飛び出して暴れるなどもした。

こちら側に出てきた怪物には銃弾は効かず、鏡の中に逃げ込まれては、その鏡を割ってももはや意味はなく、一切の手出しができなくなる。

こうして鏡や鏡面効果を持つ物を塞ぎ尽くすことでしか、人々が身を守る術はなかった。

そして瞳子は今、そんな街中をパトロール中であった。

「透……ちゃんとその「仮面ライダー」を見つけてくれたんでしょうね……」

「当たり前だ。」

突然聞き覚えのある声の横を通り過ぎた瞬間、もの凄い力で襟首を掴まれた。

「んげっ!？」

一瞬身体が宙に浮き、股下にあつた自転車だけがすっぽ抜けて走っていった。

尻餅をついた瞳子の襟が解放された。

「連れて来たぞ。約束の仮面ライダーだ。」

だが透の台詞など一切聞かずに立ち上がった瞳子は透の腹と言わず胸と言わずめちやくちやくに殴り出した。

「いいかげん法廷で会いますよッ!？」

「生憎と俺には戸籍とか無いからそれは無理だ。」  
結構全力で殴ったというのに透の鉄面皮は相変わらず小揺るぎもしていなかった。

「あの〜。俺、一応裁判員の資格持つてるけど……」  
そこに、透の後ろから辰巳 真司が黒いカードデッキをかざしながらおそおそと言ってきた。

「却下だ。宇宙規模で管轄外もいいところだろう。」  
透の返事はにべもない。

その時、お互いに気付いた瞳子と真司が顔を見合わせて驚いた。

「あれ？あんだ、さっきの弁護士事務所の……」

「「さつき」の雑誌記者!？」

指を突き合わせて呼び合うふたり。

「え？なんで警察の服なんか着てるの？あれ？」

「そいつは「弁護士の瞳子」の異次元同位体だ。」

「は？」

聞き慣れない単語に真司が問い返す。

「いわゆる「別世界のもう一人の自分」というやつだ。だが、今は俺の手伝いをしていてな。事情も了解しているし、別世界の瞳子とも記憶を共有しているから、お前の世界のこともだいたい分かっている。」

「はあ。」

「俺はこれからまた別の世界へ行くが、だいたい瞳子の側にいるから、なにかあったらこの瞳子に言ってくれれば通じる。」

「おう。 って、もう行くのか？」

「いや。その前に瞳子、お前の行き先に案内しろ。」

「え？」

瞳子が驚いて振り向く。

「そしてその前に、真司のために事情を説明しろ。」

「ああ！ええと」

瞳子は、透が既に思考を読んで自分の事情を把握してくれているの



だと気づき、それができない真司のために言うべきことを組み立てる。

「実は今、仲間の連絡が途絶えた所へ行くとこだったの。ミラーモンスター対策は、ほら」

瞳子は窓を塞ぎ尽くした街の異様を示し、

「透が言った通りばつちりしたんだけど、完全じゃくて。たぶんあのミラーモンスターが、連絡の途絶えた所に現れたんだと思う。」

「うわ。こりゃウチの世界も見習わないとな。」

辺りを見た真司が感嘆の声をあげた。

「だからお願い！力を貸して！きつと大変なことになってる！」

瞳子が、透と真司に懇願した。

「うむ。分かっている。」

「それじゃ急がなきゃ！早く！」

真司が倒れた自転車に駆け寄って起こしながら、一同を促した。

程なく辿り着いたそこ、小柄なテナントビルが建ち並ぶ街の一角には、大小様々な異形、ミラーモンスターが蠢いていた。

巨大な蜘蛛型は言うに及ばず、あらゆる生物に似て非なる形状の怪物が、鏡やガラスから出入りしていた。

ミラーモンスターは、逆に現実世界に長時間居座ることができない。獲物を捕獲する際に、鏡からの距離によっては飛び出てくるぐらいだったはずだ。

それが、この一角には大量に出現し、あるものは鏡を出たり、入ったりしている。

「こりゃあ、すげえな。」

真司が息を飲んだ。

透は別の方向を見やると、数歩歩き、そこに落ちていたものを拾いあげた。

「瞳子。」

「え？」

放り投げられたそれを慌てて受け取る瞳子。

それは、へし折れた携帯電話の上半分。

「見覚えが、あるんだな」

瞳子の手に携帯電話の下半分を乗せ、横を通り過ぎた。

瞳子は、その意味するところを察し、壊れた携帯電話を強く、強く握りしめた。

「瞳子。危険だから下がっている。真司。いくぞ。」

「……ああ。」

瞳子の様子から事態を察した真司も、決意を込めうなずいた。

透と真司、二人がミラーモンスターの群に向かい立ち、透はディレイドライバーとカードを、真司はカードデッキを取り出した

真司は、顔は前を向いたまま、左手のカードデッキを左側に立つピルの玄関の窓ガラスに向かって突き出した。

すると窓ガラスに映る真司の腰に金属色のベルトが出現し、同時にそれは現実世界に立つ真司自身の腰に転移して現れた。

そして真司はピンと指先を伸ばした右手を左上に突き出して構え、透はディレイドライバーにカードを挿し入れた。

「変身！」

その叫びは同時。

真司は右手を下げ上体の捻りを戻す動作と共にカードデッキをベルトバックルの中心に挿し込んだ。

すると、四方八方から人型のヴィジョンが殺到し、真司の姿は赤のボディースーツに軽装甲を纏い、西洋甲冑の兜の面のような水平のスリットが幾重にも入った仮面を戴いた、鏡面世界で戦う戦士『仮面ライダー 龍騎』に変身した。

《カメンライドウ・デイ・ディレイド！》

ディレイドライバーのカバーを閉塞した透も既にグレーのヴィジョンに身を包み、飛来した黄色いライドピラーが前後左右から頭部に差し込まれ、全身のカラーをイエローに変じると、隣の龍騎と並び立って身構えた。

『さて、仕事だ。』

『おっしやあ!』

『待て。』

氣勢を上げて駆け出そうとした龍騎をディレイドが呼び止めた。

『なんだよ!?!』

『あれだけの数、恐らく他の出口を塞がれたせいだここに集まっているのだろう。』

餌となる人間がいけないというのに、現実世界に身をさらす危険を犯してモンスターが徘徊しているのはそのためか。

『ミラーワールドの中と外。俺たちが互いの特性を發揮しつつ効果的にあの数を全て殲滅しなくてはならない。』

『あゝ、だから、どうすんだよ?』

飛び込んで個別撃破する気満々だった真司は、考えるのが面倒そうに問いかけた。

『そこで、この手を使う。』

『げ。』

そう言って翻したディレイドの手の指先に現れたのは、一枚のカード。

次元戦士と現地の仮面ライダーの力を合わせる『ファイナルフォームライド』のカードだ。

『いや、それ、それはちよっと……』

龍騎は両掌を突き出して後退る。

なにせ、かつてディケイドにそれをやられた時、もの凄く、筆舌に尽くしがたいくすぐったさに襲われたのだ。

真司の感覚では、正座した後のしびれが、全身に回ったような。

一瞬で終わるとはいえ、できれば遠慮したい手段なのである。

だが、ディレイドは頓着しない。

『なるほどな。なら安心しろ。俺のカードはディケイドの物とは違う。』

『ホント！？』

『ああ。だからまずはお前の契約モンスターを喚び出せ。』

『あ、ああ。』

言われ、まずは龍騎がベルトバツクルのカードデッキから一枚のカードを抜き出し、左腕に装着されている龍の頭部型の召還機『ドラグバイザー』に挿し入れると、そのカバーを閉じた。

《アドベント。》

認証の音声が告げると、どこからともなく巨大な赤き龍が長大な体をくねらせて現れた。

『よし。』

それを見てディレイドは、ディレイドライバーにカードを挿し入れ抜刀の動作でカバーを閉塞した。

《ファイナルフォームライドウ・リュウ・リュウキ！》

『では……』

そしてディレイドはこちらを警戒する龍騎の肩を突いて前を向かせ、龍騎の背後に立った。

『死又程くすぐつたいぞ。』

『うそつきいいいい！？』

言いざまに無造作に振るつたカレイドブレイドが龍騎の背中を袈裟掛けに斬り裂いた。

いや、その刃は龍騎に一切の傷をつけずにその身体を透過した。

すると、斬撃の軌跡に現れる龍騎のライダーズクレストのヴィジョンは、龍騎の体内に出現することになる。

カレイドブレイドの支配下に置かれた龍騎の身体は、わずかに宙に浮くと、迅速にその身を変形・変移させてゆく。

やがてそこに、ミラーモンスター・ドラグレッダーがもう一体現れた。

『あれ？それほどくすぐつたくない。』

『まあ、ちよつとしたトリックだがな。』

言いながら、ディレイドは次のカードをディレイドライバーに挿し

入れた。

《アタックライドウ・イリユージョン!》

認証の音声と同時に、ディレイドの姿が二体が増えた。

さらに二体が同時にカードをディレイドライバーに挿し入れ、抜刀の動作でカバーを閉塞した。

《ファイナルアタックライドウ・リュウキ!》

『はああっ!』

二体のディレイドは同時に跳躍すると、それぞれドラグレッダーの背に飛び乗った。

これによりディレイドと龍騎は接続状態となり、カードの効果により供給された膨大なエネルギーが光となって体表を迸った。

『真司!お前はミラーワールドへ!俺は現実世界の方を片付ける!』

『わかった!』

高速で飛翔する二騎の龍騎士。

ディレイドを乗せた龍騎ドラグレッダーはビルの窓ガラスへ飛び込み、ドラグレッダーに乗ったディレイドはそのままミラーモンスターの群へ突入していった。

『うおおお!』

どちらも、ファイナルアタックライドの効果により、ミラーモンスターを体当たりで次々と貫いてゆく。

『おらああああ!』

ある時は噛み砕き、ある時は尻尾で撫で斬り、ミラーモンスターたちは千々に乱れ吹き飛んで爆散してゆく。

長大な黄金龍は鏡の内でも外でも八面六臂の暴虐を尽くした。

やがてこの一帯のミラーモンスターを一掃し、ミラーワールドから帰還した真司と合流する透。

「とりあえず、この辺のやつらはこれで全部片付いたよな。」

「ああ。だが、根こそぎ駆逐したとも限らん。しばらく、この世界を頼む。」

「おう。分かった。」

真司は請け負った。

「それから、あいつも。」

「ん？」

透が親指で示した先。遠く道端に座り込んで肩を震わせている瞳子を見て、真司はうなずいた。

「ああ。俺がなんとかしとくから、あんたはこのまま行けよ。」

「頼む。」

言って、透は振り返らずにその場から立ち去って行った。

track・9 アギトの世界(前書き)

御注意・付記

・また、「九つの世界」の登場人物について、本編で語られなかった部分・描写されなかった部分(彼らの本来の性格や日常の行動パターン)等も、鉄槻が勝手に妄想して描いています。

ちりんちりん……。

間の抜けたベルを鳴らしながら、郵便配達 of 自転車が荷車を牽いてのんびりと道を辿る。

ペダルを漕ぐ配達員は小柄な女性、神楽見 瞳子。

だぶだぶの制服に身を包み、朗らかな笑顔で家並を抜けてゆく。

「〜」

鼻歌までこぼれ出す程の和みぶり。

ぎいこ、ぎいことペダルのきしみが長閑な鼻歌に音色を添えた。

「〜あれ？」

途中、瞳子は鼻歌をやめ小首をかしげた。

どういう訳か、突然自転車のペダルが重くなったのだ。

上り坂に入ったわけでもないのに。

「ん〜。おもい〜。」

それほど困った様子もない顔で力を込める。

「あれえ〜。なんでえ〜。」

一生懸命ペダルを漕ぐ。

だが、自転車は一向に軽くならない。

「瞳子。」

そこに、後ろから透の声がかかった。

「な〜に〜？」

眉をVの字にしてひたすら前を睨み付け、ペダルを漕ぎ続けながら瞳子は返事をした。

「事情を説明してくれないか？」

「ん〜。あとでねえ〜。」

閑静な住宅街の中を、配達物用コンテナに後ろ向きで腰掛けた透を乗せたまま、瞳子が懸命に漕ぐ自転車がゆっくりと通り抜けて行った。



「……しゃがってさあ。マジありえねえつつつか」

「ハハハばつかじゃね？」

ラフな格好の若者が二人、タバコをふかしながら白昼の街中を談笑しつつ歩いてゆく。

「でよ、俺そんとき」

言いながら、若者の片方がタバコを放り捨てた。

火が点いたまま、半ば以上残っているというのに。

「はははは……」

そのまま歩み去る若者たち。

ころころと転がる捨てられたタバコの手前に、その時何者かが立ち止まった。

つま先にぶつかって止まったタバコを見下ろした男は、ゆっくりと顔を上げ、去ってゆく若者たちを見つめた。

放埒な髪型に無精髭。がっちりした体つきこそ若々しいが、そんな無頓着なナリのせいで実年齢よりも老けて見える。

その男は足下のタバコと彼方の若者らを交互に見遣ると、やおらしゃがみ込んでそのタバコをつまみ上げた。

「……。」

男は、煙をくゆらすタバコを見つめ、改めて見えなくなった若者らの去った先を眺めると。

すばすばとタバコを吸い始めた。

「つぶはー！つくうー！ 神のポーナーズ！」

胸いっぱい吸い込んだ男は煙と共に歓喜を叫んだ。

「あーあーもつたいねえコトするヤツもいたもんだあ。ありがてえありがてえ」

ふかー、と鼻からも煙を吐き出してへらへらと笑う。

「おっ？」

だらしない姿勢でしゃがんでいた男は、目線が低くなったことで拓けた視界、すなわち道路の反対側の自動販売機の下に落ちていた百

円硬貨を発見した。

「らっきー！」

せかせかと道路を横切り自動販売機の根元に四つん這いで張り付くと、下の隙間に手をつ突っ込んで硬貨を取ろうとする。

「このっ、くぬっ」

だが、わずかに奥まった所にある硬貨に、男の手は届かず、指先は空を掻くのみ。

「こんのお〜……」

男は歯を食いしばって懸命に手を押し込むも、どうしても届かない。

「こっとなったら」

やがて男は暗闇の奥の硬貨に集中すると、「その力を解放した」。

「来いっ！」

気合いの声と同時に、ひゅっ、と百円硬貨が浮き上がり男の手に収まった。

「おっしゃー！神のボーナス！」

右手にタバコを、左手に百円硬貨をつまみ上げ、男は満面の笑顔で絶叫した。

「こ・ん・の、」

そこへ、押し殺した言葉とともにカツカツと響く足音が男に迫り。

「バカたれがーっ！」

渾身の横薙ぎの蹴りが万歳する男を脇腹あたりから真っ二つにへし折った。

「ぶげふうっ!?!」

およそ人類のどこを押しても出そうにない音を吐いて男はおもちゃかゴム鞠のように跳ね飛ばされてゆく。

「あしかわ、しょういちーっ！」

かつ、とヒールを叩きつけ、たつた今大男を蹴り飛ばした女性警察官、八代 淘子やしろ・たうこが男の名を呼び付けた。

「あんた、ナニをやっつてんのナニを！」

「ぐ、うぐぐ……」

先ほどからの奇行を咎めているのだろうが、その男、芦河あしかわ・しやういち 翔一は  
今、生死の境をさまよっていて返事どころではなかった。  
有り体に言つて「死んだフリ」に移行していた。

「あら。タバコが火い点いたまま落っこちてるわね。」

鋭角の双眸で眇にそれを見下ろした八代 淘子は、翔一に歩み寄るとどかつ、と突き刺さる勢いで踏みつけた。

「んげっ!？」

「タバコの不始末なんて、いったいどのダメ人間の仕業かしら。」

「いだだだだだだ!？」

ぐりぐりとヒールをねじ込まれ、苦悶の声を上げて仕方なく蘇生する翔一。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!？」

「まったく。人類守護の急先鋒が、お願いだから真人間な生活態度を心掛けてちょうだい! っついてもいつも言ってるでしょ!」

「おう。分かってんだけどよ。」

むっくりと起きあがった翔一は、服の埃を打ち払いながらぼやいた。

「ホラ。士たちに会ってきちんと覚醒するまで、社会と隔絶してた生活してたじゃんか。」

先ほど拾った百円硬貨を放り上げてキャッチする。

「クセだよクセ。な?」

「な? じゃありませんっ!」

炸裂した怒号に、圧されたように一步退いてしまふ。

「もう。今だったらもうそんなことする必要なんかないでしょう?」

いくらなんでも私、悲しくて泣けてくるわよ。」

目頭を押さえて頭を振る淘子に、歩み寄った翔一はぼん、と肩に手を載せた。

「まあまあ。こんくらいで泣くんじゃねえよ。アレだぜ? 俺に言わせりゃ「生きてるだけでもオイシイ」ってもんだ!」

からからと笑う翔一の目の前に、うつむいていた淘子の顔が起き上がってきた。

ガラス玉のような無機質で冷たい双眸で。

「……それは一生懸命頑張って社会生活を営んで生きている者だけが言っている台詞だあーッ！」

「ぶくはああっ!？」

淘子の渾身のアップーが、翔一の身体を高々と舞い上げた。

「ホラ!とつとと行くわよ?」

もはやずだ袋にしか見えない芦河 翔一だったものを片手でずるずると引きずって八代 淘子はその場から立ち去ってゆく。

「なんです?あれ。」

「この世界の守護者、仮面ライダーだ。」

そこで並んで眺めていた瞳子と透が、お互いどうでも良さそうに呟いた。

「こんにちわー！」

大きいがどこか頼りない声で挨拶をしながら、警察署の正面玄関を押し開ける瞳子。

小柄な身体には相対的に不釣り合いなほど巨大なカバンを袈裟掛けにぶら下げ、制帽の位置を両手で直しながらとことこと入ってゆく。その後を、透が閉じかかったドアを押し開けながら続いて入ってきた。

「瞳子。事情を説明してくれ。」

「こんにちわ〜。郵便です〜。」

「おお。瞳子ちゃん！」

「こんちわ！」

瞳子は警察職員達と挨拶を交わしながら、慣れた様子で受付カウンターの脇を抜け、職員の机の間を歩き回り配達物を丁寧に置いては通過してゆく。

「瞳子。事情を説明してくれ。」

「いま、お仕事中ですから、あとでねえ」

とことこと館内を歩く瞳子に後から続きながら再三説明を求めているのだが、一向に答える気配のないことに、こちらも飽くことなく付いて歩く透。

性格が違うことも行動パターンが違うことも、ここには訝しむものは透も含めて誰一人おらず、瞳子も透もただひたすら警察署内を練り歩いた。

瞳子にとってはいつものことなのか、誰にも咎められることなく二人は徘徊し、やがて「未確認生命体対策班」と札に書かれたドアを、この瞳子は躊躇なく開け放って入室していった。

「こんにちわ〜。」

「え？あら？」

室内にいた女性が訝しげに振り向いた。

こちらを向いたその女性は透に見覚えのある、先ほど路上で悶着を繰り広げていた一人、八代 洵子であった。

「ちよつと、あなた。ここは関係者以外立ち入り禁止ですよ?」

「こちら宛に、お届け物です!」

比較的威圧的なニュアンスで八代が注意したにも関わらず、瞳子はこれまでと全く同じ調子で封筒を差し出した。

どうも、瞳子は先刻一度見かけたはずの八代のことを完全に忘れて  
いるようだ。

「あなた。受け付けで何も言われなかったの?」

「はい!言われました!」

眉間のシワをより深くした八代にも物怖じせず、と言いか一切気にせず瞳子は笑顔ではつきりと返事した。

「面倒だから直接持つてけ、と」

「あいつら。」

八代の怒りの矛先は、別の方角へ向かったようだ。

「ん?なんで郵便屋さんがこんな所にいるんだあ?」

部屋の奥から、今度は白衣を着た男がのそのそと現れた。

放埒な髪型に無精髭。やはり同様に先ほどの路上の悶着の片割れ、

芦河 翔一であった。

「嬢ちゃん。他はいいけど、今度からここにや来ちゃダメだぜ?」

「はい!わかりました!」

「他も本当は立ち入り禁止です!」

間抜けな問答に八代のツツ込みが飛んだ。

そこで、ようやくドアの外に立つ透に気付いたのか、八代と翔一がそろってこちらを見遣った。

「そのあなたも。即刻退去なさい。」

「お前。アギトだな。」

八代の警告をも無視し、透は翔一の方を向いていきなり断定した。

「!?!」

翔一の顔が一瞬で警戒態勢になる。

強大な力を持つ者特有の緊張感。腕の一振りですべての力を行使できる者には得物を取り出す手間が要らない。

一見、翔一は棒立ちしているだけのように見えるが、危険を察知すれば瞬く間もなく対応するだろう。

「……てめえ。まさかあいつらの……!?!」

だが透は翔一の何もかもを一切合切無視して呟いた。

「やはりアギトだな。」

確信にうなずくと、ひょい、と手品のように抜き出したカードを突き出して続ける。

「似たようなカードを見たことがあるだろう。」

「!?!、そりゃあ!?!」

「そういうことだ。話がある。」

「……と言う多元宇宙の接触崩壊の危機については、ディケイドから聞いているな?」

「まあな。あんま実感ねえけど。」

透の話に、顎の髭をこすりながら言う翔一。

「で、俺の手伝いのこの瞳子に」

と、その椅子にちょこんと座ってにこにこしている瞳子を親指で指し、

「事情を訊こうしたんだが、情報を表層の意識にすら上らせないんでな。」

「本人に訊くのがイチバン早いです!」

瞳子が実に元気良く補足した。

「そういうのは合理的とは言わない。」

「でもでも、私のお仕事もありますし。」

白痴な見た目に似合わず頑固なことを言う瞳子と見つめあう透。

「まあまあ。あんただって、結局俺んトコ来るんだっただろ? なら同じじゃねえか」

ひらひらと手を振って二人を窺める翔一。

傍目には喧嘩をしているように見えたであろうが、実はそうでもない二人はあっさり翔一の方を向いた。

「おし。なら説明してやろう。」

ぼん、と自らの膝を叩いた翔一が、唇を舐めてから語り出した。

曰く。

謎の「アギト化現象」は、覚醒して症状が安定期に達した「アギト」こと翔一を始め、その発生を拡大させていた。

「アギト化」を発症させた者はまず「ギルス状態」と呼ばれる不安定期の緑の異形に変貌し、全身の発熱、激痛に襲われる危篤状態となる。

そこから症状は「変貌が解け人間に戻る」者と「ギルス化の能力を得る」者の二通りに分かれる。

だがいずれにせよ、P S Y、超能力としか思えない能力に目覚めてしまう者がほとんどだ。

そして「ギルス化の能力を得た」者は、「アギト化」の方向へと身体の適応・進化を始めてしまう。

「とは言っても、症例そのものが少なくなてな。動けるようになって「エクシードギルス化」までした奴は一人しかいないんだけどな。

あとはほとんど、」

そこまで話したところで、翔一は側にあつたパソコンを操作し、画像を表示させた。

そこは、白一色の壁に囲まれていくつものベッドが並ぶ部屋。

「……隣の病院の病室だよ。一応、暴走した時のための監視装置だかな。ほとんどはまだあそこで苦しんでる。」

見れば、この病室のベッドには全て「ギルス」が横たわっている。ある者は頭を振ってうなされるようにもがき、ある者は己が身を掻き抱いて苦しみに耐えている。

その間で看護師たちが懸命に対応していた。

「それで次は、ヤツラのことだが。」



モニターを消して、翔一がぐるりとこちらに向き直った。

「八代。ファイル出してくれ。」

うなずいた八代が、キャビネットを開いてファイルを取り出してきた。

皆がテーブルの周りに移動したところで八代がそのファイルを展開した。

そこには、動物と人をかけ合わせたような異形が不自然なアングルで写っていた。

「苦労してようやく撮った隠し撮りだ。」

「『テオストライブ』……」

「？」

透の呟いた謎の単語に、瞳子と翔一が顔に疑問符を浮かべるが。

「……俺たちは『アンノウン』と呼んでいる。」  
構わずに翔一は続ける。

「ここ一年こいつらと鬼ごっこさせられてよ。あいつら、俺みたいな「アギト化」した奴を見境もなく殺そうとしてやがる。」

ファイルのページがめくられた。

そこには人の変死体が写されていた。

「他にも、猫も通れねえほっそいパイプに詰め込まれてたり、ビルの一階の部屋の中に百メートルレベルの転落死体があったり、開けてみたら心臓の代わりに石コロが出てきたりよ。」

「からかうように列挙していくが、翔一の目は笑っていない。」

「殺された「アギト化」した人間たちだ。丁寧に猟奇的なトコはビタイチ譲らねえのな。これがやつらの手口だ。表では「不可能犯罪」として括っている。……反吐の出る奴らだ。」

顔をしかめて吐き捨てる翔一。

「だが、これはまだ「この世界」での異常だな。他にも何か起きてるんだろっ？」

「……」

一瞬だけ殺気のコもった目つきで透を睨むが、溜め息を吐くと翔一

は改めて語り出した。

「ああ。」

次のページをめくる。

そこには、まるで「透明なガラスで出来たマネキンに服を着せて寝かせた」ような物が写っていた。

「これでも人間の死体だけ？明らかにアンノウンのやり口とは違う。しかも「アギト化」とも無関係な人間で、アンノンよりも標的に見境いがねえ。……あんた。なんか知ってんだろ？」

「『ファンガイア』だ。」

翔一の問いかけに淀みなく返答する透。

「人間の「ライフエナジー」と呼ばれる生命力の一種を糧にする、別世界の住人だ。ライフエナジーを吸い取られると、肉体は変質し、劣化ガラス体になってしまう。」

「ほう。」

翔一は顎の髭を撫でながらうなずいた。

「実は、ついこないだ、妙なアンノウンに遭遇してな。そいつ、あろうことか俺の必殺の蹴りが通じなかつたんだ。そんな時は痛み分けでお互い撤退したんだがな。……もしかしてそいつがその「ファンガイア」か？」

「そうだ。お前が今考えているそれがファンガイアだ。」

「は？」

なにを適当なことを、と翔一は訝しんだ。

「なにを適当なことを。と考えているな。俺は、俺と接続した者の表層の思考が読める。」

「……ほう。」

翔一は、口元を引き攣らせてうなずいた。

「……カラフルな皮膚の、アレか？」

試しに翔一は、自らが遭遇した「ファンガイア」らしきものを思い浮かべながら問うてみる。

「そうだ。カラフルな皮膚の、それだ。」

「……………」

「いまいち確証に欠けるが、翔一はとりあえず納得することにした。」

「じゃあよ。」

「居住まいを正した翔一は、テーブル越しに透の瞳を覗き込んできた。「どうすれば倒せる？方法は？」」

「強烈な眼光で睨み付ける翔一に、透はアリの目かカメラのレンズのようなまるで感情の籠もらない目で見返して告げた。」

「魔皇力と呼ばれる、やつら自身が持つ属性攻撃が一番有効だ。だから俺が該当する世界の仮面ライダーをここへ連れて来るか、もしくは、弾頭か刃物に銀をたっぷり塗り付けて殴れ。結構効く。」

「……………」

「睨み合う二人。」

「いや、透は「見ているだけ」に等しいため、気味の悪さに翔一だけが若干ヒキギミになっていた。」

「あおう。」

「そこに、緊迫した空気を実に効果的にブチ壊す、のんびりした声音がかげられた。」

「翔一はわずかに安堵した様子でその声の主、瞳子に向き直った。」

「なんでい嬢ちゃん。」

「お隣の病院は、大丈夫なんですか？狙われる要素が満載に見えますけど。」

「剣呑な内容にも関わらず朗らかにしゃべる瞳子に、また別の意味で戸惑いながらも翔一はうなずいた。」

「ふん。良い所に気がつくな。俺もアンノウンだったらここを狙うが、ひとつ、そもいかねえ事情がある。」

「近くの椅子に腰を降ろした翔一は、種明かしをするように両手を広げた。」

「ヤツらアンノウンはな、「アギト化」してねえ人間は絶対に傷付けねえんだ。」

「にやり、と笑む。」

「あの病室の看護士の中にも警官も混じってな。いざとなったら肉の盾になっても守る。少なくとも「迎撃チーム」が到着するまではな。」

「先ほどの「エクシードギルス化」した者か。」  
透がその詳細を問うた。

「御明察。それと、「ギルス化」が安定した何人かの有志がな。一度、実際にアンノウンに襲われたことがあるんだが、彼らの活躍と肉の盾になった警官のおかげで撤退させることに成功している。だから、大丈夫だ。」

翔一が、瞳子に向けて言った。

「だから、当面の頭痛の種は、そのファンガイアなんだけどな。あんだ、その世界の仮面ライダーを連れて来てくれんのか？」

「ああ。」

訊かれた透は当たり前のように返事をしたが、

「だがその前に、ファンガイアの事情とやらを確認してみる必要があるな。ファンガイアの中にも人間と同じで性格にもピンキリがある。」

「聞く、つたつて、誰に聞くんだよ？当人に聞こうつたつて、殺されるかもしれないに。」

翔一がもつともなことを言うが、透は揺るがない。

「うつつつけの者がいるのではないか？」

翔一の知っている所に。と、翔一を見つめる透の目が語っていることに気付いた翔一が、わずかにたじろいだ。

俺がその男と出会ったのは、士たちと別れてからほんの数日後のことだった。

そいつが街の人々から石を投げられ棒を振り回されて追いかけられていた所にたまたま通り掛かった俺は、訳も分からぬままそいつを連れて逃げ、街の人々を避けて家に連れて帰り匿った。  
曰く。

「知らない！？ あのヒトたちだったら、ボクのこと見るなりいきなりヒドいコトするんだよ！」

歳は多分、俺とそう変わらないだろうその男は、まるで純粋な子供のような瞳で狼狽を示した。

そいつの話聞いていくうち、そいつの身の上に俺は深く同情せざるを得なくなった。

そいつも、ほんの少し皆と違うというだけで奇異の目で見られ、迫害されたのだと言う。

どこから来たのかは要領を得なかったため分からずじまいだが、そいつの故郷では誰もが自分と仲良くしてくれたのだそうだ。

だのになぜこの街ではこうなのか。そいつは嘆いていた。  
俺と同じだ。

突如「アギト」の力に目覚め八代の元から逃げ出した後、あのアンノウンのクソ野郎共と交戦するたび、変身して戦ったたび、戦闘を目撃した人間は一様に俺を恐れて逃げ出した。まるでアンノウンを見るのと同じ目で見て。

八代を守るために逃げ出した身だが、その逃走劇には頼れる者が誰もいなかった。

一夜の宿を求めても、またアンノウンに察知され、俺の正体を知られれば、手のひらを返したように拒絶された。

辛かった。「八代を守る」という行動原理がなかったら、とうに心

まで化け物と化して暴れ出していただろう。

だが俺は、士たちと出会ったことで化け物とはならず済んだ。こいつも同じだ。このままでは、「皆と仲良くしたい」という願いまで無くしてしまい、心が折れてしまふに違いない。

だから俺はそいつを匿った。

それからしばらく、そいつとの共同生活が続いている。

「てな訳だよ。デリケートな奴だから、あんま刺激してくれるなよ!?」

翔一に案内されて一同がやって来たのは、翔一の自宅だと言つ一軒家の前。

「あんたね。私も今はじめて聞いたわよそんな話!」

「そりゃそーだ。言わなかつたからな。」

八代の文句もさらりと流す翔一。

「まあ、紹介すつけど、お前らは後からゆっくり来いよ。俺も説明とかせにやならんから」

言いながら翔一はさっさと家に入ってゆき、透たちも後から上がっていった。

「おう。リヨウちゃん、いるかあ!？」

「シヨウちゃん!？」

部屋の奥から、翔一の呼びかけに応え一人の男が飛び出してきた。

犬ならば物凄い勢いで尻尾を振り回したであろう睦まじい懐きつぶり。確かに翔一と近い歳に見えるが、物腰は柔らかく、翔一を見る瞳はキラキラしている。

「大丈夫だったか?誰も来なかつたか?」

「ウン!大丈夫だったヨ! もう、シヨウちゃん帰ってきてくれてボク嬉しい! 今日、ちゃんとおとなしくしてたヨ!部屋のすみにうずくまって、ずーっと壁紙の模様を数えていたんだ!」

「……お、おう。リヨウちゃん、テレビくらいは点けていいぞ。」

ワカメか昆布のような髪型で、ブルーグレーのパーティースーツに白手袋という出で立ちのその「リヨウちゃん」は、くるくると身振り手振りを交えながら心底嬉しそうに報告していた。

その時、残りの一同がなんとも温い目つきで見つめていたのに気付いた「リヨウちゃん」が、ささつと翔一の背後の隠れた。

「だ、誰!？」

「おう、わりいな。リヨウちゃんに会いたいわってやつがいてよ。

大丈夫!リヨウちゃんに手は出させねえって!な?」

すがり付く「リヨウちゃん」の肩を押さえつつ翔一は一生懸命に宥めていた。

「おい!透さんよ!ホントに大丈夫なんだろうな!？」

怯える「リヨウちゃん」を抱きしめながら問う翔一の元に、透がすたすたと近寄っていった。

「大丈夫だ。問題ない。」

素っ気なく言って二人に近づいた透は、恐怖で顔を歪めた「リヨウちゃん」をしげしげと覗き込んだ。

「ふむ。やはりな。」

「な、なに?なんなのヨ」

恐れおののく「リヨウちゃん」に、透は至極あっさりと告げた。

「お前。ファンガイアだな。」

場が、凍り付いた。

「とりあえず、各々分かるようにじっくり説明してちょうだい。」

「はい。」

頭にタンコブを乗せた透・翔一・「リヨウちゃん」が、腕組みして仁王立ちする八代の目の前で並んで正座させられていた。

「まず翔一。こちらの方の名前は?」

「おう。リヨウちゃん、言ってやれ。」

「ウン」

振られた「リヨウちゃん」が優雅に髪を掻きあげながら立ち上がった。

た。

「ボクは「糸矢 僚」！ファンガイアとしての「真名」は、こういう個体同士の呼びかけには使わないから、言えないんだけどネ」

「はい着席。」

その「リヨウちゃん」こと糸矢の頭を、八代ががちり掴んで押し下げてゆく。

「で。翔一。どうしてこんな大事なことを黙っていたの？」  
再び八代が翔一を見下ろした。

「いやあ……知らなかったし……聞かなかったし、なあ」

「うん。ボクも聞かれなかったから、言わなかったしネ！」

どかん、と踏み降ろした八代の足に二人がびくん、と震え黙りこくる。

「ならば俺の説明を聞け。」

その時、正座したままの透が声をあげた。

「彼らの世界では人間とファンガイアが平和に共存している。友好的なファンガイアには当然害意がないからそもそも「人間かファンガイアか」と区別する概念がない。翔一に説明しなかったのも当然のことだ。」

その場の全員の視線が透に集中する。

「先ほども言った通り、ファンガイアにも人間と同じ割合で性格にピンキリがある。その先天的な習性ゆえ、人間に対し友好的か獲物と見なすかという見解の差異は個体ごとに厳然として存在する。その辺を糸矢。説明しろ。」

「え？ボク？」

突然指名された糸矢が慌てて畏まった。

「だって、ボクの一族は昔から友好的だったし。そりゃライフエナジーのために人間を襲う一族がよそにいたのも知ってるけど、かなり昔の話だし。今じゃファンガイア全体に「人間を襲っちゃダメ」って掟ができてるし。だから、それやぶったヤツは親衛隊に処刑されちゃうのよ！？」  
当たり前のことだよ？」



「うむ。だが糸矢。ここはお前が暮らしていた世界ではない。」

「えええええ！？」

糸矢が、あまりにショックだったのか派手にひっくり返った。

「その辺は後に話そう。まずはファンガイアの事情とはそういうことだ。この世界に紛れ込んで人を襲うファンガイアは、こいつ以外の「友好的でないファンガイア」ということになる。ゆえにこいつは安全だから、警戒をやめることだ。」

八代が、翔一と顔を見合わせた。

「まあ、リヨウちゃんのことには心配してねえけどよ、じゃあ危ねえのはその「それ以外」のファンガイアか。」

「シヨウちゃん……」

なにやら感動の面もちの糸矢を余所に、透がそれに応えた。

「そういうことだ。そこで糸矢。お前が居場所に違和感を感じた時点までの経緯を説明しろ。」

「え？」

「リヨウちゃんが俺と会う前のことだよ」

翔一が補足する。

「ああ、でも、なんか怪しいファンガイアの連中が、「人間を襲ってライフエナジーを奪おう」だなんて言ってるのを立ち聞きしちゃってさ、なんとか止めさせようと思って後をこっそりついて行ったら、いつの間にかどこだか分かんなくなっちゃって……」

途中で頭を抱えた糸矢が言い淀む。

「ふむ。その時点で世界の接触崩壊の異常に巻き込まれたのだろう。」

再び透が口を開いた。

「そこを追求することが俺の仕事だ。さて、これでファンガイアのピンキリの仕分けはできた。該当する仮面ライダーは、俺が連れて来よう。それまでの当面の対処も教えた。そこで翔一に頼みがある。」

「わりい。ちよっと待て」

まとめに入りかけた透を遮って、翔一があらぬ方を見て警戒している。

「翔一？まさか」

「そのまさかだ」

問う八代に立ち上がって返す。

「アンノウンの気配だ！透、悪いけどハナシは後だ！」

言って翔一は部屋を駆け出していった。

どさり、と。

劣化ガラスと化した死体が地面に投げ出された所でようやく事の異常を飲み込んだ人々が一齐に逃げ出し始めた。

「うわあああああ！？」

「ぎゃああああつ！？」

いったい何が起きたのかを理解した人間など一人もいない。

ただ、突然現れたヒトならざる異形が、人間を捕らえ、あり得ない異常を引き起こした。

それだけで本能的な恐怖を刺激し、その恐怖に突き動かされているだけだ。

「ooooooooooooo！」

劣化ガラスとなった死体を投げ捨てたそいつ・ヒグマの生態相を持つグリズリーファンガイアは、歓喜の雄叫びをあげると逃げ惑う人々の群を追ってゆったりと駆け出した。

それほど急ぐ必要はない。

なぜなら、仲間がこの一帯を包囲しているからだ。

今、目論見通りシャークファンガイアに追いつかれて人間たちが逆戻りしてきた。

想像通りの入れ喰い状態にグリズリーファンガイアは狂喜すると、さっそく二匹目の獲物目掛けて巨大な牙のヴィジョンを射出した。

だがそれは獲物に突き刺さる寸前、突如介入した何者かによって弾き飛ばされてしまった。

「！？」

「キバ」を始めとする親衛隊がないこの世界で何者が邪魔をすると言っのか。

驚愕したファンガイアの目前に現れたのは、ファンガイアである彼を以てしても見覚えのない異形の存在。

狼よりも獰猛そうな牙を露出させ、大きく湾曲した鎌を二刀構えた青灰色の獣人であった。

「……！？」

大きく一つ吼えたそいつは、鎌を左右にかざし、まるで人間を護るようにグリズリーファンガイアの前に立ち塞がった。

見れば、仲間のファンガイアたちも、それぞれ色違い・同型の漆黒の獣人たちに襲われている。

「……！？」

これは一体どういうことか。

だが混乱は一瞬。

邪魔者は全て排除すればいい。そう判断したグリズリーファンガイアは目の前の青い獣人目掛け、怪力を活かし突進していった。

翔一が気配から目した現場に辿り着いた時、そこはなぜか混戦の坩堝となっていた。

「……こりゃあ、どうなってんだ？」

バイクから降りヘルメットを脱いだ翔一は、現場の状況を把握しようとして目を凝らした。

ビルに囲まれた広場。中央の噴水の周りで逃げ惑う人々と、それを囲むようにファンガイアと狼のようなアンノウンが三組、戦闘を繰り広げていた。

おかげで三組の化け物に囲まれて離脱できない人々が右往左往している。

いずれも、アンノウンが人々を背にして戦っている状態ではあるが、逃げきれない人も含め状況は膠着しているようだった。

そして遠くに横たわるガラス体となった死体。

「……そうかい。「人間を傷つけない」って矜持に従ってるつもりかよ！」

アンノウンの行動原理に忌々しげに吐き捨てる翔一。

だが、そこでアンノウンのうち一体が、振り向きざまにその手の鎌

を一本投げ放った。

「つぎやああつ!？」

なんとそれは、ファンガイアではなく、逃げ惑う人間の一人の足を切り裂いた。

あえなく転倒する男。

その訳を、アンノウンがこの場に現れた本当の理由を翔一は瞬時に理解した。

「やっぱ「アギト」だきや殺すんかい！」

すなわち、抹殺対象として足止めされた男目掛けて翔一は駆け出した。

「うおおお！」

念じると同時、その腰に紡錘形のベルトが出現した。

走りながら左拳を腰溜めに構え、右手の手刀を上にも、引き下げて前に、ばばつと拳法の型のように突き出し。

「変身！」

眼前で両腕を交差させると、その手をそれぞれベルトの両サイドに押し当てた。

これにより、翔一の中でオルタリングを中心に、両腕を経路としてオルタフォー스가円環を描きそのパワーを全身へと行き渡らせ、翔一の肉体を变移させてゆく。

エネルギーが放つ目映い輝きの中から、光の戦士・アギトが飛び出してきた。

『おらあああ!』

怒りと勢いに任せ、アギトはそのアンノウンを蹴倒し、さらに突然の乱入に混乱している様子のファンガイアをも殴り倒した。

『しっかりしろ!立て!』

アギトは、足を切られた男に駆け寄ると、掴み上げて無理矢理立たせ歩かせようとす。

だが、それを隙とばかりにアンノウンが背後から襲いかかってきた。『うらあ!』

アギトはそれを後ろ蹴りで牽制した。

たたらを踏んで転倒したアンノウンは、だが俊敏な動作ですぐさま立ち上がってしまう。

『ちっ！』

逃げきれない。仕方なく、男をかばいながらこの場で戦おうと翔一が覚悟したその時、ノーマークになったそのファンガイアが逃げ惑う群衆に向かって宙に出現させた牙のヴィジョンを射出しようとしているのが目に入った。

『こらあ！テメエ！なにしてくれてん』

言葉で止められないと分かっているにもかかわらず翔一が叫んだのと同時に、なんと立ち上がったアンノウンまでもが目標を切り替え、ファンガイアを殴り倒しその攻撃を中断させた。

『ちっ、律儀なヤローだ！』

アギトは再び男を抱え直すと、戦闘範囲外へ迅速に離脱していった。

そこへ、黄色と白のバイク、マシンディレイダーに乗った透と瞳子がやって来た。

例によって瞳子の郵便配達用の自転車を変移させたものだが、今度の瞳子は了解しているからか何も言わなかった。

男を抱えたアギトが二人の元へ駆け寄った。

『おお！嬢ちゃん！コイツ頼む！』

『……誰ですか？この人』

『翔一が変身した姿だ。』

『はやくしろはやくうつうつ！？』

瞳子が指さして問う暢気な会話に、男を突き出したアギトが忙しく足踏みした。

『はいどうぞ。どっこいしょ。』

『危険だから、離れている。』

『はい。』

あっさりと納得し、どうにか男を背負った瞳子がずりずりと男の足

を引き擦りながらもこの場から退避してゆく。

「八代が本部に連絡すると言っていた。」

『そうか。なら支援が到着するまでに少しは片付けねえとな。』  
透の報告に、アギトは改めて戦場を見回した。

人々は散り散りに逃げ去り、それを追うファンガイアと、させまいとするアンノウンの戦況は拮抗しているようだった。

『あんたも土の仲間なら戦えんだろ？』

「仲間かどうかは分らんが、支援を待つ必要はないな。」

デイレイドライバーとカードを取り出した透は、スライドカバーを開け、中にカードを装填した。

「変身。」

呟きと同時に抜刀の動作でカバーを閉塞する。

《カメンライドウ・デイ・デイレイド！》

認証と共に透の体が幾重ものヴィジョンに包まれ、彼方より飛来した黄色のライドピラーが前後左右から次々と頭部を貫きQRコードを模したマスクを形成すると、全身の各部をイエローに変色させ、デイレイドの姿を現した。

『うん。どことなくデイケイドに似てんな。』

四隅に四角を配しランダムなドットパターンに覆われたデイレイドの顔を上げしげと覗き込んで言うアギト。

『翔一。お前のバイクを例のモードに変形させる。』

『おう。言ってる場合じゃなかったな。』

デイレイドの指示に応え、アギトは停めていたバイクに指を振って念じると、バイク・マシントルネイダーは僅かに浮遊し迅速にその身を薄べったく変形させてアギトの傍らに舞い降りた。

『つても、アンノウンの野郎共はともかく、ファンガイアにや俺の力は通じねえぜ？』

『そちらは、今回は俺が片付ける。』

言ってデイレイドはデイレイドライバーにカードを挿し入れると、抜刀の動作でスライドカバーを閉じた。

《カモンライドウ・キ・キバ!》

カレイドブレイドからの指令に従い、ディレイドベルト・カレイドサーキットがその無骨な形状をノイズに包み変移させてゆく。

突然、ベルトからドット柄のノイズに包まれた部品がひとつ、分離して飛び出した。

ベルト自体は赤い幅広の帯に姿を変え、ディレイドの手に掴まれた離脱した部品は、コミカルな一頭身のコウモリのようなモンスターへと変移した。

「変身。」

「おっしゃー!キバって行くぜ!」

再び呟いたディレイドの声にそのモンスター

・キバットバット三世が応え、その手がキバットをベルトバックルの定位置に据え付けた。

キバットがそこに完全に収まると同時、共鳴音の波紋がディレイドの身体を包み。

やはりベルト以外はディレイドのままであったが。

「おし。よく分らんが、そっちは頼んだぜ。」

「待て。なぜバイクを変形させたと思っている。」

「は?」

ディレイドに止められ、駆け出そうとしたアギトは怪訝に振り向いた。

「あれだけの数、迅速に倒さねば取り逃がしかねない。例えばこの手でな。」

言ってディレイドが取り出して示したカードに、アギトがうめき声を漏らした。

「うげええ!?! それヤメロよ!?!」

すなわち、次元戦士たるディレイドと現地のライダーの力を合わせる『ファイナルフォームライド』のカード。

「大丈夫だ。俺のカードはディケイドのものとは違う。くすぐったくない。」



『ホントかよ!?!』

軽く請け負うデイレイドにアギトは疑惑を隠せないが、言ってる場合でないことも承知している。

『……まあ仕方ねえ。さっさとやっつけてくんな!』

『その意気だ。』

《ファイナルフォームライドウ・ア・アギト!》

抜刀の動作でデイレイドライバーのスライドカバーを閉塞したデイレイドはアギトの背後に回り込んだ。

言いながらもちらちらと背後を見るアギトに、前方を指して促したデイレイドは、即座にカレイドブレイドを振り降ろした。

『死又程くすぐったいぞ。』

『嘘かコノヤロウ!?!』

カレイドブレイドが、アギトの体内にライダーズクレストを残して袈裟掛けにその身体を透過した。

カレイドブレイドの支配下に置かれたアギトの身体は、わずかに宙に浮かぶとその身を迅速に変形・変移させてゆく。

やがてそこに、二台目のマシントルネイダー・スライダーモードが出現した。

『テメエこのお礼はきっちりしてやるからな!?!』

『なに。持ちつ持たれつだ気にするな。』

文句を言うバイクからは目を逸らし、続いてデイレイドライバーにカードを挿し入れてカバーを閉じる。

《アタックライドウ・イリユージョン!》

カードの効果により二体に分身したデイレイドは、二体ともにさらに次のカードを挿し入れて抜刀の動作でデイレイドライバーのカバーを閉塞した。

《ファイナルアタックライドウ・ア・アギト!》

『はあっ!』

認証の音声と同時に跳躍したデイレイドは、それぞれマシントルネイダー・スライダーモードの上に着地した。

これによりデイレイドとアギトは接続状態となり、供給される膨大なエネルギーが光となって体表を迸った。

『行け！翔一！』

『おおおお！』

応え、デイレイドを乗せたトルネイダー・スライダーモードが爆発的な勢いで飛び出してゆく。

それを見送ったデイレイドは、ベルト側面のケースから赤い、蝙蝠の意匠を彫り込んだフェッスルを引き抜くと、バックル部のキバットの口元にあてがった。

『ウエイクアップ！』

宣告と共に、吹き鳴らされる覚醒の魔笛の旋律。

それはデイレイドベルト・カレイドサーキットが造り出した模造品に過ぎないが、その過程をなぞることにはその力を認識させる意味があり、導き出される結末を確固たるものにするために不可欠な儀式である。

そしてその「儀式」に従い、『クラインの壺』より汲み上げたエネルギーの組成を変更。「魔皇力」の属性を付与されたエネルギーはこの場合、カレイドブレイドに供給され、刀身が血のように赤い光を放ち始めた。

『ふっ！』

裂帛の息吹と共に自らが駆るマシントルネイダー・スライダーモードに発進を命じると、翔一が変移したスライダーモードに続いた。

『おおおおお！』

宙を滑空する二騎のライダーが、そこで互角のチャンバラを繰り広げるジャツカルロード、スケロス・グラウクスとグリズリーファンガイアとを二体同時に貫いた。

「アギトの力」を受け、ひととき強く頭上の光輪を閃かせて爆発するスケロス・グラウクス。

だがやはり、アギトが変移したスライダーの攻撃はグリズリーファンガイアに致命傷を与えることができなかったが、ほぼ同時に貫い

ていったデイレイドの魔皇力を付与された斬撃が続いてファンガイアを木っ端微塵に打ち砕いた。

「逃がすか！」

さながら激流を乗り越えるサーフボードのように空中を迅速に旋回した二騎のライダーは、二組目のジャツカルロード、スケロス・フアルクスとシャークファンガイアを、続けて三組目のスケロス・フアルクスとファンガイアを全く同様に貫き爆砕していった。

「よおっしやあ！」

塵も残らぬ爆発跡のただ中に、効果の終了と共に一回転して元の姿に戻り降り立ったアギトは、傍らに着地したデイレイドに向かって平手を高く振り上げた。

「…………？」

だがデイレイドは、片手を上げたポーズで固まっているアギトを不思議なものでも見るように棒立ちしている。

「………… オイコラ。「ハイタッチ」を知らないってなどーいうことだ。」

「なんだそれは。」

しびれを切らしたアギトは、デイレイドの片手を無理矢理取ると、上に引つ張り上げてから盛大に叩いた。

「コトが終わったら、こうだ！覚えとけ！変な奴だな」

「あ、ああ。」

翔一の与り知らぬことだが、透は珍しく困惑していたのだった。

その二人の様子を、物陰から瞳子がじいっと見つめていた。

「さて。改めて翔一に頼みがあるのだが。」

透が一同を前にして改めて話を進める。

ここは、再び警察署の「未確認生命体対策班」の部屋。

透の周りには瞳子、翔一、八代、そして糸矢が各々椅子に腰掛けている。

「別の世界に『テオストライブ』……アンノウンが現れた。俺に代わって、それを始末してもらいたい。」

透の話は簡潔に終了した。

翔一も、ある程度予想していたようにうなずくと、わずかに黙考してから自身を指さして口を開いた。

「一応訊くが、その世界の仮面ライダーは何をしている？ いるんだよな？ こういうヤツが。」

「その世界の仮面ライダーは、ある特定の条件下でなければ石ひとつ砕けない。アンノウンに対峙することすらできないため、対抗できない。」

淀みなく答える透に、盛大に眉をしかめる翔一。

「なんだそりゃ。しょうがねえな。まあファンガイアみたいなのもいるし、そんなもんかもな。」

うんうんとうなずいて納得する。

「そういうことなら、行って手伝ってやりたいが、見ての通りこっちは手一杯だ。悪いが俺は」行けない。」

最後に微妙なニュアンスを加えて言う翔一だったが最後まで聞けばかりに続けて口を開く。

「行けないが、放つてもおけない。だから、イイ物を貸してやろう。」

八代。

「ええ。」

どこで示し合わせたのか、翔一の意図を理解した八代が、壁のスイッチを操作した。

すると、部屋の奥を仕切っていたシャッターがせり上がり、その向こうに格納されていたものが露わになった。

巨大な拘束具に吊られているかのように棒立ちしていたそれは、青い人型の甲殻。

「『対未確認生命体用強化外骨格・強化型』、G3-X。」

八代が、どこか誇らしげにその名称を告げる。

「貧弱なボウヤでも、これさえ着ればアンノウンをブチ倒せる。装

着者を選ばないのがウリだな。」

そちらに歩み寄った翔一が、その青い胸郭を叩きながら説明する。  
「どうだ？透。これでも充分アンノウンに対抗できる。こっちは人数がいるから、もう使わねえ。あとは中身はどっかで調達すればいいだろ。ってかお前、もうだいたい筋書きは見えてんじやねえのか？」

含んだ笑みで問う翔一に、透は至極あっさりとうなずいて見せた。

「ふむ。ところで糸矢。」

そして唐突に話の矛先を向けられた糸矢が、数瞬してからようやく意識を帰還させた。

「つえ、ええ！？」

「お前、元の世界に帰りたいたらう。」

「あ。」

きよとん、とした糸矢は、しばらくしてようやく透の台詞を理解した。

「うん！うん！帰りたいたいよ！」

「よし。俺が連れて帰ってやろう。俺は平行世界を渡ることができ  
る。」

「ええええ！？ 本当！？」

透の足元に飛びついて驚愕半分に感激する糸矢。

「あ、ありがとう！」

「だが、ひとつ条件がある。」

「へ？なに？なにすればいい？」

「俺の仕事を手伝え。」

「へ？」

半笑いの糸矢は、未だ事態が飲み込めないでいたようだった。

「では、借りていく。」

G3-Xの前に立った透は、カードをディスプレイドライバーに挿し入れ、抜刀の動作でスライドカバーを閉塞した。

《アタックライドウ・リ・エミュレーション!》

音声が認証を告げると、透は無造作にカレイドブレイドを振り降ろした。

G3-Xを袈裟掛けに透過してゆくカレイドブレイド。その跡にデイレイドのマークが出現すると、G3-Xがドット柄のノイズに包まれ、カードの効果に従いその身を再構成させ、小さく変移してゆく。

まるで萎んでいくようにノイズが縮んでゆくと、やがてその床にG3-Xの腰に設置されていた部品だけが無骨な機械の円環となつて現れた。

「ちよつと!? G3-Xはどうなったの!? 貸すとは言ったけど……」

あまりの事態に斬撃を見送った八代がようやく身を乗り出した。

「なに。あまりに携行性が悪かったのな。持ち運びしやすいように手を加えさせてもらった。」

透は、そのG3-Xだった円環を拾い上げると、同じくあっけに取られている糸矢目掛けてそれを放り投げた。

「わあっ!?!」

糸矢は慌ててそれをキャッチする。

「必要な時に元の形状に再構成できるよう細工した。」

「と言うか、貸したとしていっただいどうやって持って行かせるつもりだったんでしょう?」

瞳子の呟きに答える者はだれもおらず……。

「さあ糸矢。付いて来い。」

「へ? え?」

もたもたとその円環をためつすがめつしている糸矢の袖を掴んで、透はさつさと歩き出した。

「じゃあな、リヨウちゃん! 元気だな!」

「え? シヨウちゃん? えええ?」

別れの余韻もそこそこに、透と、引き摺られる糸矢はドアの向こう

に消えていった。

「なんだい？自分の訃報を自分の雑誌の巻頭にでも載せる気かい？」  
「……そちらこそ、人を助ける弁護士たる者がそんな物を持って、  
いったいどこのどいつを弁護するつもりだ？」

巨大なビルに挟まれたそこ、表面が鏡のように加工された巨大なオブジェの足元で、男が二人、対峙していた。

「あいにくとルールが変わっちゃってね。聞いてるだろ？」

スーツの襟にバッヂを付けた弁護士・北尾 秀一が、自信に満ちた朗らかな笑顔でその手の緑色の板を振る。

「ああ。その結果得られるものが判決権でないこともな。」

応え、雑誌記者・羽黒 蓮も青い板をかざして見せた。

「ねえ！？ 先生！？ やめましようよお！？」

二人の後ろで瞳子が必死に叫ぶが、出会ってからこれまでと同様北尾にはまったく聞こえたとばかりがいない。

「やるかい？」

「……ああ。」

北尾の軽い問いかけに、重々しくうなずく蓮。

そして同時に二人は背後を、半泣きの瞳子の向こうに目を遣った。

そこには、ヒトと猛禽を掛け合わせ、オリエンタルな装飾を纏った異形が現れていた。

頭上に現れた光輪から凶器を抜き出して構えたそいつは、最近出没しては、カードデッキを持つ者のみを狙ってくる化け物である。

「その前に。」

「ああ。」

明らかにミラーモンスターとは違うそいつに背を向けて振り返ると、二人は鏡のオブジェに向け同時にその手の板・カードデッキを突き出した。

オブジェの鏡面に映る二人の腰に出現した無骨なベルトが現実世界



の二人の腰に転移して実体化し、北尾はデッキを持つ左手を腰溜めに、突き上げる右拳を眼前にかざして構え、蓮は大きく上体を翻して左肩を引き、駆け出す直前のように身を引き絞った。

「変身！」

その発声は同時。

各々、捻った体勢を戻す動作でカードデッキをベルトのバックルに納めると、四方八方からヴィジョンが殺到し、瞬時にその身を「仮面ライダー」に轉身させた。

元来、裁判に掛けられた者への判決を下す司法の象徴であったその姿は、今や全く別の印象を見る者に抱かせる。

「ふっ！」

「ハアッ！」

裂帛の息吹と共に、変身した二人は目の前のオブジェの表面に飛び込んでいった。

当然激突することなく鏡に吸い込まれてゆく北尾を、置き去りの瞳子はいつまでも見つめていた。

「……先生……」

直後、その鏡のオブジェから飛び出してきた二体の巨大なミラーモンスターに瞳子は仰天し慌ててその場から逃げ出した。

「よし。いたぞ。あれだ、糸矢。」

「ななななにあれえ!？」

透と糸矢がやって来た巨大な鏡のオブジェの立つ石畳敷きの広場では、既にモンスター同士による戦いが展開されていた。入り乱れて交戦中の三体のモンスターのうち、黒い鳥の首を生やしたアンノウンを指さして透が糸矢に告げた。

「あの黒いヒト型だけを狙え糸矢。それ以外は一応敵ではない。当てるのと完全に敵に回るぞ。……おい、起きろ。寝ている場合ではないぞ。」

「無茶言わないですよ!？ あれバケモノじゃない!？」

突っ伏していた糸矢が跳ね起きてすがりついてきた。

「冗談じゃないよ!? 死ぬ!? 死んじゃう!?」

涙まみれでぐちゃぐちゃの顔を振り回して訴える糸矢に、透はいささかの同情も見せずに続けた。

「大丈夫だ。翔一が作ったこのGXなら。あいつを信じる。」

「う……」

「それに、元々お前は悪意の同胞から人間を守るために行動を起こしたのでらう? お前になら、できることだ。」

「うっ……」

言われた糸矢は思わず口をつぐんだ。

脳裏を、自分を助けてくれた翔一との思い出の日々が駆け抜けてゆく。

「……わかった。やるよ、ボク!」

「よし。では行け。打ち合わせ通りにな。」

「うん!」

ばたばたと緊張感に欠ける拳動で前に飛び出ると、糸矢は取り出した機械仕掛けの円環を腰に巻き付け装着した。

そして左拳を腰溜めに構え、右手の手刀を上にも、引き下げて前に、ばばつと拳法の型のように突き出し。

「変身!」

眼前で両腕を交差させると、その手をそれぞれベルトの両サイド、設置された安全装置の認証スイッチに押し当てた。

《リ・エミュレーション!》

音声認証を応え、ベルトバックルのエネルギーインジケーターがレッドから順に灯り一気にグリーンまで輝きを満たした。

すると、宙から滲み出るように現れた無数の青い機械部品が出現する端から次々と糸矢の身体に張り付いてゆく。

最後に顔面を覆ったマスクが後頭部装甲を迅速に展開し閉塞したことで変化は終了。

これが、人類がアンノウンに対抗するために生み出した対未確認生

命体用強化外骨格・強化型、G31X。

「……フィーチャリング・外宇宙の意志、と言ったところか。」

「なに言ってるんですか!？」

うおおおと駆け出していったG31Xを見送りながら呟いた透の元に、瞳子が息急ぎ切ってやって来た。

「うむ。瞳子。」

「あれ、大丈夫なんですか？」

未だに肩を上下させながら、走り去っていった青い甲冑を眺め遣って瞳子が呟いた。

「糸矢さんて、言っちゃ悪いけど、なんか頼りないって言うか……」

「郵便局員の瞳子」の記憶から見た印象を告げる瞳子に、透はだがいつものように請け負った。

「問題ない。そもそもあれはファンガイアだ。基礎能力は人間を遙かに上回る。人間が使うより効果的にあの装甲を使いこなすだろう。」

今、遠くでG31Xが隣のアンノウンごと緑の巨人の放ったミサイルの爆碎に吹き飛ばされた。

「……ねえ。糸矢さんが味方だつて、先生たちに伝えた？」

「彼らはなぜ糸矢を敵だと認識する？」

逆に聞き返した透を、瞳子は実に味のある歪んだ顔で見返した。

「ああああもおおおおう!？ せんせえ!せんせえええええ!」  
絶叫と共に瞳子は戦場へ駆け出していった。

『あーああ。コレ前は検事が使ってたやつなんだよねえ? ヤル気が削げるなあ。』

『……いつでも降りていいんだぞ。』

『じょーだん。』

ミラーワールドにて、左右反転した鏡のオブジェの前に並んで立つ、北尾が変身した重戦車めいた装甲を纏う緑の銃士「ゾルダ」と蓮が変身したコウモリのような意匠の甲冑を纏う蒼の騎士「ナイト」は、

喚び出して現実世界に送り出した各々の契約モンスターの制御を続け、謎のモンスターと戦わせていた。

かつて見た謎の黄色い仮面ライダーのレクチャーを覚えていた蓮が取った対策を、他の何人かの仮面ライダーも既に目撃し、各自実行していた。

今回のこれも、二人にとってはもう幾度目かのことだったのだが。

『おい。砲撃をやめさせる。ダークウイングが近寄れん。』

『別にいいじゃん。このままぶっ飛ばしちゃったほうが手っ取り早いって。』

『ミラーワールドに引きずり込んでやればそれでカタがつく。』  
カードデッキを持つ者の命を狙う謎のモンスターに対抗するため一時的に休戦・協力をしていたのだが、方やゾルダはその火力で謎のモンスターを倒すことが可能であり、方やナイトは素早さで翻弄して捕らえミラーワールドに放り込む方策である。

おかげで一時的の目的は一致しているというのに、コンビネーションの相性が最悪なせいで謎のモンスター一体にも手こずっていた。

『……ん？なにか吹き飛ばしたかな？』

『……間抜けな仮面ライダーもいたもんだ。』

その最中、ゾルダの契約モンスター、緑の巨人・マグナギガが放ったミサイルが突如乱入してきた、見たことのない青い仮面ライダーらしきものを吹き飛ばした。

幾度か裁判を見た経験のある北尾を以てしても見覚えのないライダーである。

『まあいいか。ついでだ。』

極めてドライに切り捨てたところで、異なる方向から聞き覚えた声が聞こえてきた。

『せんせー！　せんせー！』

そちらを見れば、ビルの壁面のポスターを飾るパネルに映る、そのアクリル板の表面をばんばん叩いて何事か訴える瞳子の姿があった。

『ああもう。瞳子くんはうるさいなあ。』

『せんせー！ あの青いの、敵じゃないですー！』

いつも通り無視を決め込もうとしたが、聞き捨てならない台詞に北尾は瞳子を見返した。

ライダーバトルに直接関係のない瞳子が「敵」という言葉を使ったことに違和感を覚えたためだ。

『……瞳子くん。どういうこと？』

『だーかーらー！ あの青いのは、ミラーモンスターじゃないあのバケモノを、専門的にやっつけてくれるんですー！』

『チツ。』

瞳子の世迷い事を真に受けたわけではなく、ミラーモンスターの圏外活動の限界時間が近付いたため、ゾルダはマグナギガに帰還を促した。

となりのナイトも自らの契約モンスターを喚び戻している。

いずれにせよ、ミラーワールドにいる限り謎のモンスターは自分たちに出しはできない。

だからダメもとで瞳子の妄言の真偽を試してみようと北尾は思っただけだった。

「よし。これでオツケーだよ！」

緑の巨人と大コウモリが鏡のオブジェに飛び込んで消えたのを見送って、瞳子がそこでコゲてノビているG300Xこと糸矢に呼びかけた。

『……』

「ほら、立って！がんばって！」

だが虫の死体のように五体投地している青い甲殻からは返事がないいや。

今、なにかくぐもった、あるいは引き攣った音が漏れ聞こえてきた。

「……？」

それがなにかと耳を澄ましたところに、その声ははっきりと輪郭を

増してきた。

『クツクツクツクツク……』

突然、がばりと立ち上がったG3-Xは、肩を震わせ不気味に笑い声をあげていた。

『クツクツクツク！ ヒーツヒツヒツヒツヒ！』

キツネを模した左右の手首をぱくぱくさせて甲高く笑うその異様に思いつ切りヒいた瞳子は慌てて透のところまで下がってゆく。

「ね、ねえ透、あれ、壊れちゃったんじゃない？」

「いや。極めて正常だが？」

「いや、中身が。」

『やあつておしまい！ボク様！』

やおら絶叫したG3-Xが突如カラスの生態相を持つアンノウン、クロウロード「コルウス・クロツキオ」に向かって突進していった。

『うりゃあああ！？』

『ツーーー！？』

目前で跳躍し体重をのせたパンチがコルウス・クロツキオを激しく吹き飛ばす。

単純な攻撃だが、ファンガイアの腕力にG3-Xのパワーアシストが上乘せされたその威力は凄まじく、この広場の端まで吹き飛んでいったアンノウンはなかなか起きあがってこない。

『こらー！立て！立ちなさい！シヨウちゃんが作ったコレの力は、まだまだこんなもんじゃないんだからね！？』

握り拳をぶんぶん振って氣勢を上げた糸矢は、ごく自然な動作でどこからともなくゴツイ削岩機のような円筒を取り出して左手首にすっぽりと装着して振り上げた。

《G A 1 0 4 ・ アンタレス。》

『ちよつとコツチ来い！』

認証の音声と共に振り下ろす勢いで放たれたアンカーは、ワイヤーを引きずって飛翔すると、今ようやく起きあがったコルウス・クロツキオの片腕と胴体を拘束し絡みついた。

絡め取るや否や、アンタレスのウインチの巻き取りよりも速くワイヤーを引つ張った糸矢の臂力がアンノウンの身を高く舞い上げ、G3Ⅹの元へ放り投げた。

《GSⅠ03・デストロイヤー。》

『うりゃああ!』

吹っ飛んできたコルウス・クロツキオを、右手首に装着した超振動ブレードで縦に叩き落とす。

『ーッ!?!』

『まだまだあ!』

《GXⅠ05・ケルベロス。》

糸矢は両腕の武装を放り捨てると、G3Ⅹの背中、透によって『クラインの壺』のエネルギー供給を得たため無用になったバッテリーパックのあった場所に設置されたアタッチメントに装着されていた、無骨な機械の塊を取り出した。

そしてやはり透によって安全装置の暗証コードを取っ外されたそれを淀みない動作で展開変形させる。

蹴飛ばしたアンノウンに向けて構えられた円筒を束ねられたそれは、何にも増して凶悪で物騒なガトリングガン。

『~~~~!ファイア!』

朦朧として起き上がりかけたコルウス・クロツキオを、毎秒30発ものハイメタル製徹甲弾の掃射が襲う。

『ーッ!?!』

『あああああああ!?!』

魔獣の咆哮のようなうなり声をあげるガトリングガンの弾丸の嵐にさらされ狂った踊りのように身悶えしていたコルウス・クロツキオは、斉射の終了と同時に膝を落とし、倒れきる前に光輪を一際輝かせ爆発した。

「やった!やったよツール!」

「ああ。そうだな。」

垣根の外に立っていた透の元へ、変身を解除した糸矢が大はしゃぎで駆け戻ってきた。

「要領はこれでもいい掴んだらう。糸矢、しばらくこの世界を頼むぞ。」

「ウン！任せといてヨ！」

「それから、瞳子もな。」

「は？」

突如振り向いて告げてきた透に、瞳子は怪訝顔で聞き返した。

「なんのこと？ まだなにかやることってあるの？」

「糸矢の面倒を見てやれ。なにしろ善意のファンガイアだ。ファンガイアの常識が存在しないこの世界で、何が糸矢の存在を脅かすか分からんからな。」

「ええええええええッ！？」

「じゃあな。頼んだぞ。」

「ちょよ、ちよつと！？」

言うだけ言ってそそくさと立ち去ってゆく透を慌てて追いかける瞳子だが、透は実にあっさりと一方的に姿を消してしまった。

『……………ほう。』

その謎の男たちの様子を、蓮はミラーワールドから見ていた。

結局、あの青い仮面ライダーの介入と、現実世界にしながら謎のモンスターを倒して見せたその能力を共に観察していたせいで活動限界時間に近づいたゾルダとナイトは戦いを中止して別れたのだが、蓮は活動時間の残りをギリギリまで使って青い仮面ライダーを追跡していた。

謎のモンスターの爆発跡から立ち去った青い仮面ライダーは、途中で変身を解除するとこの広場と歩道の境目の垣根の所に立っていた男と、北尾が連れていた助手の女と合流して何やら親しげに話していた。

そしてそこにいた男は、以前 蓮の相棒と接触して何やら約束を交



わしたらしい、あの黄色い仮面ライダーの男。

カードデッキを持つ者の命を狙うモンスターと言い、それに対処できる彼らと言い、どうも蓮の周囲にはこの「ライダーバトル」以外にも不穏な事態が進行しているようだ。

それも、恐らくはお互い全くの無関係な黒幕の意志によって。

『……あの助手が通じているなら、やはりあの弁護士先生に詳しく教えてもらわねばな……』

呟くと、ナイトは身を翻しミラーワールドから立ち去っていった。

track・14 キバの世界(前書き)

本作の「キバの世界」におきましては、拙作「ブラックウイドー  
仮面ライダー キバ外伝 仮面ライダー ウィブ(N5859F)」  
の登場人物が、原作ディケイドの「九つの世界」と同様に設定を変  
えて登場致します。

まずは是非 拙作「ブラックウイドー 仮面ライダー キバ外伝  
仮面ライダー ウィブ(N5859F)」の方からお読み頂けると、  
当話をよりお楽しみ頂けるかと思えます。  
よろしければ、是非どうぞ。

幾筋もの弦の上を弓が軽やかに滑る。

広大なステージの中央、一条のスポットライトに照らされ一人の少女がまるで戯れるようにヴァイオリンを奏でている。

踊るようなボウイングにつれポニーテールが右に左にと可憐に揺れる。

伏せ加減の脛に薄く笑んだ形の唇。挙動は激しいのに穏やかな表情を浮かべる相反したその奏演に会場の観客は皆 魅了されているようだ。

キュリッ！

やがて甲高い締め音で演奏が終了し、微睡みから醒めたかのように目を見開いた少女は、ひとつ小さく息を吐くと、改めて微笑みを浮かべ、観客にぺこりと一礼した。

一拍を置いて後、万雷の拍手が巻き起こる。

再びぺこ頭を下げると、少女はてくてくと舞台の袖へと下がっていった。

その舞台裏の袖の奥に、腕組みして立つ長身の男を見つけると、少女はそちらへ小走りで駆け寄った。

「透！お待たせしました！」

「うむ。」

鷹揚にうなずいた透に、ヴァイオリニスト・神楽見 瞳子ははにかんで小首を傾げて応えた。

「調度良かったです。」

舞台衣装のドレスの上に上着を羽織った格好のままの瞳子と透は会場の通路を歩いている。

瞳子はヴァイオリンケースを軽く掲げて見せ、

「この後、これからファンガイアのキングのヴァイオリンのレッス

ンがあるんです。　キングも、あなたの言う「仮面ライダー」なんですよ？」

「うむ。そうだ。」

せかせかと早歩きで進みながら淀みなく答える透。

「キングはほら、種族のトップですから、政治的なお仕事とかとても忙しいんです。私とのレッスンを済んだら、またしばらく会うのも難しい状態になっちゃいますから。」

「そうか。」

やがて関係者通用口から外に出た瞳子は、そこに停まっていた黒塗りの高級車に近寄っていく。

辿り着く前に降りてきた、ダークグレーのスーツに白い髭を持つ初老のショーファーが、後部座席のドアを開いて瞳子を出迎えた。

「あの。こちらは私の兄で、キングのレッスンの補助に来てもらいました。」

「……。」

黙ってにこやかにうなずいた初老の運転手は、特に拒むつもりもなかったのか、変わらぬ態度で透にも乗車を促した。

「どこでレッスンをやるんだ？」

シートにもぐり込みながら問う透に、瞳子はなぜか胸を張って嬉しそうに答えた。

「それはもちろん、キングの居城、キャッスルドラゴンです！」

ファンガイア族に伝わる秘術により城と融合したグレートワイバーン・キャッスルドラゴンは居城としての機能を持ちつつ、いかなる建造物にも合体・接続できる能力がある。

場合によってはそのまま建造物に擬態もできるそうだが、現代ではその能力は必要とされていないので目にかかることはない。

現在は人間社会の政治の中枢施設のひとつのビルに合体しているその正面ロータリーに、やがて二人を乗せたロールスロイスはやって来た。

だから、端から見るとまるで巨大なドラゴンがビルの中から手足と

頭を突き出して埋まっているようにも見えないその高層ビルを見上げ、  
運転手に見送られた瞳子と透はビルに入ってしまった。

やがて指定階へ辿り着いたエレベーターから降り幅の広い廊下を歩  
くことしばし。

なにやら曲がり角の先から大勢の足音が聞こえてきたので瞳子と瞳  
子に袖を引かれた透は立ち止まった。

その角を曲がって現れたのは、威めしいスーツ姿の男女数名とファ  
ンガイア族数名。

そしてその先頭を歩くスーツに身をかためた少年に気付いた瞳子が  
声をあげた。

「あの、キング!?」

「……神楽見先生!」

それに気付いた少年が立ち止まって応えた。

それと同時に後に続いて歩いてきた者たちもぴたりと立ち止まった。  
「どうしたんですか? これから私とヴァイオリンのレッスンだっ  
たかと思いますが」

特に臆することなくキングに問いかける瞳子。

付き合いが長いのだろう。少年も後続の者たちも心得た様子である。

「申し訳ありません。急な案件が発生しまして。お電話を差し上げ  
たんですが、出られなかったみたいで。」

「あ。」

慌てて携帯電話を取り出して確認する瞳子。

設定が、マナーモードになっていた。

「確か今日はコンサートだったんですよね。お疲れさまでした。是  
非聴きに行きたかったんですが……」

「いえ。ごめんなさい、私も出られなくて。」

見掛けには年端もいかぬ少年が、実に丁寧かつ礼儀正しく対応して  
いる。

キングであるにも関わらず、自分の教師への尊敬と礼儀をわきまえ

た態度には、種族の長としてだけではなく一人の人間としての強い矜持を伺わせる。

『……キング。お時間が。』

そこに、側近の狼型ファンガイアがスケジュールを促した。

「ああ。では先生、また次回に。折角足を運んで頂いたので、お茶を用意させますから一階のラウンジでゆっくりして行って下さい。」

「待て。」

言って歩き出そうとした一団を、透が無遠慮に呼び止めた。

『なんだ貴様は!?!』

「お前、「キバ」だな?」

紫の岩塊のような側近の恫喝も無視して、透は少年に問いかけた。

「……それが、どうした。」

雰囲気ガラリと変えた少年が、王者の風格で以て静かに問い返す。突然のあまりの変貌とその威厳に、瞳子は思わず膝を震わすが、当の透は一切気にしたふうもなく、翻した指先に一枚のカードを取り出してかざして見せた。

「これと似たものを見たことがあるだろうか? 俺は、デイケイドと似たような出自の者だ。お前に話がある。」

少年は、カードと透の顔を見つめ黙っていたが、やがてついと目を逸らすと脇を抜け歩き出した。

「悪いが僕は忙しい。替わりの者に話しておけ。」「葬儀屋」。同行はいい。そいつの話聞いてやれ。」

「はい。」

瞳子と透の間をぞくぞくと歩み抜けてゆく一同を見送ると、そこに一団から取り残された者が一人いた。

「ごめんねえ? キングは見ての通り御多忙だから、わたしが取り次いであげる。」

人懐っこい笑顔でそう告げたのは、見た目瞳子と同じくらいの年代の少女。

キングの呼びかけの応えと同じ声のこの少女が、「葬儀屋」とやら

なのだろう。

「ファンガイアを一人、別の世界で拾った。『光ある楽園の綺想曲』とかいうやつだ。ついでに俺の手伝いをさせている。いずれ返す。」  
透は、言われた通り取り次ぎ役と話をすることに決めたようだ。  
まずは糸矢のことの断りを入れる。

「ふうん。見かけないと思ったら異世界に行ってたのね。ありがと。代わって礼を言うわ。だけど、「真名」はファンガイアにとっては重要儀式とかでのみ使うものだから、あんまり言わないであげてね？」

笑顔のまま、最後の所を強い調子で言う少女。

「それから、わたしのことは「遥」って呼んで。「葵遥」。よろしくね？」

ビル一階のティーラウンジに連れて来られた透と瞳子は、一角のソファに腰掛けた。

「なに飲む？」

言ってメニューを差し出して自らも二人の向かいに腰を下ろす遥。

「えーと、じゃあジャスミンティーで。……透？」

メニューを隣の透に差し出すが、ちらと一瞥したきり透は興味なさそうに前を向いてしまった。

「……え、つと、あの、彼にも同じ物を。」

「了解」

応えた遥は気安い調子でウェイトレスを呼ぶと、一同の注文を告げて下がらせた。

「デイケイドとその一行が絡んだ、あの人類反逆未遂事件のことは、幹部一同は既に把握してるわ。」

お茶も来ないうちに遥は話を始めた。流れからして「前振り」であるろう。

「反逆者に取り込まれた側近たちの蘇生も完了して、やる気を出したキングはいま俄然大張り切りなの。人類との共存社会の完成のた

めに、人間のライフエナジーに代わるエネルギー源の開発が急務な  
んだけど。」

「お待たせ致しました。」  
そこへ注文の品を持ったウェイトレスがやってきて、話を一時中断  
する。

やがてウェイトレスが立ち去っていったところで遥は再び口を開い  
た。

「……えーっと、ライフエナジーの新しい供給源のハナシね。その  
開発に大きな進展をもたらす素材が見つかったってことでファンガ  
イア上層部は大騒ぎになっちゃったのよ。」

言って、遥は自分のカップを取り上げてひとくち啜った。

「ふむ。なるほどな。」

遥が口を塞いだ隙に、透が口を挟んだ。

「それで魔化魍の命を代わりにライフエナジーとして吸い取る、か。  
なかなか考えたな。想像だにしなかったぞ。」

「!？」

隣の瞳子が跳ねるように透を振り向き、遥のカップを持つ手がびた  
りと止まった。

「……なんでそれを知ってるのかしら？」

底冷えのする遥の声音と共に、辺りの気温がシンと下がった。

戦いの心得のない瞳子ですらその変化と悪寒を感じ小さく震えてい  
る。

だが、透は相変わらず相手の態度に一切頓着しない。

「なんのことはない。俺は、自分と接続した者の表層の思考が読め  
る。デイケイド経由の情報だがな。渡もそのことで頭が一杯だった  
ようだな。おおむねの状況は把握したぞ。」

「スパスパイダー！」

「はいはいさー！」

遥の突然の叫びに応え、上から人の頭大のコミカルな体型の蜘蛛型  
モンスターが降ってきた。



そしてその蜘蛛が吐き出した白い糸に拘束される寸前、透は左手から一枚のカードを放り投げ、その瞬間まだ糸に絡まれていない右手に取り出したディレイドライバー・カレイドブレイドを振り、宙を舞うカードに刀身の峰のスリットを向けて一閃させてカードを装填させると、振り下ろす勢いでスライドカバーを閉塞した。

「変身。」

《カメンライドウ・ディ・ディレイド!》

その瞬間その身を拘束しようとした糸が千々にちぎれ飛び、透はソファを蹴って立ち上がった。

透に幾重ものグレーのヴェイジョンが重なり、彼方から飛来した黄色のライドピラーが頭部に前後左右から突き刺さって収まった。

迅速にその身をイエローに染め、変化が完了した。

「スパスパイダー!」

「よし来た!」

拘束に失敗したと見るや、遥はそのコミカルな蜘蛛を鷲掴みにし、左手の小指付近にあてがった。

「あ・がぶつと。」

その蜘蛛・スパスパイダー三世が遥の小指の付け根に噛みつくと同時、遥の顔の両頬にステンドグラス様の模様が浮かんで両目が蒼く光り、どこからともなく飛来した幾筋もの白い糸が遥の腰に巻き付き、千切れ飛ぶとその下に幅広のベルトを形成していた。

「変身!」

スパスパイダーを迅速に前へ突き出し、そして腹部へとあてがうと、スパスパイダーはベルトのバックル部分の定位置に収まり、ベルトを魔法陣として鎧を召還すると、鎧は出現と同時に同一座標に存在する遥の身に装着された。

ここまでが各々一瞬のこと。

ディレイドが突き出した剣を、キバに良く似た姿に変身した遥の指甲が捌いて両者の動きが止まった。

突然立ち上がり姿を変えて組み合ったようにしか見えなかった二人

の姿を、動作の速度について行けなかった瞳子が驚愕した顔で見上げていた。

『……やるわね。さすがあの世界の破壊者のお友達ってことかしら？』

『同種の存在ではあるが、友達ではない。』

遥の言葉に、特に感慨もなく訂正するディレイド。

『しかし、お前のその姿はなんだ？ディケイドからもディエンドからも情報のない存在だ。』

未だ獰猛な気配を緩めない遥に対しカレイドブレイドでの牽制を解かぬままディレイドはその姿を無遠慮に観察した。

その鎧は、大まかなデザインラインはキバに酷似しているが、顔面を覆う巨大なセンサーには脚の長い蜘蛛が張り付いたかのような八方向の放射状のラインが這い、肩や腕脚の装甲は例外なく蜘蛛をあしらった彫刻が施され、そして一番特徴的なのは、ベルトから等間隔に生え伸びた、八本のチェーン。

そのチェーンは球と棒を交互に繋いで構成されてぶら下がっており、傍目にはロングスカートを履いているようにも見えるだろう。

おかげで膨らんだ胸郭など装着者の体型も相まって非常に女性らしい外観の仮面ライダーであった。

『その姿の名は、なんと言う？』

ぼつりと問うたディレイドに、遥はやはり気配を緩めぬまま。

『……ウィブ。』

静かにそれだけを呟くと、ウィブはカレイドブレイドを跳ね飛ばし、くるくると踊るように身を翻して距離を取った。

『もう分かってるだろうが、「魔化魍」は異世界の存在だ。このままこの世界に置いておけば、宇宙境界線のバランスが崩れる。俺の使命だ。看過するわけにはいかない。』

特に追跡するでもないが、対峙する姿勢だけは解かずにディレイドが宣告した。

『この世界には、腕の立つ者が多そうだな。住人に被害は出さず、

魔化魍を捕らえられるとはたいしたものだ。」

『……って言うか、倒せないのよ。だから捕まえてフン縛るしかなかった。』

前に向けた掌を腹の前で交差させ、柔らかい動作で左右後方に振り抜く独特の構えでウィブが苦々しく白状した。

『なんなの？あれ。「マカモウ」って言うの？ 別世界の生き物だつてのは、キングが感付いて下さったけど、出現場所によっては人間にも一般生活者のファンガイアにも被害が出る。』

「あ、あの！」

そこに、デイレイドが蹴飛ばした隣のソファに縮こまっていた瞳子が恐る恐る声をあげた。

「なんだか、みんなを守る気持ちは同じみたいですし、ここはひとつ、一時対処法と一緒に検討したほうが良いのではないのでしょうか……」

戦闘の現場で素人が良くやった方だと言うべきか、最後には尻すばみになりながらも瞳子が言い切った。

『……。』

最後の構えのまま機を伺っていた様子のウィブは、しばし黙考するように小首を傾げると、やがて両手を下げ戦闘体勢を解いた。

同時に碎けて宙に溶け込むように鎧が消えてゆく。

跡に現れた遙は、なにやら苦笑顔で頭を搔いていた。

デイレイドも、それを確認して変身を解除する。

「……言っとくけど、最終判断はキングが下すからね。」

「多元宇宙の接触崩壊の危機回避においては、俺は別に現地の住民の心情は斟酌しない。」

「透。せっかくこの場だけでも収まったんですから、余計なこと言わないでくださいよ……」

額に青筋を浮かべた遙に両手を振ってなだめながら、瞳子は透にツッ込んだ。

t r a c k ・ 1 4 キバの世界（後書き）

と、言う訳で仮面ライダー ウィブ・葵 遥の登場でしたが、こういうのもセルフパロと言うんでしょうか。

性格や言動、立場などが原作とは異なりますことをお断り致します。

「まあねー。キングと言えども、まだ小さいですもの。隠し事なんてできないし、向かない性質だったのも、レッスン見てきた先生なら見てて分かるでしょ？」

「ええまあ。」

緩やかに下降してゆくエレベーターの中で、黙って立つ透を挟んだ遙の与太話に返事をする瞳子。

「……ディレイド、あんたにも言ってるのよ。」

「なんのことだ？」

突如矛先を向けてくる遙に、目だけ向けて問い返す透。

「キングに、あんまし突っ込んだ事訊いてイジメないであげて、っ  
て言ってるの。」

「お前の要求内容は要点が著しく欠如している。もう一度話を整理して言い直せ。」

「は？もうこれ以下もないってくらい噛み砕いてんじゃん？」

「はいストップ待ってくださいー！」

再び額に青筋を浮かべて詰め寄る遙と透の間に無理矢理身体をねじ込んで宥める瞳子。

「この人、比喻表現が苦手だから、ずばりと言ってあげないとダメなんですよ！？ あのね透」

言って瞳子は狭いゴンドラの中で怪訝顔の遙に背を向け振り向いて。  
「今度キングに会っても、キングが「魔化魍」のことを黙ってたことを、指摘しないであげて欲しいんです。」

「ふむ。既出の情報のことなど、改めて聞くこともないだろうから、言われるまでもないが。」

「聞かないでくれるそうです。」

「……はあ。」

くるりと振り向いて透の言葉を翻訳して請け負う瞳子に、遙ががっ

くりと肩を落とした。

「あんたさ、こんな唐変木と一緒にいて疲れない？」

「もう慣れました」

「あっそ。」

げんなりとした様子の遙の背後、このエレベーターのドアが、その時 静粛に開いた。

指定階に到着したのだ。

一触即発を起こしたあのテイラーラウンジから十数メートル直下。

遙が壁に埋め込まれたコントロールパネルのスリットに通したパスがなければ出入りできないその鉄の扉の向こうに、嚴重に管理された広大な研究施設が広がっていた。

自動ドアをくぐったところで、入り口両脇に立っていたファンガイアが侵入者に対し警戒態勢を取るが、

「クイーン直属「葬儀屋」が許可した二名だ。」

凜とした遙の宣告に、警備のファンガイアは警戒を解いて元の姿勢に戻った。

「さ。こつち。」

これ以上はさしたる障害もなく、一行は遙に導かれ目的地に到着した。

「せっかくだからね。「この子」も連れて行きたいのよ。用意はできる？」

「はい。いつでも行けます。」

その部屋に入るなり遙が問いかけると、中にいた係員が慌ただしく動き回り、各々機材に取り付いた。

見れば、ガラスの壁で仕切られたその向こうの部屋には、かつて見たG300Xのように、真っ白な甲冑がハンガーに固定されていた。

顔面には黄金の十字架をあしらった面頬を装着し、どこか神々しささえ感じる人型の甲冑。

「これが人間とファンガイアの共同製作による「Intercep

t X Attacker」、未知なる驚異に対する迎撃戦士システム、あ、この場合の「X」てのはその「マカモー」のことね。システム、『イクサ』!」

途中で解説を挟んだ遙の声に応え、白衣を着た研究員の一人がボタンを押し込むと、ガラスの向こうのフロアに電撃が迸り、その白の甲冑が動き出した。

「コネクタ、解除します。」

係員の声に続き拘束を解かれたその甲冑・イクサは、両腕をだらりと下げ、姿勢を幾度か微調整して直立すると、懸架されていたハンガーの台から一步、二歩と器用な動作で降りてきた。

「……あの、誰か着てるんですよね?」

先ほどの容赦ない電撃とそのあまりの自然な拳動の矛盾に瞳子が訪ねるが、遙は自信たっぷりに訂正した。

「いいえ。ロボットによる完全自律稼働よ。」

言っと、遙はそこに立つ白衣を着た女性を一人、袖を引いて引き寄せた。

「紹介するわ。このイクサのボディを造り上げたロボット工学の権

威、浅尾あさお・めくみ 恵さん。」

「……どうも。」

とてもひとりで歩くロボットを造ったとは思えないその正体、眼鏡をかけた華奢な女性に啞然とする瞳子。

「そして、中身の頭脳、プログラムを組み上げたのがあちら。」

と、遙が手のひらで指すと、そこにいた男が突然机にどかんと片足を乗せた。

「わしがあん中身造り上げたコンピュータの天っ才様や! 縁館へりたて

健吾、よろっしゅう!」

怪しげな関西弁でまくしたてた男の異様に、瞳子は先ほどの浅尾恵とは別の意味で啞然としていた。

「ええか。プログラムっちゅうのはロックや! 四の五の小難しいこと考えんとバーっとやな」

「ハロー。イクサ、調子はどお？」

「あねさあああん!？」

なにやら喚き始めた縁館を無視して遙がコンソールから生えたマイクに向かつて話しかけた。

「え!？ お話もできるんですか？」

「はい。見てて下さい。」

照れくさそうに言う浅尾に促され、固唾を飲んでその応答を見守る。すると、イクサはこちらに向き直って返答してきた。

『ア・イ・ム・オ・オ・ケ・イ。』

実にロボット臭い言葉で。

「どや?超・優秀やろが!？」

「別に縁館のバカを擁護する訳じゃないんだけど、動作管制にソフトの大部分の容量が喰われてる現状で、あれだけでもコミュニケーションができるってのは、もの凄いことらしいのよ。わたしは詳しくは分からないけど。」

上階に続く通路を歩く三人分の足音に加え、非常に静粛ながら小刻みにつながるモーターの音が後をついてくる。

イクサの足音だ。

「あの、本当にこのロボットも、一緒に戦うんですか？」

透が黙っているのも、今ばかりは不安にしか感じず、「イクサを同行させる」と主張した遙に問わずにはいられない瞳子であった。

「あら。その子の腕はなかなかのものよ。もう何度も戦闘機動の動作テストを繰り返しているし。本人に聞いてもらいなさい。」

「はあ。」

隣を実に自然な挙動で歩くロボット「イクサ」の十字架の仮面を見上げ、瞳子はおずおずと声をかけてみた。

「あの、大丈夫ですか？」

『ア・ファ・ア・マ・ティ・ブ。』

「……は？」



聞き慣れない言葉に、瞳子はきよとんとした。

「「アフアーマティブ」。「肯定する」とか「その通り」とか言う意味だ。」

前を歩く透がぼつりと告げた。

「……ちよつとデイレイド。瞳子さんのフォローができて、なんでわたしの言ってることが汲み取れないわけ!？」

そこに、なぜか不機嫌になった遥が噛みついた。

「ふむ。思うにお前は言語を省略し過ぎるくらいがある。今後は適切な言語を選択するよう心掛けることを勧める。」

「……やっぱここで殺そうかしら。」

遥の殺気を察知したのか、同時に足を止め遥と対峙する透。

「はいはいもういいですから行きましよう!イクサさん、遥さんをお願いします!」

そんな二人を遮り、いい加減うんざりしてきたらしい瞳子が透を後ろから突き押し進めた。

『ラ・ジャ・ア。』

「ちよつ!?! あんた、なにすん」

さらにイクサまでもが遥を羽交い締めにして連れ去って行ってしまった。

「……ちよつと遠回りしたけど、これから未確認生命体……もうこれからは「マカモー」って呼ぶけど、そのマカモーが現れたと思しき場所に行ってる調査隊の所に行くから。デイレイドはそのバイクを使って。」

地下駐車場で、各々バイクの側に並ぶ一同を前に遥が宣告した。

「で、ゴメン。瞳子ちゃんにはここまでついて来させて悪いけど、ここで待っていてくれる?」

「え?」

言われた瞳子が困った顔で透を見返る。

「どつするの透?」

「瞳子は連れて行く。」

「は？」

透が至極あっさりと言げ、今度は遙が怪訝な顔になった。

「あんた正気？手伝いだかなんだか知らないけど、瞳子ちゃんはいたいけな一般人でしょ！？」 場合によっちゃマカモーと直接対決するかもしれないトコに連れてつたら危ないでしょ！」

真剣な顔で怒る遙に、だが透は相変わらずの鉄面皮で応えた。

「俺の役目は、この世界の住人では倒せない異世界の存在に対処できる仮面ライダーを連れてくることと、その前に現地住民でもできる対処法を教えることだ。それには今回は瞳子の協力が要る。」

「はあ！？ どういうこと！？」

「このバイクを借りていいんだな？」

遙を無視して貸与された普通のバイクに歩み寄る透。

次の瞬間、そのバイクを無造作に一刀両断にされ遙が悲鳴をあげた。

「しかし、遙は「警察官の瞳子」にそっくりだな。」

「言っておきますけど、遙さんの反応が一般的な反応ですからね！？」

走行中のバイク、貸与されたバイクを変換した黄色と白のマシンデイレイダーの上で、ヘルメット越しに会話する透と瞳子。

今、イクサが運転する本人と同じカラーリングの専用バイク・イクサリオンを先頭に、遙の駆るどこか凶々しいバイク・マシンウエーバー、そしてマシンデイレイダーの三台が国道を疾駆している。

辺りの光景はビルや建造物が減るにつれ緑が増え、丘陵地帯からさらに高度を増している。前方にそびえる山へ向かっているのだろう。

「透。「別世界の私」の記憶だけだ。」

「やはり、そうか。」

瞳子の言葉に、その記憶を読んだ透は得心してうなずいた。

基本的に山奥や自然の深い所に巣喰い、近隣の人里の住民や旅行者を餌食にして成長し、害悪を撒き散らす存在、「魔化魍」。

キングの曖昧な表層意識からしか読みとれなかった、この世界に混ざり込んだ「異物」がそれである確率は一層高まったことになる。透はこの遠大な移動時間をそのまま検討時間とし、遭遇するであろうあらゆる事態への対処法を構築していた。

やがて辿り着いた山の中腹の拓けた土地。

各々停車したバイクから降りた三人と一体。

既にそこに停められていたワゴン車が無人であることを確認した遙は、携帯電話を取り出して操作し耳にあてた。

「……もしもし、つつ!？」

通話が繋がったと見るや、突然痛痒に顔をしかめて耳から遠ざけた携帯電話から、なにやらけたたましい絶叫が音を割りながら漏れ出てきたのが瞳子にまで聴こえてきた。

悲痛な叫びにも聞こえるそれに、いきなりの衝撃から回復したらしい遙が再び耳をあてる。

「状況を報告しろ!」

遙が一喝するが、どうも通話相手の状態は芳しくないらしい。遙の「詳しく説明しろ」という怒鳴り声が形を変えて何度も繰り返されたが要領を得ないようだ。

「いいから全速で退避しろ!最優先だ! 切るな!こちらからも向かう!」

厳しい顔で最後の指示を飛ばすと、遙はその携帯電話をイクサに押し付け、額に手を遣り沈黙した。

「……あの、遙さん?」

携帯電話を受け取りながらも宙を見上げて固まっているイクサをよそに、瞳子はおずおずと問いかけるが、遙の反応はやや遅れて返ってきた。

「……ああ。ゴメンね?びっくりさせちゃって。ファンガイア族は階級社会だから、こういう時は人間の軍隊みたいになっちゃうの。」  
言いながら、今の通信の内容を吟味しているように苦悩の表情が抜

けない遥。

「……なんだか、今度のマカモーはえらく大きいらしいのよ。要は、今まで通じていた捕獲手段が通じなくなって泡を喰っているみたい。」

完全に不測の事態なのだろう。遥の態度からは余裕が薄れている。その時、黙って立っていたイクサが彼方を見遣って動き出した。

『ザ・ヒヨ・ウ・カ・ク・ニ・ン。』

言って、一方へと歩き出すイクサに、遥も続いて歩き出した。

「調査隊の端末の位置を特定させたの。これから援護に向かうけど、今度こそ瞳子ちゃんはここにいて。」

ぎりぎりに張り詰めた笑顔で言う遥だが、透が瞳子の手を引いてついて来たのを見て完全に血相を変えた。

「デイレイド！貴様、いつたい何を考えている！」

とうとう振り向いて怒鳴り付けてくる遥に、透はあくまでもいつものペースを崩さない。

「瞳子の異次元同位体は魔化魍退治の専門家だ。お前たちに魔化魍への対処の仕方を教えてやる。」

「分からぬことを……！？」

「遥さん！お願いします！」

立ちほだかる遥に、瞳子までもが言い募った。

「調査隊のファンガイアの方が大変なことになる前に……！私と透なら、きつと確実に対処できますから！」

遥を見つめる瞳子の目は、ただのヴァイオリニストの目ではなくなっていた。

ティールラウンジでは戦士二人に挟まれたただ震えているしかなかったはずの瞳子が、まるで遥をも救助せんとする専門家の顔になっていたのだ。

「……そこまで言うなら、ここからは自己責任になるぞ？」

「分かっています。」

敢えて戦士の顔で問いかけるも、きっぱりと返答する瞳子に、遥は

わずかに目を閉じて黙考し決断した。

「デイレイド。瞳子のごときは、場合によっては完全に任せるぞ。」  
「問題ない。」

万が一の際には「瞳子を見捨てる」と念押ししたと言つのに二人の表情は揺るがない。

透に至つては逆に心配になるほどのあっさりとした返答だが、その確証は認めざるを得ないのは分かっている。

「よし！では付いて来い！」  
イクサに先行を促した遙と共に、透と瞳子も森の奥へと突入していった。

t r a c k ・ 1 5 キバの世界（後書き）

原作最終章「ライダー大戦」の世界において、「素晴らしき青空の会」が存在しないはずの「キバの世界」からなぜイクサが登場していたので、その開発の経緯を勝手に妄想してみました。

とはいえ原作で登場するなり撃破された、「いずれ死んじゃう」ことが確定している人間を創造するのも切ないので、ここでのイクサはもう完全なロボットです。イクサが倒された瞬間、ワタルも『イクサー！？』と叫び、「中の人」の名前を呼んでいないので、ちよんどのいいかと。

それでも、戦死を嘆く程度に大切な存在。多少なりとこのイクサのキャラとしての人間臭い所が表現できればな、と考えています。

木立の合間に並び立ち、遙は頬にステンドグラス様の模様を浮かび上がらせて掴んだスパスパイダーを前にかざし、透はディレイドライバーのスリットにカードを挿し入れた。

「変身！」

叫ぶと同時に、腹部に出現したベルトのバックル部にスパスパイダーを当てがい、遙の姿に召還された鎧が重なりウィブへと変身し、スライドカバーを閉塞した透の身に幾重ものグレーのヴィジョンが殺到し、彼方から飛来したいくつものライドピラーが前後左右から頭部に突き刺さりその身をイエローに変じてディレイドへの変身が完了した。

携帯電話を片手に彼方を見て立つイクサの隣にウィブとディレイドが並ぶ。

『イクサ。再計測。』

『カ・ン・リヨ・ウ。セ・キ・ン・チュ・ウ。キヨ・リ、

サ・ン・ゴ・オ・ナ・ナ。』

完了。接近中。三百五十七メートル。

それを聞いたウィブはイクサに先行を促して駆け出した。

『瞳子。』

「え？ ひゃ！？」

呼ばれた瞳子は確認も待たずにディレイドに抱きかかえられ思わず声を漏らした。

『ここからは足場が極端に悪くなる。加えて生身の人間にはついて来れないルートを多用する。しっかり掴まっている。』

「は、はい！」

言われた瞳子は返事と共にディレイドの首に両腕を廻してしっかりと掴まった。

横抱きにされた瞳子の、コンサート会場から着替えずに来たままの

舞台衣装のドレスは既に裾が枝葉に取られぼろぼろになっていたが、もはや構ってられない。

透が最初からそんなことを心配しないのは分かっていたが、迅速な移動のために瞳子はおとなしく従っていた。

まるで忍者のようにとんでもない長距離を一足飛びで飛び跳ねてゆくイクサとウイブを追い、瞳子を抱えたディレイドもその場から跳躍していった。

『ーーーーッ！』

『ッガアアッ！？』

その山のように巨大な怪物が振り回した脚だかヒレだかに薙ぎ払われてファンガイアが一人、激しく吹き飛ばされた。

『止まるな！走れ！』

岸壁に激突して落下したそのファンガイアが意外と俊敏に走るその怪物の脚だかヒレだかに巻き込まれて見えなくなるのを振り返ることもできず、調査隊の残りの二名のファンガイアは必死に逃げた。

なにしろ相手は巨大で動きが速く、それがなんなのか全容を把握することすらままならない。

加えて最初に仲間を一人「喰われて」しまったことが一同を恐慌に陥れていた。

太古の昔には獰猛と恐れられていたキャッスルドランの祖・グレートワイバーンの当時の姿を、現在のファンガイアで知る者は少ない。身の丈メートルを越え、これほどに危険な魔獣を相手にすることは滅多にないことだった。

しかも、これまでどうにか捕獲できていたモンスターよりもはるかに巨大かつ獰猛である。

突然現れた桁外れの危機が彼らの想定を大きく跨ぎ越し、調査隊は完全に泡を喰っていたのだった。

『ーーーーッ！』



魔獣の咆哮と同時に何か風を切る音が聞こえ、逃げる調査隊の周囲が次々と弾け、土塊が吹き飛び大地が、樹木が抉れた。

『な、なんだあ!?!』

『バカ!止まるな!』

ファンガイアのそばを掠めたのは長大な針の雨。

そのモンスターの山のような背中に木々のように生い茂る無数の針が斉射されたのだ。

振り向いてそれと知った直後には、恐怖にひきつるファンガイア目掛け針が放たれた。

『カ・タ・ヲ・ク・メ』

そこに片言の抑揚のない声が聞こえた瞬間。

針を放った姿勢で調査隊を見下ろしていたそのモンスターが、イクサを真ん中にして肩を組んだウィブ・デイレイドの三人同時の跳び蹴りを横面に食らって大きく仰け反り転倒した。

『やるならやるって言いなさいよね!?!』

『お前の無謀な独断専行をフォローしてやったのだが。』

『グ・・ジヨ・ブ。』

調査隊の前に着地するなりデイレイドに喰ってかかるウィブを抑えに回るイクサ。

『なにが「グツジヨブ」よ!?! 空中でいきなり肩を掴むなんて危ないじゃない!?!』

『ケ・・カ・オ・オ・ラ・イ。』

『だが、確かに結果的には効果的な質量だった。イクサは確かに優秀だ。』

『優秀ってのはそういうことじゃないわよ!それからいま恩着せがましいこと言った!?!』

イクサを小突くウィブに、デイレイドが冷静に分析するが火に油だったようだ。

『あ、あの、代行殿?』

そこに、調査隊のファンガイアが恐る恐る声を挟んだ。

『なによっ!?!』

腰に手をあてた姿勢でギツと振り向くウィブに、格下であるファンガイアは慌てて畏まった。

『い、いえ!』

『あ。』

そこで現状を思い出したのか、ウィブはひとつ咳払いをすると、居住まいを正した。

『……状況を説明しろ。あとの二人はどうした。』

『やられました。一人は喰われ、一人は轢かれ、こいつが負傷、無事なのは私だけです。』

体中を今の針に貫かれた相棒に肩を貸して報告するファンガイア。

『ー……』

そこに、例のモンスターのうちなり声が聞こえてきた。今のダメージから復活したのだろう。

『ひっ!?!』

『よし、お前はそいつを連れて退避、本部へ報告し帰還しろ。あとはこちらで引き受ける!行け!』

『は、はっ!申し訳ありません!御武運を!』

ゆっくりと起きあがった魔獣に背を向け迅速に立ち去るファンガイアを見送り、三人はモンスターを振り向いた。

『イクサ。「バーストモード」。』

『ラ・ジャ・ア。』

ウィブの指示に応え、イクサは右腰に付けていたユニットを取り外して右拳に装着し構えた。

それは、華美な装飾を施された南京錠とメリケンサックを掛け合わせたかのような機械。

『レ・デイ・イ。』

それを眼前で左掌に押し当てたイクサは、右拳を真横へ振り抜くと、再び胸元に引き寄せ、ベルトバックルのスペースへと振り下ろした。

『ファイ・ス・ト・オ・ン。』

バックルにその機械・イクサナツクルを装着した瞬間、イクサの装甲各部が展開変形し、胸郭のソルミラーが露出し、十字架の仮面・クロスシールドが四方へスライドし赤いセンサーを顕して戦闘出力の「バーストモード」へ移行した。

『デイレイド。貴様の策とやらをアテにしていんだな？』

ウィブの問いかけに、デイレイドは軽く請け負った。

『ああ。そのためには通常攻撃で ある程度弱らせる必要がある。』

『いいだろう。我らが先行する。いい所で指示しろ。』

『分かった。』

『イクサ！バトルモードD！』

『ラ・ジャ・ア。』

援護を命令したウィブと共に駆け出してゆくイクサがその巨大モンスター「魔化魍」に飛びかかってゆく。

それを見送ったデイレイドは、デイレイドライバーのスライドカバーを展開し、カードを取り出すと挿し入れた。

『瞳子。用意はいいか？』

『はい！』

後方の大木の陰に隠れている瞳子から返事があがる。

それを聞いて、デイレイドは抜刀の動作でスライドカバーを閉塞した。

『カメンライドウ・ヒ・ヒビキ！』

認証の音声後、すぐさま虚空を切り裂くと、その剣の軌跡に「三つ巴」のような紋章が現れた。

それと同時に、デイレイドライバー・カレイドブレイドの「カメンライド」の指令を受けたデイレイドベルト・カレイドサーキットが変化を始める。

複雑な機械を圧縮したかのようなバックル部分がドット柄のノイズに包まれ、その形状・構造・組成を変更してゆく。

やがてそこに、どちらかと言えばアナログな印象のベルト、むしろ

「帯」と呼ぶべきものが現れた。

バックル部分の円盤に先ほどの「三つ巴」の紋章があしらわれ、腰を取り巻く茶色の革ベルトには左に三枚の銀の円盤を、背面に二本の棍棒を、右に鬼面をあしらった音叉をそれぞれ提げている。

その右の音叉を取り上げ、ふたつ折りにたたまれていたそれを一振りして展開させると、カレイドブレイドに軽くぶつけた。

すると、透き通るような甲高い共鳴音を発し始めるその音叉。

デイレイドベルト・カレイドサーキットが変移して顕れたこれらの装備はあくまでも模造品で、特にこのベルトの持ち主である仮面ライダーに限ってはベルトそのものには装着者を直接変身させる機能は存在しないのだが、その変身プロセスを辿ること自体にその力を認識させる意味があり、デイレイドのカメンライドにおいては不可欠な儀式である。

その共鳴音を発する鬼面の音叉を自身の額にかざすデイレイド。その途端、燃え盛る炎に身を包まれたデイレイドは、やがて裂帛の気合いを込めてその炎を振り払った。

そのあとに現れたのは、やはりベルト以外はデイレイドのままであったが。

『よし、瞳子、やれ！』

叫ぶと、腰の後ろに設置されていた棍棒を両手に抜き放ち、デイレイドもその魔化魍へと駆け出していった。

巨大な体で暴れ回る魔化魍に対しイクサとのコンビネーションで戦っていたウィブが距離を開けた隙に飛び込み、その両の棍棒を叩き込むデイレイド。

それは攻撃のためと言うよりはまるで和太鼓の演奏のようであった。

『ちよ、ふざけてんのデイレイド！？』

『攻撃を緩めるな。続ける。』

構わずに奇矯な体勢で連打を浴びせるデイレイドに不審げな様子を見せずともなく、八つ当たり気味に攻撃を加えるウィブ。

巨大なヒレの殴打を飛び退いてかわした所にイクサによるやたらグ

リップの長い銃からの射撃が襲い、さらにデイレイドとウィブが飛びかかった。

『あのね、遊んでんならあんたから片付けるわよ!?!』

『魔化魍の動作が鈍っているのに気付かないのか。聴け!この音を!』

間近で炸裂する自分たちの打撲音でまったく気付かなかったが、確かに何か、音色が聞こえる。

そしてモンスターの動きが鈍くなっていることにも気付く。

『この音……ヴァイオリン? まさか!?!』

麗しき緑溢れる大自然に、優しい音色が染み渡るように広がってゆく。

荘厳な大樹の麓で踊るようにヴァイオリンを奏でる瞳子の姿はまるで葉の上で戯れる妖精のよう。この草木の中にあつては裾のほつれたドレスですら あつらえた衣装のようであった。

薄く笑んだ形の唇に伏せ加減の瞼。細かく跳ねるポニーテールなど奏演自体は先刻のコンサートと同様だが、今の瞳子がそこに込める気持ちは別種のもの。

今の瞳子の意識には、デイレイドのライドピラーによって接続された「九つの世界」の瞳子のうち、とある世界の瞳子の記憶が強く顕れている。

すなわち、「清めの音によって人々に仇成す魔物を調伏する鬼」・音撃戦士の瞳子の記憶が。

その記憶にある音色を、この瞳子は自らのアートで再現していた。だが、「魔を滅する」音撃の業は素質と修行が必要なもの。同一人物とはいえ おいそれと発揮できるものではない。

( だけど、無関係じゃない! )

「音撃戦士の瞳子」の記憶と透のアドバイスが、今の瞳子の成すべきことを教えてくれた。

( 私にできること! それでみんなを助けたい! )

「救う」などとおこがましいことなど考えたこともない。ただ、できることをやらずにはいられない。それが今の「瞳子の記憶達」を強く結びつけていた。

『魔化魍は、基本的にアナログ楽器の生演奏の音に弱い。効果は靦面だ。』

『「清めの音で調伏」だなんて、まるで日本古来の陰陽師じゃない!?!』

『「まるで」じゃない。その世界では「そのもの」だ。「音撃道」と言ってな。』

攻撃の手を緩めぬまま言葉を交わすディレイドとウィブ。

『俺のこれも、敵を太鼓と見立てた独自の打法に基づく。決して遊んでいる訳ではない。』

『あーあー悪かったわよ!』

瞳子の演奏とディレイドの音撃は時間の経過と共に効果を顕し、この巨大魔化魍、ディレイドの内部の情報領域によれば「ヤマアラシ」と「ウブメ」という二種の魔化魍が合体した異種「ナナシ」の動作は先ほどからは明らかに鈍くなっていた。

反撃自体も減り、相当弱っていると見て間違いないだろう。

『そろそろ止めを刺す。これ以上は通常攻撃では滅ぼすことはできない。』

『分かったわ。お手並みを見せてちょうだい。イクサ!』

ウィブの合図によって魔化魍「ナナシ」から大きく飛び退くイクサ。離脱の置き土産にウィブが強烈な蹴りを喰らわせてナナシを転倒させると同時に、持ち代えたディレイドライバーにカードを挿し入れカバーを閉じた。

《アタックライドウ・カエンレンダノカタ!》

カレイドブレイドを一閃させ「三つ巴」の紋章を出現させると、ディレイドは横倒しになったナナシに駆け寄り、ベルトバックル部分の円盤を外して魔化魍の腹に押し当てた。

すると、円盤が吸い込まれるように魔化魍の腹に消え、代わって「三つ巴」を描いた巨大な光陣が現れた。

『はっ!』

透にしては実に珍しい気合いの発声を飛ばすと、デイレイドはその光陣を太鼓とし、二本の棍棒を撥とした大仰な構えの後、型に則った怒濤の連打を繰り出した。

『……なんだか、奇妙なセッションねえ。』

瞳子のヴァイオリンに合わせたらしきデイレイドの演奏に、ウィブがぼつりと呟いた。

『はあっ!』

やがて、最大の氣勢と共に、締めの一発を叩き込んだところでデイレイドの演奏は終了したようだった。

魔化魍の撃滅の仕方など知らないウィブは、この後モンスターが爆裂四散するのかそれとも祓われて消滅するのかと、変に静かな死体と止まったままのデイレイドを眺めていた。

『……』

『ちよつとー。終わったのー?』

なにやら怪訝な様子の子の背中に問いかけてみるが、どうも様子がおかしい。

『……これは……いつたい……』

『?』

しかも、あろうことか止めを刺したはずのデイレイドの、困惑の聲が聞こえてきた。

『ちよつ!?!?』

ウィブの呼びかけは、突然の轟音に遮られた。

突如、死んだように崩折れていたはずのモンスターの死体が跳ね上がり、間近にいたデイレイドが吹き飛ばされてきたのだ。

完全に不意打ちだっただろう、巨大なヒレがクリーンヒットしたのか体勢の崩れた状態で吹き飛んでくるデイレイドを、跳躍したイク

サがキャッチして着地した。

『ノ・オ・プ・ロ・ブ・レ・ム。』

『ちよつと!?!? どういうこと!?!?』

イクサに抱えられて立ち上がったデイレイドに詰め寄るウィブ。振り返れば、モンスターは完全に立ち上がり、復活しているように見える。

だが、なにかが違うとウィブは思った。

色が。ウロコが妙に彩りが濃く、はつきりしているように感じたのだ。先刻まではそんな特徴はなかったように思う。

『……おい。先ほど、ファンガイアが「喰われた」と言ったな。』

『え?』

デイレイドの問いかけに、何のことか思い出すのに数瞬かかる。

『え、ええ。』

そして、その言葉の意味と目の前の怪現象が結び付く。

『……つて、まさか!?!?』

『あれは……』

デイレイドの、まるで思いもかけないというような声音がやけに耳につく。

『あれは、「デュアルビーイング」……』

無数のウロコをステンドグラスのように光らせた、不気味に変色した魔化魍「ナナシ」の変異体が咆哮をあげた。



t r a c k ・ 1 6 キバの世界（後書き）

最後の最後に登場しました、この「ディレイドマスカークレイド」における敵性要素「デュアルビーイング」。

どんなものは本文と字面でだいたにお察し頂けるかと思いますが、さて、二種の特徴を併せ持つこの難敵を次回どう打ち倒すのか、見当は付かれるかもしれませんが、お楽しみにして頂けるとありがたい。

ステンドグラスのようにウロコを輝かせ、十二メートル超もの巨体が僅かに身を沈めたのち空高く跳躍した。

そのデイレイドが称した「デュアルビーイング」と化した巨大な魔化魍「ナナシ」の変異体は、デイレイドらの間近に轟音と共に着地するとその巨体からはあり得ないほど敏速に一回転し、まるで壁のような尾で三人を薙ぎ払った。

「!?!」

「がッ!?!」

その重量差に抗すべくもなく殴り飛ばされるデイレイド、ウィブ、イクサ。

「ooooooooo!!」

間髪入れず大きく吼えた魔化魍が身を屈めると総毛立つ背中を針を一斉に発射した。

無数の針の雨がその巨体の前方の実に広範囲を舐めるように蹂躪する。貫かれた木々が弾ぜ飛び土砂が砕け大地が抉れ何もかもを吹き飛ばす。

「ぬooooo!!?!」

「くooooo!!?!」

あまりにも大量の針が襲いかかり、装甲が貫通は阻みはしたものの滅茶苦茶に殴られたかのように錐揉みして再び吹き飛ばされてゆく。辺りはもはや緑は消え失せ、唯一そこに立つ魔化魍を中心に巨大なクレーターのような有様となっていた。

「ooooooooooooo!!」

天を仰ぎ咆哮をあげると、魔化魍は何処かを目指し歩き出してゆく。

「……………くあ、」

小さくうめき声をあげ、樹木の残骸を押し退けてウィブがゆっくり

と起きあがった。

『……デイレイド？ イクサ？ 生きてる？』

無惨に抉られた周りの惨状を見回して呼びかける。自分以外、身動きするものは見当たらない。

あとは亡者の列でも加えれば「地獄絵図」の一丁上がりとも思える木々の残骸の上を乗り越え、付近を探る。

『デイレイド？ イクサ？』

『ア・イ・ム・ヒ・ア。 リ・カ・バ・リ・イ・ナ・ウ。』

少し離れた所に、半身を土砂に埋もれさせた、セーブモードに戻ったイクサを発見した。

目立った破損はないが、内部を自己修復中であるイクサを確認すると再び立ち上がりさらに辺りを探る。

『デイレイド！？ 返事なさい！』

腰に手を当て声を張り上げる。

しばしの静寂。

まさか、今のでやられたか？

苛立ち紛れに悪意でその可能性を疑ったその時、イクサが無事な片腕を差し上げた。

『ハ・ン・ノ・ウ・カ・ク・ニ・ン。 シ・チ・ジ。』

言われ、七時の方角・背後を振り向く。そちらは特に土砂と樹木の残骸がひどく積み重なっている。死角が多く、確かにこの向こうには互いの認識は困難だろう。

指定の方角へ慎重に駆け出すと、やがて僅かに人の声が聞こえてきた。

「透！？ 透！？ ねえ！？ 返事して！？」

積み上がった土砂の向こうに、仰向けに倒れる黄色の体躯・デイレイドと、その傍らにすがりつくボロボロの瞳子の姿があった。

生身の人間がこの範囲内において無事なわけがない、恐らく最初にした安全圏から戻ってきたのだろう瞳子は動かぬデイレイドに必死に呼びかけを続けていた。

だが、ウィブにはなんとなく分かっていた。

自分がこうして行動可能なのに、ディレイドがこの程度で死ぬはずがない。

『……立て。ディレイド。ヤツを追うぞ。』

「遙さん!？」

味方の無事を知った安堵と理不尽への困惑が混ざった声をあげる瞳子には構わず、ウィブは続ける。

『まだ貴様の使命は終わってはいないだろう。このまま不貞寝しているつもりか?』

『……デュアルビーイングへの対抗手段がない。』

「透!？」

突如ぼつりと呟いたディレイドに瞳子が振り向くが、ディレイドも瞳子に構わず独白のように語り続ける。

『ファンガイアの特徴を取り込んだ魔化魍には、もはや音撃は通用しない。』

『まだわたしは切り札が残っている!』

ウィブが声を荒げるが、ディレイドの調子は変わらない。

『無駄だ。ファンガイアには魔皇力の攻撃は通用するだろうが、魔化魍には効かない。お前が言ったことだ。あれは同時に魔化魍でもあるんだぞ。』

いつもの淡々節で語るディレイドだが、ウィブにはなぜかそれが力ないぼやきに聞こえた。

『やってみなければ分からない! ファンガイアの特徴を取り込んだのなら、今度は多少は効果があるはずだ!』

『無駄だ。デュアルビーイングとは、互いの長所を増長し、互いの弱点を互いにスポイルしてしまう。そういう存在だ。』

風が、砂を巻き上げて辺りを吹き抜けた。その風が歩み去る魔化魍が木々を踏み倒す轟音を運んでくる。

『「デュアルビーイング」とかいう名とその特性は出てくるクセに、肝心の対策が出てこないな。どうということだ?』

ウィブが皮肉げに、だがどうでも良さそうに問いかけた。

「知らん。デュアルビーイングの情報は俺の内部の情報領域に奴の発生と同時に現れた。対処法も存在するが、今は実行不可能だ。」

「わたしの切り札と、貴様の「音撃」とやらを同時にぶつけてやればいいのではないか？」

「さつきも言った。「同時攻撃」をしようとも、それぞれの攻撃をそれぞれの特性が阻むだけだ。必要なのは「同調攻撃」、すなわち「ファイナルフォームライド」と「ファイナルアタックライド」だ。だが、今は適切なファイナルフォームライドが存在しない。ゆえに対抗できない。」

ウィブには、ディレイドの言っていることの後半がよく理解できなかったが、もうどうでもいいことだった。

要は、こいつは諦めたのだ。

そんな腑抜けにはもう用はない。

「分かった。貴様はそこで寝ている。」

吐き捨ててウィブは歩き出した。

「イクサ！復旧し次第すぐに追って来い！」

「遙さん！」

遠くのイクサに指示を飛ばすと、ウィブは瞳子の呼びかけを無視して走り去ってしまった。

「……透。本当に、もうダメなんですか？」

「ああ。」

ウィブが立ち去ってから、僅かの間を置いて再び問いかけるが、応えは素っ気ないものだった。

「だ、って、これまでだって、結構むちゃくちゃな状況でも簡単に片付けてきたじゃないですか。どうして突然こんな、どうしようもなくなくなっちゃうんですか!？」

途方に暮れるほど大量に溢れていたミラーモンスターも、アンノウとファンガイアの混合集団も、現地の仮面ライダーとの二人掛か

りで倒してきたはずだ。  
それなのになぜ。

『これまでのことは、別に困難でも簡易でもない、ただ既知の状況  
対し的確に可能な対処をただけだ。「できること」を「やった」  
に過ぎない。だが、デュアルビーイングは違う。デイケイドからも  
デイエンドからも情報のない事例だ。俺には、前例のない未知の事  
象に独自で対処するという概念が存在しない。なぜなら、俺は『シ  
ステム・デイケイド』のフォロワーバックアップモジュールだからだ。  
』  
透にしては珍しい長広舌に、つい聞き入ってしまう瞳子。

『……お前が「なぜ」と問うから答えたんだが。』

「……でも、辰巳さんに適当なこと言っただけだし、芦河さん  
の意図を汲んだり、結構好き勝手にやってたじゃないですか。」

『それも同様だ。俺の行動はデイケイドの行動を基にしている。』

「……そのデイケイドって人は、どういう人なんですか。」  
透の人格の真相に、あきれ半分で驚く瞳子。

『だから、俺の中に次のルーチンが存在しないため、俺は行動でき  
ない。』

デュアルビーイングに吹き飛ばされたきり身動きしなかったのは、  
そういう理由からだっただけだ。

「……それじゃあ、「透には」もうどうしようもないんですね。」  
ため息混じりに言っただけ、瞳子は立ち上がった。

そこにイクサが小走りで駆けてきて、片手を敬礼の形にしながら瞳  
子の背後を通過してゆく。

『瞳子。言っておくが、勝てないと分かっている戦いを挑むのは、  
ナンセンスだ。』

瞳子の思考を読んだのか、仰向けに倒れたまま言い募る透を、見つ  
めながら瞳子は応えた。

「それも一理あると思いますけど、でも勘違いの落とし穴でもある  
と思うんです。」

『どついつことだ？』

初めて透が聞き返した。純粹に疑問を問うために。

だが瞳子は、その反応すらも愛おしそうに微笑んでそれに答えた。

「透は確かに物知りだと思っし、宇宙をばんばん行き来しちゃうすごい技術も持っている。けれどね？透は「神さま」じゃないんだよ？」

後ろ手に組んで、上体を曲げてお辞儀するように透を覗き込む。

「透は物知りだけど、全てを知ってるわけじゃない。現にデュアルビーイングのこともさっきまで知らなかったでしょ？」

『だから、対処法も俺たちの認識の外のどこかにあると言っのか？』  
「……そう信じて、一生懸命考えながら、次へと動くことができるの。私とか遥さんは。」

言っつて、瞳子は身を翻した。

「ごめんね、透。もし私がダメだったら、「ほかの私」をよろしくね？」

そして、瞳子は透をその場に残して駆け出していった。

『うおおおおお！？』

魔化魍の巨大なヒレの殴打は避けたものの、それが砕いた岩石に激突されて吹き飛ぶウィブ。

イクサ・バーストモードの牽制の射撃に魔化魍が気を逸らした隙に体勢を立て直す。

『おのれ！このデクノボウがああッ！？』  
吼える遥。

暢気に歩いていた魔化魍に、追い付くなり後ろからウィブ最大の必殺技、並のファンガイアなら五回は死ねる「ディープブルームーンブレイク」による跳び蹴りを叩き込んだのだが、いつそ呆れるくらい綺麗に無視されたのだ。

だが、だからと言っつて諦める謂われはない。

『イクサ！追い込め！』

巧妙に配置を変え、魔化魍の周りを目まぐるしく動き回り、次々と手段を講じてゆく。

やがて目標の地点に魔化魍が踏み込んだ時、ウィブは最後の一手を実行した。

『はっ！』

この戦闘中に辺りに張り巡らせた「糸」を引き、魔化魍へと殺到させる。

『oooooooooo!?!』

木々を経由して縦横に疾る無数の「糸」が魔化魍を束縛した。

離れた所に着地したウィブは、その様子を見ながらベルトのポーチからフェッスルを抜き取りバツクル部のスパスパイダーの口元にあてがった。

『フォートレスミッドガル！』

グオオと小さな笛に似つかわしくない重い音を吹き鳴らした直後、地面を透過して、巨大な蛇、ファンガイア族に伝わる秘術によって城塞と融合し移動要塞と化したグレートサーペント・フォートレスミッドガルが浮上してきた。

『これで駄目押しだ！』

『oooooooooo!』

ウィブの命令に応え、大蛇が巨大魔化魍に噛みつき、押さえ込んだ。『せめて、身動きさえ止められれば……ん？』

次の手を考えようとしたその時、どこからかヴァイオリンの音色が聞こえてきた。

いつの間にか、近くの丘の上に現れた瞳子が、ヴァイオリンを演奏していた。

『瞳子！なんで!?!』

その無謀な行動に啞然とするが、すぐに得心する。瞳子も、命を懸けた専門家なのだ。

すると同時、遥にあることが閃いた。

『イクサ！瞳子を護れ！最優先だ！』



大きく跳躍したイクサが瞳子の前に立ちはだかると、魔化魍の背中が総毛立ったのは同時だった。

あるところか、「糸」に捕らわれ、フォートレスミッドガルに拘束された状態で魔化魍は無数の針を全包围に一斉射し出したのだ。

『oooooooooooo!?!』

間近で無数の針に貫かれ苦悶の声をあげるフォートレスミッドガル。急いで木立を盾に駆け抜けたウィブは、瞳子がいた丘が粉々に吹き飛ばされるのを目撃した。

『瞳子っ!?!』

次々と碎かれる木々から必死で逃げながら叫んだ。

だがすぐにヴァイオリンの音が復帰する。

離れた場所に、着地したイクサに抱きかかえられた瞳子が演奏を続けていたのだ。

『あの娘……面白い!』

仮面の下で不敵に微笑んだ遙は、ポーチから別のフェッスルを抜き出し、スパスパイダーの口元にあてがった。

『おい、遙、これは……』

『いいから景気よく吹き鳴らして!』

それは、「シールフェッスル」と呼ばれるフェッスルの中でも特殊かつキングやクイーンによって嚴重に管理されるはずの一族秘中の秘の危険物。

単体の目標にしか効果を発揮できないが、音色に捕らわれたファンガイアを問答無用で封印あるいは抹殺する。

遙が「葬儀屋」と呼ばれる由縁。裏切り者を処刑する役割であるクイーンの補佐・代行者として任命された時からクイーンに貸与されていたものだった。

『じゃあ「両方の嫌いな」「音」だったら、どうなのよ!』

甲高く、不吉な音色を吹き出すスパスパイダー。

『せっかくのセクションよ!瞳子のヴァイオリンに合わせなさい!』

『おっ!』

薙ぎ払われた荒れ地に、奇妙なデュオ・セッションが響き渡る。途中から瞳子が音階を変えたのか、決して耳障りの良いものではないシールフェツスルの音色にヴァイオリンの音が重なったとき、綺麗な協和音へと変化した。

『……！？ ……！？』

魔化魍が、身を振らせ苦悶の悲鳴をあげた。効果は現れている。

だが、魔化魍が暴れるにつれ、拘束している「糸」を支えている木々が揺れ、たわみ、あるものは根を地面から引きはがされようとしている。

『！ させるか！』

叫んで、再び「糸」を展開させようとするウィブ。

その時、あるうことか反対側にいた瞳子が魔化魍を拘束する「糸」の一部に近寄り何か細工をしようとしているのが目に入った。

『あの娘！？ なにしてんの！？』

絶叫したウィブ。そこは魔化魍が一步步は届く距離。

果たして、瞳子がした細工とは、自らのヴァイオリンをウィブの「糸」に絡ませることだった。

ピンと張られた「糸」とヴァイオリンの弦を平行に絡め合わせ、その状態で宙のヴァイオリンに組み付き、弓を滑らせて演奏を再開したのだ。

『……！？』

さらに苦悶の声をあげる魔化魍。糸に直接音の振動を伝える方法が効果をあげているようだ。

だが。

魔化魍はただ苦しむだけで、滅ぼすには至らない。

足りないのか。やはり駄目なのか。

いや。

遥と瞳子の策は、まだ終わってわけではない。

（魔化魍が滅びるまで、いつまでも演奏を続けてやるまでだ！）

その時、互いに見つめ合う瞳子と遙が、互いにどこかで何か繋がった気がした。

笛も、自らが奏でるヴァイオリンも、音を鳴らし続けている。

遙が音を合わせてくれてから効果は発揮されているようだったが、音撃ではない音では魔化魍を滅ぼすには至らない。

だがもうやめるわけにはいかないのだ。

遙の覚悟が聴こえたから。

その超常の現象に気づかぬまま、瞳子は必死に演奏を続けていたが、そろそろ腕が痛み始めてきた。

こちらの音の振動を直接魔化魍に伝えることまでは良かったが、それは同時に相手の振動がこちらに伝わるということでもある。

暴れ続ける魔化魍を捕らえる糸がその暴虐に揺さぶられ、それを押さえつける瞳子の体力を著しく奪っていたのだ。

加えて糸を支えるどこかの木がたわみ始めている。このままでは糸が外れるか、どこかが切れるか。

それに、糸が緩めば音も伝わらなくなる。

遙が張り直してくれなければ、策は終わってしまう。

その遙は既に糸のかけ直しに動いているようだったが、その時、ついにどこかの木が千切れ飛んだ。

「!?!」

とてつもない力をかけられていた糸が突然その緊張を解かれたのだ。反動で無軌道に踊る糸を見て瞳子はあることを連想したが、一步遅かった。

反動が伝播し鋭く跳ね上がった糸が、瞳子の肩を切り裂いたのだ。

「っああッ!?!」

血をしぶかせて跳ね飛ばされる瞳子。

「瞳子ッ!?!」

遠くから遙の絶叫が響く。

(いけない……)

ヴァイオリンは手を離れ、そして遙の腹に張り付く蜘蛛のモンスターは、笛を「吹いている」のだ。

息継ぎに、音が途切れることがある。

完全に無音になった瞬間、魔化魍が糸と木々を引きずり瞳子の方へ向き直った。

そこはもう目の前。巨大な魚めいた顔面と背中 of 針の山が視界を覆い尽くすほど間近に迫り逃げる場所も時間も方法もない。

巨大なヒレのひと薙ぎで瞳子は絶命するだろう。

(ああ。駄目だったかな。)

ふと、瞬間が引き延ばされたような気がした。

死を目前にして取り乱したりしない自分に驚きながら、ちょっとだけ誇らしく思う。

ごめんね透。偉そうなこと言って、私も尽き果てちゃいました……。

『いや。お前は良くやった。』

《ファイナルアタックライドウ・スラッシュ!》

良く聞き覚えた声と共に、閃光の斬撃が魔化魍を激しく叩き潰した。

「透っ!？」

『デイレイド!?!』

『うむ。』

瞳子の前に立ちはだかった黄色の戦士が、いつもの調子で事も無げにうなずいた。

『ちよつとあんた!なにしに来たのよ!』

「透、どうして?」

『ふむ。つい先ほど、この状況を片付ける手段が生まれてな。』

言っつて、デイレイドは振り向いてその手の三枚のカードをかざして見せてきた。

『お前がウィブと接続したおかげで新たなファイナルフォームライドを発現した。』

「え……あ。でも、さっきつて、透が倒れていた所から、ここま

ですごく遠くて……」

どの時点から移動を開始したのか分からないが、どうもタイミングが合うはずがない気がするのだ。

「俺を誰だと思っている。平行宇宙を渡れると言うのに、たかだか物理的の四百六十三メートルの空間を渡ることなど造作もない。俺は、瞳子のいる所ならどこからでも一歩で来れるんだぞ。忘れたか？」  
いつもの調子で、でもどこか得意げに語る透に瞳子は思わず脱力してしまった。

「……まったく。あなたって人は。」

「こらー！ディレイド！無視すんじゃないわよ！」

「ああ。聞こえている。このデュアルビーイングを片付けに来た。こちらへ来い、遥。」

倒れる魔化魍を迂回してこちらへ跳んでくるウィブとイクサ。

「今度こそ大丈夫なんでしょうね？また不貞寝したら次こそ先に殺すわよ？」

「問題ない。」

あっさりと請け負うと、ディレイドライバーにカードを挿し入れカバールを閉じる。

《カメンライドウ・ヒ・ヒビキ！》

ベルトを音撃戦士の装備帯に変移させ、再びディレイドライバーにカードを挿し入れる。

「今度はお前の協力が不可欠だ。「同調攻撃」を行う。俺の前に立て。」

「なによ勝手に仕切ってくれちゃって。あんたがわたしをエスコートしてくれるって言うの？」

ぼやきながらも言われた通りディレイドの前に立つウィブ。

「ここからどうするんだか、あらかじめ言っと思ってくれないと、合わせるものも合わせられないわよ？」

「問題ない。黙ってそこに立っててくれればいい。」

言いながら抜刀の動作でスライドカバールを閉塞するディレイド。

《ファイナルフォームライドウ・ウ・ウィブ!》

『は?』

自分の名を呼ばれたことを訝しみ振り向こうとした瞬間。

『死又程くすぐつたいぞ。』

『デイレイド貴様あ!?!』

ウィブの身体にいきなりカレイドブレイドを袈裟掛けに透過させたデイレイドに対し、ウィブの絶叫はかなり本気の怨嗟の色が込められていた気がした。

カレイドブレイドの斬撃の軌跡、ウィブの身体に重なるように八角形型の蜘蛛の巣のようなライダーズクレストが現れた。

カレイドブレイドの支配下に置かれたウィブの身体は僅かに宙に浮かび上がると、迅速に回転し変形・変移してゆく。

やがてそこに、巨大なスパスパイダー三世を模したギター、いや、ヴァイオリンが出現した。

八方に脚を伸ばしたスパスパイダー型の本体から、頭の部分から長大なネックが伸び、それに沿って幾筋もの弦が張られている。

だがそのヴァイオリンは、胴部分の側面にいくつかの孔が空いており、ただのヴァイオリンにはない機構が加えられている。

それがなにかはまだ分からないが、これこそがウィブのファイナルフォームライド『ウィブフルート』。

『い、いきなり乙女なんて卑猥なことしてくれんのよあんたは!?!』

その喚く巨大なヴァイオリンもどき、ウィブフルートの長大なネックを掴み、デイレイドはそれを肩に担いだ。

『ああ。事前に言うのと逃げられることは知っているからな。』

『「世界の破壊者」ってのを「世界の痴漢魔」に変更しなさい!?! っていうか、言い触らしてやる!』

『訳の分からないことを言うな。』

『訳分らないかなあ。』

女性二人の意見を無視し、先ほどのデイレイドスラッシュのダメー

ジから復活したらしい魔化魍がのそりと起きあがったのに合わせ、振り向いて身構えるデイレイド。

『行くぞ。』

呟いて駆け出すと、デイレイドはウィブフルートを振り上げ魔化魍の眼前まで跳躍し、それを振り下ろした。  
ぐがぎゃん。

「きゃあああああ!？」

もの凄いい、なんとも形容し難い音をばら撒いたその攻撃を見て瞳子が悲鳴をあげた。

「が、楽器になんてことするんですかあ!？」

『これはこういう武器だと言つに。』

構わずデイレイドは再びウィブフルートを振り下ろす。  
ぶぎゃーん。

「あああああああ!？」

先ほどから複数種の楽器を一度に弾いたような音が鳴っているのは、全てウィブフルートから発生しているものである。

ウィブフルートは見かけはヴァイオリン、すなわち弦楽器でありながら、胴体に穿たれた孔は空気の流入によって音を鳴らす管楽器、そしてウィブフルート自体を打ち鳴らす打楽器と、管・弦・打、全ての楽器の特性を同時に内包する武器である。

現実的な見地からすれば破綻している構造ではあるが、デイレイドの武器としてはきちんと成立しているのだ。

そしてそれを操作しているのは音撃戦士にカメンライドしたデイレイド。

ただの騒音にしか聞こえないウィブフルートの殴打は、魔皇力と音撃とを完全無欠に融和させ、デュアルビーイングをこれまでのなによりも激しく打ち倒していた。

『はああ!』

ウィブフルートを振り回し、デュアルビーイングに反撃の隙を与えないフルスイングによる殴打に次ぐ殴打の連撃。

激突の度に鳴り響くその管・弦・打の三種の音色が混じった音は、さながら神道における神楽鈴のように聴こえ……なくもないと瞳子は思った。

事実、「音撃戦士の瞳子」の記憶には比較的馴染みに近い音であり、打ち倒されたデュアルビーイングは身体のおちこちのウロコや針を破壊され深いダメージを負っている。

『遙。今度こそ止めを刺す。』

『しくじるんじゃないわよ。』

ウィブフルートを手放して浮遊させ、取り出したデイレイドライバーにカードを挿し入れると抜刀の動作でカバーを閉塞した。

《ファイナルアタックライドウ・ウ・ウィブ!》

そして目前のウィブフルートのネックを再び握りしめると、デイレイドの身体が虹色の閃光を放ち始めた。

その場でウィブフルートを振るうと、色とりどりのデイレイドのヴィジョンが残像のように僅かに遅れて追従する。

『はああっ!』

デイレイドが裂帛の氣勢と共に空高く跳躍すると、七色のデイレイドのヴィジョンがひとつずつ次々と全く同じ動作で跳躍していった。頂点で分身たちと合流したデイレイドは、今度は重力に従い下降してゆく。やはり同様に分身たちも次々と遅れて下降してゆき。

『おおおおお!』

そして思い切り振りかぶったウィブフルートを直下でもがくデュアルビーイングめがけて激しく叩き込んだ。

これまでで最大の音が鳴り響くが、それだけでは終わらない。

遅れて降りてきた七色のデイレイドのヴィジョンが本体に重なりながら次々とウィブフルートを叩きつけたのだ。

ぐぎやらぎやぎやぎやぎやぎやんん!

巨大な鈴の雪崩のごとき轟音がデュアルビーイングに怒濤のごとく襲いかかった。

あれほどの猛威を振るっていた巨大で獰猛な存在が、音色の余韻も



待たずに迅速に爆発し消滅してしまった。

爆発跡には、ディレイドと、一回転して元の姿に戻り着地したウィブの姿。

「……遙。」

言つて、ディレイドが右手を振り上げたのを見てウィブが自身の身を抱きすくめて退いた。

「な、なによ!?」

ウィブにその意図が伝わらず所在なげに立ち尽くしているディレイドを見て、「郵便局員の瞳子」の記憶を思い出した瞳子は、笑つてディレイドの胸に飛び込みその手に自分の左手を打ち合わせた。なんだか、透が成長したようで、なんでか、それが嬉しくて。

「……未確認生命体の駆除の顛末は、以上となります。」

「御苦労だった。」

「はっ。」

キャットスルドランの玉座の間にて。

三方の壁に沿うように居並ぶ側近や高官たちに囲まれる中、玉座に座るキングの前で、遙が魔化魍及びデュアルビーイング討伐の報告を終了し、直立の姿勢できびきびと元の位置に控えた。

しばらく沈黙した後、キングは幼い顔に威厳を乗せたまま、透に向けて告げた。

「……ディレイドと言つたな。士たちに免じ、貴様の話を信じよう。」

側近たちがざわめくが、キングは一睨みでそれを黙らせる。

「だが、貴様に多元宇宙を守る使命があるように、僕にもこの世界を守る使命がある。貴様の使命が最終段階を迎えるまで、捕らえた未確認生命体……「マカモー」とやらのライフエナジーはこちらの好きにさせてもらつぞ。」

「いいだろう。それから、魔化魍に詳しいアドバイザーも用意してやる。」

「好きにしる。」

暗に「魔化魍に対抗できる仮面ライダーを連れてくる」と言ったのに対し、王の言葉でそれを承諾する渡。

なんだかんだで最終的に丸く収まった仮面ライダーたちに瞳子は微笑みを浮かべてしまう。

「それから、改めてお前に頼みがある。別の世界に人間を襲うフアンガイアが現れた。俺に代わってそれを始末してもらいたい。」

「馬鹿か貴様！」

透がようやく本題を告げたところで、遙が血相を変えて遮った。

「キングが他領地のために御自らお出向きになるはずがなかるう！」

？ キングという立場は、人間で言えば「総理大臣」や「大統領」のようなものだ！そんな簡単なことも分からぬか！？」

「下がれ。「葬儀屋」。」

「……はっ。」

キングに言われ、元の位置に戻る遙。

「多元宇宙の事情は理解している。そして僕の立場は今言った通りだ。さらに、裏切り者の跳梁も看過できない。ならば「葬儀屋」。

裏切り者の始末はまさに貴様の仕事だ。このディレイドについて行け。裏切り者を始末してこい。」

「はっ。御下命、承りました。」

キングの命令に、遙が深々と頭を下げた。

「……あーっ、疲れるわあ……」

別室で、ソファに身を投げ出してくつろぐ遙。

「側近とか、高官たちの前ではキングは「キング」でいなくちゃいけないからさ。面倒くさい茶番でもやんなくちゃいけないのよ。ごめんねえ？」

「いえ。分かってますから。」

同じく向かいのソファに腰掛ける瞳子も笑顔で応えた。

すなわち、先ほどの玉座の間での遣り取りは全て茶番劇。

渡が魔化魍とデュアルビーイングの危険性を真摯に受け止めたことは、透にも瞳子にも分かつている。

「さて。そろそろ行くぞ、遥。」

「えー？もう？」

窓辺から振り向いて言う透に、ぼやいて返しながらも立ち上がる遥。

「瞳子ちゃんは、大丈夫？」

「ええ。」

遥の問いに、笑顔で応える瞳子は、右腕を包帯で包み、首に回した布で吊っている状態だった。

あの時の弾けた糸による負傷は、深くはなかったが、決して浅くもなかった。

「しばらくヴァイオリンは無理ですけどね。でも生身で魔化魍を相手にしてこれだけで済んだのは、むしろ僥倖ですよ。」

「ほんと。根性あるわあなた。」

笑いあう二人。

「じゃあ、またね。」

遥は手を振ると、別れの感慨など無縁とばかりにさっさと歩いていった透を追って部屋から出ていった。

誰もいない山中。

生い茂る背の高い木々の枝葉に遮られ日の光が届かぬ森の奥の暗闇に、その者たちはいた。

『鬼め。』

『鬼め。』

一見、それらは人間の男女に見えた。

片や、背の高い瘦身の、細長い印象を与える男。

片や、見目麗しい妖艶な女。

だが、彼らの発する気配は尋常でなく凶々しい。

衣装も、和装ではあるのだろうが、着こなし方がまた突飛な姿であ

った。

『だが、すごくつまそうな餌がいたぞ。』

『いたね。』

魔化魍「ナナシ」の爆発跡を見下ろし、彼らは不気味に微笑んでその場を後にした。

t r a c k ・ 1 7 キバの世界（後書き）

デイレイド初の窮地と復活劇でした。瞳子の存在意義がこの時点で一段掘り下げられたのも、時期的に早かったのか遅かったのか。最後、役者繋がりがの波乱の種を残しつつ、物語は次へと巡ります。

『うおるいやあああああ!』

気合いの怒声と共に、群がっていた数体のアンノウンとファンガイアを赤のサーベルと青の薙刀が一回転して薙ぎ払った。

まとめて吹き飛ばされた異形の直中に立つのは、右腕を炎のように赤く、左腕を空のように青く染めた仮面ライダー アギト。

それは、翔一がこれまでの戦いの中で発現させたアギト現象の更なる強化、獄炎の赤と旋風の青を同時にその身に顕したトリニティフォームである。

『うらあああ!』

転倒したアンノウンの一体に飛び乗り、逆手に向けた両の武器を同時に突き刺す。

爆発と同時に跳躍し、近くにいたアンノウン目掛け揃えた両足で蹴り抜くように着地。

そいつが爆発する一瞬早く再び跳躍すると、ちょうどそこにいたファンガイアを着地ざまに右のサーベル・フレイムセイバーで斬り裂いた。

『ツガアアアツ!?!』

『ちっ!?! やっぱ効かねえかよ!』

斬撃の痛みに悶絶はするが、ファンガイアは滅びない。

毒吐いて翔一はそのファンガイアを蹴倒し反対側から迫っていたアンノウンを左の槍・ストームハルバードで下から斬り上げ、返す刃を振り下ろし続けざまに斬り倒す。

今、この広大な遊歩道は大量の異形が入り乱れて戦っていた。

勢力は三つ。複数種のアンノウンと、色とりどりのステンドグラス様の硬皮をぎらつかせたファンガイアの群と、そして翔一が変身したアギト率いるエクシードギルスと複数のギルスによる緑色の混成部隊。

アギト化症状を起こした者の攻撃なら倒すことができるアンノウンはともかく、いくら殴つても弱るのみで滅ぼすことができないファンガイアは、とにかくドツいて消耗させると指示してある。

なにやら手前勝手な使命感に燃えているらしいアンノウンの連中はなかなか挫けないが、ファンガイアの方はどうも比較的人間臭い所があり、割が合わなくなるほど痛めつけると撤退することがある。

特にアギトに次いで戦闘力の高いエクシードギルスに警察が集めて製作した銀製の武器、彼のバトルスタイルに合わせカギ爪やスパイクを括りつけてファンガイアに当たらせてみたところ、かつて一度倒すことに成功している。

透が言っていた「ファンガイアには銀が効く」という情報が正しかったことに息巻いた「未確認生命体対策室」は現在、銀製の武器の量産に取りかかっているところであるが、とにかく今はどうにかアンノウン・ファンガイア両方に対抗できる体制が整いつつある。

『……とはいえ、ちいーつと効率が悪いよな』

今も銀の武器を装着したエクシードギルスが数度の刺突の末、肉質の触手器官「ギルスステインガー」でファンガイアを一体葬ったところだが、一撃必殺ではないため非常に手間を喰わされる。

向こうでも数人のギルスが倒れたファンガイア一体を取り囲んで足蹴にしているが、こちらは足止め以上の意味はない。

『対処はできてる。できてるんだけどなあ……』

『芦河さん！危ない！』

ギルスの一人が叫んだ瞬間、アギトの首筋に巨大な一対の牙のヴィジョンが突き刺さった。

ファンガイアのエナジードレインだ。

『っかつ！？ こなくそ！』

激痛を堪え、肩をひと揺すりしてあっさり牙のヴィジョンを弾き飛ばすと、振り向きざまに左のハルバードでそのファンガイアの頭を殴りつけた。

『ッギヤアアア！？』

『つてーんだよバカ!』

吐き捨ててさらに蹴り倒した。

その特異な能力の効果は逆もまた然りで、変身したアギト患者にはファンガイアのエナジードレインが効かないという検証結果も出ている。

被験者はもちろん、かつての戦いで偶然喰らった翔一自身だったが、だからアギト能力者が対ファンガイア対策の矢面に立たされることも求められている。

武器の数も必要だが、あと一つ、決定打が欲しい所なのだ。

その「決定打」を持ってくると言ったあの男は。

『透……早くそいつを連れて来てくれよ……』

アンノウンを薙ぎ払いながら、翔一はぼやいた。

「あーしーかーわーさーさーん」

その時、この乱戦の騒音を越えて場違いに間延びした声が聞こえてきた。

「おーとーどーけーもーのーでーすー」

『こらー！嬢ちゃん危ねえって!?!』

それが、透が連れていた郵便屋の少女の声だと知った途端振り向いて窘めようとしたが、その光景につい翔一はあっけに取られてしまった。

「おーとーどーけーもーのーでーすー!」

ぎいこ、ぎいここと一生懸命瞳子が漕ぐ自転車が後ろに牽いている配達物用コンテナの上に、仁王立ちした透がいた。

同じコンテナの上、透の後ろにしがみついておっかなびっくり同乗している者がいる。

「つて、瞳子!?!」

「はいです!」

透の背後からひよいと覗き込んだその遥が、嬉しそうに満面の笑顔で元気よく返事した運転手の天真爛漫な顔を見て仰天した。



「ちょっと、なんでこんなトコで郵便屋の制服なんか着て、あれ！？」 ちょ、瞳子ナニしてんの！？」

ついさつき右腕を怪我した瞳子と別れたばかりの遙は、五体満足な瞳子の様子に思い切り混乱していた。

「遙さん！さつきぶりですっ！」

ぴっ、と敬礼までしてくるその瞳子のキャラの違いに、遙は目を白黒させていた。

「ちょっと、どういうこと透！？」

「うむ。瞳子の異次元同位体だ。」

バランスの良くないコンテナの上で事も無げに直立している透にしがみつきのながら、遙が聞き返した。

「だから、なにそれ！？」

「別世界の「もう一人の瞳子」というやつだ。」

「だって、もう一人の瞳子って、マカモーの専門家って言ってなかったっけ！？」

「それは別の世界にいる。これは郵便局員の瞳子だ。瞳子の異次元同位体は全部で十人いる。」

「そんなに！？」

「すべての瞳子は記憶を共有しているから、この瞳子もお前のことは承知している。」

すると、運転中の瞳子がまた振り向いてきた。

「はい！遙さんにはお世話になりました！」

「は、はあ。」

同一人物と言われても、こうもパーソナリティが異なっては同じ調子でというわけには行かない。

だが瞳子の方は、まるで旧知のような顔をしている。

「……はあ。頭おかしくなりそうだわ。」

「ところで瞳子。糸矢の様子はどうか？」

ふと、透が手伝いを頼んだファンガイアのことを訊ねた。

「はい！あの宿六のロクデナシ、邪魔で邪魔でしようがない感じで

す！」

「お願い瞳子の顔でそんなあばずれなこと言わないで……」

その遣り取りを聞いた遙が、なぜかさめざめと泣きだしてしまった。

「はい！到着です！」

戦闘現場の手前で停車した自転車の配達物用コンテナから飛び降りる透と遙。

「……ふん。確かにファンガイア族ね。知らない連中も混じってるみたいだけど？」

遠くの乱戦模様を眺め、遙が呟いた。

「あれは「テオストライブ」。「アンノウン」とも言う。アンノウンはこの世界の驚異で、現地の戦力が相手をする。あの赤いのと緑色のは味方だ。お前はファンガイアを頼む。」

「オツケー。」

『おお！透！ って、……まさかそっちの姉ちゃんがファンガイアの世界の仮面ライダーか？』

慌てて駆け寄ってきたアギトが、透を挟んで遙の姿を無遠慮に眺めて言い淀んだ。

「あら。格好いい。「キバの鎧」みたいじゃない。」

遙も無遠慮に歩み寄り、アギトの胸郭を指先で撫で回した。

『おおっ！？』

「うわなによ気持ち悪い！？」

第二の皮膚とも言うべき装甲を女性の手で撫でられ思わず声を漏らす翔一に、慌てて後退る遙。

「ああ。アギトは、キバやウィブと違って『エクステンドエヴォルブ』だから、装甲に見える所も自前の皮膚みたいなものだぞ。」

「は？えくす……なに？」

聞き慣れない単語に遙が聞き返す。

「俺の中での仮面ライダーの種別だ。気にするな。言わば人類の進化形態だと言うことだ。」

『へ？ おい透、てこたあ、この姉ちゃんはどうやって変身すんだ

？』

二人の会話に、自分以外の仮面ライダーの出自を知らない翔一が疑問を挟んだ。

「ああ。ウィブは『ギアテクター』だ。言わば外から着るパワードスーツでな。G30Xと似たようなものだ。」

『……ほお。……ってどこに持ってた？』

「どーでもいいわよそんなこと。訳分かんないことごちゃごちゃ言ってるじゃないわこの「世界の痴漢魔」。」

言って、遙が透を押し退けた。

『痴漢魔……って、おい透、この姉ちゃんになんか不埒を働きやがったか？』

「知らん。」

「気を付けなさいよ。こいつ、ヒトに卑猥なコトしてヒトのこと武器に変えるから。」

遙が意地悪な顔で透を指さし言い募るが。

『ああ。俺もソレやられたわ。』

「え”っ……!?”」

自分を指して言うアギトに、遙は青い顔をして男二人から身を退いた。

「せ、「世界の破壊者」って、どっからどの辺まで破壊しちゃうワケ!?”」

『待て待てねーちゃん!?　なんか俺にまであらぬ疑いを掛けてねえか!?”』

「お前たち。言語の脈絡は明確にしろ。何を言っているのか分からん。」

しばし侃々諤々となる一同であったが。

「まあいいわ。」

遙が訳の分からない会話を打ち切り、アギトの胸郭を押し退けて戦場の方に進み出た。

「アギトだっけ？あんたに見せてあげる。女だと思って見くびつてるんなら、あとで骨の髄まで吸い尽くしてあげるわよ？」

その物言いに間抜けに立ち尽くすアギトを眇に眺め、遙は前へ進み出た。

「スパスパイダー！」

『よし来た！すぱつと片付けるぜ！』

前に突き出した左腕に飛び乗ったスパスパイダー三世は、かさかさとして手首付近に近寄ると、小指の付け根に噛みついた。

『あ・がぶつと。』

すると、遙の顔の両頬にステンドグラス様の模様が浮かんで両目が蒼く光り、どこからともなく飛来した幾筋もの白い糸が遙の腰に巻き付き、ちぎれ飛ぶとその下に幅広のベルトを形成していた。

「変身！」

スパスパイダーを迅速に前へ突き出し、そして腹部へとあてがうと、スパスパイダーはベルトのバックル部分の定位置に収まった。

スパスパイダーがベルトを魔法陣として操作し鎧を召還すると、空中から滲むように現れた鎧は出現と同時に同一座標に存在する遙の身に装着された。

マスクを始め、各所に蜘蛛をあしらった装甲、所々に包帯のように巻き付く蜘蛛の糸。

特徴的なベルトから垂らした八本のロッドチェーンを優雅に揺らし、遙が変身した姿・ウィブはヒールを鳴らして呆然としているアギトに向き直った。

『さあ。手伝ってあげるから、あんたも気張んなさい？』

『は、ひゃい！』

なぜか声を裏返す翔一。だが、戦場へ向き直ると、二人は淀みない動作で駆け出していった。

『よしお前ら！ファンガイアはこっちの姉ちゃんが相手してくれ！全員アンノウンに当たれ！』

『はいっ！ ってなんすかそいつ！？』

『いいから行けえっ!?!』

一カ所に固まっていたギルス部隊をアギトが駆け寄りざまに蹴散らした。

その跡に、大の字でノビているファンガイア。

だが解放されたことに気付くとそのファンガイアは機敏に起きあがってきた。

『ええい数に任せて図に乗りやがって!?! …… って、ウィブ!?!』

『はい。』

そこに飛び込んできたウィブの存在に驚愕した瞬間にはそのファンガイアはウィブに蹴り飛ばされていた。

『ガツ!?!』

『あ!?! あれは、ウィブ!?!』

『「葬儀屋」がなんでこんなところに!?!』

吹き飛ばされてきたファンガイアに気付いた他のファンガイアが、口々に驚愕と困惑を露わにする。

『さ、て。キングの御下命を蔑ろにした罪、今ここで裁いてあげるわ。』

ヒールを鳴らして腰に手を遣り宣告するウィブ。

ファンガイア達に動揺が走る。「葬儀屋」の雷名が伊達ではないことを、ファンガイアの中で知らぬ者はいない。

『せ、せっかく喰い放題の楽園に来たつてのに、処刑されてたまるか!?!』

『に、逃げる!?!』

あれほどアギト達を手こずらせたファンガイア達が、ウィブ一人の登場で完全に泡を喰い這々の体で逃げ出そうとする光景を見て、翔一は完全に呆気にと取られていた。

『こいつぁ、すげえな。』

ファンガイアに対応していた人員が全てアンノウンに回ったため、アンノウンは全て抑えられている。

その隙に見たウィブの様子に、翔一はその能力に納得していた。

『……おバかな子たち。』

微かに首を振り呆れたため息を吐くウイブ。

だが即座に腹の前で両掌を前に向けて交差させ左右に振り抜くと、まとまって逃げ惑うファンガイアの群めがけて跳躍する。

あっさりとファンガイアを飛び越し目前に着地すると、振り向きざまに先頭のファンガイアの側頭部にハイキックを喰らわし、身を翻して足を刈り払い転倒させた。

『ぐわっ!?!』

『ひ、ひいいい!?!』

倒れたファンガイアに足をもつれさせる者、そして慌てて回れ右する者と鉢合わせしてタタラを踏む者と、ウイブのただの一跳びと一蹴りで、ファンガイアの群は簡単に混乱の坩堝に落ちた。

『ま、裏切りの意味すら分からないおバかさじゃあ、辿れる末路もお粗末なモンよね。』

ひよいと持ち上げた「糸」を引くと、いつの間にか辺りに張り巡らされていた糸が迅速に走りファンガイアの群に殺到すると、彼らをまとめて縦横に縛り上げてしまった。

『う、うわあああ!?!』

『どけバカ!』

『い、糸が!?!』

もはや哀れにもがくのみとなったファンガイア達を前に、ウイブはベルトのポーチからフエツスルをひとつ抜き出すと、腹部のスパスパイダーの口元にあてがった。

『能力で勝ると言っても、こうなれば所詮人間にも劣る。……瞳子の爪の垢でも煎じて飲ませてあげたいわ。』

『ウエイクアップ!』

吹き鳴らされる鮮烈な覚醒の音に身構えるウイブ。

『少なくとも瞳子は！自分より遙かに巨大な敵を前にしても、一歩も退かなかったぞ!』

全身を巡る魔皇力の奔流を受け、各所に包帯のように巻き付く蜘蛛

の糸の束が次々と瞳のように割れ広がりその下から輝く蒼の魔皇石を露出する。

全身に配置された魔皇石が上から順に灯ってゆくのに合わせ、まるでバレエのように優雅にターンすると、後ろ向きに仰け反り、片足で立つウィブの体を、八本のロッドチェーンが有機的に蠢いてバランスを取った。

そして足首にまで蒼の輝きが至ると、浮いた足のヒールが弾け跳び、その下から蜘蛛の牙が現れた。

ロッドチェーンを広げたその姿勢はまるで、ヒールの牙を頭部とした、獲物を狙う獰猛な蜘蛛を連想させる。

覚醒を施された魔皇力は臨界を越え、溢れ出した余剰エネルギーが空間を歪め、昼だったはずの辺りの光景を闇に閉ざしてしまう。

ウィブの背後には、いつの間にか蒼い月が浮かんでいた。

『……ファンガイアとしての矜持すらなくしたお前達は、畜生にも劣るクズだ。ウィブの名において、処刑する。』

そしてウィブはその場で迅速に回転を始め、やがてひとまとめに括られたファンガイアの群目掛けて鋭く飛び出した。

『ひいひいひい！？』

『いぎやああああ！？』

泣き叫ぶファンガイアの群に、そのヒールの牙が突き刺さり、群ごとまとめて吹き飛ばした。

あつと言つ間に魔皇力に冒され結晶化したファンガイア達は、その向こうに現れた巨大な八角形の蜘蛛の巣状の文様に激突すると木っ端微塵に砕け散り、やがて消滅してしまった。

ウィブが着地すると同時に闇が晴れ、辺りは元の光景を取り戻す。

『……はあ。こりゃあ、驚いたな。』

数体いたファンガイアが、ウィブ一人にまさに一蹴されたのだ。

一連の異常事態を見送った翔一としても、そう眩くので精一杯だった。

あれから、突然現れたウィブという圧倒的な戦力を脅威としたのか、数体を撃破されたところでアンノウンも撤退し、ここでの戦闘は終了した。

「これでいいのかしら？透。」  
変身を解除した遙が透に問いかける。

「うむ。だがファンガイアがこれで全てとも限らん。しばらくこの世界を頼む。」

「分かった。やってあげましょ。」  
小首を傾げてウィンクで応える遙にうなずくと、透は振り向いて立ち去っていった。

『つて、おいおい！？俺には一言も挨拶ナシかよあいつは……』  
そこへ、アギトとやらが駆け寄ってきてばやいた。

「あいつはそんなヤツよ。それより、そろそろ素顔見せてくれない？そのままの生き物ってワケじゃないんでしょ？」

『お？』  
遙の問いかけにアギトが振り向いた。

『おお。あまりにも格好良過ぎてヒクゼ？見てろよ』  
全身から閃光を放ち、身体を人間へと変異させてゆくアギト。  
やがてそこに、放埒な髪型に無精髭のガタイのいい男が現れた。

翔一は、きりりとした瞳で遙を見つめ、にやりと口の端を釣り上げてシブい笑みを演出する。

「……どうだい。」

「チエンジ。」

「うわああああん！？」

無表情で放たれた無慈悲な言葉に翔一は泣きながら走り去っていつてしまった。

「さ、て。これから一体どうしたもんかしら。」

翔一を追っ払い、今後の道行きについて考えが及んだその時、ふと横から視線を感じて遙は振り向いた。

そこでは、だぶだぶの郵便局の制服を着た瞳子が頬を上気させ目を





時々出てくる透の中での仮面ライダーの種別。

『エクステンドエヴォルブ』：変身者自身の肉体を変異させるタイプ。

・クウガ ・アギト ・響鬼

『デイメンションドライバー』：特定の状況下でのみ変身して力を発揮するタイプ。

・龍騎

『ギアテクター』：パワードスーツを装着するタイプ。

・G3-X ・ファイズ ・ブレイド ・カブト ・電王 ・キバ  
・イクサ

元は第三者的に龍騎系ライダーを指して「こういうヤツ」という表現に困った時に思いついたものです。

龍騎の物語の中ではカードデッキで変身してミラーワールドを行き来する者を「仮面ライダー」と呼称していましたが、ディケイド世界で「仮面ライダー」と呼ぶと、全員が当てはまってしまいます。

「ライダーシステム」という言葉もほとんどの作品で使われていましてから区別には使えません。

龍騎がギアテクター系でない理由は、基本的に現実世界では力を発揮できないからです（原作では、演出で好き勝手やって曖昧になってましたが）。

track・19 響鬼の世界(前書き)

お願い。

・今回、文句を言われても仕方のない暴挙に出ていますが、どうかその文句はこの「響鬼編」が終わるまで、子細全てを読み終わるまで待って下さい。

広大な敷地の日本家屋の外壁を取り囲むように張られた、白と黒とが交互に染められた布の裏から透がひよっこりと姿を現した。

そして敷地面積にふさわしい巨大な木造の正門へとやってくると、さめざめと泣き暮れる白の道着に黒の袴を纏う女性たちの脇を通り抜け、ずかずかと門をくぐり邸内へ入ってゆく。

敷地内の中庭には大勢の人間が集っており、一様に古武術の道着のような物を纏っている彼らは、男なら白の上下の道着、女なら下が袴という揃いの格好をしている。

そして男女問わず全員が泣き暮れている中を全くの無遠慮に進んでゆく透。

「あ、あの!？」

入り口付近に設置されていたテントの中のテーブルについていた女性が慌てて声をかけてくるが、無視。

ふと立ち止まり辺りを見回した透は、目的の人物を発見するとそちらへと無造作に歩み寄り、全く頓着せずに話しかけた。

そこに立つ、唯一紺色の道着を身につけた少年に。

「お前、響鬼だな？」

「え？」

幼い中に精悍さを漂わせた顔が、怪訝に歪んで見上げてきた。

「やはり響鬼だな。」

確認に得心しうなずく透。

だがその頃には、場違いな侵入者に対する怪訝な気配がこの邸内に充満しており、そこかしこにいる道着姿の男女ほぼ全てが透を注視していた。

「あの……」

「透っ!？」

少年が聞き返そうとしたのを遮り、武道着の少女がひとり、駆け込

んでくると透の腕をひっ掴み、外へと引きずって去ってゆく。

「おい？」

「いいから!？」

やがて正門の外、離れた場所に落ち着いた二人は、顔を見合わせて同時に口を開いた。

「なにをする。せつかく」

「たいがい空気を読んでくださいっ!」

目を真つ赤に泣き腫らした神楽見 瞳子が怒鳴るのも、無理からぬことだった。

その木造建築の正門の脇には、大きく記された巨大な看板が掲げられていた。

「音撃道 斬鬼流名誉師範 財津 蔵王丸（鬼名・斬鬼） 儀  
葬儀式場」

「空気は言語ではないぞ。何を言っている。」

「そうじゃなくて……うっ……」

言い返して、だが再び嗚咽を漏らした瞳子の脇を抜け、再び葬儀式場へ行こうとする透を、瞳子が素早く捕まえた。

「って、だから!？」

「なんだ。俺は響鬼に用があるんだが。」

「いま、それどころじゃないんですっ!？」

音撃道・威吹鬼流見習いの瞳子曰く。

かつて自ら「大師匠」と名乗るデイケイド一行が絡んだ伝説の魔化魍「牛鬼」討伐の一件から再び統合の道を辿った鬼の三派。

音撃道がひとつの体系にまとまってから、険悪だった各流派のわだかまりは消え、特に仲の悪かった斬鬼流元師範・斬鬼と威吹鬼流元師範・威吹鬼もすっかり打ち解け共に後進に師範の座を譲った後は、

それぞれ音撃道の名誉師範として共に鬼の育成にあたっていたのだがある日、突如発生した強力な魔化魍の気配の様子を見に行った斬鬼が数日戻らず、やがて変わり果てた姿で発見された。

男臭い斬鬼流の空気に長いこと入り浸りで女性免疫がまるでなかった斬鬼名誉師範には、見た目の渋さと裏腹な純粹さが威吹鬼流の女性たちの間でも人気が高かった。

頑固で気性は荒いが限りなく誇り高い、人々を護る音撃の鬼中の鬼の突然の崩御は、それはとてつもなく衝撃的なことだったのだ。

「だから、もう、みんな、これからどうしたらいいか分からなくて

……」

「そうか。」

素っ気なく言って、また葬儀式場に向かおうとする透に素早くしがみつく瞳子。

「なんだ。俺は響鬼に用があるのだが。」

「ああもう！？ せつかく透も成長したなーとか思ってたのに！？」  
だが今度は瞳子を引きずって歩き出す透。

「ならばなおさら、泣いている暇などないだろう。」

「え？」

透の言葉に、つい手を離してしまう瞳子。

その間に、透は再び式場となっている斬鬼流道場へと入って行ってしまう。

泣き暮れる参列者たちの中、ただ一人泣くこともなく、庭からじつと屋敷の奥の祭壇を見つめる紺の道着の少年に再び歩み寄った透は、また無遠慮に話しかけた。

「おい。響鬼。」

「はい？」

怪訝顔で振り向いた少年の眼前に、透は自らのカードを一枚引き抜いて突き出した。

「！？ それは……」

「そういうことだ。」

少年の確認を取った透は、だが今度は少年を見ようとせせず、少年が見つめていた、道場の奥に設えられた祭壇の方を見遣った。

「……ふむ。」

呟いた透は、再び歩き出すと、靴のまま屋敷に上がり込み、ずかすかと祭壇の前までやって来た。

祭壇の前にはうずくまって正体もなく泣き喚いている男と、その横で顔を覆って泣いている少女がいたが、それも無視してその棺に安置されている男の遺体の死に顔を無遠慮に覗き込んだ。

「……ほう。なるほどな。」

その透の呟きに気付いた、そこにいた少女が血相を変えて立ち上がった。

「あなた！？　ここは土足厳禁です！　今すぐ外に降りてください！　目は真つ赤なままだが、凜とした物言いだった。」

透は気付かないかのように無視したままだったが。

「あなたのことですっ！」

「おう！　なんじゃあ貴様あ！」

その声を聞きつけたのか、武道着姿の屈強な男たちが祭壇前に集まってきた。

「斬鬼先生の葬式じゃあ！　先生の前で無礼は許さんぞ！？」

「ふむ。」

呼ばれたから、と言うよりは、自身の用事が済んだため、透は後方を振り向き立ち去ろうとした。

だが、そこには数人の屈強な男たちが立ちはだかっている。

揃いも揃って凶悪な顔つきだ。

「透ー！　謝りなさいー！」

遠くから瞳子の声が聞こえるが、意味が分からないため無視した。そのまま透は男たちなどいないかのように歩き出した。

男たちは一様に透よりも二周りは体格がでかい。その重量差は一目瞭然。押し退けようと今この怒り狂った彼らではまず無理だと見受けられた。

男たちもそう見込んで高を括って立ちほだかっていたのだが、退こうとしない男たちに気付いた透が一番前の男の肩を無造作に突き押すと、あるうことか男は簡単に体勢を崩して畳に転がされてしまった。

ただ、邪魔なものをどかすような手つきにしか見えなかったのに。

「うお!?!」

「野郎!」

透の反抗に激高した男たちがとうとう透に襲いかかるが、透の歩調は僅かも揺らぐことなく、片手をひらひらさせる度に、傍目には男たちが勝手に明後日の方角へ次々と吹き飛んでゆき道を開ける。

やがて透は変わらぬ調子で外に降りてきた。

「……つて、変身もしてないのに、なんで?」

彼らはただの武道家ではない。魔化魍に対抗するために鍛えられ、鬼に変身せずとも高い戦闘力を有する。

それをあっさり捌ききるなどあまりの事態に呆然と呟く瞳子の側を通りながら透は解説した。

「別に。ベクトルの向きを変えることくらい、生身の人間でもできる普通のことだろう。」

「少なくとも長年の修行は必須だと思っんですけど……」

言いながらついて来る瞳子と共に、透は三度少年の元へやって来た。

「話がある。ついて来い。」

あまりにも唐突な邂逅だったはずだが、少年はあっさりと首肯した。

「はい。わかりました。」

斬鬼流道場の近くにある林の中で、透、瞳子、そして少年の三人は歩みを止めた。

「それじゃあ、明日夢君もデイケイドに関わっていたんですか。」

「はい。……黙っていてすみません。」

「ううん。多分、あの時に言われても信じられなかっただろうし……」

……」



二人で頭を下げ合う音撃戦士たち。

「それにしても、短期間での過度な変身は危険だとは言われてきましたけど、そんなことがあったなんて……」

かつて現れた伝説の魔化魍「牛鬼」の正体が先代響鬼であったことを、瞳子は今初めて知った。

これを知るのは、明日夢の他、事態の収束後に説明した斬鬼と威吹鬼のみで、それ以降は各流派の現師範にすら秘中の秘として事実ごと伏せられたのだ。

師匠を闇に葬られ、その事実を一人、胸に封じなければならなくなつた明日夢の壮絶な真実に、瞳子はまたも涙をこぼし始めた。

「そんなあ！？響鬼さんがあんまりですよぉ！？あと明日夢君もお！？」

「いえ。師匠が最期に遺してくれた、鬼の生き様ですから。」

「おい瞳子。涙を止める。」

「言われて止まりますかぁこんなもん！？」

無慈悲なことを言う透に噛みつく瞳子。

「だが、お前が秘匿している真実はそれだけではないだろう。」

「え？」

透の唐突な指摘に、少年・明日夢は不意を突かれたように振り向いた。

しばし、探るように透を見つめた明日夢は、やがて怪訝顔で問いかけた。

「………なんの、ことですか？」

「誤魔化すことはない。俺は自分と接続した者の表層の思考を読むことができる。ディケイドの情報をコンバートしているからな。」

「……………」

「へ？え？どういうことですか？」

二人の会話について行けない瞳子が疑問符を挙げた。

「俺が接続した者の思考を読めることは、最初に説明したはずだが？」

「そこじゃありませんよ!?!」

「あの!」

二人の遣り取りを遮り、声をあげる明日夢。

「……透さん。お願いです。皆には黙っておいてもらえますか。瞳子さんにも。」

「ふむ。」

「え?どうしてですか?」

しばし黙考した透は、やがて居住まいを正して返答した。

「いいだろう。ところで明日夢。」

「なんですか?」

話題の転換を察し、明日夢が返事をする。

「俺はその脅威に対抗できる手段を持っている。その脅威は魔化魍ではなく別世界の住人だ。まずはそこへ案内しろ。」

「え?本当ですか?」

「……あのー……」

完全に置いてきぼりを喰った瞳子を無視して、互いに通じ合った様子の二人は話を進める。

「早いほうがいいだろう。ここの現地の戦力では太刀打ちできない。被害が広がるぞ。」

「あ、じゃあ、すぐに行かないと。」

言って、透と明日夢が一齐に一方へと駆け出した。

「あ、ちよつと!?!」

瞳子も慌てて後を追って駆け出すが、途中で後ろ手にかざした透に止められた。

「透!?!」

「お前は戻れ。連絡するまで葬式に参加している。」  
言い置いて、瞳子を残し透は明日夢と共に走り去っていった。

t r a c k ・ 2 0 響鬼の世界（前書き）

またまたお願い。

・今回、文句を言われても仕方のない暴挙その2に以下略。どうかその文句はこの「響鬼編」が終わるまで以下略。略。略。

殉難を果たした鬼は、音撃道古来よりの習わしに従い、その身を力を頂いた自然に還すとして葬儀の後、霊山の山頂に「山送り」と称して一晩安置することとされている。

突然の進入者が立ち去ってからは滞り無く式は進行し、音撃道の関係者は威吹鬼流名誉師範・威吹鬼を先頭に、師範・師範代・門下生・事務関係者などが一列で山を登ってゆく。

列の前方には斬鬼の亡骸を納めた棺を、斬鬼流の門下生の屈強な男たちが数人がかりで担ぎ挙げ、肅々と道を辿っていった。

やがて辿り着いた山頂で、既に設えられた祭壇に棺を降ろし、全員で篝や宿営用テントの設営が行われる。

「この度の付き添いは、私と轟鬼師範、天鬼師範の三人が就く。他の者は今日はこれにて終了となります。」

設営が完了したところで威吹鬼が全員に告げ、幾人かは名残を惜しんだものの、次々と下山してゆく。

そうして山頂付近でしばらく人の列が入り乱れている最中、威吹鬼が瞳子の側に歩み寄ってきた。

「瞳子くん。」

「は、はいっ！威吹鬼名誉師範！」

泣き顔のまま、ぴつと背筋を伸ばして応える瞳子。

威吹鬼はさすがに陰りながらも整った顔立ちに控え目な微笑を浮かべ、口元に人差し指をあてながら。

「悪いんだけど、まわりの子たちに気付かれないように戻ってきてもらえるかな。君にも斬鬼さんの「山送り」に立ち会ってもらいたいんだ。」

「……え？ あ、あの、どうして私が？」

名誉師範の山送りである。最高位の立場の者のみがあたるべき付き添いに、なぜ遠慮すべき見習いの自分が呼ばれるのかが分からず聞

き返すが。

「ほら、あまり立ち話しても目立つしね。じゃあね。頼んだよ。」  
相変わらず女性をはぐらかすのが巧い威吹鬼名誉師範は、ウインクで誤魔化すととっと立ち去っていった。

しばしその黒くても派手な羽織の背中を黙して見送ってから、瞳子は深々と溜め息を吐いた。

「……どうしてこう男の人ってどいつもこいつも、ひとこと言っにくくないんだろ。」

特に、この世界に限って自分を露骨に引き離れた透に八つ当たりぎみな気持ちを込めて。

山中を分け進む透と明日夢は、森の木々を抜けやがて突如拓けた場所に出た。

森の中、唐突に木々が薙ぎ払われた一角があったのだ。

「……これは、魔化魍!? ……かなり大きい。」  
例えば、巨大な魔化魍がどこからか木々をなぎ倒して着地したなら、こうなるだろうという有様。

しゃがみ込んだ明日夢が辺りの状況を分析して呻く。

「それだけではない。」

木々が押し潰された地上ではなく、宙を眺めて透も呟いた。

「なにがですか?」

「……いや、今は先へ進むことが優先だ。急がねばならない。」

「はい。」

「だが、今の内に变身しておけ。もうここは危険地帯だろう。」

「はい!」

言っただけで透がデイレイドライバーとカードを取り出したのに合わせ、うなずいた明日夢も背中中のザックを放り捨てると、帯の横に提げていた金具を取り出した。

二つ折りにされていたそれを一振りして展開する。それは鬼面をあしらった音叉。

明日夢はそれを指先で弾くと、共鳴音を発し出したそれを額にかざし、精神を集中した。

特殊な音波が精神の最奥と鍛えられた肉体に作用し、その身を鬼の領域へと推移させる。

やがて自然界における明日夢自身の魂の属性である炎が現実にも顕現し、その身を取り巻いて肉体の変移を促進してゆく。

炎の中の人影が、二周り、三周りとは拡張してゆき。

『……ぜああ、っはあっ！』

裂帛の息吹と共に炎が振り払われた跡には、深い紫ともとれる漆黒の引き締まった肉体を持つ「鬼」が立っていた。

無貌の顔面を赤の隈取りが覆い、額からは二本の角、たすき掛けのような甲殻を纏い、腰には各種装備を提げた帯をベルト宜しく巻いている。

これが、清めの音によって人に仇成す魔物を調伏する音撃戦士のひとり、響鬼。

「変身。」

《カメンライドウ・デイ・デイライド！》

抜刀の動作でスライドカバーを閉じた透も迅速にデイライドへと姿を変えていた。

『では行くぞ。』

『ちよ、ちよっと待ってください！……はい！』

慌てて投げ捨てたザツクを拾い上げる響鬼。

衣服はさっきの炎で燃え尽きているため、音撃戦士は複数の着替えの携行が必須なのだ。

二人は、再び進行を開始した。

だが、そこらいたいして進まぬうちに、突如デイライドが、そしてそれに驚愕した響鬼があらぬ方へ跳躍した。

『！？』

『ぐっつ！？』

続いて、不自然な体勢と角度で次々と右に、左にと跳ねるデイレイ

ドと響鬼の身体。

いや、何かに殴打され薙ぎ払われているのだ。  
姿が見えない何者かに。

昼を大きく回つてはいるが夕方でもないこの時間から、既に篝には火がくべられ薪が爆ぜていた。

「…………あの。威吹鬼名誉師範。神楽見です…………。」  
山送りの祭壇が設えられてある山頂に、言われた通り瞳子は戻ってきた。

「うん。お疲れさま。」  
言つて、控え目な笑顔で労う威吹鬼。

山頂を見回すと、相変わらず棺の前で突つ伏して泣きじゃくっている轟鬼師範と、その傍らに座り共に涙する天鬼師範の姿。

そこから離れた所に腕組みして立つ威吹鬼名誉師範の他は、宿営用のテントも無人で、本当に何者の姿もなかった。

轟鬼の号泣と風が撫でる木の葉のざわめきの他は、あとは大気のうねる音くらいしか聞こえない程の大自然の直中。

遠くの間並みへ続く濃く深い緑がまるで大海原を連想させる。

「…………わあ。」

森羅万象の理と共に生き、その御力を頂き、外道の魑魅魍魎を討伐する鬼の道。

その還りきたる場所にして旅立ちの地である光景を目の当たりにした瞳子は、思わず感嘆の声をあげた。

「…………すごいですね。こんなすごいところから、お見送りされてゆくんですね。斬鬼名誉師範は…………。」

さっきまでは景色をじっくり見るようなゆとりなどなかった瞳子だ。加えて滅多に参加できない「山送り」の場に居合わせることができたことが、瞳子に僅かながら高揚感を与えていた。

「…………。」

だが、唯一の話し相手と目していたところの威吹鬼名誉師範からの

リアクションがない。

「…………？」

轟鬼師範も天鬼師範も話どころではないことは承知のはずなのに、なぜ、と瞳子がふと威吹鬼のほうを見たその時、なにかが意識に閃いた。

（…………あれ？）

威吹鬼は、棺の方とも遠くの山の方とも取れる曖昧な方角を眺めて黙している。

表情は、思案に暮れてはいるようだが、悲哀や苦悩といった感じが見受けられない。

（…………あれ？ この感じ、なんかどっかで…………）

その表情に微かな既視感を覚え、瞳子は口元に拳をあてて小首を傾げた。

なにかがおかしい。

その「なにか」に気付きかけているというのに、さつきから轟鬼師範の号泣の叫びがうるさくて邪魔で考えがまとまらない。

まったく。確かに斬鬼名誉師範の一番弟子で親交も厚かった轟鬼師範ではあるが、ちょっと女々し過ぎではないだろうか。確かにとても悲しいことではあるが。

一転して喧嘩相手から大親友になった威吹鬼名誉師範でさえ、こうして落ち着いていらっしやるのに。

（…………ああヤダヤダ。なんか透みたい。考え方が感染ったかしら。）  
「…………！？」

場を弁えない自らの第三者視点を恥じて悔いたところで、突如 先程の閃きが輪郭を増した。

（なんで泣いてないの！？ 威吹鬼名誉師範と、明日夢君は！？）  
全員が悲嘆に暮れるこの葬儀の最中、終始この二人だけは悲しむ素振りが希薄だった。

思い返してみれば、二人とも敵めしい顔でうつむくことはしていた。それを師範以上の気構えかと勝手に思っていたが、同等の天鬼師範



ですら泣いているというのに　この二人が涙を浮かべるところは一度も見ていないのだ。

(……なに!?　なんなの!?　この二人は!?)

瞳子は僅かに後退った。

親しい人の死に悲しみを見せない二人に、その明日夢の思考を読んだにも関わらず共に事情を秘匿したまま一緒に行ってしまった透。突然、瞳子は不安に駆られた。

これまで一緒にいた透が味方なのは分かっている。

その透が思考を読んで協力した明日夢も、きつと同様だろう。

だが、威吹鬼は?

かつてはいがみ合い、互いを潰そうとまでしていた斬鬼の死を前に、こうして平静を保っている威吹鬼は、いったいなんなのだ?

「……うあ、」

思わず声が漏れた。

聞かれた。威吹鬼の冷静な目がこちらを捉えた。

改めてこの現状を理解する。

ほかに誰もいない、立ち入りが制限される霊山の山頂。

斬鬼名誉師範は死んでおり、轟鬼師範も天鬼師範も泣き暮れている。すなわち、『威吹鬼を除く音撃道の最高戦力全員がいま行動不能に陥っている』。

そして、彼らには力が遠く及ばない見習いの自分。

(……え?　え?　なに?　なんなのこの状況?)

わなわなと唇が勝手に震え、悲しみとは別種の涙が滲んでくる。

底冷えのする足腰に力がまったく入らない。

その時、しゃんしゃんと独特の音を蹴立てて蒼銀色の輝きが飛び跳ねてやって来た。

音撃道一派で使用されている、古来の式神の術と現代の科学が融合した鬼のサポートロボット・ディスクアニマルの一種、四足獣型の「瑠璃狼」である。

「おっと。」

瞳子から視線を外し、肩の高さまで飛び上がって円盤状に変形した瑠璃狼をキヤッチした威吹鬼は、そのディスクを自らの変身具・音笛のディスクドライバにはめ込むと、円盤を弾いて回転させ、記録された内容に聞き入った。

暗号化された式言語は、分からない者にはきゆるきゆるといった只の雑音にしか聞こえない。

見習いの瞳子も、まだ読解は完全ではないのだが、その漏れ聞こえてくる中に「向こう」だの「始末」だのいったニュアンスの音が聞こえた。

（始末！？……始末って！？）

ディスクアニマルは一人一体という訳ではない。高レベルの鬼ともなれば、無数のディスクアニマルを音の一節で自在に操れる。そしてそれらは立派な武器になるのだ。

やがて内容を聞き取った威吹鬼は音笛からディスクを外すと、改めて瞳子を見つめ、ゆっくりと歩いてきた。

「……ああ、あ……」

零れ落ちる涙を拭うことも瞬きすらも忘れて後退る瞳子。

轟鬼も天鬼も、棺の前で泣き暮れるばかりでこちらには気付かない。威吹鬼は、底意の知れない薄い笑顔で悠々と瞳子に迫ってくる。

「ああ、つああっ！？」

その時、下げようとした片足が何かに引っかかり、予定していた地点まで軸足を用意しないまま重心だけが後退を続け……。

（……！？）

最早、そういう形の仮面のような顔にしか見えない威吹鬼がこちらに鋭利な縁を持つディスクを突き出してきたのが見え、完全にバランスを崩した瞳子は回転する視界の中、脳裏で悲鳴をあげた。

track・20 響鬼の世界（後書き）

あれあれ？別にミステリー書くつもりもなかったんですが。

原作において分かれていた三つの流派が統合された音撃道ですが、ここでは原作の原作で言う「弦の鬼」や「管の鬼」といった扱う楽器の種別の区分に、各流派の名称をそのまま流用している、という設定で流派の名を用いています。

ちゃんと統合された後の話ですよー、ということ。

『くっ！』

『うああっ！？』

謎の攻撃の連続にキリキリ舞いする響鬼とデイレイド。

あらゆる方角から次々と突き刺さる姿なき打撃に吹き飛ばされながら、明日夢は激痛の中で混乱していた。

『なんだこれは！？ 飛び道具！？ どこから！？』

『いや、射撃ではない。敵は加速して直接攻撃を仕掛けているのだ』  
打撃の嵐の間隙に倒れ伏しながら説明するデイレイド。

『これがその異世界の脅威の持つ特殊能力、『クロックアップ』だ。』

『クロックアップ？これが！？』

聞き返す響鬼をそのままに、立ち上がったデイレイドは、デイレイドライバーにカードを挿し入れて抜刀の動作でスライドカバーを閉じた。

『カメンライドウ・カ・カブト！』

カレイドブレイドの指令に従い、その身をドット柄のノイズに包んで変移してゆくデイレイドベルト・カレイドサーキット。

やがてバツクル部分からノイズに包まれた部品がひとつ、分離して飛び出したものをキャッチすると、それは赤いカブトムシを模した機械へと変移した。同様にベルトもバツクルに横向きのレールを設置した、飾り気のない平坦な機械のベルトに変化する。

『変身。』

再び呟いて、デイレイドはその赤いカブトムシをバツクルのセットアップレールに右側から滑らせるように装着した。

すると、ベルトの縁から上半身に八二カム構造状に展開構成して現れる銀色の巨大な甲殻。

それはまるでアメフト選手を機械で表現したかのような、無骨で巨

大な甲冑。

その鎧がディレイドの上半身を包みきって変化は完了した。

だが、やはり謎の攻撃を喰らい右へ左へと体勢を傾けるディレイド。

「透さんっ!?!」

伏せたままの響鬼が叫ぶが、今度はそれほどダメージを受けた様子のないディレイドは構わずにベルトに張り付く赤いカブトムシ・カブトゼクターの角を左手の指先で弾いて僅かに跳ね上げると、全身に電光が迸り、その身を包む装甲が部品単位で分割し、次々とせり上がってゆく。

「キャスト・オフ。」

やがて呟くように告げると同時、右手でゼクターの角を思い切り引き倒すと、その分割された装甲が四方八方へと吹き飛ばされた。

《キャスト・オフ! チェンジ・ビートル!》

装甲をパージした跡に現れたのは、やはりディレイドのままであったが。

「後で説明する。そのまま伏せている。クロックアップ。」

響鬼に告げ、再び呟きながらディレイドはベルトの右側面に設置されたスラップスイッチを叩いて姿を消してしまった。

否。この現実世界に重なるように存在する、時の流れの速度が異なる、数千倍の速さの世界、加速空間へと突入したのだ。

加速空間に突入するなり、ディレイドの周りは突如、無音の世界となった。

現実世界で流れる音波の波形が用を成さないほど時の流れが速い世界にいるためだ。

そこで伏せている響鬼も、まるで凍り付いたかのように止まっている。実際には数千分の一の速度でゆっくりと動き続けているのだが、時計の短針の動きを認識するのが難しいように、それはもう「止まっている」と言って差し支えない現象である。

その加速空間に突入して、ディレイドは初めてこの敵と対峙するこ

とができた。

数メートル先に佇む、昆虫をヒト型に練り直したかのような外骨格の異形。

「ワーム。成体に変態したものがもう出てきたか。それともその姿でこの世界に現れたか。」

ぽつりと呟いたデイレイドは、そのシテムシの生態相を持つセパルチュラワームに向けて駆け出した。

「……！」

一声奇怪音を発したセパルチュラワームは、右腕のもはや鈍器のよくな太い鉤爪を振り下ろして迎え討つが、デイレイドはそれをやすやすと受け流して側面に回り込むと数発の拳を叩き込み、続く回し蹴りでワームを吹き飛ばした。

「……！」

ごろごろと木の葉敷きの地面を転がってゆくワーム。

巻き上げられた木の葉は現実世界に存在するため、花の蕾が開くようなじれたい動きで舞い上がっていかうとしている。

迅速に立ち上がったセパルチュラワームは癩癩に身を揺すり、アンバランスに甲殻が分厚い左半身を前に構えるとデイレイド目掛けて突進してきた。恐らくこれが先ほど響鬼とデイレイドを翻弄した攻撃であろう。

だが、加速する敵に対応できない現実世界ならいざ知らず、同じ土俵に上がったこの加速空間ではそれはただのタツクルに過ぎない。

デイレイドは冷静にそれを見据え、ベルトのカブトゼクターを操作した。

迅速にバックルのカバーを閉じゼクターホーンを元の位置に戻すとベルト上面に設置された三つのボタンを次々と押し込んでゆく。

《ワン、トウー、スリー。》

それに伴い認証の音声が応えるのに続いて、左手の指先がゼクターホーンを弾いて僅かに跳ね上げる。

デイレイドベルト・カレイドサーキットが変移した機構は、その指

定の動作をトレースしたのに従い「クラインの壺」より汲み上げたエネルギーの組成をタキオン粒子変換エネルギーに変更し、デイレイドの全身に迸らせた。集中したエネルギーはやがて、顔面の正中線を辿って駆け上がってゆき、頭上でYの字に輝いた。

「ライダー、キック。」

《ライダーキック！》

呟きに合わせてゼクターホーンを再び引き倒した次の瞬間。

肉迫したセパルチュラワームに向けデイレイドは、「キック」と言っておきながら瞬時に引き抜いたカレイドブレイドを振り下ろした。  
「ツツ！？」

自らの勢いを上乗せされ、厚い甲殻に刃を食い込ませて突進を停止させられるセパルチュラワーム。

続けざまにデイレイドは右足を高く振り上げると、自らが握るカレイドブレイドを上から踏みつけた。

タキオン粒子変換エネルギーによる斬撃と踏み下ろし、二重の威力がワームの厚い装甲を突破し、押し負けたセパルチュラワームは踏み潰される勢いで緑色の爆炎を撒き散らして爆発、消滅した。

《クロック・オーヴァー。》

システムの加速終了の音声と共に、加速状態から帰還するデイレイド。ベルトも、元の無骨な鉄塊へと姿を戻した。

「わっ！？」

響鬼からすれば、先刻の「クロックアップ」の言葉の直後 突然デイレイドの位置が変わった瞬間に爆音を受け、素っ頓狂な声をあげて喫驚した。

遅れて舞い上がる、ワームに蹴散らされた辺りの木の葉が風に吹かれて散らばっていった。

これが加速空間を自在に行き来する宇宙からの迷惑来訪者に対抗する、加速能力を持つ戦士、仮面ライダー カブトの力。

「今の爆発は！？ 敵の攻撃ですか？」

未だ伏せて警戒する響鬼に、デイレイドは普通の歩調で歩み寄って

いった。

『いや。俺が加速空間で撃破した敵の爆発だ。もう始末したから起きあがっていいぞ。』

『へ？』

それでもまだ、透の言っていることが理解できない明日夢は辺りを警戒しまくっていた。

やがてデイレイドと響鬼は、さらに山の奥深くにある小川のほとりへとやって来た。

『確か、この辺りだと思っんですが……』

響鬼が言っただけを見回したその時、川の方この崖の上から何か巨大な影が飛び出し落下してきた。

『……！』

『あれは！？』

ハリネズミを五メートルくらいに拡大したかのような異形、魔化魍・ヤマアラシが真っ逆様に地面に激突すると同時に、崖から飛び降りその腹に着地した人影が、逆手に持ったベースをヤマアラシに突き立て、その弦を鋭く爪弾いた。

『音撃斬！雷電斬震！』

その人影は己の内の熱さを吐き出すように吼えたと、怒濤の演奏を開始した。

弦を掻き回す爪の下から放たれる、さながら雷鳴の嵐のような音色が直下のヤマアラシだけでなくその周りまでもを蹂躪する。

遠く川を挟んだ所にいる響鬼にまで強烈なプレッシャーを与えるその音撃は、まさに閃く雷すら斬り震わすような鬼神の咆哮。

『はあっ！』

裂帛の氣勢と共に弦を一閃すると、音の余韻も待たずに魔化魍ヤマアラシは爆散した。

魔化魍の爆発跡に着地し、今さらなんでもなさそうな素振りで大股にこちらへ歩いてくるその人影は。



赤銅色の隈取りに一本角を持つ、その鬼は。

「斬鬼さん！」

響鬼の呼びかけに応え、顔のみ変身を解除したその男は、先ほど盛大に執り行われていた葬儀の主役とされていた音撃道名誉師範・斬鬼その人であった。

ある夜のこと。

斬鬼流音撃道場の和室の中央に、三人の男がいた。

いつも通り黒い武道着姿の斬鬼名誉師範と、やはりいつも通り派手な羽織袴の威吹鬼名誉師範。そして、突如呼び出されてやって来た、紺の武道着に着替えた響鬼こと明日夢。

「……あの、お話って、なんででしょう？」

二人の名誉師範を前に、正座してカチコチに控えた姿勢で問う。

正面の斬鬼は普段と同じ厳めしい顔であぐらで座り、左に正座する威吹鬼は腕組みして瞑黙していた。

やがて斬鬼が両の拳を突いて尻を滑らせ僅かに進み出ると、両膝をぱんと叩いてから口を開いた。

「安西い！いや、「響鬼」い！」

「は、はい!？」

いきなり吼えるように自らの名を呼ばれ、明日夢は目を白黒させた。なにしろ、斬鬼は明日夢の「響鬼」襲名を認めていない節があった。襲名の時点で他流であった斬鬼に、認めをどうこう言われる筋合いはないのだが、斬鬼はやけにこだわっていた。

だからこそこれまで明日夢のことを本名で呼び続けていた斬鬼がなぜ突然明日夢を鬼名で呼び直したのか。

「いいか響鬼い！これから俺が、お前に対し同輩のように意見を求めるのはあ！お前に受け継がれたあの響鬼の馬鹿者の魂に敬意を表してのことだ！」

何かを堪えるようなしかめっ面で吐き出すように言う斬鬼。

威吹鬼は相変わらず黙したまま目を閉じている。

「そのところを肝に命じておけ！」

「……は、はあ」

「めいじておけ！」

「は、はいつ!？」

斬鬼に念を押され思わず背筋を伸ばす明日夢。

「よよし! まず足は崩せえい！」

「え!? いやでも」

「いいから崩せ!」「響鬼」は俺の前でそんな畏まったりはせんわあ  
!」

「は、はいつ!？」

ああもう訳分からんなどと思いつつ慌ててあぐらに座り直す明日夢。  
本来ならそんな無礼はあってはならないのだ。

「それから顔が固い!」「響鬼」はもつと間抜け面だ馬鹿者お!それ  
から」

「誰が間抜け面ですかっ!？」

「まあまあ斬鬼さん。対等に話したいっていう主旨からだんだん外  
れてますから。響鬼君は「響鬼」さんとは、違いますからね。」

そこでようやく威吹鬼が斬鬼を窘めた。

「それに、響鬼君もあなたにツツコミを入れるところまで譲歩した  
んですから、本題に入りましょう?」

「あ……」

威吹鬼に言われ、明日夢は反射的に飛ばした自分の反論に気付き慌  
てて畏まった。

音撃道は本来、元・斬鬼流のような強力な縦社会なのだ。

「も、申し訳ありませんっ!」

「……ふん、構わんわ。「響鬼」のツツコミは、もつと鋭かった。」  
窘められて僅かに斜めを向いた斬鬼が、思わしげに呟いた。

あれほど苛烈な気を発散していた斬鬼がまるで消沈したような表情  
を浮かべたのを見て、明日夢は斬鬼の意図を察した。

「……はい。師匠に見合う自分になるように心掛けます。」

「……ふん。」

「ええ。それでいいです。それと、それくらいのしゃべり方で。そつばを向いた斬鬼に代わって威吹鬼が応えた。

「力が僕たちと同等、という意味ではなくて、問うているのはその心意気です。では。ほら、斬鬼さん。」

威吹鬼に促され、斬鬼はややあつてから明日夢に向き直ると、居住まいを正した。

「では響鬼。これから話すことは、極秘事項だ。絶対に他には漏らすなよ。」

「はい。」

「……よし。おい、入ってこい」

明日夢の応えを聞いた斬鬼が奥の襖に向かって声をかけると、その襖を滑らせ、黒い武道着の男が入ってきた。

「……ええええええええええっ!？」

その、入ってきた男の顔を見て明日夢は驚愕に絶叫してひっくり返った。

その男は、斬鬼だった。

そこに座する斬鬼と、後ろから入ってきた斬鬼。

二人の斬鬼が、そこに並んでいた。

「ああああああ……」

顔中の穴と言う穴を開放して意味のない音を漏らす明日夢。

それはもう、見た瞬間「双子」とか「そっくりさん」とかいった概念を放棄するほどの酷似ぶり。もはや「コピー」の領域であるそれを本能で察した明日夢は、だからこれほど取り乱している。

あとから入ってきた斬鬼が座していた斬鬼の隣に座り込んだことで、もうなおさらどちらがどちらか分からなくなってしまった。

「ふん。修行が足らんわ。馬鹿者。」

「《人払い》と《静穏》の術が張ってありますから、もうちょっと叫んでも大丈夫ですよ?」

むすつとした斬鬼と、イタズラっぽい笑みを浮かべて見下ろす威吹

鬼に、立ち直れない明日夢には返す言葉もない。

「俺は、ワームだ。」

明日夢の回復を待たずに「後から来た斬鬼」が、本物の斬鬼と全く同じ口調で告げた。

「「ワーム」とは、宇宙の深淵の彼方からやって来た、地球の外の生命体だ。」

拳げ句「宇宙人」ときた。

もう聞くことしかできない明日夢に語られたことは。

曰く、「ワーム」は宇宙からやって来た。「ワーム」には現住生物に擬態して成りすまし、オリジナルを殺して立場を入れ替える習性がある。

「……じゃ、じゃあ、なんで、斬鬼名誉師範は、あの……」

「その「成りすまし」には個体差がある。」

ならばなぜこの偽斬鬼と斬鬼が共に並んで座っていられるのか。

「ワーム」は現住生物に擬態する際、その記憶をも写し取る。その後の生活に溶け込むために。

その複写深度によっては「ワーム」がその記憶の影響を受けることがあるのだ。

基本的には「ワーム」としての本能を保ったまま擬態して潜伏するものだが、稀に「ワーム」の本能が強過ぎ人としての理性を持たないままの者もいる。

そして、それとは反対に人の理性を色濃く写し取ってしまい、完全にその者に成りきってしまう者も。

すなわち、この偽斬鬼は本物の強烈過ぎる個性に逆に完全に乗っ取られてしまったのだ。

正義に目覚めた「ワーム」の誕生である。

「「ワーム」は危険な存在だ。今の内に殲滅する必要がある。」

「だが、その前に有効な対策を立てねばならん。「ワーム」には、俺たちの知らない脅威がある。」

同じ顔に厳かに告げられ、頭の整理を後回しにした明日夢はとりあ

えずつなずいた。

続いて威吹鬼が口を開いた。

「とはいえ、事を皆に話すわけにもいきません。我々に対処できない脅威があると知れば士気にも関わりますし、対外的には音撃道の沽券にも関わります。」

「だから、俺たちだけでやらなくてはならない。響鬼。協力しろ。」

「……と、言うワケでな。」

透への話を、斬鬼はそう締め括った。

河原に張った斬鬼のテントの前で、武道着に着替えた斬鬼と、前に立つ透と変身状態の響鬼の三人は事情の説明を行っていた。

「意図せずワームとばったり出くわしたとはいえ、その特性を有効活用するためにも擬態された俺が先陣を切らなければならん。そして事が済んだ後の情報隠蔽のためには最悪の場合、俺は死んでなくてはならない。……もちろん丸く収まれば、ひよっこり生き返る目もなくはないんだが。」

頭を掻きながらぼやくように言う斬鬼。

「「ザ斬鬼」の言っていたワームの巣に行ってみたんだが、ちょうど逃げ出した所だった。それでプランCに変えようとしたんだが、その戦闘でディスクアニマルを全部破壊されてしまったな。」

『「ざざんき」というのは、斬鬼名誉師範が考えた偽物の名前です。」

透に、響鬼が補足説明をする。

「連絡しようとしたんだが、それでできなかつた。だから響鬼、今すぐ威吹鬼とザ斬鬼にディスクアニマルを送れ。」

『分かりました。』

「待て。」

斬鬼の指示に従い響鬼が音叉とディスクを取り出したところで透がそれを止めた。

『なんですか?』

「それに、俺の情報も入れる。瞳子宛だ。」

「……と言うワケで、このディスクにあなた宛の情報があります。」  
「……はあ。」

しゃがんでにつこりとディスクを突き出す威吹鬼に、尻餅をついたままの瞳子はぼんやりと返事をした。

結局は瞳子の勘違いだったことに安心するやら、斬鬼が生きていてほっとするやら、驚くやらで瞳子は完全に飽和していた。

轟鬼と天鬼はまだこちらの遣り取りに気付いていない。

「あの男性の方が響鬼君の所に現れて、あのカードを出した所をたまたま見ていてね。彼、門矢さんの知り合いでしょ？彼と瞳子くんが知り合いだと分かった時から、ご助力願おうと思っただけはいたんだ。だけど彼は響鬼君とさっさと行動を起こしてくれたようだし、繋がりもありそうな瞳子くんもこちらで確保しておかなければなと思っ  
て、さっき呼んだんだ。」

小声で説明を続ける威吹鬼は、なおもディスクを差し出してくる。

「ちなみにワームの擬態は複写元の生態も完全に再現するんだそうだよ。心臓の鼓動も血流も擬態のうちらしくて、つまりあそこで寝ているザ斬鬼さんは、ガチで「死んだフリ」をしているだけなのさ。」

「言っ、器用にウインクして見せる威吹鬼に、瞳子は開いた口が塞がらなかった。」

「さ。悪いけど、急いで。」

「……あ、はい」

とはいえ、促されてどうにか復帰した意識でディスクを受け取り、自分の練習用の音笛を取り出しディスクドライバに取り付けてディスクを弾く。

きゅるきゅると回転するディスクの情報を苦勞して聞き取った瞳子の困惑に揺れていた瞳が、落ち着き輝きを取り戻してくる。

やがてディスクを取り外した瞳子は、威吹鬼に向き直ってはっきり

と告げた。

「私も行きます。一緒に連れてって下さい。」

「いいでしょう。行きますよ。」

瞳子の言葉を聞き入れ、威吹鬼は音笛を口元にあて、そっと細く長く息を吹き込んだ。

だが、無音。

瞳子の耳には聞こえないが、人の可聴範囲外の音を出しているのだとすぐに気付いた。

すなわち、人に聴かれない合図を出す目的はと言えば。

「うわああ！？　ざ、斬鬼さんの死体が消えたっすー！？」

あちらの方で、轟鬼が妙に状況にはまった驚き方をしているのが聞こえた。

河原にディレイドドライバーとカードを持った透と斬鬼が並び立つ。斬鬼は上着を脱ぎ捨て左拳を天に突き上げると、その手首に詰められた円環状の変身具・音枷の下端の鎖を引いて露出させた小さい弦を鋭く爪弾いた。

額近くにかざされた音枷から響く特殊な音波によって肉体の変移を促進させる。

『ぬうつ……ぜええい！』

やがて全身に電光を迸らせた斬鬼はその稲妻を振り払い、鬼の姿を現した。

「変身。」

《カメンライドウ・デイ・ディレイド！》

カードを挿し入れたディレイドライバーのスライドカバーを抜刀の動作で閉塞し、迅速にその身をイエローのヴィジョンに包み、ディレイドの姿へと転身させる透。

『……ふん。貴様、ディケイドと同等の力を持っていると見て間違いないか？』

『ああ。』

しげしげと姿を睨め回して問う斬鬼に至極あっさりと請け負うディレイド。

『斬鬼さん。透さんは、さっきも敵ワームを撃破してくれました。』

『そうか。』

響鬼の報告にうなずいた斬鬼は、改めてディレイドに問いかける。

『……対抗できるんだな？ワームに。』

『ああ。それがこの世界での俺の仕事だ。』

『それは、この件を片付けるまで協力してくれるという意味か？』

『当面はな。』

ディレイドの応えに斬鬼はやや気色ばんで詰め寄ってきた。



「おい。ワームを全て倒さねば人類は滅びるぞ！なにを半端なことを言っている！？」

「だが、危機に陥っている世界はこの他にもまだ存在している。俺はそちらも対処しなければならぬ。」

「知ったことか！」

斬鬼が吠えるが、デイレイドは意に介した様子もない。

「だから、今ざっとこの辺の連中を片付けたら、ワームが本来いた世界の仮面ライダーを連れてきてやる。」

「なに！？」

驚く斬鬼に構わず、デイレイドは辺りを見回した。

「それより、早く案内しろ。ワームの巣か、逃走した方面の見当へ。」

「ゼクトの諸君！」

そこへ、突然甲高い男の声が響いてきた。

三人が振り向いて見遣れば、川の向こう、森の奥から現れた数人の人影。

喪服姿の女性数人を引き連れ、先頭を黒のロングコートを纏って歩く男が芝居がかった仕草でステッキを振りながら近づいてくる。

やがて奇矯なポーズでぴたりと立ち止まった男は、長髪の下、フレームレスのメガネを引き降ろしてこちらを上目遣いで眺め遣ると、

大仰に顔をしかめた。

「なあにい？ゼクトのマスクドライバーではないなあ？は！鬼か！」

相変わらず芝居がかった仕草と口調で嘲るように言う男に、斬鬼は向き直って言い返した。

「……鬼だ。」

「鬼か！ゼクトの代わりに鬼と「悪魔」がいるのかここは！」

舞台役者のように両腕を大きく振りかざして天を仰いだ男は、次の瞬間たいした予備動作も見せずに十メートル以上の距離をいきなり飛び越えてきた。

「なにっ!?!」

「ッハア!」

斬鬼が反応するより速くステッキを振り回した男は瞬く間に無数の打撃で斬鬼を打ちのめし突き飛ばした。

「ッゲツ!?!」

「斬鬼さん!?!」

あまりの展開に驚愕した響鬼の前に男が瞬時に肉迫してきた。

「よそ見している場合かオラオラオラオラ!」

片手でメガネの位置を直す余裕を見せつけながら振り回す男のステッキに打ちのめされたたちまち体勢を崩した響鬼も反応する暇もなく吹き飛ばされる。

「ッハッハア!」

「うああっ!?!」

鬼二人がデイレイドの左右を吹き飛んでいくより速く迫ってきた男のステッキを、迅速に振り上げたカレイドブレイドが迎え討った。

「ハッ、まだまだまだまだまだまだ!」

ぱしぱしと手首の返しだけで凄まじい威力の打撃を無数に打ち込んでくるステッキをデイレイドは全て無言で正確無比に打ち返す。

「スカしてんじゃないよ生意気だ!」

ステッキの乱打の最中に巧妙に紛れ込んできた蹴りすらも引き上げた腿でブロックし、やがて乱打の途中で淀みなくステッキを放り捨てて攻撃を素手に切り替え一瞬の遅滞なくデイレイドに無数の拳を浴びせるが、やはり一瞬でカレイドブレイドをどこかへしまったデイレイドも冷静に全ての拳を両手で弾き逸らす。

「ほらほらほらほらほらほらほらほらほらほらほらほら!」

生身にも関わらずまるでマシンのエンジンのピストンのように残像すら見える程の速度で往復する左右の拳の連打をあくまでも冷静にぱしぱしと払ってゆくデイレイド。

お互い五十センチも離れていないその間で四本の腕が複雑に場所を取り合い、両者共に一步も退かずに打ち合いを続けている。

「……あれが「クロツクアップ」か？」

「いいえ、クロツクアップはあんなもんじゃないです。見えません。」

男とデイレイドの応酬を呆然と眺める斬鬼と響鬼。

その時、遠くで黙って立っていた喪服の女たちがその姿を揺らめかせてその正体を現した。

まるで己が目を覆い嘆き悲しむかのような面相の緑の異形、ワーム。それも、ザ斬鬼から教えられた、未発達形態の「サナギ体」である。

「ふん。この俺を喪服で出迎えるとはどんな皮肉だ？」

「斬鬼さん、僕たちはあいつらを！」

「ふん、忌々しいが、任せるしかないな」

凄まじい乱打戦を互角に展開しているデイレイドを見送り、響鬼と斬鬼は駆け寄ってくるワーム・サナギ体を迎え討った。

ワームは成体まで成長しなければクロツクアップはできない。ザ斬鬼から教えられたことだ。

そして、ワームそのものには特殊な属性もなく、鬼の通常攻撃で普通に倒すことができるとも。

「うおおああああ！」

左右の棍棒で、次々とワーム・サナギ体を打ち倒してゆく響鬼。

斬鬼も、専用武器、音撃真弦・烈斬を振り回しワームを斬り伏せてゆく。

「響鬼！打撃だけでは効率が悪い！「火」を使い！」

「はい！」

ワームを打ち倒した間隙を突き、一瞬の集中の後、両の棍棒の先に灯した火球をワームめがけて振り降ろす勢いで投げ放った。

次々と着弾する火球に身悶えするワーム。うち数体が緑色の炎を撒き散らして爆散した。

「はあああ！」

あつと言う間に数を減じてゆくワーム・サナギ体。

だが、その中に表皮がやけに赤く変色したものが現れた。

訝しくは思うものの、その意味を知らない鬼たちがそれ以外のワームを倒してゆく中で、そのサナギ体は体を膨張させ、やがて表皮が崩れ落ちると中から人型の昆虫めいた異形が現れた。

『しまった！』

残るはそれだけだったのに後回しにして事態を見送った失策に響鬼が気付いた時には既に遅く。

そいつがふつと姿を消した次の瞬間には響鬼と斬鬼は無数の殴打を喰らい宙を舞った。

『グウツ！？』

『つだあああ！？』

為す術なく地に落ちる響鬼と斬鬼。

あれほどのサナギ体を蹴散らしたというのに、たった一体のワームが変態しただけで形勢があつと言う間に逆転された。

離れた場所に姿を現して停止するワーム・成体。

『……なん、だ、これは？ 速いとかそういうことかこれが！？』

『……なんかもう、「見えない敵」とかでいいですよねアレ……』

あの一瞬のうちにとれほど殴られたのだろう。斬鬼ですら起きあがることのできないダメージに、響鬼は腕を上げることもしかない。生身だつたらとうにバラバラになっていただろう。

『……立て、響鬼！貴様それでも鬼か！？』

『……鬼、です、けどね……』

どうにかもがく斬鬼と響鬼。

だが、もう一度襲われたら二度と起き上れないだろう。

『立てええええええ！？』

『……！？』

斬鬼はようやくよく上体を起こし、響鬼は腕と脚を動かした。だがその時前触れもなくワーム・成体が姿を消した。

……終わりだ。

二人はそれを連想した。

次の瞬間、遠くに吹き飛ばされたように倒れ転がるワーム成体の姿

が現れた。

同時に、二人の前に立ちはだかる男の足が目の前に。

「……遅くなった。」

「、まったくだ。」

「助かった……」

斬鬼と瓜二つの容貌の男、黒の武道着を纏うザ斬鬼がそこにいた。

威吹鬼と瞳子と分かれて加速空間を先行したザ斬鬼は、今まさに襲われんとする斬鬼と響鬼の前に割り込み、敵ワームを迎撃した。

「下がって回復に努める。こいつは俺が倒す。」

「頼む」

動けるようになった斬鬼が、未だ動けぬ響鬼を引きずって退避してゆく。

改めてワーム・成体に向き直ったザ斬鬼は、その身を揺らめかせ、斬鬼の擬態を解除し正体を現した。

カニの生態相を持つ、漆黒の攻殻に包まれた異形、ウカワームの姿を。

「……擬態を得てみて思ったことがある。」

ザ斬鬼は棘だらけの右腕をかざしてぼつりと呟いた。

「俺たちワームは、なんの為に存在しているのか。世界に間借りしてひっそりと暮らすのでは駄目なのか？」

ようやく立ち上がってきたワーム・成体は、答えず威嚇音を発した。

「……そうか。人の知恵までは得られなかったか。」

言葉という文化が通じぬ同胞に、僅かに瞑目したザ斬鬼は、ゆっくりと、だがしつかりと身構えた。

「今ここで答えが得られれば、共に生きていくこともできただろうが……すまん、ここまでだ。俺に知恵も力も足らぬばかりに。せめて俺がお前を止めよう。」

言って、ザ斬鬼は加速した。

ほぼ同時にワーム・成体も加速空間に飛び込むが、高等種に相当す

るウカワームには、さらに斬鬼から得た鬼としての体術がある。

本能の赴くままに突進してくる同胞の死角に回り込むと、捕らえたタキオン粒子を体内の器官で破壊エネルギーに変換して右腕に集め、手首を缺へと変形させるとそれを同胞の脇腹に叩き込んだ。

「……………！？」

「すまない。だが、答えは必ず見つけよう。」

誓いを贈り、腕を引き抜いたザ斬鬼の背後でワーム・成体は緑色の炎を撒き散らして爆散した。

「……………」

ザ斬鬼は続いて遠くの、現実世界で乱打戦を繰り返している途中の姿勢で固まっている黒コートの男・仲間「ノグレイジ」と呼び分けさせていた個体とディレイドを眺め遣った。

「ハハハハハハハハハ！」

「……………」

疲れなど知らぬ様子で凄まじい攻撃を繰り返す男に、こちらも疲労とは無縁で応戦し続けるディレイド。

なるほど、敏捷性に優れた敵と直接交戦することはナンセンスだ。

と透は考えていた。

なにしろディレイドの攻撃を発展させるカードの使用を不可能にされているのだ。

相手の速度に合わせることで自体は普通に可能なのでこちらが撃破されることはないが、状況は膠着してしまふ。これでは目的が果たせない。

透は珍しく反省していた。

（……………今度からは、近付かれる前に殲滅しよう。）

もし瞳子が聞いたら盛大に溜め息を吐かれそうなことを胸中で呟いたその時、異なる時間流の干渉を感知した瞬間、目の前の敵が真横に消し飛ばされていった。

「余計な世話だったか？」

「いや。好都合だ。」

ザ斬鬼と命名された漆黒のウカワームの問いに素っ気なく応える透男が遠くへ転がってゆく今の内にカードを一枚抜き出したディレイドは、それをディレイドライバーのスリットに挿し入れた。剣を両手で構え、抜刀の動作でスライドカバーを閉塞する。

《カメンライドウ・カ・カプト！》

ベルトを加速機能を持つ仮面ライダーの物に変移させた。

「……キサマア！この俺に攻撃するとはどういうことだあ！？」

ようやく起き上がった男が怒りに顔を歪めザ斬鬼に向かって吼えた。

「「ノギレイジ」。俺たちは侵略をやめるべきだ。」

「はあ？」

ザ斬鬼に「ノギレイジ」と呼ばれた男は大げさに顔をしかめた。

「馬鹿が！擬態する相手を間違えたか！貴様ごとき格下がこの俺に指図するなど身の程を弁えぬ愚行！狂った個体はここで始末してくれる！」

ノギレイジはその場で指を弾いて鳴らした。

「！？」

《クロックアップ！》

別方面から異なる時間流の干渉を感知した瞬間、二人は同時に加速空間に飛び込んで横っ飛びにそれをかわした。

無音になった世界の中で、たった今までディレイドとザ斬鬼がいた場所を駆け抜けていった巨大な質量が地を擦り削りながらノギレイジの手前で停止し、こちらを振り向いた。

およそ十メートル程の山かと思われた。

四本の足を蠢かせて向きを変えるその山は、おおまかには亀に似ていた。

ディレイドの内部の情報領域によればそれは魔化魍オトロシと言う亀が巨大化したような異様に一番近いが、それとは違つと結論している。

本来は爬虫類のような構造・表皮を持っていたはずだが、そのオト

ロシらしきモンスターの表皮は、黒く艶やかで、あるうことが支持肢がすべて外骨格に変じていた。

背中の甲羅も角質と外骨格を混ぜ合わせた異質と化しており、やがてこちらを向いたその顔は、眼窩の中には眼球ではなく複眼が埋まっております、開いた口の中では牙が一本一本ばらばらに蠢いていた。

もはや生命体としてどうか言う変化ではない。

存在の融合、爬虫類型魔化魍と、ワームの外骨格の特徴を混在させたそいつは。

『魔化魍とワームのデュアルビーイングか。』

デイレイドが呟いた。

「見る！侵略は既に始まっている！」

デュアルビーイングの前足を叩いて示し叫ぶノグレイジ。

「この素材はただの攻撃では死なないらしいな！もはやこいつを止められるヤツはこの俺以外には存在しない！人間どもは全て、気付かぬうちに一瞬で真っ平らになるのだ！ハッハハハハハハ！」

デュアルビーイングから、まるで無数の虫が一斉にざわめいたような異音が放射された。どうもこのモンスターの咆哮らしい。

『ザ斬鬼。ついて来い。』

『逃げるのか？』

僅かに後退したデイレイドの指示に問い返すウカワーム。

『こいつに対処できる策を取りに行く。お前は斬鬼を守れ。』

デイレイドの意図を理解したザ斬鬼はうなずいて、共にモンスターに背を向けデイレイドと駆け出した。

「ははははは！デカイクチを叩いておいて逃げるだけか？」

ノグレイジの台詞を遮る轟音を蹴立ててデュアルビーイングがその山のような巨体を突進させた。

駆けるデイレイドはやがて木陰に退避した斬鬼とその傍で倒れている響鬼の元へやって来ると、デイレイドライバーにカードを挿し入れてカバーを閉じた。

《ファイナルフォームライドウ・ヒ・ヒビキ！》



音声が生けるのと同時に、通常の時の流れに置き去りになっている、倒れている響鬼の身体にカレイドブレイドを袈裟掛けに透過させた。初めて逃げられる心配のない相手をいつもより簡単にカレイドブレイドの支配下に置くと、響鬼の身体は宙に浮かびあがり迅速に回転し変形・変移してゆく。

やがてそこに巨大な鳥型ディスクアニマル・アカネタカが現れた。

『イツ!? くすぐつたい!?!』

ばたばたと宙でもがいて悲鳴をあげる巨大アカネタカ。

『つて、あれ?なんで僕空を飛んで……あれ?音がしない?あれ?』  
状態と状況の変化に戸惑う響鬼。

自分が再び巨大なアカネタカに変身していることに気付いた響鬼は、やがて落ち着いてディレイドに問いかけてきた。

『透さん!? コレ、やるならやるつて言つてくださいよ!?!』

『ああ。今の俺は加速中だからそれは不可能だった。』

『へ?』

アカネタカが素っ頓狂な声をあげる。

『ここはクロックアップの世界、加速空間だ。』

『えええ?あれ、斬鬼さんが止まつて……?へえええ?』

物珍しげに斬鬼と辺りを見回すアカネタカ。

『今は、俺と同調することでお前も加速空間に追従できている。それより響鬼、おしゃべりはおしまいだ。敵が迫っている。』

『あ、はい!わかりました!』

かつての経験から、彼らが自分を変形させる時は最終決戦であると考へた明日夢は氣勢をあげた。

『ザ斬鬼、斬鬼を頼む。』

『おう。』

漆黒のウカワームとすれ違い駆け出してゆくディレイドと飛ぶアカネタカ。

やがて、木々を薙ぎ倒して迫るデュアルビーイングの前にやってくる。

『うわああ！？ なんですかあれ！？ あんな魔化魍見たことないですよ！？』

『あれは、魔化魍とワームが融合した存在、デュアルビーイングだ。もはや通常の攻撃では滅ぼせず、加速されてはただの音撃も通用しない。俺とお前の同調攻撃だけが対抗できる。手を貸せ。』  
その異様に面食らう響鬼に迅速に説明するディレイド。

『は、はい！行きましょう！』

『よし。明日夢、お前は上から行け。』

『はい！』

飛翔してゆくアカネタカを見送り、ディレイドはベルトの上面のボタンを次々と押し込んでゆく。

《ワン、トウー、スリー。》

『ライダーキック。』

呟いてバツクルを閉じてゼクターホーンを戻し、すぐさまレバーを引き倒した。

《ライダーキック。》

タキオン粒子変換エネルギーが迸り、その電光は宙に飛び上がると飛翔するアカネタカにまわりついた。

ファイナルフォームライドによってディレイドと同調している今の響鬼はディレイドの体の一部も同然の状態。ディレイドが引き起す発展攻撃の恩恵をその身に受けることができる。

『うおおおおお！』

叫ぶアカネタカがデュアルビーイングに突撃する。そのチャージアツプを施された体当たりは強靱に変質した山のような甲羅をあつさりと碎き散らした。

『oooooooooo!?!?』

相変わらず不気味な音で悲鳴をあげるデュアルビーイング。

ディレイドもカレイドブレイドを引き抜き、モンスターの足下に駆け込んでゆく。

側面に回り込み、飛び込みざまに足に斬りつけその外骨格を砕いて

いった。

『……!?』

さらにアカネタカに突き飛ばされ、あえなくバランスを崩して横倒しになるデュアルビーイングの巨体。

それを確認してディレイドはカードを挿し入れた剣のカバーを閉じた。

《ファイナルアタックライドウ・ヒ・ヒビキ!》

モンスターの身体を駆け登ったディレイドは、跳躍して宙にいるアカネタカに飛びかかる。

『今度は言っておく。死又程くすぐつたいぞ』

『いやーでーすー!』

だがあえなくカレイドブレイドの餌食となり、その身を再び変移させてゆく響鬼。

やがて巨大な音撃鼓となった響鬼を抱きかかえ、空中からそれをデュアルビーイング目掛けて投げ放つと、モンスターの腹に命中した巨大音撃鼓はそのまま沈み込んでゆき、より大きな三つ巴の光陣を展開した。

『はあああ!』

着地したディレイドは間髪入れずに光陣に駆け寄ると、振り上げたカレイドブレイドの横面を叩き付けた。カレイドブレイドを撥とした音撃打だ。

『……!』

『はあああつ、たあつ!』

デュアルビーイングがあげる悲鳴の中、ディレイドが上体を仰け反らせては何度も何度も剣を光陣に叩き付ける。

大太鼓の音撃の音が、デュアルビーイングの巨体に浸透してゆく。巨体に見合う大きな音撃だ、討伐は間近だと思われた。

だがその時突然、一瞬横を向いたディレイドが真横に吹き飛んだ。

『透さん!? ああつ!』

制御を失いファイナルアタックライドが強制終了され、アカネタカ

の姿に戻ってモンスターの腹から吐き出される響鬼。

ごろごろと転がるデイレイドとアカネタカが見たものは、先ほどまでデイレイドが立っていた所に突如現れた異形、鈍く群青に輝く外骨格を持つワーム・成体。

「そこま で だ悪魔！」

そいつは、ノグレイジの声で告げてきた。

「あいつ!？」

「「フリーズ」、疑似時間停止か。見えてはいるんだがな。」

「ウソ吐けえ!？」

デイレイドの言葉に思わず声を裏返すノグレイジ。だが確かに激突の瞬間デイレイドは反応していた。

カプトガニの生態相を持つそのカッシスワームは、左腕をいきなり倒れたままのデュアルビーイングの腹に突き刺した。

「ふん！面白い技を持っているみたいだが、「止められた時」にまでは追いつけまい！そして！」

カッシスワームが吼えると、なんとデュアルビーイングの巨体が溶けるように縮んでゆき、圧倒的に小さいはずのカッシスワームにその腕から吸い込まれていった。

完全に吸い込みきると、カッシスワームの身体が二周りほど大きく拡大し、足が地面にめり込んだように見えた。

「……ふうー。これで俺は無敵だ！さあ、次の瞬間にはお前たちはぺしゃんこになる！はははははははは！」

余裕を含んだ哄笑を上げるカッシスワームが、右手を振り上げた。それを握り締めて振り下ろそうとした瞬間、漆黒のウカワームが飛び出し、その腕に組みついた。

恐らく今の動作が「フリーズ」のスイッチだったのだろう。それを知っているザ斬鬼が阻止したのだ。

振り払おうとするカッシスワームともみ合いながら、ザ斬鬼が必死に叫んだ。

「行け！デイレイド！神楽見 瞳子はすぐ近くまで来ている！行け

！行けえ！』

『貴様あ！？ この下等があああああ！』

『ザ斬鬼さん！？』

響鬼が悲鳴を上げるが、ディレイドは迅速に身を翻すと駆け出した。

『明日夢！急げ！「フリーズ」への対抗策を取りに行く！お前の力が必要だ！』

『うう……！？ ザ斬鬼さん！すみません！』

僅かに逡巡した響鬼も、叫びディレイドを追って宙を旋回し飛び去った。

跳躍したディレイドがそのアカネタカの足に掴まり、二人は彼方へ飛翔してゆく。

「仮面ライダー カブト」の乃木 怜治氏初登場のシーンを見ながら、今回はあのようなメチャクチャなスピード感溢れるバトルシーンを目指して書きましたが、果たしてそのように伝わっているでしょうか。

大好きですとも。乃木 怜治そして中の人、坂口 拓さん。実写版「魁！男塾」には実に感動しました。

生身で百烈拳出せる男の登場で、これまで「ひとつの世界で3〜4話」としていたパターンが崩れました。いや、要因はミステリやつて遊んでたせいですが。

なので「響鬼編」は、もう一本続きます。

瞳子は鬼に変身した威吹鬼に横抱きにかかえられ、森の中の道なき道を大きく跳躍を繰り返して進行していた。

『いやあ。役得だなあ。瞳子くんを抱っこできるなんて。』

跳躍中、威吹鬼がそんな軽口を叩くが、瞳子はジト目でそんな威吹鬼の無貌を睨み付けた。

「威吹鬼名誉師範。そういう軽いトコを引き締めてくれたら、もっと素敵になるのに。あと、今回の事は、ひとつ大きな貸しですからね!？」

『それじゃあ、今のこの瞳子くんの「足」になってることでチャラにしてよ。』

「……もう。」

『それに、そういうおしゃべりしてもらえるなんて、僕はうれしいなあ。』

「……………」

緊張が逆噴射したせいで色々タガのかけ違いが起きてるような感じを瞳子は自覚してはいる。

ぶっちゃけて「ハイになってる」という状態だ。

そのおかげで弟子にあるまじき口調が止まらないのだが、威吹鬼は一切咎めなかった。

『あ。来た。』

「え?」

そう言った威吹鬼は次の跳躍で巨木の横の僅かに拓けた場所に着地して瞳子を降ろした。

そこへ、デイレイドと鬼の姿に変じた響鬼が駆けつけてくる。

「透!明日夢君!」

『うむ。瞳子。』

目の前までやって来たデイレイドは、三人を眺め遣って告げた。

『状況は切迫している。説明は後だ。各自迅速に判断して進行してくれ。』

『そうだ！威吹鬼さん！ザ斬鬼さんが大変で……』  
慌てた様子で説明しようとした響鬼に威吹鬼が掌を突き出して窘めた。

『響鬼君。今は彼の言ったとおり、急いでいるので状況に疑問を挟まずに、各自思ったことを進めるように。どんな異常が起こっても冷静に対処すること。いいですね。』

『あ……』

『そうだ。無駄話をしている暇はない。』

敵はワーム。かつては唯一対抗できるのがザ斬鬼だけであり、対処が困難になるであろうことは斬鬼・威吹鬼・響鬼全員が承知の上だったはずだ。

そして今はなぜかあのデイケイドと同種が存在が介入してくれている。

そのデイレイドが「やる」と言っているのだ。ならば後は目的の達成のために邁進するのみ。

『はい！』

『よし。まずは瞳子。こちらへ来い。』

『はい。……なに？』

呼ばれて近寄ったはいが、戦力外の自分といった何の用事だろうと瞳子は訝しんだ。

ディスクアニマルには、「瞳子にできることがあるから来い」と記録されていたのだが……。

デイレイドはデイレイドライバー・カレイドブレイドを取り出し、左手の指先に一枚のカードを抜き出して示した。

『かつて、お前がウィブと接続したことの副産物だ。あの時お前から逆流してきてな。デイケイドが構築したデータを流用することしかできなかった俺の機能に、新規のプログラムを構築できる可能性が生まれたのだ。』



「……！？ それ！？」

言いながらデイレイドがかざしたカードには、仮面ライダーの顔ではなく、武器や装備でもなく、人間の顔が写し出されていた。

神楽見 瞳子の顔が。

「なんですかそれわあ！？」

『これをこうして』

「ちよつと透まちなさい！？」

だが止める手の届かぬうちにあっさりカードをデイレイドライブに挿し入れたデイレイドは、とつとスライドカバーを閉塞してしまつた。

そして虚空を一閃させる。

斬撃の軌跡にQRコードに似たデイレイド自身のライダーズクレストが出現したその時。

呆然と見送る瞳子の瞳が黄色に輝いた。

「え……！？」

『新たなアプリケーションの熟成に時間がかかったが、ようやく完成した。』

デイレイドから接続されている瞳子の中のライドピラーから迅速にプログラムデータが流入してくる。

それは九つの世界全ての瞳子の記憶容量と人格領域の一部に干渉し、瞳子の中に新たな概念と選択肢と知識が形成される。

やがてアップロードが終了した時には、瞳子には己が次にどうすればいいのかがもう分かっていた。

「……透。アップロードが終わつた。でも急ぐんでしょ？ 試行は無しでいきなり始めていいよね？」

『ああ。やってくれ。』

「んじゃ。……ほら」

響鬼と威吹鬼がきよんとする中で、瞳子はきびきびと動くデイレイドの肘を突いて前を向かせ、自分はデイレイドの背後に立つた。そして、いきなり背後からデイレイドを抱き締めた。

背中に顔を埋め、腹に回した両手をデイレイドベルト・カレイドサーキットの無骨な鉄塊のようなバックルの上で組んでぎゅっと握りしめる。

「……あの、瞳子くん？」

あまりにも場違いな行動に訝しげに威吹鬼が問いかけるが、瞳子は無視してそれを進行した。

「……スクエア・フォーム。」

瞳子が呟いた瞬間。

瞳子の全身から黄色の光が放出し、輪郭も分からなくなるほど光量を上げると、その人影の形を崩しみるみる体積を縮めてゆく。

やがて瞳子だった光はデイレイドの腹部に巻き付きベルトの上に重なり、ベルトの形状が変化を始めた。

全体の無骨なシルエットがなだらかなカーブに変じ、シャープな外観に生まれ変わる。

光の奔流が収まった跡には瞳子はおらず、デイレイドの腰に新たなベルトが出現していた。

白いプレートの中央に赤い丸型ウィンドウを填めたバックルはデイレイドのベルトに良く似ているが、それよりはやや細長く、それを取り巻くフレームは、まるで何かをすくい上げるかのような形の両掌を連想させる形状をしている。

だが変化はまだ終わらない。

デイレイド自身の装甲各部が迅速にスライドし展開変形してゆく。

そして体中を走るパラレルラインの間や装甲の下から、太陽電池・ソーラーセルのような輝くプレートが現れた。

スライドした装甲が再配置され、全体のシルエットを僅かに変えて変化は完了した。

「システム・スクエアフォーム。展開を正常に完了。デュアルコンバーターの初期化完了。『クライン・ボトル』からの新規エネルギー供給経路オープン。ライドピラー・ターミナルの再接続を確認。

ライドカードを全て上書きします。完了。透。スタートアップ完

了しました。』

『うむ。』

ベルトから瞳子の淀みないオペレーティングの音が聞こえ、透はその報告にうなずいた。

呆然としている威吹鬼と響鬼を完全に置き去りにデイレイドは手順を進める。

デイレイドは、ベルトバックルの左側、掌の形をしたフレームを掴むとそれを左へ引いた。

すると中央のバックルが右上を基点に九十度回転して縦になった。

続いて翻した左手の指先に一枚のカードを抜き放つと、それを縦になったバックルの側面に現れたスリットに挿し込み、左手で払うようにバックルを引き倒し元の位置に戻す。

《カメンライドウ・ファ・ファイズ!》

ベルトバックルから赤い光線が伸びてデイレイドの身体に四肢五体に沿った幾何学模様を描くと、その隙間を埋めるように黒い装甲が包み込み、今度はデイレイドのベルトだけを残してその姿を「仮面ライダー ファイズ」のものへと変移させた。

続いてデイレイドはもう一枚カードを抜き出し、今度はそれをデイレイドライバーのスリットに挿し入れ抜刀の動作でスライドカバールを閉塞する。

《デュアルカメンライドウ・カ・カブト!》

音声が、初めて聞く認証を告げると、カレイドブレイドの指令を受け、ベルトがドット柄のノイズに包まれて変移してゆく。

分離して飛び出した部品を、変化したベルトのセットアップレールに右から滑らせるように装着すると、それは「仮面ライダー カブト」のベルトとなった。

デイレイドは迅速にゼクターホーンを引き倒す。

《キャスト・オフ! チェンジ・ビートル!》

ハニカム構造状に展開構成されたマスクドアーマーをとつととパージすると、そこには「仮面ライダー カブト」のベルトを装着した仮

面ライダー ファイズ」の姿が現れた。

これが、ディケイドのフォローバックアップモジュールに過ぎなかったはずのディレイドが自ら編み出した拡張機能「スクエアフォーム」。

ベルトを変身ツールとはしていない音撃戦士はその異常には気付かないが、かつて見たディケイドとは違う手順を展開したディレイドの能力に完全に言葉を失っているようだ。

『デュアルコンバーターは正常に作動中。問題ないよ、透。』

『そうか。』

瞳子の報告にいつも通りの声で応え、ディレイドは三度、カードを引き抜いた。

そしてそれをディレイドライバーに挿し入れる。

《ファイナルフォームライドウ・ヒ・ヒビキ!》

抜刀の動作でスライドカバーを閉塞したディレイドは、今度は響鬼の方に向き直った。

『さて。おい響鬼。行くぞ。』

『……はい?』

上擦った声で聞き返した響鬼に、ディレイドは躊躇なくカレイドブレイドを振り降ろした。

『明日夢君危ない!?!』

『うひゃー!?!?!』

ディレイドの機能の発現の仕方を知らない威吹鬼が呼び名を間違えて絶叫し、完全に失念していた響鬼がその感覚に悲鳴を上げた。

宙に浮かび、迅速に回転し変形・変移してゆく響鬼の身体。

『ちが、違う!?!? 今のは聞き返したのであって』

『知らん。ちゃんと断ったぞ。』

巨大アカネタカがばたばたと喚くのを一蹴し、ディレイドはベルト側面に手を遣り威吹鬼に顔を向けた。

『俺と響鬼は先に行く。お前は後から来い。』

言うだけ言い置いて、ディレイドはスラップスイッチを叩いて加速

空間に突入していった。

同期しているアカネタカも追従して姿を消す。そこには、呆然と佇む威吹鬼一人が残された。

『ははははははは死ね死ね死ね死ねえ！』

『うおおおおおおお！』

群青の甲殻と漆黒の甲殻の殴り合いは未だに続いていた。

ワームといえど、ずっと加速し続けることはできない。クロックアップはあくまでも体内器官のひとつの作用であり、例えば人間が全力疾走を続けられないのに似ている。

互いに牽制し合いながら、互いの体力を見極めてクロックアップ・解除を繰り返し戦い続けている。

ワーム同士の戦いでは、いかにより早く加速空間に飛び込み、より長く加速していられるかが勝負の分かれ目になる。

相手より早く加速空間に入りたいが、タイミングによっては相手より早く加速空間で力尽きることになる。

その差は、僅かでもいい。

それをお互いに探りながら、今のところ二体は全く同時に動いていた。

カッシスワームは、加速中にも「フリーズ」を使うことができるが、それには若干の集中と規定の動作が必要な技。だがそれをさせまいと間断なくウカワームが攻撃を仕掛けてくるため発揮できずにいる。これは戦闘開始直後に一瞬早く加速空間に飛び込んだが斬鬼の勝ちであった。

それ以降は完全に互角の戦いとなっていた。

否。カッシスワームの足を止めることができていた。

『ハッハハ！分かってるんだろっ！あのモンスターを取り込んだこの俺は、もはやただの攻撃では殺せないぞ！いずれ消耗して貴様の死だ！』

『……………。』

言葉による牽制か、ノギレイジの哄笑に内心でほぞを噛むザ斬鬼。確かにこのままではジリ貧だ。

(いや、待てよ？異種族を取り込んだのは、ヤツだけではない！) あることに閃いたザ斬鬼は、通常空間中、次のタイミングでクロックアップすると、同様に同時にクロックアップしたカッシスワームに背を向けその方向に走り出した。

木陰で停止している、斬鬼に向かって。

(俺は「鬼」でもある！音撃ならばヤツを滅ぼせる！)

鬼の変身具は、各個人ごとにその音のチューニングが必要で、誰かの物を借りて変身することは不可能となっている。

だが、擬態元の斬鬼の物なら話は別だ。

一人ひとつしか持っていないためザ斬鬼は手ぶらだったが、今こそそれを借り受ける時だ。

そこにいる斬鬼の手首に手を伸ばした。

加速したのはザ斬鬼の方が僅かに速かった。攻撃を警戒したカッシスワームの追撃は遅れるはずだ。

そう思っていた。

だが、その直前で手が止まってしまった。

ザ斬鬼の身体ごと。

「……なに？」

突然前進が停止したのはなぜか。

ふと見下ろすと、胸から一本の群青の細長い棒が生え、それが地面に突き刺さり身体を縫い止めていたのだ。

「……焦ったな。」

「ば、ばかな……」

背後から聞こえる、カッシスワームの嘲りにザ斬鬼はかすれた声で呻いた。

「……はっ!？」

変態したワーム成体をザ斬鬼に任せて木陰に隠れてから、数瞬辺り

の気配が変化したのに気付いた斬鬼は、突然目の前に現れた光景に  
啞然とした。

突如、こちらに手を伸ばして突っ伏している人間態のザ斬鬼が現れ、  
その背中にステッキを突き刺して地面に縫い止めている例の黒コー  
トの男がその後ろにいたのだ。

「……なっ!?!」

クロツクアップ中にいつたいなにが起こったのか。

ザ斬鬼は諦めることなく斬鬼に向かって何かを求め手を伸ばしてい  
る。

「……かつ、そ、その、おんっ、かを……」

「小賢しいんだよこの下等がつ!」

「っがああああああ!?!」

男が怨嗟と共にステッキを捻り上げた。

「ザ斬鬼い!?!」

斬鬼は怒号をあげて男に襲いかかった。

だが男はろくに見向きもせず振り下ろされてきた音撃真弦の腹を  
片手で叩いて逸らすと同じ拳で斬鬼の手首を打ち砕いた。

「ッゲオオオツ!?!」

砕かれた前腕の甲殻をおさえ倒れ込む斬鬼。

その時、ようやくザ斬鬼の意図を察した斬鬼は激痛の中で外した音  
枷をザ斬鬼の手元へ放り投げた。

「使えっ!」

「バカか!?!」

突き刺したステッキを軸に跳躍した男の足がその音枷を蹴り払った。  
ザ斬鬼の苦鳴が漏れる。

「つくづく小賢しい!もう一瞬で死ね!」

「ザ斬鬼い!」

そして男がその身を揺らめかせ、二周りも体積を膨張させると凶々  
しい群青色のワームの正体を現した。

ステッキも擬態を解いて腕から伸びる長大な鉤爪となったそれを引

き抜き振り上げて。

その瞬間 群青の異形の姿が消し飛び、代わって同じ場所に見知らぬ黒いボディアーマーを纏った何者かと巨大アカネタカが出現していた。

『……行くぞ響鬼。クロツクアップ。』

その声がデイレイドのものであると気付いた瞬間には、それは再び姿を消していた。

突然の攻撃に吹き飛ばされつつも、カツシスワームは冷静にクロツクアップし身を回転させて着地した。

そこに駆け寄って来る見たこともない黒いマスクドライダーと機械鳥を睨み、カツシスワームは怒号をあげた。

『ゼクトが今頃いったい何の用だ！』

『貴様を倒しに来た。』

淡々と冷静に言い返したデイレイドは、ワームに駆け寄りながらカードを引き抜きデイレイドライバーに挿し入れた。

《フォームライドウ・ファイズ・アクセル！》

認証の音声が告げると、胸郭が分離して僅かに浮き上がり、両肩を基点に回転すると、再び装着される。

続いて体表面を走る血管のような赤のフォトンストリームが迅速にシルバーに変色し、顔面の巨大な真円のセンサーが黄色から赤に変わった。

胸郭の内部構造を露出した、これが仮面ライダー ファイズの超加速モード「アクセルフォーム」。

『ハッ！それがどうした！有象無象はこの一瞬で全て真っ平らになるがいい！』

叫ぶカツシスワームが右手を振りかざした。その右手が握り込まれながら迅速に下げられてゆく。

デイレイドは左手首に装着されていたリストウォッチ型のツールに手を伸ばし、その表面のボタンを押し込んだ。



《スタートアップ。》

システムが認証を告げた瞬間、ディレイドと響鬼以外の全てが停止していた世界の中、目前のカッシスワームまでもが右肘を下げきりながらその身動きをゆっくりと止めた。

「フリーズ」を、越えた。

「仮面ライダー カブト」のクロックアップ機能によって数千倍の加速状態になった中で、さらに「仮面ライダー ファイズ・アクセルフォーム」の超加速モードが一千倍の加速を加えたのだ。もはや何者も彼らには追いつけない。

これが透と瞳子の二人で編み出したディレイド・スクエアフォームの威力。二種のカメンライドを同時施行し、ふたつを掛け合わせて二乗スクエアの力を発揮する。

《ファイナルアタックライドウ・ヒ・ヒビキ！》

最後のカードを挿し入れ、飛びながら巨大音撃鼓に変形した響鬼はその勢いのままカッシスワームの身体に飛び込んだ。

その勢いだけでカッシスワームの腕や足がゆっくりと引き千切れてゆく。

『はあああああ！』

続いて飛び込んだディレイドが、展開された三つ巴の光陣にカレイドブレイドの横面を思いつ切り叩き込んだ。

最早どの威力が功を奏したのか分からない程の攻撃を喰らい、カッシスワームは緑色の炎を撒き散らして迅速に爆発消滅した。

「別の世界に魔化魍が現れた。俺に代わってそれを始末してもらいたい。」

「ふん。」

「ほお。」

「ええと……」

先刻の小川のほとり、斬鬼が用意したテントの前で、ディレイドの説明に斬鬼・威吹鬼・明日夢の三人が、めいめい曖昧に相槌を打つ。

瞳子とザ斬鬼は、どちらともない位置に立ってその様子を見ていた。  
「……ふん。やっぱり俺はしばらく死んでないと駄目みたいだな。」  
やがて斬鬼がぼやくように言った。

頭を掻くその手首の骨折は既に自力で治癒している。

「結局ザ斬鬼には逃げたワームを追跡してもらわねばならんし、むしろ俺もこのまま出かけたほうが都合がいい。」

言って立ち上がる斬鬼に、威吹鬼が歩み寄った。

「でも、弦だけでは相手によっては困難な場合があります。ここは僕も協力しましょう。」

「威吹鬼さん!？」

「威吹鬼名誉師範!？」

明日夢と瞳子の叫びが重なった。

「既に師範はいますし、もうそろそろ僕がいなくても大丈夫にならなくては。良い機会ですよ。」

言ってにっこり笑む威吹鬼。

「あ、あの、なら、僕も!」

「馬鹿者。」

慌てて進み出た明日夢に斬鬼から叱責が飛んだ。

「ひとりしかいない鼓の鬼がいなくなっただろう。お前はまだ、自分の世界で己を磨く時期だ。」

「そうですね。僕たちは、引退して自由の身だからできることです。」

「…………わかりました。」

うつむいて、唇を噛む明日夢。

「なら、俺はそろそろ行こう。」

言って、ザ斬鬼が山の奥の方を目指して歩き出した。

結局、胸板を貫かれたことは致命傷にはならなかったらしい。

「響鬼。連絡はこまめに送る。対応を頼むぞ。」

「はい!」

「なら透。俺たちを連れて行け。」

「いいだろう。ついて来い。」

斬鬼の申し出にうなずいて、透も振り向いて歩いてゆく。

「斬鬼さん！威吹鬼さん！」

その後ろ姿に明日夢が声をかけた。

「お気をつけて！」

言って、頭を深々と下げた。

「おう。」

「ええ。あとをしばらく頼みます。瞳子さんも。」

「はい！」

そうして、彼らは河原から各々の方向へ歩み去って行った。

坂口 拓さんもといカツシスワームの変異体がうっかり強過ぎたので、デイレイドの新フォームの登場となりました。

「ファイズアクセルとカブト合体させたら無敵じゃん」とか思ったあなた。

作者は「御都合主義」と「演出」のガイアメモリを持つダブルです。……まあなにか屁理屈を考えてみましょう。できなかつた時は、前述のドーパントが暴れたんですきつと。

ちなみにデイレイドのフォームチェンジのシーケンスは、デイケイドのオープニング映像からインスピレーションを受けまして。ほら。あのカット。

それから、これはいずれ本編でも語られると思いますが、もうお気付きの方も多いと思いますが「アンデッド」すら破壊するデイケイド・デイエンドを作者の中では「全宇宙属性」とするのに対し、そのスペックダウン機であるデイレイドは「無属性」となっています。これがカメンライドを多用する理由で、さもないと透の性格では龍騎とカブトのカードだけ握り締めてジェノサイド、で物語が終わってしまうでしょう。そんなん書いてて楽しない。

キヤッスルドラ内。

玉座の間とは別の執務室に現在、多元宇宙の危機について「真に事情を知る者」のみが全員集まっていた。

デスクの椅子に着いているキングたる渡を始めとして、キングの側近である狼の生態相を持つガルル、魚人型のバツシャー、剛腕の巨人めいたドツガの三人。

そしてソファに腰掛ける、この場で唯一の人間、包帯に包まれた右腕を白布で吊った神楽見 瞳子。

皆一様に沈黙し、沈鬱とまではいかないが、困惑に疲れた様子であった。

そこに、突然ノックもなしにドアがいきなり開けられて全員の視線がそちらに殺到した。

おおかた瞳子の予想通り、ドアの隙間から断りもなくひよっこり現れたのは透であったが、瞬時にある事に思い至った瞳子は慌ててソファを蹴って立ち上がった。

「透！？ ダメ……」

だが、一步遅かった。

その透のあとから二人の男が続けて入室してきた途端、室内にとてつもない緊張感が迸り、その気配を受け、と言うよりも目前の光景を目にした途端、透が連れてきた男二人が驚愕の表情で各々武器を抜き放ち、そしてまたそれを見て側近の三人が戦闘態勢で身構えた。一瞬で一触即発の空気に塗り潰された執務室の中、瞳子はど真ん中に立ちただかつて大声を張り上げた。

「はい、すーとーっぷ！」

無事な左腕を振り上げた瞳子に、室内の空気が停止する。

一切を無視してソファに座ろうと近寄ってきた透を除いて。

「……お願い透。無視しないで。」

その透の上腕を掴んで瞳子が悲壮な顔で懇願した。

「なんだ。なにか問題が？」

「その台詞は是非そこで凍っている二人に言っただけであげてください。」  
「む？」

透が振り向くと、ドアの所で武器を構え硬直している斬鬼と威吹鬼の姿があった。

「どうした。ここに対抗すべき敵はいないぞ。」

「透！敵がいるならいるとあらかじめ言え！」

「瞳子くん！こっちへ来るんだ！」

「……………」

未だ状況を理解しない二人に頭を抱える瞳子。

片やファンガイアの側近三人組も泡を喰っている様子だった。

「ねえねえガルル。なんであそこにもう一人いるわけ？」

「おい貴様！？ 貴様もマカモーに通じているのではあるまいな！？」

「そんなワケないだろう！？」

バツシャーとドツガに詰め寄られ困惑するガルル。

「ええと。……………もう。どうしよ。」

「どうした瞳子。表層の意識が乱れているぞ。」

「ええもう。どこかの唐変木さんのせいで状況が片付かないものですから！」

いつの間にかソファに腰掛けた透の隣に、思考を放棄した瞳子も腰を落とした。

同じ顔の男が、テーブル越しに顔を見合わせていた。

放埒な髪型に敵めしい顔の斬鬼と、七三分けで髪をべったりと撫でつけて黒縁メガネをかけた背広姿の、ガルルの人間態である。

「……………名付けるなら、「ザザ斬鬼」か？」

「は？」

ガルルが怪訝に訊き返す。

驚くべきことに、ガルルの人間態は、斬鬼とまったく同じ顔だったのだ。

それが側近組の困惑の原因だった。

「では、彼らは魔化魍でもワームでもないんですね？」

「ええ。」

ようやく話を聞く気になった威吹鬼に説明を終え、瞳子もようやく落ち着いた。

「だから、ガルルさんはただの偶然のそっくりさんです。」

現在、向かい合わせのソファには、話しやすくするために人間態に変化した側近三人組と、透・威吹鬼・斬鬼がそれぞれ座り、渡の向かいの位置、テーブルの出入り口側の端に別の椅子を持ってきた瞳子が腰掛けていた。

「しかし、いや、本当に異世界なんですねここは。人間と、異形の……失礼、異種族同士が共存して暮らしているとは……」

威吹鬼が、困惑の中で言葉を選びながら感嘆する。

「……しかしだ、元はと言えば貴様だ透！」

「なんのことだ？」

斬鬼の追求に透が心底不思議そうに訊き返した。

「こういう世界だとあらかじめ言っておけば、危つく一触即発になることもなかっただろうが！」

「脅威は魔化魍だけだと言ったが？」

「まさか異種族が一緒にお茶飲んでる世界だとまでは想像もつきませんよ。」

威吹鬼も溜め息混じりにぼやいて頭を搔く。

「ふむ。それはお前たちの認識が甘いせいだな。以後予測の可能性を拡張すると良いぞ。」

「……おい小娘。こいつを外で叩き直してきていいか？」

「いいえ私が先です。」

「気持ちは痛いほど分かりますけど、どうかその怒りは魔化魍にぶつけてあげてくださいー!？」

とうとう透の両袖を掴んで立ち上がった斬鬼と威吹鬼に瞳子が必死になつて宥めかける。

「アツハハハハ……」

そこに、堪えきれなくなつた笑い声が聞こえ一同の動きが止まつた。渡が、口元を押さえながら目に涙を浮かべて笑つていたのだ。

「……はあ、先生と「葬儀屋」の言つてた通りの人ですね透さんは！」

「キング……」

心底おかしそうに笑う渡に、瞳子も緊張を解いて座り直した。

「あなた方がマカモー退治の専門家ですね？ 僕はこのファンガイア族の長、「キング」こと紅石くわいし・わたる渡です。僕たちはあなた方を歓迎します。」

子供らしい柔らかい笑顔で告げる渡に、斬鬼も威吹鬼も居住まいを正して座り直した。

子供らしくはあるが、そこには一族の長としての誇りを根底に敷いた風格があつたことを二人は見抜いたからだ。

「なるほど。失礼をした。俺は音撃道斬鬼流、斬鬼。」

「同じく、音撃道威吹鬼流、威吹鬼です。先ほどは大変な失礼を致しました。深くお詫び申し上げます。」

威吹鬼に合わせて頭を下げる二人に、渡は掌をかざして遠慮した。

「いいえ。頭を上げてください。異種族同士が分かり合うことを目的に僕たちは活動してますから、なんと云うか、気持ちは分かりますから。」

「……貴様も見習え透。」

「なんのことだ？」

変わらぬ返事に、同時に黒い顔をした斬鬼と威吹鬼が立ち上がり、瞳子が慌てて中腰で手を振つて宥めた。

「もう、話が進みませんから、透のことは無視しましょう！？ ねっ！？」

渡の仮借ない笑い声が再び室内に響いた。



石造りの地下牢、といった風情の一角に、執務室にいた一同全員がやって来た。

あくまでも「といった風情」と言うのは、ここが近代ビルの上階に合体しているキャッスルドランの内部だからであり、キャッスルドラン内部は基本的にゴシック建築風味なため、窓がないそこは「地下牢」と呼ぶのが最も似合う。

キャッスルドランの中では最下層ではあるため、正しくも「地下牢」ではあるのだが。

「ややこしいわ。」

「しかし、不思議な建築ですね。」

斬鬼と威吹鬼が、めいめいに感想をぼやく。

「こちらです。」

ガルルが丁寧一同を誘導する。

放埒な斬鬼の顔で懇切丁寧に対応するのが余程おかしい瞳子は、さつきから含み笑いが隠しきれておらず、斬鬼もむずがゆい様子である。

そこに、どこからか楽器の演奏が聞こえてきた。

それは奥に進むほどに音量を増し、やがて開かれた扉の向こうに、その一種異様な光景と共にその正体を現した。

「……これは!?!」

斬鬼と威吹鬼、そして瞳子が息を飲んだ。

広大なフロアの中は、等間隔に設えられたいくつものガラスの小部屋に、それぞれ一体ずつ人影が捕らえられており、そのフロアの奥で十数名のファンガイアの楽団が楽器を演奏しており、その音色に合わせるようにガラスの中の何者かが悶え苦しんでいたのだ。

「これまでの間に捕獲した、人間型マカモーです。」

「……違う」

ガルルの説明に、斬鬼が震える声で訂正した。

「こいつらは「童子」と「姫」！魔化魍を発生させ、育てる役割の、

人の姿をした異形だ！」

「しかも、これほどの数を殺さずに捕獲できるとは……!?!」

威吹鬼も、青い顔を隠さず驚愕に震えている。

「違うよ。倒せないんだよ。」

「そうだ。我らにはその「オンゲキ」がない故に。」

子供みたいなナリのバツシャーと、礼服を筋肉ではんぱんにしたドツガが応えた。

「成る程な。俺たちの世界と同様に、自分たちにはどうしようもない敵か。……透が俺たちを連れて行きたがるワケだ。」

「確かに。僕たちがなんとかしてあげなくてはなりませんね。」

音撃戦士のふたりが納得した様子で呻く。

「そこで、さつき初めてお目にかかった時に我々があなた方を警戒した理由です。」

「どういうことだ？」

渡の台詞に斬鬼が訊き返す。

「実は、つい先日から我々ファンガイアのナンバー3、僕こと「キング」、そして「クイーン」に続く「ビショップ」の役割に就く者が行方不明になっていまして。」

渡が、話しながらガラスの檻のひとつに近づく。

「……その「ビショップ」の人間態が、この男に瓜二つなんです。言って、生演奏に苦しみ悶える「童子」を示して見せた。」

「我々を裏切ったのかと捕まえてみれば、ご覧の通り何人も湧いて出てきて。「ビショップ」当人でないことは、もう確認したんですが、奇妙な偶然もあつたものだ……」

「先ほどは失礼致しました。」

「ああ、いや……」

同じ顔のガルルに丁寧に頭を下げられバツの悪そうな顔をする斬鬼。「さて。じゃあ、ここにいる「童子」と「姫」は、僕たちが始末していいかな？」

言って自らの武器を取り出した威吹鬼に、渡は首を振って応えた。

「いいえ。ここに捕らえたマカモーたちは、全てファンガイアのライフエナジーに変換します。どうせ倒す存在なら、こちらで料理してもいいですよね？」

「へ？」

渡の言ったことが理解できず威吹鬼が目を丸くする。

「威吹鬼さん。ファンガイアは、ご飯の代わりに他の生物の「生命力」みたいなエネルギーを吸って生きています。」

そこに、瞳子が解説を加えた。

「今この世界では、ファンガイアが一番効率的な搾取源である人間に手を出さないための方法を一生懸命考えているんです。どうか、分かってあげてもらえませんか？」

「瞳子くん……」

「成程。共存も一筋縄ではいかないか。」

斬鬼も威吹鬼も、この世界が抱える問題に見当が付きつつあるようだった。

「いいだろう。俺たちの役割は、この世界に暮らす者に危害を及ぼす魔化魍の駆除だな？」

「こんなには捕獲できる強い方がおられるなら、こちらも心強いですよ。」

斬鬼と威吹鬼が意気を上げる。

「分かってもらえてありがたいです。」

渡が、安堵の笑みを浮かべて応えた。

「ふむ。なら、あとは頼んだ。俺は次の世界に行かねばならん。」  
その様子を見た透は、そう言うときささと出入り口へと歩いていつてしまった。

「いや待て貴様。やっぱり何か色々納得いかんぞ」

「せめて何かひとことないんですか!？」

「あつ!？ ああつ!？ 何かあつたら私から透にいつでも連絡できますから!？」

そそくさと立ち去ってゆく透に追いつがる斬鬼と威吹鬼を必死で宥

める瞳子たちの姿を見て、渡が実に楽しそうに笑い声をあげていた。

t r a c k ・ 2 4 キバの世界（後書き）

ああだがしかし。こうして勝手に異世界人同士を仲良くさせていると、「ライダー大戦の世界」がますます切なくなってくる。拳句サガひとりで白星ふたつ。合掌。

track・25 カブトの世界(前書き)

当分の「カブトの世界」におきましては、拙作「クリサリス・エマ  
ージユ 仮面ライダー カブト 外伝(N5449B)」の登場人  
物が、原作ディケイドの「九つの世界」と同様に設定を変えて登場  
致します。

まずは是非 拙作「クリサリス・エマージユ 仮面ライダー カブ  
ト 外伝(N5449B)」の方からお読み頂けると、当話をより  
お楽しみ頂けるかと思えます。  
よろしければ、是非どうぞ。

「いつてきまーす!」

ビルの玄関を蹴って少女が元気良く飛び出してきた。

サンバイザーにサングラス、腹が露出したミニのタンクトップにシヨートパンツという陽光に輝く健康美、その上からカラフルなスポーツロゴがプリントされたジャケットを羽織った活動的なファッションの神楽見 瞳子はここ、『Washiジャーナル』と看板を掲げた情報雑誌社の新米記者であった。ネックストラップで提げられたデジタルカメラをジャケットのポケットに押し込みながらビルの裏手に回り込む。

その駐車場に停めてある自分のスクーターのトランクにカバンを放り込んだところで、反対側の物陰から長身の男がひょっこりと現れた。

「あ。透!」

「うむ。瞳子。」

応えて歩み寄ってくる透に瞳子は駆け寄った。

「丁度良かった!バイク貸したげるから運転してよ!」

「ほう。」

「おい瞳子。」

ところがその時、瞳子の背後からも透の声が聞こえてきた。

「へ!?!」

振り向いてみれば、この駐車場の入り口に立つもう一人の透の姿があった。

「え?ええ!?!」

「瞳子。なにをしている。こちらへ来」

爆発。

台詞の途中で「後から来た透」が突然緑色の爆炎を撒き散らして消滅してしまっただ。

慌てて背後の透を振り向いてから見返した時にはくすぶる炎が消え去るところで、瞳子はいきなりの展開に目を白黒させている。

「……な、なに今の？」

「ああ。ワームだったようだな。」

何事もなかったかのように告げる透に瞳子は聞き返した。

「いや、だとしてなんで出てくるなり爆発して消えちゃうワケ！？」

訳分かんないんだけど！？」

「オーバーフローだな。この俺を複写するとは、ナンセンスな奴だ。」

「……おおばあふるお？ なにそれ。何がナンセンスなの？」

問われた透は、しばし黙考し瞳子の記憶から説明に適切な語彙を探索し引き出した。

「ただの人間に擬態するならともかく、俺を複写するとはつまり、ファミコンで円周率演算をするようなものだ。」

「……ふあみ？ なにそれ」  
だがその単語は、記憶にあるのみで意味はいまいち通じなかったようだ。

「……3.5インチフロッピーディスクは知っているな？ 言わばフロッピーディスクでオンラインRPGをプレイしようとするようなものだ。」

「ああ。ってあたしらは1メガバイトかいっ！？」

と例えをようやく理解した瞳子が透の脇腹に掌を甲からぶつけるが「いや。だから最初の例え通り8ビットがせいぜいだろ。」

「良く分かんないけど、なおさらゴミくない！？」

「違う。俺という存在の情報量が桁外れに巨大なのだ。決して人間が矮小ということではない。」

「言ってることが同じだー！」

すぱんすぱんと水平にした掌でチョップを繰り返すが、やはり透には一切効いた様子がない。

「まあいいや。透、アレ貸したげるから運転して。」



「いいだろう。」  
「やがてけるつとスクーターを指さした瞳子に応え、透はディレイド  
ライバーを抜き出した。」

七年前。関東地方に集中して短い期間に数個の隕石が落下した時期  
があった。

それらは山奥や海に落下し、隕石の激突による人間と生活への直接  
的な被害はなかったと言う。

その時は、世界各地で見受けられる隕石落下と同様の自然現象の一  
例に過ぎないという程度の認識だった。

だが、その時期のそれらの隕石だけは実は別物であった。

その時から現れ出した異常。もう一人の自分や複数の同一人物の目  
撃例。あるいは性格の豹変。神隠し事件等も増大した。

それらは全て、かの隕石を箱船として取り付き地球にやって来た卵  
から孵った宇宙生命体・ワームの所行だったのだ。

「……で、ワームが何者かっていう詳しいトコロは、威吹鬼さんか  
ら聞いたが斬鬼さんの例であたしも初めて知ったところだけだ。」

「ふむ。なるほどな。」

あれから瞳子のナビゲーションで二人がやって来たここは、下町情  
緒溢れる町並みの中に佇む実に味のあるのれんが掛かった店の前。

「天堂屋」と銘打たれた食事処の玄関を引き開け瞳子は堂々と入っ  
ていった。

「はいらっしやい。」

同時に、大きいわけではないが張りのある女性の声が出迎える。

「おでん二人前ちよーだい！」

「はいよ！」

闊達そうな老婆が返事をする。

客のまばらな店内の、あいているテーブルの椅子にとっとと腰掛け  
る瞳子と、その隣に続く透。

「へへ。この時間ここで軽く腹ごしらえしてから出かけるのがあたしの楽しみなの。あ、いらぬなら別にいいから。あたしが食べるし。」

「……俺の分だったのか。」

「あなたのお腹ってどーなってるワケ？」

引き抜いたサングラスをバイザーの上に差し直した瞳子は呆れた顔で透を見上げた。

「てゆうか、いいの？あたしについて来てて。今度はどっか目的地とかないワケ？」

「問題ない。ここが俺の目的地だ。」

透の言葉を聞いた瞬間 瞳子が椅子からずり落ちかけた。

「……なんだよー。なんか今回はあたしのペースかなーって思ってたのにー。」

「はい、おまちどお！」

そこへ、ふたつの井を乗せた盆を持った老婆がやって来た。

「待ってる時間が楽しかった、って思える美味いおでんのお出ましだよ。味わって食っとくれ！」

にやり、と粹に笑んだ老婆が自信たっぷりなげ、どうぞと掌を振って立ち去ってゆく。

「……相変わらずスゴいわ。……透の用事って、あのおばあちゃんに？」

「いや。」

何やら「おばあちゃん語録」と記されたメモにいそいそと書き込みながら問う瞳子に透は素っ気なく返した。

「あそこの娘、ワームだな。」

ぶっ！？

がんもにかぶりつきかけた瞳子が吹き出した。

あそこの娘とは、カウンターの奥にいる店員の少女に他ならぬだろ。

おかつぱのような髪型に朴訥な顔立ちの、ごく普通の少女にしか見

えない。

「あんだ十二言ってるの!？」

「九つの世界のお前全てが仮面ライダーと「異変」の近くにいるということは最初に話しただろう。そのお前が足繁く通うこの店がその要因に近いという可能性は高い。だからここに来た。そして事実その通りだった。」

したり顔ですらすらと説明する透の顔を、バイザーの位置を直しながら瞳子は睨み上げた。

「あんだね……」

「ごちそうさま。美味かった。」

「当たり前だよ」

その時、カウンター席にしていた男が相変わらずな老婆の返事にうなずき小銭を置いて立ち上がった。

その男は異様に身体がでかかった。身長は二メートルを軽く越えるだろう。そしてそれに見合う隆々とした筋肉に包まれており、脚はおろか、その太い腕は瞳子の腰周りくらいはありそうだった。

その大男は瞳子が呆然と見上げる前をのしと通過し、しかしその椅子を引くと透の目の前に断りもなくどかりと座り込んだ。

「……へ？」

「貴様。ディレイドだな？」

「ああ。」

人懐っこい柔らかな笑みを浮かべた岩塊のような敵つい顔面が当たり前のように告げ、透も普通に返事をした。

「ちよつ、透!？」

瞳子は慌てて立ち上がった。

初めての現象だ。透が現地の人間から「ディレイド」という正体を突き付けられるのは。

だと言うのに当人たちには一切の危機感も緊迫感もない。

ただ一人慌てた自分が馬鹿みただと瞳子は理不尽に混乱していた。「うむ。貴様を待っていた。ここに来ることは分かっていたからな。

「そうか。」

さらにその男は透の行動を予見したなどと言う驚くべき事を告げた。だが相変わらず当人たち自身にはその緊張感が欠落している。

「おお。わたしの名を名乗っておこう。」

唐突に言つて、男は人差し指を天に向けてかざした。

「わたしは「ちゃぶ台のある場で和む馬」、台場だいは・かすま和馬だ。」

「……なにその意味分からない前文句は。」

「気にするな。さてデイレイド。これはいらなんだな？」

「ああ。」

瞳子の追求を一蹴した男・台場 和馬は無造作に透の前の井を掴むと片手で引き抜いた箸を割り、さつさと食べ始めた。

「ちよつと、あんた!？」

「ふむ。これを味わえんとはもつたいなデイレイド?」

「問題ない。」

相変わらず無視され続ける瞳子は諦めて座り込んだ。

さつきから、まるで透が二人に増えたようだ。ワームとは別の意味で。

「あーもー。なんなのこいつら」

「うむ。ごちそうさまだ。さてデイレイド。話があるからついて来てくれ。」

「いいだろう。」

瞳子が応える暇もなく二人前の小銭がそこに置かれ、立ち上がった大男はさつさと玄関に向かって行った。

「お前も来い。」

「うわあなんだあ!？」

そして、店の玄関を開くと同時にそこにいた、店に入ろうとしていた若い男の襟首を掴んだ台場 和馬は、その男も連れて店を出てしまった。

透も、それに続いて出ていってしまう。

「……もういや。」  
ついに沈没した瞳子が立ち上げられるようになるまで、それから少し時間が掛かった。

「あれ。各務じゃん。」

「あれ？瞳子ちゃん？なにこの人たち！？ 知り合い！？」

天堂屋のすぐ近くの神社の境内で、店を出る時に台場が連れ去った男と顔を見合わせる瞳子。

「片方はね。そっちのでっかいのは知らないけど。」

男の名は各務<sup>かがみ・あらた</sup>新。やはりあのおでん屋「天堂屋」の常連客の一人で、同様に足繁く通う瞳子とは顔馴染みの人間であった。

とは言え食事時間の間だけおしゃべりするような間柄で、お互いの名前以外は詳しくは知らない。

「てか、残念だったねー。看板娘に会えなくて。」

だが、瞳子は各務が店に通う理由を知っている。

一目惚れしたあの店員の娘に会うためだということ。

「ホントあんまりだよ。なあ、なんなんだよあんたら！？」

言って、各務がそこにいる透と台場に向かって抗議した。

「各務 新。ゼクトのマスクドライバーシステム「ガタック」の適合資格者、だな。」

「……！？」

台場の、実にあっさりした指摘に、各務の身動きが一瞬だけ止まる。挙動不審にそわそわし、目がせわしなく動き、身体全体で狼狽を表す。

「……な、なんの、こと、だよ」

「各務。ぜんっぜん誤魔化せてない。」

瞳子を目を覆った。

この男は隠し事が全くできない。瞳子も良く知っている。

「安心しろ。ここには関係者しかいない。」

台場が続けて言う。上着の裾をはだけて腰に巻かれた機械じみたべ

ルトを示し。

「わたしはマスクドライダーシステム「クライプ」の資格者だ。そしてこっちはデイケイド・門矢 士と同種の存在、デイレイドこと神楽見 透。そしてそちらのお嬢さんはデイレイドの助手だそうだ。」

「へ！？ そうなの！？」

「んー。まあ話すと長くなるから。だいたいそんな感じ。でも、そっちの人の言ってることは あたしも良く分かんないんだけど」  
台場の説明を受け、仰天する各務に瞳子は面倒くさげに答えた。

「あれ？じゃあ瞳子ちゃんて、異世界の人！？」

「なにそれ。あたしは「この世界での手伝い」だつてば」

「さて。デイレイド。今のこの世界には腕利きのライダーが大勢いるが、まずは二人用意した。貴様はライダーに用があるのだろうか？」

「うむ。」

相変わらずにこにこと柔らかな笑みで話す台場に、透は鷹揚に応えた。  
「別の世界にワームが現れた。俺に代わってそれを始末してもらいたい。」

「うむ。よかるう。」

「いやちよつと何を勝手に！？ 詳しく説明してくれよ！？」

「だがデイレイド。その前に、この世界に起きている新たな異常を解決するために力を貸してくれ。」

「あれ？聞こえなかつたかな？もしもーし？」

「いいだろう。その異常について詳しく説明しろ。」

「いいかげんにせんかーい！」

「うわあっ！？」

とうとうブチ切れた瞳子のタツクルに突き飛ばされた各務のみつともない体当たりを受けて透が吹き飛んだ。

遠くで透と各務が積み重なって倒れている。

「あーもー！？ なんでこんな唐変木が二人もいるワケ！？ 協力して欲しいならきちんと言明するくらい常識でしょう！？」

「うむ。この世界に、ワームではない異形の存在が現れてだな」

「あのー。俺を無視しないでもらえませんかー？」

遠くで積み重なっている各務が、弱々しく手を挙げて発言した。

「……あのさ。台場さんって言ったっけ？ あいつらに言っただけ聞か

せなきゃダメでしょさすがに」

「……おお。」

まるで今 透と各務の惨状に気付いたような顔をする台場に、瞳子もずぶずぶと境内の砂利に突っ伏していった。

「……もーイヤ。誰か助けて……」

track・25 カブトの世界(後書き)

と言うところの仮面ライダー クライプこと台場 和馬。作者としても実に久しぶりに彼のキャラクターを書き起こしましたが、書いて初めて透とまつたく同じ属性だということに気付く。うわこいつらだけだと止まんねえ!?

がんばれ瞳子と各務。



「まずは、わたしのことを説明しておこうか。」

台場 和馬が、改めて三人を前に語り出した。

「わたしはマスクドライバーシステム「クライプ」の適合資格者にして、クロックアップシステムの要、「観測者」だ。」

ワームのクロックアップに対抗するためには、人間側もクロックアップしなければならぬ。

その為のシステムの開発と同時に、「加速空間」の存在を解析し、加速空間への干渉の足がかりを用意しなくてはならない。

「クロックアップ装置さえあれば加速空間に突入できる」という、そんな簡単な話ではなかった。

まずは「加速空間」を認識し、その存在確率を確定しなくてはならなかったのだ。

「その為にはわたしは、存在をこの現実世界から乖離させられた。今のわたしは、ここにいて、ここにはいない。時の流れから若干はみ出した世界にいる。そこから「加速空間」を認識し、ライダーシステムのクロックアップのための足がかりとなっている。」

「例えて言えば、この世界を一冊の書籍だとするならば、この男は登場人物のひとりにして読者でもある。読者ならば、ゆっくり読むも、速く読むも自由自在だ。」

透の補足にうなずきながら台場が続ける。

「わたしは時の流れから乖離しているゆえ、過去と未来を全て視ることが出来る。書籍の例えで言うならば、読者たるわたしは、本のいかなるページからでも内容を見ることが出来る。ディレイドの行動を予見できたのもそれが理由だ。」

「へえ。」

瞳子がぼんやりと生返事した。

正直、瞳子には言っていることがよく分からなかったが。

「……つて、ちょっと待つてくれよ」

呆然と聞き流していた各務が、ようやく意識を帰還させたらしい。

「俺も初めて聞いたぞそんな話！？ もしそいつが事実なら、ゼクトの機密中の機密事項じゃないのか！？」

「うむ。」

台場はあっさりとうなずいた。

「だが、今この世界に起きている異常事態に対処するためには必要な情報だ。お前にも知っておいてもらいたい。」

「いや、だとしてあんたは本当に何者なんだよ！？ まさか「ネオゼクト」じゃないだろうな！？」

秘密組織「ゼクト」から、思想の違いにより離反した者たちが結成した「ネオゼクト」。

カウンタースイントウルダーとしての本分には違いはないのだが、この両者は互いをも敵と見なし、それぞれが開発したマスクドライバーを多数擁して小競り合いが続いている。

「ふむ。わたしの出自はゼクトだが、今となつてはあまり関係ないな。どちらにも。だがそれは後で話そう。まずはこの世界の異常についてだ。その異常に対処するために、ディレイドの力が不可欠なのだ。」

「……あのさ。」

そこに、ぼつりと瞳子が口を挟んだ。

「それなら、その厄介事も解決できるんじゃないの？ 未来が読めんなら解決方法も分かるってことでしょ？」

「それがこの世界の中でのことならな。」

台場 和馬曰く。

その異常現象は、この世界のものとは異なる物理法則によつてもたらされているらしい。少なくとも「加速空間」を含めた「時の流れ」から完全にはみ出した事象であるらしいのだ。

そして、その異常を引き起こしたのは、見たこともない怪生物の仕業。

「ゆえに、わたしもその怪生物が干渉した後の未来は読めん。だが、奴等も干渉してくるこの三次元中ならばこちらからも直接干渉できる。」

「……じゃあ、やつつけられるんじゃないの？」

ことさら眉間の皺を深くした瞳子が問うが、台場は笑顔でうなずいた。

「うむ。倒すことはできたのだ。なにしろ奴等はクロックアップを持たない。クロックアップしない存在など敵ではない。」

「……なら、いいんじゃないの？」

台場はゆるゆると頭を振る。

「奴等は、倒した後 復活するのだ。何度でも。これは脅威だ。対処はできる。一方的に倒すことも。だが、無限に復活されては解決できない。そして問題はこれだけではない。」

台場は今度は全員に向き直り、三人を視野に収めながら。

「今、この世界は世界の住人の気付かぬうちに三十回ほど上書きを繰り返している。」

「「は？」

瞳子と各務の素っ頓狂な声が重なった。

「ど、どういふことだよ」

僅かにその言葉に不吉なニュアンスを感じ取った各務が問い返す。

「この世界は実は、三十回ほど滅びているのだ。正確には、過去を破壊されて歴史を消去されている。この「現在」が、何度も「なかったこと」にされているのだ。」

しばし、静寂が辺りを包む。

瞳子と各務の中で、情報が浸透するのを台場はじっと待った。

「……だとして、じゃあ今ここでこうしてるあたしらは、なんなの？」

どちらかと言うと眉唾な話にケチを付けるような顔で瞳子が聞き返した。

「うむ。この世界は、破壊される度にその都度復元されているのだ。」

カブトによって。」

「カブト!?」

再び瞳子と各務の声が重なった。

「カブトって、クロックアップの暴走とかで、あちこちで事件を起こしてるアレ!?」

「いや待った瞳子ちゃん!そいつはゼクトの反逆者がばら撒いた嘘の情報だ!実際にはワームしか攻撃してないって今のゼクトも把握してる!……で、なんでそのカブトが世界を救えるんだ!？」

「うむ。現在のカブトはクロックアップシステムを暴走させて現実世界に帰還できないでいる。そしてその暴走は、一年後にロールアウトする「ハイパーゼクター」を未来から喚び寄せさらに悪化している。」

「……いやだからそれ機密事項……」

「黙れ。ハイパーゼクターまで暴走したシステムに取り込んだカブトはさらなる加速に見舞われ、システムが装着者の運命に干渉して輪廻のループに突入し、現在三十回ほど人生を繰り返している。」

「はあ!? ……え、三十回って、」  
同じことに思い至ったのか、各務に続き瞳子も驚愕の表情で固まっている。

「そうだ。奴は、自分の人生を差し出すことで過去の破壊から歴史を守り世界を復元させ続けている。」

「……………」  
「……もしも言う通りなら、カブトは孤軍奮闘などという言葉すら生易しい孤独な戦いにさらされていることになる。」

「各務。実は、元々の歴史には「ネオゼクト」は存在していなかった。マスクドライバーシステムも、これほどの数は生まれていなかった。これらは全て、カブトが繰り返した歴史から漂着してきた異歴史の産物なのだ。」

「そんな……………」

薄ら寒さに僅かに身震いする各務。

世界の根幹を揺るがす一大事である。

「カプトシSTEMの暴走を停止させる方法はまだ見当が付かんが、このまま奴にだけ人生を浪費させるのも忍びない。ハイパーゼクタの異常干渉も、その怪生物の存在と歴史への干渉が無関係とも思えん。どちらが先だったのかも、詳しくは分からん。だから、まずはその怪生物を片づける。そこでデイレイド。その怪生物に心当たりはあるか？」

「うむ。」  
「うむるるる〜。」

「えっと、ちよつと待った！」

そこに、腹をおさえて顔をしかめた各務の声が割り込んだ。

「ちよつと一旦待つてくれよ!? 大変なのは分かったけど、こっちは飯食う直前に拉致されて腹減ったままなんだ!？」

かように空腹の怒りを炸裂させた各務。新は今、三人から離れて一人、近くのコンビニでパン棚を物色していた。

「天堂屋」に連敗しているため、ここのコンビニではおでんを取り扱うのをやめたと言う。恐るべしおばあちゃん、と新は思う。

「各務！」

それはさて置きパンを選んでいると、あの二人と待つているはずの瞳子がコンビニに入ってきた。

「なんだい瞳子ちゃん。あの二人に急かされたかい？」

だとしたら冗談じゃない。世界の危機は聞き捨てならないが、救う本人も腹が減るのだ。

だが瞳子はサンバイザーのツバを後ろに回しながらいつもの飄々としたペースで歩いてくる。

「あのさ各務」

「ん?.....うい!？」

会話の間合いをあっさり踏み越えていきなり首筋に抱きついてきた

瞳子の行動に仰天する。

「ちよちよちよつと、瞳子ちゃん!？」

「……あなたの願い、叶えてあげよつか。」

抱きつく腕は緩めぬまま間近で蠱惑的に笑む瞳子と、かかる吐息に新は混乱していた。

「へ?え?なに?ちよつ」

「あの娘と仲良くなりたいたいでしょ? あたしが一肌脱いであげよつかって言うてんの。」

瞳子の言う「あの娘」が「天堂屋」の看板娘・天堂 真優まゆのことを指しているのは言わずもがな。

「え?いや、そりやありがたいけどなんでいきなりこんな」

一肌脱ぐ、の言葉でそういや瞳子のファッションは露出が多いなど気付き、一気に顔が熱くなる。

さらにはコンビニの棚は総じて低く視界が拓けている。店員と他の客の目を気にして新が焦りまくっている。

「……あなたの願い、聞いたよ。」

にこつ、と艶っぽく微笑むと抱擁を解放し、瞳子はととつと軽い歩調でコンビニを出ていった。

「……な、なんだっただ……」

やがていたたまれない空気の中からようやくパンを買って脱出した新は、インカムを耳に挿し直しながらせかせかと歩いていた。

「あーもう!? なんだ!? 瞳子ちゃんまであいつらの仲間入りか!？」

普段なら可愛いはずで済ませられようが、空腹状態の今では少々癪に障る。

照れ隠しも含めて大げさに憤慨しているそこへ、向こうから瞳子が再びやって来た。

「各務!」

「あーもー! だからちよつと待っててくれって」

まるでさっきのことがなかったかのように今度は普通のいつもの笑顔で近づいてくる瞳子に、若干八つ当たりぎみに言い返した。

「パンくらい歩きながらも食えるからさ」

「各務、あのさ」

パンの包みを破こうとしたところへ、またも瞳子が会話の間合いをあつさり踏み越えて肉迫してきたことに気付いた瞬間。

鈍い痛みと共に新の意識は深い闇に落ちた。

「……ダメ。コンビニにもいなかった。買い物して出ていったつてのは店員が見てたけど。」

なかなか戻ってこない各務の様子を見に行った瞳子が戻ってきた。

「どーこ行っちゃったんだか。なんか店員に変な顔されるし。」

「……むう。怪生物に干渉されたな。」

「へ？」

台場の確信を込めた呟きに瞳子が聞き返す。

「なんで分かんのか？」

「先ほども言った通り、わたしには未来が見える。正確には主観の基点を要するが、それは置いておこう。そして怪生物が干渉した未来は視えないとも言ったな。今、各務の行く先が視えない。すなわち、各務はその怪生物に接触したと言うことだ。」

「イマジンだな。」

唐突に透が告げた。

「その怪生物のことか。」

「うむ。イマジンは、遠い未来から一定距離ごとに過去へと跳び移り、過去を破壊して現在を消去しその歴史線の時間軸を奪う習性がある。そういう異世界の存在だ。」

「ふむ。なるほどな。まさに今起きている異常そのものだ。」

「なんなのそいつ!? そんなのどうやってやっつければいいっての!?!?」

台場によれば、その上いくら倒しても復活すると言っ。

「うむ。イメージ自体は未確定確率の塵の存在で、確定事項たる現実世界には完全には干渉できない。だが、人間とある契約を結び、その人間の記憶を抛り所とすることで疑似的に自身の存在確率を確定することができる。言わば「実体化」だ。この状態なら物理に干渉できるようになる、そしてこちらから破壊してやることも。」  
台場がうなづく。

「だが、その状態のイメージは、契約者の記憶を抛り所とした疑似的な実体。契約者の記憶がある限り何度でも実体化する。完全に滅ぼすには、契約者のイメージについての記憶を消去するか、さもなけば契約を履行させ、完全に実体化したところを叩くしかない。」  
「ふむ。ならば次にイメージを発見したなら、成り行きを監視しつつ追跡すればいいのだな？」

「いや。そもいかない。」  
台場の言葉に首を振る透。

「イメージが契約を完遂した時は、同時に過去に跳ぶ時でもある。イメージが過去に跳ぶ手段とは、契約者の過去への思い出を時間跳躍の道標とし、契約の履行によって契約者の精神を支配し、契約者自身をゲートにすることによって可能となる。そしてそれで時間跳躍できるのはイメージ本人のみだ。この世界に単独で過去へ跳べるライダーはいまい？」

「ハイパーゼクターを装備したカブトなら、あるいは可能だと思われるが、この現在の時間を守らねばならん現状では、カブトは身動きできない。」

「うむ。だから、まずは今活動しているイメージは俺が撃破する。その後、過去へ跳躍できる仮面ライダーを俺が連れてこよう。正確にはその仮面ライダーを擁するタイムマシンをな。」

「……あれ？」

その時、瞳子が振り向いた。

「いま、なんか聞こえなかった？がしゃーんとか凄い壊れる音。」

「うむ。」



「ああ。聞こえたな。」

「しれつと聞き流してんじゃない！ 事件かな？事故かな？」  
言いながら、ジャケットのポケットからデジタルカメラを引き抜いて神社の境内から飛び出してゆく瞳子。

「あああつ！？」

そして、道路に出るなりその方角を見て悲鳴をあげた。

「どうした。」

大股で歩いてきた台場が瞳子の背後からそちらを覗き込んだ。

「あ、あそこ！？」

瞳子が指さした先では、玄関を破壊された天堂屋から騒動の音が響いていた。

track・26 カブトの世界（後書き）

と、いう訳でクロックアップでもファイズアクセルでも対処できない敵の登場です。

あんな設定のため、なかなかカブト本人が出てこない。でも頑張ってますよー。

台場 和馬にもなんかトンデモ設定が振られてますが、こうでもないし透と瞳子はカブトとすれ違ってても出会えない。

あと、一回やったんで、前回ほどミステリ捻るのはやめました。だいたい何が起こったのかは、想像付きますね？

「はいらっしやい！」

天堂屋の玄関を開き、瞳子がすたすたと入ってきた。

「……あら？どうしました？忘れ物ですか？」

天堂屋の看板娘・天堂 真優が、その常連客の姿を認め、怪訝な顔で尋ねた。

なぜなら、彼女はついさつき、初めて連れてくる男の人とおでんを注文して出ていったばかりだったから。

「ん？いやあ、忘れ物じゃなくってさあ。用があるのは、」

言いながら店の奥まで歩いてきた瞳子は、いきなり真優の胸倉を掴み上げた。

「んうつ！？」

「あなたなんだよね。」

「真優！？」

突然の暴挙に他の客は呆然となり、鍋の前にいた老婆が慌てて側に駆け寄った。

「なんだいあんた！？手を離しな！」

真優を掴む瞳子の手には掴みかかり引き剥がそうとするが、瞳子はうるさそうに老婆を振り払ってしまう。

「おばあちゃん！？」

「さ。一緒に来てもらおうか。」

転倒した老婆を一瞥もせずにあっけらかんと言う瞳子に真優は戦慄した。

その時、玄関を粉々に打ち砕き、何者かが店に飛び込んできた。

店内の全員が反射的にそちらを向くと、そこには一人の人影が、男を床に投げ捨てたところだった。

「各務さんっ！？」

真優が、床に投げ出された男の名を呼ぶ。

苦しげに呻く各務は、未だ朦朧としており状況を正しく把握していないようだ。

そして、各務を連れて飛び込んできたもう一人の人影は、瞳子だった。

「……え？」

「あれ？」

真優は啞然とした。他の客も。

そして瞳子も。

真優を掴み上げる瞳子と、破砕した玄関に立つ瞳子。

瞳子が、二人いる。

それも、服装の他身に付けているものも全く同じ。

同一の記号を身に付けた良く似た二人の人物という異常に、店内の人間は皆凍り付いていた。

「なんであたしがこんな所にいるわけ？」

「それ、こっちの台詞なんだけど。あんた何？」

向き合った瞳子が口々に言う。全く同じ口調で。

「ちょっと!?! どうしたの!?!」

そこに、二人目の背後からさらに三人目の瞳子が現れたことで、真優と一同の混乱は極大に達する。

瞳子を先頭に天堂屋ののれんをくぐった透と和馬が見たものは、荒れた店内と仰天する客たち、そして床に倒れる各務と三人の瞳子だった。

「ほう。これは、ワームだな。お嬢さんに二匹も擬態するとは。」

「いや、それだけではない。」

マイペースに驚く和馬に透が訂正を告げる。

「こいつら、イマジンでもあるな。」

「へ？」

瞳子が、本物の瞳子が素つ頓狂な声をあげると、店内にいる二人の瞳子が姿をばやかせ、その身を方やサソリに、方や八ちに似た異形

に変貌すると、続けてさらに両者とも同じ、己が目を覆い嘆き悲しむかのような面相の緑の異形へと変移した。

「ひっ!?!」

「ぎゃあああ!?!」

瞳子と真優、そして客たちの悲鳴が重なる。

「……ワームとイメージの、デュアルビーイングか。」

「なに!?!」

透の言葉に、和馬も息を飲んだ。

「……うっ……」

「、各務さん!」

その時、各務がようやく悶絶から回復し、辺りを認識した。

「う……あれ……真優……ちゃん……」

「各務さん!?!」

呼び合う真優と各務。

だが、それを遮るように瞳子の姿に戻ったデュアルビーイングがそれぞれ宣告した。

「願いは叶えた。」

「契約、完了だ。」

二体のデュアルビーイングが口を揃えると、あるうことが真優の身体が、倒れる各務の身体が、中央から断裂し唐竹割りになってその身を広げたのだ。

だがその断面からは血も内蔵もこぼれ出ず、代わりにそこには虹色にゆらめく深淵が広がっているのみであった。

「やあああああ!?!」

「ひいいいっ!?!」

その惨状を目撃した瞳子と客たちの悲鳴が唱和した。

それと同時に他の客たちは先を争うように透と和馬の脇を抜け店を飛び出していった。

二体のデュアルビーイングの瞳子は満足したように両手を揉み合わせる、それぞれ真優の身体の断面へ、各務の身体の断面へと飛び

込んでゆく。

両者共に近い質量にも関わらず迅速に体内へと吸い込まれてゆくと、やがて二人の割れた身体は閉塞し、元の姿に戻った。

「……………」

「うっ……………」

真優はその場に崩れ落ち、各務はまた頭を落とした。

「各務！？ 真優ちゃん！？」

瞳子が叫んで店内に飛び込んだ。

各務の肩を揺すり、続いて老婆が抱きしめる真優の元へ駆け寄って肩を揺さぶる。

「ねえ！？ しっかりして！？ ねえ！？」

「今のが、契約履行と、時間跳躍のゲートか。」

「そうだ。」

和馬に問いに答え、透は各務に歩み寄った。

「新。イマジンに何を願った？」

「…………… なんの、ことだよ……………」

「瞳子の偽物に、何を吹き込まれた？」

各務は苦しげに呻きながら、やがて言いにくそうに告げた。

「瞳子ちゃん、が、真優ちゃんと、仲良く、させて、くれる、って……………」

それを聞いた透が、真優とその側にいる曰く言い難い表情の瞳子に目を遣る。

瞳子が振り向き、真優に問いかけた。

「真優ちゃん！？ いったい何があったの！？」

「…………… 瞳子さん、が……………」

焦点の定まらぬ様子で、真優がやがて混乱のまま呟いた。

「お兄ちゃんに、会わせて、くれる、って……………」

「え！？ どういうこと！？ ……………透！？」

「イマジンは、願いを曲解してでも完遂する。」

こちらを振り向いた瞳子と隣の和馬に聞かせるように言つ透。

「契約者を無理矢理にでも納得させてしまえば、イマジンは精神を支配できる。奴らは手っ取り早い手口を好む。各務は彼女を望み、あの娘は「兄」を望みながら、各務の姿を見て心の奥では納得してしまった。それでイマジンは契約完了としたのだ。」

透の言葉に、なぜか傷ついたように沈鬱に表情を沈める各務と瞳子、真優。

言いながら構わずに立ち上がった透は、二枚のカードを抜き放ち、一枚を各務の頭にかざした。

そのカードはデイレイドのライドカードとも、かつて使用した龍騎のアドベントカードとも異なるカードで、枠線のデザインはあるものの、肝心の枠内の意匠が空欄となっている。

だが、各務の頭にかざすうち、やがてカードに先ほどのサソリ型イマジンの姿と日付が滲み出てきた。

「ふむ。」

呟いて透は、今度は呆然と座り込む真優に近寄ると、同じくブランクのカードを突き付けた。

やがて同様にハチ型イマジンの姿と日付が浮かび上がってきた。

その二枚のカードを並べて見やり、透は再び呻いた。

「……ふむ。同じ日付だな。おまえたち、この日付に覚えはあるか？」

透がカードをかざしながら告げた日付に、各務と真優はそろって身を固くした。

「え……？」

その様子を見て一人、置いてきぼりを食ったような顔で呆然とする瞳子。

「こいつはワームだぞ！今さら帰る場所などない！」

「違うなあ。」

ゼクトの地下施設で、眼帯を巻いた弟切 想の嘲笑を門矢 士が遮った。

「なに？」

「この世に一カ所だけ、例え世界の全てを敵に回しても、家族の帰りを待っている場所がある。……そしてこの世に一人だけ、例え世界の全てを敵に回しても、家族の為に戦う男がいる。」

枷に拘束された真優が、側にうずくまる天堂 総司が土を見上げた。「下らん！ 身を寄せ合うのは弱い者同士だ！」

「この男は！ 誰にも声が届かない世界で、孤独に耐えながらみんなを守ってきた。誰より強い男だ！ 同じ顔をしているが、お前はここの男の足下にも及ばない……虫ケラだ。」

「黙れえ！」

叫び、弟切 想は腕を振りかざして奥の機械に歩み寄った。

「もはやクロックアップは無力化された！ この世界は、俺の物だ！ ハアッハッハッハッハア！」

哄笑を上げ、弟切 想はその姿を揺らめかせ、アブラムシの生態相を持つ異形、フィロキセラワームの本性を現した。

だが、土はあくまでも静かに告げる。

「……どうかな。俺は全てを破壊する。」

『貴様！ いったい何者だ！？』

とうとうフィロキセラワームが土を指して絶叫した。

皮肉げな笑みの中に、その射抜くような瞳の奥に青白い怒りをたぎらせて土は宣言する。

「通りすがりの仮面ライダーだ。……覚えておけ」

『ーーーーーッ！』

フィロキセラワームの咆哮と同時、配下のワーム・サナギ体が土に襲いかかった。

土がワーム共を捌いている間に、天堂 総司が真優に駆け寄りその拘束を解きにかかる。

「……なんでわたしを守ってくれるの……？ だって、わたしは……！？」

「お前は俺の妹だ。そして俺は？」



枷を外した総司は、いたずらめいた笑みを浮かべ、真優に問う。

「……………お兄ちゃん。」

その答えに満足したように、にっこりと微笑む総司に、つられて微笑む真優。

「大切な真実はそれだけだ。これからもお前を守る。」

「……………うん。」

その時、ワームを一人で抑えている騒動の音が変化したのに総司は気付いた。土が危ないかもしれない。

「よし、あっち行つてろ」

総司に促され、真優は戦いの邪魔にならないようこの地下室の奥へ退避した。

「……………うう!？」

その時、自分の内から迫る違和感に呻き、真優はその場に倒れ込んだ。

辺りに砂を撒き散らして。

そしてその砂が自ら寄り集まり、やがてイメージモチーフにしてはやけにリアルなワスプイマジンとなると、その場から走り去っていった。

ほぼ同時刻。光写真館の奥の部屋のベッドで介抱されていた各務の身体からも砂が撒き散らされ、それはやはりやけにリアルな意匠のスコープイオンイマジンの姿となると、そこから飛び出していった。

『はあーっはっはっはあ!壊し放題だぜえええ!』

『おりゃああ!ブツ壊れんかい!』

街中に現れた二体の、イマジンとワームのデュアルビーイングは己の内のエネルギーを撒き散らし、破壊の限りを尽くしていた。

ワスプイマジン、スコープイオンイマジン共に身体から生えた針をミサイルのように射出して街を、ビルを破壊している。

『はあーっはっはっはあ!んげ!?!』

そこに突然、走り込んできた黄色いバイクが後ろからワスプイマジン  
ンを跳ね飛ばした。

「なんだあ!? まさか、電王!?!」

「んなまさかだろ!? この世界にいるわきゃねえ!?!」

その異常に気付いたスコープイマジンが振り向いたそこにいたのは、「時の列車」でも電王でもない、ただの黄色いバイクにまたがった、先ほどの狭い店に現れた男と擬態元の女であった。

「……ふむ。時空が乱れているな。これでは加速空間への干渉が  
できない。」

バイクにまたがった透が、ヘルメットを取りながら宙を見上げて咳  
いた。

今、ここを中心とする広範囲にクロックアップを阻害する力場が展  
開されている。

それはライダーシステムの加速機能にのみ干渉するもの。この領域  
ではゼクトのマスクドライバーは加速できなくなるが、生体器官の  
働きによって加速するワームには全くの無害。

人間側のアドバンテージが奪われた。

「……てめえ。ただの人間がなんでここまで追っかけて来れんだよ  
!?!」

「構うもんか!今すぐブツ潰してやんよ!過去で死んで消えなぶげ  
!?!」

物も言わずに投げつけられた透のヘルメットを顔面に喰らい悶絶す  
るスコープイマジン。

その隙にカードをディレイドライバーに挿し入れ抜刀の動作でスラ  
イドカバーを閉塞した。

「変身。」

《カメンライドウ・ディ・ディレイド!》

幾重ものグレーのヴィジョンが殺到し、彼方より飛来した無数のラ  
イドピラーがイマジンたちを跳ね飛ばして頭部に差し込まれ、ボデ

イスーツの各部をイエローに変じて変身が完了した。

『瞳子。スクエアフォームだ。』

「……………」

天堂屋の前から半ば引つ張り込まれるようにバイクに乗せられてきた瞳子は、さつきからずっと黙ってうつむいていたのだが、やがてゆっくりと顔を上げるとようやく応えた。

「……………うん。スクエア・フォーム。」

呟くと同時に瞳子の身体は黄色の光に包まれ、相乗りで掴まるために透の腹に廻っていた組んだ両手を中心に体積を縮めると、やがて無骨な形状のデイレイドベルトがシャープな形状へと変移した。

続いて装甲各部がスライド変形し、輝くフェイズシフトパネルを露出して「デイレイド・スクエアフォーム」への移行を完了した。

『な、なんだあ！？ ナニモンだてめえ！？』

『と、「時の列車」もナシに！？』

『お前たちは歴史線の過去へやって来たつもりだろうが、厳密にはそうでもない。』

言いながら、デイレイドはまたがっていたバイクから脚を高く上げて降り立った。

『お前たちイマジンが過去へ跳ぶ度、その瞬間 世界は「イマジンがいなかった正史」と「イマジンが介入した新たな可能性」の二つに分離する。』

すたすたと歩きながら、左手でベルトバックルの掌のようなフレームを引き、バックルを立ち上げる。

『それはただの可能性。ここはまだ仮想領域なのだ。お前たちが世界を破壊しきるまでこの世界での変化は未来に適用されるが、それまでにお前たちを排除すれば、この「新たな可能性」の世界自体が消去され「正史」のみが残り、未来に現れた影響は「なかった事」になり消滅する。』

そして一枚のカードを抜き出して、なおも続ける。

『俺は『ワールドスライダー』だ。多元宇宙だろうが鏡の中だろう』

が渡れる俺に、たかだか過去の仮想領域へ渡れぬ道理はない。だが、この世界の仮面ライダーに対処できぬ脅威。処理させてもらう。

言い切り、透はそのカードをバツクルのスリットに投げ入れバツクルを振り払い倒した。

《カメンライドウ・デ・デンオウ!》

殺到した光の粒子に包まれ、デイレイドの姿は正中線にレールを敷いた扁平な黒のボディスーツに変化する。

その状態でデイレイドは、デイレイドライバーを腰のベルトバツクルの前にかざすと、これまでとは異なる認証音が響いた。

《ソード・フォーム。》

その声が続いて周囲にオーラアーマーが出現し、構成が完了する端から次々と装着されていった。

そして後頭部から果物の桃のようなパーツが頭頂を越えてレールを辿って巡ってくる、顔面の位置で展開変形し、巨大なセンサーとなって張り付いた。

これが「時の列車」が擁する時間線防衛システム、仮面ライダー電王。

『げーっ!? やっぱ電王!?!』

『イメージにはフリーエネルギーによる属性攻撃が一番効くからな。』

続いて抜き出したカードを、今度はデイレイドライバーのスリットに挿し入れた。

《デュアルカメンライドウ・ファ・ファイズ!》

カレイドブレイドからの指令に従い、その身をドット柄のノイズに包み変化してゆくデイレイドベルト。

やがてそれは「仮面ライダー ファイズ」のベルトに変移し、「仮面ライダー ファイズ」のベルトを装着した仮面ライダー 電王」のスクエアフォームとなった。

さらにもう一枚カードを挿れる。

《フォームライドウ・ファイズ・アクセル!》

その瞬間、電王ソードフォームの胸郭が展開した。

それは本来は電王の別のフォームの為の形状なのだが、変化は構わず進行し、マスク、アーマー、そして腿のラインの赤が全てシルバーに変色し、シルバーだった部位が逆に赤く染まった。

「へっ。形が変わったから何だっただけだ!」

「気付いたら死んでるよ!」

叫んだイマジン達が加速した。ワームがイマジンを擬態して出来たのがこのデュアルビーイング。クロックアップ能力も健在だった。

だが同時にデイレイドも左手首に出現したリストウオッチ型ツールのボタンを押し込んだ。

《スタートアップ。》

同様に加速を得るデイレイド。

カプトたちマスクドライバーシステムの加速と違い、タキオン粒子に因らないファイズアクセルは加速空間に干渉するのではなく、「自身の時間を加速する」。

ゆえに、現在この一帯に展開されているクロックアップジャマーはファイズアクセルを阻害しない。

「うりゃああああ!」

周囲の雑音が消え、デュアルビーイングたちの蛮声のみが響く。

だが、やはりクロックアップの方がファイズアクセルの超加速モードよりも僅かに速い。

途端に数度の打撃を喰らい、キリキリ舞いするデイレイド。

だがその速度差はデイレイドも既に承知していた。

デイレイドは最小限の動作でカレイドブレイドを振るい、デュアルビーイングに当てることだけを最優先として、動きの先を読み剣を操作していた。

すれ違いざまに剣先に触れられたワスプイマジン、激しいスパークを迸らせて退け反った。

「んがっ!?!」

加速速度の違いのせいで、それほど強い打撃には見えなかった。

だが、今のカレイドブレイドが纏う「フリーエネルギー」とは時間流の制約を受けないエネルギー。その破壊力はいかなる時の流れだろうとあまねく発揮されるのだ。

『野郎！？ そんなトロい加速で！？』

スコープオンイマジンが反対側から襲いかかってくるのに合わせ、デイレイドは引き抜いたカードをデイレイドライバーに挿し入れた。《アタックライドウ・オレサンジョウ！》

『俺……』

襲いかかるスコープオンイマジンに向け、半身に構えて親指を自身の顔に向けるデイレイド。

『喰らえオラア！』

『……参上。』

呟くなり両腕を丸めて身を沈めスコープオンイマジンの針剣の斬撃をかわし、大見得のポーズで振り抜いたカレイドブレイドがすれ違いかけたデュアルビーイングの脇腹を抉った。

『っがああああ！？』

脇腹を押さえて悶絶しているうちに、デイレイドはさらにカードを挿し入れていた。

《アタックライドウ・ボクニツラレテミル！》

『お前、』

指さしのポーズで、再び迫るスコープオンイマジンに正対し、僅かに半身を入れ替える動作でイマジンの突撃をいなして背後を取った。『僕に釣られてみる。』

言い終わると同時にカレイドブレイドを振り下ろす。

背中を撫で斬られたスコープオンイマジンはそのままんどり打って転倒してしまった。

『……ねえ透。なんなの？ さっきから。台詞と抑揚が全然合ってないし。』

『ああ。』

ベルトからの瞳子の指摘に、透は気のない返事を返した。

『デイケイドからの情報ではワースト1・2を争うカードだったんだが、敵の動きさえ先読みできれば、それほど無益でもないかと』

『……ふつーに殴ったほうが早いじゃん。』

『ふむ。俺みたいなのを言う。』

『自覚あんの!?!』

《タイム・アウト。》

その時、リストウオッチ型ツールから加速終了の合図が発せられた。それと同時に周囲の雑音が復活し、デイレイドの装甲が閉じ元の形状と配色に戻る。

『ぐああこんにやるお!?!』

『やりやあがったな!?!』

同様にクロツクアップを解除したデュアルビーイング達が怨嗟を吐いた。

『次でおしまいにしてやらあ!』

『む。まずいな』

『え!?! 何が!?!』

透の珍しい悔恨のような言葉に驚いた瞳子が聞き返した。

『ファイズアクセルは、連続施行には若干のタイムラグが必要だ。だが、ワームは』

次の瞬間。

デイレイドは見えない速度の連続攻撃に激しく宙を舞った。

t r a c k ・ 2 7 カブトの世界（後書き）

本作のクロックアップの説明において、「加速空間が云々」と表現し、加速した後の世界があたかも別世界のような描き方をしていますが、あくまでも鉄槻の自己解釈です。

元々は「速い時の流れに在る」という表現を見かけたことがあってこの「在る」という表現から妄想したのが鉄槻作品のクロックアップの解釈です。回転速度が違う二枚のフィルムを行き来するような対して「自分が速い」のがファイズアクセル。

はて。肝心な人が肝心な登場をしないままのこの展開。カブトは話の主軸に絡むのか！？ 絡むけど。



クロックアップの世界から襲いかかる二体のデュアルビーイングによって文字通り瞬間に無数の攻撃を受け右に左にと吹き飛ばされるデイレイドは、傍目にはまるで一人で宙を跳ね回っているようにも見える。

『つくうっ!?!?』

盾代わりにカレイドブレイドをかざすも大した意味はなく、偶然そこにヒットした以外身体中の至る箇所から痛撃を叩き込まれ倒れ伏す。

今、数メートル先の地点に足を止めた二体のデュアルビーイングが姿を現した。

『トロクせえなあコイツ。遅すぎてあくびが出るぜ』

『へへっ、もうただの電王じゃあ俺たちじゃあ追い付けねえよ!』  
そろって嘲笑を飛ばす。

『けど無駄に頑丈だよな。次で壊せっかな』

『今度はもうちよつとゆっくりやってみようぜ。なんせ時間はたっぷりあるんだからよ』

巧い冗談を言った気になってげらげらと笑うイマジンたち。

その時、ほど近い場所から轟音が響いてきた。

何事かと見上げれば、そのビルの向こうに立っていた巨大な鉄塔、何らかの電波塔だったその鉄骨の構造物が中程からへし折れ、ちぎれた上端部が向こう側へ落下してゆくところだった。

『んなにいいいい!?!?』

『ああああああ!?!?』

それを見てデュアルビーイング二体が悲壮な悲鳴を上げた。

『一番デカくて壊し甲斐がありそうだから、最後まで取っておいたのにいいいい!?!?』

『なんだよお!?!? なんて先に壊れんだよおおお!?!?』

片や頭を抱え、片や地面にうずくまって地面を叩き悲嘆に暮れるデュアルビーイング。

『……なんなの？あいつら。』

『さあな。奴らのこだわりは理解できんが』

その間にダメージから回復し、むっくりと起きあがるディレイド。

『ジャミングが消えた。どうやらあれがクロックアップジャマーの発振器だったようだな。』

倒壊し中程から上を失った電波塔を眺め透が呟いた。

『……仕方ねえ。あいつを派手にブチ壊して代わりにしようぜ……』

『ちつとはすつきりさせてくれよ teme 』

やがて嘆いていた二体の異形がゆらりと立ち上がり、ほの暗い怒りをたぎらせてこちらへと向き直ってきた。

そして前触れもなく加速し姿を消す。

『透っ！？』

『うむ。』

《スタートアップ。》

即座に左手首のツールのボタンを押し込み同様に加速した。

だがその瞬間、こちらに迫る二体のデュアルビーイングは突如割り込んだ赤い影にまともて蹴散らされてしまった。

そしてディレイドの傍らにその赤い甲殻を纏った人影が着地する。

『……お前。士の、ディケイドの仲間か？』

『仲間ではないが、同族ではあるな。』

その赤いマスクドライダーの問いに、透はその素性にも頓着せずに応えた。

『お前、「カブト」だな？』

なぜなら、自らと接続している存在だったから。

『そうだ。……やれやれ。事件がひとつ片付いたと思っただけでまにこれか。今日は本当に忙しい。……いや、まだまだそうでもないか。俺はまだ「忙しい」という字を成すほど「心」を「亡くしてはいない、か。』

言って、正面に向き直り姿勢を正したマスクライダー・カブトは続けて呟いた。

『……って、おばあちゃんが言ってた。』

『……なにコイツ。』

『この世界の守護者。カブトだ。』

ベルトからの瞳子の呆れたような声に、透が応えた。

カブトはなにやら人差し指を天に向けてかざし、続けて告げてきた。

『俺の名は、「天の堂」にありて総てを司る「男、天堂 総司。……」

っておばあちゃんが言ってた。』

『そうか。』

『なに？台場さんと言い流行ってんの？その名乗り』

『いや。恐らくはこちらが初出だろう。まだ言っていることの意味

が通っている。それより総司。』

『なんだ？』

出会い頭に名を呼び捨てにされたにも関わらず、カブトは当たり前のように返事をし、みなまで言うなとばかりに続けて透の意図を汲んで応えた。

『奴らを倒すんだろう？奇妙なワームだが。だがだいたい状況は

把握したぞ。』

《ファイナルフォームライドウ・カ・カブト！》

『そうか。なら』

『へ？』

ついさつき聞き覚えた電子音声に怪訝な様子でカブトが振り向いた瞬間その目に入ったのは。

丁度カレイドブレイドを振り下ろしてきたディレイドの姿だった。

『死又程くすぐつたいぞ。』

『おばーちゃん！？』

絶叫と共に身体を剣に透過され、僅かに宙に浮かび迅速に変形・変移してゆくカブト。

やがてそこに巨大なカブトゼクターが現れた。

「透……それはあんまりじゃない？」

「時間がないのでな。総司、クロックアップだ。」

既にファイズアクセルは残りスリーカウントを切っている。

《クロックアップ！》

《タイムアウト。》

カブト側から発動されたクロックアップの効果を受け、ファイズアクセルの超加速が終了してもなおディレイドは加速した時の流れの中に在り続けた。

「……あのなお前。「慌てる乞食はもらいが少ない」、っておばあちゃんが言っていたぞ。」

なにやら不機嫌に巨大カブトゼクターがディレイドに向かって文句を言うが。

「その続きは、「だが動かめ乞食は何も得られぬ」、と言うのだろう？ 知っているぞ。接続したディケイドを通じて俺とも接続しているからな。」

しれっと透は言い返した。

「さあ。だいたい状況は把握しているのだろう？ 奴らを片付ける。」

さもなくばこの世界の未来が消えるぞ。」

「後で詳しく説明しろよ？」

「なに。未来のお前は総てを知っている。」

奇妙な遣り取りを交わし、巨大カブトゼクターとディレイドは同時に飛び出した。

巨大カブトゼクターを模したカブトのファイナルフォームライド「ゼクターカブト」はディレイドから供給される「クラインの壺」より汲み上げたエネルギーを受け、増強されたパワーとスピードでワスプイマジンを翻弄し、ゼクターホーンによる突撃を次々と浴びせキリキリ舞いさせていた。

「つつ！？ こんちくしょうがああああ！？」

自棄になったワスプイマジンが針剣を闇雲に振るうがかすりもせず、

やはり逆に何度も打撃を受け転倒する。

『無駄だ！自らを強くあらんと常に進化する俺の前に敵はいない！』  
ワスプイマジンの上空に回り込んだゼクターカブトが回転しながらの急降下を繰り返した。

『……って、おばあちゃんが言ってた！』

激突。ワスプイマジンごとアスファルトに飛び込み地中深くへと潜行してゆく。

『ヒヤアハハ！そうらそらそんなデカくて重い剣で俺の攻撃を捌けるのかあ！？』

哄笑をあげ針剣による無数の刺突を繰り返すスコープイマジンの攻撃に対し、冷静にカレイドブレイドを回転させ捌ききるディレイド。

だが確かに攻撃に転じる隙がない。

響鬼の世界でも感じたジレンマだが、しかし今回はあの時とは違う。

『ヒヤアハハハばげばあああ！？』

突如イマジンの哄笑が悲鳴に代わって上空へ飛んでいったのだ。

地中からアスファルトを割って飛び出してきたゼクターカブトの突き上げによって。

ゼクターカブトは既にワスプイマジンを角にぶら下げている。今や二体のデュアルビーイングを角に乗せた状態でゼクターカブトは辺りを迅速に旋回した。

そこでディレイドは改めて左手首のリストウォッチ型ツールのボタンを押し込んだ。

《スタートアップ。》

三度、ファイズアクセルの超加速モードを施行させる。

もがいていたデュアルビーイングの身動きが止まり、だがディレイドに同期して超加速を上乘せしたゼクターカブトはディレイドの正面に正対する位置に飛来すると、時の流れに置き去りになった二体のデュアルビーイングの身体を放り出し一回転してカブト本来の姿

に戻る。

デイレイドが抜き出したカードをデイレイドライバーに挿し入れ、  
抜刀の動作でスライドカバーを閉じた。

《ファイナルアタックライドウ・カ・カブト!》

認証が告げられると、それを合図に中間に漂う二体のデュアルビー  
イングに向け同時に双方から駆け出すデイレイドとカブト。

『はあああ!』

『ふっ!』

そして二人同時に蹴りを繰り出し、各々の最強のキックで二体のデ  
ュアルビーイングを挟み込むように蹴り潰し、まとめて撃破してし  
まった。

緑の爆炎と電光を撒き散らして消滅してゆくデュアルビーイングた  
ち。

『……で。実際のところ「未来が消える」っていうのは、どういう  
意味だったんだ?』

『ふむ。それは……』

カブトの問いに答えようとしたデイレイドだったが、そこに時空の  
揺らぎを感知し口を閉じた。

『? どうした?……つく!?!』

その瞬間、カブトの腰、ベルトの右側面のコネクタに突然電光と共  
にカブトゼクターとは異なる意匠のカブト虫を模した機械が出現し  
合体した。

『……これは!?!』

『その未来からの届け物だろう。事情は理解したか?』

その新たな機械がライダーベルトの装着者をサポートする補助知能  
拡張意識に新たな情報を流入させたのを、接続した意識から感知し  
たデイレイドは素っ気なく問いかけた。

『……ああ。』

『そういうことだ。そしてここのお前も「一つのお前」に統合され  
る。それでもまだ話があるのなら、後で聞こう。』

『……………ああ。』

言う間に姿を薄れさせてゆくカブト。

《タイムアウト。》

《クロックオーバー。》

ディレイド自身も加速を抜け、やがて完全にここでのカブトとは離別してしまった。

だが。

『よし。戻るぞ。』

『うん。』

マシンディレイダーにまたがったディレイド・スクエアフォームは塵も残らない戦闘現場だった場所から感慨もなく走り去っていった。

天堂屋の近くにある神社の境内に、透と、俯き加減の瞳子がやって来た。

「もおい！？ るこ行つてはんらよ！？」

巨漢の台場の隣で両手に持ったパンを代わるがわる頬張っていた各務が咀嚼しながら何かを言った。

「食べ終わるまで待つてやる。もう一度言い直せ。」

「あから、」

もぐもぐごつくんとパンを飲み込み牛乳で流し込んでさらに一息つくくと、各務は改めて口を開いた。

「だから、これからその「過去を壊す怪生物」をやっつけるんだろ！？ 俺の腹ごしらえもすぐ終わるつてのに二人してどこ行つてたんだ、つて聞いたんだよ！」

怒りに任せてパンの包みをくしゃくしゃに丸めながら各務が言うが、各務以外の三人は、既に火が消えたかのように冷静沈着になっている。

「……………おい？ ほら、世界の危機だぞ！？」

まるで祭り囃子のように一同の前で両手を振る各務に、台場が厳かに口を開いた。

「そのことだが各務。事件はひとつ解決した。」

「はあ!？」

間抜けな顔で仰天する各務。

「いやもう訳分かんないよ!？ なに!？ ここまでブチ上げとい  
て、嘘か!？ 冗談か!？ しまいにはクロックアップしてあんだ  
の髪の毛全部ちようちよ結びにするぞ!？」

完全に混乱して喚く各務。

無理もない。この場で過去の世界での顛末を理解しているのは透と  
接続していた瞳子と、時の流れから乖離した「観測者」たる台場だ  
けなのだから。

その時、四人のすぐ近く、境内の砂利の上に電光が迸り、その中か  
ら銀と赤に輝く複雑な面構成の鎧を纏った人影が現れた。

それは、カブトの拡張機能「カブト・ハイパーフォーム」。

呆気にとられる各務と三人の前に優雅に着地したカブト・ハイパー  
フォームは舞い降りた天使のように展開されていた各部装甲と閉塞  
すると、その姿を揺らめかせ、カブトの通常フォームへと変移した。

「か、カブト……!？」

各務が呆然と呟く。

そして碎け散るかのように装甲を分解消滅させ、カブトが変身を解  
除しその正体をそこに現した。

イクイップデバイスから離脱し、どこへともなく飛び去ってゆくカ  
ブトゼクター。

「……そうだ。ひとまず一件は解決した。」

一同に向き直ったその男、天堂 総司が告げた。

「……あ、あんだ、弟切 想……」

わなわなと震える唇で何かを呟いた各務に、総司はがっくりと砂利  
に両手を突いた。

「……ただけ立ち後れているんだこいつの情報……」

「偽物が事件を起こしてからずっと、だろう。」

なにやら息巻いて飛び出そうと暴れている各務を台場が羽交い締め



にしているのを眺めながら透が指摘した。

「……まあいい。」

どうにか復活したらしい総司は、頭を押さえながらも立ち上がった。「観測者」のことを知ったゼクトの人間にきちんと事情を知ってもらわなければならない。」

各務を眺めながら総司は呟いた。

「店に来い。うちのおでんをおごってやるから、店で話をしよう。」

「……お兄ちゃん!？」

イマジンが消滅したことで、イマジンによって引き起こされた全ての事象が消滅し、「店を荒らされた事実」も消滅した綺麗な天堂屋で、長らく離れていた家族の感動の再会が展開された。

「……あれ?でも、少し若くなつてない?」

怪訝な顔をした真優の指摘に気付いた者は、この場では総司の過去を知る天堂家の人間のみであった。

「……ふむ。イマジンの時間への攻撃にハイパークロックアップによって人生を差し出して防いだことによる弊害だな。」

台場がしたり顔で解説するが、それを理解した者は生憎と総司本人と透だけであったが。

本来二十数歳であったはずの総司は、今の見かけは真優よりひとつ程しか変わらないように見える。

「……まあ、いろいろと苦労したんだろうねえ。でも、総司は総司。そこに変わりはないんだよ。」

言ってカウンターの向こうの老婆がにこにここと笑う。

だが各務は渋い顔をしたままだ。

「いや、それだけじゃ済まないだろ普通……」

相変わらず「若返った元上司に瓜二つな男」に疑念を抱いている各務は混乱のままツッコミを入れた。

「さて。ひとつ解決したところで、改めてお前たちに頼みがある。」脇に立った透が、台場、総司、各務を均等に見据えて告げた。

「別の世界にワームが現れた。俺に代わってそれを始末してもらいたい。」

「うむ。」

鷹揚にうなずいたのは台場。

「だが、わたしは「観測者」。この世界のマスクドライバーのため、ここを完全に離れるわけにはいかん。そして天堂　総司は現在唯一のイマジン対策の要。ならば、事情を知る唯一の遊撃員たりえる各務に行ってもらおうのが、いま一番有効な手段だろう。どうだ？」

「うむ。よかるう。」

「良くねええ！？　勝手に何か決めるなよ！？」

うなずき合う台場と透に伸び上がって叫ぶ各務。

「そうだな。この男が行くのが最良だ。こんな半端な男、少し外の世界で鍛え直してやったほうがいい。」

「なんだよあんたまで！？」

妹の真優と沈んだ顔をした瞳子を見遣りながら言う総司に、その視線の色に気付かぬまま食って掛かる各務に老婆と台場がそろってため息を吐いた。

「よし。ならば各務。着いて来い。」

「いやだあああ！？　そんなワケ分かんないところに行くのは嫌だああああ！？」

「さあ各務。観念して己の為すべき事を為しに行くがよい。」

喚く各務を軽々とつまみ上げた台場が、とつとと店を出て行ってしまった。

それに続いて振り向いた透だったが、瞳子の横で立ち止まり、やや考えてから耳打ちした。

「……さつきからお前が気にしていることだが。各務を唆したイマジンが消滅したことで、各務があの子の前で言ったことは、あの事実ごと消滅し、「なかった事」になっているぞ。お前がそれを気にする必要はない。」

透にしては珍しい気遣いなのだろうが、残念ながらあまりにも無知

での外れだ。

「……だからって、あいつの気持ちが消えてなくなっただけじゃない。」

だから瞳子はサンバイザーを深く下ろして目元を隠してしまう。拒絶するように。

「分かってたよ。あたしが逃げてただけ。自業自得だよ。」

「だが、まだ誰も答えを出してはいない。」

そこに、総司が声をかけた。

老婆にも真優にも聞こえない位置までやって来て。

「ただの店員と常連客同士、そう思い込んでいたんだろう？ なら、気付いた今こそせっつかくの良い機会だ。自分の心に素直になれ。ウチの真優を紹介しよう。改めて友達になってやってくれ。あの各務とかいう男はいけ好かないが、店にいる間だけと言わず、相手のことをもつと良く知ることだ。そうすれば、見えてくるものがある。」

自分の一番欲しい答えがな。」

それは、ハイパーゼクターの効果によって彼らのことを見ていたから言えること。

「……天堂さん……」

「どんな事も、きちんと良く知ることだ。さもなくちゃ、嫌うことすらできない。……って、おばあちゃんが言った。」

言って、いたずらっぽく片目を瞑る総司に、瞳子はようやく苦笑を浮かべた。

「あなた、そればっかじゃん」

言って、きょとんとした真優と向き合った瞳子を、不思議なものを見るような目で見送った透は、総司の手振りに促され、店を後にした。

ごめんね台場 和馬。クライプの出番がなかった。あと各務のガタツクも。ガタツクはいいや別に。

さて、作者は台場 和馬みたいな図体（誇張）をしておきながら実は恋愛短編小説が好物なんです。

そんで無謀にもこのカブト編で「そういうの」をちよいとやってみたんですが、そういう風味ができていますでしょうか？これは是非御感想・御指摘頂きたいところ。

いや、一本目から軽くばらばらと振りかけてみたつもりではあったんですが。果たしてどの時点から「その風味」が通じていたのか、興味があります。

警告。警告。

もし読者様が「仮面ライダー デイクイド」の設定に深い興味があり、かつ冬の劇場版に原作の謎の解明を期待していらっしゃる場合、当話は是非劇場版をご覧になってからお読みになることを強く勧めます。

当話では、別に原作や劇場版のネタバレらしは一つ切やっけていません。やっけてませんったらやっけてません。が、鉄槻の独自の解釈による物語の核心(と思われる点)について触れています。所詮いち個人の妄想ですが、読者様の劇場版視聴の楽しみを阻害する恐れがあります。所詮いち個人の妄想、可能性のひとつ、と割り切れる方や、そんなん気にしない方のみ、お進み下さい。

たとえ他に見る者が居なかつても、私はこれを書き留めておこうと思う。

私は鳴滝。あの少女、光 夏海からすれば意外に思われるだろうが、これが私の「名」の全てだ。「姓」にあたるものの概念はない。これが、私という個体の名前なのだ。

まず、「多元宇宙」という言葉について説明しておこう。そもそも宇宙とは、元はひとつだった。

それが、宇宙内部の可能性を増す度に枝分かれし、「宇宙の外側」から見ればまるで「樹」のように見えることだろう。無数に分かれた枝を持つ、樹に。

「猿から進化した動物が世界を支配している宇宙」とは別に、例えば猿の代わりに「猫から進化した生物が世界を支配している宇宙」がどこかにあるかもしれない。それが宇宙の可能性。

その「枝」の一本一本の中が「宇宙」なのだ。

そして「宇宙」は内部に住む知性体が何かを選択する度にさらに細かく枝分かれしてゆく。

「あの時、ああしてれば良かった」と思ったことはないだろうか。

その選択をした瞬間から、宇宙は「それを選んだ歴史」と「選ばなかった歴史」に分岐する。

そしてそれが世界に生きとし生ける者の数だけ起こるのだ。

「世界樹の枝」がどれほど膨大な数生まれるか。これで想像に難くないだろうと思う。

これが「多元宇宙」。「並行世界」「パラレルワールド」とも呼ぶ。

当然、「選択をしなかつた歴史」へ赴くのが困難なのと同様、他の

宇宙へ移ることは基本的にはできない。

だが私の世界は、私がいた宇宙は、他の宇宙に比べその「宇宙境界線」が曖昧な領域だった。その中のひとつの世界だった。

「境界線が曖昧」とは、すなわち光 夏海がお隣の家へ行くのと同じように、私の世界では他の宇宙へ行くことが自然にできる。それがごく当たり前の行為のひとつに過ぎない世界だったのだ。

だから、憎きデイケイドを追い光 夏海が属する宇宙に来た時は、その住人たちをなんて不便なんだろうと憐れみを覚えたものだ。

だが、私は思い直した。知性体はすべからず、概念の外にあるものを羨んだりはしない。これで、この世界で彼らは十全なのだ、と。まあ、それはいい。各々世界にはそれぞれの事情があるのは当たり前のこと。

だが、確信はした。やはりデイケイドを危険視すべしとの警鐘を鳴らすのはこの私の天命である、と。

そうだ。デイケイドは世界を破壊する。宇宙を破壊する。

多元宇宙を渡り歩き、これまでもいくつもの世界を破壊してきたのだ。

私の世界と同じように。

デイケイドがいつ、どこからどのように現れたのかは不明だ。私の知覚を以てしても、その初出が過去なのか未来なのかは判然としない。

だが奴はある時突然現れた。あの時、私の世界に忽然と現れたのだ。私の世界にいた者は皆、それを察知しただろう。それが意味するところも。

そして奴は私たちの世界を通り過ぎ、やがて別の宇宙へと消えていった。

その時は皆、ほっと胸を撫で下ろしたのだ。異常なのはその存在だけで、その後起こるかもしれない事は杞憂だったのだと。

記し忘れたが、私たちの宇宙は「宇宙境界線」が曖昧ゆえ、空間だ

けでなく、時間の概念も光 夏海たちの世界のものとは異なる。私たちの世界では、過去も現在も未来も「ほぼ」等しい。

だが、その詳細な説明は割愛しよう。私たちの宇宙にしかない概念ゆえ、それ以外の諸氏に説明すべき言葉が存在しないのだ。

ともあれ、起こるべき災厄を免れたことで私たちは油断していた。

デイケイドがもたらす「災厄」とは、奴が通過した「後」に起こるものだったのだ。

なんたることだ。奴が多元宇宙を徘徊する目的は不明だが、その都度ただ通過するだけで世界は滅んでしまうのだ。

いったいなぜそんなことをするのかは分からない。滅ぼすつもりだったとして、デイケイドはなんら声明を出してはいない。それとも無言でただ宇宙を滅ぼすつもりで滅ぼして歩いているだけなのか。だとしたら最悪だ。

いずれにしても、私の世界は滅んだ。

デイケイドが消えた後、私の世界に相反する概念が流入し、対消滅してしまったのだ。

私は仲間たちと共に滅亡に抗った。だが、まったく異なる概念の浸食に為す術なく、ひとり、またひとりと仲間を亡くし、とうとう自分の宇宙から命からがら逃げ出した私を残して世界は滅びてしまった。

私は絶対にデイケイドを許さない。

奴は今、「仮面ライダー」という世界の守護者を存在の基点とした世界が集まる多元宇宙地域に移ったようだ。

悔しいことに、私自身には、デイケイドに直接攻撃できる概念と能力がない。

だが、この「仮面ライダー」の世界が密集する宇宙ならば好都合だ。なにしろ世界に影響力を及ぼす程の力の持ち主が各宇宙に存在している。

彼らの力を借りれば、あのデイケイドを倒すこともできよう。



あの「悪魔」を。「世界の破壊者」を。

他の宇宙に二の轍を踏ませない、などとおこがましいことを言うつもりはない。これは私の復讐なのだ。

だが、自らの世界を滅ぼされたくないのは、どこの宇宙の住人でも同じだろう。

仮面ライダーたちに願う。

だから、奴を倒してくれ。私にはもはや、警鐘を鳴らすことしかできない。

絶大な「世界影響力」を持つ彼ら「仮面ライダー」でしか、あの悪魔は倒せないだろう。

どうか。

君らの都合で良い。結果的に悪魔が倒されれば私はそれで満足だ。どうか。ディケイドを倒してくれ。

そして光 夏海。

もし万が一、仮面ライダーたちでも倒しきれなかったその時は。

君が、君だけが最後の最後の切り札だ。

なぜかディケイドに「選ばれた」君だけが。

なぜかディケイドに選ばれた君ならば、ディケイドを止められるかもしれない。

だが、いかに手記に記そうとも詮無いことかもしれない。

ディケイドの「後から来る滅亡」には、ディケイドに都合の悪い情報を先んじて阻害する影響力がある。

光 夏海を始め仮面ライダーたちの元に直接接触しようとも、私からの肝心の情報は伝達せず、記録媒体に残そうとも当該知性体の認識から除外されてしまい目に触れることすらできないのだ。

だが、こうして書き記さずにはいられないのだ。

希望は、ないのか。

> i33385 | 5338  
<

t r a c k . 3 0 響鬼の%u4E16%u754C(前書き)

はい。あなたのパソコンもケータイも、壊れてなんかいませんよー。

人気など皆無な奥深い樹海の直中に、透、各務、台場の三人が現れた。

緑濃い森林の青臭いが鼻をつく。

「っつて、なンツであんたがいるんだよ!？」

と、当たり前のように隣に立つ、各務よりも頭ふたつ分は優に越える、それどころか各務がすっぽり中に入りそうなほど筋骨隆々なその巨漢に伸び上がってツツコミを入れる。

「それは無論、本来ワームが存在しないこの世界を救うためよ。」  
腕組みした台場は厳かに告げ、したり顔でうなずいて見せた。

「じゃなくて!？」 確か、あんたはウチの世界で「観測者」とやらをやっけてくんないと、マスクドライダーはクロックアップできなくなるんじゃないのか!？」

「おお。よく覚えていたな。」  
心底意外そうに各務を見下ろす台場に、各務はなおも喰って掛かった。

「関心してる場合かよ!？ おい透!この人送り返さないとマズいことになるぞ!？」

慌てて透に言い募るが、透の反応も実に淡泊なものだった。

「……和馬を送り返すと、お前がこの世界でクロックアップできなくなるぞ。クロックアップできないガタックなど、ワームの前ではただの人型の棺桶も同然。」

「言い過ぎじゃないか!？ 仕舞にや泣くぞ!？」

既に半泣きで絶叫する各務に台場が鷹揚に告げた。

「まあ待て各務。わたしは「観測者」。時の流れより乖離せし存在。そして……」

そこで各務の顔を覗き込んだ台場は、続けようとした言葉を打ち消して言い直した。

「……まあ、簡単に言えば、わたしは複数の時点に渡って同時に存在することができるのだ。今のわたしは、ここに居て、同時に元の世界にも居る。だから、心配はない。そもそもわたしは、異世界でもお前のマスクドライバーシステムにいかんなく機能を発揮させるために同行したのだ。この世界での「観測者」となって加速空間の存在を確定し、お前のクロックアップの足がかりとなるためにな。

無論、わたしも戦うぞ。」

「……お、おう。そうだったんか。」

台場の妙に圧倒的な説得力に、納得しかける各務だが。

「……ってちよつと待て。あんたさつき、何か言い直さなかったか？　なんか失礼な理由で。」簡単と言うと「ってななんだ」

「さあ行くぞディレイド。敵はどこだ。」

「こつちだ。」

「あ！？　コラ！？　なに無視してやがんだ！？　おおい！？」

すたすたと歩いてゆく透と台場に追いつがる各務。

やがて三人の耳に、なにか物音が聞こえてきた。

近づくほどに、その物音は形を成し、やがてなんらかの旋律となつて聞こえてきた。

「なんだ？　こんな山奥で演奏会でもやってるのか？」

やがて辿り着いたそこ、僅かに木々が拓けた場所に展開されていた光景は。

小山のような大きさの凶々しい四足の異形を取り囲んだ、黒い筋肉を纏い頭頂に角をめいめい数本生やした「鬼」たちが五、六体、異形に向けて楽器を鳴らしているところだった。

「な、なんだありゃあ！？」

各務の絶叫が演奏に負けずに響いた。

やがて最後の一節と同時に木っ端微塵に爆砕する異形。それと同時に鬼たちも各々楽器を降ろした。

「透！」

そこへ、鬼たちの後方で控えていた、古武術の武道着と袴を纏った

瞳子が小走りでやって来た。

「うむ。瞳子。」

「あれ！？ 瞳子ちゃん！？ なんで！？」

「あー！」

透の隣にいる各務の存在に気付いた瞳子が喫驚して立ち止まる。

「……………か、各務さん……………」

「はあ！？」

瞳子に「さん」付けで呼ばれ顔をしかめる各務。

なぜか武道着など着て背筋を伸ばして立つ瞳子は、各務を見つめる顔を真っ赤にしたままもじもじしている。

親しい知り合いのはずなのにその奇妙な仕草など自分の知る瞳子からの外れっぷりに各務は呆然としていた。

> i 3 4 2 2 — 5 3 8 <

「ああ。その瞳子は、「雑誌記者の瞳子」の異次元同位体だ。」

「……………あ？なんだそれ？」

首だけを横に向けて問う各務。

「「異世界のもう一人の自分」というやつだ。瞳子に手伝いをさせていると言っただろう。瞳子の場合は、本人を連れ回さずとも、各世界に存在する瞳子は全て記憶を共有している。効率的に俺の手伝いが遂行できるわけだ。」

「……………はあ。……………へえ。」

曖昧に相槌を打ちながら、各務は見慣れない瞳子の格好を上から下へとじろじろと眺めていた。

その各務の視線に、瞳子は恥じらいつつもじっと立ち尽くしている。

『あ！透さん！』

その後ろから、今度は深紫の筋肉に赤い隈取りと二本角を持った鬼、響鬼こと明日夢が駆け寄って来た。

「うむ。響鬼。」

「うわしゃべった！？ なに！？ 鬼！？」

その響鬼の出現に再び泡を喰う各務。

「彼らは、この世界の仮面ライダーだ。この世界では、今のよう  
人に仇成すモンスター「魔化魍」を清めの音によって調伏してい  
るのだ。」

「へ？」

言われ、先ほどの出来事を思い出す。

「ああ。……それにしても、ずいぶんと生物的なマスクライダー  
システムだなあ」

「え？あの、透さん、この人たちがワームがいた世界の仮面ライダ  
ーですか？」

しげしげとこちらを見る各務から身を引きながら響鬼が透に問うた。  
「うむ。そうだ。各務。「鬼」は自らの肉体そのものを超人の域  
に変質させた存在だ。お前たち『ギアテクター』とは出自が違うぞ。」

「え？これ生身！？」

仰天する各務。

「へえー！うわー！なあ、触ってみていいか？」

「ひえ！？うわ！？ちよっ」

「あとにしておけ各務。響鬼。急ぐのだろう？」

透の言葉に、明日夢は絡み付く各務を押し退けて居住まいを正した。

「あ、はい！僕たちは魔化魍を相手にしていたんですが、その、  
あっちでアレがアレでして！」

遠くに待機している仲間の音撃道の戦士たちを気にして言葉を濁す  
明日夢。

未だワームの存在と斬鬼の生存、そしてザ斬鬼の存在は音撃道一派  
には秘匿されているのだった。

「だからその、瞳子さん、頼みます！」

「……………」

だが、役割を振られた瞳子は、先ほどからずっと各務を見つめたま  
ま顔を真っ赤にして立ち尽くしていた。  
どうも話が聞こえていた様子がない。

『瞳子さん！？』

とうとう響鬼に袖を引かれたことで、瞳子はようやく停滞が解けたようだった。

「え！？ あ、はい！？ 元気です！」

『……そうじゃなくて、透さんたちをザ斬鬼さんのところへ案内してあげてください。僕はほら、行けませんから』

「え！？ あの、各務さんを！？」

『……いやだから。カガミさんが誰かは知りませんが、透さんとそちらのお二人をです』

「あ、ああ！？ その、こ、こっち」

慌ててぎくしゃくと透たち三人を促して歩き出す瞳子だったが、その足取りはまるで出来の悪い玩具のようだった。

「……ど、どうしたんだ瞳子ちゃんは？」

「お前のことを良く知る別人、とでも思っておくといい。」  
後から続く台場が注釈を加えた。

「あの女子を泣かせるつもりがないなら、なおさらな。」

瞳子を先頭に並ぶ透、そして続く台場と各務たちに、ザ斬鬼が作戦地点とした場所まで歩く道すがら、瞳子はこれまでのこの世界での出来事と対策を、たどたどしくも説明していた。

他の音撃道の戦士たちからザ斬鬼の存在を隠匿するため、明日夢はこちらには同行せずに仲間と共に帰還した。

時折、瞳子は各務の顔を見ては自分の顔を赤くして前を向く、ということをしきりに繰り返していたが、自分の知る「瞳子」との行動パターンのギャップに面食らっている各務にその意味に気付いた様子はない。

「ふむ。罪作りの男よの。」

「なんだよいきなり。」

台場のぼやきも当然通じず。

「そんなことより、ワームが味方だなんて、そんなの信用できるの



「かよ!?!」

瞳子の説明に、各務はかなり憤慨していた。

「で、でも、ザ斬鬼さんは、「事が済んだら自分のことを殺してくれてもいい」とまで言ってるんです!」

各務に大きな声を出され、泣きそうな顔で抗弁する瞳子。

一転して失望に染まる瞳子の様子に各務は気付かぬまま憤り続けている。

「だいたい、そうやって取り入って侵略するのがワームの手口だけ? そいつだって」

「そこまでにするがいい。各務。」

上から、台場の重々しい声のし掛かった。

「冷静に考えるがいい。聞けばそのザザンキなる者、ワームとしての能力も相当高いようだ。そんなものがいながら、これまでこの世界が無事でいられるはずがあるまい。」

「んう……!?!」

感情意外の反論を封じられ口をつぐむ各務。

「そしてそのザザンキが真に悪ならば、このディレイドが放置しておいたはずがない。 そうだな? ディレイド。」

「うむ。」

透がうなずく。

「……あの、そろそろ、です」

今にも泣きそうな顔で告げる瞳子に、透と台場がうなずいた。

「ふむ。では各務。まずお前がお嬢さんと共に先行しろ。わたしとディレイドは迂回して挟み撃ちにする。いいな。」

「……わかったよ。 瞳子ちゃん……じゃなくてええと、瞳子、さん?」

呼びかけようとしてそのパーソナリティーの違いに困惑する各務に、複雑な顔をした瞳子は控えめに告げた。

「……あの、よければ、「瞳子ちゃん」で……」

「あ、ああ。 その、瞳子ちゃん、頼むよ」

「はい！」  
一転して花のほころぶような笑顔になった瞳子に続いて、各務はその方向へ駆け出していった。

木々の向こうへ消えてゆく二人を見送り、やがて和馬は透に向き直った。

「ふむ。これで邪魔者は消えた。さてディレイド。話がある。」  
「なんだ。」

まるで和馬の意図を読んででもいたかのように透は淀み無く返事をした。

「悪いが、お前にはここで死んでもらおう。」  
「ほう。」

あくまでも柔和な笑みのまま、宇宙すら越えてジウونتを抜け飛来したセミ型メカ「クライプゼクター」をキャッチして身構える和馬に対し、こちらもなんでもなさそうに向き直る透。

「お前のことは聞いている。「悪魔の影法師」。世界を滅ぼすディレイドと同質のもの、とな。」

「それは初耳だ。身に覚えがないな。」  
「とぼけるんじゃないよ「悪魔の影法師」！」

そこに、別方面の木陰から罵声と共に女の姿が現れた。

三十には届くまい、妙齡の女性だった。

一見くしゃくしゃに掻き筆ったかのような、そのようにセットされたらしき赤毛のヘアスタイル。

その髪に包まれた顔は濃い目の化粧に彩られているが、何よりもその形相で怒りの色に染まっている。

赤のビジネススーツの上に白衣を羽織り、その白衣の縁には埋め尽くすように無数の安全ピンがこれでもかとまるで刺繍のように縫い止められている。

全体的に奇抜なファッションは、総じて「怒髪天を突く」という言葉を見事に体现しているようだった。

「デイレイド。鳴滝のボンクラの目は欺けても、このあたしは誤魔化せないよ！」

ルージュをひいた口を大仰にひん曲げて怒鳴りつける女。

「デイレイド！「デイケイドの後からやって来る災厄」！あたしはあんたを絶対に許さない！……冥土の土産に持つてきな。自分の滅ぼした世界の存在を！あたしの名を！」

ぱつと腕を振って絶叫する。

> i 3 4 2 3 — 5 3 8 <

「あたしの名は震フルル！ さあクライプ！ やっちまいな！」

「……と、言うワケだ。手加減なしだ。デイレイド。 変身。」

震の怒声を受け、和馬は左手に握るクライプゼクターを、腰のベルト、和馬のイクイップデバイス「ライダーベルト」のバックル部に設置されたセットアップレールに左から差し入れ装着した。

《ヘンシン！》

その瞬間、ベルトの縁から上下に、ハニカム構造状に展開構成される装甲。

それは和馬の全身を包み込み、やがて本人よりも二周りも大きいマスコドフォーム仮面ライダーが現れた。

アメフト選手のプロテクターのように巨大な胸郭と肩当て、そして幾重もの装甲が重なったガントレット。表面に紅茶色のラインで構成された三角形がいくつも配置され顔面や各部を飾っている。

そしてクライプ・マスコドフォームの一番特徴的なのは、通常はな以下半身まで覆うマスコドアーマーの存在。

その巨大な体躯を包む全身重甲冑は、圧倒的な圧迫感を撒き散らしていた。

「変身。」

カレイドブレイドとカードを取り出した透も、ついさっきまで協力していたことなど忘れたかのようにいつもの動作でカードをデイレイドライバーのスリットに挿し入れ抜刀の動作でスライドカバーを閉塞した。

《カメンライドウ・デイ・デイレイド!》

瞬時にグレーのヴィジョンが殺到し、彼方より飛来した無数のライドピラーを四方から頭部に収め、全身の各部をイエローに変じてデイレイドへの変身を完了する。

そしてデイレイドは続け様に次のカードをデイレイドライダーに挿入した。

《カメンライドウ・カ・カブト!》

カレイドブレイドからの指令に従い、その身を仮面ライダーカブトのベルトに変移させるカレイドサーキット。

ベルトから分離したパーツ、カブトゼクターをベルトのセットアップレールに右から差し入れ装着した。

『変身。』

《ヘンシン!》

認証後、デイレイドの上半身に、ベルトの縁からハニカム構造状にアーマーが展開構成されてゆく。

その間、クライプ・マスクドフォームも己の手順を進めていた。

クライプは、左手の指先でベルトのクライプゼクターの翹を弾いて押し上げると、アーマーパージの為のエネルギーのチャージアップが始まり、電光が全身を這い回ってゆく。

『キャスト、オフ。』

呟いて、クライプの左手がゼクターの翹を元の位置まで引き下げた。

《キャスト・オフ! チェンジ!シケイダ!》

認証の音声と同時に。

……何も変化が起こらない。

通常ならここでクライプのマスクドアーマーが細かく分割されパージされるところなのだろうに。

だがその瞬間、対峙していた、上半身をマスクドアーマーで覆ったデイレイドが右に、左にと跳ねた。

いや、高速移動する何者かに攻撃を受けているのだ。

いったい誰が。クライプ・マスクドフォームは腹部に手を遣ったま

まそこで突っ立っているのに。

「はははははいいいザマだディレイド！」

震の哄笑が響く間もディレイドの身体は宙に跳ね上げられる。

『ふ。』

マスクドアーマーのおかげか、苦鳴ではなく裂帛の息吹を吐き、ディレイドはベルトのゼクターホーンを一気に引き倒しマスクドアーマーをパージした。

《キャスト・オフ！ チェンジ・ビートル！》

『クロックアップ。』

《クロックアップ！》

即座にベルト側面のスラップスイッチを叩いて加速空間に突入し、跳ね上げられていた空中から着地する。

途端に無音の世界となったそこに、突如この場にはいなかったもう一体の人影が現れた。

倒れるディレイドから離れた位置、木陰に立つ震との間に立つマスクドライダー。

各部に張り付く軽装甲は紅茶色で構成され、そのマスクはまるでセミを上下逆さに張り付けたかのような意匠でセミの翅を模したフォースアイがぎらりとオレンジに光る。

全体的に、ゼクトに所属する蜂系のものによく似た装甲を纏っているが、細かい部位が異なっている。特に胸郭の脇の裾からは燕尾服の尻尾のようなフィルムが垂れ下がっているのだ。その後姿は、背後から見たならセミのようにも見えるだろう。

そして完全にこちらを向き直ったその腹部に巻かれたベルトには、セミ型メカ・クライプゼクターが貼り付いている。

すなわち、このライダーは、クライプ・ライダーフォームということ。

だが、さっきの位置にはクライプのマスクドアーマーが丸ごと突っ立っているのだ。

しかしよく見ればそのマスクドアーマーはベルトバックルを失い、

前後に割れ、僅かに隙間を開けている。

クライプは、マスクドアーマーを細かく分割してパージするのではなく、前後の二パーツに分けて吹き飛ばさず、その間からクロックアップして出てきたのだ。

クライプ・マスクドフォームに限って下半身にまでアーマーが装備されているのは、こうして自立させておくためか。

『言つなれば、「空蝉の術」というヤツだ。面白いだろう?』

『そうかもしれない。』

和馬の面白がるような物言いに、特に感慨もなく返して立ち上がるディレイド。

『さて。ここからが本番だ。かかってこい、ディレイド。「悪魔の影法師」よ。』

『言つに及ばず。この俺の使命を邪魔すると言つのなら、誰であろうと排除するのみだ。』

淡々と告げ、クライプが、ディレイドが、加速空間の中で対峙した。

> i 3 4 2 4 — 5 3 8 <

え？サブタイトル？ 壊れてなんかいませんよ？

てなわけでこのところ急展開きみです。……急展開かなあ。 だんだんと、宇宙一周を待たずに不穏な影が作品を侵食してきています。主にサブタイトルを。

あれワザとです。何も壊れてませんよー。

ここに来て遅れて来た新キャラ、震姐<sup>フルル</sup>さん。このデイレイドマスクーカレイドにおけるポスト鳴滝なのは明白なところ。きつと何もかもデイレイドのせいにしては**んばんど**つか行っちゃいます。

そして久しぶりに姿を現した仮面ライダー クライプ。ええ、初めて設定した時から「空蝉」って言いたかっただけですもの。あーもう満足。

track・31 響%u9B3C%u306E%u4E16%u754C(前

ご連絡。・ひとつ前の「track・30」を、ほんのちよつと修正しました。内容自体に変化はありません。

その場面にいるメンバーに疑問がありましたら、遠慮なくお伝えください。



俺は、財津 蔵王丸という人間に擬態した地球外生命体・ワームだ。財津 蔵王丸は職業上のコードネーム「斬鬼」と呼び親しまれており、その斬鬼に俺は呼び分けのため「ザ斬鬼」と名付けられた。

自分の名に定冠詞を付けるとは、いかにも「俺」らしい。

ワームは、擬態する際に擬態元の記憶と思考パターンをも複製する。本来我々ワームは、擬態元を殺し、その擬態を以てその存在に成り代わり生活に溶け込むのだが、俺は違った。

斬鬼の強い意志が、俺のワームとしての本能を凌駕してしまい、本能を駆逐してしまったのだ。

そして今の俺は、斬鬼ら鬼と協力し、同胞から人間を護ることを己の使命としている。

かつてのここでのボスだった「ノグレイジ」と呼び分けていた個体がデイレイドに倒された今、この世界にいるワームの中で一番強いのは、俺だ。

ワームの社会は野生生物のそれとほぼ同じ、力が強い者が格上。そして最も強いものはその群のボスとなる。

そしてそのボスの命令は絶対。

いま俺はそのボスとしての特権を行使し命令を発している。ワームにのみ聞こえる波長の声を介して、ここ周辺のワーム共に一カ所に集合せよ、と。

……人間との共存、あるいはどこかでひっそりと暮らせる方法を模索しているうちにも人間への被害は広がってしまう。いくら同胞の為とはいえ、平和的解決までの時間と人々の命を天秤にかける訳にはいかない。

だから俺は、戦いながらも悩み続けていた。この擬態と記憶を得て、鬼たちの協力を取り付けたあの時からずっと。

……結局、間に合わないのかもしれないが。

「ザ斬鬼さーん！」

小娘の声が聞こえてきた。

と言うことはディレイドがとうとう俺たちの本来いた世界の仮面ライダーを連れて来たということだ。

「……間に合わなかったか。」

ため息は山の風に吹き浚われていった。

こんな山風の前の呼気のように消え去る運命なら、我々は一体なんのために生まれてきたのだろうか。

> i 3 4 7 5 — 5 3 8 <

崖の縁に立つ黒衣の武道着を纏う放埒な印象の男、の姿に擬態したザ斬鬼の元に、瞳子と各務がやって来た。

「ふん。小娘。そっちのが例の仮面ライダーか。」

「は、はい」

振り向いたザ斬鬼の問いに、やや身を固くして答える瞳子に僅かに苦笑するザ斬鬼。

「……俺はお前らの師匠ではない。あまり固くなるな。」

「は、はい……」

困惑顔でうなずくも、やはり納得のいかない様子であったが、ザ斬鬼もそれ以上の追求はやめ、瞳子の傍らにいる各務に目を遣った。

視線を転じた頃にはもう各務は既に歩き出し、無遠慮にザ斬鬼の目の前までやって来た。

それも胸板が触れるか触れないかの距離で睨みを利かす「ガン飛ばし」の間合い。もの凄い形相で睨み付けてくる各務に対し、だがザ斬鬼は子供のいたずらでも見るかのような笑みを浮かべていた。

「……どうした小僧。面白い顔をして。」

その言葉に、途端に怒りに朱に染まる各務の顔。

「……テメエ!? ワームのくせにいつたいナニ企んでやがんだ! ?」

啖呵を切る威勢は良いが、宙を泳ぐ手は胸倉を掴もうとしてやめた

手だ。

ザ斬鬼の、年季の入った覇気を察知して。

「ふん。本当に貴様は仮面ライダーか？透にいったい何を聞いてきた。」

ザ斬鬼の笑顔は揺らがない。

だが、いつの間にか各務の胸倉がザ斬鬼に掴まれていたことで各務と瞳子の顔が驚愕の表情に変化した。

「俺が悪意のワームだったなら、お前は既に死んでいるぞ。クロックアップするまでもない。今のこれは、ただの鬼闘術の基礎だ。

人間の業の範疇だ。」

そしてぱつと手を離し、申し訳程度にちよいちよいと各務の襟元を整えてやる。

「俺が信用できないなら、殺せばいい。だが、今のお前じゃ無理だな。」

続く辛辣な言葉に、各務の朱に染まった顔がドス黒くなり、握った両の拳がぶるぶると震え出す。

「そう急くな。どうせ、デイレイドに頼まれてこの世界のワームを駆逐しに来たんだろ？ そら。これが俺の作戦だ。」

言って下方を指さしたザ斬鬼に倣い崖下を覗き込むと、その数十メートル下の谷底の拓けた場所が緑色の何かで埋め尽くされ蠢いているのが見えた。

「っなっ!？」

「ワーム共は虫と同じなのは知っているな？ ボスの命令には絶対服従。今の俺には造作もないことだ。」

「……あ、あんた、こいつらを呼び集めて、いったい何を!？」

「それは無論」

驚愕の表情で震える各務と瞳子に、ザ斬鬼はいたずらめいた笑みを浮かべて宣った。

「ここで一網打尽に殲滅するのよ。効率的だろう？ そして小僧。」  
改めて各務に向き直り。

「恐らくワームはこれで全部ではないだろう。俺は、最後の一匹になるまでこれを繰り返すつもりだ。……今ここで俺を殺すのは、得策ではないだろうな。」

「……つくつ……!?!」

剥き出して歯ぎしりする各務の肩を気安く叩いてザ斬鬼は崖の縁へ歩み寄った。

「お前は、お前の為すべき事をしろ。お前は、仮面ライダーなんだろう?」

言い置くと、身を翻したザ斬鬼は止める暇もなく飛び降りていった。慌てて駆け寄った各務と瞳子が見たものは、落下の途中で漆黒の蟹のようなワーム・成体に変化した。正しくは斬鬼の擬態を解除したウカワームの姿だった。

数十メートルの距離をもとせずに着地したウカワームは、ワーム・サナギ体の群の中に飛び込むと、片っ端から喰い散らかすかのような獰猛な暴虐で以てワームを斬り裂き屠ってゆく。

連続する断末魔の緑の爆炎がまるでワームを薙ぎ払ってゆくかのようだ。

「あ、あの、各務さん」

「……お、俺は、マスクドライダー・ガタツクの適合資格者だ!」  
突如絶叫した各務に瞳子はびっくりして後退った。

そこへジョウントを抜け飛来した青いクワガタ虫型メカ・ガタツクゼクターをキャッチし、上着の裾を振り払った各務は腰に巻いてあったイクイツプデバイス「ライダーベルト」のセットアップレールにガタツクゼクターを右から差し入れ装着した。

「変身!」

《ヘンシン!》

ベルトの縁の上下から、ハニカム構造状に展開構成されてゆく装甲。それは全身を包みきり、仮面ライダー　ガタツク・マスクドフォー　ムの姿を現した。

黒地のボディスーツの上にシルバーの鎧、ブルーで裝飾された装甲

各部と、特徴的な丸い頭と両肩の突起。

『おりゃああああ！』

一発、左掌を右拳で打ち合わせたガタツクは、そのまま背後の瞳子など忘れたように崖から飛び出した。

「各務さんっ!？」

ワームを踏み潰して着地し緑の爆炎から姿を現したガタツクに、振り向いたウカワームは嘲笑するように肩を揺すって応えた。

『ほう。多少は役に立つんだろうな。』

『……あんたのことを信用した訳じゃねえ。』

同じく向き直ったガタツクは腕を振って叫んだ。

『あんたは確かに有用だ!だから今は生かしてやる!だけど忘れんな!あんたは、最後には俺が倒す!』

『ふん。覚えておこう。』

そして二体は背を合わせてワーム・サナギ体の群に向き直った。

『うおおおおお!』

ガタツク・マスクドフォームの装備、両肩のガタツクバルカンから放たれる毎分五千発という連射性能のイオンビーム光弾がワームの群目掛け一斉射された。

取り出したゼクトクナイガンの銃身部分を握りアックスモードとしたそれを振りかざして迫るクライプ・ライダーフォームに、デイレイドはカレイドブレイドを引き抜いて応じた。

ガガキーン!

激しい雷鳴のごとき轟音を響かせた激突の瞬間、あるうことがカレイドブレイドが地面に叩き付けられそれを握るデイレイドの身体が地面を抉って激しく吹き飛ばされた。カレイドブレイドを手離さなかったのが不思議な程の勢いである。

森の木々を数本砕き貫いて激突し落下するデイレイドの身体。千切り飛ばされた木は通常空間にあるため宙で静止している。

『おいおい。大げさなやつだな。』

アックスモードを振り下ろした姿勢のクライプが嘆息と共に姿勢を戻した。

クライプの足元の地面には、打ち落とされたカレイドブレイドとブレイドが激突して出来たクレーターがあった。

『む？』

そしてその手の異常に気付き持ち上げたアックスモードは、刃部分がかレイドブレイドの刃の形でへこみ、柄の部分が拳の先でひん曲がっていた。

マスクドライダーの装甲素材にも使われている超硬金属ヒイロノカネで出来たゼクトクナイガンを、クライプはその膂力だけで破壊してしまっただの。

> i3476—538<

『……またか。一回しか使えない武器とは不便なものよ。』

言って、自覚なく捻じ曲がったアックスモードをぽいと放り棄て、クライプは両手をぶらぶらさせてブレイドの復帰を待った。

『どうした「悪魔の影法師」。まだたったの一撃だぞ。』

『ああ。そうだな。』

森の奥に押し込まれたブレイドは今、カレイドブレイドを杖にようやく身を起こしたところだった。

それも、左手のみでカレイドブレイドを支えている。右手首が半回転して有り得ない方向を向いているからだ。

振り上げた剣をもの凄い威力で叩き落とされたのだ。その瞬間剣を握る右手首が捻れた。

だが身体の破損にもたいした痛痒を見せずにブレイドは、立て膝の姿勢でカレイドブレイドのスライドカバーを開き、剣を肩に立てかけた状態でカードを取り出し、それをスリットに挿し入れるとスライドカバーを閉塞してから剣を無事な左手で掴み立ち上がった。

《アタックライドウ・マイト！》

全身のパワーを増強し、今度はブレイドから襲いかかった。

『さあ来いー！』

叫ぶクライプめがけ無言で振り下ろされたカレイドブレイドを、クライプは両腕の装甲でブロックした。

増強された腕力により、今度は逆にクライプを後退させるが、それも僅かのこと。

『ふんっ！』

軽そつに聞こえる気合いの声と共にカレイドブレイドが押し返され淀みなく繰り出されたクライプの肘がデイレイドの胸郭をそれと分かる程へこませて吹き飛ばした。

身体を「く」の字に曲げ、再び木々を砕いて森に飛び込んでゆくデイレイド。

『どうした「悪魔の影法師」。その程度なのか？』

面白がると言つよりは、どちらかと言うと心底不思議そつに問いかけるクライプ。

森の奥に消えたデイレイドからの返事は、ない。

『うおおお！ キャスト・オフ！』

絶叫と共に、ベルトに張り付くガタツクゼクターの角をフィンガースナップで弾いて開き、僅かにチャージアップを待ってから半回転させた。

《キャスト・オフ！》

全身を電光が這い回ると共に細かく分割されたマスクドアーマーが部品単位で次々とせり上がり、やがて一斉に弾け飛んでいった。

《チェンジ・スタッグビートル！》

顎の両サイドのローテートを基点に立ち上がったエッジが二本角を構成し、ガタツクはライダーフォームへと移行した。

『クロツクアップ！』

《クロツクアップ！》

ベルト側面のスラップスイッチを叩いて加速空間に突入するガタツク。

通常空間に置き去りにされ途端に身動きを止めるワーム・サナギ体

の群を前に、ガタツクは両肩に突き出たグリップを握って引き抜き、二振りの曲刃・ガタツクダブルカリバーをかざして駆け出してゆく。  
『おりゃあああああ!』

クロックアップできないワーム・サナギ体などライダーフォームの敵ではない。

次々とワームを屠ってゆくガタツクの視界の端に、やはり同様に加速してワームを駆逐してゆく漆黒のウカワームの姿が見えた。

『……ちくしょうっ!?!』

訳の分からない怒りと悔しさに、絶叫しながらもワームを斬り捨ててゆくガタツク。

だがその時突然、目の前のワーム・サナギ体があるうことがガタツクの斬撃をひよいと避けた。

『なに!?!』

思わずつんのめるガタツク。

まさかサナギ体でもクロックアップできるやつがいるのか!?

その疑念は復帰した自然の騒音に掻き消された。

何事かと周りを見れば、なんとワーム・サナギ体全てが普通に動作している。

いやつまり、ガタツクのクロックアップが予告なしに強制停止したのだ。

先ほどのワームの回避は、なんのことはない、移動の途中だったワームがたまたまそのタイミングで動いただけのこと。

だがしかし、なぜガタツクの加速が解除されたのか。

装着者の意識に直結してサポートするライダーシステムの補助知能は、今もクロックアップシステムは稼働中だと表示している。

『ど、どうなっただこりゃ!?!』

困惑している間にも、通常空間に復帰したガタツクの姿を認めた周囲のワームたちがガタツクを振り向き取り囲み始める。

『くっ、くそっ!?!』

有り得ない異常に各務の思考が空転する。



補助知能もエラーを起こし、装着者に開示する戦術すら意味不明の記号を羅列してゆく始末。

それに直結している各務自身の意識も混乱に巻き込まれ正常な判断ができない。

とうとう寿司詰めに押し囲まれ、手前のワームらがデタラメにガタツクを殴り始めた。

装甲の薄いライダーフォームではサナギ体の攻撃ですらダメージを完全には阻めない。

「ッガツ!? くつそ!?!」

全包围から滅茶苦茶に殴られスパークが迸る。

システムの維持も限界か。

そう思われた時。

唐突に世界が無音になり、停止した。

「……え?」

目の前のワーム・サナギ体が、腕を振り上げたまま止まっている。補助知能も正常を取り戻し、直結する各務の意識に正常な情報を送り出してきた。

加速空間に、戻ったのだ。空転していたギアが噛み合ったみたいに。

「……な、なんだかよく分かんねえけど!」

再び振り回されるダブルカリバーが、密集していたワーム・サナギ体の群を、まるで草でも刈り取るように斬り裂いていった。

「……ふむ。手間を掛けさせる。」

倒壊した樹木の陰に座り込んでいたデイレイドは、呟きとともに立ち上がった。

丸くへこんだ胸郭もそのまま、デイレイドはカレイドブレイドを真上に放り上げると続いて同じ左手にカードを一枚抜き出し、それをも放り上げ、代わって落下してきたカレイドブレイドの峰部分をキヤッチする。

そしてそのまままるでショットガンのポンプのように剣を振りス

ライドカバーを開放すると、剣を僅かに宙に浮かせてグリップを持ち換え、落下してきたカードにスリットを向けて振り上げカードを挿し入れさせた。

続いて剣を振り下ろす動作の勢いでスライドカバーを閉塞する。

《ファイナルアタックライドウ・デイ・デイレイド!》

虹色の輝きを放ち始めたデイレイドは、そこから勢い良く駆け出していった。

《ファイナルアタックライドウ・デイ・デイレイド!》

『む?』

突然聞こえてきた音声に訝しげに辺りを見回したクライプの周囲に、デイレイドのマークを描いた巨大なカードのヴィジョンが七枚、取り囲むように次々と出現した。

『おおおおお!』

そこへ、カードのヴィジョンの隙間を抜けて駆けてくるデイレイドの姿。

『来るか! さあ、お前の力を見せてみる!』

まるで抱き留めようとするかのように両腕を振りかざしたクライプの懐へデイレイドが、カレイドブレイドの一閃が飛び込んだ。

『ぬっぐ!?!』

咄嗟にブロックに回した腕の上から構わずに斬撃を叩き込み通過してゆくデイレイド。

意外な威力にクライプが僅かに体勢を崩したその瞬間。

クライプを取り囲む七枚のカードのヴィジョンから、次々と七色のデイレイドが飛び出し順番に各包囲から斬撃を浴びせて通過していった。

『っぐ!?! おおおお!?!』

そして最後。

すべてのカードのヴィジョンから再び、だが今度は同時に七色のデイレイドたちが、そしてカードのヴィジョンを飛び越えて本物のデ

イレイドが襲いかかり、クライプを八重に斬り裂いた。

『おお！？　ぐうおおおおおお！？』

これこそが、真のイレイド自身のファイナルアタックライド『デ  
イレイドデイレイスラッシュ』。

カレイドブレイドを振り下ろした姿勢のデイレイドに分身たちが重  
なり収まったところで、全身にスパークを迸らせたクライプの巨体  
がよろめき、やがて倒れ伏す直前で大爆発を起こし消滅した。

《クロックオーヴァー。》

加速が終了し、辺りの雑音が復帰する。

それと同時に、先ほど砕かれた森の木々が一斉に地面に落下し騒々  
しい激突音を響かせた。

「……………あ？」

最後の姿勢のまま固まっていた震フルが怒りにひん曲げていた形相を、  
その異常に気付きまた逆方向にひん曲げた。

『……………クライプなら、倒したぞ。』

「ああ！？　き、貴様、クライプを、「観測者」を……………しよ、  
正気か！？」

厚い紅色の唇をわななかせ震がよろよると後退る。

周りを見回すが、デイレイドの手前にくすぶる煙以外に、それと示  
す痕跡は何もない。

『良く分かんが、俺の使命の邪魔をする者は、なんであろうと排  
除する。……………お前自身はたいした脅威には見えないな。』

「……………くっ！？　覚えておおき！」

吐き捨て、盛大に顔を歪めた震は身を翻して走り去っていった。

原作と同じく滅茶苦茶な馬鹿力を発揮したクライプと言うか台場和馬。その馬鹿力を是非ワームとかにぶつけてみたかった。

なんとなくこの人、生身の素手の一撃でアンデッドのバツクル開けちゃうと思う。

はてさて、今話でいったい何が起こったのか。次回明らかになるといいなあ。

……斬鬼さんだって分かりますか？それだけが心配。

震が姿を眩ませて後、気配が完全に消失したのを見届けるとディレイドは再びカレイドブレイドを放り上げ、左手ひとつで投げたカードとカレイドブレイドを器用にお手玉でもするように持ち換え、宙に舞うカードめがけて剣のスリットを一閃させ装填させると、振り下ろす勢いでスライドカバーを閉塞した。

《カメンライドウ・デイスガイズ!》

認証の音声と共にディレイドの姿がドット柄のノイズに包まれ、やがて人間・神楽見 透の姿を現した。

『カメンライド・デイスガイズ』は、あくまでもディレイドに偽装を施す効果のカード。

先ほどの戦闘で捻れていた右手首は、人間の姿となった今は元に戻っているように見えるが、実質的には使用不能だ。しばらくは。

時間を置けばいずれディレイド自体の身体のダメージは復元する。

「しかし、やはりナンセンスだ。」

翻した左手の指先に、手品のように三枚のカードを取り出して呟く透。

それらは、新たに追加されたカード。

それぞれ「仮面ライダー クライプ」が描かれており、すなわち端からクライプの「カメンライド」「ファイナルフォームライド」「ファイナルアタックライド」のカードであった。

「……やれやれ。やっといなくなったようだな。」

そこへ、別方面の森の木陰から巨大な人影がひょっこりと姿を現した。

「本当に、あそこまでする必要があったのか？和馬。」

向き遣ってごく普通に問いかけたその相手は言わずもがな、台場和馬その人であった。

「しかも、前準備もなしに俺と接続するなど、前例のない現象だ。

「お前、本当に人間か？」

カードをかざして追求する透に和馬は鷹揚にうなずいて見せた。

「ふむ。ずいぶん人間臭いことを言うようになったなディレイド。」

あの小娘の影響か？」

「なんのことだ。」

「別に不思議なことではあるまい。貴様たちワールドスライダーは気持ちを通じ合わせることで絆と成し、己と接続して自身の能力とする。逆に、こちらに協力する気があれば、条件はそれだけで満たされる。」

いつもの人懐っこい笑顔で、自らのこめかみを指した人差し指をこちらに突き付けて言う和馬に、透は無表情の中に、わずかにきよとんとした雰囲気混せて手元のカードを見下ろした。

「……そういうものか。」

「そういうものだ。おかげで口に出さずともあの女を追っ払う作戦が通じて解決できた。」

「……こちらからは思考を伝えることができない。俺は承認したわけではないのだがな。」

「これを結果オーライ、と言うのだ。覚えておけ、ディレイド。いや。貴様のほうが良く分かっていることか？」

不承不承といった雰囲気透に、にやりと笑みを深めて答える和馬すなわち。震の前で行われたディレイドとクライプの対立と戦闘は、全て茶番だったのだ。それも、意識を繋いだ和馬が一方的に発案し実行された。

「だいたい、わたしに言わせればあの女のほうがずっと深刻だ。」

一番最初にウチの世界に外からやって来たのはディエンドで、……おっと、それは知っているか。あれもあれで最悪だがな。その次にやって来た鳴滝とか言う男とあの震とか言う女は同じくらい厄介だ。さりとて殺してしまう訳にもいかぬし、捕らえるなど論外だ。ふむ。

「和馬には珍しい長広舌だったが、相変わらずの柔和な笑顔はそれほ

ど困っているようには見えない。

「だとして、わざわざお前が一回死んでやる程の効果があるとは思えないのだがな。」

「あっさりと倒しておいてよく言う。」

その言葉に和馬はからからと笑い声をあげる。

「わたしは「観測者」。あらゆる時点に同時に存在することができ  
る。自分で言ったことだ。なにより効率的だから、そうしたままでよ  
各務にはわたしが復帰するまでの一瞬だけ苦勞をかけてしまったが  
な。」

すなわち、先ほどの戦闘で倒された台場 和馬は世界を認識する「  
観測者」の有識分体・言わば分身の一体。「カブトの世界」にい  
る台場 和馬からの干渉の復旧に僅かなタイムラグは必要だが、こ  
うして新たに存在を確立し続行させること自体は可能なのだ。

つまり、新たに現れたこの台場 和馬も分身の一体。

「だがなディレイド。ひとつ言うておく。……死ぬのは、死ぬほ  
ど痛いぞ。」

一瞬だけ真面目くさった顔で告げ わははと豪快に笑う和馬からは  
目を逸らし、瞳子たちが走り去って行った方角を見遣った透は、と  
ある可能性を検討していた。

「（「観測者」が消滅した一瞬に、新が致命的な負荷を負ってなけ  
れば良いが……）」

和馬が「苦勞」と表現していたなら、少なくとも死んではないは  
ず。それがたとえ虫の息でも。

その新がまさに最悪のタイミングでクロックアップを失い窮地に陥  
ったことなど微塵も知らぬ透であった。

「さて行くぞディレイド。この世界に対処できない脅威を退治しに。」

「うむ。」

ディレイドのダメージの復元を待つて告げた和馬に合わせ、透もう  
なずいてディレイドライダーとカードを取り出す。

再びジョウントを抜け飛来したクライプゼクターをキャッチした和  
馬と並び立ち、カードをスリットに挿し入れながら共に告げる。

「変身。」

《ヘンシン！》

《カメンライドウ・ディ・ディレイド！》

クライプゼクターをセットアップされたベルトの縁からハニカム構  
造状に巨大な装甲を展開構成させるクライプ・マスクドフォームと、  
殺到したグレーのヴィジョンを纏い飛来したライドピラーを頭部に  
収め体色をイエローに変じ転身を完了するディレイド。

そのディレイドの胸郭と右手首は既に元の形状に戻っている。

ディレイドは続けてカードを挿し入れスライドカバーを閉塞した。

《ファイナルフォームライドウ・ク・クライプ！》

『和馬。死又程くすぐったいぞ。』

忠告するディレイドに、クライプは事も無げに言い返した。

『ふむ。あの天堂 総司に負けず劣らずわたしも鍛えているぞ。果  
たしてそのわたしに通用するかな？』

不敵に告げて、クライプは自信満々にディレイドに背を見せた。

『では。』

『ぬっっっっっっっ！？』

至極あっさりとカレイドブレイドを振り下ろし、身体に剣を透過さ  
れたクライプは口程にもないリアクションを残して迅速に浮遊・回  
転・変形して巨大なクライプゼクターへと変移した。

これこそがクライプのファイナルフォームライド『ゼクタークライ  
プ』。

『……おい貴様。これはなかなか凄いぞ。』

『あいにくと分かってやれないな。』

ばやく巨大クライプゼクターに素っ気なく返し、ディレイドは浮遊  
するゼクタークライプの足に跳躍して掴まった。



『行くぞ。クロックアップ。』  
和馬の宣言に、同期して加速した二人はその場から迅速に飛び立っていった。

『だりやああああ!?!』

ガタック・マスクドフォームが吼え、ワーム・サナギ体を殴り、蹴り、そしてガタックバルカンを斉射して薙ぎ払う。

今のガタックは、通常空間でプット・オンによりマスクドアーマーを再装着して戦闘を続行していた。

ワームに対抗する為に造られたマスクドライダーシステムといえど、クロックアップの連続施行は大きな負荷となる。

装着者の意識に直結するシステムの補助知能の警告に従い、新はシステムを一時休眠させマスクドフォームで戦っていたのだった。

やがて無数のワーム・サナギ体の群の中で幾度目かの合流を果たした漆黒のウカワームと背中を預け合い構える。

『おいあんた!喚び集めんのちょっと多過ぎたんじゃないのか!?!』

『ふん。もう弱音か?いつでも不貞寝していいんだぞ?』

『へっ、あんたこそ、ちょっと後悔してんじやねえのかよ!本当にこれ一人で片付けられるつもりだったのか!?!』

『なんだ。俺のこと心配してくれるのか。』

『ふざける!集めるだけ集めといてくたばられたら、周りの人たちが大変だろうが!』

『そうだ。だから俺たちは倒れる訳にはいかんぞ。』

『当たり前だ!うわああああ!』

叫び、再びワームの群へと突入してゆくガタック・マスクドフォーム。

その時、システムの補助知能がクロックアップシステム休眠解除のサインを灯して見せた。

『よっしゃあ!キャスト・オフ!』

フィンガースナップでベルトのゼクターの角を弾いて開き、それを

半回転させた。

《キャスト・オフ!》

システムの認証と共に、チャージアップされた電光を迸らせ次々と部品単位でせり上がったマスクドアーマーが全方位に弾け飛び、取り囲んでいたワームを薙ぎ払い、激突したうち数体をそれで撃破した。

《チェンジ・スタッグビートル!》

『うおおおおお!』

顎のローテートを基点にエッジが二本立ち上がり、クワガタの角を形成してガタツク・ライダーフォームへと移行する。

『クロツクアップ!』

《クロツクアップ。》

先に引き抜いたガタツクダブルカリバーを握り締めた拳でベルト側面のスラップスイッチを叩き加速空間へ突入するガタツク。それ以降はまた一方的な駆逐へと流れが変わった。

ウカワームがボスの権限でこいつら手下どもの孵化を禁じているから、こうして成虫の脅威にさらされることもなく一方的に撃滅できている。

その一点のみにおいては、感謝してもいい。

だが、心の奥では僅かな信頼感を覚え始めていることを、新はまだ自覚まではしていなかった。

> i 3 6 0 2 — 5 3 8 <

『うおりゃあああ!』

丁度そこに一箇所に固まっている数匹のワームを見つけ、ガタツクはベルトのゼクターホーンを元の位置に戻し、僅かに弾いてから再び半回転させた。

《ライダー・キック。》

『ライダーキック!』

電光を纏った蒼いローリングソバットがワームの群れ一塊をまとめて貫いた。

そこに、飛翔する大きな影が横切った。

『なっ!?!』

まさか成虫がクロックアップしたのかと見上げたガタツクのセンサーが捉えたのは、巨大なセミ型メカにぶら下がる黄色い人影であった。

それは、かつて見た士が変身した姿、デイケイドにどこことなく似ている。

『おい!まさか透か!?!』

『そうだ。』

『おお。まだ生きていたか各務。』

『はあ!?!』

やはり黄色い姿は透が変身した姿だったが、巨大なセミ型メカに台場の声で返事をされ、新は素っ頓狂な声をあげた。

『ほう。これはまたとんでもない数を集めたものだ。』

『だが、今の俺たちには関係ない。今から全て殲滅する。』

和馬の感嘆の声に透が続けて告げ、デイレイドはカレイドブレイドを放り上げると、翻した左手に取り出したカードを放り投げ、代わってキャッチしたカレイドブレイドのスリットをカードめがけて一閃し装填させ、剣を振り下ろす勢いでスライドカバーを閉塞した。

今回はやけに片手でカードを入れ換える局面が多いなと思いつながら、  
《ファイナルアタックライドウ・ク・クライプ》

宙に滞空するゼクタークライプからデイレイドが手を離すと、ゼクタークライプは翅を大きく広げてその身を変形させてゆく。

そして下降すると落下中のデイレイドに組み付き、まるで飲み込むようにデイレイドの上半身に合体した。

さながらアメフトのプロテクターを超え、戦車を着込んだかのような重厚なアーマーとなったゼクタークライプ。

デイレイドの腹の前を覆うゼクタークライプの腹部パーツの中心に一基、背中から展開されている一対の翅にそれぞれ二基ずつの黒い

円盤、つまりは巨大なスピーカーを五基出現させたゼクタークライプと合体したデイレイドは、再び飛翔しワーム・サナギ体の群の中心上空へと移動した。

> i3603—538 <

そしてデイレイドがカレイドブレイドを振ると、デイレイドのマークを描いたカードのヴィジョンが数枚、ガタツクの周りに閉じ込めるように舞い降りた。

『なんだこれ!?!』

見れば、デイレイドを見上げる漆黒のウカワームと、崖の上で停止している瞳子にも数枚のカードのヴィジョンが取り巻いていた。

『やれ!クライプ!』

『応!』

デイレイドにクライプが応えた瞬間。

虹色の輝きを放ったアーマーの五基のスピーカーから無数の弦楽器を一齐に引つ掻いたかのような騒音が轟いた。

目に見えた訳ではないが、同心円状に広がる音波はまずデイレイドの直下のワーム・サナギ体を押し潰すように分解消滅させ、その謎の破壊はそこを中心に全方位へと拡大してゆく。

つまりそれはクライプのチャージアップアタック《ライダーソニック》を発展・強化させた攻撃。

強化された『破壊音波』が、効果範囲にあるものを有象無象の区別なくその固有の波形の振動によって分子間の結合を破壊して蹂躪し駆逐してゆくのだ。

その破壊半径が迅速にガタツクのいる所を通過してゆくが、ガタツクにはなんの痛痒もない。取り囲むデイレイドのカードのヴィジョンが破壊音波からの防壁となっているのだ。

その周りでは、草木や岩石もろともワーム・サナギ体が破壊音波を受け粉々に崩壊してゆく。

騒音がこの谷を舐め尽くした時、ようやくそれは終了した。

《クロックオーヴァー。》

ぼん！どどん！

加速終了の合図と共に、加速空間で既に死んでいたワーム・サナギ体が全て、一匹残らず緑の爆炎を撒き散らして消滅していった。

これがデイレイドとクライプのファイナルアタックライド『デイレイドデイレクティブソニック』。

ザ斬鬼とガタツクだけになったこの谷に、デイレイドと、一回転して元の姿に戻ったクライプが着地した。

『ここにいたのは、これで全部だな？』

「ああ。そうだ。」

デイレイドの問いに答えるザ斬鬼。

『……遅かったじゃないか。挟み撃ちはどうしたんだ？』

ガタツクがクライプへと不機嫌に問いかけるが。

『ふむ。少々ヤボ用ができてな。よそ見せざるを得なかった。だが、貴様が無事でなにより』

『やっぱあんたかあああ！？』

その言葉にガタツクがクライプに掴みかかった。

『突然クロツクアップが解除されるし、もうあん時俺あどうしようかと』

『はっはっは。窮地を生き抜くとは少々見直したぞ各務。』

『違うだろ！？ あんだる別に言葉が！？ ごめんなさいとか！？』  
微動だにしないクライプにガタツクがしがみ付く様はまるで大木に張り付くクワガタ虫のようだ。

その時、そこへごごと何か深く鳴動するような音が聞こえてきた。  
『……！？ なんだ？』

続いて音は身体にも感じ取れる振動と変じて足下から伝わってくる。

『地震！？』

ガタツクが慌てた様子で、他の三人は黙して周りを伺うも、ただの地震とは様子が違うその原因は未だ発見できない。

『ああああ！？』

いち早くそれを発見した新が悲鳴をあげた。

左右に切り立った崖が、その高度を下げ、土埃と共に崩落しようとしていたのだ。

『地滑り！？ まさか俺たちの戦闘の影響で……』

そこまで考えて、新はついさつき、何が起きたかを思い出した。

広範囲を破壊する「何か」を撒き散らした元凶を。

『おまえらあああああ！？』

『ふむ。どうした』

『いいから、退避したほうがいいぞ。この谷底に生き埋めになりたくなかったら』

デイレイドとクライプに喰ってかかったガタツクに言い置いて、漆黒のウカワームに変じたザ斬鬼がさっさとまだ無事な崖へと跳躍していった。

先ほどの『デイレイドデイレクティブソニック』からカードのヴィジョンで守られたのはザ斬鬼とガタツクと瞳子のみ。それ以外の「破壊音波が接触する範囲」は一切保護されていなかった。

無差別な広域織滅攻撃はこの狭い峡谷の底にあって、左右の岸壁を崩落させるというとんでもない後遺症を生み出してしまったのだ。

『うおおおお！？』

崖の崩落に飲み込まれまいと必死にライダーシステムの脚力で跳躍を繰り返す新だったが、そこでもう一つ思い出した。

瞳子がカードのヴィジョンに守られたということは、そこも破壊音波の範囲だったということ。

そこに気付いたガタツクは、跳躍の軌道を変えたデイレイドよりも早くその方向へ崩れる斜面を駆け抜けていった。

『瞳子ちゃああああんっ！？』

『ひああああ！？』

崩壊してゆく足元に悲鳴を上げ、足場の土塊と共に転落してゆく瞳子。

そこへガタツクが飛び込み、瞳子をすくい上げるとすぐさま飛び退

き別の岩場を足場として無事な崖上の平地へと跳躍していった。

やがて崩落が治まり地形を大きく変えた峡谷の上、崖の端で、変身を解除した新と抱きかかえられて呆然としている瞳子の元に、その傍らに立つ透の背後に和馬とザ斬鬼がやって来た。

「ふむ。よく助けおおせたな各務よ。」

「……あのな。」

呆れた顔で新が和馬を見上げたそこで、突然ザ斬鬼が透の後ろ頭を叩き、次に和馬を殴り付けた拳を痛そうに抱えて悶絶していた。

「……なぜだ。」

「どうした今のは。」

頭を押さえた透とけろっとした顔の和馬がそろってザ斬鬼に問いかける。

「……お前らな、もう少し後先を考えて戦え！」

拳を抱え苦悶の表情で怒鳴るザ斬鬼だったが、やはり二人には通じた様子がなかった。

「やれやれ。瞳子ちゃん。どうだい？立てるかい？」

「……」

座る新に抱きかかえられている瞳子は、なにやら呆然と言うよりは困惑の表情で固まっているようだった。

「瞳子ちゃん？もう大丈夫だよ？」

「……え、つと、あの……」

なぜか瞳子はなかなか離れようとしなない。

その様子を見て顔を見合わせた和馬とザ斬鬼は、そろって肩をすくめた。

そしてザ斬鬼は透の肩を小突いて促した。

「もう行け。こっちはもう大丈夫だ。」

「そうか。」

うなずいた透は、特に感慨もなく背後へ振り返る。

「なら、俺はそろそろ行こう。あとは頼む。」

「うむ。任せておけ。」  
台場の返事を受け、透はその場から立ち去っていった。



と言うわけで、茶番で死んで再登場するという、ガチで死んだフリをしたザ斬鬼を超えたパフォーマンスを見せた台場 和馬ですが、異世界にいる彼が「いくらでも繰り出せる分身」であることを御理解頂けたでしょうか。

どうか「ズルい」とか言わないであげて下さい。話すと長くなりますが、彼の立場は「不死身」とはまた意味が異なります。 エントロピーは増大するゆえ、あんまり死んでるとそのうち狂って本当に死ぬと思うし。

そう言えば、ディケイドもいちいち技名言わないため忘れていましたが、各ライダーと連携するファイナルアタックライドにも個別に名前が付いてるんですね。

と、言うワケで前回辺りからディレイドのファイナルアタックライドの各名称を入れ始めました。

ディケイドが使用したものと同一の技は、当然名前も同じです。それでディレイドのみが持つファイナルアタックライドで、まだ御紹介していないものがひとつ。今後その技が再登場するか分からないので、ここで表記しておきます。あとで当該部分に足しておこうかな。

・ディレイド&ウィブのファイナルアタックライド『ディレイドオラトリオブレイク』

track・33 電王の世界(前書き)

当分の「電王の世界」におきましては、拙作「デイレイルエクリプス 仮面ライダー電王 外伝 仮面ライダー エクリス(N2795D)」と、なんと今回 もふ先生よりお借りしました「仮面ライダーアリア」歌う列車、参上！(N0900J)」の登場人物と要素が、原作ディケイドの「九つの世界」と同様に設定を変えて登場致します。

まずは是非 拙作「デイレイルエクリプス 仮面ライダー電王 外伝 仮面ライダー エクリス(N2795D)」と、もふ先生の「仮面ライダーアリア」歌う列車、参上！(N0900J)」の方からお読み頂けると、当話をよりお楽しみ頂けるかと思えます。よろしければ、是非どうぞ。

遙かな未来、人類は時を越える術を編み出し、それはやがて普及するにつれ一般の人々にも気軽に利用できる旅行手段となつていった。だが、新たな概念は日常に浸透するにつれ只の「普通」に成り下がりに、人々はそこに新たな価値を見出すも、結局やることに何一つ変わりはないのだ。

曰く、それを「ただの移動手段」とし、「生活の移動手段」とし、「行程を楽しむ移動手段」とし、「それ自体を愛でる対象」とし、「旅行手段のひとつ」とし。

そして「犯罪の手段」とし、「犯罪を取り締まる手段」とする。そう。何一つ変わりはないのだ。

人類が自動車を生生活の中に取り込んだ時代と全く同じに。

「……だと言うのに、この世界の基点は2009年に置かれているのだな。」

他の世界でならば「近代的」と表する、高精度な設計によって構築された、透明感のある建築物内の通路で透はぽつりとひとりごちた。そこを、様々な意匠の姿の無数の人々が往来している。

この世界独自の概念の為、透もここを表現する他の世界にも通じる比喩には見当が付かないが、それでも一番近いものを挙げるとするならば、『駅』か『空港』だろう。

それも、オートメーション化が進んだ都心の特急電車の駅及び駅ビルの内部か、国際空港の内部。

館内には天井各所から案内用の看板が下がり、人々はそれに従った流れを構築している。ように見える。

時折館内にアナウンスが流れ、窓の外の荒野に流れる無数の線路を見ては、実際に『駅』と言わざるを得ない。

何が透の判断を曖昧にさせているかと言えば、透の持つ常識がディ

ケイドが一番長く接した世界の文明レベルを基準にしているせいであり、知識としてここが何なのかは良く承知しているが、勝手は異なる。

空を仰げば、天窓の向こうは虹色に揺らめく限界領域<sup>レイヤー</sup>。

つまりここは現実世界ではなく。

「時空間……時間線か。」

時の流れを行き来するタイムマシンの通り道である異空間「時間線」。

いつものように瞳子を目印にやって来た所が現実世界でなかったことで透は一時フリーズし、通路の真ん中でようやく状況を把握したところだったのだ。

そして把握してしまえば、周りの状況も見えてくる。

人々の動きは旅行等の乗り換えの為と言うよりは、行き場を見失い右往左往しているように見受けられる。

「ふむ。」

まずは情報収集だと見切った透は通行人をかわし、一方を目指してそこから歩き出し始めた。

やがて人気のないフロアにやって来た透は、ようやく目的の人物を発見した。

「瞳子。」

「！、透！」

呼びかけに気付いた、ベンチに腰掛けていた少女が読みかけの本を閉じて振り向き快活な笑みを浮かべて返事した。

「良かった。やっと会えた。前の世界から消えてからずいぶん時間がかかったみたいじゃん？」

ただ長いから纏めましたと言わんばかりの適当なポニーテールを揺らし、精悍な目つきでさばさばと言った感じで話しかけてくる瞳子。服装はタンクトップに多機能ベスト、ショートパンツと格好のチョイスだけを見れば「雑誌記者の瞳子」と変わらないが、こちらはよ

り実用性に特化した着こなし方をしている。

傍らに置かれた使い古されたザックと併せ、まさに「旅人」という名乗りが似合う様だ。

「前はあたしン所にだったら一歩で来れる〜とか言ってたじゃん？」

「この世界の時空が激しく乱れていることが原因だ。この施設の内部の混乱も、そのせいだろう？」

問いに淀みなく答え、親指で背後を指して続ける透に、瞳子も間髪入れずに応えた。

「うん。ただの時空嵐だったらとうに解消してるはずなのに、もうまるで「災害」扱いだもん。あたしもここで長いこと足止め喰ってさ。」

がしがしとまるで男のように頭を掻いてばやく瞳子。時空嵐。

この世界に起きているその次元異常干渉のせいで、透も出現地点の確率干渉値の拡大を余儀なくされたのだ。

「ふむ。ならば次は駅長にでも話を聞かか。」

「あ。だったらちよつとここで待って。透が来るって分かってたからさ、あたしが駅長にハナシといたから。すぐ来ると思うよ。」

「どお〜も〜！ の 者、あるいは の影法師殿！お待ち申しております〜！」

そこに、甲高い男の声が、たびたび挟まれるピープ音に紛れて聞こえてきた。

「うわ。透がなんか卑猥なことになってる」

瞳子が口元に手を遣りくすくす笑っている。

「これはこれは大変失礼致しました〜」

全身白の制服に身を包んだ、扁平な顔をした中年男性が制帽を取りながらにこやかに挨拶をしてきた。

「ウチのアナウンス部の者は大変な気遣い屋で御座いまして〜！」

改めまして、わたくし、「駅長」です〜以後、お見知り置きを〜！」  
言って「駅長」と名乗った男は器用に制帽をくるくると回すと脇に

収め、握手の形の掌を差し出してきた。

その手を不思議そうにじつと見下ろす透に代わって握り返した瞳子が手を振った。

「ええ。よろしく願います。こいつ、こういう交流をよく知らないみたいで、他意はないんですよ」

「ええ存じておりますよ！お気になさらないでください」

瞳子のフォローに「駅長」も気を悪くした様子もなく応答した。

> i3626—538<

すなわち。これでここが間違いなく「駅」施設であることが確定する。「時を越える移動手段」の、駅。

荒野の直中に鎮座する、数棟の赤い巨大な移動駅施設『キングライナー・ステーションモード』。それがこの施設の正体である。

「さて！それでは、デイケイドと同様の使命を持つあなたに、まずは我々からの支援の御紹介を致します！まずはあちら！」

言って、駅長の掌が指し示した先の窓の向こうには、その彼方から線路を辿ってこの『ステーション』に入ってくる八両編成の水色の、まるで流水のようなデザインの「時の列車」の姿があった。

> i3625—538<

「なにしろここは、今まさに未曾有の危機とも言える時空嵐に見舞われております、お客様には安全な場所に避難して頂きまして

「時の列車」を全て時空の調査に充てさせて頂いているのです」

駅長は、あくまでも高いテンションを保ったまま悲痛な状況説明を語り出す。

「その為、今すぐお手伝いして差し上げられる「時の列車」はまずあれしか御座いませ〜ん」

「『デンライナー』はどうした。」

駅長の言葉の途中で透が口を挟んだ。

「デイケイドの情報によれば、世界に影響力を及ぼす程の力を持つ者がそこにいるはず。」

「ええ。誠に申し訳御座いせんが……」

それを聞いて、駅長が言い淀んだ。

「『デンライナー』はただ今、まさしくこの時空嵐の元凶の調査・対処の為、別の時空へ出向致しております。最後の報告によれば、鬼退治に行く」、とのことだ。」

「は？なに？桃太郎の世界にでも行ったワケ？」

冗談でも聞くようにあっけらかんと瞳子が聞き返すが、駅長はゆるゆると首を振り。

「ともあれ、あちらもこちらで一大事には違いありません。ですが！ただ今御用意致します『アリアライナー』も、『デンライナー』に負けず劣らずの力を持っておりますよ？きつと、お力になれるはずです！」

やがてそこに、こちらを目指してどやどやとやって来る一団が見えてきた。

『きみの う た聴いた気がして うしな わ れた譜面さまよ  
う』

すばああん！

まず調子つばずれた歌声と、それを断ち切る盛大なハリセンの音が聞こえてきた。

『旋律さえわすれられた この思いはどこへつづくの』  
すばああん！

こちらへ歩いてくる一団は四名。人間の女性が三人と、女性型イマジンが一人。

再三のツッコミに挫けず調子つばずれた歌声を放っているのはそのイマジンで、それを一番小柄なツインテールの金髪の少女が手元の文庫に視線を落としたままハリセンでどついている。

先頭を颯爽と歩くのは、やたら露出度の高いきわどい衣装を纏う妙齢の美女で、その中間あたりの位置をセミロングの髪の少女が歩いてた。

「はあい 駅長」

「ごぉ〜も〜 お待ち申しておりました〜」  
その先頭の美女が、駅長と慣れた挨拶を交わした。

> i3627—538<

『わたしに立ち向かうすべての〜 あいては後悔するわよ〜』  
すばああん！

その背後で、相変わらず歌をかなり立てるイメージと金髪ツインテールの少女のハリセンのフルスイングの応酬が続いていた。

「そっちのが例のオトコノコ？」

「はい〜。そうです」

背後の騒動を無視して、美女が透の目の前までやって来た。

そしてやって来るなりべつたりと透に絡み付いた美女の行動に、仰天して声をあげたのはその後ろにいたセミロングの少女であった。

「ちよ！？ オーナー！？ 失礼ですよやってんですか！」

「んふ〜 あなたが噂の「悪魔の影法師」さん？ん〜もうイイ男じゃな〜い」

艶めかしく抱きつく、「オーナー」と呼ばれた美女が甘ったるい声音で囁いた。

「ねええ？あなたのお名前、聞きたいなあ〜」

セミロングの少女は、注意はしつつも実力行使はやる前から断念していた様子で、諦観の眼差しで事の成り行きを見守っている。

瞳子としても、この程度は冗談の範囲内だと心得ているし、正直透の反応が楽しみなので放置していた。

そして透は。

「デイレイド。あるいはこの姿の時は神楽見 透と名乗っている。」

絶世の美女に抱きつかれているというのに、透は眉一つ動かさず、唇が触れるか触れないかの距離にある美女の顔を、まるでアリの目かカメラのレンズのような全く感情の籠もらない目で見返して質問の内容に淀みなく応えた。

「……………」

途端に不機嫌な顔になる美女。



あつさり身を離すと、オーナーと呼ばれた美女はすたすたとセミロングの少女の元に向かい、むぎゅー、と抱きしめた。

「美穂ちゃああん！口直しいいいい！」

「いひゃー！油断したあー！」

美穂と呼ばれたセミロングの少女の悲鳴がこだまする。

「……透。無反応はないんじゃない？」

「なにがだ。」

瞳子の呆れた声にも同様に返す透。

「ハンパにウロチョロしないで！ すわってアタシの歌を聴いて！」

すばああん！

その間も、イマジンの歌唱とツインテール少女のハリセンの応酬は続いていたようだった。

とうとうそのイマジンとツインテールの少女は、肩で息をしながら対峙した。

「……ねえ秋乃。作詞・あたし、作曲、どっかで聴いたアレ。歌・あたし、のゲリラライブの邪魔をしないでくれる？」

「……聴くに耐えないのよレイラ。次に口を開いたら、ハリセンのここが飛んでくから。」

まるで水色の妖精のような姿の、ご丁寧に波打つ髪までイメージされた女性型イマジン・レイラと、良く見れば金に近い茶髪のツインテールを提げた少女・秋乃がハリセンの折れ線部分の面を指さしながら威嚇し合っている。

その様子を眺めて瞳子がひとり、頭を抱えていた。透が素気なくしたせいで、話が全く進まない。

「……駅長さん。説明してくれませんか？」

「では僭越ながらわたくし駅長が、この度のミッションの御説明をさせていただきます。」

瞳子の要請に応えた駅長がフィンガースナップでぱちんと音を立てると、駅長の背後の空中に半透明のスクリーンが出現し、なんらか

の図柄が描かれた。

「まずは、この世界に現在起きている未曾有の危機について御説明いたしまあゝす。」

朗らかに「世界滅亡」を謳う駅長に、一同が注目する。

「過去の世界に大規模の時空震が発生し、過去と現在が一時的に繋がってしまいました。現在この時間線を襲っている時空嵐もその影響によります。歴史線の例えで表現すれば、アメリカを襲うハリケーンの最大級の災害を時空レベルで相似拡大させたような威力です。そこに敵性イマジンを以外の要素が介入したようです。」  
言いながら、空中に投影されたスクリーンに映し出された意味不明な科学記号っぽい何かの羅列を伸ばしたポインターで示して解説する駅長。

「それを現在デンライナーが調査中、未だ原因不明・復旧の目処も立たない状態です。」

と、あっさりとポインターをたたんで締める駅長に少女たちがそろって肩をコケさせた。

「そんだけ!？」

「さつき言ってたことと変わんないじゃん。」

「凄い状況だったのは、私たちさつきそこを通ってきたから、もう良く分かってることだけ。」

美穂、瞳子、秋乃が口々に言う。

「ふむ。なるほどな。」

「透!？」

ひとり、今の話に得心した様子の透に瞳子が仰天して振り向いた。

「あんだ、今ので何か得るものがあつたワケ!？」

「む? あのスクリーンにだいたい詳細は表示されていたが? :

…だがまだそれは「この世界での異常」だな。」

駅長の横に浮かぶスクリーンを指して言う透に、駅長とオーナー以外の全員が仰天した。

「あんだあれ読めたの!？」

「……あたし、ただの壁紙だと思って読むの放棄してた。」

「オーナーのへソ曲げたことと言い、時間線の特権階級並の変人ね……」

瞳子がつつ込み、美穂と秋乃がぬるい目つきで透という男の胸中の置き場所を密かに変更していた。

「あるんだろう?」「この世界の出自に寄らない異常事態」が、  
続けて駅長に向け、見透かすように透が呟いた。

それを受け、鷹揚にうなずく駅長。

「さすがですねえ。では、これよりそのことについて御説明致します。」

「うわ。通じてる。」

美穂の呟きは宙に消え、駅長はスクリーンの内容を変更させた。

「今のこの時空嵐の原因は、デンライナーが調査中のものの他にもあるものという見当は既についております。その要素のひとつを我々は既に確保しており、それに同期して出現した異常反応を示す地点への調査を想定し、実は我々はワールドライダーを、あなたが訪れるのを心待ちにしていたのでえす!」

「ちよつと待つてよ。」

そこに、オーナーが口を挟んだ。

「わたしはそんな報告 聞いてないわよ?」

「ええ 何しろ超・トップシークレット、でしたもので」

下唇を突き出して不機嫌に言うオーナーに、あくまでにこやかに告げる駅長は、制帽を取ると恭しく続けた。

「ですが、このタイミングで戻ってきたのがアリライナーであったことに、ワタシは深く感激致しているのですよ?」

「は?なによそれ。」

駅長は答えず、制帽をかぶり直して振り向くと、先ほどの窓に歩み寄り、彼方を掌で指して一同を促した。

「今回、未曾有の危機に際し、事態の完全なる収拾とワールドスラ



そしてその奥に、黒のロングワンピースに純白のエプロンを掛けたエプロンドレスとホワイトブリムを装着した少女が、完全無欠のメイドがきっちり九十度に腰を折り曲げてお出迎えしていた。

「竹中さ〜ん！ただいま〜」

美穂らアリアライナー組は慣れた様子で各々ソファに転がり込んでゆく。

「たっけなつかさ〜ん！ミルクティーちよ〜だい！」

「私にも。ストレートで。」

『ケーキ！ケーキ！けー』

ずびしっ！

と、今度はバックスイングで飛んできたハリセンを両腕でブロックするレイラに、秋乃は小さく舌打ちする。

「わたしはドッキングの作業があるから「前」のほうにいるわ。」

「畏まりました。ようこそ。いらっしやいませ。」

前方車両に続くドアに向かうオーナーとすれ違い、透と瞳子の元に戻って来た竹中と呼ばれたメイドは、二人にも丁寧な対応を見せた。「どうぞ。好きな席にお掛け下さい。よろしければお茶などいかがですか？紅茶の他にもコーヒー、緑茶など、各種多数の茶葉・豆を取り揃えて御座います。おおよその御希望にお応えできるかと思えますが。」

と、淀みなくすらすらと説明する竹中に瞳子はあっけにと取られていた。

透はさつさと近くのソファに座ってしまったが。

「……………あ、じゃあ、コーヒーお願いしますようかな。えと」

そこで、好みを告げる直前にあることを思いついた瞳子は、続く注文の内容を切り替えてみた。いたずらめいた笑みを浮かべて。

「あなたのブレンドで……………あるでしょ？」

につ、と快活な笑みで問う瞳子に、竹中は控え目な笑みの中、瞳の奥にきらりと光を放ち、恭しく腰を折り曲げた。

「畏まりました。」

「あ、ふたつね。こいつの分」

「畏まりました。少々、お待ち下さいませ。」

透を指さして言う瞳子に淀みなく答え、竹中は厨房へと消えていった。

「え！？　ここコーヒーあったの！？」

「あつたよ。私たちが飲まないだけで。」

「へへー。あたしはコーヒー好きだからさ。あの人、凄いの持ってそうじゃん？」

美穂と秋乃に、にかつと笑って応える瞳子。

「そう言えば、竹中さんのコーヒーは未体験かも。」

「ええ〜！？　コーヒーなんて苦いだけじゃん！？」

口元に手を遣り思案する秋乃に、美穂が渋面で呻いた。

「……このコドモちゃんめ。」

「じゃあ、来たら一口試してみなよ。竹中さんの紅茶にも興味あるし、取り替えっことで」

「回し飲み大会で……！？」

途端に少女たちのみで盛り上がる食堂内。

片隅に忘れ去られた透は、なんとなく陶製の狸の置物のことを連想していた。

ステーションを通過したエクリスエクスプレスは、途中で線路をS字にカーブさせて生成し、アリアライナーの進行上にラインを併せた。やがて同様に線路を接合させ同じ線路に乗り込んだアリアライナーも相対速度を合わせ、連結器を延ばし、やがて二本の「時の列車」は一本に接続された。

虹色の空の下、砂と岩ばかりの荒野を、合計二十一両編成となった列車が、各々警笛を鳴らしながら走り去っていった。

生成した枕木とレールを次々と撤去しながら。

あげく自分のエクリスエクスプレスのメンバーが出てこないっつー。いえいえ。プロット通りです。なぜ二本もの「時の列車」が必要なのか、その理由と共に次回エクリスエクスプレス側の事情が明かされます。

ちなみにデンライナー一行がかすりもしていないのは本文で言っていた通りの事情で、確か「電王の世界編」TV放映と春の劇場版「超・電王」が同時期なんですよね。つまりデイケイド一行が通過した後はまだデンライナー一行は鬼退治の真っ最中でこの世界にいません。

「電王の世界編」最終話に改めて正式なお礼を申し上げますが、今回御協力を快諾して下さった もふ先生、ありがとうございます！

瞳子はコーヒーカップを口に付けたまま呆然としていた。

「……………おいしい……………」

ほろり、と涙が一筋 頬を伝う。

テーブルの脇に控えたメイド、竹中の澄まし顔に、わずかながら誇らしげな輝きがキラリと見えた。

> i3690—538 <

「……………う……………うそ……………あたし、ここまで凄いの飲ませてもらえるなんて……………」

歓喜と、驚愕と、困惑と、後悔と、悲嘆と、でも抑えられない欲望と感動の荒波に翻弄される瞳子は意図せぬままコーヒーを一口ずつ味わい続け、カップを上げ下げする自らの手を止めることができないでいる。

「ちょよ、ちょつと瞳子!? ねえ、一口くれるって約束……………!?!」

瞳子のあまりのリアクションに秋乃がツインテールを振り乱して瞳子の手を止めようとする。

「え……………ナニゴトですかコレ……………!?!」

目を丸くしている美穂の前で、瞳子と秋乃によるコーヒーカップの奪い合いが展開された。

「ちょっ!?! やめてよ、これあたしのコーヒー!?!」

「さつき一口くれるって言ったじゃない!?! なに、そんなに凄いの!?!」

「あー!?! ひ、一口、一口だからね!?!」

ようやく手中に収めたコーヒーカップを見下ろした秋乃がゴクリと喉を鳴らし、やがておずおずとカップの縁に口をつけ傾ける。

「……………あ……………あ……………」

それを縫る眼差しで見つめる瞳子の前で、中身をすすり口腔を通して嚥下した秋乃の目がくわ、と見開かれた。



「……………うそ……………」

「ね！？ ね！？ すごいでしょ！？ すごいよね！？ ところで  
もういいよねそれ！？」

「いや、ちよ、ちよっと、待って」

慌てて奪い返そうとする瞳子からカップを遠ざけ必死に困惑から立  
ち直ろうとする秋乃。

「なにこれ、確かに凄い！？」

「……………そんなに凄いの〜？」

「「あ！？」「」

ひよい、と秋乃の手からカップを取り上げた美穂が、完全に眉唾な  
表情で中身を見下ろす。

「なにしてんのあんた！？ それをこっちに返しなさい！？」

「いやそれあたしの！？ って言うか美穂ちゃんお願い早まらない  
で！？」

「……………。。」

二人のオーバーリアクションを胡散臭げに眇に眺め、美穂は恐る恐  
るカップの縁に口を付け、一口飲み込む。

「ああ！？」

「……………どお？」

瞳子の悲嘆と秋乃の問いを聞き流し、しばしその舌の苦みを味わっ  
た美穂は……………。

「……………にがつ。」

「返せ。」

「だからあたしの」

うえっ、と突き返されたカップを奪い合う瞳子と秋乃。

「秋乃様。よろしければ、同じコーヒーをお持ちしますか？」

「お願い！」

「あたしももうひとつ！」

「畏まりました。」

言って、恭しくお辞儀した竹中が厨房へと入ってゆく。

「ねーレイラー。ケーキちょこつとちょーだい？ 口ん中苦いの〜」  
『ちょ！？ なにすんのお美穂！？ これはあたしのケーキなの！』  
「ちょつとだけ！？ ちょつとだけでいいの〜！？」

『イ・ヤ・よ！ あっち行け！ しっしっ！』  
「端っこにくつついてるクリームでいいから〜」

「あらあらかししまいわね？」

そこに静粛に開かれた自動ドアからオーナーが戻って来た。

一番端の唯一豪華なソファに優雅な動作で舞い降りるように腰掛け、  
見事な美脚を高々と振り上げて組んだ。

「お待たせ致しました。」

ややあつて竹中がトレイを持って戻ってくる。

トレイの上にはカップが三つ。

ひとつは瞳子のおかわり。

ひとつは秋乃のコーヒー。

そして唯一デザインが違う豪華なカップは一番奥のオーナーの前の  
テーブルにそつと置かれた。

「ん。ありがとう。」

軽い労いの言葉に、僅かに腰を落として返礼し通路を戻る竹中。

「……………こ、これが……………」

「ね？すごいでしょ？」

カップを持ち震える秋乃に、通りすがりの竹中に空いたカップを返  
しながら瞳子が興奮気味に言う。

向こうでは、美穂とレイラがケーキを巡る攻防を続けていた。

かましい。

オーナーの言葉を透は胸中で繰り返した。

別に透は自身の思考活動を外界の刺激に左右されたりしないので、  
ただ本当にオーナーが呟いた単語と、それが示す現状の合致を思っ  
ただけのことだったが。

ふと、目の前のテーブルに置かれたコーヒーを見下ろす。

先ほどから直結している瞳子の意識からこのコーヒーに関する活発な精神活動の情報が流入してくるので、透もなんとなく気になったのだ。

「……………」  
我ながら思いも寄らない情動を受け、その手をカップに伸ばす。

やがてつまみ上げたカップを、その中身の琥珀色を眺め、そして口元に近付け、口に含んだ。

「……………！」  
ぱちくり、と瞳を覚醒させた透は、続けて二口、三口とカップを傾け、やがてカップを空にしてしまった。

「……………」  
空になったカップに何か、言いしれぬ喪失感を感じながらテーブルに置く。

「もうひとつ、いかがですか？」

そこに、いつの間にか竹中がトレイを抱いて立っていた。

「……………ああ。」

「畏まりました。」

竹中はそっとカップを持ち上げ、厨房に下がっていった。

そこで突然、進行方向側の自動ドアが静粛に開かれた。

アリアライナーに乗っている者は全員この部屋にいる。

では、そこに加えてここにやって来る者とは言えば。

「失礼致しますよ皆さん……………」

厳かな重い声と共に、黒い礼服を身に纏った中年男性が食堂に入ってきた。

ステッキが床を突く音と足音が同期してやがて停止し。

その顔を見た少女たちが仰天して叫び声をあげた。

「「駅長……!?」」

「え!? あれ!? なんて乗ってんですか!？」

そこに立っていたのは、衣装を黒に変え、厳めしい顔をした駅長だ

つたのだ。

> i3691—538 <

だが少女たちの仰天の声を聞いたその駅長は、厳めしい顔をさらに渋面に歪めた。

「あんなのと一緒にしないで頂きたい。失礼な。」

ぐわ、とその扁平な顔面が拡大したような気すらした。

突風のようなプレッシャーに、思わず口をつぐむ少女たち。

「あーあー。そーいや分かんないコもいたんだったわね」

「へ!?!」

オーナーの気だるい言葉に呆けた顔で聞き返す美穂。

「ほら。黙ってるって分かんないからとつとと自己紹介する!」

しっしつと手を振るオーナーに応え、その駅長にしか見えない男は室内を睥睨し厳かに口を開いた。

「……はじめまして。皆さん。わたしは緊急特務車両『エクリスエクスプレス』の、オーナーです。」

「ええええええええええ!?!」

「お、オーナー!?! どういうことですか!?!」

今度は目を丸くした秋乃がオーナーに聞き返す。

「あのね。あんたたちにはそっくりに見えるでしょうけど、コイツと駅長は別人だから。別。」

なにやら男の登場時点から心底イヤそーな顔をしていたオーナーが渋面で吐き捨てた。

「で、でも、良く似てますね。と言うか似過ぎ」

「気のせいです。」

「うわあああああ!?!」

男の顔面拡大の気配に悲鳴をあげて後退る美穂。

既に涙目の美穂をレイラが抱き止めて頭を撫でて宥めた。

「……気のせいなのです。」

「分かったから、濃過ぎるあんたのせいで出て来れない、後ろの私たちの紹介でもしたらどう!?!」

気配を収縮させた男に、オーナーが投げやりにもその後ろを示して手を振った。

「おお。 皆さん。 入ってください。」

気付いたようにその男・「エクリスエクस्पレスのオーナー」が端へ寄り、スペースを開けたドアの向こうに声をかける。

すると突然、二体のピンク色の同じ姿をしたイマジンがどたばたと現れ、同時にドアをくぐるうとして枠に挟まり、それでもどうにかこちらへ抜け出ようとどちらも必死になってもがいていた。

「え？ あれ、イマジン！？」

「エクリスエクस्पレスにもイマジンがいたの！？」

美穂と秋乃が口々に漏らして驚く。

確かに美穂が持つような「時の守り人」は「時の列車」全てに標準装備されており、そのシステムは特性上フリーエネルギーに馴染みの深いイマジンを味方に付けるとより力を発揮する。

とは言え「人間の味方をしてくれるイマジン」などそうそういるものではないので、「時の列車」にイマジンが関係していることが非常に稀なことなのだ。

それが二体。

ここまで呆然としている間もずっとドアの枠に挟まってぎゅうぎゅうともがいているそのピンクの道化師のような姿のイマジンが、いったいどういう経緯でエクリスエクस्पレスに関わることになったのか。

そうとう間抜けな出来事があつたに違いないと美穂と秋乃は考えていた。

『な・に・やつ・てん・だ押しでダメならどっちか引いてみるとかそういう人並みの知恵くらい働かせやがれ teme ！？』

その時、ドアの向こうからのそんな男の悪罵の声と同時に、枠に挟まってもがいていた二体のピンクのイマジンが食堂内に吹き飛んできた。

クリアになったドアの向こうから覗く足の靴底から、要はこのイマ

ジンたちは蹴り込まれたのだらうと察せられた。

どうやら「向こう」のイマジンの扱いはあまりよろしくないらしい。美穂と秋乃とレイラが、そんな連想と共に固唾を飲んで見守るドアをくぐって現れたのは。

若い、男だった。

見かけは美穂・秋乃・瞳子とそう変わらない年齢のように見えた、少年。

その少年の顔は、有り体に言って不機嫌かつ凶悪に斜めに歪んでいた。

「猫が狭いとこ通れんのは、道幅と自分の身体の幅を心得ているからだ！ アレか？ おまえの知能は猫以下か？ 猫はヒゲの感覚と本能で道幅を察知すつけど、せめておまえは知恵で上回れよ！？ ナニやっつてんだ！？」

しかも挨拶そつちのけで悪口雑言の一斉砲撃を始めた。

「そうよね！？ わたしは猫畜生にも劣るクズよね生きててもしょうがないし分かったわ、もし今度道端の側溝とかに落ちて挟まったりしたらそのまま死ぬことにするわ！？ ああ側溝に挟まって死ぬのってどのくらい時間かかるかしら？ 速効？ うふふ。面白過ぎて死にそう……」

「おお恭也。恭也は考えたことはないかね？ 旅立ちの朝、玄関をくぐる際に最初に踏み出す足は右足と左足どちらからが良いだろうと？ 我が輩も同じ命題に取り憑かれてしまい眠れぬ幾夜を過ごしたのだ！ だが我が輩に知恵の女神は舞い降りた！ そうだ、我が輩には右足と左足が二つずつあるのだと！ そう！ 我が輩は両方を同時に叶える力があつたのだ！ ああ素晴らしきかな！」

そのイマジン側も振り向いて代わるがわる身振り手振りを交えまくし立て始める。

片やドス黒いネガティブな妄想を。

片や脳に花を咲かせたポジティブな妄言を。

「やかましいわっ！？ ってかダレが巧いコト言えつつあったかッ！

? 不足した知恵を悔やんでもう速攻で女神様とやらに謝ってこい  
!」

『女神様ってどこにいるのかしら。』

「あの世だッ!」

しらっ、と聞き返したイマジンに処刑宣告を叩きつける少年。

> i 3 6 9 2 — 5 3 8 <

アリアライナーに乗っていた一同は全員ぼかーんとしていた。

「あー。恭也くん。自己紹介を、してもらえませんかねえ。」

「は!?!」

凶悪な不機嫌顔のまま問い返したその少年・恭也は、ようやく見  
回した室内の空気に気付き、しかめっ面のまま天を仰ぎ深呼吸をし  
ながら正面を向いた。

「……双葉ふたば・きょうや 恭也。よろしく。」

「……はあ。」

端的な自己紹介に辛うじて美穂がそう息を漏らしたが、今この瞬間  
の展開が激し過ぎ、皆、飽和していた。

そして奇妙な沈黙が舞い降りる。

誰も口を開かない。

だいたいこういう場を取り仕切って盛り上げるのは、なにかとノリ  
と勢いの強いアリアライナーのオーナーの役目のはずなのだが、彼  
女は先ほどから不機嫌に黙りこくり口数が激減している。

その為美穂にも秋乃にも言うべきことが見当たらず、エクリスエク  
スプレスのオーナーは寡黙な性格なのか宛てにならず、恭也も美穂  
らと同じ立場なのか「……で?」みたいな顔をしている。

やれやれ。

そこまで考えて、テーブルを叩いて立ち上がったのは、瞳子だった。

「違うでしょ!」

「は!?!」

いきなり駄目出しを喰らい恭也が素っ頓狂な声をあげるが今は無視

「「は？」じゃない！こっちはいきなりマジックコミ見せられてドン引きしてんのよ！あんたがそのイメージン連れてんなら、あんたが紹介してくれないと話が進まないでしょ！？ その人たち、名前なんての！？」

「あ？おお。おい、立てよ」

瞳子の見立て通り、ただのタチの悪いチンピラという訳ではなかった恭也は、オペラ座の怪人のような白無地の仮面の上半分を顔面に貼り付けピンク色で統一した道化師のような意匠の表皮のイメージン二人を前に立たせて並べた。

「んで、こっちがヴァイオラ、こっちがシーザー。ほれ。よろしくつつとけ。」

『どうも。生きててごめんなさい。わたしはヴァイオラ。』

『我が名はシーザー。お見知り置きを。』

二体の外見のデザインは全く同一だったが、その姿勢と仕草で辛うじてどちらが男で女かは分かる。

内股の姿勢でやたらもじもじくねくねしているのが女性型のヴァイオラ。

威風堂々と胸を張り直立しているのが男性型のシーザーだ。

その他の自分の疑問は無理矢理押し込め、瞳子は勢いに乗せて美穂を指名した。

「はい！こっちの質問タイム！美穂、なんかない？」

「え〜？」

思った通り、飽和していた美穂は思考を言われたことへの反応に意識を向けてくれた。

「あたしもレイラと繋がってるけど、そっち二人も憑いてて、重くない？」

「あのね美穂ちゃん。」

そこでこちらのオーナーが口を開いた。

「あのピンクのイメージン。二人に見えるけど、実際は「二人で一人」の同体二種よ。」



「へ？なんですかそれ。」  
きよとんと美穂が聞き返す。

「例えば、「二重人格」っていうのが、「身体はひとつで心がふたつ」だとしたら、「同体二種」ってのは「意識がひとつで身体がふたつある」っていうタイプよ。そっちのヴァイオラとシーザーってのは、それぞれ個別の人格を持つてるように見えるけど、意識の奥では矛盾なくひとつになってるわ。」

「へえ。」  
分かったんだか分からないんだか曖昧な返事をする美穂。

「その恭也くんも、さつきからイマジンのこと「おまえ」って単数形の代名詞で呼んでたでしょ。」

「あ。」  
今度声をあげたのは秋乃だった。なかなか観察眼が鋭い。

「美穂。私たちも対峙したことがあるよそういうタイプ。「いつも一度に一体しか出ないよね」って話してた時、同時に二体出たことあったでしょ。たぶんそのタイプだよ。」

「へえ〜!？」

「じゃあ次！美穂、自己紹介してあげて！」

「は、ほいつ！」

トピックの切れ目を捉え即座に水を向ける。

「あたしは音無おとなし・みほ 美穂！で、こっちがあたしと繋がってるレイラ！」

「はあい」

呼ばれたレイラがひらひらと掌を振る。

「……ねえ恭也。わたしもあいうイメージが良かった。」

「知るか。今度から注文してから取り憑け。」

指さして振り向くヴァイオラに素っ気なく返す恭也。

「私は片瀬かたせ・あきの 秋乃。よろしくお願ひしますね？」

立ち上がり、さつきまでとは違うイントネーションで穏やかに自己紹介する秋乃に瞳子は怪訝に感じた。

その声音は友好的な感触が満載だが、媚びる気配は一切ない。

(……なんで、わざわざそんな……?)

まあ、これだけの少数活動だ。あとで聞けばいい、と瞳子は意識を切り替えた。

「で、あたしは神楽見 瞳子。あたしはいつもは旅してて、今回はたまたまお手伝いで乗せてもらったもんだから、この列車の関係者じゃないから。」

「へえ？大丈夫なのか？生身で怪我しなきゃいいけどな。」

恭也には悪気はないのだろう。だが言い方を良く知らない男だな、とは思った。

「それなら大丈夫だよ。秋乃もずっと一緒に手伝ってくれてるし。」  
ね？と振り向いてくる親友に、秋乃は曖昧な微笑みを返した。

「まあ、ね。できることしかしませんし。」

「(わお。すごい猫かぶり。)」

美穂が小声で囁いた途端、恭也たちの方向からは見えない位置、自身の背中越しに翻った秋乃の文庫本の角が美穂の脇腹に突き刺さる。  
「!!!??」

「それより、自己紹介が済んだなら、今回の作戦を説明して頂けませんか？」

悶絶する美穂をさて置いて秋乃が話を促した。

「そうだね。そっちのオーナーさんが説明してくれるのかな？」

やれやれ。これでようやく話が進む、と胸中で胸を撫で下ろした瞳子だったが、ふと見ると、エクリスエクスプレスのオーナーと、恭也と、ヴァイオラとシーザーがそろってこちらを指さしているのに気付いた。

「……なにか？」

「いや。そいつのこと教えてくれよ。それともただの客か？」

「え？」

言われ、彼らの指先、後ろを振り返ると。

そこではテーブルの上に無数の空のコーヒーカップを並べて埋め尽くし、澄まし顔でコーヒーをすすする透の姿があった。

あと、追加人数分のカップをトレイに載せて厨房から出てきた竹中と。

「「あ。」」

少女三人の声がきれいに重奏した。

「あんた居るんなら黙ってないで話に加わりなよ!？」

「狸の置物というものがあってな」

「なにそれ」

「いいこと美穂。余計なコト言うんじゃないわよ!？」

「瞳子ちゃん。さすが旅慣れしてて巧いまとめ方だったけど、詰めが甘かったわね」

「……精進します。」

シートについたエクリスエクスプレスの面々に竹中がお茶を配っている間、アリアライナーの面々はこそこそと反省会を開いていた。

全員が固唾を飲んで見守る中、シートに挟まれた通路にひとり立つエクリスエクスプレスのオーナーは、両手で握ったステッキを外側に向けて引つ張ると、きゅぽんと半分が抜け、その中からどう考えでも収まりきらない程の大量の花束が出現した。

全て真紅の薔薇だ。

「『おおー!』』

「わあ!？ すごい!」

アリアライナーのオーナーと透を除く全員の歓声が巻き起こる。

「……それでは、この度の緊急特務指令、および今作戦について御説明致します。」

言いながら、エクリスエクスプレスのオーナーは花束から薔薇を一本引き抜き、それをアリアライナーのオーナーに差し出した。

「おお!？」

その粋な行動に美穂が目を輝かせるが。

ソファに腰掛けるアリアライナーのオーナーは、受け取ったその薔

薇の花をそのまま手首を下げる動作でぽいと床に捨ててしまった。

「ええ!？」

そのあまりの仕打ちに美穂は仰天するが、オーナー二人とも表情が微塵も動かない。

「今回のこの未曾有の時空嵐について、成り行きから『デンライナー』が原因のひとつの対処に向かいましたが、我々はもう一つの原因に対処する為に、その発振源と思われる座標地点に急行致します。」

話しながら、エクリスエクस्पレスのオーナーはまた花束から薔薇を一本引き抜き、アリアライナーのオーナーに手渡す。

そしてアリアライナーのオーナーはそれをぽいと放り捨てる。

「駅長からお話があったかと思いますが、我々は既に、その元凶の一つを確保しております。それを発振源地点に移送するのがこのエクリスエクस्पレスの役目だったので……」

話しながら、エクリスエクस्पレスのオーナーはまた花束から薔薇を一本引き抜き、アリアライナーのオーナーに手渡す。

そしてアリアライナーのオーナーはそれをぽいと放り捨てる。

「……あ、あの。それではなぜ、アリアライナーが同行するんですようか……?」

冷や汗を一筋垂らしながら、秋乃が質問を挟んだ。

「ええ。おっしゃる通り本来ならエクリスエクस्पレスのみで遂行可能な任務だったのですが……現在、我がエクリスエクस्पレスの時間線防衛システムは、使用不可の状態になっています。」

話しながら、エクリスエクस्पレスのオーナーはまた花束から薔薇を一本引き抜き、アリアライナーのオーナーに手渡す。

そしてアリアライナーのオーナーはそれをぽいと放り捨てる。

「時間線ぼうえいなんたらって、「時の守り人」のことですか?」  
美穂が、エクリスエクस्पレスのオーナーに問い掛けた。

「そうとも、言いますねえ。ですから、デイレイドの支援が十分に遂行できない、と言う訳で他に稼働可能な時間線防衛システムを持

つ「時の列車」の随伴が必要になったのです。」

話しながら、エクリスエクस्पレスのオーナーはまた花束から薔薇を一本引き抜き、アリアライナーのオーナーに手渡す。

そしてアリアライナーのオーナーはそれをぽいと放り捨てる。

「……じゃあ、さ。その、確保してるって言う「元凶」ってのを、こつちに乗せるんじゃないあ、ダメだったの……？」

瞳子は、まるで張りつめた糸の上を渡るかのように慎重に質問を挟んだ。

「ええ。なにしろ、超・トップシークレットな代物ですから、それを搬送できるのは、特務権限を持つ我がエクリスエクस्पレスのみ。そしてその発振源の座標情報を持つのにも特務権限が必要ならば、当然そこに行けるのも特務権限を持つエクリスエクस्पレスのみ。」

話しながら、エクリスエクस्पレスのオーナーはまた花束から薔薇を一本引き抜き、アリアライナーのオーナーに手渡す。

そしてアリアライナーのオーナーはそれをぽいと放り捨てる。

「お分かりですか？こちらは道案内とそこへ至る権利を。アリアライナーは万が一の際の、デイレイドを支援する戦力を。それぞれ分担する為に、我々は協力せねばなりません。」

話しながら、エクリスエクस्पレスのオーナーはまた花束から薔薇を一本引き抜き、アリアライナーのオーナーに手渡す。

そしてアリアライナーのオーナーはそれをぽいと放り捨てる。

この時点で瞳子・秋乃・レイラ・恭也が胃の辺りを押さえてうつむいており、ヴァイオラはテーブルに突っ伏してダウンし、シーザーは着席した姿勢のまま気を失っていた。

> i3693 — 538 <

「……竹中さん、よくこのプレッシャーの中で普通に立ってられるね……」

「竹中さんは、折り紙付きだから……」

瞳子の囁きに、秋乃がこそっと返す。

「……？ どしたの？」

「このにぶちん……!?!」

そしてもう一人、けろつとした顔でいる美穂に悪罵を吐き付けた。透が平気な顔をしていることはもう処置無しとして全員が承知している。

「ところでさ。」

この空気を無視して美穂が問いを発した。

「なんでエクリスエクスプレスの「時の守り人」は使えないの? 恭也くん、具合悪い?」

あつげらかと訊く美穂に、うつむいていた恭也がぎぎぎと上体を巡らせた。

「……おう。いま絶賛胃の内壁を掘削中だけだよ。」

額に脂汗を浮かべ、斜めの双眸をより悲壮に歪めて応える。

ちなみにこの間も、オーナー二人による薔薇のリレー投棄は続いている。

「まず、順を追って説明しようか。俺は、お前と違って真性特異点じゃあねえ。」

「へ!?!」

「えっ?」

美穂と、それを聞いた秋乃が喫驚した。

「あれ? どういうこと?」

「「真性」って、「特異点」にバリエーションでもあるって言うの!?!」

「いやまあ、バリエーションっつーか、イレギュラーだよな、どっちかつつーと。俺は「疑似特異点」だった。」

「ぎじとくいてん?」

美穂がオウム返しに呟いた。

「おう。まあ難しいハナシは知らねえが、俺はある日、このエクリスエクスプレスの脱線事故に巻き込まれて、……まあ、物理的に直撃されたわけじゃなくて、高次元経由で意味的に撥ねられたのかなとか……やっぱ良く分かんねえや。で、その瞬間俺の「運命」

だかそうというのが吹き飛ばされたらしい。んで、その俺の状態はちようど「特異点体質」の人間の「運命の在りよう」と酷似してるんだそうだ。「歴史の事象の影響を受け付けない」とかなんとか。「……そんな、ことって……有り得るの!？」

秋乃が、戦慄く口元を抑えて呻く。

「まあ、この通り。……と言いたいところだが、いま現在は証明できねえ。で、ここまでを踏まえた上で、オーナー。説明してくださいよ。」

「ええ。」

応え、エクリスエクスプレスのオーナーはまた花束から薔薇を一本引き抜き、アリアライナーのオーナーに手渡す。

そしてアリアライナーのオーナーはそれをぼいと放り捨てる。

「現在この世界を襲う時空嵐の影響で、「疑似」に過ぎない恭也君の「特異点体質」は無効化されてしまっているのです。まるで妨害電波を受けているように。よって、今の恭也君は、時間線防衛システムを稼働させることができません。」

「……だつてさ。」

皮肉げに「お手上げ」のポーズで言う恭也。

「もしもこの仕事が無事終わって、それで嵐が止むなら俺も変身できるかもしれんけど、したらもうエクリスの出番もないだろ？

よって、あんたらに頑張ってもらうしかないって訳さ。」

「はあ。」

美穂は落胆したように声を漏らす。自分以外の「時の守り人」と共闘できる面白そうな体験に、期待していたのだ。

「なーんだ。つまんないの。」

「なに言ってるんの。優秀な「時の守り人」だったら、丸投げして昼寝してるつもりだった？」

「そんなわけないでしょお!？」

「なら、俺からの質問をさせてもらおう。」

美穂と秋乃の言い合いを遮って、さっきまで影が薄かった透が復活

した。

「どうぞ。」

鷹揚に応え、エクリスエクスプレスのオーナーは最後の薔薇を引き抜き、アリアライナーのオーナーに手渡す。

そしてアリアライナーのオーナーはそれをぽいと放り捨てる。

「その「確保した異常要素」とやらを、見せてもらおうか。」

質問と言いながら、透の発言は確固たる要求だった。

「ええ。」

まったく同じ調子でうなずいたエクリスエクスプレスのオーナーは、空っぽになったステッキの下半分をもアリアライナーのオーナーに差し出した。

そしてアリアライナーのオーナーはそれもぼいと放り捨てた。

「いや、ちよつ、待てよ!？」

そこで突然、恭也が血相を変えて立ち上がった。

「なんですか?」

「「あいつ」に、「悪魔の影法師」だかを会わせんのかよ!？」

「そうしなければ、話が進みませんので。」

恭也の激高に、エクリスエクスプレスのオーナーは表情を微動だにせず平然と答えた。

「マジかよ!？ おい、てめえ!？ 「あいつ」に会って、ナニするつもりだ!？」

恭也は今度は透に向かって吼えた。

「状況による。それが害悪をもたらす敵性体なら排除するし、そうでないなら世界安定のため適宜対処する。」

透は、シートに座ったまま淡々と答えた。

「お前たちが「それ」が何か分からなくとも、俺なら判明できるだろう。まずそれは間違いなく異世界の住人だろう。それも、お前たちこの世界の仮面ライダーでは対処できない、な。だが、俺なら対処できる。そして俺はその為にこの世界に来た。」

透は、目線を恭也から再びエクリスエクスプレスのオーナーに向け



た。

「見せてもらおうか。」

「ええ。それでは。」

うなずいたエクリスエクस्पレスのオーナーは、無手になった自らの掌をアリアライナーのオーナーの前に差し出した。まるでエスコートするかのよう。

そしてアリアライナーのオーナーはそれをばいと放り捨てた。

……正確にいま起こった事を説明すると、アリアライナーのオーナーはエクリスエクस्पレスのオーナーが差し出した手首を掴み、柔術の小手返しの要領で捻って関節を極め、そのまま投げ落としたのだ。

ぼさつ。と床で山になっていた薔薇の束に直立の姿勢で突っ伏すエクリスエクस्पレスのオーナー。

「……………」

曰く言い難い沈黙が部屋を支配した。耳に痛い程の沈黙が。

やがて、エクリスエクस्पレスのオーナーは突然ビデオの逆回しのように手も膝も突かずに直立の姿勢のまま起き上がった。

「……………それでは、行きましょうか。」

言って、何事もなかったかのようにくるりと身を翻しドアに向かって歩き出した。

「……………」

「……………なんでオーナーがあんなに嫌がってたのか、よく分かったわ。」

盛大な溜め息と共にやがてのろのろと立ち上がった一同は、美穂はレイラに肩を貸し、瞳子は秋乃と協力して気絶したヴァイオラとシーザーの介抱にかかり、アリアライナーのオーナーと透はさっさと歩き出した。

だが、その透の前に恭也が立ちはだかった。

「……………おい。もしあいつに手エ出したらお前が悪魔だろうがなんだろうがへこまずぞ。変身できねえからってバカにすんな。」

もの凄い形相で恫喝する恭也を、透は感情の籠もらない目でただ見下ろした。

「俺は、使命の遂行にあたり、現地の住人の心情は一切斟酌しない。好きにすればいい。」

「……!？」

「ちよつと待つて!」

透の言葉に激高しその胸倉に掴みかかった恭也を、瞳子が制止した。「今の遣り取りで、もう相手がだいたいどういものなのかは分かつたけど、本当に実害がないなら、透は絶対に怪我させたりなんかしないから!」

透の胸倉を掴む恭也の手を抑えながら、瞳子は必死に説得する。

恭也は透の目を睨んだままだ。

「これまでも、そういう例はあつたから!ちゃんと異世界から連れ出した例が! だからあんたは「その人」を信じてあげて!「その人」は害悪の存在じゃないんでしょ!？」

「……」

恭也はやがて、透から瞳子へと目線と泳がせ、瞳子の手を振り払うとさつさとドアの方へと立ち去っていった。

「どしたの? 恭也くん。」

「……あんただんだけ鈍いのよ。駅長とあつちのオーナーが「物扱い」してたものを、恭也は「あいつ」とか言つて「人扱い」して入れ込んでんのよ!？ もうそれだけでバレバレよ。」

これだから男は、と秋乃はぼやいた。

「恭也は不器用で、優しいゆえにな。ただエレガントさに欠けると常々口にしては口汚く罵られるのだが。」

「分かつてるよ。……いや、口汚い云々はさて置いて。」

シーザーの言葉に、彼に肩を貸している瞳子が応えた。

「ホント。こつちにたくさん分けてもいいのにつてくらい優しさを持っているのよ? ああ妬ましさで死にそう。」

「その苦勞は分かるような分らないような……」

肩を貸しているヴァイオラのぼやきに秋乃は力無くそう言うほかな  
く。

『でも、悪い人じゃなさそうじゃん美穂？』

「ん？別に疑ってなかったけど？」

レイラの問いにあっけらかんと返す美穂。

「凶暴なだけならあたしの隣にも二人いるし。」

『へえ。秋乃。なんか言ってるわよ？』

「いいわ。あとで優しい証拠にしこたまコーヒーご馳走してあげる  
から。」

「いええええ！？」

喧々譁々としながら残りの一同は肩を貸し合いドアへと歩いてゆく。  
その後ろ姿はまるで激戦を乗り越えた戦友たちのよう。

「しかし、なぜお前たちは敵に遭う前からそんなにダメージを負っ  
ているのだ？」

その言葉にとうとう瞳子がシーザーを、秋乃がヴァイオラを透に投  
げつけた。

ようやく。ようやく合流。

やはりそれなりに濃ゆいメンバーを二杯分も盛り合わせると、文量  
がえらいことになりました。いえ。想像通りでもありますが。

あげく設定のアクロバットによって仕事を丸投げしやがったエクリ  
スエクスプレス陣営。

もちろんそれだけで済むはずがないのは次のハナシ。まずは合流そ  
して交流の第二幕でありました。

たった一言の台詞回しにも全霊を以てキャラを解析し細心の注意を  
払って言葉をひねり出しているのですが、みなさん、発言者の混乱  
とかがありませんか？大丈夫ですか？

一度の場面に同時にこれだけ集まったことがあまりない体験なので、  
そこがとても心配。

あと、実はこれが鉄槻の新年初の投稿ではないんですよね。でも周  
知の方も、そうでない方にも、改めまして、今年も拙作を宜しくお  
願い致します。

緊急特務車両『エクリスエクスプレス』。

全十三両編成という長大な構成のこの車両は、基本的なデザインライオンこそ統一されているがそれぞれ各車両異なった外観をしており、それぞれ「黄道十二星座」をモチーフとした形状をしている。

ちなみに三号車「ジエミニ」が二両構成のため合計十三両編成となっている。

その中の八両目、七号車「リーブラ」内に一同はやって来ていた。

「……なに、これ……」

それを見た瞳子が、うわごとの様に呟いた。

ほか、美穂と秋乃も似たような感想を抱いたように痛ましげに眉をしかめていた。

曰く言うところの「時空嵐の元凶のひとつ」であると見せられたものは。

エクリスエクスプレスの中でも危険物の搬送等に活用されると言う特に内壁の頑丈なこの部屋に閉じこめられていたものは。年端もいかぬ儂げな少女であった。

簡易な布にくるまれただけの少女には、両腕がなかった。

一見、両腕がないように見えた。

それは実の所は、両腕を胸元で交差させてベルトで固定し上体を束縛する拘束具。

そんなものを着せられて、しかも粗末なシートに腰掛けた彼女の両足は枷を填められ、一切の身動きを封じられていたのだ。

その状態で、少女は憔悴し、疑惑に満ちた面持ちでこちらを見つめている。それは、警戒し怯える小動物のように見えた。

> i3774—538<

エクリスエクスプレスのオーナーの背後で、恭也が渋面で舌打ちし

ている。

一同が少女を遠巻きにしている中でその少女を観察するように見ていた透が、やおら無言で一枚のカードを取り出した。

それは、いつものライドカードでも、龍騎のアドベントカードでもなく、「時の列車」のチケットとも異なる瞳子も見たことのないカード。

枠線のデザインのみで、枠の中が空いているそれを見た瞬間、少女が恐怖に目を歪ませて「ひっ!？」と小さく悲鳴をあげたのが聞こえた。

構わずそのカードをかざして少女の元へ歩き出した透の前に、恭也と瞳子が血相を変えて飛び出した。

そして透の胸倉を掴んだ恭也とその振り上げた拳にしがみ付いた瞳子が絶叫する。

「てめえナニするつもりだあッ!？」

「やめなさい透っ!」

一旦歩みを止める透。

何が起きたのか分からない美穂と秋乃は呆然としていた。

「おいコラあ!てめえナニするつもりだったッ!」

いまだ殴るつもり満々の恭也の拳にしがみ付いたまま瞳子も言い募る。

「透!説明して!」

激しい勢いで暴れる恭也の片腕を必死で抑えながら瞳子が続ける。

「遥と一緒に戦った時、透がいつぺん停止した時から思ってたんだけど!あんた、まず説明しなよ!? それから、せめてあたしには相談して!あたしにもそれなりのアドバンテージがあるってことを、あんたは学んだはずでしょ!？」

「……………」

恭也に胸倉を掴まれていることは全く無視し、透は瞳子の言葉を検討しているように沈黙している。

「……………ふむ。いいだろう。説明しよう。」

やがてカードを持つ手を下げ、透は進行する態勢を解いた。

「恭也、もう、大丈夫だから……」

「……………」

瞳子に宥められ、恭也も手を離して距離を置く。だが、透から少女を遮る位置からは動かなかつた。

「お前の言うことに一理あることも認めるが、これは本来なら見た瞬間に片付けなければならなかつたことだ。お前のアドバンテージが今回も有効に働くか分からないが、一度 試行してみるとしよう。」

まず透は、瞳子に向かいそう前置きしてから語り始めた。

「そいつは、『ジョーカー』だ。」

「『ジョーカー』!?!?」

恭也が胡散臭げに聞き返す。

「先ほど言った通り異世界の存在で、その世界では生物の進化と人類が世界を支配し繁栄した歴史の根拠に、53種の生物の始祖によるバトルロイヤルに人間の始祖が唯一勝利したという過去があつた。その戦いを「バトルファイト」と呼び、それに参戦した各種生物の始祖を「アイデアファウンダー」と言う。アイデアファウンダーは各種生物の概念が一個体として顕現した疑似物理存在。例えば「赤」とか「前」といった「概念」そのものを物理的に破壊することができないのと同様、各種生物の存在の概念の化身であるアイデアファウンダーは、疑似的とはいえ物質でありながら破壊することができない。「バトルファイト」においては、一定のダメージを負うと敗北が確定するルールがあつたが、そうでなくとも、物理攻撃で弱らせることはできても、絶対に殺すことはできない。よって現地の研究者はアイデアファウンダーを不死生物「アンデッド」と名付けた。が、まあそれはいい。バトルファイトにおいては、勝者には全生命を統率する「統制者」から「万能の力」が与えられ、世界に種として君臨できると言う。だがそこに、もうひとつルールがあつた。「ジョーカー」が勝ち残つた場合、「統制者」は全生命を消去し、全てをリ

セットする」というルールが、な。」

真顔で滔々と語る透の言葉に、瞳子、秋乃、恭也は内容とその先の見当が付いたのか、顔色が変わってきている。

「その本来の世界で、ある事件により封印されていたアンデッドが流出する事件があった。殺せないアイデアファウンダーは、敗北が確定した段階でカードに封印される。それが解き放たれたのだ。奴らにしてみれば、再び地上の覇権を狙えるチャンスと見なしただろう。人間の始祖、言わば「ヒューマンアンデッド」が再び勝ち残らなければ、人間の世界は滅びてしまう。だが、それはその世界の事件だとして。さて。」

透は再び間を置き、一同の理解を待った。

特に恭也の顔色がひどい。

「さて。ここに「ジョーカー」がいるな。この世界に他にもアイデアファウンダー「アンデッド」が紛れ込んでいるのは分からんが、「時の列車」の情報にはかかっていない。『この世界には「ジョーカー」一体しかない』と見做すべきだろう。ならばこの世界はどうなる。これから向かう地点に「統制者」が出現しており、『「ジョーカー」の勝利と見なして今まさにこの世界にリセットをかけるうとしている』と考えるのが一番妥当だろう。そしてそれを防ぐことは簡単だ。その「ジョーカー」をこのカードに封印し、「勝者なし」の状態にしてしまうことだ。そうすれば「統制者」はリセットを行わない。」

ひよい、と再びカードをかざす透。

「分かったか。なぜジョーカーがこの世界のここに現れたのかは謎だが、今すぐ封印せねば、世界は滅びる。」

「……ねえ、透。封印されたら、彼女は、どうなるの?」

瞳子が、少女の表情からでもすぐ分かりそうな質問をした。

「特に高等なアイデアファウンダーには人格を模したインターフェースを持つものがあるが、封印されればその人間態の姿と人格は消失し、概念の情報のみの存在として、カードに永遠に記録される。」



つまり、死や消滅と同義。

「これで、俺が事を急いだ理由が分かっただろう。さあ。そこをどけ。」

「！、どかねえって言うてんだろ！？」

再び歩みを始めた透に喰ってかかる恭也の腕を掴んで宥めながら、瞳子は必死に思考を巡らせ言葉を紡ぎ出した。

「……ねえ透、それって、まだ時間はあるよね！？」

「誰一人被害を出さないという条件なら、猶予はない。仮に人類の最後の一人が残ればいいという条件なら、約148時間か。」

「うわ極端な。」

「そこじゃないでしょ！？ そいつは、一週間で全世界の生命をリセットできるの！？」

美穂の呟きに秋乃が驚愕を被せた。

「……少なくとも、透があたしの話を書く時間はあつたわけだよ。そうでしょ？」

必死に頭を回転させながら言葉を続ける瞳子。

「ねえ透。その「統制者」ってというのは、具体的にどうやって全世界の生命をリセットさせるの？」

「不明だ。」

「ねえオーナー。」

瞳子は、今度はエクシスエクスプレスのオーナーに問いかけた。

「今、この時空嵐のほかに、なにか大きな被害は出てる？」

「いえ。ですが、全ての「時の管理者」は「高確率で148時間後に世界が壊滅状態に陥る」という計測結果で一致しています。」

エクシスエクスプレスのオーナーは、つらつと澄まし顔で終末を告げた。

アリアライナーのオーナーも、そっぽを向いているが肯定的な気配だった。

「……それなのに駅長はあの笑顔なの……？」

秋乃が泣きそうな顔で呟いた。

「オーケー。これからじわじわ来るのか、148時間後にいきなりバーンと来るのか分かんないけど、「今は」まだ大丈夫みたいだね。ねえ透。」

言って再び透を見つめる。

「この娘を、その「護るべき人類」の中に入れてくんないかな。」

「……………」  
「あたしの考えてること、分かるよね？ ジョーカーだとしても、怖がるとか感情を持つてる一人の人間でもあるんだよ？ そうと分かった以上、この娘を、この感情を犠牲にして得た平和の世界にあたしは居られない。あたしはこの娘も守りたい。みんな、そう思ってる。」

美穂が、秋乃が、恭也がうなずいた。

「……………」  
「ねえ透、お願い。最後の最後まで、あたしたちに戦わせて。透も、あたしたちのやり方に協力して。あたしたち全員がダメになつたら、その時は透が手を下して。」

「……………」

瞳子の必死の訴えに、透は黙したまま。

見た目には無視しているように見えるかもしれないが、瞳子には、透がなにか検討しているように見えた。

あとひとつ。

あと一押しで同意を取り付けられるかもしれない。

そう見当を付け、瞳子は知恵を絞り続けた。

「あのだ。」

そこに、美穂があっけらかんと言ってきた。

「その「統制者」っていうのをやっつけるんじゃないやダメなの？ これから、そこに行くんだよね？」

「……………！？」

なんと透までもが美穂を振り向いた。

「……………え？なに？」

「ふむ。いいだろう。瞳子、基本的にお前の方針で動く。」

唐突に透は意見を翻した。

「まずは「統制者」を叩く。全員が、全力で、全戦力を尽くす。ただし条件がある。瞳子の策が尽きた時、俺はジョーカーを封印する。それでいいな。」

「……………」

あまりの切り替えの早さに全員が面食らっていたが、やがて瞳子はその意味を理解した。

「うん！それでいい！ 恭也！封印はしないって！」

「……………お？ ………………おお」

恭也はいまだきよんとしていたが。

「美穂。あんた偶にとんでもないこと思い付くわよね。」

「そう？」

秋乃の呆れたような安堵の言葉に、当然のような顔をしている美穂は首を傾げた。

「じゃあ透！この娘のこの拘束って、意味ある？」

瞳子が少女を指して透に問い掛けた。

「……………いや。まるで意味はないな。」

言って少女に近付いた透は、怯える少女に構わず拘束着のベルトを摘んだり引いたりして素材の具合を確かめながら。

「もしジョーカーがその本性を顕したなら、こんな拘束など簡単に引きちぎるだろう。」

「ねえオーナー聞いた！？ これ意味ないから解いてよ！ ねえ、

一緒にお茶しよう？」

「……………いや、しかし……………」

言い渋るエクリスエクспレスのオーナーの上腕を、アリアライナーのオーナーがぼんと叩いた。

「ワールドスライダーの超越権限よ。外してあげなさいな。 大丈夫

夫よ。あの子たちがいるんだから。」

「はい分かりました」

あつさりと首肯すると、エクリスエクスプレスのオーナーのフィン  
ガスナツプの音一発で、少女の拘束がすべて解けた。

「おお!？」

「ほら、恭也。」

「あ、ああ」

美穂が目を輝かせ、瞳子が恭也を促して少女を立たせた。

『ね! このケーキおいしいでしょう!』

『ああ素敵!おいしい!おいし過ぎて死んじゃう!ああでも死ぬのはイヤ!? 死ぬ前にきちんと食べておかないと……』

『ああなんたる美味!? かつてこれほどの感動があっただろうか!? どうかの恭也は甘味処を迂回して歩くようになってしまったのでこの味わいは久しぶりだ!ああ素晴らしきかな! ああそのウエイトレス。同じものをあと五つ頂けまいか』

「畏まりました。」

「かしこまらんでええわ!あんたもほいほい出してつとそいつら懐いちまうぞ!？」

ひとつのテーブルについたイマジンたちが大量のケーキをがつがつと貪り喰っている。

『あらなによけちんぼ恭也。男の嫉妬は見苦しいわよ?』

『恭也もかのウエイトレスの器量を見習わねばならんぞ。良い男はもつと心を広く持つものだ。』

「うるせえよ!? ヒトの堪忍袋の緒の上でシリー・ウォークしている奴に付ける薬はねえよ!」

通路を挟んだ漫才に、拘束を解かれた少女がけらけらと屈託なく笑っていた。

今、一同は再びアライナーの食堂車に移っていた。

「でね、あなたのこと、なんて呼んだらいい?」

そこで隣に座る瞳子が少女に問いかけた。

「はい。わたしの名前は、相川あいかわ・うい初っつていいいます。」

にこにこ少女、相川 初は自身の名を告げた。  
ぼさぼさだった髪は櫛で梳いて整えられ、秋乃の持ち物から渡されたヘアピンを差したその少女は、愛らしい純朴さであると言えた。同様に、アリアライナーに置いてある秋乃の着替えを着せているが、秋乃よりもさらに小柄な初にはだぼだぼだった。恐らく、十代半ばにも満たないに違いない。

> i37775—538<

「そっかあ。じゃあ、ういちゃんていいね!」  
美穂が朗らかに愛称を呼んだ。

「あ。ねえ、ここって飲み物は他に何があるかな」

「ちよつと待って。竹中さん!手が空いたらメニユーちょうだい!」  
「畏まりました。」

瞳子の問いに秋乃がケーキを大量に運んできたメイドへと声をかけた。

『やたー!今日はケーキ食べ放題!?』

『ああ!?感動の連続よ!? この極上の甘さの素晴らしさを知る度にわたしの矮小さが身に滲みるわああ死にそう……』

『ふむほむ。 ああ、この味わいの感動を言葉で表したいが、喉元まで言葉が出かかってはまた嚙下してしまう。またよく味わわなくては』

「つて、おまえそれひとつ寄越せ!」

『ああ何をやる恭也!?』

「ほらよ。」

言って、恭也はシーザーの前から奪い取ったケーキを、シートの背もたれ越しに瞳子と初の間突き出した。

「あ。……ありがとう。」

ぼさぼさと、顔を赤くしてそれを受け取る初。

「おおー!恭也くん気が利くね! ……ろりこん?」

「紳士的って言え!そいつのこと好きになんぞ!?」

美穂の一言に歯を食いしばった凶悪な笑顔で言い返す恭也。

だが、指差された秋乃は困ったように曖昧な笑顔で小首を傾げるのみ。

「あー秋乃はヤメといたほうがいいよ。ハリセンでべっこべこにくぐ!？」

曖昧な笑顔の隣に座っていた美穂が突然言葉の途中で悶絶した。

「ほら。女の子の前で悪い冗談。」

秋乃が、まるで陶でできたような笑顔で窘める。

その目はまるで笑っていないかった。

「……で？ 私がなんですか？」

その笑顔で恭也を見つめてくるが、シートの背もたれに肘を突いた恭也はそれを半眼で見返した。

「……ロリコンにでもならねーとピリとも来ねー女だなんて言ったんだよ。」

「……え!？ ちょっと、恭也……」

振り向いて見上げた瞳子の制止にもよらず、なぜか二人の険悪なオラは共鳴し増幅し始めた。

「あら。見る目がない男は可哀想ね。紳士が聞いて呆れるわ。」

「生憎と俺の知ってるレディーの得意技に「暗殺」ってのは入っていないんでな。ところでハリセンって何のことだ？」

「あら？知らないの?……これのことよ」

言って、凄まじい笑顔で秋乃は傍らの小さいバッグから一体どうやってか長大なハリセンを引き摺り出した。

「ちょっと!？ 秋乃も!？」

瞳子の声は届かない。

ハリセンをぶら下げた秋乃はまるで怨霊のようにゆらりと立ち上がると通路に歩み出てゆく。

「ついでに教えてあげる。ハリセンっていうのはね。無礼で無粋でとにかくダメな男を躡る為の道具なの。」

同様に怒気を放ちながら、恭也も青白い笑顔でシートから降り通路に出てくる。

対峙する二人の身長差は隔絶しているというのにその纏う気迫は同等で、今なお増大している。

「ほう？どっかの猫かぶりの巧いやつに良く似合いそうな道具だな。で。そりやどうやって使うんだ？」

「本来はこの平らな面を使うんだけど、格別に効果的なのはこの折れ線が並んだ面ね。」

秋乃はハリセンの折れ線を指でつつーとなぞる。

「ははっ。そんな紙っぺらでダメ男が真人間になればいいけどな。」

「試してみる？」

「言ってる意味がわかんねーよ。どこで試すってんだ？」

きりきりと、緊張の糸が引き絞られてゆく。

「ねえ？あの？ちよつと？ふたりとも？」

瞳子がなんとか宥めようとするが、どうも聞こえた様子がない。

固唾を飲んで二人を見守っている美穂と初。

美穂は言い出しつぺなのに。

そして。

「……………ここだよッ！」

『とっつ！』

とうとう機が満ちて緊張が弾けた瞬間。

なぜか突然シーザーが横っ飛びに恭也の身体に重なった。

フルスイングのハリセンを崩れた体勢でかわした恭也は、姿勢を戻した時、既にその様相を変化させていた。

すっ、と背筋を伸ばして立った恭也は、髪をテカテカのオールバックに纏められ、その中に一房だけピンクのメッシュが入り、微かに眉をしかめたその瞳は力強くピンクに光り、そしてなぜか鼻の下に雄々しいカイゼル髭が付いていた。

『やめたまえ！我が輩は争いは好まない！』

「……………ぶっ。」

そして片手を挙げ堂々と宣告した「シーザーが憑依した恭也」のその姿に、秋乃を含めた少女たちの仮借ない爆笑が沸き上がった。

『さあ恭也。恭也も怒ってばかりいないでこの味の芸術を堪能するのだ。身体に甘いものを入れればきつと恭也のような誰彼構わず噛みつく狂犬のような男でもまるまるに丸くなるであろう!』

『コラ待てテメエ!? 誰が何だ!? 味わうのはやっぱおまえだろ!? それから丸くなんのは性格か!? 身体か!?!』

押し退けられた意識の中で罵声を飛ばしまくっている恭也の身体は、ヴァイオラの隣のシートにどっか座ると猛然とケーキを貪り始めた。

『うん! 美味しい!』

『コラー!?!』

もぐもぐと頬を膨らませた恭也の顔はクリームにまみれ、立派だったカイゼル髭が真っ白になっていた。

「……………!?!」

再び絶叫のような爆笑が巻き起こる。

秋乃は既に脈絡を忘れたように笑っていた。

初も、目尻に涙を浮かべて腹を抱えている。

もう争いの空気はどこにもなくなっていた。

瞳子らが賑やかにしている脇では、専用シートにアリアライナーのオーナーが、その通路を挟んだシートにエクリスエクスプレスのオーナーが、そして瞳子らを挟んだ一番後ろのシートに透がそれぞれ腰掛け茶を飲んでいた。

当然のように透はコーヒーのおかわりを延々と続け。

竹中はその間、各員のオーダーを代わるがわる持ち運ぶなど細々と動き回っていた。それは瞳子にも遠慮を感じさせない機敏かつさりげない動き。

この食堂の憩いの空気は、控え目な彼女の高い能力によって維持されている。

これから戦いに赴く彼女らの心身のコンディションをベストな状態



に保つ為に。

そしてその時は訪れた。

『インフォメーション。該当座標地点に大型構造物の反応を確認。あと十秒で目視可能距離に到達します。』

突然、車内に女声の合成音声が響き渡った。

「え！？ なに！？ 今の誰！？」

「失礼。我がエクリスエクスプレスの制御システム《プロトレマイオス》です。」

びっくりして見回す美穂に、エクリスエクスプレスのオーナーがゆったりと立ち上がりながら答えた。

「目的地が見えてきたようです。」

言って、エクリスエクスプレスのオーナーは近くの窓を覗き込む。

「ええ！？ どこどこ」

美穂に続き全員がそれぞれの窓に張り付いた。  
だが。

「ちょっと待つてよ。「目視可能距離」って、誰の視力を基準にしてるの？」

秋乃の冷たい指摘の通り、延々と続く荒野には、特にこれといった物は見当たらない。

「融通が利かないのは、オーナーに似たのかしらね？」

そこに、唯一シートに腰掛けたままのアリアライナーのオーナーが呟いた。

「あんだ。ここのスクリーン使っていいから映像を出しなさい。」

「ええ。それでは。」

あっさりと引き下がったエクリスエクスプレスのオーナーに、瞳子らが肩をコケさせる。

「……やっぱり。」

「例え点に見えても「目視可能距離」、か。」

秋乃と瞳子が疲れた表情でぼやいた。

「プロトレマイオス。こちらのスクリーンに映像を出してください。」

『ラジャー。』

その声と共に、この食堂の壁の一部をモニターと成して映像が出現した。

地平線を画面の中央よりやや下に。荒れ狂う空の虹色と吹きすさぶ荒野の砂色の間に、奇妙なものがぼつんと立っているのが見えた。

「……………なにあれ。」

一瞬、それが何か分からなかった。

何となく、瓶に見えた。黒く、細長いビンに。

だがそれは角度を変えてゆくにつれ、別の姿を現してゆく。

「……………え？」

美穂が、その意味が分からず呆けた声を漏らした。

ビンと思われたそのの、細い上半分の幅が増し、太い下半分が細くなってゆくのだ。

すなわち、それは黒い板状の構造物。もし黒い長方形の鉄板を、中心で九十度捻ったらこうなるであろうという形状をしていた。

「……………へんなの。」

「え？ちよつと待って。これ、どれくらいの大きさなの!？」

突然、秋乃が喫驚した。

瞳子と恭也は瞬時にその意味を悟る。

映像の、その黒い板の手前を、荒野の光景が、無数の岩が通り過ぎている。

つまり、現在列車は目標地点を遠巻きにして走行しており、カメラは横を向いているということ。

そしてその間を通過してゆく荒野の岩の配置からその構造物がカメラの視点からしても遠くにあると言つこと。

その構造物の近くに比較対照物がない為に判別しづらいが、恐らく、とても大きい。

「プトレマイオス。対象のサイズを計測してください。」

『ラジャー。計測完了。当該構造物は、全高100メートル。最大幅25メートル。』

「……高層ビル並じゃない!？」

プトレマイオスの出した計測結果に秋乃が悲鳴をあげた。

「なんなのよあれ!？」

「「統制者」だ。」

唐突に透が呟いた。

> i3777—538<

「なんだ？あの中に「統制者」が住んでんのか？」

恭也の問いに透は首を振った。

「生憎と、この「統制する者」の存在の概念は人類の概念を遙かに越えている。言うなれば、その正体である情報思念体がこの次元に干渉することで空間と質量を歪めて現地の知性体の目に移る姿。

他のなんでもなく、あれが、統制者だ。」

「……………」

透の答えを裏付けるかのように、初が真剣な面持ちで映像のそれを注視している。

「さあ。皆で頑張つてあれを倒すぞ。」

「……えーっと。とりあえずこの距離でそれが分かって良かった。

みんな、集合。」

透の平坦な発破を無視して、頭痛を堪えるようにこめかみを押さえる瞳子の号令でぞろぞろとテーブルに戻る一同。

「……どうしよう。今「殴つても効かないぞ」って言われたような気がしたんだけど。」

「うん。私もそう聞こえた。」

沈鬱な面持ちで呟く瞳子と秋乃。

「ねえオーナー。オーナーは、あそこに初ちゃんを連れて行って、何をする予定だったの？」

「両者の接近によって発生する現象の調査を行う予定でした。ディレイドが来ると分かるまでは。」

しれっと応えたエクリスエクスプレスのオーナーの言に、また頭を抱える瞳子と秋乃。

「行くだけのつもりだったのか……」

「もしかして駅長、匙投げたんじゃないでしょうね!？」  
呆れるほど杜撰な行動。

いや、それほどにこれが「手の打ちようのない事態」と言うことだ。

「……ねえ透。いや、そのカードはしまつて。まだだから。」

例のカードをかざしていた透にぞんざいに手を振る。

「ねえ透。初ちゃんを元の世界に連れて行けば、万事解決するんじゃないの?」

「それができないから封印しようとしたんだが。」

「はあ!？」

あまりにも想定外の言葉に瞳子は驚愕のあまり立ち上がった。

「な、なんで?」

「この世界で起きている時空嵐のせいだ。入ることはなんとかできたのだが、このままでは出ることができない。」

「そこを無理矢理、なんとかならないの!？」

「例えば、猛吹雪の雪山で遭難した人間が、緊急避難場所からそのまま出て行くようなものだ。この世界から離脱すること自体は可能だが、その後どこに辿り着くか、あるいは宇宙の狭間に落ちて永遠にさまようか分からない。そんな不確定な手段は使えない。」

「……………」

へなへたとテーブルに沈没する瞳子。

しばし食堂を沈黙が支配する。

「……とりあえず、ありつただけの火力を叩き込んでみようぜ。」

そこに、恭也が声をあげた。

「元々その予定だったじゃねえか。やるだけやってみようぜ。もしかしたら効くかもしれないじゃねえか。試してもいねえのにいきなり諦めてんじゃないじゃねえや。」

ぎらぎらした目つきで映像を睨みながら言う恭也を見上げ、瞳子は溜め息を吐いた。

「……そうだね。ゴメン、我ながら透に感化されてたよ。」

頭を掻いて身を起こした。

「みんな。予定は変わらない。あいつをぶっ壊すよ！」

「おう！」

美穂と恭也の氣勢が重なった。

『アラート。』

その時、プトレマイオスが警報を発した。

『アラート。当該座標地点より反応が多数出現。計測完了。全高2メートル前後・90キログラム前後の物体が一万を越え、なおも増加中。当該群は、エクリスエクस्प्रेसを目標して移動しています。』

「は！？」

たった今あげた氣勢が怪訝声に変わった。

見れば、映像に映る「統制者」の根本に、蠢く影が見える。

プトレマイオスの報告によれば、人間サイズの「何か」が一万以上出てきたと言う。

「……な、なによあれ」

「「統制者」の尖兵、「ダークローチ」だよ。」

初が、恐れ混じりにきっぱりと言った。

「ふむ。あれが生命をリセットさせる手段か。」

透の呟きが、初の発言を裏付け、この現象の意味を明確にした。

人間大のモンスターが、大拳して襲いかかってきた、ということだ。

「オーナー！ありったけの火力を出してくれよ！あいつら突っ切つて、「統制者」を直接叩く！」

「もちろんです。プトレマイオス、バトルステーション。」

『ラジャー。』

恭也に伝えたエクリスエクस्प्रेसのオーナーが、エクリスエクस्प्रेसの戦闘態勢の指示を下した。

「オーナー！こっちも！」

「ああ。ダメ。」

「へ？」

秋乃の要請に、アリアライナーのオーナーはぱたぱたと手を振った。  
「なんでですか!？」

「この領域でアリアライナーの武装を動かす権限がないのよ。単独航行ができないからこうして連結してるわけだし。」

「そんなあ!？」

秋乃が悲鳴をあげる。

「しよーがないよ秋乃。」

「美穂!？」

ベルトを抜き出した美穂が、眉をVの字にして立ち上がった。

「やれることをやろうよ。もともとあたしはこうする約束だし。」

複雑な顔を見せる親友に、美穂はいつもの笑顔を向けた。

「よし。ならばエクリスエクスプレスを借りるぞ。」

唐突に透が言つて、ドアに向かい歩き始めた。

「つておい!？ なにするつもりだよ!？」

「瞳子の方針に従い、その範囲で俺は俺のやれることをする。エクリスエクスプレスの戦闘機動に優秀なオペレーターが必要だろうか? エクリスが稼働できない今、俺が代わって戦闘機動をコントロールする。」

「ええ。よろしくお願いします。 恭也君。 ヴァイオラ君とシーザ

ー君も。 ついて来て下さい。」

恭也の問いに応えた透に続きオーナーが言いながら歩き出した。

エクリスエクスプレスの先頭車両一号車『アリエス』のコックピットにやって来た透は、まずディレイドライダーにカードを装填してスライドカバーを閉じディレイドへと変身した。

《カメンライドウ・ディ・ディレイド!》

迅速に纏ったボディスーツを黄色に変じ、続いてもう一枚カードをドライバーに装填する。

《アタックライドウ・マシンディレイダー!》

このコックピットルームの中央に設置されている「運転席」、エク

リスの拡張機能にしてエクリスエクスプレスのトータルコントロールデバイス、やたら豪華なバイクにしか見えないそれに歩み寄り、デイレイドはカレイドブレイドをそのバイクに振り下ろした。

「あぁー!?!」

恭也の悲鳴を聞き流し剣を透過させると、そのバイクの形をした運転席は、迅速にその身をドット柄のノイズに包んで形状を变移させてゆく。

やがてそこに、代わってデイレイドの高速移動手段マシンデイレイダーが現れた。

さつさとそのバイクに跨ったデイレイドは、さらにもう一枚カードを装填し、スライドカバーを閉じた。

《ファイナルアタックライドウ・ディ・デイレイド!》

だが、別にここで必殺技を放つわけではない。デイレイドの持つ無限のエネルギー源「クラインの壺」を、自身を介してエクリスエクスプレスに接続させてエネルギーを供給し、武装の攻撃力の底上げを図ったのだ。

そうして剣をしまい、デイレイドはハンドルを握った。

『さて。始めるぞ。総員、戦闘機動に備えろ。何かに掴まれ』

デイレイドの宣告に、このコックピットルームに至る通路に佇む恭也とオーナー、ヴァイオラとシーザーは各々近くの突起を掴み身体を固定させた。

進路を「統制者」に向け正対させたエクリスエクスプレスは一直線に荒野を突き進んでいた。

その先には、地平線を埋め尽くす黒い波が広がっている。

それはすなわちこちらへと迫るダークローチの大隊。

もうじきその先頭と接触するところで、エクリスエクスプレスの車体に変化が起きた。

一号車から次々と、車体後部の上半分がリフトアップしそれが展開変形してゆくのだ。

全十三両、三両目と四両目を除き全て形が異なっているが、共通して細長い円筒を突き出したそれらは巨大な砲頭であった。

これがエクリスエクस्पレスのバトルモード。

僅かに進路を曲げ緩やかに蛇行を始めたエクリスエクस्पレスの全砲門が、一斉に光線を発射した。

二十数条の光線は、黒の大群に扇状に突き刺さると広い範囲に渡る各所で甚大な爆発を引き起こした。

木っ端微塵になって消滅するダークローチたち。

だが、その塵芥の向こうからさらに黒の大群が押し寄せた。

続けて一斉射される光線。ダークローチの大群のあちこちを抉り散らしながら、エクリスエクस्पレスは群の中に飛び込んでいった。

直線上の質量差はいかんともし難かったらしく、あっさりと轢き潰されて爆散してゆく無数のダークローチ。だがエクリスエクस्पレスはやがて線路を空中に生成して高度を上げて大群をかわした。正面からの力任せでは、いずれ数で押し負けると判断したのだ。

だがあまり高度を上げることができない。吹き荒れる時空嵐に煽られて脱線する危険性もあるからだ。

たたらを踏むダークローチの群。まるでボートに引き裂かれた水面の波のようにエクリスエクस्पレスを追って黒の群はその外形を歪ませた。

黒の大群の頭上を、光線をあちこちにバラ撒きながら蛇行するエクリスエクस्पレス。光線の一撃でかなりの数のダークローチを吹き飛ばしているが、「統制者」の足下からは今もだくだくとダークローチが溢れ出ており、大勢に変化は見られない。

やがて、黒の大群の形状に変化が出てきた。

ダークローチ達は、出てくる者と後を追って戻る者とでこつた返し、踏み潰され折り重なる者も出てきたのだ。

それを繰り返して、ダークローチで構成される波は各所で高さを生み、それはやがて肥大化し、まるで太陽の表面で弧を描くプロミネンスのごとく隆起してエクリスエクस्पレスに襲いかかった。



間一髪、その弧の下を潜り抜けるエクリスエクスプレス。

今もあちこちで生まれつつある黒い隆起をもぐら叩きのように片っ端から光線が叩き潰しているが、いくつか撃ち損ねたそれは素早く高さを延ばして襲いかかる。

辛うじて、その黒のプロミネンスをかわし潜り抜けてゆくエクリスエクスプレス。

『よいしょっと。』

戦闘機動中のエクリスエクスプレスに牽引されるアリアライナーの屋根に、人影が現れた。

白のボディースーツに丸い黒色の装甲を装着し、赤い瞳が光る黒のマスクの頭頂からは二本の細長い紡錘形を延ばしたその姿は、まるで白黒を反転させたバニーガールのようである。

美穂が変身した姿、「仮面ライダー アーリア・ソロフォーム」である。

『んん〜。ちゃっっちゃかやりますか。』

蛇行運転に揺れるアリアライナーの屋根の上で、片膝立ちで身を安定させたソロフォームは、アリアガッシャーを組み立てながら呟いた。

『ちよつと美穂！？ あんた大丈夫なの！？』

意識の内から心配するレイラの声が聞こえてくる。

『大丈夫だよ〜。って言うか、この状況って飛び道具持つてるあたしの独壇場だし。』

一直線に繋いだ五基のパーツの両端をそれぞれ内側に曲げ、やがて完成した『アリアガッシャー・ボウモード』を構えて応える。

その時、斜め後方を向いたエクリスエクスプレスの砲頭が光線を発射した。

『おおっ！？』

巨大な光条にびっくりして身をすくめるが、プトレマイオスも、自身の状態を把握した上で射線を選定している。

『大丈夫だいじょうぶ。』

むしろ自身に弦きながらソロフォームは、ボウモードの両端を繋ぐオーラの弦をつまみ、矢がないにも関わらずまるで矢を番えるように引き絞ると、一方を狙って弦を解き放った。

すると同時に出現して射出されてゆく光条。それは列車の下で蠢く無数のダークローチのどれかにヒットした。

『……焼け石に涙?』

『なに? どうしたの美穂?』

『なんでもないよ? 悲しくなんか無い!』

弦きを聞いたレイラに慌てて言い返し、美穂は気を取り直した。

『できることを、あきらめないんだ!』

大声で言いきり、ソロフォームは再び見えざる矢をオーラの弦につがえた。

> i 3 7 7 8 — 5 3 8 <

『なー! あとたったの一万うん千匹!』

言って、次々と光の矢を放ってゆく。

もう特に狙わなくても矢はダークローチのどれかに当たっている。

『えっ!? 美穂! 逃げて!』

『へ?』

そのレイラの叫びはあまりにも突然で。

だからそこに襲いかかった激震に、対応する意識が一瞬遅れた。

激しく振動するアリアライナーの食堂車内では瞳子は初を抱きかかえながら、秋乃が、レイラがシートにテーブルにそれぞれしがみ付いていた。

オーナーはこの揺れの中でもいつもの姿勢を崩さない。

『アラート。十秒後にアリアライナー八号車は大破します。』

『えっ!?』

突然告げられたブトレマイオスの警告に、レイラが素っ頓狂な声をあげた。

「やってくれるわね！　「時の列車」の未来予測を越えて干渉してくるなんて！」

『って言ってる間にっ！？』

毒づくオーナーに続き、テーブルにしがみつくレイラが悲鳴をあげた。

『美穂！逃げて！』

「全員！衝撃に備えろ！」

絶叫と同時に、食堂を最大の衝撃が襲った。

「あああああああつ！？」

あまりの衝撃にレイラが辺りを転げ回り、瞳子も秋乃も額をテーブルにぶつけた。

初は必死に瞳子にしがみ付いている。

『インフォメーション。アリアライナー八号車は大破しました。』

「いちいち言わなくてもいいっ！？」

オーナーが、珍しく怒声をあげる。

「竹中っ！全員を連れて「前」へ行けっ！」

「オーナー！？　どうするんです！？」

テーブルにしがみ付いたままの秋乃が問いかける。

「いいから、装甲の厚い「前」に避難しなさい！せめて一矢報いてやる！」

髪を掻き上げ、オーナーは犬歯を剥き出して氣勢をあげた。

「瞳子様。初様。どうぞ、こちらへ。」

「……ありがとう」

「ちよつと、レイラ！？　立って！？」

なぜか泡を喰った様子のレイラを駆け寄った秋乃が助け起こす。

『ああ……美穂が、みほがっ！？』

意識の接続を失ったことに混乱するレイラを、秋乃は無理矢理立ち上がらせた。

「大丈夫だから！美穂は大丈夫だから！立って！」

揺れる車内で全員をドアの向こうに誘導したオーナーは、無人の食

堂を見回してから身を翻して叫んだ。

「デイレイド！大破したこっちの八号車を切り離せ！奴らにお見舞いしてやるんだ！」

「わかった。」

アリアライナーのオーナーの通信を受け、デイレイドは思考トリガーでそれを操作した。

長大な二十一両編成の車体では、無数に生まれつつある黒のプロミネンスの乱舞をかわしきれなくなってきている。

今の攻撃も、潜り抜けきれなかったプロミネンスが最後部車両を直撃したものだ。

「アラート。十秒後に十二号車「ピスケス」は中破します。」  
デイレイドの高速思考演算でも進路の選択に綻びが発生し始めている。

やがて車体を第二の激震が襲った。

「インフォメーション。十二号車「ピスケス」が中破しました。F・Eキヤノン「エリダヌス」、使用不可。」

淡々と報告するプロレマイオス。

ダークローチの大群にかすられた十二号車から砲頭が吹き飛ばされたのだ。

もはや一面黒の荒波と化したダークローチの大群の上を疾走するエクリスエクスプレスは、大きくカーブを描くとその円弧の頂点でスクラップと化したアリアライナーの最後部車両の連結を切り離れた。遠心力を受け、切り離された最後部車両は脱線して線路から飛び出し、その身を激しく回転させダークローチの海に飛び込んでいった。大量のダークローチを巻き込んで爆発する最後部車両。

「よおしっ！」

その様子を窓から見たアリアライナーのオーナーが喝采をあげた。

だが、それでも途絶えることのない黒の濁流の中をエクリスエクスプレスは光条を撒き散らしながら駆け抜けてゆく。

隆起した黒の津波に阻まれ進路変更を余儀なくされたエクリスエクスプレスの、「統制者」へ至る道のりは、まだ遠い。

「仮面ライダー 剣」<sup>ブレイド</sup>の設定に詳しい方なら、これがどんだけヤバい事態がお分かり頂けるかと思いますが。彼らは「モノリスを倒す」という第三の選択肢を選びました。それが可能なのか鉄槻も知りません。どうしょ。いえ、ちゃんと考えますが。

今回は、透の中での敵性存在の種別についての解説。言うまでもなく「テオストライブ」「アンノウン」「アイデアファウンダー」「アンデッド」というそれぞれを示す透特有の単語は全て鉄槻の想像によるものです。

敵自身がそう名乗る「ファンガイア」や「イマジン」「オルフェノク」とか、開発者が命名した「ミラーモンスター」、文献に記されている「グロンギ」や「魔化魍」「ワーム」等は透もそのまま呼んでますが、なぜ上記の二種に限り別名を設定しているのか。

識別不能だから「アンノウン」、死なないから「アンデッド」と、両者共に今世の人間が勝手に付けた名称だったと思います確か。そして彼らは、人間が名付ける遙か昔から存在していた。

だから、彼ら特有の定義を発生当時からデイレイドは持っていたはずだ、と鉄槻は考えています。「デュアルビーイング」の定義の発生と同様に。

現地の人間と話を合わせるために透は場合に応じて使い分けていますが。

ちなみに意識すると「テオストライブ」「テオス（闇）の部族」、  
「アイデアファウンダー」始祖の概念」となります。

各宇宙の外にいたデイレイドが、人間が後から名付けた名称を使うことを不自然に感じた、鉄槻個人のこだわりです。

t r a c k ・ 3 6 電王の世界（前書き）

二度も読めない長さかもしれないが、  
今回、挿絵は後ほど追加します。

秋乃は、初が解放されてからずっと「ある事」を考えていた。

初自身はとても良い娘だし、彼女に悪意を疑う要素が何一つないことは分かっている。

ただ、ひとつ解せないことがあった。

透は言った。「ジョーカーの本性を顕せば、こんな拘束など簡単に引きちぎる」と。

では初は『なぜそうしなかったのか』？

初自身のパーソナリティが非常に穏やかで無垢で繊細なのは分かる。もし初がただの人間の少女だったなら、訳も分からず捕らえられてあんな拘束をされ監禁されれば怯えもするだろう。

だが、彼女は『いつでも脱走が可能だったのに、それをしなかった』  
なぜ？

最初に紹介された時に居合わせた中で、彼女に危害を加えることが実質的に可能だったのは、ジョーカーを封印できるというカードを持つ透のみだった。

にも関わらず、透の存在を知る以前から、初は部屋に入ってきた全員を警戒していた。

先ほどのささやかな茶会でずいぶんと馴染んでもらえたと、恭也に對してはあからさまな好意も抱いている。

つまり初が茶会を境にその警戒を解くに値すると判断したからこそ。（もしかしたら、「自分がジョーカーだ」というのとは別に、何か抱えているのかも。）

彼女に悪意など疑いようもない。

ただ、その抱えている問題を、お別れの前に解消してあげられたら。そう、秋乃は思っていた。



ぎやぎやぎやと線路に火花を盛大に咲かせてエクリスエクスプレスは自ら生成した急カーブを疾走してゆく。

ダークローチの大群が寄り集まった黒い荒波による体当たり攻撃は激しさを増し、エクリスエクスプレスと続くアリアライナーはあちこちが傷だらけになっていた。

アリアライナーの食堂にいた面子は一号車の乗務スペースに移り、それぞれ一人用のシートに腰掛け身体を×字に固定するハーネスを装着していた。

乗ったことはないが、F1レーシングカーに乗せられたらきつとこんな感じであろうという激震に瞳子も秋乃もくらくらしていた。

そんな中、オーナーと竹中は普通の顔で前を見つめ、初はなにやら真剣な面持ちで唇を引き結んでいた。

「……初。大丈夫だから。」

激しい振動の中、横を向いて秋乃がそう声をかける。

「……はい。」

初は素直にうなずくが、どうも恐怖や心配とは違った表情だった。

むしろ、比較的前向きなニュアンスで、瞳には力がこもってすらいた。

(なぜ……?)

ふと、先ほどの思考の続きを思う。

だが未だ答えは出ない。

その時、また車体を激しい衝撃が襲った。

「ああもう!? 透はなにやってんの!? ああせめて分離できれば……」

つい毒づいてしまう。

「……そっか。」

その時、瞳子が自分の呟きになにか閃いたらしい。

「透! アリアライナーを分離して走れない!? あんた、分身できたでしょ!？」

『なるほどな。それは想像だにしなかった。』

透が瞬時にその意図を汲み、通信越しに感嘆した。

「ちよつと瞳子？アリアライナーは単独で走る権限がないって」

「よく分かんないけど、透がエクリスエクस्पレスを運転できるなら、アリアライナーも同じなんじゃないの？」

「……ああ。」

そこに、オーナーの感心したような声があがった。

「瞳子ちゃん、頭いいわねえ！」

『アリアライナーを借りるぞ。』

そこへ、静粛に開かれた後方の自動ドアからデイレイドが現れた。

『アタックライド・イリユージョン』の効果で出現した分身だ。

エクリスエクस्पレスと、連結するアリアライナーは、それぞれのドアを空間を歪曲させて接続させている為、こうして徒歩で車両間の移動が可能となっている。

デイレイドはすたすたと一同のシートの間の通路を通過すると、その先のドアの向こう、コントロールルームに入ってしまった。そこにはアリアの専用バイクにしてアリアライナーのトータルコントロールであるマシンアリアードが設置されており、デイレイドはさつさとそれに跨った。

だが、そこでデイレイドの動きが止まる。

「……どうしたの透!？」

『このままでは連結を解除できない。』

デイレイドの後ろ姿が、とんでもない事態を告げてきた。

『エクリスエクस्पレスとアリアライナーを繋ぐ連結器に、美穂が引っかかっている。』

「『えええええええ!?!』』

一同の悲鳴が重なった。

先ほど、単独で屋根に登っていったアリア・ソロフォームが、あの最後部車両を襲った攻撃の衝撃でそこに転落していたのだ。

『誰か回収してこい。このままでは連結を解除できないし、危険だ。』

』

「……って、言われても……」

透は運転中、美穂は危険な場所で気を失っている。車外は無数のダークローチが乱舞するという危険地帯、他に变身できる者がいない。この乱戦の最中、生身で救出活動など自殺行為にも等しいだろう。

『あたしが行って、憑依してくる！そうすれば動けるようになるから！』

「待つてレイラ！」

ハーネスを解きにかかったレイラを瞳子が窘めた。

「ちょっとちゃんと方法を考えないと、例えあんたでも一人じゃ危ないよ!？」

『でも、こうやってるうちに美穂が落っこちちゃうよ!?!』

レイラは今にも飛び出す構えだ。

その時、何かどこかで気配が動いた気がした。

初がいる所からだ。

なんとなく初を注目した一同の見つめる前で、うつむいていた初が、やおらがばつと顔を上げた。

『あはっ！ あはははははっ』

初は、さつき見せていた笑顔とは明らかに違う顔を見せていた。

なんと言うか、底の抜けたハイテンションな爆笑。

その初は、髪の中にいつの間にか一房だけピンクのメッシュを付け足しており、その瞳は鮮やかなピンクに彩られていたのだ。

そしてその声質も微妙に異なる。

これは。この現象は。

「……イマジン!? 初の中にいたの!？」

秋乃が絶叫する。

『あはははは ちょっと待つてねお姉ちゃんたち! アタシ、ちょっと必要なものがあるの!』

口を大きく開けてはきはきとしゃべるその語り口は、明らかに初のものではない。

『キョーヤ! キョーヤ! ベルトこっち持ってきて!』

『はあ！？ 分かった！すぐ行く！』  
車内通信で恭也が応え、やがてこの車両の後ろの自動ドアから恭也が現れた。

「つて、どうすんだこれ」

『あいがとつ！ ワケは瞳子お姉ちゃんに聞いて？』

恭也から複雑な機械の塊のようなバックルのエクリスベルトを受け取ると、瞳をピンクに輝かせた初は通路の中央に立ち、その身体から同じ大きさの人影を吐き出した。

飛び出したそこに新たに現れたのは、全身ピンクの衣装を纏った令嬢に見えた。

だが、腕脚は節くれ立ち、頭に載せた つばのやたら広いフリルつきの帽子は顎まで深く被せられている。否、そういう形状の「頭部」なのだ。

そしてピンクのエプロンドレスのような表皮を持つそのイメージは、一同を振り返ってピンクのパラソルを片手に、ちょこんと膝を曲げて会釈して見せた。

> i4091—538<

『はい アタシの名前はアリス！ つて、細かいハナシはあとあと 手が必要でしょ？さあ初、変身しちゃって』

「うん」

そのアリスと名乗ったイメージに比べ、きよとんとする一同の前で髪と瞳の色を元に戻した初は、もたもたとエクリスベルトを腰に巻き付けると、ベルトバックルの左端に飛び出しているレバーを押し込んだ。

するとバックル右側面のパネルがフラップドアのようにカシッと跳ね上がり、チェンバロによるアメリカのカントリー風味の音色が流れ出した。

「……変身。」

言って、初がパスをバックルのフラップパネルの下のスリットに押し込むと、がしゃん、とパスがバックル内部を通過し、バックル中

央のクロスディスクが時計回りに九十度回転し、左端に突き出たパス表面の「3」のような文様とクロスディスクの文様を併せて銀色の「B」を描き出した。

《バロウズ・フォーム》》

ベルトが認証を告げた途端、初の身に殺到した光の粒子は黒の平坦なボディースーツとなり、そこで両腕を胸元で交差させた初を、どこからか伸びてきた光のレールがまるで先ほどの拘束具のように縛り付けてゆく。その状態で、初の周囲に金属パーツが次々と出現し、初の身体に張り付いてゆく。

そのパーツの量は膨大で、通常の「時の守り人」の装甲のパーツ数を遙かに上回る。

それは主に上半身を、自ら拘束した腕の上から巨大な胸郭として装着された。タキシードを意匠化したような両襟のプレート間に蝶ネクタイ型のパーツが開くように現れた。

背中にもより大量の部品が集中し、装甲とは無関係な巨大な円形のユニットを構築してゆく。

そして足には膝下で大きく膨らんだ部位を持つブーツが装着された。やがて頭頂のレールを辿ってきたパーツが顔面の位置で迅速に展開変形し、バイザーのようになって目の位置に張り付き、続けて現れたパーツが、腕ほどにも長い靴べらのような「うさぎ耳」を形成して頭頂に二基、設置された。

背中には巨大な懐中時計のような無数の歯車が複雑に絡み合う機械をまるで雷神の雷太鼓のように据えつけ、腕のない銀色のバニーガールとなったこれが初が変身した姿、「仮面ライダー エクリス バロウズフォーム」。

バロウズフォームは、体中に設置された十二基ものエクリスガツシヤの部品を、手も触れずに分離し浮遊させると、次々と空中で部品を合体させ、中程で折れまがり先端を細かく分解して展開したそれらは、左右六基ずつで構成された一对の「機械腕」を形成した。

中程に肘関節を持ち、先端を変形させて精密な五指を構成した、腕

に。

《エクリスガッシャー・アームモード。》

> i 4 0 9 2 — 5 3 8 <

そのアームモードを、本来腕がある位置に浮遊させて己の腕と成し、初が変身したバロウズフォームは、アリスとレイラをそれぞれ見遣った。

『……じゃあ、お願い。手伝って。一緒に美穂お姉ちゃんを助けよう！』

『……う、うん。』

『らーじゃっ』

レイラは戸惑いながら、アリスはテンション高く返事をし、啞然とする他の一同を置き去りにして後部の自動ドアを出ていった。

「……知ってたの？ 初にイマジンが憑いてること。」

秋乃が眇に恭也を見つめ訊ねる。

「ああ。最初に捕まった時、俺にだけ話してくれた。「アリスを消させたくないから、他の「時の守り人」には黙っててくれ」って。

「見つかったら消されちゃうから、怖がってる」ってさ。」

恭也は、空いたシートに腰を下ろしながら言った。

「あいつ、自分があんな重大な運命を背負わされてなのに、自分に取り憑いたイマジンのこと心配してんだぜ？ たいした奴だよ。」

「……そう。」

秋乃が呟いた。

「あのアリスっていうのも、悪い奴じゃなさそうね。」

「まあ、な。最初は過去に跳ぶつもりで取り憑いたらしいが、初に「過去がない」ってのと、「特異点体質」に良く似た体質だったことで脱出できなくて泡喰ってたそうだ。」

「ふうん。」

くつくつと笑う恭也と、気の抜けた溜め息を漏らす秋乃。

「って、じゃあ初が「時の守り人」のベルトを使えたのって!？」

「そういうこった。体質が似てるってだけで今のはぶっつけ本番だ

つただけだな。俺が变身できないから、万が一の時にはベルト貸して手伝わせてくれて言われてたんだ。……できるなら、やらせたくはなかったけどよ。」

「……ホント。たいした娘だわ。戦うつもりでいたなんて。」  
呆れたような、感心したような声を漏らしたその時、がくと車体が揺れた。

「っと。和んでる場合じゃなかったな」

アリアライナーの先頭車両一号車の屋根に、初が变身したエクリス・バロウズフォームとアリス、レイラがやって来た。

無数のダークローチが飛び交う中を這つての移動でやり過ごし、アリアライナー一号車の舳先を見下ろす位置に辿り着いた。

そこから先のフロントノーズは、流水のようになだらかなカーブを描くデザインになっており、迂闊に降りればそのまま滑り落ちる危険がある。

特に今はダークローチの群の体当たりをかわすため乱数機動で激しく蛇行している。この平らな屋根の上でも、何か突起に掴まっていないと振り落とされてしまいそうだ。

『少し待て。十秒間直進できる隙を探す。』  
外部スピーカーから透が指示を発する。

『俺が合図してから十秒、その間に助け出せ。』  
少しでも揺れの少ない状況を作り出すと言う。

レイラも焦る心を押さえつけ、じつとその時を待った。

何しろ、すぐそこに連結器に引っかかっている美穂の姿が見えているのだ。カーブを曲がる度に腕を力無く揺らす姿が。

レイラとしても、これほど心を乱す出来事は滅多になかった。どれほどの強敵を前にするよりも遙かに恐ろしい。

『捉えた。五秒前。……三、二、行け!』

透のカウントと同時に行動を起こす三人。

言う通り、列車は直進し安定している。

まずはアリスが屋根の手がかりを掴んでフロントノーズ上に身を投げ出した。

そしてバロウズフォームが続いて滑り降り、アリスが伸ばしたピンクのパラソルの柄を掴み、さらに頭頂から生えたウサギ耳をパラソルに巻き付けて片腕を下方に伸ばす。

そして二人の身体を掴みながらレイラがフロントノーズを下まで滑り降り、アライナーの物質生成照射装置のあるフロントバンパーを足がかりに屈み込むと、連結器に引っかかっている美穂の体勢を慎重に把握してから飛び込むように憑依した。

途端にウエーブのかかったロングヘアと水色のメッシュ一筋を伸ばして水色の瞳を見開く美穂の身体。

自身の体勢とバランスを慎重に捉え、連結器や車体の突起に手足を掛けて身を起こす。

『さあ！』

『うん！』

バロウズフォームが伸ばす機械腕に向かって手を伸ばす美穂の身体。その時突然、直下型の振動が車体を襲った。

『ひゃ！？』

一瞬、身を浮かせた三人。

掴みかけた掌を互いに見失い、慌てて体勢維持に気を遣う。

『アリス！大丈夫！？』

『なんのまだ負けないよお！』

『早くしろ。そろそろ限界だ。』

透の言葉に各々自身の中のカウントを思い出す。あと二秒あるかないか。

『くっ！？ ういちゃん！』

『はいっ！』

互いに伸ばし、掠めた手が、今、しっかりと握り合った。

『よっ！』

歡喜の声が重なる。



そしてそのまま引つ張り上げた。  
瞬間。

列車がいきなりカーブした。直進制限時間が終了したのだ。

『わあああああ！？』

途端に投げ出された美穂の身体。

掴んだ手は離さなかったが、続いてバロウズフォームも車体表面から引きはがされ飛び出してゆく。

『初！？』

いかなイマジンといえど振り子のように吹き飛んだ二人分の重量をすぐに支えきれぬものではない。特にイマジンとしても矮躯のアリスの小さな手から、ピンクのパラソルが重力の暴虐にもぎ取られた。  
『ああっ！？』

絶望的な悲鳴をあげるアリス。

その傍らを、列車を狙って降ってきたダークローチの濁流が落下していった。

『ういー！？』

そこへ、何者かが飛び込んでアリスとバロウズフォームを繋ぎ止めた。

『諦めるな！希望の灯火はまだ消え去つてはいない！』

『ああもうダメ！？ これで一生分の奇跡を使い果たしたわ！？  
残りの一生は絶望の暗闇よ！？』

間一髪、身を投げ出したシーザーがアリスの手とバロウズフォームが握るパラソルを掴み、ヴァイオラがそのシーザーの足とアリスの腕を掴んで支えていたのだ。

『シーザー！ヴァイオラ！』

『さあ早く！自慢ではないが我が輩の根性は恭也の機嫌ほどに脆弱だぞ！』

既に列車は乱数機動を再開している。激しい揺れを逆に利用し、アリスとシーザー、ヴァイオラはバロウズフォームと美穂の身体を車体の方へと振り向けた。

バロウズフォームもその勢いを利用して美穂の身体を車体に近付けようとし、レイラも一刻も早く全員の負担を軽減させようと懸命に美穂の腕を伸ばして車体の突起を求めた。

やがて美穂の手が車体の枠を掴み、今度はバロウズフォームの身体を引き寄せた。

『ういちゃん！？ 大丈夫！？』

『ありがと！良かった！』

『よし！撤収だ！』

シーザーが叫び、バロウズフォームと美穂の身体はその一号車のドアから車内へ飛び込み、アリスとシーザー、ヴァイオラは慌てて屋根の上をかさかさとい戻っていった。

直後、エクリスエクスプレスとアリアライナーを繋ぐ連結器が解放され、やがて距離を開けたアリアライナーの前方に新たな線路を敷設してアリアライナーはエクリスエクスプレスとは別方面へと駆け出していった。

車体の全長が縮まった分被弾領域が圧倒的に縮小し、両車両の動きは目に見えて軽快になった。

「美穂！？ レイラ！？ 初ちゃん！？ ああ良かった！」

秋乃が涙目で一同を迎えた。

一号車のエントランスでくたくたになっているバロウズフォームとイマジンたち。

だが、状況は依然乱戦の渦中だ。

『アリアライナー七号車に進入者だ。排除しろ。』

車内放送を通して透の報告が入る。

『……守らなきゃ。アリス、立てるかな。』

『行けるよ！……代わるうか？』

幾分か元気の落ちた様子ではあるが立ち上がったアリスが、エクリスベルトを指して訊ねた。

『うん。手が多いほうがいいと思うの。手伝って。』

『うん!』

『我が輩も援護しよう。』

シーザーとヴァイオラも立ち上がり二人の後に続いた。

『秋乃。美穂のことよろしく。』

「うん。」

言いながら、美穂の身体で秋乃に抱きつくレイラ。

秋乃がすっかり受け止めたことを確認してから美穂の身体から離脱したレイラは、アーリアベルトを引き抜いた。

『これ、借りてくから。』

途端に脱力した美穂を支える秋乃に断り、水色のカードを取り出して腰に巻き付けたベルトのバックルに上から挿し入れる。

流れる水を思わせる涼やかなミュージックホーンが流れ出す中、レイラはパスをバックルの前に振り抜くように翳した。

《ディーヴァ・フォーム》

認証の音声と同時に光の粒子が殺到し、瞬時に扁平な白いボディスーツとなってレイラの身体を包み込む。

続いてベルトバックルから飛び出した水色のパーツが胸に肩に、前腕に臍にと装着され装甲を成した。

後頭部から体表のレールを辿って三つ並んだ涙滴形のパーツが顔面に移動し、扇状に展開すると薄べったく変形して顔に張り付いた。

さらに別のパーツが後頭部に取り付き、そこからフリーエネルギーによる波打つ豊かな水色の髪を生成し、マスクのセンサーを閃かせて変化は完了した。

これがレイラの力を取り込んだアーリアの第二形態「アーリア・ディーヴァフォーム」である。

『さて!あたしのビート、隅々まで刻み付けてやるわ!』

勢い良く声をあげ、ディーヴァフォームはアリアガッシャーを組み立てながら初たちの後を追って駆け出していた。

食堂と厨房を抜け、七号車の物資倉庫に辿り着いたところで、初たち一同はその向こうに蠢く影と対峙した。

黒い人型の異形・ダークローチたち。

最後部車両が大破した衝撃でひしゃげたドアの向こうにも、今だ蠢く影がある。

いったいどうやってかアリアライナーの最後尾に群の一部が取り付いたらしい。

『ここから先には通さないよ！わたしに優しくしてくれた、みんなの大切な場所だから！』

きつぱりと宣言し、バロウズフォームはダークローチめがけ駆け出していた。

それに続くアリスも、自らの武器であるピンクのパラソル『アリスアンブレラ』を振りかざしてダークローチに踊りかかる。

ダークローチたちは二本足で立っているものばかりではなかった。

壁を、天井を虫のようにかさかさとい回り回る奴も現れ、それらは私たちの手の届かぬ所を迂回して侵入しようとする。

『させぬよ。招かれざる客らよ、立ち去れ！』

『落ちなさい！虫ケラのように落ちて死ぬのよッ！？』

ずどぎやぎやぎやと後方からシーザーとヴァイオラによる二丁の銃剣銃『ヴァイオラバヨネット』のそれぞれ一組・計四丁が続けざまに火を噴き壁を、天井を這い回るダークローチたちを撃ち落としてゆく。

だが銃の数に反して一発の威力が極めて低いのが難点で、撃ち落とすしてなおシーザーと、特にヴァイオラは執拗に一匹に対して連射を浴びせていた。

『はあい！あたしも混ぜて！』

シーザーとヴァイオラの間を飛び越えて、レイラが変身したアリア・デーヴァフォームが一直線に合体させたアリアガッシャーによる棒杖を転倒しているダークローチに一閃させた。

既に弱っていたため途端に黒の霞と化して爆ぜて消えるダークロー

手。

『あなたは取りこぼした奴を足止めして!』

『承知!』

『うふふふチクチク行くわよチクチク。』

レイラの指示に明朗かつドス黒く応えるシーザーとヴァイオラ。

その間もバロウズフォームとアリスは壊れたドアからぞくぞくと侵入してくるダークローチを迎え討ち、ディーヴァフォームもそれに並んで迎撃する。

『六号車に侵入者だ。排除しろ。』

そこに、車内放送で透がさらなる襲撃の報をもたらした。

『つて、前の車両じゃん!?!』

レイラが悲鳴をあげた。

『レイラお姉ちゃん、六号車に行つて! アリスもちよつと下がつて!』

初の指示に、各々目の前の敵を蹴倒して飛び退いた。

バロウズフォームがベルトバツクルの左端に突き出たレバーを引くと、電光を迸らせたカードがせり出てくる。

《フルチャージ。》

そのカードを引き抜き、バロウズフォームは右の機械腕のスリットにそれを一閃させた。

《フルチャージアタック。『ラピッドレイド』レディ。》

そして迸る電光が左右のアームモードから全身に行き渡ると、胸の装甲が弾け飛び、露わになったアンダースーツに包まれた初自身の腕が解放された。

さらに頭頂の二本の「うさぎ耳」までも腕のように動き、左右三対計六本の腕が使用可能になる。背に負う巨大な懐中時計のようなユニットが、内部の歯車が一斉に加速し高速回転を始めた。

力強く身構えた初は、目前のダークローチの群に飛び込んでいった。  
『やあああああああああああああ!』

初の絶叫が轟き、六本の腕が凄まじい速度と威力で振り回され、フ

ルチャージを施された腕一本の一撃でダークローチ一体を確実に、次々と屠っていった。

これがバロウズフォームのフルチャージアタック、可動肢を増設し身体能力を増強する「ラピッドレイド」。

『ああああああああああ！』

その勢いで、残りの群を壊れたドアから車外へと押し出した。

フルチャージアタックの効果の終了と共にバロウズフォームはまた己の身を拘束してしまう。

『……、こっちは、わたしとアリスで守るから、お姉ちゃんたちは前の方に行つて！』

『わかった。……気を付けて。』

『うん！』

快活に返事した初を残して、レイラはシーザーとヴァイオラを伴つて前方車両へ続くドアへ飛び込んだ。

『さああて！そこ汚されるとここのオーナーが超ご立腹なんだけど！？』

砕かれた窓の先に、前方の車両へと向かおうとしていたダークローチが数体がいた。

『ゴキブリは大っ嫌いだけれどね！無視されるのはもっつと嫌いよッ！？』

アリアガツシヤーの棒杖を振りかざし駆けるディーヴァフォーム。

シーザーとヴァイオラによる射撃を受けてようやく振り向いてきたダークローチらに向けて、ディーヴァフォームはガツシヤーを一閃させた。

『……ッ！』

『りゃああああつ！』

続けざまに縦横に振るわれるガツシヤーに薙ぎ払われるダークローチたち。

だがその時立て続けにガラスの破碎音が響き、左右の窓からぞくぞ

くとダークローチの群が飛び込んできた。

それは、距離を開けたディーヴァフォームとヴァイオラ・シーザーの間を遮り埋め尽くした。

『おのれ!?!』

『イヤー!?! 死んじやうー!?!』

シーザーの怨嗟とヴァイオラの悲鳴が黒い群の向こうから聞こえる。四丁の銃の連射でも、この数を押し切るのは困難だ。

『ええい! そんなにあたしの歌が聴きたいの!?!』

手前のダークローチを振り払い、ディーヴァフォームはパスをベルトバックルに翳すとそれをぽいと放り捨てた。

《フルチャージ。》

認証の音声と共に、ディーヴァフォームは一直線に繋げたガツシャーの端、グリップパーツを折り曲げて片仮名の「イ」の字にしたそののグリップ部分を眼前に添えて構えた。

あたかもそれはマイクスタンドのようで。

『ならいいわ! 遠き者は音に聴け! 近くは寄って、もっと聴け!』

電光を迸らせたアリアガツシャー・マイクモードを両手で支え、大きく息を吸うように身を退け反らせたディーヴァフォームは、次の瞬間。

『くあつち行けこのゴキブリ野郎どもおおおおお!』

渾身のシャウトが炸裂し、レイラの音声とフリーエネルギーを取り込んで破壊音波に変換したマイクモードから凄まじい衝撃波が放たれ室内を蹂躪した。

> i 4 0 9 3 — 5 3 8 <

ディーヴァフォームのフルチャージアタックはその特性上、対象は無差別で密閉空間では使用に制限があった。

発振元の自身には効かないとしても、一番遠くの部屋の端にシーザーとヴァイオラがいた。

だが、その間を埋め尽くすダークローチの群が衝撃を緩和してくれりとレイラは踏んだ。

『おおおお！？』

『うひゃー！？』

突然の轟音にびっくりしたシーザーとヴァイオラが耳をふさぐ。

その手前で、ダークローチたちが次々と黒の霞となつて爆ぜて消えていった。

『ゴメン！大丈夫！？』

『問題ない！助かった！』

『今のはアレよね！？ わたしに「死ぬ」って言ったのよね！？』

『違うから！？ 悪かったから！？』

大袈裟に狼狽えるヴァイオラに駆け寄り必死で謝るディーヴァフォーム。

その背後でまた一匹、二匹とダークローチが車内に侵入してきた。

『ちっ！？ ああもう！？ 少ないうちに片付けよう！』

『心得た！』

再び各々武器を構えたイマジンたちは、ダークローチめがけて突撃していった。

もしもこの光景を上空から見る事ができたなら、黒い荒波の中を輝く列車が二本、蛇竜のごとくうねりながら走り抜ける様が見えただろう。

今だ時空嵐が猛威を振るう上空は暴風が蹂躪して時の列車の頭を押さえ、地上は無数のダークローチに埋め尽くされ、黒い海と化したその僅か上を走るしかない状況。

おかげで黒の波がわずかでも高さを増せばそれが障害物になる。破壊するか迂回するかせねばならない。

エクリスエクスプレスはそれらを多数搭載したF・Eキャノンやバルカンの光条で吹き飛ばして進み、アリアライナーはそれらをかわしながら、あるいはエクリスエクスプレスがフォローの為に放った光条で拓いた道を突き進む。

両車両と「統制者」との直線距離は近いのに、大きく迂回して進ま



ねばならない為に今だ到達には至らない。

だが、分かり難いほどゆっくりとではあるが、ピッチの細かいネジ孔の溝を辿るように、その距離は着実に縮まりつつあった。

アリアライナーの現最後部車両七号車も、あれからさらにダーククロイチが侵入してきていた。

バロウズフォームとアリスは六号車へ続くドアの前に陣取り、ダークローチらを迎撃していた。

「あーもーしっこいしっこいしっこいしっこいっつ！？」

「アリス！がんばって！」

とうとう痼癢を起こしたアリスを、初が必死に宥める。

だが、アリスの痼癢は意のままにならない状況に対する逃避の為ではなく、堪忍袋の緒が切れたものだったようだ。

「やっぱ初、借りるね！」

「え？」

ダークローチの勢いが一瞬空いた隙に、アリスがバロウズフォームの身体に横っ飛びに憑依すると、バロウズフォームは身動きを止め、バックルの左端に突き出ているパスを引き抜いて左端のレバーを押し込んだ。

チェンバロによるカントリー風味なメロディーが流れる中、バロウズフォームはパスを裏返しフラップパネルを解放したバックルの右端のスリットにパスを押し込んだ。

がしゅん、とバックル内部をパスが通過すると同時フラップパネルが閉じ、中央のクロスディスクが反時計回りに四十五度回転し、左端に突き出たパス表面の「7」のような模様と併せてピンクの「A」を描き出した。

《アリス・フォーム。》

ベルトの認証と共にウサギの電板面が消失し、全身の装甲が部品単位で分割し、腕を成していたガッシャーも全て分離して宙に浮いた。全ての部品がその配置を迅速に上下逆さに回転し、パーツの表裏を

転換してピンクの面を露出する。

そして一斉に身体に張り付いていく装甲。

それは特に腰回りに集中して合体し、巨大なドーム状のスカートを形成した。

ほか、エプロンのような胸部装甲と、両肩にパフスリーブのようなアーマーを装着し、まるで元のアリスをそのままロボットにでもデザインしたかのよう。

やがて後頭部から体表のレールを辿って大きな半円形が頭頂を越えて巡ってきた。まるで巨大なモヒカンヘアーのようにも見えたが、そのパーツは中央で左右に展開し、広い円形の つばを持つ帽子となつて頭部を覆い尽くした。

余剰のフリーエネルギーによるつむじ風で弧を描いて変化が完了した、これがアリスの力を取り込んだ「仮面ライダー エクリス・アリスフォーム」の姿。

『キライキライキライ！しつっこいのキライ！ゴキブリもだいたい大っキライツ！』

その場で地団太を踏むと、イメージとしての自身の武器「アリスアンブレラ」を取り出して、びつ とダーククローチの群に突き付けた。『みんな、いなくなっちゃえばいいんだあつ！』

そう叫ぶのと同様、スカートアーマーの中から十二基のエクリスガツシャアが分離状態のまま飛び出してアリスフォームの周りを旋回した。

《エクリスガツシャア・アサルトモード。》

『行つてー！』

指揮棒のごとくかざされたアリスアンブレラに導かれるように、分離状態で「アサルトモード」なる特性を発揮されたガツシャアパーツは、砲弾のように飛び次々とダーククローチを打ち据えてゆく。

『おりゃおりゃおりゃおりゃあー！』

さらに滅茶苦茶にパラソルを振り回すと、それに併せてアサルトモードのパーツたちが旋回して乱舞しダーククローチに突き刺さつてゆ

く。

小さな部品による体当たり攻撃に、ダークローチの群は完全に泡を喰っているようだった。

『キライキライだいつキライ！みんな消えちゃえー！』

叫んだアリスフォームがバツクルの左端のレバーを引くと、一枚のカードが電光を纏いせり出てくる。

《フルチャージ。》

それを引き抜くと、手元に飛来したガツシャーパーツのスリットに一閃させる。

すると、そこから迸り出た稲妻がこの部屋中を跳ね周り、乱舞するガツシャーパーツに取り付いてはまた電光を放射し、稲妻の網の目で覆い尽くしてしまう。

《フルチャージアタック。『アリスインワンダーランド』レディ。》

『どっかーん！』

叫び、パラソルを振り上げた瞬間、室内はまるでミキサーに攪拌されたかのようにガツシャーパーツと電光が入り乱れて旋風を巻き起こし、その渦中に閉じこめられたダークローチの群を縦横に切り刻むと一匹残らず爆散・消滅させてしまった。

『あースッキリし……』

全てのダークローチを一掃し、大きく伸びをしようとしたところでアリスフォームの身体からアリスが抜け出て床に突っ伏してしまい、アリスフォームは変身を解除して初の姿に戻ってしまった。

「アリスっ！？ ねえ！？ しっかりして！？」

倒れ伏すアリスを慌てて抱え上げるが、アリスは弱々しくも、片手をひらひらと振って見せた。

『……ちこつと、元気出し過ぎて、疲れちゃった……』

「……もう！？ そんなに力使っちゃダメだよ！？」

初だけならば、皮肉にもジョーカーとしての本能が戦いにおける力のペース配分を整えてくれるが、アリスは精神が非常に幼い。イマジンとはいえ、闇雲に暴れては保たないだろう。アリスにはそうい

う力加減がまだ上手くできないのだ。

「ここで休んで。わたしが守るから。」

言ってアリスを横たわらせ立ち上がったその時、割れた窓の外の光景が変化していることに初は気付いた。

時空嵐が、消滅していたのだ。

「……え？あれ？……あれ、なんだろ」

そして、遠くの丘陵に現れた異常を。

「……あん？なんだありゃ。」

「どうしたの？」

アリアライナーの一号車の乗務員用シートに座って窓の外を見ていた恭也が素っ頓狂な声をあげた。

「ほら。あそこ。」

言われ、恭也の指が示す方を見遣る瞳子。

見れば、遠くの丘陵の上に、まるでグレーのオーロラのようなものが現れていたのだ。

『インフォメーション。時空震の干渉を感知しました。方位、281°。』

ブトレマイオスが報告した反応は、恭也が発見した通り、ほぼ真左の方角である。

やがてそのオーロラは、まるで舞台の幕のように下がってゆくと、その中から数体の人影を吐き出したのだ。

「なんか出てきやがったぞ!？」

「透!？ 左側! なんか出てきた!」

『確認している!あれは……』

デイレイドの背中が応えるより先に突如起こったその現象に、恭也と瞳子は愕然とした。

それは同じ光景を目撃した、六号車にいるレイラとヴァイオラ・シーザーと七号車の初とアリスも同様だった。

あれほど絶望的な数で荒野を黒い海と埋め尽くしていたダークロー



慌てて横っ飛びに列車をかわす震。異世界から連れてきたモンスターたちも、各々飛び退いてかわしており無事なようだったが。

それらのすぐ脇を、巨大な質量の濁流が暴風のように疾走してゆく。「なっ!?!? なにっ!?!? あぶ!?!? あぶ!?!?」

尻餅をついて口をぱくぱくさせる震。

列車に轢かれかける経験などそうあるものではない。

走り去った列車は数百メートル先で旋回すると、こちらへと半分ほど近づいたところで停車した。

「……ふむ。やはりサイズ差が大きいとなかなか当たるものではないな。列車では小回りが利かない。」

「……いや、今のはあんまりだと思っただけど……」

その遠くに停車した「時の列車」から黄色い異形・ディレイドが降り立ったのが目に入った震は慌てて立ち上がった。

「お、お前!?!? 今の当てる気だったのか!?!?」

「言ったはずだ。俺の使命を邪魔するものは、すべからく排除する。」

しれっと告げた「悪魔の影法師」の言い種に、震の怒りはあっさりと沸点を越えた。

「世界の破壊には手段は選ばないってかい!?!? 卑怯だとかどうとかそんなのは軽く突破してるのは分かってたけど、なおさら惨たらしく潰したくなっただよ!?!?」

地団太を踏んだ震は、周りに立つ自分が連れてきた数体のモンスターたち指し示して宣告した。

「見る!?!? こいつらは不死生物「アンデッド」だ!?!? いくら倒しても起きあがるこいつらにかかれれば、貴様とていずれ消耗して滅びるほかないだらう!?!?」

「なるほど。だから「統制者」は生命のリセットを解除したのか。」  
「助かったってことか?」

「だがあそこにいるのは、先ほどのダーククローチと大差ない連中だ。倒さねばならんが、初を守るなら、この場合やり方に制限がある。」

デイレイドは、震の言うことをそつちのけでなにやら列車のドアの中のと会話をしているようだった。

「……おのれ「悪魔の影法師」！余裕をぶっこいていられるのも今の内だよ！なんせあたしには「奥の手」がある」

横の列車のドアの中を向いているデイレイドに向かって指をさした震は、己を掻き抱くように身をすくめた。

「鳴滝のボンクラの実験も、たまにゃあ役に立つもんだねえ！？

そら！行くがいい！」

叫び、両腕を広げた震の身体から大量の砂が吐き出され、それは一塊に寄り集まるとまるで悪魔のような人型を成し、モンスターの中でも一際大きな体躯をもつ三つ首のモンスターに滑るように飛び付くと、溶けるようにその身体にまとわりつき、そいつの背中から上半身を生やして覗き込むように呟いた。

『……貴様の望みを言え。』

震が解き放ったデスイマジンの問いかけに、その三つ首のモンスター・ケルベロスアンデッドはぐるぐると唸りながら応えた。

『勝利を。全てを塵芥に帰し完全なる俺一人の勝利を！』

『よかるう。貴様の望み、聞いた。』

契約を取り付けたデスイマジンはケルベロスアンデッドの体内に溶け込むと、やがて三つ首の異形が体色を白っぽく変化させ、三つの頭から大きな角を生やし、全身の筋肉に当たる組織を膨張させ、爪を伸ばし、あちこちから鎌のような突起を生やした。

『……』

溢れる力に身を震わせ禍々しい咆哮を轟かせるケルベロスアンデッド。

『……イマジンとアンデッドの、デュアルビーイングか。』

訳の分からないことを言うデイレイドに、震は誇らしげに宣告した。

「さあ！あたしらの知恵と、合体した世界物理に勝てるものならやつてみる、デイレイド！ 行け！お前たち！」

震の命令に、一斉に動き出す数体のアンデッドたち。

ところが、デスイマジンが取り憑いたケルベロスアンデッドだけが、なぜか明後日の方角へとすたこらと走り去って行ってしまったのだ。

「……………へ？ あ！？ コラー……!？」

ケルベロスアンデッドの背中に震の絶叫が聞こえた様子は、ない。



「龍騎の世界」で鳴滝が行っていた「実験」とは、ディケイドに対抗するための異世界戦力の融合、透が言うところの「ディアルビーイング」生成の実験だろうと鉄槻は解釈しました。

あるいは別の実験の副産物が「デュアルビーイング」だったのか。まあ細かい事は今後本筋で語るとして。

だいたい舞台裏が知れてるせいで、すっかり出オチにも等しいピエロと化した感のある震姐さんですが。

まあこれでも必要があつて設定したつもりのキャラなので、生暖かく見守つてあげて下さい。

さて、もふ先生ごめんなさい！「電王の世界」編は、あと一本続きます！

track・37 電王の世界(前書き)

ご報告。

前話track・36に、挿絵を追加しました。

ご注意。

電王の世界編いよいよクライマックスです。

クライマックスに長いので気合いを入れてお読みください。

特にケータイ読者の方。 さあ、今こそ「なるつ」の新機能「しおり」を使う時！

……つてくらい長いかもです。

こちらに向かつて荒野を駆けてくる数体の異形を見据え、ディレイド・透は車内にいる瞳子と恭也に語りかけた。

『時間がない。聞け。あれがイデアファウンダー「アンデッド」だ。奴らはバトルファイトのルールに則り、自分だけが生き残り己の種を繁栄させる為、まずはバトルファイトの盤をひっくり返すジョーカーを真つ先に潰そうとする。』

確かに、アンデッドたちは赤い服の女の怨嗟にまみれた指示を無視して、ディレイドではなく初がいるアリアライナーの最後部車両の方角へまっしぐらに向かっているようだった。

『アンデッドは過大なダメージを受けるとベルトのバックルを開ける。だがそれで行動不能になったとも限らないから注意しろ。バックルを割つたらすぐに専用のカードで封印することだ。カードは初が持っている。』

「お前も持ってたんじゃないか？」

恭也が尋ねるが、ディレイドは首を振った。

『俺が持っているカードは疑似的なもので、俺の手から離して他人に貸すことができない。そして俺は、あの逃げたデュアルビーイングを追わねばならない。アンデッドは全滅させねばならないが、初を含むどれか一体だけが残ってもこの人間の世界は消滅する。だからそちらはそちらで一体は捕獲しておけ。』

「勝利条件が厳しいな。」

『それから瞳子。』

「なに？」

恭也の後ろから瞳子が身を乗り出す。

『お前の目的を達成する為の条件は今言った通りだ。俺はこれからあのデュアルビーイングを追跡する。状況をよく理解し、お前が必要に応じて策を練り決断を下せ。』

「……分かった。」

瞳子はしつかりとうなずいた。

『美穂たちにも伝えておけ。』

言い置いてデイレイドは駆け出した。

片手を振ると、エクリスエクस्पレスのフロントノーズのハッチが開き、中からマシンデイレイダーが飛び出してきた。

傍らを併走するバイクに飛び乗り、デイレイドはアンデッドの群とすれ違い、遠くを走り去ってゆくデュアルビーイング目指して駆け抜けていった。

『……と、言うわけだから。』

「よおしっ！ういちゃんを守る為！アンデッドだかなんだか知らないけどサクサクやつつけるよっ！」

瞳子からの車内通信を聞き、復活した美穂はアリアライナーのドアから飛び降りた。

取り出したアリアベルトを一振りして腰に巻き付け、黒いカードをバツクルに上から挿し入れる。

弾むようなアップテンポのメロディが流れ出す中、美穂はパスを振り抜くようにバツクルにかざした。

「変身！」

《ソロ・フォーム》

認証の音声と共に、美穂の身体に白い輝きが殺到し、純白の扁平なボディスーツとなって包み込んだ。

続いてバツクルから飛び出したいいくつものパーツが美穂の周りに配置され、次々と接続してゆく。

丸みを帯びた装甲が胸に、肩に、ベルトに沿って腰にも装着され、頭部にも三方から取り付いたパーツが、体表のレールを辿って移動する。

後頭部から頭頂を越えて巡ってきた大きな機械めいたアイマスクのようなパーツが顔面に装着され、左右のパーツは頭頂付近へと移動

して細長い紡錘形を伸ばしてウサギの耳のようになり、マスクのパーツが展開変形して赤いセンサーを露出した。

これがアリアライナーが所有する「時の守り人」にして美穂自身のオーラを変換して顕現した姿、「仮面ライダー　アリア・ソロフオーム」。

『さあて。ちゃっっちゃかやりますかっ！』

前開きのスカートアーマーにマウントされている白いパーツ「アリアガッシャー」を、左右の手でひとつずつ引き抜き、それぞれをもうひとつのパーツに接続させる。

そうして引き抜いた、二基ずつ繋いだ状態になった部品を背後に回し、残りひとつのパーツに左右から接続させて引き抜いた。

合計五基のパーツを一直線に繋いでできた棒杖を、先端を弾き下端を蹴って曲げると、両端をオーラの弦で繋いだ弓が形成される。

《アリアガッシャー、ボウモード。》

見渡せば、遠く、こちらに駆け寄ってくる異形の群。その数ざっと六体。

瞳子の報告通り、背後のアリアライナーの中にいる初だけを狙うつもりなのだろう。

『やらせないからね！絶対に！』

『美穂、守りきるよ。』

『うん！』

隣に並び立ったレイラに応え、ソロフオームは矢のない弓をきりりと引き絞り、そして光条の矢を解き放った。

「くっくっく……時空嵐が収まったってことは、ようやく俺の出演ってこったな。」

そのアリアライナーのドアから、今度は恭也が降りてきた。凄まじい怒りとも歓喜ともつかないキラキラした形相で。

『さあ！ゆくのだ恭也！世界は恭也を待っている！』

『ふれー！ふれー！きよ・う・や！　わたしが怖いから早くやっつ

けてー！」

「しまいにやお前からたたむぞ!？」

アリアライナーの上でなにやら喚いているシーザーとヴァイオラに振り向いて吼えると、前を向いた恭也はそのごついベルトを一振りして腰に巻き付けた。

バックル左端に突き出たレバーを押し込むと、右端のフラップパネルがカシッと小気味良い音を立てて展開し、チェンバロによるケルティックめいたメロディが流れ出す。

「変身！」

恭也はパスをバックルの右端、フラップパネルの下のスリットに挿し入れた。

がしゃん、とバックル内部をパスが通過するにつれ、中央のクロスディスクが反時計回りに九十度回転し、左端に突き出たパス表面の模様と併せてシルバーに輝く「K」の文様を浮かび上がらせた。

《カイロス・フォーム。》

女声による認証が告げた直後、恭也の身体に光の粒子が殺到し、平坦な黒のボディースーツを形成し包み込んだ。

続いてぞくぞくと溢れてくる粒子は恭也の周りで次々とパーツを形成し、完成する端から恭也の身体に張り付いてゆく。

そのパーツは膨大な数で、胴体はおろか腕を完全に包み込んでしまう程。ベルトバックルを除いて最初の黒のボディースーツを一切露出させないほど寄り集まったそれは、まさに重甲冑の趣。

それはまるで城塞を築くかのような光景だった。鋭角に張り出した胸郭といい、両肩から双塔のように突き出た部位といい、まるで堅牢な城塞が人型に立ち上がったかのような鎧。

そして後頭部から頭頂を越えて、カールした巨大な角を持った羊が正中線のレールを辿ってくると、薄べったく変形して顔面に張り付いた。

続いて同じく後頭部から今度は巨大なヘッドフォンのようなアーチ型のパーツが両耳を基点に回転して巡り、縦のスリットが幾重にも

入ったプレートが顔面を覆い隠した。それはまさに西洋甲冑の面頬。ハーユネット  
ようやく変化が完了し、余剰のエネルギーが吹き出し巻き上げた塵  
で弧を描いた、これがエクリスエクस्प्रेसが所有する時間線防衛  
システム。恭也自身のオーラを変換して顕現した「仮面ライダー  
エクリス・カイロスフォーム」の姿。

「……この俺が出てきたからには、もうお前らどうなっても知らね  
えぞ……！」

物騒なオーラを漂わせ眼前で小指側から拳を握り込むと、恭也はカ  
イロスフォームの全身に配置されたシルバー地にピンクのラインを  
刻まれたエクリスガツシャーのパーツを取り外し、まず三基で「H」  
型を組み続いてそれを先頭に部品を一直線に次々と接ぎ足すと、全  
十二基からなるパーツで構成された長大な棒杖が完成し、それを頭  
上で回転させて地面に突き立てた。

身長を大きく越える全長の先端、H型の両端から鋭利な幅広のオー  
ラブレードが伸びる。

《エクリスガツシャー、ハルバードモード。》

「おりゃあああああ！」

巨大な槍斧を振り上げ、カイロスフォームは迫るアンデッドの群目  
掛け駆け出していった。

> i 4 0 9 6 — 5 3 8 <

恭也たちに迫る六体のアンデッドのうち一体が、突然宙に飛び上が  
った。

トンボの祖「ドラゴンフライアンデッド」は凶悪な形状の短剣を振  
りかざし、トンボらしい不規則な空中機動で肉迫しては強烈な一撃  
を加えて飛び去ってゆく。

「おわっ！？」

その時、カイロスフォームの足が、地中から現れた触手に絡め取ら  
れ動きを封じられた。地中を移動する能力を持つ巻貝の祖「シエル  
アンデッド」の仕業だ。

そこへまたドラゴンフライアンデッドが飛来し動けぬカイロスフォームに強烈な斬激を加える。

装甲の上をスパークが走るが、カイロスフォームは小揺るぎもせず恭也もダメージを負った様子がなかった。

カイロスフォームの装甲は見た目通りとてもぶ厚く、生半可な攻撃では一切ダメージを通さない。

『くそつたれ！ちよこまかとうぜえな！？』

『恭也くん！』

そこにソロフォームからの援護射撃が飛び込み、ドラゴンフライアンデッドに痛撃を加えてバランスを崩させた。

『さんきゅー！』

さらにアリアライナーの上からヴァイオラとシーザーの射撃がドラゴンフライアンデッドに襲いかかり、とうとうアンデッドは墜落した。

『そいつを片づけるおっ！』

恭也の叫びに応え、ソロフォームとヴァイオラ・シーザーの射撃が集中する。

そしてカイロスフォームもハルバードモードを振り上げ地面に突き立てた。

『てめえもだっ！？』

土をすくい上げるようにハルバードモードを振り上げると、地中からシエルアンデッドが抉り出されてきた。

そしてそれをハルバードモードの先に引っ掛けたまま別のアンデッドに叩きつけた。

転倒するシエルアンデッドと集中砲火に打ちのめされたドラゴンフライアンデッドのバツクルが、割れるように展開した。

『よっしやー！』

『えいつ！』

即座に初から借り受けた専用カード「プロパーblank」を恭也と美穂それぞれ手首のスナップで投げ放ちアンデッドの身体に突き立



てた。

するとみるみるうちにそのアンデッドの身体を吸い込んでゆくカード。やがてアンデッドを封印しきったプロパーブランクは、それぞれのアンデッドを収めた「プライムベスタ」へと変化し、逆戻りするかのようにくるくると恭也と美穂それぞれの手元へ飛び込んだ。

『なるほどな！』

『どんどん片付けるよっ！』

封印完了したカードをキャッチした二人は、氣勢を上げさらにアンデッドに立ち向かっていった。

マシンディレイダーを駆りデュアルビーイングを追跡するディレイド。

いかなデュアルビーイングの健脚といえど、バイクの速度に勝てるものではない。

だが、イマジンの悪知恵は既に状況を己の有利に働かせていたのだ。背後の気配に気付くや、デュアルビーイングはやおら振り向いて左手の短剣のような爪から光弾を発射した。

だがそれを冷静に避けるディレイド。

やがて対峙する姿勢のデュアルビーイングの前でバイクから飛び降り、ディレイドはカレイドブレイドを抜き構えた。

『くく。聞いているぞ「悪魔の影法師」。貴様、仲間がいなくては我のような「混ぜ物」には対抗できないそうだな？』

ケルベロスアンデッドの中からデスイマジンが嘲笑と共に呟いた。

『そしてアンデッドとやらは、とにかく生き残れば「勝ち」になる。あそこで貴様の仲間共々共倒れにさせ、貴様は我に対抗できず、よって我の勝ちとなる。くくく………』

『ああ。そうかもな。』

ディレイドの素っ気ない返事に、気を悪くしたように嘲笑を止めるデスイマジン。

『………平静を装ったところで状況は変わらんぞ。こちらはひたすら

逃げに徹すればいいだけ。』

『ああ。そうかもな。』

『……………』

ケルベロスアンデッドの、中央の首が機嫌を損ねたように傾いた。

『つまらん。貴様からバラバラにしてくれようか。』

融合してから倍に膨れ上がった肉体を唸らせ、デュアルビーイングは両手の巨大な爪を構えた。

『何か勘違いしているようだが、今回作戦を考えるのは瞳子の役目だ。』

『……………誰？』

イマジンの疑問には構わずに言葉を続けるデイレイド。

『非効率なのは先刻承知だ。後のことは瞳子が考えてくれるだろう。今回俺は、お前を足止めしていればそれでいい。そして。』

デイレイドは言いながらカードを一枚取り出し、デイレイドライバーのスリットにそれを挿し入れた。

『他のデュアルビーイングならいざ知らず、イマジンには「フリーエネルギー」で攻撃せねばならないが、アンデッドに対しての攻撃には属性になんの制限もないんだぞ？』

『……………あ。』

デスイマジンの、呆けたような声が漏れ出てきた。

デイレイドは構わずに抜刀の動作でスライドカバーを閉塞した。

《カメンライドウ・デ・デンオウ！》

認証と同時に、カレイドブレイドからの指令を受けたベルト・カレイドサーキットが己の身をドット柄のノイズで包み、形状を、構造を、組成を変移させてゆく。

やがてそこに、中央に円形の紋を描いた「仮面ライダー 電王」のベルトが現れ、デイレイドはカレイドブレイドをバツクルにあてがった。

『変身。』

《ソード・フォーム》

どこからか殺到した光の粒子に包まれるディレイド。

その光が晴れたそこに現れたのは、やはりディレイドのままであったが。

『さて。』

呟いて、ディレイドは再度カレイドブレイドをバツクルにあてがう。

《フルチャージ。》

稲妻のような電光を身に纏い、ディレイドは剣を腰溜めに構えた。

『行くぞ。』

『……く!?』

慌てて気を取り直したデュアルビーイングに、斬撃が襲い掛かった。

残り四体。

だが先ほどの二体のアンデッドとこいつらとでは、強さがまるで隔絶していた。

『くっそ!? アンデッドにもピンキリいるってことかよ!?』

カイロスフォームのハルバードモードは、先ほどからのアンデッドに対して何かすりもしていない。

パラドキサマンティスの祖、漆黒のカマキリのような異形「パラドキサアンデッド」の鎌から放たれた三日月形の光刃が、カイロスフォームをかすめ遠くにいたソロフォームが咄嗟に飛び退いた地面を吹き飛ばした。

『うひゃ!?』

『美穂!?』

レイラが悲鳴をあげた。

『美穂！俺を盾にして動け!』

『かつこつけてる場合かなっ!?』

パラドキサアンデッドからソロフォームを遮る位置に移動した恭也に美穂が怪訝に応える。

そのカイロスフォームの身体の各所に数発の三日月形の光刃がヒットするが、カイロスフォームは小揺るぎもしない。

肉迫した狼の祖「ウルファンデッド」が爪を振り回し素早い連撃を浴びせるが、それにもびくともしなかつた。

『おりゃああああ！』

そこでお返しとばかりに片手でハルバードモードを振り回し、アンデッド二体を牽制した隙に空いた手でベルトバックルの左端のレバーを引き電光を纏ったカードを引き出した。

《フルチャージ。》

そして引き抜いたカードをハルバードモードの柄の中ほどにあるスリットに一閃させた。

途端に全体を電光で覆い尽くすハルバードモード。

《フルチャージアタック。「カイロスディバイド」レディ。》

『うらあああ！』

カイロスフォームがその稲妻の槍と化したハルバードモードを振り回すと、オーラを伴った烈風がアンデッドを押し退け動きを鈍らせた。

『ああああああ！』

さらにそこへ背後から振りかぶったハルバードモードを縦一文字に振り下ろす。

まるで落雷のように巨大な電光の刃がアンデッドたちを襲った。

『こっちの装甲は異様に固えんだ！構わねえから言う通りにしろ！』

『はいよっ！』

今の一撃は、ここから先へ行かせないためと、複数体いるアンデッドどもの消耗を誘う意図で放ったもの。そこにいたアンデッドは、腕をかざした防御体勢でまだしっかりと立っていた。

そこに突然、別方面から伸びてきた紫色の蔦がハルバードモードとカイロスフォームの首に絡みついた。

『うお！？』

『恭也！』

アリアライナーの屋根からのヴァイオラとシーザーの射撃がその蔦の主、蘭の祖「オーキッドアンデッド」に残らず命中するが、まる

で効いた様子がなかった。

この四体に対しては、威力が低過ぎてヴァイオラとシーザーの攻撃はまるで役に立っていなかった。

動きを抑えられたカイロスフォームを、パラドキサアンデッドとウルファンデッドが迂回していこうとしている。

『こなくそっ!?!』

恭也は絡め取られたハルバードモードに片手で掴まりながらパラドキサアンデッドに牽制の回し蹴りを放つが、とうとうマークを逃れたウルファンデッドがカイロスフォームから離れソロフォームへと迫った。

『えいつ!』

ソロフォームから放たれた光の矢は、己に迫る敵ではなくハルバードモードに絡みつく蔦を打ち据えちぎり飛ばした。

さらに続けて放たれた数条の矢が、その向こうのオーキッドアンデッドに襲いかかるが、あるうことかその瞬間、レイラと取っ組み合いをしていたムカデの祖「センチピードアンデッド」が突然不自然な拳動でふらりとその射線上に身を投げ出したのだ。

センチピードアンデッドに直撃する光の矢。ムカデの祖はバツクルを割って倒れ込んだ。

『美穂、逃げろおお!?!』

今の攻撃を己の敵に向ければ、飛び道具しか持たないソロフォームは敵の接近を許しはしなかったはずだ。

それでもソロフォームは冷静に次の矢をつがえようとする。だが間に合いそうには思えない。

『あ・よいしょ。』

そこに突如飛び降りてきたヴァイオラが、ウルファンデッドを押し潰して着地した。

『ヴァイオラ!?!』

その無茶な行動に美穂と恭也の絶叫が重なった。

次の瞬間にはヴァイオラはアリアライナーの向こうまで逃走してい



の要である瞳子を伴っていないのだ。

早いとこ透の元に行ってあげたいが、バイクで追走するような長距離などとても瞳子の足では追いつけそうにない。

肝心のコントローラーであるバイクを使われているため、エクリスエクスプレスで追いかけることもできないのだ。

（なんだよ……肝心の自分のことがおざなりじゃん）

胸中で愚痴をこぼす。

（……ああ。ダメダメ。時間の無駄。）

頭を振って鬱に傾きかけた思考を叱咤した。

やおら立ち上がった瞳子は、壁の備え付けのコンソールに向かい話しかけた。

「ねえ、秋乃。外の状況はどう？」

『残り四匹。倒れて動かないのが内二匹。でも見てて心臓に悪いわ。』

ぼやき加減の秋乃の声が答える。

『倒れたやつにカード使う暇もないのよ。あれ、また起きあがってくるのかしら。』

「あまり放っておくと、復活しちゃうよ。」

その疑問に初が応えた。

「シーザーとヴァイオラにカード全部持たせるべきだったかな。」

瞳子が反省するも、今さらではある。

『あら？』

「どうしたの？」

突然、秋乃が喫驚の声をあげた。

『瞳子、ちよつとこつち来て。あなたがこつちに来たほうが話が早そう。』

「なにそれ？」

『ちよつと待ってて。そこ代わるから。』

少ししてこの倉庫のドアが静粛にスライドし、秋乃が現れた。

「どうしたの？」

「いいからエクリスエクスプレスの前に行ってみて。瞳子が直接見たほうが早いと思う。」

「……？ 分かった。ここよろしく。」  
言って、初のことを秋乃に任せ瞳子は出ていった。

「秋乃お姉ちゃん、なにかあったの？」

「ううん。悪いことじゃないんだけど。たぶん瞳子じゃないと分かんないことだと思う。」

よく分からないことを言って秋乃は初の隣に腰掛けた。

「ふうん。」

「やれやれだわ。」

それでも苦笑ぎみに溜め息を吐く秋乃。

しばし部屋は沈黙に浸る。

「……ねえ、秋乃お姉ちゃん。」

「……なに？」

ややあつて、初が改まった調子で話しかけてきた。

なんだろうと横を向いた瞬間、秋乃はびっくりして固まった。

そこにいたのはあの小さい少女ではなく、おぞましく巨大な悪魔の姿。

顔を覆うクリアグリーンのバイザーの向こうから、まるで歯を食いしばった悪鬼のような形相がこちらを向いていたのだ。

『……ごめんね。』

くぐもった初の声が謝った次の瞬間、秋乃の意識は闇に落ちた。

『ちょっと!?!? 恭也くん!?!? しっかりして!?!?』

美穂が懸命に叫ぶが、そのカイロスフォームには聞こえた様子がないかった。

幽霊のようにのそりのそりと歩いてきたカイロスフォームは、だらりと提げていたハルバードモードをいきなり振り上げ後退るソロフォームめがけて振り下ろした。



『うひゃあああ!?!』

横っ飛びにかわしたソロフォームの背後で地面が派手に陥没した。さらにその脇では、バツクルを割ったはずのセンチピードアンデッドがやけにぎこちない歩き方でレイラに迫り。

『ちよっ!?! なんなのこいつ!?!』

そしていきなり口からドス黒い霧を噴射した。

『ツツ!?! きゃああああ!?!』

突然の噴霧を浴びせられ泡を食うレイラ。

そして直後に倒れ、顔とのを押さえてのたうち回りもがき苦しんだ。だしたのだ。

『ああああっ!?! つげほっ!?! げほっ!?!』

『レイラっ!?! わっ!?!』

駆け寄ろうとするが、そこに振り下ろされてきたハルバードモードをなんとかかわしてたたらを踏む。

『どーなってんのコレ!?!』

突然カイロスフォームが拳動不審になり、味方に攻撃をしかけてきたのだ。

その不自然な拳動。どうも正気とは思えない。

その上パラドキサアンデッドまで腕を振り上げソロフォーム目掛けて例の光刃を飛ばそうとしている。

『!?!?!』

だがその時、あろうことかセンチピードアンデッドがパラドキサアンデッドにも毒霧を噴射した。

『えっ!?!』

途端にもだえ苦しみ出すパラドキサアンデッド。

一瞬間割れを疑ったが、美穂はアンデッドの習性を思い出す。

元々こいつらは同じ「アンデッド」ではあっても「仲間」ではないのだ。

乱戦に乗じて他のアンデッドを襲うことは、そのルールと目的上確かに有り得そうだ。

『……と、いうことは』

恭也の異常行動の謎とバックルを割ったにも関わらずもたもたと動いているセンチピードアンデッド。

残るは、離れた所で事を傍観しているオーキッドアンデッドのみ。ということは、奴が何かしたということだろう。

『レイラ！もうちょっと我慢して！』

叫び、ソロフォームは弓の狙いをオーキッドアンデッドに定めた。

だが、動きを止めたソロフォーム目掛けてなおもカイロスフォームが殴りかかってくる。

『っ！？ 恭也くん！？』

『とうっ！』

そこへ、シーザーが飛び降りカイロスフォームの体内に滑り込むように憑依した。

続いてどこからか瞬時に駆け戻ってきたヴァイオラまでもがその身体に飛び込む。

やがておとなしく腕を下ろしたカイロスフォームは、バックルからパスを引き抜くと、左端のレバーを押し込んだ。

チェンバロによるケルティックめいたメロディが流れる中、カイロスフォームはパスを裏返しバックルの右側からパスを差し込んだ。

がしゅん、とバックル内部を通過し、クロスディスクを時計回りに九十度回転させ、左側に突き出したパス表面の模様と併せてピンクの「D」の文様を浮かび上がらせた。

《デイオスクロイ・フォーム。》

認証の音声と共に、面頬のような巨大なマスクが分解消滅し、全身の装甲が部品単位でせり上がり隙間を割り広げると、その隙間から無数の光のレールを吹き出した。

その光のレールはカイロスフォームの背後に寄り集まると、絡まるようにして人型を成す。

すると浮かびあがった装甲のパーツが次々とレールに沿って移動を始めた。

やがてそこに、かなりスリムになったエクリスと、装甲のパーツを組み上げてできた全く同じ姿のもう一体のエクリスが背中合わせで現れた。

体を包む道化師めいた軽装甲の色は、ピンク。

続いて両者の後頭部から三日月型のパーツが頭頂を越えて正面にやってくる、迅速に回転してわずかに変形すると一方は顔の右半面に、もう一方は左半面に装着された。

口の端を吊り上げて笑っているかのようにも見える電仮面をぎらりと輝かせ、変化は完了したようだった。

《ディオスクロイフォーム・キャスター。》

ベルトを持つ、元の位置にいた方が、その名称を告げた。

《ディオスクロイフォーム・ポラクス。》

背後に現れた分身も、音声がそう告げる。ただしこちらにはベルトがない。

ほか、電仮面が左右対称であることを除けば両者は全くの同形状であった。

これがヴァイオラとシーザーを取り込んだエクリスの第二形態。大量の装甲を分離・変形させて分身を作り出し、一体で二体分の戦力を構成する「仮面ライダー エクリス・ディオスクロイフォーム」の姿。

『死にたくないいいいい!?!』

『さあ。自らの罪を数えるがいい。最大の罪は、怒ると怖い恭也を怒らせたことだ。よって極刑に処す。』

突然振り向き身をすくめて悲鳴をあげたディオスクロイフォーム・キャスターと、その手前でスナップを効かせた片手を指し向け何かよく分からないことを言うディオスクロイフォーム・ポラクス。

その立ち居振る舞いから、それぞれヴァイオラとシーザーが憑依した存在だと知れた。

> i4097—538<

『つて、怖いんだかやる気になったんだか、どっちなの?』

ぼつりと美穂がツッコんだ。

『うふふふ。どつちでもないわ。死にたくないだけよ。』

『問題ない。それより恭也を操っていた異能力は無力化した。かの怪現象の元凶を今こそ退治せん。』

言ってオーキッドアンデッドを指し示したディオスクロイフォームは、それぞれ身体に装着されているエクリスガツシャーを次々と外して組み立て、三基で構成された「へ」の字型の武器を二丁ずつ計四丁を作り出した。

《エクリスガツシャー・バヨネットモード。》

先端からオーラブレードを伸ばした銃剣銃「バヨネットモード」を構えるディオスクロイフォーム。

『いざ、ゆかん!』

『さあ遠くからチクチク行くわよ。美穂も手伝って。』

『あ。うん』

駆け出したディオスクロイフォームに比べ、ソロフォームもボウモードを構え直した。

『はあああああ!』

鈍重だったカイロスフォームとは一転して凄まじい速さで駆けるディオスクロイフォーム。合計四丁のバヨネットモードが火を噴きもはや一本に繋がったように見える程の光弾の連射がオーキッドアンデッドを襲った。

『オーキッド!?!』

未変身時よりは威力を上げた銃撃に身悶えするオーキッドアンデッド。

『ていつ!』

ソロフォームは、今だもたもたとさまよっているセンチピードアンデッド目掛けて矢を解き放った。

直撃を受けもんどり打って転がるアンデッド。毒霧の噴射だけは防がなければならぬ。

ディオスクロイフォーム・キャスターは、ベルトバツクル左端に突

き出たレバーを引くと電光に包まれたカードを引き出した。

《フルチャージ。》

そしてそのカードをバヨネットモードのスリットに一閃させる。

するとキヤスターの身体が電光に包まれ、それは空に稲妻の腕を伸ばすと離れた位置を駆けるポラクスを捉え電光を伝播させた。

《フルチャージアタック。クロスファイアテンペスト」レディ。》

「さあ！今こそ貴様の幕引きだ！」

「たとえアンデッドだろうと、死ぬまで殺すわよ」

改めて離れた位置から狙いを定めたディオスクロイフォームが、オーキッドアンデッド目掛けて分身と同時に銃撃を浴びせながら駆け出した。

「ooooooooooツツ!?!」

けた違いの威力の銃撃に狂ったように身悶えして踊るオーキッドアンデッド。

やがて肉迫したディオスクロイフォームはアンデッドのいる場所で交差し、それぞれ通過した先で両腕を左右に振りきった姿勢で停止していた。

オーキッドアンデッドの身体に輝く二重の「x」の字を刻みつけて糸が切れたかのように膝を落としたオーキッドアンデッドは、倒れ伏す直前に大爆発を起こした。

それでもアンデッドゆえ爆発跡に丸ごと身体が燃え残っていたが、バツクルはしっかりと割れていた。

それに伴い、操られていたらしいセンチピードアンデッドも倒れて動かなくなった。

これで、残るはパラドキサアンデッドのみ。

「ooooooooooツツ!?!」

咆哮を上げその鋭利な爪を生やした丸太のような腕を振り回すケルベロスアンデッド。

デュアルビーイングの攻撃を、ディレイドは冷静に剣で打ち払い捌

いてゆく。

凶悪な形状の爪がうなりを上げ、そこから光弾がバラ撒かれるが、  
ディレイドはそれら全てをことごとくかわしてしまふ。

『これまで出会ったなかで一番精度が低いデュアルビーイングだな。』

『なにおう！？』

ディレイドの呟きに、デスイマジンの意識が激昂した。

『我は最強の力を手に入れたんだあああ！』

『確かに力は強い。力が強いだけだな。』

冷静に事実を指摘し、ディレイドはデンオウベルトのバックルに再びカレイドブレイドをかざした。

《フルチャージ。》

途端に電光に包まれるカレイドブレイド。

『力が強いだけでは世界は滅ぼせない。』

『三回も言ったああああ！？』

デスイマジンの絶叫を無視して、ディレイドはフルチャージを施された剣をデュアルビーイングに振り下ろし、その電光で巨体を貫き激しく吹き飛ばした。

『うおおおおお！？』

転がっていった先で、デュアルビーイングの身体はスパークを迸らせ、やがて大爆発を起こした。

燃え残った身体が、どさりと倒れ伏す。

だが、これも同時にアンデッドでもあるデュアルビーイング。だからとて簡単に死に絶えることはない。

『……まだ、だ』

デスイマジンの意識がしつこく繰り返す。

『まだまだ！まだ終わらんぞ！』

絶叫をあげたデュアルビーイングの巨体が、いきなり爆発するよう膨れ上がり全く異なる巨大な姿へと変貌して空に飛び上がった。  
デスイマジンが暴走したのだ。

それは「時の列車」の間では「ギガンデス」と呼ばれる現象。イメージが暴走したイマジンは、理性を失い破壊力を撒き散らすだけの存在になり果てる。

そこに現れたのは、三つの首をもつ巨大な魔鳥。広げた翼の端から端が「時の列車」に匹敵する程の大きさ。

「……！」

絶叫をあげたデュアルビーイングギガンデスは、翼から蹴爪から巨大なスパイクを無数にバラ撒き始めた。

広範囲に渡る爆撃に、ディレイドは迅速に駆け回り回避に努めた。

「……これだから力自慢は始末が悪い。」

「……ああ。これじゃ確かに秋乃には意味分かんないかも。」

エクリスエクस्पレスの一号車のドアにたどり着いた瞳子が見たものは、外に停車している無人のバイク、マシンディレイダーのみの姿だった。

自律走行で戻ってきたのだということは分かっていたが、はて、透はいつたいこれで瞳子にどうしろと言うつもりだったのか。

（……わたしに考えろって言ったのは、このこと？）

まったく。決断を任せたにも関わらず相変わらずマイペースな奴だ。瞳子は列車の後方で繰り広げられる乱戦を眺め、しばし黙考した。

唯一残ったパラドキサアンデッドと対峙するアリア・ソロフォームとエクリス・ディオスクロIFORM。

パラドキサアンデッドはまだ毒に苦しんでいるようだったが、それでも対決する姿勢は崩さない。

それどころか、ソロフォームとディオスクロIFORMに迂闊に動けないようなプレッシャーを与えてきているのだ。

間違いない。ここにいたアンデッドの中で、別格の強さを持つ最高位のアンデッドだ。

むしろ、単体にしてしまったことでパラドキサアンデッドの強みを

引き出してしまったとも言える。

だが、こちらにも倒す順番まで気が回らなかった。

「そこまでだよ！」

状況が膠着したそこに、戦場には不釣り合いな幼い声が響いた。

『えっ！？ ういちゃん！？』

見上げた美穂が仰天した。

アリアライナーのドアに立ってアンデッドをきつと睨み付けていたのは、安全な場所に避難してなければいけないはずの存在だった。そしてパラドキサアンデッドは、ソロフォームとディオスクロイフォームに背を向けてまで初を見返した。

『ういちゃん！逃げて！』

言いざまにソロフォームが光の矢を放つが、一瞬で振り向いたパラドキサアンデッドが光刃を放ち光の矢を打ち返してきた。

『わっぷ！？』

なんとかボウモードで受け止めたが勢いで転倒してしまう。

「もう、これ以上、わたしの大切なひとたちを傷付けさせないから！変身！」

きつぱりと宣言した初は、指先に取り出したカードを胸元に引き寄せると、それを腹まで滑らせて、腰に現れていたベルトのバックルの中心のスリットを通過させた。

《チェンジ。》

ベルトがくぐもった声で認証を告げ、初の身体を細かく揺らめく水面のようなヴェールで包み込むと、次の瞬間には二周り、三周りも体格を拡張させ、そこに黒い異形の姿を現した。

黒のボディスーツの表面には金のラインを描き、シルバーの軽装甲を各所に装着していた。

そして赤いバイザーのようなマスク。なんとなくハート型を模しているようにも見えるその頭頂からは、二本の爪のような突起がツノのように伸び、後方へと曲線を描いていた。

すなわち。対アンデッドの封印戦士のひとり、仮面ライダー カリ



ス。

『やあああああー!』

流星のようにアンデッドに飛びかかったカリスは、いつの間にか手にしていた弓のような双剣「カリスアロー」で凄まじい速度の斬撃を上から下からと浴びせる。

迎え討つパラドキサアンデッドも、己の身体から生えた刃を巧みに動かしてその攻撃の全てを阻んでゆく。

その動きは速すぎて、美穂にもヴァイオラ・シーザーにも見えてはいても割り込むのは難しそうだった。

ヴァイオラとシーザーには、さらにその根性が足りないだけだが。

やがてその攻撃の応酬の中、カリスは素早くベルトバツクルを取り外しカリスアローの中心に据え付けると続く斬撃と足払いでパラドキサアンデッドの体勢を崩し後方へ跳躍、ソロフォームの隣へと着地した。

『美穂お姉ちゃん!一緒に!』

『うん!』

カリスは取り出したカードを弓の中心に設置したカリスラウザーのスリットに一閃し、ソロフォームはパスをベルトバツクルに振り抜くようにかざした。

《トルネード。》

《フルチャージ。》

二種の異なる音声認証を告げ、だが二人は同様の動作で弓を構えた。

カリスはアローのトリガーレバーを引き、ソロフォームはオーラの弦を引くとそこに通常よりも巨大な光の矢が出現した。

やがてのろのろと身を起こしたパラドキサアンデッド目掛け、二人は同時に弦を、レバーを解き放った。

『くっくっくっく!』

> i 4 0 9 8 | 5 3 8 <

発射と同時に出現した風の矢が、光の矢が空中で溶け合い、より大

きな矢となつてパラドキサアンデッドを貫いた。

「oooooooooo!!?」

苦悶の声を上げ、やがて力尽き倒れ伏すアンデッド。

大きな爆発を巻き起こしたが、やはり燃え残ったその身体のバックルは、しっかりと割れていた。

「やったあ!」

「うん!」

歓喜をあげて掌を打ち合う二人。

その時、停車していたエクリスエクスプレスとアリアライナーが、突然駆動音をたて始めた。

「およ?なに?」

「みんな!乗つて!」

そこに、外部スピーカーから瞳子の声が響いてきた。

「そのアンデッドを例の部屋に!初ちゃん、そいつの封印だけは待つて! 透の所に行くから!急いで!」

再び荒野を走り出したエクリスエクスプレスと連結されたアリアライナー。

コックピットルームに設置されたマシンディスプレイダーに跨っているのは、瞳子だ。

「……うわー、コレ、滅多に体験できないよね」

「ディスプレイドのバイクに変換されてしまいましたからねえ。あなたにしか動かせないんですよ。」

後ろにいるエクリスエクスプレスのオーナーが、どこかばやくように言った。

「あ!ほら!見えてきた!……つてなにあれ!?」

美穂がメインスクリーンに映る光景を指さして仰天した。

相変わらず平坦な広野の中にあつて、近くに比較対照物がなかったため大きさが分かりにくいのが、遠くにそびえる巨大な黒の板「統制者」の手に、空を飛ぶ化け物がいたのだ。

おおまかに鳥つばい形状のそいつは、直下に無数の弾丸を撒き散らしている。

地上は土煙に覆われていてよく分からないが、他に化け物が暴れている理由はないだろう。

「よく分からないけど、きつとあそこに透がいる。」

「よおし！瞳子、またあのでっかいビームではーんとやつちやおう！」

「……どうやるんだろ。」

美穂は脳天気煽るが、瞳子には走らせる以外の操作法が分からないのだ。

「そしたらほら、このパスを差し込んでトリガーボタンを押して……」

言って美穂が自らのライダーパスを突き出してバイクの横にやって来るが、そのバイクを覗き込んで動きが止まった。

マシンディレイダーのハンドル周辺にはパススロットはおろか、コネクタの類がなにもなかった。

「……あゝ。これ、透くんのバイクだったね。」

「くしょうがない！みんな！あの近くに突っ込むから、透を見つけたら援護して！」

雨霰と撒き散らされるスパイクを走ってかわしながらディレイドは「その位置」へと移動していた。

すなわち、意識を繋いだ瞳子から流れてくる情報から推測されるエクリスエクスプレスの通過地点へと。

そこへ、土煙を貫いてエクリスエクスプレスが駆け込んできた。

迅速に通過した後には、既に変身したエクリス・カイロスフォームとアーリア・ソロフォーム、そしてヴァイオラ・シーザーとレイラが着地していた。

「透くん！おつまたせ〜！」

「大丈夫かよ透！？」

こちらに駆け寄ってくる二人の仮面ライダーを見遣り、ディレイドは一枚のカードを取り出してディレイドライバーに挿し入れた。

『うむ。丁度良い所に来た。瞳子のおかげで既に用意はできている。』

『は？なんのことだ？』

怪訝に聞き返すカイロスフォームには取り合わず、ディレイドはさりげなくカイロスフォームの背後に回った。

『んで、どうしよっか。あんなおっきいのやっつけられるかな。』

『もちろんだ。俺たちがいればな。』

掌を額にかざして空を見上げる美穂の疑問に透は素っ気なく応え、抜刀の動作でスライドカバーを閉塞した。

『ところで恭也。死又程くすぐつたいぞ。』

『ファイナルフォームライドウ・エ・エクリス！』

『なにうわああああ！？』

言いざまに振り下ろしたカレイドブレイドを呆気なく身体に透過されたカイロスフォームが悲鳴をあげた。

『ぬお！？』

『わ、なに！？』

同時にまるで掃除機に吸い込まれるようにヴァオイラとシーザーが圧力に引っ張られ、やがてカイロスフォームの身体の中にすぽんつ、と吸い込まれて消えてしまった。

そしてカレイドブレイドの制御下に置かれたカイロスフォームの身体はわずかに宙に浮かぶと、その身を回転させ迅速に変形・変移してゆく。

やがてそこに現れたのは、二本束ねたような長大なピンクのマスクと銃のような双胴型の銃身と、先端に設置されたシルバーの巨大なダイヤ型の銃。

ピンクの銃身は、どこかヴァイオラとシーザーの姿を、先端の銃はカイロスフォームを模した複雑かつ鋭角なデザインが見て取れる。これがエクリスのファイナルフォームライド『エクリスカイロスハ

ーケン』。

『んなななんじゃこりゃあああ!?!』

デイレイドはさらにカードを入れたデイレイドライバーのカバーを閉塞する。

《ファイナルアタックライドウ・エ・エクリス!》

『さあ。皆で協力して奴を倒すぞ。』

驚愕する恭也をさて置き、白々しく言ったデイレイドはカイロスハーケンを担ぎ上げ、宙で羽ばたくデュアルビーイングギガンデスの前に飛び出した。

『ooooooooo!』

即座にこちらを捕捉したデュアルビーイングが翼を大きく羽ばたかせ、無数のスパイクを射出した。

デイレイドはそれに対し、カイロスハーケンを縦に構え、その巨大な銃の部分で盾として無数のスパイクの直撃を受け止めた。

さすが高い防御力を誇るカイロスフォームを模した銃だけに、衝撃が全く伝わってこない。

そしてスパイクの雨が途切れた一瞬を突きデイレイドはカイロスハーケンを銃のように突き出して構え、先端をデュアルビーイングギガンデスにぴたりと向けた。

トリガーを引いたと同時に、先端の巨大な銃がぎゃらぎゃらとチェーンを引きずって発射された。

それはデュアルビーイングギガンデスの右の翼を貫き吹き飛ばし、デイレイドがピンクの銃身を振り回すとそれにつれ繋がったチェーンが銃を回転させ、デュアルビーイングの上体を斜めに切り裂き残る翼も吹き飛ばした。

これがデイレイドとエクリスのファイナルアタックライド『デイレイドデイベイドテンペスト』。

『ooooooooo!?!』

悲鳴を上げてあえなく落下する魔鳥の身体。

デイレイドはチェーンを巻き上げ銃を引き戻したカイロスハーケン

をばいと放り捨てると、再び別のカードを取り出してディレイドレイバーに挿し入れ、抜刀の動作でカバーを閉じた。

《ファイナルフォームライドウ・ア・アリア!》

そしてじろりと横を振り向くが、既にソロフォームとレイラはすたこらと逃げ出していた。

『む? おい。なぜ逃げる。』

『だってだって!? なんかすごそうなんだもんそれ!?』

『恭也の悲鳴が聞こえたんですからね!?』

遠くを走る美穂とレイラがめいめい叫ぶ。

その間に、地上に落下したデュアルビーイングギガンデスは、残った身体から昆虫のように節くれ立った足を生やして地面に突き立てて身体を持ち上げ立ち上がった。

『ーーーーッ!』

魔獣の咆哮が轟く。

『大丈夫だ。そんなにすぐつたかない。』

『うそだー!? さっき死ぬほどなんとかって言ってたじゃん!?』

『あれは嘘だ。』

『いやー!?』

辺りを駆け回るソロフォームとそれを淡々と追いかけるディレイド。やがてディレイドの執拗な追跡にとうとう背後を取られたソロフォームの身体をカレイドブレイドが容赦なく透過した。

『今のも嘘だ。死又程くすぐりたいぞ。』

『ばれてないでも思ってたかきやーーーー!?』

美穂の悲鳴と同時、やはり圧力に引つ張られるように今だ逃げる姿勢で足を掻くレイラを引き寄せると、ソロフォームの身体の中に入らばんっ、と吸い込んでしまう。

そしてカレイドブレイドの制御下に置かれたソロフォームの身体はわずかに宙に浮かぶと、その身を回転させ迅速に変形・変移してゆく。

やがてそこに現れたのは、アルファベットの「D」のような形の、

オーケストラで使われるような巨大なハープ。

ウサギ耳を生やした黒い縦軸から湾曲した水色のフレームが弧を描き、そしてディーヴァフォームのオーラの髪を模した水色の弦が幾本も縦に張られている。

これがアリアのファイナルフォームライド『アリアソロハープ』。

ディレイドはさらにカードをディレイドライバーに挿し入れカバールを閉じた。

『ファイナルアタックライドウ・ア・アリア！』

本来のオーケストラでは床に置き、場合によっては二人がかりで演奏されるそれをディレイドは事も無げに担ぎ上げると、それをこちらに歩いて迫るデュアルビーイングガンデスに向けた。

『さあ。これでとどめだ。』

言つて、ディレイドは無数の弦に手を添えると、それを一気に端まで引つ掻いた。

すると、指が弦を弾くたび、光の矢が生まれ射出されてゆく。

それが弾いた弦の数だけ生まれ、さながら雨霞と光が飛ぶのだ。

その巨体にそれをかわす術などなく、光の矢の雨に蹂躪されるデュアルビーイングガンデス。

これがディレイドとアリアのファイナルアタックライド『ディレイドガデスゴスペル』。

ディレイドは両手で弦を弾き続け、矢の雨は途切れることなく魔獣に降り注いでゆく。

やがて身体中に孔を穿ち身を崩したデュアルビーイングガンデスは身動きをやめ、とうとう足を折って身体を倒し、木っ端微塵に大爆発した。

その爆炎の中から転び出てくる人影。

三つ首を持つアンデッド、ケルベロスアンデッドはバツクルを割り動かなくなっていた。

『よし。』

デイレイドがアーリアソロハープをばいと放り投げると、宙で一回転してソロフォームとレイラの二体に分かれて着地し、そのまま膝を落として抱き合い泣き出し始めた。

『あ〜ん！？ おヨメに行けない〜！？』

『なんかの扉が開くかと思っただよ〜！？』

あちらでは、呆然と地面に手を突くカイロスフォームとその傍らで折り重なって気絶しているヴァイオラとシーザー。

『うむ。皆で力を合わせる事ができた。おおむね作戦通りだな？ いけしゃあしゃあとデイレイドが言うが、それに応えたのは背後から駆け寄って振り下ろされた秋乃の盛大なハリセンの一撃だった。』

この死々墨々の状況で、接近するまで誰も気付くことはなかったが、遠く地平線から、こちらへと接近してくる「キングライナー」の姿があった。

「……と言うわけで、俺に代わって別の世界に現れたイマジンを始末してもらいたい。」

「なるほど。それは由々しき事態ですねえ。」

ここはキングライナーのホーム。

事態の収拾を察知して事後処理にやって来たキングライナーにエクリスエクस्पレスとアリアライナーを収容し、それぞれ破損個所の修復と、喪失した八号車の予備の接続と物資の補給を受けている横で、透は己の用件の説明をしていた。

「そういうことであれば、共に戦った我々のどちらかが行って差し上げるべきですねえ。」

「だったら、うちの役目じゃない？」

エクリスエクस्पレスのオーナーの言葉に、アリアライナーのオーナーが提案した。

「そっちは例の「アンデッド」とやらを元の世界に運ぶ役目があるでしょ。頑丈な倉庫持ってんだし。」



「そうですね。」  
「オーナー同士でうなずき合う。」

ちなみに、現在エクリスエクスプレスの倉庫にはケルベロスアンデッドが収容されている。

これでこの世界には「アンデッドが二体いる」ということになり、「統制者」は生命のリセットを行わない。

アンデッドを全て連れ去れば、「統制者」も元の世界について来るだろう、というのが透の見解だ。

美穂たちが倒したパラドキサアンデッドは、初によってカードに封印された。

結局、あの時襲ってきた六体のアンデッドはすべてカリスの持つ属性のアンデッドで、最後の一体を封印してそろった六枚のカードを眺めていた時の初の顔がどこか憂いつつも満足げだったのが印象的だった。

「そっか。じゃあ、これでお別れか。」

美穂が初の前にしゃがみ込んだ。

初は既に涙でぐしゃぐしゃだった。

「……………つく、美穂、お姉ちゃん。あと、秋乃お姉ちゃん、さつきは、ごべんなさいいいいい!?!」

言葉の途中で決壊し、抱きつく初を秋乃は優しく抱きしめた。

「別にいいわよ。私も初ちゃんだって分かったのに、あんたのあの姿見て私も驚いちゃったし。私のほうがひどいことしたと思ってる。ごめんね。」

「わああああん!?!」

抱き合ったまま泣き続ける二人。

やがて身を離すと、初は今度は瞳子の前にやって来た。

「……………瞳子お姉ちゃん。アリスのこと、よろしくね?」

「うん。任せといて。」

イマジン・アリスは現在初に取り憑いている状態だが、透によればこのまま初が元の世界に戻ると、強制的に接続が断たれ、アリスが消滅する可能性があった。

そこで「時の列車」で元の世界まで同行し、初との接続が断たれた瞬間、他者に再接続すればいいという回避策を聞き、瞳子がそれを引き受けたのだ。

どの道、今回は透の運転でエクリスエクスプレスでその世界へ行くことになっている。こちらのお別れはもう少し時間がある。それでも、アリスは初に歩み寄り、ひしとしがみついた。

「恭也お兄ちゃん。ありがと。おかげでアリスも消えなくて済んだ。」

「おう。良かったな。」

恭也も初の元へ歩み寄り、屈み込んだ。

「まあほら、まだ元の世界に送り届ける仕事が残ってるからよ。まだ油断すんなよ?」

「うん。」

「どおもおゝ みなさあん」

その時、そんな底抜けに陽気な声と共に白の制服に身を包んだ中年男性、駅長がやって来た。

途端に顔をしかめてそっぽを向くエクリスエクスプレスのオーナー。

「エクリスエクスプレス、及びアリアライナーの修復、完了いたしましたあ！出発準備、完了です!」

「ふむ。では行くとするか。」

言って、透はとっととエクリスエクスプレスの先頭車両の方へ歩き出した。

そうは言っても、アリアライナー一行を「カブトの世界」に案内するため、この二本の列車はまだしばし連結して走るのだが。

だがそれでも一同は別れを惜しみつつ、それぞれの車両へと向かって行った。

「恭也くん!」

「あ？」

美穂の呼びかけに、恭也が振り向いた。

「ありがとね！いろいろと！楽しかった！また会えるかな？」

「さあな。こつちの基点が2007年で、そつちが2009年だろ？ まあ今生の別れとまではいかんと思うが。」

「馬鹿ね。こつちいう時は「また会える」って言っときなさいよ。」  
秋乃がぶすつと呟いた。

「はっは。半端に気を持たせねえのもダンディズムってやつだ！  
少なくとも忘れやしねえよ！」

「最後までかわいくないわね。」

「あははっ」

それでも、互いに笑い合いながらドアの奥へ消えていった。

「たっだいま〜！竹中さ〜ん！」

「お帰りなさいませ。」

ぴかぴかの食堂に飛び込んだ美穂を、ぱりつとしたメイド服の竹中が折り目正しく腰を折って迎えた。

「ただいま。竹中さん。」

「お帰りなさいませ。」

同様に秋乃にもお辞儀する。

「たっだいま！」

「お帰りなさいませ。」

レイラにも同様だ。

『うむ。ウエイトレス。ケーキを頂こうか。』

『ねえねえケーキちょうだい！』

「お帰りくださいませ。」

「お前はこつちだろ！？なにしてやがんだ！？」

『ああ恭也！？ 待ってくれ！？ ケーキを！？ 我が輩にあの至高にして究極のケーキを！』

『いやあああ！？ 離してっ！？ わたしはあのケーキが食べられ

「たらもう死んでもいいのっ!？」

なぜかアリアライナーの食堂に入り込んできたピンクのイメージを、竹中は冷静にお引き取り願ひ恭也が引き擦り出して行ってしまった。それを見て一同はくすくすと笑い出す。

「まったく、綺麗に別れたつてのに台無しじゃねえか。」

ヴァイオラとシーザーを引き摺りながら恭也が苛立たしげにぼやいた。

『果たしてそうかな？恭也。』

『素直になればいいのに。言っておきなさいよ「また会おう」って。』

「そもいかねえつての。」

引き摺ったまま恭也は極力なんでもなさそうに言い返した。

「俺はあいつらと違ってエクリスのピンチヒッターに過ぎないんだぜ？いずれ「時の列車」の旅路からは外れることになる。」

『だからなんなのよ。』

だが、ヴァイオラもシーザーも黙らなかつた。

『道は一本とは限らない。希望は持つだけならタダだし、その効果はほぼ無限なのだぞ?』

「……ふん。」

わずかに口の端を吊り上げ、恭也は苦笑でそれに応えた。

「楽しかったよね。みんなでいたのも。」

「まあ悪くなかつたわ。」

『素直じゃない言い方。』

含み笑いするレイラを秋乃はじろつと睨み遣るが、すぐに引っ込めた。

「……ここがこんなに広く感じたのって、初めてかも。」

「……そうだね。」

食堂を見回した美穂の言葉に、さすがに相槌を打つ秋乃。

その時、わずかな振動と共に列車が走り出した。  
「あ。動いた。」

それはまた、新たな旅の始まりであった。

まずは、大切な作品をお貸し下さった もふ様、ありがとうございました。

おかげで拙作の電王編を想定以上に楽しく書くことができました。予想外の展開に流れることもあり、実に面白い体験ができました。展開によって今後も登場させていただくことがあるかと思いますが、まずはここで深く御礼申し上げます。

そして読者様におきましては、ここで描かれた「仮面ライダー アーリア」の設定・要素は鉄槻が自己解釈を施して書いたもので、原作とは少々異なるところがありますことを御了承ください。ですが、原作の雰囲気壊さぬよう大切に再現に努めたつもりです。未読の方は、是非「仮面ライダーアーリア」歌う列車、参上！〜（N0900J）」の方もご覧になってみてくださいませ。

はてさて。原作ディケイドにおいて、ディケイドに「破壊」されたはずの存在がいくつか登場しました。それはいつたいなぜなのか、は、次々回からの「ブレイドの世界」にて語られるでしょう。

「これからここに透が来るのか？」

「うむ。」

「だから、なんであんたが仕切つてんのよ。」

おでん屋「天堂屋」からほど近い場所にある神社。

その境内に三人の人影があった。

いつもの軽装にサンバイザーとサングラスをかけた瞳子と、クロックアップシステムの要たる「観測者」の巨漢・台場 和馬、そしてこの世界の基点たる存在「仮面ライダー カブト」こと天堂 総司。その特徴的な大きめの耳に触れながら総司は胡散臭そうに和馬を見上げた。

「……そう言えば、各務はどうしている？」

「問題ない。厳しい師匠にシゴかれてヒイヒイ言っておるわ。」

「なんだその状況は……？」

同じくガタツクのマスクドライバーシステム適格資格者である各務

新と、和馬の分身が現在も異世界でワームと戦っている。

和馬は自らの分身と意識を繋いでいる為、向こうの状況も把握しているのだ。

「……わざわざここで訊くことじゃないじゃん」

それを聞いて瞳子がバイザーを下ろして顔を隠し そっぽを向いた。

「ふむ？無事の知らせは 一つ聞いても構わんだろう？」

「異世界のあたしの性格が恥ずかし過ぎてカユいんだよ！」

赤面して和馬に怒鳴りつけてしまう瞳子。

そして砂利を蹴飛ばして辺りをうろろし始める。

「あああああんなオトメなあたしなんてもう死ねばいいってかいつそ死にたい……！？」

「ふむ。乙女心は複雑怪奇。彼岸と此岸を行ったり来たり。」

「男と女は時として化学反応を起こすものだ。っておばあちゃんが

言つてたな。」

「黙れ。」

> i 4 2 5 0 — 5 3 8 <

口ほどにも理解していない男どもに吐き捨てたその時。

鳥居の前の道路を突然巨大な列車が轟音と共に走り抜けて行った。

さすがに目を瞬かせる総司と和馬。

しかもその列車は、自分で枕木とレールを敷設していた気がする。

やがてしゅー、という鎮まる駆動音の中、そこに停車した列車側面

のドアが静粛にスライドし数人の人影が降りてきた。

『君の歌がく聴こえるたびく生まれ変わるく』

まずウエーブのかかった長髪の中に一筋の水色のメッシュを加えた

少女が、調子つばずれた節で上機嫌にかなり立てながら歩いてきた。

『目に見えぬくメロディイ越えてくエモーション』

まるで子供の遠足のように上機嫌に腕を振り回して歩くその少女の

あとから降りてきた、金に近い茶髪をツインテールに括った小柄な

少女が追いつきざまにウエーブの頭にハリセンを叩きこんだ。

> i 4 2 5 1 — 5 3 8 <

それにつんのめった黒髪の少女は、起きあがった時にはなぜか髪が

肩ほどまで縮まり水色のメッシュが消失していた。

「……秋乃。ほら。あるじゃん。手加減とか。」

「これが私の最大限の善処の結果。」

後ろ頭をさすりながら不満顔で言う黒髪の少女に、フラットな表情

で素っ気なく返すツインテールの少女。

殴られたにも関わらず様子の異なる会話を展開する少女たちに、さ

すがに総司も和馬も言うことが思い当たらなかった。

「……と、言う訳でな。この美穂とあの「時の列車」がこの世界に

入り込んだイマジンに対処する。」

「ほづ。」

「……………」



「あははっ。信じてない。」

透の説明に、どこか焦点のずれた眼差しでうなずく和馬と総司の様子を見て美穂が朗らかに諦観を漏らした。

「とにかくアレよ。過去を壊してその度にあんたの人生を消費させてた奴らを、あんたを犠牲にせずにやっつけてくれるっての。」

「ほう。そういうことか。」

瞳子の解説を聞きようやく総司も納得したようにうなずいた。

「んで、あなたがこの世界の仮面ライダーだよな？」

そこで美穂が和馬に向かって訊ねた。

「うむ。そうだ。あとこっちの天堂 総司もな。」

「へ！？」

美穂と秋乃の仰天の声がかさなり、二人そろって総司の姿を不躰に見つめた。

「……え？ いや、だって、この子、どう見積もっても中学生くらいでしょ！？ ちょっと大変なんじゃない！？」

美穂は、総司を指して瞳子と和馬に言い募った。

細身で小柄な体躯の男児の姿をした総司を。

「いや美穂違っつての。この人こっちは見えても実年齢は二十ウン歳なんだよ。」

「へ！？」

瞳子の言葉に同じ喫驚を繰り返す美穂。

「イマジンが入り込んだこの世界が、「時の列車」なしになぜ今まで存続できたと思っっている？ 総司が自らのライダーシステムを駆使して己の人生を差し出すことで過去からの歴史の破壊を回避していたのだ。」

「もう、みるみる小さくなってくから、美穂たちが間に合っつてホントに良かったよ。」

透と瞳子の解説に、美穂と秋乃もお絶句するよりなかった。

「……ほ、ほえ〜。なんかこっちの世界もスゴいんだね〜。」

「……なんで、そこまでできるの！？」

「まあ守るべきものがあるし、俺の外見の異変なんかはそれに比べたら些事だからな。」

「……………」  
淀みなく言い放たれた総司の覚悟に、秋乃はなにやら沈痛な面持ちで唇を引き結んだ。

「……………え？ あ、うん。わかった。」

その時、美穂が唐突に虚空に向かって独り言のように相槌を打った。  
「なに？ レイラから？」

「うん。なんかオーナーが総司くん連れて来てって。」

「俺を？ どこにだ？」

憑依しているイマジンの伝言に、一同は怪訝顔になった。

「さあどうぞ！ ようこそ、「時の列車」アリアライナーへ！」

美穂の導きで、総司は車道に停車している巨大な列車に乗り込んだ。その室内には品の良いソファとテーブルが並び、憩いの空間を構成している。

「これは……………」

「アリアライナーは旅客車両でもあるからね。」

車内の光景に心奪われていた総司の元に、部屋の奥から現れた絶世の美女がゆったりと近付いてきた。

「いらっしやい。ご飯にする？ それともお風呂？ それとも、わた・し？」

「あの？」

その美女は、あっさりと肉迫すると総司に両腕を回して絡み付いてきた。

「んふ〜 あなたの壮絶な覚悟にクラクラしちゃった。だから特

別サービス 元の姿に戻った気分はどお？」

「え？」

「あれ!？」

己の異常に気付いた総司と、その姿を見た美穂の喫驚が重なった。

首筋に抱きつく美女を見下ろす総司の身長が、体格が元の二十代に戻っていたのだ。

「これは……!?!?」

「あなたの宿業係数を再計測してこの歴史線を最適化。要はあなたの削れて散らばった運命を元に戻したのよ。そもそもこの「時の列車」は時の流れを監視し健全な状態に導く装置なの。入るだけで修復しちゃうから大したことじゃないわ。むしろイマジンを取り逃がしたこっちの世界が迷惑をかけたしね。」

身を離して数歩下がった美女が、いたずらっぽい笑みを浮かべてすらすらと説明した。

総司には前半がいまいち理解できなかったが。

「……そうか。礼を言う。」

「お詫びだって言ったでしょ？ でもまあ、しばらくは持ちつ持たれつになるみたいだし。そっちの美穂ちゃんたちのこと、よろしく頼むわ。」

「なら、しばらくこの世界を頼む。」

「らーじゃっ!」

再び降り立った神社の境内で。

きりつと眉を鋭角に立て美穂が敬礼で透に応える。

「さあて！イマジンは出現と行動パターンに特徴があって、過去に跳ぶまでに怪事件が頻発するものなんだけど、そういうの見かけたら教えてね?」

「そういうことならゼクトの情報網が役に立つな。わたしがいろいろと掠め取ってきておこう。」

さっそく指針を説明した美穂に和馬が軽々と請け負った。それを総司が胡散臭げに見上げる。

「お前、そんなほいほいとゼクトをおもちやにしている大丈夫なのか?」

「問題ない。元はわたしもゼクト所属だったが、「観測者」となっ

た今となつてはどこにいようと最早関係ないからな。」

「それより、美穂ちゃんて言ったかな。この世界には「ワーム」という脅威がいるから気を付けておくといい。」

「ほえ？わーむ？なにそれ？」

総司の忠告に訊ね返す美穂。

各々の成すべきことを追い始めた彼らを確認した透は、踵を返しその場から立ち去っていった。

ところでふと瞳子の異常に気付き、瞳子の前で足を止める。

「どうした。心拍数やほかの体機能の数値が平時よりも大きくぶれているぞ。」

「勝手に健康診断すなっ！？ いいから異世界でもどこでも行けえっ！？」

顔を真っ赤にして絶叫した瞳子に蹴りつけられ、透は今度こそこの世界から姿を消した。

今日のごはんは和食？洋食？それとも中華？

ここならなんでもそろってる！

世界中のお料理を、よりどりみどりで召し上がれ

料理は国境無制限！ファミリーレストラン『ぼくだれす』

かようなTVコマーシャルが絶賛放映中の、いま話題のファミリーレストランチェーン店『ぼくだれす』の自動ドアをくぐり、透と初そして変質者が入ってきた。

『いやぁーん 久しぶりのレストランよあ 甘いものはあるかしら？あるわよね？あぁんもう死んじやいそう』

そう言つてくねくねと身を擦らせたのは恭也である。

恭也ではあるのだが、なぜかその髪は嵐の夜の柳の木のようにぼさぼさに乱れ、そのばらばらな前髪の間隙から覗くかつ開かれた瞳はピンクに輝き、髪の中にピンクのメッシュが一筋からまっっており、そして唇が艶めかしく紅に染まっていた。

> i 4 2 5 6 — 5 3 8 <

内向きに捻った両手首を口元にあて、異常犯罪者のように興奮するその恭也は、嫌悪感に身を引く他の客を無視してさっさと空いているソファに転がり込んだ。

『おつねえさーん！こっちこっち あかねえ、ケーキちょうだい！

お店のぜんぶ』

「いらつしゃいませ〜 『ぼくだれす』へようこそ」

ずばぁん！と接客の挨拶と共にもの凄い勢いで振り下ろされてきたアルミトレイの一撃を脳天に受け、その恭也はテーブルに突っ伏して動かなくなった。

「うむ。瞳子。」

そこへ歩いてきた透が、やはりさっさと恭也の向かいのソファに座

り込んだ。

そして透の隣に並んで腰掛ける初。

「……ありがとう。」

やがて、恭也が髪型と瞳の色を元に戻して起き上がってきた。

「どういたしまして」

それに快活に応える、このレストランのウェイトレスを勤める可愛らしい制服姿の瞳子。

「ご注文はお決まりですかあ？」

曲がったトレイを胸に抱き、営業スマイルで訊ねる瞳子の前で、恭也はメニューを引き抜き一部を初に差し出した。

「ほらよ。」

「ありがとう！」

「瞳子。コーヒーを寄越せ。」

「つて早えな!？」

二人を待たずにいきなり注文を告げた透に恭也がツッコんだ。

「ああ、まあ、俺もコーヒー。」

「わたしは、アップルジュースで。」

「かしこまりましたあ 少々お待ちくださいね」

その手の端末に注文を入力した瞳子はにこにこことそう言って下がっていった。

「つてか瞳子のヤツ、ノリ違わねえか？」

「あれは瞳子の異次元同位体だ。「別世界のもう一人の自分」というやつでな。パーソナリティに若干の差異はあるが、記憶は共通している。」

「……ほう。」

「お待たせ致しましたあ」

そこへ、新しいトレイに各々の注文の品を載せた瞳子が戻ってきてそれぞれの前にカップを、グラスを置いた。

グラスの横に添えられたストローの包みを破く初の横で、透がカップを取り上げ中身をすすると、怪訝な顔で瞳子に告げた。

「おい瞳子。不味いぞ。」

「黙れよ。」

突如聞こえてきた、どろり濁った声音に初と恭也が慌てて見上げるが、瞳子の顔は瞬時に営業スマイルに化けていた。

今、一瞬だけ違う顔が見えた気がしたが……。

「当店のコーヒーは最高級の豆を使用しました特製のブレンドとなっております 文句がおありでしたらどうぞお引き取り下さいませ？」

「竹中が淹れたコーヒーと全然違うぞ。」

「大量生産品でアレに敵うワケねえだろ！？ ……我慢してお飲み下さいませ」

やはり一瞬だけ凶暴な顔を覗かせた瞳子はがらりと営業スマイルに変化すると、さっさと下がっていつてしまった。

「……おい透。どこが「若干の差異」なんだ？」

「なにか問題が？」

「あんだけ言われて無視かよ！？」

真顔で問い返した透に仰天する恭也。

「瞳子お姉ちゃん、怖い……」

初が、泣きそうな顔でぼつりと呟いた。

「……………」

ファミリーストランチエーン『ぼくだれす』一号店の店内のひとつのテーブルで、剣立 一真はフォークをつまんだまま宙を見つめ、一見鋭利にも見える顔を弛緩させてぼんやりとしていた。

「おい剣立。なにをポーっとしている。」

向かいの席に座る長髪の男が敵めしい顔で言ってきた。

「いらぬのなら、そのビーフシチューハンバーグを俺に寄越せ。

俺が食う。」

「……………っていらぬワケないだろ！？ 食うよ！ ってかなんで菱形さんはそう他人の食べ止しを食いたがるんだ！？」

勝手に皿を引き寄せようとする菱形の手から慌てて器を奪い返し叫ぶ一真。

菱形と呼ばれた長髪の男はなおも器の中身を求めてフォークを伸ばしてくる。

「何を言う。この世でいちばん美味しいのは他人の食べ止しだ。ことわざにも「隣の柿は甘い」と言うだろう。」

「正確には「甘そうに見える」って内容だろそれ!? 食べかけがどうか関係ないから!？」

「俺に言わせれば他人の食べ止しはダメージゾーンズと同じだ。他人が食べているものは、より美味そうに見えるだろう。だから客に出す前に従業員が一口かじってから出せば見た目の美味さが倍増すると、いつも会議で言っているだろう!？」

「あんた正気か!? そんなのお客さんに出せるワケないだろう!？」

言い合いながら、一真と菱形は必死の形相で器を引っ張り合っていた。

その菱形の隣では、黒縁メガネをかけたどこか坊ちゃん臭い幼い印象の男が、アニメキャラクターが描かれたファイルを開いて、中にぎっしり詰め込まれたカードゲームのカードを眺めてニヤニヤしていた。

「……………って、おい、睦月! お前もそんな見ないでメニューの改善点とかちゃんと考えろよ!？」

「うん。おいしいよ。」

睦月と呼ばれた男は、ニヤニヤしたままファイルから目を離さずに素っ気なく応えた。

「てめええ!?! 適当に言ってるじゃねえ!?!」

「……………もう、どうでもいいんだよボクは……………」

諦観に染まった声で呟いた睦月は、そのままファイルのページを繰って無視してきた。

「ああもう!?! おまえら、ちつとは真面目に考えろよ!?!」



政府直轄の秘密組織「BOARD」<sup>ボード</sup>。

人類を脅かす現代に蘇った不死身の生命体アンデッドに対抗する為に作り上げられたライダーシステムを運用するにあたり、その莫大な費用を国に負担させることで稼働していた組織であるが、国に予算を認めさせるために確実な成果を示す必要がある為、組織はまるで利潤を追求する一般企業のような体制を取り、厳しい階級制度を敷いて競争意識を植え付けることで従業員の能力を高めるという方策を行っていた。

それは結局のところ、かつての前社長・四条 始が一部のアンデッドと結託して計画した、「脅かす者」と「護る者」のイタチごっこを永遠に続けさせて会社を存続させ、やがてはその利益によって研究を重ねて最強のアンデッドを創り上げ、世界征服を狙う陰謀の為だった。

その陰謀はデイケイドの介入によってすんでの所で潰えたが、前社長・四条 始の「社長としての懸念」は、実に現実的な問題として残された一真たちの前に立ち塞がった。

すなわち。  
アンデッドが全ていなくなれば、ライダーシステムは必要なくなる。ライダーシステムが、「BOARD」が必要なくなれば、国は予算を割く必要がなくなる。

資金源がなくなったら「BOARD」に所属する社員は、全員路頭に迷うことになるのだ。

アンデッドから人々を護ることが仮面ライダーの使命だったから、アンデッドがいなくなることが最終目標なのは当然だ。

だが、その後はどうする。

前社長・四条 始はそれを防ぐためにアンデッドと結託した。だがそれでは会社と社員は守れても本末転倒だ。

だから、一真たちは考えた。

仮面ライダーとしての使命が終わっても、会社に所属するみんなの生活を守る方法を。

まだ、アンデッドが残っており、国が予算を出してくれている今のうちに。

そして編み出された手段が、かつて介入したディケイドこと土が一真を教え諭し、働く仲間として皆を繋いでくれたこの社員食堂をレストランとして開業することだった。

どういう訳か、土の手腕のおかげでメニューの内容は充実し、料理の質は向上し、業務形態も確立されており、飲食業界に打って出る条件は既に全てそろっていたのだ。

これを活かさない手はない。

これでまだ戦える。社員みんなを、路頭に迷わせずに済む。

一真たちの、新しい戦いが始まったのだ。

その努力の結果生まれたのがこのファミリーレストラン『ぼくだれす』である。

いずれアンデッドの全滅と共に消滅する「BOARD」のその次の職場として。そして境界を越え世界を渡ると言っていた土にあやかって考え出され命名されたのだ。

仲間たちと協力し合い、助け合い、励まし合い、そして成長し合ってゆく為の働く場所として。

「……だっっていうのになんなんだお前たちは!？」

食器を片付けられたテーブルで、一真は二人を叱りつけていた。

睦月はともかく菱形は一真より年上だったが、今は関係ない。

名義上、現在の『ぼくだれす』の社長は一真なのだが、実質はこの三人の共同経営という形になっており、同格の仲間と見なしてのことである。

「もつと真面目に考えるよ!？」 店も順調に増えているし、いずれ俺たち三人はそれぞれ分かれて各方面の店を管理して運営してかな

きやなんないんだぞ!？」

「ああ。真面目に考えているぞ。」

「どーこーがーだー!？」

菱形の言葉に一真はばんばんとテーブルを叩く。

「……なんかさあ。緊張感がないんだよねえ。もつとこつ、ギリギリした競争社会つばくいきませんか？」

「あげくどうなったのか、お前らも知ってるはずだろう!？」

睦月までばやくように吐き捨てるのにも言い返す。

「社長は、いや、前社長はそうやって失敗したんだ!二の轍を踏む訳にはいかない!」

もう一度テーブルを叩いて言い切ると、今度は懇願するように言葉を続けた。

「……頼むよ。動機はどうあれ、一緒に戦ってきたお前らは頼りになるって思ってるんだぜ?菱形さんも、食べかけがどうかじゃなくって、美味く見える理由って、ほかに何かあるでしょう?睦月も、お前の戦略の知恵だってアテにしてるんだからさ。」

「おい。お前。」

そこに、唐突に横から何者かが話しかけてきたのを一真は見上げた。

「あ?」

「お前、ブレイドだな?」

「? ああ。」

背の高い男が、無表情に訊ねてくるのに応える。アンデッドが残り少ない今、それを秘密にする意味はあまりない。

「……あんた、何者だ?」

一真の問いかけに、男は一枚のカードを突き出して応えた。

一真に見覚えのあるカードを。

「同じようなものを見たことがあるだろう?俺は、ディケイドと同じ出自の者だ。話がある。」

四人掛けのテーブル席をふたつ繋げて八人掛けの形に増やしたソフ

アに、透と瞳子、向かいに恭也と初が腰掛けた。

一真と菱形、睦月らと横に向き合う。

「……と言う宇宙の接触崩壊の危機については、ディケイドから既に聞いているな？」

「ああ。まあな。」

透の説明に、一真が曖昧にうなずいた。

「あんまり実感はないけど。……って言うか、瞳子は異世界の人だったのか？」

かつて士と行動を共にしていた二人の人物を思い出し、一真はウエイトレス姿の瞳子に問いかけた。

「違うっすよ。よその世界の「もう一人のあたし」ってヤツがいて、そいつが透の手伝いしてるんで、あたしも手伝いしてるんす。」

接客時とはまるで異なる態度でしゃべる瞳子に、恭也と初は完全に聞いていた。

「……あのよ。瞳子は、そっちのヤツとは知り合いなのか？」

「ああ。」

恭也の問いに、瞳子はまるでチンピラみたいに返事をした。

「カズマとは、昔一緒にツルんでた仲。」

「はっはっ。瞳子。その話はやめようよ。」

「りょーかいっす。」

ちゃ、と指先で敬礼して瞳子は一真にうなずいた。

「なんだよ。そうとうハジけてた黒歴史でもあんのかよ？」

「いいだろ別に。若気の至りってやつだ。お前にだってあっただろ？」

もういいだろと言わんばかりの一真の目線が恭也のどこかと通じ合う。

「まあな。」

「そこで、ディケイドが干渉したこの世界の問題とは別に、本来ならこの世界にいないてはならないはずの存在が別の世界にも現れた。それを連れてきたから確認しろ。」

話を遮り、透は初を指さした。

「まず、この少女の姿をした者は、ジョーカーだ。」  
「がたがたがたがばんっ！」

言った瞬間、菱形と睦月がそろってプロパーブランクを握って立ち上がり、同時に一真が菱形を、瞳子がアルミトレイで睦月をしばき倒した。

初は涙目で恭也にしがみついている。

「落ち着けお前ら!？」

「いきなりナニしやがんだ、ああ!？」

続いて瞳子は透の頭にもトレイを振り下ろした。

「ためえもいきなりバラしてんじゃねえよ!？」

「いずれ説明せねばならない情報だ。」

「だからって、こーしていきなり襲いかかってくるバカだっているだろうが!？」

すぱんすぱんと透の頭をトレイで叩くが、透にはまるで効いた様子がない。

そこに、こっそりとプロパーブランクを差し出してきた睦月の手を瞳子はいきなり踏み潰した。

「痛い痛い痛い!？」

「いいか良つく覚えとけ!こっちの初に手え出そうとするヤツあ、あたしがこのトレイに封印してやるかな!？ どうやってか?は!こっやってカードみたく真っ平らになるまでブっ叩いてやんよこーやってッ!」

「痛い痛い痛い!？」

「はっはっは。瞳子。あと2〜3発くらいにしときなよ。」  
「言いながらアルミトレイで睦月を滅多打ちにする瞳子を、一真が朗らかに窘めた。

「……で、説明してくれないか?ジョーカーは、確かに俺と士で倒したはずだ。」

「うむ。俺もディケイドからの情報でそれは知っている。」

改めて一同は居住まいを正したが、一真の向かいの約二名が変死体と化していた。

「だが、ディケイドはイデアファウンダー・アンデッドを封印するのではなく「破壊」してしまった。アンデッドとは各種生物の始祖にして概念の化身。本来は破壊不可能な存在だ。そしていかなる理由があるうとも「消滅」することはない。」

「回りくどいな。どうして倒したアンデッドがまた出てきたのか教えるよ。」

瞳子の指摘に、透は変わらぬペースで話を続けた。

「うむ。破壊されたアンデッドは、「統制者」によって再び出現する。」

「何!？」

一真が血相を変えて立ち上がった。

「じゃあ、まだ社長の陰謀は……」

「その心配はない。」

一真の脳裏に浮かんだ懸念を、読み取った透が否定した。

「高等なアンデッドの中には多種族に化身する能力を持つ者もいる。戦いを有利に進める能力のひとつだ。だがそのインターフェースは封印されると同時にリセットされる。パラドキサアンデッドは既にこちらで封印した。「鎌田」とかいう人物もはや存在しない。だが、ジョーカーに限っては話が別だ。」

「そのジョーカーは、ただの人形みたいなものだよ。」

そこで、初が声をあげた。

まだ恭也にべったりとくっついたままだが、瞳には力がこもっている。

「……わたしは、ずっと眠っていたかった。戦いなんて、したくなかった。」

恭也の服のすそを握る手にも力がこもる。

「なんでか分からないけど、再び解放されたヒューマンアンデッドを封印して取り込んだ時から、わたしはジョーカーとしての自分が

イヤになったの。だから、途中で自分で自分を休眠状態にした。」  
言って、初は薄べつたい機械を取り出した。

「それは!？」

一真が息を飲む。

中央に、ひし形で構成された赤いハートマークをあしらったバックル。

伝説の仮面ライダー カリスのカリスバツクルであった。

「きつと、その人はこれを使って何かをしたんでしょ？わたしも、この中で力だけを吸い出されてるのは感じてた。その人は、ジョーカーの皮を被っただけ。本物のジョーカーは、わたしです。」

初は、カリスバツクルをしまい込んだ。

「ハートスーツのアンデッドは、全部封印しました。」

「え？そうなの？」

その言葉に一真が仰天する。

「みんなが、手伝ってくれたからですけど。」

「ああ。まあなかなか手応えがあったぜ。」

初の言葉に恭也が続けて告げた。

「他の世界でも、異世界の存在が侵入しているという異常が起きている。一度デイケイドに破壊されたジョーカーは、「統制者」によって再出現する際それらと同じ要因で別の世界に現れたのだらう。」  
そして透が続けた。

「このジョーカーをどうするかはこの世界の問題だ。初に、争う意志はないのだから、それは後で考えればいい。それより先に片付けなくてはならないものがある。」

そして一同は、レストラン『ぼくだれす』の裏手にある広大な駐車場にやって来た。

「……な、なんだこりゃあ……」

一真と菱形、睦月はそれを見て呆然としていた。

そこにあっただのは、駐車場に沿う道路を視界の端から端まで覆い尽

くす、長大で荘厳な列車。

あるはずのない線路まで敷設して、そこに圧倒的な存在感を放射して鎮座していた。

自動車が、出口に困って右往左往している。

「邪魔。」

「用が済んだらどかすつてよ。」

瞳子の呟きに恭也が応える。

「さて。お前たちこの世界の仮面ライダーに片付けて欲しいものは、これだ。」

巨大な列車の側面の壁が開き、中から三つ首の異形が咆哮と共に姿を現した。

『ガーーーーー!!』

「人造アンデッド「ケルベロスアンデッド」だ。」

「「うわ、うわーーーーー!?!」」

慌てて一真たち三人は己のライダーシステムたるバックルを腰にあて、変身してケルベロスアンデッドに立ち向かう。

『ガーーーーー!!』

そして三人をあっさりと蹴散らしたケルベロスアンデッドはどこかへと走り去っていつてしまった。

その跡には、ぷすぷすと煙をあげて五体投地して突っ伏しているブレイド、ギャレン、レンゲルの三体。

「……びっくりするほど弱いな。」

「透が「びっくり」なんて言葉使うなんて珍しいじゃん?」

「……い、いや、待て、なんだあれは……!?!」

ようやくこんがりとコゲたブレイドが肘を突いて上体を起こした。

「だから、人造アンデッド「ケルベロスアンデッド」だ。」

「そーじゃなくて!?!」

半泣きの様子で起きあがるブレイド。

「なんなんだよあの強さ!? 有り得ないだろ!?!」

「頑張つてパワーアップしろ。俺の用事はこれだけではない。」



素っ気なく返した透は、続けてブレイドに問いかけた。

「それで、この世界に何か異常は起きていないか？ アンデッドや、その「時の列車」以外のものによる、異常だ。」

補足。あるいは前々回の答え。

恐らく文中で説明することもないと思うので、ここで補足説明しますが、

原作において社長・四条 始氏は「カリスバックル」を変身ツールとして用いて「仮面ライダー カリス」に変身していた、本当に「ただの人間」で、終盤の実験で生み出したジョーカーは「あそこで精製したカードを使用して」「ジョーカーの姿に」「変身した姿である」（ジョーカーの皮をかぶった）と解釈しております。

ジョーカーそのものに変異した訳ではないのだらうということ。その根拠として「ジョーカーのカードをレーザーに通している」という変身プロセスが共通であることが挙げられるかと思えます。

だもんで、ここでは本物のジョーカー・初がカリスバックルの中に潜んで寝ていたのだとしております。それをその状態のまま社長・四条 始氏に使われていたのだという。

あとは、不死生物をディケイドが爆砕したにも関わらず再登場した理由は、文中で語った通りで、「絶対に壊せない。仮に壊したら、何度でもどっからか出てくる」としました。これぞまさしく不死生物。

それを震姐さんがせつせと掻き集めたんでしょう。

荷物を降ろしたエクリスエクスプレスがぞろり、と巨体を動かし前進を始める。

やがて、加速したエクリスエクスプレスは枕木とレールを自ら次々と撤去しながら走り去り、宙に現れた光の輪の中へと吸い込まれるように消えていった。

「……あれよりスゴいモンなんて、見たこともないなあ……」  
それを見送った一真が呆然と呟いた。

「……まあ、とりあえず睦月。情報部に聞いてみてくれよ。」  
「わかりました。」

言って、睦月は『ぼくだれす』店内へ走ってゆく。

「少なくとも現時点で俺の耳には、たった今取り逃がした変なアンデッドの事以外で変な情報は来てないな。」

「そうか。」

一真の言葉に透がうなずいた。

「一真さん！」

やがて睦月がモバイルを持って戻ってくる。

「やっぱり、特に新規の情報はありません。」

「だそうだ。けどまあ、引き続きウチの方でも気を配っておくよ。」

具体的にそれはどう「異常」なんだ？」

「不明だ。」

「たとえ ば こんな異常とかかあ！？」

『ぼくだれす』駐車場での透たちの会話に、突如嘲りの声が介入してきた。

『珍しいトコで会うなあデイレイド？』

その場にいた全員が一斉に振り向いたその先にいたのは。

黒とグレーに彩られた奇怪な悪魔のような異形だった。

モノトーンに包まれている為ぱつと見では分かり難いがそのボディ

スーツはディケイドのものと共通した要素が見受けられる。一真たちの与り知らぬことではあるが、つまりはディレイドとも似ていると言える。

だが胸郭と肩のアーマーはどちらとも異なっており、まるで黒い板をいくつも水平に積み重ねて彫り抜いたかのような形状の装甲となっていた。

ベルトの部分には中央に横線を並べたマークを描いた素っ気ないパネルがはめ込まれているのみ。ディケイドのベルトのようになんらかの機構が内蔵されているようには見えない。

そしてその身体の上には無数の黒い板を水平に突き刺して並べたような貌<sup>かお</sup>。そのマスクの顎にあたる箇所はまるで牙を剥き出し口の端を釣り上げているかのようなモールドを描いている。

目に映る全てを嘲笑うかのように。

『こおんなトコロでデメエ、いったいナニやってやがんだあ?』

「ディシエツド。」

そのモノトーンの異形に、透が応えるように呟いた。

ディシエツドと呼ばれた異形は、まるで馬鹿にするかのように大げさに顎をしゃくって見せた。

『はきはきしゃべれよ。ナニしてんのかって訊いてんだぜ?』

「己の使命を遂行しているところだが?」

『は!』

嘲笑の声をあげ、大げさに肩をすくめて見せるディシエツド。

『イかれてんのあディエンドとディケイドだけかと思ったらデメエも壊れてんのかディレイド!?!』

「俺には特に異常はない。現に今も『システム・ディケイド』のルーチンに従い使命を遂行中だ。」

『ざっけんなッ!?!?』

モノトーンの異形・ディシエツドは突如痙攣を起こして隣の車を蹴

り付けた。

あるうことが巨大なRV車があっけなく吹き飛び宙で数回転すると彼方の軽自動車をぶつ潰して砕け散った。

「なっ!?!」

そのあまりの暴虐に透を除く一同が驚愕の声をあげた。

『デイエンドもデイケイドも原住民ごときに鹵獲された『システム・デイケイド』の面汚しだッ!今の『システム・デイケイド』はメインを』

に置き換えて続行中なんだよ!』  
台詞の途中に空いた不自然な間に透を除く全員が怪訝顔をするが、デイシエッドは一切頓着しない。

『それがなんだあ!?! せっかく俺が余所の世界に置いてきてやったモノを連れ戻してきやがってよ!?!』

「ヒッ!?!」

デイシエッドに指先を向けられた初が完全に恐怖にすくみ上がり恭也にしがみついて歯の根も合わないほど震えている。

『どーしてくれんだコラア!?! 俺の仕事の邪魔なんかしてタダで済むと思ってるのか!?!』

「俺はデイケイドのフォローバックアップモジュールだ。」

烈火のごときデイシエッドの怒りにも全く頓着せず透はあくまでもマイペースに言葉を紡ぐ。

「そのデイケイドが世界を救うと言っている。ならば俺はそのフォローを遂行するのみだ。」

「……ほお?」

まるでヤクザのように威嚇的に突き出していたデイシエッドの首が不機嫌に傾いた。

『おーけい。よおーく分かった。どおーも不自然に宇宙の侵攻が滞つてると思ったらデイレイドまでイカレてたあな。いいだろう。』

わざとらしく首を振ると、デイシエッドはどこからともなく長大なアサルトライフルのような奇怪な長銃を引きずり出すとそれを天へと指し向けた。

『現時刻を以て『システム・ディケイド』からディレイドを破棄する。この世界とまとめてスクラップにしてやるよ!』

「『システム・ディケイド』のメインはあくまでもディケイドだ。

ディシエツド及び　　はディケイドに従うべきだ。」

『ほ　ざ　い　て　る　よ!』

グガウツ!

ディシエツドの持つ漆黒のアサルトライフルが火を噴いた。

刹那も待たずに銀にたゆたう巨大なオーロラが地面に突き立ちいくつかの自動車を真つ二つに切断した。

その壁のようにそそり立つ銀の幕の奥から、無数の灰色の異形が津波のように大量に溢れ出てきた。

「おわー!?!　　なんだあれは!?!」

「オルフェノクだ。」

「おる……なに!?!」

「いいから変身して対処しろ。」

あつと言う間に駐車場を埋め尽くした灰色の異形の大群に泡を食う一真に素っ気なく告げ、透はディレイドドライバーとカードを取り出した。

一真も、菱形と睦月も慌てて自らのバツクルとカードを取り出す。

「変身。」

言ってカードを挿し入れたディレイドドライバーのスライドカバーを抜刀の動作で閉塞すると同時、無数のグレーのヴィジョンが透に殺到した。

《カメンライドウ・ディ・ディレイド!》

彼方より飛来したライドピラーを前後左右より頭部に収め、全身の各所をイエローに変じてディレイドに変身する。

カテゴリーAのカードを収めたブレイバツクルを腹に押し当て、吹き出した無数のカードのようなバンド「シャツフルラツプ」が腹部で結束してベルトと成したのち、一真は左拳を腰溜めに引き右掌を甲の側から突き出した。

「変身！」

右手首を翻して叫ぶと同時、左右の手を入れ替える動作でバックルのターンアップハンドルを引きパネルを迅速に回転させた。

《ターンアップ。》

認証の音声と共に一真の正面に展開されたカードのヴィジョン「オリハルコンエレメント」が迫る灰色の異形を弾き飛ばした。

「うえええええいつっ！」

氣勢を上げ駆け出す一真。そのオリハルコンエレメントを透過した瞬間、粒子状に分解されていたアーマーが力場を通過した装着者の身体に合わせて瞬時に再構成され、そこに対アンデッドの青き封印戦士・仮面ライダー ブレイドの姿を現した。

「えりゃあああああ！」

その勢いのまま、そこにいた灰色の異形目掛けて飛びかかるようにパンチを叩き込み、続く動作でさらに殴り、蹴り飛ばした。

「一真。オルフェノクは専用の属性攻撃でなければ完全に滅ぼすことはできない。できる限り足止めしろ。」

「封印すればいいんじゃないのか!？」

「ナニ悠長におしゃべりしてやがるツツ！」

デイレイドとブレイドの間を断ち切るようにアサルトライフルの銃床が振り下ろされてきたのを二人は横っ飛びにかわした。

「はっはあ！」

そして見た目に違わず機関銃のように無数に吐き出された光弾の斉射がブレイドがいる方角から扇状に辺りを舐め始めそのオルフェノクと乗用車とオルフェノクとワゴン車とオルフェノクと屈んだデイレイドの後ろにあったトラックを滅多打ちに打ちのめした。

「って勝手に避けてんじゃねーよっ!？」

「……………」

応えるべき必要性を感じずデイレイドは無言でカレイドブレイドを手にデイスエッドに迫った。

> i 4 3 7 6 — 5 3 8 <





そしてカレイドブレイドに両足を乗せてバランスを取ると、光弾の連射を波の浮力と見立て波乗りの要領で滑空し、斉射をやり過ぐすとデイシエツドの背後へ着地した。

『デメエー!?』

猛攻を乗り越えた感慨もなくデイレイドはすぐさまデイシエツドに斬撃を浴びせて打ち倒した。

『っがあっ!?』

転がるデイシエツドにすたすたと近寄り容赦なくカレイドブレイドを振り下ろす。

が、それは水平にかざされたデイシエツドライバーに受け止められた。

『……調子に乗ってんじゃねえよ……』

底冷えのする恫喝と共にカレイドブレイドを弾き飛ばし、なお地面を転がって膝を突き起きあがったデイシエツドは、ベルト側面からグレーの線で複雑な文様を描かれた黒いケースを引き抜いてそれをデイシエツドライバーのトリガー部分の先にあるスロットに下から差し込んだ。

それはあたかも銃弾を詰め込んだマガジンのごとく。

『俺が誰だか忘れたか!? 俺は『システム・ディケイド』のファイアコントロールモジュールだぞ!』

《アサルトカメンライドウ・ライダーキック!》

『バラバラになりやがれよ!』

くぐもった音声の認証に続きセクターレバーをフルオートに捻り、そして淀みなく突き付けられたデイシエツドライバーの暗闇のような銃口からとつもない破壊力が撃ち出された。

無数に放たれた仮面ライダー1号、2号、V3から続く「ライダーキック」を必殺技とするありとあらゆる仮面ライダーが跳び蹴りの姿勢で射出されてきたのだ。

『!!--』

弾速で叩き込まれた無数のライダーキックに吹き飛ばされたデイレ

イドがそれらを滅茶苦茶に喰らいながらいくつもの自動車を貫いてゆく。

『いぎやはははははははははははははははは！』

トリガーを握りっぱなしにしたデイシエッドの哄笑が絶え間ない爆音に紛れてなお響く。

マズルフラッシュを瞬かせるデイシエッドライバーのマガジンスロットの上、通常のアサルトライフルなら空薬莖が排出されるイジエクターからは色を失った無数のブランクカードがまるで手品か噴水のように大量に吹き出してゆく。

その間もデイシエッドライバーの先端からはぞくぞくと仮面ライダーが射出され、中には立ち姿勢で蹴りを放つタイプのカブトやコーカサス、かかと落としの要領で放つギルスまでもがそれぞれそのままの姿勢で吹っ飛んでゆきデイレイドに激突していた。

その仮面ライダーの乱射に滅多打ちにされるデイレイドを先頭とした無数の仮面ライダーの濁流が自動車を次々と打ち砕いてゆきついには巨大なトレーラーに激突して大爆発を起こした。

「透っ！？」

『いぎやはははははははははははははははははははははは！』  
だよ！いぎやははははははははははは！』

瞳子の、恭也の叫びを濁った哄笑が上塗りして塗り潰した。  
ひゅんひゅっ。

何かが回転して風を切る音が聞こえ、そちらを見上げた瞳子の視界を黄色い影がかすめて地面に激突した。

ツカキンツ、カツ、キツ、カツカラカラカララー………  
呆然と見下ろしたアスファルトに転がっていたのは黄色い大剣、デイレイドライバー・カレイドブレイドであった。

「……っ！？」

瞳子は息を飲んだ。

今、カレイドブレイドのグリップにデイレイドの指が絡みついていたのが見えた気がしたのだ。すぐに霞と消えてしまったため見間違

いかと思つたが……。

思いたかつたが……。

『さあーて。アレ？おかしいな、あつちの世界に置いてきたヤツが、なんかそこにいるなあ？』

『ひっ！？』

『させるかよ！』

威嚇的にカリスへと首を巡らせてきたデイシエッドに、瞳子の異常にも気付かずカリスの前に立ちはだかつたエクリスがベルトバックルから引き抜いたライダーパスを突きつけた。

すると同時、空の一点に閃光と共に現れたゲートからエクリスエクスプレスが枕木とレールを敷設しながら宙を駆け降りてきた。

そして全ての車両が後部ユニットをリフトアップして展開変形させるとバトルモードへと移行した。

『あ？』

『くらいやがれ！』

エクリスの指令のもと、上空を走るエクリスエクスプレスの全砲門が光条を一斉射し駐車場内を撫でるように蹂躪した。

『っがあああああ！？』

『おらああああ！』

パスを一振りしてなおも射撃を促すエクリス。

車は残らず吹き飛び巻き込まれたオルフェノクまでもが消し飛んでゆく。

その光条の嵐が止んだあと。そこはアスファルトがめくれ自動車のスクラップが折り重なった瓦礫の野と化していた。

『どうだよ！？』

エクリスが吐き捨てる。

辺りには土煙が立ちこめている。

やがてそれが晴れたそこに見たものに、恭也を始めとした一同はうめきを漏らした。

『……やってくれるじゃねエか。原住民のクセによ。』

怨嗟を吐いたデイシエッドは、苦しげに己が身を押しさえ屈んでいたが、その姿はいつの間にか現れた銀のオーロラの向こうにあって。どういふ原理か知らないが、そのオーロラがダメージを抑えたのだろう。致命打を受ける前にあのオルフェノクの大群を喚び込んだスクリーンの向こう側へと待避して。地面の破損状態が、その銀のオーロラを境に明らかに異なっていた。

「くっそ!?」

「……覚えとくぞ。てめえの世界はとびきり惨たらしく消し去ってやらあ」

呪詛めいた脅し文句を残して、デイシエッドはオーロラの奥の方へと溶け込むように消えていった。

「……なんだったんだ今のやつは……」

それを見送ったブレイドも呆然とつぶやくのみ。

「……おい!? とぅ、透のこと、探してくれよ……!?」

脅威が消え去ったと見た直後、エクリスとカリスの後ろにいた瞳子が炎をあげるトレーラーの残骸をわなわなと震える指で差して叫んだ。

「……透が……!? と、とおるがツツ!?」

振り向いた一真が、恭也が狂乱状態の瞳子の様子を見て訝しんだ。

見たこともないほど取り乱した瞳子とそこに転がっているカレイドブレイドを発見して、エクリスとブレイドは顔を見合わせると慌てて黒煙を巻き上げるトレーラーの残骸の元へと駆け寄った。

「おい!? まさか!?」

「ああまさかだよなあ!? フザケンなよ!? おい!透! 透っ!」

いくつもの車の残骸が積み重なった瓦礫の山をそれぞれエクリスとブレイドのライダーシステムの腕力で押し退け、あるいは引きずり下ろして撤去してゆく。

爆心地と思しき場所をあらかた広げたが、そこにはデイレイドの姿はおろか、なんの人影も発見できなかった。

『おい！菱形さん！睦月！手伝え！この辺みんなひっくり返せ！透を探すんだ！』

そこに駆け寄ってきたギャレンとレンゲルも加わってひしゃげた車体を掘り返すが、やはり何者も見つかりはしなかった。

「……………そんな……………おい……………ウソだろ……………？ ……うそだよなあ、とおるっ？」

やがて丁寧に全ての瓦礫を除けられて拓けた爆心地点に、よろよろと焦点の定まらぬ様子の瞳子が歩み出てゆく。

「透っ！？ 返事しろよ！ いるんだろ！？ 透！とおるッッ！」

悲痛な絶叫が、荒れ果てた広大な駐車場だった敷地に白々と響いた。

ミリタリーに詳しくない読者様へ。

作者も決して詳しい訳ではないのですが、「アサルトライフル」とは俗に「ライフル」という単語で連想される長さを持つ長い銃で、大まかな形状は先端から

円筒形の銃身があつて、その次に後方へ膨らんでゆく緩やかな円錐形の部品が繋がり、次に弾倉を下から納める穴が開いた箱状の胴体があり、その後ろに引き金と握りの部分が続き、そして銃を構える時に肩に当てて安定させる為の棒と言つか板と言つかかな部品が最後尾についている。

というような形で、最初にデイシエッドがデイレイドに振り下ろしてきた銃床とはこの最後尾の部分です。……詳しくはウィキペディアとかの画像を御覧下さいはくはがんばりました。

唐突に何か出てきました第四のワールドライダー・仮面ライダーデイシエッド。そしておぼろげに見えてきた「デイケイド」の言葉が示す本来の姿。

地の文の主観の定義が「全体」に及んでいたため説明しませんでしたが、デイシエッドとデイレイドの言葉の中に出現した不自然な「間」が意味するものとはなんなのか。

#### 参考文献

『track・29 鳴滝の手記より。』

鉄槌の解釈によるデイケイド世界の謎が世界一周を待たずにその片鱗を覗かせ始めました。

仮面ライダーを弾扱いするというある意味「人形使い」デイエンドよりもライダーの扱いの悪い、かつ冗談のような効果でデイレイド

を圧倒してしまったデイシエッド。

最強のアンデッドであるジョーカーたる初をトラウマに陥らせる程の手腕で拉致した張本人であるらしいグレーの悪魔の暴虐に対し、残された面子に抗う術はあるのか!?

興がノってきたのでここは敢えて言わせて頂きましょう。

どうか、続きをお楽しみに。

track・41 ブレイドの世界(前書き)

ええと、既に御存知の方もおられるかもしれませんが、近頃、無謀にも「web拍手」と「キャラクター人気投票」を各ページの最下端に設置しました。

よろしければ是非ばちっとひとつ押してやって下さいませ。



「……とおるっ!?! とおる……うっ……」  
瓦礫の野となった『ぼくだれす』駐車場の拓けた場所で泣き崩れて  
いる瞳子。

そこから離れた場所で恭也と一真らも立ち尽くしていた。

「……なあ。とりあえず場所変えようぜ」

「……ああ。」

変身を解除して辺りを見回した恭也の提案に同じく変身を解除した  
一真が応えた。

「瞳子お姉ちゃん……」

初が、唯一遺された黄色の大剣カレイドブレイドを重たげに抱えて  
瞳子の元へとやって来た。

「あ……」

涙でぐちゃぐちゃになった顔をあげ、瞳子は初からカレイドブレ  
イドを受け取った。

だが思いもかけない重量に瞳子の両腕が地面に押しつけられた。

「っっ!?!」

それは本来は仮面ライダーの腕力で振るわれることを想定された剣  
だけあってとても重く、二十キログラムは越えているのではないだ  
ろうか、それを重たげに運んできた初の正体がジョーカーであった  
ことを今さらながら思い出させられた。

そこに、遠くからサイレンの音が響いてくる。さすがに誰かが通報  
したのだろう。消防か、警察か。

「よう、とりあえずエクリスエクスプレスに乗っちゃまえよ。しばら  
く身を隠したほうがいい。」

「ちよっと待て。睦月、店長に伝えておいてくれ。あとのことは「  
BOARD」で引き受けるって。」

「分かりました。」

恭也に促され、一真は睦月に指示しながらそこに再び停車した巨大な列車へと歩いてゆく。

菱形も、ケータイを耳にあてた睦月も二人に続いた。

「……瞳子お姉ちゃん……」

「……」

歩み去ってゆく恭也らを見遣り、初が瞳子を控え目に促すが、剣の重量に身を屈めた瞳子からは返事がない。

「……？ お姉ちゃん？」

初が瞳子の顔を覗き込むが、その表情は髪に隠れ伺えない。

「初！どうした！？」

「恭もお兄ちゃん！？ 瞳子お姉ちゃんが……」

恭也の呼びかけに初が返事をしようとしたその時。

突如、初を無視して立ち上がった瞳子が事も無げにカレイドブレイドを握り締めすたと歩き出した。

「え……！？」

「……は？……」

胸を反らして堂々と直立し、大股でのしと歩く、どこかで見た覚えのある拳動でエクリスエクスプレスに向かう瞳子の姿に、恭也と初は言葉を失った。

それとも透を失ったことでどこかおかしくなってしまったのかとすら恭也は疑った。

「『全員。エクリスエクスプレスに乗れ。説明はその後だ。』」

「はあ！？」

恭也の脇を通過しながら、その瞳子は二重にぶれた奇妙な声音で告げた。

「『早くしたほうがいい。異世界の脅威も投入されてしまったしな。』」

黄色に輝かせた瞳で見返してくる瞳子。

その声は、瞳子自身の声と、あるうことかもう一つ、透の声が被せられていたのだ。



「『正確には、ここでしゃべっている俺は、出会ってからこれまでの活動中に瞳子の中にサポート用のプログラムを色々仕込んだついでに埋め込んだデイレイドのバックアップなのだがな。』」

自身を親指で示しながら言う瞳子。  
「『それが、カレイドブレイドの引き渡しをキーとして覚醒するよう設定していた成果だ。』」

だからあの時、瞳子はカレイドブレイドを受け取るなり豹変したということか。

「……それじゃあよ。お前は……あのデイレイドは、死んだ……って、ことなのか？」

「『うむ。』」

瞳子の姿をした者相手に遠慮がちに言葉を選んだ恭也の問いを、その瞳子・デイレイドのバックアップはあっさり肯定してきた。

「『あのデイレイドの活動体は完全に破壊された。現在修復中だ。』」

「直んのかよ!？」

「『時間がかかるがな。その為のこのバックアップだ。だが、それを待つてはもらえない。この世界に異世界の脅威が侵入してしまっただ。』」

自身の胸をとんとんと突きつつデイレイドのバックアップが言うが、恭也もそれを抑えて言い募った。

「いや、確かに世界も大変だけだよ。お前だつて大変だろ。つてか、こつちの気持ちの整理にも気を遣えよ。」

掌を振って言葉を続ける。

「じゃあ、お前は生き返るんだな? いやほら、瞳子がすっげえ取り乱してたのを、お前だつて分かっているだろ!？」

「『活動体は完全に復元されるし、記録情報もこのバックアップから完全に復元される。それはもう「生き返る」と表現して差し支えあるまい。瞳子は心配し過ぎだ。』」

「いや、お前ひとりの尺度で割り切んなよ。」

恭也は頭を抱えてソファに沈没した。

「どうやら「仲間の死」という最悪の憂き目は、形式はどうあれ免れたと見て良いらしい。」

「……んで、その瞳子は今どういう状態なんだ？イマジンの憑依みたいに瞳子の意識はあんのか？それとも寝てんのか？」

「『ああ。意識はあるぞ。今も内部情報領域で罵倒を繰り返している。』」

「つらつと聞き流すなよちゃんと聞いてやれ。あとでイヤってほど殴られんぞ。」

「『問題ない。』」  
鷹揚にうなづくディレイドのバックアップに、呆れたように返事を返す恭也。

「……じゃあ、悪いけど、あの「オルフェノク」とやらの対処法を聞かせてくれよ。」

「『うむ。』」  
そこに挟んできた一真の問いかけに、瞳子の姿をしたバックアップは鷹揚にうなずいた。

「『あの「オルフェノク」とは異世界の住人で、人類の進化形として顕れた突然変異種だ。』」

改めてそれぞれテーブルについた一同の前に立った瞳子……の姿をしたディレイドのバックアップが説明を始めた。

「『戦闘生物として人間を遙かに上回る能力を持ったオルフェノクは、元は人間でありながら、その高い能力に溺れ、自らを驕り、その精神を、人類を脅かす脅威へと変質させてしまっている。』」

「怪物になっちまった人間、か……」

「『うむ。』」  
恭也の呟きにうなづく瞳子。

「『その能力は今言った通り高く、皮膚も強靱だが、そもそも完全に滅ぼすには専用の属性攻撃が必要だ。』」

「それなんだけどさ。さつき、恭也がこの列車のビーム砲で吹き飛ばしてたよな？」

一真の言う通り、F・Eキャノンに巻き込まれたオルフェノクが消滅するのを、一真も恭也も見ている。

「『うむ。専用攻撃以外が完全に無効というわけではない。』」

「アンデッドも、俺たちの持つライダーシステムだけじゃなく、例えば低いランクのアンデッドは120ミリ滑腔砲一発でグロッキー状態に追い込めることが分かってる。」

「……なに？ひやくにじゅうみりかっこーほう？」

「ぶつちやけ、戦車の主砲だ。」

恭也が吹き出し、初が顔を恐怖に歪めて恭也にすがりついた。

「一回「BOARD」で実験したことがあるんだよ。ライダーシステム以外で有効打はないのかって。でも、効果はあっても実用はさねなかった。……なんで分かるか？」

一真は、デイレイドのバックアップではなく恭也に向かって言った。

「……なんでだよ。」

「展開能力が著しく低いこと。簡単に言えば、アンデッド出現を感じて、戦車が現場に着くまでどれくらい時間がかかるか、ってことだ。ちと残念な遅さだった。」

「あ。」

一真の説明に恭也の目からうるこが落ちた。

「それともうひとつ。実験の時はアンデッドを柱に括って撃つたけど、実際にはアンデッドはじっとしていない。砲弾を外したら周りに被害が広がるし、当てても被害が広がる。」

「なんでだよ」

「命中した砲弾ごとアンデッドが吹っ飛んで民家とか建物に突っ込む可能性もあるからさ。」

「……………」

「だから、この列車のビーム砲を使ってそのオルフェノクとやらを

殲滅すんのは、ナシだぜ？」

そこまで言い切って一真はいたずらっぽく片目を閉じて見せた。確かに、先ほどの戦闘では駐車場を壊滅状態にしてしまった。

人間社会に紛れ込む害悪を、街中で大砲で退治することは不可能だということだ。

「まあ、あのデイシエッドとか言うやつは危険だったし、世界の危機でもあったから今回は責任は問わないしこっちで片付けるけどな……もうやらないでくれよ」

「悪かった悪かったよ!？」

なにやら黒い笑顔で念を押す一真に恭也は掌を振って謝り倒した。

> i 4 4 7 2 — 5 3 8 <

「剣立も大変だな。」

「やっぱトップは責任が重いですよ。ボクはナンバー2でいいや。」

後ろで無責任なことを言う二人を怒りを押し殺して無視し、一真は瞳子に向き直った。

「という訳で、そういう制限で作戦の立案を頼む。」

「『いいだろう。』」

瞳子の顔でデイレイドのバックアップはうなずいた。

「『先ほどは時間がなかったので説明しなかったが、オルフェノクには専用の属性攻撃の他にも効果のある攻撃があと二つある。』」

「あんのか!？」

「『うむ。恭也らの世界の仮面ライダーが持つ属性「フリーエネルギー」だ。』」

色めき立った恭也に、デイレイドのバックアップがあっさりと告げた。

「『オルフェノクの生態及び能力に対し、フリーエネルギーの確率干渉は全くの無関係という訳でもない。だが、攻撃方法に制約がある。』」

「制約?どんなだ?」

「『一撃で一定値以上のダメージを加える必要がある。簡単に言えば、通常攻撃ではいくら当てても効果はないが、フルチャージャタックならば当てれば一撃でオルフェノクの防御を突破できるだろうと言っことだ。』」

「……ほう。」

「『だから、俺がオルフェノクの世界の仮面ライダーを連れてくるまでは、例えばお前たち全員で連携して最終的にエクリスのフルチャージャタックを命中に導く陣形を構築することだ。』」

「なるほどな。分かった。」

「もう一つは？」

恭也がうなずくのに続いて一真が問いかけた。

「『うむ。もうひとつは、手持ち武器を使用するタイプのオルフェノクからその武器を奪い、それで攻撃することだ。奴ら自身同士の攻撃は普通に通用する。ただし、その状態だとライダーシステムの大技が使えないだろうから地道に殴り続けるしかないがな。』」

「ふーむ。」

それを聞いて一真は顎に手を遣り考え込んだ。

その脇で恭也が身を乗り出した。

「じゃあ、こうだな。まずどうにかしてオルフェノクの武器を奪って、それを使って俺がフルチャージャタックをぶち込む状況を作る。」

「その「どうにかして」がまず大変そうだけど、なあ恭也。」

「あ？」

その時、一真が真摯な表情で恭也に向き直ってきた。

「その前に、お前はいいのか？ここで油を売って。ここはお前の世界じゃないし、命まで懸ける義理がないだろう。自分の世界は守らなくていいのか？」

「あ……」

言われ、恭也は明後日の方角を向いて頭をがしがしと掻いた。

「まあ、細かいハナシすつと、俺が仮面ライダーやってんのは、事



故で巻き込まれたようなもんなんだ。もちろん今となつちや世界を守るべき意義も見出しではいるけど、でも俺の世界には実は仮面ライダーがかなりの数存在している。」

「それは、ちゃんと自分の世界を守るに足る数なのか？」

「逆に何人いたって万全にはならないってことは、どの仕事だつて同じだろ。それに、俺にとってはこの世界も「守りたい世界」になつたんだから。」

「なに？」

苦笑しながら恭也は傍らにくつついている初の頭に手を置き。

「こいつがウチの世界に迷い込んできた時から、俺、こいつも守りてえって思つたんだよ。」

頭を撫でられた初が、くすぐつたそうに目を細めた。

「いずれ、初をこの世界に戻して俺は帰らなくちゃならない。だから、心配なんだよ。こいつはジョーカーだし、この世界にちゃんと居場所を作れるのかつて。」

そこで恭也は眇に菱形と睦月を睨み付けるが、二人はそろってそっぽを向いた。

「だから、悪いけどそれがはつきりするまでは俺はこの世界に居座るぞ。」

「……そうか。」

恭也の意志を聞いた一真は、それでも顎に手をあてたまま思案を続けた。

「別に揚げ足を取るつもりじゃないんだが、つてことはこの列車はお前個人の所有物じゃないんだな？」

「ああ。オーナーがいるけど、俺はこの列車にでかい貸しがあるんでな。けっこう無理が効くんだよ。」

「……そっか。分かった。オルフェノクの退治にはお前にも協力してもらおう。」

「つてゆーかやらせる。」

犬歯を剥き出して笑んだ恭也と一真ががちりと手を握り合った。

「つてとこでハナシがついたところでよ。お前はそのオルフェノクに対抗できる仮面ライダーの世界に行かなくていいのか？」

「『うむ。』」

恭也の何気ない問いに、瞳子はあっさりと首肯した。

「『どのみち、このバックアップの身ではワールドスライドは実行できない。活動体の復元完了までは身動きが取れないから、それまではこの世界の脅威の排除に回る。』」

「ん？ じゃあ変身はできるってことか？」

「『そうだ。』」

一真の指摘にもうなずいて見せる。

「一応聞くけど、お前、ディケイドと同じ能力を持ってるって見ていいんだよな？」

「『その通りだ。』」

「よし。じゃあおおまかに三隊に分けよう。菱形さんと睦月でアンデッド専属対応。俺と恭也と、それから初ちゃんやアンデッドとオルフェノクの両対応。そんで透はオルフェノク専属対応ってことでどうだ？」

「ちよつと待つて下さい。ジョーカーを作戦に同行させるのは反対です。そもそも人間の世界を守るこの作戦にジョーカーが本心で協力するなどあぶげ!？」

言い募った睦月の顔面を、ドス黒いニコニコ顔の一真が黒縁メガネごと握り締めた。

メガネのフレームがみしみしとイヤな音を立てる。

「あっはっは。おかしなコトを言うなあ。世界まるごとぶっ潰れるかもしれない危機だぞ？人間のジョーカーだの言ってる場合か？」

「あいつ、いちつ、いひひー！？」

> i 4 4 7 3 — 5 3 8 <

「それにもし初ちゃんに悪意があったら、恭也たちが無事にいるのもおかしいだろ？」

「そつ！？ それはっ！？ いつ！？ 元の世界に戻る為にいいいいいい！？」

「アンデッドは自分の種を繁栄させるのに別に世界を選ばないだろ。帰ろうとする必要性が全くない。聞けば、ジョーカーは恭也の世界で危うく勝ち残るところだったらしいじゃんか？それをわざわざ危険を冒して「残り二体」の状態にしたんだ。初ちゃんには他のアンデッドと違って共存の余地があると思うけどなあ？」

「あいいいいいいっ！？ わかつ！？ 分かりました一真さんの言う通りでいひひひひい！？」

「ん。分かってくれて嬉しいよ。」

「はい、と睦月を投げ捨てる一真。

「それに、仲間とは協力し合うもんだろ。そうやって俺たちは今日までやってこれた。違うか？」

「違わんが……アンデッドとの共存を認めるのは、俺たち仮面ライダーの存在意義と矛盾しないか？」

そこに、菱形が額に脂汗を浮かべながら反論した。

「ぶっちゃけアンデッドが人間に危害を加えない状態になればいい訳でしょう？無駄に戦うこともないし、結果的には同じことですよ。」

「何を以て無害と判断するかは各個人の見解によって異なるだろう。

……だがまあ、剣立の言う通り宇宙規模の危機でもある。この件がおさまるまで、という条件で、そのジョーカーとの共闘に協力しよう。睦月もそれでいいな？」

「え〜？？」

菱形の問いに心底イヤそうな顔をした睦月だが、やがて掴まれた箇所をさすりメガネの位置を直しながら居住まいを正した。

「……まあ、二対一になったら仕方ないですね。三人の共同経営を始めた時からの伝統の過半数決裁ですし。分かりました。」

「よし。じゃあ透、恭也。さっそく始めるぞ。」

「ああ！」

「『いいだろう。』」

「真の号令に、恭也と瞳子の身を借りたディレイド・透が迅速に応答した。」

もう、何を願っていたかなんて思い出せない。

ヒューマンアンデッドを封印し取り込む以前のことなんか、何もかも忘れてしまった。

ただ平穏であればいいとどこからか聴こえる声にどうすればいいかわからなくてたまらず眠りに就いたのに、呼び覚ます騒音は争え争えと心を掻き乱す。

あの灰色の悪魔に動けなくなるほど痛めつけられて気が付いたら知らない世界にいた。

初めての「トモダチ」のアリス。元気かな。大丈夫かな。瞳子お姉ちゃんが一緒にいてくれるから、心配ないかな。

まだ何物でもない未確定確率の塵の砂漠を宛もなく歩き回ったあの旅も、アリスがいてくれたから辛さを感じずにいられた。

その感情をなんと言うのか知らないけれど、「時の列車」に捕まった時はアリスだけは守りたいと思った。それだけを考えていた。

その感情をなんと言うのか知らないけれど、なんて危ない思考だろうと思った。他の存在の為に自分の身を危険にさらすなんておかしいと思つてたはずなのにアリスを必死に押し隠していた。

どこからか聴こえる声はそれでいいと優しく思考を塗り潰す。

どこか心地良いその支配に身を委ねるうちに「トモダチ」のアリスだけじゃなくて恭也お兄ちゃんも瞳子お姉ちゃんも美穂お姉ちゃんも秋乃お姉ちゃんもレイラお姉ちゃんもシーザーお兄ちゃんもヴァイオラお姉ちゃんもみんなみんな守りたいと思うようになった。

なんてことだろう。自分が危なくなるかもしれないのに、そうせずにはいられないなんて。

あの灰色の悪魔は動けなくなるくらい怖いけど。

みんなが守りたいと思ってるものも守りたいと思いは始めている。

だけど結局勝ち残ればみんなを死なせてしまうジョーカーの自分が

いったいどうすればそれを叶えられるのか、まだ、分からない。  
もう、何を願っていたかなんて思い出せないけれど、今はみんなを  
守りたいと思ってる。そこに一緒にいたいと願ってる。  
なんてひどい我が儘わがままだろう。

これはきつと、忘れてしまった願いよりもずっとひどい我が儘だ。

『いやああああー！』

円環を三つ巴に配した穂先による刺突が灰色の異形の手首を打ち据  
える。

『ー！ー！？』

その衝撃にたまらずその両手の、表皮と同じ灰色の短剣を取り落と  
すオルフェノク。

素早く踏み込んだレンゲルは落ちた武器を後方へ蹴り払いさらなる  
槍の連撃でオルフェノクを押し退けた。

『ー！ー！』

そこへ別のオルフェノクが長大な灰色の槍を振りかざしてレンゲル  
に迫る。

『いつ！？』

睦月は慌ててレンゲルラウザーを引き戻すが、既にオルフェノクの  
方は腰溜めに槍を突き出すところだった。

同じ間合いの武器同士では一瞬の差が命取りである。

だがその槍は、突き出されることなく全身に火花を散らせて仰け反  
ったオルフェノクの体勢とともに彼方に投げ出された。

レンゲルの後方にいたギャレンからの射撃による援護だ。

『菱形さん！ ああ良かった！槍だったらレンゲルのシステムでも  
上手く扱える！』

『……銃を持ったオルフェノクはなかなかないものだな。』

無手になったオルフェノクになおも銃撃を浴びせて追い払いながら  
ぼやくように言う菱形。

レンゲルは構わずにほくほくした様子で灰色の武器を拾い集めてい

る。

『いたとしても、銃なんてどうやって奪い取ればいいんです?』

『お前が突撃して隙を作るしかないな。』

『しかなくもないですよ!?! …… ああまあ一真さんにはこれで我慢してもらおう。ブレイラウザーよりかなり短いけど。』

灰色の、不思議な質感の短剣をためつすがめつしながら睦月はぼやいた。

『菱形さん!睦月!オルフェノクはどこ行った!』

『あつちです!はいこれ!』

その場に専用バイク「ブルースペイダー」で駆け込んできたブレイドに、すれ違いざまに二本の灰色の短剣が投げ渡された。

『さんきゅ! ってちっさ!?!』

手に飛び込んできた短剣に驚きながらも慌てて胸に抱えて持ち換え走ってゆくブレイド。

その後を、専用バイク「エクリストリーム」に跨ったエクリスとそのタンデムに腰掛けてエクリスにしがみつくカリスが駆け抜けていった。

一同は現在、作戦通りオルフェノクの武器を奪いつつ、アンデッドとオルフェノクにそれぞれ対応していた。

『アンデッドサーチャー』によって所在を感知できるアンデッドと違ってオルフェノクにはそういった目印がない。

しかも人間に化身できるというのだから、より質が悪い。街中に紛れ込まれたら探し出すことは不可能だ。

だがデイレイドのバックアップによれば、オルフェノクは自身の能力にかなりの驕りがあり、自らを「人類を超えた存在だ」としてその力を誇示せずにいられない輩が多いと言っ。

そう言った驕りと、タガが外れた精神は、下等種たる人間を殺して「自分は優れているのだ」と悦に浸りたいという欲求にまみれている。

そしてオルフェノクに殺害された被害者の死体は塵化して消滅してしまうと言う。

今「BOARD」の情報網によつて「怪物」の出現を極力早く察知するよう努力してはいるが、そういった前述のオルフェノクの特性による暴虐を目撃した一般人の情報の他は変死、あるいは行方不明事件を追うという後手に回らざるを得ない状況だ。

その上もつとも厄介なことは、オルフェノクは「殺した人間」を「仲間」に変えてしまう場合もある、ということだった。

『くそつたれ！「進化」つてのは、誰かを見下す為にするもんじゃないぞ！』

追いついたオルフェノクに駆け寄りざまに振りかぶった灰色の短剣を叩き込むブレイド。

やはり武器のリーチと重心のバランスが異なるため剣を扱うブレイドのシステムを以てしてもブレイルウザーを振るう時のようにはいかないが、効かない武器を使うより遙かにましだ。

同じく渡されたもう一本の灰色の短剣を手に、カリスももう一体のオルフェノクに攻撃を加えて足止めし、巧妙に指定の方角へと誘導してゆく。

『よおし！どけ二人とも！』

そこに掛けられたエクリスからの合図にブレイドとカリスは同時にオルフェノクから飛びすさり後退した。

《フルチャージ。》

『おらあああああ！』

電光を纏ったグレイブモードを一回転させ、発生したフリーエネルギーによる烈風でオルフェノクらを薙ぎ倒し足止めする。

『ああああああ！』

そこへ、背後から振りかぶった巨大な稲妻の縦一閃がオルフェノクらをまとめて飲み込み爆砕させた。

「……………なんだよ？これ……………」



瞳子はその異空間でそんな交錯する仲間たちの声を聞きながら、事の異様に呆然としていた。

「……なんで、初の声が聴こえてくるんだ……？　一真のも、恭也の声も聴こえる……？」

『一真はデイケイドからコンバートした情報だが、初と恭也はお前が接続したものだ。瞳子。』

「透！？」

聞こえてきた透の声に、瞳子は慌てて意識をそちらに向けた。

だが視覚に捉えられる情報はなにもないのに、そこに透が存在していることが解る。

「おい！？　なんなんだよここは！？」

『お前の中に構築したディレイドのバックアップの内部情報領域だ。』

「もつと分かり易く言いやがれよ！？」

『これ以下もない状況なのだが。』

ついついものノリで言い合ってしまったが、瞳子の意識はこの異様な状況を受け入れてしまっている。

目に映るものとは異なる空間認識。耳に聴こえるものとは違う言語の伝達。声帯を振るわずものとは異なる意識の主張。そしてそれらをおかしいとは思わず新たな常識として受け入れる概念。

自身の体勢や顔の向きなどという肉体的感覚も存在しないものとして既定されており、そのことで喪失感も不安感も抱きはしない。

ディレイドの内部情報領域。

言うなれば、思念のみの世界。

言い方はあるじゃないかと思っただが、確かにこれ以上もこれ以下もない状況ではある。

「でも、だからってなんで初と恭也の声が聞こえるんだ？　あたしは特になにもしてないぞ！？」

『デイケイドからの情報によれば、これが「絆を繋ぐ」ということらしい。『システム・デイケイド』には全て標準装備されているが、

俺には実行不可能なものだった。俺と接続したお前がそれを実行可能にしたのだ。』

「……わかんねえよ。」

いや。瞳子の理性は既に理解していた。感情が納得していないだけで。

こんなことの為にみんなと協力した訳じゃない、と。

「わかんねえけど、でも透、おまえ、初がこんだけのことを思っているのに、おまえ、なんとも思わねえのか!？」

『うむ。その感情の有無がお前と俺の「絆」の接続の可・不可の違いの根拠だろう。』

瞳子の激昂にも透は冷静なまま解説した。

『おかげで現時点まで使命を遂行できている。』システム・ディケイド』にパートナー設定があるのは恐らくこの為なのだろうな。』

「いや。お前の場合違うだろ。なんとなくだけで。」

いけしゃあしゃあと言う透に、瞳子は半眼で告げるような心地で言い返した。

「そんなことより、お前、今までこんなものをずっと聴いていたのか?」

瞳子の認識が脆弱なせいで全ては聞こえないが、この情報領域には瞳子と透が出会ってから透が接触した全ての世界の「基点となる仮面ライダー」たちの「声」が満ちていた。彼ら全ての思考が、リアルタイムで流入しているのだ。

そしてこの世界にあつては特に「初」と「恭也」と「一真」の声が明瞭に聴こえていた。

『そつだ。だから言っただろう。』自分と接続した者の思考は全て読んでいる』と。』

「だったら!？」

瞳子は叫んだ。

「だったら、初のこと、助けてやれよ!? このままじゃ恭也だって帰れねえじゃねえかよ!？」

『初のことは、この世界の問題だ。そして俺には使命がある。宇宙の接触崩壊の危機に対しては、このまま進むしかないことも、今のお前になら分かるだろう?』

「んう……!?!?」

その通りだ。今の瞳子なら理解できることだ。

『だから初のことはお前が好きにしる。……いや、むしろお前でなければ解決できまい。』

「……え?」

透の言葉にきよとんと聞き返す瞳子。

「それって、どういう……?」

『俺とお前の違いはそのまま』できること』と』できないこと』の差でもあることを俺もようやく認識しつつある。きつと、「初」という個体を救うことは俺には構造的に不可能だが、お前なら可能なのだろう。……これまでの事と同様に。』

「……………」

どこか、透にしては真摯な物言いに、つい聞き入ってしまった。

『話はここまでだ。ディレイドの活動体の復元までお前の身体を借りる理由は先ほど話した通りだ。そしてそれまではこの世界に侵入した異世界の驚異を排除する。』

「ちよつ、まで……………」

そして瞳子は静かに瞼を開き黄色に輝く瞳で眼前の光景を見据えた。

「『……………」

そこは拓けた場所の工事途中で途切れた道路の端。

計画が中止されたのか、中途半端な姿をさらして佇むコンクリートの高架の柱と、その周辺に置き去りにされた錆びた重機。そしてあちこち部品を失い同様に錆びて朽ちた数台の乗用車。

やはり錆だらけのフェンスで囲まれたこの敷地内には今、風に吹かれた砂埃が渦巻いていた。

否。

吹き荒れているのは砂ではない。

物質を粒子レベルで識別できるディレイドのバックアップの目にはそれがなんなのか瞬時に判別された。

『灰』だ。

辺りに点々と散らばった灰の小山が風に吹き散らされているのだ。今、その朽ちた重機の向こうから人影が歩み出てきた。

片手に巨大な灰色の人型の首を掴み上げて。

だらしなく衣服を着崩した長身痩躯。だがその天真爛漫な笑顔を浮かべた顔は体格に比して幼い。

片手でオルフェノクの重量を掴み上げているのが何かの冗談かと疑うほどの曇りない笑顔。

「キミたちさあ、なにしてんの？」

その状態で男はオルフェノクに向かって朗らかにしゃべり出した。

「今ボクの前に出てくると危ないってのになあ。知らなかった？」

『ツグ！？ ツガツ！？』

宙吊りにされたオルフェノクが己の首を絞め上げる手を掴み返して振り解こうとするが、なぜかその手が、掴まれた首が表面から灰化し風に散り始めたのだ。

『ツガツ！？ アアアアアア！？』

男が触れた場所からオルフェノクの身体が灰化し崩壊してゆく。

辺りに点在する灰の小山は、この男が滅ぼしたオルフェノクの残骸か。

自身の身体の謎の崩壊に恐慌に陥ったオルフェノクをばいと放り捨てたその男は、その笑顔を瞳子のほうに向けてきた。

「で？あれが「悪魔の影法師」？あれオモチャにしていいいんだね？」

「あ、ああそうだ！」

自らが投げ捨てたオルフェノクなどもはや忘れてしまったかのように踏み碎いて歩いてきた男の問いかけに、男の後方から女声の返答がかけられた。

見れば、男が歩み出てきた重機の陰に、隠れるようにこちらを覗き

見ている震フルトの顔がちらりと見えた。

なにやらやたらその男を恐れて怯えているように見える。

「そうだ！霧崎！そいつを好きにしていぞ！」

「ふうん。面白そうじゃん。」

震の言葉を聞いた「霧崎きりさき」と呼ばれた男は、着崩れた着衣を直そうともせず、満面の笑顔のまま瞳子に近寄ってきた。

その途上で霧崎の顔に複雑な文様が浮かび上がり、次の瞬間には肉体が膨張し、灰色の巨大な異形へと変貌した。

「でい、デイレイド！今度こそ貴様の最期だ！こ、こいつはね、オルフェノクの世界でも裏で「イルラッククローバー」の名で知られた最強のオルフェノクのひとりなんだよ！こいつで塵になっちまいな！デイレイド！」

顔だけ出して言うだけ言った震はすぐに引っ込んでしまった。

「さあ。なんかあのおばさんが、おまえで遊んでいって言うからさ。………楽しませてくれよ。」

霧崎が変貌した凶々しき蛇竜のごとき相を持つ「ウロボロスオルフェノク」は、面白がるような素振りで見前で合わせた掌の指先を端からぱらぱらと閉じたり開いたりしながらゆったりと歩いてくる。

「『ふむ。』』

瞳子の身体を借りたデイレイドのバックアップは、震の言うことも霧崎の異様も一切意に介さずカードとデイレイドライバーを取り出した。

カードをスリットに挿し入れ、抜刀の動作でスライドカバーを閉塞する。

「変身。」

《カメンライドウ・ディ・デイレイド！》

無数のヴィジョンが殺到してグレーのボディへと変移し、彼方より飛来した幾本ものライドピラーを前後左右から頭部に収め、全身の各所をイエローに変じてデイレイドへと変身する瞳子の身体。

そこに現れたデイレイドは、透自身が変身するものよりもかなり小

柄な体躯となっていた。瞳子を素体とした為にサイズが瞳子に合わせられたのだ。

だがデイレイドのバックアップはそんな自身の身体のことも意に介さず次のカードをスリットに挿し入れカバーを閉じた。

《カメンライドウ・ファ・ファイズ！》

カレイドブレイドからの指令に従いドット柄のノイズに身を包んだベルト・カレイドサーキットから部品がひとつ飛び出しデイレイドはそれをキヤッチした。

それは黒とシルバーに彩られた巨大な携帯電話。

それを手首のスナップで展開したデイレイドは親指でキーを次々と打ち込んでゆく。

《スタンディングバイ。》

キコンキコンと特徴的な音で打ち込まれたキーの入力内容に従い待機状態の旨を告げた携帯電話を手首のスナップで閉じたデイレイドは、その携帯電話をひょいと僅かに放り上げ三軸回転させてからキヤッチした。

「『変身。』」

再び呟いて手の中の携帯電話をそのまま、変移が完了したカレイドサーキットのバックル部分に出現したコネクタに振り下ろして接合させ、時計回りに九十度押し倒した。

《コンプリート。》

携帯電話を合体させることでベルトバックルと化したその両端から赤い光条が上下に伸び、デイレイドの体表で幾何学模様を描き出し一際強い輝きを放った。

後に現れたのは、やはりデイレイドのままであったが。

だがこれで、オルフェノクの王を守護するために造られた、フォトンブラッドによる『同族殺し』、ライダーズギア・仮面ライダーフェイスの能力を発現できる。

『……ふうん。面白いよ「悪魔の影法師」。』

そのデイレイドのベルトを見た霧崎・ウロボロスオルフェノクが笑

みを含んだ声音で呟いた。

『本物くらいには遊べるんだろっねえ！？』

次いで叫んだ瞬間にはウロボロスオルフェノクの姿は掻き消え同時にデイレイドが宙を舞っていた。

## track・42 ブレイドの世界（後書き）

また吹き飛ばされて「つづく」かいっ。

仕方ありません。オルフェノクにはフォトンブラッド以外はまともに効かないぞっ。なんて設定したせいでクロックアップが使えないもので。ついでに当の瞳子がデイレイドに変身してるのでスクエアフォームも使用不可。デイレイドがいつペンやられたのはこの伏線でもありまして。

ですが個人的に、こうして各ライダーと怪人の「有利・不利」というものをきっちり定義しないと差別化がなくてつまらないのですよ。せっかく九つも世界があるのに。

霧崎・ウロボロスオルフェノクが誰のオマーージュかは分かりますよね？

でもこの業界ではやっぱり「速さ」が強さなのかなあ。なんか別の「強さ」とか提唱してみたい。

「web拍手」を押して下さった方、「キャラクター人気投票」に投票して下さいました。ありがとうございます。

「読んだよー」の証にぼちっと押してもらえただけでも励みになります。

「キャラクター人気投票」につきましても、締め切りとか特に考えてないのですが、中間報告など。

現在のところ、

透と瞳子の主人公ふたりが同列一位となっております。瞳子とはもかくこの唐変木が！？と我ながらびっくりしているところです。良かったなあ、透。

続きまして三位に恭也、四位に初と、オリジナル勢が上位を占めており、オリジナルキャラクターを認めて頂けたようで嬉しいことです。特に現在（track・42投稿時点）活躍中ということもあ



るのでしょうか。

そして五位に芦河 翔一さんがランクイン。原典出身勢では一番人氣を頂きました。確かに濃さでは随一かもしれませんが。

以下、遙、ザ斬鬼、各務 新、ヴァイオラ、音無 美穂、一真、デイスエットが横並び。オリジナル、セミオリジ、原典出身、借用キヤラ取り混ぜて票を頂きました。出てきていきなり得票した敵キヤラ・デイスエットにも驚きです。

そして、総司、シーザー、片瀬 秋乃、糸矢、斬鬼、威吹鬼、エクリスエクスプレスのオーナー、アリスと続いてあとはぱらぱらと。ヴァイオラとシーザーは設定上二人で一人なのですが、面白そうなので分けてみました。みたらなぜか票が分かれてたという。皆さん貞子恭也が好きか。

という感じでした。

別に「ひとり一回」とか制限は設けてませんので、気が向いたその時に気に入ったキャラクターに入れて頂けるとありがたいです。引き続き宜しくお願い致します。

オルフェノクとは、「ファイズの世界」における「人類」が死亡することで確率的に発生する突然変異種である。

ヒトとしての姿の他に灰色の異形の姿を得て蘇り、その身体能力はヒトを遙かに凌駕する。

その強靱な体は銃はおろかヒトの持ついかなる兵器も通用せず、神経系を始め体機能全てが増強されており、生身の人間がオルフェノクに太刀打ちすることは不可能。

まさに人類の進化系である。

その上、個体ごとに様々な能力を有する者も中には存在する。

今デイレイドがキリキリ舞いに翻弄されている超高速移動能力も、オルフェノク全てが持っている訳ではなく、この霧崎・ウロボロスオルフェノク固有の特殊能力である。

『あつつははははははは！』

急停止して哄笑をあげるウロボロスオルフェノク。

その背後で落下してきたデイレイドが地面に激突した。

『ははははは！ あれえ？「悪魔の影法師」って何かの冗談？ あ

つつははははははは！』

気取った仕草で両手を広げてげらげらと笑うウロボロスオルフェノクは、両の前腕を覆う「8」の字型に捻れた巨大な手甲を打ち合わせながら、ようやく身を起こしたデイレイドにゆったりと歩み寄ってきた。

『ねえ。手加減してあげようか？ 確かに今のは一方的過ぎてつまらなかつたもんねえ。ボクって強いから。でも、「悪魔の影法師」の実力とやらを、ボクにも見せて欲しいなあ』

「『「悪魔の影法師」とやら言う呼称を名乗った記憶はないのだがな。』」

立ち上がったデイレイドは、言いながら一枚のカードをデイレイド

ライバーのスリットに挿し入れ抜刀の動作でスライドカバーを閉じた。

《フォームライドウ・ファイズ・アクセル!》

『コンプリート。』

認証の音声と共にデイレイドの左手首にリストウオツチ型ツール「ファイズアクセル」が出現し、それと同時に「ファイズアクセル」のプラットフォームに設置されていたシルバーとレッドに彩られているプログラムキー「ミッションメモリー」が、ベルトの「ファイズフォン」表面に設置されていたものと入れ替わりで出現する。デイレイドはさらに一枚のカードを挿し入れカバーを閉じた。

《アタックライドウ・ファイズエッジ!》

抜刀の動作でスライドカバーを閉塞した途端、カレイドブレイドの刀身だけが一気に赤く染まりフォトンブラッドの輝きを放った。

『準備はできたかな? 「悪魔の影法師」』

「『ああ。』」

黙ってそれを見ていた、両手を弄びながら笑みを含んで問うウロボロスオルフェノクに素っ気なく返し、デイレイドはリストウオツチのボタンを押し込んだ。

《スタートアップ。》

その瞬間、超高速機能を發揮し一千倍の速度で駆け出したデイレイドの赤い斬撃をまともに喰らい、ウロボロスオルフェノクが為す術もなく派手に吹き飛んでいった。

まるで先程と立場が入れ替わったよう。駆け回る黄色い人影が交錯する度にウロボロスオルフェノクの灰色の巨体が宙を跳ねる。

『つつ!?!? なっ、なんだよこいつ!?!?』

自分と同等の高速移動に喫驚し狼狽えるウロボロスオルフェノク。どうやらファイズの存在は知っていても、ファイズアクセルの機能は知らないらしい。

地面に落下すると同時に自らも超高速能力を展開して跳ね起きる。辺りの大気のうちねる音が速度についてこれず消失するのと引き替え

に、黄色い風にしか見えなかったデイレイドの姿が相対速度が同調したことでようやく捉えられた。

「……。」

「くっ！？」

無言で振り下ろされてきた赤い刃をなんとかかわすウロボロスオルフェノク。だが続く斬撃が容赦なく間断なく襲いかかりウロボロスオルフェノクを追い詰めてゆく。

その両手を広げ腰を引き必死に剣戟を避ける動作は、やたら素早いだけで完全に素人の動きだった。

むべなるかな。オルフェノクは「人間を殺し同族を増やす」習性があるが、自分と同等以上の存在と戦うことを全く想定していない。

元々の能力が高い為、そもそも「自身の能力を鍛えて伸ばす」という概念を持たない者がほとんどなのだ。

このウロボロスオルフェノクも、同族の中にあつては、こんな素人そのものの動作でも楽に他を圧倒できる程に基礎の身体能力が突出して優れているのだろう。

だが「高い身体能力」に加えて「高い戦闘技能」を持つデイレイドが相手では、同じ土俵に立たれては勝ち目はない。

「くっ！？ くそっ！？ なんなんだよなんなんだよこいつうっうっ！？」

「お前の言っていた「悪魔の影法師」だが？」

「この！？」

透には冗談や挑発といった概念はないが、馬鹿にされたと感じたウロボロスオルフェノクは途端に激高しさらに冷静さを失う。

おかげでとうとう赤い刃に胸板を捉えられ激しいスパークを迸らせながらウロボロスオルフェノクは大きく吹き飛ばされた。

「あっあああああ！？」

ごろごろと転がり、自動車の残骸に激突するオルフェノク。

「くそっ！？ くそっ！？」

《タイムアウト。》

うつ伏せの姿勢で地面を何度も何度も叩くオルフェノクの前に、超高速機能を終了したデイレイドが姿を現した。

『……へっ。ボクの力は、まだこれだけじゃないんだよ』

なにやら思い直したのか、ゆらりと立ち上がったウロボロスオルフェノクは、怨嗟を漏らしながら背後へ手を遣りその廃車の枠を握り締めた。

すると、自動車のフレームがその灰色の手が触れた所から浸食されるように塵と化し崩れ落ちてゆく。

やがて瞬く間に一台の自動車が灰の山となって風に吹かれ消えてしまった。

『さっきのあいつらを見ただろう？ お前もこうなる。 どうだ！

？ 怖いだろう！？』

「『……。』」

だが、デイレイドの反応は実に淡泊だった。

「『まあ、通常の宇宙物質なら、分子間の結合を破壊してやればそうなるだろうな。』」

『ほざいてなよ！？』

今度は通常の数倍で踊りかかるオルフェノク。

まるで柔道のように開いた両手を突き出して突進してくる。ただし、柔道家のように何か戦略があつての動作ではない、素人同然の直進で。

『ほづら！？ どこから塵にして欲しい！？』

迫るその破滅の掌に対し、デイレイドはその両手めがけて無造作にカレイドブレイドを振るった。

『じゃあこの生意気な剣からボロボロにしてやるよ！』

絶好の軌道に、オルフェノクの両手は迫る赤い刃をがっちりキャッチした。

その瞬間、オルフェノクの足下に落ちる影の中に裸身の霧崎のヴィジョンが現れ、その顔に満面の嘲笑が浮かんだ。

ウロボロスオルフェノクはオルフェノクの中でも強力な個体。いか

に「同族殺し」たるフォトンブラッドといえど、触れた程度ではダメージは喰らわない。

逆にこのまま剣を崩壊させてやる。ウロボロスオルフェノクの目論見ではそのつもりだった。

なのに、いつまで経ってもその赤い刃を持つ黄色い大剣は崩壊する様子を見せなかった。

今でも両掌からは分子間の結合を破壊する力場を送り続けていると言っている。

「……あ、あれ？」

オルフェノクの首と、地面の影の中の霧崎の首が同期して傾げられた。

「これは「システム・ディケイド」による宇宙外の存在。「宇宙の中の住人」には破壊する手段は存在しない。」

淡々と告げながらディレイドは、剣を掴まれた状態のままスライドカバーを展開し、カードを挿し入れてそのままカバーを閉じた。

《ファイナルアタックライドウ・ファ・ファイズ！》

「だからもう、お前は滅びるしかない。」

「ひっ！？」

二人が握り合うカレイドブレイドの刃がより赤く激しく輝きを放つ。そしてディレイドが踏み込む動作に合わせ振り抜いた剣に吹き飛ばされ、ウロボロスオルフェノクは全身にスパークを迸らせながら後ろの重機に激突した。

「がっ！？ あがが……」

だが、ウロボロスオルフェノクはまだ滅びない。さすが、強力な个体だというのは伊達ではないらしい。

ならば、滅びるまで攻撃を続けるのみ。

ディレイドは赤光の剣となったカレイドブレイドをぶら下げ容赦も感慨もなく倒れるオルフェノクに歩み寄ってゆく。

「く……来るな！？」

もはや戦意を喪失したのか、オルフェノクは仰向けの姿勢でもたも

たと後退るばかり。

『透！大丈夫か！？』

そこへ、バイクの爆音と共にブレイドと、一つのバイクに相乗りするエクリスとカリスがやって来た。

『ああ。問題ない。』

振り向くことすらせずに応えるディレイド。

『ガー！』

そこに、さらに唐突に咆哮と共に三つ首の巨大な異形が飛び込んできた。

ケルベロスアンデッドだ。

『な、なにいー！？』

『うわー！？ なんだこいつ！？』

ブレイドとウロボロスオルフェノクの悲鳴が重なった。

『剣立！こちら辺にアンデッドの反応が！』

『きゃー！？ あれあの時の三つ首じゃないかあ！？』

さらに続けてこの場に駆け込んできたギャレンとレンゲルが、ケルベロスアンデッドの姿を目撃して泡を食う。

だが、これだけのメンバーが揃いながら、ケルベロスアンデッドが襲いかかったのはそこで倒れているウロボロスオルフェノクだった。

『ガーー！』

『うわ、うわー！？』

やおらオルフェノクを掴み上げたケルベロスアンデッドは、三つ首でそのままオルフェノクの両肩に、額に噛みついた。まるで獲物を捕食するかのよう。

『あーっ！？ あーっ！？』

悲鳴が上がるが、オルフェノクの表皮はフォトンブラッドか同族の攻撃でなければ破れない。ウロボロスオルフェノクはそうとう混乱している見える。いつまでも噛み続けるケルベロスアンデッドも。

『こ、この野郎！？ お前なんか……！？』

混乱の中ウロボロスオルフェノクが叫ぶと、アンデッドの上腕を掴

み返した。

だが、引き剥がすでもなく投げ飛ばすわけでもない。恐らくは触れた物を塵化させる能力を行使しているのだろうが。

『えへえ！？ な、なんでこいつまで塵になんないんだああ！？』  
アンデッドとは概念の化身たる疑似物質。人造の存在であってもウロボロスオルフェノクの破壊能力は及ばない。

その自慢の能力が二度も続けて通じなかったことにオルフェノクはさらに混乱した。

その間もケルベロスアンデッドの三つの頭はそれぞれしつこく噛み付き続けている。

『こ、これならどうだ！？』

叫んだ後、ウロボロスオルフェノクの後頭部から三つ編みのように垂れ下がっていた部位が蠢き浮き上がった。いった。

まるで蛇の尾のように。

そしてそれは鋭く伸長すると、ようやく引きはがしたケルベロスアンデッドの真ん中の首の顎の中へと突き込まれた。

本来これは、オルフェノクが人間に対し行う「使徒再生」と言う人間をオルフェノク化させる行為であるが、果たして人間でないアンデッドに対して効果があがるのだろうか。

『……な、ない！？ コイツ、心臓がない！？』

二体の間でのたうつ尾の先はまるでアンデッドの体内をまさぐっているかのようにだったが、オルフェノク言葉からまさしくその通りのことをしていようだった。

狂乱状態のオルフェノクは見知らぬ異形をどうにか手下にでもしようとしたのだろうが、そのくんずほぐれつしている様は、ディレイドにしてみればただの際に過ぎない。

とうとう二体の間近まで来たディレイドは、目の異様な光景などないかのようにカレイドブレイドを振り下ろした。

『ああっ！？』

『アガー！』



その悪魔の影法師の横槍に気付いた二体の異形は、互いに離れる方向へと逃れようとした。

だが未だオルフェノクの尾をアンデッドの口腔に突き込んだ状態。自然、赤い刃の軌道上にその灰色の尾が取り残された。

『いぎやあああああ！？』  
切断。

文字通り引き合った綱を断たれたかのように左右にそれぞれ転倒するオルフェノクとアンデッド。

その途端、ケルベロスアンデッドのベルトバックルがぱかりと割れた。さすがに体内への直接攻撃は効いたのか。

『いひいひいひい！？』  
断ち切られた激痛に己の後頭部を押さえながら、俊敏に起きあがったウロボロスオルフェノクは慌ててその場から逃げ出した。

「うわわわわわ！？」  
そしてなぜかオルフェノクが逃げ込んだ重機の向こう側から女の悲鳴が聞こえてきた。

後を追って廻り込んだデイレイドが見たものは、今だにそこにいたらしい震と、その胸倉を掴まえているウロボロスオルフェノクの姿だった。

『うわ、き、来た！？ ホラ、早くボクを元の世界に帰せよ！？』

『いひいひいひい！？ さ、触るな！？ ひいひい！？』

掴み上げられた白衣の襟元が塵に変わってゆくのを見て震も泡を食って取り乱している。

『早くしろよ！？ 殺すぞ！？』

「わわわわかった分かったよ！？」

なにやら賑やかに喚いた二人を銀のオーロラが包み込み、その姿をこの宇宙から離脱させてしまった。

「……逃げたか。」

ぼつりと、デイレイドは見たままのことを呟いた。

『透！こっちもなんとかしてくれえ！？』

ブレイドの叫びに振り向いてみると、そこでは胸にコモンブランクのカードを突き立てられたケルベロスアンデッドが地面で身悶えしていた。

ブレイドが封印しようとしたのだろうが、なぜか突き刺さったカードはアンデッドを吸引しようとしていない。バックルは既に割られているというのにだ。

「……そいつは」

ディレイドが何か言いかけたところで、皆が注目している中、ケルベロスアンデッドの胸に突き立つコモンブランクが突如、端から塵と化して崩壊し消滅してしまった。

つい先刻目撃したばかりのその現象は。

「なっ!?!? カードが溶けた!?!?」

「全員、そいつから離れたほうがいい。さっきまでそこにいたオルフェノクの特徴を取り込んだそいつはデュアルビーイングへと変質した。そいつは接触した物質の分子間結合を破壊する。距離を取って包囲しろ。」

驚愕するブレイドとその後ろの一同に指示をするディレイドに心え、エクリスとカリス、ギャレンとレンゲルがそれぞれ散開した。

「……でゆある、なに?」

「今説明したままの存在だ。もはやただでは封印できない。全員、300秒間こいつを足止めしろ。」

「は?なんでだよ?」

ブレイドへの返答に続くディレイドの指示に、エクリスが怪訝に聞き返した。

「あと五分でディレイドの活動体の完全復元が完了し復帰する。

それまではこのバックアップではこのデュアルビーイングに対抗できない。その間にこいつを逃がし見失う訳にはいかない。故にこの場に足止めする必要がある。」

瞳子の体格の小柄な「ディレイドのバックアップ」が己の胸郭を親指でとんとんとつつきながら説明する。

「……触れただけで塵にしちまうなんてな。ダウンさせてもカードを当てられないんじゃないかもどうしようもないだろ。」

「『ディレイドとお前との連携技ならば倒せる。』」  
「ぼやくブレイドに、ディレイドのバックアップが応えた。」

「『一度、ディケイドと共に戦ったことがあるなら、分かるだろう？』」

「げ。」

その事を思い出し、ブレイドは僅かに後退った。

それを見てエクリスが笑いを堪えるように肩をすくめた。

だが、その頃にはケルベロスアンデッドが完全に立ち上がり、体勢を整えていたため、エクリスも含め全員が改めて身構えた。

『……！』

オルフェノクと同化し身体の各所に灰色を混じらせたケルベロスアンデッドが、オルフェノクとアンデッドのデュアルビーイングが実際奇怪な咆哮をあげた。

「『唯一、このカレイドブレイドは奴の能力に干渉されない。俺が前に出る。全員、援護しろ。』」

『よし、みんな！行くぞ！』

ディレイドのバックアップとブレイドの号令に、その場にいる全員が同時に動き出した。

本来、ディレイドだけであれば、そんなことは言わないはずだった。「全員、そいつから離れたほうがいい。さっきまでそこにいたオルフェノクの特徴を取り込んだそいつはデュアルビーイングへと変質した。そいつは接触した物質の分子間結合を破壊する。距離を取って包围しろ。」

部分的に同化したディレイドのバックアップの情報領域と瞳子の意識が、「本来なら単独で行動する」ディレイドの選択肢を拡張させたのだ。

今この時に限り、ここにあるのは「透」でも「瞳子」でもない、両

者が融合した第三の意識。

「唯一、このカレイドブレイドは奴の能力に干渉されない。俺が前  
に出る。全員、援護しろ。」

デイレイドのバックアップの媒体として自身の内に構成された内部  
情報領域の中で、透の意識と一体化した瞳子は己の目的のため高揚  
のまま叫んでいた。

「初を護る」という意思が、矛盾なくデイレイドの行動に影響を及  
ぼしていたのだ。

この世界の瞳子には、過去にツルんでいた仲間たちとの喧嘩三昧の  
日々で得たチームプレイの経験がある。

「デイレイド」は本来、単独で行動することを前提としている。だ  
から「仲間に援護を頼む」などという概念は存在しなかった。

『ファイナルフォームライド』はあくまでもデイレイドの機能拡張  
である。本来の意味での「他者との連携」とは少々異なる。

その仲間との連携を、今のこのデイレイドのバックアップは完璧に  
こなしていた。

エクリスがディオスクロイフォームへとフォームチェンジし二体に  
分裂したことで、飛び道具を持つカリスとギャレンとの合計四人で  
ケルベロスアンデッドを取り囲み、集中砲火を浴びせる。

『ーーーーッ!』

オルフェノクの特徴を取り込んでいる為これ程撃ち込まれてもダメ  
ージにはならないが、その衝撃は足止めにはなる。

そこへ射線を潜り抜けデイレイドが迫り斬撃を浴びせる。

『ーーーーッ!?!』

赤く輝く大剣を縦に振り下ろして激突させ、そのまま腕ごと振り回  
して回転させ二度、三度と斬り付け、途中から軌道を斜めに切り替  
え大きく交差を描くとその場でターンし横薙ぎに殴りつけた。

『ーーーーッ!?!』

カレイドブレイドはともかくデイレイドの身体自体に触れられては

崩壊されてしまう為、何より技巧による手数で翻弄する必要があるのだ。

吹き飛ばされて転がったデュアルビーイングが起きあがったと同時に再開される三丁の銃と弓による集中砲火。

『睦月！足を固めろ！』

『はい！』

ギヤレンの指示に応えたレンゲルが、ベルトの横に設置されたケースを開き、中から二枚のカードを引き抜いた。

脇に抱えた醒杖レンゲルラウザーの柄尻部分のリーダーに、それを続けざまにスラッシュユさせる。

《スクリュー。》

《ブリザード。》

『喰らえ！』

《ブリザードゲイル。》

ラウザーの認証音声と同時に、翻した指先から放たれたカードがそれぞれ宙で光の紋を描きレンゲルの胸郭へと吸い込まれた。

『透！氷付けにする！離れる！』

『うりゃああああ！』

頭上で一回転させた槍を一閃させると同時に、解き放たれたポーターアンデッドの冷気にモールアンデッドの回転効果が付与された凍気の竜巻『ブリザードゲイル』が、ディレイドが飛び退いた後のケルベロスアンデッドに襲いかかった。

『oooooooooo!?!』

凄まじい局地的猛吹雪が過ぎた跡には、氷で足を地面に縫い止められたケルベロスアンデッドの姿があった。

『おっしやあ！やったあ！』

ひとり喝采を叫ぶレンゲルは、続けてカードを引き抜きラウザーに通した。

《バイト。》

『これでトドメだわりゃああああ！』

『バカ！？ やめる！』

やたらテンションが上がってしまったらしいレンゲルは、あるところか下半身が氷付けにされたアンデッド目掛けて駆け出し、ブレイドの制止も聞かずに跳び蹴りを繰り返した。

『うりゃああああ！』

身を捻って跳躍し、広げた両足の爪先と踵の交差を叩きつける「蟹挟み蹴り」、『コブラバイト』を発動させたレンゲルだが、ケルベロスアンデッドは全身全てを凍結させた訳ではなかった。

『ーーーーッ！』

迫るレンゲルのキックに対し、ケルベロスアンデッドは無造作にその蹴り足を掴み止めてしまった。

『なに！？』

途端に塵となり崩壊してゆくレンゲルアーマーのブーツ。

『あっ！？ あああああ！？』

『睦月いいいい！？』

慌ててブレイドが駆け寄り、レンゲルを逆さに吊り上げているその腕に向かって斬りつけた。

『ーーーーッ！？』

『あだあああ！？』

衝撃でレンゲルの足は解放されたが、転がって逃れるレンゲルの片足はブーツが崩壊消滅し、血だらけの素足が露出していた。

『逃げる！睦月！』

『一真。お前も下がれ。』

そこに割り込んだブレイドがケルベロスアンデッドに攻撃を加えて注意を逸らした隙にレンゲルを引きずって後退するブレイド。

『バカ野郎！？ 無茶しやがって！』

『痛い！？ 痛いよう！？』

だが良く見れば、露出した睦月の臍の傷は深くない。せいぜいアンデッドの指の形に皮がはがれているだけだ。

それよりも、ブレイラウザーの被害が深刻だった。刃がこぼれてい

る。理論上、地球上のあらゆる物質を切断できる刃がだ。

あのオルフェノクの触れた物を崩壊させる異能力は本物らしい。

『……ちつ。俺にできることはないのか……?』

「『いや。時間だ。』』

デュアルビーイングに攻撃を加え続けるデイレイドのバックアップの背中が告げたと同時、遠くカリスの背後に無数の人影のヴィジョンが折り重なり、そこに黄色い異形を出現させた。

いま戦っているバックアップよりも背が高く体格の良い透本来の活動体、デイレイドであった。

「『射撃を続ける』』

叫んだバックアップが後方に跳躍すると同時に再開される集中砲火がデュアルビーイングを襲う。

その隙にバックアップはデイレイドの側に駆け寄り、カレイドブレイドを逆手に持ち変えると差し出されたデイレイドの手に渡した。

「『これよりアップロードを開始。バックアップの活動を終了する。』』

『アップロード完了だ。』

バックアップとデイレイドが向かい合ってそう告げたと同時、バックアップから無数のヴィジョンが吹き飛ぶように掻き消えて瞳子の姿に戻った。

「……透!? 良かった!?」

『うむ。予定通りだ。』

「……この!」

まるで感慨など無縁なことを言うデイレイドの胸を、涙目になった瞳子の拳が小突いた。

『さあ、瞳子。スクエアフォームだ。』

「おーけー! スクエアフォーム!」

素早くデイレイドの背後に回り込んだ瞳子が叫ぶと共に、抱きついた瞳子の身体が黄色い輝きに包まれて溶けるように収縮し、デイレイドの腹に回された両手を基点に新たなベルトとなって収まった。

そして各部の装甲を展開変形させ太陽光電池のようなフェイズシフトパネルを露出させ、ディレイドの機能発展形『スクエアフォーム』へと移行した。

『透！ 大丈夫なのか！？』

『うむ。問題ない。』

『いや、木っ端微塵にされてそれ言われてもな。』

駆け寄ってきたブレイドにも当然のように応えるディレイド。

『それより、状況はバックアップから情報を受け取っている。あのデュアルビーイングを片付けるぞ。』

『あゝ……、なあ、やっぱアレじゃなきゃダメか？』

マスクの頬を掻きながら問うブレイドを無視してディレイドはさっさとカードをディレイドライバーに挿し入れる。

『当然だ。他に方法はない。』

言つて、がしゃん、とスライドカバーを閉塞したディレイドは、ブレイドの肩を突いて背を向けさせた。

『ファイナルフォームライドウ・ブ・ブレイド！』

『さあ。死又程くすぐりたいぞ。』

『土のよりひでえじゃねえか！？』

あっさりとカレイドブレイドに身体を袈裟掛けに透過されたブレイドは、カレイドブレイドの支配下に置かれ僅かに宙に浮くと、迅速に回転し変形、変移してゆく。

やがてそこに巨大なブレイラウザーのごとき大剣『ブレイドブレード』が現れた。

『でもよ透。俺のブレイラウザーも刃あこぼされたぞ。どうやって攻撃するんだ？』

『問題ない。俺と同期したお前はカレイドブレイドと同質のものに変位している。奴の破壊は効かない。』

宙に浮くブレイドブレードの問いかけに素っ気なく応えるディレイドは、言いながら続けてカードをディレイドライバーに挿し入れカバーを閉じた。



『だが、活動体たるこの身体はそうはいかない。接近戦は危険だから、この手を使う。』

言ってスライドカバーを閉塞されたディレイドライバーは認証を告げた。

《ファイナルフォームライドウ・カ・カリス!》

『え?』

その音声に、ケルベロスアンデッドに射撃を行っていたカリスが怪訝にこちらを振り向いた。

『初。死又程くすぐつたいぞ。』

『え、いやあああああ!?!』

射撃で手が離せないのいいことにカレイドブレイドを透過させられたカリスの身体が僅かに宙に浮かび上がり、迅速に回転し変形、変移してゆく。

やがてそこに、ハート型のパネルを中心に、幾重もの突起を生やした四本の長大な弓が交差した、まるで傘の骨のような槍袞が現れた。これがカリスのファイナルフォームライド『カリスグレイル』。

『な、い、いきなりなにするんですかあ!?!』

『む。待て。』

文句を言う巨大弓に掌をかざし、あらぬ方を見遣りしばし沈黙するディレイド。

『うむ。今、中で瞳子から人格に傷跡を残しかねない罵詈雑言を浴びせられた。』

『いや。そんなことじゃお前の鉄面皮は傷ひとつ付かねえから安心しろよ。』

己の内部の出来事を報告するディレイドに、そこに浮かぶブレイドブレードが呆れ気味に呟いた。

『剣立!まずいぞ!』

そこに、ギャレンの絶叫が飛んできた。

見れば、ギャレンとディオスクロイフォームの集中砲火を浴びなが

ら、ケルベロスアンデッドが屈み込んで己の両足の氷に掌をかざしていた。

足を縫い止めている氷を能力で崩壊させようというのだろう。

『透！？ 早くなんとかしねえと！？』

『うむ。』

ブレイドブレイドの焦りの声に応え、デイレイドはスクエアフォームとなって形状が変化したベルトバックル端の掌型のフレームを左から引いた。それに伴い右上を基点に九十度跳ね上がるバックル中央のユニット。

そのユニットの側面に現れたスリットに取り出した一枚のカードを挿し入れ、同じ手で左に振り払いユニットを元の位置に押し倒した。『カメンライドウ・カ・カブト！』

その途端、ベルトを残してドット柄のノイズに包まれたデイレイドの身体が赤き甲殻・仮面ライダー カブトの姿へと変移した。

続いて取り出したカードを、今度はデイレイドライバーに挿し入れカバーを閉じる。

『デュアルカメンライドウ・ファ・ファイズ！』

カレイドブレイドの指令に従い、デイレイドベルト・カレイドサーキットがドット柄のノイズに包まれる。飛び出した部品を宙でキャッチし、携帯電話に変移したそれを展開してキーを入力し、再びたたむと変移を完了したバックル本体のコネクタにその携帯電話を差し込んだ。

『変身。』

言うや、その携帯電話を左に九十度引き倒す。

携帯電話を収めることでベルトバックルと成したその両端から上下に赤い光線が延びて体表に幾何学模様を描くと、一際強い輝きを放ち、その後に「仮面ライダー ファイズのベルトを身につけた仮面ライダー カブト」の姿が現れた。

だが、ここまでのシークエンスを踏んだ時点でデュアルビーイングの足を束縛する氷は崩壊されてしまった。

『ーーツ!』

己を襲う銃撃を無視して一声吼えたデュアルビーイングは、次の瞬間にはその姿を消しており、ギャレンとディオスクロIFORMが宙に舞ったと見るや全く別の地点に姿を現した。

『は!?! なんだ今のは!?!』

『超高速移動能力。取り込まれたオルフェノクが持っていた能力だ。』

『悠長に言ってる場合かよ!?! あんな速度に対応できんのか!?!』  
『落ち着け。自分の能力を思い出せ。』

泡を喰ったブレイドブレードに冷静に告げ、ディレイドは淡々と己の手順を進行していた。

『フォームライドウ・ファイズ・アクセル!』

ディレイドライバーのスライドカバーを抜刀の動作で閉塞すると同時に、ケルベロスアンデッドの姿が再び掻き消えた。

すかさずディレイドはカリスグレイルをそちらに向ける。  
ギャレンらが薙ぎ倒された今、他に向かう場所はこちらしかない。

果たして、ディレイドの読み通りまるで傘の骨のようなカリスグレイルを盾に阻まれたデュアルビーイングが目の前に現れた。

だがデュアルビーイングは三度姿を消してしまう。高速移動でカリスグレイルを回り込むつもりだろう。

だが、ディレイドの方もようやく準備が整った所だ。

ディレイドはファイズのベルトの右側面、ファイズの装備であるポインターを上から叩いた。

『クロックアップ。』

見かけは異なるうとも、今のディレイドは規定の動作で機能を発動できる。

カブトのクロックアップ機能で加速したディレイドは、相対速度を同じくしたデュアルビーイングに向き直った。

『!?!?』

己のみと思っていた超高速の世界にディレイドが対応したのを見て

ケルベロスアンデッドが動揺の素振りを見せた。

再びカリスグレイルをそちらに向け盾とした上で、デイレイドは一枚のカードを取り出した。それはブレイド達が持つプライムベスタジャガーアンデッドが描かれたそれを、デイレイドは滞空するブレイドブレイドのカードリーダーのスリットに投げ放った。

狙い変わらずスリットをカードが通過し、その能力が発動される。

《マツハ。》

それはジャガーアンデッドの加速能力。

クロックアップにさらなる加速を上乗せし、目の前のデュアルビーイングは付いてこれずに身動きを止めた。

「駄目押しだ。」

素っ気なく告げたデイレイドは、さらに左手首のリストウォッチのボタンを押し込んだ。

《スタートアップ。》

ファイズアクセルの加速も上乗せし、最早全てが身動きを止めた世界の中で、デイレイドは最後のカードを取り出した。

取り出したカードをデイレイドライバーに挿し入れ、抜刀の動作でスライドカバーを閉塞する。

《ファイナルアタックライドウ・カ・カリス！》

そして左手にカリスグレイルを掴んだデイレイドは、右手でベルトバックルのファイズフォンを開き、エンターキーを押し込んで再びそれを閉じた。

《イクシードチャージ。》

ファイズフォンが認証を告げると、ベルトバックルから放たれた赤い光がカブトの体表を辿り、左腕を伝ってカリスグレイルに注がれた。

それはオルフェノクに滅びをもたらすフォトンブラッドの輝き。

そして右手でブレイドブレイドを引き寄せたデイレイドは、あろうことかカリスグレイルの長大な弓の弦に、ブレイドブレイドをあたかも矢のようにつがえて構えたのだ。

すると、ブレイドブレードの刃部分にフォトンブラッドのエネルギーが伝播し赤く染め上げた。

『さあ。これで止めた。』

その巨大さゆえ両腕を全開にするように弦を引き絞るデイレイドの身体が、ブレイドブレードが、カリスグレイルが赤に加え虹色の輝きに包まれた。

そして解き放たれたブレイドブレードはまさしく矢の早さで動けぬデュアルビーイングに突き刺さった。

だが、それだけでは終わらない。

カリスグレイルから、七色のブレイドブレードのヴィジョンが時間差で次々と射出されてゆくのだ。

それらは次々とブレイド本体に重なるように突き刺さり、デュアルビーイングの巨体を吹き飛ばしてゆき、やがて大爆発を起こした。

これがデイレイドが発現させたカリスとのファイナルアタッククライド『デイレイドアロー』。

《クロックオーヴァ。》

《タイムアウト。》

通常の時の流れに戻ったところで、解放された巨大弓と、跳ね返った巨大剣がそれぞれ一回転してブレイドの、カリスの姿を取り戻す。

『……やった、のか？』

『ああ。デュアルビーイングは完全に破壊された。』

『……よかった……』

ブレイドの問いかけにデイレイドがあっさりと応え、カリスが安堵の息を吐いた。

超高速移動能力を得たデュアルビーイングがその能力で行方を眩ませば逃げおおせたものをわざわざ立ち向かってきたのは、ひとえに取り込んだオルフェノクの性格に依る所が大きいだろう。

おかげで倒すことができた。

もっとも、そのことに気付いているのは、この場ではデイレイドの

中にいる瞳子のみであつたが。

「それでは、この世界をしばらく頼む。」

「ああ。任せとけ。」

この放置された工事跡で、透と一同が向かい合っていた。

透の言葉に恭也が軽く請け負う。

「だが、オルフェノクに対抗できる仮面ライダーを連れてきたら、お前には元の世界に帰ってもらうぞ。異世界の存在が居座ることは、宇宙境界線のバランスに差し障るからな。」

「……わかつてるよ。」

続く透の言葉に、表情を曇らせる恭也。

「わざわざつまんねーこと言っんじゃねえよ透。」

初を抱きしめた瞳子が横から口を挟んだ。

「あたしが、ダチに納得のいかねえ半端なことなんかさせやしねえよ。恭也が安心して帰れるようにしてやつから。」

な。と初に、恭也に笑顔を向ける瞳子に、恭也も表情を和らげた。

「……ああ。頼むぜ。」

「そんな訳だから、こっちはあたしに任せて、とつとへ行けよ透。」

「うむ。」

瞳子の言葉を受け、うなずいた透はそこから立ち去っていった。

「デジタルカメラ」や「デジカメ」と名の付くものは知っているけれど、じゃあ「デジタルじゃないカメラ」がなんなのかを僕は良く知らない。

「デジタル」の対義語として「アナログ」という言葉が存在することは、テレビ放送形式が変更になると毎日のようにテレビCMで言われるようになって初めて知ったようなものだ。

その「デジタルじゃないカメラ」のことを教えてくれたのは、彼女だった。

写真画質のことなんて、僕にはよく分からない。「何万画素」なんて謳われたって、写真なんてみんな同じようにしか見えなかった。けれど、彼女が撮る写真は違った。

どこがどう、とは巧く言えないけど、デジカメで撮るのよりも「僕が良い」と思った見え方に近い写り方をする。

彼女は「この風合いが好きなんだ」と屈託なく笑う。

だから僕も、そんな写し方ができるこの「デジタルじゃないカメラ」が好きだ。

そして彼女はこのカメラで撮った写真を集めて写真集を作るのが夢だと言う。

是非とも見てみたいと思った。

だから、彼女を、彼女の夢を守りたいと、そう、思ったんだ。

「はいこれ！」

「うん。」

少女が自らが構えたポラロイドカメラの下部スリットから吐き出されたインスタントフィルムを引き抜き、元気良く眼前に突き出された真つ黒のそれを尾上<sup>おがみ・たくみ</sup> 巧はいつものように受け取った。

「あゝ!?! だから、振っちゃダメだって！」

「ああ、ゴメン。つい。」

その紙をぱたぱた振った手首を掴まれ、慌てて平謝りする巧。

「振り回したら印画紙の中の薬剤が遠心力であちこち行って、画が悲惨な出来になるんだから。って前にも言ったじゃん!？」

「ご、ごめん……」

「ほら。おとなしく座って待とう?」

「うん。」

少女に促されるままに巧は学園の中庭のベンチに一緒に腰を下ろした。

「ほら。最初に撮ったやつ画が出てきた。」

少女が取り出した一枚のインスタントフィルムの、真っ黒だった表面にじんわりと画が浮かび上がってきた。

カメラのことは良く分からないが、巧はこの瞬間は好きだった。まるで宝箱を開ける瞬間のような、ちよつとしたワクワクを感じるのだ。

「うん。綺麗に撮れてる。」

「でしょ? ほら、こっちも」

うなずく少女が取り出すインスタントフィルムにも次々と画が浮かび上がってきた。

独特の厚みを持つ紙の上、一方だけが広い白縁の枠の中に描かれる理想郷。

そこに、巧の大好きな世界があった。

「……ああ。やっぱりイイなあ。」

「ふふつ。」

巧の恍惚の溜め息に少女が屈託なく笑う。

彼女と同じ世界を共有している。

それが巧にはたまらなく嬉しかった。

この学園に在る自分の立場を、一時忘れさせてくれるほどに。

> i 5 6 6 1 — 5 3 8 <



ここは、校名と同じ名の巨大企業が出資して設立された私立学園「スマートブレインハイスクール」。  
大勢の学生が各所にこった返す昼休みの、絶好の憩いの場であるはずのこの中庭に、今は彼ら二人しかない理由を二人とも知っている。

巧が人外の者、「オルフェノク」だからだ。

オルフェノクとは、元は人間でありながら、一度死んでのち異形の姿を得て蘇り、人を襲い殺すか仲間に変えてしまうという社会を脅かす存在。

だから、この学園の者は誰も巧を恐れて近寄ってこない。

唯一、巧を真に理解するこの少女、友田<sup>ともた・ゆり</sup> 由里以外は。

けれども二人は気にしない。

巧が守りたいと願うのは由里と、由里の世界たるこの学園生活であり、それはすなわち結果的に学園のみんなを守ることに繋がるため誰からも文句は出ない。

だが、巧の正体がみんなにばれたあの日から、二名ほど巧への態度を変化させた者がいた。

「尾上！おまえオルフェノクだったんだろ！？」

学園の廊下で、友達だった者から物を投げつけられた。何かのプラスチック容器が巧の胸に当たって床に落ちた。

「出て行けよ！俺らまで怪物に変える気か？」

「あっち行けよ！死にたくねえんだよ！」

「ヒトの皮かぶって人間に成りすましたつもり？」

一人の罵倒を皮切りに、周りの者全てが巧に罵声を浴びせる。ペンケースが、雑巾が、ほうきが、文房具が、そこらにあるものが次々と投げ込まれる。

「やめて！ みんな、やめてよ！」

悄然とうなだれ、されるがまま立ち尽くす巧の前に由里が立ちはだかるが、投げつけられる物は構わず四方八方から飛んでくる。

当然、割って入った由里にも投げつけられたものが飛んできた。

だがそれは、自分に物がぶつかるとも構わずに回り込んだ巧の手によつて宙で掴み止められた。

「っ！？」

「……由里ちゃん。危ないから。下がってて。」

「でも！？」

寂しげに薄く微笑む巧に、由里が悲壮な顔で振り向く。

「そこまでにしたまえ。生徒諸君。」

そこに、通りの良い声が学園構内に響き渡った。校内放送用のスピーカーからだ。

「冷静になりたまえ。彼は、かの四人のオルフェノクの暴虐から学園を守つたのだ。感謝こそすれ、罵るなどんでもないことだ。騒いでいる諸君らのやりようはまるで、生徒に襲いかかったかの四人のようではないか？ 皆、己を見返してみるがいい。」

その冷徹な声に、暴拳に及んでいた生徒たちが辺りを見上げ身動きをやめる。

「落ち着いて考えてみることだ。現在、社会問題となっている「オルフェノク問題」だが、その危険性は「荒い息を吐いて刃物を握つてこちらを見つめている子供」とそう大差ない。それにだ。君らの隣の友がオルフェノクでないと、一体誰が証明してくれる？」

その言葉に、隣の者を見ては互いに僅かに距離を開ける者もいる。

「今、友に疑いを持った者。所詮、人間関係などその程度のもの。」

別に悪いと言っている訳ではない。「ヒトを信じる」とは「そのヒトを信じる自分を信じる」ということだ。自分は友人にとつての友人たりえるか？ 尾上 巧は自分の友にそう思っていることだろう。」

巧は、おずおずと顔をあげた。

「その友の友の友たるこの生徒会長・草壁 雅人は、尾上 巧を我らの仲間として歓迎する。」

スピーカーの声と同じ肉声が、その曲がり角から同時に現れた。白隻の伶俐な容貌の少年。この学園の生徒会長・草壁くさかべ・まさと 雅人その人だ。

携帯電話を耳に当てている。原理は分からないが、放送機材に直結させマイクにしているのだろう。

「生徒会の決定に不服のある生徒は、所属から外れるなり好きにするがいい。」

フラットな表情のまま遠回しに学園を辞めてしまえ、とまでその生徒会長は言つてのけた。

「だが、良く考えることだ。少なくともこの学園にいる内は、ファイズの守護に与れるということをな。」

巧の傍らまでやって来た生徒会長・草壁 雅人は、この場で肉声の届く範囲に、構内放送の届く全域に、丁寧に区切るように言い切つた。

特にこの場にいる生徒たちに向けられるその冷徹な眼差しに当てられた者は、それ以上反論することもなく、目を逸らし、おとなしく引き下がってゆく。やがてここには巧と由里と草壁以外誰もいなくなつた。

「ふむ。まさしく「被害者を名乗る加害者の群」だな。」  
「あの、生徒会長、どうして……」

携帯電話をたたんでばやく草壁に、巧はおずおずと問いかけた。今のこの事態に至るまで、全く面識のなかつた人間だ。

それが、どうしてこんな、場合によっては生徒全員を敵に回しかねないことをしたのか。

「さすがに見るに耐えなかつたのでな。大勢でよつてたかつて一人を一方的に糾弾するなど、生徒会長としては看過できない。」

「そうじゃなくて!?!?」  
冷静な顔で当たり前のように言う草壁に、巧は慌てて言い募つた。

「だって、僕はオルフェノクだ！ ……非難されても、仕方がない……」

「君の友人だったかな？あの事件の日、バイクに乗ってやって来た転校生が言っていただろう。「人間だのオルフェノクだの、下らないことで括るんじゃない」、と。少なくとも君はその娘を大事にしている。そして現在まで無事に生存している。ならば別に問題はない。」

あの時、聞こえる場所にいたのだろう、土の言葉を引用した草壁は、肩をすくめて続けた。

「それに、これは私見だが、私は現在のこのような浅ましい人間社会というものに希望を見出せないでいたのだ。そんな私が唯一、君という存在に希望を見出した。」

たまたんだ携帯電話を揺らしてこちらを指し示し言う草壁。

「いったいヒトとはなんなのか。「オルフェノクが絶対悪とは限らない」という命題を証明するためには、君が一人、存在していれば充分だ。何かあったら、いつでも訪ねてきてくれていい。」

言って、草壁は巧に背を向け歩き出した。

「私を信用するかどうかは、君に任せる。信用の根拠は、君が隣の娘を信用する根拠とそう変わらないと思うが。」

「……草壁先輩は、僕がここにいていいって言ってくれた。でも、僕は、本当にここにいていいのかな。」

写真を持つ手を膝に落とす、中庭のベンチで巧はぼつりと呟いた。

「それは、巧が決めることでしょ？ 巧の道だもん。」

隣で、由里があっけらかんと言った。

「それに、私の夢を守ってくれるんじゃないの？ 少なくとも、私はこの学園を卒業するつもりでいるんだけど。だったら、巧も卒業までちゃんといないと、守りたいものが守れないでしょ。」

「あ。」

すらすらと、淀みなく考えている事の道筋を立てる由里の言葉に、巧は目からウロコを落とした。

「会長は、巧がしたいことの為に、したいようにしていいって言っただよ？ 自分のしたいこと、忘れてないでしょうね。」

「はい！分かってます！」

突きつけられた指先に慌てて応える。

「まあ、みんながみんな仲良くしてくんないのは残念だけど、みんなが敵に回ったわけでもないし。巧がこの学園に居座る分にはしょうがないんじゃない？持ちつ持たれつ、みたいな。」

「……ああ、うん、まあ。」

頬を掻いて曖昧に相槌を打つ巧。

巧が心配していることは、そこではなくて。

（でも、僕のせいで、ほかにいたはずの友達をなくした由里ちゃんは、本当にそれでいいの……？）

「私のことはいいのよ！」

「い!?!」

巧はぎよつとした。まさか思考を読まれたのか？そんなこと、あるはずなのに。

「……私のこと心配して返事が曖昧になったんでしょ。巧の行動原理を知ってんだから、それくらいはお見通しよ。」

恐れ入った。確かに巧の行動の根幹は「由里を守る」ということである。

「私はいいの！むしろ夢を捨てて巧に石投げるなんてことのほうが有り得ないよ！それに、みんないずれ分かってくれるかもしれないし、分かってくんなくても、私の夢に予定の変更はないから！」  
言っただけでこり微笑む由里を、巧は眩しそうに見つめた。

（ああ。やっぱり由里ちゃんは凄いな。）

巧自身、「夢」というものにあまりピンとこないまま現在に至っている。

自分の将来のことなんて、オルフェノクとなったあの時から考えることを忘れてしまった。

ただ、「夢」を大事にする人の気持ちに眩しい程の輝きを感じている。

それを大切にしたいと思った。守りたいと思った。

きつと、そうすることが、自分の「夢」みたいなものだろうとも思っただ。

そこに、誰も訪れるはずもないと思われていたこの中庭に、一人の長身の男がふらりと現れたのに気付いた。

その者が学生では有り得ないことにもすぐに気付いた。男は制服も着用しておらず、そもそも十代には見えない。

その男は真っ直ぐに巧を見据え一直線にすたすと歩いてくる。

「巧!？」

「……!？」

関係者以外でここに立ち入り、かつ巧に用のありそうな者といったら一種類しかない。

巧は緊張しつつも、ベンチの下のトランクケースに手を伸ばすべく身を屈めた。

「おいお前。フア」

「っだりゃあああああああ!」

イズだな、という男の台詞は、二人の座るベンチの背後の植え込みから飛び出した小柄な女子生徒の華麗なドロップキックによって叩き潰された。

巧も由里も、目を丸くしていた。

二人の頭上を飛び越えたその少女は、スカートが翻るのにも構わずまるで男の顔面に横から着地するかのようにつまえた靴底を叩き込んでいたのだ。

> i 5 6 6 2 — 5 3 8 <

いったいどのようにバランスを取っているのか判然としないが、そ

の姿勢のまま数秒が過ぎ。

「瞳子。そこをどけ。俺はそいつに用事がある。」

「いやかましいっ!?」

顔を踏まれたまましゃべる男の顔面に反動を付け（恐るべきことに男はその瞬間も小揺るぎもなかった）、着地したその少女・神楽見 瞳子は男に怒鳴りつけるとその腕を取ってぐいぐい引つ張っていった。

「ほら！見て分かんないの？いま絶賛取り込み中だからお邪魔虫は退散退散！」

「む。待て」

「ささ。どーぞどーぞお気になさらずどーか続きを。 ……ほら！こっち！」

こちらへ掌を差し出してへらへらとした笑顔で促した瞳子は、一転表情を翻して男をどこかへと連行して行ってしまった。

瞳子の頭に巻かれたハチマキに挟まれた小枝が歩調につれひよこひよこ揺れる。

「……なんだろあれ。瞳子ちゃんの知り合い？」

「……てか、いたんだ。後ろに。」

由里と巧の呆然とした眩きが、白々と風に消えていった。

かの同級生の神楽見 瞳子こそが、事件を機に巧への態度を変えたもう一人の人物であった。

空手部に所属し、「賢脳流」とかいうこの学園の空手部独自の体系を追求していると言うが、二人にはいまいちよく分からない。

なにやら巧と由里の仲に興味津々と公言してはばからない、別の意味で迷惑な少女だった。

そうしてそろって首を傾げているそこに、都営鉄道の駅のミュージックホーンのような涼やかなメロディが一節、学園の敷地の外まで響きわたる大音量で流れ出た。構内放送の合図のメロディだ。

『尾上 巧くん。尾上 巧くん。至急、理事長室まで来て下さい。』

「巧？」

「……うん。」  
同じ内容の放送が繰り返されるのを聞きながら、巧は怪訝顔の由里にうなずき返した。

重厚な色合いの調度類が並ぶ広大な部屋。

部屋の主ひとりのためだけだとするならば大げさな程の広さを持つこの部屋の中、その主たる理事長が腰掛けるデスクの前に巧と由里が立っていた。

呼ばれたのは巧だけではあるが、由里を伴ったことに対して理事長は特に何も言わなかったので、共にここにいる。

その、肩書きの割には若々しい面立ちに僅かに面白がるような色を混ぜて二人を眺める理事長のデスクの端には、「騎端 勇治」と書かれた札が置かれていた。

「あの、なんで、これを僕に渡したんですか？」

持ってきたトランクケースの手提げを握る手に力を込め、巧は理事長・騎端に問いかけた。

「あの時、好きに使っていいと言われて、僕は、みんなを守りたくて他のオルフェノクを倒しました！　なんで、オルフェノクが入れないこの学園に僕を入学させたんですか？　どうして、あの四人はこの学園に入れたんですか？」

呼ばれた用件を聞く前に、巧はまくし立てた。

これまで、聞きたくても理事長が多忙で聞けなかったことを。

「本当に、このまま、これを、僕が使つていいんですか……？」

「もちろんです。」

巧の、絞り出すような独白に、騎端は笑みを含んだ調子であっさり  
と答えた。

「君のしたいようにしなさいと、あの時言った通りです。私が見込んで下した判断です。そしてその成果には何も問題はない。」

デスクの上で組まれた両手の上に乗せられた顔は、相変わらず喰えない澄ました笑顔のまま。



「正直、人間に化身したオルフェノクを見分ける方法はありません。学園の入学規約に明記はしても防げない、それが現実。ですが、尾上くんやあの四人と、それ以外のオルフェノクではやはり大きな違いがあるんですよ。それは、いかにオルフェノクの本能に寄りわずに生活できるか。本能を完全に隠して生活できるか。それを可能とするのは強い意志力。そんな高等なオルフェノクだけを、この学園は秘密裏に入学を認めているのです。」

「えっ？」

淀みなくすらすらと告げた理事長の言葉の意味を捉え、由里は思わず一歩下がった。

「ああ。心配いりませんよ。そうは言っても、現在この学園に在籍しているオルフェノクは尾上くんただ一人です。……あとはまあ、学生でなければ、私、とか。」

言って笑みを深めた騎端の顔に、複雑な紋が浮かび上がった。それは、オルフェノクが正体を表す直前のサイン。

「ひっ!？」

「由里ちゃん!大丈夫!理事長先生は大丈夫だから!」

恐怖にひきつる由里の肩を抱き、巧は必死に宥める。

「僕にこのフェイスギアを渡したのも理事長先生なんだ!」

「ええ。まあ他のオルフェノクは、人を越えたとか言ってタガを外すことが多いようですが、私はそういうのは嫌なんですよ。」

顔の紋を消して、つまらなそうに言う理事長に、巧にしがみつくことで平静を取り戻した由里もとりあえず話を聞く体勢になる。

「まあこの学園自体、優秀な人材を育成して、ゆくゆくはスマートブレインの社員として迎え会社を発展させようという目的で設立されたのですが、つまりは優秀な、強力なオルフェノクをも欲しがってる訳です。「上」は。」

言って天を指さす騎端。上とはすなわち、学園の名の元となった巨大企業「スマートブレイン」のこと。

「さらに、研究・改修された「ライダーズギア」を若いオルフェノ

クを素体にして稼働実験しろだなんて指示も来てましてね。あの時はチャンスだと思ったワケですよ。」

「チャンスって……なんの、ことですか？」

由里を宥めつつも、巧もその雰囲気には圧され、思わず唾を飲む。

「世界を引っかき回す、ね。」

肘を突いた両手に口元を埋め、笑みを含んで呟く騎端。

「オルフェノクに覚醒したからといって、必ずしも人を襲うとは限らない。私や尾上くんのように。ならば、「ヒト」とはなんなのか。何を以て「ヒト」を「ヒト」たらしめているのか。私たちは本当にもはやヒトではないのか。尾上くんなら、その答えを導いてくれると思いませんか。」

「……………」

相変わらず底意のしれない笑顔で言う騎端だが、巧は心の奥底でその疑問に同意していた。だからフェイスギアを引き受けたのだ。

「さて。そろそろこちらの用件に移らせてもらいますが。」

「ぼん、と掌を打ち騎端が居住まいを正した。

「現在、「上」が報道に規制をかけているので表沙汰にはなっていませんが、ある深刻な事件が起こっています。ヒトでもオルフェノクでもない、何者かによる異常殺人が。」

言いながら立ち上がった騎端を追って向き直った巧と由里が、「異常殺人」の言葉に息を飲んだ。

騎端はキャビネットに歩み寄ると、差し込んだ鍵を捻って解錠した引き出しの中から一冊のファイルを引き出して、応接用のテーブルに広げ、二人を促した。

「ご覧なさい。ああ、友田くんは見ないほうがいいですよ。」

近寄って、巧が覗き込んだファイルの中にあっただのは、ガラスでできた精巧なマネキンが路上に横たわっている写真だった。

「……………」

「それでも、人間の死体ですよ。」

しれっと騎端が応えた。

だが、その「死体」の様相はあまりにも現実離れし過ぎていて、そう言われても巧にはピンと来ない。

「……はあ。」

「いったいどのようにすればヒトがこうなるのかは分かりませんが、この異常を為した存在については目撃情報と交戦記録があります。」

それによれば、オルフェノクとは別種の人型の異形の存在だとか。

「

「ええ!?!」

それを聞いて巧は仰天した。オルフェノクの存在だけでも人の身からかけ離れた異形の存在として一大事だと思っていたのに、「オルフェノクではない異形の存在」など、場合によってはオルフェノクにとっても脅威になり得るのではないか。

「たまたまそのモンスターと出くわしたオルフェノクによれば、そいつは牙のような弾丸を飛ばし、それに刺されると人間はそのように色を失って死んでしまうそうです。ですが、オルフェノクはその牙の弾丸に当たってもそのようにはなりません。」

その異常な能力は人間には効くが、オルフェノクには効かない。

それを聞いて対処可能と知った巧は、由美は守れると安心したが、

「が、オルフェノクの攻撃も、そのモンスターには通じなかったそうです。」

「ええっ!?!」

巧の思惑はあっさりと砕かれた。

「そこで、尾上くんをお願いしたいこと、と言えばもうだいたい察しはついているかもしれませんが、我々に残る武器はライダースギアだけです。ですので、ファイズギアで、そのモンスターに対処してみて頂きたいのです。」

「僕が?ですか!?!」

思わず己を指さして喫驚する巧。

「そ、そんなの、理事長先生が、ファイズギア使ってやってくればいいじゃないですか!?!」

「オルフェノクになっても、大人は色々忙しいのですよ。生活が懸かってますから。」

騎端は額に手を当てふう、とわざとらしく溜め息を吐いて見せる。

「それに、稼働実験が必要なライダーズギアは全部で五つあったのですが、ファイズギア以外はクセが強過ぎて未だ装着者が見当たりません。……その上二基のベルトが行方不明……」

台詞の最後にだけ、なぜか騎端から笑顔のままほの暗い怒りのオーラが滲み出て、巧と由里は訳も分からず後退った。

「……まあ、それはともかく、いずれその脅威が例えばそちらの友田くんにも牙を剥かないとも限りません。場合によっては授業とかの単位の操作もこちらでしておきますので、宜しく願いしますよ。」

「それは……」

「そのことについて話がある。」

巧が逡巡したところで突然扉が開かれ、そんな台詞と共に長身の男が無遠慮に入室してきた。

巧と由里には見覚えがある。先刻、中庭にやって来て瞳子に連行されていった部外者の男だ。

片腕に瞳子を引き擦っている。

「コラ待て透！」

「あんたは……」

敵性のオルフェノクかと身構えるが、瞳子の罵声と言いかけた巧を遮って突き出されたカードに覚えを感じ、巧は言葉を飲んだ。

「このカードに見覚えがあるな？ 俺はディケイドと同じような出自の者だ。お前に話がある。」

## track・44 ファイズの世界（後書き）

みなさん、覚えておいででしょうか。

この「デイレイドマスカーカレイド」では、士たちが世界を渡った後遺症（ 実際のところ、現時点ではデイシエッドによる工作と思われる ）によつて、怪人たちが別世界に紛れ込んできました。

それは概ね「ひとつの世界」に「別のひとつの世界の怪人」という比率でシャッフルされてきましたが。

さて、この舞台には「並行宇宙」が「瞳子の世界（夏美の世界）」を除いて九つあります。

それぞれの世界から、怪人をそれぞれ別の世界に1：1の割り合いで放り込んでゆくとして。

鉄槻は、原作デイケイドにおいてン・ガミオ・ゼダを倒したことによつて、「クウガの世界」では Grongi の脅威が完全に消滅したものと見なしております。（さもないと、ユウスケがあんな悠長に士について旅なんかしてらんないはず。）

みなさん、覚えておいででしょうか。

世界が九つあるのに対して怪人の勢力が八つ。

おや。怪人の勢力が一種足りない。

士たちと同様に、透が悠長にひとつずつ世界を巡っていた間にも各宇宙で状況が進行しています。

この「ファイズの世界」に現れた脅威がなんなのか、みなさんはもうお分かりかと思いますが、同時にこの状況のマスさにもお気付き頂けたかと思えます。

はてさて、この状況を透はどう捌くのか。これからいったい何が起こるのか。

みなさん、覚えておいででしょうか。

どっかの世界で、いるはずの何かが欠けていたこととか。

「このカードに見覚えがあるな？ 俺はディケイドと同じような出自の者だ。お前に話がある。」

私立学園スマートブレインハイスクールの理事長室で。

己のライドカードを突き出した透と巧ら一同が向かい合っていた。

「土さん、の？」

巧が、おずおずと問いかけた。

「ほう。噂に聞いた、ピンクとブルーの謎のギアの使い手のお仲間ですか。」

そこに、理事長・騎端が巧を回り込んで透の目の前までやって来た。

「理事長先生？」

巧と瞳子の怪訝な声が重なった。

「本人は「マゼンダ」と「シアン」だと言い張るだろうがな。それと、我々は『ギアテクター』ではない。そして、我々は同族ではあるが仲間ではない。」

「そんなことはどうでもいいんですよ。」

言いながら騎端は、爽やかな笑顔のまま透の両の上腕を左右からがっつちりと掴んだ。

笑顔の中に、ようやく獲物を捕らえたと言わんばかりの獰猛でほの暗い怒りを滲ませて。

「返してくれませんか？オーガドライバーを。あの時の彼らの戦闘の余波で嚴重な保管庫を木っ端微塵にされてからこの方 見当たらないんですよ。そのピンクのか青いのどっちかが持っていたんですでしょう!？」

あげく、かつくんかつくと透を前後に振り回す始末。騎端の笑顔の中の目つきがやや常軌を逸してきたのが傍目にも明らかに見えてきた。

「ちょよ、ちょつとちょつと理事長先生!？」

「知らん。そんな情報は受けていない。」

「だったらどちらか当人に直接訊いて、直ちに返還するように言いなさい!こちらとしても人の命と世界の危機が懸かっているんですから!」

「理事長先生!落ち着いて!」

「ねえ透。そのデイケイドっていうのも、透みたいに余所の世界で必要があつて持つて行つたつてことじゃないの?」

「巧が騎端を羽交い締めにして引き剥がしたところで瞳子が問いかけた。」

「それは有り得ない。異世界の脅威が紛れ込む異常が起きたのはデイケイドが世界を通過した後のことだ。しかも『ギアテクター』のデバイスだけ持ち出す意味がないことは理解しているはずだ。G3と違って装着者の選定に制限があるからな。」

「ふうん。じゃあさ。デイケイドとかと連絡つて取れないの?」

「できない。『システム・デイケイド』は、それぞれが固有のルーチンに従つて行動するもの。機能としてのデータリンク以外で『システム・デイケイド』同士が、例えば離れたところで通信などで対話することはないし、そもそも意味がない。デイシエッドとの邂逅すら本来は有り得ない例外中の例外だった。」

「じゃあ直接掴まえて話をするしかないんだね。」

「ええい離しなさいなどと向こうで喚いている理事長の方に瞳子は振り向いた。」

「ええと、見かけたら連絡するつて言ってます。」

「お願いしますよ!？ホントに!？」

「てか、なんで神楽見さんがそんな詳しいの?」

「それより、この世界に起きている異常事態についてだが。」

「巧の疑問を遮つた透の言葉に、ようやく騎端も錯乱から回復し一同は居住まいを正した。」

「『ファンガイア』だな。」

「『ふぁんがいあ?』」

応接用のソファに全員が腰掛けたところで、巧、由里、騎端がそろってオウム返しに呟いた。

「異世界の住人でな。その世界では他の世界ではおとぎ話にしか存在しない異種族が多種実在し生活している。その内の人間に次ぐ生存圏の規模を持つ生命体がファンガイアだ。」

テーブルに広げられたファイルの、劣化ガラス体で朽ち果てた遺体の写真をとんと指で突いて透は解説した。

「ファンガイアは糧食としてライフエナジーという他の生物の生命エネルギーを吸引する。その方法は、例の牙のヴィジョンを介して行われる。ライフエナジーを吸い尽くされた生物の遺体は変質し、劣化ガラス体となって朽ち果てる。」

牙の弾丸が当たった人間がガラスになって死ぬメカニズムとは、まさしくこれだ。

得心した巧と騎端はうなずいた。

「で。対抗するには?」

「うむ。まず、俺がファンガイアの世界の仮面ライダーを連れてくることだが」

そこに、瞳子が慌てて身を乗り出した。

「ねえ透!? ファンガイアって、芦河さんたちの世界にもいつぱいいたじゃん!? どーすんの!? 遥さんは芦河さんの世界にいなきゃいけないし、キングは自分の世界で忙しいでしょ!? 手が足りないよ!?!」

その通りだ。

事情を知らないスマートブレインハイスクールの三人はきょとんとしていたが、透がこれまでやってきたような、「脅威に対応できる仮面ライダーを連れて来る」ことが、今回はできないのだ。

「うむ。そうだな。瞳子、なにか良い策はないか?」

「知るかあああああッ!」



いきなり真顔で検討を放棄してきた透に瞳子が伸び上がって絶叫した。

「だが、まず相談しろと瞳子が」

「丸投げはないでしょーが!? いくらなんでもこんな寄り切りいっぱいの逆境から世界丸ごと逆転させる知恵なんかないわあああッッ!?」

「あの一。」  
「ぎゃんぎゃん吠える瞳子の横から、騎端がぱたぱたと手を振ってきた。

「つまり、的確に対抗できるはずの人が、今はいないということですよね?」

「そうだ。」

臆面も逡巡もなく透はうなずいてみせた。

「そのことですがね、こちらとしても未知の存在ですから、とりあえずライダーズギアでもぶつけてみようと思っっているんですよ。」

「いやまだやるとは……」

「ふむ。まずはそんなところだろうな。」

諦め悪くうめく巧を無視して透がうなずいた。

「ファンガイアに対し有効な攻撃は、奴ら自身の持つ「魔皇力」という属性攻撃が最も有効だが、太陽光に類似した性質の兵器も有効だ。その点ではファイズの持つフォトンブラッドならば問題なく滅ぼすことができるだろう。」

「へ?いま、やつつけられるって言った?」

透の言葉に、瞳子がきょとんと問い返した。

「うむ。」

「じゃああたしに訊くことないじゃん!」

「お前は「手が足りない」ことについて問題提起したのだろう?」

人手の充足については最初から放棄している。各世界に置いてきた彼らに頑張ってもらうより他にはないことは始めから分かっていることだろう。」

「がー！ー！」

淀みなく正論で返され頭を搔き毟って吼える瞳子。

「だが今回ばかりはどうしようもない。だから訊いたのだがな。」

「あーもーどつちなよ回りくどい！？ だからなにがどう どうしようもないのよ！？」

「一真の世界に、オルフェノクに対抗できる仮面ライダーを連れていかねばならないだろう。」

「で！？」

「だが、ファイズはこの世界に現れたファンガイアに対処せねばならない。」

「あああああ！？」

オルフェノクの脅威にさらされた世界はふたつあるのに、ファイズは一人しかいないのだ。

再び混乱したように喚く瞳子をさて置いて、透は騎端に向き直った。

「他にもライダーズギアがあつたはずだ。装着者はいないのか？」

「うち一基はあなたのお仲間が持つて行つてるはずですがね。」

しつこく根に持った様子の騎端が皮肉っぽいい言い回しで告げるが、

透の鉄面皮は小揺るぎもしない。

「……もう一基、『カイザギア』がその前から行方不明。残る二基のうち『デルタギア』だったら、近々装着者のアテが付きそうなんですがね。」

どこか含んだ調子で説明する騎端に、透は鷹揚にうなずいた。

「ふむ。ならば、その装着者が確保されるまでは、俺がファンガイアの対処に回ろう。巧。」

「ふえ！？」

突然名を呼ばれ、巧は今しがた目覚めたかのように目を瞬かせ泡を食って振り向いた。

「な、なに！？」

「お前に頼みがある。準備ができ次第、俺に代わって別の世界に現れたオルフェノクを始末してもらいたい。」

「いやだー！ー!?」

言われるなり巧はもの凄い形相で絶叫した。

「なんで僕が、そんな異世界まで行かなきゃならないんですか!?

僕は、由里ちゃんさえ守ればそれでいいんだ! そんな、余所のことまで知りませんよ!?

「巧……」

必死に言い募る巧に、由里は複雑な表情を浮かべた。

その二人の様子を頬杖を突いて横目に見ていた瞳子は心中で溜め息を吐いた。

傍目に見てても、巧の心に余裕がないことと、由里が己のことよりも巧の身を案じていることぐらいは分かる。伊達に二人のストーカーをやっつけてはいない。

それに、巧の行動原理を考えれば今の反応は仕方のないことだ。巧の目的は身の回りの平穩であり、巧個人には世界ひとつ背負う義理などどこにもないのだから。

使命を持って行動する透や遙や音撃の鬼たち、自分の命を守らねばならなかった翔一らと、この巧とでは立場が違う。

「ねえ透。とりあえずその『デルギター』とか言うので変身できる人が見つかるのを待とうよ。世界の危機も大変だけどさ、巧ひとりに無理強いもできないじゃん。」

「ふむ。」

「『デルタギア』、です。」

相づちを遮って騎端がしつこく訂正してきたが、透は無視してソファから立ち上がった。

「仕方がない。他を当たるとしよう。」

それきり透は巧には目もくれずにドアへと歩いていった。

「ちよつと透!? そんな言い方ないでしょ!?

慌てて立ち上がった瞳子が透に追いつがる。

だが透は一切構わずにドアを開けて出て行ってしまった。

閉まりかけたドアを掴んで廊下側の透を見送った瞳子は、僅かに後

巡してから室内を振り向いた。

「ああもう!? ……巧!」

どこか申し訳なさにこちらに目だけ向けた巧を、瞳子は真正面から見つめてはつきりと宣告した。

「そんな顔しないの! 自分で決めたんならそれを貫きなさい! オトコでしょっ!」

ぎょっとした顔で仰け反る巧に構わず瞳子は怒鳴り続ける。

「あたしだって死にたくないけどっ!? だからって巧一人に全部押しつけるのがおかしいってことぐらい、分かってるからっ!」

きよんとしている巧の見つめる前で、瞳子はまだ言葉がありそうにわなわなと震えていたが、結局そこで身を翻してドアの向こうに飛び出していった。

「か、神楽見さん……」

「モテモテですね。尾上くん?」

「ツツ!」

騎端の笑みを含んだ声に巧は慌てて振り向いた。

「ま。そういうことで、今回の件は以上です。ファンガイアを見かけたら、お願いしますよ」

そうだ。変な介入があつたが、現在騎端に放送で呼び出された件は依然として存在していたのだ。

「だけど、僕は……」

「巧。話が終わったんなら、行こう?」

突然、逡巡する巧の腕を引っ張り上げて由里が立ち上がった。

「ちよ、由里ちゃん!」

「それでは理事長先生、失礼します。ほら! いいから!」

「あわわ」

はきはきと告げ由里はさつさと巧を引きずって歩き出した。

その勢いのまま理事長室のドアをくぐり出る。

「ちよ、ちよっと由里ちゃん!」

「いいから! 巧、ちよっと落ち着いて考えよう!」

先に立つて廊下をずんずんと進む由里は、前だけを向いて、悲痛な声でそう言った。

「みんな巧、巧って……。私だって、私だって巧が辛そうにするのなんか見たくないんだからあつ!？」

「由里ちゃん……」

引つ張られる巧には、その時由里がどんな表情を浮かべていたかは見ることができない。

ただ、その今にも泣きそうな声音に激しく胸が痛み、どうすればいいか分からないもどかしさにまた苦痛を覚えて眉をしかめた。

スマートブレインハイスクールの校門付近は今、異様な雰囲気に包まれていた。

おかげで下校しようにも門を塞がれて出ることができない生徒たちでごったがえしていた。

何が異様かと言えば、この学園の校門の外を、他校の学生服の集団が半円を描いて立ち塞いでいたからだ。

それもただの学生ではなさそうだ。

彼らが纏っているのは、元は詰め襟タイプの学生服だと思われるが、一様に変形が激しく、腕脚の裾は広がり、上着も「それはコートか」と疑うほど長く延びていて、とても校則基準を満たしているとは思えない。それとも彼らの学校の校則の方がまともではないのだろうか。

そして、日常でいっただいどの様に運用しているのか、どれもこれもあちこちがボロボロにほつれているのだ。

さらに、その集団のほとんどの者が上着の下にYシャツはおろか肌着の類を着用しておらず、胸板が厚い素肌を覗かせていた。それは逞しい胸板ではあったが、セクシーなどという感慨からは程遠く、ただひたすら暑苦しい。

彼ら全てに共通していることはと言えば、皆そろって獯猛な気配を発散し、威嚇的な態度で学園を睨み付けていること。

何より最も異様なのは、その集団の中に、明らかに十代とは思えない年かさの者が混じっているように見えるということだった。それがたとえ変形学ランであろうとも、著しく似合っていなかった。

「なにあれ」

「テレビで見たことあるぜ。懐かし映像とかで昔の「キンパチ先生」に出てきた生徒みてえ」

「は？ じゃなに、あいつら昭和時代のイキモノ？」

「すげー。あんな長い学ラン初めて見た」

当時生まれてすらいない者ばかりの学園の生徒たちが時代錯誤な昭和の古くさい臭いを感じひそひそと囁き合う。

なにしろその異様な訪問者の中には木刀や鉄パイプ等で武装している者もいるのだ。

門番を務めていた気のいい警備員のおじさんは早々に追い払われてしまった。

面と向かって抗議する者は誰一人いなかった。

やがて、学ランの集団の中から一人の男が進み出てきた。

やはり他の面々と似たり寄ったりの格好だったが、その男は唯一白のハチマキを額に締めていた。

男は、周囲の奇異の視線などものともせずには辺りを睥睨し、すう、と息を吸い込んだ。

「わしゃあ！ 『流星塾』 二号生筆頭！ 相模原 さがみはら・しゅうじ 修二じゃあああ！」

突然の凄まじい怒号に、校門に群がっていたスマートブレインハイスクールの生徒たちが一斉に後退した。

否。男の常識外れの胆力から放たれたプレッシャーが生徒たちを押し退けたのだ。

> i 6 6 0 9 — 5 3 8 <

「うわー！？ なんだなんだ！？」

「声でけー！？」

とうとう生徒の数人が校舎へと逃げ戻ってゆく。

「決闘じゃああ！ 空手部の連中！ 出てこんかいいいーっ！」

再び放たれた怒号に、とうとう校門のレンガにびしりとヒビが入った。

「ちよつとちよつと!?!」

一斉に耳を塞いだ人垣を押し退けて、校門の前に瞳子が飛び出してきた。

「なんなのよあんだ達はあつ!?!」

「出たな小娘!」

瞳子の姿を認め、男・相模原 修二は腕を振って応えた。

「何しにここまで来たのよ!? 勝負はこないだのでついたでしょお!?!」

「ふん!あんな未熟者連中を倒しただけで、わしら『流星塾』の力をあんなものと思つてもらつちやあ困るんじゃないーっ!」

吼えて相模原が指さした方を見れば、学ラン集団の端に全身包帯まみれの重傷患者が数人いた。

「今日は、わしが本物の『流星塾』の空手つちゆうモンを教えてやるうと思つてな。」

ごきりと拳を鳴らしてみせる相模原。

「瞳子。知り合いか。」

「透?」

そこに、透が瞳子の横に現れた。

「うん。こないだ空手部の大会があつてね。そんな時あたしがへこましたやつら。」

「へこました」言うなああああつ!?!」

突如 相模原が絶叫した。

「わしはまだ負けを認めたワケじゃないわあああつ!」

「知らないわよ!? あんた応援席にいたじゃん!?!」

「ふつ。お前達を見くびっていたことは認めよう。」

いきなり平静になった相模原は、したり顔で呟いた。

「ぬるま湯教育に浸かった連中が集まるヘナチヨコな大会と思つて手心を加えたのはわしの慢心だと反省した。」

「こいつ、大会に出場できる人数制限があんのに、わしが出るーとか途中で騒ぎ出してさあ」

「ほう。」

「だから！」

瞳子と透の遣り取りを遮って相模原が突然声量を上げた。

「反省したから、今度はきちんとわしが相手をしてやると言っているんじゃああーっ！」

「帰れ。手続きして出直してこい。」

「ぐうっ!？」

「そもそもナニ大勢で来てんのよ。通行の邪魔。」

「ぐうっ!？」

「あとあいつとかあいつとか、なに物騒なモノ持ってんのよ。それでナニする気!? 帰り道で絶対逮捕されるよ!? つか、よくここまでお巡りさんに見つからずに来れたね。」

「ぐうっ!？」

木刀や鉄パイプをぶら下げた学ランの男を指さして指摘する度に、相模原は胸を押さえて崩折れてゆく。

やがて相模原はうずくまって動かなくなった。

「っーわけだから。帰った帰った。」

だが瞳子は容赦なく両手を叩いて冷徹に追い払いにかかる。

「……ふ……ふふふふふ……」

やがて、突っ伏した相模原の下から地獄の鳴動のような含み笑いが漏れ出てきた。

それと共にゆっくりと起きあがる。

対して瞳子のつまんなそうな顔はまったくの無反応。

「拳の勝負に時も場所も選ばんわ!いま!ここで!わしと戦ええええ!」

絶叫と共に踊りかかってくる相模原に対し、瞳子はつまらなそうな顔のまま実に冷静に身構えた。

「喰らえわりゃあああああ!」



相模原が拳を振りかぶって突進してくる。

だがその姿は瞳子の直前に割り込んだ人影によって巻き込まれるように進路を変え、路上を数メートルほど転がっていった。

野蛮な物腰の割に腕はそれほど悪くなさそうだった相模原を投げ飛ばしたのは、言うまでもなく横にいたはずの透であった。

「……あー。あんたって、そういうのもできたっけね。」

「クラああ！貴様！教師が生徒の喧嘩に出て来るんかい！？」  
「やおら立ち上がって相模原が吼えた。どうやら透のことを学園の教諭だと思っただらしい。」

「でもさあ、学生レベルの喧嘩にあんたが手え出すのはさすがに大げないんじゃない？」

「いや。そうでもない。」

転がされた男のことを無視してしゃべり始めた瞳子に透はいつものペースであっさりと告げた。

「そいつはオルフェノクだぞ。」

「は？」

「あと、そいつとそいつと、あとそいつもオルフェノクだな。」

次々と学ラン集団を指さす透の台詞の意味が瞳子の耳を伝って脳に浸透するのにだいぶ時間がかかった。

「はあああー！っ！？」

「おう！オルフェノクだから、なんだって言うんじゃないっ！」

瞳子の喫驚を遮って相模原が怒声をあげた。

それと同時にその姿をぼやかせ、灰色の異形・オルフェノクへと変貌する。

「ああっ！？」

「うわー！？」

その姿を見てスマートブレインハイスクールの生徒たちは悲鳴をあげて一斉に逃げ出していった。

『ふん。甘ちゃん共め。修行が足らんわ。』

二本の湾曲した角のような触覚を生やしたアリジゴクの生体相を持

つアントリオンオルフェノクは、肩を揺すり相模原の声で嘲笑した。  
「……あ、あんた、オルフェノクだったの!？」

「……ふん。それほど珍しいものではないだろう」

瞳子の声にぼやいて返し、アントリオンオルフェノクはあっさりと人間・相模原の姿に戻った。

「この学園にもいたらしいじゃないか。人を襲うオルフェノクと、そいつから人を守ったオルフェノクが。」

続けて不機嫌そうに吐き捨てる。

「それに……あんたたち、なんで……」

瞳子は、そこに見たもうひとつの異常、相模原の正体を見ても微動だにしない学ラン集団『流星塾』の一同を見回してうめいた。

透の指摘によれば、この三十人近い中に相模原のほかにもオルフェノクがあと三つ四体はいると言う。

オルフェノクの他は間違いなく人間だろうに、彼らはそのことで眉一つ動かさなかったのだ。

「それはワシから説明しようお嬢ちゃん……」

そこに、学ラン集団の人垣を割って深みのある声が告げてきた。

同時に全員びしりと「気をつけ」の姿勢で左右に分かれ整列した間に現れたのは、初老の男性。年の割りにがっしりした肉体を作業衣で締め付けたその姿は、まるで武道か何かの達人のような佇まいであった。

正直、どっかの軍事国家を見ているようで瞳子は軽くヒいていたが、その男は校門の前まで来ると、深く息を吸い込んだ。

既視感を感じた瞬間あることに閃いた瞳子を含むその場の全員がとっさに耳を塞いだ。

「ワシが流星塾塾長!!」

びききつ、と校門のレンガのヒビが延び、横一直線に壁を両断した。

「花形 はながた、へいはちろつ 平八郎でああああるツツ!!!」

シパンツ!パンツ!パパパンツ!

続いて校舎の窓ガラスが端から順にひとつ残らず砕け散っていった。

「ooooooooooooッ!?」

耳を塞いだ両手を突き抜けてくる轟音の威力に瞳子は必死に抗った。見れば、彼の塾生であるところの学ラン集団も耳を押さえたまま必死の形相で堪えており、うち何人かが真つ逆様にひっくり返って両足を天に突き上げていた。

残響が辺り一帯の気を震わせ、無数のカラスの群が泡を喰った様子で飛び立ち、そこら中のご近所から犬の吠え声が幾重も飛び出した。

「ふっふっふ。お嬢ちゃん。その手を耳からどけて話を聞いてくれるかのう?」

己の側頭部をとんとんと指でつつきながら問うその男・花形 平八郎の姿に、瞳子は恐る恐る両手を離れた。

「……なんなのよあんたント」は……」

「それからその若者も。」

「へ?」

花形が示した指先を振り返った瞳子は、そこに信じられない光景を目撃した。

あるうことか、透が直立の姿勢で地面に真つ直ぐ突つ伏していたのだ。

両手の位置からして先ほどの花形の怒号をまともに喰らったのではないかと思われた。

「ちよ、とおる!? とおるっ!?!」

慌てて透に取りすがすが、返事が返ってくるまで思いがけない時間がかかった。

「……むう、今は、いったい……」

「透!? あんたオーナーのプレッシャーは効かなかったのになんでっ!?!」

「ふっふっふ。修行が足らんのう?」

自ら引き起こした災厄など忘れたかのように花形は朗らかに笑った。

「まあ聞くが良い。我が流星塾は、日本全国から様々な事情で爪弾

きにされ教育を受けられない者を分け隔てなく受け入れてきた。その「様々な事情」とは、周囲とは馴染めないはみ出し者であることがほとんどで、そこにはもちろんオルフェノクとなった者も含まれる。」

「まさか……そんなことが可能なの!？」

「ふっふっふ。目の前に実例があるじゃろう?」

見れば、塾生たちは一樣にうなずき、中にはオルフェノクに変移した者と肩を組んでいる者すらいた。

「……………うそ……………」

「それに、オルフェノクと共存している例はそちらにもあるじゃろ。」

「ふん。小娘との勝負は後にして、こっちの用事から片付けるか!？」

花形に続き相模原が突き出した指先を追って振り向いた先には、生徒がいなくなつた校門の向こうには、心配そうな顔の由里を伴つた巧が現れていた。

その手にはアタッシュケースが握られている。

「……………。」

巧は、相模原を見つめて唇をきつく引き結んでいた。

「お前がスマートブレインハイスクールの守護者・尾上 巧だな?」  
相模原の詰問に、だが巧は沈黙で応えた。

相模原も巧が何者なのか分かっているのか、それ以上なにも聞くこともなく巧に正対し、巧が持つものによく似た、だが二周りほど大きなアタッシュケースを取り出した。

留め金を解放して蓋を開き、中の機械類をガチャガチャと取り出すと、金属製の円環となつたそれを己の腰に巻き付けた。

瞳子も見たことがある、ファイズギアによく似たそれを装着した相模原は、黒い携帯電話を取り出し、本来ならディスプレイのあるパネルをリボルバー式に回転させて展開し構えた。

「さあ!お前の持つてる物を出してみろ!」

「ちよつと!? あんた本当にナニしに来たのよ!?」

巧に向かって携帯電話の先を突きつけた相模原に、瞳子が喰ってかかった。

「それってファイズと同じやつ!? そんなもの持ち出して、あたしを殺す気!?」

「お前とは、きちんと人間の範疇で空手で決着をつけてやるわ!

だが尾上 巧は違う!」

「へ?」

真摯な瞳で応える相模原に、瞳子はきよとんと聞き返した。

「学園を守るだ!? オルフェノクになっても人間を守るだ!?

? 尾上 巧のその妄言、本物がどうか確かめたい! 半端な覚悟だったら、このわしが灰にして散らしてくれる!」

言いながら相模原はキコン、キコンと特徴的なプッシュ音を鳴らしながら携帯電話のキーを押し込んでゆき、エンターキーを押してから手首のスナップでリボルバー式のパネルを回して閉じ眼前に逆手に構えた。

《スタンディングバイ。》

「変身!」

認証の音声が続いて携帯電話をベルトバックルのコネクタに斜めにセツトし、水平に押し倒した。

《コンプリート。》

認証が告げた途端、ベルトバックルの両端から上下に黄色の光条が延び、相模原の体表で幾何学模様を描くと一際強く閃光を放ち、そのあとには顔面にギリシヤ文字の「(カイ)」をあしらったマスクを持つ装甲服の姿が現れた。

変身した相模原は乱暴に喉元の装甲を引き襟元を整えるように顎を振ると、巧に向かってすたすたと歩き出した。

『さあ!お前も出してみろ!』

「巧!?」

瞳子と由里の叫びが重なった。

だが、巧は懊悩の表情で固く唇を引き結び、迫るカイザを睨み付け立ち尽くしていた。

ええと皆さんついて来てるでしょうか。

坂口 拓氏繋がりでなんとなく「流星塾」を先進的な学園とは対照的な古臭い昭和の私塾にしていまいましたが、分からない方はまあ「時代錯誤な残念な方々」と思っ頂いて結構。

でも彼らの異常な大声は、決して特殊能力とかではなく、鍛えた気合です。

ちなみに「二号生 二年生」「筆頭 代表」みたいな意味と想っ下さい。

さて。どっかの怪盗がやらかしたツケがこんなところに飛び火してきました。

全てのベルトが学園に集結していたということで、ファイズギアが巧の手に渡った理由はここで書かれたような設定になったのですが、カイザギアだけが既に行方不明になっていたのには一応根拠があります。

学園の壁が砕かれて海東がベルトを物色していた時、あのシーンの瓦礫の中に、唯一カイザギアだけ映っていません。なかつたように見えました。

だもんで、ぽーんとなくしてしまいました。いったいどうやって入手したんだか。

t r a c k ・ 4 6 ファイズの世界（前書き）

ご連絡

前話「t r a c k ・ 4 5」に挿絵を追加しました。



校門での騒動に気付く少し前のこと。

巧と由里は生徒会室を訪れていた。

「あー。失礼します……」

少々気後れ気味にドアを開くと、室内にいた生徒数人がこちらを振り向いた。

だが彼らは訪問者がオルフェノクである巧だと知っても、他のクラスの子のような大げさなリアクションは見せなかった。

「来たか。」

その部屋の最奥のデスクについていた生徒会長・草壁 雅人が、かつてと同様の怜悯な表情で呟いた。

「入りたまえ。 皆、すまないが席を外してくれ。」

草壁は巧に入室を促すと、生徒会役員に退席を告げた。

特にこれといった反応も見せず、唯々諾々と席を立つ役員の生徒たち。かつて草壁が語ったことが生徒会の総意であるということは事実のようだ。

いったいそこにどのような経緯があったのか。草壁の影響力なのか、生徒会の人間が物分かりが良いのか、今の巧には知りようもない。

やがて退出する生徒らと入れ違いに入室した巧と由里は、勧められるまま空いた椅子に腰を下ろし、対面に着席した草壁と向き合った。

「やつれた顔をしているな。迷っているのか。」

「!？」

実は大した用向きも考えずにここまで来たのだが、草壁に内心を言い当てられ巧は顔を跳ね上げた。

「君はなぜ、それを持っている？」

続けて発せられた問いが指すことが、草壁の目線の先にある、傍らに置いたアタッシュケースのことだということはすぐに分かった。

「守りたい者を守りたいからだろうか？」

「……でも、力を持っているんだから戦えって言う人もいるんですけど……つい意図せず口をついた言葉に自分で驚愕しつつも、言いたいことはその後から続いて出てきた。」

「でも、別に僕はそんな世界を救いたいだとかそんな大それたことは考えてないんです。正直、身の回りを守るので精一杯って言うか、自分の周りとか、由里ちゃんさえ平穏でいられたら、それでいいって言うか……」

言いながら、己の発言の意味に気付いて尻すぼみになってしまう。

「……勝手なのは分かっているんですけど、でも僕がたまたま人を襲わないオルフェノクだからって、オルフェノクに対抗できるからって、僕だってそんなわざわざこっちから喧嘩なんかしたくないし……」

周りからの勝手な期待と、自分の勝手にしたいということのジレンマ。

それがいま巧の心に陰を落としていた。

「勝手なのは誰もが同じだ。」

沈黙の隙に、草壁の伶俐な声が差し込まれた。

その言葉に はっとして巧は顔を上げる。

「ファイズとして装甲服姿に変身し、悪の異形を退ける。まるでヒーローだな。もし強靱な力に高潔な意志と世界平和を守る使命感まで持ち合わせていたならそれはさぞかし素晴らしいことなのだろう。だが、忘れてはいけない。それもヒーロー自身の都合であるということ。」

長広舌にも関わらず草壁の表情はまるでつまらない話でもするかのようにあくまでも平坦なままだ。

「力ある者が力なき者を守らなくてはならないなどという決まりなど存在しない。現にオルフェノクは暴虐の限りを尽くしている。そこに善意のオルフェノクがいたとして、弱き者に見れば、自分に代わって暴力を退けてくれる便利な道具に過ぎない。あの時、ラッキークローバーの四人を退けた君に皆が何をしたのか忘れてはい

まい？ 「強い能力には責任が伴う」などという妄言を良く聞くが、果たして暴虐のオルフェノクを前にそんな言葉がどれほどの意味を持つのかな」

そして草壁の平坦な口調にやがて、嘲りの色が混じり始めたのに巧は気付いた。

「勘違いするな尾上 巧。助けを求める声が、例え無垢なる乙女の純真な願いという形をとっていたとしても、実質それは真綿で首を締め付けるような脅迫、己の命を盾にしたテロリズムも同然に過ぎない。ヒーロー気取りが敵を退けている間、弱き者どもは何をしている？ 一時の感謝こそすれ「自分は戦わなくていい」と高を括って次なる面倒事を押し付けに来るだけだ。」

草壁の言葉は次第に熱を帯びてきた。それがこの場にいない者に対してのものだと知りつつも、巧自身も圧倒されていた。

「浅ましい。自ら戦うことを放棄した弱き者どもと、オルフェノクに変質したくらいで自ら人であることを放棄した連中とではその心の置き方に大差はない。そんな愚蒙な輩に身を墮とすなど私は御免だ。だから私が君に願えるのはだ。尾上 巧。」

そこで草壁の冷徹な瞳が巧の瞳を真っ向から捉えた。

「せめてその暴力を私に向けなくて欲しいと思う、ただそれだけだ。」

「そ、そんなこと!？」

「君の力は君だけのものだ。誰にもその使い道を強制することはできない。力ある者がその力の在りように悩んでいる間に、力なき者は何をしていた？ 自分に力が無い事を言い訳にして他人の悪事や不幸を黙認して看過し、責任の押し付け合いをしているだけだ。」

そんな怠惰で、無責任で、狡猾な偽善者などの為に君は指一本動かす必要はない。」

「……………」

「そして力行使するのなら忘れるな。君の敵はなんだ？ 望む結末を導く為にはなにをすればいい？」

「俺の……望み……？」

「君の存在が私の希望だという意見は変わらない。オルフェノクの力の上、ファイズの力をも持っていないながら驕ることを良しとしない君だからこそ、だ。」

やがて巧と由里が退出した生徒会室にひとり、座る草壁はやがてデスクの下からアタッシュケースを引っ張り出した。

巧が持つ物とほぼ同じ大きさのアタッシュケースだ。

「……………」

陶でできたかのような無表情のまま草壁はそれをデスクに乗せ、やあつてから留め金を外してケースを開いた。

「……………」

そこに収められていたのは、円に三角形を収めたマークを中央に据え付けた巨大な機械をバツクルとした、三本の白いラインを描かれた金属のベルトと、銃把のみのような形状をした小振りな機械、そして似たようなデザインラインを持つデジタルビデオカメラの三点だった。

「……………」

蓋を押し開けた手を下ろし、再び背もたれに上体を預けた草壁は、その機械を無感動に見下ろした。

「……………尾上 巧。君が力に溺れるようになったなら。私は君を打ち滅ぼすぞ。」

そしてガラスのように無機質で冷たい眼差しで伸ばした指先を機械の三本線に這わせた。

『さあ！お前も出してみろ！』

「巧！？」

迫るカイザを前に棒立ちしている巧を見て瞳子と由里の叫びが重なった。

「……………！」

『んがッ！？』

突然、無防備に見えた巧が投げつけたアタツシユケースを顔面にモロに喰らいたたらを踏むカイザ。

不意は打たれても大したダメージにはならなかったカイザがあっさりと体勢を立て直した時にはだが、もう既に巧の腰に金属のベルトが装着され片手には展開した携帯電話が握られていた。

『……ほう。やる気になったかよ！』

『……お前の都合なんか知らない。』

無風の湖面のように静かな瞳でカイザを睨めつける巧の様子に、由里と瞳子は息を飲んだ。一瞬、まるで別人に見えた。

キコン、キコンと特徴的なプツシユ音を立ててキーを押し込んでゆく巧は続けて穏やかに言葉を紡ぐ。

「僕はただ、平穏な世界にいたいんだ。オルフェノクだのなんなのなんて、どうでもいい。』

《スタンディングバイ。》

エンターキーの入力と共に認証を発声した携帯電話を手元も見ずにたたんだ巧は、カイザを睨み付けたまま言葉を続ける。

「出て行けよ。ここは由里ちゃんの大切な世界だ。僕はここにいたいんだ。……邪魔をしないで。』

そして巧は、宣誓するかのようには携帯電話を握った手を天に突き上げると、高らかに叫んだ。

「変身！』

続いて上げた手を真っ直ぐに振り下ろし携帯電話をベルトバックルのコネクタに接続、横に押し倒してバックルの中央に据え付けた。

《コンプリート。》

認証の音声が告げた後、バックル両端から赤の光条が上下に伸び、巧の体表で幾何学模様を描くと一際強く輝きを放ち、閃光が収まった後にはギリシャ文字の「」をマスクにあしらい、先の赤のラインを描かれたシルバーの装甲服の姿が現れた。

『よっしゃ！かかってこい！お前の覚悟を見せてみる！』

『出て行け、と僕は言ったんだ。』  
喜色を浮かべて打ち合わせた両掌を上に向け手招きするカイザに対し、巧が変身したファイズはあくまでも平静に、そして鋭く一直線に突進してゆく。

だが固唾を飲んで巧を見守る瞳子の目には、例え荒くれていても修得した空手に基づく体術を備えたカイザに対してファイズの体裁きはいかにも危なっかしいものに映った。

『うあああああ！』

『ぬおおおおお！』

氣勢を上げる両者が今まさに激突するかと思われたその瞬間。

横面にふたつの巨大な蹄ひづめの突撃を喰らったカイザがまるで砲弾のように真横に吹き飛んでいった。

> i 6 6 1 0 — 5 3 8 <

『……は？』

きよとんと中途半端な姿勢で足を止めるファイズが見たものは、いつの間にか目の前に立ち塞がっていた、灰色の巨大な人馬の異形の後ろ姿だった。

今、彼方で鈍い轟音が響き、吹き飛ばされたカイザが飛び込んだ物置小屋ががらがらと倒壊した。

『……かゝえゝせゝ……』

呆然とする一同の前で、本来なら馬の首が生えている所から人型の上半身を生やした、オルフェノクの中でも稀に備え持つ異形態を顕したホースオルフェノクが、まるで地獄の底から立ちのぼるかのような怨嗟のうなり声を吐き出した。

その声は知っている。このスマートブレインハイスクールの理事長の声。つまりこのオルフェノクは騎端が変じた姿だ。

それも、オルフェノクの異形態は感情の高ぶりに呼応して発現される。つまりは、騎端は相当怒り狂っているということだ。

「ぬう！いかん！あれは攻撃色だ！全員、全速力で退避せよ！」

「「押忍！」」

「かあゝええゝせえゝ！」

ほの暗い怒りのオーラを背負った人馬形態を見て血相を変えた花形の訳の分からない指図に従い、昆虫の死体のようなポーズで昏倒したカイザを担ぎ上げた流星塾塾生一同とそれを追うホースオルフェノクが学園正門前からどたばたと走り去っていった。

「……………」

いきなり静かになった門の手前で呆然とそれを見送る瞳子と由里とファイズ。

「な、なんだったの？あれ」

「ってか、アイツのベルトが、理事長が無くしたベルトだったんだ……………」

「理事長先生、怒り過ぎですよ……………」

由里が、瞳子が、ベルトの携帯電話を引き抜いて変身を解除した巧がめいめいぼやいた。

そこに、パソコンのハードディスクのように非常に静粛な駆動音を立てるバイクがやって来て停止した。

「乗れ。瞳子。」

「透！？」

黄色の地に黒と白のドットパターンを描いたマシンディレイダーに跨った透が、無感情に瞳子を促した。

「って、バイクなんか持ち出してどこに行くっての？」

「あれを追う。」

「は？」

町外れの山の麓、丘陵地帯に続く森の中の拓けた野原で。

大地に突き立つ数十もの黒く歪な柱に囲まれて、花形とカイザと、怒り狂うホースオルフェノクが対峙していた。

あれほどいた流星塾の塾生は二人を残してすべて真つ逆様に地面に突き刺されてしまっていた。すなわち、いま辺りに乱立している黒い柱は、騎端によって片っ端から頭から地面に埋め込まれた塾生た

ちだった。

「気を付け」の姿勢で真つ直ぐ地面に突き刺さった塾生たちは時折、足首をびくびくさせている。どうやら死んではいないらしい。

『かあゝええゝせえゝ……』

「ふっふっふ。ウチの塾生たちも修行が足らんかのう。いや、さすがは騎端。「イルラッククローバー」に誘われただけのことはある。

未だ正気を失った様子のホースオルフェノクの怨嗟のうなり声に、花形の面白がるような声音が応える。

『くっ！すまないみんな！ワシがふがないばっかりに！』

蹴散らされた仲間たちを見回し、カイザが拳を握り悔恨のうめきを漏らす。

昏倒から復帰したのは、自分を運んでくれた仲間が蹴散らされた時に投げ出されたショックのおかげで、気が付いた時には既にこの状況だったのだ。

『だが、ワシに希望を託したお前らの気持ち、無駄にはせん！こいつは、必ず倒す！うおおおおお！』

「あんたが一言謝ってソレ返せばいいだけでしょおがああああッッ！？」

涙を振り払って駆け出したカイザが突如、横から飛び込んだ瞳子のドロップキックをまともに横面に喰らってがらごろと派手に彼方へ吹き飛んでいった。

「ああもつたいがい会話になつてないんだから！」

華麗に着地し腰に手を当て言う瞳子の背後に透が駆るマシンディレイダーが静粛に停車する。

フロントカウルに瞳子の靴の足跡が付いている。どうやら走行中のバイクをカタパルト代わりに跳び蹴りを繰り返すことで、カイザギアを纏った相模原すら吹き飛ばすパワーを得たらしい。

「理事長先生もそろそろ正気に還ってくださいっ！」

『……………おお。』



灰色の人馬が、たった今覚醒したかのような声を漏らす。

『……って言うか、神楽見くんも度胸が据わってますね。私のこの姿を見ても、何とも思わないんで？』

揺らめくように身体を縮小させ、人馬形態から人型のオルフェノクの姿に戻る騎端が、地面に落とした影のヴィジョンから問いかけた。  
「なんかもう、透のおかげでいろいろ見飽きましたから。っていうかこの惨状のほうかドン引きです。」

瞳子は手を振って辺りの逆さまの塾生を示してばやくように言い返す。

『ぬうつ、小娘きつさまあ！漢おんと漢の勝負の邪魔立てをするかあ！』

「やつかましいっ！コトの図式だけ見たらあんたタダのドロボウじやん!？」

土まみれになつてのしのと戻ってくるカイザに向かってがうつと吠える瞳子。

「じゃがのうお嬢ちゃん。わしらもカイザギアの力が必要だったんじゃない。」

そこにいる花形が溜め息混じりにそう呟いた時、山に続く森の奥からなにか鳴動する音が響いてきた。

「そら。来たぞ。」

「へ?」

『……なにが来るって言うんです?』

花形の言葉に、瞳子と騎端が怪訝な目線を森の奥に遣る。

すると、森の奥の暗がり突き破って巨大な『何か』が飛び出してきた。

「『へ?』』

それがあまりにも巨大過ぎ、かつ見知った形状のものが常識では有り得ない大きさに拡張していた為、それを見た瞳子と騎端の認識が僅かに遅れた。

だが「瞳子の記憶」にはある姿。その事に気付くと瞳子はホースオルフェノクの傍らに駆け寄り灰色の上腕を叩いて叫んだ。

「逃げて！あれは魔化魍・バケガニ！ここじゃ誰も対抗できない！」  
「え？は？」

「いいから逃げてっ！？」

相手がオルフェノクであることも厭わずにその身体をぐいぐいと押しつぶす瞳子。

「透っ！なんとかして！こっちは逃げるから！」

「わかった。」

「ほら！みんなもいつまで寝てんの！」

透と入れ違いに駆け抜け、騎端と一緒に辺りで昏倒していた流星塾の塾生たちを蹴り起こしてゆく。

そうしている間にも、全高では樹木も越えれないが前後左右に巨大な形状のバケガニは八本の節足を蠢かせ迅速にこちらへ迫ってくる。

透がカードとデイレイドライダーを引き抜いて駆けてゆくが、なんとそのバケガニの手前にカイザと花形が立ちはだかった。

「ちよっ！？ 危ない！？ 逃げなさいっ！？」

「どけ。この世界のライダーでは対処できない。」

「はあ？」

瞳子の絶叫にも透の指摘にも、あるうことかカイザに変身した相模原は怪訝声でとんでもないことを口にした。

「つってもワシ、何匹かこういう「妖怪」を倒したぞ？」

「はああああ！？」

バケガニを指さして素っ気なく告げるカイザに瞳子は素っ頓狂な声をあげて喫驚した。

「バカ言っつてんじゃないわよ！音撃道の鬼たちが鍛錬に鍛錬を重ねて練り上げた音撃でようやくやっと打ち倒せるモンなのよそれは！それが、オルフェノクだろうが機械の鎧着てようが、倒せるワケないでしょお！？」

「そう言われてものう。……どれ、修。いっちょ揉んでやれい。」

「押忍！」

聞く耳を持たない花形は軽く指示を下し、カイザは氣勢と共にバケ

ガニに向き直ってしまっ。

「ちよっ!? ……あもっ!? 透!?!」

「分かっている。変身」

デイレイドライバーにカードを挿し入れ、抜刀の動作でスライドカバーを閉塞し、迅速にその身をドット柄のノイズに包んで彼方より飛来したライドピラーを受けイエローに変じ、デイレイドに変身した透が花形の脇を駆け抜けてゆく。

『邪魔だ先公!』

デイレイドの出現をも「出過ぎた教師のやること」と勘違いして切り捨て、カイザはベルトバックルの携帯電話表面から円に×字の飾りをあしらったチップ「ミッションメモリ」を引き抜きそれを取り出した巨大な黄色い「X」を模した機械に挿し込んだ。

すると機械の一端からイエローの光条が伸びまさしく「光の剣」と化した。

続いてベルトバックルの携帯電話のリボルバー式の蓋を僅かにずらすと、その下のエンターキーを押し込んだ。

《イクシードチャージ。》

キインと甲高い共鳴音と共にバックルから体表のイエローのラインを一際強い輝きが辿り脇を右腕を伝ってその手に握る機械へと流入していった。

『巻き込まれても知らんぞ! 行くぞ! 流星塾流・究極奥義!』  
叫ぶカイザがかざした光の剣を振りかぶって大仰に構えを取る。

それにしても、さつきからとんでもない大声だ。マスク越しでも辺りの木々が震える声量。

マスクの中の自分の耳は大丈夫なのかと心配になるほどである。

『甲斐座棲羅修ッ!』

奇妙なイントネーションで叫んだのと同時に振りおろしたカイザブレイガンのブレードから、巨大な光弾が射出された。

『?』

後方から迫る光弾に気付いて脇に避けたデイレイドのそばを掠めて

飛んだ光弾は、狙い違わずバケガニの身体にヒットした。

その途端、光弾は弾け飛び、だが飛散はせずにバケガニの身体にまとわり付くとエネルギーネットを形成してバケガニの動きを完全に封じてしまった。

『でやああああああ！』

射出と同時に駆け出していたカイザが迅速に巨体に迫り、カイザブレイガンを逆手に構え、と言うよりもまるでメリケンサックでも握るように振り上げて。

『往生せいやあああああつ！』

しつこい絶叫と共にバケガニの甲殻にそれを叩き込んだ。光刃の部分ではなく、x字の本体の方を。

正直、音撃以外は効かない事を知っている瞳子はその光景を白けた目で眺めていたのだが、続く有り得ない光景に目を剥き完全に言葉を失った。

音撃以外は受け付けられないはずの巨大魔化魍の身体が、頑丈そうな甲殻が、カイザの一撃を受けて見る見る亀裂に斬り裂かれ、あっさりと爆砕してしまったのだ。

「……………はい？」

『っと。どんなモンじゃい！チヨロいモンじゃろうが！』

がっはっはと笑うカイザと、したり顔でうんうんとうなずく花形。

瞳子と騎端は呆然と立ち尽くすしかなく、だがその背後で流星塾の塾生たちが喝采をあげていた。

「うおおおすげえ！」

「さっすが修じゃー！」

「ざまあみさらさんかいあんバケモンが！」

「ええ〜と……………」

頬を掻きながら呻いた瞳子は、変身を解除して戻ってきた透に問いかけた。

「……………ねえ。どういうこと？あれは魔化魍じゃなかったってこと？」

「いや。確かに魔化魍だった。」

特に衝撃を受けた様子もなく透はあっさりと応えた。

「そしてフォトンブラッドが効果を表していた様子もなかった。そもそも当たっていなかったしな」

「……じゃあ、なんで魔化魍が滅ぼせんよ。」

「ふっふっふ。お嬢ちゃん。それは我が流星塾流の究極奥義のおかげじゃ。」

「いや、黙ってていいよ おっちゃん。」

横から話しかけてきた花形に、完全に胡散臭い顔でしっしと手を振る瞳子だが、花形は一切意に介さずに言葉を続けた。

「流星塾流究極奥義の極意のその一に曰く。「大声で技名を叫びながら殴りつければ威力も増した気になる」、ということじゃ。」

「で、透。なんで魔化魍がやつつけられたの？」

花形を無視して瞳子は透に振り向いた。

「今その男が言った通りだが？」

「は？なに？透までおかしくなった？」

だが、あるうことか透は花形の言を肯定してきた。

「俺は極めて正常だ。そして瞳子。お前の記憶にもあるはずだぞ。」

音撃道において、「鼓」・「弦」・「管」以外に魔化魍を滅ぼす手段がかつてはあった。」

「は？でもそれって昔に失われた……」

瞳子は「音撃道見習いの自分」の記憶を掘り起こして言われたことを検討していたが、やがてある事に思い至り言葉を失う。

「……あ……でも……まさか……」

対照的に平坦な無表情でうなづく透が瞳子の発想を肯定する。

「そつだ。そのカイザは「発声」を打撃に上乘せして魔化魍を滅ぼした」

「うそおつ！？」

瞳子はもう開いた口が塞がらなかった。

「……と、言う訳でな。魔化魍とは かような存在だ。」

「ふん。要は根性でヤツツケられると言っことじゃろう!?」

「……………うん……………まあ、どうでもいいや。」

透の理路整然とした説明を軽く一蹴した相模原に、瞳子もとうとう説得を断念した。

一同は、まだバケガニを爆砕した跡地におり、状況の説明を行っていた。

「とはいえ、さすがにライダーズギアでもなければ危なっかしくてまともに戦えぬで。カイズギアをこっそり借りてきたのじゃ。」

「なにが「こっそり」ですか。ウチのセキュリティを何だと思ってるんです? どういう手を使ったのかきっちり説明してもらいますよ!」

付け加える花形に、人間の姿に戻った騎端が不機嫌に告げた。

「なに、たいした事じゃないわい。そもそもライダーズギアの保管庫のパスコードを知っている者は、ギアの開発関係者に限られるわけじゃろ? そしたら自ずと答えは出るじゃろうが。」

「……………は?」

眇に見つめて言い返す花形の言葉に、騎端は何か思い当たったのか、呆けたように口を開けたまま。

だが花形は騎端を放って透の方に目を向けた。

「ちゅうワケで。こないだスマートブレインハイスクールに現れたという異世界の連中とやらを、わしらも待っておった。」

「ほう。」

「なにしろ我が流星塾は山間部に近いところにあるから。どうい訳かやたらあのような「妖怪」……………「魔化魍」と言うのか。がしよっちゅう出てくるようになって。ウチの塾生の身が危なくてかなわん。」

「でもコレどういうこと? 今まで「ひとつの世界」に紛れ込んだのは「ひとつの異世界の脅威」だったじゃん?」  
そこに、瞳子が割り込んだ。

「なのに、この世界には今、元からいたオルフェノクと、ファンガ

「イアと、魔化魍までいるなんて。」

「まだ推測の域だが、ディシエッドの目的が宇宙の破壊で、一真の世界でやったように異世界の脅威を移送しているのだとしたなら、宇宙の破壊を確実なものにする為に、二種以上の異世界の脅威を送り込むことはしそうだな。」

「うーわ。初めて見た時から思ってたけど、つくづく陰険なヤツ。」  
瞳子はうえつと舌を出した。

「でも、どうすんの？ これから音撃道の人たちを連れてくるにしても、その前に一真の世界にここの誰かを連れていかないといけないでしょ。」

「うむ。そこで俺はカイザギアを使えるそこの相模原に頼もうかと思っただが」

「……？ なんだ？ 「妖怪」が出るところが他にもあるのか？」

「……いや、いい。あんたはここにいて。 って、ああ、そうか……」

つい反射的に却下にしたが、瞳子もようやく気付いた。

協力する気のない巧と、未だ装着者の知れないデルタギアの使い手を待つまでもなく現れたカイザ・相模原だったが、この世界の住人ながら魔化魍に対抗できるその能力は確かに貴重で、相模原をこの世界から動かすわけにはいかない。

対してファンガイアへの対策は、ライダーズギアであればどれでも対処が可能。

となると、残るはデルタギアの使い手のみ。

だが、それはいつ現れるか今のところ不明だ。

「……、ねえ透。 あたし、もう一回 巧に頼んでみる。」

「巧は断ったが？」

「だから、譲歩できる条件を考える。無理はさせられないし。 あ  
のさ透。」

瞳子は、今度は身体ごと透に向き直って真正面から問うた。

「そう言えば最初の「絵描きのあたし」のいた世界も含めて、ここ

で十個目の世界じゃん？ 最初に透が言っていた「接触崩壊する十の世界」は一通りなんとかしてきたワケじゃん？ まあ、ここはただだけど。」

「ふむ。」

「で、透は十個の世界の危機をなんとかしたら、次はどうする予定だったワケ？ ほら、「異世界の住人が別世界にいるだけでマズいことだ」って言ってたじゃん。そしたら、脅威になる連中だけじゃなくって、仮面ライダーやってる奴らも元の世界に戻さないといけないんだよね？」

「うむ。そうだ。」

透が鷹揚にうなずくのを見て、瞳子も改めて考えをまとめる。まったく。論理的思考なんて普段のこの「学生の瞳子」だったら滅多にやらないことだ。他に九つの「自分」の記憶があるからできることだ。

そんな自分への苦情もさて置いて瞳子は続けた。

「それを、いつ、どういうふうに行うのか教えて。ほら、巧にお願いするにしても、短時間だけでいってことにすれば、聞いてくれるかもしれないし。」

「ふむ。」

透は、あごに手をあてて思案する素振りを見せた。そんなポーズに意味があるのかどうか瞳子には分からないが。

「いいだろう。説明しよう。」

「十の世界全ての「裏面」にあたる場所に、十一個目の世界がある。」

「はあああつ！？」

いきなり出てきた新情報に瞳子が絶叫した。

「なによそれ！？ 宇宙同士の接触崩壊の危機だったのに、まさかそんな調子でこれから先うつかり「十二個目」とか「十三個目の世界」とか出てこないでしょうね！？」



「十二個目」以降の世界にはデイケイドも赴いているが、俺には関係ない。」

「あるんかいつ!? ほかにも!?!」

瞳子の再三のツッコミも無視して透は続ける。

「その、「十一個目」の世界に、「絵描きの瞳子」の世界を除く、「九つの世界」全ての異常を片付けることができるようになる拡張ツールがある。ついでに言えば、「九つの世界」の異常を治めることで、「絵描きの瞳子の世界」の異常も消える。」

「……なんで真つ先にそれを取りに行かなかったワケ?」

「その世界は特殊でな。「九つの世界」全てを通過することが、その世界へ至る力ギでもあった。だから俺はいずれにせよ世界全てを通過しなければならなかったし、これまでしてきたことは、言わば「ついで」だ。」

「……はあ。」

いまいち腑に落ちない調子で瞳子はうなずいた。

現在、事情を全て知っている者が透しかいない為、疑っても詮無いことだし、なにより、透がいなかったらどの世界も今頃もつと深刻な事態に陥っていたであろうことも事実だ。

(本人がその「ついで」で挫折しかけたり、あげく死んじやつたりしたワケだもんね)

瞳子にも、透が使命ばかりの為だけに動いていた訳でもないことは分かっている。

「そして、所要時間については正確に定義することは不可能だ。」

「なんでよ」

「細かい理由はいろいろあるが、何より、各宇宙間で時の流れる速度に若干の誤差がある。が、年単位までのずれはない。例えば約一週間単位で巧に協力を要請することは可能か?」

「ん……」

瞳子は、俯いてしばし考え込んだ。

「そしたらさ、こうしよう? 巧には一週間だけってお願いする。」

で、こっちは一週間でデルタギアの人を探す。透は一週間したらデルタの人と巧を交換する。」

それを聞いて、透が首を傾げた。

「……一度異世界に連れていってしまえば、巧を交代させる必要はないのではないか？」

「あんたナニさらつと鬼畜なコト言ってるのよ。巧にウソ吐いて、行った先で拗ねられたらあんただって困るでしょ!?」

「困りはしないが使命は果たせなくなるな。」

もの凄い形相で瞳子が言い募るが、透には通用しなかったようだ。

「だ・か・ら、せめてこの約束は守んなよ!? んじゃ、あたしは行ってくるから。」

歯を食いしばって言うだけ言い、瞳子は身を翻すと駆け出していった。

「待たんかい！神楽見い！」

「……なによー!?!」

だがそこに、唐突に相模原が声をかけ瞳子は振り向かずに返事した。

「お前、バイクで来るようなこんな距離、駆け足であるスマートなんたら言う学校まで行くつもりか？」

「え？」

相模原の不機嫌な声音に、はたと瞳子の足が止まった。

夕焼けに染まるいつもの通学路の途中の河原の土手の道。

長く長く伸びる木々の影や街灯の影、電車が通る陸橋の影の間に、向かい合う ふたつの細長い人影があった。

「……いま……なんて……？」

その影の一方の根元で、唇をわななかせ、巧は決壊しそうな心を押しとどめて、聞き間違いであることを祈りながら、聞き間違いであつて欲しいと願いながら問い返した。

儚げに、悲しみに沈んだ表情の由里に向かって。

こんなに沈鬱な由里の顔を見たのは巧は初めてだった。

まるで、背後の夕焼けが透けて見えそうな、溶けて消えてしまいうな……

「……もう、私のこと、守ってくれなくて、いい、って……言ったの」

頭を打った衝撃に、巧の身体はぐらりと揺れた。

何かが実際に激突した訳でもないのに、ひどい衝撃だ。

それだけではない。足下もおぼつかなくなり、まるで平衡が感じられない。

自分は今、立っているのか立てなくなったのかすら分からない。

世界が、回る。

「……………どうして……………」

カラカラに乾いて上手く舌が回らない。

世界が回るほどに、世界が巧から言葉を奪ってゆく。

その宣告は突然下された。

寄って立つ自分の中の確かなモノを得たと思ったのに。

これで、これからはしっかりと戦えると思ったばかりだったのに。

守らなきゃいけないモノから勝手に掌から抜け出ていってしまった。

「……………さよならっ」

巧の脇をすり抜け、由里はそこから走り去る。

由里を止める為に片手ひとつも動かせなかった。

「……………な　　んで……………」

後頭部から突き抜ける、海面のように大きな揺れが巧を襲う。

それはぐらん、ぐらんと平衡を奪い、景色が傾いても、膝が地面を

突いても巧はなにも感じることはなかった。

だが陸橋を通過する電車の音が耳に飛び込み頭蓋に反響した。

痛みを感じる心臓なんて、だいぶ昔になくしてしまった。

脈打つ鼓動とも長らく無縁だったから、自分の内から聴こえてくる

音の少なさに今更ながら啞然とした。

おかげで頭の中で明瞭にかなり立てる電車の音がやかましい。

「……………ゆ　　り　　ちゃん……………」

心臓を、生命を無くし、そして今、守るべきもの、戦う理由も無くしてしまった。

平衡感覚の欠落に加え、ひどい喪失感までもが巧に襲いかかった。

「……どうして……」  
いつの間にか、視界は一面橙だいたいの一色に埋め尽くされていた。

それが夕陽に焼けた空だということにすら巧の意識は及ばなかった。

「どうした。そこまでか、尾上 巧。」

どこからか、そんな冷徹な声が聞こえてきた。

なんて冷たい声だろう。耳朶を打つその声音は、身体に染み込み不快な冷たさとなってあごを、背筋を震わせた。

「立て。尾上 巧。いつまでもそのままなら。そのザマでは私の希望の光には程遠い。」

聞こえる言葉の意味が理解できない。

ただ、その冷たさに巧は震えていた。

「……分かった。ならば私がここで殺そう。……変身。」

《スタンディングバイ。コンプリート。》

その声言うはずのない言葉に続いて、聞き慣れた音声までもが聞こえてきた。

やがて巧の視界の上から、円と三角を組み合わせたマスクが逆さまに、覗き込むようにして現れた。

その巨大なセンサーは、その先の夕焼け空を透過させたかのように不気味な橙の色をしていた。

> i 6 6 1 1 — 5 3 8 <

track・46 ファイズの世界（後書き）

なんかちよつと、デイケイド・ファイズの世界は部分的に麻生俊平先生の某作品と重なる部分があるかなーなんていろいろ妄想した拳句、一部、表現を変えて引用して話に絡めてみました。元の作品とは違う見解が立てられたらな、と考えています。

で、ついぼろつと漏らしてしまいました。恐らく皆様ご想像の通り、「十一番目の世界」が存在します。それはもう少々お待ち頂くとしまして。

魔化魍と遭遇した丘陵地帯の拓けた場所でひとり、透は指先につまんだ一枚のカードを眺め立ち尽くしていた。

夕暮れに陰るそのカードには、色を失い像がぼやけていたが、ファイズの姿の残滓が見て取れた。

もはやこのカードは効果を發揮しない。

「……ふむ。」

その使えないカードを眺め、透は思案に暮れて ずっと立ち尽くしている。

『力への依存も精神の懦弱。成すべき使命への依存もまた懦弱。』  
まるで地面にこぼれた影が立ち上がったかのような漆黒の異形が、冷たい声を吐き出した。

円にそれを三分割するラインと三角形をあしらったマスクを持つ白と黒のモノトーンの装甲服が、土手の道に仰向けに倒れる巧を見下ろして奇妙な形状の銃を差し向ける。

その動作はハンカチを差し出すよりも軽やかで、なによりも意図や感情の見えない動作だった。

殺意も害意も見せず、ただ作業のように凶器を構えている。

『誰かを守るといふ使命にしがみついているならば、まともに立つことすらできないか。それもまた唾棄すべき弱さだ。』

聞こえていないのか、巧は全くの無反応。  
だが構わずに声は続ける。

『私の敵は、そういう「懦弱」だ。浅ましい依存は何もかもをたやすく壊してしまう。……友田 由里が立ち去っていったように。』

由里の名が出て、自失し呆けた巧の表情に変化は現れなかった。

『君がただの人間だったなら なんかの矯正手段があったのかも しれない。だが生憎と君はオルフェノクで、ファイズギアを持って

いる。いつ他の人間への脅威となるか分からない。だからここで殺そうと思う。』

言いながらベルトのバックル表面から引き抜いたミッションメモリを、その銃身の上面に滑らせ差し向けた銃口を微動だにさせずに装填した。

同時に銃口がせり出し全長を伸ばしてその機構を露出させる。

『さよならだ。尾上 巧』

『待たんかいコラアアア!』

《バトルモード。》

その時突如、怒声と共に巨大な質量が襲いかかった。

『そいつはわしの獲物じゃこらああああ!』

一瞬前までデルタがいた所に逆関節の鉄骨の脚が突き刺さり、機構が複雑に絡まり合った金属フレームが精密かつ迅速に動き回ってその巨体の向きを反転させる。

上部にカイザが跨った、さながら黒の機械鳥『サイドバツシャー・バトルモード』がその巨体に見合わぬ迅速な拳動でデルタに迫り、蹴りを、車輪のついた拳を振り下ろすが、デルタはそれらを後退しながらかわしてゆく。

> i 7 2 4 3 — 5 3 8 <

『ええいちよこまかとしおって!』

サイドバツシャーの足が地面を突く度に激しい振動と轟音が噴き上がった。

この巨体と重量からは思いも寄らない敏速な戦闘機動を披露するサイドバツシャーに対し、攻撃の間断を突いてデルタがミッションメモリを引き抜いたプラスターモードで運転席を狙撃してくるが、嵐のように振り回される金属フレームの暴虐に阻まれカイザまでは届かない。

『うりゃああ!』

カイザも業を煮やしてサイドバツシャーで蹴りを繰り返すが、デル

夕はその蹴り足に飛び乗るとサイドバツシャーの上半身まで跳躍してきた。

『フトコロに入りや勝ちつてか!?!』

粗野な言動とは裏腹に即座に状況に反応したカイザはサイドバツシャーの上半身を腰部を軸に回転させ宙にいるデルタ目掛けてアームによる裏拳を見舞った。

だが巨体を一回転してきた後輪のアームが激突する瞬間、デルタは身を翻してサイドバツシャーの腕に絡みつく。と鉄棒運動の要領で一回転して腕の上に立ちそのまま運転席のカイザへと肉迫してきた。

『わしを乗ってるだけの飾りとも思ったか!?!』

デルタムーバー・ブラスターモードを握る腕とカイザブレイガンを握る腕が交差し両者は動きを止めた。

だがどちらも眼前に突きつけられた銃口など見てはいない。

そしてどちらも追いつめた・追いつめられたなどと考えてはいない。まだ状況の途中。

だが「勝負はこれから」と考えていたのはカイザだけだったようだ。突如そこに襲いかかった激しい衝撃にサイドバツシャーが横倒しにされカイザが地面に投げ出された。

『うおおお!?!』

ごろごろと地面を転がるカイザが立ち上がった時には既にデルタは姿を消しており、遠くをまるで前後に車輪をつけたミサイルのようなビークル、ジェットスライガーが走り去るのが見えたのみだった。さながら鉄の花束のような過剰に生えたバーニアから火を噴く後ろ姿が土手を駆け降り川へ進入すると、そのまま水上を走り去ってゆく。

『……ふん。』

《ビークルモード。》

悪態を吐き、やがてバランスを取り戻して立ち上がったサイドバツシャーに指令を送ってビークルモードに変形させ、携帯電話を引き抜いてカイザは変身を解除した。



あとに現れた相模原は、後ろを振り向きそちらへと歩いてゆく。そこには、倒れた巧を介抱する瞳子がいた。

魔化魍と遭遇したあの場所から瞳子を送るためサイドカーに乗せてきたのだが、その途中で巧の窮地に出くわしたのだった。

「ちよつと!? 巧!? しつかりして! 巧!?」

瞳子の必死の呼びかけにも反応を示さない。開いている目は虚ろで、間近にある瞳子の顔も認識できていない様子だった。

「……ふん。ちよおどけ、神楽見」

「ちよつと!? なにするの!?!」

瞳子押し退けた相模原は、喚く瞳子に構わず巧の胸ぐらを掴み、目の高さまで片腕一本で持ち上げた。

巧はまるでぶら下げた雑巾のように脱力しきつたままだったが。

「ええか。男の目エの覚まし方、教えたるわ。」

言うなり相模原は巧を殴り飛ばした。

「ちよつ……!?!」

吹き飛ばされた巧の身体は糸の切れた人形のように土手の草の上でごろごろと転がり落ちてゆく。

「あ、あんた、ナニすんのよ!?!」

「さあどうした尾上 巧い! さつき校門でほざいてたお前の覚悟はそんなちやちいモンか!? ほれ! 悔しかったここまで来て殴り返してみんかい!」

瞳子の抗議を無視して相模原は土手の下で倒れ伏す巧に向かって囁し立てる。

だがやはり倒れ伏す巧から反応はなかった。

「ああもう!? あんたんトコの連中とは違うんだから、そんな古っつい熱血が何もかも通じるワケないでしょお!? 巧! 巧!」  
慌てて土手を駆け降りて巧の横についた瞳子は、巧の身体を転がして仰向けに寝かせた。

その目は虚ろに開いていたが、方頬を真っ赤に腫れ上がらせても無反応のままだった。

「ちょっと!どうしたの!? 何があったの!? 由里ちゃんはど  
うしたの!？」

身体を揺さぶって瞳子は問いを繰り返す。

「……由里ちゃんが……もう……守ってくれなくて、いい……って  
……」

「え……?」

やがて、巧はぼそぼそと唇を動かし始めた。

「……せっかく、ちゃんと戦えると思ったのに、由里ちゃん、もう、  
守らなくて、いいって……」

ぽつり、ぽつりと語るにつれ、巧の目の端に水気が滲み、涙があふ  
れてきた。

「……僕は……これから、どうしたら……」

声を震わせた巧の、閉じたまぶたの端から涙が一筋こぼれ落ちた。

そこに、立ったまま草の斜面を滑り降りてきた相模原がすたすたと  
歩み寄ってきた。

「ふん。言いたいことはそんだけか、尾上 巧」

ポケットに両手を突っ込んだまま、まるでチンピラのように肩を揺  
すって巧を覗き込む。

「手前てまえのしたい事くらい、手前で決めんかい。誰かに四の五の言わ  
れたくらいで諦める理由になるか、阿呆。例えそれが本人でもじゃ」

つまらなそうに吐き捨てる相模原。

目を閉じた巧に聞こえているかどうか分からない。

「実際問題、オルフェノクに襲われたらあの女に対抗できる力はある  
んか? わしゃあ塾のみんなを守らなきゃならんから、あの女の

ことまで手え回らんぞ。……お前は、あの女を守りたいんとちゃ

うんか

「……」

返事はない。

だが、違うわけがないことぐらい、瞳子も相模原も分かっている。

「守りたきゃ守れ。たとえ迷惑がられようが、死なれるよりも遙か

にマシじゃろうが」

「そうだよ巧！ こうしてる間に、由里ちゃんがオルフェノクと遭ったりしたらどうすんの！？」

「……でも、」

目は閉じられたままだったが、ようやく巧が口を開いた。

「僕が守ると、由里ちゃんが苦しむんだ。 そんなの、僕のEGOで、由里ちゃんに押しつける権利なんて……」

「うりゃ。」

「つぶげっ！？ ぶげほっ！？」

突然、巧がむせ返った。

台詞の途中で相模原がいきなり寝ている巧の顔に土を蹴りかけたのだ。

「もうええ。 お前、そこで寝てる。」

「ちょ、ちよつと！？」

構わず相模原は土手を登り始める。

「そうやって屁理屈こねてる間に大事なモンみんななくして後で泣けばええじゃる。それがお望みのようじゃからな。」

途中で肩越しにちらりと瞳子を見遣り。

「お前もとつとそいつを見限ったほうが互いの為じゃ。 男は甘

やかしたら腐るからもう」

そう言つて、相模原はバイクにまたがってヘルメットをかぶると、さっさとそこから走り去っていつてしまった。

「……。」

相模原のバイクの音が遠ざかるにつれ、その独特の音が街の騒音にまぎれてやがて聞こえなくなった。

その間、身を起こして必死に土を吐き出している巧を眺めて瞳子はある事を考えていた。

「ねえ巧。」

「……なに？」

呼びかけに、巧は口元を拭って応えた。

「さつきあいつらが来た時、校門に来てた時は由里ちゃんと一緒にいたよね。それがなんでいきなりそんな急展開になってるワケ？」  
「それは……」

巧が言い淀んでいるうちに瞳子は次の疑問をぶつけた。

「あと今さつき巧の横にいたやつ。あれもフアイズとかと同じヤツだよ。もしかしてあれが「デルギター」ってやつ？」

「「デルタギア」、だと思うけど……」

巧は、細かい間違いは逃さなかった。

「……でも、正直、僕も突然由里ちゃんに ああ言われてよく分かんないんだ。なんでこうなったのか……」

「うーん」

言われ、瞳子は腕を組んで考え込んだ。

「……とにかくさ。由里ちゃんに あたしからも聞いてみる。で、巧もその間、近くに隠れててよ。」

「え？ ……でも」

またも逡巡する巧の背中に瞳子は遠慮なく張り手を喰らわせた。

「っ！？」

「ゴチャゴチャ言わない！ 由里ちゃんがハナシしにくいかもしれないから巧には隠れてもらうとして、本当に危なくなったら巧がいてくれないと大変でしょ！？ ただでさえ今、オルフェノクとフアンガイアの他にも厄介なのがいるんだから！」

「は？」

「いーから早くッ！」

とうとうしびれを切らして吼えた瞳子に尻を蹴飛ばされ、巧はようやく立ち上がった。

きい。きい。

金属同士のこすれる小さな音が、膝の動作につれて控えめに鳴り響く。

由里は一人、ブランコに腰掛けて物思いに耽りながら椅子を繋ぐチ

エーンを揺らしていた。

ここは商店街の裏手に広がる公園。

夕方の買い物の喧噪からは建物ひとつ分隔てられているが、買い物中の母親を待っているのか子供たちが大勢遊んでいた。

駆け回る子供たちを見るともなしに眺めながら、由里は巧と別れてから同じことをずっと考えていた。

「お姉ちゃん。」

そこに、小さい男児が話しかけてきた。

「ん？ なあに？」

「ブランコかして。ずっとすわってたから、もういいでしょ？」

この年頃特有の物怖じしない物言いに、ふと微笑ましさを感じて由里は表情を緩めた。

「うん。いいよ。はいどうぞ」

「ありがとう！」

立ち上がった由里がそこを離れるよりも早く、由里の後ろに潜り込むようにしてブランコに駆け込んだ男児は、喜色満面で椅子に腰掛け身体を揺らし始めた。

男児が待ちかねていた様子が見受けられ、由里はまた頬を緩めた。が、すぐにその表情は曇ってしまう。

離れた所にあるベンチに腰を下ろし、また思索に沈み込む。

「由里ちゃん！」

そこに、瞳子が駆け込んできた。

「良かった！無事だった」

「……瞳子ちゃん？」

どれほどの距離を走ってきたのか、息を切らせながら瞳子は無遠慮に由里の隣に座り込んだ。

「どうしたの？そんなに慌てて。」

「そりゃこっちの台詞だっつーの」

取り出したハンカチで頬と額の汗を拭い、ぱたぱたを顔を扇いで瞳子は言った。

「昼に理事長先生からファンガイアのこと聞いたばっかだったのにさ、肝心の巧と一緒にいないなんて危ないじゃん？ 巧のバカなにかやらかしたの？」

「……ううん。」

再び由里は前を向き、うつむいてしまう。

「巧はなにも悪くない。」

「は？ じゃあ」

「悪いのは私。なにもしなかった私のほう。」

「え……？」

思いがけない返答に、瞳子は面食らって言葉を失った。

「なにそれ。どういうこと？」

思わず返した問いに、由里は逡巡し、しばらく躊躇っていた様子だったが、やがてゆっくりと口を開いた。

「……放課後、校門のところに行く前に、生徒会長のところに行つたの。……ほら。初めて巧の正体がばれた時、巧のことがばつてくれたでしょ？ それで、巧が会長と話がしたいって言って」

それは瞳子には初耳だった。

生徒会長なのに大胆なことをする人だなあとあの当時は思っていたが。

だがそれで巧は会長に何をアテにしたのだろうか。

「その時ね、会長のした話がとても重くって、巧に対しての話だと思っただけど、隣にいる私にも言ってるみたいに聞こえたの。」

「はあ？あのむつつり、ナニ吹き込んだの！？」

「……」

瞳子の生徒会長に対する辛辣な偏見に反応もせず、由里はまた迷うようにしばし口を噤み。

「……オルフェノクに抵抗できない弱い人間は、自分から戦う事を放棄した浅ましい人間だ、って。」

「は？」

由里が会長の発言内容をかいつまんで話したことは理解しているが、

それにしても瞳子にとって突拍子もない意見だった。

「巧が守るって言うてくれるから、って私も「巧がそうしたいなら」って受け入れていたけど、でもその話を聞いて私、私も無意識に「自分は戦わなくていい」だなんて思っていたんじゃないかって思ったら、……もう、申し訳なくて、巧の隣になんて……いられないって思ってた……」

どこに向かう感情なのか、途中から涙が混じり、声を震わせ言葉を詰まらせてしまう。

しばし隣の嗚咽を聞きながら、瞳子はまた頭脳に不慣れな労働を行使させていた。

「……えーと。それって、なにか不都合があるワケ？」

両の人差し指を左右のこめかみに突き立て、瞳子は必死に言葉を組み立てた。

「あたし、空手やってるからたまに思うんだけど、「世界最強」とか「強さ」ってなんなのかなって時々考えるの。」

由里は、不思議そうな顔で瞳子の話を聞いている。

いや待て。あたしもナニが言いたいんだか不思議なんだから。

「上段の人も、ちょっととした偶然で格下に負けちゃうことだってあるし、そもそもどんなに鍛えたって寝込みを襲えばだいたいどうしようもないし、車と喧嘩しても勝てないし、固くて尖ったものにはだいたい弱いし、海に沈められたら溺れて死ぬし」

由里の視線が怪訝に染まってゆく。

そりゃそうでしょうよ。あたしもナニがなんだかさっぱりだ。

「つ、つまり、由里ちゃんが気兼ねなく巧の横にいられるようになるには、世界最強にならなくちゃいけないってことだね？ でもそれって、なんか破綻してない？」

……ぷっ。

由里が突然おかしそうに吹き出した。

「ええっ!?!? 嘘!?!? ここ笑うトコ!?!?」

「……っぷぷ。ゴメン、でもなんかやっぱりおかしい」

あははと笑いの止まらない様子の由里に、瞳子としても苦笑いで応えるのみだ。

しばらく笑い転げていた由里は、ようやく息を治めて向き直った。

「……うん。ありがとう。なんか、悩んでるのがばかしくなっちゃった。」

「そりやどーも。じゃあ、巧に連絡してあげてくれる？あいつ、なんか捨てられた子犬みたいになってて見てらんないったら」

「ええっ!？」

由里の喫驚の理由が分からずきよんとする瞳子としばし見つめ合っ  
つてしまう。

「……えーと。そこで、なんで「ええー」かな」

「……なんで、巧が、そんななってるの……?」

「あー……」

目だけ彼方へ逸らし、頭を掻いて思案する。

「……嫌われた〜とか思ったんじゃない?」

「あ、わ、わたし、そんな……」

「きゃああああ!？」

由里の狼狽を打ち破り、幼い悲鳴が聞こえた瞬間ふたりは立ち上がった。

見れば、公園中央にある小型の噴水の水の中から数体の人型の異形が立ち上がったのだ。

近くにいた子供らが泡を食って駆け出してゆく。

「やああつ!？ なにあれ!？」

「魔化魍、「河童」!？ あんなのまで!？」

瞳子は「音撃戦士見習いの自分」の記憶からその異形の正体を看破し駆け出した。

「由里ちゃんは逃げて! 巧! 巧ー!」

叫びながら瞳子は、片っ端から子供たちを魔化魍から離れる方向へと押し遣ってゆく。同時に、近くに控えているはずの巧に出撃を促した。



「うわあああん!？」

「ほら!逃げて!」

噴水の近くにいた子供ににじり寄った河童に飛び蹴りをかまして押し除け、子供の背を叩いて逃走を促すが、その子供は腰を抜かしたのか瞳子に押されたことでよろめき倒れてしまった。

「ああっ!？」

いくら空手を修得していても、生身の人間の業では魔化魍に対抗しきれない。

河童に二度、三度と殴られあえなく吹き飛ばされてしまう。

魔化魍は餌として人間の肉を好む。そしてより柔らかい女・子供の肉を、とりわけ子供の肉を好むものが多い。瞳子を振り払った河童は、己の餌と定めたかそこで座り込んで泣いている幼児に向かって近寄ってゆく。

「こつらあ!やめなさいよあんた!」

痛みに動かぬ身体を叱咤して、起きあがるのが困難な中 瞳子は諦めずせめて罵倒を飛ばす。

そんなことで動きを止める魔化魍ではないと知りながらも。

そこに、人影が宙返りを打って飛び込んだ。

河童の前に立ちはだかったのは、灰色の人型の異形、体中から鋭利な突起を幾重にも生やし獰猛な狼のような生態相を持ったオルフェノクだった。

「巧!」

「……巧!？」

瞳子と、まさか近くにいたとは知らなかった由里の声が重なった。左右の拳の乱打が河童を押し遣り、続く肘打ち、踵が河童を吹き飛ばした。

ウルフォルフェノクの体中に生えている突起は全て、ナイフよりも鋭い凶器だ。ウルフォルフェノクの攻撃はどこが当たっても深いダメージをもたらす。

……相手が魔化魍でなかったら今の連撃で打ち倒されただろうに。

その間に瞳子が子供を引つ張り起こして立たせ、尻を叩いて走らせた。

『神楽見さん！こいつらがその、オルフェノクでもファンガイアでもない奴ら！？』

「そう！ だけど魔化魍はファイズの武器じゃ倒せない！とにかく子供らが逃げるまで時間を稼いで！ …… 由里ちゃん！」

早口でまくし立てながら瞳子は携帯電話を素早く操作してそのまま由里に向かって放り投げた。

「その出てる番号に電話して！ 出たヤツに「まかもーがでたー」って叫んでここの住所を教えて！」

「えっ！？ ええっ！？」

泡を食いながらも由里は飛んできた携帯電話を慌てて受け取った。

「巧っ！ とにかくあの河童どもを片っ端からぼてくりこかして！

時間を稼ぐの！」

『分かった！ ……で、誰を呼んだの？透さん？』

「……あ。忘れてた。」

『は！？』

言いながら、瞳子とウルフェノクはそれぞれ噴水から這い出してあちこちへと歩き出した河童に追いつき、蹴り倒してゆく。それはまるでタチの悪いモグラ叩きだ。

噴水を中心にあちこちへと歩いてゆく河童を駆け回っては蹴倒さねばならない。

魔化魍は通常の打撃でもある程度までダメージを与えられるが、完全に滅ぼすにはやはり『音撃』が不可欠だ。蹴倒した河童もしばらくすると起きあがってしまう。

だが、ないものねだりをしていても仕方のないこと。瞳子とウルフェノクは起き上がる端から河童どもを蹴り倒して回った。

だが、倒れては起き上がる河童の配置はじわじわと公園の外周へと広がってゆく。このまま河童が散開を続け各個体の距離が開けばそれだけ回復までの時間を与えてしまい、いずれ取り逃がしてしまう。

そしてオルフェノクたる巧はともかく、ただの人間に過ぎない瞳子の持久力は既に尽きかけていた。

「……はあつ。はあつ。……ああつ!?」

「神楽見さん!?」

河童の間を駆け回っていた瞳子がとうとう息を切らせて倒れ込んでしまった。

「……ッ!」

それを好機と見る知恵まであったのかどうかは分からない。

だがそれとほぼ同時に別方面を歩いていた河童がウルフェノク目掛けて何かを口から吐きつけた。

「わっ!?」

足首に重い衝撃を感じてたたらを踏む巧。

バランスを崩した体勢を支えようと、出そうとした片足が動かないのに気付いた時にはウルフェノクはそのまま転倒してしまっ

た。

「な、なに?」

見れば、ウルフェノクの両足首に透明な粘液がへばり付き、

見る見る内に凝固して地面に固着させてしまった。

妨害工作をしていた二人が動けなくなったことで、河童らはぞくぞ

くと公園から出ていこうとする。

「くっ!? このっ」

足を引っ張るが、どうにもこの不思議な粘液は取れそうにない。

「やああああ!?」

「きゃああ!?」

公園の外から、河童の異様を目撃した人々の悲鳴があがる。最悪なことに、とうとう一匹の河童が逃げ遅れた子供に襲いかかるうとしていた。

「……ちよつ、巧、あれ……」

「分かつてる!けど!?!」

巧は必死にもがくが、足の拘束は外れない。

そこに、由里が公園を駆け抜けていった。

「…………え？」

『由里ちゃん！？ だめだ！』

由里が向かう先は、今しも河童に捕まえられそうになっている子供。瞳子にも巧にも知る由のないことだが、それは由里が先刻ブランコを譲った男児だった。

「…………！」

由里は、走ってきた勢いそのまま河童に体当たりし、どうにか魔化魍を子供から引き離した。

「立って！逃げて！」

泣きじゃくる子供の手を取り引つ張るが、狂乱した子供はいやいやと頭を振り立ち上がるうとしない。

「お願い！？ 立って！？」

「由里ちゃん！」

『くっそお！』

その様子を見、瞳子も巧も絶叫するしかない。河童は、あっけなく体勢を立て直し由里の背後に迫っている。

そこへ、重い音を立てて何者かが駆け寄り、由里に迫る河童を彼方へと殴り飛ばした。

「…………え？」

恐る恐る由里が見上げたそこにいたものは、人型に組み上げられた機械。まさしくロボットが立っていた。

「…………なにあれ。」

『僕のバイクだ！』

瞳子の怪訝声に巧が答える。

その人型の機械、ファイズギアの拡張装置オートバジンは、左腕に装着した前輪を盾のようにかざしてウルフォルフェノクに向けるとそれを高速回転させ、あるうことかその前輪の側面の孔から無数の弾丸を発射してきた。

「うわわわわわわわわ！？」

キユド、チユン、チユインと巧の周囲で弾丸が跳ね回り、やがて巧の足首を拘束する粘液を粉々に打ち砕いた。

やがて弾丸の雨がやみ、頭を抱えて伏せていた瞳子とウルフオルフエノクは恐る恐る辺りを見上げた。

「……な、なんなのあいつ!?」

「いや、悪いやつじゃないんだけど、いまいち気が利かないっていうか……」

解放された足を打ち払い立ち上がった巧は、子供を抱えてうずくまる由里の元へと駆け寄った。

『由里ちゃん。ケガはない?』

「……うん。」

子供を逃がし、立ち上がった由里も巧に向き直った。

『あの子は助かったけど、無茶し過ぎだよ』

「……でも……」

由里は、わずかに言い淀んでから、やがてはつきりと告げた。

「でも、ああいうのに敵わないからって、抵抗すること何もかも諦めるのはおかしいって思ったし、巧みたいに力がなくなっても、できることを、したかったの。」

『……もしかして、それ、生徒会長の話……』

「……うん。」

おずおずと、影の中のヴィジョンから問いかけた巧の言葉に、由里はうなずいた。

『でも、危ないよ。由里ちゃんだって、死んじゃうかもしれないんだよ!?!』

「それは!巧だって同じでしょ!?!」

突然の絶叫にウルフオルフエノクの巨体がたじろいだ。

「噂でしか知らないけど、不可解な事件が起きる度にオルフエノクをやっつけていたのだから巧でしょ!?! いくらフェイスでも、絶対負けないとも限らないじゃない! それなのに、私、何も知らなくって。それで、もし巧が私の知らないところで負けちゃったり

したら、私、何も知らないまま巧を失ったら、私……！？」  
叫ぶ中、涙を浮かべた由里はやがて言葉を詰まらせて口元を押さえ、  
嗚咽を漏らし出す。

『……由里ちゃん……』

「……お願い巧。私にも手伝わせて。私、巧の重荷になりたくないの。」

『……え……？』

由里の、思いも寄らない唐突な願いに巧は狼狽えた。

『いや、それは……』

「それに、巧の様子がおかしくなったのって、土さんがラッキークローバーをやつつけたあの日からだったし。みんなが何か色々言い出したから、巧の中で自分の目的が分からなくなっちゃったんでしょ？違う？」

『……あ……』

由里の指摘には、心当たりがあった。

もともと由里を守るのが目的なのには違いはないが、正体がばれたあの日から、その目的は強迫観念となって巧の精神を蝕んだ。

他人の言うことを聞くまいと頑なになり、由里ひとりに依存することとで自己を守ろうとしていたのだ。

そして草壁の話聞くことで自縄自縛に陥り、由里を戸惑わせ、あげく廃人になりかけた。

「だから私、巧の負担を減らしたくって、でも、今のままじゃ巧に申し訳なくって、巧が傷付くのも分らないで、あんなこと言っちゃって、ゴメン。でも、これからは私もできることを手伝うから！巧ひとりで背負い込まないで」

『それは違う！』

由里の言葉を、今度は巧が遮った。

『ようやく思い出したんだ！僕は由里ちゃんを、由里ちゃんの写す世界を守りたい。ただそれだけだったんだ。他人にどうこう言われても自分の都合を貫き通す強さが僕になかったから翻弄されち

やってただけで。それに、草壁先輩の考えは、部分的にうなずける所もあつたけど、おかしい点もあるよ。鵜呑みにしちゃいけないと思う。危ないオルフェノクに敵わないと思つたら、逃げなきゃ。じゃないと、由里ちゃんの夢が果たせなくなるでしょ？ 逃げるのは悪いことでもなんでもない。自分の夢を叶える為に必要な行動だよ！』

一気にまくし立てるウルフルフェノクの顔を、由里は呆然と見上げる。

『オルフェノクになった人たちも、人を越えた力を持つたら、それを使うか使わないかの二択に捕らわれる。おかしいよね。必要なのは、自分は自分だ。ってちゃんと自分を持つことだと思う。僕もファイズギアを持って、同じ思いに捕らわれていたのかもしれない。そして思いついたら化け物になってしまふ。それだけは避けなくちゃいけない。だから、僕はファイズギアがなくても、もしオルフェノクの力をなくしても同じように由里ちゃんを守る。そういうふうに心掛ける。そしてファイズギアを使つていても、絶対に自分が強くなつただなんて思いつかない。誰かを救う、だなんて考えは驕りだと思つから。僕はただ、由里ちゃんの夢を守りたいんだ。そうしていつか、由里ちゃんが夢を叶えてくれるのが僕の夢だ。』

「……………たくみ……………」

由里も瞳子も、これほどに何かを熱く語る巧を見るのは初めてだった。

見かけは灰色の獯猛そうな異形の姿なのに、語る仕草は非常に人間臭く、まさしく巧は巧なのだと思わせる。

『だから由里ちゃん。僕を手伝うだなんて言わないで。「由里ちゃんを手伝う僕を由里ちゃんが手伝う」ってなんだかワケ分かんないし。それにあくまで僕の夢なんだから、重荷だなんてことは在り得ないよ。もう、僕は大丈夫だから。』

「……………うん……………」

由里は口元を押さえ、しきりにうなずいて見せた。

目元に涙を溜めて。

「……………うん、うん……………」

向かい合う二人の様子を眺め、瞳子もようやく安堵の溜め息をついた。

瞳子はこの二人のストーカーなのだ。その二人が平穩でいてくれないと瞳子としても気が気ではないのだ。

> i 7 2 4 4 — 5 3 8 <

そこへ、瞳子の後ろから何かかけたたましい音を立てて転がり込んできた。

慌てて振り向いたそこに見たものは、散々蹴られたのか足跡だらけで昏倒している一体の河童と、公園の入り口に立つ学ラン集団の姿別の公園入り口にも、同様に何体もの河童を簞巻きにして担ぎ上げている流星塾の塾生たちが集まっていた。

『おうおう兄ちゃん。ええスケ連れとるやないけワレ。』

さらに別方面からかけられた声を振り向けば、公園の端に建てられていた石碑の上に、黒地のスーツにイエローのラインを描かれた装甲服・カイザが片足を一段高い所に載せたガラの悪いポーズで立ってこちらを見下ろしていた。

『オマエラがイチャイチャしとる間に妖怪どもはだいたい締め上げたぞ。』

『べ、べつにいちやいちゃしてなんか……………!?!?』

ウルフォルフェノクが狼狽えてそれに言い返す。

『おーおー可愛いねえ』

「……………お願い瞳子ちゃんやめて……………」

その様子を見てニヤニヤしている瞳子を由里が気まずげに窺めた。瞳子にはまるで聞こえた様子がなかったが。

『さあて。どっかの青春ド真ん中な破廉恥野郎は放つといて、わたしはこの妖怪どもを究極奥義でしばいておこうかのう』

『だから違つって……………』



公園の中に集めてきた簀巻きの河童を並べて転がし、首をひねって拳を鳴らしながらカイザがその数体の河童の前までやって来た。

「どうやら、ファイズは復調したようだな。」

「うおわ!? 透!？」

そこに突然、この場にいる全ての人間の死角から透が現れた。

「って、あんたどこほつつき歩いていたのよ!？」

「一步も歩いてはいない。ファイズとの接続が断絶したので、魔化魍・バケガニが出現した丘陵地でフリーズしていた。」

「またかいっ!？」

容赦ない裏張り手が透の胸板を叩いた。

「だが、原因は不明だがファイズのライドカードの接続が復帰した。これで調査を続行できる。」

やはり透はツツコミを無視してしゃべり続ける。

「……この数時間のあたしらの苦労を原因不明とか言って流すな。」

「問題ない。それより。」

怒りで白眼比率を上昇させた瞳子をさらに無視して、透はこの公園の一角を指さした。

「お誂え向きに、異世界の脅威が現れたようだ。」

「へ?」

示された方を見遣れば、今まさに銀の帳とほりが数体の人影を残して掻き消える所であった。

現れたのは、凶々しい気配を発散してこちらを睨みつける背の高い痩身の男と、背後に並ぶ数体のファンガイア。

男の、丸眼鏡の下の瞳が不自然に青白く輝きを放っていることこそいつもはや常人でないと知れる。

「あれ? あいつ……」

瞳子はその男に見覚えがあった。

それは「ヴァイオリニストの瞳子」の記憶で見た姿。 斬鬼と威吹鬼をキング・渡らと引き合わせた際に居城キャッスルドランの牢獄で見せられた魔化魍の育ての親、捕らわれの「童子」に酷似してい

ただ。

「瞳子。あれは魔化魍ではないぞ。」

「へ？」

透が、読みとつた思考を指摘してきた。

「覚えていないか。渡は、ファンガイアのナンバー3「ビシヨップ」と「童子」が瓜二つだと言っていた。」

「じゃあ!? あれ……」

『ほう。あれが「悪魔の影法師」なんだな?』

こちらを睨め付けていた丸眼鏡の男は、やおら屈み込むと足元から崩折れていた何者かの胸倉を掴み上げてその者に囁いた。

「……」

喉元を締め上げられ苦悶に身を擦らせたのは、満身創痍となった震フルルであつた。

安全ピンを大量に刺した白衣も赤のビジネススーツもボロボロに煤けており、傷だらけの震は朦朧とし問いかけにも満足に反応できない有様であつた。

> i7245—538<

『ふん。間違いないようだな。』

返答がないにも関わらず確信を得た様子の丸眼鏡の男は、無造作に震を投げ捨てると屈めていた姿勢を垂直に戻した。

『「悪魔の影法師」。「ワールドスライダー」。いかに名乗ろうともどうでも良い。この世界は我らファンガイアの領地となる。ありがたく思え』

その瘦身の男は敵かにそう告げるとゆつたりと片手を振り上げた。

それと同時に突如地面が鳴動し、公園の敷地の半分ほどを抉り、遊具を吹き飛ばして地中から巨大な「何か」が浮上してきた。

「うわあああああ!？」

「おわー!? なんんじゃありゃあああ!？」

慌てて逃げ惑う流星塾生たち。

回りの混乱などまるで無視し微塵の動揺も見せずに立っている透の

横で、その巨大な影を見上げた瞳子はそれを「でっかいシャンドリアみたいだ」と思った。

ただし、シャンドリアは支えもなしに浮遊したり無数の触手を蠢かせたりはしないものだが。

track・47 ファイズの世界（後書き）

かなり時間が掛かりました。今回は日常に忙殺されて小説に手が回らなかったのではなく、真剣にキャラの事を考えに考えてじっくり時間を掛けました。

いや、キャラと一緒に頑張って必死に検討を重ねたのですよ。

いずれ誰かが納得の上で異世界に救助に行ってもらわねばならないので「世界平和の守護者」としての本分を持たせるにはどうしたらいいかと悩みに悩んでいたら、そもそも尾上 巧の行動原理は「由里を守る」ことだけで他のことなんか八ナっから眼中にないってのに（由里ひとりに拒絶されただけでファイズギアを捨ててましたし）、そりゃあムリだとようやく気付いた次第で。

芦河 翔一や葵 遙らと違って自分から戦いをふっかける理由がないと思うんですよタクミには。

まあでも、いまいち芯がしっかり立っていないなかったので、巧には自分が困って立つ信念を再確認してもらいました。

異世界の救助に誰が行くかは……あとで考えます。

こんこん、とドアをノックする音が鳴る。

だがこの理事長室の主たる騎端の応答も待たずにそのドアは開かれ、三人の男女が無遠慮に入ってきた。

一様にビジネススーツを着こなした彼らを、騎端は薄い笑みを浮かべて立ち上がり出迎える。

「これはこれは。「イルラッククローバー」がお揃いで。……霧

崎くんは具合でも悪いですか？」

「悪魔の影法師にいじめられた」って泣いてましたよ。いい気味ですネー」

本来は四人一組であろうという揶揄を込めた騎端の挨拶に、右側に控えていた男がハードカバーの文庫を持った手でフレームレスの眼鏡のブリッジを押し上げ嘲笑するように応えた。奇妙なイントネーションでくすくすと笑っている。

「宅間くん？悪い趣味。」

「ゴメンなさい冴子さん」

艶っぽい笑みで眼鏡の男・宅間を窘めたこの場で唯一の女性・冴子は騎端に巨大な一升瓶を差し出した。

「騎端クンにこれ。おみやげ。」

「ああ。すみませんねえ。私は日本酒は飲らないんですよ。」

「あら残念。」

騎端の白々しい遠慮に、冴子も笑みを浮かべたまま瓶を引き下げた。何しろ冴子から酒を受け取った者にはろくな事が起こらないと評判だ。

全ては高い実力を持ちながら「イルラッククローバー」への勧誘を蹴ったことへの当てつけに過ぎない。

この四人で戦えば誰一人ただでは済まないことは全員が理解している。

だからこれは茶番。

「……で。スマートブレイン代表取締役社長が御自らいったい何の御用でしょう?」

「言うまでもなく用件は一つしかありません。」

騎端の問いに、中央の男はにべもなく簡潔に告げた。

「「天のベルト」を出しなさい。」

「ほう。」

「謎の脅威はどうやら複数種類存在している模様です。これは十段階中十を遙かに越える由々しき事態。全力で收拾に当たります。」  
「スマートブレイン社長・浦上 峽児つらかみ・きやうじと言えばTVのビジネス番組にも出演し独特の口調と辛辣な十段階評価が何かと特徴的な企業人としても有名である。」

「……現在、他のギアで稼働実験している学生がいますが?」

「子供の遊びは、子供同士でやっていればいいデスネ。」

騎端の質問には宅間が嘲りの色を込めて応えた。

続いて浦上が口を開く。

「正直、ここで「ラッキークローバー」などと自称していた生徒の能力ですらアテにはしていません。十段階中一以下です。お話になりません。」

「子供のおアソビで介入できることでもありません。稼働実験はそのまま続けてくだサレバいいでショウ。」

「それでは、保管庫から借りていきますよ。」

言うだけ言って三人はとつとと部屋を出て行ってしまった。

彼らは、一応の管理者である騎端に断りを入れに来ただけらしい。

それも既に分かりきっていること。

騎端は終始変わらぬ薄い笑みの中で考えていた。

(……ですが、その四人を倒してしまつた尾上くんは言うほど侮れるものではないですよ? 同族を倒した経験値は、決して安いものではない)

くつくつと、つい漏れ出た笑みの声を掌で隠し、騎端はデスクの仕

事に戻っていった。

アンテイクシャンデリアと蛇竜を掛け合わせたかのような異形、一部の強力なファンガイアのみが生成できる、オーラとライフエナジーによって構成された巨大モンスター「サバト」が商店街の上空に現れた。

四方に爬虫類のドクロのような首を突き出しており、どこが正面なのか判然としない。

だがそんなことはどうでもいいこと。

それが吐き出す火球が辺りに降り注ぎ深刻な被害を撒き散らしている。

「透！？ 早くアレなんとかして！？」

「分かっている。変身」

《カメンライドウ・デイ・デイレイド！》

瞳子に急かされるまでもなく、デイレイドライダーにカードを挿し入れ抜刀の動作でスライドカバーを閉塞した透の姿はドット柄のノイズに包まれ無数のヴィジョンが殺到しグレーのボディスーツへと変移した。

そして彼方から飛来したライドピラーを前後左右から頭部に納めスーツの各部をイエローに変じて変化は終了する。

『巧。修二。あの巨大モンスターもファンガイアだ。ライダーズギアの装備で対応できる。ギアの持つ攻撃力を全て叩き込め。』

『なんじゃあ？ 見かけに寄らずちよるいモンじゃのう。』

透の解説に、カイザが拍子抜けしたような声を漏らした。

そのカイザの背後にサイドバツシャーが無人のまま自律走行で走り込んできた。

その途上でサイドカーと分離すると、展開変形して再合体し、逆間接の脚をもつ機械鳥・バトルモードとなってカイザに隣に停止する。カイザは迅速に運転席に飛び乗った。

『ほんじゃあ、しこたまミサイルぶち込んだらどうかのうー！』

「そうはいかん。」

サバトを生み出した張本人、丸眼鏡の男が敵かに口を開いた。

「この女が面白い技術を持っていてな。異なる存在を掛け合わせてそれぞれの特性を同時に内包し発揮する新生命体が生み出せると言う。見せてやろう！」

叫び、男が手を振ると、上空のサバトが無数の触手を地上まで伸ばしてきた。

その触手らは身構えるデイレイドもカイザも無視して、地面に転がされていた河童を一匹残らず絡め取り釣り上げていった。

「……つて、まさか!?」

これから起こることの見当がついた瞳子が悲鳴をあげるが、触手に絡め取られた河童どもはあえなくサバトの体内へと吸い込まれていった。

『けっ！そんなモン食つても腹あ壊すだけじゃろがいつ!』

かまわずカイザはコントロールパネルを操作し、サイドバツシャーの左腕に内蔵された六連装ミサイル砲「エグザツプバスター」よりミサイルが発射された。

さらに右腕先端から四連装フォトンバルカンが光弾を撒き散らす。

それらは残らず上空のサバトにヒットし、巨体のあちこちを抉り瓦解させた。

『どっじゃあ!』

カイザが氣勢をあげ、物陰に避難していた流星塾の塾生からも喝采があがる。

だが、くすぶる煙を漏らし傾いて上空を漂うサバトは一向にその高度を落としてこない。

それどころか砕けた体組織の下から新たな表皮が覗き見えた。

「……間に合わなかったの!?」

声を震わせる瞳子の見ている先で、サバトは身を震わせると破損した体組織を振り落とし、体勢を水平に立て直してしまった。

そのサバトは、ステンドグラス様の表皮を境目ごとに盛り上げらせ



てまるで爬虫類の鱗のように皮膚を変質させ、所々に獣毛のようなものを生やし、体色が緑青ぎみに変色し、ゴシック風味な形状だった各部位に節くれ立った樹木のような組織が絡み付き、どこかジャパンホラーめいたテイストが混ざり込んだ。

まさしく「ファンガイア」と「魔化魍」の融合体、デュアルビーイングの誕生だ。

「さて。これでこの土地も少しは見晴らしが良くなるだろう。…

…おい女。次の世界へ案内しろ」

丸眼鏡の男が嘲るように言うと、再び震フルルの襟首を掴みあげた。

途端に銀の帳とばしが舞い降り、男と配下のファンガイア数体を取り込んで消え去ってしまった。

「ああ!?! 透!消えちゃったよ!?!」

『構わない。まずはあれを片づけねばならない。』

デュアルビーイングが言うのに倣い、瞳子も上空のサバトを見上げた。

デュアルビーイングは変形をより進行させており、爬虫類のドクロのようだった複数の頭部の中に、いくつか河童の首を混じらせていた。

それは火球の他に謎の粘液も吐き出すようになり、引火した粘液は焼夷弾のように着弾地点にへばり付いて燃え続ける凶悪な兵器となつて街を蹂躪した。

「あああああああつ!?! 街が!?! 透つ!?! 街が、みんながつ!?!」

『引つ込んでろ神楽見い! 効かなきゃ効くまでブチ込んだらええんじゃ!』

狂乱する瞳子の脇を、サイドバツシャー・バトルモードがモーター音を轟かせてのしのと通過していった。

「ちよつと!?! 相模原!?!」

『修二!あのデュアルビーイングは倒せなくとも弱らせることはできる!攻撃の手を緩めるな!』

「透もつ!?!」

『は！ なに又ルいこと言っとなるか！ ブチ壊すつもりで戦うに決ま  
つとろつが！』

獯猛な氣勢をあげ、カイザが操るサイドバツシャーはミサイルを撒  
き散らしながらサバトの直下へと走り去っていつてしまった。

それを見送り、瞳子はデイレイドに掴みかかった。

「あいつを煽ってどうすんのよ！？ 今のあの化け物は「音撃」じ  
やなきやどうしようもないでしょ！？」

『そうだ。そして対象が巨大過ぎて「響鬼」のカメンライドだけで  
は倒しきれないだろう。』

「なに悠長なこと言ってるのよ！？ あんた状況分かってる！？」

『ああ。』

焦る瞳子に対して透はあくまでも平静に、マイペースに告げる。

『だから、今から適切な手段を持つてくる。 それまで瞳子。 危な  
いから避難している。』

「へ？」

言われたことへの理解も待たず、瞳子の目の前からデイレイドの姿  
が消えてしまった。

「……へ？ あれ？ ちょっと！？ 透っ！？」

## アギトの世界

どんだんぱふぱふ！

「ふれー！ふれー！はるかさんっ！」

だぶだぶの郵便局員の制服を着た瞳子が各種楽器を打ち鳴らし、顔  
を真っ赤にして絶叫している。

その先の林の中では様々な異形の者たちが大勢で入り乱れて戦って  
いた。

『こらー！嬢ちゃん、危ねえって！』

その乱戦の最中、一体のファンガイアを蹴倒した仮面ライダー ア

ギトが振り向いて瞳子を怒鳴りつけた。

『いいからどつか行ってる!』

「芦河さんのことなんか応援してませんっ!」

『ンなおう!?』

言い合いながらもアギトは振り下ろされてきたアンノウンの棍棒を上体のみ振ってかわし、一瞬で気を練り上げクロスホーンを展開させるとそのアンノウンの腹へ前蹴りを見舞った。

そいつは数歩後退りたちまち爆砕して消えてしまう。

今この林の中ではアンノウンとファンガイア、そして翔一率いるアギトと複数のギルスによる「未確認生命体対策班」と異世界より救援に来たウィブとの混成部隊が入り乱れて戦っていた。

こここのところのいつものパターンではある。

人間のライフエナジーを喰らいに来たファンガイアから人類を守護する為にアンノウンが現れ、両者の出現を察知した翔一と遥が横槍を入れる。

『ったく、どいつもこいつも懲りねえなあ!?!』

『ぼやいてないで働きなさいよ』

乱戦の渦中をくぐり抜け、合流したアギトとウィブが背中合わせに身構えた。

『そこはホレ、お前が一言「ガンバツテ」って可愛らしくだなあ』

『懲りてないのは あんたの方じゃないの!?! わたしに色目使う度に八代に折檻されてんのにまだ言う!?!』

『おい、遥。』

そこに ぬっ、と横からディレイドが顔を出した。

『うわあなによいきなり!?!』

『おお!透!ちょうど良かった手伝ってくれ!』

戦況は五分五分。ここでディレイドの力が加われば一気にたたみかけることができる。

だが翔一の目論見を無視してディレイドはウィブの肩を掴んだ。

『え?なに?』

『手伝え。』

『は？』

『おい！？ 透おまえなに言ってる』

『数分で戻る。持ちこたえろ。』

『って待てコラ！』

アギトが追いつがるも、ウィブの肩をがっちり掴んだディレイドはカレイドブレイドで虚空を斬り裂くとウィブ共々さっさと姿を消してしまった。

突然のことに呆気に取られて動きを止めていたファンガイアたちの、気配と目つきが色を変えた。

『……な、なんてことしやがんだあのやるおおおおおッ！？』

## ファイズの世界

由里の手を引いて走る巧は頑丈そうなビルの陰まで回り込むと、この路地に由里を押し込んだ。

巧は既に人の姿に戻っている。

辺りは巨大モンスターの出現と暴虐に泡を食って逃げ惑う人々で大騒ぎになっている。

「由里ちゃんはどこにいて！ いや、できるだけ遠くに逃げて！ こもじきに危なくなるかも！」

「ちよつと！？ 巧はどうするの！？」

肩を押さえた手を掴み返し、由里は言い募った。

「一緒に逃げればいいじゃない！ 巧、まさか……」

巧の手を取って揺さぶるが、巧は彼方に浮遊する巨大モンスターをじっと睨み付けている。

それは、由里も見たことがない表情だった。

怒りではあるが、憎しみといったあの暗い感情ではなく、どこか凜

とした勇ましい表情。

由里はついその巧の横顔に見惚れてしまった。

「……危ないのは分かってる。由里ちゃんさえ無事ならそれでいいし、このまま透さんたちに任せて帰ってもいいのかもしれない。」  
彼方を見上げたまま、巧は静かに語り出した。

「でも、なんでだろう、僕は、あれを野放しにするのが凄いイヤだ。」  
視線の先にあるであろう巨大モンスターを睨み据えたまま、静謐かつ凄烈な怒りをたぎらせる。

それは、相模原とかいう男とも、先ほど現れた丸眼鏡の男のものとも違った強い感情。

「……うん。そうだ。僕らの世界を、あんなふうにメチャクチャにされるのは、「僕が」我慢ならない。」

己の思いを確認するように、一言ずつ区切って告げる。

そして巧は、由里を振り向いた。

その真っ直ぐな眼光に、まるで射抜かれたかのように由里の心臓が跳ねた。

「……え？」

「ちよつと行ってくる。大丈夫。すぐ戻るから。」

ごう、と巧の背後に突風が逆巻いた。

やがてそこに、上から先ほどのロボットが舞い降りてくる。

そのロボットは、巧に向かってその手のベルト、ファイズギアを突き出した。

巧はそれを受け取るとその場から駆け出してゆく。

「……たくみっ!？」

咄嗟に由里は巧の名を呼んだ。

なぜ巧を呼んだのか、呼んでどうするのかまでは考えていなかったが、それ以上は逡巡の末、やがて唇をきつく引き結んだ。

そのあとをのしのと駆けてゆくロボットと巧の後ろ姿を、由里は黙って見送っていた。

自分でもどうしたのか分からない。

だが、自分の気持ちを再確認してからこの僅かな時間に巧の中で強い情動が溢れてきたのだ。

あの巨大モンスターが現れてから、巧は最優先で由里を避難させていた。そこまではごく普通の行動だった。

だが、巧の足は暴虐にさらされた地から遠ざかることを嫌がった。その時、胸の内にたぎる情動の正体がはつきりした。

自分は由里を守りたい。由里の夢を守りたい。

それは、由里が属する世界を守ることとも同義であると。

（由里ちゃんの生きる世界を穢す奴は絶対に許さない！）

ああそうだ。これは由里の為だけではない。

他にもない巧自身がその暴虐を嫌悪する。

そんな下らないもので由里の道を穢すなど巧自身が激怒している。

人気のなくなつた交差点に立ち止まり、巧は勢いを付けてベルトを腰に巻き付けた。

そして取り出した携帯電話・ファイズフォンにコードを入力し、エンターキーを押し込んだ。

《スタンディングバイ。》

「……変身！」

握りしめたファイズフォンを高々と差し上げ、垂直に振り下ろしてベルトバックルのコネクタに接合し、左に九十度押し倒す。

《コンプリート。》

空手の構えのように両拳を脇で引き締め、血のように赤いフォトンストリームに包まれてファイズへと変身する。

続いてファイズはファイズフォンを引き抜き、展開してキーを押し込んでゆく。

3。8。2。1。エンター。

《ジェットスライガー・カム・クローザー。》

ファイズギアの全ての装備の存在を巧は既に知っていた。ギア装着

時に内部の情報を閲覧できるからだ。

巧はそれらを「用がない」としてこれまで使用しようとは思わなかった。

だが、今こそあの最も危険な装備を使う時。巧は一切躊躇しなかった。

やがて爆音を轟かせて車輪を付けたミサイルのような獰猛なビークル・ジェットスライガーが自律走行でファイズの傍らまでやって来た。

それに飛び乗ると、二対の「」のような形状の操縦桿を握り締める。

『……行くよ。バジン。』

傍らの相棒に呟き、ファイズはジェットスライガーのスロットルを解放した。

『おりやおりやおりやあああああ！』

迅速に駆け回り、上空の変異サバト目掛けてミサイルを、光弾を撒き散らすサイドバツシャー。

サバトは浮遊はできてもその動きはまさに鈍重。攻撃は残らずヒットした。

……一向に効いた様子を見せないが。

しかもこちらを全く気にしていない。サイドバツシャーが回避行動を取っているのは、たまたま火球が飛んでくるからに過ぎない。

サイドバツシャーのコントロールパネルが残弾が残り少ないことを表示した。

『ふん。このままじゃどつちにしろラチが開かん。……どうれ』

マスクの下で舌なめずりするとカイザは近くの電柱にサイドバツシャーを寄せた。そして運転席から跳躍し、カイザブレイガンのブレードで電線を切断すると、再びサイドバツシャーにまたがり、機械のアームで垂れた電線を掴み、ぶちぶちと引きたくり寄せた。

夕刻の街並みのそこかしこで灯りが消えるが、カイザはお構いなし

だ。

『せええの!』

カイザ自身はレバーを操作するだけだというのに大仰に気合いを入れる。

やがて精密な操作を受けたアームが、握った電線を振り回し始め、次第に回転速度を上げてゆく。

『そおおりやああああ!』

どんぴしゃのタイミングで投げ放たれた電線は狙い変わらず上空のサバトへと飛翔し、その脇を大きく通過すると、その起伏の激しい突起に引っかかり、数回転してサバトの身体に巻き付いた。

『さああ、こつちの土俵に降りてこんかいいいいい!』

拘束が成功するや否や、カイザはスロットルを全開にしてワイヤーを力一杯引っ張った。

サイドバツシャーが後退するにつれ高度を下げてくるサバト。いったいどういうカラクリで浮いているのかは知らないが、ミサイルは効かなくとも力押しは通じるらしい。

それが分かっただけでも収穫だ。

『さあ来い!ジカにドツいちやる。……ん?』

そこへ、近くの交差点からジェットスライガーが車輪を傾けてこの路地に横滑りに飛び込んできた。

そのビークルの形状からカイザはまたデルタが現れたのかと警戒したが、迫る運転席にファイズの姿を認めて警戒を解く。

『おう、尾上! ちょお手伝え! こいつミサイル効かんから、とりあえず引き摺り下ろすんじゃ!』

『、分かった!』

サイドバツシャーに並んだジェットスライガーが再び車輪を傾けて迅速に尾部をサバトに向けると、ファイズはモニターのタッチパネルを次々と操作し、車体後部からサバトめがけてアンカーワイヤーを射出した。

アンカーはサバトの身体に突き刺さり、その巨体を縫い止める。



『おりゃあああ引けええええ！』

カイザは氣勢を上げ、ファイズは黙ってスロツトルを解放する。二台の強力なビークルのパワーに、サバトもようやく民家の屋根程まで降下してきた。

その頃にはようやく自身の身に何が起こっているのかを理解したか、サバトの数本の首がこちらを向き、火球を、粘液を吐き出してきた。狙いがまるでなっていない為こちらをかすめるばかりで当たりはしないが、稀に命中しそうな危険弾は間に割り込んだオートバジンがバスターホイールによるガトリングガンを乱射し迎撃してゆく。

この弾丸が飛び交う危険な綱引きは、やがてファイズとカイザに軍配が上がりそうだった。

サバトがやがて力尽きたようにビルに、電柱に激突しながら地表に近づいてきた。

『おつしゃあ！ もうちょいじゃあ！』

『……！』

二人が改めて気合を入れた、その時。

どこからか放たれた無数の光弾がサバトに着弾した。

そのせいでサバトを拘束していたワイヤーが断ち切られてしまった。

『ああ！？』

『あつ！？』

慌てて光弾が発射された方を振り向くと、上空を巨大なバツクパツクユニットで飛翔する謎の白いギアの姿があった。

『こらああああ！なんじゃあ貴様あ！邪魔あすんじゃねえ！』

『ハ ハ ハ！ ご苦労だったネ若人諸君！』

その白いギアは、甲高い気に障る声で妙なイントネーションでしゃべり出した。

『さあ子供のオアソビはオシマイだよ！ 邪魔だから、おうちに帰ってミルクでも飲んでるといいヨ！』

『……貴様から死ぬかコラ。』

相模原の最も嫌いなタイプであろうことは想像に難くない。

だがカイザの恫喝を遮って、そこに重々しく地面を突く音が断続的に聞こえてきた。

「ハ　ハ　ハ！　キミたち若人はまだオルフェノクの世界の深さを知らない！　我々にも切り札があるんだヨ！」

やがてビルの合間を抜け、その白いギアの背後に　ぬうつと灰色の小山が現れた。

でかすぎて全容が認識しにくいのが、そいつは巨大な四足獣に見えた。  
「「エラスモテリウムオルフェノク」！　さア！我らオルフェノクの真の力を見せつけてやるがイイ！」

「……………ッッ！！！」

さながら岩山のような猛獣エラスモテリウムオルフェノクは大きく吼えると、その巨体にはやや狭い左右の建物を削りながらサバトめかけて突進してゆく。

その、進路上にいるサイドバツシャーとジェットスライガーのことが眼中に入っていないといっばい走りつぷりにファイズとカイザは慌ててそこからビークルを退避させた。

二人の脇を巨大な質量が駆け抜け、エラスモテリウムオルフェノクがサバトに激突した。

「チッ。ありやあどつちも化け物じゃのう。後始末できるんか？」

「仕方ない。援護しよう。」

カイザのぼやきを聞いて、車体を反転させるファイズ。

そこに、瞳子が慌てた様子で駆け込んだ。

「！？　神楽見さん！？　危ないよ！？」

「巧！　今すぐあの灰色のでっかいのをアイツから引き離して！　駆け寄るなり瞳子は絶叫した。

「え？なに？」

「あのシャンデリアみたいな奴、あいつは、他のモンスターを喰って、そいつと混ぜたって強くなっちゃうの！　あの灰色のでっかいのまで喰われたら……………」

「そっぴや、あいつ河童喰ってからなんかおかしくなったのう。」

『相模原君、気付いてたんならもつと早く……』

『「修二」でええ。ともあれあの灰色のをどかすか』

悪びれもせずに動き出したサイドバツシャーに倣い、若干腕に落ちないながらもファイズも車体を反転させた。

だが、変化は起きてしまった。

サバトに噛みつき角と顔面で押さえ込んでいたエラスモテリウムオルフェノクの巨体が次第に身動きを止め、皮膚の下をぼこぼここと無数の紐状のものが潜っていくのが見える。

それが全身に行き渡った時、エラスモテリウムオルフェノクの全身にヒビが入り、灰色一色だった体表が瞬く間にカラフルに変色していった。

まるでステンドグラスのように。

やがてゆっくりとこちらを振り向いた絡み合った巨体は、おぞましいことにサバトの身体がエラスモテリウムオルフェノクの頭部を丸飲みにする形で融合していた。

「……あ……うそ……」

瞳子が二歩、三歩と後退る。

「三種類も、合体しちゃった……」

> i7404 — 538 <

『ほう。トライビーイングか。』

「透っ!?!」

唐突に。

瞳子の背後からデイレイドが現れた。

デイレイドの後ろには、ウィブも立っている。

『……また異世界? あら。また瞳子だわ。』

「……はるか、さん……」

その者の名を呆然と呟く瞳子。

『ねえデイレイド。今度こそこの瞳子は「マカモー」の専門家?』

『違う。その瞳子はただの学生だ。』

『……ああそう。』

「いや、そんなこと言ってる場合じゃないよ透！？ あ、あれ、三つも合体して……」

『ふむ。いったい何があった？』

混乱する瞳子とは対照的に、言うほどに興味もなさそうに問いかける。

その問いに、ファイズと、カイザと、そして瞳子が顔を見合わせる  
と、三人が一様に上空に浮かぶ白いギアを指さした。

「『あいつが……』』

『……』

フライングアタッカーで浮遊しているサイガは、自慢の切り札の有様に呆然とし飛行用ユニットに吊られるように脱力していた様子だったが、一斉に指を差されたことに気付くと、やがて無言のまま後ろを向いてふよふよと宙を去っていった。

『……逃げた。』

『なんじゃあいつ。口だけか。』

『拳げ句、なんか事態を悪化させてったね。』

ファイズとカイザが口々にぼやいた。

そこに、パンパンと掌を打ち合わせる音が響く。

『ほらほら。アレをなんとかするんでしょ？ どーすんのディレイド。……あれ、サバトよね。わたしを呼んだってことは、この世界

にもファンガイアがいるってこと？ 翔一の世界の奴らもまだ片付いてないし、さすがに世界の掛け持ちはキツイわよ？』

『問題ない。この世界に入り込んだファンガイアは現地の仮面ライダーが対処する。お前には、あれを倒すのにだけ協力してもらいたい。』

『あらすごい。ならさっさと片付けましょ？ あつちも今大変なのよ』

言いながら、ディレイドとウィブが並んで進み出た。

「でも透、大丈夫なの？ いま、さらっと「トライビーンング」な

んて初めて聞く名前出したけど。また止まっちゃわない？」

『問題ない。』

瞳子の問いに、デイレイドはにべもなく応えた。

『六種混合までは想定内だ。今からそれを見せてやる。瞳子。スクエアフォームだ。』

「うん。わかった。」

言われた瞳子はデイレイドの背後に回り込み、後ろから抱きしめた。

『へ？あの、瞳子？』

「スクエアフォーム。」

ウィブの怪訝な声は無視してシーケンスを開始する。

瞳子の身体は黄色い光となって溶け、デイレイドのベルトと一体化しその形状をシャープなものに変化させる。

続いて全身の装甲を展開変形させ、フェイズシフトパネルを露出させて、デイレイドの発展形「スクエアフォーム」への移行を完了した。

『あー！？ と、瞳子がベルトになっちゃった！？ ちょっと、大丈夫なのそれ！？』

『大丈夫大丈夫。なんか、こういうモンだから。』

慌てふためくウィブに、デイレイドのベルトから瞳子の声が朗らかに告げるが、ウィブも、フェイズもカイザも呆然とするばかりだ。

『さあ。詳しい説明はあとだ。』

《アタックライドウ・イリユージョン！》

一同を無視してデイレイドはカードをデイレイドライバーに挿し入れると、二体に分身した。

そしてさらに掌型のバツクルフレームを左へ引いてバツクル中央のユニットを引き起こすと、それぞれ異なるカードをユニットのスリットに挿し入れバツクルを振り払うように倒した。

《カメンライドウ・ヒ・ヒビキ！》

《カメンライドウ・エ・エクリス！》

二体共にドット柄のノイズに身を包まれ、方やベルトを残して鍛え

上げられた深紫の肉体を持つ隈取りの戦士・仮面ライダー 響鬼に、方や城塞のような巨大な甲冑を纏う騎士・仮面ライダー エクリス・カイロスフォームに姿を変えた。

続いて二体のデイレイドはさらにカードを今度はデイレイドライダーに挿し入れスライドカバーを閉じた。

《デュアルカメンライドウ・カ・カブト!》

《デュアルカメンライドウ・キ・キバ!》

それぞれドット柄のノイズに包まれ変移するベルトから飛び出したパーツをキャッチし、変移が完了したバツクルにそれぞれカブトゼクターを、キバツトバツトを組み込んだ。

これにより一方は上半身をマスクドアーマーに包まれて「仮面ライダー カブトのベルトを身に付けた 仮面ライダー 響鬼」に、一方は「仮面ライダー キバのベルトを身に付けた 仮面ライダー エクリス」の姿となった。

「カブト・響鬼」のデイレイドはゼクターホーンを操作してマスクドアーマーをパージし、「キバ・エクリス」のデイレイドはベルトポーチからフエッスルを引き抜いてキバツトバツトの口元にあてがった。

『バツシャーマグナム!』

吹き鳴らされる音色と共に、オリジナルと違って武器は飛んでこないが、「キバ・エクリス」の装甲とキバツトの瞳がバツシャーエメラルドに変色した。

これで各々のライダーの特性を発揮できる。

だが、準備に許された時間はそこまでだった。

融合が落ち着いたのか、サバトと河童とエラスモテリウムオルフェノクが混じったトライビーンングが、その巨体に似合わぬ俊敏な動きでこちらに駆けてきたのだ。

即座に進路上から飛び退く二体のデイレイドとウィブ。

かわされたその巨体は対面のビルに突っ込んで身動きを止めた。

『くっ、これ以上 街を壊されたくない!』

既に壊滅状態となった商店街を見回し、ファイズはジェットスライガーを急発進させた。

『尾上い！』

カイザの叫びを後に、ファイズは構わずこちらを振り向いたトライビーングの足下に横滑りに車体を体当たりさせた。

ジェットスライガーの車輪は一見二輪のバイクに見えて実際は軸の両側に半球状のタイヤを付けた構造をしている。

その軸を傾けてやることで、ジェットスライガーは車体を正面に向けたまま水平移動を可能とする。

今、ファイズは車体の全長を活かして動こうとするトライビーングの前足を封じていた。

『うわあああああ！』

ジェットスライガーもとてつもない出力のエンジンを搭載したモンスタービークルだが、三種の強力なモンスターが融合したトライビーングのパワーを完全に押さえ込むには足りない。

出力を全開に続けたことで膨大な負荷がマシン全体にかかることになり、モニターはレッドアラートを点滅させ、車体全体にスパークが走り始めた。

オーバーヒートで異常をきたした車体が、わずかに押し除けられる。

『遙。死又程くすぐつたいぞ。』

『〜！ いいからとつととやんなさいよ！』

《ファイナルフォームライドウ・ウ・ウィブ！》

僅かに躊躇したウィブを、「カブト・響鬼」のカレイドブレイドがあっさりと透過する。

カレイドブレイドの支配下に置かれたウィブの身体は僅かに浮遊し、迅速に回転し変形、変移してゆく。

やがてそこにスパスパイダー三世を模した巨大なヴァイオリン「ウィブフルート」が現れた。

『巧！ もういい！ 離脱しろ！』

「キバ・エクリス」のディレイドが滑るような動きで駆け出した。

いつの間にか、辺り一帯の地面は透き通るエメラルドのように輝く水に覆われ、周囲は深い霧が立ち籠めていた。

「仮面ライダー キバ・バツシャーフォーム」の能力「アクアフィールド」による効果。これによりこの一帯はデイレイド以外は足を取られて動きが鈍り、デイレイドのみが自在に動き回れる優位領域となる。

『ああああっ』

とうとうあちこちに小爆発を起こして機能をダウンさせたジェットスライガーが蹴りどかされ、トライビーングが歩き出した。

だが水浸しのアクアフィールドにあつては先ほどの俊敏さはもはや発揮できない。

その間に「キバ・エクリス」は摺坐したジェットスライガーに駆け寄ると、デイレイドライバーにカードを挿し入れた。

『巧。死又程くすぐりたいぞ。』

『……へ？』

運転席で、マシントラブルの衝撃で朦朧としていたファイズの身体をカレイドブレイドが呆気なく透過した。

『いひやーーーーーっ!?!』

悲鳴を残して浮かび上がったファイズの身体が迅速に回転し変形、変移してゆく。

やがてそこに長大なビーム砲「ファイズブラスター」が現れた。

『と、透さん、これ、やるなら前もって言って』

『いま断った。』

文句を一蹴してファイズブラスターを抱え、「キバ・エクリス」のデイレイドがトライビーングの前に滑るように飛び出した。

足を封じても、トライビーングの武器を全て奪ったわけではない。いくつかのサバトの首と河童の首が蠢き、立ちほだかるデイレイドを注視すると一斉に火球を、粘液を吹き出してきた。

雨霰と飛来する焼夷弾を前に、「キバ・エクリス」のデイレイドは微動だにせずに全弾をその身に受け止めた。



燃焼する粘液が全身にへばり付き、ディレイドを火達磨にしてしま  
う。

だが、エクリスの装甲はこの程度の高熱など通しはしない。ディレ  
イドは焼夷弾を食らってもなんらダメージを負っていないかった。

そんな攻撃に構わず「キバ・エクリス」のディレイドはバツシャー  
フォームの射撃能力でファイズブラスターを構え的確に狙いを定め  
た。

トリガーを引き 続けざまに射出された無数の光弾が、僅かに角度  
を変えて飛びサバトの、河童の首を的確に打ち抜いてゆく。光弾が  
命中する度に、着弾点に爆炎と赤い「」型の光輪が瞬いた。

その脇を、ウィブフルートを肩に担いだ「カプト・響鬼」のディレ  
イドが駆け抜ける。

《クロックアップ。》

一方の手でベルト側面のスラップスイッチを叩き加速空間に突入し  
た。

相対的に身動きを止めたトライビイングの手前で跳躍し、けたた  
ましい音と共に殴打を加えながらサバトの身体を蹴って駆け登って  
ゆく。

その途上でベルトバックルからカプトゼクターを引き抜き、それを  
トライビイングの身体に押し付けた。すると、カプトゼクターは  
モンスターの身体に溶け込むようにして消え、代わって三つ巴を描  
いた巨大な光輪のヴィジョンが現れた。

スクエアフォームのデュアルカメンライドで出現した各装備は、例  
え形状が異なっても意図した機能を発揮する。今のカプトゼク  
ターは同時に音撃鼓でもあるのだ。

そしてそこからさらに跳躍し上空で手放して浮遊させたウィブフル  
ートの上に飛び乗ると、取り出したディレイドライバーにカードを  
挿し入れスライドカバーを閉じた。

《ファイナルアタックライドウ・ウ・ウィブ！》

『はああああ！』

音声の認証後、掴み取ったウィブフルートと共にトライビーイングの背に降下してゆくデイレイド。七色の分身のヴィジョンを引き連れて、響鬼のカメンライドの効果により音撃を込められたウィブフルートを三つ巴の光輪の中心に次々と叩き込んでいった。

その頃には既に「キバ・エクリス」のデイレイドもファイズブラスターを手放して浮遊させ、取り出したデイレイドライバーにカードを装填していた。

『いくぞ巧。とどめだ。』

『はい！』

《ファイナルアタックライドウ・ファ・ファイズ！》

スライドカバーを閉塞しファイズブラスターを構え直すと、デイレイドと、一体化したファイズはその強大な力を解き放った。

踏ん張った足を僅かに後退させる程の強大な光条が一瞬でトライビーイングを巻き込み、その巨体を吹き削るように迅速に崩壊させてゆく。

音撃と、高濃度のフォトンブラッドのエネルギーを浴びたオルフェノクと魔化魍とファンガイアのトライビーイングは、赤い巨大な「L」型の光輪に囲まれて爆炎を撒き散らしながら灰化し消滅していった。

## アギトの世界

『うっおおおおおおお！？』

アギトは絶叫しながら両腕両脚をぶんぶか振り回して逃げていた。その背中には、まるでハリネズミのように無数の牙のヴィジョンを突き立てており、今もなお背後を追走するファンガイアの群から放たれる牙のヴィジョンが周りをかすめ飛んでいつている。

ウィブがいなくなったおかげで勢い付いたファンガイアどもがアギト一人を追い立てているのだ。

『ちつつくしょおおおお！とおるのやつつつつつつつつつ！』  
エナジードレインは効かないが、牙が刺さるのは普通に痛い。  
悪くすれば、痛みだけでいい加減死ねそうだ。

そんな愚にもつかない事を考えてそこを走り抜けた次の瞬間。  
あとを追ってきたファンガイアの連中の顔面を、そこに割り込んだ  
巨大なウィブフルートのフルスイングが強打した。

『つぶげええっ！？』

走ってきた勢いそのまま次々と頭を打ち倒され、脚を投げ出して鉄棒  
のない逆上がりのように激しく回転して吹き飛んでゆくファンガイ  
アたち。

『待たせたな。』

ウィブフルートを振り切った姿勢のディレイドが、悪びれもせずに  
そう言った。

『透コラてめえ俺あたいがい死ぬトコだったぞ！？』

背中をぶちぶちと引き抜きながらアギトがディレイドに迫る。

『ああ。返すぞ。』

だがディレイドはにべもなくウィブフルートを放り投げるとさっさ  
と振り向いて消え去ってしまった。

『お、おい！？………つたく、相変わらずだな』

変わってそこに残された、元の姿に戻って打ちひしがれたように座  
り込むウィブに近寄って声をかける。

『おい？遙？どした。しっかりしろ』

肩を掴んで揺ると、ウィブはややあつてから ゆらりと立ち上が  
った。

立ち上がり、うつむいたまま、転倒しているファンガイアの集団を  
ゆっくりと振り向く。

その時、翔一はなんとなくそこに「ゴゴゴゴゴ」という音を聞いた  
ような気がした。

その後のウィブが取った行動は、翔一をしてビビらせる程の壮絶で  
一方的な暴虐と蹂躪であった。

## ファイズの世界

「……てワケでね。少しでもいいから、余所の世界に現れた悪いオルフエノクを倒すのを手伝って欲しいんだ。」

荒地地となり果てた元・商店街から少し離れた場所で、瞳子は巧と相模原の前で両手を合わせて嘆願の内容を説明していた。

「どうか。透の用事が済めば、すぐに終わりにできるし、二人が協力してくれるなら、もう少し短い間隔で交代してもらうこともできるんだけど」

「ふん。しゃあないのう。」

やがて、頭を掻きながら相模原が応えた。

「まあ、ここには塾長もおるし、なんとかなるじゃろ。」

「あ、ありがとう!」

「……僕も、やるよ」

「へ?」

続いて巧も承諾したことに、瞳子は少しならず驚いた。

「い、いいの!? 頼んどいてナンだけど」

「うん。」

理事長室で初めて事情を説明した時とはまるで別人のように真摯な眼差しではつきりと応える巧。

「透さんが来てから、色々と考えることがあつて。ちょっと混乱

して迷惑かけたけど、もう大丈夫だから。それに、暴虐のオルフ

エノクを放っておくのは、僕が、イヤだ。だから。」

「……ん。そっか。」

言葉の最後に見せた巧の強い意志の籠もった表情に、巧の内心の変化と覚悟に納得して瞳子は安堵のため息を吐いた。

脇で成り行きを眺めていた由里と巧が見つめ合い、互いにうなずき合う。

「ふん。交代でいいなら、わしが先に行かしてもらおうか。」

「え？」

唐突に先行を申し出た相模原に、巧が怪訝に聞き返した。

「大丈夫なの？そっち。」

「は。ナメんな。流星塾の根性は半端じゃないわい！多少は保たして見せるわ。お前はもうちよいここで自分を鍛えとけ。まだまだ危なっかしくて任せられんわ」

犬歯を剥き出して巧の心配を突っぱねてみせる相模原だが、それが巧への気遣いであることに瞳子も巧も気付いていた。

「うん。分かった。そうする。」

信頼と感謝の混じった笑顔で応じる巧。

その顔は、実に晴れやかなものだった。

カイザとデルタの変身者の要素が原作と逆になっているのはワザとです。

リイマジネーション世界の名付け方の法則に則って二人の名前を考えてみたのですが、なんとなく「草壁 雅人」のほうが生徒会長っぽいって名前な感じがして、ただそれだけの理由で入れ替えました。世界の相模原 脩二さん。ごめんなさい。

そして立場が確定すると、ギアの特徴からして「オルフェノクでない」と変身後、灰になる「なんて物騒なベルトは自然と相模原が持つしかなく、「誰でも変身できる（条件付き）」デルタギアは草壁にということに。

ファイズファンの読者様におきましては、混乱を招きまして申し訳ありません。

イルラツククローバーの「イルラツク」とは「不吉」とか「厄運」とかの意です。

もちろん「四人がそろって不運だ」という意味ではなく、「周囲に凶事を撒き散らす四ツ葉」というニュアンスです。

スマートブレインハイスクールにいたF4もどきが「ラッキークローバー」を自称していたのは、彼らにあやかっただけのことと設定しています。

さて、今回サブタイトルの形式が変わりました。デイレイドマスカ―カレイドもぼちぼち第二部に突入済みです。

何話から？という線引きは書いてる本人にもまだはつきりとしませんが、

ですが、以降こういう書き方が増えてくると思います。

今まではあまり用がなくて忘れられていた設定ですが、デイレイド

は自らの意思で世界を自在に行き来できるんですね。

話のスポットが、ひとつの世界の出来事に限らなくなってくるワケです。

と、言いつつしばらくはまだ似たような流れになると思いますが。

ではまた。

夜の臨海公園の遊歩道を照らすものは、立ち並ぶ街灯から降り注ぐ灯りのほか、路面の石畳に等間隔で埋め込まれた淡い灯りが小川のように緩やかにうねるこの小道をさながら夜空の星の川のようにぼんやりと浮かび上がらせる。

空と地上に流れる天の河以外には他に何も見えない暗闇の中を、恭也と初は手を繋いで歩いていた。

どこか透き通るような控えめな微笑を浮かべて、何を語るでもなく、互いに黙したままただ、歩く。

ゆったりとした歩調で、進むことを惜しむように、一步一步を楽しむように、同じペースで石畳を、植え込みを、暗闇に浮かびあがる光景を後ろへ、後ろへと送ってゆく。

当然、恭也が体格の小さい初の歩調に合わせているのだが、それでも一歩ずつ同じ方の足を出して進んでゆく様はまるでヴァージンロードを辿る新郎新婦を思わせた。

恭也は彼方を見つめ、初は僅かに俯いて歩いているため、初の微かに赤らんだ顔は見られずに済んでいた。

でも、互いが何を想像し、何を感じているかなんて、ふたりにはもうだいたい分かっていた。

だから恭也は敢えてからかいも気遣いもしなかったし、初も自ら何かを伝えたりはしなかった。

これまでと同じ。共に歩き、互いに互いを想い遣り、前から巡ってくる景色を後へと送ってゆくことの繰り返し。

穏やかな灯りの届く範囲の向こうから、緩やかにうねった小道が右に、左にと身をくねらせながら現れる。

それがどこまで続いているかなんて、二人は考えもしていなかった。望むことは、ただひとつの同じ事。

(このまま、今がずっと続けばいい。)



いずれ　　が来ることなんて、そんなこと、理性では分かっていた。ただ、今はそれを意識から締め出していた。特に今だけは必要のないことだから。

> i7425—538 <

その知らせは突然だった。

(透が、迎えに来る、つて。)

恭也と初を前に、努めて平静に振る舞おうとしてむしろ無表情に強張ってしまった瞳子に、恭也も初も「わかった」とだけ応え、決して狼狽えたりはしなかった。

ただ、瞳子の不器用な気遣いに胸中で感謝した。

正体が「ジョーカー」である初の生存権の為に尽力し、恭也が安心するに足る信頼の根拠を確立する為に瞳子がどれだけ奮闘したか、初も恭也も知っている。

いずれ訪れる別れの時の為に、恭也も初も瞳子も「今」を一生懸命に、大切に過ごしてきたのだ。

初は、ジョーカーだ。

本来は無慈悲な闘争本能の権化であり、それ以上でも以下でもない存在だった。

だが他のアンデッドを封印し取り込んでから、特に人格に影響を与えたヒューマンアンデッドが人間の雌の幼体の姿をしていた為に周りからも「少女」として扱われ、本人のパーソナリティーも無意識に少女としての人格に馴染んでいった。

その姿の設定年齢から「人間」を突然始めるかたちになった初は、

恭也に限って時折り顕れる自身の内の反応に当初は戸惑っていた。それが時を経るにつれ形を成してゆくことに、初は冷静に自身の想いを受け容れ、そして同時に恭也のそれが初のものとは違う種類であることを理解してしまった。

（男の理解能力の鈍重さは、余りにも度し難い。）

かつて関わった全ての人類女性の「男性に対する認識」を統合した結果、初はそう結論付けていた。

同時に、自分が人類女性の中では比較的理解のある方だというカテゴライズも済んでいた。

そもそも本物の人間の女は、こんなことまで滅多に認識しないし、考えもしないものだが。

そんなことを考えて、初は軽く頭を振ってその思考を追い払った。

（こんなわたしを、恭也は大事にしてくれた。）

そして、そんな恭也を大切に思う。

それだけで充分だ。  
でも。

これだけ自己分析を重ねても、自覚できない情動が、胸の内に蠢いている。

恭也がいる内にその正体を掴めないことが残念だった。

あともう少しで分かりそうなのに。

もし、その正体が知れた時。

恭也は自分を怒るだろうか。見放すだろうか。

愚問だ。そんなこと、あるはずがない。

ただ、恭也は困るのだろうか、と初は直感していた。

やがてふたりは同時に足を止めた。

道の終わり、石畳の途切れた向こうをまたいで通る高架の下の薄暗がりに、透が立っていた。

意識から締め出していた「おわり」の三文字が、とうとうそこに現

出した。

「……………」

「……………」

ふたりは、そつと手を離した。

「……………じゃあな。」

いつもの口調で、いつものひねくれた笑顔で初を見返して恭也は歩き出した。

初の為に、恭也は極力「いつもどおり」を心掛けた。

自分を信頼し懐いてくれた初に、別れに際して少しの衝撃も残したくはなかった。

なにも大仰に別れの挨拶をすることもない。

そんなことをしたら、別れられなくなる。

だから、できる限り当たり前な顔をして立ち去るつもりだった。

初もそれを理解してくれていると恭也は考えていた。

だから、突然うしろから手を引かれて呆気なく体勢を崩し、頬に受けた小さな花びらを押し当てられたような感触に戸惑い、小さな両手に突き飛ばされて簡単に転倒し、夜闇の遊歩道をひとりで駆け戻ってゆく初の後ろ姿を間抜けに見送ることしかできなかった。

やがて予定の地点の大木の陰に駆け込んできた初を、瞳子は優しく抱き止めて迎えた。

途端にわんわん泣き出した初の頭を何度も何度も撫でてやる。

（……………こちらら男の浅知恵なんか とつくに見透かしてるっつうの。）

初の頭を撫でながら、瞳子は白けた顔で恭也を胸中で罵った。

全身に滅茶苦茶に殴りつけられた跡を残した、有り体に言ってボツ

コボコになった相模原の変死体を動かないように踏みつけながら。

「……む、むう。なんじゃこの神楽見の強さは……むぎゅ

瞳子は白けた顔のまま、足首をぐりつと捻った。

> i 7 4 2 6 — 5 3 8 <

この二人でやりたい事というのは「年の差カップル」ではなく、「異種族恋愛」ですよ。と一応言うだけ言ってみる。危険性で言えばどちらも大差ないか。

これを以て、ディレイドの世界救済の為の容赦ない地均しが完了。物語は次のステップの為に、十一番目の世界に続きます。

注釈。

当作「ディレイドマスカーカレイド 仮面ライダー ディケイド外伝 仮面ライダー ディレイド」におきましては、  
TV「仮面ライダー ディケイド」及び「劇場版 仮面ライダーディケイド 完結編」のみを本筋として物語を捉えております。  
夏の劇場版「オールライダー対大ショッカー」の要素は、ここではなかつたことになっておりますので、御了承下さい。  
だって、倒壊したはずの大ショッカー基地が、TV最終話のあのシーンに無傷で入ってるんですもの。  
それよりなにより、鉄棍としましては、「終わった他作品の敵組織が現作品の主人公たちのツールを作った」という設定は、到底受け容れられるものではありません。

それと。

ネガ世界の音ヤンを待ち焦がれていらっしやる方には申し訳ありません。御覧の通り、挿話を一本挟ませて頂きます。

「GOD機関」を名乗る原住民による組織が山間部に建設した研究施設に、突如多数の「仮面ライダー」が襲いかかった。

彼ら連綿と「仮面ライダー」達と戦いを続けてきた「GOD機関」の持つどの情報と照らし合わせても該当しない、見たこともない仮面ライダーがかなりの数 混じっていることに施設警備の責任者は愕然としていたが、それでも状況への対策を講じる。

研究資材・データの回収、研究員の待避と護衛の配置と同時に基地内の構造から戦闘員の迎撃配置を編み出して矢継ぎ早に指示を飛ばしてゆく。

ここでの警備責任者の任務は研究情報の保護を最優先としている。だが、飛んで火に入る憎き組織の敵・仮面ライダーからただ逃げるなど彼のプライドが許さなかった。

「迎撃など生温い！殲滅だ！」

テーブルを殴りつけ、警備責任者は各小隊長へと攻撃命令を下した。

今や基地の正面フロアは混戦の坩堝となっていた。「GOD機関」の邪魔者・仮面ライダー Xに続く一号・二号を始めとする馴染みの面々の他にも特徴的な装甲服を纏った戦士が獲物を振り回して彼らに追従しているのだ。見たことはないが、奴らも「仮面ライダー」に違いない。

後衛の戦闘員が構えた銃器で弾幕を展開する中、短剣を手に無数の前衛戦闘員が仮面ライダーどもに襲いかかるが、一騎当千の仮面ライダーが軽く二十を越えて攻めてきているのである。状況は絶望的にしか見えなかった。

同じ頃、基地の内部では、非戦闘員である研究員たちが護衛の戦闘員に囲まれて、地下通路を経由して離れた場所にある資材搬入口へ

と脱出に向かっていた。

地下通路と言っても、施設の一部である。そこかしこに各種研究設備を置いた部屋があり、大きなガラスで仕切られている間を、彼らは足早に通過した。

ここでの研究の成果を失うわけにはいかない。これが完成すれば、GOD機関が支配すべき領地を桁外れに大きく拡張できるのである。地球ひとつなど途端にちっぽけな箱庭に成り下がる程に。

せかせかと薄暗い通路を早足で駆け抜ける一同。

「……おい？後ろの奴はどうした？」

その時、研究員たちを取り囲んで護衛していた戦闘員のうち、後方に控えていた隊員が仲間の不在を訴えた。

一斉に振り返る一同。確かに、後衛を務めていた隊員が二名、いなくなっている。

「ちっ。探しているヒマはない。先を急ぐぞ。」

先頭に立っていたリーダーが、消失した仲間を見切り先行を促した。

「んむっ!？」

だが再びあがった声がかくもった悲鳴であったことで一同は今度は厳戒態勢で身構えた。周囲を忙しなく見回す。

「今度はどうした!？」

苛立ちの混じったリーダーの問いに、答えられる者は誰一人いない。

「なにがあった!？ なんださっきの声は!？」

ここにいる一同に詰問するが、互いを見回す彼らにも心当たりがなかった。

やがて研究員の一人が、青ざめた顔で一方を指さした。

「……あ……ひ、ひとり、いな、い……」

自分の、空白となった傍らを指し、そこにいたはずの仲間の不在に彼は震えていた。

消えてしまったのだ。忽然と。

「なんだと!？ おい!点呼だ!」

慌ててリーダーが脱出人員を確認する。



やがて帰ってきた報告に、リーダーは戦慄した。五人、減っている。

「……こ、これは……」

戦慄くリーダー。

だが、今度はそのリーダーの襟首が誰かに掴まれ、もの凄い力で後ろに引つ張られた。

「ぐっ!？」

めり込んだ戦闘服の襟が喉を締め付けた。

やがて背中から投げ出されたところでリーダーは慌てて周囲に目を配った。

そこは地下研究施設の一室。他には誰もいない。

否。

そのガラスの壁の前に、見知らぬ仮面ライダーが立っていた。

赤いボディスーツに、横に引かれたスリットが並ぶ西洋甲冑の兜のようなマスクを被り、左手に龍の頭のような形状の手甲をつけている。

そして腰に巻かれた幅広のベルト。見たことのない姿だが、仮面ライダーに間違いあるまい。

「き、貴様!？ いったいいつの間ここに!？」

追いかけてきた足音など聞こえなかった。

待ち伏せだとしても、意味が分からない。この仮面ライダーが今したこととは、殴るでも蹴るでもなく、リーダーの襟首を引つ張ったことだけ。

それきり、そのバーゴネットを被った仮面ライダーは棒立ちしたままこちらを見つめている。

不気味だった。

不気味や恐怖は「GOD機関」の専売特許のはずなのに、なぜ。

ともあれ、仲間を五人も消したのは、この仮面ライダーの仕業だろうと見切り、リーダーは短剣を引き抜いた。

だが短剣が床に落ちて冷たい音を立てたことで、リーダーは自分の

手から握力が消失していることに気付いた。

「……………なに……………」

眼前にかざした自らの手が、あるうことか末端から粒子化して消え去ろうとしていたのだ。

「……………な、なんだこれはあ!？」

絶叫するリーダーは、助けを求めて周囲を見回した。

なにしろこちらにはまだ仲間がいるのだ。

だが、そこでリーダーはもうひとつの異常に気付いた。

あまりにも無音。

そこには謎の仮面ライダーとリーダー当人以外、誰もいないのだ。

「ば、ばかな……………」

いや、仲間はいた。この部屋を仕切るガラスの向こうに。

「こ、これは……………」

否。ガラスの「中」に。

慌ててリーダーはある事に閃き、それを求めて辺りを見回した。求める物はすぐに見つかった。

設備の内容を示すナンバープレート。

その表示が、左右に反転していたのだ。

まるで、鏡に映したみたいに。

「ま、まさかここは……………」

ふと見ると、ガラスの中に映っている仲間たちと研究員たちが、近くの窓ガラスから生えた腕に掴まれて次々とガラスの中へと引きずり込まれてゆくのが見えた。

間違いない。ここは「鏡の中の世界」なのだ!

「バカな! バカなあああああ!」

謎の仮面ライダーが手を出してこない理由がようやく分かった。

自分達は物理法則の異なる異世界に引きずり込まれたのだ。

先ほどから、居てはいけない場所にいることによる拒絶反応で全身に激痛が走っている。

身体の粒子化はますます進み、リーダーは今まさに消え去ろうとし

ていた。

「か、仮面ライダー！ 貴様あ！」

呪詛を残し、ミラーワールドの物理法則に抗しきれずにリーダーは消滅してしまった。

他の組織員たちも。

仮面ライダー 龍騎を始めとするディメンションダイバーたちは、無言のままそこを後にした。

ひょいと取り出したカードを銃身側面のスリットに挿し入れ、ポンブアクションで銃身をスライドしカードを読み込ませた。

《アタックライドウ・ライダーキック！》

ドライバーの指令に従い、遠くで乱戦を繰り広げている仮面ライダーたちが一斉に跳躍し、めいめいの方角へ片足を突き出して突撃していった。

そこかしこで巻き起こる爆発。

跡には、何者の姿も残ってはいなかった。

やがて無人となり打って変わって静寂に包まれたGOD機関の研究施設の前庭に、シアンのボディスーツの上に縦に並べた板で構成された装甲と、同様のマスクを纏う仮面ライダー、ディエンドがすたすたと歩いてきた。

ディエンドは一枚のカードを取り出すと、それを銃身側面のスリットに挿し入れ、銃身をスライドさせた。

《カメンライドウ・デイスガイズ！》

引き金を引くと同時、ディエンドの姿に縦線のノイズが幾重にも走り、やがてそこに人間・男性の姿が現れた。

「さ・て。殲滅完了、ですね。」

眩き、フレームレスのメガネのブリッジを指先でくいと押し上げ、男はすたすたと施設の中へと歩いていった。

> i 7 5 2 5 — 5 3 8 <

私は『システム・デイケイド』のタクティカルパイロテージモジュール。デイエンド。

役割は、他のシステムモジュールに先行して目的地の宇宙に楔を打ち、『システム・デイケイド』が至る礎を築くこと。

現地での調査に際し原住民に偽装する必要もあり、この姿の時は「かい・とうま甲斐 当麻」と名乗ることにしている。

これまでではただ宇宙に楔を打ち込み通過するだけであつたのだが、この宇宙で私は危険要素を発見してしまった。

それは、「GOD機関」と名乗る組織が研究していた、本来原住民には不可能な『次元間跳躍』ワールドスライドの基礎理論であつた。

実際のところ、我々の眼から見れば破綻にまみれた見戯にも劣る内容だつたが、原住民のやること、永い時を経て何かの間違いで完成してしまう可能性も決してゼロではないものだ。

それがいずれ『システム・デイケイド』の障害になり得ると判断した私は、「GOD機関」なる組織を壊滅させ、その研究を消却することにした。

これはまだ手始めに過ぎない。

所属構成員を一掃した私は、施設の中枢に到達した。

そこには、この世界の水準ではかなり高等なコンピュータが揃えられていた。

一応、高次元から記録媒体にアクセスし内容を確認するが、私が襲撃した時点であらかた消去されていたようだ。

携帯用記録媒体に移し替えて持ち出して脱走しようとした分は、先回りさせたディメンションダイバーのカメンライドによって阻止してある。

ついでに、ネットワークを介して接続されている先のアドレスを取得する。次の「GOD機関」関連施設の場所だ。

用が済んだ私は、取り出したディエンドライダーにカードを挿し入れ銃身をスライドさせた。

《カメンライドウ・リュウキ・リュウキ！》

認証の音声と共に壁際に設置されていたガラス棚に銃口を向け、ガラスの鏡面めがけて龍騎を打ち込んだ。

さらにカードを挿し入れて銃身をスライドさせる。

《ファイナルアタックライドウ・リュウキ・リュウキ！》

ミラーワールドに飛び込んだ龍騎は腕脚を広く構えて身を深く沈め、大きく跳躍すると、身をくねらせて現れたドラグレッダーが吐き出した火炎を背に受け砲弾のように飛び出すと、ミラーワールドのコンピュータ設備を端から端まで蹴り貫いていった。

途端に連動して紅蓮の炎をあげて爆散する現実世界の設備を後目に、私はさっさとこの施設をあとにした。

GOD機関所有の日本での前線基地「GOD秘密警察東京分署」では、研究施設からの「仮面ライダーの大群の襲撃」の報に大童となっていた。

その上、普段の日本侵略作戦と異なり被害者が存在しない為に足がつきにくいにも関わらず例の研究施設を嗅ぎつけられた理由の見当がつかず、GOD秘密警察第一室長・ガイは顎に手をあて首を傾げていた。

「いったいこれは……。なんとも不可解なことである。」  
白スーツを纏った壮年の男・ガイは、豪華な椅子に身を沈め、眉をしかめて思索に耽る。

例の研究施設へのあらゆる通信が途絶したことで、ガイは当該施設の破棄を決定。情報の漏洩を想定し、これより72時間の間、この基地の警戒レベルを大幅に引き上げるよう命令を下した。

だが、仮面ライダーに対する侵入警報が鳴るより先に、終末のような爆音と激しい振動と衝撃がこの基地を襲った。

途端にけたたましく鳴り響くレッドアラート。

「警報を止める！なんだ今のは！？」

警備管制室に飛び込んだガイの怒鳴り声に、管制官が泡を食って応えた。

「が、外部からの、み、ミサイル攻撃です！」

「んなんななにいいいい！？」

その報告に、さしものガイも仰天した。

「発振源を捕捉！映像出します！」

別の管制官がコンソールを操作し、モニターの一つに基地前景が映し出された。

広い敷地の入り口付近に、見たこともない仮面ライダーらしき人影が立っているのが見える。

たった一人。

だが、その仮面ライダーが肩に担ぎ上げているものがなんなのかを認識した瞬間、ガイは血相を変えた。

有り得ない。その存在の理解をガイの理性は拒んだ。

全世界の闇部をGODが掌握した現在、日本国内においてミサイルを建造するなど不可能なはずだ。その特殊な部品を調達する課程において、どこかしらでGOD機関の懐を通らざるを得ないからだ。

しかもそれを、個人レベルで活動している仮面ライダーの仲間が用意できる道理がある訳がないのだ。

「げ、迎撃しろおおおお！？」

うわずった声で怒鳴り上げた時には、既に白煙を引いてミサイルが射出された後だった。

《アタックライドウ・ギガント!》

投げ捨てられた空のランチャーに代わり、仮面ライダー G4の右肩に三つ目の四連装対地ミサイルランチャーが出現する。

これはほんの挨拶代わり。物陰に隠れているデイエンドは、ベルトのバックルにはまっている、自身のマークを描いたパネルを取り外すとそれをデイエンドライバーの銃身の側面に取り付けた。

「……………」

喚び出したG4が牽制攻撃をしている間に、準備を開始する。

なにしろ調べたところに寄れば、このGOD機関なる組織にはかなり強力な戦力が置かれている。壊滅させるには少々骨が折れるだろう。

デイエンドは、引き抜いた一枚のカードをデイエンドライバーに取り付けたバックルパネルのスリットに挿し入れた。

それは、デイエンドの本領を発揮させる為のツール。

《タクティカルカメンライドウ・フアランクス!》

音声か認証を告げる。

だが、この段階ではまだ何も射出できない。

デイエンドは続いて数枚のカードを取り出すと、一枚ずつパネルのスリットに挿し入れていった。

《カメンライドウ・クウガ!》

《フォームライドウ・クウガ・ドラゴン!》

《カメンライドウ・アギト!》

《フォームライドウ・アギト・ストーム!》

《カメンライドウ・オーデイン!》

《カメンライドウ・レンゲル!》

《カメンライドウ・デンオウ!》

《フォームライドウ・デンオウ・ロッド!》

八枚ものカードを続けざまに投入し、それからデイエンドはドライバーを正面に構えて引き金を引いた。

途端に解き放たれる無数のノイズが次々と人影を形成し、そこに五

人の仮面ライダーが出現した。内、三人が出現するなりその姿を変えた。

槍や杖などポールウエポンを武器とする仮面ライダーが一直線に横並びに整列し、各々の武器をずらりと正面に突き出した。

これが《タクティカルカメンライド・フランクス》の効果。棒杖を武器とする仮面ライダーで、まさしく槍衾を構成するのだ。

ミサイルを打ち切り、役目を終えた仮面ライダー G4 が掻き消え、そこを横一列に並んだ仮面ライダーフランクスが進軍を開始する。その頃にはGOD機関が擁する戦闘作業員が大勢、基地の正面からぞくぞくと飛び出してきた。

仮面ライダーフランクスの後を悠々と歩くディエンドは、それには構わず己の手順を続行していた。

踊りかかってきた多数の戦闘員を、展開した槍衾が的確に次々と迎撃してゆく。

得物の長さ故、戦闘員どもは簡単にこちらに手出しできない。

無駄な突撃を繰り返す敵戦闘員を横目に、ディエンドはカードをドライバーのパネルに挿し入れた。

《タクティカルカメンライドウ・バラージ！》

続いて数枚のカードを次々と挿入してゆく。

《カメンライドウ・ゾルダ！》

《カメンライドウ・ファイズ！》

《カメンライドウ・カイザ！》

《カメンライドウ・デルタ！》

《カメンライドウ・ギャレン！》

《カメンライドウ・イブキ！》

《カメンライドウ・ドレイク！》

そして銃口を天に向け光弾を解き放った。

辺りに吹き荒れたノイズの嵐は、やがてディエンドから左右に離れた位置に、それぞれ三人と四人の人影を形成して静まった。

今度は銃を持つ仮面ライダーがずらりと左右から武器を突き付け、



槍袞の手前をキルゾーンに設定して、群がっていた敵戦闘員をことごとく撃ち倒してゆく。

基地からは今もぞくぞくと敵戦闘員が出てくるが、ゆったりと敷地を突き進むデイエンドのフォーメーションの前では暴風にさらされたるうそくの灯火も同然であった。

『さ・て。我ら『システム・デイケイド』の脅威。消去させて頂きますよ。』

デイエンドは指先で、メガネのブリッジを押し上げると同じ仕草で己のマスクの真ん中のライドプレートの縁をなぞり上げた。

> i 7 5 2 6 — 5 3 8 <

「ふん。小癩な。仮面ライダー共もようやく数の運用を覚えたというとか。忌々しいものだ。」

監視室でモニターを見つめ、ガイが苦々しく呻いた。

基地はもはや半壊状態。備え付けられていた対人・対地・対空全ての迎撃装置もミサイルによってことごとく破壊されてしまった。

残る戦力はGOD戦闘員と研究開発中の怪人のみ。

だというのにガイには落胆も焦りも見えない。

ただ、整然と行動する仮面ライダーの隊列を見つめ、指揮官として戦況を見下ろす顔になっている。

「それにしても、見たことのない奴らばかりであるな。まあいい。

捕まえて聞き出せばよからう」

それきり仮面ライダー各個の素性に興味を失くしたガイは、コンソールを操作し怪人研究室を呼び出した。

『はっ。室長殿。』

「現在試験中のグリプスにナンバー12を与える。三分で実戦仕様に調整して出撃させる。」

『は！？』

「私の言葉を聞き逃すなど、組織においては重罪なのだ。言ったとおり三分で準備できねば貴様は死刑だ。分かったな。」

「は、はっ！」

忌々しげにスイッチを切ると、別の通信機を引き寄せた。

「アポロガイストである。これより私が指揮を執り、基地を強襲した仮面ライダーどもを殲滅する。待機中の戦闘員は四隊に再編。各隊、指示に従い行動せよ。」

喚び出した仮面ライダーを周囲に配置したままディエンドは基地内部に突入した。

二隊に分けたフランクスとバラージの仮面ライダーを前後に並べ、悠々と通路を進む。

時折、通路の脇から襲いかかる戦闘員が現れたが、瞬時に撃ち倒された。

やがて、通路の先に拓けた空間が見えてきた。

ディエンドは、そこへ至る前にドライバーのパネルにカードを一枚挿し入れた。

《タクティカルカメンライドウ・バリケイド!》

続いて取り出した数枚のカードを挿し入れながら、周囲の仮面ライダーと共にその広大な部屋に踏み込んだ。

途端にフランクスとバラージの仮面ライダーたちがディエンドを護るように配置を変えて取り囲んだ。

だがここは、あれほどの数の戦闘員を擁していたにしては、やけに閑散としている。

それとも、先ほどの戦闘で全滅させてしまったのか。

いずれにせよディエンドとしては目的を達成するだけであり、警戒レベルを上下させることもない。

変わらぬ歩調でその飛行機の格納庫ほどもある空間を、分身を引き連れて中程まで歩いたその時。

四方の通用口を重厚そうなプレートが落下するようにして閉塞し、

同時にそこかしこの空調用のエアダクトからガスが吹き込まれてきた。

だが生憎とデイエンドは宇宙物質の感染や浸食を一切受け付けず、周りの仮面ライダーは疑似的な物質による分身。この攻撃にはまるで意味がないとデイエンドは考えた。

だが、続いて天井から小さい蓋を開いて電撃銃が姿を現したのを見て、デイエンドは敵の意図を察知した。

『!?!?』

次の瞬間には、電撃銃のスパークを受けて部屋に充満したガスが引火し、閉塞された空間内で甚大な爆発が巻き起こった。

やがて爆発が静まり四方の隔壁がゆっくりと上昇していった。あまりに大きな爆発の威力の為、歪んだ隔壁が上がりきらずにがりがりと耳障りな音を立てた。

そこに、通路の奥から歩いてきたガイが、室内の様子を眺め回して眉をしかめた。

二十ほどいたように見えた仮面ライダーのほとんどが死体も残さずに消え失せ、部屋の中央に四、五人の人影が組み合うようにして立っていたのだ。

それは爆発の瞬間に発動させた《タクティカルカメンライド・バリケイド》によって召還された仮面ライダー G300X、仮面ライダー ザビー・マスクドフォーム、仮面ライダー ガタック・マスクドフォーム、仮面ライダー キバ・ドツガフォームによるスクラムであった。

やがて肩を組んでいた四人の仮面ライダーがスクラムを解くと、その中からデイエンドが立ち上がった。

「……ほう。あれだけの火力を受けて燃え残るとはたいしたものだ。」

「なるほど。原住民と言っても侮れませぬね。」

腕や脚の煤を打ち払いながらデイエンドはぼやくように呟いた。

「貴様の目的はなんだ？」

『こちらで危ない研究をしているのを発見しましてね。殲滅しに来ました。』

「ほう。交渉の余地はないのか。」

あっけらかんと「殲滅」を口にしたことにガイは心底おかしそうに口元を押さえ身を震わせた。

「貴様、仮面ライダーの仲間ではないのか？ あの仮面ライダーでも、もうちょっと穏便な言葉を選びそうなものだが。」

『私の判断ですよ。この組織に所属する者は一切の区別なく殲滅します。さようなら』

言って躊躇なくディエンドライバーの引き金を引いた。

だが射出された光弾は、突如ガイの前に割り込んだ影に叩き落とされてしまう。

猛禽と人とを掛け合わせたような怪人・グリップスがそこに着地するや否や、ガイも胸を張って自らの背に両手を回してひとこと呟いた。

「アポロチェンジ。」

途端にその身を揺らめかせ、炎のような仮面と純白のマントを纏った戦闘形態アポロガイストへと変身する。

背後に回した両手はそれぞれ二連装式の銃と、まるで太陽のような装飾の盾を握って現れた。

『奇遇であるな。我々の今の目的も、貴様らの殲滅である。 さあ。殺し合おうか』

言うなり手の二連装銃アポロショットを抜き打ちするアポロガイスト。

それは、ディエンドの正面に立ちはだかった仮面ライダー キバ・ドッグフォームが厚い胸板で悠々と受け止めたが、それが合図だったのか、四方の通路から駆け込んできた戦闘員の集団が一斉にディエンド目掛けて銃を乱射してきた。

それらを、バリケイドの四体に身体で阻ませ、その陰でディエンドは取り出したカードを今度はディエンドライバーのスリットに挿し

入れて銃身をスライドさせた。

《アタックライドウ・ブラスト!》

そしてキバ・ドツガフォームの脇の下から銃を突き出し、怪人グリップス目掛けて斉射した。

だがそれは高い跳躍力で呆気なくかわされてしまう。

デイエンドはバリケイドの四人に出撃を促すと、ドツガハンマーを取り出したドツガフォームと共に怪人グリップスへと駆け出した。

左右と後方の集団にはザビー・マスクドフォームとガタック・マスクドフォーム、G3-Xがそれぞれ進み出て彼らの射線を塞ぎにかかった。

デイエンドは身軽に跳ね回るグリップスを追うが、敵が素早い上に、キバ・ドツガフォームが鈍重過ぎてまともなコンビネーションにならない。

仕方なくキバ・ドツガフォームの横に並んでグリップスめがけて通常射撃を試みるが、突如キバ・ドツガフォームが身体の向きを変えて別方面から飛来した衝撃を胸板で受け止めた。

デイエンドの身を護るはずのキバ・ドツガフォームのカバーリングが外れたと見るや、襲い掛かるグリップスの鋭い爪がデイエンドを抉っていった。

「くっ!？」

すぐさま攻撃を振り払って銃撃を浴びせようとするが、再び飛来した光弾がキバ・ドツガフォームの脇をかすめてデイエンドに激突し、デイエンドは体勢を崩した。

「よそ見している場合かね？」

先ほどからのアポロガイストの二連装銃による銃撃が防護を突破してきたのだ。

それを好機と見たか、さらにグリップスが襲いかかる。だがそれにはキバ・ドツガフォームが割って入り攻撃を阻んだ。

すると、がら空きになったデイエンドにアポロガイストからの射撃が襲う。

『どうやら貴様が司令塔の役割のようであるな。忌々しいほどに頑丈でのるまな他の連中は後回しにして、貴様から片付けてくれよう。』

アポロガイストの的確な指摘に臍を噛むデイエンド。召喚した仮面ライダーが分身であるということまでは考えが及ばないようだが、その戦略は間違っていない。

手持ちの壁役の人数に対し、敵の数の方が上回っている。その上四方を塞がれており、インビジブルで消えたとしても逃げ場がない。

なによりこの組織の研究を見過ごす訳にもいかない為、宇宙からの脱出も論外だ。

ならば、採りうる手段は一つ。

『……さて。もう、これしかないですかね』

デイエンドは、取り出したカードをドライバーに挿し入れ銃身をスライドさせた。

《ファイナルアタックライドウ・デイ・デイエンド!》

認証後、差し向けた銃口の先の空間に、無数のカードのヴィジョンによるターゲットイングサイトが出現した。

カードのヴィジョンが取り巻くリングが幾重にも重なって標的に至るまでの通路を形成し、時折 時計の歯車のように所々を回転させつつ、さながら鎌首をもたげる大蛇のようにアポロガイストを捕捉する。

『そろそろ君の「詰み」ではないのかね?』

デイエンドの攻撃の予兆にもまったく臆することなく、平然と指摘するアポロガイスト。

言いながらサイドスローで投げ放たれた盾がターゲットイングサイトのヴィジョンをすり抜け、その鋭利な縁がデイエンドの胸郭を深く抉った。

その衝撃で体勢を崩すが、狙いは逸らさなかった。

『まだですよ!』

叫び、尻餅をついた体勢でディエンドは終末の凶弾を解き放った。

『いいやチエックメイトだ！』

やはり全く同時にアポロショットから放たれた銃弾がディエンドの胸板を激しく打ちつけた。

解き放たれた蒼き光の濁流は、周りで戦っていたバリケイドの四人の仮面ライダーをエネルギーに還元し取り込んで進み、アポロガイストから大きく逸れて壁に激突、大きな穴を開けて消えていった。

『……あ……』

たった一人になってしまったぼろぼろのディエンドに、戦闘員の集団の銃撃が、グリップスの攻撃が、アポロガイストの銃弾が容赦なく襲いかかり。

そこまでが『システム・ディケイド』に残されたディエンドの最後の交戦記録だった。

ディエンドの活動体は完全に破壊されたのだろう。

残されたディエンドライバーが件の組織に鹵獲され、結果的に原住民にワールドスライドの技術を供与してしまったのだろうことも想像に難くない。

そして、原住民の何者かがディエンドライバーを持ち出して使用していることも。

ディレイドライバーに対する透と同じ、ディエンドドライバーの活動体、言うなれば「元の持ち主」の思い出の記録です（涙）。

海東が、「元は とある宇宙の中で生きるただの人間のひとり」であることは、劇中でも語られていると思います。

「ディケイド」という作品に対する鉄槻のスタンスは前書きに書いた通りで、ディエンドドライバーを大シヨッカー謹製には絶対にしたくなかったので、ここでのディエンドドライバーの経緯を語らせて頂きました。

まあ大シヨッカーのことですから「ウチらが作ったんじゃない」と嘯く程度のこととは普通にしそうです。

さ・て。という所の元・ディエンド・甲斐 当麻くん。恐らくこれつきり出番はありません。合掌。

名前の読みがカブっているのは、ワザとです。名付けの法則に則りつつ、そこそこ記憶に残る名前……になつてるといいなあ。

なんかまた勝手な設定をくつつけていますが、と言うか「人形使い」ならこれくらいはして欲しかったというファンの憤りの煮凝りでもあります。

毎回思っていました。「なんで手持ちのカード全部叩き込まないんだらう」と。



track・51 ネガの世界(前書き)

これは世間話ですが。

「仮面ライダー　ダーク」と呼ばれる、いわゆる「ダークライダー」って、ディケイドがあらかたやつつけちゃったんですよね。

人気のない廃工場らしき敷地の裏手に透は現れた。

今回ばかりは瞳子の異次元同位体の目印がない状態での次元間跳躍である。目的地の見当がないまま見知らぬ土地に出現し、行き先の見当も不明なままだ。

だが透は迷う様子すらなく一方へ歩き出した。

その場に情報がない場合は、状況の方を動かしてみる程度のサブルーチンはこれまでの旅の中で得た。

「……………」

そうして廃墟以外何も無い場所を歩き続けることしばし。

「とーーるーーー！」

遠くから、あるうことが瞳子の声が聞こえてきた。

斜め前方から、こちらへと全速力で駆けてくる少女。その瞳子は、「九つの世界」のどの瞳子とも一線を画す風体をしており、黒のパーカーに赤いグリッドパターンの短いプリーツスカート。そしてその表面に黒のベルトバックル部分のみの飾りやジッパ、チェーンなどを各所にあしらひ、意味不明な英字や赤い飛沫をプリントした、いわゆる「ゴシックパンク」の装いを纏っていた。

間違いなく瞳子の異次元同位体であるが、いつもとは勝手が違う。

この瞳子は、ディレイドのライドピラーとは直接は接続していないのだ。

逆に言うと透にとってもこの瞳子に限っては全く用はないのだが、一般人と同じレベルの情報源ではある。

透は瞳子が到着するのを待っていたが、瞳子は駆け寄りながら手元でなにか操作を始めた。

瞳子は左手に巨大な、華美な装飾を施された南京錠を取り出し、右手に引き抜いたボールペンほどの大きさの、端に薔薇の飾りをあしらひ先端が「F」の形をした古い形式の鍵をその南京錠に横から突

き刺した。

「ゲート、オープン！」

叫んだ瞬間、どこからか飛来した巨大な枷が瞳子の細い腰に組み付いた。まるで幅広のベルトのように。

「施錠！変身！」

続けて叫びながら、瞳子はその南京錠をベルトの正面に組み付け、開いた上部の金具を閉じ合わせた。

すると同時、辺り一面に吹き荒れた無数の花びらに包まれ、その姿を推移させてゆく。

やがて花びらの嵐を突き破って現れたのは、様々な花を模した仮面と、まるで令嬢のドレスのような装甲を身につけた仮面ライダー。

『仮面ライダー フルール！ただいま参上！』

さらに、その手に黒の薔薇を鍵頭にあしらった別の鍵を取り出すと、それを腹部の南京錠の真ん中の鍵穴に正面から差し込んでひねった。

『そしてそして！禁断の花園、開門！』

《ダンディルティ・フォーム》

認証が告げると、その花びらの装甲が全て細かく弾け飛び、中から黒薔薇に身を包まれた戦士が飛び出してくる。

『とーるには特別に最強の『フォーム・フルール・ダンディルティ』でおもてなししてあげる！』

言って、透の手前で大きく跳躍したその瞳子が変身したフルール・ダンディルティは、今やベルトバックルとなった南京錠の正面から黒薔薇の鍵を引き抜くと、それを一振りして巨大化させ、一本の杓杖と化したそれを振り下ろしてきた。

『ていつ！』

透の額ど真ん中を捉えた杓杖は、だが音すら立てずに見上げた透の顔面で停止してしまった。

「激突」ではなく、「停止」である。

人間の姿にも関わらず、首が反動で揺れることもなく、透にはダメージを負った様子がまったくない。

『……あれ？』

「いきなり何の用だ？ 瞳子」

その上、額にアザも浮かべず事も無げに問いかけてくる透にフルールは困惑の声をあげた。

『ねえ透。痛くなかった？』

「今まで説明しなかったが、俺と接続した瞳子と、瞳子を経由して間接的に接続しているそれ以外の全ての瞳子は、俺に一切の危害を加えることができないぞ。」

『ほえ？ どういう意味？』

杓杖を抱え直し、おとなしく聞き返すフルール。

「例えば、「何でも斬れる刀」があったとして、だがその刀にはこの世でひとつだけ斬れないものがある。なんだと思う」

『分かんない。』

さして悩まずに瞳子が応えた。

「その刀自身だ。俺と瞳子は物理的には別の個体だが、高次元では同化し同一の存在も同然の状態となっている。そしてそれは、直接の接続がなくとも、間接的に接続しているこの世界の異次元同位体であるお前にも適用されている。お前が俺を攻撃しようとも、だから俺には届かない。」

これまで九つの世界の瞳子から、首を絞められたり振り回されたり滅茶苦茶に殴られたり踏まれたりチョップを打ち込まれたりトレイではたかれたり蹴られたりしても透がけろっとしていた、これがその理由だ。

『ふうん。つまんないの。せっかく透に「挨拶」に来たのに。』

「挨拶か。」

『うん。そう。』

言いながら、フルールはバックルの横に差してあった鍵を捻って南京錠を開き変身を解除すると、あっさりと当たり前のように続けた。

「大丈夫だよ？ これで倒れたりするのは怪人か人間だけだから。」

「そうか。」

ごく普通に返事する透。

それがこの世界の常識ならば、透としても特に言うべきことはない。

「それより、丁度良かった。『王』はどこにいる？」

「『王』？」

問われた瞳子が小首を傾げる。

『王』と言えば、この世界を統べる、あの『王』しかない。

「うん。『世界の破壊者』の関係者がこの世界に来たんだから、そのうちここに来ると思うけど。」

「そうか。」

「あゝ、でも、その前にとーるにお客さんかも。」

言いながら遠くを見た瞳子の視線の先を振り向くと、その遠くからこちらへと歩いてくる数人の人影が現れた。

「よオ瞳子オ！そいつかあ！？ その『世界の破壊者』のオトモダチつてのはよオ！？ は！ずいぶんヒョロっちな！チヨロいんじやねえ？」

「ああ……。こうしてかの高名な『悪魔の影法師』にお会いできるなんて、ウェットかつセンチメンタルな僕の涙が止まらないよ。」

「俺の正義の名の下に！大歓迎するぜデイレイド！まずは正義の乾杯と行こうじゃないか！」

「下らん。忌々しい。忌々し過ぎて反吐が出る。歓迎の杯を鼻から飲んで窒息死すればいい。」

その数、四人。うち一人が三人の少女を侍らせているため合計七人とも言えるが、その少女たちが人の姿に化身したヒトならざる者であることを見た瞬間に透は看破していた。

やがて近くまでやってきた彼らのうち、ウェーブのかかった長髪を始め、全身をどこかなよなよさせた男が目元をハンカチで拭いながら話しかけてきた。

「ともあれ歓迎しますよデイレイド。僕の名は海參<sup>ヒョウサン</sup>潤<sup>うる</sup>。ウェットかつセンチメンタルな僕はこの素晴らしい邂逅に涙が止まらないの

で片手の握手で失礼しますね」

言いながら、潤と名乗ったその男は自らの超能力でわざわざ大気中から掻き集めた水分を目元に乗せて涙を演出してはいちいちハンカチで拭っている。

そうして差し出してきた手を透が握った瞬間、両者の間に緊張が走った。

透の手を握った途端、潤が泣き真似を続行しながら透の手首の関節を極めようとひねりを加えてきたのだ。

そして透も同時にその力を打ち消す方向へと手首を捻り返す。

傍目にはただ握手してぶんぶんと手を振っているようにしか見えな  
いが、実はそんな地味な攻防を繰り広げていた。

「はッ。海參のヤロウ、いきなり陰険な挨拶カマしてやがんなあ」  
三人の少女を侍らせた男が近寄ってきた。

その男は短く刈り込んだ銀髪に、浅黒く焼けた肌を露出させた、まるでストリートダンサーのようなファッションを纏い、鋭角に尖ったゴーグルを始め攻撃的なアクセサリを各所にちりばめている。

だが両手首とベルトバックルに、それらとは明らかに意匠の異なる装置を身につけており、ファッションの統一感を著しく損なっていた。

そして侍らせた少女達は一樣に人間離れた風貌をしており、男の右腕にしなだれかかる少女は赤いワンレンの髪に赤い瞳を持ち、赤いビスチェにレザーパンツ、レザーコートといった扇情的な衣装で起伏のある肢体を締め付け、蠱惑的に笑んでいる。

左腕には青いセミロングの髪をきっちり切り揃え、青の瞳は神経質に光り、青のブラウスにプリーツスカートとまるで深窓の令嬢のよ  
うな佇まいで見るもの全てを冷徹に見下している。

そして背中から首筋に腕を回してぶら下がっているのは、紫の髪をツインテールに括り、紫の瞳を好奇心に輝かせ、紫のゴシックロリータファッションで身を包み、天真爛漫な純真無垢故の邪悪さに染まった笑みに目を歪めている。

そんな三人の少女がしがみついている重さを全く感じさせない動作で銀髪の男がニヤニヤと笑いながら透の横に立ち止まった。

「俺あ、竜胆寺<sup>りんとうじ</sup>。下の名は『イイ男』と書いて「良男<sup>よしお</sup>」ってんだ！」  
ぷっ。

男が名乗った瞬間、後ろの二人と瞳子が吹き出した。

その瞬間男はそちらをギツと睨んだが、すぐに向き直ってきた。

「……竜胆寺 良男だよろしくな！」

言っただけでもさりげなく足の位置を微調整した瞬間、透もそちら側の足の位置を僅かに変えた。

竜胆寺は横から蹴りを喰らわせようとしたのだが、同時に透に警戒態勢を取られ身動きを封じられた。

互いに先んじて蹴りを繰り出せば、その瞬間に軸足を払われる、そしてその後どうするか、透と竜胆寺の間でも数手先の読み合いが展開された。

「俺サマにも生来の特異能力があつてよお！「イイ男過ぎる」能力でなあ！こうして両手と腰にリミッター付けてねえと俺サマの「イイ男」つづりが暴走しちまうんだよ！」

ぺらぺらと良く分らないことをしゃべりながら蹴り込む機会を伺うが、透にはなかなか隙が見あたらぬ。

「まあまあ二人とも。俺の正義の名の下に、そんな挨拶は失礼つてもんだよ。やるならきちんとしなきゃさあ」

「ふん。忌々しい。忌々し過ぎて反吐が出る。そんなに暑苦しくやりたければ血と汗と涙だけしゃぶって飢えて死ねばいい。」

窘めに来たのか煽りに来たのか分からない事を言いながら残りの二人が透の後ろに立った。

「ちなみに、俺の正義の名の下に名乗っておこう！俺は正義の深洞<sup>みど</sup>沙威<sup>う・さい</sup>！」

快活そうな笑みを浮かべ烈火のような髪型の好青年然とした男が名乗るが、ぎらつく三白眼が自身の言葉と態度を大きく裏切っている。  
「ふん。忌々しいが教えてやる。おれは魚虎<sup>うご・きょうこ</sup>鏡慈。ブツ潰されて

壁のシミになっても覚えていられたらいいがな。」

顔の半分を隠す枯れた柳のような長い前髪の隙間から殺気の籠もった眼光を放ちながら、隣の男がくぐもった声で吐き捨てるように言った。

「それで。お前たちはいったい何の用だ？」

相変わらず素立ちの状態で四人全員を同時に牽制しながら透が問うた。

「そりゃあ、正義の御挨拶さ！」

「忌々しいが、これも仮面ライダーの勤め。」

「そうさ！俺サマの格好いいトコ見せてやるから早くやろうぜ！」

「ああ。ウエットかつセンチメンタルな僕の心が悲しみの涙に溺れそうだよ。」

言葉と同時に、四人の男たちが一斉に飛び退き間合いを開けて各々構えを取った。

> i7717-538 <

ハンカチをスーツの胸ポケットに押し込んだ海參 潤は、取り出した機械じみたベルトを腰に勢いをつけて巻き付けて装着した。

そして両腕を交差させ、左手は人差し指を立て残りの指で輪を作り、右手は人差し指と親指で輪を作って「銭」のサインを示し、両手でアルファベットの小文字の「d」を二つ形作ると、ぽつりと呟いた。「変身。」

その瞬間、足下からドロドロ黒い水の濁流が螺旋状に這い登り、潤の体に漆黒のボディスーツと琥珀色の各部装甲を形成した。

マスクには巨大な涙滴型が二つ並んで複眼のようなセンサーを成し、琥珀色の装甲各所にはグレーの二本線が三組交わって三角形を描き二重の「D」を表しているようにも見える。

『ウエットかつセンチメンタルな僕にこの姿は泣けるよね。これが仮面ライダー ダークドライだよ。』

言って、ダークドライは取り出したハンカチでマスクの目元を拭っ



た。

「ルージユ！ブルー！ビオレ！俺サマの超格好いいところを見せてやれ！」

「はあい」

「……いいよ。」

「うんっ！」

竜胆寺の命令に応え、侍っていた少女たち・ダークアンカオスが僅かに身を離すと、少女たちの姿が変化した。

まるで「龍」と「少女」を掛け合わせたかのような人型の異形。赤・青・紫のそれら龍人が、続け様にそれぞれの色の光球に変化すると、先ほど竜胆寺がリミッターと言ったベルトバックルに赤と青の光球が、左手首の機械に紫の光球が取り付いて吸い込まれるように消え、それぞれの装置のデザインをシャープな形状に変化させた。

「いつくぜえー！へんっ」

叫び、左手首をベルトバックルの上に添えて三色の光球を三角に配置し。

「っしんっ！」

そして何かを掴み上げるかのように右手を振りかざすとその身が滲むように揺らめき、やがて輪郭を膨張させて変化させると再び姿を現した。

全身黒地のボディスーツの各所に赤、青、紫の尖った装甲を配置しており、マスクには尖り目の巨大なセンサーの周りに鋭角のウロコを幾重にも生やし、漆黒のドラゴンのような意匠を形成している。

『はっはあ！悪いな格好良過ぎてよ！これが仮面ライダー　ダークミラージユの超格好いい姿だ！』

気取った仕草で両腕を広げ、天を仰いでダークミラージユは哄笑をあげた。

「今こそここに、俺の正義の名の下に、「夜闇の光」をもたらそう

！  
叫び、沙威が取り出した辞書大の機械を腹部に押し当てると、機械の両端から勢い良くバンドが飛び出して背後で接合し、その機械をバツクルとしたベルトを形成した。

そして半身に構え左手を大仰に突き出すと、その動作に連動しバツクル右端から生えたレバーを右手で引き払った。

「正義の変身！」

《チェンジ！ノクスルーキス！》

ベルトの音声が認証を告げた途端、沙威の周囲二メートルの範囲がいきなり球状の影に包まれた。

光を完全には遮蔽しないその影のフィールドがやがてその直径を縮小してゆくと共に、突き出した左手から、踏みしめた両足から、頭から、フィールドの境目を通過するに従い装甲に包まれてゆく。

やがて小さくなった影の球は、胸の装甲の中央に埋め込まれた紫水晶に吸い込まれて消え、変化は終了した。

そこには、白のボディスーツに黒水晶のような装甲を各所に装着し、胸郭の中央とマスクの中央の紫水晶からグレーの放射線を描いた異様が、先ほどの構えのまま立っていた。

『これが！正義の！仮面ライダー ノクスルーキスだ！』  
大仰な構えをいちいち変えて、ノクスルーキスが絶叫した。

魚虎は気だるげに腕を振り、腰の辺りで両掌を捧げるように添えると、揺らめく波紋が腰を取り巻きそれはやがて幅広のベルトとなって実体化した。

正面の紡錘形のバツクルの中央には海底の岩に張り付く苔のような緑青色の石がはめ込まれている。

「忌々しい。忌々し過ぎて反吐が出る。すべからく擦り潰してあまねく血肉の泥濘と化し、海底へと流しこんで等しく溶かしてくれよう。……この『深海石』の糧となれ。」

捻くれた鉤爪のように五指を曲げた左手を眼前にかざし、まるで円

の縁をなぞるように弧を描いて下げながら、同期してゆらりと上げられた右掌と、上を向いた左掌が、合わせてまるで獰猛なシャチの顎のように開かれる。

そしてS字を描くように右手をベルトバックルの前へ、左手を頭上に差し上げ。

「……変身。」

両手で「D」、続いて「S」を描いた魚虎は左手を振り下ろすと同時にそう呟いた。

途端、足下に出現した凶々しい魔法陣から吹き出した黒い渦が魚虎の身体を透過しながら迅速に上昇し、その身を異形へと変化させてゆく。

海底の泥のように暗いボディースーツの上に、腕脚に沿うように骸骨の色をしたフレームが取り付き、胸郭には肋骨のような放射状のフレームが幾重にも巻き付き、大仰なグローブとブーツが腕脚を覆う。そして魚虎の身体を抜けて頭上に舞い上がった黒渦は、溶けるように黒い長衣へと変化すると、舞い落ちると同時にその身に装着された。

まるで船の舳先のようなパイレーツハットを頭部に頂き、黒のマスクの中央に逆Y字のフレームを張り付けたその姿はまるで幽霊海賊船の骸骨船長のよう。

『……仮面ライダー　ダークシークロス。光も射さぬ海底のようなもどかしい絶望をくれてやるっ……』

捻くれた五指をかざし、呪詛のようにダークシークロスが吐き捨てた。

> i7718 — 538 <

「よかるっ。本来ならば世界を滅ぼす脅威以外とは戦わんが、この俺の邪魔をするのなら、排除しよう。」

周りを取り囲むダークライダー達を眺め回し、透はディレイドライバーとカードを取り出した。

ディレイドライバーにカードを挿し入れ、抜刀の動作でスライドカバーを閉塞する。

「変身。」

《カメンライドウ・ディ・ディレイド!》

瞬間、幾重ものグレーのヴェイジョンが透に殺到し、彼方から飛来した無数のライドピラーが前後左右から頭部に差し込まれ、ボディスーツの各部をイエローに変じて透はディレイドへと変身した。

> i7733 — 538 <

『は？ おいフルール、おめえはやんねえのかよ?』

ダークミラージユが、そこで人間態のまま成り行きを見守っている瞳子に問いかけるが。

「ああ。あたしはパス。なんかよく分かんないけど、あたしの攻撃ってディレイドには通じないみたいなの。」

『そうかよ』

ひらひらと手を振って言う瞳子にあっさりと返すダークミラージユ。

『じゃあ俺サマたちだけでやろうぜ! 派手にな!』

『俺の正義の御挨拶、とくと味わうといい!』

『ああ。ウエットかつセンチメンタルな僕の挨拶がちゃんと伝わる  
といいなあ。』

『忌々しい。返事するまで半年間放置した水槽の中に深々と頭を下  
げているがいい。』

口々に叫び、四人のダークライダーが一斉にディレイドに襲いかか  
った。

をや。どこかで見かけた名前がありましたかな？

と・いうワケで、ディレイドと戦うダークライダーとして、現在「小説家になるう」において「完全オリジナル」の仮面ライダー小説を執筆されている各作家様より、各作品の仮面ライダーを「ディレイドマスカーカレイドでのダークライダーのデザインモチーフ」としてお借り致しました！ようやく登場となりました！

辰巳 結愛様の「仮面ライダー ドライ（N0555H）」より、仮面ライダー ダークドライを。

冥様の「仮面ライダー ルーキス（N1311I）」より、仮面ライダー ノクスルーキスを。こちらは唯一ネーミングごとお借受け致しました。

少年C様の「仮面ライダー シークロス（N9983G）」より、仮面ライダー ダークシークロスを。

無限の闇様の「仮面ライダー ミラージュ（N9449H）」より、仮面ライダー ダークミラージュを。

それぞれのダーク版を設定して使用する許可を頂いて、登場と相成りました。

ただし、お借りしたのは「仮面ライダー」の設定部分のみで、「中の人」は鉄槻オリジナルであり、それぞれの原作とは全く関係ありません。いえ、人様のキャラをやってつけちゃうワケにもいきませんでしたので……。ここら辺はリイマジネーション世界での扱いに準じたカタチで。

それから、上記各作品にダークライダーが登場するワケではありません。

せんで御注意下さい。あくまでも「ディレイドマスカーカーレイド」の中だけの存在です。……一部、そうとも限らない話があるそうですが……  
なにしろディケイドがあらかたやつつけてしまったので、外伝分のネガ世界の手駒がありませんでした。そこで各作家様にお願いした次第であります。皆様、ありがとうございました。

ちなみに、あくまでも「モチーフ」としてお借受けしたもので、決して各原作を穢すものではないことを強く申し置き致します。  
よろしければ、上記各作品のほうもお読み頂けると、より楽しめるところもあるかと存じます。よろしければ、是非どうぞ。

それではまた。「ネガ世界編」終了時に改めて解説と御礼を申し上げます。と思います。

四人のダークライダーが四方からデイレイドに襲いかかる。逃げ場はない。跳躍などで上に回避する他には。

四人はそう思っていた。

だがデイレイドはその場を一步も動くことなくダークドライの、ノクスルーキスの、ダークシークロスのパunchを上体の捻りだけで避けて各々の拳を両手で捌くと、あるうことか三者のpunchはそれぞれダークライダー同士に激突した。

『がつ!?!』

『痛い!?!』

ところが、互いの攻撃によって跳ね飛ばされるダークライダーに混じってデイレイドまでが吹き飛ばされていた。

唯一躲される直前に拳を引いたダークミラージユが神速で放った二発目のpunchが他のダークライダーの身体の陰からデイレイドを捉えたのだ。

『イイ男つてのはな、punchを外さねえんだよ』

気取った仕草で肩をすくめて迫るダークミラージユの前で次々と跳ね起きた三人のダークライダーとデイレイドが間断の隙なく跳び退き間合いを取った。

その頃には影すら残す速度でダークミラージユがデイレイドの懐まで接近していた。

だが同時に炸裂した爆音が聴こえるや否や、ダークミラージユは即座に反応した。

『!?!』

そこに飛び込んできた銃弾に、身を翻して躲したのはデイレイドだけではなく、先ほどの地点まで一瞬にして退避していたダークミラージユも同様であった。

見れば、ダークシークロスがフロントロック銃にも似た奇怪な銃器

を構えてこちらをポイントしていた。もろとも狙撃しようとしたのだ。

『てめえ魚虎！？ なにしゃがる！？』

『忌々しい。貴様のおかげで射線が逸れたぞ』

二人が言い合う内に、ダークドライとノクスルーキスがディレイドに迅速に迫る。

『さあ！僕の気持ちを受け止めておくれ！』

振りかぶったダークドライの拳に大気中の水分がまとわり付き、アームガードとリストバングルの中に充填されると、それらは遠心力によって腕の装甲の中を迸り撃ち出されたパンチの威力を増幅させた。

それは攻撃をいなすことを得意とするディレイドの力を上回り、正拳突きの軸は逸らされたものの捌いた腕ごとディレイドの体勢を崩させた。

『くらえ！正義のキック！』

丁度そこにノクスルーキスの蹴りが襲いかかる。あまりにも絶妙なタイミングなのはつまり、ダークドライの攻撃を受けたディレイドのリアクションを待つて攻撃を仕掛けた為だ。

「うーわ。相変わらずえげつない。」

傍観している瞳子をして言わしめる狡猾さ。

結局それは命中には至らず、一回転して立ち直ったディレイドとダークライダー四人が向き合う配置となった。

『はっは。ヤルじゃねえかよ。最初、跳んで逃げると思ったのによ。』

『言ったはずだ。俺の使命の邪魔をする者は、すべからく排除するとな。』

ダークミラージュの嘲笑に淡々と応え、ディレイドは間近にいたノクスルーキス目掛けて疾く走り、その胸郭に拳を叩き込んだ。

『うー！？』

虚を突かれた様子のノクスルーキスだったが、ディレイドの拳はな



ぜか威力を著しく殺がれ とん、とその胸を小突くに終わった。

『つと、無駄だよデイレイド！悪の攻撃は俺には効かない！』

瞬時に立ち直ったノクスルーキスに蹴り返されたたらを踏むデイレイド。

だがデイレイドは今の一瞬の交錯でその怪現象を見抜いていた。アンチエネルギーフィールドの類だろう。

ノクスルーキスが纏う力場は、体表付近のごく狭い範囲だが、全てのエネルギーの流れを阻害している。

運動エネルギーさえも。

最初に相打ちを誘った時に仲間の攻撃を食らっていたということは、その後に展開していたということか。

その分析の一瞬に遠くのダークシークロスの手元でマズルフラッシュが瞬いた。

瞬時に引き抜いたカレイドブレイドの腹で弾丸を受け止めるが、その剣の死角を縫って駆け込んできたダークミラージュとダークドライが拳を、蹴りを打ち込んできた。

『いま僕のこと忘れてたでしょ！？ 忘れてたよね！？』

『はあっはっはっはあ！御挨拶はまだまだこれからだぜえええ！』

二人の奇妙な特性を孕んだ連撃はデイレイドをして圧してゆく。

ダークドライの攻撃は非常に重く、打ち払うのは容易いことではない。

そしてダークミラージュの動きはとにかく素早かった。

その素早さは「クロックアップ」や「超高速移動」とはまた種類が異なり、ダークミラージュの素体である竜胆寺自身の反射速度が異様なまでに速いことに寄る。

ダークミラージュの攻撃は、デイレイドがガードしようとしたと見るやことごとく軌道を変えてヒットし、デイレイドからの攻撃は、死角から打ち込んだにも関わらずダークミラージュはそれらを全て「見てから」回避しているのだ。

接近戦に不利なカレイドブレイドを収納し、まずは攻撃動作がやた

ら大振りなダークドライを蹴り倒すが、同時にダークミラージユに軸足を蹴り払われて転倒してしまった。

『もらったっ！』

倒れたデイレイドを踏み砕こうとダークミラージユが僅かに飛び上がる。

そこへ瞬時に取り出したカレイドブレイドでデイレイドは寝転んだまま空を薙いだ。

『ちっ！？』

回避不能な空中にあつて、あるうことがダークミラージユはその不意打ちにすら反応を見せ、かるうじて宙で身を擦って反対側へ着地した。

すぐに間合いを開けるダークミラージユと起きあがるデイレイド。

ふと見ると、ダークミラージユの肩から白煙が立ち昇っていた。カレイドブレイドがかすっていたのだ。

『……ヤロウ……』

途端に据わった声で唸るダークミラージユ。

どこかだらけた挙動だったこれまでと打って変わって突然 隙のない動作で手首のリミッターに手を遣り身構える。

きゅりっ！

突如鳴り響いた甲高い擦過音にダークライダーの身動きが止まった。あるうことが、全員が変身を解除して戦闘態勢を解いてしまったのだ。

それを隙とばかりに突撃しようとしたデイレイドの前に一人の男が現れ、デイレイドもそこに立ち止まった。

派手なスーツを着こなした男は広げた両腕にそれぞれヴァイオリンと弓を掲げており、さながら喝采を浴びている音楽家のように閉じた瞳で天を仰ぎ特徴的な唇の端を吊り上げて何やら興奮と感動に打ち震えている様子だった。

「……お前が『王』か。」

その姿を見た瞬間に正体を看破したデイレイドが、自らも変身を解除しながら呟いた。

男はぱちりと瞼を開くとおどけた仕草で両手を前後に回して深く礼の態度を取ると歓迎するように両腕を広げた。

「その通り！王さまだ！　だが『王』だなんて堅つ苦しい呼び方をすることはしない。特にデイレイド。「悪魔の影法師」。お前には特別に「紅くれない・おとや音也」と呼ぶことを許してやる。なにせ俺は千年に一度の、……いや、謙遜が過ぎたかな、万年に一度の宇宙の奇跡……

天才だ！　「音也さま」と「様」を付けても構わんぞ！」

いちいち気取った仕草で己と相手とを指し示し身振り手振りを交えながらハイテンションに滔々と宣う「紅音也」なる男。

「おい王さんよ。ナニ邪魔してくれてんだよ今イイとこだったのによ」

ぎぎやりいいつつ！

紅音也の背後から竜胆寺が威嚇的な態度で詰め寄った途端、音也がいきなりヴァイオリンを盛大に引つ掻いた。

「っがあああああああッッ！？」

それは常人には不快極まりない騒音で、響いた瞬間　透を除く皆が眉をしかめたのみだったが、唯一　竜胆寺だけが耳を押さえてのたうち回った。

「あああああッッ！？　っがあああつ、くそッ！？」

「ちよつと良男！？　大丈夫！？」

「しっかりして。良男。」

「「良男」言うんじゃねえええッ！？　っがあああッ！？」

ダークアンカオスの少女たちが駆け寄るが、どうも傷に塩を擦り込んでるようにしか見えない。

「……黙ってる。ダレが「王さん」か。俺様が今しゃべっているとこるだろ」

苦悶にのたうち回る竜胆寺を冷たく見下ろし吐き捨てた音也はやが

て透に向き直ってきた。

「……まあ、かのホームラン王も偉大には違いない。おかげでこれから先 二万年ほどは宇宙は天才に恵まれないことだろうがな。」  
ころりと態度を変えて朗らかにしゃべり出す。

「熱烈歓迎が過ぎたようだな。それとも「悪魔の影法師」には今さら大した持て成しでもなかったかな？」

「問題ない。」

対照的に透は素っ気なく応えた。

「それより、お前に話がある。」

「わかつている皆まで言うな」

掌を突き出して斜に構え、大げさに頭を振りながら音也が言葉を遮った。

沈痛な面持ちを装い、立てた掌をくるりと指さしに変えて。

「お前を遣わせた奴らから俺もハナシは聞いている。礼の物を取りに来た。そうだろう？」

「うむ。」

「へ？」

離れた場所で成り行きを見ていた瞳子が怪訝な声を上げるが、誰も採り合わない。

「渡してもらおうか。」

「だがその前に俺の話を聞いてもらおう。」

はぐらかすように指先を回すと音也はそのまま語り始めた。

「この世界がどんな所かは知っているよなディレイド？ ここは全宇宙の裏面領域。当然その概念も「表」の宇宙とは異なる。」

言いながら、音也は透を遠巻きにゆったりと歩き出した。

「「表」に対する「裏」、「光」に対する「闇」のように、「多数ある表の世界」に対して我らが世界は「単一」だ。すなわちここは全ての「表の世界」の「裏」であり「闇」である。」

歩きながら音也は持ち直した弓を教師の持つポインター宜しくひよこひよこ振りながら滔々と語り続ける。

「その概念も裏返り、無力な人間は淘汰され、半端な力を持つ怪人を管理し、仮面ライダーを統制する「力による絶対支配」！これがこの世界での常識だ！……まさかそれを否定し俺たちを駆逐するなどは、言わないよな？」

「ああ。」

再び両腕を広げて宣言してから試すように弓を突きつけて問う音也に、透は素っ気なく同意した。

「当該宇宙の常識に口出しをする気はない。俺は使命の遂行にあたり、原住民の心情は斟酌しないからな。」

「イイ子だ。」

くるくる回る弓の先端の向こうで音也の顔がにやりと歪む。

「そこでだ。俺様にも使命があつてな。なにしろこの世界は「力が全て」だ。そこで、もう世界丸ごとシメちまったモンだから、やる事がなくなってしまった。ヒマなんだよ！」

再び歩き出した音也は大きな身振りではやくつつ、最後は大げさに肩をすくめて全身で退屈を表現した。

そしてヴァイオリンを担ぐとまるで楽器が腕の延長であるかのように自然に弦を操り弓が滑って華麗な音色を紡ぎ出す。

「いかに創世以来の奇跡たる俺も頂点を極め過ぎていささか退屈だ。

……だからさ。」

ゼン ウ チュ ウ ヲ セ イ フ ク シ テ ヤ ル

あるうことかヴァイオリンの音色で言葉を表現した音也は楽器を操る腕をぴたりと止めてこちらを睨み上げ、にやりと口角を吊り上げた。

「とまあそんなワケでな。最初はデイケイドに手厚いお持て成しを振る舞ったんだが敢えなく袖にされちまったんで、お前に協力を頼みたいんだけどな。」

「断る。」

透は一瞬の遅滞なく即答した。

「それは俺の使命に反する。」

「オーケイ。交渉決裂だ。」

音也も実にあっさり引き下がった。

「預かり物は俺が隠した。お前の手には渡らない。そしてお前の力を俺が頂こう。デイケイドのフォロワーバックアップの力をな。お前たち！」

透に背を向けた音也は、ダークライダーの四人に向かって弓を一振りした。

「全力で倒せ。手加減ナシだ。」

「……んだよ、結局やるんじゃないか」

未だ側頭部を押さえたままの竜胆寺が両脇を三人の少女たちに支えられながら立ち上がった。

その後ろから潤が、沙威が、魚虎が歩み出て立ち並ぶ。

そしてそれぞれ、三人の少女が龍人にそして光球に変化してリミッターに取り付き、ベルトを巻き付け、腹部に手を添えてベルトを召還し。

全員が身構えると同時に叫んだ。

「変身！」

三色の光球を三角に配し、サインを形作った両手を交差させ、大見得のポーズで影に包まれ、両腕を妖しく蠢かせ。

共通して凶々しいオーラの奔流に包まれた彼らの姿は次の瞬間には再びダークライダーに変じていた。

『ああ。残念だよデイレイド。』王『から命が下された。ウェットかつセンチメンタルな僕としては御下命に従わなければならないのが心苦しくて悲しいよ。でも』

ダークドライはマスクの巨大なセンサーの縁の水分を拭っていたハンカチをピツと放り棄て。

『やるからには全力を尽くそう。……「悪魔の影法師」相手に「

ドライ」も「ヴァッセル」もないよねえ……じゃあ』

白々しい泣き真似から一転してワクワクといった様子であれこれ手

札を吟味していたダークドライは、やおら中指と親指で輪を作った両手を舞台役者のように左右に伸ばすとマントを翻すかのようにその場で優雅にターンした。

するとその姿が瞬時に変化を遂げていた。

装甲各所が凶々しく反り返って渦を巻き、まるで沿岸地域を襲う凶暴な津波の濁流のごとき異相と化していたのだ。

『「アイネフルトフォーム」。君の息の根を止める水害の化身さ。』

言うや、ダークドライ・アイネフルトフォームが何かを捧げ持つように両掌をかざすと共に、辺りの地面が鳴動を始めた。

激震が臨界に達した途端、あちこちで鉄の円盤が吹き飛び口を開いたマンホールから汚水の濁流が吹き上がった。

『さあ！全て洗い流してあげるよ僕の涙で！跡には何も残りはないだろうけどね！』

「うひゃー!?」

ダークドライの切り札の機能により際限なく増幅された海參の能力で招き寄せられた大量の下水が津波の勢いで辺りを飲み込み、瞳子は慌てて近くの廃ビルの非常階段の踊り場まで跳躍し着地した。

『クラア！海參テーマ俺サマの超力ツコいいプロテクターが汚れんだろうが！』

同様にブロック塀に飛び乗ったダークミラージュが罵声を吐きつける。だが際限なく濁流を喚び寄せ続けるダークドライには聞こえた様子がない。

『チツ、いくら命令でも俺ア全力はゴメンだぜ!? ルージュ！ブルー！ビオレ！「スーパースターフォーム」だ！』

叫び、ダークミラージュは右手首のブランクユニットを掴んで外し、右手でベルトバックルの青のユニットを取り外すとそこに代わってブランクユニットを設置し、持ち換えた青のユニットを右手首に付け直した。

『マスター。何度も言いますが、正確には「コーディネイトフォーム」です。』  
右手首の青のユニットから、ブルーと呼ばれた少女の冷たく呆れた声が訂正した。

それには構わずダークミラージユの変化は進行した。

全身の赤、青、紫の装甲が分離して僅かに浮かび上がり、左右で配置を入れ替えると再び身体に装着された。

それだけで、全体の印象が大きく異なる。

まだ変化は終わらない。

姿を変えたダークミラージユの背部から赤の、青の、紫の突起が一本ずつ突き出し、それぞれ赤い皮膚の、青い羽毛の、紫の機械の翼に変形したのだ。

背中から三本の異様な翼を生やしたダークミラージユは すっ、と不自然な挙動で宙に浮かび上がった。

『さあて。俺サマの「スーパースターフォーム」の超力ツコいい強さを見せてやるぜ』

『ですから、「コーディネイトフォーム」ですってば。』  
ブルーの再三の訂正は届かず、ダークミラージユは疾く飛翔していった。

襲い来る汚水の津波を背後にノクスルーキスは相変わらず大見得の構えで両腕を振っていた。

己の装甲各所に埋め込まれた黒水晶・紫水晶を順に触れてゆくその仕草は、それは十字形ではないにせよ、どこか「聖印を切る」動作を思わせた。

『「正義バリアー」！』

その動作の雰囲気をブチ壊すネーミングセンスに瞳子は思い切り肩をコケさせた。

だが新たに発現された機能はいかなく発揮されたようで、なんと濁流に飲み込まれたはずのノクスルーキスがなんの痛痒もなくそこ



に立っていたのだ。

濁流に流されることなく立ち続けるノクスルーキスの足下は、よく見れば水のほうから避けて通って地面を円形に露出させており、ノクスルーキス自身を中心とした不可視の球形の力場が水を押し退けているように見える。

『俺の正義はこんなものに屈したりはしない！ 行くぞ「悪魔の影法師」！ とっつー！』

絶好調に元気良く宣言したノクスルーキスは、足場の悪さを全く無視してデイレイド目掛けて駆け出していった。

『ふん。忌々しい。忌々し過ぎて反吐が出る。あの海參と おれの相性が戦場において合致するとはな。』

吐き棄てたダークシークロスは、自らコートのようなクロークアーマーをはぎ取るとそれをふくらはぎまで埋める水面に叩きつけた。

するとクロークアーマーは瞬時に黒い渦と化し、ダークシークロスはその黒渦に飛び乗った。

『変身態のまま反吐を吐いたら、そうとう泣ける事態になるだろうね？ マスクの中が。』

『戯けたことを抜かすな。忌々しい』

ダークドライの茶々入れにも悪罵で返し、ダークシークロスは黒渦に乗ったまま水面を滑るように走り出した。

ダークシークロスの装備は、水の属性に反応し自在にその境界を操る。

ノクスルーキスと距離を空けて併走するダークシークロスは黒渦の上で銃の上部を腰の鞘に接続させると、その鞘の中から三日月のように湾曲した刃を引きずり出した。銃把を柄としたサーベルだ。

その白刃を構え、ノクスルーキスと共にデイレイドに襲いかかった。

「変身。」

《カメンライドウ・デイレイド！》

カードをドライバーへ装填しスライドカバーを閉塞させて迅速にデイレイドへと変身した透の足元を濁流が流れ見るみるうちに水位を上昇させていった。

膝下までドス黒い水に浸されたデイレイドの元へ、それぞれの持つ機能で足場の制限を無効化して走るノクスルーキスとダークシークロスが迅速に迫る。

ダークシークロスは脱ぎ捨てたアーマーコートを変化させた渦状の力場の上で、引き抜いたサーベルを振りかぶるとゴルフスイングのように足元の水を斬り上げた。

すると斬撃に釣られるように水流が立ち昇り、ダークシークロスのサーベルの動きに合わせての蛇竜のごとくたうち回るとデイレイドめがけて鋭く迸った。

それは水流を薄く研ぎ澄ました長大な水の刃。

デイレイドはカレイドブレイドの腹を立ててその水の刃を受け止めるが、断たれた水流の残りの部分はそのままデイレイドの身体に激突した。

ホースで蒔かれた水のごとく鞭のようにしなる水流の刃が複雑な曲線を幾重にも描き、続けざまにデイレイドを打ち据える。

『忌々しい。水が棒きれごときで止められるか。』

濁流を蹴立ててバランスを崩し転倒するデイレイドにダークシークロスは悪罵を吐きつけた。

すぐさま起き上がったデイレイドは足場の確保の為に近くの建造物に見当を付け、そちらへと跳躍した。

だが空中で何者かに激突され水面に叩き落とされた。激しく水しぶきを蹴散らして転倒してしまう。

『逃がしやしねえよ「悪魔の影法師」。』

浴びせられた嘲笑を見上げれば、上空でその姿を変形させたダークミラージユが三本の異形の翼を背負って空中の一点で静止していた。

『地べたを這いずり回ってるよ。滅茶苦茶にぼてくりこかしてやるからよ。』

言つや否や空中のその姿が掻き消え次の瞬間にはデイレイドの背後に殺氣と共に現れた。

『ほらよー！』

水面から僅かに浮いた位置で滞空し繰り出された蹴りをデイレイドはかろうじてブロックしたが、蹴り足を跳ね返した次の瞬間には既にその姿はデイレイドの死角に回り込んでいた。

慣性を無視する有り得ない空中機動で飛び回るダークミラージユは次々と痛撃を浴びせ、デイレイドの身体は右へ左へと跳ね回った。

力場で濁流を退けた地面に立つノクスルーキスは大仰な動作で両腕を振り、全身各部の装甲に埋め込まれた黒水晶にひとつずつ触れていった。

聖印を切る仕草にも似たそれは、ノクスルーキスの機能を発現させる為のサイン。

先ほどの強力なアンチエネルギーフィールドを発動させた時とは異なる経路で黒水晶を辿りきると、両の手甲の黒水晶と胸郭の中央の紫水晶から短剣ほどの長さの漆黒の針が突き出てきた。

『ノクスルーキスの正義の必殺技さ！』トレ・チオード『三本の釘』！ 罪深き「悪魔の影法師」よ！この釘で磔はりつけになるがいい！』

左手の甲から生えた漆黒の針を掴み引き抜くと、ノクスルーキスはそれをダークミラージユに翻弄されるデイレイド目掛けて投げ放った。

「コーディネイト」とは「座標」の意。

推力や揚力に寄らず慣性を無視した空中機動を行うダークミラージユのコーディネイトフォームはその三本の翼により重力の楔から解き放たれ「絶対座標」に対し自身の座標を変更する「ことで空間を自在に移動している。

そしてその機能は、素体である竜胆寺自身の持つ特性によってデイレイドの高速思考演算すら凌駕する速度の超高機動を發揮する。

「!?」

そこに突如飛び込んできた投射物を察知しダークミラージユは即座にデイレイドから離れ謎の射線から退避した。

二人の間を通過したその漆黒の針はデイレイドの右腕に激突するとくぐもつた異音を立てて針の長さを直径とする空間を丸く抉り取りデイレイドの右手を削り飛ばした。

「テメエ！なにしやがるッ!?」

泡を食ったダークミラージユが針を投げ放った張本人・ノクスルーキスに向かつて怒鳴りつけた。

「なにつて。正義の必殺技さ。」

対するノクスルーキスはしれつと言い返し、続いて己の身体から生えた針を二本引き抜いた。

「今の俺に当たるところだっただろ!?」

「君が押さえててくれれば、もろともデイレイドの頭を吹き飛ばしてやれたのになあ」

「てんめええええ!?」

仲間を巻き込むことを厭わないノクスルーキスの発言にダークミラージユが激昂した。

「トレ・チオード三本の釘」はノクスルーキスの持つ局所重力制御機能の一端。

三発しかなくその効果範囲は極めて小さいが、針が穿った指定の空間にあるあらゆる物を効果半径を境に硬度の区別なく球状に切り離し、飲み込んで超縮壊をかけたどこかへと消し飛ばしてしまう。

宇宙外物質であるカレイドブレイドで弾き返そうとしても、その空間掘削範囲はカレイドブレイドを越えて発揮されるであろうことを、喪失した右腕の先を眺めながらデイレイドは看破していた。

盾にしたカレイドブレイドは無傷でも、デイレイドの上半身を丸ごと抉られるに違いない。

「チッ！コイツは俺の獲物だぞ！」

「知ったことじゃないね。正義を成すには犠牲は付き物だしさ！」  
改めてダークミラージユがデイレイドに襲いかかるが、構わずノク

スルーキスが漆黒の針を投擲したのを見て慌てて軌道を変えた。デイレイドもノクスルーキスの投擲体勢を見て回避行動に移る。

『忌々しい。貴様らまとめて海の藻屑となるがいいわ』

波を蹴立てて水面を旋回してきたダークシークロスが怨嗟を吐きながら水流の剣『レイヤースライサー』を一閃させ、逃れる隙のない広大な斬撃を放ってきた。

その水の刃の範囲はダークミラージユとデイレイドとノクスルーキスの三者を捉えて余りあるほど巨大。

だがダークミラージユは呆気なくそれを躲し、残ったデイレイドとノクスルーキスを激しく打ち据えた。

『痛い！？』

脇腹に水圧を喰らい「く」の字に折れ曲がって吹き飛ばされるノクスルーキス。

だが既に投げ放たれた二本の漆黒の針は、一本は明後日の方角へと逸れていったが、同様にバランスを崩したデイレイドの左足に激突し片足を周囲の水と地面ごと丸く削り飛ばしていた。

さすがに体勢を維持できずデイレイドは転倒してしまう。

ちなみにこの間も非常階段の踊り場に座る瞳子は眉ひとつ動かさず、楽しそうな顔で成り行きを眺めていた。

すかさずダークミラージユがデイレイドに襲いかかるが、蹴り飛ばす直前に水面が隆起し手足を喪失したデイレイドを飲み込んだまま水柱が高く高く伸び上がっていった。

『さあて。そろそろお別れの時間だね悲しいよデイレイド』

『海参！てめえもツ！？』

この洪水のような水浸しの環境を作り上げた張本人であるダークドライが白々しく惜しみを告げながら、同様の能力で大量の水を操っていた。

『ウェットかつセンチメンタルな僕としてはすっきりさっぱりとし

たお別れなんてしたくないよ。……だからじっくりねつとりねちつこく送ってあげるよ。地獄までね』

水を操っているのはライダーシステムによって増幅された潤の持つESPであり、本人は悠々と気取った仕草で白々しくマスクのセンサーをハンカチで拭っている。

ダークミラージュの恫喝も聞かず、ダークドライ・アイネフルートフォームは一帯を浸す水を掻き集めて作り上げた巨大な水柱の頂点にデイレイドの身体を掴み上げ、水を操り、まるで腕のようにしならせると近くの廃ビルの壁面にデイレイドを叩きつけた。

鉄筋コンクリートの壁が粉々に砕ける程の勢い。

だが水柱は瓦礫の中からデイレイドを引きずり出すと再び持ち上げ、反対側のビルに叩きつけた。

水中にあっては手がかりが何もないため脱出は不可能。

デイレイドはダークドライの成すがままあちこちのビルに叩きつけられていった。

各ダークライダーの機能・能力は、それぞれ本家をモチーフとしてアレンジし考案してみました。

なかなか厄介なものに仕上りまして、まとまってかかられると対処も一苦労。

まだまだ隠された能力もあり、果たして透はいったいどうやってこの苦境に対処するのやら。

拍手を押して下さる方。コメントまでつけて下さる方。大いに励みに癒しになってますありがとうございます！

そしてキャラクター人気投票のほうも付けて頂きましてありがとうございます。ごさいます。前回の発表からまた動きがありましたので、第二回中間報告などをドカンと一発。

あれから、ぐんと得票を得まして、二位を大きく引き離して瞳子が一位を独走中であります。ありがとうございました。

そして最近やけに影が薄くなりつつあった主人公・透がかなりの差を開いて二位に。

その影のうっすい主人公を背後から追走しているのが、辛い別れを経験した初ちゃん。この娘の上昇率がパないです。

数票差を空けて、わかっていないお兄ちゃん双葉 恭也が四位。

以上、前回に続きましてこのオリジナル勢がわりと団子ぎみで本当にありがたいことです。ただ、一位の瞳子と二位の透の間の開きっぷりに作者もびっくりしているところです。いやむしろ当然の流れかあの唐変木。

次に、五位・剣立 一真、六位・天堂 総司と順番に続き、その後にはザ斬鬼、台場 和馬、各務 新、尾上 巧、ディシエッドなどが横並びしております。

シナリオの展開時期の影響か、剣立 一真の伸びが異様でいつの間  
にやらこの位置にいました。

その後を、芦河 翔一、葵 遥、音無 美穂が肩を組んで追走。夫  
婦漫才コンビが定着しつつあるのか。

続いてヴァイオラ、シーザー、片瀬 秋乃、イマジン・アリスの電  
王組が同列、そして後もぱらぱらと票を頂いております。

各キャラ、活躍時期の影響もあるかと思いますが、全体的にキャラ  
クターの表現を認めて頂けてるようで、どこに票が入るにしても作  
者として大変ありがたいことでもあります。

特に期限も投票制限も決めていませんので、また気が向いた時にで  
もぼちりと入れて頂けるとありがたいです。

そして、もう既に気がついている方もおられるかと思いますが、キ  
ャラ投票の設問に、「好きな瞳子はどれ？」というのが加わりまし  
た。

世界を渡る度に現れた、同一人物なのにどこかが違う瞳子たち。

その中にお気に入りがありましたら、よろしければ教えて頂きたい  
です。

それでは、今後ともよろしくお願い致します！



デイレイドを取り込んだ水柱が立ち並ぶ廃ビルを立て続けに横薙ぎに貫き倒壊させた。

瓦解し崩落する瓦礫の中から黒く濁った水が吹き出し、ひび割れたアスファルトにボロボロのデイレイドを吐き出して散らばった。

デイレイドはひどい有り様となっていた。

右前腕と左脚は既に失っており、残る手足も所々で折れており有り得ない方角へと捻じ曲がってまともに用を成すとは思えない。

全身の装甲も凹み、歪み、ひび割れ、マスクのセンサーもライドピラーも至る所が欠けており、満身創痕という表現すら生温い。

投げ出された路上で最早びくりとも動かないデイレイドの元へ、四人のダークライダーが集まってきた。

『ああああ。俺サマの分が残ってねエじゃねえかよ』

『そりゃあ、正義を成すのは何時だってこの俺だからね!』

『ウエットかつセンチメンタルな僕は、出会ってからずっとお別れのことばかり考えていたんだ。本当は、こんなんじゃあちつとも足りないんだけどさ』

『忌々しい。これ以上手間をかけさせられてたまるか。』

半壊したデイレイドの身体を四人が取り囲む。

『ご苦労だった。お前たち。』

そこへ、紅 音也が歩いてきた。

「どけ。下がっていいぞ」

居丈高な態度でダークライダーを追い払うと、渋々といった調子で最後に離れたダークミラージュにびっぴと手を振り、音也はデイレイドの傍らに立つと、物憂げな顔でデイレイドのひび割れたマスクを見下ろした。

「……ふん。「あいつら」の言う宇宙の接触崩壊など、俺様にとってはなんの意味もない。侵略し、破壊し、支配する。そして、後の

「ことなんか知ったことじゃあない。」

ポケットに片手を突っ込み、人差し指をひよこひよここと振りながら、特に後半を囁くように言う。

「それがこの世界の、この俺の考え方だ。それをさも同類のように考えて扱う「あいつら」には、魚虎の奴じゃあないが、実に反吐が出る思いだ」

言い聞かせるように顔をしかめてひよいひよいと手を振りながら弁舌を振る音也は、やおらデイレイドの腹を勢い良く片足で踏みつけた。

「だからだ！ 救うだのなんだのとフザケたことをほざいている「あいつら」と纏めて全部ぶち壊してやるよ！」

突如激高した音也がデイレイドの腹に立て続けに靴底を叩き込む。

「なにもかも！ なにもかもだっ！」

そしてやおらしゃがみ込んだ音也はデイレイドのマスクの顎を掴み上げた。

睨め付けるように欠けたセンサーを覗き込む。

「……デイケイドも相当聞き分けが悪かったが、お前もまさか本気で「あいつら」の言うことを鵜呑みにしているのか？」

デイレイドからの反応は、ない。

「は！ 度し難い阿呆だ！ おめでたいなどいつもこいつも！」

デイレイドの頭を放り捨て、音也は立ち上がった。

振り向いて、四人のダークライダーに向かつてぞんざいに手を振る。

「例の所に持っていけ。解析して作戦を実行する」

『奇遇だな。』

突如、背後から掛けられた声に、音也と、こちらに歩み寄ろうとしていたダークライダーたちがびくりと体を強ばらせ身動きを止めた。俺も同じことを考えていた。俺も使命を完遂した後のことはどうなるうと知ったことではないんだ。』

恐る恐る、といった様子で音也は振り向いた。

有り得ない。こんな素っ気ない調子で語れる声の主の状態ではなか

つたはずだ。

なのに、確かに壊れているディレイドの身体から、ディレイドの声で平静な呟きが滔々と流れ出てきている。

『「度し難い阿呆」という言葉が示す定義を俺は良く知らんが……いま解析した。なるほど、俺を基点とするとお前たちは「度し難い阿呆」ということになるな。』

「……………貴様ア」

肩越しに、怒りに歪んだ音也の目が白眼比率を急上昇させ全身をぶるぶると震えが走る。

> i8240—538<

『俺の使命を邪魔する者は、すべからく排除する。俺の宣告は覆らない。……………できるなら、この手段は使いたくはなかったが。』

非常階段の上で瞳子は驚きに目を見張った。

透が「できれば・使いたくはなかった」などと「忌避の」「感情に基づく」言葉を使ったことに心底驚いていた。

ところがその驚愕の渦中、瞳子は己の内から迫り来る謎の圧力と急激な倦怠感に見舞われ、錆だらけの非常階段の踊り場の床にどさりと倒れ込んだ。

「貴様……………なにを偉そうに……………自分の有り様が分かっているのか！？」 満身創痍の分際でツ！」

激高した音也は横たわる半壊したディレイドの脇腹めがけて癩癩のままに思い切り蹴りを叩き込んだ。

だがその蹴り足は、ディレイドの右手によって至極あっさりと受け止められていた。

「『!?!?!?』」

その場にいる全員が息を飲んだ。

全身を半壊させ倒れていたディレイドの姿はなく、煤ひとつ付いていない美しい装甲を持つ四肢五体を備えた無傷で完全無欠の姿のデ

イレイドが片膝立ちの姿勢で音也の蹴り足を掴んでいたのだ。その変化はあまりにも唐突で不自然。

仮面ライダーならば誰しも変身時のエフェクトに身を包まれるのが道理。

だが今イレイドの身に起きた変化は、ダークミラージユの眼を以てしてもその変化の前後の瞬間の境目を捉えることができなかった。

「……………うそだろ……………」

竜胆寺が呆然と呟いた。

「『システム・ディケイド』が一柱。フォローバックアップモジュール・ディレイドの本来の力を見せてやろう。」

音也たちが気付くことはなかったが、そのディレイドの宣告と同時に瞳子の精神の深奥にさらなる圧力が加わり、瞳子は再び苦悶に身を振らせた。

## クウガの世界

辰巳 真司がミラーモンスターに対処している間、その区画へ至る道路を封鎖した交差点で交通整理をしていた警察官の瞳子が、突如脱力して路上に倒れ込んだ。

## 龍騎の世界

「ハアイ マイハニー瞳子！今日も綺麗だね可愛いね ボクのお嫁さんになってくれないかい？」

「あの今仕事なのであつち行って……………」

弁護士事務所の中で、ぬいぐるみのパペットを両手に装着して戯れる糸矢に、書類と格闘している瞳子はぞんざいに手を振る仕草の途中で突然、くたりとデスクに突っ伏して動かなくなった。

## アギトの世界

「はるかさんはるかさんっ！この服なんてどうですかっ！？ すっごく可愛くて似合うと思うんですけどっ！」

「……あー。」

ブティックに連れ出された遙は、代わるがわる押し当てられるキヤミソールに曖昧な相槌を打っていた。

好意はありがたいのだが、未だにこの瞳子のノリには付いて行けない。

「あ！これなん」

歓喜の声の途中でクロークハンガーを薙ぎ倒して転倒し、それきり動かなくなつた瞳子に遙はさすがに泡を食って駆け寄つた。

「と、瞳子！？ 瞳子！？ どうしたの！？」

## キバの世界

「くっくっく。弦の弾き出す音色を聴いちゃあ黙っておれんな……」

「あの。レッスンの邪魔ですから……」

キング・渡とのヴァイオリンのレッスン中に突如ベースを担いで割り込んできた斬鬼に、瞳子は苦笑しながら掌を振って遠慮した。

「さあ！貴様等の魂の音撃を俺に聴かせてみる！」

「ですから」

微かに困惑した様子で、でも楽しげにその遣り取りを眺めていた渡だが、瞳子が脈絡なくいきなり転倒したのを見て渡を含む全員が一斉に血相を変えた。

落下したヴァイオリンが派手な音を立てた。

「先生っ！？」

「小娘！」

## 響鬼の世界

顔や腕など至る所が絆創膏で埋め尽くされた各務 新が不機嫌な顔で道場の縁側に座っている。

「……あ、あの。各務さん。お茶です……」

「、ああ、ありがとう瞳子ちゃん」

傍らに正座した武道着姿の瞳子から、湯気が立ち昇る熱々の湯呑みを受け取る。

「あ、あの、あんまり、無茶しないでくださいね」

「う、うん。」

相変わらず、自分の知る瞳子とのギャップに困惑している新であったが。

「あ、あんまりお怪我されると、わ、わたし」

その瞳子がお茶を手渡した位置でなにやらもじもじと喋り出したのだが、唐突に言葉を切って黙り込まれ、怪訝に思った新はそちらを振り向いた。

「……ん？どうかした？瞳子ちゃ」

いきなり脱力した様子の瞳子に肩にもたれかかれ新は慌てふためいてその身体を受け止めるが、取り落としたお茶を膝にぶちまけてしまい悲鳴をあげた。

「あじゃああああっ！？」 と、瞳子ちゃん起きて起きて！あじやあああああ！？」

## カブトの世界

「……ふむ。お嬢さん、ちょっと待て」

街を歩いている途中、歩道の真ん中でいきなり立ち止まった台場和馬に合わせて立ち止まり、瞳子は訝しげに振り向いた。続いて天道 総司も立ち止まる。

「なによー？」

「ふむ。天道。お前、あと一步こちらへ来い」

「なんなんだいったい」

言いながらも天道は指示に従い位置をずらした。

歩道の真ん中で、台場はいつたい何を始めようと言うのか。瞳子はサンバイザーのツバを摘んで捻り、訝しげな面持ちのまま待っていた。

そしてそのまま崩折れ、ちょうどそこにいた天道の腕の中に納まった。

「よし。」

「いや。「よし」じゃない。何事だこれは」

## 電王の世界

「キングライナー・ステーション」のティールラウンジで、頭を抱えている恭也を囲んで瞳子とアリス、シーザーとヴァイオラがテーブルでお茶やケーキを満喫していた。

「答えの出ないことで悩むだなんて時間の無駄よ？恭也。」

「人生、後悔後を絶たずと言う。うかうかしている暇はないぞ？」

「あんたも傷に塩塗るのも大概にしときなさいよね」

珍しいことに恭也が無反応な為、瞳子が代わって窘めた。

「まあ、あたしの記憶を通じて初ちゃんの無事は分かるから、そこは安心しなさい」

半分呆れ気味に言った瞳子が途中でスツールから転落した。

「瞳子！？」

隣のアリスが慌てて倒れる瞳子にすがりついた。

## ブレイドの世界

『どつつせいやあああああ！』

ワケの分からない怒声を上げてオルフェノクを粉碎するカイザの後ろ姿を、瞳子と剣立 一真が腕組みしながら眺めていた。

「……なんか、ある意味懐かしいノリだなアイツ。」

「まあ、現役のやんちゃ坊主っスからねえ」

「あはは……」

初が曖昧に苦笑する。

が、唐突に瞳子がくたりと膝を落とし、路上に転がったことで初は血相を変えて瞳子にすがりついた。

「お姉ちゃん！？ 瞳子お姉ちゃん！？」

「お、おい瞳子！すっかりしろ！」

## ファイズの世界

「……あのさ。由里ちゃん、人物は撮らないんじゃないかなかった？」

「まあまあ。いいからいいから」

なにやら上機嫌な由里に押しつけられたエプロンドレスを身に纏い、困惑した顔で瞳子は撮影ブースに立たされていた。

「神楽見さん。似合うよ」

「黙れ。あたしに色目使う暇があるなら、そういうことは由里ちゃんに言っとけ」

「い、いや僕そんなつもりで言ったんじゃない……」

「はい撮るよー」

遣り取りに苦笑しながら由里はファインダーを覗き込んだが、なぜかそこにいたはずの瞳子の姿が消失していた。



「神楽見さんっ!?!」  
巧の絶叫にカメラから顔を上げた由里が見たものは、ブースで倒れ込んでいる瞳子の姿であった。

## ネガの世界

片膝立ちで今だ音也の足を摘んだままのデイレイドから立ち昇り始めた不穏な気配を敏感に感じ取り、音也を始めダークライダー四人も身構えて僅かに後退った。

デイレイドは特に固執することなく摘んでいた音也の足を手放して解放し、一步、二歩と後退る音也の前でゆったりと立ち上がった。やがてダークライダーたちの見つめる前で、デイレイドのマスクの青いセンサーが輝きを放ち、さらに蒼い炎のようなオーラが溢れ出て立ち昇り始めた。

それと共に、蒼い炎の中のセンサーがその輪郭を変形させてゆく。さながら、激情に心を焦がす悪鬼のような形相へと。

センサーの上の縁を揺らめく炎のように鋭角に釣り上げて、やがて蒼い炎は鎮まり消え去った。

「……………なんだ……………それは……………」  
音也が、僅かに恐れを含んだ声で問いかけた。

『お前たちは見たことがないか。もしデイケイドの機能が万全な状態であったなら、俺よりも五割増しの力を体感できたであろうな。もっとも、ここでデイケイドがこの機能を発現させていたなら、俺の出番はなかっただろうが。』

「それはなんだと訊いているんだっ!?!」  
デイレイドの言葉を遮って音也が絶叫した。

まるで余裕を失った様子の音也は、気取ることも、居丈高に振る舞うこともできないほど追い詰められているようだった。

『それは先ほど言っただろう。本来の力を見せてやると。』

言って、デイレイドは一步踏み出した。

「か、かかれえっ!? 全力で破壊しろオツツ!?」  
指先を突きつけた音也の絶叫に、背後から四人のダークライダーが駆け出していった。

「は! ヤベえ感じがゾクゾクするぜえ! いいじゃねえかよこんくらいじゃねえと戦ってる気がしねえぜ!」

駆けるダークミラージユが吐き捨てるように氣勢を上げるが、多分に自らを奮い立たせる為の虚勢が混じっていることに、ユニットの中の三人のダークアンカオスの少女たちは気付いていた。

「いいぜ! 全力でやってやんよ! ルージュ! ブルー! ビオレ!」  
「ナイスガイフォーム」だ!」

「ちよつと!? マスター!?」

「正確には「ダークネスファイナルフォーム」です。」

「やつちやえやつちやえ」  
ユニットの中からの声には応えず、ダークミラージユはまずベルトバックルの両端のフレームを左右に引くと、ブランクユニットを外し、広がって空いたバックルのスペースに両手首から外した青と紫のユニットを装着した。

本来は二基までしか入らないバックルが拡張され、赤と青と紫の光を納めたユニットが三基並んだことで、ダークミラージユに変化が起きた。

全身の赤、青、紫の装甲が分離して浮遊し、その配置を半回転させて上下を逆に装着された。それによってダークミラージユは再びその意匠の印象を大きく変化させた。

背の三本の翼はそのまま、まるでスマートな悪魔めいた異様に変身したダークミラージユ・竜胆寺が言うところのナイスガイフォームは走る勢いから浮上するとデイレイドめがけて飛翔していった。

「おりゃああああ喰らいやがれえええええ!」

この場にいる敵性要素の中で最も高い速度を持つ仮面ライダー・ダークミラージュが最終最強フォームを発揮し仲間を置き去りにして単独で襲いかかってくるのを捉えたデイレイドは、そのダークネスファイナルフォームの機構を看破すると、やおら片手を上げて虚空を掴む動作をし、それを脇へと放り捨てるように腕を下げた。

その途端、こちらへ一直線に飛翔してきたダークミラージュがいきなり失速した飛行機のように墜落し地面に激突した。

『おわー！？ なんだなんだああ！？』

『たいしたことではない。今のお前の足掛かりであるこの空間の「座標」自体を高次元から經由して干渉し傾けてやっただけだ。』

『なんつじやそりゃああああ！？』

『そして、位置エネルギーを空間の座標に依存した今のお前は、同様に絶対座標を操ることでお前の位置を制御できる。こんなふうには体勢を立て直せないまま地面を跳ね回ったその絶叫は、不自然な軌道を描いて近くの廃工場のトタンの壁を突き破り、無様に飛び込み消えていった。』

高次元より干渉しジカに投げ飛ばしたのだと理解した者は他に誰もいなかったが。

ダークミラージュとの交錯の間断を突いて飛び込んできたノクスルークスの蹴りを、そちらも見ずにかわしていたデイレイドは改めて大仰なポーズで構えるノクスルークスに向き直った。

『負けるもんか！たとえ相手がどんなに凶悪な悪魔でも、最後に勝つのは必ず正義だ！』

『俺は「悪魔」と名乗った覚えはないのだがな。それと、「正義」とやら言う大儀の勝率の高さは知っているが、「お前の」勝率は限りなく低いぞ。』

それを聞いた途端、ノクスルークスの構えた拳がぶるぶると震え出した。

『……うつるさいバカ死ぬバカ今すぐ跡形もなく消してやるぞばか

あああああ！』

これまでのどこか芝居があった言動は掻き消え、ノクスルーキスはまるで幼い子供のように癪癪を起こして地団太を踏むと、全身の黒水晶と紫水晶を再び別のルートで両掌で辿ってゆく。

やがて指定のエネルギー経路を形成したノクスルーキスは、今度は大見得ではなくなったただ両腕を広げた。

途端に全身から紫色の「暗い光」とも言うべき光条が迸り、デイレイドを迅速に通過するとデイレイドの後方に突如新たな人影が現れた。

その紫の光線自体が無害であることは、見た瞬間に看破している。

デイレイドの背後に現れたそれはまさに、ノクスルーキスを光源とし、デイレイドを遮蔽とした影。

その「影」は、ノクスルーキスと同じ形状をしており、ただしそのカラーリングは反転した配色となった存在。黒地のボディスーツの上に、白いラインが中心から放射状に描かれたような装甲。

ただし、その色が反転したノクスルーキスの「影」の正体が「人型をしたブラックホール」とでも言うべき異常領域であることも、デイレイドは見た瞬間に理解していた。

ヴァリア・ケルチス

『『十字架の道行』！ 闇の彼方に消し飛ばしてやるぞデイレイド

おおおお！』

絶叫し駆け出すノクスルーキスに同期して、背後の「影」も同時にデイレイドへと駆け出した。

そして前後同時のハイキックがデイレイドを挟み込むように襲いかかる。

だがそのハイキックを始め、次々と繰り出される前後のノクスルーキスの連撃をデイレイドは淡々と捌き、ノクスルーキスの足を絡め取り大きく腕を回すと難なく投げ飛ばしてしまった。

続いて後ろの「影」にも裏拳を見舞うと、本来は触れることすらできない疑似ブラックホールであるはずの「影」を激しく叩き倒してしまった。

他のダークライダーが手を出してこないのは、敵味方に見境のない  
ノクスルーキスの機能を恐れていたことだった。

「ヴァイア・クルーチス十字架の道行」を発現させたノクスルーキスに近付けば、その疑  
似ブラックホールにもるとも飲み込まれかねない。

だというのにそれをものもしないディレイドの攻防に、「ヴァイア  
・クルーチス十字架の道行」の干渉を全く受け付けない」その異常に残りのダークク  
イダーは戦慄していた。

『くつ、くそつ！くそつくそつ！俺は、負けないんだッ！』

地面を何度も殴りつけたノクスルーキスは、やおら立ち上がると改  
めて身構え、己の能力を全解放し始めた。

『うおおおおおお！』

再び放射された「暗い光」が本体と「影」を繋ぐと、ディレイドの  
いる地点から「影」までの間の空間が歪み、「影」の胸の水晶の一  
点を中心に引き込まれ始めた。

周りから見れば、布の端を引っ張ったようにディレイドの姿が歪ん  
で見えたことだろう。

ディレイドの体自体が歪められている訳ではなく、ディレイドの周  
りの空間ごとたぐり寄せられているのだ。

『これで終わりだ！このまま宇宙の深淵の彼方まで蹴りこんでやる  
ぞ！』

風圧とは異なる吸引力を發揮した「影」と挟み撃ちするように駆け  
出すノクスルーキスだったが、ディレイドはここまでされても素立  
ちの状態のまま冷静にノクスルーキスを待ち受けていた。

『……宇宙の深淵の彼方？ むしろそこは俺の庭だが。』

ディレイドは、いつの間にか空間歪曲の束縛から脱していた。

『……………え？』

そして引き抜いたカレイドブレイドを振るい、空間歪曲によってデイレイドとはほぼ無限の距離を開けているはずの「影」を難なく袈裟掛けに両断すると、振り返りざまに迫る蹴り足を叩き落とし、間断の隙なくノクスルーキスの腹部をベルトバックルごと刺し貫いた。

『……あ……』  
僅かなスパークを迸らせたあと機能を失い、ベルトを残して変身を解除させられた沙威は腹を押さえてふらふらと後退って座り込んだ。

『さて。次はどいつだ』  
デイレイドは水平にしていたカレイドブレイドを下げ、撃破の感慨もなく、ただ問いかけた。

それきり辺りは静寂に包まれ、風のうねる音がやけに目立った。

『……いまのは……なにを、したのか……な……？』  
ダークドライが、呆然と意図せぬ問いを漏らした。

『この活動体を消失する訳にはいかなかったのだな。』  
その呟きを質問と判断し、デイレイドは己の胸に手をあて素っ気なく返答した。

『空間歪曲が及ばない位相に移動した。それだけだ。』  
『くっ！？』

悠長に会話されていたことによろやく気付いたダークドライは我に返り、再びアイネフルトフォームの機能を全開にして一帯のマンホールの底から大量の濁流を喚び出した。

『なに言ってるのかよく分からないけれど、またべっこべこにしてあげるよ！』

渦を巻いて取り囲んだ濁流がデイレイドを掴み上げようと中心で吹き上がり、巨大な水柱がそこに立ち上がった。

だがデイレイドはまるで何事も無いように地上に立っている。そしてそのまま歩いて水柱から出てきた。

『はい？』

『無駄だ。俺はそこにはいない。』

水滴ひとつ纏わずに歩くデイレイドが、己の胸をつつきながら呟いた。

『そして、これ以上は説明してやれない。』

言って、事の異常に呆然とするダークドライにあっさり接近するとカレイドブレイドを振りかぶった。

するとデイレイドのライダーズクレストを描いたカードのヴィジョンが目の前に現れ、デイレイドは瞬時にカードのヴィジョンごとダークドライを横薙ぎに斬り倒した。

『！！』

地面に激突し壊れた玩具のように激しく回転して吹き飛んだダークドライは遠くで大爆発を起こし大量の白煙のような水蒸気を撒き散らして消滅してしまった。

断末魔すらない。

爆発跡には塵も残ってはいなかった。

『おのれ……！？ 忌々しい「悪魔の影法師」よ！』

見せつけられた、あまりにも一方的で異常な暴虐に憤怒の氣勢を吐き、ダークシークロスは自らクロークアーマーをはぎ取るとそれを裏返しにして再び羽織り直した。

現れた裏地には複雑かつ怪奇な文様が刻み込まれており、ただでさえ異様なダークシークロスの禍々しさを増幅させている。

そして腕を通して装着した途端身体中から黒い炎が吹き上がり、装甲とマスクの所々を鋭角に尖らせ変形させて消失し変化は完了した。

『「マリーセレストフォーム」。殴るもかわすも叶わぬ恐怖を以て貴様を消し去ってくれよう……』

怨霊のごとき形相となったマスクで呪詛のように呟いたダークシークロス・マリーセレストフォームがベルトバックルの前に両手をかざすと、中央にはめ込まれた宝石が禍々しい光を放ち始めた。

それはダークドライの制御を離れて散らばった水たまりに干渉すると、それらを霧に変え、瞬間に辺りを覆い尽くした。

ダークシークロスの姿が霧に掻き消える瞬間、マリーセレストフォ

ームのその姿が三つに増えて各々霧の彼方に消えていった。

『「フロリアン・トライアングル」。おれの姿が見えまいディレイド。次に会う時は貴様の終焉だ』

それがこの霧を構成する機能の名か。濃密に漂う霧は、光すら阻んでいるようで薄暗い。

いや。確かに光の進行に干渉している。この霧はただの異常気象現象ではなく、マリーセレストフォームの能力なのだろう、あらゆる波動の進行を阻害するハイパージャマーである上、空間にまで異常干渉しディレイドの位相変換を僅かながら制限している。

『ほう。』

その現象を看破し、ディレイドはカレイドブレイドをぶら下げたまままだ、待った。

『……』

ダークシークロスは、とどめを放つ際に声を上げることとはしなかった。

音も光も気配も遮り空間すら断絶させる「フロリアントライアングル魔の海域」の中で、突如周囲に出現した三体のマリーセレストフォームが同時にサーベルでディレイドの首めがけて斬撃を放った。

だが振り切ったサーベルの軌道上にディレイドの首はなく、僅かに身を沈めたディレイドの突き出したカレイドブレイドが本体であるダークシークロスの腹をベルトバツクルごと刺し貫いていた。

『波動を何もかも遮ったところでお前の存在が消えて無くなったわけではない。』

ベルトを破壊した剣を引き抜き、ディレイドは再び剣を振り上げて出現したカードのヴィジョンごとダークシークロスを叩き斬った。

『今の俺がいる場所は、もうそんな次元をとうに越えている』

『ツグオオオオオオ！？』

ディレイドの解説は、己の発した断末魔によって聞こえていないだろう。

ダークシークロスは斬撃に吹き飛ばされ彼方で爆発した後、無数の



怨霊のような黒い風に包まれて消え去ってしまった。

広大な廃墟の街に、再び静寂が舞い降りた。

カレイドブレイドを振り切った姿勢から剣を下ろして素立ちに戻ったところではちり、ぱちりと手を打つ音が、辺りのひび割れた壁に反響して静寂を乱す。

音也が、ぞんざいに拍手を打ちながら、相変わらずの横柄な歩き方でやって来たのだ。

「さすがだ、デイレイド！「悪魔の影法師」の雷鳴は伊達ではないな。……そう、「創世以来の奇跡」の次くらいには……な。」にやりと口の端を歪めた音也は指先をちよいと突きつけて笑う。

「例の物を渡してもらうぞ。」

だがデイレイドは採り合わずにすたと音也の方へ歩き出した。

「いいだろう！聞き分けの悪い子のお仕置きは俺様の最も得意とするところだ！その力、腕ずくで俺のモノにしてやる」

差し出した掌を胸元に添え、両手を揉み合わせた音也も自らデイレイドの方へと歩き始めた。

「ッ！おおおおおおおおお！」

だが唐突に絶叫が響き、彼方から人影が走ってきた。

それは先ほど吹き飛ばされていた、漆黒の悪魔の異相に赤と青と紫の装甲を纏った仮面ライダー　ダークミラージユ・ダークネスフ　アイナルフォームだった。

「っがああああああ！デイレイド！くそつたれがああああああ！」  
苛烈な怒気を孕んだ罵声をあげるダークミラージユは、座標変換による飛翔ではなく脚による全力疾走で地を蹴り駆けてくると、これまでとは打って変わって非常に激しく荒々しい拳を、蹴りを繰り返して来る。

「があっ！っがああああっ！」

動く度にまるで猛獣のように吼えるダークミラージユだが、その連撃はデイレイドにかすりもしない。

むしろ攻撃の速度は増しているというのに、デイレイドは首を傾ける、肩を引くなどと最小限の動作で拳の、蹴りの数ミリ横を通過していた。

『くそがつ！くろえ！くろいやがれええつ！』

相変わらず猛るダークミラージユはダークネスファイナルフォームの機能をなおも開放し、攻撃速度を上昇させた。

身体が仄かに光り輝き始め、発生した圧力が塵を舞い上げる。

『うおおおおおおお！』

その動作はまるで動画の早送りのような超高速。

対するデイレイドも同様に僅かな仕草でかわし続けるが、やがてダークミラージユの攻撃を掌で受け止めた。

『がつ！？』

だが苦悶の声をあげたのは、なぜかダークミラージユの方であった。

『くそがつ！ナメてんじゃねえぞコラあ！』

再び攻撃を再開するダークミラージユだが、目の前で起きた怪現象にマスクの下で狼狽に呻いた。

攻撃を受け止め続けるデイレイドのその掌は、防御の為の動作ではない。

なぜかダークミラージユの攻撃した箇所には、既に掌があるのだ。

『な、ば、バカにしやがってえええええ！』

意味が分からない。まるで待ちかまえていたかのようなタイミング。だがその怪現象は竜胆寺の怒りの火に油を注いだ。

『うおおおおおおお！』

やがて音速の壁を叩き始めたダークミラージユの連撃。

だがそれはデイレイドに顔面を掴まれたことで唐突に中断させられてしまった。

『……………あ？』

ダークミラージユの纏う光も消失してしまう。

『識域を二秒先まで拡張させていた。今の俺は二秒ほど先にいたのだが、どの経路を辿っても、ここら辺がお前の「詰み」だろう。』

二秒先にいた？

竜胆寺がその言葉の意味を捉えるのを待たずにディレイドは続ける。『それと、お前の持つ特殊能力は「良い男」とか言う曖昧な評価事項ではなく、「神経の異常発達」だな。生身にしては高い能力だが、殴る拳にも地を踏む足にもひどい激痛が伴うだろう。その為のリミッターだったな。だが、変身時の倍力機構は身体に掛ける負荷を増やし、激痛のレベルも上がる。その強い激痛の信号は、ベルトの中にいる媒体を活用すれば緩和、ないし消去できるだろうに、なぜ今それをしない』

ディレイドの指摘に竜胆寺は顔面を掴まれた状態のままぎくりと狼狽えた。

『いずれにせよ、お前のその選択は不合理だな。』

そして竜胆寺が反論するより早く、顔面を手放したディレイドのカードブレイドが閃いた。

それに同期して二人の間の空間にカードのヴィジョンが出現する。

> i 8 2 4 1 — 5 3 8 <

『あいつらに「痛み」なんかやらねえよ！テメエの知ったことかあツツ！？』

『……………』

カレイドブレイドが奔る刹那にダークミラージユが絶叫したその途端、なぜか半透明のカードのヴィジョンが触れもせず消滅し、ただの斬撃となった剣がダークミラージユを吹き飛ばした。

ベルトに横一文字の刻み目を付けて。

たちまち装甲を溶け崩れさせ変身を解除された竜胆寺が腹を押さえ、数歩たたらを踏み尻餅をついて座り込んだ。

ところが、良く見ればベルトのバックルに装着されていた、三人の少女が収まったユニット、アンカオスターミナルがなくなっている。遅れて地面に散らばった音の方を見れば、三色のアンカオスターミナルが遠く離れた場所に落下したところでそれぞれから人間態のルージユ、ブルー、ビオレが飛び出てきた。



突きで跳ね返し、華麗なハイキックで竜胆寺を吹き飛ばした。

いちいち襲う激痛に悶える竜胆寺の身体は、離れたところで壊れたベルトを抱えてうずくまっていた沙威に激突してもろとも崩折れた。「使えない三下は我が世界にはいらぬ。……消える」

蹴り足を下ろし、片手で微かにこめかみに触れて嘔くように吐き捨てる音也。

それと同時に、半壊していた沙威のノクスルーキスのベルトがスパークと共に異音を立て始めた。局所重力制御システムが暴走を始めたのだ。

「……………あ……………あ……………」

朦朧としている沙威はただ讒言を繰り返し。

「くそつたれ！ ルージュ！ブルー！ビオレ！俺はあ！」

竜胆寺の絶叫の途中で現れた黒の真球が続く台詞と二人を飲み込み、一帯の大気を大量に巻き込みながら迅速に収縮しやがて消滅してしまった。

ごおと大気のうちねりが空にこだまし、すり鉢のように丸く抉れた地面には何も残ってはいなかった。

「さて。無粋な横槍が入ったが、さっそく続きと洒落込もうか。デイレイド。」

『言つに及ばず。』

一連の同士討ちを眺めていたデイレイドも身体の向きを変えて音也と相対した。

『だが。』

だが。

この時、デイレイドの中に形成されていた、ある領域が活性化を始めていた。

それは、旅人の瞳子からコーヒーにまつわる情動を受けた時に初めて透の中に居座ったデータ領域。

そこには、これまで瞳子から流入してきたあらゆる精神活動が記録されている。

それが、瞳子の精神と一時融合したことがあるバックアップをアップロードした今のディレイドの、瞳子によって僅かに書き換えられた部分と異常干渉を始めたのだ。  
きっかけは、透を一瞬なりと狼狽させた、竜胆寺の最後の叫び。

『あいつらに「痛み」なんかやらねえよ!』

敵は敵。そこは変わらない。

だが透は今、竜胆寺の不合理的な判断をようやく理解し、初めて他者に共感した。

『お前にはもう一つ用件ができた。』

「ほう?」

音也が心底意外そうに薄笑いの顔で促す。

「それはなんだ。」

『例の物を受け取る前に、お前に非常に理不尽な攻撃を大量に加える。これは俺の今の最優先事項だ。』

「……は?」

ディレイドの、らしからぬ不可解な発言を耳に受け、音也は笑みを忘れて怪訝に顔をしかめた。

これが「チート能力」というやつだ！ どうだ！盛り上がんなくてつままないだろう！

何が起こったのか良く分からなかった皆様。

詳しくは、多分、次回語るかと思います。それまではどうか、直接それを体験したダークライダーと同じ心境を御堪能下さい。

ただし、お気付きの方もおられるかと思いますが、この能力も「無償」ではありません。

というところの清々しいヤラレっぷりを披露して下さったダークライダーたちでした。

各元ネタを貸して下さった、辰巳 結愛様。 冥様。 少年C様。

無限の闇様。 ありがとうございます。

おかげ様でこの「ネガの世界」を想像以上に楽しんで描くことができました。今となってはこの四人の組み合わせでなければ「デイレイドマスカーカレイド」の「ネガの世界」はないなと思える程に良いキャラとなったと思います。自分の中では。

一応、「ヤラレ役のモチーフですよ」とお断りした上で、それでも快諾して下さった各作者様に、改めて深く感謝致します。

「は！ あの四人を退けた手並みは見事だと言っておこう！」  
デイレイドの発言を一蹴し、音也は元の振る舞いで言い放った。

「まるでチエス盤を上から覗き込む視点！ 盤ごとひっくり返すような暴虐！ まさに「神」の所業だな！ 「盤上の駒」ごときには抗うことすらできない訳だ！」

「チエスの例えは的を射ているが、俺は「神」とやらではない。お前たちとは階段が異なるだけだ。」

両腕を広げて大げさに宣う音也に、デイレイドは素っ気なく告げた。  
「それよりも、戯れ言は止めてさっさと変身しろ。一撃で終わりにして構わないのでなければな。」

その言葉を聞いた途端、音也は弁舌を振るっていた途中の体勢で身を固め、あっさりと腕を下ろして向き直ると片手を眼前にかざした。  
「……相棒。叩き潰すぞ」

「よかるう相棒。真っ平らにしてやるがいい」

仄暗い不機嫌な呟きにキバットバット二世が応え、かざした手首の小指の付け根付近に近づいた。

「がぶり。」

咬み付いたキバットのアクティブフォースの注入を受け、両の頬にステンドグラス様の文様を浮かび上がらせた音也の腰にどこからともなく飛来した幾条ものチエーンが巻きつき瞬時に弾け飛ぶと、その下には漆黒のベルトが形成されていた。

手首に張り付くキバットバットを掴み真正面に突き出す。

「変身」

呟き、キバットをベルトバックルにあたる場所に設置された止まり木に据えると定位置に収まったキバットバット二世は術式を起動。  
銀に揺らめく力場に包まれた音也の姿は瞬時に鎧に身を包むとその力場を打ち破った。



闇のごとき漆黒のボディスーツに血のような深紅の装甲、装飾。各所に輝く魔皇石と、細かく彫り込まれた複雑で独特な文様。

まさに闇の王者が纏うにふさわしい荘厳な意匠。仮面ライダー　ダークキバが威風堂々とその姿を現した。

> i 8 4 8 9 — 5 3 8 <

「……あまり図に乗らない方がいいぞディレイド……俺が何者が分かっているよなあ……」

全身に漲る力に打ち震えるダークキバは、ゆったりと空を仰いでいたコウモリ型のセンサーを正面に巡らせると、威嚇的に首を傾けた。「俺は裏面領域の主、「マスター・ダーク」だぞ！いかなワールドスライダーとて、世界丸ごとひとつ相手に喧嘩を売ってタダで済むと思うなああああああ！」

絶叫と同時に、ダークキバとディレイドは互いに向けて駆け出した。

「はああッ！」

外側の指に特に注力した特徴的な構えの両掌を瞬時に交差させ広げたダークキバは、足下に出現させたキバの紋章を描いた力場を片手の一振りで解き放った。

地面を滑るように疾走した紋章はディレイドの足下でその機能を展開、走行中のディレイドが踏み込んだ片足を不可視のフィールドで絡め取るが、続く蹴り足に呆気なく踏み砕かれてそのまま通過された。

足止めにもならなかった。

とうとう目前まで接近した両者は各々拳を振りかぶる。

その瞬間、ディレイドの目の前の空間にカードのヴィジョンが出現した。

これは、今のディレイドが限定的に発揮できる発展機能の一つで、ライドカードの発動の手順を限りなくゼロにまで圧縮した結果。今のディレイドは、ヒトが息をするのと同じようにファイナルアタックライドを常時発動できるのだ。

だが同時に、ダークキバの眼前にもキバの紋章が出現した。

激突。

それぞれの力場を通した拳は互いに相殺したようにお互いを仰け反らせた。

『つくつ、 どうしたディレイド！ 理不尽な攻撃とやらはいつ加えてくれるんだ？』

『お前が消耗してからだ。』

その声は背後から聞こえた。

ダークキバの背後に出現していたカードのヴジョンから飛び出したディレイドの延髄蹴りが、間髪ブロックに回した腕ごとダークキバを激しく吹き飛ばした。

『まずは身動きができないようにせねばならないからな』

『……っ！？ 陰険な野郎だな！』

吹き飛ばされる途上で倒立で体勢を立て直したダークキバはそのまま華麗な連続後方回転で間合いを広げてゆく。

だがそれを追うように次々とディレイドのカードのヴジョンが立ち並び、ディレイドが凄まじい速度でそのヴジョンの中を通過して迫ってくる。

こうしてカードのヴジョンを経由する空間移動を小刻みに繰り返すことでディレイドは凄まじい速度での追走を可能にしている。

そのディレイドはカードを通過する中、既に跳び蹴りの姿勢に移行していた。

ダークキバが立ち止まったが最後、とてつもない威力の蹴りを叩き込む算段だ。

さながら己を弾丸とし、カードのヴジョンを磁場トンネルとしたリニアレールガンだ。

『舐めるなよディレイド！』

移動中瞬時に三つの紋章を解き放ったダークキバは、一つ目の紋章をディレイドから遮る位置に配置すると、水平に寝かせた二つ目の紋章を蹴って空高く跳び上がり、宙に配した三つ目の紋章の上に着地した。

『まずはコイツから御馳走してやるっ』

ダークキバは上空の紋章の足場の上で、ベルトポーチからフェツスルを引き抜きバツクルのキバットバット二世の口元にあてがった。

『吹き鳴らせ、相棒！』

『よかるう。喰らわせてやれ、相棒。 ウエイクアップ・ワン！』

甲高くも不吉なパイプオルガンの音色という、およそ笛からは出てきそうにもないはずの音が響き、覚醒の旋律を受けたダークキバの右拳がおぞましい黒炎を吹き上げた。

『ハッ！』

中空の足場から跳躍し、燃え盛る拳を振り上げて踊りかかってゆくダークキバ。

一つ目の紋章に進行を阻害されて着地していたデイレイドは瞬時に反応し、振り返りざまに展開したカードのヴィジョン越しの回し蹴りでそれを迎え撃った。

激突した瞬間甚大な爆発が巻き起こり、噴き上がったどす黒い爆炎の中から打ち砕かれたアスファルトの無数の破片と共にダークキバとデイレイドが吹き飛ばされてゆく。

それぞれ無人のビルに、廃屋に壁を砕いて飛び込んでいった。爆発の中心地点は大きく砕け抉れており、アスファルトには巨大な穴が口を開け放射状に無数の亀裂を伸ばしていた。

『……ふん』

巨大な瓦礫を片手で押し退け、ダークキバが廃ビルの奥から姿を現した。

『言っておくが、こいつはまだ序の口だぞ。 さあ来いよ！今度は

蹴り返した脚ごと粉々にしてやるぞ！』

絶叫するダークキバ。

だが、デイレイドが飛び込んでいったと思しき廃屋からは返事がなく、代わりに廃屋に空いた穴からダークキバめがけて無数のカードのヴィジョンが次々と舞い降り瞬時に整列して立ち並んできた。

『！！？』

廃屋から、そのカードのヴィジョンを蹴り砕きながら跳び蹴りの姿勢のデイレイドがカードの列を辿ってまっしぐらに襲いかかってきたのを見てダークキバは即座に跳躍し、そのカードの列の射線から逃れた。

ところが宙を舞うダークキバの周囲全方位に突如無数のカードのヴィジョンが現れて取り囲み、あるうことかそのカードのヴィジョンの中から脈絡無くデイレイドが飛び出しダークキバを蹴り飛ばした。それも一度では終わらず、通過したあと別のカードのヴィジョンから現れたデイレイドがダークキバを蹴り飛ばし、また別のカードから飛び出したデイレイドが一撃を加えて通過してゆく。

空中でカードのヴィジョンに取り囲まれたダークキバは、次々と襲いかかるデイレイドの攻撃によってあちこちへと跳ね上げられ、地上に降りることはおろか足場を得られぬまま無数の蹴りに翻弄され続けた。

『っがあああつ!? 調子に乗るなッ!』

攻撃の中断の刹那に喚び出した紋章の力場を纏ってかろうじて蹴りを弾くと、ダークキバは再びウエイクアップフェッスルをキバットの口元にあてがった。

『「二曲目」だ相棒!』

『よかろう。殲滅の第二楽章だ相棒。ウエイクアップ・ツー!』  
かろうじて地上に着地したダークキバの腹から再び吹き鳴らされる禍々しい音色。

さらなる覚醒の旋律により、両足から漆黒の炎を吹き上げたダークキバは、未だ宙にいるデイレイドの脇をかすめて空高く跳び上がっていった。

『はあああああ!』

膨大なる魔皇力の影響によって空間が歪み喚び出された「夜」の世界の中で、天上に浮かぶ巨大な月の前で優雅に旋回し身を擦ったダークキバは、地上に降りたデイレイドめがけて黒炎を吹き上げる破壊の蹴りを繰り出し急降下を仕掛けた。

黒炎がキバの紋章を形取り、鋭利な両端を鉞か鎌のように展開して獲物を狙う。

地上で待ち構えるデイレイドは、ダークキバを見上げ指先を突き付けると、瞬時に無数のカードのヴィジョンを二人の間に立ち並べた。「それがどうした！この蹴りはさっきのの比じゃないぞ！」

キングスバーストエンド。王による暴虐の処刑宣告は、跡形も残さぬ圧倒的な滅びをあまねくもたらす。

哄笑を叫ぶダークキバの視界の中で、だがデイレイドは整列したカードのヴィジョンの間隔を狭めて圧縮すると、ほぼ一枚近くに重なって纏まったカードのヴィジョンを盾のようにかざしてダークキバを待ち受けた。

『おおおおおおお！』

瀑布のごとく迫るダークキバの蹴り足とカード越しのデイレイドのハイキックが激突した途端甚大な爆発が起き、凄まじい衝撃が見渡す限りを突破して薙ぎ払っていった。

地上を舐める爆炎は通路に沿って一直線に吹き飛び、衝撃波は辺りのひび割れた廃ビルのごとくに致命傷を与え、先程とは比べ物にならない規模の黒く巨大な積乱雲がキノコの型を成して吹き上がった。

ごおと大気を振るわせた轟音がこだまし、やがて煙の晴れた地上は廃墟のほとんども吹き飛ばされ、アスファルトもコンクリートも丹念に打ち砕かれてめくれ上がり、見渡す限り一面荒野の様相を呈していた。

その荒野の一点に、ダークキバがゆったりと舞い降りる。

『……ふん。蹴り足ごと打ち砕くと言ったのに律儀に蹴り返してくるとはな。「悪魔」の脳味噌は相当残念な構造をしていると見える。』

言っただけに側頭部に触れ、辺りを睥睨したダークキバの視界を突然巨大な掌が覆い尽くした。

『！？』

『

掌を巨大だと感じたのは錯覚であり、実際のところは只いきなり顔を掴まれたのだと音也は瞬時に理解した。

『今の発言も解析した。残念なのは、お前の思考の方だな。先ほどの俺と四人との戦いで、お前はどこを見ていた』

『淡々とした物言いが、逆に何よりも神経を逆撫でする。』

『……！？』

ダークキバはディレイドの手を跳ね除け一足飛びで間合いを取った。だが反撃に転じようと足元の重心を変えた時には既にディレイドが眼前にまで肉迫していた。

『なっ！？』

驚愕しつつもディレイドが振り上げたハイキックをブロックしようと両腕をかざすが、ディレイドの蹴り足はその前に出現したカードのヴィジョンを境に消滅し、背後に出現したカードのヴィジョンから飛び出した黄色のブーツがダークキバの後頭部から蹴り倒した。カードのヴィジョンを使って足のみ空間を渡らせたのだ。

蹴り飛ばされ荒れ地をごろごろと転がっていったダークキバの周囲を再びカードのヴィジョンが取り囲んだ。

そして先ほどと同じようにカードを経由して現れる無数のディレイドがダークキバに襲い掛かり翻弄してゆくが、そこは「この世界を統べる王」たるダークキバ、途中から体勢を立て直しディレイドの不規則かつ縦横無尽の攻撃をかわし、受け、捌き始めた。

背中に垂れるハーフマント「ダークネスベール」を翻らせ、いくつかの拳を、蹴りを打ち払う。

『っ、どうしたディレイド！まるでなんとかのひとつ覚えじゃないか！やってる事がワンパターンだぞ！』

『問題ない。お前を消耗させることが狙いだからな。』

周囲を駆け回るとのディレイドが発した台詞かは分からないが、その声は嘲笑も意に介さず攻撃の手も緩まない。

『それともうひとつ。適切な機会を探っていた。』

続くその言葉と同時に、辺りを駆け回っていたディレイドの姿が突如

揺き消え、ダークキバは怪訝に周囲を見回した。

そのダークキバの大きく張り出した後ろ襟首が突然掴まれ凄まじい  
膂力で後方に引き倒される。

「っ！？」

いかな不意打ちだろうとすぐに体勢を立て直せる。片足を後ろに引  
いて重心を支えれば転倒などしない。

そう思っていたダークキバの引き足は、そこにあると思っていた地  
面の感触を見失い呆気なく後ろに倒れていった。

「……んなっ！？」

視界を埋め尽くすのは澄み渡る青空のみ。

そしてすぐに身を襲う浮遊感と続く落下感にダークキバは大きく狼  
狽した。

ここは地面のはずなのに、いかに地上をズタズタに破壊していよう  
と、これほどの距離を落下するような段差など存在しないことは「  
鎧」の探知能力で把握していた。周囲の地形を察知しながら戦うこ  
とは、普段から普通に行っていることだ。  
では、今のこの状況はいったい何なのか。

仰向けの体勢のままダークキバは首を僅かに傾けた。右方向の彼方  
には、果てまで広がる空と地面の境目が大きく弧を描いているのが  
見えた。

一瞬呑まれた感慨を振って棄て、ダークキバは首をよりひねって背  
後を覗き見た。

肩アーマーとはためくハーフマントの隙間から、網目の模様のように  
しか見えない街並みらしき遠景が白く霞んで見えた。

それが意味する所を考え、導き出された有り得ない結論と容赦ない  
現実が、そこが上空三千メートルで、現在落下中であることを否が  
応にも思い知らされた。

「なっ！？」  
なんだこれはあああああああ！？」

絶叫は、己を下から激しく打つ強烈な風によって即座に吹き散らされる。

さしものダークキバにも高い跳躍能力はあっても飛行能力はない。この「鎧」を以てしても、高度三千メートルからの落下に「鎧」は耐えても中身は原型を留めないだろう。

『でい、デイレイド、きさまあああああ！』

怨嗟を、怒号を吐き出すも、吹きすさぶ風が何もかもを空へと吹き飛ばしてしまう。

絶叫に応えた訳でもないだろうが、落下中のダークキバの傍らにデイレイドが姿を現した。

重力に引かれるまま猛スピードで仰向けに落下しているダークキバに対して、デイレイドはぴったり真横に付きながらも直立不動でそこにいた。

意味が分からない。そのデイレイドは、まるで足場があるかのように片足を組んで立っているのだ。

『ふむ。予定していた「理不尽な攻撃」はだいたい済んだ。』

あろうことか、そのまま立ち話を持ちかけてきた。

『……き、貴様！？ 状況が分かっているのか！？』

『ああ。お前は落下中で、俺は安全圏からそれを傍観している。』

狼狽したダークキバの問いにも、実に素っ気なく応えてくる。

その発言内容も意味が不明だ。

『それで、最優先の用件が済んだから、そろそろ例の物を渡せ。』

『はあ？』

一瞬だけ、音也は己の状況を忘れた。

この場合、疑うべきはこいつの正気か、俺の正気か。

愚にもつかないことを連想し、ダークキバはかぶりを振った。

『……もういい。ここまでコケにされておとなしく終わってたまるか』

『相当反抗していたと思うが。』



『おい相棒。』

デイレイドの間抜けな相槌を無視し、音也はベルトバックルに鎮座するキバットバット二世に呼びかけた。

『なんだ。相棒。』

『最後に景気良く吹き鳴らせ。「三つ目」だ。』

『……そうか。よかるう。終末の最終楽章だ。ウェイクアップ・スリー!』

そして三度、フエッスルをくわえたキバットバットが覚醒の音色を吹き鳴らす。

この「闇の鎧」にあつては「三度の覚醒を促せば、泡沫の夢たる現世は主の目覚めを以て泡と消える」と謳われる、おぞましい能力を秘めていると伝えられている。

文字通り、この世の終わりを喚び寄せる禁断の「三度の魔笛」を、音也とキバットバット二世はとうとう実行したのだ。

『……さあ。こうなっちゃあおしまいだ。最後に一撃キメてやる。』  
声音は穏やかだが、どこか狂気を孕んだ調子で音也は呟いた。

そして腕組みしたままのデイレイドが眺める前で、ダークキバの最後の機能が解放された。

落下中のダークキバの身体から、闇のオーラが大気に滲むように溢れ出し、迅速に周囲を染め上げると突如勢いを増してまるで黒い稲妻が全包围ヘジグザグに伸びていった。

それはさながら大樹の枝のように鋭く細かく分岐して伸び、まるで血管のように脈動して行き渡り、そして投網のように世界を覆い被さった。

遙か上空からこの光景を見る者がいたのなら、この島国を、大陸を、惑星を黒の網が包み込む様が見れただろう。

迅速に世界を闇のオーラで包むと、ダークキバの身体はそれら全てを収縮させて引き寄せ始めた。

成層圏を越えて宇宙にまで伸びた闇のオーラは空間そのものを掴ん

でたぐり寄せ、ダークキバを中心に世界の何もかもをその身に飲み込みだしたのだ。

『おおおおおおおおおおお！！』

空間を、次元を軋ませて王は己の領地を一滴残らず飲み干し、そしてそこには『なにもなくなつた』。

在るのはダークキバとディレイドのみ。

周囲は全ての色を含むが故の白き光に包まれた領域。

遠くに大小まばらの黒点が散らばる光景は、まるで星空をネガポジ反転させたかのよう。

そして真白き領域に浮かぶダークキバは、背中から放射状に広がる黒の網を背負っていた。

それは網目の所々を色とりどりに彩り、まるでステンドグラスのように見える。

全体を見れば、ダークキバのモチーフはコウモリなのに極彩色の蝶を思わせた。

『……はあ……、……これ、で。これで貴様と同格だ！ディレイ

ドー！

『……』

> i 8 4 9 0 — 5 3 8 <

ここがどこなのか、ディレイドと、今のダークキバは理解している。

宇宙の内と外の狭間。

今や「ネガの世界」は消失し、世界を丸ごとひとつその身に飲み込んだダークキバは、その在り方において『システム・ディケイド』とほぼ同格となった。

『これで貴様をきつちり殴れるな。もうどこにも避けようがないだろ』

『その為だけに己の世界を取り込むか。およそ原住民にそぐわない思考だな。』

『俺は「マスター・ダーク」だぞ!』

デイレイドの眩きを遮ってダークキバが絶叫した。

『「表」の概念で俺を騙るんじゃないやねえよ。世界丸ごとひとつに喧嘩を売ってタダで済むと思うなって言っただよな!? 隣人全てを巻き込んで、笑って奈落に飛び込むが裏面領域の本懐!そして俺様が自分の玩具をどうしようも勝手だろ?』

極彩色の翅はねを揺らめかせ、かざした手を握り込んだ。

『そしてデイレイド。忘れちゃいないだろうな。お前はデイケイドの使命に追従してるんだってな? ならもうこの俺様に手出しはできないな。』

指先を突きつけ、ダークキバは嘲笑した。

『なぜなら、今の俺は裏面領域を内包した「世界自身」! 俺を攻撃するということは「世界を破壊するということ」だ!』

『ああ。そうだな。』

絶叫したダークキバは、デイレイドの素っ気ない返事に最早 耳を貸さない。

三度目の笛を吹いては、もう後戻りはできないのだから。

『さあデイレイド!一緒に地獄でも宇宙の狭間でも堕ちようぜえええええええ!』

そして翅を大きく揺らめかせ、ダークキバはデイレイドめがけて一直線に襲いかかった。

もうこれ以上の策も能力もいらぬ。一撃ぶつけてやればそれでいい。 歓喜とも諦観とも付かない平衡を失った高揚感に包まれた音也の頭の中にはもうその事しかなかった。

このダークキバの突撃は、一切の迷いのない、これまでの中で最も強く純粹な流星のような一撃だった。

『断る。いいからさっさと例の物を寄越せ。』

廃墟の街の真ん中の路上で。

ダークキバはディレイドに顔面を掴み上げられ宙吊りにされていた。

『……………！！！？？』

音也は、前後の脈絡が理解できずにマスクの下で目を白黒させていた。

ベルトバツクルにぶら下がるキバツトバツト二世も同様だった。

そこは先ほどまでの戦場だった廃墟。

それも、土地も建物も崩壊していない、戦闘で破壊される前の状態。

『……………これ……………は……………なん……………だ……………？』

ほんの一瞬前までは、宇宙物理の外側を覗いて万能の力を得たと思っていたのに、その高揚感も跡形もなく消え失せ、音也は混乱の渦に翻弄されていた。

『ばか……………な……………俺は、俺たちは、確かに三度目の笛を吹いて……………』

呆然と謔言のように呟くダークキバを、顔面を掴むディレイドの片手が乱暴に揺さぶった。

『おい。聞いているのか。波動関数の収束を再拡散させてお前が世界を取り込んだ事実を「なかつた事」にしただけだ。たかだか宇宙が数分前の状態に戻ったくらいで「マスター・ダーク」がいちいち狼狽えるな。』

音也の気のせいだろうか。まるで機械のようだったディレイドは、出会ってからこれまでの僅かな間に少し人間臭くなった気がする。

それも粗暴な方向に。

なにか反応を見せるまで続ける気なのか、ディレイドの、ダークキバを揺する手の動きは止まらない。

『……………もういい。勝手に探すぞ。』

そう言つと、ディレイドはいきなりダークキバの胸郭に片手を透過させて突っ込んでかき回し始めた。

『！！？』

痛みはない。物理的に身体を貫いたのとは違う感覚だということは

分かっていた。

だが、自身の存在をゲートにして亜空間に隠していたものと言え  
ば一つしかない。

『あった。』

言つて、ディレイドが引き抜いたその手には、再三要求されていた  
「例の物」が握られていた。

必要な物を得るや否や、ディレイドは脱力したダークキバの身体を  
ばいと放り捨てた。

それは、黄色と黒で構成された、超薄型の折りたたみ式携帯電話に  
見えた。

天井の四隅に黒の四角形を配し、表面を黄色と黒のドットパターン  
で飾られたこれこそがディケイドの持つケータツチに並ぶツール、  
『システム・ディケイド』における水先案内・ディエンドが先行し  
て宇宙に打ち込む楔の片割れにして、ディケイドのフォローバック  
アップモジュールたるディレイドの機能を飛躍的に発展させる拡張  
装置『ディレイフォン』。

ディレイドの、九つの世界を巡る行程の目的は、これを得ることに  
あつたのだ。

『……俺を……殺さない、のか……？』

未だ朦朧としているらしいダークキバが、仰向けに倒れたまま装甲  
を溶け崩れさせて音也の姿を晒した。

その腹の上では、キバツバツバ二世が目目を回して転がっている。

『先ほどお前が言った通りだ。俺の使命はディケイドと同じく宇宙  
の救済。この世界の基点たるお前を倒す必要はないし、この通り用  
件は済んだ。』

ディレイドは、ディレイフォンをひらひらとかざして言った。

『もうここに用はない。』

言つて、ディレイドはあっさりと背を向けると、音也を残してすた

すたと立ち去っていった。

かん、かんと錆だらけの非常階段を登る足音が、やがて二階の踊り場に倒れている瞳子の元で立ち止まった。

その足音の主は瞳子の傍らで片膝を突くと、まるでQRコードのようなマスクでこちらを覗き込んできた。

元の形に戻った青いセンサーに瞳子自身の顔が映り込んでいる。

「……………」

何か言おうにも、今の瞳子は著しい倦怠感に包まれ激しく消耗し、口を開くことはおろか、まともな思考も難しい状態だった。

半ば朦朧とした夢心地ではあったが、残りの意識はかろうじて自身の状態を把握していた。

「すまなかつた。瞳子。」

唐突に告げられたデイレイドの言葉に、瞳子は心底驚愕した。健全な状態だったら飛び上がっていたところだ。

透が、初めて謝罪の言葉を口にしたのだから。

「……………!?!?」

「うむ。思考活動も困難だろう。ここのお前には中継器になってもらい、九つの世界の全てのお前の中に埋め込んだ緊急用プログラムにフルドライブをかけて「ヴァイオレントモード」を強制実行していた。おかげで必要な物は入手できた。」

視界の端で、黄色い携帯電話が微かに揺れた。

「あとは、これを使用して九つの世界のそれぞれに侵入した異世界の脅威と抑止に回ってもらった仮面ライダーたちを全て元の世界に帰還させ、宇宙境界線のバランスを取り戻すことで俺の使命は終わりだ。後は俺のみで遂行が可能な範囲だ。もうお前に手伝わってもらうことは何もないだろう。消耗が激しいだろう。各世界の瞳子

で消耗具合は異なるだろうが、とにかくゆっくり休め。』  
言ってディレイドは立ち上がった。

拳げ句、気遣いの言葉まで吐き出した透の変化にも喫驚しつつ、動かない身体で瞳子は安堵の溜め息をついた。

ネガ世界の住人の身の上では、その心根は他の瞳子と異なるが、記憶は共有しているし、事情も理解している。

異なる概念に基づく思考ではあるが、この瞳子なりに透のことを思い遣っていたのだ。

(……ああ……良かった……かな……)

立ち上がったディレイドは、引き抜いたディレイドライバー・カレイドブレイドのスライドカバーを納刀の動作でスライドさせ、カードスリットを露出させた。

そして片手に取り出したディレイフォンを展開し、ディスプレイ部分をリボルバー式に九十度回転させた。

そのディレイフォンのキーパッドプレートをカレイドブレイドのカードスリットに挿し込んだ。ディスプレイが刀身の腹の一部にぴたりとはまり込んだ。

するとカレイドブレイドの刀身が中央のスリットを境にバシヤツと展開し全長も僅かに伸長する。

割れ広がった刀身のその溝の下からは、一直線に並んだクウガから始まる十のライダーズクレストが現れた。

ただし、最後尾に描かれたマークは、ディレイドのものではなく、ディケイドのものであったが。

ディレイドは、指先で刀身の溝のクウガのライダーズクレストに触れた。するとマークが発光し、ディレイフォンのディスプレイにクウガの紋章が表示される。

続いてディレイドはその指先を、溝にそって順にマークを辿ってゆく。それに伴い、ディスプレイにそれぞれのマークが表示され、認証音声を読み上げていった。

《クウガ・アギト・リュウキ・ファイズ・ブレイド・ヒビキ・カプト・デンオウ・キバ・ディケイド!》

最後まで指先が辿り切った途端、全てのライダーズクレストが黄色の輝きを放ち、そしてディスプレイにはディレイドのマークが表示された。

《ファイナルカメンライドウ・ディレイド!》

最後の認証と同時に、ディレイドの周囲に十枚のカードのヴィジョンが現れ取り囲んだ。

それらには、クウガから始まる十騎の仮面ライダーのライダーズクレストが描かれている。

それらをディレイドはカレイドブレイドで全て一閃した。

剣を水平にして一回転したディレイドの周囲でカードのヴィジョンは全て打ち砕かれ粉々になった。

微細に飛び散るカードのヴィジョンの欠片。

だがそれらは落下も消滅もせず、しばし滞空するとやがてディレイドを中心に渦を描くように旋回し、ディレイドの身体に吸い込まれてゆく。

全てのヴィジョンを飲み込んだディレイドの身体が輝きを放ち始める。

胸郭と肩のアーマーが歪むように変形を始めると、胸からバラバラに切り刻まれたライドカードの欠片が無数に飛び散った。

それらのカードの破片は即座にディレイドの胸板にべたべたと張り付いてゆく。

それに伴いブレストアーマーも変形を進行させ、カードの欠片の間を仕切るラインがイエローに変色した。

同時に、輝きを放っていたディレイドの全身が光を納め、腕脚の黄色だった部分が全てシルバーに変じていた。

そして周囲の光景がマーブル模様のように歪み、渦の基点がディレイドの頭部に至ると、ディレイドの額にあるうことかディレイド自身のライドカードが据え付けられたディレイド自身のライドカード



が据え付けられたデイレイド自身のライドカードが据え付けられたデイレイド自身のライドカードが据え付けられた。

まるで合わせ鏡の最奥を覗き込むようなそのカードを、さながら王冠を戴くように。

続いて機械を圧縮したかのような無骨なバックルを持つデイレイドベルトの周囲に十のライダーズクレストが浮かび上がると、まず正面に現れたクウガのマークがアークルの中央部分、アルティメットフォームの金のバックルに移し、デイレイドベルトに張り付いた。そして僅かに回転しアギトのマークが正面に來ると、アギトのマークもシャイニングフォームの持つベルトバックルに移しベルトに張り付いた。

続いて赤のカードデッキを設置した龍騎サバイブのバックルが、コネクタが空の状態のファイズドライバーが、スピードスーツを描いたバックルが、音撃鼓が、カブトゼクターが、赤い枠のデイスプレイを設置したターミナルバックルが、キバットバット三世が次々とベルトに合体していった。

十ものバックルを収める為、さすがに本来のデザインに比べてやや左右に縮まった形状にアレンジされていたが。

そして最後の正面の空きスペースに、カードスロットを上に向けた状態のデイケイドライバーの中央の白いユニットが合体することでベルトの変化は完了した。

これこそが、デイレイドベルト・カレイドサーキットの本来の姿。

腰には十騎のライダーベルトのバックルを巻き、胸板にはバラバラに刻まれたライドカードがステンドグラスのように埋め込まれ、青かったデイメンションヴィジョンはイエローに変じ、その上の額には自らのライドカードをかざし。

これが、デイレイドフォンによって発現したデイレイドの正規の発展形態『カレイドフォーム』。

胸板に埋め込まれたバラバラのカードの欠片は、デイレイドが姿勢を動かす度にちらちらとその配置をずらす。まるで万華鏡の色紙の

ように。

だが、良くみれば、九騎分の仮面ライダーのライドカードの欠片がそろっていることが分かる。

『……………』

瞳子は、仰向けに倒れたまま呆然とそれを見ていた。

一見冗談のようにしか見えない姿だが、先ほどのダークライダー達を一蹴した時とは別種の底知れぬ力を感じさせる。

『では、行ってくる。』

僅かに瞳子を見遣って呟き、軽く跳ねるような動作でディレイド・カレイドフォームは姿を消した。

> i 8 4 9 1 — 5 3 8 <

ディケイドは、なぜかディエンドが施したマーキングを外れ、これまでの十一の世界以外の世界へと移行したようだった。

だとして、ディレイドの使命が用があるのは、あくまでもこの十の世界。

ディレイドは、かつて通過した世界へと向かっていった。

track・54 デイレイデッド・ワールドハイド(後書き)

これ、なんてキングクリムゾン？ 書いてる本人もいまいち良く解  
つてないのでツッコまないであげてください。

というところのデイレイドヴァイオレントモード激情態のチートな暴虐でした。でも電池  
(瞳子)が切れて正規のパワーアップもしたので多分もうやりませ  
ん。盛り上がりがないったら。

新フォーム「カレイドフォーム」の真価は次回以降に発揮しますの  
で、どんな能力をどう発現するのは、少々お楽しみにお待ち頂け  
るとありがたい。

なかなかデイケイドに引けを取らない奇抜なデザインになったかと  
自負していますが(笑)。

デイケイドの寄り道はデイケイドがケリを付けますので、デイレイ  
ドはとつと本筋の後片付けに向かいます。

さて。デイケイドの旅の裏側で、九つの世界ではいったい何が起こ  
っていたのか。

t r a c k ・ 5 5 カメンライド・シンクロニシティ いつか見た泡沫の飛沫の

1 報告。

ここから第二部、と言ってみる。サブタイトルに書き込むと語呂も悪くなるし、区切る意味が自己満足以外にないっばいので、でも一応ここで表明する次第。

光 夏海は、いきなり背後で炸裂した巨大な爆発音に喫驚して反射的にしゃがみ込んだ。

「っひゃっ!？」

続いて飛来する無数の光線に導かれるようにして、彼方から仮面ライダーの大群が怒濤の咆哮を上げて押し寄せてきた。

( ああ。またこの夢 )

夏海はやがて冷静に現状を把握した。

辺りは相変わらずどころも知れぬ深い山中。

見下ろせば、服装は元は白かったと思われるボロボロのドレス。

やがて目の前を怒濤の勢いで通過してゆく無数の仮面ライダーたちを見送って、夏海は溜め息を漏らした。

( …… もう、いいじゃないですか。 起きませんよこんなこと。 )

土くんは「悪魔」じゃないんだし。 )

彼方に浮かぶ、地上を睥睨する目映い輝きに大挙して襲いかかる仮面ライダーたちを眇に眺めて夏海は胸中で呟いた。

これまでの旅の中、さんざん言われてさんざん否定してきたことがある。

もういい加減にして欲しい。夢の中でまで全否定されても夏海の心は変わらない。

早く終わらないかなと、飛び交う光線も喧噪も無視して夏海は再びしゃがみ込んだ。

どうせ、なにが起ころうと自分には無害だし。

「こんにちは。」

「!？」

そこへ、突然声をかけられて夏海は仰天した。

「へえ。あなたの主観だと、こんなふうに見えるんだ。」

全速力で駆け抜ける仮面ライダーの大群の中を、辺りを眺め回しながら普通に歩いて横断してきたのは、ひとりの少女だった。夏海自身とそんなに変わらない年頃に見える。

野暮つたい眼鏡に、こだわりのなさそうな髪型、そして無頓着にも程がある地味な服装。

ぱつと見はそんな人混みに紛れたら二度と発見できなそうな格好なのに、その立ち居振る舞いと余裕に満ちた表情、強い意志の宿る瞳は土と並んでも見劣りしない強烈な印象を抱かせた。と、そこまで観察していて夏海は はたと気付いた。

(夢の中で、誰かに話しかけられた!?)

幾度も見た夢の中で、このパターンは初めての展開だった。

あれほどの大群の中を、誰ともぶつからずに歩いてきた少女は、立ち上がった夏海の手前で立ち止まった。

「え……と、あの……」

夢の中の人物に話しかけられるなど初めての経験だ。

この状況でなんと声をかければ良いのか分からず思索していると、少女のほうから話しかけてきた。

「こんにちは。この世界、この時間で会うのは初めてかな？」

「？」

少女の笑みを含んだその台詞にどこか既視感を覚えるが、どうにも思い出せない。

「私は神楽見 瞳子。よろしくね？光 夏海さん。」

「え……」

さらに、名乗ってもいない名前をさらりと告げられ軽く混乱してしまふ。

「っても、どうせすぐ忘れちゃうでしょうけど。」

「……！？ そんなに記憶力は悪くありません！」

そう歳も変わらなさそうな相手に健忘症を疑われ、夏海はつい反射的に言い返してしまった。

「……あ、いやその、神楽見 瞳子さん、です……ね？」

すぐに我に返り、謝意の代わりに相手の名を繰り返す。

だが、神楽見 瞳子は特に気にした様子もなかったようで、そんな夏海の様子をおかしそうに眺め遣っていた。

> i 8 6 3 6 — 5 3 8 <

「あはは。 うん、ごめん。 あなたの記憶力のことを言ったんじゃないの。」

神楽見 瞳子は苦笑顔でぱたと手を振った。

「確かにディケイドは壊れてるね。これだとこの接続履歴も記録されないかも。 だから。」

「土くんは壊れてなんかいません！」

神楽見 瞳子のその言い種だけは聞き逃せなかった。

「「悪魔」だの「破壊者」だのはよく言われましたけど、「壊れてる」だなんて言い方はひどすぎます！」

夏海の剣幕にきよとんとする神楽見 瞳子。

だがそれは、剣幕に圧された訳ではなくただ単にびっくりしただけのようだった。

やがて神楽見 瞳子の表情は微笑みに戻り。

「ああ。ごめん。 ええと、その「土くん」てヒトが、ディケイドの人？」

「そうです！」

夏海のふくれっ面は簡単には収まらないが、神楽見 瞳子の微笑みは、どうにも憎めない不思議な愛嬌があった。

「ええと、私が言ってるのは、「機械の方」のこと。 ね？」

「機械」……？ あのベルトのことですか？」

「あー、うん、そうかな」

「壊れる」という言葉をあてるとすれば「機械」だが、神楽見 瞳子の返事はどうも歯切れが悪い。

「まあ、そんな訳で、もしかしたらすぐに忘れられちゃうかもしれないけど。」

それにしても、と怪訝な夏海の中に疑問が浮かび上がった。

自分の夢にしては、ずいぶんと個性的な登場人物だ。こんな知り合いがかつていただろうか？

挙げ句、夢相手に忘れられる心配をされるなんて。

「……忘れませんよ。この夢はしょっちゅう見えますし、特に今回はあなたが印象的過ぎましたから。」

夢相手に気遣いなどおかしな感じだが、人の姿をしたものに丁寧さを忘れられないのも夏海の夏海たる所以でもある。

「ふうん。あなたは、これを「夢」だと認識してるんだね？」

「え？」

だが、あろうことか、夢の登場人物が夏海の脳を否定してきた。

「うんまあ、私も夢だと思って目覚めたい悪夢のような出来事ばかりだったけど。」

「……どういう、こと、ですか……？」

つい、夏海は問いかけた。

「だ、って、あそこで戦ってる仮面ライダーのみんなとは、一人ずつそれぞれの世界で協力して、それぞれの世界で問題を解決してきてたんです！ ここでみんな集まって戦うようなことなんかなかったですよ！？」

今も爆発に巻き込まれた数人の仮面ライダーが吹き飛ぶ戦場を指さして叫ぶ。

「これが夢じゃなかったら、これはいったい何だっというんですか！？」

「これは、かつて実際に起こったことの記録。」



ぼつりと呟いた神楽見 瞳子の言葉は、やけに大きく聞こえた。耳に何か衝撃を受けた気がして夏海は口をつぐんだ。

「あそこにいる仮面ライダーたちは、あなたの知っている彼らじゃないよ。」

なぜか戦場の怒号の音が遠ざかり、なのに神楽見 瞳子の声だけは明瞭に耳に染み込んでくる。

「アレでしょ？あなたが知っている仮面ライダーって、芦河 翔一さんとか、剣立 一真とか、キング……渡さんとか、尾上 巧とか」「知ってるんですか！？」

これまで出会った仲間の名を列挙されて夏海は驚愕した。

「なんで、なんでみんなの事を！？」

「うん、まあ、私もあなたと似たような立場でさ。ディケイドが通り過ぎた後にみんなと会ったのよ。」

なんだか、同じ罰を喰らった仲間のような苦笑顔で応える神楽見 瞳子の様子に、夏海なぜかはむしろ不安を覚えた。

「まあとにかく、この光景は夢なんていうあなたの想像の産物なんかじゃなくて、これから起きる未来の予知夢でもなく、過去に実際に起きた出来事の記録なの。そして、あそこで戦っている……って言うか片っ端から吹き飛ばされている仮面ライダーは、姿こそ同じだけど、中の人は私たちの知らない、別の世界の人たち。」

「はあ！？」

夏海はさらに顔をしかめた。

神楽見 瞳子の言っている意味が分からない。

「なんですか「別の世界」って！？ 確かに「世界」はいくつもありましたけど、「仮面ライダー」はそれぞれ一人ずつしかいませんでしたよ！？」

たびたび海東が喚び出していた同型同種の複数の仮面ライダーがいるが、あれは量産型らしいということは知っている。

だが「クウガ」も「アギト」も、その他の仮面ライダーも全てそれぞれたった一人しかいない唯一無二の存在のはずだ。

「へえ。じゃあ、あのアギトは誰かしら。」

言われて見上げた、神楽見 瞳子が指さした上空を吹き飛ばされていった仮面ライダー アギトが彼方に着地し、再び雄叫びをあげて二人の前を駆け抜けていった。

『うおおおおおおおおお！』

「!？」

夏海はその違和感と、それが示す異常に驚愕し目を見張った。

「……う、そ……」

「芦河さんの声じゃないでしょ？」

神楽見 瞳子がつらつと違和感の正体を指摘した。

「!？」

夏海は写真館のカウンターで跳ね起きた。

どうやら座ったまま突っ伏して眠っていたらしい。

「……ああ。またいつもの夢……」

目をこすり夢の残滓を追い払う。

「……起きませんよこんなこと。 土くんは「悪魔」じゃないんだし。」

夢の中と同じ言葉をわざわざ声に出して呟き、己の内にくすぶる不安を誤魔化した。

ディケイドドライバーの記憶領域は破損しており、門矢 土の一定時期以前の記憶が失われているのと同じ原因で、他の『システム・ディケイド』からのデータリンクの接続履歴はディケイドドライバーの内部キャッシュには残らなかった。

そして、ディケイドに接続されている光 夏海の記憶にも。

「神楽見 瞳子」なる人物の存在も、交わされた会話も全て、どこにも、微塵も残りはしなかった。

t r a c k ・ 5 5 カメンライド・シンクロニシティ いつか視た泡沫の飛沫の

ここでの夏海は、TV第19話、デイケイドが「九つの世界」の最後、「響鬼の世界」を通過した後あたりの夏海です。ただし、この瞳子はいったいどこの誰なのやら。

クウガの世界

《ファイナルベント。》

龍の頭のような手甲が終末の認証を告げ、それによって喚び出された赤き無双龍・ドラグレッダーが長大な身をくねらせて契約者・仮面ライダー 龍騎の周囲を旋回した。

『はあああああ！』

身を大きく広げて構えたのち、一気に高く跳躍する。

その龍騎の前では、三体の異形が蠢いていた。

まるで機械でできた巨大なイノシシの首から手足を生やしたかのような異形、ミラーモンスター・シールドボーダー。

それらが、片足で何度も地を擦りながら、得意の突進攻撃の機を伺っている。

『でやあああああ！』

跳躍の頂点で蹴りの体勢に移行した龍騎が、その背後に現れたドラグレッダーが吐き出した火炎の後押しを受けて猛烈な勢いと威力を得、砲弾のように飛び出してゆく。

それを機と見たのか、三体のシールドボーダーは互いに目配せし、やおら縦一線に並んで突進を開始した。

ミラーモンスターが連携を行うなど珍しい現象だが、皆無というわけでもない。

恐らく、先頭のものがその頑丈なボディで敵の攻撃を受け止め、続く二体目が反撃すると見せかけて、残る三体目が二体目の陰から襲いかかる算段。

だが、このミラーワールドの物理法則において、人間と契約もしていない野良モンスターごときが「ファイナルベント」と言われてそれを妨げられる道理もなく。

真司もちよつとだけ一番前にいる奴の頭を踏み台にしてみたい衝動に駆られたが、結局三匹もろとも蹴り貫いて爆散させた。

爆炎がくすぶる道路の先に、龍騎は事も無げに着地した。

真司が裁判員に選任されカードデッキを得てから、土との共闘を経てのち透にこの世界に連れてこられ、毎日とはいかないがモンスターとの戦闘に明け暮れていたのだ。今さらこの程度のモンスターなど問題にならない。

本来なら裁判所の選任がなければ得られないカードデッキを、かつての事件で「タイムベント」のカードを使用し過去に遡ったことによつて、そのまま「裁判所の選任の事実がない状態で」カードデッキを保持する形になった真司は、一過性の他の仮面ライダーとは比べ物にならない程の経験値を得るに至つた。

背後で、爆発跡から舞い上がったミラーモンスターの成れの果てであるエネルギーの光球を大慌てで貪り喰っているドラグレッダーを苦笑しながら眺め、他にミラーモンスターが近くにいないことを確認して龍騎はこのミラーワールドから離脱すべく、入ってきた空きテナントの窓へと歩いていった。

『……………やん……………』

『……………ん？』

ふと、呼ぶ声が聞こえた気がして龍騎は立ち止まった。だがすぐにその異常に気付く。

ここに、このミラーワールドに『自分以外の人間がいるはずがない』。

真司の住む「本来の世界」ならいざ知らず、「この世界」にやつて来た「仮面ライダー」は自分一人のはず。他のライダーと出会う訳がないのだ。

そのミラーワールドで、人の声がするなど。

『……おにいちゃん……』

『!?!?』

聞こえた。今度ははっきりと聞こえた。

今にも消えそうな弱々しい声で、助けを求める幼い感じの女の声だ。

『誰だ!? 誰かいるのか!?』

振り返り、大声で呼びかけるが誰も応えず、その謎の声もそれきり聞こえてこない。

> i 8 7 4 2 — 5 3 8 <

有り得ないと思うが、誰かが遭難でもしているのだとしたらと考え、真司は探しに行こうと身を翻すが、そこで龍騎の身体から粒子が立ち昇り始めた。

ミラーワールドでの活動限界時間を迎えたのだ。

このままここに居座っているのは、真司こそこのミラーワールドの異なる物理法則に飲み込まれ、粒子化して消滅してしまう。

『……くっ!?』

相手は何者か分からない。

カードデッキを持つ真司ですら活動限界を迎えた現状で居座っている者が、ただの人間であるはずもないとも考え、真司はとりあえずここから脱出することにした。

いずれその声の正体を探ることを決意しながら。

「「到達不能点」?」

「ん。そ。」

コーヒーカップを片手に問い返した真司に、同じくコーヒーカップをすすりながらその白衣の女性・柊つばきひかりは簡潔に応えた。

コーヒーカップを口から離して赤いフレームの眼鏡を掛け直すと、ひかりは怪訝顔の真司を置き去りにパソコンの前に座ってキーボードを操作し、くるりと振り向いて真司にモニターを示した。

「なにになに……」

返事や相槌ですら最小限に、口で説明するのも面倒臭がる柊　ひかりの性格はもう承知している。

読め、と態度で示されたことを理解した真司は何も言わずに表示されたモニターの内容を覗き込んだ。

ここは、警察庁に設立された「未確認生命体対策班」の研究室。

本来ここで言われている「未確認生命体」とは、「グロンギ」と呼ばれる超古代種族のことを指していた。

それが近年蘇り、人々を襲った経緯から立てられた部署で、その任務は未確認生命体第四号と突如現れた十号によって「グロンギ」が全滅したことで一旦終結したが、最近、鏡の中から現れる謎のモニター出現の報を受けて再始動された。

再始動に際しては、その鏡の中のモンスター、通称「ミラーモンスター」の第一発見者にして「鏡を塞ぐ」という的確な対処を迅速に施して被害を抑えた功績を認められた神楽見　瞳子巡査部長の働きが大きく関与したと言う。

（まあ、言い出しつぺなもんだから、押しつけられたとも言つのよね〜）

などと。当の瞳子は言っていたが。

ともあれ昇進し地位を得た瞳子によって、「龍騎」の姿を「未確認生命体第十一号」と認定させ、かつ「四号」や「十号」と同じ「人類の味方である」という立場を捏造してこの世界での真司の仕事の土台を作り上げられた。

なにしろ、その「四号」とやらもこの「未確認生命体対策班」にしようっちゅう出入りしていたそうだ。

今は亡き、当時の班長であった八代　藍　警視（二階級特進・当時



は警部補)と懇意にしていたその「四号」の正体である男とは、この柙 ひかりもその正体を知った上で仲良く協力しており、異形に変身する存在を見慣れている為 瞳子が連れ込んだ真司をなんの躊躇もなく受け入れた。

それから、瞳子と、真司と、柙 ひかりとの三人のみでその秘密を共有し、現在までミラーモンスターの対処を行ってきたのだ。

「……ふーん。」

パソコンのモニターから顔を離れた真司が気のない返事を漏らした。「なんスかこれ。「到達不能」つつつてんに、行けないワケじゃないみたいじゃない?」

到達不能点。

曰く、「陸上で最も海から遠い地点」あるいは「海上で最も陸から遠い地点」のこと。

あくまで地理的に定められた概念で、物理的には到達可能。故に「到達困難極」とも呼ばれる。

「……。」

だが真司の抗議にもひかりはコーヒーカップに口をつけたままうなずくのみ。

ひかりは、提示した情報に全てが記載されている時は、一切口で補足をしたりはしない。

なので真司はモニターの大まかな内容だけ覚えて、ひかりが続きを口にするのを待った。

「……その、「到達不能点」が、ミラーワールドにもあるんじゃないかと思うのよ。」

「へ?」

再び赤いフレームの眼鏡を掛け直してコーヒーカップをデスクに置いたひかりの台詞に、真司は頓狂な声を漏らした。

> i 8 7 4 3 — 5 3 8 <

「どづいう意味?」

「……」

また眼鏡を外したひかりは、しかめっ面でくわえたコーヒークップの陰から真司を睨め上げる。

ひかりは、なにがあっても自分のペースを崩さない。

なんか、透が女になったらこんな感じかなと真司は胸中でこっそり失礼な事を考えた。

「……地図上の「到達不能点」は、「行くのが困難」なだけだけど、ミラーワールドの「到達不能点」は、行ったが最後、戻れない地点のこと。」

「え？」

眼鏡を掛け直してカップを置いたひかりの言葉に、真司はワンパターンの怪訝声を上げた。

「あんの？ミラーワールドに？そんな場所が？」

「知らない。」

事務椅子に腰掛けたひかりは、身体を左右に捻りながら簡潔に応えた。

「だから、なきや作るだけ。」

「なんでそんなことを？」

「ミラーワールドの発生の原理はまだ分かってないの。」

相変わらず事務椅子を左右に回転させながら、ひかりは澄まし顔で淡々と告げた。

真司よりいくつか年上のはずだが、こうしている時のひかりは無表情でもどこか幼く見える。

「ミラーモンスターのどこから来るのかも分からない。鏡の中の民家に巣を作っている訳でもなし。」

「えーと、じゃあ、もしかしたらミラーワールドの「到達不能点」に、モンスターの巣があるかもしれない、ってこと？」

「。」

ひかりはうなずいて返した。

「あくまでも仮説だけど。でもその」

ひょい、と突きつけた細い指先が、真司のジャケットのポケットに収められているカードデッキを示す。

「その「リユーク」で探れる場所には、少なくともそういう要所は存在しない。これ以上、現状でミラーワールドの解析が進まないのなら、いま探れる範囲の「外」に、その謎を解く鍵を求めるしかないの。」

むしろ真司は、「龍騎」をまるでカタカナで呼ぶようなイントネーションに座りの悪さを感じて身じろぎしたが、ひかりの発言の意味に気付き、思わず立ち上がった。

「行け、ってんすか！？ 俺に！？」

「。」

うわずった声で叫ぶ真司に、ひかりはあくまでも無言でうなずいて見せた。

「いやいやいや！？ そんな、もしかしたらミラーモンスターがうじゃうじゃいるかもしれないトコに単騎特攻でそれなんて処刑っスか！？ 俺なんか悪いコトしました？ そんな「行ったら戻れない到達不能」なんて行きたくないっスよ！？」

「だから「到達不能点」て言うんだけど。でも、膠着している現状を打破する唯一の可能性でもあるの。」  
両掌を顔をぶるぶると振る真司に、ひかりは淡々と告げる。

「瞳子さんが倒れ、そのデイレイドとか言う協力者の所在が掴めなくなっただけで帰ってくるのかも分からず、今のままずっとミラーモンスターとのイタチごっこを続けてたら、いずれこっちが、と言うか真司君が消耗して、やがて人類はミラーモンスターに蹂躪される。」

ひかりは、眼鏡を外してデスクの上のカップに手を伸ばし、カップの手すりの少し前の空間を摘んだ。

「……………」

「……………」

何度か空を摘んだ指先がようやくカップに触れ、ひかりは何事もな

かったかのように口に運んだ。

「強制はできない。わたしたちはお互いに命令する権利も従う義務もないから。でも、現状唯一の打開策。」

口から離れたカップを置こうとデスクに戻すが、ひかりの指はデスクからだいぶ手前でカップを手離してしまった。

「がちゃん！」

床に激突したカップが粉々に砕け散った。

既に飲み干した後だったのが幸いしたか、散らばったのは破片のみで、琥珀色の液体が床を汚すことはなかった。

そこでようやく眼鏡を掛けたひかりは、やはり慌てた様子もなくゆったりと椅子から降りてしゃがみ込み、破片を拾い始めた。

「……真司君を犠牲にすることもできないし、したくない。だから、決めて。真司君が。」

その言葉はひかりの背中から聞こえ、やがて拾い集めた破片を持ってひかりは研究室から出て行った。

ドアの向こうに消えてゆく後ろ姿を見送って、真司は身動きできぬまま、深く深く考え込んだ。

あれほど狼狽したひかりを見たのは初めてだった。

眼鏡なしではまともに距離感が掴めないのに、それを忘れるほど狼狽えていたひかり。

だいぶ前から既に空になっていたカップで飲むフリをしなければ、間を保てないほど狼狽えていたひかり。

現状を打破できる手段を持っているのが真司のみで、だが真司を犠牲にはしたくないと言うひかりの言葉は真実だろう。

「……………」

椅子に座り込んだ真司は、ジャケットのポケットからカードデッキを取り出した。

「……………」

掌に載せた、黒地に金の装飾を施した「龍騎」のカードデッキに視線を落とす。

「……なんで、俺なんだろうな……」  
ふと、呟いた。

「裁判員に選ばれた時も、士が介入してきた時も、透が来た時も……  
……それで、今も。」

ぎり、と思わず掌に力が籠もる。何でできているのかは知らないが、  
ヒトの握力で壊せるものではないらしく、軋みひとつ上げなかった  
が。

『……おにいちゃん……』

「!?!」

真司は顔を跳ね上げた。

今はつきりと聴こえた。あの時の少女の声だ。

「今の……!?!」

方向性を感じない音に、真司は宛もなく辺りを見回したが、当然そ  
んなことで声の主を捜し当てられるはずもなく。

その時突然、がちやりとドアが開かれた。

入ってきたのはひかり一人だけではなく、もの凄く顔色の悪い瞳子  
がひかりに肩を支えられて入って来た。

「……あ……神楽見さん!」

慌ててひかりの反対側に付き瞳子の腕を取って肩を支える。

「どうしたんだよ!?! 起きて大丈夫なんか!?!」

「……ゴメン、ちよい、静かに……」

「あ、ごめん!?!」

かろうじて制服に身を包んだ様子の瞳子は、かなり辛そうに足を動  
かし、なんとかソファに転がり込んだ。

「でも、こんなんで、どうして出てきたりしたんだよ!?! も少し  
休んでたほうがいいんじゃないか!?!」

「……!?!」

こめかみを押さえてしっしと片手を振る瞳子の仕草に、慌てて自ら

の口を押さえる真司。

真司は自らの馬鹿デカい声をこの瞬間まで自覚していなかった。

「……伝えなきゃ、いけないことが、あつて……」

辛そうに、それでもその「しなければいけない事」の為に、息も絶え絶えに言葉を紡ぐ瞳子の様子に真司は居住まいを正して、手招きする瞳子の口元に耳を寄せた。

「……透が、じきに、戻つて、くるから……… だから、早まらないで……… ひかりから、聞いた、から………」

ひかりはこちらに背を向けていて、その表情は知れない。

「……いつ、かは、分からない。けど、…… もうしばらくの、辛抱、だ、から………」

頭を抱え、苦痛に抗うように言葉を搾り出す瞳子に、その鬼気迫る様子に、真司も止めなきゃと思いつつ堪えて耳を傾けていた。

だから、真司はようやく覚悟を決めた。

「あの、神楽見さん、柊さん。 用意して欲しいモノがあるんすけど。」

原作ディケイドの「クウガの世界」では描写されていませんでしたが、原作の原作のクウガにあったのと同じ様な協力者が、ユウスケの周りに八代以外にもいたんじゃないかと鉄槻は思うのですよ。

そこで出てきた「クウガの世界」の「未確認生命体対策班」において、ユウスケのサポートにクウガの生体メンテナンスを請け負っていた、として科学者・柊 ひかりさんを設定しました。

警察の階級について調べていたら、八代刑事は二階級特進しているはず、なんだよねえと ついしみじみしてしまいました。

ユウスケと八代がいかにして出会って、どのように「四号」の正体を隠蔽しつつ協力体制を築いて第一話現在に至ったのか。原作クウガとはまた違ったアプローチができそうで、かつ それだけで一本ハナシが作れそう。

龍騎の世界

「ああ……なんつかズキズキする…… ような気がする……」  
無機質な拘置所の独房の床で、男は額を押さえて呻き、寝返りを打った。

露わになった簡素な衣服のはだけられた襟元の下には、顎から首、喉元を越えて恐らく胸まで続くであろう、一部赤黒く爛れた色の肌が見えていた。  
深い火傷の痕。

それは額を押さえる手にも、腕にも足にも至る所に点々と存在していた。

そして、どかした手の下のその素顔の半分にも。

「……気のせいだよなあ。痛えワケねえもんなあ……」  
気だるい様子で腕を投げ出して寝転がる。

その時、何かガラスを撫でるような薄く高い共鳴音のような音が聴こえてきた。

『あさくら・たけし字倉 威だな？』

「あ？」

突如、有り得ない方角から名を呼びかけられ、男・字倉 威は気だるげに首だけ上げてその方向を見た。

この部屋の出入り口は一カ所しかなく、声が聴こえてきたのはその反対側。

三方を厚い壁で囲まれたこの部屋には、出入り口の他に声をかけられる場所などないのになぜ。  
などとまで字倉は考えない。



人間らしい論理的思考など、「あの時」から忘れてしまった。本能と直感にのみ従い、刹那的な生命の綱渡りを勢いに任せて突っ切ってきたのだ。

「恐怖」とか「訝しむ」とかいう反応を示す前に、見た瞬間に何もかも壊してしまえばいいのだから。

だから、部屋の奥に見知らぬ若い男が突然現れていても、字倉はそれほど大きな反応は示さなかった。

「……なんだてめえ」

『知らなくていいよ。どうでもいいことだろ?』

字倉よりは年下だろうが、十代には見えない。

だが、その口調はまるで十代のチンピラのようなだった。

『これ、知ってるか?』

言って男が付き出した紫色の四角いプレートを、目に認識した瞬間に激昂した字倉は跳び起きて男に殴りかかった。

「っらあッ!」

だが肉迫した時には男の姿は掻き消え、拳は虚しく空を切った。

「!?!」

『やめろよ。俺、そこにいねえから』

字倉は相手の言うことなど聞いてはいなかった。

いつの間にか背後にいた男に向けて再度殴りかかる。

「っらあッ!」

『お前の目に映る位置に結像して姿を見せてるだけだからさ。』

…まあいいや、そのままハナシ聞けよ』

「っらあッ!」

全く言うことを聞かずに遮二無二あたりを殴り続ける字倉に呆れたように、男は構わず語り出した。

『まあ、ムカつくよなあ。お前をここに放り込んだ裁判員の証だもんなあ。 どれの判決が適用されたんだかは知らねえけど』

「……………」  
そうだ。野良犬のように生きてきて、ある日突然警察に拘束され、もう自分のやったどの事について訊かれているのかも分からない話の末に「仮面ライダー裁判」とやらにかけられ字倉はここにいるのだ。

なにはなくともその「仮面ライダー裁判」の裁判員の連中は、仮面ライダーはどいつもこいつも叩き潰して真っ平らにしてやらねばこのムカつきは収まりそうにない。

『だからさ。これ、やるよ』

だが、あるうことが男はその裁判員の証を、カードデッキを汚い布団の上にぼん、と放り投げてきた。

「……………あ？ 阿呆か？」

さすがに殴るのをやめた字倉が、首を傾けて吐き捨てた。

「俺が裁判員になれるワケねえだろうが」

『阿呆はお前だろ。ソレがなんだか分かってんのか？』

互いに射殺せそうな視力戦の応酬を繰り広げながら男は言い返す。

『事情が変わったんだよ。「仮面ライダー裁判」はもうヤメだ。』

そこで、もしそれが用済みの警察官の拳銃かつこ弾入りだとしたら、どうよ』

「……………」

ようやく事の次第が見えてきたのか、字倉の目つきに喜色が浮かび始めた。

『ミラーワールドに出入りできて、仮面ライダーのパワーを法的制約ナシで自由に扱えるとしたら。』

「……………フン。おもしれえ」

字倉はその紫のカードデッキを拾い上げた。

「いいのか？本当に」

『好きにしろよ。お前の邪魔をできるのも仮面ライダーだけだ。』

「……………フン。」

にやり、と字倉の顔に狂気の笑みが浮かんだ。

鳴り響く拘置所の警報に慌ただしく駆け回る多数の警備員の靴音が入り乱れ。

字倉 威の独房が空になっていたのを知った彼らの騒ぎはまた一段と大きくなった。

いずれにせよミラーワールド側から脱獄を果たす『王蛇』を阻める者などこの施設には存在しない。

その様子を眺めて、神鳥 士郎は仄暗いひきつった笑みを漏らしていた。

『そうだ。残りのやつらのバトルを引つ掻き回してやれ………  
まだ決着をつけられちゃ困るからな。……ん？』

その気配を、士郎は敏感に察知した。

振り向けば、道路の先に立てられた反射鏡からこちらをじっと見つめる少年の姿があった。

さらさらの長い髪で美しい面立ちの半分を隠した、線の細い感じの少年。

しばらく前から現れたミラーモンスターではない謎のモンスターの出没に併せて神鳥 士郎の周囲をうるつくようになったその少年が、どうも人間ではないことにはなんとなく勘付いていた。

『……ち。しつこい奴だ』

今の自分に危害を加えられる者など存在しないはずだが、士郎のことを認識しつつ、何度ミラーモンスターをけしかけても、いったいどうやってか時を置いて再び現れるという不気味で厄介な存在だった。

士郎はミラーモンスターを数体、その少年を襲うよう命じて解き放つと、さっさとその場から立ち去った。

「さて。」

ひかりの、いつもの感情の薄いフラットな声が風に浚われて消える。ここは、普段ならば大量の自動車でごった返す高速道路の入り口。だが今は警察により一時封鎖されており一台の車もおらず、無人ゆえいつもより広大に見える壁に囲まれたスロープが緩やかに彼方へ伸びてゆくのが良く見える。

その幅広のアスファルトの道路の真ん中に、真司と、ひかりと、そして車椅子に座った瞳子はいた。

背後に、彼らを運んできた大型バスが控えている。

そのさらに向こうには、この高速道路に至る道を警察官と車両と看板が立ち塞いでいる。

「手順の最終確認。」

言って ひかりがクリップボードを取り出したのに合わせ、真司もそちらに向き直る。

「この高速道路は全長約40キロメートル。真司君は変身してミラーワールドに入ったら、すぐにライドシューターを乗り捨てて。駆け足で全力疾走すること。ライドシューターの速度だと5分足らずで終点に着いちゃうから。」

ひかりがすらすらと読み上げる内容に真司はうなずいて返す。

「「リユーキ」のミラーワールドでの活動限界時間は9分33秒。

以前の計測結果によると「リユーキ」は100メートルを5秒で走るから、9分半もあつたら11キロメートルは軽い。」

手元のクリップボードに目を落とし、淡々と続ける。

「この高速道路には、1キロメートルごとに距離の数字を書いた旗が立ててあるから目印にして。デッドラインは5キロメートル地点。つまり半分。半分まで来たら、そこが最後の分岐点。真司君自身が行くか戻るか決めて。そこを越えたら周りは緑しかない山岳地帯。もう鏡のある場所には戻れなくなるから。」

「……ん。」

真司は、真剣な眼差しで力強くうなずいた。

ミラーワールドの「到達不能点」とは、「ミラーワールドにおいて全ての鏡から最も遠い地点」のこと。  
そしてもう一つ。

「仮面ライダー」の活動限界時間で辿り着ける距離の「向こう側」。当初、ひかりが抱いていた「龍騎」のシステムの疑問のひとつに「なぜ活動限界時間があるのか」というものがあつた。

「……水ん中に潜るのに酸素ボンベを使うみたいにな、ミラーワールドにいる為に必要な何かがかードデッキに付いてるんじゃないスカ？」

「だとして、スキューバダイビングならスピアのボンベを持ち込むことで活動時間を増やすことができる。これの制作者は、これほどの技術を持ちながら、なぜそれをしなかったのかな。」

「……裁判の効率化？」

「真司君の世界の裁判制度はツツコミ処が満載だからいちいち言わないけど、むしろ決着が付かないで次回に持ち越すことが多かったとも言つてたよね？むしろそれは非効率。」

「うん。まあ。」

「となると、考えられる理由がひとつある。「9分33秒で辿り着ける所より先が何らかの理由で立ち入り禁止である」という可能性。この場合の「到達不能点」は、全ての鏡から最も遠く離れていて、かつ観測者が世界を認識できる限界時間以降の世界のこと。」

「観測者」っていうのは真司君のことね。量子論は真司君には難しいから詳しい説明は省くけど、とにかく行ける限りの距離と時間の向こうに、「何か」があるかもしれない、ってこと。」

そのひかりの推測に則つて、真司は「ミラーワールドの到達不能点」にその謎を解く鍵を求めたのだ。

「……真司君。」

放り上げたカードデッキをキャッチした真司は、呼びかけた車椅子の瞳子を振り返った。

「なに？」

「……やっぱり、透を待とうよ。真司君が命賭けることないよ」  
瞳子はまだ立つことも難しい状態だが、しゃべり方はだいぶ落ち着いてきたようだった。

「いやあ。命懸けってんなら、この世界みんなそうでしょ。」  
くるりと振り向いた真司は両手を広げてあっけらかんと宣った。

「いくら鏡を塞ごうたって、意外とツヤツヤした物って多いし。そしたら、ミラーモンスターに怯えて暮らすのと、こっちから攻めに行くのって、そんな大差ないし。」

「……でも。」

瞳子はなおも言い募ろうとしたが、真司のどこか気迫の溢れる笑顔を見て言葉を失った。

「俺、カメラマンだからさ。ファインダー覗いてても、だからこそこの世で起こる何もかもが、どっか遠くの出来事なんかじゃなくて自分と地続きの世界の現実なんだっていつも思うんだ。だから、自分の世界のこと、もっとちゃんと知ろうと思って雑誌の仕事やってんだ。みんなにも、それを知って欲しくて。それで写真撮ってる。」  
照れくさが浮かんだ笑顔に、僅かに真剣な色が混じる。

「だから、できるだけ自分出来る事は躊躇しないようにしたいんだ。それに、俺たちチームの頭脳が出した提案だぜ？俺はただ死に行く訳じゃない。その可能性を拾いに行くんだ。」

言いながら真司が手招きしたのに合わせて、ひかりが傍らに立てた板にかかった布をはぐって姿見の鏡を露出させた。

そちらにカードデッキを向けてかざすと、鏡に映る真司の腰に出現した金属質のベルトが現実世界の真司の腰に転移して現れた。

「それと、多分、透のこと待ってられないと思う。急がないと」

「……え？ なんのこと？」

問い返す瞳子には応えず、真司は鏡に向き直ると右手を左斜め上に

びしりと突き出した。

「変身！」

叫び、右腕を振り下ろし上体の捻りを戻す動作で左手のカードデッキをベルトバックルに装填する。

途端に無数のヴィジョンが殺到し、真司の体は赤地のボディスーツに黒と金属色の軽装甲に包まれ、バーゴネットのマスクを纏った仮面ライダー 龍騎に変身した。

『じゃ、行ってくる！』

「真司君！？ ちよつと」

瞳子の制止の声にも応えず、龍騎はひかりの傍らの姿見に飛び込んで消えていった。

ミラーワールドの境界に飛び込んだ龍騎の身体はまず、いつの間にか二輪の次元転送機『ライドシユーター』のシートに座った状態で出現する。

ライドシユーターは、二輪車の構造を持ちながらシート幅は身体より広く、フロントから大きく弧を描く戦闘機のキャノピーのような天蓋が後ろまで覆い尽くし、背もたれが後方に傾斜したそのインテリアはまるで一人乗りのマイクロカーのようである。サイドにドアがないことで、かろうじて「バイクである」と思わせる。

このマシンに乗せられて、デイメンションホールを通過し現実世界からミラーワールドへと渡るのだ。

そして姿見の表面から、左右が反転した無人の高速道路に飛び出したライドシユーターは、だが予定の地点で停車することなく、龍騎の加速の操作によって高速道路の彼方めがけて疾走していった。

「ちよつ……！？ 真司君！？ なにやってんの！？」

鏡の向こうに出現したライドシユーターが、停まるどころか加速をかけて見る見る遠ざかってゆくのを目の当たりにして瞳子が車椅子から身を乗り出し転倒した。

「やめなさい！ それじゃ、本当に戻れなくなっちゃう！？」

間違いない。真司は、ひかりの仮説の条件を確実なものにする為、「到達不能点」に辿り着く為に自ら退路を捨てたのだ。

あの速度では、もう二度と唯一の鏡があるこの地点まで戻ってこれないだろう。

「真司君！ 真司君！？」

普段から冷静なひかりまでも、姿見にしがみついて真司の名を叫んだ。

「ひかり！すぐに車を呼んで！鏡を持って真司君を追うの！」

「でも、あの速度じゃあ……！！？」

「いいから！少しでも近づくの！」

うなずいたひかりは、すぐさま携帯電話を操作して入り口を封鎖しているパトカーを呼び寄せた。

「……あのバカ、なんであんな無茶を……」

瞳子は道路に倒れたまま鏡の中を遠ざかる後ろ姿を睨み付け歯噛みしていた。

> i 8 9 1 9 | 5 3 8 <



track・57 デイレイテッド・龍騎・アギト（後書き）

そう言えば。「裁判」をテーマに置きながらなぜこの人が出てこなかったのか、とも思っていました。

ディケイド龍騎に浅倉さんがいたら絶対に仮面ライダー裁判行き確定でしょうに。

ところで。皆さん覚えておいででしょうか。「神鳥 土郎」。

ぶつちやけ track・5 に登場して以来どれだけ振りかつてもう忘れたくらい久し振りの再登場。

よろしければ、読み返して確認して頂きたい所存。 まあ、誰のイメージネーションかは言うまでもないところですが。

龍騎の世界

『戦え。唯一勝ち残った者には、いかなる望みも叶える。』万能の力』を与える。      戦え。』

裁判制度を放棄し己の我欲の為にのみ戦い合うバトルロイヤルに変貌したライダーバトルは、現状 中盤に差し掛かったと言える。関係者への見せしめに、一番最初にミラーモンスターの直中に放り込まれ殺されたインペラーを始め、シザース、タイガ、ファムがライダーバトルの最中に次々と誰かの目の前でミラーモンスターに殺されていった。

我欲に取り憑かれた参加者には血の気の多い者が多いとはいえ、初めて目にする契約モンスター以外の異形の群に恐れを為す者も多く、先の三人はそれが要因でミラーモンスターに遅れを取った。

逆に言えば、現在生存が確認されているナイト、ゾルダ、ライア、ベルデ、ガイ、アビスの変身者は、異形の存在への恐怖を克服し強者として一段上の高みへ昇ったと言える。

ただし、唯一の懸念があるとすれば、まだ誰も己の手で直接他のライダーを倒した者がいないという現状。

いざという時に、本当に他人を手にかけることができるのか。「殺人経験」というアドバンテージを持つ者がまだ現れていないこの現状は、ある意味全員がまだ互角の条件である。

そんな中、今だ姿を見せぬ龍騎、王蛇、オーデインを警戒しつつ、六人の仮面ライダーはバトルを繰り返していた。

ナイトの持つ突撃槍に紫色の多節鞭が巻き付き、互いに武器を引き

合った。

『……お前、死相が見えるぞ……』

『マスク被ってるのにそんなものが見えるか』

どこか中国風味の武闘戦士めいたデザインの仮面ライダー　ライアの嘲笑に、コウモリの意匠を取り込んだ甲冑の騎士・仮面ライダー

ナイトに変身する羽黒　蓮はマスクの下で忌々しげに言い返した。ただの威嚇と聞き流すこともできない。決して知り合いではないが、このライアに変身している男のことは雑誌記者の仕事で聞いた噂で知っている。

てっか・みゆき鉄架　海之。表向きで有名な肩書きは司法解剖を担当する法医学者

で、それだけでもこの面子の中では最も「死というタブー」に一番近い男だが、噂によれば、どういふ訳か死期の近い人間を察知しては、その者の周囲に現れるという奇怪な行動を繰り返していたらしい。その目標の人物が実際に亡くなるのが非常に多く、その為に警察にしばしば容疑者扱いされていたと言う。ちなみに、直接殺害に及んだケースはゼロらしい。

そして裏でついたあだ名が「訃音のネクロフィリア」。「死の訪れを告げる死体愛好者」という不気味極まりない男なのである。

その鉄架が「死相が見える」と言うのはもはや挑発にも冗談にも聞こえないのだ。

『羽黒　蓮。お前の辣腕は聞いている。いらぬ情報を漁り過ぎたのではないか？　このバトルの末に手に入る物で己の運命を回避できるというが……』

ぼそぼそと不吉で暗い声音でしゃべるライア。

正直、声を聞いているだけで運を吸い取られているような心地だが、蓮としても己の目的の為にこんな戯れ言に付き合っではいられない。

『生憎と俺の願ひ事はそんな事じゃない。それに俺が死ぬとしても、お前のずっと後のことだろうよ！』

『そうか。』

拮抗している武器の綱引きの最中、ライアはデッキからカードを引

き抜いた。

鞭を握る左腕に装着された盾のスライドカバーを展開し、そこにカ  
ードを挿し入れるとカバーを閉じた。

《コピーベント。》

認証が告げられた途端、あるうことかライアの右手にナイトの物と  
同じ突撃槍・ウイングランサーが現れた。

『まあそう言わず遠慮せずに逝くといい。』

『！』

ぼそぼそとした口上の中で突き出されてきた己の武器の穂先を、ナ  
イトは腰から引き抜いた召還機、細身の剣・ナイトバイザーで打ち  
払った。

看板が左右反転したこの広大な工場の敷地の別方面では、桁外れに  
大きな爆音が何度も轟いていた。

事務棟の屋上に陣取った緑の銃士・ゾルダが両肩に担いだ巨大な二  
連装キャノン砲・ギガキャノンで地上を砲撃しているのだ。

だがその砲撃にさらされている鋼色の重甲冑姿の仮面ライダー ガ  
イは意に介したふうもなくそこに立っている。

ガイの傍らに立つ、立ち上がった犀のような契約モンスター・メタ  
ルグラスも同様だった。むしろ爆炎が痒いのか脇腹を掻いてすらい  
た。

『クソ大砲なんかさあ。別に避けなくたって跳ね返しゃあいいだけ  
つしょ？』

見かけの巨躯のわりに聞こえてきた声は幼い少年のようだった。

ガイの装甲の異常な厚さは、ゾルダの砲撃を受けてもびくともしな  
い。

『忌々しい堅さだね！思わず本気を出したくなっちゃうよ！』

口調は軽薄だが、マスクの下で北尾は僅かな焦りと苛立ちを覚えて  
いた。

『クソスナイパーなんかさあ。居場所を悟られたら終わりつしょ？』

そこに行つて、ボコリやいいんだから」

「近付けるものなら近付いてごらん！」

ガイの勘に障る指摘に言い返しながらも北尾は舌を巻いていた。確かにその通りだ。

だが、ガイも厚い装甲と引き替えに決して素早いとは言い難い。状況は膠着している。はずだった。

「僕が近付く必要はないっしょ。それよりクソ手前の心配でもしたら？」

「なに？」

こちらを指さしてガイが告げた途端、怪訝な声をあげたゾルダを横からの痛烈な一撃が襲った。

「!？」

吹き飛ばされた衝撃でギガキャノンが消滅しゴロゴロと転がる。

だが跳び起きて周囲を見回しても何者の姿もこの屋上にはない。

だというのに再び顎に衝撃を受けて吹き飛ばされた。

「っがつ!？」

さらに屋上を転げたゾルダはなおも跳び起きるとすぐその壁に背をつけて立ち、デッキからカードを引き抜いた。

取り出した機召銃・マグナバイザーの尾部を引いて銃身をスライドさせると、本来の銃器ならマガジンスロットにあたる部分が滑り出し、カードトレイを現した。

そこにカードを置き、まさしく弾倉を納める動作でトレイを押し込むとカードが読み込まれる。

《ガードベント。》

どこからともなく飛来した、契約モンスター・マグナギガの膝を模した肩当てがゾルダの両肩に装着される。

その間も辺りを警戒していたゾルダだったが、真上から強烈な衝撃を受けコンクリートの床に叩きつけられた。

「っがつ!？」

「脆い。脆すぎる。大火力を得て調子に乗ったか」

いつの間にかそこに、ゾルダの背を片足で踏みつけて立つ仮面ライダーが現れていた。

黄緑に彩られ、曲線で構成された装甲とマスクはカメレオンにそっくりな形状をしていた。

すなわち、仮面ライダー ベルデ。

『弱い。弱過ぎる。せめてあのガキくらいはさっさと始末して見せろ。俺の予定が狂っただろうが』  
ぐり、とベルデの足がゾルダを踏みにじる。

ガイの余裕を含んだ態度はつまり、このベルデと連携し、ガイがゾルダを引きつけている間にベルデが接近して強襲することを結託していたからだろうが、今のベルデの台詞から、ベルデはベルデでゾルダがガイを倒してくれば手間が減る、と考えていたと推測できた。

(さすが。所詮は敵の敵も敵、か)

ライダーバトルの非情なルールを改めて実感し、呻きながらもゾルダは身を起こそうと腕脚に力をこめた。

だが、いかにガードベントでダメージは軽減できても、いくらもがこうともベルデの足はゾルダの背を押さえて離さなかった。

『ふん。浅ましい。浅まし過ぎる。「万能の力」とやらは、最も活用できる人間が手にしてこそ最も効果を発揮する。貴様ら脆弱な有象無象は、ただ優秀な俺のやることを甘受していればそれでいいのだ。』

ベルデは、足から逃れようとするゾルダの動きを敏感に察知しては、ゾルダの重心を巧みに捉えて押さえ込む。

その間に、ベルデはデッキからカードを引き抜いた。

それを引き延ばしたワイヤークリップに挟み、ぱつと手を離すとカードは左大腿部のバイオバイザーに瞬時に引き込まれた。

《ファイナルベント。》

認証に応え、屋上のさらに高みにある避雷針の頂点にカメレオン型のミラーモンスター・バイオグリーザがしがみつく形で出現し、這

いつくばるゾルダめがけてその舌を鋭く射出した。

《タイダルベント。》

伸びた舌がゾルダの足を絡め取ろうとした瞬間、別方面からの認証の音声と共に現れた膨大な津波が屋上を舐め、ゾルダを、ベルデを、バイオグリーザを、そして地上にまで及んだ波はガイとメタルゲラスまでもを薙ぎ倒した。

『うおおおお！？』

『わああああ！？』

波に捕らわれ数メートルを押し流される一同。

だがそれほどダメージはない。これは範囲内のユニットの体勢を強制的に崩させるだけのものようだ。対して、その効果範囲は異様に広い。

『注目なさい！』

高飛車な女声が響くと、この屋上の端にいつの間にか新たな人影が現れていた。

細身の体躯を曲線で構成された装甲が覆い、末広がりな突起を生やしたそれはどこか水棲生物を思わせる。

そして大きく膨らんだ胸郭といい、ヒールの高いブーツといい、女性の記号と相まって、それはまるで二本足を得た人魚のようだった。これが、現在参加が判明している最後の一人、仮面ライダー アビス。

今の「タイダルベント」発動の為だろう、巨大な鮫型モンスター・アビスドンを背後の空中に従えている。

『そう。わたくしの前では何もかもがひれ伏すの。心得のない者は容赦なく海の藻屑と変えミラーワールドの塵にして消して差し上げてよ？』

《ソードベント。》

言いながら淀みなくカードをバイザーに通し、まるでチェインソーのような大剣を召還して構えるアビス。その様はまさに女王の風格であったが。

『……いきなり力任せに薙ぎ倒しておいて「ひれ伏す」もないんじゃない？お嬢さん』

心底呆れたばやきを吐いて、ゾルダはあっさりと立ち上がった。

『おだまりなさい。貴方達はわたくしの目的を叶える為の礎に過ぎないことが分かって？ もはや人とも敵とも思わない。道端の雑草の処理のように、微塵の感慨もなくその首を刈り取って差し上げますわ！』

居丈高に叫び、剣を振りかぶり手甲のバイザーを盾のようにして構え走るアビス。

ゾルダは、デッキから引き抜いたカードを展開したマグナバイザーに挿し入れトレーを押し込んだ。

《ストライクベント。》

どこからともなく飛来した、マグナギガの頭部を模した手甲を装着し、手甲から湾曲して延びる長大なスパイクで鮫の歯のような剣の一閃を受け止めた。

『無礼者！その首を差し出さない！』

凄まじい膂力で振り下ろされた剣はギガホーンだけでは押さえきれずに押し込まれ、ゾルダは辛うじてその剣先を逸らして肩アーマーで担ぐようにして受け止めた。

ガードベントを発動させておいたのが幸運に働いた。ゾルダのデッキは、本来接近戦には不向きなのだ。

『やれやれ。お嬢さんには「女王不信任案」でも出してあげなきゃダメかねえ？』

ばやいたゾルダは、間髪入れずに片手のマグナバイザーを至近距離からアビスの腹に撃ち込んで相手を引き離れた。

『ぐうつ！？』

続く連射にたたらを踏んで後退し転倒するアビス。

そこへ、屋上入り口のドアをくぐって、地上にいたはずのガイまでもが現れた。

『さあて。混戦の第二ラウンドかね』



四人のライダーが一堂に会した戦場を眺め、ゾルダは溜め息混じりに呟いた。

## クウガの世界

無人の高速道路を疾駆するライドシューターは「10」と書かれた旗の脇を一瞬で通過した。

スタート地点から十キロメートルを走破したことになる。

真司は既に腹を括っていた。

ひかりの説明は良く分からなかったが、「ミラーワールドの到達不能点」とはとにかく「鏡まで戻れる」などと微塵も思っていないは辿り着けない場所らしい。

だったら、行けるところまで行ってしまえばいい。

真司は、迷いのない瞳で高速道路の彼方を睨み付けていた。

その向かう先の遠くから、何者か蠢く多数の物体が見えてきた。

それが何かなどと考えるまでもない。この世界にミラーモンスター

以外の何がいると言うのだろうか。

地を駆けるもの、飛翔するもの、生態も形状も種々雑多なミラーモンスターが大挙してこちらに殺到してきたのだ。

『っしやあ！これビンゴってヤッじゃねえ！？』

真司はむしる喜色を込めて絶叫した。

なにしろ、ひかりの推測が裏付けられたのだ。

このモンスターの動き。この先にいる何者かの意志が介在していると考えるより他にないではないか！

『うおおおおお！』

龍騎はなおもスロットルを開放するとミラーモンスターの群の中に突撃していった。

『おおおりゃあああああ！』

右に、左にとかわし、体躯の小さなものはそのまま跳ね飛ばした。

だが、いかなライドシューターといえどミラーモンスターとの連続体当たりにはいつまでも耐えられるものではなかった。

さらに四方から、上空から火球を、稲妻を浴びせられ、あちこちを打ち砕かれひしゃげられたライドシューターはとうとう耐用限界を越えて爆発した。

『つどおおおおお！？』

緊急脱出装置が作動して、キャノピーが吹き飛んだ一瞬後に跳ね上がったシートに押し出されて宙を飛ぶ龍騎は無数のミラーモンスターの上空を飛翔すると、何匹かのシアゴーストを踏み潰してアスファルトに着地した。

『うっおおおおお！』

そして遮二無二駆け出してデッキからカードを引き抜き左腕のバイザーのスリットにカードを挿し入れてスライドカバーを閉塞した。

《アドベント。》

《ソードベント。》

《ガードベント。》

次々とカードを装填し、盾を、サーベルを構えてミラーモンスターの群を押し退け、斬り分け、前へ、前へと突進してゆく。

上空の脅威をドラグレッダーが牽制している隙に地上を駆け抜ける。今はミラーモンスターを倒すことが目的ではない。

前へ進むことが目的なのだから。

## 龍騎の世界

『さあ。三人とも、その首を差し出さない！』

『御免被るね。』

アビスの宣告を丁重にお断りして返し、ゾルダは腕に装着したギガホーンを振り上げていきなり屋上の床を打ち砕いた。

『！？』

『何を！？』

他のライダーの狼狽も無視してゾルダは大きく砕け拓かれた穴に踊り込み階下へと降りていった。

『戦略的撤退つてやつだよ』

さらに着地した床も殴って破砕し階下へと降りる。

いかな接近戦が苦手なゾルダでも、「仮面ライダー」はおしなべて皆 拳でコンクリートを簡単に砕く基本スペックを有しているパワードスーツだ。

あとは、いかにこの「仮面ライダー」の姿での常識に慣れることができるかが戦略の幅を広げる鍵でもあると言える。

やがて地階まで到達したゾルダはカードを引き抜いて、展開したバイザーにカードを置きトレーを押し込んだ。

《シュートベント。》

そして現れた一丁の長大な大砲・ギガランチャーを脇に抱え、その砲頭を天井へと向けた。

『さあ喰らいな』

言つて、ギガランチャーを連射し天井に次々と孔を穿つてゆく。

それはすなわちこのビルの階層全てを縦に貫く、屋上にいる三人のライダーへの遠隔攻撃だ。だが別にこれを命中させる気もない。

ありつたけを斉射したところで砲頭を水平に向け、一発放つて壁に大穴を開けてギガランチャーを脇へ放り捨てる。ゾルダはそこからビルの外へと飛び出した。

そのわずかのち、轟音をあげて倒壊してゆく事務棟を、ゾルダは離れた場所から眺めていた。

『まあ、あいつらも悠長に屋上に居座っていたとも思えないけどね』  
ともあれ北尾としてはデッキの都合上、接近戦は御免被りたいところ。

今日はこれで離脱して仕切り直そうと考えていた。

そこへ、激しい剣戟の音と共に離れたところで戦っていたはずのナイトとライアが転がり込んできた。

『うわあ。なにしてんの』

『うるさい』

トタンで構成された巨大な作業棟の間の路地に突如現れたふたりに、思わず頓狂な声をあげるゾルダにナイトも忌々しげに言い返した。さらに倒壊した事務棟の瓦礫の下からコンクリート壁を押し退けてガイが立ち上がった。鈍重さゆえ逃げ遅れたのだろうが、と言うより逃げる必要もなかったということか、いやはや頑丈なことである。『まあいいや。僕は疲れたからそろそろお暇するし』

じゃね、と手をひらひら振って、ゾルダは一方へと歩き出した。

『……………待てよ……………』

そこに、初めて聞く声がかげられた。

このミラーワールドにあつて、新たに加わった声と言え、それが示す意味はひとつしかない。

『ああ…………… なんつかズキズキする…………… ような気がする……………』

遠くから、首に手を遣りぐるぐると頭を回す紫色の装甲を持つ新たなライダーが現れた。

まるで湾曲して広がったコブラの鎌首のような形状の胸郭とマスク。それに加えて変身者の獰猛な物腰がさらに獲物を前にした毒蛇の威容を思わせる。

間違いなくその体を示すがときその仮面ライダーの名は「王蛇」。

『おい。お前ら。』

そこまで歩いてきた王蛇は、取り出したコブラ型の杖の柄尻の方を持ってそれをくるくると回し。

『ちよつと潰させろよ』

言つて、杖を、牙召杖・ベノバイザーを一振りして先端からカードトレイを振り開くと、そこにデッキから引き抜いたカードを挿し入れて、柄尻を地面に突き立てその勢いでカードトレイを閉塞した。

《ソードベント。》

認証と共に、どこからともなく飛来したドリルのような刺突剣を掴み取り、気だるげに肩に担いだ。

『とびつきりの殺し合いの末になあ』

初めて体感する今まで感じたものとは桁外れに強大な気迫に、北尾の背におぞげが走つた。

(……ああ。これが本当の「殺気」つてやつか)

北尾は弁護士という仕事柄、ごく稀にだが「凶悪殺人犯」と面会で向かい合つたことがあつた。

王蛇の変身者の素性は知れないが、これほどの冷たく深く暗い強烈な気迫は、恐らく二三人は殺していないと出てこない殺気だろう。『……おいおい。冗談じゃないよまったく。なんてやつ参加させてくれてんの……?』

間違いない。この王蛇こそ、このライダーバトルにおける最凶最悪の敵だ。

> i 9 0 4 8 | 5 3 8 <

## クウガの世界

『おりゃああああああ!』

次々と迫り来るミラーモンスターを右に、左にとサーベルで斬り伏せ、巨大なクモ型モンスターの股下に飛び込み前転して通り抜け、

突進してきたシールドボーダーを踏み台にして跳躍すると伝承における牛若丸のごとくモンスターたちの頭を、背を飛び石のように足場にして飛び越えてやり過ごす。

再びアスファルトに着地し駆け出す龍騎の、手から、足から、全身から粒子が立ち昇り始めた。

とうとうミラーワールドでの活動限界時間が来たのだ。

「まだだ！」

ライダースーツが消え去る前に。

龍騎は引き抜いたカードを左腕のバイザーに挿し入れカバーを閉じた。

《ファイナルベント。》

「おりゃあああああ！」

駆ける勢いで跳躍し、カードの効果に従って背後までやって来たドラグレッダーが吐いた火炎を背に受けて蹴りの体勢に移行した龍騎は砲弾の勢いで飛び出した。

押し寄せる多数のミラーモンスターをことごとく蹴り貫いてゆく。

やがて巨大なモンスターの身体を突き抜け路上にもんどり打って転がったところで龍騎のライダースーツは完全に粒子化して消失してしまった。

残るは、ただの人間に過ぎない生身の真司のみ。

「っぐっ！？」

アスファルトに突っ伏した真司の身体を、ミラーワールドの物理法則の拒絶反応が襲い粒子化が始まる。

まるで勢い良く砂を浴びせられているかのような激痛に呻くが、真司は苦悶をあげながらも立ち上がり、歩き出した。

「ま、だ、だ」

物理法則がまるで異なる為に一歩踏み出すだけでも異常に重い。まるで水か泥の中を歩いているかのようだ。

「ま、だ、だあ！」

とうとう突っ伏すが、真司はアスファルトに爪を立て、膝を擦り、

這つても前に突き進む意志を曲げなかった。

「ぐ、お、お、あ、あ、ああ！」

周りをミラーモンスターが駆け抜けてゆく気配があったが、もはや真司は周囲をまともに認識してはいない。

とにかく前へ、前へとじりじりと進み続けていた。

「……………！？」

意識も朦朧としてきた。

周囲の光景が歪んできた気がする。目もおかしくなってしまったのか。

実際、辺りの風景はまるで柔らかい鏡をぐにやぐにやに曲げたかのように歪曲していた。

その異様な変形は水面のように緩やかに変移を続け、一瞬たりと定まらない。

「……………」

もう感覚もない。いま進んでいるのか、進めなくなってしまったのかも分からない。

「……………まえ、へ……………」

真司は、それでも諦めたつもりはなかった。

「……………」

一瞬、意識が途切れたかと思った。

ふと気がつくのと、突っ伏した真司の目の前に微かに揺れる沢山の小さな花があった。

「……………あ？」

身体を襲う激痛と倦怠感は続いている。

目の前に投げ出した右手は半ば薄れかけ、その向こうの花が透けて見えていた。

だが、意識と光景は平衡を取り戻しているようだった。

「……………これ、は」

戸惑う真司の元に、何者かが駆け寄ってきた気配がした。

見えないが、恐らくここ一帯が花だらけなのだろう、草を踏む音と共に真司の傍らに靴を履いた人間の足が現れ、スカート越しに膝を付き、慌てた様子で置いたポーチの中をまさぐると、白く細い人間の手が真司の手を取りポーチから取り出した何かを握らせたのをぼうつと眺めていた。

「…………だれ」

なぜ、ミラーワールドに人間がいるのか。

残った意識に上った疑問と同時に、目の前の手に握るカードの内容をようやく認識した。

それは見たこともないアドベントカードで、火炎に巻かれた金の翼が描かれていた。

「…………これは、は…………！」

タイトル欄にはただひとこと、「SURVIVE」と書かれている。サブイブ

それに気付いた途端、真司の身体を紅蓮の炎が取り巻き、いつの間にかその身を再びライダースーツが包み込んでいた。

「！」

全身を襲う激痛は嘘のように消え去り、真司は軽々と跳ね起きた。

「これは…………」

そして身体を覆う違和感に己を見下ろすと、装甲の形状が自分の知る物とは違うことに気付いた。

同じ赤のカラリングだが、これは「龍騎」の姿ではない。

ベルトは共通のもののように、バックルには初めて見る赤色のデッキがはまっている。

ところがその表面の紋章が「龍騎」のものであることに気付き真司は驚いた。「龍騎」のカードデッキは黒かったのになぜ。

だがなんとなく理解した。どうやらこれは、言わば「龍騎」の別形態らしい。

自分の顔が見えない為、本当にこれが「龍騎」なのかははっきりしないが、今はどうでもいい。



とりあえず自身の姿に納得した真司は、さつきからずつと真横にいる存在によく振り向いた。

「……、そうだ！ あんたは」

それが何者なのかを確認しようとした真司は、その若干予想外な相手の姿に僅かに面食らっていた。

そこにちよこんと正座して、こちらを不思議そうにぼんやりと見上げていたのは、真司と同じか少し下くらいの歳の少女に見えた。

「……あー……」

真司は間抜けに辺りを見回すが、高速道路の途中とも思えぬこの一面花畑にはどこまで目を凝らしてもこの場の二人しかおらず、「モンスター」の群を仕切ってたんだから、さぞかしゴツくて恐ろしい親玉がいるに違いない」と考えていた真司はただひたすら混乱していた。「えーと。きみ、ひとり？」

とりあえず真司は唯一の話し相手におずおずと聞いてみた。

「……あなた、だあれ？」

「へ？」

ところが質問で返された。

だが、それより気になったのは、その少女のしゃべり方。二十歳前後の人間がしゃべるにはなんと舌足らずで幼いしゃべり方であったのだ。

「……おにいちゃんの、おともだち？」

「え、いや、えーと……」

不思議そうにこちらを見つめるその瞳は一点の曇りもなく、とぼけているとも思えない。

まあいいか。可愛いから。と、真司はそれ以上彼女の印象について追求することを放棄した。

それよりも、今の少女の台詞で思い出した。何度か真司の耳に聴こえていたあの声と同じものだということに。

「あ、えと、俺、辰巳 真司。きみは？」

「え？」

またいきなり聞き返して返され真司は肩をコケさせたが、少女には  
一応通じていたようだった。

「わたし、神鳥かんとり・ゆい 優衣。」

小首を傾げて、神鳥 優衣はおっとりとそつ名乗った。

t r a c k ・ 5 8    デイレイデッド・龍騎（後書き）

うづむ。なんだか最近「仮面ライダー 龍騎の二次創作」と化している感がありますな。とうとう瞳子も出てこなくなつた。

初めて透が訪れた際には「龍騎の世界」は真司だけ捕まえてほぼスルーしてましたから。その分がここに廻ってきたのと、あと主要人物多過ぎ。さすが「龍騎の世界」。

鎌田さんがいなくなつたのでアビスの変身者をこそつと変更、女性に変えました。まあアビスに限っては他のライダーと違って「元」がありませんし、女性キャラを「ファム」で再設定してまで語るこたがないなと考えるここではこんな配置になりました。

同様に「手塚 海之」のポジションもプロットでは不要となりまして、「吉凶を読む人」というモチーフだけ移植してあんな人に。

アギトの世界

警視庁内、「未確認生命体対策室」と札の掛けられた部屋の中。

乱雑に物が置かれたテーブルの端で、放埒な髪型と無精髭に似合わない白衣を着崩した男がパイプ椅子にだらしなく身を投げ出して座り、新聞を両手で広げて眺めながら、宙に浮いたカップに口をつけてコーヒーをすすり、手も触れずに浮かび上がったパンにかじりついていた。

「んん」。……ふむふむ」

「横着すなっ！」

「んぶふっ!?!」

その男の脳天にいきなり墓石並みにぶ厚いファイル束が叩き落とされ、男はパイプ椅子ごと縦に潰されて紙束の墓標に沈んだ。

途端に宙に浮いていたコーヒーカップとパンが、糸が切れたかのようになりに落下した。

「なにをフツツな顔して超能力なんか使ってるの!? 誰かに見られたらどうすんのよ!?! そんな横着してそのうち手足が退化して芋虫人間になるのがあんたの夢!?!」

さらに女声の激しい罵倒が浴びせられる。

じたばたともがいて手足を動かし頭上のファイル束をどかして立ち上がった男・芦河 翔一は首と顎と後頭部をしきりにさすって縦に縮んだ部分を伸ばすかのようにして呻いた。

「あんな八代。お前は知らなかったかもしれんがな、実は俺、殺したら死ぬぞ。」

「へえ知らなかった。これからは試行錯誤して手加減を覚えるわ。」

「そんなことより!」

ぴしゃり！と片手でテーブルを叩いた八代 淘子警部補は尖り目をさらに釣り上げて翔一を睨み付けた。

「横着してないで手を使いなさい手を！ あんたのその超能力が他に知れたら即どっかの研究所のモルモット行きよ！？ 分かっているの！？」

「分かっている分かってる！ だから新聞紙でそこから見えないようにしてたじゃねえか！」

「そもそもすんなって言うてんの！」

翔一が入り口に向けてぶらぶらと振った新聞紙をひたたくって床に叩きつけ八代がなおも怒鳴り散らす。

「ああもう！ どうしてこんな怠惰に横着さすようなオマケがくっついたのかしら！？」

「普段死にそうなくらい大変な俺に神がくれたボーナスなんじゃねえの？」

「日頃の行いからして、アギト化症状でもまだマイナスだと思っただけど。」

「まあ、できちまったモンはしょうがねえよな。女子高生のスカートがなぜか風もねえのにめくれんのも神のボーナス」

がし、と翔一の顔面に八代の五指が咬み付いた。頭蓋がみしみしぎりぎりと言音を立て始める。

「や・っ・た・の？」

「いぢいひいひいひい！？ してねえしてねえ！？ まだなんツにもしてねえ！？」

「ま・だ？」

「いいいいいいいい！？ しねえしねえ絶対にしねえってえ！？ 情けない壮絶な悲鳴が上がるも八代のアイアンクローは緩まる気配を見せない。

「へええ不思議ねええ？ お得意の超能力で私の手くらい簡単に振り解けるんじゃないの？」

「いいいいいやなんかジカに見えてねえと効きにくいってえかああ

ああああ割れる割れる割れる割れるわれるつづつづつづつ！？」  
ふと絶叫の最中、翔一に僅かに緊張の気配が走った。  
が、ただいま絶賛それどころではない。

翔一の手が八代のアイアンクローを極めて腕をぱんぱん叩きだした。

「ぎぶぎぶぎぶぎぶ！？ いやマチでアレが来たアレ！あんのん、あんのん」

「え！？ アンノウン！？」

「あ……。まだクラクラすらあ」

ヘルメット越しに側頭部を押さえ呻きながら、翔一はアンノウンが現れたと思しき方面へとバイクを走らせていた。

その気配が強まり、もうそろそろその地点かと思ったところで、翔一のバイクの脇を巨大なトレーラーが猛スピードで追い抜いていった。

「おお！？ あつぶねえなああのやる」

キャビンが黒塗りのいかにも獷猛そうな雰囲気その巨大トレーラーは、だがあるうことかこの道路の彼方、翔一がアンノウン出現場所と目していた辺りの路肩に停車した。

「あん？ あのバカ、変な所に止めやがって」

腹いせに適当な違反切符切ってから追っ払ってやる、と思いつつ走行を続けていると、トレーラーはその危険な場所で荷台の側面を全開に展開しだした。

「はあ！？ なにやってやがんだ！？」

そんなところで荷物の搬出などされても邪魔だ。

訝しげに思いながら、ほどなく翔一のバイクはそこに着く。

ひとこと文句を言ってやろうとヘルメットを脱いだ翔一の目の前でトレーラーの荷台から見覚えのある姿がタラップを軋ませてゆったりと地上に降り立った。

「……あ……？」

それは、その横姿は。  
見紛うことなき、だが漆黒に染められたG30Xだった。

## クウガの世界

警察が封鎖している為に無人の高速道路を、一台のパトカーが猛スピードで疾走していた。  
ハンドルを握るはひかり。助手席の瞳子は渋面で前方を睨み据えていた。

「……真司君。無事戻ってきたら、キッツいお仕置きだかね……！？」

その時突然、天井からみしりと何かが載ったような気配が現れ、ひかりも同時に感じたアクセルの負荷に怪訝顔になった。

「……まさか、ミラーモンスター！？」  
だとしたら、ただの人間に過ぎない瞳子とひかりではひとたまりもない。

だが恐怖におののく二人を余所に、助手席側の窓を上から伸びてきた黒い拳がこんこんと叩いた。

その手首には見覚えがある。ディレイドのグローブだ。

「、透っ！？」

それに気付いた瞳子は慌てて助手席側のパワーウィンドーを下ろし上体を乗り出して上を仰ぎ見た。

思った通り、パトカーの屋根に片膝を付いて鎮座していたのは、とどりのライドカードの切れ端と様々なベルトバックルを身につけた姿に変移したディレイド・カレイドフォームであった。

「透！あんた……やっ……」

他の世界の瞳子と記憶を共有しているとはいえ、直接会ったのは初めて透が真司を連れてきた時が最後だった。

いつも一緒にいた記憶と同時に懐かしむ感覚がこみ上げるといふ矛

盾した感情が渦巻く瞳子は、素直に感情の奔流のほうに身を任せた。  
「もう……！ 大変だったんだから！？ こっちはずっと、大変だったんだからっ！？」

「ああ。済まない。」

口調こそ素っ気ないいつもの通りだが、言葉の意味を知った上での謝罪を口にする透に瞳子は言いしれぬ感動を覚えた。

「うん！いいから！来てくれたんだから全部許すよ！ それよりも大変なの！真司君がひとりでの先にいっちゃったの！」

「ほう。真司はこの先か。」

デイレイドは高速走行中の車の上でも平静な動作で遠くを眺め応える。

「ミラーワールドの「到達不能点」を探しに行ってもらったんだけど、真司君たらぎりぎり戻れるところをぶつちぎって遠くに行っちゃったかもしれないの！ お願い透、一緒に探して！？」

「うむ。もとよりそのつもりだ。この先だな？」

その淀みない返事の頼もしさに瞳子の瞳に気が戻る。

そんな瞳子の様子をひかりが物珍しそうに横目で見ていた。

「お前はそのまま車で進め。俺は真司を回収してのちお前と合流する。」

言ってデイレイドは走行中のパトカーの上でも危なげなく立ち上がると、僅かに跳ねるような動作と共に姿を消してしまった。

「瞳子さん、いま、上にいるのがその「デイレイド」ですか？」

「うん！ いやもう行っちゃったけど」

ひかりの問いに喜色満面で応える瞳子。

「真司君を助けに行くって！ とりあえずわたしたちはこのまま直進すればいいから！」

「了解」



『はああ……』

王蛇が突如駆け出した。

掌を後方に向けた両腕を広げる独特の構えで走る王蛇が狙いを定めるは、ゾルダ。

『つくつ！？』

強烈な殺気の吞まれて一瞬対応が遅れたが、剣の届かぬ遠距離にあつては銃器を持つゾルダのアドバンテージは揺るがない。

即座に構え連射した光弾は、迫る王蛇の身体に残らずヒットした。

『つらあつ！』

『なに！？』

だがまともに喰らった王蛇はまるで何事もなかったかのように衝撃を無視して突進しゾルダを剣で殴り倒した。

『つくつ！？』

地面に激突し壊れた玩具のようにきりもみして吹き飛んだゾルダの身体はその作業棟のトタンの壁を突き破って飛び込んでいった。

王蛇は即座に標的を切り替え、立ち尽くすナイトに迫ると再びそのドリルのような刺突剣を振り上げた。

『つらああつ！』

『くつ！？』

ナイトは辛うじてウイングランサーでその剣を受け止めるが、攻撃が阻まれたと見るや即座に王蛇が繰り出した蹴りに腹を突かれたたらを踏み体勢が崩れた所に剣を叩き込まれ地面に打ち倒された。

『がつ！？』

その上ナイトの背中を王蛇の足が力任せに踏みつける。胸郭を圧迫され蓮はまとも息ができなくなった。

『つらあつ！』

『つくつ！？』

さらにまるでサッカーボールをシュートするかのような物凄い勢いの蹴りを脇腹に叩き込まれナイトは「く」の字に折れ曲がって吹き

飛んでいった。

『なんだよ！こんなモンなのかよお前は！』

高く積まれたパレットに飛び込み突き崩し、崩落したパレットの山に埋もれて見えなくなったナイトの末路もろくに見ずに王蛇はすぐさま隣のライアを横薙ぎに殴り飛ばし、即座にガイに襲いかかった。だが振り下ろしたベノサーベルはガイの厚い装甲に逆に跳ね返されてしまう。

『っ、どこの誰だか知らないけどさあ！今さらただの棒きれなんか効かないっしょ！』

『っはあ！』

対峙した一瞬で互いにデッキからカードを引き抜き、ガイは左肩のカードスロットにカードをぽいと放り込み、王蛇もベノバイザーにカードを叩き込んだ。

《ストライクベント。》

《アドベント。》

どこからともなく飛来したメタルガラスの頭部を模した、長大なスパイクを生やした手甲を装着した時には既に、ガイの目前に紫色の大蛇・ベノスナイカーが鎌首をもたげ肉迫していた。

『っひゃ！？』

まるで頭突きのように噛みついたベノスナイカーの頭ごとアスファルトに埋め込まれた。

だがすぐにくわえられたまま引きずり出され、ベノスナイカーはそのまま隣のビルに首を突っ込むとくわえたままのガイを壁と言わず天井と言わず滅茶苦茶に振り回しあちこちに叩きつけ始めた。

コンクリートを砕く音が激しすぎてガイの悲鳴も苦悶の声も聞こえてこない。

『おのれ！見るに耐えぬ暴虐よ！』

チェーンソーのような大剣を振りかざし、アビスが果敢に王蛇に向け駆け出していった。

『目障りだ！真っ二つになって視界から去ねい！』

『うるせえよばあか』

迫るアビスに大した反応も見せず王蛇が親指を下に向けると、アビスは王蛇に辿り着く直前に真横から投げつけられたガイの身体に激突されもろとも反対側のトタン壁を打ち砕いて飛び込んでいった。

『……おいおい。こんなモンかよ……』

やがて動くものなくなつた辺りを睨ね回し、溜め息まじりに王蛇がぼやいた。

『こんなモンなのかよ！ライダーバトルってのはよおツ！？ ええ！？』

怒りに任せて地面に叩き付けられたベノサーベルがアスファルトを砕きながら明後日の方角へと跳ね飛んでいった。

## クウガの世界

『ええと、とりあえず、一緒に現実世界に戻ろう。』

『どうして？』

少女・神鳥 優衣に三度質問で返事され、龍騎の強化形態「龍騎サバイブ」となつた真司はなおも器用に肩をコケさせた。

生身の人間がミラーワールドに居座ることの危険性は自明の理だと真司は当たり前前に考えていたが、神鳥 優衣が平然とここにいる矛盾にまでは頭が回らない。

あたふたと一面の花畑を見回して真司は「言うまでもない当たり前前なこと」をどう説明したものかと考えあぐねていた。

『ん〜、と、とにかくさ、ここ、危ないんだ。だから、俺と一緒に逃げよう！』

『でも、おにいちゃんが、ここにいろ、って。』

『ええ！？』

真司は仰天した。

『お兄さんがいるの！？ ど、どこ行っちゃったんだ！？』

「ちがうせかい。」

『はあ！？』

龍騎サバイブは頭を抱えてしゃがみ込んだ。

『おおおわっけ分かんねええ！？』

そうして真司はしばし懊悩していたが、やがてどこか諦観のオーラを纏って立ち上がった。

『……おっし。分かった。あとでそのお兄さんも探してやる。』

「でも。ここでまってるって」

『いーから。知り合いにお巡りさんがいるから、大丈夫。な？』

きよんとした顔で頑固なことを言う優衣を勢いで言いくるめたつもりになり、龍騎サバイブはデッキからカードを引き抜き、いつの間にか龍の首のようなデザインの銃器に形状を変化させたドラグバ イザーツヴァイの尾部を引き側面のカードトレイを展開させるとそこにカードを挿し入れ、再び尾部を押し込んでトレイを閉塞させた。《ライドベント。》

平時と違いエコーのかかった音声で認証と告げた後、召還されて現れたドラグレッダーもその姿を屈強な巨龍に変移させており、ドラグランザーと名を変えた龍騎の契約モンスターはカードの効果に従いその身をくねらせて変形させ、あるうことが巨大バイクへと姿を変えて龍騎サバイブの傍らに着地した。

『さあ！乗って！』

「あ……」

半ば無理矢理手を引いてシートの後ろに優衣を乗せ、龍騎サバイブはドラグランザー・バイクモードを発進させた。

『っしや！いくぞ！』

「ひとさらい〜。ゆーかいま〜」

『人聞きの悪いこと言わないでくれっかな！？』

平淡な顔と声でどこかへと訴える優衣にとつとツッコミを入れ、真司はこの果てが見えぬ一面花畑の一方に見当をつけバイクを走らせていった。

ところが、無数の花を蹴散らして、行けども行けどもこの一面花畑の果てや変化が一向に見えてこない。

『~~~~!?!? どーなってんだこりゃあ!?!?』

「どーこーいーくーのー」

『どつか! ここじゃないどつか!』

「ないよー。そんなのー。」

『あるわいつ!?!?』

相変わらず平淡に真司のやる事を否定してくる優衣についつい声を荒げつつ、とにかく真司は直進を続けた。

『ええい! 到達不能なトコまで来れたんだ! こーなりゃ不能なトコから意地でも還ってやる!』

『……真司』

意気を上げた真司の耳に、どこからか名を呼ぶ男の声が聴こえた気がして真司は辺りを見回した。

『んあ?』

『……真司。こっちだ。』

『その声……透か!?!?』

その声を聞くのは久しぶりだが、間違えようはずもない。この世界を真司に任せてからしばらくぶりだ。ようやく戻ってきたのか。

『……真司。こっちだ。』

『はあ!?!? どっちだよ!?!? どこにいるんだ!?!?』

だが、声はすれども姿が見えず。

距離も包囲も曖昧な声の発生源に混乱しつつ、真司は必死に回りを見回していた。

『おおい! 透!』

『真司。どこを見ている。そこから俺の方角は、前後でも左右でも上下でもないぞ。』

『どこじゃいそれッツ!?!?』

『仕方ない。危険だがもう少しそちらへ寄る。捕捉しろよ。』

真司の絶叫に透の声が応えた僅かのち、真司の視野に二重映しにバイクに跨ったディレイドの姿が視えた気がした。

「……………!?」

だがその姿は、走行中にも関わらず横を向いているようにも、上から見下ろしているようにも感じられ真司は目をしばたかさせた。

やがてそれは、立体視の焦点が合ってくるかのように周囲の光景がぼやけるのと引き換えにはっきりと捉えられるようになり、それと同時にその不可思議な謎の空間感覚を真司はようやく直感的に把握した。

「……………透っ！見えたっ！」

「よし。ついて来い」

それは「前」と「進行方向」が連動しているようでしていない、人間の理解を越えた移動だったが、龍騎サバイブと優衣を乗せたドラグランザー・バイクモードはマールブル模様に歪んだ花畑の光景の中をディレイドの誘導に従い、その「先」へと真っ直ぐに貫いていった。

アギトの世界

今この林道一帯は異種族混合の乱戦の様相を呈していた。

『はあっ!』

蜘蛛の意匠を取り込んだ、ファンガイア族における葬送の装束「ウイブの葬衣」を纏った遙が次々とファンガイアを蹴り倒してゆく。

『ooooooooo!』

その中に混じっている「アンノウン」とかいう異形の雑魚をもついでに蹴り飛ばす。

ファンガイアとはまた明らかに生態の異なるアンノウンは、魔皇力に寄らずとも打撃だけで倒すことが可能な為それほど脅威ではないが、単純にウイブが対応すべき頭数を増やすとにたく厄介な存在だった。

『つつたく!翔一はナニしてんのよ!』

遙は、街中に張り巡らせたスパスパイダー三世の『糸』の結果によってファンガイアの出現・人間を襲う際の魔皇力の戦闘出力を察知できる。それによって、この世界での突破りのファンガイアの駆逐を行っている。

同様に、翔一も自前の能力でアンノウンの出現を察知できるらしい。それによって、「人間を襲いに現れたファンガイアから人間を守る為にやって来るアンノウン」を、遙と翔一がそれぞれ察知して現場で合流するというのが、こここのところのパターンであった。

遙としても、ある日突如謎の昏倒で入院している瞳子を看ながらの対応な為に今日の出勤が遅れたのだが、だというのに今だに翔一が現れない。

おかげでいつもの倍の数を相手取って立ち回らされる羽目になったのだ。

『はー！上等よ！』

ウィブはベルトポーチからフェッスルを引き抜くと、それをベルトバックルに鎮座するスパスパイダー三世の口元にあてがった。

『ウエイクアアップ！』

吹き鳴らされる覚醒の旋律。

それと同時に辺りに張り巡らせた「糸」を引いて殺到させ、数体のファンガイアとついでにアンノウンをまとめて縛り上げた。

『はあああああ！』

そして膨大な魔皇力を練り上げてその場でターンし、鋭く跳躍して束ねた連中をまとめて蹴り貫いた。

『つぎやあああああ！』

『………！』

喚び出された夜の暗闇の中に浮かび上がった蜘蛛の巣型の紋章に激突し、ファンガイアは微細な破片となって砕け散り、アンノウンは頭上の光輪を一際輝かせて爆散した。

周囲の光景が昼のものへ戻り、爆発跡にウィブが着地する。

だが、ファンガイアもアンノウンもまだ残っている。

『ええい！翔一っしたら何時になったら来んのよ！？』

ぼやきつつも残りの連中に向け構えたところで、最もウィブから遠くにいたアンノウンが木立の陰で何者かに殴り倒された。

『翔一！？ 遅いわよ………？』

安堵の混じった遙の声は、殴り倒されたアンノウンを黒い機械の足が踏みつけたのを見て尻すぼみに消え去った。

木立に隠れその全容は見えないが、それがアギトの足ではないことは一目瞭然だった。

『……… GS - 111。』

『……… ミヨルニルステイク。レディ。』

そこから女の暗い声と機械の認証が聞こえた途端、アンノウンを踏みつけている右ふくらはぎの側面に設置されているユニットから勢いよく鋼鉄の杭が飛び出しアンノウンを串刺しにした。



苦悶に身を折るアンノウン。その杭の長さからして、恐らく身体を突き抜け地面にまで届いているだろう。

たちまち頭上の光輪を煌めかせて爆発してしまった。

その爆炎を踏み潰して「そいつ」がこちらへと歩み出てきた。

「……な……なに、あいつ……」

ずしゃ、ずしゃと重い足音とサーボモーターのような駆動音を立てて歩くそいつは、まさしく機械の全身鎧といった出で立ちであった。黒とシルバーのみで構成された身体。唯一巨大な瞳が青く光っている。

それは、まるで翔一の変身する「アギト」をロボットで再現したかのような姿をしており、中に女が入っているとは思えないほどの巨躯であった。

> i100087—538<

(……いや、)

遙が感じた違和感はそれだけではない。

あれほどの巨体からくる凄まじい圧迫感と存在感に溢れているが、いまいち生気が感じられないのだ。

(……どういうこと？ 機械越しだから気配を感じ難いのかしら？) ウィブを始め、そこにいる全てのファンガイアとアンノウンがその新たな乱入者に警戒して身動きが止まった中で、黒い「そいつ」は立ち止まり再び声を発した。

「……GX-052。」  
ジークスオーフィフティウー

《ケルベロス・カスタム。コード。》

「2-3-1。」  
トウ・スリー・ワン

《レディ。》

女声と認証が遣り取りしたのち、そいつの両大腿部の側面に設置されていた機械が自動で展開し、左右の手で引き抜かれたそれぞれのパーツは、二丁の小振りなガトリングガンとなっていた。

だが、その長い遣り取りの間にファンガイアとアンノウンは気を取り直してしまい、近くにいる者から次々と「そいつ」に襲いかかっ

ていった。

まるで熊のような巨体を持つアンノウンが、その巨体に見合う巨大なハンマーを振りかざし、黒い「そいつ」に思い切り叩きつけた。直撃だ。自分の身体と同じ大きさの鉄の塊を叩きつけられては、あの黒い装甲がいかな高テクノロジーの成果だとしても中の人間はひとたまりもあるまい。

だが、大きく仰け反った黒い「そいつ」は二、三步後退したのみで簡単に体勢を立て直した。

「……は？」

次々とアンノウンが、ファンガイアが襲いかかるが、黒い「そいつ」は全ての攻撃をモロに喰らい続けた。

身を折り、頭を殴られ、右に、左にと吹き飛ばされるが、黒の「そいつ」はその度にあっさりと体勢を立て直す。

装甲は毛ほども歪まず、衝撃吸収システムがあつたとしてもあれほど殴られては中身は原形を留めないはずだ。

遙は若干気の毒そうにその光景を見ていたが、あるうことが黒い「そいつ」はここまでされても両手の凶悪な銃を構える体勢を解いてはいなかった。

「……ファイア。」

暗い呟きと共に無数の弾丸が撒き散らされた。

木々もまとめて木っ端微塵にするの弾丸の雨にさらされたアンノウンは狂つたように身悶えさせやがて片っ端から爆発してしまつた。

だが只の銃弾など受け付けないはずのファンガイアまでもがその威力に身体を痙攣させて砕け散つたのを見て遙はその異常に気付いた。

「銀の弾丸かッ!?」

叫び、横っ飛びに射線から逃れるウィブ。

ファンガイア族はおしなべて銀製の武器に弱い。人間との共存の掟がなかつた大昔には、人間族の中のファンガイアと戦う専門家が武器として銀を使用していたという歴史があつたほどだ。

そしてそのファンガイア族の術を結集して作られたこの「ウィブの

葬衣」も銀に対しての耐性は薄い。あの銀の弾丸の雨霞の前では「ウィブの葬衣」は「ただの鎧」に過ぎないのだ。

まともに喰らい続けては、破壊されてしまっただろう。

「遙っ！」

『翔一！？』

銃弾の暴虐に曝された一帯から離れた木立で、脇から翔一が駆け寄ってきた。

『遅いわよ！？ あんたなににして』

「いいからどっか行け！逃げる！なんかやべえ！」

駆け寄るなり遙の文句を遮って翔一はウィブの肩を押し遣った。

『は？なに』

「いーから早くツツ！」

珍しい翔一の剣幕に、ウィブは目を白黒させていたが、やがて踵を返して立ち去ろうとしたところでけたたましい銃撃の轟音がぱたりと止んだ。

見れば、林の一部が見事に丸ごとこっそりなぎ倒されて見晴らしが良くなっており、そこには最早ファンガイアもアンノウンも一体たりと残ってはいなかった。

『警視庁「未確認生命体対策班」の芦河 翔一 巡査部長ですね。』

「……ちっ」

黒い「そいつ」は、既にこちらに顔を向けていた。

相変わらずその巨軀に似合わぬ暗い女の声で語りかけてくる。

『そして、そちらにいるのが「エクステンド」専門のスイーパー、

「ウィブ」あるいは「葬儀屋」と呼ばれている方ですね。』

『……なに？「えくすてんど」って。』

『あのカラフルなアンノウンのことを、われわれはそう呼んでいます。未知の脅威を示す記号「X」と、奴らの表皮に似ている「ステンドグラス」を合わせた造語です』

怪訝に聞き返したウィブの言葉にも律儀に応えながら、黒い「そいつ」はこちらにゆっくりと歩み寄ってきた。

「……ち。俺たちが必死こいて戦ってる時に、悠長に覗き見でもしてたのかよ」

忌々しげに翔一が舌打ちした。

ウィブの名や存在、「葬儀屋」の異名は、戦闘のその場にいなければ知れないことだからだ。

『ええ。それが私の得意技ですから。』

「あ？」

やがて、数歩手前まで辿り着いた黒い「そいつ」は立ち止まった。

翔一や遥の視線がやや上向きになるほどの巨体である。間近に来ることで、その圧迫感はより強力になった。

(……でも、相変わらず生気が感じられない……?)

『はじめまして。私は陸上自衛隊八王子駐屯地所属の、水城<sup>みづき</sup>理沙<sup>りさ</sup>一等陸尉です。』

遥の怪訝な様子を無視して、そいつは暗い声で自己紹介した。

「ほう。防衛省と来たかよ。」

ウィブはその硬い声に驚いて隣の翔一の横顔を見、再び驚いた。

普段は飄々としているその顔が、激しい怒りに染まりドス黒く歪んでいたのだ。

「ついでに聞かせろよ。なんで自衛隊が「G4」を持っていやがんだ？ チップは破壊されたはずだ！」

## 龍騎の世界

「……くそっ！」

神鳥 士郎は無人のミラーワールドの街を駆け抜けながら悪罵を吐いた。

振り返って辺りの鏡を見渡す。

いた。

現実世界から、どこぞの店のウィンドーの鏡面越しにこちらを覗き

見ている少年の姿があった。

「なんなんだよあいつは!?」  
「癪癪のままに怒鳴り散らす。」

あの少年はもうずっと士郎に付きまといっているのだ。

付きまとうだけでなんら実害はないのだが、ある時、立ち止まって長時間休憩していた時など（現実世界の人間の「睡眠」に相当する）は、休憩に入る前にいたのと同じ場所の鏡の前でじっとこちらを見つめていたのだ。恐らく、士郎が再び動き出す時まで現実世界のそこでじっとしていたのだろう。

それ以来、もう不気味で不気味で仕方がなくなった。

その上、いくらミラーモンスターを差し向けても排除できないのだ。どうしようもない。

「くそっ！ くそっ！ くそっ！」

（まさか、この俺が何かから逃げ回る羽目になるなんて！）  
悪罵を繰り返し走り続ける。

「それもこれも！ 優衣だ！ 優衣さえいれば、ライダーバトルもととと締め上げて、あんなヤツも叩き潰せるのによおッ！」

だがやがて、唐突に少年の気配が遠退いた。

「……………」

引き離れたかと思い、振り向いて確認すると、遠くの交差点の反射鏡に映る例の少年はなぜか、あらぬ方を眺め遣って立ち止まっていた。

そして、その目線の方へと歩いていってしまう。

やがて、ここ一帯の鏡からあの少年の気配が完全に消失した。

「……………」

それでも疑り深く周囲の気配を探るが、また現れる様子もない。どうやら、あの少年はどこかに行ってしまったようだった。

「……………」

「いやっはっはっはははのは イイ天気だネ清々しいネ最高のボク日和だネまいハニー瞳子？」

「ええええあんたのアタマみたいに底の抜けた青空のいい天気よねあとマイハニー言っな」

両手に動物のパペットを装着し、ブルーグレーのパーティースーツを着てキビキビクネクネと腰を振って歩く糸矢に、後について歩く瞳子は心底げんがりした様子でぞんざいに応えた。

その瞳子は今、弁護士の仕事で着るレディーススーツ姿ではなく、カジュアルな服装を纏っていた。

ある日、突然昏倒してから、弁護士の先輩にして師匠にして、事務所の所長であるところの北尾から長期の休暇を与えられたのだ。

医師の診断は原因不明。次いつ同じ症状が現れるか分からない為、しばらく様子を見る必要がある。

と言われた為である。

もつとも、瞳子は自分の症状の原因を知っているし、二度と同じこととは起きないと分かっているのでこの「様子見期間」は無意味なものでしかない。

ちなみに、この「謎の昏倒」は、各世界の瞳子で症状の深さが異なるらしい。記憶にある他の世界の瞳子のほとんどが意識をシャットダウンさせ途絶えている。

その上、なぜか突然自分からライダーバトルに飛び込んだ北尾の事が心配なのに、おかげで北尾の様子を見ることもできない。

もつとも、当の北尾にしてみればライダーバトルに反対を表明している瞳子のことを敬遠しているから好都合なのだろうが。

(ああもう。なにが「休み」よ。ちつとも気が休まりやしない)

「ところでマイスイート瞳子？ボクと結婚してくれないかい？」

「いくらなんでも脈絡なさ過ぎよツツ！」

ほとんど反射的に振り下ろしたハリセンが糸矢の脳天を容赦なく打ち据えた。

あまりの勢いにハリセンが瞳子の手からすっぽ抜け、きりきりと回

転しながらあらぬ方へとすっ飛んでゆく。

「…………あれ？」

自分の手を見下ろして、不思議そうに呟いた。

いつもに比べて握力がない。どうやら、昏倒のダメージはまだ身体に残っているようだった。

脳天を打たれた勢いのまま下を向いていた糸矢はやおらにこやかな笑顔を跳ね上げ、また正面を振り向いてキビキビクネクネと腰を振って歩き出した。

「でもボク挫けない！なぜなら？お年頃？だからネ！挫けてるヒマがないのさーあははのはははは！おつヨメさあ〜ん！」

途中で一言区切りで奇矯なポーズを挟みながら言う糸矢は、朗らかに笑いながら歩いていった。

「ああもう！どこから突っ込んだらいいんだか！ちよつと！糸矢さん待って！ハリセンどっかいつちやった……………」

ぼやきながら辺りを見回した瞳子は、離れた公園入り口にとんでもないものを発見してしまった。

そこに立つ少年の顔面に、白く細長い物・ハリセンが張り付いていたのだ。あまりにも綺麗にヒットしたのだろう。少年は立ったまま微動だにしない。

「…………あ…………あ……………」

やがてハリセンは、少年の顔面からずるずるぼとりと落下していった。

露わになった少年の色白で端正な細面には、残酷なことにハリセンの形に赤い線が穿たれていた。

「…………あ、ご、ごめんなさいっ!？」

少年は、朗らかな笑顔のまま微動だにしないので、もしかしたらその姿勢のまま気絶でもしているのかと心配しながら駆け寄るが、その瞳子の腕を糸矢が後ろから掴んで引き留めた。

「…………え？なに？」

「ちよつと待ってマイハニー。」

いつになく真剣な面持ちで前を見据える糸矢の様子に吞まれて身動きを止める。

その見つめる先が、あの少年と分かって瞳子は怪訝な顔になった。「ちよつと。なに？ ほら、わたしが投げちゃったハリセンがあの子にぶつかつちやつて……」

だが、糸矢は厳しい顔のまま、ゆるゆると首を振るのみ。

やがて少年は、屈んで地面に落ちたハリセンを拾い上げると、それを片手で弄くりながら、真っ直ぐに糸矢を見つめた。

> i10088—538<

「え？ な、なに？」

「……あいつは、人間じゃないね」

「へ？」

「しかも、ファンガイアでもない」

唐突な言葉に目を白黒させて少年と糸矢とを見返す。

そこで、少年がゆつくりと口を開くのが見えた。

『……なんだい？ お前は。人間では、ないね？』

少年特有の高い声が糸矢と同じことを言った。

だがその声は、少年の口元から発せられているようにも、どこか遠くから聴こえるようにも感じられる不思議な感覚だった。

『ここは、大切な人間たちが暮らす世界だよ。お前みたいなのは、いちゃいけないだ。』

「あー！ ファンガイアを差別したー！ いけないんだー！」  
少年の言葉に突如糸矢が指さして絶叫した。

眉をVの字にした糸矢の顔を、瞳子は珍獣でも見るかのように呆けた目で見上げていた。糸矢は滅多に怒らない為、それが激しく激昂しているのだとはすぐには分からなかった。

「ボクたちは、人間と仲良しなんだ！ ファンガイアを差別すると、親衛隊にすつごく怒られるんだぞ！」

『……おいで。あいつを殺すんだ』

激しく非難する糸矢を無視して、少年は傍らに手招きするように軽



く手を振った、すると少年の横に目映い光が現れ、その中からライオンとヒトを掛け合わせたような存在が姿を現した。

「……なっ!? あ、アンノウン!?」

「そっちだって人間じゃないじゃん! て言うか、そいつらの仲間!? 仲良くできないなら、ボクもう知らないよ!」

驚愕する瞳子の前に立ちはだかった糸矢が、どこからともなく取り出した機械のベルトを腰に巻き付けて装着し、手刀の形にした右手を上にも、そして前にはぱつと突き出して構え。

「変身!」

交差させた両手をベルトの両サイドに押し当てた。

《リ・エミュレーション。》

ベルトバツクルのインジケーターがレッドから反対端のグリーンまで一気に灯り、それに伴って空中に出現した装甲が次々と糸矢の身体に張り付いていった。

やがてそこに、青の装甲に包まれた仮面ライダー G3-Xが姿を現した。

『うりゃー!』

いまいち覇気に欠ける氣勢を上げたG3-Xと、ライオンの生態相を持つアンノウンが互いに突撃していった。

## クウガの世界

ひかりと瞳子が乗ったパトカーは、無人の高速道路を疾走し、「10」と書かれた旗の脇を迅速に通過した。

「……あのバカ。本気でここより先に行ったのね……!?」

「……!?」

瞳子の呟きに、同意するようにひかりも黙したままうなずいた。

「……あの、瞳子さん。ディレイドはどうやって真司君を連れ戻すんでしょう?」

「さあ。なんかミラーワールドだろうが余所の宇宙だろうがどこでも好きに行き来できるらしいから、もうそのまま手掴みで連れて戻ってくると思うんだけど……」

ひかりの問いかけに、首を傾げながら応える。

「「どうやって」かなんて細かいことなんか、わたしには難し過ぎてよく分かんないや」

「ミラーワールドもそうですけど、……なんて言うか、有り得ない、と言うより出鱈目なテクノロジーですよ。その「デイレイド」も。」

科学者の矜持を挫かれたのが腑に落ちないのだろう、ひかりは眉をきつくしかめて言った。

「公に知れたら世界中の科学技術の常識が根本からひっくり返りますよ？」

「そんなの「グロンギ」が現れた時点から大童だったじゃない。あと「四号」も。」

科学技術に疎い瞳子は、胡散臭いものをまとめて追い払うように片手を振った。

「だから、これからもずっと他言無用だよ？ 用事が済んだら、透も真司君も元の世界に帰っちゃうんだから。」

「……もう、お別れなんですよね……」  
「……！？」

ひかりの物寂しげな呟きに、瞳子は自身の失念に気付き臍を噛んだ。  
（……そうだ、「わたし」はいつでも会えると思って忘れてたけど、「この世界」からはもう、いなくなっちゃうんだ……！？）

そして問題はそれだけではない。

ひかりの物憂げな顔のもうひとつの理由。

かつてこの世界に現れたグロンギから人類を守護し、十号ことデイクライドの介入による事件終息と同時に姿を消してしまった「未確認生命体第四号」こと「仮面ライダー クウガ」として戦っていた小野寺 雄介のことを、ひかりは真司を重ねて思い出しているのだ。

何も言わずにいなくなってしまった雄介。恐らく、懇意にしていた当時の班長・八代が亡くなったショックから姿をくらませたのだろうと瞳子とひかりは考えていた。

だから、雄介の方から戻ってくるまでこちらから行方を追うのはやめようと決めていた。

だが、命懸けの戦いを共にくぐり抜けてきた仲間との別れにしこりを残したまま、同様に一緒に戦ってきた真司も元の世界に帰ろうとしている今に際し、ひかりは仲間ときちんとしたお別れをできるかどうかを心配しているのだ。

「……大丈夫だよ。」

「え？」

瞳子の呟きにひかりが横顔を見返した。

「大丈夫。最後に挨拶さすように、透に念力送つといたから。」

「……？」

言っている意味が分からなかったのだろう、きよとんとしたひかりにいたずらっぽく微笑み返し、瞳子は前を向いた。

「……あ！ ほら！ いた！」

「え？ あ！？」

唐突に前方を指さした瞳子の叫びに反応し、ひかりは慌ててブレーキペダルを踏み込んだ。

急減速した逆Gによって前のめりになりながら、ひかりは高速道路の彼方に三人の人影を見つけていた。

「あなた、話分かるようになってきたじゃないの」

「なんのことだ？」

広大な高速道路の真ん中で。

パトカーから降りた瞳子が透に歩み寄り上腕をぼんと叩いた。

「んで、そっちの娘はだれ？」

「ああ。この世界におけるミラーワールドを構築する中枢にあたる存在だ。」

透の背後で意識が現世から途切れたかのようにぼおつとして突っ立っている白痴っぽい少女を指して訪ねる瞳子に、透は素っ気なく応える。

「こいつを元の世界に連れ返すことで、この世界からはミラーワールドが消滅する。これでこの世界の異常は完全に解消するだろう。」

「そっか。なんか、返すがえすも長かったわ。」

「ところで。」

状況終了の報を聞きなげにやら感慨深げに溜め息を吐く瞳子に、透は平坦に問いかけた。

「例の要求だが、一分ほどなら待てるぞ。」

「野暮なこと言ってんじゃないわよ。もうちょっと待ちなさいよ。もうちょっと。」

言って、振り向いた先ではひかりと真司が気まずそうに向かい合っていた。

「えーと、その、柊さんのおかげで状況を打開させることができた。ありがとう。あと、無茶してごめん。」

今さら指示を無視した負い目を感じているのだろう、背を丸めて頭を掻く真司に対し、ひかりは白衣のポケットに両手を突っ込んだまま薄い笑みを浮かべて真司を見つめていた。

そして、やがていつもの簡潔な口調で呟いた。

「好き。」

「ってこのタイミングでツツ!? あと一分ないんすよ!? なにこの無理ゲー、ハナシがまとまる気がしないんすけどツツ!」

言われた真司が両手で頭を抱えて仰天する様を眺めてひかりはくすくす笑っていた。

「うそ。」

「分かってますよっ!?」

真司がつっこみ、やがて笑い合うふたり。

「……………うん。わたしも真司君にひどいこと言ったから。ごめん。」

……………帰ってきてくれて、ほっとした。」

「いや、自分で決めてやったことつスから。」

笑顔で向かい合ったまま、ひかりは片手を差し出した。

真司もその手を握り返す。

「ありがとうございます。お世話になりました。」

「うん。ありがと。……忘れないから。真司君のこと。」

「俺も。」

やがて手を離れた真司は、瞳子を振り向いた。

「神楽見さんは、俺の世界にもいるんだよね？　なんか、ここでお別れってのもおかしな感じだけど」

「まあね。私は別に、いつでも会えるようなもんだし。透？」

「うむ。」

呼ばれた透が真司に手招きした。

「こちらへ来い、真司。そろそろ行くぞ。」

「ああ。分かった」

透の横に駆け寄った真司は、どこかへとふらふらと漂うように歩き出した少女の手首を取って引き戻し立ち並んだ。優衣は、目を離すとすぐどこかへ行くこうとするのだ。

「ではな、瞳子。」

「うん。じゃあね。」

瞳子とひかりが手を振る前で、透が取り出したカレイドブレイドで虚空を横薙ぎに一閃すると、透・真司・少女の三人の姿は一瞬で掻き消えてしまった。

僅かの残滓も残さず、まるで電源が落ちたかのように、唐突に。

警視庁が「ミラーモンスター事件」の終了を宣言するまでは今しばらくの観察期間を置くが。

これで「クウガの世界」を襲った「第二の異常」は完全に消滅した。

これにて「クウガの世界」での事件は終了。六十話かけてようやく一周したのだなあと感慨に耽つてみたり。

そうも言っていられない、混戦模様が既に渦を巻いておりますが。

……と言って出てきたG4ですが。また勝手に武装を増やしてますが、許してください。

原作の原作のG4の強みとは、超能力者をシステムに組み込み未来予測を可能にしたところにあると思うのですよ。（超能力者は装着者にあらず。）

今回ここでは原作とは異なるアプローチでG4を運用している為、少々仕様をいじりました。

……原作を知らないヒトは、G4のことを「ミサイル持つてる仮面ライダー」としか認識していないんだらうなあ……

未視聴の方は、よろしければ「仮面ライダーアギトPROJECT

G4」を御覧下さい。その運用システムの着想はなかなか面白いと思います。

龍騎の世界

『……………思い出したぞ……………』

瓦礫を押し退けたゾルダは、朦朧としながらも身を起こし立ち上がった。

『お前、「字倉 威」だろ。』

ふらつきながらも、飛び込まされた工場の壁の穴から表に出る。

『暴行傷害の常習犯で、だいぶ前とうとう何人が殺して仮面ライダー裁判にかけられて有罪判決、ぶちこまれたって聞いたけど?』

『……………その名前は、俺も聞いたことがあるぞ……………』

パレットの山を押し退けてナイトもふらふらと立ち上がった。

『だとしたら、あの噂は本当だったことか……………?』

『なんだ。ちゃんと仕事してんじゃん』

『ほざけ』

作業棟の間の舗道の真ん中に立ち尽くす王蛇を挟んで言い合う。

『だとして、なんでこいつがカードデッキを持っているんだ?』

『そんなことはどうでもいいよ。仮面ライダー裁判の裏方だった権力者なら誰だってどうにでもできることだろうしさ。それよりも』

ゾルダは、王蛇の方に向き直ってその事実を突きつけた。

『お前、無痛症って本当だったんだな。』

アギトの世界

『あの八代 淘子が作り上げた、ただでさえ凄まじいパワーを誇るG3-Xを越えるとされるG4を、ただ廃棄するのは惜しい。』

林の中で立つG4が、己の掌で胸板にそっと触れる。

『仮に装着員に恵まれずとも、これほどの技術は運用法さえ編み出せば、アンノウン、及びエクステンドへの対策には非常に有用です。ですので防衛省で回収致しました。別に問題はありませんよね？棄てちゃったんですから。』

黒の巨体が、可愛らしく小首を傾げた。

「ほざけ！そりゃネコババってんだよ！」  
腕を振って叫ぶ翔一。

「チップだけじゃねえ！だいたいその強化外骨格自体はどうやって作った！？ 見様見真似で作れるもんじゃねえぞ！？ よしんば完成したとして、肝心の中身が保たねえだろが！死ぬぞ！？」

『そう言われましても。』

激昂する翔一とは対照的にG4は、水城 理沙は気楽な態度で器用に肩をすくめて見せた。

『さきほど言いましたよ？ 覗き見は私の得意技なんです。それと、現にこうしてきちん運用できています。』

「……………！？」

青いセンサーを睨み付け、翔一はきつく唇を噛む。

『それにしても、僥倖でした。』

あくまでも暗い声音で朗らかに水城が言った。

胸の前で両手を合わせる芸の細かさだ。口調と相まって、どこか馬鹿にされているニュアンスを感じ、翔一はより苛立ちを増した。

怒りのあまり「なにがだ」と問い返す気も起さない。

だが水城は頓着しないようだ。・その翔一の心証も心得ているように。

『私は、お二人にも用事があつたんです。』

「……………あ？」

完全にチンピラの威嚇のように聞き返す翔一に、G4は嘲るようにあとを続けた。

『アンノウンが狙うは「アギト化現象」発症者のみ。ですが、アギト化患者は被害者にして同時にアンノウンへの貴重なカウンターで



もありません。』

G4は、語りながらゆっくりと振り向いて歩き出す。

『人類を守る為ですから、その存在自体は有益です。ですが、アンノウンが一扫されたあとはどうでしょう？』

「……………てめえ……………」

既に水城の言いたいことに見当がついたのか、翔一が押し殺した声で呻く。

だがG4は意に介さない。

『ただの人類にとってアンノウン消滅後は、今度はアギト化患者が有害な存在となります。アギト化患者が牙を剥いたら、ただの人類には身を守る術がありません。』

「だから、てめえがアンノウンも、ファンガイアも、俺たち「アギト」もまとめてたんでやるうって寸法か！？」

『御明察。』

翔一の絶叫に、くると振り向いたG4が指先を差し出した。

『……………ジーエスオーサーティトゥーGS-032。』

《デストロイヤーカスタム、レディ。》

続く呟きに認証が応え、同時にG4の両前腕の装甲が変形し大型ナイフの刃が出現した。

刃が展開されると同時に微かな音が聞こえ、その刃の輪郭がぶれ出した。

超高周波振動ソード。毎分二百万回振動し、一メートルの鉄板すら紙のように斬り裂く。

自ら装着したことのあるG3-Xのデータを思い出しながら翔一はウィブを後ろ手に下がらせながら後退した。

『警視庁では活動に制限があるでしょう？ いつぞや以来、G3-Xは姿を見かけませんし。』

「ありやちよいと余所の世界に旅行に行ってたんだよ」

『余裕なこと。いずれにせよ、国防の要は我々防衛省が担います。安心して……………逝きなさい！』

G4が、両腕の振動剣を振りかざして襲いかかった。

翔一とウィブは互いを突き飛ばして左右に身を翻してそれを躲した。草の上を一回転した翔一は、腹部で腕を交差させ肘を引くとオルタリングを出現させる。

淀みない動作で立ち上がった翔一は、拳法のように構えた手刀を上  
に、そして前に突き出し。

「変身！」

> i 1 0 3 4 3 — 5 3 8 <

絶叫と同時に交差させた両手をベルトの両側面に押し当てた。

オルタリングを中心に両腕で二つの力の循環の経路を描いた翔一の身体は輝きに包まれ、やがてその中から黒地のボディに黄金の装甲を纏った戦士・アギトが姿を現した。

『ぬっつ……』

アギトは再び拳を交差させて集中すると、再び掌をベルトの両側面へと押し当てる。

すると再び輝きに包まれ、アギトの右腕が赤に、左腕が青に染まった。

これが、翔一がこれまでの戦いの中で得たアギトの発展形態。超越精神と超越感覚の力を同時に顕現したトリニティフォーム。

『独自に進化を遂げましたか！なおさら生かしてはおけませんね！』  
一瞬の交錯ののち、アギトに狙いを定めたG4は両腕の刃を振りかざして踊りかかった。

アギトはベルトバックルの前に両手をかざすと、バックルの中心から突き出た二本の棒を掴み、引きずり出したそれでG4の振動剣を打ち払った。

甲高い激突音が林にこだまする。

右手に赤のサーベルを。

左手に青の双刀の槍を。

両腕を広げて構え、アギトは押し殺した声で告げた。

『……てめえは、一年間ほど化け物に追い回されたことはあんのか

よ。這々の体で逃げ回り、死にたくねえばかりに戦わなくちゃいけないになったことはあんのかよ！」

最後には絶叫となるも、G4には聞こえた様子もない。

「なあにが国防だ！理解する努力もナシに悪即斬たあさぞかし楽だろうよ！は！国防のリスクは、本来国民全員で背負うもんじゃねえのか！？」

「我々は、そのリスクを負う力を持つことを国民から託されていきます。」

「防衛省が先手必勝を掲げてどーする！？俺あ死なねえぞ！「命」つてな生きてるだけで神のボーナスだ！絶対に生き延びてやるからな！うああああああ！」

アギトは、咆哮と共にG4へと駆け出していった。

## 龍騎の世界

ライオンの生態相を持つ異形・地のエルロードとG3ーXが激しく激突した。

互いのパンチが互いを跳ね飛ばし、再び交錯して激突を繰り返す。

「お前！こいつらのボスか！？ どうしてこんなことをするの！？なんで殺そうとするの！」

「……ここは人間の為の世界だよ。人間たちが、僕たちに守られながら穏やかに暮らす世界だよ。その人間を脅かすものは、なんであるかと排除するよ。」

「おびやかしてないじゃんっ！」

G3ーXの、糸矢の絶叫と同時の一撃がエルロードを激しく殴り飛ばした。

「ボクはみんなと仲良くしたいと思ってるよ！ボクの故郷の人間たちは、みんな分かってくれてたよ！分かってくれるヒトもいるのに、どーしてそれができないのっ！？」

『人間以外の存在など、知ったことではないよ。』

『わからずやつ！いじわる！偏屈！』

少年の姿をした者の言い種に、痼癢を起こしたG300Xは一言区切りにエルロードを殴りつけ最後に大きく吹き飛ばした。

続く動作でどこからともなく削岩機のような円筒を取り出すと、右腕に装着し先端のアンカーワイヤーを射出した。

それは迅速に巻きつきエルロードの上半体を絡め取って拘束し身動きを封じた。

『お前なんか、こつだ！』

叫び、背中にマウントされていた収納状態のガトリングガン「ケルベロス」を取り出して展開変形し、さらに先端に赤い弾頭を装着して、そこでもがくエルロードに振り向けた。

『ん、ファイア！』

トリガーを引くと同時に射出された弾頭がワイヤーに絡まれてもがくエルロードに激突し、もろとも甚大な爆発を引き起こした。

『どうだ！』

やがて黒煙が風にさらわれて晴れたそこには、燃え残ったエルロードが完全に突っ伏して倒れていた。

『……おのれ、よくも……』

少年が、これまでとうって変わって仄暗い怨嗟の声を絞り出す。

その表情のまま、す、と片手を伸ばすと、あるうことかエルロードの体が光に包まれ浮かび上がった。

『……戻っておいで。お前の使命はまだ終わってない。』

すると、姿を溶け崩して光の球となったそれは、少年の体内に吸い込まれて消えてしまった。

『……人間以外の種の繁栄など認められない。消える』

G300Xを睨み付けた少年の、再びかざした掌から爆発的な光が溢れだした。

「っひゃっ！？」

あまりの光量に瞳子は手をかざして顔を背けた。

G3ーXはセンサーの感度を調整して事なきを得たが、それでもやがて糸矢の視界がホワイトアウトするほどの光だ。なにも見えない。『なに！？　こら！まぶしくて見えないぞ！』

闇雲に手足を振り回して抗議するG3ーXだが、触れるものはなにもない。

だが突然、G3ーXの全体を激しいスパークが迸り身体を衝撃が走り抜けた。

『あつ！？　がっ！がああああツ！？』

やがて連続的な爆発と光が収まったあとには、全身各所から煙を漏らして立つG3ーXの姿が現れ、だがすぐに体勢を崩し膝を付いてしまう。

「…………い、糸矢さんっ！？」

耐用限界を越えたG3ーXの装甲は、ベルトを残して空中に溶けるようにして消え、あとに残った糸矢は前のめりに突っ伏してしまっ

た。  
「糸矢さんっ！？　糸矢さんっ！」

## 龍騎の世界

『僕の銃撃をまともに喰らってもびくともしなかったことと言い、お前、字倉だろ？』

なお訊ねるゾルダに、王蛇は気だるそうに振り向いた。

『…………昔、頭に刺さった釘の先っぽが、引き抜く時に折れて残って、それが神経かどつかを圧迫してるってんで、そんな時から痛えのが分かんなくなっちゃった。手術でも取れねえ所に入っちゃってどうにもなんねえ』

指先でとんとんと頭を突いて、どうでも良さそうに言う王蛇。

『でもよ、痛えワケねえのになんてかズキズキする気がすんだよ。

…………イライラするぜ…………』

ぼやくように吐き捨てた王蛇は、言いながらデッキからカードを一枚引き抜いてベノバイザーのトレーに載せて叩き込んだ。

《ストライクベント。》

認証と共にどこからともなく飛来した、ベノスナイカーの鎌首を模した巨大な盾が付いた手甲を王蛇は左前腕に装着した。

まるで王蛇の左腕が丸ごと契約モンスターであるベノスナイカーになったかのように見える武装である。

『……だからよ。お前ら、全力でかかって来いよ』

その縁にスパイクを生やした盾付き手甲をかざし王蛇が再び殺気を放ち始める。

『痛えのが分かんなくってイマイチ生きてる気がしねえんだよ！お前ら、てめえの願いを叶えんのに他のライダー全部殺すんだろ！？

やってみろよ！俺と殺し合え！』

絶叫し、王蛇はナイトに踊りかかった。

振り下ろされる巨大な毒蛇の手甲にナイトはバイザーで受け流そうとするが、王蛇のストライクベントはとてつもない重さで剣を弾いてしまい、体勢の崩れたナイトを、王蛇の返す手甲が殴り飛ばした。

『がッ！？』

『はっはあ！』

嘲笑を吐く王蛇の背中に無数の光弾が命中し弾けた。

衝撃でつんのめりはしたが、本当にダメージを受けていないように普通の動作で王蛇はゾルダを振り返ってきた。

『つか、ホントに効かないでやんの』

『ぬる過ぎんだよ。もっと気合いを入れる！』

『……じゃあ』

吼えて踊りかかって来る王蛇を見据え、ゾルダはデッキからカードを引き抜いた。

『気合いの入った奴、いってみよっか』

そしてマグナバイザーのトレーにカードを載せて押し込んだ。

《ファイナルベント。》

終末の認証を告げたのち、ゾルダの前の地面から緑の巨人、ゾルダの契約モンスター・マグナギガが浮上して出現した。

そのマグナギガの背中にマグナバイザーを差し込み接続する。

『でくの坊が！デカキヤ勝てると思っただか！』

だが一切意に介さず王蛇が猛り、いまだ距離は開いていると言いつのに腰溜めに構えた左腕の手甲をまるで正拳突きのように突き出した。するとベノスネイカーの首の形をした手甲の先端から、その牙から紫色の霧が吹き出した。

それは迅速に辺りに広がり、その霧に触れたマグナギガが突如身悶えし始めた。

『毒霧かつ！？』

パワードスーツによって呼吸を保護されている仮面ライダーには効果はないようだが、ミラーモンスターはそうはいかない。これは厄介な能力だった。

『ちっ！？ でももうファイナルベントは発動している！喰らえ！』  
それでも契約モンスターの苦悶に構わずゾルダは接続したマグナバイザーのトリガーを引いた。

その途端、全身のハッチを開放し、全武装を展開するマグナギガ。だが毒に侵されて悶えるマグナギガの状態ではまともに狙いを定めることができず、あちこちを向いた砲門は全て、まるで見当違いの方向へとビームを、ミサイルを撒き散らした。

辺りを無数の光条と爆発が蹂躪した。

やがて晴れた煙の向こうにはだが、無傷で立つ王蛇の姿があった。

『……………くそっ！？』

『終わりか？ ……なら、死ね！』

疾く駆け出す王蛇。ゾルダのデッキにはもうカードは残っていない。そして付近に鏡が見当たらない。ミラーワールドからの脱出すらできない。

（万事休すか！？）

そうゾルダが臍を噛んだ、その時。

王蛇とゾルダの間地点に突如膨大な光が出現し、その中から飛び出した何者かが王蛇のストライクベント・ベノファンングを打ち払うとパンチひとつで王蛇を激しく吹き飛ばした。

『……な、誰だ!?!』

ゾルダの前には、三人の新たな人影が現れていた。

王蛇を殴り飛ばしたそいつの背中には特徴的なジベツトスレッドが見受けられることから、仮面ライダーであることが分かる。

そしてその赤い装甲。北尾はオーデインの姿は見知っている為、消去法でいけば、こいつは長らく行方不明になっていた『龍騎』に間違いないだろう。

そして、黄色と黒とシルバーの装甲を纏った見たこともない仮面ライダーと、あるうことか、生身の少女がその傍らに立っていた。

呆然とするゾルダの前で、王蛇を吹き飛ばした体勢を解いた『龍騎』は、辺りを眺め回して、そこから倒れる他の仮面ライダーを一人一人確認すると、やおら大声で叫んだ。

『……お前ら……もう、こんな下らない裁判は、やめろおっ!』

……。

『……はあ!?!』

龍騎の唐突で見当違いの台詞に、この場にいる全ての仮面ライダーの怪訝な声が唱和した。

透の導きで元の世界に戻ってきた真司は、そのままライダーバトルの直中に飛び込み戦闘を妨害した。

なぜか全員に呆れた返事をされたが、そんなことはどうでもいい。

龍騎は左掌に右拳を打ち当てた。

『真司。これで俺の頼みは終わりだ。あとはこの世界の問題だ。』

『ああ。分かっている。優衣ちゃんも俺に任せて、お前はお前の使命のほうに行ってくれよ』

『分かった。助かったぞ。真司。』



『よせよ。らしくねえ』

透の言葉に手を振って応えた真司にうなずくと、デイレイドはその場から姿を消してしまった。

『さあて。俺は、俺の戦いをする！こんな馬鹿げた戦いは、絶対にやめさせてやるからな！』

『……お前、真司か？』

そこに、ナイトがおずおずと声をかけてきた。

『は？ え？あれ？蓮さんまた「ナイト」やってんの？』

『「また」？ なんのことだ真司？』

デイケイドが介入した事件の記憶を持っているのは、タイムベントの行使者である真司のみ。

他の人間は、時を巻き戻され事件の事実を「なかった事」にされた為に、以前のことを「知らない」のだと気付いた真司は話の食い違いをようやく理解した。

『ああ、いや、なんでもねえ。……あ、ごめん蓮さん。ただいま。』

『おかえり。……って、そんな場合じゃないぞ真司！お前、誰に吹き込まれてライダーバトルに参加した？何が目的だ？』

『いや。俺のはたまたま手に入っただけで、裁判所の選任は受けてないんだ。』

『……裁判所って、お前……今のライダーバトルの事情を知らないのか！？』

『は？なんだよそれ』

『おい。』

言い合うナイトと龍騎の間に、不機嫌そうな王蛇の声割り込んだ。『ごちゃごちゃ言ってんじゃねえ。要はここにいる奴らは殺し合いをやってんだよ。……お前はちつとは手応えがありそうだなあ』

首に手をあてぐりと頭を回した王蛇は、ストライクベントを解除されて手ぶらの状態だと言つのに一切頓着せず拳を構えて龍騎に襲いかかった。

『さっきのもう一回やってみろよ！』

『うわあああああ！？』

慌てふためいてかざした両手を振り回す龍騎サバイブは、だがナイトの肩を押し遣って退けると、王蛇の拳の連撃をばしぱしと打ち払って捌き、その上王蛇を殴り返して吹き飛ばした。

『あわわわわ！？　こういうの苦手なんだよ俺！？』

『……………』

その王蛇を簡単にあしらう龍騎の強さに、ナイト、ゾルダを始め、ライア、ガイ、アビスが呆然としていた。

言っていることはとんちんかんなのに、能力はとても高い。

『……………てめえ……………』

押し殺した声で怨嗟を吐きながら起きあがる王蛇。

先ほどまでの余裕が見る影もなくなっている。

『おもしれえよ。てめえは俺の獲物だ。俺を殺せ！』

『いやいやいや！？　なに言ってるのかさっぱり分かんないからあんた！？　殺人はやだつて！？』

あれほどの攻防を繰り広げたライダーとは思えない声で、腰を引きながら両手を振る龍騎サバイブ。

王蛇は聞く耳も持たずににじり寄る。

他の者はカードを使い切っており、各々離脱の隙を伺っている状況だ。

《ファイナルベント。》

そこに、全く別の方角から認証の声が聞こえ、全員がそちらを振り向いた。

すると、離れた場所に黄金の仮面ライダー・オーデインが現れており、あるうことか終末のカードを装填し、背後に金色の魔鳥・ゴルトフェニックスを従えていた。

『なにっ！？』

『あいつは！？』

最強のライダーの突然の出現に浮き足立つライダーたち。龍騎と王蛇は泰然としていたが、他のライダーは完全に泡を食っていた。

だが、すでにファイナルベントは発動されている。  
一声甲高く鳴いたゴルトフェニックスが迅速に飛翔しこの一帯をひ  
と薙ぎすると、辺りに金色の羽が舞い散らばった。

「!?？」

「これは!？」

オーデインのファイナルベントを見た者はまだ誰もいない。手札を  
切らせている為にほとんどのライダーが恐れおののいていた。

まるで雪のように周囲を埋め尽くす金の羽。

だが、旋回してきたゴルトフェニックスが上空ではばたき翼から輝  
きを放つと同時にそれらの羽が全て甚大な爆発を巻き起こした。

広範囲に高密度にばら撒かれた羽による爆発の連続。かわす術は、  
一切ない。

爆発は、広大な工場の敷地の全てを多い尽くしてなにもかもを巻き  
込み吹き飛ばした。

ライダーバトルが行われていた工場施設から離れた、ミラーワール  
ドの異なる場所に優衣は現れていた。

爆発の渦中にいたにも関わらず傷ひとつなく、煤も汚れもついては  
いない。

茫洋とした顔でどこをともなく眺め、海中の海草のようにふらふら  
と立っている。

「……優衣!」

「……おにいちゃん?」

そこにやって来た神鳥 士郎が、優衣の名を呼んだ。  
優衣も、変わらぬ顔で兄を振り向く。

「探したぞ優衣! あそこでおとなしく待ってるっつたのに、ど  
こ行ってたんだ!？」

言って、安堵を苛立ちの混じった顔で駆け寄る士郎。

「でも、見つかって良かった。もうちょっとだぞ優衣。もうちょ

つとで俺たちの目的が  
ばし。」

肩に触れようとした兄の手を、優衣はすげなく振り払った。

「……優衣？」

「……。」

掌を呆然と眺め、謔言のように妹を呼ぶが、優衣はいつもと違い、どこか怒ったような顔で兄を睨み付けていたのだ。

「わたしにさわらないで？」

「優衣……どうしたんだ……。」

訳が分からない、といった顔で妹を見つめるが、優衣は相変わらず不安定な立ち方で士郎を睨み付けている。

「きづいたの。わたし。なんとなく、わかっちゃったの。……」

わたしの、ほんとうのせかいが。」

ゆらゆらと立つ優衣の背後に、士郎は山ほどもある巨大な「何か」が立ちあがるのが見えた気がした。

「優衣！そいつは！？」

「あっち行って。おにいちゃん。」

その呟きと同時、優衣から、あるいは優衣の背後の「それ」から巨大な波動が吹き付け士郎を大きく押し退けた。

「なっ！？　これは！？」

為す術なく舞い上がり吹き飛ばされる士郎。無人の街を越え、優衣の姿がみるみる遠ざかってゆく。

それでも士郎は懸命に手を伸ばした。

「馬鹿な！？　優衣！優衣ーっ！？」

> i 1 0 3 4 4 — 5 3 8 <

ここから先は、龍騎の世界の物語。

宇宙の接触崩壊の問題とは関係なく、ディケイドの、ディレイドの干渉も関係なくこの世界独自の物語をこれから築いてゆくことにな



これにて真司のディレイドのお手伝いも終了。そして現地での物語に帰還しました。

辰巳シンジは原作において、唯一タイムベントの行使によって持ち続けた事件の記憶と裁判所の選任に因らないカードデッキの保持という、なかなか面白い出自の仮面ライダーになったと思います。それが活かしきれたかは分かりませんが。

王蛇のストライクベントは鉄槌の勝手な創作です。王蛇の武装って、剣一本しかないんですよ。その分ほかにとんでもないカードを持つていますが。……いや、ソードベントだけだと間が保たなくて。

これはまだ検討中の事ですが、今回、実に中途半端なところで「龍騎の世界」の話が途切れました。これ以降のことはディレイドの活動には関係ない「龍騎の世界」の中での出来事になりますので、恐らくこの「ディレイドマスカーカーレイド」では語られないと思います。

だもんで、いずれ、「ディレイドマスカーカーレイド」の中での「龍騎の世界」のその後の話」を別作品として立ち上げようかと考えております。

発表がいつになるか分かりませんが、ひとつお楽しみに加えて頂けるとありがたい。

アギトの世界

(……おかしい……)

「G4」とか言う強化外骨格に襲われるアギトを援護しながら、ウイブは疑念に捕らわれていた。

初めてその異様を見た時から消えない違和感。

その正体がなんなのか、喉元まで答えが出てきている気がするのに、なかなか表まで出てこない。

(あの巨体で、この生気のなさは、異常……)

ウイブには、他の生命体の気配を察知できる機能がある。

それなのに、あれほど巨大なG4が目の前にいる気がしないのだ。

幻とかいうものではない。現にアンウンとファンガイアは一掃され、その腕から生えた剣をアギトが剣と槍で弾き返している。

強いて言えば、元の世界でファンガイアと人間の科学者たちが作り上げた「イクサ」に近い。そこにいながら、気配を持たないもの。

だが、G4のあまりにも人間臭い挙動は機械で表現できるレベルを越えている。

(リモートコントロール？ それも違う……)

この林の中には他に誰もおらず、例え離れたところからこの場所を覗き見ようとしても、無数に乱立する木々に遮られ視界が通らない。遠隔操縦は不可能だ。

(！？)

ふと、遙は閃いた。

自分はこれと良く似た現象を知っている。

『……そうか！そういうことか！？』

『なにがだ？』

怪訝な声で問いかけるベルトバックルに鎮座するスパスパイダー三世には応えず、ウィブはポーチからフェッスルをひとつ引き抜くとそれをスパスパイダーの口元にあてがった。

『むぐ！？』

『いいからソレ吹き鳴らして！ 景気良くね！』

ところがその瞬間、遙の視界に有り得ない光景が展開された。

『！？』

G4の刃が、アギトの胸板を貫いていたのだ。背中から、鈍い輝きが突き出ている。

『……しよ、』

『あはははははははははははははははは！！』

ウィブの呟きはかすれて消え、代わりにG4のけたたましい哄笑が林の中に響き渡った。

> i 1 0 4 3 6 — 5 3 8 <

## 龍騎の世界

『……ふん。』

倒れ伏す糸矢を冷たく見下ろして、謎の少年は鼻を鳴らして手を下ろした。

そして一転して花のほころぶような笑顔になると、そこで呆然としている瞳子のほうへと歩いてきた。

「……あ……あ……」

『はいこれ。どうぞ。 落とし物ですよ。』

恐怖にわななく瞳子に、にこやかにハリセンを差し出してくる。

「……あ……」



まともに反応できない様子の瞳子にも変わらず笑顔のまま、少年は瞳子の片手を取ってそこにハリセンを握らせた。

『今度は落とさないでくださいね。 ああ、大丈夫ですよ。人間は、僕たちが守りますから。』

言って、一層微笑むと、少年はくるりと身を翻して歩き出した。

瞳子は動けない。この世界の瞳子には、音撃道見習いや、空手をやっている学生の瞳子のようにモンスターに立ち向かえる度胸などないのだから。

でも。

傍らに倒れ伏す糸矢を見、瞳子はどうにか思い直した。

(でも、こんなのが許されていいワケないじゃない！)

この世界の瞳子にも、自分を自分たらしめている理由がある！

「ちよ、ちよっと待ちなさいよ！」

瞳子は、勇気と声を振り絞った。

『……………なにか？』

少年は、ゆったりと振り返ってくる。

「あ、あなた、さっきからもの凄い上から目線で、何もしてない糸矢さんにこんなことして、何様のつもりなの!?」

『神様のつもりですよ?』

淀み無く告げられた少年の発言内容に、しばし瞳子の思考が停止した。

『……………と、言うのは人間の冗談でしたね。』

悪びれもせず続けた少年に、瞳子は混乱しながらも僅かに意識を持ち直す。

『ですが、言葉の概念に非常に近い存在です。僕は、太古の昔にあなたたち人間を生み出した存在。このような姿を得、こうしてお話していますが、僕には本来「個」という概念がありません。ですが、強いて言えば、僕のごときは「テオス」と呼んで下さい。』

すらすらと説明される中で、瞳子は必死にその意味を考えていた。

「アンノウン」はそもそも翔一の住む世界の住人。それを従わせた

この少年も翔一の世界の住人であり、その少年が「自分が生み出した」と言っている人間とは、翔一の世界の人間を指しているのだらう。

この世界の人間は、関係ない。

それでも「この世界の人間を守る」と言っているのはつまり、この少年はここがどこだか分かっていないのか。

『ですから、僕は我が子のごときあなたたち人間を守ります。アギトも、それ以外の脅威も、全て僕たちが排除します。安心してください。』

「冗談じゃないわよ！」

そこまで聞いてとうとう瞳子が吼えた。

「糸矢さんは何もしてないじゃない!? 報復だって認められちゃいないけど、「悪い事しそうだから殺す」なんてあんまりよっ!」まくし立てる瞳子を見、少年はきよとんとしていた。

突然怒鳴られて驚いているのではなく、瞳子の言っている事が理解できていないのだと瞳子はなんとなく分かってしまった。

「糸矢さんはファンガイアだけど、性格もちよつとアレだけと凄くいいヒトだよ!? それなのに、相手のこと何も知らないで勝手に殺すなんて、ひどいよっ!？」

糸矢はまだ死んではいないのだが、先ほど少年は殺意を持って攻撃を放った。

「人間の中にだって、そりゃあどうしようもなく悪い人だっているよ! でも、分かり合うことを放棄して、気に入らないからって殺し合ってたなら、みんなわがままなだけになっちゃっ!」

だから、この世界の瞳子は弁護士を目指した。

「誰も聖人君子じゃないし! 嫌いな人は近寄りたくないし、酷いことされたらとても憎いと思うけど、悪いことしたら懲りて止めてもらわなきゃ! そういうルールを作らないと、みんな最後は殺し合っ

て死んじゃうよ!」

いつしか、瞳子は涙にまみれていた。

そして、ここまで訴えても少年の顔が微動だにしないことが無性に悲しかった。

「憎くたって、生きていかなきゃいけないのに、憎しみを抱えてばかりじゃ生きてるのが辛いよ。起こった事件は消えはしない。生きてるんだから、幸せにならなくちゃいけないのに、殺すことばっかり考えてちゃ、不幸になっちゃう。どこかで気持ちの折り合いを付けないと、憎しみで死にそうになるよ……」

ぐす、と鼻をすする。

「ねえあなた。分かってあげてよ。糸矢さんはいいヒトだよ？ アギトだって、翔一さんだって、別に変身して誰かに迷惑かけたりとかしてないのに……」

『僕が懸念しているのは、「人間」という種の存続です。』  
少年の声が、さらりと差し込まれた。

その淀み無い口調に瞳子はつい怒りを覚えてうつむいていた顔を振り上げた。今の話を聞いていなかったのだろうかと疑う程にまるで変わらぬ調子だったから。

『例外はありませんし、実際問題、人間にはアギトに対抗できる手段がありません。だから僕たちが守ります。』

「そんなのっ！？ 守ってくれなくていいよっ！？」

「……くつくつくつく……」

突然、突っ伏している糸矢がぐもった声を漏らしてきた。

「糸矢さん！？」

「くつくつくつく……」

そして、やおらがばつと立ち上がった糸矢は、両手に装着した動物のパペットをそれぞれパクパクさせながら哄笑をあげた。

「クーツクツクツク！ ヒーツヒツヒツヒ！ 下がってマイハニー！分からず屋には、別の言葉で語り合っしかないって、三丁目のおじいちゃんが言った！」

訳の分からないことを言うなり、糸矢は少年めがけて駆け出した。

「うふふふふそこ動くなよこらあああああああ！」

『!?!?』

突然のことに少年もさすがに怪訝な顔をしながら片手をかざし、再び強烈な光を放った。

「うおおおおおおお！」

そして炸裂する爆発。

だが閃光を突き抜けて飛び出した糸矢は既にファンガイアとしての姿に変移していた。蜘蛛の生態相を持つスパイダーファンガイアの姿に。

『この、バカ野郎—————!!』

『ひっ!?!?』

そして、スパイダーファンガイアの右拳が、少年の頬を殴り飛ばした。

## アギトの世界

『んっがああああああ!?!?』

アギトの、翔一の苦悶の絶叫が響く。

『あっははははは!?!?まずは一人!?!?』

G4の哄笑の中、アギトはフレイムセイバーとストームハルバードを取り落とした両手でG4の腕を掴むと、刃を引き抜こうと押し返し出した。

『ぬっつっつっつ!?!?』

『なに!?!? まだそんな力を!?!?』

じわり、じわりとアギトの胸からデストロイヤーの刃が引き抜かれてゆく。

『ええい!?!?しぶといですね!?!?』

罵声を吐き捨てG4はもう片方の超振動ソードをも突き立てようと片腕を振り上げた。

『させるかあっ!?!?』

そこへ、ウィブが強烈な跳び蹴りを加えG4をアギトから引き離した。

もんどり打って転がってゆくG4。

『スパスパイダー！』

『おっしや！』

ウィブの指示で吹き鳴らされた禍々しい笛の音が辺りに広がってゆく。

これは、「シールフェスル」と呼ばれるファンガイア族秘中の秘の危険物。

単体にしか効果はないが、あらゆる魔族を問答無用で封印してしまうとてつもない代物なのだ。

魔皇力やそれに類似した性質にしか反応しない為、人間には効果がない。

だと言うのに、転倒から身を起こしたG4は途端に体勢を崩して突っ伏し身悶えし始めた。

『ぬっ！？ ぐうう！？ こ、これは……！！？』

『やっぱりね！ どうかで見たことあると思つたのよ！ 性質まで同じかどうかは賭だっただけど！』

吹き鳴らされる笛の旋律の中、ウィブが意気を上げて宣告した。

『お前！水城 理沙とか言つたっけ？ お前はそこにはいない！どこか遠くから操っているな！ ゴースト連中とやり口が一緒だ！』

『……「ポゼスト」……憑依能力者、か……』

『翔一！？』

背後の呻きにウィブは慌てて振り返り、胸の傷を押さえて膝を付いたアギトの体を支えた。

『ちよつと、しゃべらないで！しっかりして！？』

『……は、は。……ちよい、むずかしい、相談、だ、な……』

平衡も保てずに傾いたアギトの身体を、ウィブはなおも横抱きに抱き止めた。

『翔一！ 翔一！』

『……へん、しん……解除してから、もう一回、やってくれ、よ、これ……』

『バカ言っただけじゃないわよ！また八代に折檻されたいの！？いいわよ！何回でもしてあげるから好きなだけぼてくり回されるがいいわ！だから、死ぬんじゃないわよ！』

だがその時、胸に穿たれた孔から、胸郭に放射状に亀裂が走り始めた。

致命傷を負った「アギトの身体」がどうなるのかを遥は知らない。いずれにせよ、この亀裂が広がりアギトの身体は崩壊するのではと思ひ怖気が走った。

『いや！？ ちよつと、翔一！翔一！』

『……なん、か、さむ……いや、あつい、か……』

ひび割れたマスクから、かすれた声が訴えた。

『寒い！？ 熱い！？ どっちなの！？ しっかりしてよ！』

必死に呼びかけを続け、装甲越しに抱きしめる。

スパスパイダーがシールフェッスルでG4を抑えている為、遥も変身を解除できない。

今これ以上お互いに近寄れないのがとても辛かった。

『翔一！？ 翔一！』

呼びかけ続ける中、ふらふらと震えるアギトの手が上がり、一方を指さして示した。

『翔一！なに！？ え！？』

アギトを抱き抱えながらその指先を振り向いたウィブが見たものは、林の奥からこちらに歩んでくる異形の姿。一体のアンノウンだった。

『……こんな時に……！？』

鳥の生態相を持ったさいつからは、これまでのアンノウンとはまた桁の違った強い気配を感じる。

そのゆつたりした余裕の物腰といい、いずれ高位のアンノウンであるろう。

ウィブは仕方なくひび割れが全身に侵行したアギトを地面に横たえ、

新たなアンノウンに向き直り身構えた。

『スパスパイダー。あんたは笛を止めんじやないわよ。』  
ぴー！

旋律の途中の音での返事を聞き、ウィブはアンノウンに突撃していった。

『いま取り込み中なのよ！爆裂四散して失せなさい！』

### 龍騎の世界

頬を打たれた少年が地面に倒れ、スパイダーファンガイアがその前に立ちはだかった。

『どうだ！ボクだってとても怒ってるんだぞ！』

端から見たら完全に糸矢の方が悪者な光景だが、少年も見たままの存在ではない。

その証拠にファンガイアのパワーで殴られたにも関わらず、ふらふらと身を起こしたのだ。

『……な、殴られた……僕が……殴られた……』

だが、殴られた衝撃よりも、殴られたという事実の方を気にしているようだった。

そのまま、這うように二人から遠ざかろうともがき始める。

『……殴られた！この僕が！二回も！？』

「あれ？数に入ってる？」

瞳子が手元のハリセンを見下ろし、気まずげに呟いた。

『……ゆ許さない……この僕の身を穢し、守ってやったこの僕を拒否する人間……』

「え？うそ、ちょっと、私のは事故で……」

『うわあああああああ！』

瞳子の声も聞かず、突如絶叫した少年からまた膨大な光が溢れ出した。

少年の身体に電光が走り回る。

よく分らないが、攻撃の予兆には間違いない。それも危険な兆候だ。

「わ！ちよつと、糸矢さん！前に、前に立って！」

「え？ひどいよマイハニー！？ 死ぬ！死んじゃう！？」

「あれ出してよ！G300X！」

「あ、そうか！ あれ？ベルトが締まらない！？」

「ファンガイアの胴回りじゃ締まらないでしょ！？」

「あ・そうだった、ってうわあああああ！？」

言い合っている内に膨れ上がった光が辺りの光景を真っ白に塗り潰してしまった。

続いて襲いかかるあの爆発の嵐の恐怖に抱き合って身を縮めるも、恐怖の瞬間はなかなか訪れない。

やがて何事も起こらず光が薄れて周囲の光景がもとに戻ると、そこには少年の顔を驚掴みにしてぶら下げた新たな人影が出現していた。

「……と、透！？」

「え？あれツール？」

それは、糸矢の見たことのない姿、ディレイド・カレイドフォームであった。

「待たせたな、瞳子。糸矢。」

少年を掴み上げたまま、ディレイドは素っ気なく告げた。

「透！？ あれ、真司君は？まさか宇宙の狭間に落ちことしちやった！？」

「この世界に来てすぐに、別の場所に落としてきた。糸矢。ご苦労だった。これから一カ所寄り道をしてから、お前を元の世界に連れ帰る。」

「ホント！？ ツール！？」

人間態の糸矢が両手を組んで目を輝かせた。

「って言うか聞いてよマイハニー！ あのツールが「ご苦労」だな



んて労いの言葉を使った！」

「……………ああ……………まあね」

なにやら目敏く透の変化を見抜いた糸矢に、瞳子はぬるい目つきで曖昧に返事した。

「って言うか、あんたきつとそれ、これからずっとみんなに言われるかもよ？」

『問題ない。そして瞳子。これを以て、この世界に侵入した「異常」は終わる。』

「あ、透。その子、なんかアンノウンのボスみたいなんだけど……………」

『そうだな。翔一の世界における創世の存在の「光」の片割れの「闇」にして、テオストライプの頂点、「テオス」だ。』

「あ。」

瞳子は今ようやく、透の中でのアンノウンの呼び名の意味を悟った。

『いずれにせよ、こいつの処遇は翔一の世界の中での問題だ。行くぞ、糸矢。俺の横に來い。』

「うん！」

いそいそと瞳子から離れてデイレイドの隣に糸矢は並んだ。

「でもなにその格好？ カードいっぱい貼り付けて。なんかの自慢

？ あ。「キバの鎧」のカードもある。」

『問題ない。ではな、瞳子。』

「うん。」

手を振る瞳子の前で、片手に少年・テオスを掴み上げたまま空いた手に引き抜いたカレイドブレイドを、デイレイドは水平に一閃させた。

すると、前回とは異なり、デイレイドの身体からドット柄のノイズのヴィジョンが溢れ出して広がり、迅速に視界を埋め尽くし、街を越え、瞬く間に世界を覆い尽くしてしまった。

「トール！？ これは！？」

『ああ。今の俺は宇宙に対するフィルター機能を發揮し、異なる宇宙の存在全てをこれから元の世界に移送する。テオストライプ、ア

ンノウンは大量に散らばってしまったが、これでその所在に關係なく宇宙の異物を全て回収する。』

「透、本当にこれで全部連れて行けちゃうの？」

『問題ない。一体の取りこぼしもないから安心しろ。』

最後に瞳子に応え、デイレイドと、掴み上げられた少年と、糸矢の姿はノイズと共に掻き消えてしまった。

「あ！マイハニー！けっこんー！」

「うるさいばかー！」

最後の最後の戯言にも、しっかりとツつ込み返した。

結局のところ、この世界でアンノウンが狙うは人間以上の力を携行していた仮面ライダーのみであったが。

これで「龍騎の世界」に紛れ込んだ「第二の異常」は完全に終結した。

そして「龍騎の世界」からの撤収完了。

アンノウンが自在にミラーワールドに出入りできないので、侵略しても盛り上がらないっつら。アンノウンに普通人を襲う習性がなくてヨカッタネというところ。

ここら辺は「専用のフィールドに自在に出入りできる龍騎系ライダーの強みの勝ち」と言ったところかもしれませんが、そもそも勝負にならないというクロックアップとは別種の「どうしようもなさ」。あとは「糸矢と瞳子の繋がりを知った羽黒 レンが北尾の事務所に押しかけて無理矢理共同戦線」というプロットも用意してはいたのですが、冗長になり過ぎると考えて泣く泣く端折りました。せつかく前フリつけたのに。残念。

はてさて、次もまた大変な事態になってますが、糸矢はこれ以上活躍するのか！？

track・63 デイレイテッド・アギト・キバ

unknown spot

「……女。次の世界へ案内しろ」

「……」

そこは『いくつもの宇宙』を見下ろす『宇宙の外側』とでも呼ぶべき場所。

足場も不明ながら全く意に介さずに立つ瘦身の男が、傍らでぐつたりと突つ伏している赤のビジネススーツの上に白衣を纏った女の襟を掴み上げて冷徹に告げた。

男の名は「禁欲家と左足だけの靴下」。今は人間の姿に化身しているが、その本性はファンガイアであり、一族の中ではトップのキング、クイーンに次ぐ地位のナンバー3『ビショップ』と呼ばれている。

その男が数体の配下のファンガイアを引き連れ、宇宙間を移動できる能力を持つ女を使い今まさに他の世界へ赴こうとしていた。

『はあ〜い　ちよつとまってえ〜　ストップストップ〜』

そこへ、宇宙外の空間にありながらばたばたと形而上の音を立てながら、人間の掌よりも小さなコウモリが飛来してきた。

『そつちは行かなくていいのよ〜』

『キバ〜ラか。』

ビショップは平静な顔のまま、そのキバット族を呼んだ。

『キバット族ごときが何用だ？　私は一族を守る自らの使命に従い、領地拡充の任務中だ。私の行き先に口を挟むな。』

『あらつれない。』

蠅でも追い払うように振られたビショップの手を軽やかに躲しながら、変わらず戯けた調子で続けるキバ〜ラ。

『でもお、ばんばんクチ挟んじゃうわよ〜』

そつちは行かなく

ていいわ。「クウガの世界」はあ、いま仮面ライダーが不在だから、いつでも制圧できちゃうからもう手に入れたも同然なの。だから、あっちの方から先に行つて」

『仮面ライダーが不在ならば好都合ではないか。なおさら後回しにする意味がない。』

これから赴こうとしていた方を塞いで別方面を指し示すキバーラに、ビショップは顔をしかめて反論した。

『そこをどけ。長くは構つてやれん。』

『あら。アタシの言うことが聞けないの？』

その時、キバーラが微かに不機嫌な声を発した。

『確かにあなたは「ファンガイア族」だけだね。アタシもアタシが従つてるのも「マスター」なのよ。』

『!?!?』

キバーラの纏う気配の変化に気付いたのか、ビショップの顔色が僅かに変わった。

いつの間にか、掌よりも小さな体躯がこの場にいる全てのファンガイアを圧倒していたのだ。

『テムエラ「フォース」ごときがこのアタシを従わせるだなんてどんだけ身の程を知らねえんだ! ああ!?!?』

突然がらりと口調を変えたキバーラの啖呵に、配下のファンガイアどころかビショップまでもが恐怖に竦み上がった。

『「フォースクウガ」はお出かけ中だからあ、「クウガ」にや手え出さなくていいよ。つてアタシが言つてんだからテムエラはとつとアツチ行けやコラア!?!?』

『うわあああ!?!?』

『ひひひひひ!?!?』

慌てふためいて配下のファンガイアが腰を抜かす中、キバーラから溢れ出たオーラから白銀色の「キバの鎧」が飛び出しビショップの喉首を掴んで押し倒した。

『ぐっ!?』

地面など存在しないはずだが、ビショップは「足場」に叩き付けられて苦悶に呻いた。

『んんんん?分かったら「ハイ」はあああああ?』

『……ぐ……わ、わかりました……』

『そこで「ハイ」って言うてくれたら可愛いんだけど。まあいいわ』  
呆れた声と同時にビショップの喉が解放され、白銀色の「キバの鎧」は立ち上がるなりその姿を消した。

『ほらほら。分かったらさっさと行った行った!』

しっしと翼を振るキバーラに追い立てられ、ビショップらファンガイアは女・震を引き連れて指し示された宇宙へと消えて行った。

『……ふう。やれやれ、手間のかかること。アタシってば、どんだけサービスすれば気が済むのかしら。あああ。』

何者もいなくなった空間でひとりごちたキバーラは、ひと打ちはばたき旋回するとその場から姿を消していった。

## アギトの世界

『うあああああ!』

『……ッ!』

ウィブの拳と、鷹のような面相の「風のエルロード」の弓のような剣戟が交錯する。

ベルトから等間隔に生えた八本のロッドチェーンをまるでロングスカートのように翻して放たれた回し蹴りをエルロードは軽やかに宙を舞ってやり過ぎし、代わってその身が宙にある内に弓から放たれた颯風の矢が連続後方宙返りで後退するウィブのあとを追って次々と地面を抉る。

『はッ!』

ウィブが、傍らにある自らの「糸」を鋭く引いた。

ウィブはスパスパイダーが生成する「糸」を戦闘中に辺りに張り巡らせることを基本戦法としている。「糸」で物理的な結界を形成し、場合によって「糸」で相手の動きを制限し、あるいは封じ、あるいは自らの空中での足場とする。

今の操作で空中にいるエルロードめがけて無数の「糸」が縦横に走って殺到したのだが、エルロードはその面相にふさわしく空中で軌道を変えてそれらの「糸」を回避してしまった。

「チツ。やるわね。やっぱそこら辺のアンノウンの雑魚とは格が違うってこと!？」

吐き捨ててウィブは改めて「糸」を周囲に展開した。

この林の中にあつては、空間を三次元的にフル活用できるウィブのホームグラウンドである。

いかな空飛ぶ生き物を模したアンノンといえど、ここは「蜘蛛の巣」も同然なのだ。

「囚われの餌の分際で、いつまでも逃げられると思うなあッ！」

再び宙に浮かぶエルロードめがけて飛びかかる。

エルロードは迅速に飛翔しウィブに向かって矢を放つが、ウィブは木々に張り渡した「糸」を蹴って空中で軌道を変えて回避。そのままジグザグに跳躍を繰り返してエルロードに飛びかかった。

「やあああああ!」

「……ッ!?」

回り込んだ真上からエルロードを蹴り落とし、地面に激突したエルロードの身体が大きく跳ねた。

「はああああ!」

ウィブは止まらず枝を蹴って地上のエルロードへと急降下を仕掛ける。

だがさすがにエルロードもこの程度では動きを止めない。すぐさま別方面へ飛び上がると、あるうことが明後日の方角へと矢を放った。「どこを狙って……ああ!？」

戦場の配置を一瞬で思い出したウィブは矢が放たれた先を振り返っ

た。

その遠い先では、たった今、矢の直撃を受けたアギトの身体が大きく跳ねた所だったのだ。

『動けない翔一に、なんてことを……!?!?』

怒りに視野が赤く染まる。

臍を噛んだウィブは今すぐ駆け付けたい衝動を抑え、エルロードに向き直った。

『貴様アアアアアッ!』

『ーッ!』

だが、それと同時に放たれた矢が既に回避不能な所まで迫っていたと見るや、胸郭に凄まじい衝撃を受けウィブは跳ね飛ばされた。

『ッガッ!?!』

地面を転がり、樹に激突してようやく止まった。

『くっ!?!? くそつたれえええええ!』

『遙! 落ち着け! こういう奴にはアレだ!』

起きあがったウィブはポーチから無数の蛇に囲まれた女性の顔を刻印されたフェッスルを引き抜くと、それをベルトバックルに鎮座するスパスパイダーの口元にあてがった。

『メデュテシールド!』

きやらきやらと甲高いざわめきのような笛の音が鳴り響くと、どこからともなく飛来してきた人間の頭大の女性像が、ウィブの元へ到着するなり展開変形し、無数の蛇に囲まれた女性の顔を模した小振りな盾となると、ウィブはそれを左手で掴み取った。

途端に左腕と胸郭が蜘蛛の糸に包まれて弾け飛ぶと、その下は紫色に染まっており、マスクのセンサーとスパスパイダーの瞳がメデュテヴァイオレットに輝いた。

これがウィブのフォームチェンジ機構のひとつ。魔の眼光で生き物を石に変えて喰らう魔女・ゴゴン族のメデュテの力をウィブの葬衣に付与した「ウィブ・メデュテフォーム」。

『さあ。イイ子だから、おとなしく横におなりなさい!』



性格の影響を受け僅かに口調を変えたウィブが盾をかざすと、その表面に彫り込まれた女性の顔の臉がカシツと開かれ、中の瞳から禍々しい光が溢れ出した。

その間も木々を飛び回るエルロードはウィブに矢を放ち続けていたが、どれもこれもウィブの体表で弾き返されていた。

「ウィブ・メデュテフォーム」は防御に優れた特性を持つ。装甲は強度を劇的に増し、この程度の攻撃などものもしない。

そしてメデュテフォームの真価はこれだけではない。

盾から溢れる光を辺りに放射し続ける内、エルロードがついに失速して地上に墜落してきた。

『ハッ。ざまーみるだ!』

ベルトからスパスパイダーの罵声が飛ぶ。

エルロードは、己の身に何が起こったのか分からぬかのように怪訝な様子で身悶えしていた。

メデュテシールドの瞳から発せられる光線は、まさしくゴーゴン族の能力の通り効果範囲にいる者の身体を麻痺させる効果がある。

今は武器の姿に封印されているため石化とまでは至らないが、スパパイダーの活性化によって本来の力を発揮することも可能。

だが、今はとどめを刺している暇はない。ウィブ・メデュテフォームはメデュテシールドの瞳を閉じると麻痺したアンノウンを放って慌ててアギトの元へ駆け寄った。

『翔一!?! 翔一!?!』

そこでぐったりと倒れ伏しているアギトの身体は至る所がひびで埋め尽くされ、胸の真ん中に続き脇腹にまで大きな穴を開けていた。

『翔一!?! ああ、なんてこと……!』

慌てて駆け寄るも、ウィブには手の施しようがない。

時折、ぴくりと震えている為、まだ死んではないだろう。死んではないが、これがいつまで保つのか分からない。

『もっ!?! どうすればいいのよこれ!?! ……そうだ、警察の病院に、似たようなのが担ぎ込まれてるって前に……!』

「遙っ！うしろっ！」

スパスパイダーの警告に振り向いた時には、いつの間にか背後に忍び寄っていたG4が超振動ソードを振り下ろしてきたところだった。「があああああ！」

「ああっ！？」

まるで獣のように吼えるG4の刃をもろに胸郭に受けたウイブだが、その身はびくともしなかった。

メデュテフォームの装甲強化はまだ継続しているのだ。

大げさに叫んでしまった事にマスクの下で顔を赤らめながらウイブは姿勢を立て直した。

「ちよつと！シールの笛止めるなって言ったでしょ！？」

「いや、仕方ないだろメデュテシールドは必要だったし！？」

言い合いながらも、なおも刃を振り回してくるG4をいなして蹴り返す。

「あんたも大概しつこいわね。ネタは知れてんのよ！？ そいつをぶっ壊さないとわかんないってんならそうするけど！？」

「……はあっ、これがファンガイアの能力って訳！？ インチキにも程がありますね！」

「あんたに言われたくないわよ！ ってことは、やっぱりそれって口ポットなワケ？」

「先ほど言いましたよ。これは「強化外骨格」。そして私は憑依能<sup>ホセ</sup>力者<sup>スト</sup>。この中には、深海 史郎、私の恋人の死体が入っている！」

「！？」

己の胸を押さえたG4の叫びに少なからず衝撃を受けるウイブ。

「全ての異形の者どもを駆逐しなければ！彼の命は報われない！だから私は止まる訳にはいかないの！ G X - 052！！」  
ジークスオーフィフティートゥー

《ケルベロス・カスタム。コード。》

「うわあああああ！？」

G4は暗証番号の要求を無視して大腿部からガトリングガンを引きちぎり、それをこちらへ差し向けてきた。

『くっ！？』

ウィブはとつさに盾を正面にかざすのではなく両腕を大きく広げて身構えた。

守るべき翔一が背後に横たわっている。一步もここを退く訳にはいかない！

そして束ねられた銃身が高速回転し、毎秒30発の弾丸が雨霰とウィブの身体に降り注いだ。

『がああつがああああああああああああ！？』

だが、G4のガトリングガンに装填されていた弾丸には全て銀が織り込まれている。いかに硬いメデュテフォームといえど、「魔」は「銀」の前では著しく力を殺がれてしまうのだ。

装甲を突き抜けてくる無数の衝撃に、遥はマスクの下で絶叫した。

『遥っ！？ ダメだ！もう保たねえ！』

メデュテシールドが吹き飛び、フォームチェンジが解除されたウィブは鎧を粉々に砕かれながら吹き飛ばされていた。

「あああああああつ！？」

そして守る者がいなくなったアギトの身体を無数の銃弾が蹂躪する。さながらホースで撒かれた水に蹴散らされる屑のごとく、斉射を受けて土の上をごろごろと転がるアギトの身体。その途上で脱落した体組織があちこちに散らばってゆく。

「しょういちーーーーー！！」

『あつははははははははは！』

遥の絶叫と、G4の狂喜じみた哄笑が重なって響いた。

やがて斉射を終了し機構が動作を止めると、林の中に静寂が戻り動くものが何もなくなった。

『あ……あ……あ……』

うつ伏せで見つめる遥の目の先には、もはや動かぬ「アギトだったもの」が転がっていた。

『あは、あはは、これで……』

取り憑いているだけのくせに肩で息をする動作をするG4は、脱力

したかのようにガトリングガンを取り落とした。

『これで、史郎の任務は………！？』

だが、G4の怪訝な沈黙と同時に遙は事の異常に気付いた。辺りには、黒こげになったアギトの体組織の破片が散らばっている。あれほどひび割れていたのだからこれくらいの量にはなるだろう。だが。

あそこで倒れているアギトの身体は、あれ程の弾丸を喰らいながらも四肢五体をそろえているように見えるのだ。

「……これは……？」

やがて、訝しむふたりの見ている前で、アギトだったものがのそりと蠢き、肘を、膝を立ててゆっくりと起き上がった。

『なに……！？』

「翔……？」

立ち上がったそいつは、見る見る内に身体を変色させ、まるで羽化する昆虫のように新たな姿を形成した。

それは、形状はアギトに酷似しているが、金色だった角や胸郭、各部が全て燃え上がる炎のように真っ赤に染まっていたのだ。

「……なに……あれ……」

『……………ッ！』

そいつは突如咆哮を上げた。

それはまるで獣のようだった。人の理性を感じさせない動き。

やがて前方を、G4を見据えたそいつは野獣さながらの動きでG4に襲いかかった。

『くっ！？ こいつは！？』

『……………ッ！』

そいつは両腕両足でG4にしがみつくくと、呆気なくG4の巨体を押し倒した。

跳躍地点の地面が大きく抉られている。それほどの爆発力のある跳躍だったのだ。

そして馬乗りになったそいつは、哮る勢いのまま両の拳を何度も何

度もG4に振り下ろし始める。

『……ッ！……ッ！』

鈍い激突音と、獣の唸り声が断続的に響く。

そしてG4の両肩に両手をつくると脚を高く振り上げ両膝をG4の腹部に叩き付けた。

『……ッ！……ッ！』

『やめてえっ！？ な、なんなのよこいつはっ！？』

飽き足りないのか、そいつはやおら立ち上がるとG4の足首を掴み上げ、片手で難なく振り上げると反対側の地面に叩き付けた。

砕けた土塊が飛沫のように飛び散った。

『……ッ！』

『ああっ！？ や、やめ』

『……ッ！』

そしてまた反対側へ。

見るからに決して軽くないG4の巨体をそいつはまるでずだ袋のように軽々と振り回してみせた。

何度叩きつけただろう。辺りの地面が残らず抉れ、あちこちの部品を脱落させたG4を、そいつは今度は水平に回して投げ飛ばした。

ジャイアントスイングだ。

冗談のように長距離を飛翔した黒い巨体は、遠くの大木に激突するとなす術なく地面に落下し、それきり動かなくなった。

『……ッ！』

なおも吼えるアギトだったもの。治まり切らないのか、有り余る力を吐き出すように辺りの木々を腕のひと振りでなぎ倒して回っている。

「……でも、あれじゃ自分も壊しちゃう……」

アギトが変化したそのパワーが凄まじいのは分かった。

だが今のそいつには、己を制する意志というものが感じられない。

その力は決して無尽蔵という訳でもないだろう。どこかで誰かが止めてやらねば今度こそ死んでしまうに違いない。

「……止めなきや」

遙は残りの力を振り絞って立ち上がると、そいつの元へ駆け出していった。

「おい！遙！さすがにありややべえんじゃねえか！？」

「だから止めんのよ！」

「いや、危ねえのは遙のほう……」

スパスパイダーの忠告も無視し、遙はそいつに駆け寄った。

「ちよつと！翔一！しっかりしなさい！」

「……………」

だが、そいつは遙をも木々と同様に殴り飛ばした。大きく吹き飛ばされ木に激突してしまう。

「っ！？……わたしのことも分からないの！？」

激痛と失望に顔をしかめる遙。

だが、このくらいで諦める訳にはいかない。

翔一を、死なせる訳にはいかないのだ。

「ふざけんじゃないわよ！」

叫び、再び遮二無二掴みかかってゆく。

「……………」

激しく腕を振り回されるが、今度は懐に入り込みしっかりとしがみついた。

「あなたね！あれだけわたしに色目使つといて今さら忘れただなんて、ダメな男だとは思ってたけど絶対に許されないわよ！分かってんの！？」

「……………」

そいつは大きく身を擦るが、しっかりと組み付いた遙は振り飛ばされない。

「この罪は重いからね！？ キッツいお灸を据えてやるから、まずは正気を戻しなさい！」

なおも上体を振り回すそいつ。

さすがに遙の足が浮き上がり、振り回され脇腹から樹に激突してし

まった。

「つづく!? ……伊達にウィブの紋を背負ってんじゃないのよ！  
捕らえた獲物を、簡単に放すものかあッ！」

そいつの身体に回した腕を組み直し、燃え盛る炎のようなマスクに顔を近づけるとそのセンサーを睨み付ける。

「絶対に生き延びてやるんでしょ!? しっかりしなさいよ！  
これ目を……」

そして両手でしっかりと顔面を固定し。

「覚ましなさい！」

そいつのマスクに口付けた。

> i 1 0 5 4 6 — 5 3 8 <

人間で言えば、人口呼吸にあたる。

アギトの口元に当てた遥の口腔から、遥自身の魔皇力が注がれてゆく。

ファンガイアであれば他者を賦活する行為であるが、それが異種族にも効くかは分からない。

だが、形は違えどエネルギーには変わりはない。少なくとも毒ではないはずだ。

異なるエネルギーの流入を受け、戸惑うかのように身動きを止めたそいつは、ただ遥の包容と接吻を受け続けていた。

「……………はあ、」

やがて唇を、身を離れた遥は、すっかりおとなしくなったそいつを眺め遣った。

「……………どうなのよ、翔……………」

返事は、ない。

だが、胸郭は僅かに上下している。呼吸はしているようだ。  
だから、その突然の変化に遥はぎょつとした。

そいつの胸郭が、またしてもひび割れ始めたのだ。

「うそ！？　なんで！？　やっぱり違う世界のエネルギーじゃダメだつての！？」

だがその変化は慌てる遙を無視して迅速に進行し、赤い胸郭が粉々にはがれ落ちていった。

「……………は？」

遙は目を見張った。

そのはがれ落ちた組織の下には、白銀に輝く新たな胸郭が形成されていたのだ。

それだけではない。肩の、下腕部の甲殻も変形し、輝ける赤と白銀の新たな戦士の姿を現した。

「……………は、るか……………？」

「翔一！」

そして翔一の声が遙の名を呼び、新たな姿となったアギトは怪訝に辺りを見回した。

「……………おれ、は……………？」

「翔一！　翔一！」

「うっおー！？」

突如胸に飛び込んできた遙を受け止める。

その受け止めた己の腕を見るなり翔一が絶叫した。

「うっおー！？　なんじゃあこりゃあ！？」

「翔一！　良かった！　痛いところない？　大丈夫？」

己の身体をためつすがめつ見回す翔一には、とりあえず見た目以外の問題はないようだった。

「大丈夫？　あんた、どの辺まで覚えてる？」

遙が目の前で三本立てた指を振るのに合わせて指を三本立てて見せながら、翔一は新たなマスクを傾げた。

「んー？　そーだなー。……………ちゅーしてくれたら思い出せそうな気がするんだが」

「もっかいパワーアップしたい？」

『嘘ですごめんなさい』



にっこりと笑顔で拳を振り上げる遙にアギトは慌てて両手をかざして後退った。

「ってかなによ!?! 最初っから意識あったんじゃない!?!」

「い、いや、なんか悪夢の次にいい夢見たなーとか思ってたんだが、まさか現実だったとは!?!」

結局ほかほか殴られるままのアギト。

「あ、いや、待て! そっいや あいつは? どこ行った?」

「え?」

言われて辺りを見回すと、遠くを這いずって遠ざかるG4の後ろ姿が見えた。

取り憑いているくせに這いずっているのは、G4が動作不良でも起こしたのだろうか。

「……はっ、まあいいや。あとで防衛省を問いつめちやる。」

「!」

「!?!」

その瞬間、同時にその気配を察知したアギトと遙はそれぞれ同じ方向を振り向いた。

「あいつは!?!」

「あれ……!?!」

林の奥からこちらに歩んでくる影。

そいつは一体きりのようだったが、なぜかアギトと遙は同じものを見ていた。

やがて現れたのは、先ほどの風のエルロード。

だが、先ほどと違い体中に色とりどりのステンドグラスのような体組織を顕して変形していた。

「なんだありや。派手になりやがって。」

「……っそ……なんで……」

アギトは首を傾げていたが、遙はこの現象を知っている。

かつて自身の世界にディレイドが介入した時に発現したモンスター、デュアルビーイング。

デイレイドの弁に寄れば、二種の異なる存在を掛け合わせた新たな存在で、両者の長所で両者の弱点をスポイルしてしまう厄介な能力を持っている。

だが、こいつはアンノウンとファンガイアの混合生物。ファンガイアは魔王力と銀の攻撃しか受け付けられないが、アンノウンへの攻撃にはなんの制限もない。

そのことを脳裏で検討した遙はアギトの前に立った。

「翔一。あいつにただの攻撃は通じない。アンノウンとファンガイアが混ざっちゃってんのよ。わたしが仕掛けるから、援護して。」

「お、おお。」

「スパスパイダー！」

「おう！」

飛び上がってきたスパスパイダーを手に噛みつかせ、アクティブフオースを受けてベルトにスパスパイダーを配置し、鎧の召還を受けてウィブへと変身する。

「行くわよ！」

「ファンガイアがいた痕跡があるのに、さほど侵攻は進んでいないようだな。」

「！？」

今まさに駆け出そうとしたその瞬間に横から聞こえた声に、ウィブは身をすくめて立ち止まった。

見れば、デュアルビーイングとは別方面の木立の間に、ファンガイアの集団が出現していた。

先頭に立って声を発した者は人間の姿に化身していたが、そいつもファンガイアであることは気配で分かる。

それも、遙が見知った姿だった。

「……び、ビショップ！？」

デイケイドが介入した前後から姿が見えなくなったファンガイア族のナンバー3が、そこにいた。

『……なぜ、こんなところに……?』

「それはこちらの台詞だな「葬儀屋」。貴様はなぜここにいる」  
当然のように見下ろした発言をするビシヨップ。

クイーン直属の部下といえど、遙はチェックメイト・フォーには遠く及ばない格下なのだ。

『わ、わたしは、キングの勅命を受け、異世界に侵入した裏切り者の討伐に当たっております』

「裏切り者、か。あの小さきキングはまだそのような世迷い言を言っておられるのか……」

憂うようにビシヨップが言うが、その声音には多分に嘲りが込められている。

『お言葉ですがビシヨップ。キングの御下命をないがしろにするのは、いかなビシヨップといえど』

「黙れ。」

瘦身の男の目が光ったと見るや、いきなりウィブが吹き飛ばされ、身体で木々を二本打ち砕いて激突し落下した。

『おおいつ!? 遙っ!?』

仰天してアギトが叫ぶ。ウィブは激痛に身を擦らせ悶絶していた。

『おどれナニさらすんじゃわりやあああああ!』

激情のままにアギト・シャイニングフォームが男へと駆け出した。が、瘦身の男の瞳がアギトを捉える方が速い。

迫るアギトを睨み据えその目が輝くが、アギトは僅かに風圧を感じたのみでその足は止まらない。

「何?」

異世界の戦士の持つ異能に勘付いた配下のファンガイアが二体、ビシヨップの前に素早く立ちふさがった。

『どりゃあああああ!』

だが、アギト・シャイニングフォームの拳の一薙ぎで二体のファンガイアは呆気なく殴り飛ばされた。

「……………!?」  
冷静にその隙に距離を取ったビショップは、身を翻すとアゲハ蝶の生態相を持つスワローテイルファンガイアの本性を顕し、アギトを迎え討った。

凄まじい速度で殴り合う二体。その力は拮抗しているようだった。

『てんめええええ！おとなしくそのツラ差し出せえええええ！』

『……………これが、異世界の、戦士の力、か……………！』

ウィブを吹き飛ばした魔王力の異能が通じなかったことを含め、ビショップとしても相当警戒せざるを得ない。

『ならば、やはりアレの出番か』

『何!?』

交戦中に突如横から蹴り飛ばされ、アギトは為す術もなく吹き飛ばされてゆく。

そこに飛び込んできたのは、派手に変色したアンノウン・デュアルビーイング。

『お前たちは行け。 女。 次の世界へ案内しろ』

ビショップの指示に、配下のファンガイア数体が林の奥へ駆けてゆき、ビショップが足下にいた人間の女を掴み上げると共々姿を消してしまった。

『ああつ!? てめえこらあ!』

怒声をあげるも意味はなく、アギトは襲いかかってきたデュアルビーイングに向き直らざるを得なくなつた。

鋭い鉤爪が、弓の剣が振り回され、アギトはそれらを的確に打ち払い捌いてゆく。

そしてさらに、林の向こうから大量のアンノウンが続々と現れ出した。

『んななんだあ!? くそつたれ!透!まだかよ!』

『芦河さん!お待たせしました! ……つて、なんか色変わってる!?』

『あーしーかーわーさー』

『バカヤ口俺だ俺!』

そこに、今度は数人のギルス部隊と、なぜか入院しているはずの瞳子までもがだぶだぶの制服姿で現れた。

『すみません芦河さん!防衛省の連中が道塞いで邪魔しやがって』

『おっし!いいから、こいつは俺に任せてお前等はアンノウンを!

それからお嬢ちゃんは帰れ!』

「黙りやがれですー!」

『んだとう!?!』

一気に乱戦の様相を呈する林の中。

そしてそこに今日一番の異常、アンノウンまでもが狼狽する程の巨大な目映い光が突如林の中に出現し、その中からイエローとシルバ―で構成された装甲を纏う戦士、ディレイドが現れた。

『翔一。遙。待たせたな。』

『透! ……ちよいと形変わったか!?!』

「え?あれ、シヨウちゃん!? おーい!」

『うお!? リヨウちゃんまで!?!』

ディレイドの背後から、かつて一度別れたはずの糸矢までが顔を出した。

『おっしやあ!リヨウちゃん、G300Xは使えるな?全員でたたみかけるおっ!』

『ほう。デュアルビーイングか。』

『おおい!?! のんきに分析してねえでなんとかしろ! なんか混ぜモンで厄介なんだろこれ!?!』

アギトと交戦する異形を見て呟いたディレイドは、片手に掴んでいた少年・テオスの腕を放すと、そちらへと歩いていった。

『ふむ。アギトのもつエネルギーではファンガイア側の特性が邪魔をするだろう。翔一。タイミングを見て離脱しろ。』

『ああ!なんでもいいから早くなんとかしてくれえっ!?!』

翔一の焦りも意に介さず、ディレイドは己の手順を実行した。

取り出したカレイドブレイドの刀身の溝に描かれたライダーズクレストの内、キバの紋章に指先で触れる。すると紋章が輝き刀身にはめ込まれたディレイフォンのディスプレイにキバのマークが現れた。

そして様々な形状のバックルを並べたベルトを掴むと、それを振り払うようにして回転させた。

連動して胸郭表面に散りばめられた多数のライダーカードの切れ端が複雑に入り乱れて万華鏡のように回転し、左右に詰まった形状のキバットバットがベルトの正面で停止したのと同時に胸郭の中央に唯一キバ・エンペラーフォームが描かれたライドカードの欠片がそろい、完全な絵柄となった。

《カレイドカメンライドウ・エンペラー。》

姿かたちこそ大きな変化はないが、これによりディレイド・カレイドフォームは仮面ライダー キバ・エンペラーフォームの特性を得た。

認証の声と同時に駆け出すディレイド・カレイドフォーム。

『翔一。蹴りだ。合わせる』

『ええ！？』

突如戦闘に割り込んだディレイドの要求に泡を食うも、ディレイドに合わせて同時にデュアルビーイングを蹴り飛ばす。

『あとは任せる。』

『うわ！？ 透にや珍しい頼もしい言葉！？』

訳の分からないアギトの台詞を無視し、たたらを踏んで後退るデュアルビーイングを追うディレイドは、まずカレイドブレイドの刀身の溝の先端に触れると、クウガのマークからディケイドのマークまで一気に指先でなぞりきった。ディレイフォンのディスプレイにも同期してスロットのように次々とマークが表示されてゆく。

《ファイナルアタックライドウ・カレイド！》

認証後、ベルトを掴んで振り払い、十のバックルを勢い良く回転さ

せた。

それに同期して目まぐるしく模様を回転・変化させる胸郭のカードの欠片。

それらは勢いを緩めることなく回転し続ける。

これがデイレイド・カレイドフォームの真骨頂。正面を向くバツクルが瞬く間に回転して入れ替わり、胸郭のカードの欠片も入り乱れ、この間に限りデイレイドは九旗の仮面ライダーの最強フォームの特性を同時に発揮することができる。

否。九旗の仮面ライダーの特性を全て内包し融合させて発現できるのだ。

駆けるデイレイド・カレイドフォームはデュアルビーイングの手前で跳躍した。

衝撃から立ち直ったデュアルビーイングはだが、既にかわす暇もない。

このデュアルビーイングは、アンウンとファンガイアの特性を同時に持っている。

対してファイナルアタックライドを発動したデイレイド・カレイドフォームは今、全ての仮面ライダーの特性を融合させている。

だからその蹴り足はデュアルビーイングを呆気なく蹴り砕き、爆砕させ消滅させた。

このデイレイドカレイドキックは、あまねく融合モンスターを打ち滅ぼせる攻撃なのだ。

「ほらこれ。あんた、こんな顔してたのよ？」

「……鏡ねえから、進化した俺の顔が自分じゃ分かんなかったんだよな」

デイレイド・カレイドフォームの胸郭のカードの欠片を指さして、しげしげと覗き込みながら遙と翔一が言った。

「ってえか透。この格好はなんの冗談だ？なんかの自慢か？」

「あはつ。シヨウちゃんボクと同じこと言ってる」  
『問題ない。』

翔一の言い種に糸矢が朗らかに笑った。

あれからアンノウンは一掃され、解放した少年・テオスは悔し涙を浮かべて走り去ってしまった。戦闘中のことだったので誰も手が出せなかったが、その正体を透が翔一に告げたのがその後のことだったので、どうしようもなかった。

「まあ、売られた喧嘩だ。その内会うこともあるだろうよ。」

「気楽なもんね。本当に大丈夫なの？」

「あゝダメかも。でもちゅーしてもらえたら世界丸ごと救えるかもしない。」

「あーしーかーわーさーん」

翔一と遥の間に、にゆう、と瞳子が下から生えてきた。

そして翔一に土を蹴りかけながら遥を抱きしめて距離を離す。

「お前な……」

「ぺっ。ぺっ。」

「あはは。なんかだんだんガラ悪くなってくるわねこの娘。」

遥は乾いた笑いで瞳子の頭を撫でた。

「ねえシヨウちゃん。これ。」

傍らに寄ってきた糸矢が、翔一にG30Xのベルトを差し出した。

「お手伝いが終わったから返すね。それと、ありがとう。シヨウちゃんみたいなのがいてくれて、本当に良かった。」

「おう。そりゃ良かった。まあ生きてんのが神のボーナスだから

よ。挫けねえでがんばれよ。」

「ウン！」

嬉しそうに満面の笑みで糸矢はうなずいた。

『さて。そろそろ行かねばならない。』

「あらま。慌ただしいこと。」

遥が苦笑しながら呟いた。



「まあ、キングに報告しとかないといけないことが増えたしね。」  
泣きそうな顔の瞳子が、渋々と、名残を惜しみまくった拳句にようやく遥の袖を握りしめた手を離れた。

「世話になったわね。ありがとう。」

「ふええええええええ」

とうとう泣き出した瞳子の頭を優しくなでる。

考えてみれば、ディレイドの手伝いとはいえ、瞳子は人間としては希有な存在だ。

苦手なタイプではあったが、遥も大いに救われたのだ。

『では、遥、糸矢。側に寄れ。』

言ってカレイドブレイドを一振りしたディレイドの身体から、ドット柄のノイズが溢れ出し、瞬間に全世界を覆う程に拡張してゆく。『この世界に入り込んだファンガイアは、新たに侵入したものも含めて一体の取りこぼしもないから安心しろ。』

「おう。」

『それから翔一。G30Xの貸与は助かったぞ。』

それを聞いた途端、翔一と遥がそろって吐きそうな顔をした。

『どうした。具合が悪いなら、当面脅威はないからゆっくり休め。』

「おめえが、らしくねえこと言うからだバカタレ！ 早く行っちゃえ！」

『そうか。ではな、瞳子。』

泣き顔で、あくまでも遥に手を振る瞳子に告げ、ディレイドと遥と糸矢の姿は掻き消えていった。

「遥！ おめえはいい女だったぜー！」

「……………」

姿が完全に消える寸前に叫んだ言葉に、遥が珍しく投げキッスなど披露してくれたおかげで翔一の鼻の下は伸びっぱなしになったが。その遥の行動が、翔一の背後に八代が立っていたことを見越した上での最後の置き土産であったことに翔一が気付くのは、この一瞬後のことである。

これを以て、「アギトの世界」に紛れ込んだ「第二の異常」は完全に終結した。

続いて「アギトの世界」からの撤収も完了。

そしてようやく「ディレイド・カレイドフォーム」が活躍できました。

やってることは「スクエアフォーム」とたいして変わらないんですが、その違いは「瞳子が必要ない」とことと「六種以上の混合モンスターにも対処できる」ということと「手順の圧倒的な簡略化」。

それ以上の真価というのも存在するんですが、それは物語が進行するにつれ語られることでしょう。

ディケイド・ディエンドみたいに「最強フォームが別個に出現する」のはやめました。小説で表現しようとすると煩雑になるといっつか、文字媒体である小説でやつても意味のない演出なので。

ただ「指先のひと振りですべての最強フォームの特性を同時に発揮できる」というのも、なかなか勝るとも劣らないデタラメっぷりだと思いますがいかがでしょう。

さて。冒頭で「ディレイドマスカークレイド」の世界の秘密をひとつ、つらつと開示してしまいましたが、気付かれた方はおられるでしょうか。

これまでの情報を統合すると、見えてくるものがあるかもしれませんね。

ところで。俺は「アギト世界のその後」も書くのか……？

ブレイドの世界

「はあつ。 はあつ。」

少女がひとり、森の中を必死に走っていた。

だが突如、周囲の地面に火花が散り木々が弾けて枝葉が大量に落ちてきたことで足を止めてしまった。

「はあつ。 …… はあつ」

荒い息を繰り返して、少女・相川 初は苦しげな表情で後ろを振り向いた。

『いぎやーっはっはっはあ！ どうしたどうしたあ！？ もう追いかけてこはおしまいか？ 構わねえぜ？ もっと逃げてみるよ！ 逃げられるモンならなあ！』

神経を逆撫でする嘲笑を撒き散らして、横線で構成された装甲を纏う人型の異形、ディシエッドがアサルトライフルのような形状のディシエッドライバーを振りかざして木立の陰から悠々と現れた。

瞳子がある日突然昏倒してしまい、やむを得ず単独で外出しようと思ったのがいけなかった。

突如、三度姿を現したディシエッドが初に襲いかかってきたのだ。いや。むしろ瞳子を巻き込まずに済んで良かった。瞳子がいたなら、きっと初を守ろうとするだろう。

そして瞳子ではディシエッドに太刀打ちできない。簡単に殺されてしまう。

今の初には、そんな誰かを犠牲にして逃げることはもうできそうにない。

（瞳子おねえちゃんの異常を察知して、ディレイドがここに来てくれれば……！？）

一度一方的な負けを喫したが、なお蘇ってみせたディレイドは唯一  
ディシエッドに対抗可能な存在。  
そのディレイドの救援の可能性に賭けて初は逃げ続けていた。

ディシエッドに向き直った初は、目つきを鋭く意識を集中させ、現  
在の姿「ヒューマンアンドッド」としての本性を解放した。

今の姿は生活に馴染む為己の能力を制限した、言うなれば「ヒュー  
マンアンドッドの人間態」。

瞬時にカーディガンとブラウスとスカートが溶け崩れて簡素な白の  
ワンピースのような衣装に変移し、厳しい初表情が緩み完全な無  
表情になった。

これがヒューマンアンドッドの本来の姿。

そして腰にはカリスラウザーをバツクルに据えたベルトを巻いてい  
た。

> i 1 0 6 4 5 — 5 3 8 <

『は！ いっぺんジョーカーの姿で負けてんのに今さらただのアン  
デッドが役に立つかよ！』

嘲りを吐いたディシエッドはベルトの側面から複雑な紋を描かれた  
ケースを取り出すと、ディシエッドライバーのマガジンスロットに  
下から差し込んだ。

《アサルトカメンライドウ・スラッシュ！》

くぐもった声で認証を告げたアサルトライフルを構えたディシエッ  
ドはセレクタをマニュアルに捻りトリガーを引いた。

二度の重い炸裂音と同時に暗い銃口から仮面ライダー ブレイドと  
仮面ライダー サソードが飛び出し、各々武器を構えて飛翔する勢  
いのまま初に斬りかかった。

対する初も、同時に自らの武器を召還していた。

初の目の前に現れる一本の青銅色の棒。

その棒は左右に三対の突起を生やしていた。

それは日本の古代より伝えられる「七支刀」に非常に良く似ている。

これがヒューマンアムデッド自身の武器、セブンスード。

初は、滞空するセブンスードに手をかざすと、触れもせずに掌と腕の動きだけで操り自身の周囲を旋回させると弾丸の速度で飛来したブレイドとサソードの斬撃を打ち払った。

『いぎやーっはっはっはあ！そっついや今の片っぽはお前の仲間だったな！襲われた気分はどうだ！？』

『……………』

黒い悪魔の嘲笑を無視して初は宙を旋回するセブンスードに命じて剣を七本の小剣に分離させた。

『つれなくすんなよ。今すぐ悲鳴をあげさせてやるからよ！』

若干不機嫌な声で叫んだデイシエッドはセレクタをフルオートに捻ると改めて銃口を突きつけた。

『アンデッドってなあいいよなあ！殺しても死なねえし死体も消えねえ！ブチ込み甲斐があるぜええええええ！』

そして銃口から仮面ライダー 一号、二号、V3を始めとする、徒手空拳でありながら切れ味鋭いチョップを必殺技に持つ者や、武器に刃物や斬撃を持つありとあらゆる仮面ライダーが次々と射出されてきた。

『いぎやーはははははははははは！！』

マガジンスロットの上のイジェクターからは色を失ったブランクカードが噴水のように吹き出てゆく。

『……………！？』

初は七本の小剣で次々と飛来する仮面ライダーの斬撃の弾丸を打ち返した。

一発の仮面ライダーに対し一本の短剣をぶつけて相殺し、弾かれる端から呼び戻し次々と小剣を前に出して迎撃してゆく。

『いぎやーはははははは！健気に頑張るじゃねえか！ちなみにこのマガジンの最後にやちよいとデカい弾が入っててな！？』

デイシエッドと初を繋ぐ無数の仮面ライダーの射線の一番最後に、巨大な影が現れて初に迫った。

「!?」

すぐさま反応した初は小剣を集めて円形に配置して身構える。仮面ライダーの列の一番最後に現れたのは、身の丈三メートルを越える巨大な仮面ライダー。

捻くれた悪魔の角を生やしたそいつは仮面ライダー アーク。

そいつが巨大な槍を腰溜めに構えながら滑るように迫り、一気に槍を振り上げた。

斬撃が地面を抉りながら初に襲いかかる。

「あ……」

甲高い衝撃の音と爆発が轟いた。

「いぎやーっはっはっはっは！的が小せえから真っ二つになるより先に叩き潰れちまったかな!? いぎやーっはっはっはっは！」

撃ち終えたデイシエッドライバーの銃口を天に向け、哄笑を上げるデイシエッド。

やがて爆煙と土埃の晴れたそこに、何者の姿も残っていないことに気付くと不機嫌に口をつぐんだ。

「……おい。つまんねえ目眩まししてんじゃねえよ」

グリップ近くのイジエクトレバーを引くと装填されていたマガジンが吹き飛ばされ、デイシエッドはベルトから別のマガジンを取り出すとそれをスロットに叩き込んだ。

《アサルトカメンライドウ・スナイプ!》

「そろそろ終いだ」

そしてデイシエッドは弾丸を解放した。

「……………!?」

巨大な仮面ライダーの斬撃に合わせて爆発を引き起こした初は、衝撃を相殺して凌ぎきると同時にあの場から離脱する為の目眩ましをした。

「……………」

少女の姿をしてもアンデッド。本領を發揮した今は息を切らす

こともなくかなりの距離を走破した。

かつてのバトルファイトでヒューマンアンデッドが勝ち残ったのは伊達ではない。体躯のサイズ差やパワーで大きなハンデを背負いながらも勝ち残れたのは、ひとえにヒューマンアンデッドの知性の高さに因る所が大きい。

これでデイシエッドは初を見失い、まだしばらくの時間を稼げるだろう。

そう思っていた初の身体は突然背中に受けた衝撃につんのめって転倒した。

『!?!?』

地面を転がりながら後方を確認するが、何者の姿もない。

背に受けた衝撃の角度から僅かに上を見上げた初は、デイシエッドの能力がヒューマンアンデッドの想像を遙かに越えていたことを思い知り臍を噛んだ。

この森林公園の上空に、こちらに武器を突きつけ捕捉している仮面ライダー ドレイクを始め、次々と地上から舞い上がった、銃器を武器とする仮面ライダーたちが続々とその銃口を地上の初に突きつけてきたのだ。

『……………!?!?』

逃げなきゃ。

初の身体は衝撃にふらつきながらも立ち上がり、地を蹴った。

だが、上空から解き放たれたありとあらゆる大量の弾丸がその小さな身体に殺到するほうが遙かに早かった。

巨大な爆発が巻き起こった場所へ、デイシエッドが雑草を踏み分けてやって来た。

『……………つまんねえ手間喰わせんじゃねえよ』

そして、地面で昏倒している初の片腕を無造作に掴み上げた。



## アギトの世界

この辺の警察関係者御用達の理容店から、警官の制服をぱりっと着こなした威めしい顔の大柄な男が出てきた。

歩道に歩み出るなりそこに通りかかった若い女性が残らず振り返り、反対側の歩道にいる女性ですらわざわざこちらを眺め遣って狼狽えては嬌声を上げる者もいた。

それ程に男からは一種圧倒的な魅力が満ち溢れていたのだ。

「……計算外だったわ……」

その男の後ろから、頭を抱えた女性警官・八代 瞳子警部補が懊悩しながら続いて出てきた。

「おい八代。なんか道行く女という女がみんな俺のこと睨み付けるぞ。俺なんか悪いことしたか？ ……はっ！？ それともお前、おっちゃんに妙な事吹き込んで変な髪型にしてねえだろうな！？」  
慌てて男・翔一は己の頭、特に後頭部を念入りに手探りした。  
あれほど放埒に伸ばしまくっていた無精ヒゲと長髪を、たった今ばっさりと落としてきっちり整えられたところだった。

「あんた、自分に向けられる好意には鈍いのね。それとも日頃の行いが悪いことの裏返しかしら。」

やたらびくびくしている翔一の様子を見て八代は頬に手を当てて溜め息を吐いた。

「まあとにかく、しゃきつとなさい翔一！あんた、昇格辞令をもらいに行くんだから、そんな変な頭にするワケないでしょ！？」

「お、おお。」

この度、芦河 翔一 巡査部長は昇進し、芦河 翔一 警部補となる。  
未確認生命体対策班の活動の成果を認められ、また、これからのアンノウン対策に大きな期待を込められての昇格である。

「……ってのは建前だよ。実際は昇格ってエサやるからこれからも化け物と戦ってね？っていう上からの押し付けだよな。」

「あとその捻じ曲がった性格を直せってことよ。」

カラカラと笑って皮肉る翔一の横に並んで八代が補足した。

「「アギト化患者」がアンノウン対策に有用であることをこれからも証明し続けないと、あんたもギルス部隊も面倒なことになるわ。」

「あーあーわかったら」

それこそ面倒そうな仕草で片手を振る翔一。その動作だけを見れば、身なりを整える前の翔一のままである。

「……まったく。」

わざとらしく呆れるが、翔一がいざとなったらやる時はやる男だと八代も知っている。

しかめっ面を苦笑顔に変えて先を歩く翔一を追いかけた。

「おっと。」

「ひゃ!？」

ところがいきなり翔一が立ち止まった為に背中にぶつかりそうになった。

「なに?どうしたの翔一?」

「いや。どうした?お嬢ちゃん」

曲がり角のすぐその路上に、十代半ばにも満たない少女がひとり、腰を抜かしたように後ろ手を付いて座り込んでいたのだ。

カーデイガンにブラウス、スカートを纏った、なんの変哲もない少女だ。だが翔一の呼びかけに反応を示さない。

その少女の前に屈み込んだ翔一は、その時少女の異様な状態によりやく気付いた。

少女は、目を見開き恐怖に慄いてがたがたと震えていたのだ。

「……!? おい、どうした。しっかりしろ」

この年頃の少女が遭う正気を失う程の被害についていくつかの心当たりを思い出しながら翔一は極力気持ちを抑え気味に、できるだけ平静に問いかけた。

「翔一。代わって」

「ああ。」

背後から肩を叩いた八代にうなずいて立ち上がり、場所を交代する。

場合によっては女性警官の方が対処に適していることもある。

「お嬢ちゃん。どうしたの？なにかあったのかしら」

八代が至極柔らかい調子で語りかけるが、やはり少女は震えるばかりで反応を示さなかった。

だが構わず八代は少女の顔を見つめたまま背中に回した右手を、握り拳から親指と小指だけ立てて軽く振って見せた。

その「専門部署に連絡しろ」のサインを見た翔一は、さりげなく携帯電話を取り出した。

「わたしたちは警察よ？ もう大丈夫だから。一緒に、安全なところに行こう？ね？」

「……………さい」

「ん？」

八代の説得の最中、なにか聞こえた気がして翔一は携帯電話をいじめる手を止めて少女を覗き込んだ。

「え？どうしたの？なにか思い出した？」

「……………さい、……………んなさい、ごめんなさいごめんなさい！」

「え？」

「あ？」

呆気にとられる二人の前で、少女は取り憑かれたかのように繰り返して絶叫し出した。

「ごめんなさい」

「ちよつと！？ しつかりして！？」

「こいつあやべえな！？」

しゃがむ八代と立つ翔一のとどちらともつかない角度を見上げた少女はがたがたと震えながら尋常でない反応を見せ始めた。

八代が少女の肩を抱いて必死に宥めるが、どういつ訳か八代の腕力でも抑えきれないほどに少女は取り乱している。

「ちっ、待つてろよ今すぐ……………」

言いながら、翔一は手早く携帯電話を操作した。

ざうつ。

少女の見上げる先、翔一の背後のビル群の隙間という隙間から黒い「何か」が蠢く津波が吹き出して街を人を何もかもを一瞬の内に飲み込んだ。

その黒い「何か」は瞬く間に全世界を覆い尽くしてしまった。

モノリスが役目を終えたジョーカーと無数のダークローチを回収したことで、地球上に生きて動くものは何もなくなった。

モノリスの次の役目は、次なるバトルファイトの為に、争うに足る生命体の新たな発生を待つこと。

それまでは永劫ともつかぬ永い眠りに就くのだ。

そうして活動を停止しようとしたその時。

モノリスの表面にひびが発生し、瞬く間に全体を覆い尽くすと中心に向かって収束し、吸い込まれるように渦を描いて消えてしまった。それと入れ替わるようにして、渦の中心点から人影がひとつ、地上に舞い降り着地した。

そいつの足が地についた途端、そこを中心に世界から色彩が褪せて消えてゆく。

やがて世界は、白と黒の二色のみとなった。

間のグレートーンは一切存在しない。陽の光も意味を失い、世界の全ては「白」と「黒」の二階調のみで覆われたのだ。

立ち上がった人影は、この世界をゆったりと睥睨した。

そいつは白と黒の縦線のみで構成された人型に見えた。身体の表面に白線と黒線が描かれているわけではない。肘を曲げても、脚を

動かしても、白と黒の縦ストライプがそいつの輪郭を境に人型を成すのだ。

ただし、頭部には特徴があった。

「目」にあたる部分だけ、ゴーグルのように、「」のような形状に白く抜かれているのだ。この「目」の部分だけは、そいつがどちらを向こうと黒線が避けて通った。

もしも縁ある者がその姿を見たなら、「デイケイド」を連想したであろう。デイケイドを白と黒のみで表現したらこうなるだろう、と

> i 1 0 6 4 6 — 5 3 8 <

そいつはやがて一方を見据えると、そちらへと歩き出した。

この世界は「音」の概念を失った。足音も何の物音も立ちはしない。辺りは無数のダーククローチによる津波に押し潰され瓦礫の荒野と化している。

その中に、唯一色彩を保っているものがあつた。

白と黒の二階調の瓦礫に埋まっていた、仮面ライダー アギトの身体だった。

それは既に事切れており動くこともなかったが、そいつは頓着せず屈み込むと、アギトの額に手をかざした。

すると、アギトの額の触れられた所から色彩が失われてゆく。

元から黒色の場所は濃淡の階調を失い、やがてアギトの身体は白と黒のみとなった。

だがそいつはまだ手を離さない。

色彩を一切失ったアギトの身体が、そいつの手に吸い込まれ始めたのだ。

掌に消失点があるかのように頭から収縮しながら手の中にするすると吸い込まれてゆくアギトの身体は、たいしてかからずに全てを飲み込まれ消えてしまった。

支えを失った瓦礫が無音で僅かに崩れ落ちた。

己の成すことを終えたそいつは、屈んでいた姿勢を立て直すとおっそりとその場から消え去っていった。

最後の観測者を失った途端、世界は見るもののない「無」となり果てた。

「アギトの世界」は完全に消滅した。

『システム・ディケイド』のデータリンクに記載されたそいつの名は、「ディヴォイド」。  
ルインドライブモジュール・ディヴォイド。

「紅 渡」や鳴滝らが再三警告していた「宇宙の接触崩壊・消滅」が、具体的に起きてしまいました。

「地球と別の地球がぶつかって潰れる」というヴィジョンは、「宇宙の接触崩壊」を分かり易く一目で理解させる為の、あくまでもイメージ。

実際の接触崩壊とは「世界と別の世界が部分的に融合し、それぞれの脅威がそれぞれを脅かすもの」と鉄槻は解釈しています。

その結果、原作での「ライダー大戦」終盤のように世界と世界が対消滅してしまったり、あげくデイヴオイドが喰ってしまったりするのが「宇宙の消滅」である、と。

ちなみに世界同士の対消滅を誘発しているのは言うまでもなくデイシェッドの仕業。

今回のサブタイトルは完全に侵食されてしまっていますが、伏せてばっかだと意味ないので解説の鍵を御紹介します。

`ttp://oh.ta.oioi.jp/cgi-bin/ang  
o.cgi` (頭に「h」を足して下さい)

こちらにアクセスして頂いて、サブタイトルを入力して「UNICODEを解読する」をクリックして頂くと意味ある言葉に変換されます。お試しあれ。

なお、いずれにしても次回の後書きにて答えを發表します。携帯読者の方や環境の合わない方はもうしばらくお待ちを。

あと、翔一の理髪後のシーンは、劇場版のあそこに繋がる伏線ですな。

キバの世界

「っ瞳子っ!?!」

「ハニーツ!?!」

けたたましく病室のドアを引き開けて、血相を変えた遙と糸矢が駆け込んできた。

郵便局員の瞳子と同様にこちらの瞳子も入院していると聞き、元の世界に戻ってきた遙が見舞いに来たなりその瞳子の病室で異常が発生したと聞いて飛んできたのだ。

そうして室内に駆け込んだ遙と糸矢が見たものは、滅茶苦茶に乱れ配置を傾けたベッド、引きちぎられたカーテン、砕けた窓、倒壊した棚やテーブルなどまるで嵐が起きたかのような惨状の真ん中で、数人の女性看護師に取り押さえられている瞳子の姿であった。

その瞳子は着衣を乱れさせ、ちぎれて中身をはみ出させた枕を握り締めて未だに看護師たちの腕の中でもがき続けていた。

「あああああっつ!?! あああああああ!」

「……瞳子……」

その上、糸矢はともかく共に戦ったことのある遙をして見たことのない、常軌を逸した形相の瞳子の顔に遙は愕然とした。

巨大な魔化魍を前にしても取り乱したりしなかった瞳子がこれほど我を失う程の、いったい何があったのか。

「瞳子っ!?! 瞳子、しっかりして!?!」

我に返った遙は慌てて看護師らに取り押さえられている瞳子に駆け寄り寄った。

「あああああっ!?! あああああああ」

「瞳子っ! わたしよっ!?! しっかりして!なにがあったの!?!」

「



正面に回り込んだ遙が瞳子の襟を上腕を掴んで揺さぶる。

やがて瞳子の目の焦点が戻り、遙を認識したように瞳を合わせた。

「……は、るか、さん……？」

「そう、わたしよ。 どうしたの瞳子。 なにがあったの？」

目の端で部屋の惨状を再度確認しながら瞳子を見据えて内心舌を巻く。

これが全て瞳子の仕業だとしたら、ただ事ではない。

「……はるかさん……はるかさんっ！？ うう……」

謔言のように名を繰り返す瞳子の瞳に涙が溢れだした。

ちぎれた枕を落とし瞳子が脱力したのを確認した看護士が拘束を解くと、瞳子は力なく崩折れて座り込んだ。

そして、ぽつぽつと瞳子の口から語られた事実、遙と糸矢もまた同様に愕然と膝を落とした。

緑深い山中に、激しい獣の怒号と戦いの轟音が響き渡る。

暴れ回る小山のようなモンスター、ステンドグラスのような表皮をもつ巨大な蟹に対し、魔化魍討伐にやって来た斬鬼と威吹鬼、バーストモードに移行したイクサと、人手不足の為に御自ら出撃を決めたキングことキバラが攻撃を躲しつつ遠巻きに様子を伺って駆け回っていた。

『くそつたれが！デュアルビーイングじゃあ俺たちではどうにもならんぞ！』

『とにかく足止めして行動不能にさせましょう！』

『どうやってだ！？』

各々の武器をふりかざし鬼の姿で怒鳴り合う斬鬼と威吹鬼。

『イクサ！ マップを検索！ ここより高度の低い沢か崖を！』

『ラ・ジャ・ア』

振り下ろされた巨大なハサミをかくぐったキバラの指示にイクサが

応答するなり、後ろを向いて駆け出していった。

『逃げんなあああ！？』

『いえ！違います！ 足止めできそうな場所を発見しました！誘導願います！』

『斬鬼さんはイクサさんを追って！』

斬鬼にキバが注射を入れ、威吹鬼の指示で全員が移動を開始した。離れた所から音撃管の鬼石の射撃でバケガニデュアルビーイングの気を引いて後退る威吹鬼を置いて駆け出す。

『距離は？どんくらいだ？』

『キヨ・リ・イ・チ・ハ・チ・サ・ン』

『だああ八キ八キしゃべらんかいッ！？』

『二百メートルありません！引きつけて！』

斬鬼がイクサに喰ってかかるのはいつものこと。

威吹鬼は走り去る彼らに苦笑しながら銃撃を続けて迫るバケガニからつかず離れずの距離を保って誘導を続けた。

『だあああああ！？』

ところが威吹鬼の元に三人が泡を食った様子で駆け戻ってきた。

『威吹鬼い！ダメだあああ！』

『ちよ！？ 斬鬼さんナニやってんですか！？』

『威吹鬼さん！？ あ、あれなんですか！？』

同様に慌てるキバが指さした空を見上げ、威吹鬼は目眩を感じた。あるうことか、上空を翼を生やした巨大なウツボのような怪生物が身をのたくらせて飛翔していたのだ。

それも、表皮をステンドグラスのように変質させて。

それさえなければ、魔化魍ウブメと言えば管の鬼の格好の獲物だったのだが。

『……あのー。もう帰って寝ません？』

『貴様それでも鬼か！？ 俺は昔っから貴様のそういう軟派なところが気に喰わんのだ！』

『じゃあどうしろって言うんですか！？ バケガニはともかく、あ

んなのどうやって足止めしろって言うんです!? 空飛んじやって  
るじゃないですかホラ!?」

「お、お二人はカニの方をお願いします!」

鬼の間に身を割り込ませたキバが、二人を押し離し宥めながら指示  
を下した。

「空を飛ぶモンスターになら、こちらに手がありますから」

言いながらキバは、ポーチから引き抜いたフエッスルをベルトのキ  
バットの口元にあてがった。

「キャッスルドランー!」

グオオを重厚な音色を吹き鳴らしたのち、空の彼方から巨大な城か  
ら手足と首を生やしたグレートワイバーン・キャッスルドランが現  
れ、そのままの勢いで飛翔するデュアルビーイングに体当たりした。

「よおし! 威吹鬼! 俺たちはバケガニを!」

「さっきの発言については後できっちり追求しますからね!」

鬼たちは言い合いながらも改めてバケガニに対峙した。

ところがそのバケガニと斬鬼、威吹鬼らの間に突如何者かが地面を  
打ち砕いて着地した。

「うっお!?」

「新手!?」

ふたりが警戒する中、着地体勢から立ち上がったその銀色の人影は  
振り向いて事も無げに告げてきた。

「斬鬼。威吹鬼。待たせたな。」

「お前、透か!」

「なんですかその格好は。まさかカードの自慢でもしに来たんです  
か!」

「うむ。その意見はお前で三人目だ。」

かつてより姿を変えたデイレイド・カレイドフォームを見て怪訝な  
顔をする二人に透は意味の分からない返事をした。

「ご苦労だった。これから全てのデュアルビーイングを始末したの  
ち、お前たち二人とこの世界に入り込んだ全ての魔化魍を元の世界

へ移送する。デュアルビーイングには構わなくていいから、そつちで別れの挨拶でもしておけ。』

『あ?』

『いや、透くん。言っている意味がさっぱり……』

そうは言われてもきよんとするばかりの二人にはそれ以上構わず、デイレイドはまずバケガニを見上げると己の手順を実行した。

引き抜いたカレイドブレイドの刀身の溝に指先をあて、クウガの紋章からアギト、龍騎と順に指を滑らせキバ、ディケイドまで一気になぞりきった。

《クウガ・アギト・リュウキ・ファイズ・ブレイド・ヒビキ・カブト・デンオー・キバ・ディケイド!》

それに併せて刀身に組み込まれたデイレイフォンのディスプレイに次々とライダーズクレストが表示される。

《ファイナルアタックライドウ・カレイド!》

発声された認証後、バックルだらけのベルトを掴むと、振り払い勢い良く回転させた。

それに同期して胸郭のカードの欠片がめまぐるしく模様を回転・変化させてゆく。

その状態で駆け出したデイレイドはバケガニの手前で大きく跳躍し、宙で伸身二回転をかけて跳び蹴りの姿勢に移行すると流星のようにバケガニとファンガイアのデュアルビーイングを蹴り貫いた。

たちまち爆発して微細な欠片を撒き散らしたその向こうに着地したデイレイド・カレイドフォームはすぐさま立ち上がり、片手をひと振りすると目の前に巨大なカードのヴィジョンを出現させた。

デイレイドが間髪入れずにそのカードのヴィジョンを叩き斬ると、傍らに瞬いたドット柄のノイズの中から現れた専用バイク「マシンデイレイダー」にとつとと跨りバイクを急発進させ、上空で格闘戦を展開しているキャッスルドランとデュアルビーイング目掛けて突進していった。

崖まで猛スピードで走るとその勢いそのまま跳躍し、ウブメを上回る

高度へ飛翔するとデイレイド・カレイドフォームは再びベルトを振り払い回転させた。

バイクごとファイナルアタックライドの輝きに包まれると、デイレイドはそのままウブメとファンガイアのデュアルビーイングに飛び込みバイクの体当たりでその身体を貫いていった。

たちまち爆発し微細な欠片を撒き散らして巨体が消えてしまう。

「……な、なんです？あれ」

「あんな苦労したあの化け物を、一撃で簡単に……！？」

呆然と上空の爆発跡を見上げる一同の元に、デイレイドが跨ったバイクが静粛に駆け戻ってきた。

「別れの挨拶はすんだか？ 状況は切迫している。元の世界へ行くぞ」

「ああ！？」

バイクから脚を振り上げて降り立ち、急かすデイレイドに斬鬼も威吹鬼も泡を食うばかりだ。

「待て待て待て！？ 切迫してるってのはどういう意味だ？」

「宇宙の情勢が緊迫している。既にひとつ世界が消滅した。」

「なんだと！？」

一同に構わず淡々と説明しながらデイレイドはカレイドブレイドをひと振りすると、デイレイドの背中からドット柄のノイズが翼のように大きく吹き出した。

「待ってください透さん！「葬儀屋」はどうしたんです！？」

「街の方に先に降ろした。詳しくは遥に聞け。糸矢も一緒だ。これでもう魔化魍は一切いなくなるから心配するな。世話になった」  
「一方的に言い切ると、デイレイドの姿は慌てふためく斬鬼と辛うじてお辞儀をしてみせた威吹鬼と共に掻き消えてしまった。」

「慌ただしいですね！？ ろくな挨拶もできなかったじゃないですか！？」

『別れの挨拶を済ませておけと言った。それと、状況が切迫しているとも。』

深い森の中に現れたデイレイドと斬鬼、威吹鬼は転移が済むなり言い合いを始めた。

「つていうか、着替えもないじゃないですか！？」

「いくらなんでも急ぎ過ぎだろう透！？」

変身を解除し全裸で立ち尽くす斬鬼と威吹鬼の文句を聞いてか聞かずか、デイレイドはその辺の木の枝をへし折ってカレイドブレイドを一閃させると、木の枝はたちまちドット柄のノイズに包まれて黄色の簡素なジャージの上下セットに変移した。

同じことを繰り返してそれを二組用意するとデイレイドは二人にそれぞれ放り渡した。

『悪いが俺は急がねばならない。これ以上宇宙を消させない為にな。世話になった。』

それだけ言い置くと、いそいそと着替える二人を後目にデイレイドはさつさと森の奥へ立ち去っていつてしまった。

「やれやれ。慌ただしいことですね。」

「……それにしてもあいつ。ずいぶん気が利くようになったと思わんか？」

「……確かに。」

顔を見合わせて呟く。

「まあ、とにかく我々は我々のことをしましょう。とりあえず斬鬼さんが生き返った言い訳を考えないと、みんなの所に戻るからできませんよ？」

「ぬああしまつたっ！？ そうだった！？」

頭を抱えた斬鬼の苦鳴が森の中に響いた。

じやり。

他に何者もいないはずのこの場所に迫る足音に気付き、斬鬼と威吹鬼は素早くそちらを振り向いた。

そこに立っていたのは見覚えのある痩身の男。に見える存在。

「……童子!？」

「さっそく出おったか！」

魔化魍の育ての親の片割れの出現に、途端に臨戦態勢を取る。

その「童子」のまるで西洋貴族のような風変わりな出で立ちを不思議に思うも、「童子」の装束にはバリエーションがある。その内のひとつだろうと斬鬼も威吹鬼も深くは考えなかった。

なにしろその「童子」の足下には、傷ついた女性が倒れている。赤のビジネススーツの上に白衣を纏っていることから、どこかの科学者だろうか。

なんにせよ無力な人間を魔化魍の餌になどさせる訳にはいかない。不気味な薄い笑みを浮かべるその「童子」を前に、斬鬼は、威吹鬼は各々変身具を取り出して身構えた。

## キバの世界

(翔一が……死んだ……)

病院の中庭のベンチで一人、遙は脱力して座り込み、事の衝撃に飽和していた。

糸矢もどこかに行ってしまったが、きつと似たような状態だろう。いずれにしる他のことになど構ってはいられない。遙は両掌で顔を、頭を抱え込んでうずくまった。

なにしろ、ほんのついさつき最後の最後に戯けたことを叫んだ翔一に置き土産を残してきたばかりなのだ。

それなのに、彼が世界ごと消滅してしまったなど、さっきの今のことなどとはあまりにも残酷過ぎる事実だ。

消滅を直接見た訳でもなく、瞳子から伝え聞いたただだから実感がいまいち伴わない。

が、余所の世界にも異次元同位体という同じ自分を持つ瞳子が言うのだから、その瞳子があれほど狂乱していたのだから、そこはやはり疑うべくもないことなのだ。

(……翔一……翔一！)

膝の上で組んだ拳に額を打ちつける。

自分を痛めつけたところで何が変わるわけでもないことは百も承知だがやり場のないこの憤りを、悲しみを、いったいどこにぶつけばいいのだろう。

どこかの山奥にでも行って、野良モンスターでも手当たり次第駆逐してこようか。

病室で滅茶苦茶暴れた瞳子を思い、それに倣おうかと本気で考えたその時、ぱたぱたと軽い羽撃きが遙の元にやって来た。

『「葬儀屋」どの。』

横目で傍らを見遣ると、そこにはキバツト族がひとり対空していた。羽飾りの形状と紋様から伝達役の兵士であることが分かる。

「……何の用だ？」

正直それどころではなかったが、遙はどうにか意識を職務モードに切り替えて俯いたまま己の髪陰からキバツト族に問いかけた。

「悪いが今は虫の居所が悪い。急ぎでなければあとにしる。」

言葉通り不機嫌に返すが、キバツト族は冷静に用件を続けた。

『火急です。クイーンより、出頭せよ、との御命令を仰せつかつて参りました。』

人間社会の中でのファンガイア族専用の政治機関が収められているいつものビルの指定の階へと遙はやって来た。

キャッスルドランは緊急出勤しているようでビルの高度がその分下がっている。

やがてたどり着いた豪華な木製の扉の前で立ち止まり、姿勢を正し



て改めて気を引き締めると遙は扉をノックした。

「クイーン。「葬儀屋」であります。」

「お入りなさい」

「失礼致します。」

気高い明朗な女性の声に遙は畏まって扉を開き入室した。

中はクイーン専用の執務室だけあって、キング・渡に並ぶ重厚で豪華な調度が均整の取れた配置で置かれている。

クイーン直属の部下である遙はその中を慣れた様子ですたすたと進んでいった。

いつもの位置で立ち止まり、一礼する。

「「葬儀屋」。ただ今参りました。」

「ご苦労。」

デスクの向こうで人間態で立つクイーンはにこりともせず挨拶に応えた。

「キングの御命令で、異世界に赴いていたとか。」

「はっ。」

クイーンの問いに畏まって応える。

キング・渡は出身が出身だけに他の者がいない環境では非常に気さくな態度で接し、気安い対話を許す寛容さがあるが、クイーンはそうはいかない。

「異世界において、掟破りの裏切り者の処刑を遂行しておりました。先ほど帰還したところであります。」

「そう。」

「キングが不在でしたので、お戻り次第併せて御報告しようと考えておりました。」

「それは別にいい。」

特に報告のタイミングについて拘りのないことを告げながら、クイーンはゆったりとデスクを回り込んできた。

ならばいったい何の用件なのか。遙は微動だにせずに胸中で訝しんだ。

「お前は異世界を見てきたのだろうか？　そこはどのような場所だった。大きな異常があるのか？」

「いえ。我々の世界となんら変わりはありません。ただしファンガイア族は存在してはならず、人間種族のみが世界に繁栄し、その中に人類を脅かす脅威が存在していました。」

「それは人間にとつては大変なことなのだろうか？」

「いえ、人間の中にもその脅威に対抗できる能力を持った者が稀にいるようです。彼らの活躍により、人類は守られています。」

淀みなく質問に答えながら、遙の疑念はいまだ解消されなのまま。

クイーンともあるう方が、ただ世間話の為にわざわざ自分を呼びつけたのだろうか……？

「そうか。なるほど。」

その疑念の原因のひとつが、この言う程に内容に興味のなさそうなクイーンの状態。

果たして、本来の用件とはいったい何なのだろう。

「その異世界の脅威に、我らの秘術は通じたのだろうか？」

「はい。ただ、「マカモー」のように、中には特殊な条件でないと受け付けない脅威も存在するようです。」

「ふむ。それはたいした問題ではないな。滅ぼせなくとも、捕らえて閉じこめてしまえばよい。ふむ。」

相変わらず会話の要に見当が付かず困惑する遙。

だが、次の瞬間その懸念がとうとう正体を現した。

「なるほど。異世界を我らファンガイアの領地とするのに問題はなさそうだな。」

「く、クイーン！？　恐れながら、」

遙は慌てふためいて僅かに前のめりになった。

「それはいったいどういう！？　我々は人間との共存を目指しております！　なにゆえ他領地への侵略など……！？」

「それがお前の答えか」

狼狽えた言葉の途中でこちらを見据えたクイーンの瞳の冷たさに、

遙は思わず身を竦ませた。それが、今まで見たことのない目だったから。だから、クイーンが左掌をかざす動作に対し一切の反応ができなかった。

腹部に灼熱の熱さを感じた遙は、下半身の感覚を失ってその場に仰向けに倒れ込んだ。

腹に黒く焦げた大穴が空いていることを、腹筋を失ったせいで自ら上体を起こして確認することもできない。

「……………え……………？」

翔一の死という内心の同様が渦巻いていたせいでもある。

気もそぞろな状態ではクイーンの不意打ちには対抗できない。

(……………なぜ……………?)

いずれにせよ、悲しみと、憤りと、怪訝と、困惑と、疑念と、あらゆる感情に翻弄され飽和していた遙では、クイーンの突然の致命の一撃に対処できる道理はなかった。

(……………な……………ん、で……………?)

己に身に起きた事の原因に見当がつかないまま、葵　遙の意識は闇に落ちて消滅した。

左手の紋章からの波動の一撃で「葬儀屋」を始末したクイーンは、部屋の奥を遮る美しい装飾を施されたパーテーションの方を見遣った。

「デイケイドの仲間とやらと同行していた者は始末した。」

「ふむ。異世界に行っていたのがキングでなくて良かった、と言ったところであるな。」

応えて奥から鷹揚に歩み出てきたのは、白のスーツを纏った壮年の男だった。

その男は感慨もなく腹に穴を開けて事切れている遙の死体を見下ろすと、クイーンに向き直って続けた。

「有り得んと思うが、時期が来るまで情報の漏洩にだけは気を付け

るのだ。いらぬ邪魔が入っては困るのでな。」

「分かってる。」

クインの返答に鷹揚にうなずくと、白スーツの男は身を翻して元来た部屋の奥の方へと立ち去っていった。

「また来る。準備を怠るなよ。」

そう言つて、この大シヨツカーの大首領を自称する男・ガイはこの世界から姿を消していった。

track・65 訃音を奏でるサファイレット（後書き）

前回のサブタイトルの答え： 『track・64 遊びは終わりだ』

デイシエッドの本気の介入を示すサブタイトルでした。

そして異世界に侵入した脅威と仮面ライダーは元に戻りつつあるのにちっとも状況が良くなっているように見えない昨今です。

異世界間を渡る脅威は複数あるのにデイレイドは単騎で立ち向かわなくてはならない。

瞳子がかつての戦いで消耗し、唯一の同志と思しきデイケイド一行は、タイミング的には今頃シンケンジャーの世界で大童になっていることでしょう。デイケイドのデータリンクが破損しているので救援を頼むことも危機を知らせることもできない。

そして本筋に現れた大シヨッカーの大幹部・ガイ。ファンガイアのクイーンとの絡みは原作における「ライダー大戦の世界」への伏線ですな。

デイケイドの結末に至る裏側で何が起きていたのか。 鉄槻の妄想に、もうしばしお付き合い願いたい。

響鬼の世界

山中の峡谷を望む崖にやって来たデイレイドは、覗き込んだ谷底に異なる時間流を察知し、取り出したカレイドブレイドの刀身の溝に描かれているカブトのライダーズクレストに指先で触れた。

《カブト!》

認証の音声と共に、刀身にはめ込まれているデイレイフォンのデイスプレイにもカブトのマークが表示された。

続いてベルトを掴んで振り払い回転させると、同期して回転した胸郭のカードの欠片が、ベルトの正面に左右に寸詰まりになったカブトゼクターが停止したのに合わせて胸の中央に「カブト・ハイパーフォーム」の絵柄をそらえた。

《カレイドカメンライドウ・ハイパー!》

これにより仮面ライダー カブト・ハイパーフォームの特性を得たデイレイド・カレイドフォームは、ノーモーションでクロックアップを発動し加速空間に突入すると谷底へ飛び降りていった。

峡谷の底では、ザ斬鬼によって呼び寄せられた大量のワーム・サナギ体を各務 新の変身する仮面ライダー ガタツク、台場 和馬の変身する仮面ライダー クライプの三人がかりで薙ぎ倒していた。ザ斬鬼は、斬鬼に擬態したワームで、その能力はボスクラス。

そのザ斬鬼が、呼び寄せたワームどもに「羽化」を禁じている為に一方的にクロックアップできるガタツクの掃討作業は容易なものだったが、稀にボスの命令を無視して脱皮するものが多数現れだした。

そいつらは、ただのワームではない。この世界に蠢く脅威「魔化魍」に擬態したワームは、異なる特性を得たせいかわボスの命令を受け付

けなくなっていたのだ。

だから今、漆黒のウカワームであるザ斬鬼と、キャストオフしてライダーフォームとなったガタツクとクライプは加速空間で動き回るワーム・成体と魔化魍のデュアルビーイングに対抗していた。

『くそっ!？ 「マカモー」に混ざられたら倒せないじゃないか!』

『ふん、もう泣き言か? 若造』

ガタツクの悲鳴をザ斬鬼が嘲笑う。

だが音撃道の鬼に擬態したとはいえ変身具も音撃武器も持たぬザ斬鬼も条件は同じであり、襲い来るデュアルビーイングを殴り倒すことはできても滅ぼすには至らない。

『となると、ここはわたしの出番だな。』

ずずいと進み出てきたクライプの得意げな物言いに、ガタツクは慌てて回れ右して駆け出した。

『ほう。なかなか良い逃げ足だな各務。』

『うるせえばかー! 「破壊音波」なんか仲間のいるところでブチかますんじゃねえー!』

クライプのチャージアップアタック「ライダーソニック」は特有の波形の音波を撒き散らして分子間の結合すら破壊する見境のない攻撃。

現状唯一、相手がなんであろうと一切合切構わずに無に帰す必殺兵器なのだ。

『だが場所を考える。ここは谷底だぞ。またいつぞやのように生き埋めになるつもりか?』

そうは言いながらも同様に遠くへ避難したザ斬鬼がクライプに忠告する。

デイレイドが介入した時も、それで危機に陥ったのだ。

『うむ。だから、早く崖の上まで待避するがいい。む。ちょっと待て。』

迫るワーム成体と魔化魍のデュアルビーイングにも構わず掌を差し出したクライプは、しばしあらぬ方を見上げた。

「おーい！ 台場さん何やってんだー！？ 混ぜモンがそっち行つたぞー！？」

「お前たち。伏せろ。」  
ガタツクの警告も無視してクライプはそう言うなり やおら屈み込んだ。

「は？」

怪訝に聞き返すガタツク聴覚にその時クライプのさらに向こうから音声が聞こえてきたのに気付いた。

《ファイナルアタックライドウ・カレイド！》

そして突然この谷底に現れた謎のマスクライダーが、胸郭の模様とベルトを高速回転させながら駆け込んできて、続く跳び蹴りで全てのデュアルビーイングも無数のワームも一切合切纏めて吹き飛ばしていった。

なお、クライプに呼びかける為に口元に両掌を立てた体勢で立っていたガタツクも、すぐ脇をかすめたその威力にちよつとだけ肩口を引っかけられて吹き飛んだ。

「……まさか、カードのコレクションの為に異世界を廻ってきたんじゃないだろうな」

「うむ。四人目だ。」

聞き慣れた文句を言う新に素っ気なく告げ、ディレイドは変身を解除し人間の姿になった三人に向き直った。

「ともあれ、これからお前たちを元の世界に帰す。この世界に侵入したワームと共にな。」

「俺もか？」

「お前もだ。」

ザ斬鬼の問いにもディレイドは淀みなく応えた。

「そうか。……俺はワームの世界の住人なものな」

どこか物悲しげに呟いて顔を伏せるザ斬鬼に、新も複雑な顔になった。



新としても、これまでの戦いの中で最早否定できない信頼関係を覚えていたのだ。個人的にザ斬鬼の記憶の故郷であるこの世界に残せないのか、頭を抱えて考え込んだ。

「おい。お前が悩むことがあるか。用は済んだんだ。宇宙の安定の為に、とつとと帰らねばならんのだぞ。」

「でも！」

呆気なく思考を見透かされた新がザ斬鬼を振り向いた。

「でも、あんたの住み慣れた世界はここなんだろ！？　なあ透、

どうにかなんないのかよ！？」

『ならん。』

デイレイドの返事はにべもない。

「余計なことを抜かすな青二才が。この世界に残ったところで、本物の斬鬼がいる以上この俺に居場所などない。どっちの世界に行っても同じことだ。それにお前。自分の使命を忘れちゃいないだらうな」

泣きそうな顔で立ち尽くす新に、ザ斬鬼は厳しい調子で続けた。

本来はワームであるはずの自分の事まで気にかける、この優しい若者の成長と未来の為に。

「お前は、仮面ライダーなんだろう？　いずれはこの俺を倒さねばならない。そんなザマで世界を守れるかッ！」

「……！？」

一喝を受け、悄然とうなだれる新から目を外し、ザ斬鬼はデイレイドに向き直った。

「透、やってくれ。」

『うむ。状況は切迫している。行くぞ』

行くと、デイレイドの背からドット柄のノイズが翼のように吹き出し、剣を一振りすると四人の姿はこの世界から消え去った。

おでん屋「天堂屋」に程近い神社の境内に立つ天堂 総司と台場  
和馬の目の前に突如輝きが現れると、その跡には三人の人影が立っ  
ていた。

「ほら。帰ってきただろう？」

「……だから、こういう異常事態をほいほい予見するな。」

現れたデイレイドらを指さして言う台場に、総司は額を押さえてが  
つくりとうなだれた。

「あれ？ 台場さんの分身がいねえ！？」

「うむ。本体がここにいるのだ。デイレイドがこの宇宙領域に入っ  
た時点で消失したわ。」

後ろを振り向いて喫驚している新に、台場が己の胸を突いて注釈を  
告げた。

「それから新。こちらのお嬢さんも入院している。未だに意識が戻  
らん。」

「なんだって！？ おい！？」

それを聞いた新が慌てて横のデイレイドに呼びかけた。

「どうなってるんだよ！？ お前の手伝いなんだろう！？ 大丈夫なの  
かよ！？」

『ただひどく消耗しているだけだ。安静に休養させればいずれ回復  
する。』

新の剣幕にも構わず、素っ気なく告げるとデイレイドは僅かに歩き  
全員から距離を取った。

『総司。これからこの世界に侵入したイマジンを全て元の世界に連  
れ戻す。それで全ての異常は消滅する。』  
それから総司に向けて説明を続ける。

『悪いが、時間線に突入したら、そのまま美穂らはアリアライナー  
ごと元の世界に連れ戻す。別れの挨拶の時間もないが、なにか伝え  
ることはあるか？』

「……なんか人が変わったみたいに気を遣うようになったな」

むしろ透の人格変貌に呆然として呟く総司。

「いや。世話になったと伝えてくれ。その前に、そのそいつは誰だ？異世界に行ったのは各務と台場の二人だけだろ？」

その総司の言葉に、ザ斬鬼は鷹揚に腕組みしたまま身動きひとつしなかつたが、新だけが挙動不審になり露骨に狼狽えていた。

『元・この世界の住人だ。そしてこの世界の中の問題でもある。』  
ディレイドが連れ帰った見知らぬ第三者、というだけで総司には既に見当がついていた。

「……まあいい。こっちはあとで詳しく訊いておく。透は行つてくれ。」

『分かった。ではな。世話になった。』

言つて、再び背中からドット柄のノイズの翼を吹き出したディレイドは、剣の一振りと共に姿を消した。

気持ち悪そうな顔の総司のリアクションにも一切構わずに。

「……何があつたんだあの男は……」

「俺も不思議でさ。」

総司の呻きに新が同意してきた。

そしてやおら顔を見合わせると、同時にザ斬鬼の方に顔を向けた。

「さて。きつちり説明してもらおうか。」

「……お、おう。」

## 電王の世界

虹色の空の下に広がる岩と砂ばかりの荒野を、一本の列車が自ら線路を敷設・撤去しながら走り抜けていた。

水色の流線型のフロントノーズがさながら流水を思わせる時の列車

「アリアライナー」。

「カプトの世界」に侵入したイメージの対処に当たっていたアリアライナーの面々は、突如運転席に現れたディレイドの操作によって、

いま列車ごと元の世界に帰還しているところだった。

「いやー、クロックアップしたイメージで、厄介って言うかひどいって言うか、ひどいねー。」

「ひどいんだ。」

ソファに寝転がって朗らかに苦勞を謳う美穂に、対面に座る秋乃が半眼でうなずいた。

『もーイヤよあんなの相手にすんの！なにあの速さ。反則よ！』  
同様にレイラもテーブルに突っ伏してぼやいている。

「まあ確かに、天堂がいなかったら私たちだけじゃまずいことになつてたわね。」

「総司くん格好良かったよね。」

口元に手を遣り呟いた秋乃の前で、美穂がテーブルに載せた顔を潰れた饅頭のように弛緩させた。

「なに暢気なこと言ってるの。ほとんど丸投げにしておいて。」

ワームが擬態したイメージは、契約による時間遡航を可能にしながら過去の世界でもクロックアップは健在だった。

なので美穂らも有事の際にはオーナーの特別権限によって天堂 総司を同行させ、アーリアとカブトのコンビネーションで事件を解決していたのだ。

だが、当然クロックアップを持たぬアーリアではワームとイメージのデュアルビーイングには対処できず、追い詰める作戦のほとんどをカブトが行っていたのだ。

「タキオン粒子変換エネルギーがイメージにも効果があつて良かった、といったところだわね。今回は。」

奥の豪華な専用ソファに腰掛けた美女・オーナーが気だるげかつ妖艶に呟き付け足した。

「だのに、ねえディレイド？ お別れの挨拶もできないだなんて、あんまりじゃない？」

天井を振り仰いで宣ったオーナーの言葉に、車内通信でディレイドが応えてきた。

『先ほども言った。状況は切迫している。』

「イイ男はあ。もつと余裕を持って振る舞うべきよお？」

『先ほども言った。状況は切迫している。』

戯れの冗句に全く同じ言葉を返され、オーナーは不機嫌に唇をへの字に歪めた。

「あー！あつちの瞳子にも挨拶もしてないじゃん。」

「まあ、昏睡状態のまま、私らが出発する時にうまく目覚めてくれたかも分からないけど。」

跳ね起きた美穂が、秋乃の言葉で再びへなへたと沈没していった。

「あゝ。そーだよね。……ねえ透くん。うちの世界の瞳子は元気かな？」

また跳ね起きて問うた言葉に、車内通信が応えた。

『いいや。俺の内部の接続ステータスでしか判断できないが、未だにブラックアウトしている。すなわち昏倒している。』

「……ちよつと、透くん。なにそれ。どういうこと？」

ディレイドの発言に、秋乃が突然立ち上がって問いかけた。

「確か、瞳子は全部で十の世界に存在してて、全部があんたの手伝いをしてるって言ったわよね！？」

『ああ。』

秋乃の言葉には怒気がこもっている。よくない兆候だ。

それなのに透の応えは実に平淡で、秋乃に油を注いでいる。

「もしかして、よその世界の瞳子も実は全員倒れてんじゃないでしょうかね！？」

『その通りだ。ただし、昏倒の深度は各個体によって異なる。』

「あんたいったい何やらかしたのよっ！？」

どかんと床を踏みつけて秋乃がとうとう怒鳴りつけた。

『ある世界で最大出力が必要な事件があった。その為に全ての瞳子の中の緊急プログラムをフルドライブさせた。だが、命に別状はない。俺としても瞳子を死なせないことを最低限度に設定している。』

「当たり前よっ！？」

どすんとソファに腰を落とす秋乃に、対面の美穂はテーブルの端にしがみついて怯えていた。

透と瞳子の間になにがあつて今に至るのかは良くは知らないが、瞳子は透を信頼しているようだし、透が瞳子のことを一方的に道具扱いしているとも思えない。その位は信じたかった。

ともあれ、怒った秋乃は怖いので、美穂は話題の転換を試みた。

「あー。ねえねえ？そしたらさ、初ちゃんは元気かな？透くん、初ちゃんがどうなってるか知らない？」

努めて朗らかに問いかけた。

みんなの可愛い妹分だった初の現状でも聞けば、それはそれは和むに違いない。

そう思つてわくわくしながら返事を待っているのだが、なぜかスピ

ーカーからは声がしない。

「……透くん？今の聞いてた？」

「ああ。聞こえていたぞ。」

「初ちゃんはどうか？いま元気かな。」

「……。」

聞こえた。

今度ははつきりと沈黙が聞こえた。

「……。」

秋乃が、怒りと困惑に満ち溢れたどす黒い形相で前方を睨み据えた。

「……。」

美穂が、わなわなと唇を震わせながら、身を起こし、今にも泣きそうな青い顔で進行方向をゆっくりと振り向いた。

「……。」

レイラが、全くの無表情でテーブルから身を起こした。

オーナーの顔からも表情が消え失せた。

「……ディレイド。状況が切迫していると言つたな」

ソファに寝そべって片肘を突いている状態のままだが、かつての事件でも聞いたことがない程の静謐な怒りに満ちた、低い声音でオナーが問いかけた。

「それは、どう切迫している？」

『宇宙がひとつ消滅した。』  
もう充分だった。

「初の現状が言えない状態であること」、「宇宙がひとつ消滅したこと」、「この二つを掛け合わせれば、出てくる答えはひとつしかない。秋乃が、美穂が、レイラが立ち上がり前方車両へのドアにけたたましく殺到した。

数台の車両を越えコックピットルームのスライドドアが自動で開くのも待たずに押し開けると、トータルコントロールであるマシンアリアードに跨るデイレイドの左右にそれぞれが詰め寄った。

「透くん！ どういうこと！？」

「ねえ！？ うそだよねえ！？ ねえ！ うそだよねえっ！」

美穂がデイレイドの腕に掴みかかり、アリアライナーの進路が小刻みに蛇行した。

「ねえ！？ 透くん！？ うそなんですよお！？」

涙でぐしゃぐしゃになった美穂の訴えにも、デイレイドは黙したまま、まっすぐデイレイドを見つめている。

「……誰よ。」

泣き崩れる美穂とは対照的にぎらぎらとした怒りを立ち上らせて秋乃が声を絞り出した。

「どこのどいつよ！？ 誰がいったいそんなことをしたのよ！？」

「言いなさい！」

烈火のごとき形相で詰問するも、やはりデイレイドは応えなかった。「あんた、ただの人間と思ってナメてんの！？ 敵わなくても暴力に訴えたくなる時だってあんのよ！？ 言え！ 言いなさい！ ……」

「言え、言って、よお………」

同様に片腕を取って要求する秋乃の声から、顔から力が抜け落ち、

やがて嗚咽に変わっていった。

「失礼致します。」

いつの間にか、コックピットルームの入り口にメイドが、竹中が沈鬱に面を伏せ、両手と踵を揃えて立っていた。

「美穂さま。秋乃さま。運転の妨げになり大変危険です。どうか、食堂車にお戻りください。」

「あ……」

「たけなか、さん……」

デイレイドの左右に崩折れる秋乃が、美穂がそれぞれ竹中を見遣った。

「もう、お気付きかと思われませんが。以前はあれほど感情に乏しかった透さまが、情報を選別して黙秘しています。それは、透さまにおいては相当なお気遣いかと思われませんが、いかがでしょう？」

「……あ……」

まるで冷や水を被せられたような心地だった。

さながらコンピュータのような融通の利かない透であったが、今は不器用ながらも伏せるべき情報だけを選んで伏せてくれていたのだと竹中の言葉で気付かされた。

「……とおる、くん」

『99%の確率でデイシエッドだ。』

横顔を見つめる美穂に、デイレイドが唐突に語り出した。

『かつて初をこの世界に連れ込んだ張本人で、元の世界に帰還した初をもう一度連れ出したのだから。デイシエッドは、俺やデイケイドと同種の存在で、俺でなければ対抗することができない。』

そのマスクは相変わらず前だけを見つめていたが、なぜだろう、美穂は、デイレイドの語る言葉にかつてよりも感情がこもっていると感じた。怒りによる静謐な激情を。

『俺の使命は宇宙の接触崩壊を回避させることだ。だが、その使命とは関係なく俺はデイシエッドを破壊する。理不尽な攻撃を以て完膚なきまでに破壊する。』



「…………透くん…………」

もはや美穂も秋乃も、床に崩折れ泣き暮れている。

運転の妨げにならないと判断したのだろう。入り口に控えている竹中も、これ以上なにも言わずに立っている。

それからアリアライナーは、幾度か警笛を鳴らしつつも、それ以降は静かに航行していった。

ブレイドの世界

現れたデュアルビーイングは、アンデッドの不死性とオルフェノクの永遠とも言える恒久性が融合し、いくら攻撃しても決して倒れぬどころか揺らぐことすらない強靱なモンスターへと変貌していた。そのデュアルビーイングの両腕のひと薙ぎでブレイドとギャレンが、レンゲルとカイザが吹き飛ばされた。

『っわあああああ！？』

近くの朽ちかけたプレハブの壁を砕いてブレイドとギャレンが飛び込んでゆく。

反対側のコンクリート壁にレンゲルが激突し、その上に宙返りしたカイザが足から着地した。

『おげえっ！？』

『はっ！ この程度でこのわしが倒せるか！ ぬんっ！』

『ぶげえっ！？』

そしてレンゲルの腹を足蹴にして再び飛びかかってゆく。反動でレンゲルからはカエルが潰れるような苦鳴が聞こえた気がしたが誰も構わない。

『おどりゃあああああ！』

『ばかやる！相模原、ムチャすんな！』

レンゲルをカタパルトにして跳躍したカイザの身体は砲弾の勢いで水平に飛翔し、ブレイドの制止も聞かずにデュアルビーイング目掛けて突撃してゆく。

両腕を大きく広げて待ち構えるデュアルビーイング。

そして今まさにカイザと激突せんとするその瞬間。

突如現れた激しい閃光が両者を包み込み甚大な爆発が巻き起こった。

『なにことだあ！？』

『相模原……っ!?』

ギヤレンの、ブレイドの喫驚と絶叫が爆発の轟音に紛れて掻き消えた。

やがて光と爆煙が収まったそこには、消え去ったデュアルビーイングの異形の代わりにディレイド・カレイドフォームだけが立っており、その足下のアスファルトにカイザ型の穴が空いていたのみだった。

『……あ?』

ブレイドの怪訝な呻き声が漏れる。

現れたディレイドは、ふと今気付いたように足下のカイザ型の穴の縁に跪くと、その穴の中に片手を突っ込んだ。

『おい。次元間跳躍の着地点にいと危ないぞ。』

『いや……お前、その言い種はあんまり……』

片手をひらひらと差し出したブレイドの言葉は届かなかったようで、やがてディレイドはその穴の中からカイザを逆さ吊りに引き摺り出した。

『おい。聞こえているのか。』

掴んだ足首をぶらぶらと揺するも、カイザは完全に脱力したように垂れ下がった両腕をゆらゆらと揺らした。どうやら気を失っているらしい。

デュアルビーイングが跡も残さずに消滅するほどの威力の爆心地にいて気絶で済んでいる相模原のバイタリテイに、残りの一同は改めて呆れ半分に感心していた。

「透っ! すまんっ!」

町外れの路地裏で。

変身を解除した剣立 一真がいきなりディレイドの前で土下座した。「初ちゃんを見失った! 瞳子に任せきりだったんだが、あいつが突然倒れてから初への対処が疎かになったのは俺の責任だ! 方々を探し回ったんだが、もうアンデッドサーチャーにも引っかからな

いんだ！ すまんっ！」

一真は地面に額をぶつける勢いで頭を下げていた。そしてその背後に立つ菱形 朔也と黒葉 睦月はなぜか顔中ぼっこぼこの痣だらけになっていた。

有り体に言つて、滅茶苦茶に殴られないところという顔にはなるまい。「最初はこいつらを疑ったんだが、誰かが初ちゃんを封印した訳でもないらしい。……なあ透。初ちゃんの行方を探せないか？」

『……』

背後の二人からのものすつごい不機嫌な怨嗟のオーラにも構わず懇願する一真に対し、デイレイドは黙したままなかなか口を開かなかつた。

「……まあ、そうだよな。怒ってるよな。恭也にもさんざん念を押されて、瞳子があんなに頑張つて初の立場を守つたつてのにこの体たらくじゃあな……」

悄然とうなだれる一真だが、デイレイドがあまりにも長く沈黙しているのをさすがに不自然に感じ顔を上げた。

「どうした透？ 怒ってくれていいんだぞ？」

『……いや。お前が責任を感じる必要はない。初をさらつたのはデイレイドなのだから。』

「なっ!？」

「げ!？」

一真に続き、後ろの二人も呻き声をあげた。

『もしその現場にお前たちの誰かが居合わせたとしても、恐らく初を拉致された上で死体がいくつか出来上がつていただけだろう。』

むしろ、お前たちが生き残ってくれたことが僥倖だ。』

首を振つて労うように告げるデイレイドを、一真も後ろの二人も不思議なものでも見るような目で見ていた。

『一度は敗北したが、目的の完全拡張ツールを手に入れた今、デイレイドは俺が必ず破壊する。任せておけ。』

「……お、おお。」

「て、言うかあ」

透の人が変わったような発言に呆然と返事する一真の脇を抜け、睦月が不機嫌な顔の黒縁メガネの位置を直しながらずかずかとディレイド・カレイドフォームの目の前まで歩み出てきた。

そして無遠慮にその胸郭を撫でてしげしげと覗き込み眺め回した。

「これ何のカードゲームですか？見たことないカードばかりだし。

「いーなー。うらやましーなー。ちょっと、これ僕の持つてるカードと交換しません？僕も結構レアなカード持ってますから」

ねちっこくディレイドの胸郭に埋め込まれたカードを眺め回した睦月は若干息を荒げながら、アニメ調のイラストが描かれた自らのカードファイルを取り出して広げて見せた。

「うむ。お前で五人目だ。その上一番の重症と見た。」

必死にトレードを要求する睦月の背後に温い目つきをした一真が滑るように接近し、背中から脾臓と延髄に的確に拳を埋め込んで昏倒させると菱形に投げ渡した。

「……菱形さん、そいつ埋めといてください。で、透。もう宇宙のことはお前に任せるしかないが、頼む。ディシエッドを倒して、初ちゃんを取り戻してくれ。」

「ああ。任せておけ。」

請け負ったディレイド・カレイドフォームはうなずいてから数歩下がると、カイザの足首を掴み上げ、背中からドット柄のノイズを翼のように吹き出した。

「これで、俺が消えると同時にこの世界に侵入した全てのオルフェノクは消滅する。一体の取りこぼしもないから安心しろ。」

「ああ。分かった。」

「ではな。世話になった。」

「……ずいぶん気が利くようになったよな。お前。」

「……。」

最後には応えずに、ディレイドとカイザの姿は掻き消えていった。

気遣いができるようになった、か。

会う者会う者皆に言われたその評価に、透は胸中でひとりごちた。だがなぜか、一真に対しては初を奪われたことで宇宙がひとつ消滅したことを言えなかった。

デイレイドの中の瞳子の思考形態が、それを言うなと言っていたのだ。

それがどういふことなのか、透は完全に理解はしていなかったが、これで良かったのだと考えている領域の判断に思考を委ね、今の会話の記録を内部領域の指定の場所にファイリングした。

## ファイズの世界

そして辿り着いた九番目の世界は、一面が火の海に包まれていた。

「な、なんじゃあこりゃあああ!？」

前に駆け出た相模原が、辺りを見回して絶叫した。

建物という建物が全て倒壊し火達磨になっている為、ここが街のどこなのかも分からない。

まるで資料映像で見せられた、第二次世界大戦中の東京大空襲でも見ているようだった。

見渡す限り、遠くどこまでもが燃え盛る炎に包まれているのだ。

逃げ惑う人の姿もない。既に避難したのならいいが、その瓦礫の下に動かぬ人の腕を発見し相模原は唇をきつく噛んだ。

「おい先公!こいつはどういふことじゃ!? なんでわしらの世界がこんな有様になつとるんじゃ!？」

「敵の仕業だな。」

「ンなこた分かつとる! けどなんぼ異世界の化け物でもこんないきなり街ごと火達磨にできる奴がおるんかい!？」

相模原の詰問には応えず、デイレイドは街の彼方を指さした。

そちらには、街の瓦礫の向こうを徘徊する、ビル程もありそうな巨

大なモンスターがのしり、のしりと火の海を歩いてた。  
それが、見渡す限り無数に存在しているのだ。

『ヘキサビーイング……』  
ぼつりとディレイドが呟いた。

六種混合体。滅んだグロンギと消滅したアギトの世界のアンノウンを除く全ての世界の脅威が混ざり合ったモンスターだと一目見た瞬間に看破した。

そんなことができる者は。

『いぎやーっはっはっはっはあ！まあ壊されに來たかよディレイド！粉微塵にしてやったのにどうやって復元しやがった！？』

『パートナー設定のバックアップを使用したただけだが？』

燃え盛る紅蓮の炎の中から黒い人影を引き摺って現れた、横線で構成された装甲を纏う灰色の悪魔・ディシエッドに、ディレイドは淡々と返答した。

そのディシエッドが引き摺っているものが半壊したファイズだと気づき相模原は愕然とした。

「……おい、巧い、貴様あ！」

『は！これから滅ぼす原住民と慣れ合ってどうすんだよ。パートナー設定なんざあ一番いらねえ機能だろうがよ！』

相模原の絶叫には構わず、ディシエッドは壊れたファイズの身体をばいと放り捨てた。

『だが、おかげで俺は活動体を復元できた。』

『だからどうした。またすぐぶっ壊してやんよ！』

「ほざいてる貴様あああああ！」

無視されることに耐えかねた相模原が、腰にベルトを巻き付け携帯電話を操作しながらディシエッド目掛けて駆け出した。

《スタンディングバイ。》

『待て！相模原！』

「待たれんわ！変身！」

《コンプリート。》

迅速にトランスジェネレーターにカイザフォンを接続させてカイザに変身した相模原は、手前で大きく跳躍し拳を振りかぶってディシエッドに踊りかかった。

『どおりやあああああああ！』

『……うるせえな原住民が』

眼前まで迫られてようやく反応を見せたディシエッドは、まるで蠅でも追い払うように手を振ると、途端にカイザの目の前に銀のオーロラが舞い降り立ち塞いだ。

カイザは構わずに打ち砕く気満々の様子だったが、ディシエッドが呼び出したそれは小規模な世界境界線。物理的に干渉できる代物ではない。

思った通り界面に弾き返されたカイザだったが、激突し仰け反った瞬間にオーロラの向こうから伸ばしたディシエッドの手がカイザの首を掴み止めた。

『あっち行つてろ』

言つて、掴んだカイザをオーロラに引き込むと、オーロラを境にディシエッドの手からカイザの姿が掻き消えてしまった。

『……さて。イカレたシステムはここでもつかいぶつ壊しておくか。』

『破壊されるのはお前だディシエッド。』

引き抜いたカレイドブレイドを振り払い、ディレイドが一步踏み出した。

『は！ずいぶんやる気になったみてえじゃねえか。前よりやちつたあ保つんだらうな？』

ディシエッドも、そろ長いアサルトライフルのようなディシエッドライバーを抜き出して威嚇的に身構えた。

『あああああああああ！？』

その時、燃え盛る街外れの方に空の彼方からカイザが真つ逆様に落下してゆくのが見えた。

ディシエッドがオーロラを利用して、カイザを上空はるか高くへ放



り込んだ結果だろう。

だがこうしてデイシエッドと対峙している今、他者のフォローに回れる隙はない。

炎で埋め尽くされた瓦礫の海の中、武器を構えたデイレイドとデイシエッドが、じりじりと互いに機を伺いにじり寄った。

『そついや世界を救うとか寝呆けたこと又かしてやがったな。どうすんだ？もうじきこの世界も消滅するぜ？』

その間、デイシエッドが己の後方を親指で指し示して嘯いた。

事実、街中を歩き回る無数の六種混合体へキサビーイングを放つておいては、いずれこの世界は滅びてしまっだろう。

『問題ない。お前とまとめて殲滅する。』

『ナメたクチ利いてんじゃねえぞゴラア！！』

その途端、激昂したデイシエッドライバーが立て続けに火を噴いた。それに対しデイレイドは、カレイドブレイドを眼前で一閃させると手のひら程の小さなオーロラをいくつも出現させ、飛来する光弾は全てそのオーロラに吸い込まれて消えどこぞの宇宙へと放逐された。その間にデイレイドは迅速にデイシエッドに迫りカレイドブレイドを振り下ろした。

『チツ！なるほどな！デイエンドが打ち込んだアンカーを回収して完全拡張しやがったか！』

『そつだ。今の俺は機能を完全な形に完成させた。』

苦し紛れにデイシエッドが己の目の前に展開したオーロラを紙のよつに斬り裂きながらデイレイドはなおもデイシエッドに迫る。

> i 1 0 8 7 7 — 5 3 8 <

『そして世界救済の使命のほかには用件ができた』

『あ？』

カレイドブレイドとアサルトライフルが幾度も激突する中、デイレイドらしからぬ発言にデイシエッドが怪訝に声をあげた。

『これからお前に理不尽な攻撃を大量に加えたのち、完膚なきまでに破壊する。これは世界救済の使命に並ぶ最重要事項だ。』



掻き消えてしまった。

まさしく火事場のなんとやらか、別の宇宙へと待避したらしい。だがデイレイドは全く慌てることなく、辺りを見回すと改めてカレイドブレイドの溝に指を遣り紋章を一直線に撫で、ベルトを掴んで振り払った。

《ファイナルアタックライドウ・カレイド!》

続いて片手のひと振りで見前にカードのヴィジョンを出現させるとそれを叩き斬り、傍らにマシンデイレイダーを召還した。

バイクに跨ったデイレイドはさつさとスロットルを解放して、街を蹂躪するデュアルビーイング目掛けて突進を開始した。

だが、炎と瓦礫に埋め尽くされたこの世界で、あるうことがマシンデイレイダーは虚空を走り出した。

今のデイレイドにはもはや、宇宙の物理などなんの制限にも束縛にもならない。デイレイドの拡張機能たるマシンデイレイダーが、走れと命令されたなら虚空だろうがなんだろうが道になるのだ。

そうして山のような巨体、もとの生物にも該当しない形状のそいつ目掛けて突撃したマシンデイレイダーは、まるでそこがトンネルだと言わんばかりに呆気なく異形の巨体を貫いていった。

たちまち大爆発をおこして消滅するヘキサビーイング。

だが仲間を消されたことに警戒した他のヘキサビーイングがこちらに向き直り、あるものはクロックアップして姿を消し、あるものは過去の仮想領域へ跳び、あるものはミラーワールドに身を潜めた。

無数のヘキサビーイングが各々特殊能力を並列施行して世界をかき乱すが、今のデイレイドにとってはどれもこれも「今さらどうでもいい」こと。

ミラーワールドに飛び込んでそいつを轢き殺し、クロックアップしたそいつと相対速度を合わせて正面から貫き風穴をあけ、過去に追い詰めてそいつの「時間」をゼロ以下に押し潰し、輝ける黄色の流星は「ファイズの世界」を蹂躪するヘキサビーイングのことごとくをそれこそ丹念に蹂躪していった。

やがてこの世界のヘキサビーイングを全滅させると、デイレイドはバイクに跨ったままデイシエッドが逃げた世界へと追跡を開始した。

## 龍騎の世界

『ただあああフザけやがてえええええ!!』

虚空からもんどり打って地面に転落したデイシエッドは迅速に立ち上がると、目的のものを求めて辺りを見回すと、胸を押さえ片足を引き摺りながらそちらへと駆け出していった。

白昼の町中であるにも関わらず、この世界に限っては「仮面ライダー裁判」によつて人型の異形を見慣れた人々にとっては「デイシエッドの姿は驚くに当たらないものだった。

そしてデイシエッドは目的のビルの窓の鏡面に飛び込んでいった。だがさすがにそれを追うようにして現れたバイクに跨った仮面ライダーがバイクごと同じ窓に飛び込んで、ガラスも割らずに消えてしまったことには僅かに何人かが驚いていた。

『おい!てめえ!』

呼びかけられて、そこにいた白痴っぽい少女・神鳥 優衣がおつとりと振り向いた。

ところが、途端に優衣の背後から高層ビルほどもある巨大な何かが起き上がり、デイシエッドを見下ろしてきた。

『ダレにガンたれてんだアホ』

その巨大な何かをデイシエッドライバーの銃撃で呆気なく打ち倒すとデイシエッドは冷たい目つきで睨みつける優衣の細腕を掴み上げた。

『もっかい来い。世界を滅ぼせ』

『却下だ。』

要求を遮る声と同時にデイシエッドの身体が後ろから来たバイクに

撥ね飛ばされた。

『ンガッ！？』

さらに地面を転がったデイシエッドをマシンディレイダーが轢き潰してゆく。

そして同じことを繰り返そうというのか、通過したマシンディレイダーを反転させ、再びデイシエッドの方を向いた。

『ツハア、てめえ、おもしれえよ。どこで覚えたそんな真似』

『……』

ディレイドは応えずにバイクを急発進させた。

が、デイシエッドもドライバを正面に突き出しフルオートで光弾を撒き散らす。

フロントカウルに無数の光弾を受けながらも突進してきたマシンディレイダーはとうとう途中でバランスを崩して転倒した。

『ぎゃっは！ バカを晒せよ！』

喝采を叫ぶデイシエッドだったがそれが見当外れであることをすぐに思い知る。

ディレイドは、マシンディレイダーを横倒しにし、バイクのスライディングで襲いかかってきたのだ。

『うっおお！？』

足下を重量物で打ち払われ宙を舞うデイシエッド。

その真横にディレイドが飛び上がった。

『てめえ！？』

『ふっ。』

そして振り下ろしたカレイドブレイドがデイシエッドの脇腹を抉り「く」の字に折り曲げて激しく打ち飛ばした。

『っがああああああっ！？』

ごろごろと地面を転がるデイシエッドだったが、またその姿を消してしまった。

だが、いくら次元間跳躍で逃げようとも無駄なこと。

かつて語った「ワールドスライドデイシエッドに対抗できるのは自分だけ」というの

は、多くの仮面ライダーと同じように言えること。  
ワールドスライダーに対抗できるのは、同じ能力を持ったワールド  
スライダーだけなのだ。

デイレイドは、デισηェッドを追ってこの宇宙から飛び出していつ  
た。

## 電王の世界

「時の列車」が行き来する砂と荒野の世界に降り立ったデイレイド  
に、デισηェッドは今度はマガジンをドライバーに差し込んで待ち  
受けていた。

『今度こそバラバラになりやがれよ!』

《アサルトカメンライドウ・ライダーキック!》

そしてその銃口の暗闇から仮面ライダー一号、二号、V3を始めと  
する「ライダーキック」を必殺技とするありとあらゆる仮面ライダ  
ーが射出されてきた。

かつて一度、デイレイドの活動体を破壊した攻撃だった。

それを見ても、デイレイドに動揺はない。

刀身の溝をなぞり、ベルトを掴んで振り払うと仮面ライダーの砲撃  
を真正面から待ち受けた。

《ファイナルアタックライドウ・カレイド!》

『はっ! バカかよ! ? いっぺんこれで死んでんだぜ! ? 凶に乗  
つてるよおおお!』

デισηェッドの嘲笑を無視し、デイレイドは仮面ライダーの濁流に  
駆け出すと、先頭の仮面ライダー一号から次々と剣で打ち払い始め  
たのだ。

『んなあああ! ? 』

右に左にと凄まじい速さの剣捌きで次々と飛来するライダーキック  
の弾丸を跳ね返し、前へ、前へと突き進んでゆく。

「ま、待てよ、ば、バカな、バカなああああ!?」

狼狽えるデイシエッドに構わず前進を続けたデイレイドは、やがて剣が届く距離にまで迫るとデイシエッド本人を剣で殴り飛ばした。

「ツガアアアツ!?」

未確定確率の砂を蹴散らして転がったデイシエッドは、迫るデイレイドに対し尻を擦って後退った。

「……ば、バカな、なんなんだよこいつの強さは……」

「予定していた理不尽な攻撃には僅かに足りないが、もういい。」

ゆつたりと歩いて迫るデイレイド・カレイドフォームは、もう一度カレイドブレイドの刀身の溝に指先を遣り、クウガのライダーズクレストから順にマークをなぞっていった。

《クウガ・アギト・リュウキ・ファイズ・ブレイド・ヒビキ・カブト・デンオー・キバ・デイケイド!》

そしてベルトを掴んで振り払い回転させる。

《ファイナルアタックライドウ・カレイド!》

「ここでデイシエッド、お前を完全に破壊する。」

「っぎっ!? ツクツ、て、てめえが、お俺を破壊できるわけっ!

? わけっがっ、くっくそったれがああああああ!」

もはや悪罵を吐くのみで身動きのできなくなったデイシエッド目掛け、剣を振り上げて肉迫したデイレイドは、渾身の力を込めて激しい輝きを纏うカレイドブレイドを振り下ろした。

## ライダー大戦の世界

何者もない固い地面にカレイドブレイドを振り下ろした姿勢で停止していたデイレイド・カレイドフォームは、周囲の光景の変化に気付いて体勢を解き立ち直した。

見上げた空は青く澄み渡り、周りは緑深き山々に囲まれ、ここはどことも知れぬ切り拓かれた無人の土地。

デイレイドの内蔵されたジャイロが宇宙境界線を走査し現在地を測定するが、計測は想定よりも複雑かつ多岐に渡り、やがて計測器はここを「元は別々に存在していた複数の世界が融合しかけている宇宙である」と結論づけた。

データリンクでディケイドの持つ情報に照らし合わせることで判明したこの世界の名は。

『「ライダー大戦の世界」、か。』

デイレイドは、ぽつりと呟いた。

「そーだよ。」

横からの検討結果を肯定する声に振り向くと、無人と思われたこの場所に、離れた位置にある大岩の上にいるのか腰掛けた男の姿が出現していた。

「よっ。ひさしぶり」

こめかみの辺りで翻した右手のピースサインをまるで敬礼のように振ってみせるその男は、おそらく三十は越している年代に見え、経験に裏打ちされた大人の余裕を纏いつつ、かつ愛嬌のある人懐っこい笑顔が人を惹き付ける、実に魅力溢れる男であった。

あくまでも、その見かけは。

この世界に転移したのは、当然デイレイドの意志ではない。

デイレイドは、何者かに強制的にこの場所に転移させられたのだ。誰であろう、この男によって。

『いったい何の用だ。あと一手で使命遂行の最大の障害を排除できるところだったのだが。』

「んん〜？ ばか言っちゃあいけねえよ、お前さん。」

大岩に腰掛けた男は、笑顔のまま目を閉じてひょこひょここと首を振った。



「使命の障害の排除？ はは。おかしいおかしいと思ってたけど、こりゃやっぱし本格的に壊れちゃったんかねえ」

『俺は極めて正常だ。それより俺の質問に答えろ。』  
男の戯けた物言いに否定を返し、デイレイドは再度問いかけてその男の名を呼んだ。

『答えろ。「マスター響鬼」。』

track・67 咎の在り処 槌の行方（後書き）

すっかり逆転したのに惜しいところで見覚えのある誰かさんが見覚えのあることを。

こちら辺、鉄槌の妄想する彼らの正体については、もう見当の付いている方もおられるでしょうか。

参考文献・・・track・54 『track・55』

track・63

さてとうとう状況は「ライダー大戦の世界」に突入してしまいました。

デイケイドひとりで大勢で吊るし上げていた彼らの行為にきちんと屁理屈をつけてあげられると良いのですが。

参考文献・・・track・29 『track・40』

track・64

今回は「デイレイドマスカーカレイド」の世界観の核心を御披露することになるかもしれません。

よろしければお楽しみに加えておいて頂けると幸い。

ライダー大戦の世界

「へいへい。お前を呼び出した用件ね。」

あくまでも暢気な態度で「マスター響鬼」と呼ばれた男は腰掛けていた大岩から尻を滑らせ、数メートルを落下したにも関わらず簡単に着地してみせた。

「んん〜。てえかさ、アレだよ。お前さんさ、最初に俺が言ったこと覚えてる？」

「」

わざとらしく困惑したような顔を作って空々しく問いかけてくるが、「その」反応の接近を感知したディレイドは返答を中断してそちらの方を振り向いた。

「あああああああああああああ！？」

突然すぐその地面にドット柄のノイズと共に苦悶に身を擦る瞳子が出現したのだ。

今回はかりは透はなんの操作もしていない。

さりとて第三者による干渉の気配もない。

その答えは己の内にて即座に判明した。

エラーが発生したのだ。

地面をのたうち回る瞳子は姿をぶれさせ、その服装を、髪型を、体格を次々に変移させてゆく。

「あああああつ！？ ああつ！？ あああああああ」

頭を抱えてうづくまる武道着と袴姿の瞳子が横倒しに転がるとレストランのウエイトレスの衣装に変移して髪が肩口まで収縮し、そして反対側に転がる途上でフォーマルドレスに変移して後頭部からポニーテールを伸ばした。

すべからく入院施設で静養させられているはずの複数の瞳子たちが、

時系列も滅茶苦茶に乱されて無理矢理ひとつに統合しようとしているのだ。

すなわち、「響鬼の世界の音撃道見習いの瞳子」と「ブレイドの世界のウエイトレスの瞳子」と「キバの世界のヴァイオリニストの瞳子」の三人が。

それはそのまま、この「ライダー大戦の世界」に統合されつつある世界を示していた。

「ああああ。いたいけな一般人まで巻き込みやがって。どうすんだよ。」

呆れた声でばやく「マスター響鬼」に背を向け、デイレイドは駆け回る瞳子に駆け寄った。

「瞳子！しっかりしろ！」

そばに屈み込んで上体を抱き上げる。

だが瞳子は現状を把握することすらできず身を仰け反らせて悶えるばかりだった。

本来パートナー設定はその要素を付与された異次元同位体がそれぞれの世界で別々に存在していてこそ意味のある設定。

問題なく使命を全うできたなら、なんら異常は起こらなかった。

だがこうして世界が統合されるとデイレイドに区切られた瞳子たちは反発し拒絶反応を引き起こす。

このままでは人格を崩壊させ瞳子の存在が壊れてしまう。

デイレイドは掌を翻して指先に黄色の半透明のカプセルをひとつ取り出すと、悶える瞳子の顎を掴み、こじ開けた口腔に無理矢理それを押し込んだ。

「んんん！っ！？ んんん！？」

「飲み込む必要はないぞ瞳子！ あと17秒堪える！」

口を閉じ続ける意志もない瞳子の顎と口を押さえ込む。

「緊急回避プログラムを仕込んだライダーだ！お前の中の重複した人格を区分けして整理し最適化する！」

「んんん！っ！？ んんんん！」

17秒経過したが、デイレイドの腕の中の瞳子は暴れるのをやめない。

やがて口元を押さえられた瞳子の目がデイレイドを見上げ、その手が拳を握ってデイレイドの胸と言わず顔と言わず滅茶苦茶に殴り始めた。

「んんっ!? んむっ!? ぷはあっ!?」

カ一杯暴れ回ってようやくデイレイドの手から顔を外した瞳子は己を抱く腕から転げ落ちると立ち上がるなりそのマスクに靴底を叩きつけた。

「てめえいつまで押さえつけているんですかっ!? わざとですかよ殺す気っ!? 終いにゃキャツスルドランの餌にしますからなっ!」

相変わらずその姿を三重にぶれさせ変移させ続けながら、「ひとり」となった「三人の瞳子」が同時にまくし立てた。

「……つて、あれあ!？」

自分の混沌とした発言に気付き口元を押さえる。

その様子を見てデイレイドは立ち上がった。

当然ながらパンチも蹴りも一切効いてはいない。

『うむ。落ち着いたようだな。』

「統合」とか「最適化」ってというのは、こういう意味じゃねえですよっ!？」

しれっと解決を告げるデイレイドに伸び上がってツッコむが、自身の無軌道な語彙に途端に渋面になってしまった。

比較のおだやかで丁寧な二人の瞳子に真逆の性格の瞳子が混ざっているのだ。荒っぽい台詞のつもりが珍妙に変形してしまっていてまるで締まらない。

「ほう。なかなか便利なモン持ってるんじゃない。」

そこに投げ込まれた笑みを含んだ暢気な声に、デイレイドはゆっくりと振り向いた。

『……待たせたな。お前が最初に俺に言った内容だな? 覚えて

いるぞ。』

「マスター響鬼」から瞳子を遮る位置に立ち直し、デイレイドは話の続きを促した。

「……おいすみません。さっきあのひとのこと「マスター響鬼」って言ってたけど、どういうことだよ?」「

控えめな態度で強気に話を遮る瞳子にデイレイドは肩越しに振り向いた。

「「響鬼」って、明日夢君のことじゃねえのですか? 師匠の「響鬼さん」とも違うし、「響鬼さん」よりは若そうだし、明日夢の前にもう一人「響鬼」がいたってことか?」「

『違う。瞳子。「マスター響鬼」はお前の知る明日夢とは直接の関係はないぞ。』

「はっはは。ひびきひびきって連呼されるってなあなんかおかしいね。」

愛嬌のあるように見える顔を苦笑させ、「マスター響鬼」が頭を掻きながら口を挟んだ。

そしてやおら両手を叩き揉み合わせる。

「おっし。いいだろう。故障ぎみのデイレイドが復習しやすいように、事情を知らないお嬢さんにも理解できるように最初から説明してやるっ!」

その様子だけ見れば、まるで生徒の信頼篤いガキ大将のような学校教師のようにも見えたが、それに対しデイレイドが警戒態勢を取っているこの光景が瞳子の目には非常に不気味に映った。

何より「音撃道見習いの瞳子」と喧嘩慣れした「ウエイトレスの瞳子」の記憶が「何かヤバイ」と警報を発している。

そうしてデイレイドの背に寄り添いながら「マスター響鬼」なる男を睨み据えた。

「お嬢さんさ。これまでの人生で大きな選択を決断したことってあるかな。」

「「えあ？」」

唐突に警戒対象である男から気安い調子で話を振られ、瞳子はディレイドの背後で困惑した。

『瞳子。大丈夫だ。答えてやれ。』

「「あ、ああ、うん。」」

ディレイドに肩越しに告げられ、瞳子は思い直して僅かにディレイドの横に出た。

「「あるよ。あります。」」

「じゃあさ。例えばAを選んだあと、ああやっぱBにしときゃ良かった、って後悔したことはあるかい？」

その屈託のない話しぶりについ引き込まれそうになるが、瞳子は慌てて警戒心を立て直すと居住まいを正して応えた。

「「ああ。あります。」」

「うん。実はさ、人が何かを選択した瞬間に宇宙が分岐してそれぞれの選択をした可能性に枝分かれするって言う考えがあるんだよ。「多元宇宙論」だったかな。良くわかんねえけど。」

再び歩き出した「マスター響鬼」は指先を振って滔々と語りながら小岩に近づくとそこに腰を下ろした。

「誰かが何かを選択した瞬間、Aを選んだ世界と、Bを選んだ世界が生まれ、そこから枝分かれした宇宙はそのままそれぞれが歴史の枝を伸ばしていく。それが人の数だけ行われているとしたら、どうよ。宇宙を外から見たならもう無数の枝を広げた大樹のようだな。」

男は頓狂な顔でぱつ、と両手を広げて見せる。

「そして宇宙の分岐は人生だけを起因として起こるこっちゃない。俺たち猿から進化した人類が繁栄している世界と同様に、もしかしたらものすごい昔の宇宙から枝分かれた、猫から進化した生物が繁栄している宇宙もどっかにあるかもしれない。まあ、そこは俺の知ったこっちゃないけどな。」

そうして男は両手を高く差し上げ、大きなものを抱える仕草から、

だんだん手の幅を狭めながら下げる動作をした。

「まあとにかく、今の宇宙の在りようが無数の分岐を経た状態ならば、宇宙の元は一本だった、と考えられる。まさにさっきの例え通り宇宙は今なお枝を伸ばし続ける大きな樹のようなものなのさ。そして、」

膝の前で見えない棒を掴むようにした拳を前に伸ばし、そこから人差し指を突き出した。

「木に害虫がつくように、ある時この宇宙の枝を喰う悪い害虫が現れた。それが、「デイケイド」だ。」

「「デイケイド!？」」

唐突に出された聞き覚えのある単語に、瞳子は思わずデイレイドの横顔を見上げた。

「その害虫は、あろうことか宇宙をばりぼりかじって喰い尽くしちやうのさ。すなわち、世界の滅亡だ。」

「「ちよつと待てよ!」」

あまりに的外れな例えにウエイトレスの記憶を全面に出した瞳子が話を遮った。

「「宇宙を滅ぼしてんのは、連れ込まれた別の世界のモンスターだろが! 透はそれを元の世界に帰したんだ! ……ひとつ、世界は消えたけど、それだつてデイシエッドつてやつが」」

「そのずーっと前から、世界はいくつも消されてんだよ!」

「「!？」」

初めて大声をあげた男に瞳子は言葉を止めてしまう。

「おお。驚かして悪いな。でもよ、もう既にいーっぱいの世界が滅ぼされてんのは事実なんだよ。そう言やお嬢さん、俺のほかには「響鬼」を知ってるって言うてたよな?」

「「……ああ。」」

戸惑いながらもつなずいて返す。

「そいつの手伝いをしてるんなら、この宇宙域には九つの世界があることも知ってるよな? 実は、お嬢さんの知っている「九つの世



界」つてのは、「第四階層」なんだわ。」

「「は!？」」

瞳子はあるぐりと口を開けた。

「「な、なんですかそれ？」」

「「九つの世界」それぞれから分岐した宇宙は、同じ階梯の「九つの世界」を一括りにしてひとつの階層と見做すんだ。んで、俺らは第四階層の連中を「フォース」って呼んでる。すなわち、お嬢さんの知ってる「響鬼」は「フォース響鬼」ってことになるな。」

男はわざわざ親指のみ曲げた手のひらを突き出して告げる。  
「そしてこの世界は、俺の世界から枝分かれした世界から枝分かれした世界から枝分かれした世界。つまり、四番目。四段階目、だよな?」

言いながら、立てた指を外側から順にたたんでゆく。

そして残った人差し指をことさら前に突き出し。

「そんで俺の世界は「第一階層」。正しくは「第一階層」に限り「マスターヒストリー主歴史」と呼称する。だから俺は「響鬼の世界の主歴史」、マスター響鬼、だ。」

引き戻した手の立てる指を親指に変えて、男は、マスター響鬼は自身の顔を指し口の端を歪めて粹に笑んだ。

「全て本当のことだ。」

思わず見上げていたデイレイドの横顔が唐突に告げてきた。

それが、マスター響鬼の語った内容に対する瞳子の怪訝な感想に対する注釈だと気付くのに、僅かに時間がかかった。

「「……………」」

思いがけずに触れた世界の成り立ちの解説に言葉を失う。

「「そんで、次は滅ぼされた世界のハナシだけだな。」」

「「あ……………」」

マスター響鬼は瞳子の感傷にも頓着せずに話題を進める。

「第四階層まであるってことは、当然第五、第六って宇宙の分岐が

進んでてもおかしくないよな？ その第五から先はいつたいどうなつたと思つ？」

まるで空中に縦に並んだ見えない球を片手で上から順に掴むような動作と共に語られた内容に、困惑しながらも瞳子はすぐに思い当たった。

「……どこまで……いくつあつたの！？ 世界は！？」

「ざつと三十階層以上。三十段階も「九つの世界」があつた。だがそこから先は宇宙境界線が曖昧で、かつ宇宙としてはひどく脆弱だったから把握しきれない。枝分かれし続けた先つぽを想像してごらんよ。簡単にへし折れそうたる？」

片目を瞑つて親指と人差し指を合わせた両手を真つ直ぐ左右に引いて細い線を示して言う。

「そしてデイケイドは宇宙の最下層の末端から侵入し、宇宙を喰つてきた。樹の例えで言つたら、枝の先つぽからばりばり齧つてきたんだよ。そうして枝を辿り、本体である幹に向かつてな。」

「……ちよ、ちよつと待てよ。さつきからデイケイドデイケイドつて、私は「デイケイドは世界を救う」としか聞いていませんよ！？」

「おう。今からそこを説明してやる。」

分かつてると言わんばかりに鷹揚にうなずいたマスター響鬼は唇を舐めて続けた。

「「デイケイド」あるいは「システム・デイケイド」つてのは、今でこそばらけているが、元は一体の存在だった。 たつた一体でこの宇宙域の末端から三十階層に渡る仮面ライダーの世界を喰い尽くしてきた。 各階層ごとに俺らが現地の仮面ライダーに命じて総攻撃を繰り返したんだがごとく返り討ちにされ、融合されかけた第六階層に第五階層の仮面ライダーを全て送り込み総攻撃をかけてようやく破壊することに成功した。……んだが、したと思つたら各モジュールごとに分離してさらに襲いかかつてきやがった。それが今つろちよろしているワールドスライダーだ。」

いつしか語るマスター響鬼の瞳は暗い怒りに染まり、デイレイドを睨み付けている。

「だがメインセントラルモジュールのデイケイドを中破させることができたのは僥倖だった。奴は活動記録を失いドライバーをも手放すことで一時的にただの人間に成り下がった。それきり宇宙の浸食は停止したんだが、万が一再発した時の為に俺たちはデイケイドを放置しながら監視していた。場合によってはデイケイドを鹵獲兵器として活用し宇宙の浸食に対抗させる為にな。」

「……と、透は？ デイレイドは、なんなの？」「  
わなわなと、唇を震わせながら瞳子が問うた。

「そいつ自身が言っている通りだ。デイケイドのフォロバツクアツプモジュールであるデイレイドは、デイケイドに従って動くもの。第六階層での総攻撃でデイケイドが骨抜きになった時点でそいつも活動をやめた。そこでまとめて鹵獲した俺たちは、そいつの役割通りのことをさせた。デイケイドの作戦をフォロしると。」

「その通りだ。俺は、そのマスター響鬼を始めとするマスターヒストリー主歴史の仮面ライダーたちの指示で俺の使命を開始した。」

呆然とする瞳子を振り向いて、デイレイドが最後に補足をした。

『デイケイドが彼らの指示により宇宙の接触崩壊の回避に出立してから数ヶ月、フォローの必要性が発生して俺が出立し、あの時、「絵描きの瞳子」の元に現れたのだ。』

「……………」  
瞳子は呆然としている。だがここで語られた内容は耳に入っているようだったので、デイレイドはマスター響鬼の方を振り向いた。

『これでようやく現状の話に入れる。なぜ俺を呼び戻した。』

「おおほほ。思わず「じゃ、これで」とか言いそうになっちまったぜ。」

ぺち、と己の頭を叩いておどけて見せたマスター響鬼だったが、やおら立ち上がると突如苛烈な気配を放ってきた。

デイレイドはまるで何事もないように立っているが、瞳子は強烈な

気を受け身を竦ませた。

「ウチのコウモリの坊ちゃんからディケイドに確かに言ったはずだ。『全ての仮面ライダーを破壊してこい』と。俺もお前にそう言ったよな。」

『ああ。そうだな。』

これまでのどこかおどけた態度は消え失せ、マスター響鬼は燃え盛る岩石のごとき厳しい顔つきで、瞳子の知るよりもずっと高等な鬼闘術による素立ちの構えで立っていた。

重心をぐつと落とし、微塵の揺らぎもない立ち姿勢はそれだけで強烈な圧迫感がある。

「それなのにディケイドは第四階層の仮面ライダーを破壊せずに仲間にし、お前までもが同様にフォースの連中を救って回った。なぜだ！？ お前バカなのか？死ぬのか？」

最後のほうだけ顎をしゃくって罵るが、当然目は全然笑っていない。『お前こそ理解できなかったのか。俺はディケイドのフォーローバツクアップモジュール。俺の役目は、ディケイドに従いディケイドの作戦を補助することだ。』

「ふん。だからお前は壊れてるってんだよ。」

「おい！もうひとつ聞かせてください！」  
色々と常識を覆されて飽和きみではあったが、それだけは瞳子は聞き逃せなかった。

「仮面ライダーを破壊するって、どういうことですかよ！？」

「お嬢さん、「防火線」って言葉知ってるか？」

気配は収縮させぬまま、マスター響鬼は瞳子の方に目を向け片眉を上げてみせた。

「大きな火事が起きた時、火災と延焼物の間に空間を空けてやる防災方法があるんだ。時代劇で見たことない？町で火事になったら、まだ燃えてない周りの家をばんばん壊してんの。もし山で火事が起きたら、途中の木や草をばんばん切り飛ばしたりしてな。場合によっちゃあ延焼する前に焼き払うこともある。そうして火の手が回

んねえように作った空間のことを「防火線」、あるいは「防火帯」  
って言うんだけどな。」

靴のつま先で地面に横線を引いて続ける。

「分離したディケイドの後から来る災厄についても承知している。  
そいつはディケイドの通った経路をトレースして来て、世界の基点  
たる存在に取り付いて喰っちまう。この場合、世界は無事でも基点  
たる仮面ライダーひとりが喰われたら宇宙は消滅するんだ。まるで  
ガン細胞だよな。」

そして同じ足で横線に交差する線を上書きした。

「じゃあどうすればいいか。そこでさっきの「防火線」の例えだ。

浸食される前に、その階層の仮面ライダーを全て破壊してしまえ  
ばいい。そうすれば、その「災厄」は喰うべき仮面ライダーを見失  
いそれ以上宇宙を浸食できなくなるって寸法だ。」

「……その為に、真司君を、巧を、みんなを殺させようとしたん  
ですか!？」

「そうしなければ、全てが滅亡するんでな。」

平坦な声で応えたマスター響鬼が、そこでばちんとフィンガースナ  
ップを放った。

と同時に辺りに五人の仮面ライダーが何の前触れもなく出現してい  
た。

マスターアギト・グランドフォーム。

マスター龍騎。

マスターファイズ。

マスターカブト・ライダーフォーム。

マスター電王・ソードフォーム。

「……ん？」

右手を上げた姿勢のまま、マスター響鬼が怪訝に辺りを見回した。

「おい。コウモリの坊ちゃん、と剣の字はどうした。」

『ははっ。先にディケイドを片付けてくるってさ。』

「……え?」

マスター龍騎が肩をすくめて軽薄な口調で応えたのを聞いて、瞳子の顔が青ざめた。

それは辰巳 真司の声ではなかったのだ。

「まあ、そっか。んじゃこっちもとつと片付けるかね」

素っ気なく言つて、マスター響鬼は鬼面を彫り込まれた変身具、変身音叉・音角を取り出し一振りして展開すると、それを爪で弾いて澄んだ音を響かせた。

「悪いけど、手段の是非についてお嬢さんと議論するつもりはないんだ。……変身。」

呟き、音を発し続ける音叉を額にかざすと、肉体に秘められた鬼の素質に共鳴し、魂の属性である炎を顕現し、瞬く間に火達磨になると肉体の増強、変移が促進されてゆく。

『ああああ、ぜいああつ！』

やがて裂帛の息吹と共に炎が振り払われ、そこに深紫の引き締まった肉体に各種装備を下げた腰帯、たすき掛けのような甲殻に赤い隈取りのような面相と頭頂に二本の角を持つ鬼が姿を現した。

『これ以上お前になにかをさせるのは、もはや宇宙にとって有害だからここでお前を破壊する。動くなよ』

腰の後ろから引き抜いた、先端に赤い鬼石がついた棍棒をディスプレイに突き付け、マスター響鬼が宣告した。

unknown spot

「剣崎 一真。」

呼び止められた黒衣の男・剣崎 一真が立ち止まり、サングラスを取りながら振り向いた。

落ち窪んだ暗い目が、背後からゆったりと近づく男に向けられた。

「なにをしに行くのですか。」

白のシャツの襟に白のマフラーを巻き付けたその男が、平坦に問い

かけてきた。

童顔で、どこか拗ねているようにも見える形の唇を持つ愛嬌のある顔立ちだが、抑揚のない言葉と同様 瞳にはいかなる感情も浮かんでいない。

全身から一切の抑揚を廃した黒一色の剣崎 一真と同様に。

「……第四階層の世界がひとつ消え、融合箇所もだいぶ進行している。まずは宇宙内部を確認してくる。」

言いながらサングラスをかけ直して再び前を向いた。

「そちらはどうだ？」

「ええ。問題ありません。」

後ろ向きで投げかけられた問いに、白衣の男も淀みなく応えた。

「第三階層の仮面ライダー全員、総攻撃の召集に応じました。ですが、相変わらず第二階層の仮面ライダーは誰一人として要請に応じません。」

それを聞いた剣崎 一真は足を止めて肩越しに背後を見遣った。

「……奴らには「セカンド」としての自覚がなさ過ぎる。「サード」が全滅したなら次に喰われる番だというのが理解できんのか。」

「「セカンド」の意見は一貫して「平和的解決手段の模索の継続」を謳っています。」

「そんな暇がどこにある。」

せき込むように唾棄して吐き捨てる。

「この宇宙はもはや、あと三階層しか残されていないと言っのに。」

「ええ。ですから、今度こそ止めなければなりません。」

白衣の男の言葉を聞きながら、剣崎 一真は歩みを早めた。

「剣崎 一真。確認するのは結構ですが」

「分かっている。早急に済ませ合図を送る。それでいいだろう？」  
言い捨て、剣崎 一真は歪に融合した宇宙の内部へと侵入していった。





track・68 影法師の轢死体（後書き）

と、言う訳で鉄槻の解釈「仮面ライダー デイクイド」に登場した紅 渡と剣崎 一真は、原作の彼らとは顔が同じなだけの別人」でした。

さすがに設定とキャラと行動の矛盾を解消するのは不可能と判断し、ただし存在の重要性を鑑みて、「デイレイドマスカークレイド」では御覧のポジションとなりました。

なのでマスター響鬼の役者もあの人です。 きっと他のマスターライダーもそれぞれ同じ顔。

ちなみに言うまでもないと思いますが、皆さんの良く知る各原作の設定に一番近いのは「第二階層」の彼らです。

役者と言えは。もしこのシーンをドラマ化したら、瞳子役のひとは佐藤某君より大変そう。

「仮面ライダーの破壊を要する理由」も、鉄槻にはこれしか思いつきませんでした。

もしも門矢 士が言われた通りに九つの世界の仮面ライダーを一人残らずデストロイして一周してきたら、マスターライダー達は心置きなくデイクイドを絶対悪に仕立て上げて全員掛かりで血祭りに上げたんだろーなと思うとやりきれませんな。

参考文献・・・『track・29』 『track・50』

『track・54』 『track・55』 『track・63』

『track・64』

ライダー大戦の世界

『はああ!』

マスター響鬼が二本の音撃棒を左右に振りかざして迅速にデイレイドへ迫った。

透の戦闘機動の邪魔にならないよう慌てて後退した瞳子の目の前で、マスター響鬼に横薙ぎに殴られたデイレイドが遠くへ吹き飛んでいった。

『とおるっ!?!?』

あまりの事に瞳子は悲鳴を上げた。

デイレイドが迎撃することも躲すこともしようとせず、棒立ちしたまま無防備にただ殴られたから。

地面を激しく抉りながらごろごろと転がりようやく止まるデイレイドの身体。

その衝撃は相当なものだったようだ。ダメージにより完全拡張が維持できなくなり、握り締めているカレイドブレイドからデイレイドオンが吹き飛び自動で収納状態に変形するとどこへともなく消え去り、カレイドフォームが解除されて通常のデイレイドの姿へと戻ってしまった。

『……よおし。言った通りに動かなかったようだな。イイ子だ』

音撃棒を振り切った姿勢を解きながら、片方の棒を肩に担ぎマスター響鬼が鷹揚にうなずいた。

『透!?!? どうして!?!?』

『……デイケイドが、使命を放棄したようだ。』

手を突いて、ようやく身を起こしたデイレイドが呻くように呟いた。

『故に、次のルーチンが存在しない為、俺は行動できない。』

『とおるっ!?!?』

『ははっ！なんだっていいよ』

ふらつきながらも立ち上がったデイレイドの横にマスター龍騎が飛び込んできた。

『一方的に殴れるんならさっ！』

小刻みなパンチの連打にデイレイドは言った通り何もしようとはせずただ殴られて後退していった。

『ははっ！』

その攻撃の動作の中、淀みなく片手がベルトのデッキからカードを引き抜いて宙に放り投げ、身を回転させた途上で振り上げた左腕のドラグバイザーのスロットでカードを受け止めて装填させ素早くカバーを閉じる。

《アドベント。》

がっつ。

認証の音声と同時に真上から現れた赤き無双龍・ドラグレッダーがデイレイドごと土中に突貫していった。

まるで水をくぐるように別の地点からデイレイドをくわえて飛び出したドラグレッダーは上空からデイレイドを地上めがけて吐き捨てた。

『遊んでんじゃねえよ』

その真下に陣取っていた真円のマスクを持つマスターファイズが、振り上げたファイズエッジで落ちてきたデイレイドを袈裟掛けに叩き落とした。

地面を大きく碎き散らしてバウンドし他方へと吹き飛んでゆく。

『胸くそ悪いんだよ、こういうの。さっさと済まそうぜ』

ぼやいたマスターファイズがそれを追って駆け出した目の前で、地面を転がるデイレイドの身体が突如跳ね上がり、宙をあちこちに舞った。

それはすなわち、目にも止まらぬ超高速『クロックアップ』を発動させたマスターカブトの連続攻撃によるもの。

離れた位置に停止して姿を現したマスターカブトの背後でデイレイ

ドの身体が今ようやく地面に激突した。

『……一秒でも惜しい。完全に、確実に破壊するんだ。』

仄暗い怒りのオーラを纏いながら振り向いて言う。

『情弱な攻撃などに価値はないぞ。』

『ダレに言っただコラアアアア！』

まるでチンピラのような罵声を上げて、マスター電王が剣をぐるぐると振り回して駆け込んできた。

『俺様の攻撃はオハヨウからオヤスミまでクライマックスだっつーの！』

賑やかに絶叫したマスター電王は剣の刀身のみを分離させると、それを柄の動きに同期させて操り振り下ろした。

挟まれた地面と一緒に吹き飛ばされたデイレイドを、さらに空中で切り刻む。

その反対側では、マスターアギトが半身に構えて軽く身を弾ませて待ち構えていた。

額のクロスホーンが、展開したり、閉じたりをしきりに繰り返している。まるで魚のエラ呼吸のように。

それはマスターアギトのエネルギーチャージの予備動作。それを小刻みに繰り返すことにより足下に現れた輝きが光量を増し、さながら噴火直前の火口のように危険な膨張を見せている。

『はああっ！』

そして裂帛の息吹と共に跳躍したマスターアギトの身体は砲弾の勢いで飛び、途中で蹴りの姿勢に移行してデイレイドを蹴り飛ばしていった。

『透っ！？ とおるっ！？』

一方的な暴虐に曝されるデイレイドに、瞳子は必死に叫び続けた。

『やめろっ！？ やめろよお前ら！ 透っ！？ 反撃して！？』

戦って！ 透！？』

戦いに割り込むことのできない自分の無力さがうらめしかった。

世界の危機に、あれほど身体を張って頑張ってきたのに、なぜこんな仕打ちを受けなければならぬのか。

「透！？ とおるっ！ ……うっ！？」  
「理不尽に怒り絶叫する中、突如強烈な目眩と喪失感が襲い瞳子はその場に崩折れた。」

「うっ…！？ あ…これ、は…！？」  
瞳子の身体から光の粒子が溢れ出し、舞い散って消えてゆくのだ。

「ああ…あああああああ！？」  
三重に重なった瞳子の人格から今、「ウエイトレスの瞳子」の人格が消滅した。

「あああああああっ！？ やだ！？ わたし、消え、いや、いやあああああ！？」

正気の均衡を失いかけた顔で頭を抱え絶叫する瞳子の姿にぶれて重なっていたもののうち、ウエイトレスの瞳子の姿が現れなくなった。

「…あらま。「ブレイドの世界」も消えちゃったよ」  
その瞳子の様子を見て、マスター響鬼があっけらかんと言った。

「じゃあ急がないとな」  
そしてそのまま地面で悶え苦しむ瞳子を置いて、取り囲まれるデイレイドの元へ走り去ってゆく。

今、瞳子は「己の死」という恐怖に生きながらにして苛まれているところだった。

常人ではまず体験もできないし、耐えられない恐怖だろう。  
二人の人格が重なっているから、まだ精神が壊れずにいられているのだ。

「あああああいやあああああ！？」  
破裂しそうなほど激しい動悸が物理的な激痛となって瞳子を蹂躪する。

涙を撒き散らし、頭を、胸を掴んでも抑えられない痛みで瞳子はあちこちと転げまわった。

『瞳子っ！？』

がきん、と鈍い音を立て、ディレイドの絶叫と同時に戦場の喧騒が止まる。

『……おい。なんのつもりだ?』

動かないはずのカレイドブレイドで音撃棒を受け止められたマスター響鬼が不機嫌に呻いた。

途端に静かになったこの山中に、瞳子の苦鳴だけが響き渡る。

『……俺にもわからん。』

二本の音撃棒を受け止める自らの剣を眺め、ディレイドは呆然とした様子で呟いた。

『動くなつつつただろうが。 やっぱ壊れてんだよお前。』

剣を押し返し、マスター響鬼は後退して間合いを取った。

指示を無視された以上、これからは反撃を想定して警戒しなければならぬ。

『ははつ。だからなんだってんだよ』

そのマスター響鬼の様子を無視し、ディレイドの背後に湾曲したサーベルを振りかざしたマスター龍騎が襲いかかるが、振り向きざまに一閃したカレイドブレイドがマスター龍騎をサーベルごと吹き飛ばした。

『馬鹿が。油断すつからだ』

吐き捨てたマスター響鬼を始め、他のマスターライダーはディレイドを遠巻きにして配置を入れ替え様子を伺い始めた。

『……だが、これまでの活動の中で俺の中に新たに構築された領域が、これを嫌だと言っている。』

振り切ったカレイドブレイドを下ろして体勢を戻す。

『ディレイドの使命に寄らないルーチンが発生した。……のか? よく分からない。』

諭言のように続けながら、ディレイドは遠くで苦しんでいる瞳子の方へと振り向いて歩き出した。

『……どけ。俺は瞳子を助ける。最優先事項だ。』

『……。』

たまたま瞳子との進路上にいたマスターファイズが斜に構えてファイズエッジの峰で肩を叩きながら、歩いてくるデイレイドを眺めていた。

『通常時だったら、聞いてやれたんだけどな。悪いけど、お前の頼みは聞けねえよ』

素っ気なく告げ、マスターファイズはファイズエッジを一閃させた。赤の軌跡をカレイドブレイドが跳ね返し、続く斬撃を次々と打ち払うととうとうカレイドブレイドがマスターファイズの胸板を捉え激しいスパークと共に打ち倒した。

地面に激突したマスターファイズを乗り越え、デイレイドは瞳子の元へと歩き出した。

『オイコラどこ行くんだよ!?!』

続く罵声に即座に振り向いたデイレイドは、刀身が宙を舞う剣を振り下ろしてきたマスター電王に対し何も無い空間にカレイドブレイドをかざしてその斬撃を停止させた。

マスター電王は刀身を切り離して遠隔操作しているにも関わらず、柄と刃の間の空間を剣で止められ困惑した。

『俺の邪魔をするな』

虚を突かれたマスター電王は返す斬撃で呆気なく吹き飛ばされる。そうしてまたデイレイドは瞳子の方へと振り返り歩を進めた。

「……………とおる……………」

息は荒く脂汗が止まらないが、瞳子はようやく正気を取り戻し肘を付いて上体を起こした。

「……………とおる……………わたし……………たいじょうぶ、だから……………」  
『しゃべるな。今行く。』

飛びかかってきたマスターアギトを即座に振り向いて袈裟掛けに打ち倒し、そしてまた瞳子の方を向いて歩き出す。

『今、俺が助ける。苦しみを、抑える方法がある』

「……………とおる……………とおる!?!……………」

見つめる瞳子の目の先で、たびたび振り向いて次々と襲いかかるマ

スターライダーを迎撃してはこちらへと歩んでくるデイレイドに、瞳子はうつ伏せのまま叫んだ。

「透っ！ 戦って！」

今度はマスターカブトのカブトクナイガン・クナイモードの斬撃とマスター響鬼の打撃が同時に襲いかかる。

振り向きざまにマスター響鬼の音撃棒は打ち逸らしたが、マスターカブトの斬撃がデイレイドの脇腹を抉った。

その衝撃にもんどり打って転倒してしまう。

「透！ 戦って！ 透！」

迅速に立ち上がったデイレイドに、マスター龍騎のサーベルが、マスター電王の飛翔する剣が、マスターファイズの赤い斬撃が襲いかかった。

デイレイフォンによる完全拡張のない通常状態でありながらデイレイドは凄まじい剣戟を披露して三人がかりの斬撃を捌いてゆく。

だが多勢に無勢。肩の装甲を砕かれ、胸郭を打たれ、よろめいたところで片足を赤い刺突が貫いた。

「透っ！？ 透！？」

瞳子は必死に叫び続けた。

マスター響鬼が語ったことも、宇宙の危機も、今はどうでも良かった。ただ、あれほど頑張ってきた透を大勢で否定されることにとても腹が立った。

唯々諾々と殺されることなんてない。透がどれほど頑張ったかは瞳子が一番よく知っている。

だから、否定してくるやつにそれを思い知らせてやればいい。逃げるだとか、瞳子自身の命の危険だとか、そんなことは頭から消えてしまっている。

今までと同じように、全てをなんでもないことのように片付けてゆく透でいて欲しかった。

「なによ！？ なんにも知らないで！？ 道具みたいに切り捨て



て！？ ふざけんじやないわよ！？」「  
マスターアギトの蹴りがデイレイドの側頭部を打ち砕いた。  
構わず振り回したカレイドブレイドの剣先がたまたまそこにいたマ  
スター電王を殴り倒すがその背中をマスターカブトのクナイモード  
が斬り裂く。

拝み打ちに振り下ろされた二本の音撃棒を回し蹴りで蹴り返し、蹴  
り足が打ち砕かれたのと引き替えに音撃棒を一本へし折った。  
マスターファイズの赤光の剣とカレイドブレイドが、同時にお互い  
を袈裟掛けに斬り裂いてそれぞれの方向へと吹き飛ばされる。

「「思い知ればいい！ 透のこと否定する奴はみんな、許さないん  
だからあつ！」「

マスター龍騎のもつ龍頭の手甲とマスター響鬼の音撃棒から放たれ  
た火炎がデイレイドを火達磨にした。

燃え盛る炎を纏ったままマスターアギトと殴り合って仰け反り、さ  
らにマスター電王に殴り倒される。

仰向けのままカレイドブレイドを振り回してマスターファイズとマ  
スターカブトの足を斬り払いまとめて転倒させた。

だがクロックアップで瞬時に体勢を立て直したマスターカブトに顎  
を蹴り上げられ大きく仰け反って吹き飛ばされる。

デイレイドはその勢いを利用して、ちょうどその反対側にいたマス  
ター電王の顔面に剣の柄尻を叩きつけた。

「「透つ！ 戦つて！ とおるー！」「

乱戦を見つめる瞳子の視界が霞んできた。

先ほどから感じていた、己の内から迫る喪失感。「音撃道見習いの  
瞳子」と「ヴァイオリニストの瞳子」のそれぞれの世界が消えかけ  
ており、それに連動して瞳子も消えようとしているのだ。

迫り来る死。

だがもう恐れない。関係ない。

最後まで叫び続けてやるんだ。

「「透！ 透ー！」「

一斉に襲いかかるマスターライダーたちを前に、仁王立ちで迎え討つ構えのディレイドのぼろぼろのその背中が、その光景がとうとう白くかすれて消えていった。

> i 1 1 0 5 8 — 5 3 8 <

もう、なにも見えなくなった。

ライダー大戦の世界

満身創痍のデイレイドと、システムの一部に組み込まれていたらしき少女の姿が掻き消えてからしばし。

頭部のみの変身解除・フェイスオフ状態となったマスター響鬼を始め、他のマスターライダー達も次々と変身を解除した。

各々輝きに包まれ、あるいは装甲を溶け崩れさせて姿を現した男たちはそれぞれ浮かべた表情の形こそ異なるが、皆一様に瞳に仄暗い陰を湛えていた。

「ははっ。ヒビキさんさ、変身解除しないの？」

「んん？なに？俺のフルヌードが見たいの？」

「戯れ言を抜かすな」

指さして笑うマスター龍騎とマスター響鬼の掛け合いを不機嫌に遮り、濡れ髪の下から鋭い視線を投げかけるマスターカブトがすたすたと歩み出た。

「デイレイドに逃げられた。かなりのダメージを与えたが、完全破壊には至っていない。どうするつもりだ。」

「まあ問題ないでしょ。」

睨め上げるマスターカブトを鷹揚に見下ろして朗らかに告げる。

「あとはデイケイドを破壊すればデイレイドはもう動けない。」

「お前等が足を引っ張らなければ、状況開始から半分の時間で破壊できた。なにか言うことはないのか？」

「おつかれさん。」

マスター響鬼の食えない返答にマスターカブトは舌打ちし顔を逸らした。

『みつなさあくん    大変大変！たいへんなのよあく』

そこに、掌よりも小さな白いコウモリのモンスターが嬌声を上げな

がら飛来してきた。

「おお、キバーラちゃん。ご機嫌いかが？」

「んん、絶好調よおむぎゆ」

明るい調子でそのコウモリの名を呼びかけたマスター響鬼に、応えようとした途上でいきなり身体ごと握り締められキバーラは息を詰まらせた。

『ちよ、ちよつとお！？ なにするの！？』

「いや。さすがは最も貪欲な世界だよねえ「キバの世界」は？

ちよろちよろ動き回って、領地拡大の下調べ？」

『な、なんのことがしら？』

朗らかな笑顔のマスター響鬼の拳の中で身悶えし空々しくとぼける。「んん？ なんか、面白いオモチャ拾ったファンガイアがうるちよろお散歩してるみたいじゃん？ 第四階層の融合係数で一番高いのが「キバの世界」でさあ。そりやどうせ「空き地」になるかもしれないけどさあ。なんつーか、こう、品がねえつーか。」

『んむぐ、わ、ワタシはただ、マスターキバ様の御命令に従ってるだけで、そこら辺はなんともコメントできないしい』

「ま。いいけどさ。」

ぽい、とキバーラを放り出したマスター響鬼はキバーラが飛来してきた方角へと歩き出した。

「それよりキバーラちゃん。報告報告。ディケイドもイイ感じに下拵えが進んだ？」

『……ハナシする前に握り絞めたクセに……』

「ん？」

『な、なんでもないわ！？』

暢気に振り返ったマスター響鬼に慌てて翼を振り、当初の目的に戻った。

『その通りよ。ディケイドの処理が確定したから、集まって欲しいつて。』

「んじゃ、ぱっぱと行くこう。俺たちも、下層にあんまり長居してら

んないしさ。」

## 瞳子の世界

……はっ。

広大な更地の状態の開発地区を挟んだ、遠く向こうのビル街を埋め尽くす九つの世界のモンスターの群の山が、まるで動画の一時停止のように固まった光景の前で再び、瞳子は我に返った。

一度目は、事の発端、町中にモンスターが溢れて逃げ惑い、瞳子ひとりでの場所に辿り着いた時に、初めて透に会った時。

その時透は、「この世界の瞳子に会うのはこれが最後だ」と言っていた。

だが、当然のことながらこの瞳子も「九つの世界の瞳子たち」と記憶を共有している。

事の次第は全て体験したも同然に把握していた。だからあの時、マスターライダーたちの総攻撃の後ディレイドがどつなつたのか、それがいま頭の中を占めていた。

「……透!? 透っ!?!」

無意識に、瞳子はディレイドの姿を求めて辺りを見回して叫んだ。

「透っ!?! いるんでしょ!?! ねえ!?! とおるっ!?!」

この煉瓦敷きの遊歩道のような拓けた場所には、人影どころかベンチひとつない。

この場所の見晴らしの良さが返ってうらめしい。何か物陰があったなら、多少の希望でも持てたかもしれないのに。ぱっと見ですぐに動くものない全包围を確認してしまい、瞳子はうなだれた。

だが、すぐに自分の違和感に気付いた。

崩壊を免れる為に停止させられているこの世界の中で、自分だけが動ける理由はひとつだけだ。

瞳子は即座にそちらの方向を振り向いた。

数メートル先に、突如ドット柄のノイズが発生し、その中から黄色い人影が現れたのだ。

「透……！？」

瞳子は息を飲んだ。

片足を引きずり、非常にアンバランスに傾いた体勢で辛うじてのそり、のそりと歩行しているデイレイドは、有り体に言ってまるで死体のようだった。

両脚は歩行できているのが不思議なほど、折れ曲がり、角度を変え、捻れている。挙げ句片方の大腿部には貫かれた穴が空いているのだ。脇腹も大きく抉れており、その上の胸郭の真ん中にも穴が穿たれて向こう側が見えている。

肩アーマーは左右とも脱落しており、両腕は脚同様に滅茶苦茶に捻くれ、特に苛烈な衝突を繰り返した部位である両手は指のほとんどが有り得ない方向に曲がっていた。

そして半分失った頭部の断面から黒い靄を煙のように漏らしながら、デイレイドはよたよたと瞳子に近づいてきた。

『……瞳子、瞳子……』

「……と、とおる……」

そして全身をくまなく走る無数の斬撃の傷跡と穿たれた弾痕からも靄が漏れ出ており、いかに人間とは違う身体といえど、生きて動いているのが不思議な有り様だった。

『……とう、こ……』

とうとうデイレイドが前のめりに転倒した。

「とおるっ！？」

一瞬感じた恐怖を振って捨て、瞳子はデイレイドに駆け寄り屈み込むと慌ててその上体を抱き起こした。

「透っ！？ 透、すっかりして！？」

「瞳子……」

片方しかない青いセンサーがどこを捉えているのかがいまいち良く分からないが、頼りなく首が揺れているのはつまり、周囲の光景もまともに認識できていないのではないだろうか。

「透！？ いるよ！？ 私、ここにいるよ！？」

「瞳子。すまなかった。」

なのに、この有り様になってもデイレイドからは謝罪の言葉が出てきた。

「謝らないでよ！？ 透は何も悪くないでしょ！？」

「……すまなかった。お前を巻き込んだのは、最初は確率に基づく判断のみだったが、お前のアドバンテージは非常に有用で、……いや、頼りになった。なのに、使命を果たせず拳げ句世界ごと消滅させてしまった。すまない」

「違うよ！？ 悪いのはデイシエッドでしょう！？ 透は頑張ったじゃない！？」

あの唐変木の透が苦渋の思いで謝罪を口にするという変化にも、今は喜ぶこともできない。

いや、透が謝ることはないのに、そうさせるこの状況に理不尽を、怒りを覚え、そのどうしようもなさに悔しさを覚えた。

「……だって、透はあんなに頑張ったのに、あんなの、ないよ……」  
「……思えば、九つの世界の仮面ライダーたちにもすまないことをした。」

だが、デイレイドの内罰的な独白は止まらない。

「一方的に協力を強要されては、さぞかし気分も悪かっただろうな。俺の情操が未発達だったとはいえ」

「そんなんじゃないよっ！？」

そこだけは聞き逃がせず瞳子は大声を上げて話を遮った。

「……瞳子……？」

「そんなこと、絶対はない！ みんな透のこと、悪く思ってなんか絶対はないよっ！」

溢れた涙を振り払い、涙を拭おうとした手が眼鏡にぶつかって初めて眼鏡の存在に気付いた。

十人の瞳子の内、眼鏡を着用しているのがこの瞳子だけだった故に、今までその感覚を忘れていたのだ。

眼鏡をずらして涙を拭い、改めてデイレイドを見下ろした。

「……そりゃ自然災害の竜巻みたいにマイペースにみんなのこと勝手に巻き込んで、目的を達成したらとつと先に引っっちゃって、殴つても蹴つてもぜんぜん効かないし、気も利かない唐変木だし！」  
『うむ。ひどい言われ様だ。』

「でも！ 透はそういう奴なんだって、みんな認めてたよ！ 本当はただの唐変木ならこんなこと言わない！ 透は、できる事はきちんと果たしてきたもの！だからみんな、なんだかんだ言っても透のこと、頼りにしてたんだよ！？」

『……………』  
「だから、そんな事言わないでよ。きつと誰も透のこと責めてないよ。透、頑張ったもの。」

ぼろぼろと涙をこぼしながら、しゃくりあげながら絶え絶えに訴える。

デイレイドは、腕に抱かれながら静かにそれを静かに聞いていた。

『……………だが、』  
僅かに身じろぎしたデイレイドは、瞳子の腕の中から抜け出ると地面に身を投げ出した。

『だが、俺は、悔しい！』  
動く指をどうにか内側に曲げると、歪な握り拳で地面を力無く叩いた。

『この感情を、なんと言うのか良く分からなかったが、いま解析した。俺は、悔しい！ 悔しくてたまらない！』

「……………透……………」  
これも、見たことのない姿だ。

透は、いつの間にか豊かな感情の基礎を築きつつあったのだ。



なのに。

『……この情報をどう処理していいのか分からないし、俺は、もう保たない。』

「え？」

訝しむ瞳子の目の前で、ディレイドの身体中の傷から黒の霧に混じって黄色い粒子が吹き出し消えていった。

「……………これ……………!？」

『この活動体の耐用限界はとうに越えている。もうすぐ消えるだろう。だが、このままこの俺の中にくすぶる情報をただ消されるのは耐えられない!』

叫んだディレイドは、やおら腹部のベルトに手を遣ると、元の無骨な機械の塊のような形状に戻っていたディレイドベルト・カレイドサーキットを引きちぎり始めた。

「と、透!？」

『ぬあああああああああ!？』  
ぶちぶちという異音とスパークを迸らせて、ベルトが腹から引きはがされた。

ディレイドはそれを瞳子の前に放り捨てると、今度は胸の穴に片手を突っ込んだ。

『あああああああああつ!？』  
呆然とする瞳子の前で、ディレイドは己の体内から何かを掴み出すようにしていた。

やがて苦鳴をあげながら引き出した手に握られて胸から出てきたのは。

黄色の大剣ディレイドライバー・カレイドブレイドだった。

『……………っはあつ!』

がしゃ、と剣をベルトの上に放り出し、ディレイドは力尽きたように地面に膝を、手を落とした。

「……………と、とおる、何を……………?」

『……………おまえに……………』

応え、デイレイドはなおも自分の胸の穴に手を突き入れた。

『お前しか、いない。俺の、俺の情報を残せる者が、お前のほかにいないんだ!』

そして三度苦鳴を漏らしながら体内から引き摺り出されてきたのは、六十センチメートル程の黄色い半透明の棒、デイレイドの情報素子、ライドピラーだった。

『……っはあっ! ……すまない、瞳子。これを、受け取って、くれ』

「え? それ、どういう」

困惑する瞳子に膝立ちで擦り寄ると、差し出した手を無視した透の意図が分からずあたふたする瞳子を突如捻れた腕が抱きすくめた。

「え? ええ?」

透の言葉と行動が繋がらず困惑が止まらない瞳子の鳩尾に、何か硬い尖った物が押し当てられた。

「っ!?!」

それが、片手に握られたあのライドピラーだと気付いた瞬間、瞳子は透の意図に気付いたが、全く同時に透の手がライドピラーを瞳子の胸に突き刺した。

「あっ!?! がっ!?!」

文字通り、突き刺す痛み反射的に逃れようと身を擦るが、背中に回されたデイレイドの腕ががっちりと身体を捕らえて離さない。

「がああああっ!?! ああっ!?! つぐっ、」

『……すまない。瞳子。』

「ぐっ!?! あああああ!?! ……と、る や、やめ……」

決して細くはない角材が体内に押し込まれてゆくのが感覚で分かる。かつて身体を貫通された時はまったく痛みはなかったのに、なぜ。

『すまない。今の俺には、ライドピラーの情報転送の形式の調整に割ける余力がないんだ。』

「っっっ!?! ぐっっ!?! があああああ!?!」

『もう少しだ。もう少しで、全部、入る』

もがき、ディレイドの身体を叩いて暴れる瞳子の身体を抱き締め、容赦なくライドピラーを押し込んでゆく。

やがてディレイドの腕が瞳子の身体を解放し、二人同時に、糸が切れたかのように煉瓦敷きの上に倒れ込んだ。

当然だが、ライドピラーは物理的には瞳子の身体を貫通しておらず、服の胸には破れた跡もなければ、背中には何も突き出てはいなかった。

瞳子は、涙でぐちゃぐちゃになった顔で必死に呼吸し肩と胸を上下させながら、傍らに横たわるディレイドに顔を向けた。

「……………これ、……………なん、で、こんな、こと……………？」

『……………どうするかは、お前に任せる。』

仰向けになったディレイドの横顔が、同様に苦悶にこもった声で応えてきた。

『お前に、頼るしか、なかったんだ。すまない。本当にすまない』しばらく、無音のこの世界に静寂が漂う。

「……………謝らなくて、いいよ。」

やがて、激痛が引いて落ち着きを取り戻した瞳子がぼつりと言った。「分かったから。もう、そんなに謝らないで。」

『……………ああ。』

どこか透明感のある穏やかな瞳子の顔を、ディレイドのマスクが僅かに傾いて見返した。

『ありがとう。瞳子。』

「……………うん。」

涙ぐんだ瞳子の顔が、穏やかにうなずいた。

『……………じゃあな。』

その言葉を最後に、ディレイドの身体が迅速に粒子化して無数の傷跡から溶け崩れるようにして消え去ってしまった。

静かな最期だった。

「……………さよなら。透。」

激痛に耐えて疲労していなかったら、悲しみに絶叫し暴れ散らして

いただろう。

もう今の瞳子には分かっていたから。

「九つの世界の瞳子」が消滅しては、バックアップに必要な容量を維持できず、ディレイドの活動体の復元はもう不可能だということ  
を。

それでも試しに、傍らに置かれたカレイドブレイドのグリップをそ  
つと掴んでみたが、特に何が起きるでもなく。

仰向けに横たわる瞳子はたださめざめと泣き暮れることに余力を注  
いだ。

> i 1 1 0 5 9 | 5 3 8 <

track・70 デイレイド・瞳子（後書き）

二話連続投稿という荒行の陰には、「track・69が主題が副題になつてゐるからつて最終回と間違えられたらどうしよう」という作者の小心ぶりが悲鳴をあげた経緯がありました……。いや、我ながら結末があまりにもばった臭い。

まだ続きますよー。ほら、劇場版完結編の分が残つてゐるし。

てな訳で御覧の運びとなりました。

時系列的には、透の『デイレイドが、使命を放棄したようだ。』のちよい前に、原作では士が「仲間なんか作るもんじゃない」と一時「九つの世界の仮面ライダー」を見限つていました。

そのデイレイドの行動方針の転換を透は「使命の情報の齟齬」と解釈し、一時的に行動方針を見失いました。

その後原作ではブレイドらが助けに入り士と仲直りしましたが、既にデイレイドはデイレイドからの情報を遮断。自分で定めた行動方針にシフトしていました。

続く「九つの世界の瞳子たち」の消滅は、原作でのブレイド、キバ、響鬼それぞれの消滅とほぼ同時のこと。

と言つ関連になつております。

はてさて。これからいつたいどうするのか。

伏線は、既にだいぶ前に張つてましたが。

ぱち、ぱちと火の粉を散らして薪が爆ぜる。

薄暗がり、適当な瓦礫に腰掛けた瞳子が陰鬱に焚き火の炎を見るときともなしに眺めていた。時折、眼鏡のレンズの下の物憂げな瞳が炎の照り返しの瞬きの合間に見え隠れしている。

その火を挟んで反対側にはピンクの鍰広の帽子とピンクのドレスを纏った小柄な深窓の令嬢……のように見える外皮と形状のイマジン、アリスが座っており、瞳子と同じように炎を照り返していた。

> i 1 1 3 7 4 — 5 3 8 <

あれから四ヶ月が経った。

透を失い、停止したままの自分の世界から「ライダー大戦の世界」へと渡った瞳子は融合した世界の混沌とした地形を延々と徘徊していた。

「瞳子の世界」のある場所は、「九つの世界」の宇宙域のすぐ隣に位置していた。

「隣」と言っても三次元的に横に並んでいる訳でもないが、とにかく宇宙としては、「仮面ライダーの九つの世界」の宇宙域に最も近い「仮面ライダーとはなんの関係もない世界」のひとつだった。

なぜ、そんな「仮面ライダーとはなんの関係もない世界」にディケイドと九つの世界のモンスターが現れたのかと言えば、

ディレイドのシステムの中核を得た今なら分かる。

ディケイドが第六階層での総攻撃で中破し「瞳子の世界」に吹き飛ばされた時、宇宙境界線に穴を開け、「全ての九つの世界に隣接する瞳子の世界」に九つの世界のモンスターが引きずられるようにして転がり込んできたのだ。

元々ワールドスライダーであるデイケイドの到来と、そうでないモンスター流入までの間には体質の違いに因る大きな時差が生まれただが。

そしてこれが透の活動を阻害してまでマスターライダーたちがデイレイドを排除した理由でもある。

ワールドスライダーが宇宙を渡る際、その境界をほんの僅かに浸食しそれぞれの世界を部分的に癒着させてしまうのだ。

もしも世界が「一枚の布」だとしたなら、ワールドスライダーは「針」だ。それも、糸を通した針。

それが複数の世界を渡り、挙げ句あちこちを行き来したらどうなるだろう。

九枚の布は、貫いた糸に寄り集められ皺くちやになっってしまう。

世界の融合を促進していたのは、誰あろう、「システム・デイケイド」たちだったのだ。

（あと、あの震とか言う女もね。）

ふと、たびたび突っかかってきたあの女のことを思い出した。

そう言えば、ファンガイアに囚われ使役されているらしき姿を見たつきりだ。

まあ、いい。

そもそもデイケイドの記憶が万全で、そういった「世界を渡るだけで世界融合を促進してしまうリスク」を考慮してくれていれば、透もそれに倣って行動方針になんらかの対策を加えたはずだ。

デイケイドを中破させ、その損壊程度もろくに見ずに運用したマスターライダーたちの罪も重い。

そして何より、透が殺されたに至るそもそも元凶であるディシエツドとデイヴオイドを倒さねばならないのに、なぜかあの二体の存在が、同じ『システム・デイケイド』以外には認識できなくなっているのが厄介だった。

マスターライダーにも認識できないほど、あの二体は自らの存在を完全に隠蔽している。

おかげでデイケイドのあとを辿って現れた透が「悪魔の影法師」などと呼ばれたが、本当はデイヴオイドこそが、その「悪魔の影法師」に該当する。

個人的にマスターライダーへの怒りは残るが、そもそも元凶はデイヴオイドだ。デイシエッド共々倒さねば、透が浮かばれない。

（宇宙の外の連中に、成仏なんて概念があるのか分かんないけど。）それが今の瞳子の目的だ。

壊れてしまった世界の救済など、もうどうでもいい。透はもう、いないのだ。

あとは復讐のついでにデイケイドとマスターライダーを一発ずつ殴れたら、最高だ。

あの時。

透が消滅して、泣くだけ泣いたあと、起きれるようになった瞳子は立ち上がり、透が遺したベルトと剣とデイレイフォンを取り上げた。デイレイド以外にとっては二十キログラムもあるただの鉄板に過ぎないはずのカレイドブレイドに、瞳子はなんら重さを感じなかった。デイレイドのシステムの中枢を埋め込まれた瞳子は、今やデイレイドと同様の存在。

故に、カレイドブレイドも、ベルトも、自身の身体の一部のように扱えるのだ。

腕や脚を動かすのに重さを意識しないのと同じこと。

そうして自身の身体をゲートとした亜空間に装備をしまい込み、やはり自分のものとなった次元間跳躍能力で「ライダー大戦の世界」へ飛び、彼の地に降り立った途端瞳子の身体から大量の砂が吹き出し、それがイマジン・アリスとなって現れたのだ。

かつてアリスは初に憑依していたのだが、初が元の世界に帰るにあたり、イマジンの憑依能力は宇宙を越えて繋がることができず、接続が断たれては消滅してしまう為、アリスを瞳子に接続し直させた



のだ。

その時はアリスの存在維持以外のことは特に何も考えていなかったのだが、良く考えてみれば「瞳子に憑依する」ということは「ディレイドに接続される」ということでもある。

意図せずシステムに組み込んでしまったアリスに、透を失った衝撃から立ち直りきれなかった瞳子には何も言うことができなかった。

ただ、それはアリスも同様で、一度は「電王の世界」の融合消滅と共に瞳子が消滅した際、一緒に消えたはずのアリスは、この「仮面ライダーの世界」に再び瞳子という存在が現れた為、再び存在確率を得たのだ。

その精神状態は世界消滅当時のままで、再会を喜ぶどころではなかったが。

自分たちの存在の在り方を自覚し受け容れたのは、それから少し経ってからのこと。

だが、瞳子にとってはアリスは間違いなく一緒にいたアリスで、アリスにとっても同じく瞳子は瞳子。

だから、結局一緒に旅をすることになった。

『ねえ。どこにいくの?』と訊ねるアリスに曖昧な返事を繰り返しながら、瞳子とアリスは世界を彷徨った。

正直、ディレイドやディヴオイドを探す宛が全くなかったのだ。

『システム・ディケイド』のデータリンクも探知の役には立たない。だが立ち止まることだけはできなかった。

たびたび現れる、消えたはずの九つの世界のモンスターどもや、見たこともないモンスターに遭遇しては、変身して、戦って、蹴散らして、逃げてを繰り返し続けた。

中には変身した瞳子を指して「ディケイド!?」と反応するものもいたことから、ディケイドも残存していて、同様にこの世界を放浪しているものと推測された。そして、モンスターたちがディケイ

ドを狙っていることも。

そんなことはどうでもいい。瞳子が探しているのはディシエッドと  
ディヴオイドなのだ。

草の根を分けてでも、必ず見つけ出してやる！

(……………でも……………)

炎を眺めたまま、瞳子の身体がやがて船を漕ぎだした。

瓦礫に腰掛けた瞳子の上半体が、ぐらり、ぐらりと揺れる。

いつの間にか、隣にアリスが腰掛けていた。

『トーゴ。寝ちゃいなよ。起こしてあげるから。』

「……………ありがとう……………」

身体を支えるアリスに身を任せ、瞳子はまぶたを閉じた。

四ヶ月。

この世界が存続している以上、ディシエッドもディヴオイドもどこ  
かで足止めを喰っているに違いないのに。

四ヶ月。

方々を歩き回ったが、全然見つかる気配がない。

遭遇するのは、モンスターばかり。

八つ当たりのように片っ端から殲滅してはいたが。

(……………でも、どんなにモンスターをやっつけても、見える景色が変  
わらないよ……………透……………)

たまらない倦怠感に、瞳子は逃げるように眠りに落ちた。

やがて差し込む陽の光に目を覚ました瞳子とアリスは岬<sup>ねづみ</sup>としていた  
この廃屋から出て移動を開始した。

ここに辿り着いた時は暗くてよく分からなかったが、この辺りは住  
む人間のいなくなったゴーストタウンのようだった。

山々に囲まれた窪地に、中心を貫く河に沿って作られた街。だった

場所。

枯れた河とその周囲に立ち並ぶ半壊したビル群を見下ろしながら、瞳子とアリスは坂道を降りてゆく。

やがて坂道が終わり、拓けた場所を街へと通り抜けようとしたところで二人の前にわらわらとモンスターの群が立ちはだかった。

「……………」

グロンギとオルフェノクとイマジンの混成群。

結局ディレイドが相對することはなかったが、グロンギの存在は「警察官の瞳子」の記憶で覚えている。

「警察官の瞳子」は消えてしまったけれど……………。

一瞬浮かんだ感慨を振って捨て、瞳子はカレイドブレイドを引き抜いてカードと共に身構えた。

両手で構えたカレイドブレイドのスライドカバーを納刀の動作で開き、中にディレイドのマスクが描かれたカードを挿し入れ、再び両手で掴むと抜刀の動作でカバーを閉塞した。

《カメンライドウ・ディレイド!》

途端に無数のヴィジョンが殺到し、グレーのボディースーツ姿になった瞳子の頭部に彼方から飛来した黄色のライドピラーが四方から突き刺さり、たちまち全身の各部をイエローに変じるとそこにディレイドの姿が現れた。

瞳子の体格に沿った、かつて透が変身したものよりも小柄なディレイドが。

ボディラインも瞳子に合わせて調整され、腰のラインや胸郭の形状などからはつきりと女性型であることが分かる。

変身が完了したディレイドは一枚のカードを取り出すと、カレイドブレイドに挿し入れカバーを閉塞した。

《カメンライドウ・クウガ!》

『アリス。ちよつとこつち来て。』

「ん!」

ピンクの parasol「アリスアンブレラ」を構えてやる気満々のアリ

スを呼び寄せ、デイレイドはカレイドブレイドでアリスの背中を一闪した。

剣を透過されたアリスの身体はたちまち輝きに包まれて体格を増し、そこに古代から蘇った封印戦士・仮面ライダー　クウガの赤い姿が現れた。

《フォームライドウ・クウガ・タイタン！》

続けてカードを装填されたカレイドブレイドの一閃を受け、アリスが変移したクウガの体色が赤からシルバーとパープルのツートンに変わり、装甲が大きく張り出して変形し「クウガ・タイタンフォーム」へと移行する。

それに伴って、持っていたアリスアンブレラがタイタンフォームの干渉を受け、握った部分から大剣「タイタンソード」へと変移した。

『よし！行って！』

『うりやりやー！』

デイレイドの指示に、およそタイタンフォームに似つかわしくない内向きの動作で跳ねたクウガは、アリスの動作でグロンギの群に駆け寄ると一体、二体と斬り払い始めた。

それを見送ったデイレイドは、今度はベルトに手をかけた。

このデイレイドのベルトバックルは、あの無骨な鉄塊のようなものではなく、中央に赤いレンズをはめた白いボックスと、それを捧げ持つかのような両手のような形のシルバーのフレームを持つ、かつ『スクエアフォーム』時に現れたベルトの形状となっていた。

瞳子が何かをした訳ではない。

透から受け取った時は確かに無骨な機械の塊だったはずなのだが、瞳子が使うと決めて喚び出した時にはもうこの形になっていたのだ。恐らく、スクエアフォームの基点となった自分に合わせ、システムが勝手に変換したのだろう。

特に異常も問題もないので、瞳子は普通にこれを活用していた。

バックルの、掌型のフレームを左に引くと、中央のボックスが右上を基点に回転して立ち上がった。

その側面に現れたスリットにカードを挿し入れ、ボックスを振り払って押し倒し元の位置に戻す。

《デュアルカメンライドウ・ファイズ!》

するとデイレイドの身体をドット柄のノイズが包み、たちまちベルトを残して仮面ライダー ファイズへと変移させてしまった。

『はああ!』

そしてカレイドブレイドを振りかざしてモンスターの群に飛び込んでゆく。

アリスがイマジンである為、既に対イマジンの特性は常時発揮されている。

そして瞳子とアリスは離れていても、システムの中では繋がっており、スクエアフォームと同じ機能を発揮した今は、デイレイドもアリスも同時に「クウガの封印パワー」と「フォトンブラッド」の特性を含めた三種混合の能力を獲得している。

アリスをシステムに取り込んでしまったのは単なる偶然からだったが、この四ヶ月、瞳子とアリスはこうして戦い続けてきた。

『てやあああ!』

モンスターの群は、デイレイドとアリスによって種類の区別なく片っ端から薙ぎ倒されていった。

やがてモンスターの数も半ばに減じ、ここでの戦闘も問題なく片付くと瞳子が考えたその時、突如別方向から声が聞こえた。

《アサルトカメンライドウ・ライダーキック!》

くぐもった認証音声が響き渡ると同時、この戦場に無数の仮面ライダーたちが跳び蹴りの姿勢で降り注いだ。

『!?!?』

『うつひゃー!?!?』

あまりに突然のことに瞳子もアリスも泡を喰うが、驚くべきことにこれだけの乱戦状態にも関わらず、降り注ぐ仮面ライダーの雨はモンスターだけを的確に貫いていた。

それも、戦場に入り乱れた三種のモンスターの配置を見切り、場合によって密集している所にいるグロンギのみを狙い撃ち、グロンギの強力な断末魔の爆発に周りのモンスターを巻き込ませるといって周到ぶり。

その上デイレイドとアリスにはかすりもしない。

やがて、様々な爆音を立ててモンスターたちが一体残らず消えていった。

再び、辺りは山間部特有の自然の音だけの世界となる。

『……………どういっつもり？』

デイレイドは、瞳子はその方向を見上げた。

山の斜面に突き出た岩の上に立つ、アサルトライフルの銃口を天に向けた灰色の悪魔、デイシエツドの姿を。

デイシエツドの横線で構成されたマスクと胸郭には、最後に見た時にはなかった深い亀裂が斜めに穿たれていた。

透の最後の攻撃は、届いていたのだ。

感慨に胸を熱くする瞳子の前で、デイシエツドは岩の斜面を滑り降りながらデイシエツドライバーのマガジンスロットに一枚のカードを挿し入れた。

いつもは専用のマガジンを装着する部分で、カード一枚分どころではない幅があるのだが、よく見ればマガジンスロットの内壁にカードを支えて通すスリットが付いていた。

ともあれアサルトライフルの中にカードを挿入し、サイドのレバーを引いたデイシエツドはそれを天に向けトリガーを引いた。

《カメンライドウ・デイスガイズ！》

爆音の割に銃口からは何も射出されず、認証の音声と同時に横線のノイズに身を包まれたデイシエツドの身体は鋭角のシルエットを締め、やがてそこに人間・男性の姿を現した。

それが目の前に着地するや否や、デイレイドがいきなり斬りかかった。

斬撃をアサルトライフルで難なく受け止めた男は、尖った歯を剥き出しにして獰猛な笑みを浮かべて見せた。

「おうおう御機嫌斜めじゃねえか。なんかムカつくことでもあったのか？」

「そういう冗談で嫌いなのよ。」

不機嫌さを前面に押し出し吐き捨てるデイレイド。

事実、瞳子は怒り狂っていた。

デイシエッドが変化した人間の姿が、透のものと同一だったから。

透の顔の造作で、三白眼をぎらつかせ凶暴に嘲笑っているのだ。

ただし、透にはなかった、顔に斜めに走る傷跡が唯一の造形的な違い。

ただでさえ探し求めていた憎き仇敵に透を穢すような真似をされ、怒りの余り視界が赤く染まった。

> i 1 1 3 7 5 — 5 3 8 <

「……今すぐその質の悪いギャグをやめて。殺しそうだわ。」

「そうは言ってもよ。俺も適当なデータがデイレイドからコンバートしたモンしかねんだから、しょうがねえだろ」

「何がしょうがないってのよ！」

ぎりぎり、交差したカレイドブレイドとデイシエッドライバーが軋みを上げる。

「こちとらこれでも最大限の誠意を示してるつもりなんだぜ？ 提案がある。まずはハナシだけでも聞けや。」

「……………！？」

瞳子は腕の力を緩めぬまま、怒りの暴風が吹き荒れる意識の中の、ほんの僅かに残った冷静な部分で黙考した。

確かに、瞳子らに致命打を加えるのが容易なところをデイシエッドはわざわざこうして話を持ちかけてきている。

これまでの経緯からすれば異例中の異例だ。異常と言っている。

それに、倒すべき敵であると同時にデイヴオイドの手掛かりでもある。

そこまで考え、デイレイドはデイシェッドライバーを押し返して離れると変身を解除した。

「……言ってみなさいよ。」

「おう。ありがてえな」

油断なく睨み付ける瞳子の前でアサルトライフルをくるりと回すとどこへともなく掻き消して仕舞い込み、デイシェッドは透ではあり得ないだらけた姿勢で足の位置を変えると片手を出して語り出した。

「まあとにかく、ダレにとっても厄介な事態になってんだよコレが。」

言って親指で肩越しに背後を示すが、別にデイシェッドの後方に何かあるのではなく、そのどこかの「誰か」を示しているのだろう。

「今この世界には第三階層から降りてきた仮面ライダーどもが寄ってたかってデイケイドを追い回してる。それだけじゃねえ。「スーパーショッカー」とか言う原住民の組織が「敵の敵は味方」とばかりに仮面ライダーどもの敵対組織・敵性要素と手を組み取り込んでちよっかいを出してやがる。」

「それを助けに行くって言うの?」

「ふざけるよ」

瞳子の推測を、デイシェッドは唾棄して否定した。

「イカレたデイケイドにや用はねえよ。だがまあ、上層の仮面ライダーどもと原住民の組織を引きつけといてくれるのは大助かりだわな。」

と、そこでデイシェッドの顔つきが真剣味を帯びた。

「この「ライダー大戦の世界」。九つの世界を接触融合させる俺の目的はだいたい果たしたんだが……おいおい怒んじゃねえよ。ハナシはこれからだ。どうやら「ライダー大戦の世界」に統合されず、かつ、どの「九つの世界」とも違う新たな世界が分岐して現れたらしい。」

「……え?」



険しい顔の瞳子が怪訝に問い返した。

「悪いけど言葉通りだぜ。    どうかの何モンかが、この宇宙域に新たに世界を作りやがった。    俺の使命としちゃあ、同じ階梯にある世界にやあとりあえず行つとかにやいけねえ。    そして「デイレイド」。    デイシエッドは、瞳子を指して「デイレイド」と呼びかけた。

「お前の目的も分かつてるぜ。俺とデイヴオイドを破壊したいんだる？」

「そうだね。」

瞳子は殺気立った目であっさり肯定した。

別に隠すようなことではない。対立の布告は「ブレイドの世界」でとうに為されている。

「会えるぜ？デイヴオイドに。    俺が全ての世界を接触崩壊させれば、細かく言やあ接触崩壊の準備さえできれば、デイヴオイドは現れる。    そういう順番で動いている。    これまでもずっと。    そういふふうになってんだ。」

「あんた一人じゃ入れないなんて、変な世界だね。」

「おう。察しがいいな。    そういうことだ」  
つまり。

新たな世界が発生した。

その世界は、ワールドスライダーの侵入を拒むことができる、これまでとは違う異質な世界。

だが、一体のワールドスライダーで駄目なら二体掛かりならどうか。    それでデイシエッドは瞳子を、デイレイドを必要とした。

互いに殺し合うしかない者同士、互いの目的の為に、最後の協力にして、最後の決着をつける為に。

「……いいよ。連れていきなさいよ。」

「いぎゃっは！イイ返事だ！」

途端に元の調子で哄笑を上げたデイシエッドに、瞳子は渋面で返した。



track・71 寂寞の傷痕（後書き）

ここから物語は劇場版完結編の時系に入ります。

だからと言って、原作の連中と合流することはないのですが。世界  
って意外と広い。

今頃ディケイドは仮面ライダーたちに追い回されたり逆襲したりし  
ていることでしょう。

「……で？その心当たりって、どこ？」

「ひゃは！まあそう急くんじゃねえよ。俺が最も接近できたルートはもう使えねえ」

瞳子の問いに、デイシエッドは手をひらひら振って応えた。

「どこのどいつがどんな手え使って宇宙丸ごとひとつ創り上げたのかは知らねえが、まあ出来立てほやほやなんだろうな、宇宙境界線が不安定でランダムに流動してやがる。おかげで折角見つけた入り口はもう消えてどっか行っちゃまった。」

「その、境界線が不安定なせいで入れないの？」

「いいや。」

瞳子の言葉に、デイシエッドがしかめっ面で肩越しに遠くの街並みの建物をひとつ指さした。

「カントンに言やあ、あのビルがその世界だしたら、ビルごと荒波に浮いて漂ってるようなモンで、玄関に取り付きさえすりゃああとはドアを開けるだけだ。ワールドスライドにジャミングかけてんのは意図的なモンだろうよ。」

「誰かがドアに鍵を掛けたってこと？」

「いんや。イイトコ俺がドアノブ掴んだ瞬間にあっちからドアノブ掴み返して押さえただけなようなモンだ。だから、今度は二人掛かりならぜってえ入れる。」

犬歯を剥き出して壮絶な笑みを浮かべるデイシエッドに、瞳子は敵意とは別の嫌悪感を催した。

「なんだよ。そんな顔すんじゃねえよ」

「こつちの台詞よっ！？」

デイシエッドの人間態は、ずっと無表情だった透の顔を模しているのだ。

別人とは分かっている、こつちも表情豊かな「透の顔」は正直気持

ち悪い。

だがデイシエッドは頓着しない。

「しようがねえって言っただろ。まあとにかくそんなワケで、これから出入り口を探さにやなんねえ。」

「何かアテがあるの？」

「ねえな。けど、知ってそうな奴ならその辺にいんじゃないかねえのかなあ？　なあ！」

言いざまに振り上げたデイシエッドライバーが立て続けに火を吹き、無数の光弾が先ほど例え話に指したビルの上階を横薙ぎに打ち砕いた。

「！？」

突然のことに頭を抱えて屈み込んだアリスと共に振り返った先では、上階を吹き飛ばされたビルの上で土埃がもうもうと立ちこめ、やがて風に流されてゆく。

その跡には、二体の異形が立っていた。

「……………！？」

見たことのない種類の異形だった。

だが、どこか既視感に似た見覚えを感じる。

威風堂々とした仁王立ちで突然の銃撃にも泰然としているその偉容から、かなりの力を持っているか過信しているかのどちらかだろうと思われた。

そして大柄な体躯のあちこちに見受けられる一番大きな特徴、ステンドグラスのような色とりどりの表皮に気付く。全体の印象はフアンガイアとはかけ離れ、似ても似つかないが。

「……………まさか！？」

そのことに思い至った瞬間、遠くのビルの上にはいた二体の異形の姿が掻き消えたと見た時にはもう瞳子の目の前に出現していた。

「！？」

『トーン！？』

横っ飛びに抱きついたアリスと共に転がった瞳子の頭上を剛腕の颯

風が薙いでいった。アリスの助けがなかったら瞳子の頭など果実のように砕かれたことだろう。

地面を転がり横を見れば、デイシエッドももう一体の異形の攻撃をデイシエッドライバーで弾き返したところだった。

初撃の攻防を終え、だがあるうことか二体の異形はそこで数メートルの距離を跳んで後退し並び立った。

『ふむ。そこそこやるようだ。』

おもむろに片方が流暢に語りだした。

『我は『ノウエム』の『セプタゴン』がひとり、フラウド。』

『同じく『セプタゴン』がひとり、ポルトラト。』

併せて、隣の異形が名乗りを上げる。

『「セプタゴン」……?』

それを聞いた途端、瞳子の意識の中で意図しない何かが閃き、その謎の感覚が迅速に目前の存在の情報を内部で検索し、瞳子に開示してきた。

『「……え? なに? 『セプタビーイング』!?』

『おう、気付いたかよデイレイド?』

隣のデイシエッドが敵を睨み遣りながら問いかけてきた。

『気を付けな。ライブラリに名があっても、当人どもがそう名乗ってるとも限らねえ。』

それは瞳子が初めて体験するデイレイドのシステムの機能。怪人を始めとする異種族を目にした瞬間に種族名が自動で検出されたことに瞳子が困惑している内にデイシエッドは二体の異形に向けて犬歯を剥き出した。

『ずいぶん余裕じゃねえか!今ので畳み掛けて来ねえんざ、七種混合だからって調子コキ過ぎなんじゃねえか!?』

『問題ない。』

『我ら『ノウエム』は誇り高き一族。汝らが真つ向勝負をするに足る力を持っていると確信すればこそ、こうして汝らの支度が整うのを待っている。』

セプタビーイング。七種混合体。

デイシエッドの遣り取りを聞きながら瞳子はその言葉の意味を把握した。

そして「ポルトラト」だかの鷹揚な台詞を聞いて、半ば確信する。こいつらのベースは「ファンガイア」だろう。この上から目線の言い種は、錠破りのファンガイアの慢心に非常に酷似している。

フラウドとポルトラトが続けて告げながら身構えた。

『さあ。遠慮なく持てる力を存分に発揮するがいい。』

『いざ尋常に勝負せん。』

「は！後悔すんじゃないぞ！？俺は能力差なんてモンにや斟酌しねえからな！」

アサルトライフルのスロットにデイシエッドのマスクが描かれたカードを挿し入れながら吼えた。

「……気分悪いわねあんたたち。」

デイレイドのマスクが描かれたカードを取り出し、瞳子が渋面で呟いた。

「虫酸が走るわ。ちょうど、ついさっきムカつくことがあったばかりなのよ。……遠慮なく八つ当たりさせてもらっわ」

言ってデイレイドライバーにカードを挿し入れ、スライドカバーに手を添えた瞳子が、それに合わせたデイシエッドが同時に叫んだ。

「変身！」

《カメンライドウ・デイレイド！》

《カメンライドウ・デイシエッド！》

瞳子がデイレイドドライバーのカバーを抜刀の動作で閉塞し、天に向けられたデイシエッドドライバーが火を噴いた瞬間に、二人の姿に無数のヴィジョンが殺到した。

彼方から飛来したいくつもの黄色いライドピラーがグレーのボディスーツ姿に移したデイレイドの頭部に前後左右から収まるなりその身の各所をイエローに変じさせ、デイシエッドの背後からグレーのライドプレートが数個、まるでブーメランのようにくるくると回

転しながら左右から旋回して現れ、顔面に次々と突き刺さるとそのグレー一色だったボディのカラーを部分的に黒、あるいは白に変更させた。

デイレイドのデイメンションヴィジョンがブルーに、デイシエツドのデイメンションヴィジョンが暗いオレンジに輝きを放つと、二人の変移は完了した。

『さあ景気良くバラバラになりやがれよおまえら!』

『目の前と言わず世界から跡形もなく、消えて。』  
そして各々武器を構えて二体の異形へと駆け出していった。

『っはあ!』

デイシエツドの開幕一番のデイシエツドライバーの斉射がフラウドとポルトラトを滅多打ちにした。

『がつ!?』

『うっお!?』

スタンドグラス様の体表で無数に弾ける着弾に後退る二体の異形めがけて銃をフルオートで発射しながら駆けるデイシエツド。

『いぎやつは!オラオラオラオラア!』

哄笑をあげるデイシエツドを見送りデイレイドは途中で足を止め、翻したその手に黄色い薄型携帯電話『デイレイフォン』を取り出した。

混合怪人が相手となればこれを使わない手はない。

デイシエツドにそのつもりがあつたのかは定かではないが、敵二体がまとめて牽制されている内に瞳子は自身の準備を進める。

納刀の動作でデイレイドライバーのカードスリットを展開させると開いたデイレイフォンのディスプレイをリボルバー式に九十度回転させ、キーパット部をカードスリットに差し込んだ。その瞬間に刀身が中心に走る溝を広げるように伸長展開する。

その溝の下には、一直線に並ぶクウガ、アギトからキバ、デイレイドまでの十旗のカメンライダーを示すライダーズクレストが描かれ



ている。

デイレイドは、指先で刀身の溝のクウガのライダーズクレストに触れた。するとマークが発光し、デイレイフォンのディスプレイにクウガの紋章が表示される。

続いて指先が溝にそって順にマークを辿ってゆく。それに伴いディスプレイにそれぞれのマークが表示され、認証音声がそれを読み上げられていった。

《クウガ・アギト・リュウキ・ファイズ・ブレイド・ヒビキ・カプト・デンオウ・キバ・ディケイド!》

最後まで指先が辿り切った途端、全てのライダーズクレストが黄色の輝きを放ち、そしてディスプレイにはデイレイドのマークが表示された。

《ファイナルカメンライドウ・デイレイド!》

最後の認証と同時に、デイレイドの周囲に十枚のカードのヴィジョンが現れ取り囲んだ。

それらには、クウガから始まる十騎の仮面ライダーのライダーズクレストが描かれている。

それらをデイレイドはカレイドブレイドで全て一閃した。

剣を水平にして一回転したデイレイドの周囲でカードのヴィジョンは全て打ち砕かれ粉々になった。

微細に飛び散るカードのヴィジョンの欠片。

だがそれらは落下も消滅もせず、しばし滞空するとやがてデイレイドを中心に渦を描くように旋回し、デイレイドの身体に吸い込まれてゆく。

全てのヴィジョンを飲み込んだデイレイドの身体が輝きを放ち始める。

胸郭と肩のアーマーがドット柄のノイズに包まれ歪むように変形を始めると、胸からバラバラに切り刻まれたライドカードの欠片が無数に飛び散った。

それらのカードの破片は即座にデイレイドの胸板にべたべたと張り

付いてゆく。

それに伴いブレストアーマーも変形を進行させ、カードの欠片の間を仕切るラインがイエローに変色した。

同時に、輝きを放っていたデイレイドの全身が光を納め、腕脚の黄色だった部分が全てシルバーに変じていた。

そして周囲の光景がマーブル模様のように歪み、渦の基点がデイレイドの頭部に至ると、デイレイドの額にあるうことかデイレイド自身のライドカードが据え付けられたデイレイド自身のライドカードが据え付けられたデイレイド自身のライドカードが据え付けられたデイレイド自身が据え付けられた。

さながら王冠のように。

続いてスクエアフォームのベルトバックルが僅かに横にスライドすると、デイレイドベルトの周囲に九つのライダーズクレストが浮かび上がり、まず正面に現れたクウガのマークがアーケルの中央部分アルティメットフォームの金のバックルに変移し、デイレイドベルトに張り付いた。

そして僅かに回転しアギトのマークが正面に来ると、アギトのマークもシャイニングフォームの持つベルトバックルに変移しベルトに張り付いた。

続いて赤のカードデッキを設置した龍騎サバイブのバックルが、コネクタが空の状態のファイズドライバーが、スピードスートを描いたバックルが、音撃鼓が、カブトゼクターが、赤い枠のディスプレイを設置したターミナルバックルが、キバットバット三世が次々とベルトに合体していった。

十ものバックルを収める為、さすがに本来のデザインに比べてやや左右に縮まった形状にアレンジされていたが。

そして一周してきたデイレイドのバックルが正面を向いたことで、ベルトの変化は完了した。

腰には十騎のライダーベルトのバックルを巻き、胸板にはバラバラに刻まれたライドカードがステンドグラスのように埋め込まれ、青

かったデイメンションヴィジョンはイエローに変じ、その上の額には自らのライドカードをかざし。

正面のベルトバツクルの形状こそ透が変身したものと違うが、これがデイレイフォンによって発現したデイレイドの正規の発展形態『カレイドフォーム』。

胸板に埋め込まれたバラバラのカードの欠片が、デイレイドが姿勢を動かす度にちらちらとその配置をずらす。まるで万華鏡の色紙のように。

『……行くよ、アリス。 ああ見えても七種類の能力を持つてるから気をつけて』

『うんっ！』

アリスアンブレラを構えて元気良くうなずくアリスと共に、二体のセプタビーイングめがけ疾く駆け出してゆく。

コンクリートの壁を砕いてセプタビーイング、彼ら自身が言う所の『セプタゴン』の一人フラウドが無人の朽ちかけたホテルのロビーに転がり込んできた。

『うおおおおお！？』

さらにその周囲を無数の光弾が跳ね回る。

『いぎゃーはっはっは！ オラオラどしたどしたあ！？ 「ぬうこれほどとわ」とか言ったらあまりにもテンプレ過ぎだぜ頼むからこれ以上笑かしてくれんなよな！』

トリガーを握りっぱなしにして銃の斉射を続けながらディシエッドが砕かれた穴をくぐって入ってきた。

『……………！？』

一回転して銃撃を躲したフラウドが、僅かに身を震わせて緊張に固め、怒気を膨らませた。

『ぎゃっは！凶星かよ！？ 怒ったかよ！？』

嘲笑を叩きつけ、なおも光弾をばら撒く。

『システム・ディケイド』としての特性とは関係なく、ディシエツ

ドはこういった感情の機微に敏感で、それを逆撫ですることが得意だった。

原住民との戦力差は明らかで、特に精神的揺さぶりなどかけなくても使命は遂行可能なので、別に戦略として軽口を叩いている訳ではない。

本人にも自覚できない、もはや「趣味」としての行為でしかない。事実、無駄口で窮地に陥ったことが一度もないのだ。

ナチュラルに悪罵を吐き、そして機械の精密さで使命を遂行してきた。

例え七種混合体だろうが、ワールドスライダーが原住民に負ける道理がないのだ。

特に今、デイヴオイドと接続し、直接目視されない限り認識されない状態にあるデイシエッドは。

『フン。歯ごたえがねえなあ。 ええと、せぶたゝ……なんつつたつけ？』

嘲りながら、デイシエッドはベルトから取り出したマガジンをデイシエッドライバーのマガジンスロットに下から叩き込んだ。

『……侮るな！我ら『セプタゴン』の力、こんなものでは』  
『答えなくていいよ覚えねえから』

《アサルトカメンライドウ・ライダーキック！》

そして突きつけた銃口から仮面ライダー一号、二号を始めライダーキックを必殺技に持つ仮面ライダーが大量に射出された。

『いぎやははははははははは！』

そして弾速で放たれた仮面ライダーが直線上にある何もかもを打ち砕き貫いてゆく。

やがて斉射が止み、ホテルの地階を反対側の壁まで真っ直ぐに貫いたところでデイシエッドはその異常に気付いた。

撃破した手応えがない。

『……………？』

訝しげに首を傾げたところで、激しい衝撃がデイシエッドの身体を

吹き飛ばした。

『ッガッ！？』

それも一度ではなく、凄まじい速さで二度、三度。あとは数えるのも面倒なほど立て続けに襲いかかる。

だが既にデイシエツドの感覚は異なる時間流の干渉を感知していた。

『クロツクアップかよ！』

吼えたデイシエツドは床を転がる途上で銃から空のマガジンを吹き飛ばし、ベルトから取り出した弾倉をデイシエツドライバーに叩き込んだ。

《アサルトカメンライドウ・クロツクアップ！》

くぐもった声が認証を告げ、フルオートで斉射された「弾丸」が目制止まらぬ超高速で飛翔した。

デイシエツドの銃から解き放たれたのは、カブト、ザビーを始めとするクロツクアップシステムを持つありとあらゆる仮面ライダー。十騎のマスクライダー・ライダーフォームが加速空間に突入するなり、それらは加速中のフラウドの姿を捉え、全員が同時にそちらを振り向いた。

『っなっ！？ こいつら、どこから……！？』

絶対的有利だと思っていたフィールドに踏み込まれたフラウドが驚愕に目を剥いた。

一斉に襲いかかってくる仮面ライダーの群に泡を喰ったフラウドは、慌てて「そちら」に逃げ込んだ。

通常の時の流れに置き去りになり静止しているデイシエツドに攻撃を加えようにも、新たに現れた仮面ライダーが邪魔をしており近付けなかったのだ。

やがてフラウドに殺到した仮面ライダーの拳は、蹴りは、鏡の前で空を切った。

『……は！ やっぱそういうことかよ！』

打ち出したカブトらの情報を読み取ったディシエッドが氣勢を上げながら、ベルトから引き抜いたマガジンをスロットに叩き込み引き金を引いた。

《アサルトカメンライドウ・ディメンションダイバー!》

そしてその半ば砕けた姿見めがけてディシエッドは銃を乱射した。

『……は、は。やはりミラーワールドまでは追ってこれまい!』

現実世界の鏡の向こうからこちらを覗き込んで手をこまねいている仮面ライダーどもから後退り、フラウドはようやく緊張を解いた。

分身を行使するワールドスライダーのことは聞いている。ボディカラーはシアンだと聞いていたが、そんなことは些細なこと。

『あとは、一番奴に近い鏡からとどめを刺してやれば終わりだ』

本体さえ倒してしまえば、いくら仮面ライダーを繰り出そうとも全て消失してしまう。

そう思つて振り向いた、半ば砕けた姿見から多数の仮面ライダーに飛び込まれてフラウドは再び喫驚した。

『んなななにいいいい!?!』

慌てて咄嗟にクロックアップするが、新たに現れた十五体もの仮面ライダーのうち、風変わりな二体の仮面ライダーが、取り出したカードを左腕の機械に一閃させたなり加速空間に追従してきた。

《アクセルベント。》

『んなばかなあああ!?!』

フラウドの知る由もないことだが、それはディシエッドのみが持つカード、「疑似仮面ライダー」オルタナティブと、オルタナティブ・ゼロ。

今度こそ絶対有利と思われたミラーワールドまで踏み込まれ、泡を喰ったフラウドはトゲを生やした凶悪な剣を振りかざす二体の仮面ライダーに追い立てられた。

七種のモンスターの力を融合させてもフラウドの身体はひとつ。

オルタナティブとオルタナティブ・ゼロの連携に翻弄され、そのト

ゲ付き大剣の連撃を喰らい、右に、左にと殴り飛ばされる。

『ッガッ!? がああああああ!?!』

やがてクロックアップの限界時間を迎えたフラウドは、二重の斬撃を受けて鏡に飛び込み現実世界へと帰還した。

『は、話が違う!?!』

『よう。おかえり。まだ五秒も経ってねえけどよ』

たたらを踏んで転倒したフラウドの前に、嘲りを浮かべたディシエツドが立ち塞がった。

『ひっ!?!』

見下ろす凶悪な造作のマスクに怖気を震わすフラウド。

その二人の周囲に、突如銀のオーロラが舞い降り完全に取り囲んだ。

『うん、まあ原住民相手にこの手を出させたことは褒めてやるよ。』

慌てたフラウドが、逃げようと立ち上がるなりそのオーロラに突撃するが、簡単に弾き返されてしまう。

『ああああああ!?!』

『やめとけやめとけ。こりや宇宙境界線だ。破ろうつたつて破れるとかそんなんじゃないよ』

呆れ混じりにぼやきながらディシエツドはベルトから弾倉を取り出してディシエツドライバーに下から叩き込んだ。

『うああああ!』

フラウドは狂乱したままクロックアップしてディシエツドに襲いかかるが、一瞬早くディシエツドの前にも銀のオーロラ「レイヤー」が舞い降りフラウドの突撃を阻んでしまった。

呆気なく弾き返され、クロックアップを解除して尻餅をついてしま

う。

『っひひひひ!?!』

『だからもう、おめえはおしまいだ』  
ひよこ、と突き出されたアサルトライフルの先端が、侵入を阻むはずの銀のオーロラをあっさりすり抜けてこちらを向いたことが、フラウドにさらなる混乱をもたらした。

『いいいいいい！？』

デイスエツドが、銃側面に生えたレバーを引いた。

《ファイナル・アサルトカメンライドウ・スラツシユ！》

『じゃあな』

そして銃口から吹き出した大量の仮面ライダーの斬撃がなます斬りにし、最期に仮面ライダー アークの巨大な一閃がフラウドの身体ごとこのホテルのビルを一刀両断にした。

上空を、長大な蛇竜が身をくねらせて旋回し、色ガラスのようなウロコをまるでミサイルのように撒き散らし地上を爆撃する。

地上ではデイレイド・カレイドフォームとアリスが駆け回り、ウロコの爆撃を避け回っていた。

『さあどうしたね。この程度で殺されてしまうのかな？』

『虫酸が走るわ。あの言い種。』

上からのポルトラトの台詞に、瞳子は小声で吐き捨てた。今さら舌戦による議論など無意味。

いま上空を飛び回っているのは、ポルトラトが変身したものだ。

セプタビーイングの中の魔化魍の特性を強調させて身を膨張させ、下半身を蛇のように変形させたのだ。

だがどう見ても申し訳程度に生えた不釣り合いに小さな翼であるのよううに自由自在に飛べるはずなどなく、その意味不明な飛翔能力は確かに魔化魍の特性だ。

そしてその飛翔能力は、スタンダードに見えて実に「クロックアップ」や「ミラーワールド」に並ぶ厄介さだった。なにしろ、こちらの攻撃が届かず、向こうの攻撃のみ届くものだから。ここにるのがデイレイドでなければ。

『今のわたしには、加速空間も鏡の中も、地上も空も等しくどうでもいいのよ』

暗い声音で呟いたデイレイドが片手を翻すと、目の前に巨大なカードのヴィジョンが二枚出現し、即座にそれをまとめて叩き斬った。



《カモンライドウ・ヒビキ!》

《ファイナルフォームライドウ・ヒ・ヒビキ!》

認証が響くと同時、離れた地点を駆け回っていたアリスがドット柄のノイズに包まれてその影を膨張させ仮面ライダー 響鬼に変移し、続いて浮かび上がり迅速に回転、変形すると巨大なアカネタカとなつてはばいた。

続いて片手を翻したディレイドの前にカードのヴィジョンが現れ、それを叩き斬った次の瞬間にはドット柄のノイズと共に、ディレイドの傍らにイエローのバイク、マシンディレイダーが出現した。

『行くよ!アリス!』

『うんっ!』

素早く跨りスロットルを全開にして急発進したディレイダーに併走する巨大アカネタカ。

やがてフロントカウルが上を向き、バイクがなにもない虚空を駆け上昇したのに追従してアカネタカも飛翔する。

『……待ちたまえ。それ、バイクだろう?』

『だからなによ。宇宙すら渡れるワールドスライダーの持ち物に何か文句でもあるの?』

まるで理不尽だと言わんばかりのポルトラトのぼやきに、ディレイドは冷たく返した。

『特に透の文句を言う奴は、絶対に許さない。』

『「トオル」? 誰?』

『あいつに文句を言っているのは!わたしと、九つの世界の仲間だけだっ!』

怪訝に聞き返したポルトラトにバイクで突撃し、激突した瞬間にカレイドブレイドの斬撃を浴びせ、さらに続いて飛翔してきたアカネタカの翼がウロコを斬り裂いていった。

『っがああああっ!?!』

苦悶の絶叫を上げ、飛翔の軌道を乱す蛇竜。

己の力に慢心し、わざわざ空に飛び上がった時点で愚策だ。

こうして空にまで追いつかれては、もうどこにも逃げられない。ちなみに今、ポルトラトもデイレイドも既にクロックアップしている。これ以上の加速で逃げることも不可能。

上空に来てしまったが為に、すぐそこに街がありながらミラーワールドに逃げ込むこともできない。

時折、セプタビーイングの中のアンノウンの特性による念動力がデイレイドを捕らえようと干渉してきたが、アギトの特性をも持つデイレイドには効きはしなかった。

『あれだけ大口を叩いておいてこの程度？ 一体きりじゃ憂さ晴らしにもなりやしない。』

心の底から激みを吐き出すかのような深い溜め息を吐きゆるく頭を降った後、デイレイドはカレイドブレイドの刀身の溝を指先でなぞり、片手でベルトを掴むと勢い良く振り払い回転させた。

《ファイナルアタッククライドウ・カレイド！》

『もういい。ひとつだけ、あなたに聞きたいことがあるの。まずは地上に降りなさい。話はそれから。』

ベルトの回転と共に胸郭のカードの欠片も万華鏡のごとく入り乱れ、そしてファイナルアタッククライドの指令を受けたアリスの姿も巨大アカネタカからゼクターカブトやデンオウデンライナーなど次から次へとあらゆるファイナルアタックウェポンに変移されてゆく。

『う、うおおおおお！？』

狂乱したポルトラトが向かってくるデイレイドにウロコのミサイルを次々と飛ばすが、デイレイドはバイクのカウルの陰に屈んでそれを防ぎ、あるいはカレイドブレイドで斬り裂いた。

『いやあああああああ！』

そして、イエローの流星が、九つの武器に変移するアリスが蛇竜の中ほどを貫きその長大な身を大爆発と共に真っ二つにした。

その時、街の方でもビルがひとつ真っ二つになって倒壊したのが見えた。

あちこちから煙をくすぶらせて地面に倒れている、四肢五体備えた姿に戻ったポルトラトをデイレイドとアリス、デイシエッドが取り囲んだ。

「そっち、景気良く吹き飛ばしてんじゃないわよ。肝心な手掛かりでしょう？わたしがこいつ倒しちゃってたらどうするつもりだったのよ」

「は！俺は「システム・デイケイド」のファイアコントロールモジュールだぜ？言わば「破壊者」と呼ばれる由縁そのものだ！壊すのに手加減なんかいらねえだろ？」

「……役立たず」

「拳げ句マスターライダー共に破壊されたデイレイド程じゃねえよ」互いに殺気を立ち登らせて睨み合う。

だがすぐに同時に目を逸らして足下のポルトラトを見下ろした。

「とりあえず、こいつがここに来るまでに辿ったルートと時空震の痕跡から、例の新しい世界の最接近領域が逆算できる。」

デイシエッドが淡々と告げた。

「おまえやれよ。計測に関しちゃデイレイドのが上だ」

「分かってる」

言って、一歩前に出たデイレイドが、苦悶に身を擦るポルトラトの身体にカレイドブレイドの切っ先を突き刺した。

とは言っても、刀身を透過させたに過ぎないが。

カレイドブレイドは迅速にポルトラトの存在律を解析し、「ポルトラトというもの」をあらゆる方面から観測してゆく。

「セプタビーイングのポルトラト」を構成している要素を子細に分析してゆくが、今は関係ない為省略する。

やがてポルトラトがこの世界に降りたつてからの移動経路が明らかになったところでデイレイドは剣を引き抜いた。

「……分かった。行くわよ」

言って、デイレイドは素っ気なく振り返って歩き出した。

『おっ』

デイシエツドの返答に続き、くぐもった爆音が轟いたのを聞いてデイレイドが振り向いた。

完全に振り返ったところでポルトラトの身体が爆発炎上し、それを背にデイシエツドがこちらへ歩いてくる場所だった。

『……別に、殺すことはなかった』

瞳子としてはポルトラトの存在に興味を失ったに過ぎず、わざわざ手を下したことに思わず口を出してしまったが、デイシエツドは採り合わずにデイレイドの脇を通過していった。

『生かしくと邪魔になる。たいがい回りくどいのはムカつくんだ』  
言いながらデイシエツドは、取り出したカードをデイシエツドドライバーのスロットに装填してレバーを引き、虚空に向けて引き金を引いた。

《アタックライドウ・マシンデイシエツダー！》

その途端、デイシエツドの傍らに横線のノイズが迸り、そこに大柄なバイクが出現した。

それはハーレーダビッドソンに酷似していた。

それも、前輪のシャフトが不自然に長く、シートが極端に低く背もたれが高く、ハンドルが呆れるほど長く急角度に上に伸び、折れ曲がって垂れ下がった先にグリップがあるという一見非常に運転し難そうな形状のバイクであった。

それを見た瞳子は、アメリカかぶれの暴走族を連想した。

『へへっ、悪いな格好良過ぎてよ！ 見惚れてねえで、その座標まで案内しな』

獰猛な形状のマスクのデイシエツドがシートに跨ることで、そのバイクの凶悪さが増した気がした。

「ウエイトレスの瞳子」の記憶はバイクに詳しいが、それでも瞳子の目から見て、シートに座するとふんぞり返る姿勢になるこのバイクは、小回りが効き難そうだなとも思った。

ともあれマシンデイレイダーに跨るとアリスをタンデムシートに乗せ、その場から走り出していった。

先刻の街を見下ろす丘陵の道路を前後に並んで疾走する二台のバイク。

当然ポルトラトから情報を取得した瞳子のマシンデイレイダーが前で、わざわざ人間態に変身したデイシエツドのバイクが後。

自ら本領を発揮するまでに一手間を要する枷を填めるというデイシエツドなりの「誠意」らしいが、透と言い、どこかずれたこだわりを持つのも「システム・デイケイド」の特性なのだろうかと首を傾げつつ、瞳子はバイクを走らせた。

やがて山間部の道路特有のカーブに入ると、そこからマシンデイレイダーは、右でも左でもない、三次元外の方角へ進入すると、この世界から離脱する方向へと走り出した。

難なく追従してくるマシンデイスエツダー。

そこからは周囲の光景も銀のオーロラのように揺らめき、砂利とも大理石ともつかない不思議な足場を駆け抜け、やがて宇宙境界線の目標とする座標に到着し瞳子はバイクを停止させた。

程なくマシンデイスエツダーも並んで停止し、デイシエツドがバイクから足を降ろすと並び立つ瞳子とアリスの横へやってきた。

「ほお。ここかよ」

「そう」

ここは「ライダー大戦の世界」の外側。

もはやなにもない無の空間に、まるで水面に垂らされた一滴の油のように、世界を内包する宇宙境界線の一部が揺らめいていた。

それはデイシエツドが喚び出すレイヤーに酷似しており、銀色に輝きオーロラのようにたゆたっている。

「ふん。じゃあ行くぜ。デイレイド」

「ん」

言って、まずはデイシエツドが先に立ち、その銀のオーロラに片手をかざした。

デイシエツドのワールドスライド能力が干渉し、オーロラ表面が激

しく波立つ。

だが即座に打ち消す波が発生し、ディシエツドの干渉を跳ね除けてしまった。

「……ほらな？ ディレイド、やれ」

「……！」

苦笑してその謎の現象を示すディシエツドの横に並び、瞳子も同様にワールドスライドの干渉を仕掛けた。

なるほど。この向こうにいる存在は、どうやら一度にひとつの干渉に対抗することしかできないらしい。

瞳子の干渉があつさりとおーローラを突破し、向こう側からのジャミングを完全に消失させた。

「おっしやあ！ 行くぜええええ！」

間髪入れずに飛び込んでゆくディシエツドを追って、瞳子もアリスの手を握ってその銀のオーローラに飛び込んでいった。

## ノウエムの世界

薄暗い、まるで夜明け前か黄昏時のような暗い世界だった。

完全な闇ではない。僅かに青い陰影を浮かべる程度の仄かな薄闇。

静寂に包まれた青白い風景はさながら手遅れを悟った時の不安感と逼迫感を抱かせる。

辺りは普通の都市のような街並みでありながら、所々にゴシック建築めいたテイストが混ざり込む異様な光景となっていた。

システムが勝手に検索したこの宇宙のインデックスには「ノウエムの世界」と謳われていた。

すなわち、あの時フラウドとポルトラトが名乗りの言葉に入っていたのは、己の出身の世界のことを言っていたのだと思いついた。

などと。周囲の見慣れぬ光景に目を奪われつつも、瞳子は警戒を怠ってはいなかった。

むしろ最大限に警戒していたところにいきなりデイシエツドがアサルトライフルを真横に向けてきたのと同様、瞳子もカレイドブレイドを引き抜きそちら側の身体の側面に沿わせて盾のように剣をかざした瞬間にデイシエツドライバーの激しい斉射が炸裂した。

「いぎやーっはっはっはっはっはあ！」

どがががと刀身の表面に無数に激突する光弾の衝撃が、盾にしたカレイドブレイドを越えて脇腹に突き抜けてくる。

そこへ射線を迂回して迫ったアリスが降り上げたアリスアンブレラの切っ先に手を掠められデイシエツドが銃撃を中断して後退したのに合わせ瞳子も大きくそこから飛び退いた。

「さあここからが本番だ！壊して壊して壊し合おうぜえええええ！」  
叫びながらアサルトライフルのスロットにカードを挿し込むデイシエツドと正対し、瞳子も物も言わずにデイレイドライバーにカードを挿し入れた。

元々、この新たな世界に入るまでが協定。

ここからは、互いが互いを排除するのみだ。

デイシエツドが銃のレバーを引き、瞳子がデイレイドライバーのスライドカバーを抜刀の動作で閉塞した。

「変身っ！」

「変身！」

《カメンライドウ・デイシエツド！》

《カメンライドウ・デイレイド！》

たちまちグレーのヴィジョンに包まれ、グレーのライドプレートを、イエローのライドピラーを頭部に収めてボデイカラーを変色し、それぞれデイシエツドに、デイレイドに変身を完了した。

『道案内ありがとよ！用が済んだらさっさと消えろや！』

改めて突き出された銃口が無数の光弾をばら撒いた。

『瞳子っ！』

そのデイレイドの前にアリスが飛び出し、正面に突き出したアリスアンブレラを広げて盾と成し光弾の乱射を受け止める。

デイレイドの能力を万全にする為には、カレイドフォームに移るにはデイシエッドよりもひと手間余計に要するのが弱点であることは百も承知。

だが今のデイレイドは身体が二つあるも同然の状態。アリスが攻撃を阻んでくれている隙にデイレイドはデイレイフォンを取り出して展開し、デイスプレイ部をリボルバー式に九十度回転させた。

だがデイシエッドの桁外れの攻撃力に対抗するには、アリスの小さな身体では無理があつた。

『ああつ!?』

デイシエッドライバーのフルオート斉射を支えきれず、呆気なくアリスの矮躯が吹き飛ばされた。

『アリスっ!?』

慌ててシークエンスを中断して、吹き飛んできたアリスの身体を抱き止める。

『いぎやーっはっはっはあ! そんなチビに止めきれると思つたのか? 本気で思つたのか? いぎやーっはっはっはあ!』

哄笑を上げたデイシエッドは、ベルトからマガジンを取り出すとデイシエッドライバーのスロットに叩き込んだ。

『馬鹿が! 準備に手間の掛かるてめえにやハナから勝ち目なんてねえんだよ!』

《アサルトカメンライドウ・ライダーキック!》

くぐもつた声で認証を告げたデイシエッドライバーを真っ直ぐ突き出してデイシエッドが叫んだ。

『そおら派手にバラバラになっちまいな!』

『……!』

万事窮す。

デイレイドは、せめてアリスだけは助けようと、イメージの矮躯を脇へ突き飛ばした。

暗い銃口から、跳び蹴りの姿勢の仮面ライダーが射出されてくる。

『……!?!? トーコっ!?!?』



投げ出されたアリスの悲痛な叫びが響き。

だが無数の仮面ライダーの飛び蹴りの濁流は虚空を貫いていった。

『ああ？』

デイシエットの怪訝声の方向が変わる。

為す術のなかったはずのデイレイドとアリスは、黒い鋭角の装甲を身に纏う仮面ライダーに両脇に抱きかかえられて飛翔していたのだ。

『……な！？』

『ちよ、だあれこいつ！？』

デイレイドの喫驚の声とアリスの文句に、その漆黒の仮面ライダーが快活に応えた。

『はっはあ！ドンピシャの超カッコイイタイミングだろ！』

漆黒の竜の頭を模した形状に赤・青・紫の三色のパーツを配したマスク。

背中からは赤い皮膜と青い羽毛と紫の機械の翼を生やした、仮面ライダー　ダークミラージユ。

『……あ、あんた、良男！？』

『「良男」言うんじゃない！』

思わず「ネガの世界の瞳子」の記憶のままに呼びかけたデイレイドに、ダークミラージユはかつてと全く同じ調子で言い返してきた。

ネガの世界でダークキバに殺されたはずの仮面ライダー　ダークミラージユこと竜胆寺　良男が一体なぜこんなところにいるのか。

『へっ。俺だけじゃねえぜ』

『え？』

思わぬ事態に混乱する瞳子は、デイレイドの超感覚で後方を振り向くと、突如現れた大量の水による濁流がデイシエッドに襲いかかり、その濁流の中から生えた幾本もの水の刃が足下を取られたデイシエッドに殺到したのが見え、その意味するところを直感して目を見開いた。

『うそ……』

たたらを踏んで転倒したデイシエッドを跳び越えて、さらに三体の

人影が着地したダークミラージユとディレイドの周りに並び立った。  
『ここに来てまで下っ端扱いだなんて、ウエットかつセンチメンタルな僕としては大いに泣ける惨状だね。』

『はははは！正義中の正義！ただいま参上！』

『忌々しい。忌々し過ぎて反吐が出る。何もしていない貴様の参上こそが何よりの惨状だ』

すなわち、白のハンカチでマスクの目元を拭っている仮面ライダー  
ダークドライと、大仰に拳を突き上げている仮面ライダー ノク  
スルーキスト、そっぽを向いて唾棄する仮面ライダー ダークシー  
クロスと。

『……あ、あんたたち！？』

驚きに声を震わすディレイドの周りに集まったのは、ネガの世界で死んだはずのダークキバの配下であったダークライダーたちであった。

t r a c k ・ 7 2 例 えば 灰 燼 の 明 日 に は ( 後 書 き )

……長。読破、お疲れ様でした。

また更新まで長いこと間が空きました。数日ごとに更新できる時もあれば、そもいかなない時もある、調子の波のようなものなんですよ。うな。

今回登場しました「ノウエムの世界」。ディレイドの新たな戦場として設定しましたが、「新たな世界」と聞いて「Wの世界か!？」と予想された方がいましたが、すみません。その発想はありませんでした。

いや、この物語はディケイドの外伝であり、ストーリーとしては「完結編」の時系まで、と考えていましたので、「MOVIE大戦2010」のことは眼中にありませんでした。

と言いますか、さすがに「MOVIE大戦2010」でのディケイドとダブルとの世界観の繋がり方はフロー不可でした。無理。あれお祭りだもん。

それに、拙作「デュオソリスト・キス」の主人公を絡ませようにも、今の段階では協力できなさそう(汗)。

十字架をあしらった、まるで巨大な蒸気機関のように無数のパイプが複雑に絡まり合ったパイプオルガンを祭壇に据えた漆黒の広大な空間は、さながら闇色に染められた荘厳な神殿のようだった。

柱に等間隔に設えられたランタンからは紫色の不気味な炎が上がり、室内の全容が見渡せるにも関わらずまるで暗闇の中にいるような錯覚を思わせる。

それもただの暗闇ではない。揺らめく炎に照らされて、部屋中を這い回る無数のパイプとのたうつ影は、まるで脈打つ血管か臓物のよう。

さながら猛毒に侵されたどす黒い臓腑の中にいるかのようだ。

祭壇の前の玉座には、気だるげに身を投げ出して座する黒衣の男。その身を包むマントには、九本の銀線が描かれている。

瘦身の男の整った長髪の下、紫の炎を照り返す丸眼鏡の下からは、時折この部屋よりもお昏き闇色の瞳が覗き見える。

部屋の中央、入り口から玉座までを縦断する絨毯の真ん中に、ひざまづく異形の姿が唐突に現れた。

否。その異形はクロックアップしてここまで直接やって来たのだ。玉座に腰掛ける男は微動だにしない。その接近は既に知れていたこと。異なる時間流の干渉を感知していたのだから。

『……王。予定地点に「悪魔の影法師」が現れました。』  
深く頭を下げたまま異形が告げる。

その異形もマントを纏っており、それには八本の銀線が描かれていた。

『既に全ての『モノゴン』を差し向け、続いて『デイゴン』『トライゴン』をその後に配置し、順次進撃する態勢を整えてございます。』

『「」苦勞。』

王と呼ばれた玉座の男が素っ気なく返した。

『私もこれより出撃準備に移ります。 それでは。』

言い終わるや、その異形の姿が掻き消えた。

再びクロックアップしてこの玉座の間から退出したのだ。

玉座の男は配下が消えてからも虚空を見るときもなしに見つめ、やがて首を巡らせて背後のパイプオルガンの遙か高みに据えられた十字架を見上げた。

そこには、ぼろぼろの赤のビジネススーツと白衣を纏った女が、震フルルが括られていた。

その身体はぐつたりと脱力し、まぶたは閉じられ意識の程は伺えない。

『存外、役に立たぬものだな。 だが、まだ貴様の役割は終わってはいない。』

十字架にかかる震を見上げた男・出身世界では『ビショップ』と呼ばれていた元ファンガイアのナンバースリーは、その端正な貌に狂喜の色を浮かべた。

『切り札としての最後の役目が残っている。 カードを出さずに済むことを、互いに祈ろうじゃないか……』

言って、再び前を向いたビショップの口元からくつくつと笑い声が漏れ出てきた。

十字架に掛けられた震は、未だ目覚めぬまま。

「世界の破壊者」デイケイド、及び「悪魔の影法師」デイレイドへの復讐の為に、自身のワールドスライド能力と、鳴滝の残した実験の成果「異種族混合技術」を以てファンガイアに協力を要請した震は、そのまま交渉相手のビショップに捕らえられてしまった。

それより以前、「キバの世界」においてデイケイドが介入した「人類反逆未遂事件」のあとのこと。

「人間との共存」を謳い出したキングに絶望し世を憐んだビショップの元に「上層のキバの世界の遣い」を名乗るキバット族が現れた。

キバーラと名乗るキバツト族は、格下にあるまじき凄まじいパワーを誇示しながら、指示に従うことをビショップに要求してきたのだ。曰く、「もうじき滅ぶ世界にとどめを指し、我ら「キバの世界」のものにせよ」と。

「九つの世界」の存在と多元宇宙の成り立ち、そして今この「九つの世界」に迫る脅威の存在を知り、そしてキバーラの言う通り現れた「ワールドスライド能力を持つ人間」と対面した瞬間、ビショップの中に野望が生まれた。

キングに成り代わり、自分が王となって自領地を統治し支配する！それもただの領地ではない。世界まるごとひとつが自分のものになるのだ。

そして多元宇宙の話が本当ならば、自分の領地を無限大に広げてゆくことも可能だろう。

キバーラや「上層のキバの世界」の者どもは自分たちを捨て駒にするつもりなのだろうが、そうはいかない。

キバーラにあった誤算は、その「ワールドスライド能力を持つ人間」が、「異種族混合技術」をも持っていたことだろう。

この技術さえ完成すれば、ディケイドだろうが「悪魔の影法師」だろうがもはや恐るるに足らず。

自分に勝てる存在などいなくなる。宇宙最強の王として、多元宇宙に君臨するのだ。

そしてビショップは表向きはキバーラに従うフリをしつつ、宇宙の接触崩壊を機に一気に行動に出た。

解析した震の「ワールドスライド能力」で、消えかけた「キバの世界」から切り離れた一部の地盤を核に、ファンガイアを送り込んだ異世界を部分的に吸収・統合して完全に独立させ、新たな宇宙を作り上げた。

そして配下のファンガイアに掻き集めさせた異世界のモンスターで「異種族混合技術」を施し、自らと、配下の一同を合成・強化した。ただ、合成には個体ごとの適正の差があり、全てのモンスターが融

合できる訳ではなかった。

元から強力なファンガイアは次々と融合を果たしたのに対し、脆弱な格下のファンガイアやモンスターの中には二種混合すらできない者もいた。

やがてそれはファンガイア社会そのままの格差を産み、同様の階級社会へと錬成されてゆく。

すなわち、二種混合もできない素のままの弱者は『モノゴン』として最下位に置かれて蔑まれ、続いて二種混合の『デイゴン』、三種混合の『トライゴン』と合成種数が増えるにつれて階級が上がり、以上、『テトラゴン』、『ペンタゴン』、『ヘキサゴン』、七種混合の『セプタゴン』の順に並び。

いま玉座の間に現れたのが第二位である『オクタゴン』、そしてこの世界の王であるビショツプこそが、世界唯一の九種混合体『エニアゴン』である。

九つの世界と力を統合する新たな世界と種族の誕生。故に、ビショツプはこの世界を「9」を意味する「ノウエム」と名付けた。

多種の仮面ライダーの力を武器とするデイケイド一派の能力は知っている。

そして互いの弱点を互いにスポイルする「異種族混合技術」の特性も理解している。

「……デイケイドさえ排除してしまえば、『モノゴン』に過ぎぬ上層の連中とてもはや恐るるに足らん。「悪魔の影法師」など、大地ごと踏み砕いてくれる。全宇宙支配の礎になる程度の手応えがあれば良いがな。フフ……」

やがて抑えきれなくなった哄笑が玉座の間に響き渡った。

『……』という訳でね。僕たち仮面ライダーはこの世界では怪人より

も格下なんだ。ああもう涙がとまらないよ。 いやこれ、空気の水  
分じゃなくて本物の涙ね。』

マスクのあごの下の隙間からばたばた垂れる水を指して海參 潤こ  
と仮面ライダー ダークドライが締め括った。

三人とも、既に各々の最強形態に移行していた。唯一フォームチェ  
ンジ機構を持たないノクスルーキスだけが元の姿のままであるが。

『泣き過ぎだよあなた。マスクの中でそれじゃ窒息するんじゃない  
？』

『忌々しい。忌々し過ぎて反吐が出る。涙で溺死できたらどれだけ  
救われることか！』

デイレイドの宥めに、隣のダークシークロスこと魚虎 鏡慈が見た  
こともない程に肩を落として落胆していた。鼻声で肩を震わせてい  
るのは、魚虎もマスクの下で泣いているのだろうか。どうやら本気  
で自分のマスクの中を涙で満たそうとしているらしい。

『でも、じゃあなんでこんなところに？』

『正義の斥候部隊さっ！』

深洞 沙威こと仮面ライダー ノクスルーキスが拳を突き上げて朗  
らかに言った。

『「あそこ見てこいや」ってダークローチに上から目線で命令され  
るなんて、なかなかない体験だったよ！』

『ナニ胸張って「ゴキブリ以下です」なんて認めてんだ temeエ！』

『忌々しいわっ！』

びしりと親指を立てた拳を突き出したノクスルーキスを、ダークミ  
ラージュとダークシークロスが瞬時に殴り倒した。

『……でも、あなたたちって、死んだはずじゃあ……』

いつもの遣り取りに苦笑しつつも、触れにくい部分を瞳子はそつと  
訊ねてみた。

『いやあ。まあこの「ノウエムの世界」の王さまがとんでもない奴  
でね』

デイレイドの隣にやって来たダークドライがなにやら平坦な口調で



語り出した。

『僕たちが気付いた後のことしか知らないけど、僕、見ちゃったのよ。王さまが、なんかすごいエネルギー出して、「よみがえれわがしもべたち、異世界の亡霊よー」だなんてやっててさ。』

その「王さま」のモノマネだろうが、ダークドライが両手を高く上げてゆらゆら揺らしている。

『そしたらさ。何も無い場所に次から次へといるんなモンスターが出てきてさ。たぶんアレ、ディケイドとかにやつつけられたモンスターたちじゃないかなあ。』

『……え？』

怪訝に聞き返したディレイドの前で、ダークドライは再びハンカチを取り出した。

『つまりはさ、一番泣けるのは、どうも僕たち、怪人と同じ括りで蘇らせられたんじゃないのかなあってこと。』

『言うな！忌々しい！』

さめざめと泣くダークドライの肩に組み付いてダークシークロスまで再び泣き出した。

『……ああ。それは、ご愁傷様……』

『皮肉か teme エコラ 瞳子。いつペン死んでみるか？』

思わず漏らした瞳子にダークミラージユが噛み付いた台詞で、ディレイドの気配が重苦しく変化した。

『……いいじゃない。あなたたちは、どんな形であれ生き返れて。』

でも、透はもう、戻って来ないんだからっ！』

突然のディレイドの叫びに、ダークライダーの四人が皆押し黙った。四人は顔を見合わせ、やがてダークミラージユがおずおずと口を開いた。

『瞳子。オメエだって知ってたんだろ？俺たちは「ネガの世界」の住人だ。隣人を亡くして泣いてやれる甲斐性なんざ持ち合わせちゃいねえ。』

そうだ。それは、「ネガの世界」の常識。

『でもな、隣人全てを巻き込んで、笑って奈落に飛び込むのが「ネガの世界」の本懐だ。』

ダークミラージュが黒い拳を突き出した。

『俺はこの世界が大嫌いだ。気に食わねえ。王さんもムカつくしよ。だから、この世界をぶっ壊してやる！』

後ろで、三人がうなずいた。

『おあつらえ向きに瞳子、おめえがディレイドの力を得たつてのは好都合だ。俺たちやおめえを手伝うぜ！』

『え？』

この瞳子は、「ネガの世界の瞳子」ではない。

だが、彼らは瞳子を同じ「瞳子」として認識している。

瞳子は「ネガの世界の瞳子」の記憶も持っているが、これは彼らを利用することになるのではないだろうか。

逡巡するディレイドの肩を、ダークミラージュがぽんと叩いた。

『細けえ事は気にすんな！ さあ！敵はどこだ！』

そして四人が一斉に前を振り向いた。

瞳子の中の「ネガの世界の瞳子」の記憶が再会を喜ぶ感覚が分かる。その記憶が、こいつらに遠慮は無用だと訴えている。

『……ねえトーコ。こいつら、トモダチ？』

すっかり追い遣られていたアリスが、ディレイドの肘をつまんで問いかけてきた。

『うん。まあね』

アリスの頭を撫で、ディレイドは改めて前を向いた。

『分かった。』

うなずいたディレイドは、だがカレイドブレイドを持って四人の前に進み出た。

『みんな。手伝って』

『『おつ！』』

『はいー！』

氣勢を上げる六人が立ち向かう先で、灰色の人影がゆらりと立ち上

がった。

『……やってくれるじゃねえかよ、ただの仮面ライダーの分際ですよ。ずぶ濡れのディシエッドには今の奇襲によるダメージは一切なさそうだった。』

既に刻まれていた、顔と胸に走る斜めの傷の他にはなんの損傷も見当たらない。

『俺とディレイドの喧嘩を邪魔すつと、死ぬぞ。死にてえヤツから前にお出ろおッ!』

絶叫と共にディシエッドライバーのフルオート射撃が火を噴いた。

『なんだその鉄砲は!? ノロ過ぎてあくびが出るぜ!』

相変わらずの敏捷性で無数の光弾全てを躲しながら真っ先に飛翔したダークミラージュ・ダークネスファイナルフォームに続き、ダークシュークロスが、ノクスルーキスが駆け出した。

ダークドライ・アイネフルートフォームはその場に立ち止まったまま、己の超能力に集中している。

やがて辺りに散らばった濁流の残滓が再び寄り集まって隆起し、膨大な津波となってこの青白い街を蹂躞した。

ノクスルーキスは即座に横の建物に飛び乗り屋根を駆け抜けてゆく。ダークシュークロス・マリーセレストフォームが身に纏うロングコート、クロークアーマーを脱ぎ捨て膝まで水位を増した水面に叩きつけ黒渦に変じさせると即座に飛び乗り、水面を滑るように疾走してディシエッドを迂回してゆく。

『がああっ!? あああうぜえな!?』

『ツレなくすんなよもつと遊ばうぜ!』

宙を飛翔するダークミラージュがディシエッドライバーの銃身を蹴りつけディシエッドの照準を妨害して周囲を飛び回る。

濁流に足を取られディシエッドは攻撃態勢を取ることできない。

『トコッ! いまっ!』

『うん! 分かってる!』

ダークライダーがディシエッドを牽制している今の内にとディレイ

ドはディレイドライバーのカードスリットにディレイフォンを差し込んだ。

刀身が展開変形し、現れたライダーズクレストを一気に指先で一閃する。

《クウガ・アギト・リュウキ・ファイズ・ブレイド・ヒビキ・カブト・デンオー・キバ・ディケイド!》

指先を振り切り全てのライダーズクレストがイエローの輝きを放ち、そしてディスプレイにはディレイドのマークが表示され。

《ファイナルカメンライドウ・ディレイド!》

最後の認証と同時に周囲に現れた十枚のカードのヴィジョンをディレイドはカレイドブレイドで全て一閃した。

微細に砕け散った輝きに包まれて、光が収まったあとにはディレイド・カレイドフォームの姿が現れた。

『今度こそ、透の無念! ディシエツド!おまえをここで、破壊する!』

絶叫し、アリスを伴いディレイド・カレイドフォームが濁流渦巻く戦場へ疾く駆け出していった。

郊外から離れた場所で、ダークローチたちが偵察に遣った四人のダークライダーがいつまで経っても戻って来ないことに気を揉んでイライラしていた。

やがて業を煮やした一同は、そろって「悪魔の影法師」が現れたとされる地点が見える場所へと移動し、建物の陰からそこを覗き見た。

『……な！？ なんだあれは！？』

前情報では、宇宙境界線に侵入した「悪魔の影法師」は一体だと聞いていた。

だと言うのに、そこに二体もの見慣れぬ異形がいるのを見てダークローチらは狼狽した。

『と、とにかく、上に連絡するんだ！』

そして伝達役のキバット族に命令し、その異常を伝えるべく王の元へと飛び立たせた。

ところが、王城へと向かって飛翔していた伝達役のキバット族は、やがて自分がなぜこんな所を飛んでいるのかを訝しんで宙で立ち止まった。

自分が今なにをしていたのが全く思い出せなくなってしまっており、ただその場でおろおると宙を漂う。

結局、ディシエッドの所在はどこにも伝わることはなかった。

ディヴオイドの存在隠蔽の影響力はこうして宇宙に浸透しており、効力は確実に働いていた。

『なああめええるうつなあああっ！』

膝までに達する濁流に足を取られる上に周囲を飛び回るダークミラージユに翻弄されるデイシエッドが、激昂してダークミラージユの蹴り足を打ち払ったのと同時にデイシエッドライダーにマガジンを叩き込んだ。

『ちいつ！？』

『死ねよ！』

《アサルトカメンライドウ・クロックアップ！》

能力発動を阻止できず臍を噛むダークミラージユ目掛けて放たれた連射はかわされたが、撃ち出されたカブト、ザビーを始めとするクロックアップシステムを持つ十騎の仮面ライダーは次々と加速空間へ飛び込んでいった。

『ウエットかつセンチメンタルな僕としても、そいつは看過できないなあ』

呟いたダークドライ・アイネフルトフォームが支配する濁流に両手をかざすと、全体の水位がより上昇した。

いや、濁流全てが地上より僅かに浮上したのだ。

今この付近を埋め尽くす大量の水は、地面から数センチメートルの隙間をあけて流れている。

足にかかる圧力の段階的な違いがさらに歩き難さに拍車をかけデイシエッドの足周りの自由を奪った。

その効果はそれだけではない。

加速空間に飛び込んだクロックアップシステムを持つ仮面ライダーたちの足も、着水した足が水に取られ、身動きが取れなくなってしまうのだ。

加速空間では通常空間とは物理法則が異なる。

加速空間においては、通常の時の流れに置き去りにされた大量の水がまるで粘液のように足にまとわり付いてくるのだ。

それに気付かず着地後すぐに動き出そうとしたカブトらは皆一斉に転倒してしまった。

しかも、その水は地面との間に僅かな隙間がある。

地面に突こうとしていた手に感じる水圧の抵抗感があっさり突き抜け、カブトらは崩れた姿勢を支えることすらままならない。

なんのことはない膝までの浅い水流の一角でもがくカブトラクロックアップシステムを持つ仮面ライダーたちの加速中の姿が、相対速度が合ったことで通常空間にいる者にまで視認されるようになった。  
『なんだあ！？ どうなつてやがる！？』

『よそ見してる場合かよ！』

自らの弾丸の異常に困惑するディシエッドに、再び飛翔するダークミラージユの猛攻が襲い掛かる。

『忌々しい。忌々しすぎて反吐が出る。クロックアップがこんな下らないことで破られるとは』

黒渦に乗って濁流の上を滑るように回り込んだダークシークロスがサーベルを振るい、刀身に導かれるように立ち上がった水流の刃が複雑な曲線を描いて殺到すると、水面でもがくカブトラ十騎の仮面ライダーをまとめて打ち倒してしまった。

『アリス！』

『うんっ！』

低いビルの上を駆けるディレイドがアリスの背後に回り込み、カイドのヴィジョンを出現させるとそれごとアリスの身体を袈裟掛けに剣を透過させた。

《ファイナルフォームライドウ・カ・カブト！》

たちまちアリスの身体が浮かび上がって迅速に回転、変形しゼクターカブトへと変移する。

『行って！』

『らーじゃっ！』

瞳子の指示に急発進で飛び出したゼクターカブトはそのまま加速空間に飛び込み、通常の時の流れにいるディシエッドに立て続けに体当たりを喰らわせた。

『ッガッ！？ ガアアアッ！』

目に止まらぬスピードであちこちに撥ね回されるデイシエッド目指してデイレイドは建物の屋根を駆け抜ける。

『瞳子！付いておいで！』

そこに、同じく反対側の建物の屋根を走っていたノクスルーキスが濁流渦巻く地上に飛び降りてデイレイドに呼びかけてきた。

見れば、ノクスルーキスの持つ局所重力制御機能によってノクスルーキスの周囲の水が丸い形で押し退けられている。

『俺の正義の名の元に！あの横線の奴のとこまで連れてってあげるよ！』

『サンキュ！』

すぐさま飛び降りたデイレイドはノクスルーキスに続いて水が押し退けられる地面を駆け抜けていった。

未だゼクターカブトとダークミラージュの猛攻にキリキリ舞いさせられているデイシエッドの元に辿り着いたところでデイレイドがノクスルーキスの前に飛び出した。

『デイシエッドおおおお！』

『ッガアアアアてめええええええ！』

真つ正面からのカレイドブレイドの縦一閃は、横にかざしたデイシエッドドライバーを跳ね除けてデイシエッドの身体に激突した。

『うあああああああ！』

二撃、三撃と翻るカレイドブレイドが、後退するデイシエッドに次々と叩き込まれる。

デイシエッドは未だに足を水に取られているが、デイレイドの足下にだけは水がない。デイレイドの足場の確保の為、猛追するデイレイドの背後に身を縮めたノクスルーキスがぴったりと追従しているからだ。

『へっ！本物の「悪魔の影法師」ってなこんなモンかよ！』

『キラキライだいつキライ！ おまえなんか消えちゃえーっ！』

デイレイドに場所を譲ったダークミラージュとアリスのゼクターカブトがそれぞれ旋回してデイシエッドの背後に襲いかかった。



『っがあああああ！フザケンなああああああ！』

砕けた装甲の破片を飛び散らせて身を擦ったディシエッドが咆哮をあげた途端、ディシエッドの周囲を銀のオーロラが取り囲んだ。

『っがっ！？』

『ひゃっ！？』

突然展開された宇宙境界線に弾き返され跳ね飛ばされるダークミラージユとゼクターカブト。

ディレイドも思わずたたらを踏んで立ち止まった。

『ただの仮面ライダーの分際で、原住民の分際でよくもこの俺をここまでコケにしてくれたな！』

続けざまにディシエッドのアサルトライフルが火を噴き、遠巻きにしていたダークシークロスとダークドライを打ち倒してしまう。

『がっ！？』

『痛い！？』

制御を解かれてたちまち水位が下がり、荒れ狂っていた濁流が排水溝へ流れ込んでゆく。

『俺は「システム・ディケイド」のファイアコントロールモジュールだぞ！俺以外の何もかも、この俺にブチ碎かれる為だけに在るんだ！それを理解しやがれ！』

『ほんつと耳障りなのよあんたの声が！』

断絶するレイヤーをあっさりと斬り裂いて、ディレイドが吼えるディシエッドへ迫った。

『うるせええええ！欠陥品のガラクタが、今度こそ粉微塵にしてやらあああああ！』

『透を馬鹿にする奴は、全部わたしが黙らせる！』  
至近距離で振り下ろされるカレイドブレイドを横にかざしたアサルトライフルが何度も打ち払う。

隙を突いて撃ち出された光弾も、ディレイドの前に出現した小規模なレイヤーに吸い込まれて消えた。

『ほざいてる！あとでジャンクになったテムエに唾ひっかけてま

めて嗤ってやるよ!」

『ぶっ壊す!』

罵声と剣戟が交錯し、互いの攻撃が互いのレイヤーを飛び越えて刀身が銃底が激突し、あるいはいなされ、同等の能力を持つが故の小手先の技を超えた殴り合いが繰り広げられた。

不可侵の宇宙境界線を展開されてはそれを越える術がない為、ダークライダーたちは遠巻きにそれを見ているしかない。

当然、ノクスルーキスはとっととディレイドの背後から遠く離れている。

そこに、どこか遠くから地鳴りのような音が響いてきた気がして四人は辺りを見回した。

『あ! そう言や総攻撃だつて』

『あああそうだった! ?』

ノクスルーキスの台詞にダークミラージュが頭を抱え、四人は自分たちが来た方角を振り向いた。

遠くから、ここに迫る大群の影が見える。

この郊外の場所目掛け、街の反対側から大量の種々雑多なモンスターの群が押し寄せてきていたのだ。

『俺たちが戻らねえからって、おとなしくしてるワケねえか! ?』

『あああどうしよ! ?』

『忌々しいが、おれたちで食い止めるしかあるまい。』

迫りくるモンスターの群に、ダークシークロスが一步進み出た。

『いろいろ泣かされたお礼もしたいしね』

ダークドライも再び自らの超能力に集中し、辺りの排水溝から水を呼び寄せ始める。

『は! 丁度イイヤ! このままこの世界を潰しちゃおうぜ! おい深洞! おめえのノクスルーキスは切り札だかな! 使い所を間違えんなよ! ?』

『もちろんさ！』

底抜けに朗らかに応えたノクスルーキスが元気良く拳を突き上げた。  
『っしや！いくぞおめえら！』

幾百、幾千とも分からぬ地平線を埋め尽くす津波のようなモンスター  
の群へと、四人のダークライダーは駆け出していった。

『やれ！海参！』

『ふふふこの世界で虐げられてきた僕の悲しみの涙はこんなもんじ  
ゃないよ！』

ダークドライ・アイネフルートフォームの腕の一振り、膨大な量  
の濁流が立ち上がり、文字通り津波となってモンスターの群を飲み  
込んだ。

『怪人の分際で忌々しいことよ！』

一帯が水浸しになったところで黒渦に乗ったダークシークロスが滑  
るようにモンスターの群へ突撃してゆく。

飛翔するモンスターへは、ダークミラージユが凄まじい速さで次々  
と痛撃を加えて叩き落としてゆく。

いくら合成しようと、ノウエムの航空戦力は少ない。

足を取られたモンスターのほとんどは未だ水面でもがいていた。

『おい！』『デイゴン』『も』『トライゴン』『ももつ来てんぞ！』

『やれやれ。慌てんぼうだなあ』

上空から敵の増援を視認したダークミラージユの警告に答え、ダ  
ークドライはさらに濁流を喚び寄せた。

『いくら押し寄せようと、ウェットかつセンチメンタルな僕の悲し  
みを埋めるには全然足りないよ』

先を上回る大津波が、後から現れた大群をも押し流してゆく。

『蘇らされた当時はともかく、ディレイドの後盾を得た今だつた  
らもう何をしたらって平気さ！』

『ふん！忌々しいことこの上なかったぞ！』

もがくモンスターの間をダークシークロスが駆け抜ける度に水流の  
刃が閃き、断末魔の爆発を起こしてモンスターが倒されてゆく。

ワームの混合体が混じっていようと、この四人のフォーメーションの前ではクロックアップなど脅威にはならない。

アンデッドは希少な為、オクタゴンですら混合している者は少数だろう。いずれにせよ、この乱戦の中にとしたらその不死性にはなんら意味がない。

見渡す限りを埋め尽くすモンスターの大量の中にあつて、四人の勢いは止まる所を知らない。

『うりゃあああああ！』

ダークミラージユが、蹴りの姿勢で宙を飛ぶモンスターをことごとく貫いていった。

群の中に、いつの間にか一際体格が大きいものが出現していた。

混戦模様のこの戦場にあつて、もうそいつが『テトラゴン』なのか『ペンタゴン』なのかも分かりはしない。

いずれにせよ、どんな力を持っていようと、これほど混乱した場所では宝の持ち腐れである。

『うおおお！』

『はあああああ！』

多少のサイズ差などまったく気にも留めずに片っ端から貫いてゆく。ダークミラージユとダークシークロスが戦場を駆け回る中、群の最後尾から小山のような巨大なシルエツトが出現した。

『ヘキサゴン』。六種混合体のうち、巨大化したモンスター中のモンスター。

『oooooooooooooo！』

岩塊のような顎が開き、おぞましい咆哮が迸る。

が、その『ヘキサゴン』の巨大な頭が突如現れた黒い真球に飲み込まれたと見るや次の瞬間には首から先が消滅していた。

為す術なく倒れ伏したその巨大な死体にどよめく怪人の群。

『トレ・チオド三本の釘』！ 的がでかいと当たりやすいね！』

手甲から生えた闇色の釘を抜き放ち、ノクスルーキスが喝采をあげた。

形成逆転の鍵であったはずの大型モンスターを呆気なく倒され、ノウエムのモンスターの群に戦慄が駆け巡った。

『はっはあ！　どどん来いどどん！』

二体目の巨大モンスターもノクスルークスが投げ放った釘に激突された腹に大穴を空けられて転倒し、モンスターの中には泡を喰って逃げ出すものまで現れ出した。

所々に濁流が隆起して立ち上がり、腕のようにになった水柱が先端にモンスターを掴み上げては別のモンスターに叩きつける。

飛び上がったモンスターをダークミラージュが蹴り落とし、水面を滑るように駆け抜けるダークシークロスの水流の刃がモンスターを次々と両断してゆく。

『喰らえ！正義の裁き！』

ノクスルークスの身体から放たれた暗い光とも言うべき光線が群の中に炸裂し、そこに現れたノクスルークスの「影」が、擬似ブラックホールが排水溝のように辺りのモンスターを見境なく吸い込み始めた。

たった四騎のダークライダーに、ノウエムのモンスター軍は一方的に蹂躪されていた。

背後に自ら生み出したレイヤーを次々と後退して潜り抜け小刻みに空間跳躍を繰り返すディシエッドの手が、取り出したマガジンをディシエッドライバーに下から叩き込んだ。

《アサルトカメンライドウ・スナイプ！》

『喰らいやがれ！』

間合いを広げ宙から落下しながら、突きつけたアサルトライフルをフルオートで乱射してくるのをディレイドは右に左にと躲しながら駆け抜ける。

『トーコッー！』

撃ち出された「銃を武器に持つ仮面ライダー」が通り過ぎざまにデ

イレイド目掛けて放った銃撃を、デイレイドの背後に立ちはだかつたアリスがアリスアンブレラを広げて受け止め阻む。

「っらあああああああ！」

未だ宙にあるデイシエッドは、乱射を続ける銃を天に向けて扇を描くように振った。

上空に飛び上がった銃を持つ仮面ライダーが一斉に地上を駆けるデイレイドへと光線を撃ち下ろす。

「うわあああああ！」

雨霞と降り注ぐ無数の光条が地面に突き刺さる中を、デイレイドはまともに射線も見ずにそれら全てを躲して駆け抜けていった。

後を追うように地面が次々と抉れて吹き飛んでゆく。

そのマスクの眼差しは、デイシエッドから僅かたりと逸れることはない。

左右に身体を振ることはあっても、後退することは一切なかった。

「しやらくせえ！」

《アサルトカメンライドウ・スラッシュユ！》

着地と同時にマガジンを叩き込んだデイシエッドライバーを真っ直ぐに突き出して、再び仮面ライダーが乱射される。

手刀を構えた仮面ライダー一号、二号が、剣を振りかざしたクウガ・タイタンフォームが、アギト・フレイムフォームが次々と襲い来るのを、デイレイドは駆ける勢いを全く緩めずにカレイドブレイドで真っ向から迎え討つ。

「あああああああ！」

斬り上げ、叩き伏せ、右に、左に打ち払い、絶叫するデイレイドは力を力で薙ぎ払い突き進む。

「っがああああ調子に乗んなああああ！」

吼えるデイシエッドも空になったマガジンをイジェクトレバーで吹き飛ばし、次なるマガジンを叩き込んだ。

その時、先の「アサルトカメンライド・スナイプ」で一番遠くに射出された仮面ライダー　クウガ・ペガサスフォームが、常人の肉眼

では視認できない程の遠方からデイレイドの背中目掛けて鋭い光の矢を解き放った。

『つぐつ!?!?』

超長距離を瞬時に飛翔したそれはデイレイドの背に突き刺さり、想定外のタイミングの被弾に瞳子も思わず狼狽し体勢を崩してしまった。

さらにそこに襲いかかった「アサルトカメンライド・スラッシュ」の最後の弾丸、仮面ライダー アークの巨大な槍の一閃がアンダースローに抉り抜いた地面ごとデイレイドを高く斬り上げ銀色の身体が仰け反り宙を舞った。  
カレイドブレイドがその手からすっぱ抜け、あらぬ方へと飛んでいってしまう。

『いぎやつはあ!バカ見やがれよ!』

それを見てデイシエッドは喝采をあげつつデイシエッドライバーのレバーを引いた。

《ファイナル・アサルトカメンライドウ・ライダーキック!》

デイシエッド自身のエネルギーを付与されたマガジン表面に鈍い輝きが幾何学模様を描いて走り、銃口付近をグレーのカードのヴィジョンが円形に取り囲む。

『これで終いだ!』

両足を踏み締め、両手で前後をがっちりと保持したアサルトライフルから、宙を舞うデイレイド目掛けて終末の凶弾が今、解き放たれた。

『いぎやーっはっはっはっはっはあ!』

『……アリス。』

『トローコッ!』

そこへ後方から駆けてきたアリスが跳躍し、宙を舞うカレイドブレイドに飛びつくと刀身の溝のライダーズクレストを指先で一直線になぞりきった。

デイレイドのシステムに組み込まれたアリスも、今は「デイレイド

の身体の一部」である。

機能の発動は、アリス側からでも可能。

デイレイドは仰け反った状態から宙で身を擦ると一回転して華麗に着地し、そしてアリスが投げ返したカレイドブレイドを背後も見ずに右手で受け取り即座に駆け出した。

デイレイドはアリスの視界も共有している。この程度のことは造作もない。

『んなあつ!?!?』

驚愕するデিশエツド。だが弾丸は既に放たれている。

グレーのヴェイジョンをだぶらせた仮面ライダー一号、二号、V3から続く、ライダーキックを必殺技に持つありとあらゆる仮面ライダーが、威力を倍増させて一直線に殺到してくる。

デイレイドは、振りかぶったカレイドブレイドのデイケイドのマークにもう一度触れた。

するとデイレイドベルト・カレイドサーキットの正面のデイレイドのバックルが輝きを放ち出した。

『うわあああああああ!』

絶叫と共に弾丸と激突したデイレイドの身体は、仮面ライダーの弾丸と大して拮抗することもなく直進を続けてきた。

真っ正面に剣を突き出したデイレイドが、ライダーキックの濁流に逆らってまっしぐらに突っ込んでくるのだ。

『な、なんだとおおお!?!?』

『あああああああああ!』

阻むでも打ち払うでもなく、デিশエツドの最強の銃弾を、一直線に突き破って迫ってくる。

『んな、ば、ばかな!?!? ばかなあああああ!?!?』

『デিশエツドおおおおおおお!』

地上を走る黄色の流星が、その切っ先がデিশエツドライバーの銃口に突き刺さり、縦に斬り裂き銃身を両断して機構を破砕しながら刃が突き進む。



『ばかなっ！？ こ、こんなフザケたこと、ありえね』

『碎け散れええええええええ！』

とうとうデイシエッドドライバーが粉々に吹き飛んだ。

思わず後退したデイシエッドだが、いつの間にか回り込んでいたアリスのアリスアンブレラが背中から突き刺さり、胸板から切っ先が突き出して身動きを止め。

『あああああああああ！』

『ツガツ！？』

そしてカレイドブレイドが間違いなくデイシエッドの胸郭の、かつて透が穿った痕に深く深く突き刺さった。

> i 1 2 9 8 8 — 5 3 8 <

三者の動きが、止まる。

やがて、デイシエッドの腕がだらりと垂れ下がり、アリスと向かい合わせで串刺しにされたデイシエッドの身体が脱力した。

さながら、磔刑に処された罪人のごとく。

『……ありえねえよ……こんなボンクラのカスどもによお……おかしいだろ……』

デイシエッドからは力ない罵倒が零れ続けている。

『……は。俺を倒したからなんだってんだ……？ 俺が「破壊」なら、デイヴォイドはルインドライブモジュール……「滅び」そのものだ』

デイシエッドの身体が、末端から崩壊を始め、粒子化して散り始める。

色がグレーの為、それはまさしく死滅の象徴たる灰のようにも見えた。

『ただかかフローバックアップモジュールに、どんだけのことができるんだか、楽しみに……して、る……ぜえ……』

最後まで嘲りを続け、やがてデイシエッドは完全に消滅した。

『……………』

『……………』

この青白い静寂の町外れで。

武器を突き出して向かい合った姿勢のデイレイドとアリスは、荒い息に肩を上下させながらそのままの体勢で止まっていた。

『……………トーコ?』

やがてアリスアンブレラを下げたアリスが、デイレイドの傍らに近付いて剣を強く握り締めたままのデイレイドの手にそっと触れた。

『……………うん。……………倒し、た』

ようやくそれだけを呟き、デイレイドの身体から幾重ものヴィジョンが吹き飛んで掻き消えると、その後には瞳子の姿が現れた。

「……………倒したんだ、デイシエッドを」

『うん!』

隣で手を握るアリスにゆっくりと顔を向け、そして思い切り抱きつくると決壊したかのように泣き出し始めた。

抱きつかれて体勢を崩したアリスと一緒に地面に座り込んでしまう。

「……………つく、やった……………やったよ……………」

『うん! やった! やった! やったよ!』

「……………うう……………つく、うああああああああ」

デイシエッドを破壊したところで、透が、初が、失われた者たちが戻ってくる訳でもない。

結局は、この復讐はこうしてきちんと泣く為の儀式に過ぎなかったのだと、瞳子の中の冷静な一部が囁いていた。

例え深い悲しみの再確認だとしても、デイシエッドを倒さずにはいられなかった。

それが叶った今、瞳子は実に四ヶ月ぶりに涙を流していた。

> i 1 2 9 8 9 | 5 3 8 <

track 74 なみだのむこう（後書き）

なぜなにデイレイドマスカークレイド！

Q・ デイシエッドの「アサルトカメンライド」と「ファイナル・アサルトカメンライド」の違いはなんですか？

A・ 威力だよ威力！ぎゃっは！

……だ、そうです。

いや、ちよいとそんな疑問をお見かけしましたもので。

デイケイドのファイナルアタックライドの、仲間あり・なし版の違いみたいなの。

カタルシスのひとつが終結。ざっくりと見事な遂げっぷりでした。

そんなデイシエッドですが、登場回数少なさもなんのその。人気投票も多く得票を頂きまして健闘しております。

そこでキャラクター人気投票の中間発表をば。

第一位は神楽見 瞳子。真の主役の貫禄です。続いて数票差を空けて第二位に壮絶な最期を遂げた神楽見 透。まだまだ健在です。

ここからぐぐつと離れて第三位、我らが相川 初ちゃん。この三強は揺らぎませんな。

その次になんと第四位に芦河 翔一さんが割り込みました。座を明け渡して五位に双葉 恭也、と同列で尾上 巧くんがランクイン。巧くんのこの間の追い上げが凄かった。

続きまして六位に借用キャストの音無 美穂さんが登場。

以下、七位・葵 遙、八位・台場 和馬と同列、意外にも相模原 脩二、すごいよ相模原。九位・剣立 一真と続き。

第十位にデイシエッドが入り込んでいます。トップテン入りです。

これ以降は 辰巳 真司・天堂 総司、漢を見せた糸矢 僚。  
騎端 勇治、一回しか出てない甲斐 当麻、男を見せて急上昇した  
竜胆寺 良男。

ザ斬鬼、各務 新、シーザー、ヴァイオラ、魚虎 鏡慈、イクサ、  
片瀬 秋乃、アリス、海参 潤、紅 音也。

深洞 沙威、北尾 秀一先生、草壁 雅人と続き、ほか、ほとんどの  
キャラに得票を頂いております。

また、瞳子のランキングでは、一位・ウエイトレスの瞳子、二位・  
音撃道見習いの瞳子、三位・学生の瞳子のこの三強が大きく上位に  
並んでおります。

翻ってワーストには絵描きの瞳子とネガの瞳子という全体的な出番  
の少なさがモロに影響したような形でした。

投票して下さった皆様、ありがとうございます。

物語の続く限り、特に制限もなく続きますので、よろしければ今後  
ともぼちりと入れてやってくださいませ。

元ファンガイア族のナンバースリーであったノウエムの王・ビショップは、その身に八種類の異世界のモンスターを取り込んだ、唯一の九種混合体・エニアゴンである。

自身の出生であるファンガイアに加え、魔術によって蘇らせたグロウングの王「ン・ガミオ・ゼダ」、人間の子供のような姿をしたアンノウンの主である「テオス」、ミラーワールドの基点である少女「神鳥 優衣」、未覚醒状態だった所を無理矢理覚醒させたオルフェノクの王「アークオルフェノク」、ダイヤのカテゴリークングである「ギラファアンデッド」、魔化魍の育ての親の起源たる存在である「始祖童子」、ワームの最強種たる「グラリスワーム」、「死」という最も忌まわしいイメージから現出した「デスイマジン」。

始祖童子の顔が自分と瓜二つであったことにはそれなりに驚いたが、いずれもそれぞれの世界では宇宙の基点たる仮面ライダーを凌ぐ最強の力を持つものばかり。

ン・ガミオ・ゼダは一度は破れ去ったが、混合体の素材としては最上のものであり、有用である。

これら全てを自らの内に宿し、ビショップは九つ全ての世界を越える強さを持つ王となったのだ。

膠着しているという戦場に、ビショップは配下の八種混合体オクタゴン二体を引き連れてやって来た。

全ての戦力を叩きつけ、疲弊した「悪魔の影法師」に自らの手とどめを刺すつもりであったのだが、戦場でモンスター群相手に大立ち回りをしているのは、ヒエラルキーの最底辺であるはずのたった四人の仮面ライダーであり、肝心の「悪魔の影法師」はそこから離れた場所にいた。

「……………」

思いも寄らない状況に首を傾げるが、仮に先手が通じていなかったとしても、エニアゴンにして「悪魔」をも上回る切り札を持つビシヨップの優位は揺らがない。

このまま「悪魔の影法師」を叩き潰すべく、ビシヨップは仲間と座り込んでいる「悪魔」の元へ歩んでいった。

「……………!?!」

やがてこちらの接近に気付いたのだろう。人間の女の姿をした「悪魔の影法師」がこちらの姿を認め立ち上がった。

「ようこそ。「悪魔の影法師」よ。手違いがあったようだな。期待の挨拶が遅れたようだ。」

言葉が示唆する遠くの喧噪に気付いたのか、「悪魔の影法師」が彼方を見遣って驚愕する。

「我はこのノウエムの王。この新しき世界に降り立った「悪魔の影法師」を歓迎しよう。されば」

そこでビシヨップはフィンガースナップを一発放った。

合図に従い前に進み出る二体のオクタゴン。

「まずはこちらの挨拶を受けて頂こう」

そして二体のオクタゴンが「悪魔の影法師」へと襲いかかっていった。

突然現れた桁違いの気配を放つ「王」を名乗る存在に慌てて立ち上がり、その手下二体が襲いかかってきたのを見て瞳子はカードとカレイドブレイドを抜き出した。

「変身！」

《カメンライドウ・デイレイド！》

瞬時にイエローのボディスーツを装着しデイレイドへと変身する。

続けざまにデイレイフォンを取り出し、変形させてカレイドブレイドに叩き込み、展開した刀身の溝を指先で一閃し周囲に出現したカードのヴィジョンを一回転して一薙ぎし、閃光に包まれてカレイド

フォームへと移行した。

『我はノウエムのオクタゴンがひとり、イモレイル!』

『同じく、オクタゴンがひとり、クローウン!』

いちいち名乗りを上げるのは、こいつらの流儀と言うよりは、ブームかなにかではないのだろうか。

『こいつら、オクタビーイング……!』

邪推しつつ、検索機能により看破した敵の混合種数を忌々しげに吐き捨てる。

迫る二体のオクタビーイングへ駆けながら、ディレイドはカレイドブレイドの刀身の溝のライダーズクレストをなぞりきり、ベルトバツクルを掴んで振り払い回転させ、隣を並んで走るアリスの身体に剣を透過させた。

《ファイナルアタックライドウ・カレイド!》

認証の音声が応え、ディレイド・カレイドフォームの胸郭のカードの欠片が激しく入り乱れて回転し、走るアリスもクウガ・アルティメットフォームに、アギト・シャイニングフォームにと九つの仮面ライダーのファイナルフォームへ次々とその姿を何度も何度も変えてゆく。

対するオクタビーイングの二体も、頭上に光輪を出現させ、その中に両腕を突っ込むと凶々しいステンドグラス様の凶器を引きずり出して構えた。

まるでガラスでできた樹木のような凶器。刺々しいその武器は四方八方に鋭い切っ先を突き出しており、全体を見るとそれは剣なのか斧なのかも分からない。

やがて互いに目前に迫った両者は武器を激突させて配置を入り乱れさせた。

様々な最強武器に変移し続けるアリスアンブレラでガラスの凶器を弾き返すアリス。

ディレイドも、相手の武器が複雑な形状をしていることを逆手に取り、相手の武器をカレイドブレイドで引っかけて地面に押し下げた。

だがそれはオクタビーイングも承知の上だったようで、押し下げられた武器でカレイドブレイドを引っかけたままくると円を描いて元の位置に戻してきた。

互いを蹴りで弾き間合いを取る。

『なかなかやるようだ。』

『さすが「悪魔の影法師」。ならば』

もはやどちらがイモレイルでクローウンなんだか分かりはしないが、そう呟いた二体が同時に姿を掻き消した。

『……クロックアップ!? アリスっ!』

『うんっ!』

即座に反応したディレイドは、アリスと同時に自らの右腰を叩く動作をした。

《クロックアップ。》

現在、全てのライダーの機能を発現させているディレイドとアリスの中の、ハイパーカブトの機能が規定の動作を認識して認証を告げ、ディレイドとアリスを加速空間へ突入させた。

途端に無音となる世界。そこに、先ほど姿を消した二体のオクタビーイングが現れた。

『やはりクロックアップもできたか』

『ここからが本当の勝負だ』

『いいえ。殲滅よ』

たいがいその白々しい余裕の態度に付き合いきれなくなった瞳子は忌々しげに吐き捨てた。

『今の私にとって、あんたたちは只の路傍の石よ。通り過ぎたら、そのまま忘れるから』

『ふ。大口を叩きおる。』

『我らの力、侮ると通り過ぎることなく貴様の命が忘却の海に沈むぞ』

ディレイドは、オクタビーイングの発言を無視してカレイドブレイドのディケイドのマークに指先で触れた。



カレイドブレイドの刀身が、ベルトのバックルが、スロットマシンの凶柄のように姿を推移させ続けているアリスの持つ武器が激しい輝きを放ち始めた。

同時に自らの異能力を發揮したのか、ガラスの凶器に凶々しいオーラを纏わせたオクタビーイングが身構え、やがて両者が共に互いに向けて駆け出した。

『うああああああ！』

『死ねええいつ！』

振りかぶった剣がうなりを上げて振り下ろされ、カレイドブレイドが、変移を続けるアリスアンブレラが、ガラスの凶器を粉々に打ち砕き、そのまま二体のオクタビーイングをも両断し、爆裂四散させた。

幾重ものしつこい小爆発を繰り返し、やがてデイレイドとアリスの前には何者の姿もなくなつた。

《クロックオーヴァー。》

加速終了の音声と共に、辺りに喧噪の物音が復帰した。

「すばらしい。」

最初の位置で立っていた王とやらが、冷酷な笑みで呟いた。

「「世界の破壊者」と「悪魔の影法師」には、全ての世界のモンスターを混合させても最早意味はないということか。」

『理解が早くて助かるわ。』

デイレイドは、つまらなそうに男の言葉を肯定した。

『だからもう、あんたもお終いな。悪いけどこれから私、用事があるの。あんたを呆気なくぶち倒していくわ。』

「そうはいかん。」

相変わらずどこか狂気を孕んだ笑みを浮かべる男が片手をかざすと、空にパイプを複雑に縋り合わせて作ったような十字架が出現し、即座に落下して男の背後の地面に突き立った。

その十字架には、赤のビジネススーツの上に白衣を纏った女、震フルルが括られていた。

服はぼろぼろで、本人も傷だらけになっており、意識の程は伺えない。

「……………!?!」

瞳子は、その震の出現を訝しんだ。

これまでの透に対する所業からして決して友好的な関係ではなかったが、今ここで人質にされたなら、無碍に見殺しにする訳にもいかない。

「エニアゴンたる我が力で「悪魔の影法師」を倒そうと思っていたが、どうやらワールドスライダーの力を見縊っていたようだ。」

十字架に近付いた男は、言いながらうなだれる震の顎を掴み上げた。「ならば、切り札を出さねばなるまい。そもそも完全を目指していたのだ。躊躇したのは間違이었다。」

なにを、と問い掛けかけたデイレイドを待たず男の周りに無数に出現した牙のヴィジョンに瞳子は思わず言葉を失った。

「!?!」

そして一瞬の遅滞なくその全ての牙のヴィジョンが震の身体に殺到した。

「いひいつ!?!」

一瞬だけ、突然の激痛に覚醒した震の苦悶の悲鳴が聞こえたが、変化は迅速にその悲鳴をも飲み込んで進行してゆく。

身体中に牙のヴィジョンを突き立てられた震はたちまち色を失い、劣化ガラス体へと変質してしまった。

それどころか、牙のヴィジョンはその震の死体をも吸収し、跡形も残さなかった。

「ふふふ……………」

「……………あ、あんた、いったい何を……………?」

思わず呟いたが、男は反応せず、かざした手はそのままに牙のヴィジョンを操りパイプの十字架を取り囲むと、今度は十字架が変形を始めた。

擦れるように歪み、取り囲む牙のヴィジョンに圧されるようにその

外形を縮め、小さく小さく圧縮されると、やがて掌大の大きさの黒い塊となると、かざしていた男の掌にぽとりと落ちて収まった。

「ふふ。この女が残したモンスター混合の技術。それは、モンスターを強化するに止まらず、貴様等ワールドスライダーに迫る可能性をも秘めていたのだ。」

こちらに突きつけられたその黒い塊は、中央に青い宝玉をはめ込んでおり、良く見れば、それは知っている物の形状にそっくりであった。

黒いデイレイドベルト。

スクエアフォーム時のデイレイドのベルトバックルにそれは酷似していたのだ。

ただし、配色は反転したかのように漆黒であるが。

「それは!？」

「ふふふ……」

笑みを含み、男はそれを己の腹部に押し当てる。するとパネルの両端からバンドが飛び出し、腰を半周し背後で結束してベルトとなった。

その途端、男の周囲に八つの半透明の人影が出現した。

グロンギの王ン・ガミオ・ゼダ、アンノウンの主テオス、ミラーワールドの基点と言われた少女、オルフェノクの王アークオルフェノク、ダイヤのカテゴリークィングであるグラフィアアンデッド、魔化魍の育ての親の祖である始祖童子、グラリスワーム、デスイマジン。

「……………!？」

棒立ちするそれらのヴィジョンに、それらの各世界での重要性を知る瞳子は言葉を失った。

最強のヴィジョンに取り囲まれた男は、人差し指と中指の二本を突き出し、目の前の虚空を縦になぞった。

続いて今度は人差し指と親指で、先ほどの線と交差するように横になぞると、描かれた線で囲まれたそこに、一枚のカードが現れた。それを指先で摘み取った男は、呟きながらそのカードを翻した。

「……変身。」

ベルトバックルのスリットにカードを挿し入れ、左右の手でバックルフレームを押し込むと、バックルパネルが回転して収まると同時に周囲のヴィジョンが男の身体に殺到し、グレーのボディスーツへと変移してしまった。

さらにバックルパネル中央の青の宝玉からいくつものアメジストのような細長い鉱石の板が飛び出すと、次々とマスクに差し込まれてゆく。

それらのプレートはマスクの中央で交差するように重なっていくと、顔の中心から放射状に広がるラインを形成し、そしてラインに区切られた箇所が、全身のプロテクターの表面がステンドグラスのように目に痛い程の多彩なカラーに変色すると、その変化は完了したようだった。

マスクの目にあたる部分には、デイケイドやデイレイドと同じ形状のデイメンションヴィジョンが形成されている。深紫に染まるデイメンションヴィジョンに。

『これが、俺が手に入れた九種混合にワールドスライド能力を加えた十種混合の力！デイケイゴンだ！』

> i 1 3 2 7 8 — 5 3 8 <

あまりの想定外の事態に、瞳子は驚愕していた。

十種混合など、本来あり得ないバリエーションだった。

敢えて名付けるならば「デイカビーイング」といったところだろうが、デイレイドの検索機能は目の前のそれを「デイケイゴン」と定義している。

『さあ。この力、試させてもらおう。』

愉悦と興奮の混じった声が宣告した途端、デイケイゴンの姿が消滅し。

消滅を認識した瞬間にデイレイドは全身に凄まじい衝撃を受け立ったまま身悶えした。

(…………み、視えないっ…………！？)

全方位から突き刺さる無数の衝撃に翻弄されるままのデイレイドの身体。

あまりの怒濤の衝撃にその場から一步動くこともできない。

心なしか辺りが薄暗くなつた気がするが、デイメンションヴィジョンを始めデイレイドの持つどの超感覚でも敵の動く気配を捉えられない。

あらゆる方向から襲う連打に次ぐ連打。例えクロックアップしたにしてもこの攻撃量は異常だ。

『トコッ!?』

『アリスっ!?』

同様に身動きが取れない程の攻撃にさらされているアリスに呼びかけ、デイレイドとアリスの身体が同時に右腰を叩いた。

《クロックアップ。》

加速空間に突入したデイレイドとアリスは、喧噪の音が掻き消えた世界で目にした光景に絶句して辺りを見上げた。

『…………これ…………!?』

デイレイドとアリスの周りを、街中を、見渡す限りの空を無数のモンスターが埋め尽くしていたのだ。

巨大な角を、牙を突き出して突撃してきたモンスターを躲してデイレイドとアリスが背中合わせに身構える。

『なに!? ……なになにこれえええええ!?』

『ミラーモンスターに、…………魔化魍!?』

辺りを駆け回るモンスターの中から飛び出してきたミラーモンスター・シールドボーダーを、魔化魍・ヨブコをカレイドブレイドで打ち払い、あるいは避けてやり過ごす。

突撃してきたモンスターは、それ以上の攻撃には執着せずに通過してゆき、辺りを駆け回るモンスターの濁流に紛れてしまう。もつとれがいま攻撃してきたモンスターなのか分かりはしない。

さらに得物を手に振りかざす高等なタイプのモンスターが群を飛び

越えて襲いかかってくる。

グロンギ、アンノウン、オルフェノク、イマジン、ファンガイアが腕力にモノを言わせて、あるいは巧妙な小手先の技で翻弄して、あるいは厄介な異能力を駆使してディレイドに、アリスに痛撃を喰らわせてゆく。

『ああっ!?!?』

『わああっ!?!?』

剣で受け止めるが、とても捌ききれぬ数ではない。

それどころか、転倒したところを盲滅法に駆け回る無数のモンスターに意図せず踏みつけられてゆくのだ。

どうにか立ち上がったところで、今度は空の一部が黒くなったと見るや、汚水の濁流のようにひとかたまりの群を成した無数のミラーモンスター・シアゴーストの大群が上空から飛来し、ディレイドを、アリスを薙ぎ飛ばして通過していった。

『ああああっ!?!?』

跳ね上げられ、だが二人の身体は地面に落下する前に駆け回るモンスターに弾かれる。

まさに大海に放り込まれたアリのごとき状況だった。

先ほど通常空間において辺りが薄暗くなった気がしたのは、加速中のモンスターが残像が残るほど間断なく飛び回って視界を遮っていたせいだ。

超感覚が敵を捕捉できなかつた訳ではない。対象の数が膨大なせいで超感覚が塗り潰されていたのだ。

『ふははははははは!手も足も出ないようだな?』

無数のモンスターに翻弄されているそこに、この乱戦の渦中にあっても良く通る声が聞こえてきた。

飛び回る羽虫のようなモンスターを掻き分けて見上げれば、何も無い虚空に立ちこちらを見下ろすあの瘦身の男が変身した「ディケイゴン」の姿があった。

『いかに世界の基点たる仮面ライダー全ての力を身に付けようと、』

所詮ワールドスライダーの身体はひとつやふたつ！例え分身能力があつたとて、千や万には及ぶまい？』

両手を広げて嘲るディケイゴン。

『数の暴力だなどつたらんことを言うのではあるまいな？ この圧倒的な力の差を前にして、そんな世迷い言しか出せぬなら、まとめてモンスターの海の藻屑となるが良い！』

叫んだディケイゴンが交差させた両腕を広げると、アメジストに放射状に仕切られたマスクや胸郭、全身のプロテクターなど体中のステンドグラスのごとき表面から無数のモンスターがぞくぞくと吹き出された。

それらはミラーモンスターに限らない。アンデッドを除くありとあらゆるモンスターが生み出されている。

異常なまでの増殖速度とそれらを納める異空間は、融合したミラーワールド能力者の要素だろう。

それも、母体たるディケイゴンが同時に全てのモンスターと融合している為、見た目は単体のモンスターでありながら Gronkimo アンノウンも全てのモンスターがミラーワールドから出現し加速空間で普通に行動しているのだ。

言わば、辺り一面を埋め尽くすこの千や万を越える数のモンスター全てが「ディカビーイング」なのである。

『わああああ！？』

広げたアリスアンブレラでモンスターの猛攻を凌いでいたアリスがとうとう弾き飛ばされてきた。

その身体を受け止め、そちらから猛追してくるモンスターをカレイドブレイドで薙ぎ払う。

だがモンスターは四方八方から押し寄せてくる。逃げ場がほとんどない。

『トーコー!? どうするの!?!』

『決まってる! どんなにモンスターがいても、頭はひとつ!』

上空に佇むディケイゴンを睨み付け、ディレイドはカレイドブレイド

ドの刀身の溝のライダーズクレストを指先で一閃してベルトバックルを掴み、振り払った。

《ファイナルアタックライドウ・カレイド!》

カレイドブレイドをアリスの身体に透過させ、アリスの身体を幾重にも変移させるとデイレイドは邪魔なモンスターを振り飛ばして駆け出した。

『行くよアリス! 付いて来て!』

『うんっ!』

飛び出したデイレイドは目の前に宇宙境界線レイヤを出現させるとその中に飛び込んでいった。

だが宇宙を渡る訳ではない。

出現した場所は、虚空に佇むデイケイゴンの背後。

『もらったっ!』

虚空から飛び出したデイレイドとアリスは、無防備なデイケイゴンの背中めがけてカレイドブレイドを、アリスアンブレラを突き出した。

『……読んでいないとでも思ったのか?』

『!?!?』

地上を見下ろしたままの冷淡なデイケイゴンの眩きと同時、デイレイドとアリスの身体は、真横に出現した銀のオーロラの中から飛び出してきた大量のシアゴーストの濁流に薙ぎ払われ地面に叩きつけられてしまった。

『くあっ!?!?』

『ああっ!?!?』

『愚かしい。ワールドライダーも取り込んだのを見ていなかったのか?』

苦悶に身を擦るデイレイドとアリスを見下ろして、呆れたようにデイケイゴンが嗤う。

『なかなか面白い能力だが……。ふむ。なら、こっついうのはどうだ?』



顎に手を遣ったデイケイゴンが軽く手招きをすると、そこに八種類のモンスターが一体ずつ集まり身体をぶつけ合うと、まるで粘土か何かのように潰れ合い、ひとつに融合してしまった。

『ふふ……』

そして縊り集まった肉塊に両手をかざし、手のひらを外側に向けた両手を広げる動作をすると、あるうことか宙に浮かぶ肉塊の中心を唐竹割りにするかのよう光の亀裂が入り、その肉塊を二つに分けて切り開いてしまった。

その断面には肉も内臓も見えず、ただ深淵の闇が広がっている。

肉塊にはなんらダメージを負った様子も苦しむ様子もない。

『ふふふ』

相変わらず笑みを含み、デイケイゴンは地上のデイレイドをちらと見ると、その肉塊に刻まれた割れ目に飛び込んでいった。

そう体積の変わらないデイケイゴンを飲み込んだにも関わらず、肉塊は膨れる様子もなくその亀裂を閉塞した。

『まさか……？』

『トーコっ！あれっ！』

その現象を良く知るアリスが、デイレイドの閃きを裏付ける。

デイレイドは慌ててブランクチケットを取り出すと、宙に佇む肉塊に向けてチケットをかざした。

『やはりクロックアップもできたか』

『ここからが本当の勝負だ』

『いいえ。殲滅よ』

たいがいその白々しい余裕の態度に付き合いきれなくなった瞳子は忌々しげに吐き捨てた。

『今の私にとって、あんたたちは只の路傍の石よ。通り過ぎたら、』

そのまま忘れるから』

『ふ。大口を叩きおる。』

『我らの力、侮ると通り過ぎることなく貴様の命が忘却の海に沈むぞ』

デイレイドは、オクタビーイングの発言を無視してカレイドブレイドのデイケイドのマークに指先で触れた。

カレイドブレイドの刀身が、ベルトのバックルが、スロットマシンの図柄のように姿を変移させ続けているアリスの持つ武器が激しい輝きを放ち始めた。

同時に自らの異能力を発揮したのか、ガラスの凶器に凶々しいオーラを纏わせたオクタビーイングが身構え、やがて両者が共に互いに向けて駆け出した。

ところが、こちらに迫る二体のオクタビーイングの片方・多分、イモレイルとか言う方が突如動きを止め、呆けたように武器を下ろして棒立ちすると、その身体の至る所から大量の砂を吹き出して倒れてしまった。

『!?!?』

怪訝な顔で走るデイレイドの見ている前で、地面に積もった砂は吹き上がるように立ち上がり人型を成すと、そのままクローウンをも追い越してデイレイドに襲いかかってきた。

『死ねいッ!「悪魔の影法師」ッ!』

マスクと胸郭に放射状の線を刻んだ見たこともないボディスーツ姿に驚愕したその時、驚きに仰け反るデイレイドの体勢が再び攻撃のそれに移行してアメジストの結晶のような鋭い手刀をカレイドブレイドで受け止めた。

『ほう! 過去に追いついてきたか!』

『ふざけた能力ね! まったく!』

デイケイゴンの時間遡航を解析し、瞬時に数分前の自分に同期した瞳子はマスクの下で忌々しげに吐き捨てた。

『アリスっ! ついて来てる?』

『おっけーだよーっ！』

振り返らずに問いかけたディレイドに、既に状況を把握したアリスが応えた。

『でやああああああ！』

手刀を押し返し、即座にカレイドブレイドでの連撃で迫る。

『お、王！？』

後退するディケイゴンの脇で、置いてきぼりにされたようにクロウウンが狼狽えていた。

『いつたい、この状況は！？』

『クロウウンよ。我に続け。』

カレイドブレイドの鋭い斬撃を手刀で打ち払いながら、ディケイゴンがオクタビーイングに呼びかけた。

『今こそ「悪魔の影法師」を仕留める時。見事、打ち果たせ！』

『はっ！』

そしてカレイドブレイドを横に弾くと、再びディケイゴンの身体中から大量のモンスターが吹き出してきた。

『うわあっ！？』

途端にモンスターの濁流に押し除けられディレイドは後退を余儀なくされる。

『「悪魔の影法師」！ 覚悟！』

そこへ、モンスターの濁流を掻き分けてクロウウンとか呼ばれたオクタビーイングがガラスの樹木のような凶器を振り上げて迫った。

『トーっ！？』

割って入ったアリスがその凶器をアリスアンブレラで受け止めるが、背後から巨大な魔化魍に突き飛ばされて呆気なく振り払われてしまふ。

『アリスっ！？』

叫ぶが、既に無数の突起が眼前に振り下ろされてきており、ディレイドはやむなくカレイドブレイドで受け止めた。

『余所見している場合ではないぞ「悪魔の影法師」！』

『うるさい！ 構ってらんないのよ！』

吐き捨ててディレイドは、ガラスの凶器を受け止めているカレイドブレイドの刀身の溝を指先で一閃し、ベルトバツクルを振り払った。  
『うわあああああ！』

『なにっ！？』

突如吹き上がったイエローの閃光がオクタビーイングを押し退けた。同時にモンスターの濁流の向こうにも同じ輝きが吹き上がり、近くのモンスターを吹き飛ばしてアリスが立ち上がった。

瞬時にディレイドは眼前にカードのヴィジョンを召還してそれを叩き斬ると、傍らに出現したマシンディレイダーが実体化するなり無人のままモンスターの群に突撃していった。

『あんに用はないのよ！』

ディレイドは驚愕に仰け反るオクタビーイングをさらに殴り付けてからその頭を踏み台にして跳躍し、空中で飛翔するモンスターを足掛かりにしてさらに高みへと跳んだ。

地上ではマシンディレイダーに合流したアリスがバイクに跨り、滑らせた後輪で蹴散らすなどモンスターの群を相手に大立ち回りを演じている。

宙を舞うディレイドは小刻みにレイヤーを展開すると、ディケイゴンを遠巻きにするように移動し、その途上でカレイドブレイドの刀身の溝の、ディケイドのマークを再びタッチした。

さらに激しい光芒が、カレイドブレイドから、ベルトバツクルから、アリスの身体から吹き上がった。

『できるのか？「悪魔の影法師」、貴様に？』

『知ったことかああああ！』

同様に自らもレイヤーを展開して空間を跳躍し、身体の表面から大量のモンスターを吹き出しては後退を繰り返すディケイゴンが嘲笑う。

『私の邪魔をする奴は、すべからく叩いて踏み潰すだけよっ！』

モンスターの濁流に飲み込まれる青白い街を眼下に、黄色の流星と

化して飛翔するデイレイドは、空をあちこちへと渡り続けるデイケイゴンを追って空間跳躍を繰り返し執拗に追撃する。

レイヤーを渡るデイレイドの前に、大量に吹き出されるモンスターの群も意味はない。

モンスターの群の後へ、後へと出現を続け、今やデイケイゴンとデイレイドはマスク同士がぶつかり合いそうな距離を保ったまま空間跳躍を繰り返していた。

『ぬつうう貴様ああああ!?!』

『うああああああああ!』

この宇宙境界線の不安定な「ノウエムの世界」にあつて、宇宙の外に出る訳にはいかないワールドスライダー同士の追撃戦は世界の端から端にまで及んだ。

デイケイゴンも自らの鋭い手刀にエネルギーを込め、カレイドブレイドの突きを打ち払い、あるいはデイレイドの胸郭を、肩を打ち砕くが、同時にカレイドブレイドもデイケイゴンの身体をあちこちを打ち据えた。

装甲を、尖ったあちこちを打ち砕かれ、焦ったデイケイゴンはこの至近距離からモンスターを吹き出したが、それらはデイレイドの胸の前に展開されたレイヤーに吸い込まれてどこかへと消えてしまった。

『ぶつ、ざける、なつ!?! 俺は! 全ての世界を、越えて、最強の、』

『下らないこと言ってるじゃないよっ!』

デイレイドの、レイヤー跳躍の速度が増した。

『何が最強よ!?! 最強がなにしてくれんのよ!?! そんなものに用なんかないのよ!』

『トーコっ!』

その時、地上からイエローの光芒が真っ直ぐに飛び上がってきた。マシンデイレイダーに跨るアリスだ。

それは空間跳躍を繰り返すデイケイゴンとデイレイドの絡まるレイ

ヤーに同期すると、ディレイド側のレイヤーを増幅し、ディケイゴン側のレイヤーに干渉して強制的にその領域を取り込んだ。

『なに！？』

驚愕するディケイゴン。

ディレイドと、アリスと三者が交錯した瞬間、三者の座標は疑似的に限りなくゼロに近付いた。

『ああああああ！』

その高次元の世界の中で、瞬時にあらゆる可能性が渦を巻いた。

ディケイゴンの爪がディレイドの頭部を貫き、胸を引き裂き体中をばらばらにして打ち捨てた。

ディレイドの剣が、ディケイゴンの胸郭を貫き、手足を斬り裂き、爆散させた。

爪を受け止め、剣を弾き、離れ、追い、様々な可能性が迸る。

『勝った！やはり宇宙最強はこの俺だ！』

ディケイゴンが、砕けたカレイドブレイドをかざして喝采を上げた。  
『俺こそが最強なのだ！もはやキングもマスターキバもいらぬ！俺が全宇宙を支配してやるのだ！』

瘦身の男の姿のビショップが、狂喜にまみれて絶叫を繰り返していた。

『さあ！次に滅ぼされたい宇宙はどれだああああああ！』

そして振りかぶったアメジストの手刀が無限の宇宙に浮かぶ九つの地球めがけて襲いかかる。

がきん！

この異空間にあつて、手刀が形而上の音を立てて停止されてしまった。

『……なに！？』

『……そんな未来はないよ。』

ディケイゴンの鉤爪のように捻くれた五指を、カレイドブレイドが受け止めていた。

目の前に、いつの間にか傷ひとつないディレイドが立ちはだかつて

いた。

『貴様っ！？』

思わず飛び退いたディケイゴンは、背が何かにぶつかり後退を止めざるを得なくなった。

振り向けば、そこにはディレイドのバイク、マシンディレイダーが立ち塞いでいる。

『邪魔だ！』

バイクを吹き飛ばそうと振り上げた手刀が、横から突き出されたアリスアンブレラに遮られて動きを封じられた。

『！？』

『どこにも行けないよ。』

そうしている内にディレイドがディケイゴンの眼前にまで迫っていた。

『きつ、きさまあつ』

『だからもう、あんたはお終いだよ。』

たゆたう銀色に包まれた、バイクと三人しかいないこの広大無辺の異空間で。

漆黒のベルトを貫いたカレイドブレイドの切っ先がディケイゴンの背中から突き出した。

カレイドブレイドを握るディレイドのディメンションヴィジョンが、揺らめく炎のように鋭角に変形していた。

『ッガッ!? ガアアッ!?』

苦悶に呻くデイケイゴンの腹からカレイドブレイドを引き抜いてデイレイドは着地した。

マシンデイレイダーに跨ったアリスも上空を旋回して地上に舞い降りた。

ワールドスライダー同士の高次元干涉から発展した互いの可能性の奪い合いは、デイレイドに軍配が上がった。

(…………でも、危なかった…………)

マスクの下で、瞳子は勝利の感慨に浸ることなく荒くなった息を必死に抑えていた。

先の高次元干涉は瞳子にとっても不意の現象であり、つい先刻ワールドスライダーの能力を手に入れたばかりの「ノウエムの王」とやらとは能力使用の練度において四ヶ月も先行してはいたが、可能性の奪い合いに勝てたのはまさに偶然と言うよりほかない。

そう。偶然だ。

デイレイドが勝てたのは、内包する存在が一人ではなかったから。アリスがいてくれたから、二人分の可能性が共にあったから瞳子はデイケイゴンの確率干涉を跳ね除けることができたのだ。

そのアリスをデイレイドのシステムに取り込んでしまった原因は、消滅の危機にあったアリスを救う為にした行為であり、あの当時はこんなことになるなど予想だにしなかった。

『やった! やったよトーコ!』

『…………うん』

後ろから飛びついてはしゃぐアリスに瞳子は収まらぬ息でどうにか応える。

勝因を呼び込んだ友人に、瞳子はこれまで共に戦ってくれたことも含めてとても感謝していたが、同時に巻き込んでしまったことにも



後ろめたさを感じていた。

時間侵略の先兵として生み出された種族「イマジン」であり、この世に生まれてから実質一年も経っておらず、そう言った「人生」に対する概念が根本的に異なる異種族とはいえ。

「ッグウウ!?」

「!」

上空から聞こえてきた呻き声に、デイレイドは未だ宙で身悶えしているデイケイゴンを見上げた。

アリスへの謝罪はあとだ。今は前の敵に集中しなくては。

油断はできない。ドライバーを貫いたにも関わらず、デイケイゴンは未だに変身した状態のままのたうつスパークを身に纏い重力に逆らって宙に留まっている。

「ッガッ!? ガアアアアアアア!?」

突然、デイケイゴンが仰け反って一際悲壮な苦鳴を上げた。

「えっ!?!」

その異変に驚愕したのは、瞳子とアリスと同時だった。

デイケイゴンの胸の真ん中から、腕が一本生えていたのだ。

「なにあれ!?!」

アリスが悲鳴を上げる。

これまでの激闘をくぐり抜けた身としてもそれは見たことのない異常であった。

その腕は、白と黒の縞模様に覆われていた。

否、「白と黒のボーダーラインが」「腕の形に切り抜かれている」と言っただけが近い。

> i 1 4 3 9 0 — 5 3 8 <

「あれは……」

その異常を理解した時、瞳子の中で戦慄が走った。

縞模様の腕は、肘を中心にデイケイゴンの胸の上でまさぐるように這い回ると、穴の開いたベルトのドライバーを探り当てるとやおらそれを驚掴みにした。

「……………!?」  
より苦悶に仰け反るディケイゴンに構わず、腕はドライバーを引きちぎり始めた。

「ガアアアアアアアアア!?!」  
ぶちぶちと異音を立てて腹からドライバーがはがされてゆくにつれ、まるで身をもがれるような悲鳴が交差線のマスクから迸る。

やがて胸から生えた手にドライバーを完全にちぎり取られたディケイゴンは集中線のノイズに包まれると、元の痩身男性の姿に戻ってしまった。

と同時にその身体に異変が起こる。

「……………あ……………あ……………」  
胸から生えた腕が「こちら側」に伸びて、続く上腕を、肩を現してくるのにつれ、「ノウエムの王」の身体が胸の穴に吸い込まれるように歪み、縮壊してゆくのだ。

「……………あ、がつ……………」  
めりめりと音を立てて縞模様の腕がその頭を胴体を引きずって現れ、「ノウエムの王」の身体は見る見る小さくなってゆく。

やがて、縞模様の異形がするりと爪先を引き抜くと同時に「ノウエムの王」の姿は声も残さずに跡形もなく虚空に消えてしまった。

その直下の地面に音も立てずに身を屈めて着地する縞模様の異形。相変わらず厚みのない姿のせいで、目前のことなのに現実感に乏しい。

「……………やだ……………なに、あれ……………」  
その異様に怯え、腕にしがみついてくるアリスを抱き返して宥めながら、瞳子は己の内にあるデータリンクが開示した答えを口に出した。

「……………ディヴオイド……………」  
異常はそれだけでは済まなかった。

地面が、「影」がついた足下から色を失い白に、あるいは黒に変色してゆくのだ。

その変化は迅速で、たちまちこの「ノウエムの世界」を白黒のみの二階調に染め上げると、怒濤の勢いで「世界そのもの」を足下から吸い込み始めた。

「……な！？ あ……あ……」  
まるで排水抗に流れ込む濁流のように「影」を中心に景色が収束してゆく。

その中には、無数のモンスター群と戦う四人のダークライダーたちの姿もあった。

「良男！？ みんな！？」

思わず叫ぶが、「影」が世界に干渉した時点で「影」も瞳子もアリスも異なる位相に移動しており、怪訝に辺りを見回す四人のダークライダーたちには瞳子の声は届かない。

そのまま、景色ごと「影」の足下に吸い込まれて消えてしまった。

「あ……」

そこからたいしてかからずに辺りは何も無い「ノウエムの世界だった無の空間」となり、「影」とディレイドとアリスはすぐにこの第四階層で唯一の世界となった「ライダー大戦の世界」へと着地した。人気のない山並みに囲まれた窪地の一角で。

立ち上がった縞模様の「影」が、今の惨劇などなかったかのように無為にこちらを見据えた。

なぜ「影」の視線が分かったかと言えば、その「影」の頭部にだけ「」の形に黒線が避けて通っていたからだ。

それは、ディレイドやディケイドのディメンションヴィジョンの形状に酷似している。

そして全身を縦線で構成された姿は、ディケイドに似ているとも言える。

その「影」・・・ディヴオイドは、片手に掴んでいたディケイゴンのドライバーを見下ろすと、やおら己の腹にそれを押し当てた。

すると、穴が開いて全壊したはずのドライバーが綺麗に復元し、両端からバンドを伸ばして「影」の腰を一周すると結束してしまう。

そして、ベルトの上下の縁から滲むようにして影のような厚みのない縞模様の身体が実体を帯び始めた。

「……な!？」

驚愕に慄く瞳子の見ている前で、影は上下に質量を得てゆき、やがてそこに漆黒のボディスーツが現れた。

縦線で構成されたマスク。たすき掛けのように胸郭を走るパラレルライン。

そして腹に鎮座する黒い宝玉をはめ込んだプレート。

それはまるで、「デイケイド」を漆黒に塗り潰したかのような姿だった。

変異が完了すると、デイヴオイドは己の腹に手を遣り、たったいま装着したばかりのドライバーを外すと、その身を無数の縦線のノイズに包みシルエットを変形させ始めた。

すぐにノイズは消え去り、そこには代わって人間の男が立っていた。放埒な濡れ髪の下の鋭い釣り目と拗ねたような形の唇を皮肉げに歪めて嗤っている。

「……あ、あんた……なんで……」

「俺は「門矢 士」かどやつかさ。通りすがりの仮面ライダーだ。」

訊きもしないのに、デイヴオイドは男にしては高い声でやおらそう告げてきた。

口の端を釣り上げ。

「……と、名乗ればいいんだな？ これから消滅する相手に自らの存在を通過することにどんな意味があるんだか分からないが。メイセンソラルモジュールも、なんとも酔狂なことをするもんだ」  
横に持ち上げた己の掌をためつすがめつ眺めながら、デイヴオイドはすらすらと流暢にしゃべり出す。

「だが「通りすがりの」は良い枕言葉だな。通過するべく通過する俺たち「システム・デイケイド」にはまさにうってつけの表現だなあ?」

言葉の最後でぐるりと振り向き同意を求めてくるが、瞳子には応え

られない。

恐らくは、透と同じく「システム・ディケイド」のデータリンクからディケイドの人格をアップロードして模倣しているのだろうが、透と違い語り口は露悪的ながら人間性に溢れているのに、

ああ。なんということだろう。今の瞳子も「システム・ディケイド」であるが故に、すぐに解ってしまう。

語り口は露悪的ながら人間性に溢れているのに、そのあまりにも虚ろな中身の無さが露骨に感じ取れてしまつて気持ちが悪い。

これほど自分の言っていることに興味のないしゃべり方をする存在を、瞳子は見たことがない。

ぼつかりと口を開けたブラックホールの深淵がヒトの服を着て人間の真似をしているようだ。

本性を隠しおおせる訳がない。その無意味で露骨な偽装がより一層不気味だった。

そもそも心えられることを求めている問いかけに、なんと答えれば良いと言つのだろうか？

> i 1 4 3 9 1 — 5 3 8 <

「さて。メインセントラルモジュールもタクティカルパイロテージモジュールもフォロワーバックアップモジュールも鹵獲され、ファイアコントロールモジュールも破壊されちまつた。と、なつたら、この俺が単独で「システム・ディケイド」の本懐を成し遂げなくちゃいけない訳だ。」

だらりと下げた手で己の胸を示しディヴオイドが宣つた。皮肉げな釣り目をにやりと歪め。

「まあ心配するな。なにせ俺は宇宙最強の仮面ライダーだからな。それに、たつた今おもしろいものも手に入れたし」

言いながら、例のドライバー・今となつては「ディヴオイドライバー」とでも言つべき漆黒のバックルをかざす。

「全ての仮面ライダーの能力を使いこなし、かつ全てのモンスター・怪人の能力も使えるこの「仮面ライダー デイクエイゴン」だか言うポンコツのおかげで俺は「システム・デイクエイド」の中でも最強のさらに上まで登り詰めた。」

瞳子のはつとした。

懸案の存在の不意の登場で見落としていたが、デイクエイドが手にしているドライバーは元はデイクエイゴンのもの。

デイクエイドは構わずに己の腹にドライバーを当てがった。

途端にバンドが飛び出し腰を取り巻いて結束しベルトと成す。

「だから俺は、全ての仮面ライダーと、不要になった全ての「システム・デイクエイド」を破壊する。」

左腰の、デイクエイゴンは身につけていなかったライドブツカーを展開して中からカードを一枚取り出し、「門矢 士」は指先に摘んだそれを真正面に突き出した。

「覚えておけ。 変身！」

くるりと翻したカードをドライバーに叩き込み、両手を交差させてフレームを閉塞した。

その途端、無数のヴィジョンが「門矢 士」に殺到しグレーのボディスーツ姿に変移すると、バックル中央の黒い宝玉からいくつものライドプレートが飛び出し、ブーメランのように弧を描いて次々と頭部に突き刺さる。

たちまち全身を漆黒に染めて、デイクエイドが戦闘態勢に移行した。

「アリス！ 気を付けて！」

未だ震えているアリスの肩を掴んで下がらせ、デイクエイドはカレイドブレイドを突き出して後退した。

能力が未知数なのはデイクエイゴンの時と同様だが、プレッシャーが桁違いだった。

いや、虚ろな存在であるデイクエイドに限ってこれはプレッシャーでは有り得ない。

いま感じているこれは、純粹に「恐怖」だった。

踵のすぐ後ろが奈落へ通じる崖つぶちであることを悟った時の、あの膝から這い上がる寒気にとても良く似ている。

進んでも退いても飲み込まれるしかない相手に、いったいどう戦えばいいのか。

泰然と構えているデイヴオイドは、再び左腰のライドブッカーに手を遣ると、一枚のカードを抜き出した。

それを手の中ですくると翻し、ドライバーに叩き込むと両手を交差させてバツクルを閉塞する。

《カメンライドウ・》

音声か、認証を不自然に途切れさせた。

「……………！？」

恐怖に後退を続ける瞳子にとって、それもまた不気味でしかない。変化は唐突に始まった。

デイヴオイドの黒光りする装甲が艶を失い、再び凹凸のない縦縞の影へと変移したのだ。

そして白線の一部が消滅し、残る黒線部分の間に背後の光景を透過させ、まるで人型の鉄格子のように変化する。

続いてデイヴオイドは残った黒線部分同士の間隔を左右に広げ出した。

「……………！？」

カメンライドと謳っておいて、これから何が起こるのか。

慄くデイレイドの前で、今度はデイヴオイドの黒線自体が不意にゆっくりと太さを増した。

いや、違う。今のデイヴオイドの身体を構成していたのは「線」ではなく、「黒い板」だったようだ。

さながら縦に輪切りにされたようなデイヴオイドの身体の断面がこちらを向いた為、黒線が太くなったと勘違いしたのだ。

そして向き直ったデイヴオイドの身体の断面は、あるうことかそれぞれ九つの仮面ライダーと、九つの世界のモンスターの形をしていた。

「な……！？」

こちらを向いて並び立つ仮面ライダーたちとそれぞれの世界の脅威の根元たち。

書き割りのようだった平面のそれらが、途端に厚みを増して本来の形状を取り戻し、実体化して襲いかかってきた。

「……う、うわ！？」

クウガが、アギトが、龍騎が、ファイズが、ブレイドが、響鬼が、カブトが、電王が、キバが。

ン・ガミオ・ゼダが、テオスが、神鳥 優衣が、アークオルフェノクが、ギラフアアンデッドが、始祖童子が、グラリスワームが、デスマジンが、スワローテイルファンガイアが。

十八もの脅威がディレイドとアリスに殺到してきた。

《クロックアップ！》

「うわあああああああ！？」

同時に五体以上から殴られてディレイドは派手に吹き飛んでいった。直前にクロックアップを作動させられたことは僥倖だった。

だが、それだけ。

初撃で何がどう攻撃してきたのかも把握できず、アリスがどうなったのかを確認する暇もない。

慌てて体勢を立て直して着地し、振り下ろされてきたブレイラウザーをカレイドブレイドで受け止めた瞬間にはファイズエッジが、デングアツシャー・ソードモードが、ヘルター・スケルターが死角から叩き込まれ、吹き飛んだところに後方から放たれたン・ガミオ・ゼダの火球が、テオスの輝く十字の光線が殺到し爆発に蹂躪される。モンスターの大群に襲われても捌くことができたのに、この仮面ライダーと世界の脅威の混成軍には為す術が見当たらない。

その行動は、連携はあまりにも有機的で隙がない。

いや、これは「連携」などと言う生易しいものではない。意識を繋いだ瞳子とアリスでも、こうはいかない。



十八体すべてが「デイヴオイドの身体」なのだから。

『分かつているだろうが、』

怒濤の打撃・斬撃と爆撃の波状攻撃の最中、十八体全てが同時にデイヴオイドの声で語り出した。

『デイシエッドを破壊できたからと言って、デイレイドが俺を破壊できる根拠にはならないぞ。』

突き放したような、嘲るような高い声。

だがその実、「嘲る感情」も伺えない機械の作動音のような宣告。

それだけに、より事実のみを的確に伝えるような台詞に瞳子は背筋を這い上がる不快な冷たさを感じた。

『加えてこの「敵性要素」の能力も付与された今、』

離れた岩の上に立つ神鳥 優衣がデイヴオイドの声でしゃべりながら片手をかざした。

『ただの「システム・デイケイド」に適切に対抗できる方法は無い。』

手刀を振り下ろしたスワローテイルファンガイアの体表のステンドグラス様の表皮から無数のミラーモンスターの大群が濁流のように吹き出しデイレイドを跳ね飛ばした。

激突の寸前に数体を斬り裂いたが、あるうことがミラーモンスターの死体が崩れて砂になると、再び元のミラーモンスターとなって襲ってきたのだ。

さらに脇にいたファイズの、カブトのマスクのセンサーから、表面の艶を鏡の媒介として龍騎とアギトが飛び出して空中にあるデイレイドの身体を蹴り落とす。

『つまり、デイレイドは破壊されるしかない。』

地面に激突する前にアークオルフェノクがデイレイドの脇腹を蹴り飛ばし、クウガとグラリスワームの殴打が背中から迎え打ち、飛び越えてきた始祖童子の全体重を乗せた足裏がデイレイドを地面に叩きつけた。

間断なく火球の雨が、光の十字架が降り注ぎ絶え間なく爆発する。

『ああああああっ!?!』

とうとう幾重ものヴィジョンが飛散し変身を解除されて吹き飛ばされた瞳子の身体がごろごろと地面を転がっていった。

『トーンコッ!?!』

アリスの悲鳴が聞こえた途端甚大な爆発が巻き起こり、倒れる瞳子の元に大量の砂が撒き散らされた。

アリスが、撃破された。

「……あ、りす……」

衝撃で朦朧としつつも瞳子は震える頭を上げる。

だが、アリスはイマジン。そのピンクの身体はすぐに瞳子の記憶を基に再構成されて傍らに出現するが、消耗自体は回復できず現れるなり膝を落として突っ伏してしまった。

『まあ良くやったよ。嘆くことはない。お前が弱過ぎるんじゃない、俺が強過ぎるんだ』

倒れ伏す二人のもとに、十八体の仮面ライダーと世界の脅威が歩んできた。

『』とはいえ、新たな力を得て生まれ変わった俺の初陣としては少々物足りなくもある。　と言うよりこの「人格」とやらは不合理だな。』

途中で自身の台詞を怪訝に感じたのか、デイヴオイドが首を傾げた。十八体が同時に。

『』まあいい。多少のおしゃべりが俺の使命の結果を左右することはない。　じゃあデイレイド。お前はこれでお終いだ。』

這いつくばったまま睨み上げる瞳子の周りで、十八体の仮面ライダーと世界の脅威が各々の凶器を振り上げた。

「!?!?!」

『』!?!?!』

その感覚に気付いたのは同時だった。

瞳子の中のデータリンクの、デイケイドのアカウントが突如前触れもなしに消滅したのだ。デイヴオイドも同様に察知したのだろう。

それと同時に瞳子を取り囲む十八体の仮面ライダーと世界の脅威がスイッチを切られたテレビの画面のように微かな瞬きを残して全て消え去り、ディレイドライバーの中のワールドスライドマップに消滅したはずのこの第四階層の「九つの世界」のアイコンが再び出現したのだ。

「……………これ……………!？」

「……………バカな!？」

離れた位置に、ノイズと共にデイヴオイドが再び姿を現した。たった一体の、漆黒のデイケイドの姿で。

『デイケイドが、なぜ「システム・デイケイド」を自壊させる!？』

そして胸を押さえ、苦悶の様子で膝をついてしまった。

透がデイケイドからの使命を放棄したあの時から、瞳子も特にデイケイドの動向には注意を払っていなかった。だから、何が起きたのかは良く分からない。

いま言えることは、デイケイドが消滅し、消滅したはずの第四階層の「九つの世界」が復活したこと。

そして、デイケイドの消滅と「九つの世界」の復活は連動しており、恐らくはデイケイドの意志であること。もうひとつ。

デイヴオイドは、宇宙の復活に伴い吸収していた第四階層の「九つの世界」の仮面ライダーの能力と世界の脅威の能力を全て失い、その分弱体化したこと。

少なくとも、世界の脅威に関してはデイケイゴンのドライバーを通じて第四階層のものしか吸収してはいない。

今のデイヴオイドが持っている能力は、第五階層以降の仮面ライダーのものしかない。

「……………確かに人格って不合理だよな」

こみ上げる笑いで全身を苛む痛みを誤魔化しながら、瞳子は両手で地面をついてゆっくりと起き上がった。

「多少のおしゃべりで使命の結果を左右しちゃうしさ。　こんなふうに。」

『……貴様……』

口の端に滲む血を手の甲で無造作に拭い、怨嗟を上げて睨むディヴオイドを逆に睨み返す。

「なんだか知らないけど、ディケイドって世界を救済する為に行動してたんでしょ？ディケイドは本懐を成し遂げたんじゃないの？」  
溢れる嘲笑が止まらない。

どこかで聞いた台詞を逆順に辿り上げて悪罵に変えディヴオイドに浴びせかける。

本当に偶然というものは恐ろしい。

ディヴオイドから第四階層の能力を奪ったところでワールドスライダーとしての危険性はディシエツドとあまり変わらないのだが、今はそんなことはどうでも良かった。

ディケイゴンのドライバーは、ディヴオイドに致命的な弱点をも植えつけてくれたのだから。

「さあて、さつきは出鼻を挫かれちゃったけど、私もあなたに言いたいことが山ほどあんのよ！」

取り出したカレイドブレイドの切っ先をディヴオイドに突きつける。  
「だいたい後ろからこっそりついて来て、世界を潰して罪だけ前の奴に押しつけてるその性根が気に入らないのよ！　おかげで「悪魔の影法師」だなんてつまらないあだ名を付けられた透がいい迷惑よ！　マスターライダーにも集中攻撃されて殺されて……ムカつくつたらありゃしない！」

どがつ、と目の前の地面を剣で殴りつける。

「私がここまで来たのはね！　まずはあなたをぶっ壊す為よ！　その次に間抜けなマスターライダーたちを片っ端から一発ずつぶん殴つてやるんだから！　あんたはその前の前菜だよ！　とにかく理不尽な攻撃をしこたまぶち込んでやるからさっさと立て！」

『貴様あ！　ドライバーを鹵獲したただけの原住民の分際で！』

激昂したデイヴオイドが、おぼつかない調子でようやく立ち上がった。

「ふん。不合理な人格の味はどう？ ドライバーを鹵獲しただけの原住民の分際に、頭っからバカにされた気分はどうだって訊いてんのよ！」

キラキラした目つきで瞳子は手前の空間を一閃した。

「宇宙最強が聞いて呆れるわ！今の気分を言っつてごらん！あんたにトドメを刺す手前で全部言い返してやるから！」

「ふざけるな！宇宙ならまた喰い尽くしてやればいい！だが貴様はバラバラに引き裂いて宇宙の狭間に放逐してくれる！吸収した宇宙のどこにも貴様の存在は残さん！」

「オツケー、トドメを刺すのが俄然楽しみになってきた！」

デイヴオイドの絶叫に狂喜の笑みを浮かべ、瞳子はデイレイドのカメンライドカードを取り出した。

「貴様……原住民の分際に、つけあがるのも大概にしる！何様のつもりだあつ！？」

「通りすがりに当て逃げされた被害者よっ！覚えておきなさい！これからじっくりたっぷり賠償させてやるんだから！変身！」

叫んだ瞳子は、カードをデイレイドドライバー・カレイドブレイドのスリットに叩き込み、抜刀の動作でスライドカバーを閉塞した。

《カメンライドウ・デイレイド！》

> i 1 4 3 9 2 — 5 3 8 <

track・76 シークレットマニユール（後書き）

逆転のシーンのタイミングは、劇場版完結編でのデイケイド消滅のシーンの直後と連動しています。

図らずも光 夏海が瞳子の窮地を救ったという構図で。

……おかしいな。盛り上げる為のボスオンパのはずなのに、どいつもこいつも出オチみたいに。

《カメンライドウ・デイレイド!》

閃光を振り払って現れたデイレイドが黄色い携帯電話型機能拡張ツール・デイレイフォンを取り出すのと、デイヴオイドがカードを引き抜くのは同時だった。

《カメンライドウ・》

《ファイナルカメンライドウ・カレイド!》

周囲に出現したカードのヴィジョンを一回転して薙ぎ払い、切り刻まれたライドカードの紙吹雪を身に纏ってデイレイド・カレイドフォームが現れ、不気味に認証を途切れさせたデイヴオイドが輪切りに分離した己の身体を九体の仮面ライダーに変移させた。

『俺から第四階層のライダーの能力を奪ったところで、俺の中にはまだ三十階層以上の仮面ライダーが取り込まれている! 貴様には万にひとつの勝ち目もないぞ! いずれ消耗するのは貴様の方だ!』

『上等だよ! 消耗する前にあんなの中からライダーの能力をひとつ残らず奪い取ってやる!』

『ほざいただけのものは見せてくれるんだろうな!』

叫んで一斉に襲いかかってくる九体のデイヴオイドに、デイレイドはまずアリスのそばに駆け寄って手前に出現させたカードのヴィジョンごとアリスの身体にカレイドブレイドを透過させた。

《カメンライドウ・エクリス!》

たちまちドット柄のノイズに包まれたアリスのピンクの矮躯が拡張し堅牢な城塞のごとき重装甲を纏う仮面ライダー エクリス・カイロスフォームへと変移する。

『つわあ! これ、キョーヤのじゃん!?』

『アリス! 前!』

『あ、うん』

後退したデイレイドに代わって前に出たアリスが、飛びかかってき

たクウガ、龍騎、響鬼、キバの攻撃を全身で受け止めた。

「んっ、うりゃあ！」

「なに！？」

一瞬、四体の腕力に押し込まれたかに見えたエクリス・カイロスフォームがそんな声と共にデイヴオイドを纏めて弾き飛ばしてしまっ  
た。

エクリス・カイロスフォームは瞳子の知る限りどんな攻撃を受けてもびくともしない最強の防護を誇る。

デイヴオイドを相手にしてアリスを守りつつ攻撃を加えるには最適なカメンライドだった。

「うりゃうりゃー！」

そのアリスが、エクリス・カイロスフォームのパワーで次々とデイヴオイドを薙ぎ倒してゆく。

その隙にデイレイドはマシン・デイレイダーに駆け寄ると、同じく呼び出したカードのヴィジョンと共にカレイドブレイドで撫で斬った。

《アタックライドウ・オートバジン！》

途端に立ち上がったマシン・デイレイダーが機構も構造も無視して変形し、やがてそこに人型のロボット、仮面ライダー ファイズのサポートメカ「オートバジン・バトルモード」が出現する。

「行って！」

「ー！」

瞳子の指示にオートバジンはセンサー周りのインジケーターを点滅させて進み出、回り込んできたデイヴオイドのアギト、ファイズの攻撃を受け止め、弾き返した。

当のデイレイドにもブレイド、カブト、電王が迫り、躲しようのない三方からの同時攻撃を仕掛けてきた。

閃く斬撃に対してデイレイドは自ら一方に踏み込んで連携のタイミングを狂わせると、三体のデイヴオイドの攻撃を次々と打ち返してゆく。



『ぐっ！？』

だがさすがに多勢に無勢。一本の剣を打ち払った瞬間には左右から斬撃が激突している。刃が装甲を打ち据える度に激しいスパークが迸った。

劣勢にも怯むことなくデイレイドはカレイドブレイドを振って小刻みに牽制を繰り返しながら敵と自らの配置を微調整すると、ブレイドの剣を捌いて回り込み電王の飛ぶ刀身を打ち払うと一番武器のリーチが短いカブトに肉迫して真っ向から剣で殴り倒した。

『おおおお！？』

額に痛恨の一撃を喰らい大きく仰け反って転倒するカブト。

そこに、離れた位置でアギトとファイズを押し除けていたオートバジンが向きを変え、倒れるカブトめがけてバスターホイールをかざすとガトリングガンを乱射しだした。

『うわああああああ！』

さらに二体のライダーの包囲をを振り切ったデイレイドが、カレイドブレイドの切っ先を下にして倒れるカブトに飛びかかり、剣を突き立てた。

『ぐおおお！？』

胸郭を貫かれたカブトが大爆発を巻き起こした。

『まず一体！』

背後に襲いかかってきた電王の飛ぶ刀身を前転の要領でからくも紙一重で躲して喝采をあげる。

『貴様あ！』

だが、すぐに離れた位置に縦線のノイズと共に再びカブトが無傷で出現した。

『無駄だと言ってるのが分からないのか！？ 俺の中にはまだラ

イダーがいるぞ！』

『全部奪い取ってやるって言った！』

起き上がったところでブレイラウザーに殴られながらもデイレイドは氣勢を上げた。

『みんなの力を借りたわたしに、第五階層以降のライダーで勝てるだなんて本気で思ってるの!?』  
デンガツシャーの斬撃を背中に喰らいながらもデイレイドは直進を続けてブレイドを押し遣り続け、力任せに殴り倒して叩き伏せた。エクリスとオートバジンのラリアットに挟まれたファイズがたちまち爆発を起こして吹き飛んだ。

『だからどうした！ これほどの数を相手にいつまでも保つと思ってるのか!? いずれ責様は追い詰められる!』  
すぐに無傷のファイズが離れた位置に出現する。

デイレイドはしつこい電王の剣戟を回し蹴りで蹴り返し、体勢を崩したブレイドに狙いを定めてカレイドブレイドを振るった。

だがそれは僅かに届かずブレイドの片足を斬り裂くに終わった。

『うりゃー!』

ところが、そこにエクリスがアリスの声で駆け寄り、あろうことが足首を掴み上げたアギトの身体をまるで棍棒のように振り回し、転倒したブレイドにアギトを叩きつけた。

二体まとめて爆発し砕け散る。

その間もオートバジンのバスターホイールの乱射が他のデイヴオイドの身体を牽制してデイレイドとアリスが体勢を立て直す隙を作る。ブレイドとアギトも、また離れた位置に再び出現した。

『無駄だ無駄だ!』

『は！ もう半分くらい第六階層のライダーなんじゃない?』

改めて駆け出したデイレイドが、響鬼とカブトの同時攻撃を受け止めた。

音撃棒を打ち返したカレイドブレイドを持つ手にはしびれが走ったが、シオルダーアーマーで受け流したカブトの攻撃はそれまでと比べ格段に軽くなっていた。

『こんなのをいくら集めても、今のわたしを倒せやしない!』

踏み込みの反作用を込めた体当たりでカブトを突き飛ばすと、振り向きざまに響鬼に剣を振り下ろす。

弾き返した音撃棒との数合の剣戟の末、音撃棒を一本叩き折ると同時に鬼の膝を蹴りつけて体勢を崩させ、横からオートバジンのバスターホイールの斉射を喰らわせ、転がっていった響鬼をアリスが踏み潰していった。

途端に爆散した響鬼だが、やはり離れた位置に再び出現する。

だがそれは、一階層下の響鬼。

滅ぼされた仮面ライダーたちの無念を思うと泣きそうになるくらい、力の差は顕著だった。

『さあ！どうするの「悪魔の影法師」！このまま削られてすり減らされるだけなのかな！？』

だから、これは決して下層の仮面ライダーを貶める言葉ではない。取り込まれた彼らを解き放つことができるのは、より強い者の役目であるが故に。

『どうなの！ディヴオイド！』

『ほざくなあつ！』

九体の仮面ライダーが一カ所に集まると、合体し再び漆黒のディケイドの姿のディヴオイドとなった。

『……くつ！？』

そして胸を押さえて怨嗟を呻くと、音もなく姿を消してしまった。

『ああつ！？ 消えちゃった！？』

『大丈夫。』

悲鳴を上げたアリスに、瞳子は冷静に応える。

どこへ消えようと狼狽えることもない。

今のディヴオイドの考えることを推測するなど、瞳子にだって容易なことなのだから。

『追うよ。アリス』

「……………」

墓の前で手を合わせ、瞑目する青年の姿があった。

墓石には「八代家」と刻まれている。

やがてゆっくりと目を開けた青年は、穏やかな笑みを浮かべると元  
気良く立ち上がった。

「……よし！」

己の覚悟を誰かに証明するように氣勢を上げた青年は両手を揉み合  
わせると、墓地の入り口へ向けて歩き出した。

「雄介くん！」

「へ？」

突然、これから向かう所だった墓地入り口から自分を呼ぶ声が聞こ  
え青年は、雄介は立ち止まった。

慌てた様子で駆け込んだのは見知った顔、婦人警官と、白衣を  
纏い、赤いフレームの眼鏡を掛けた  
女性の二人だった。

「あれ？ ひかりさんと、……神楽見巡查？」

「今は「巡查部長」！」

「いて！？」

ずびし、と脳天に婦人警官・神楽見 瞳子の手刀が打ち込まれ、雄  
介は思わず首を竦めた。

「……え？ って言うか神楽見さんが、なんでひかりさんと一緒に  
？ あれ？」

終 ひかりは、雄介と共にグロンギと戦った「警視庁・未確認生命  
体対策班」のサポートメンバーであったが、別部署の人間であるは  
ずの神楽見 瞳子までが一緒に現れたことこの理由が分からず雄介は  
目を白黒させた。

「とにかく、大変なの！ えとね！？ あのね！？」

「雄介くん、よく聞いて」

泡を喰った様子の神楽見 瞳子を横に押し退けたひかりが、真摯な  
眼差しで雄介の上腕を掴んできた。

「詳しい説明はあとです。今これから、ここに「十号」にそっくりな存在がふたつ現れる。」

「へ？ え？ なに？」

ただごとではない二人の様子と、久しぶりに聞いた「十号」なる単語が何を指すのかがすぐに思い出せず雄介はただひたすら困惑するばかり。

だが、ひかりの簡潔な説明は雄介の困惑に構わずに進行してゆく。

「ひとつは真つ黒な十号。もうひとつは黄色い十号。いい？ 黒い十号は、敵。黄色い十号は味方だから、現れたら間違えないように黄色い十号を支援して。」

「え、や、ちょ、待って！？ いったい何がどう？」

「あーもう！ だからディヴオイドがここに逃げ込んでくるからそれを私と一緒にやつつけてってむぐ」

「大事なことはひとつだけ。」

突如訳の分からないことを喚き始めた神楽見 瞳子の口を両手で塞いだひかりが、変わらぬ口調で繰り返した。

「黒い十号は敵。見つけ次第、倒して。」

「いや、だから……」

混乱する頭を抱えて聞き返そうとしたその時。

墓地の外れに膨大な輝きが進むと、その中から雄介にとって非常に見慣れた形に良く似た人影が現れたのを目撃して目を剥いた。

「ええ！？ 土！？ なんて！？」

そこに現れたのは、長い間ともに旅をしてきた仲間が変身した姿だった。

ただし、ピンク（本人はマゼンダだと主張する）色の装甲はおるかセンサーもベルトも全て漆黒に塗り潰されており、胸を押さえて苦しそうにしながら雄介の方に近付いてくるのだ。

「え？ なんで？ 真つ黒になって、あれ？」

「違うー！ ディヴオイド！ あれ！ ディヴオイド！」

「雄介くん。黒いのは、敵。」

戸惑う雄介に必死に否定意見を告げるふたりはあたふたと雄介から離れていった。

そのひかりの動作は、これから雄介がグロンギと戦う時のそれと全く同じ退避行動だった。

それを見送り、振り返ってこちらに迫る黒い人影を見遣り、雄介は苦手な頭脳労働を展開させた。

「え、だって、あれ、どう見ても……」

未だに見慣れた姿が脅威であるらしい矛盾に戸惑いながらも、雄介は腹に両手を遣りアークルを出現させると左拳を腰溜めに構えて右手を斜め前に突き出した。

> i 1 4 7 8 5 — 5 3 8 <

その時、黒い人影の後方から、別の何者かが現れたのに気付いた。

丁度黒い人影の真後ろにいる為か、黒い人影の左右からちらりちらりとしか見えない。

だが、そいつも雄介の良く知る者が変身した姿に酷似しているようで、かつ、黄色かった。

「……え？ 黄色？」

「雄介くん！ 黒は敵！」

戸惑う雄介の耳に、三度ひかりからの警告が飛ぶ。

「ええい！ 変身！」

とりあえずの心地で叫んだ雄介が、突き出した右手で空を一閃し、左腰で両手を重ねるとアークルのエネルギーを解放した。

たちまち輝きに包まれた雄介の身体が赤い装甲に覆われ、雄介のもうひとつの姿、仮面ライダー クウガへと変移した。

『ああもうなんだよ！？ やるつてののか！？』

叫び、戦闘態勢で身構えたクウガの前で、迫ってきた黒い人影は片手を突き出してきた。

『……よこせ……その力、よこせ』

『士！？』

黒い人影が発した声が仲間のもので同一であることに気付いたクウ

ガは、警戒と解き構えた拳を下げてしまった。

「雄介くん！？ だめ！」

「よこせ！」

その隙を突いて一瞬で肉迫した黒い人影が物凄い握力で首を掴んできた。

「がッ！？ ……土……なんで……」

慌てて首を掴むその腕を掴み返すが、あるうことか力が吸い取られていくようで急激に全身に倦怠感が走り手に全く力が入らなくなつた。

しかも、黒い人影が掴んだ喉元から滲むようにクウガの装甲の色が失われてゆくのだ。

黒色の部分はそのままだが、赤色の部分が見る見る白くなってゆくを見て雄介の背に寒気が走つた。

見た瞬間は力を吸い取られたことによるクウガの弱体化かと思つたのだが、目の前の手は陰影も凹凸も失せ、金色のはずのリストバンドすら色彩を無くして白と黒のみの二階調に変異しているのだ。

「こ！？ これは！？ うわあああ！？」

「やあああああああ！」

そこに、黒い人影の後方から跳躍してきた黄色い人影が振りかぶつた大剣をその黒い人影に叩き付けた。

「がッ！？」

雄介の首から手を離して吹き飛んでゆく黒い人影。

そこに着地した黄色い人影は、色を取り戻してへたり込み変身を解除した雄介のことを一瞥もせず、身を翻すと黒い人影にさらに攻撃を加えた。

間近で見ることでその姿の詳細を知ることができた。見れば見るほど酷似している。

「……なんなんだ！？ なんでディケイドがふたりも！？」

体当たりで墓石を倒壊させながら戦う黒いディケイドと黄色いディケイドを見て呻く。

その上、黒いディケイドが突如九体に分身したのを見て雄介は驚愕した。

それらは、これまで土と共に旅をしてきた「九つの世界」の仮面ライダーの姿をしていたのだ。

「はあ!?」

しかも、その中に自身が変身するはずの「クウガ」も混じっているのを見て雄介の混乱は極大に達した。

「な、なんなんだよいったい!?!」

「雄介くん! 手伝って!」

九体に分身した仮面ライダーと器用に交戦しながら黄色いディケイドが僅かに振り向いて呼びかけてきたが、その声が神楽見 瞳子のものであることに気付いた雄介はもう返答できる状態ではなくなってしまった。

「……………え? あ?」

「やっぱダメか。 アリス!」

「はいはい!」

間抜けに口をばくばくさせる雄介がぼんやりと眺める遠くで、黄色いディケイドがその場にいない何者かと会話すると、黄色いディケイドの足下からひとかたまりの砂が迸り出て雄介の方へと一直線に地上を滑ってきた。

やがて走る砂が雄介に激突し、辺りに砂が飛び散ったのと同時に砂とは違う「何者か」が胸の内に入ってきたような感覚に気付いた時には、雄介の意識はその「何者か」によって脇に押し退けられてしまった。

(……………あれ? この感覚、どっかで……………)

覚えのあるその感覚の見当を思い出している内に、雄介の意識は闇に落ちた。

やがて、砂の激突を受けて仰け反っていた雄介の上体が前のめりになり、ややあつてから雄介は顔を上げた。



だが、それはもう雄介ではなくなっていた。

瞳をピンクに輝かせ、脈絡なく延びた髪がまるでおとぎ話のお姫様のようにくるくるにカールしており、前髪の中に一房だけピンクのメッシュを入れた異様に変じていたのだ。

『トーコ！ 身体、借りれたよー！』

その上内股で立ち上がり、まるで幼い少女のように天真爛漫かつ奔放な仕草でデイレイドに手を振ったのを見て、ひかりが青い無表情でがたがたと痙攣し始めた。

> i 1 4 7 8 6 — 5 3 8 <

翻って冷静になった警察官の瞳子がショックに震えるひかりの肩をそっと抱き締める。

『よし！ 手伝って！』

『ほーい！』

分身して飛び回るデイヴオイドの対応に苦心するデイレイドの指示に、雄介に憑依したアリスが元気良く応え駆け出した。内向きに手足を捻った少女走りで。

「……………！？」

いよいよ痙攣がピークに達したひかりを必死に宥める警察官の瞳子の叱咤の声を後目に、合流した雄介に憑依したアリスをカレイドブレイドが透過した。

《カメンライドウ・クウガ！》

続いてカードのヴィジョンを出現させ、返す刃で赤き封印戦士・仮面ライダー クウガに変身したアリスを再び袈裟掛けに透過する。

《ファイナルフォームライドウ・ク・クウガ！》

認証を告げるや否やクウガの身体が僅かに浮かび上がり、迅速に回転、変形してゆき、やがてそこに巨大な機械仕掛けのクワガタ虫「クウガゴウラム」が出現する。

『行って！』

『うりゃりゃー！』

デイレイドの指示に応えたアリスが鋭く飛翔してゆく。

改めて追いつき再びデイレイドを取り囲もうとしていた九体のデイヴオイドのうち、クウガとキバをその巨大な顎で銜えたクウガゴウラムがかつさらう勢いで上空へ飛び上がった。いった。

『無駄だよデイヴオイド！この仮面ライダーを取り込もうたってもう遅い！』

『貴様あ！』

唯一デイレイドと接触していないクウガが戸惑うことも、説明している暇がないことも瞳子は見通していた。

透が消滅したことで、九つの世界の瞳子との接続も完全に断たれてしまっており、消滅した世界が復活して各地の瞳子が蘇っても再び瞳子同士が接続することはなかった。戦いの記憶は残っていても、瞳子は「ただの一般人」になってしまったのだ。

だが、今は瞳子自身がデイレイドである。瞳子はすぐに自らの意志で自らの異次元同位体全てと接続し、九つの世界の瞳子たちとネットワークを形成した。

今の瞳子はひとりではない。九人の瞳子の意識が手伝ってくれる。

『うあああ！』

自ら突撃し、いくつもの斬撃をかいくぐり龍騎のサーベルの横腹を叩いて逸らし、狙いを外して地面に突き刺さったサーベルを上から踏みつけて押さえつける。

その勢いのままサーベルを引き抜こうともがく龍騎の手首を、肩を蹴って駆け登り、頭を踏み台にして高く跳躍した。

そこに、上空を旋回してきたクウガゴウラムが軸を合わせて急降下してきた。

その顎には未だクウガとキバが捕らわれもがいている。

『やあああ！』

デイレイドはカレイドブレイドの刀身の溝を指先で一閃し、ベルトバックルを掴んで振り払い回転させた。

《ファイナルアタックライドウ・カレイド！》

そして蹴りの姿勢に移行して上昇するデイレイドと急降下するクウ

ガゴウラムとで挟撃されたクウガとキバが爆砕消滅した。

「っがああ貴様ああっ!?」

また離れた位置にクウガとキバが出現すると、怨嗟を上げたディヴオイドは一カ所に集まって合体し姿を消してしまった。

「トーコっ! また逃げた!」

「いくらだつて追いかけてやるわよ! アリス、雄介返してあげて!」

「らーじゃ!」

空中で一回転してクウガの姿に戻ると変身を解除して着地し、アリスが憑依した雄介の身体は警察官の瞳子の前までやって来た。

「トーコ! はい!」

「うん」

ディレイドと意識を繋いでいる警察官の瞳子は承知したように差し出された手を受け取った。

「じゃあヨロシクね!」

くるくるカールのお姫様のような面相で満面の笑みを浮かべた雄介の身体から砂が抜け出てゆくと同時に脱力した雄介の身体がぐりと膝を崩して座り込んだ。

飛び出した砂は地面を迸り、合流したディレイドが体内に回収すると、僅かに跳ねる動作とともにこの世界から離脱していった。

「……はッ!?」

雄介は唐突に覚醒した。

慌てて身を起こすとそこは墓地の中。

記憶にある最後の位置と同じ場所であり、神楽見 瞳子が傍らで正座して微笑んでいる様子を見るに、どうやら自分はこの謎の砂の突撃による違和感に襲われてから一時気を失って神楽見 瞳子に介抱されていたらしい。しかも膝枕で。

「……あ。ども、すみません」

「いいよ別に。」

面識の薄い神楽見 瞳子から何でもないうなずかれ、雄介としても赤い顔を隠しながら恐縮するしかない。

「……あれ？」

ふと、ひかりの姿がないことに気付く。

さつきまで神楽見 瞳子と一緒にいたはずなのに。

「……あの、ひかりさんは？」

「えーっと……」

雄介の問いに、神楽見 瞳子はバツが悪そうに上を見上げながら、片手の親指でそちらを示した。

「？」

促された方を見遣ると、なぜか遙か彼方の墓石の陰に隠れたひかりが、今まで見たこともないような疑惑の眼差しで雄介のことを見つめていた。

「……え？ あれ、なんで……」

「いや、まあ、今のこの数分間の悪夢は見なかったことにする努力をするとして。」

なぜか明後日の方角に目を逸らしたまま神楽見 瞳子が歯切れ悪く応えた。

「とりあえず緊急の用件は済んだから、ひかりに「ただいま」って言うてあげてよ。」

「は？」

神楽見 瞳子の言う「ただいま」の意味が分からず怪訝にその顔を見返す。

「んーとね、私はあなたがいなくなってから「未確認生命体対策班」の班長やってたんだけど、前の事件の後、あなた、断りもなくこの世界から出ていっちゃったでしょ」

石畳に座り込んだまま、雄介はその言葉を聞いてあの当時の顛末を思い出しわずかに視線を下げた。

「八代先輩が亡くなって、直後に雄介くんの失踪でしょ？ 最悪の結末まで想像しちゃって、ひかりったら一時期かなり参っちゃって

さ。」

「……………」

己の行動の不義理に気付き、雄介はぼつりと悔恨の呻きを漏らした。「私は事情がちょっと違うから別にいいけど、ひかりにはきちんと言っただけで？」

「は、はい！」

元気良く返事をして立ち上がった雄介は、未だ墓石の陰に隠れているひかりの元へ駆けていった。

『たあ〜いへえ〜ん！』

そこに突然、そんな嬌声と共に掌よりも小さな体躯の白いコウモリのようなモンスターが飛来してきた。

『大変大変！ 大変なのよ〜！』

「キバーラ!?」

その姿を認め、雄介はそのコウモリの名を呼びかける。

「なんでこんなところに!？」

『迎えに来たに決まってるじゃない!? 夏海ちゃんが大変なのよ! スーパーショッカーに追われててもう手が足んないの!』

「わかった! わかったからちよつとだけ待ってくれ!」

むしろ八工のようにぶんぶん飛び回って危機を訴えるキバーラに手をかざすと、雄介はひかりのそばに駆け寄った。

「……………」

「あの、ひかりさん、ごめんなさい!」

おずおずと墓石の陰から出てきて名を呼ぶひかりに対し、雄介はやおら深々と頭を下げた。

「姐さんのことは本当にショックだったけど、俺は戦える理由を持ち直したし、実はあのあと旅に出ていたんだ。」

「……………」

「……………」

その、「異世界」に?」

ディケイドとは無関係のはずのひかりの口から「異世界」という言葉が出てきて雄介は喫驚して顔を上げた。

「……………」

ええと、うん、そう。それも、ちよつと突然のことだった

から、ケータイも繋がらないし、連絡できなかった。ゴメン。」  
もう一度、ひよこんと頭を下げる。

「それと、旅の中でも色々あってさ。姐さんそっくりな人も会ったし、守る笑顔の意味とか仲間とか、本当にいろんなものを得ることができた。」

『ちよつと！ユースケつたら！？ 早くはやむぎゅ』

耳元でかしましく訴えだしたキバーラを、ろくに見ずにひったくるようにして掴み取り黙らせる。

「心配かけてごめん。でも、俺はもう大丈夫だから。 ひかりさんは？」

「……わたしは、もう平気。」

「そっか。」

ひかりの応えを聞いて、雄介は満面の笑顔を浮かべた。

「なら、これからは笑顔でいなくちゃな。 じゃ、悪いんだけど、また突然異世界からお呼びが掛かっちゃったんだ。俺、行ってくるから！」

「うん。いつてらっしゃい」

そしてひかりと手を振り合った雄介は、振り向いて駆け出していった。

「よし。キバーラ、案内してくれよ」

『その前に！』

雄介の手の中からようやく解放されたキバーラは不機嫌顔で飛び上がると、雄介の顔面の前までやって来て小さな翼で神速の往復ビンタをかました。

「ぶべべべべ！？」

『レディーに対する紳士の嗜みを覚えなさい！ ほら、いくわよ！？』

頬を真っ赤に腫らした雄介の襟首を掴み、舞い降りた銀の帳の中にそのまま引きずり込んでゆく。

なにやら情けない調子で雄介は消えていってしまった。

「良かったね。きちんと話ができて。」

「ええ。」

消滅してゆく謎の銀のオーロラを見送り、ひかりの背中が満足げに同意した。

「…………でも、」

「ん？」

ひかりの背後から近寄った瞳子は、あちらを向いたまま身じろぎひとつしないひかりの後姿に怪訝になった。

「…………ちよつと、非科学的なことが、起こりすぎて…………限、界…………」

「ちよつと！？ ひかり！？」

言うや否や膝を落として倒れ込んだひかりに、瞳子は慌てて駆け寄った。

t r a c k ・ 7 7 シークレットマニユール 2 (後書き)

最初のプロットでは、きちんとディレイドとユウスケで共闘させる予定だったんです。

でも、実体化できないアリスがいたら、憑依させるしかないじゃないですか！

と言うところの、劇場版完結編での夏海逃走→ユウスケ救援の間の出来事でした。



アギトの世界

「うーりゃー!」

だぶだぶの制服を着た郵便局員の瞳子が、眉をVの字に釣り上げて配達用のコンテナを牽引した自転車をせっせと漕いでゆく。

凹凸の少ない舗装道路を走っているのに、自転車が引きずるコンテナがなぜかがたがたと不自然に振動していた。

「到着ですっ!」

ききいッ、と甲高いブレーキの音を立てて自転車が停止する。

そこは河原を見下ろす土手の道。

そして自転車を降りて回り込んだ瞳子がいきなり後ろのコンテナを蹴り倒した。

「うりゃー!」

「んむー!?!」

激しく横転したコンテナから蓋を吹き飛ばして転がり出てきたのは、簀巻きにされ猿ぐつわまで噛まされた警察官、芦河 翔一だった。

「ほら! 芦河さん! 寝てないで、とつと起きて待機してください  
!」

もがく翔一の背後に回り込み、瞳子がロープをほどくにつれ手足が自由になった翔一が猿ぐつわを引きちぎって跳ね起きた。

「だああナ二がどうなっただこうなっただー!?!」

「黙りやがれですー!」

猿ぐつわを地面に叩きつけた翔一に、瞳子も負けずに伸び上がって怒鳴り返す。

明らかに体格差が隔絶しているというのになぜ自分が瞳子に簀巻きにされたのか意味が分からない。

だと言うのに瞳子はいつもよりもひどいマイペースで事を進めてゆ

く。

「これからここに黒いディケイドが来るから、芦河さんはそいつをやっつけてくださいっ！」

「はあ？なんだそりゃ！？ 透のやつは指示か？」

腕の赤くなつた縄の痕をさすりながらがしかめつ面で問うが、突然瞳子の怒り顔が涙を溜め始めたのを見て翔一はぎよっとして後退つた。

「お、おい、なんだよ」

「……………透は、……………透はっ！」

目を真っ赤にし唇をわなわなと震わせる瞳子の様子を見て、翔一はその発想の可能性に思い至り、だが自分の思い付きを信じる事ができず口元をひきつらせて瞳子の泣き顔を見返した。

「……………おい……………じょう、だん……………だろ……………？」

「うう~~~~！？」

とうとう決壊して泣き出した瞳子を前に、翔一も呆然とするより他にない。

「……………そいつか。」

力無く下げた視線をさまよわせていた翔一が、やおらぼつりと呻くように言った。

肩を震わせてしゃくりあげていた瞳子が怪訝に見上げた。

「その「黒いディケイド」って奴か。透を殺したのは？」

「…………………………」

仄暗い翔一の声音に、泣き腫らした顔で瞳子は何度もうなずいた。

「……………そうです！ディヴォイドのせいで、透はっ……………」

言葉の途中でぬっと突き出されてきた手が、思わず言葉を途切れさせた瞳子の頭をくしゃ、と撫でた。

「……………任せとけ。そいつがこれからこの辺に来るってんだな？」

瞳子の脇を抜け河原を見下ろす道の端に立った翔一は、脱ぎ捨てた警察官の制服の上着を自転車のハンドルに放り投げ、意識を集中すると両腕を振り払いまるで拳法の型のように真上に突き上げた右の

手刀を引き下げて前に突き出した。

翔一の腰を光が取り巻き、紡錘形のバックルを持つベルト、オルタリングとなつて装着される。

「変身！」

裂帛の息吹と共に正面で両手を交差させ、その手を腰のベルトの両サイドに押し当てた。

ベルトと両腕によるエネルギーの円環の経路が形成され、途端にまばゆい閃光に包まれた翔一の身体は一瞬にして白銀の輝きを放つ竜人のような異形、仮面ライダー アギト・シャイニングフォームへと変身した。

『さあ！ どころからでもかかってきやがれ！』

奇しくも丁度その時、河原の上空に膨大な閃光が現れ、その中心から黒い人影が滲み出るようにして這い出すと、まるで墨汁を一滴垂らすように滑り落ちて音もなく着地した。

立ち上がったその黒い異形は、確かに漆黒のディケイドと呼ぶにふさわしい姿をしていた。

『おらあああああ！』

河原に降り立ったディヴオイド目掛け、アギト・シャイニングフォームが氣勢を上げて土手を駆け降りてゆく。

そして神速で繰り出された跳び蹴りが、ディヴオイドの胸郭のど真ん中を捉え激しく吹き飛ばした。

『つしゃあ！ どうしたテーマ！こんなもんなのか！？』

転がってゆくディヴオイドに駆け寄ったアギトが間断なく回し蹴りを繰り出し、起き上がりかけたディヴオイドを押し遣ってゆく。

『つらあ！』

連撃の末に蹴倒すと、アギトは腰を落として身構え、気を練り上げて足下に輝く紋章を展開するとそのエネルギーを体内に取り込み跳躍した。

『消し飛べおらああああ！』

宙で身を捻り、地上で身を起こしかけたデイヴオイドめがけ必殺の蹴りの姿勢で急襲する。

『あああああ！』

白銀の流星のごときその蹴りは、だが片膝をついたデイヴオイドの片手で掴み止められるとそのまま振り回されアギトの身体は地面に叩きつけられた。

『っがつ！？』

デイヴオイドを打ち砕くはずだったエネルギーで地面を大きく抉り飛ばしてアギトが地面に転がった。

『……ぐっ、くそっ！？』

転倒した姿勢から重心を取り戻すことができないアギトは、自らの体勢に気付いて悪罵を吐いた。起き上がるうにも片足をデイヴオイドに握られたままで立ち上がることができないのだ。

『ああ！？ テメエコラ離しやがれ！』

アギトは両手をついて倒立の姿勢で蹴りを繰り返すとするが、その異常に気が付いて翔一は凍り付いた。

デイヴオイドが握る自分の足首が、色を失い白と黒だけに変色していたのだ。

『っなっ！？ なんじゃこりゃあ！？』

掴まれた足の感覚は、まだある。

翔一はすぐに気を取り直して動作を続行、倒立からの蹴りを繰り返した。

それはデイヴオイドの頭を二度、三度と打ち据えるが、足を掴む手は小揺るぎもしない。

そうこうしている内に、その変色の現象は脚を浸食して登ってくる。

『うわああ！？ なんだこれ！？』

『芦河さんっ！』

突如そこに聞き覚えのある、だが翔一の知るものとは異なる口調で飛び込んできた声が割り込み、デイヴオイドを激しく殴り飛ばしてアギトの足を解放した。

河原を転がってゆくディヴオイドを見送りながら自身も一回転して身を起こし、自身の片足が色彩を取り戻していることを確認してから傍らに現れた何者かを見上げた。

だが、その著しい違和感を目の当たりにして翔一は呆然と身動きを止めた。

『はい芦河さん！気持ち分かるけど、私は別の世界の神楽見 瞳子！……透は、もう、いないよ。』

こちらを制止するように掌を突き出す、翔一の記憶にあるものよりはるかにちっちゃなディレイド・カレイドフォームが、瞳子の声できびきびとそう告げた。

## 龍騎の世界

「……死んだ……透が……？」

Atashiジャーナルのオフィスに駆け込んできた瞳子の話を聞いて、真司は呆然としていた。

「……んな、俺たちは、こうして元に戻ったのに……」

「でね、」

駆け込んできた瞳子は膝に手を突いて荒くなった息を整え、身を起こして言い直した。

「敵討ちと、全ての世界をまた消させない為に、真司君に協力してもらいたいの」

瞳子の真司への呼び名がすっかり「警察官の瞳子」のものになっていたが、互いにもう慣れてしまった。

真司は一も二もなくうなずいた。

## ファイズの世界

「で、僕はなにをすればいいの？」

「とにかく、持ってる武器全部持ってついてきて！」

昼休みの写真部室に突然飛び込んできた瞳子がまくし立てた話にも、巧は冷静にうなずきながらアタツシユケースを掴み上げた。

『おらー！巧いー！早くせんかーい！』

その時、外からそんな怒鳴り声が聞こえ、その尋常でない声量のせいで張り替えたばかりの窓ガラスがびりびりと震えひびが入った。

「うっさいあほー！黙って待ってる！」

その窓に駆け寄って取り付き乱暴に開け放った瞳子が、その花瓶をひっ掴んで投げ飛ばした。

「じゃ、由里ちゃん、ちよっと行ってくるから」

「うん。気をつけてね。」

ごちゃりん、という声は、既に駆け出していったドアの外からドップ、由里が思わしげな顔ながらもはつきりと応えた。

「……神楽見さんも。」

らじゃー！という声は、既に駆け出していったドアの外からドップラー効果付きで聴こえてきた。

あれつきり静かになった外の誰かのことと言い、苦笑しながらも巧もあとを追っていった。

## ブレイドの世界

見晴らしの良い県道を四台のバイクが駆け抜けてゆく。

「こっちだ！」

先頭を走る黒地に金のラインを描いた鎌のように鋭いカウルを持つバイクが交差点を左折してゆく。

跨っているのは瞳子。タンDEMシートには初が座り、瞳子の腹にしつかりとしがみ付いている。

あとを次々と曲がり込んでくる一真、菱形、睦月らの「BOARD」

で実戦配備された三台のバイクと違い、瞳子が乗っているバイクは「BOARD」の前社長が隠していたものだった。

『シャドーチェイサー』と銘打たれていたこのバイクはラウズシステムを搭載しており、ハートストートに対応していた。

すなわち、伝説の仮面ライダー、と昔は言われていた仮面ライダーカリスの、今となっては初の為のバイクであった。

もつとも、カリスに変身しない限り「初」の体格では扱えない代物であった為こうして瞳子が運転しているのだが。

ともあれ、瞳子の仕切りによって「BOARD」の仮面ライダーは全て瞳子の示す目的地へと向かっていた。

「くそっ！ 俺は、もう、失敗しない！」

瞳子に追従する青いバイクに乗る一真がヘルメットの中で叫んだ。

「透との約束も、土のことも守りきれなかった！ 今度こそ、世界を守ってみせる！」

## 響鬼の世界

『全員、揃いました。 …… 大師匠。』

「うむ。」

緑深い山中に、数十人もの鬼が集結していた。

皆が鬼の姿に変身して整列する先頭で報告の声を上げた響鬼に、御輿の上に鎮座する斬鬼・大師匠が鷹揚にうなずいた。

「では、始めい。」

『散開！』

『はっ！』

敵かに下された命令を受け、響鬼が発した号令に怒号が応えて大勢の鬼たちが森の中へと駆け込んでいった。

あとに残ったのは、仰々しい御輿に座る斬鬼と、その横にいる威吹鬼と、響鬼と瞳子だけ。

「……ぶはあつ!?」  
突然、御輿の上の斬鬼がまるで呼吸を止めていたかのように大きく息を吐いた。

「……し、しんどいわ……」  
ぜい、ぜいと荒く息をつき吹き出た脂汗を拭う斬鬼を威吹鬼が苦笑しながら見上げた。

「仕方ないでしょう。あなたは「黄泉還った」んですから。」  
あれから斬鬼が「生き返る」にあたり編み出された策というのが、「山送りされた鬼が「鬼神」となって再び現世に降臨する」という音撃道の伝承に倣い、斬鬼を「斬鬼神<sup>ざんきじん</sup>」として祭り上げることだった。

「鬼神化」した実例など音撃道の歴史を紐解いてみても軽く五百年は遡る。日常的に音撃や式などの術を使う鬼たちにとってすら御伽噺のレベルだった。

だからこの無茶な茶番も受け入れられた。  
ただし、信憑性を持たせる為に、斬鬼は厳粛な態度の演技を続けることを強いられた訳だが。

「……が、まあ是非もない。……透の弔い合戦だからな。」  
「はい。」

遠くの間並みを見つめて座り直した斬鬼が寂しそうに呟き、響鬼もそれに同意した。  
事情を知っている者が格上にいたことは僥倖だった。

響鬼と斬鬼の協力があればこそ、瞳子の作戦の為に音撃道の持つ戦力全てを動かすことができるのだから。  
事の進行を見守り、武道着姿の瞳子はきゅっと唇を引き結んだ。

## カブトの世界

「……と、言うワケで、ゼクトとネオゼクトに偽のワーム出現情報



を吹き込んでおいた。」

ぱたん、と携帯電話を閉じて岩山のような巨漢・台場 和馬が朗らかに言った。

「冗談じゃないよ!? 嘘の情報で超法規組織を手足みたいに操るってアンタ正気じゃないよ!?」

神社の境内の砂利に座り込んでノートパソコンを操作していた各務

新が半泣きの顔で言い募ってきた。

「安心するがいい。実行犯は貴様だ。」

「フザケンなよこの野郎!?」

鷹揚にうなづく台場の前でとうとう各務が泣きながら伸び上がって怒鳴りつけた。

瞳子の協力の願いに対し、ライダーシステムの裏方に繋がりのある台場の提案で、この世界の全てのマスキドライダーを一カ所に集める算段が取られた。それも、至極あっさり。

「……どうした?」

腕組みしてその様子を眺めていた天堂 総司が、隣で頭を抱えてうつむく瞳子に声をかけてきた。

「……いや。ちょっと、隣の世界との温度差に目眩を感じてただけ。」

## 電王の世界

虹色に揺らめく空の下、広大無辺の荒野を一本の列車が自ら線路を敷設しながら疾走していた。

『まさかアリスが「そっち」に行つてたなんてな!』

運転席兼コントローラーに座るのは、仮面ライダー エクリス・カイロスフォームに変身した恭也。

「うん。こんなことになるなんて考えもしなかったし。」

コックピットルームの後方で、瞳子が手すりを握りしめて応えた。

世界が復元されるなり、事態を察知した恭也がキレて暴れ出すより先に駅長を始めとする時間線の特権階級の全てが動き出した。この世界では過去と未来がほぼ等しい。

復元された世界を新たな脅威が襲うであろうことを、駅長やオーナーたちは既に察知していたのだ。

（それもこれも、デイケイドが消滅して、デイヴオイドとの接続を切ったからだ。）

デイヴオイドの存在隠蔽能力が効かなくなっているのを、瞳子はこの事態の流れで初めて知った。タイミングからして原因はデイケイドの消滅以外に考えられない。

自身の存在を隠蔽できるはずのデイヴオイドがもたらず脅威が、駅長らに察知されているのがその証拠。

『おいオーナー！ あいつらも来んのか！？』

『もちろんです。言われずとも、世界の危機、ですからねえ。』

恭也の声に、車内通信でエクリスエクスプレスのオーナーがゆったりと応えた。

「あいつら」とは、以前共闘した「アリアライナー」の面々。

それだけではない。瞳子が言うでもなく、既に全ての「時の列車」が指定の場所へと急行していると言うのだ。

「……………」

この宇宙の状況にあつて、確かな追い風を感じ、瞳子の顔に強気な笑みが浮かび上がった。

## キバの世界

都会から離れた山岳地帯に、大勢のモンスターが集結し、窪地を取り囲んでいた。

地表にステンドグラス様の表皮に包まれた人型の異形がぐるりと並び立ち、中空をグレートワイバーンが旋回している。

一段高い丘からそれらを見下ろし、渡は深く息を吐いた。

「……配置は完了したよ。渡」

そこに、渡より数歳年上に見えるグレーのスーツを纏った少年が、前髪を弄くりながら傾いた目つきで歩いてきた。

「太牙兄さん。」

その少年に向き直り渡は応えた。

この少年は、「兄」とは言っても「異父兄」にあたる。

渡とは出自が異なり、太古の皇帝の鎧「サガの鎧」を受け継ぎ、渡とは意見を異にするファンガイア一派を率いている。

意見を異にすると言っても「人間を獲物とすべき」というほど過激なものではないが。

だが、クイーンとビショップが「謎の失踪」を遂げてから、少々おとなしくはなった。

「ありがとう。これほどの勢力を統率できたのは兄さんのおかげだ。」

「御為ごかしはいいよ。世界の危機なんだろう？」

真っ直ぐ兄を見つめる渡に対し、兄・太牙は眇に見返すのみ。

「こないだの世界融合の時のよりも深刻な事態だそうじゃないか。」

「……せいぜい油断しないことだ」

それだけ言って、太牙は素っ気なく振り返り立ち去っていった。

「……。」

それでもその背中を真っ直ぐ見送る渡がいる丘の端で、控える遙と共に瞳子はいた。

ちなみに動きやすい登山服姿である。

「……仲良くしてくれと、いいんですけどねえ。」

「ま、これからの成長に期待、ってところですよ。」

溜め息を吐いた瞳子に遙がのんびりと応えた。

「お二人ともまだお小さいから。」

「そうですね」

兄を見送る渡の背を眺めて呟く。

「それよりさ瞳子。あんた、確か余所の世界のあんたと意識が繋がってるのよね？」

「え？ はい」

やおら遙が向き直ってきた。

「……そしたらその、翔一に「心配してた」って言っといてくれる？ ほら、世界が消滅した時なんか、ほんと色々まいったし。」

「あー……」

ばつの悪そうな顔で頭を掻きながら言う遙に対し、瞳子も困った顔で目線を泳がせた。

「通じるかなあ……」

## アギトの世界

「このゴミ！ クズ！ あんぼんたん！ わたしはケータイじゃありませんっ！」

「んだとう！？」

突然土手の上から訳の分からないことを叫び始めた郵便局員の瞳子にアギトが即座に言い返した。

『まあそんな訳だから、悪いんですけど、協力してくださいね』

『おう、上等だ！ なんか嬢ちゃんがいっぱいいるってのはいまいちピンと来ねえけど』

『黙りやがれですー』

突然あり得ない所からあり得ない言葉が出てきたことに、ぎよっとしてディレイドを見返したアギトに、ディレイドは口元に拳をあてて笑いを堪えていた。

『……ね？ほら、わたしも私ですから。』

『……』

対してアギトは沈黙している。

マスクのせいで表情は分からないが、なんとなくむすっとしている

であろう気配がする。

それはさて置き、ディレイドは片手を翻すと指先に一枚のカードを取り出した。

『それじゃ、言った通り、フォローよろしく。』

『っしや来い!』

拳を掌に打ち合わせたアギトの応えを聞いたディレイドはカードをぽいと放り投げると、たちまちカードは巨大なカード型のヴィジョンとなって正面に展開され、即座にカレイドブレイドが袈裟掛けに切り裂いた。

それは、決戦の為に新しく生成されたカード。

《ファイナル・カレイドカメンライドウ・オーバードライブ!》

『……ちっ、忌々しい』

舌打ちと共に呻いた漆黒のデイケイド・デイヴオイドが、唐突に河原から姿を消してしまった。

『あれ……？』

その消えたデイヴオイドの声に覚えを感じ怪訝に首を傾げたアギトの肩を、デイレイドがぼんと叩いた。

『油断しないで。デイヴオイドは、デイケイドの人格を模しているだけ。』

『お、おおそれだ。土の声とそっくりだった』

『その「土」とか言う人とは別人だから。じゃ、またあとでよろしく』

間抜けにうなずいたアギトの前から、デイレイドも僅かに跳ねるようにして姿を消してしまった。

『さあて。』

ひとり河原に残された翔一の役目は、いずれ再びここにデイヴオイドが現れた時の為の待機。

意気を上げて掌に拳を打ち当てた所で、背後に郵便局員の瞳子が近寄ってくるのに気付いた。

『あしかわさんっ！』

『おう？ 嬢ちゃん、危ねえからさが』

だが振り向いたそこにあつた姿にアギトは思わず言葉を失ってしまった。

『死又ほどくすぐったいですよっ！』

『なにぎゃあああああああ！？』

左右反転して無人となった都心の巨大交差点を走る龍騎の前に、突

如虚空から滲み出た黒い水滴が垂れ落ち、地上でひとかたまりになると垂直に練り上がって人型を成し、デイヴオイドとなった。

『……おい、おまえの力、よこせ』

『こいつだー！』

ところが龍騎は、手をかざして迫るデイヴオイドを見るなり指先を突きつけて唐突に叫び声をあげた。

『どっちも吹き飛びなよ』

《ファイナルベント。》

続いてあらぬ方から認証の音が聴こえるや否や、デイヴオイドの元に無数のミサイルが雨霰と降り注いできた。

『なっ！？』

当の龍騎はとつとどこかへと走り去ってしまっていた。

残されたデイヴオイドのいる地点に全てのミサイルが残らず着弾していくつもの爆音を轟かせた。

『ちよつとお！？ いま「どっちも吹き飛べ」とか言わなかったか

！？』

『ライダーバトルをなんだとってんの』

物陰から慌てた様子でまくし立てる龍騎の文句に、緑色の巨人・マグナギガを従えた緑の銃士・仮面ライダー ゾルダが気だるげに応えた。

『事のついでに他人を出し抜こうと考えるのは当たり前でしょ？』

『当たり前じゃありません先生っ！？』

ところが、ゾルダの背中をいきなり瞳子が叩いてきた。

『ええっ！？ 瞳子くん！？』

弁護士としての弟子にして北尾の事務所の所員であり、カードデッキを持たない瞳子がこのミラーワールドに現れた異常に目を白黒させたゾルダが慌てて振り向くと、そこには見たことのない黄色い仮面ライダーが立っており北尾の混乱の渦はさらに勢いを増した。

『……って、なにその格好、って、 えええ！？』

『驚いているヒマはないですよ先生！ あれ！』

さすがに泡を食っているゾルダの肩を叩いて瞳子が指さした先を見遣ったゾルダは未だ黒煙を吹き上げる爆心地から九体の人影が飛び出したのを見てさらに仰天した。

『うわあ!？ また仮面ライダーが増えたのかい!？』

『あれはやっつけてもいいヤツです先生! でっかいのをかましちやっってください!』

現れた九体の謎の仮面ライダーのうち、一体だけ北尾に見覚えがある者がいた。

雑誌カメラマンの辰巳 真司とかいう男が変身するものとは別の「龍騎」がもうひとり現れたのだ。

『……なんで、あれ……』

ところが、あちこちに散らばって襲いかかるうとしていた九人の仮面ライダーのうちのその「もう一人の龍騎」を、横から飛びかかった何者かがひっ捕まえて路上を転がっていった。

そいつも黄色いボディスーツを纏っており、有り体に言って隣の瞳子と同じ様な姿をしていた。

『……は?』

『真司くんと間違えられちゃ、困るからね!』

『貴様あ!』

組み合った黄色い仮面ライダーと「もう一人の龍騎」が組み合いもみ合いながら別の路地へと転がり込んでいった。

『ほら先生! 危ないですよ!』

『へ?』

呆然とする北尾の前では、残りの八体の見知らぬ仮面ライダーが半数が龍騎に、半数がゾルダに向かってきていた。

『う、うわ!？』

慌てて自らのバイザーを構えて応戦しようとしたゾルダの前で、まるで割った桃のようなマスクをかぶった仮面ライダーを突如現れた黒い颯風が真横から吹き飛ばしていった。

『ぼおっとしてるなよ弁護士先生』



マントを翻して着地した蒼の騎士・仮面ライダー ナイトが眇に顎をしゃくって忠告し、腰から引き抜いた細身の剣型のバイザーを引き抜いて見知らぬ仮面ライダーを打ち倒した。

『へへっ。こんだけクソ入り乱れてたら硬いモンに有利っしょ』

『ほう。これほど死の臭いが色濃い者も珍しい』

『ひれ伏しなさい！ いまさら雑魚の居場所などわたくしの領地には一寸もなくてよー！』

そこに、ガイが、ライアが、アビスが突入し、手当たり次第に攻撃を始めた。

『あああなにこれこんなくちゃぐちゃした戦いなんて美しくないよ』  
謎の仮面ライダーを含めた生き残りの仮面ライダーたちの混戦の埒埒に、北尾はあからさまにヒいていた。

『なに言ってるんですか先生！ あの見たことのないヤツをやっつけないと、ライダーバトルもへつたくれもなくなるんですからね！』

『ああ、瞳子くんまでなんか物騒なこと言い出し始めた……』  
悲嘆に暮れる北尾の耳に、この乱戦の喧噪を越えてなにか轟音が近付いてくるのが聞こえてきた。

ついでに、肌が泡立つ感覚も。

『……え？ うそ、これってまさか……』

恐る恐る振り向いた先に、いま一番見たくない姿がドリルのように捻くれた剣を振り回して爆走してきていた。

『おおおれええもおお、まああぜええろおおおおおお！』

『『うわああああ！』』

その紫色の毒蛇のような姿の仮面ライダー 王蛇の剣の一薙ぎで、そこで戦っていた仮面ライダーたちが見覚えの有無問わず吹き飛ばされていった。

『うあああああ！』

デイヴオイドの龍騎だけを別方面に連れ出したディレイド・カレイドフォームは、突き飛ばした龍騎にさらにカレイドブレイドを叩き

つけた。

『ぐうつ！？ 貴様あ！』

殴られて後退ったデイヴオイドは、取り出した一枚のカードを左腕のドラグバイザーに挿し入れてカバーを閉じた。

《キック。》

それは、本来ブレイドが持つカード。

デイヴオイドは、九体に分かれていても、全ての身体が全ての仮面ライダーの能力を使うことができる。

ブレイドのキック技の能力を付与した龍騎は両掌を水平にして両腕を広げると、腰を落として身構えた。

途端に地面に広がった龍の顔のような光の紋章が渦を描いてデイヴオイドの足から吸い込まれていった。

アギトの力をも取り込んだ龍騎は、裂帛の息吹と共に大きく跳躍した。

『はあっ！』

跳躍軌道の頂点で身を捻り、跳び蹴りの姿勢に移行したデイヴオイドを前に、デイレイドはカレイドブレイドの刀身の溝を指先で一閃し、ベルトバツクルを掴んで振り払い回転させた。

《ファイナルアタックライドウ・カレイド！》

『あああああああ！』

流星のごとく迸るデイヴオイドの蹴りが、輝きを放つカレイドブレイドを振りかぶるデイレイドに襲いかかる。

激突と同時に巻き起こる甚大な爆発と轟音。

やがて煙が晴れた跡にいたのは、剣を振り下ろした姿勢のデイレイドのみ。

龍騎の姿は跡形もない。

『くつ！？』

すぐに離れた地点に九つの人影が現れると一カ所に集まり、再び一体のデイヴオイドへと変移した。

『神楽見さん！』

そこへ、デイレイドの後を追ってきた真司が変身する龍騎がやって来た。

『真司くんっ！ やるよっ！』

『おうつ！ って、なにをうひゃー！？』

問い返す真司に応えずデイレイド・カレイドフォームが後ろ手に手を振ると、たちまち龍騎の身体が浮かび上がり迅速に回転・変形しドラグレッダーへと変移してしまった。

『えええいっ！』

構わず、そこから疾く駆け出したデイレイドは鋭く跳躍し、宙で身を捻ると蹴りの姿勢に移行、弧を描いて背後に現れたリュウキドラグレッダーが吹き出した火炎を背に受け、砲弾の勢いでデイヴォイド目掛け急降下した。

『いやあああああああ！』

『おおおお！？』

アスファルトを大きく抉って粉々に吹き飛ばしたデイレイドの蹴りに、デイヴォイドの身体が派手に弾き飛ばされて路面をころころと転がり消えていった。

『まだまだ！ 序の口よ！』

『ちよ、ちよつと神楽見さん！？』

『文句は後でね！』

元の龍騎の姿に戻り、突然のファイナルフォームライドのショックでふらふらしている真司の抗議を手を振って流すと、デイレイドもさっさと姿を消してしまった。

背後に野山が広がる流星塾の校庭に、己の武器を肩に担ぐカイザとポディスーツ表面を真っ赤に染めたファイズがブラスターを構えて立っていた。

瞳子に言われた通り、「あっても、危険なので使わなかった装備」のうちのひとつ「ファイズブラスター」をも持ち出して初めてブラ

スターフォームに変身した巧だったが、滅多に持ったことのない物騒な銃器に恐々としていた。

『……あの、神楽見さん。ほんとにコレ、必要なの……？』

『今さらナニ言ってるのよっ！？』

いつの間にかディレイドの姿に変身していた瞳子が、カイザとファイズの間で腰に手を当て仁王立ちしていた。

これが「ファイナル・カレイドカメンライド・オーバードライブ」の効果のひとつ。

「九つの世界」の瞳子たちを全て同一にディレイドへと変身させ、

「絵描きの瞳子」との完全同期連携を行うことを可能とする。

「絵描きの瞳子」と意識を繋いだことにより、「九つの世界」の瞳子たち全員が既にこの状況を心得ていた。

『ある意味ディシエッドなんかよりもヒドいのが来るんだから！

あのロケットみたいなバイクが直ってたら、それも持ってきたところよっ！』

『……壊れててよかった……』

透が関わった戦いで攔坐したジェットスライガーの威力を思い出し、巧の背に寒気が走った。

『とにかく！』

より声を張り上げた瞳子が、びしりと指先を突き出して校庭の反対側にある一本の樹を指し示した。

『これから、合図と同時にあの辺に向かってありっただけ一斉発射すること！……いいっ？』

『おう！』

瞳子の指示に、カイザに変身した相模原がカイザブレイガンを構えて応えた。

『おう巧い。恐いんじゃないやったらガッコウに帰ってあの女に甘えとつてもええぞ』

「……………こ!?」

嘲るように顎をしゃくったカイザに、ファイズは一瞬だけ激昂しかけたが、

「……………怖いけど、由里ちゃんを守る為なら、やるよ。」

「へいへいゴチソウサン。」

「ひゅーひゅー。」

「ちょ!? なにその平坦な冷やかし!?」

距離を離して適当な茶々入れをする二人にファイズが伸び上がって叫んだ。

「つと、さて二人とも! そろそろ来るからちゃんと構えて!」

「……………!」

瞳子の合図に、途端に戯けをやめて武器を構え直すファイズとカイザ。

「……………三、二、いち……………撃てえっ!」

「痛い!?」

合図と同時に瞳子の蹴りがファイズの尻に炸裂した。

突如校庭の真ん中に、なぜか地面を転がるようにして出現した黒い人影への攻撃はカイザブレイガンの黄色い光弾のみで、ファイズブラスターの赤いビームはあらぬ方へ飛んでいつてしまった。

「ヘタクソツ!」

「神楽見さんっ!?」

「先行くぞ」

不条理に怒鳴り合う二人を余所にカイザブレイガンを逆手に持ち変えたカイザが駆け出してゆくを見て、慌ててファイズ・ブラスターフォームも駆け出した。

ファイズ・ブラスターフォームは、走りながらファイズブラスターのグリップを囲む赤い円環の縁に並ぶ数字のキーを順に押し込みエントーキーを押した。

《ブレイドモード。》

たちまちファイズブラスターの砲身部分が溶け崩れるように変移し

長大なフォトンブラッドの刃と成す「フォトンブレイカーモード」へと移行した。

『どおおっせいやあああああ！』

ファイズ・ブラスターフォームが追いつく頃には既に、カイザが黒の人影・・デイヴオイドを殴り倒していた。

相変わらず使い方を知らないのか、カイザブレイガンのフォトンブラッドの刀身ではなくまるでメリケンサックのように×字の筐体自体で殴りつけているが、それでも殴り倒されたデイヴオイドが地面に埋まる馬鹿力である。

『でやあああ！』

ファイズ・ブラスターフォームも続いて駆け寄り、転がるデイヴオイドめがけてブレイドモードを振り下ろした。

が、巨大なフォトンブラッドの刃は地面を大きく抉り飛ばしたのみでそこにはもうデイヴオイドはいなかった。

『巧ッ！』

相模原の警告と共にカイザの蹴りがファイズ・ブラスターフォームを押し退けた跡を、鋭く飛翔した火球が貫いていった。

体勢を立て直したファイズとカイザが見たものは、漆黒のデイケイドの代わりに周囲に現れた九体の仮面ライダーの姿だった。

『修！加勢するぞ！』

そこに、朽ちかけた木造の校舎から塾生のオルフェノクが数人駆け出してきた。

『待つて！ 敵は全員フォトンブラッドでの攻撃ができるんだから！近付いちやダメ！』

慌てて瞳子が塾生のオルフェノクたちの前に立ちはだかった。

分身したデイヴオイドは九体で一体。ファイズ以外の身体からもファイズの技を出せるのだ。

『……なるほど。デイケイドと同じような能力ということだね』

『は。こないだ行ってきた異世界の連中もあるわ。』

デイヴオイドの分身を見回して、そこにいるブレイドを見て巧と相模原がめいめい呻いた。

その時、塾生を宥める瞳子とデイヴオイドのファイズがあらぬ方を振り向いた。

それと同時に虚空に出現した輝きの中からデイレイド・カレイドフォームが飛び出し、デイヴオイドのファイズ目掛けてカレイドブレイドを振り下ろした。

『やあああああ！』

だがデイヴオイドの反応のほうが一瞬だけ早く、割り込んだファイズエッジと音撃棒と龍騎の手甲が同時にカレイドブレイドを阻んだが、デイレイドは力任せに三体の防御を押し切りデイヴオイドのファイズを地面に押し倒した。

『あああああああ！』

左右からアギトの、キバの蹴りが加えられるがデイレイドは構わずにカレイドブレイドを振り下ろしてデイヴオイドのファイズを叩き潰してしまった。

巻き起こる赤い爆発。

すぐさま離れた場所に無傷のファイズが姿を現した。

『っがああああ貴様ツ！？』

『巧！ 相模原！ 総攻撃！』

『応！』

デイヴオイドの怨嗟に構わず張り上げたデイレイド・カレイドフォームの声に、相模原が氣勢を上げて応え、ファイズも黙してブレイドモードを構え、デイヴオイドの仮面ライダーに攻撃を仕掛けた。

総勢十二人が入り乱れる混戦模様だが、巧がブラスターフォームに移行している為デイヴオイドのファイズと誤認することはない。もつとも、誤認の心配をすべきはデイレイドと接続していない相模原のみだが、当の相模原はそんなことは気にしていない。

デイヴオイドのクウガが装甲の形状と色を変化させた。

それと同時に響鬼が構えている音撃棒が二本ともタイタンソードへ

と変化し、一本がクウガに投げ渡された。

『があああつ！ 力を！ 寄越せッ！』

クウガが振り下ろしたタイタンソードをカイザが武器で受け止めるが、全く同時にブレイドとカブトに胴を殴られて吹き飛ばされた。

『させるかッての！』

叫ぶデイレイド・カレイドフォームが響鬼が振り下ろしてきた大剣を、電王の飛翔する剣をカレイドブレイドで打ち払い、キバの、アギトの蹴りを捌き、あるいは受け止めて跳ね返すが、とうとう龍騎とファイズがファイズ・ブラスターフォームを捕まえた。

『うわ！？ うわあああ！？』

巧の悲鳴が上がる。深紅のボディが掴まれた所から見る見る色彩を失ってゆくのだ。

デイレイドのファイズは既に数段階階層も下のものの為、肩を揺すただけで簡単に振り解けたが、そこに響鬼も押さえ込みに加わった。

『ちっ！？』

付きまとうアギトとキバを振り払おうとするが、回避に徹したデイレイドのマークはなかなか振り切れない。

『少しは頭使うようになったじゃないの！』

『黙れ！ せめて一匹でも吸収すれば！』

そこへ、比較的静粛な駆動音と共にオートバジン・バトルモードが後輪のローターで飛翔してきた。

戦場の上空でホバリングすると、左腕のバスターホイールを地上へと向けて高速回転させ、ガトリングガンを斉射しだした。

『うわわわわわわ！？』

ファイズ・ブラスターフォームを中心に撒き散らされる無数の12mm弾。

それなりに強力な兵器だが、高出力フォトンブラッドを全身に纏ったブラスターフォームにはまるで効きはしない。だと言うのにまるで雹か霰を撒かれたようにばらばら弾く装甲の中で巧はびっくりし



ていた。

だがまとわりついていたデイヴオイドを排除するには充分だった。怯んだ隙を突いてファイズ・ブラスターフォームがデイヴオイドの仮面ライダーたちを振り払う。

『今っ！』

『巧っ！』

巧の身が解放された瞬間に二人の瞳子の声が重なり、巧の背後に学生の瞳子が変身したデイレイドが駆け寄ってきた。

『死又ほどくすぐつたいよっ！』

『へ？ って』

そのまま巧の返事も待たずに瞳子がファイズの背中に手を突っ込んで左右に振り払った。

『いひやーーー！？』

悲鳴と共にファイズ・ブラスターフォームが宙に浮かび上がり迅速に回転・変形し巨大な銃「ブラスターファイズ」へと変移してしまふ。

なぜかカラーは反映されていないシルバーの巨大銃を担ぎ上げたデイレイドは、巧が持っていたファイズブラスターをデイレイド・カレイドフォームに放り投げ、受け取ったカレイドフォームと同時に発射態勢を取った。

『喰らえ！』

発射。

深紅の十字砲火がデイヴオイドの群を焼き尽くす。

『ぐおおおおお！？』

『はっ！ まだまだあ！』

間髪入れずにファイズブラスターを投げ捨てたデイレイド・カレイドフォームが駆け出してゆく。

地面に投げ出され元の姿に戻ったファイズ・ブラスターフォームはへなへなと校庭にへたり込んだ。

『……ひ、ひどいよ神楽見さん……』

『『つっさい』』

瞳子の返事は、ふたりそろってにべもない。

すぐさま離れた場所に出現したデイヴオイドの腹に足裏を叩きつけて別の世界へ吹き飛ばした。

『今だ！ カードを切れ！』

採石場跡地にデイヴオイドが転がり込んでくるや否や、デイレイドの姿に変身したウエイトレスの瞳子の指示が飛び、広場の四方を囲むように待機していたブレイドを始めとする四人の仮面ライダーたちが一斉に己の持つカードを複数枚引き抜いてはラウザーに通していった。

《スラツシュ。》 《バレット。》 《サンダー。》 《ラピッド。》 《トルネード。》 《スクリュー。》 《ファイア。》 《ブリザード。》

四基のラウザーの認証音声が重なり合い、やがて各々が効果を発揮し始めた。

《ライトニングスラツシュ。》

『うええええええいッ！』

裂帛の息吹と共に振り下ろしたブレイラウザーの刃の軌跡から飛び出した稲妻の斬撃がデイヴオイドのいる地点に突き刺さり、さらに次々と飛来するギャレンの、カリスの、レンゲルの放った属性弾が着弾しては爆発がいくつも巻き起こった。

『やったか！？』

『まだだ！』

一真の声に瞳子が鋭く警戒を飛ばす。

思った通り、もうもうと立ちこめる土埃の中から九騎の仮面ライダーに分身したデイヴオイドが飛び出してきた。

ところが、デイヴオイドはこの世界に四人の仮面ライダーがいると知りながら、九体全てが一直線にブレイド目指して駆け出てきたのだ。

他の三人の仮面ライダーは、この広い採石場を囲むように立っている。援護に駆け寄るにしてもディヴオイドとの距離の差はあまりにも大き過ぎた。

『は！ あたしがそれを読んでないとも思ってたか！』

ブレイドの真横にいたディレイドが叫んで手を振り上げた。

『一真っ！ 死又ほどくすぐったいけど我慢しろ！』

『やっぱりかよぎやー！』

やおら隣のブレイドの背中に手を突っ込むとブレイドブレードへと変形させ、一振りして正眼に構えた。

『うらあああああ！』

『があっ！？』

出会い頭に真っ先に辿り着いたディヴオイドのカブトを殴り倒し続  
くアギトとファイズをも横薙ぎに吹き飛ばした。

あっと言う間に三体が爆発して消滅し、離れた地点に一階層下のア  
ギト、ファイズ、カブトが出現する。

『えひゃあああああ！』

どうにも情けない悲鳴のような絶叫と共に、ようやく追いついてき  
たレンゲルがディヴオイドの仮面ライダーの群に飛びかかった。

《バイト。》

ラウザーにカードを通し、宙で身を捻ったレンゲルは大きく開脚し  
てディヴオイドのブレイドに踊りかかっていた。

『あああああああ！』

前後に振り切った両足を勢良く閉じ合わせて相手を挟み込む強力  
なクロスキックが炸裂し、ディヴオイドのブレイドはたちまち爆発  
して消滅してしまった。

『っくおおおおお！？』

『まだまだあ！』

すぐさま離れた地点に出現したディヴオイドのブレイド目掛けてレ  
ンゲルは疾く走り、駆け寄りざまに槍を叩きつけ、横殴り、振り下  
ろし、蹴り倒し、たちまち圧倒してしまう。

『シネヤオラあああああ！』

『ぎゃー！』

またしてもディヴオイドのブレイドが爆発した。  
三度離れた位置にブレイドが出現する。

『もいつちよう！』

『マテ。』

さらに駆け出そうとしたレンゲルの後ろ頭を、元の姿に戻ったブレイドが蹴倒して踏み潰した。

『ぶぎゅ！？』

潰れたカエルのような苦鳴を漏らしたレンゲルの頭を踏み押さえたまま、屈んだブレイドがレンゲルの腹からベルトを引き抜いてしまった。

たちまち変身を強制解除され、ブレイドに踏まれたまま黒葉 睦月の姿に戻ってしまう。

「……絶好調だなあ睦月。」

同様にブレイドも変身を解除してしまい、オリハルコンエレメントが通過した後から仄暗い顔で冷たく見下ろす一真の姿が現れた。

「な、なにするんですか一真さん！？ 早くディヴオイドをやっつけないと！？」

「おーおー大した意気だな。ところでお前はナニか。ブレイドのカチチしたモンに何か文句でもあんのか？」

後頭部から踏みつけられ地面とキスしている睦月に一真のドス黒い笑顔が見えたはずもないが、睦月はわたわたと虫ケラのようにもがき始めた。

「……い、いや！？ ボクはただ、世界の脅威を一刻も早く倒したいと切に願う次第であります」

「ダレが世界の脅威だコルアアアア！」

「ぎゃー！ ぎゃー！」

とうとうキレた一真がまるで振動コンパクトのような凄まじいスピードで靴底の連打を叩き込み、睦月の頭部がみるみる地面に沈み込

んでいった。

『遊んでる場合かよ!?』

そこへ忍び寄っていたデイヴオイドの響鬼をデイレイドが飛び込みざまに蹴り飛ばした。

そのまま一真と睦月の前に立ち塞がりデイヴオイドの電王とクウガを殴り返してゆく。

『ったく、一真をキレさすなんて、黒葉もたいがい進歩しないわよね』

『……お、瞳子お姉ちゃん!?』

突如カリスの横にデイレイド・カレイドフォームが脈絡無く出現するなりばやきを漏らし、初が喫驚の声をあげた。

『初ー! また会えてよかったー!』

ところが、デイレイド・カレイドフォームがいきなり声色を変えて手を振り回し賑やかにしゃべり出したのを見てカリスのマスクの下で初は驚愕に眼を見張った。

『……その声、アリス!? ……生きて……』

『うん。訳あって今「こつちのわたし」と一緒にいるけどね』

がらりと態度を変えて瞳子の声で語り出すデイレイド・カレイドフォーム。

『詳しい話はあとで。今はアレを倒すのに協力してくれる?』

『はい!』

意気を上げ、カリスがぴよんと跳ねて前に向き直った。

『よし、いい返事! 死又ほどくすぐつたいけど大丈夫だよね!』

『はい! え?』

瞳子の言葉に既視感を感じた次の瞬間にはデイレイド・カレイドフォームの手がカリスの背中に突き込まれ、振り払うと同時にカリスの身体が宙に浮かび上がった。

『あー! あー!』

迅速に回転、変形し、やがて四本の弓が交差したようなカリスグレイルへと変移してしまう。

『さあデイヴオイド！壊して壊して、壊してやるから！』

『……ちよ、おねえちゃ』

巨大な傘の骨のような弓を掴み大きく跳躍したデイレイド・カレイドフォームはカリスグレイルを引き絞り、地上でウエイトレスの瞳子と戦うデイヴオイドの群に狙いを定めた。

『喰らえ！』

解き放たれたカリスグレイルから無数の光の矢が飛び出し、地上のデイヴオイドの群へ雨霰と降り注いだ。

『なっ！？　があああああああ！？』

あちこちで巻き起こるいくつもの爆発でデイヴオイドの仮面ライダーが次々と消滅してゆく。

世界影響力を持つ仮面ライダーとしか接続していないデイヴオイドに、カリスのファイナルフォームライドはまるで想定外だったろう。感情を植え付けられたデイヴオイドは「狼狽」してしまい対処が遅れたのだ。

『さあて！悪いけど、まだ油断しないでね！』

カリスグレイルをウエイトレスの瞳子に投げ渡し、デイレイド・カレイドフォームは着地寸前に別の世界へ跳び姿を消した。

『ぐっつ！？』

爆撃に乗じて宇宙を離脱したデイヴオイドは別の世界の地面に転がり落ちた。

『……おのれ……　ここは「響鬼の世界」か』

せめて一体でもこの階層の仮面ライダーを取り込めば状況をひっくり返せる。

そう思つて響鬼のいる方向へ歩き出したデイヴオイドの聴覚に、地を揺るがす怒濤の音が聴こえてきた。

『なに……っ？』

地殻運動かとも思ったが、違う。

だがそれを察知した時には既に、全包围の森の中から無数の「鬼」が襲いかかってきていた。

「な！？ うわああああ！」

うおおお、という「鬼」たちの怒号にその狼狽の声は掻き消され。たまらず九騎の仮面ライダーに分身するが、デイヴオイドはあつと言つ間に「鬼」の大群に飲み込まれてしまった。

森深い山々に囲まれた中でぽっかりと拓けた窪地には今、数百もの「鬼」の大軍が入り乱れて戦っていた。

相対するたつた九体のデイヴオイドは荒波に呑まれた木の葉のように蹂躪されるばかり。

『ぐあああああ！？ こつ、こいつら！？』  
数の暴力に散々に蹴散らされデイヴオイドが悲鳴をあげた。

いかな「九つの世界」の仮面ライダーに分身したところでこの大軍の中にあつてはものの数にもなりはしない。

あつと言う間に大量の音撃斬に殴り飛ばされ、音撃管による無数の鬼石の段幕が雨霰とデイヴオイドを打ち据える。

『響鬼師範だ！ 響鬼師範がいるぞ！』  
『ここに響鬼師範がいるはずがない！敵だ！』

唯一この世界の仮面ライダーと同種の分身も、その所在を知られては攪乱の役に立ちほしくない。原住民の虚を突こうとしたデイヴオイドの響鬼はたちまち集中攻撃を喰らい吹き飛ばされた。

『つがああああつ！？ くそつ！？ くそつ！？』  
目論見をあつさり碎かれて臍を噛む。

だが一方的に翻弄されていたカブトが体勢を立て直すと、とうとう左腰を叩いた。

《クロツクアップ！》

九体のデイヴオイドが加速空間に突入し、「鬼」たちが敵を見失ったことでたちまち形勢は逆転してしまった。

『ぎゃあつ！？』  
『うわあつ！？』

視認できない超高速の世界から殴り飛ばされ無数の「鬼」たちが次々と錐揉みして宙を舞う。

『て、敵が見えませんか！？』



『狼狽えるな！根性で心の眼を開けぎやああああ！？』

『低次元どもが！そんなモンで見破れるかッ！』

一方的に翻弄される「鬼」たちを、悪罵を吐きながら打ち倒してしまっ。

そこへ、上空を巨大な金属色の鳥が飛来してきた。

それはファイナルフォームライドを施されたヒビキアカネタカ。足に音撃道見習いの瞳子が変身したデイレイドがぶら下がっている。

『全員、散開してください！』

ヒビキアカネタカが戦場の上空を旋回しながら叫んだ。

『明日夢くん！やりますよ！』

『やですけど！』

『えいつ！』

煮えきらない響鬼の返事を無視してデイレイドは掴まっているヒビキアカネタカに空いている片手をかざして一振りした。

するとたちまち回転、変形し、響鬼は巨大な音撃鼓へと変移してしまっ。

『うりゃー！』

いまいち覇気に欠ける掛け声と共に、上空からデイレイドがヒビキオングエキコを投げ落とした。

それと同時に「鬼」の大軍が一齐に、寄せた波が帰るように素早く戦場から飛び退いていつてしまった。

『なに！？』

いきなりの総員撤退に虚を突かれたデイヴオイドだったが、上から迫るヒビキオングエキコに気付いて即座にその場から飛び退いた。

デイヴオイドの脇をかすめて地面に激突したヒビキオングエキコは、即座に巨大な三つ巴の光陣を展開しながら大地に沈み込んでゆく。

投げ落とした反動で滞空するデイレイドの横の空中に、閃光と共にデイレイド・カレイドフォームが出現した。

『全員、跳んで！』

『皆さん！お願いします！』

二人の瞳子が同時に叫ぶや否や、退避していた大勢の「鬼」たちが一斉に全周囲の森の中から飛び上がり、窪地の中心にいる九体のデイヴオイドに殺到してきた。

『舐めるなあっ!』

ワールドスライダーによる牽制ののちに一斉同時攻撃か。

下らない策だと心中で唾棄しながら再度、九体のデイヴオイドが全く同時に左腰を叩いた。

《クロックアップ!》

再び加速空間に突入し、デイヴオイドの周りで「鬼」たちが空中にあつて静止した。

《クロックアップ!》

だが上空から落下中の二体のデイレイドも加速機能を發揮して追従してきた。

『くだらない! 数をそろえたところで加速空間について来れるものがないじゃないか!』

九体が各々の必殺の攻撃の予備動作を行いながら吐き捨てる。

『あなたの評価は聞いていませんっ!』

『何が起きたのかは、滅びた後で考える!』

《ファイナルアタックライドウ・カレイド!》

落下を続けながらデイレイド・カレイドフォームが剣の溝を指先でなぞってベルトを振り払った途端、二体のデイレイドが同時に目映い輝きに包まれた。

『あああああああ!』

そしてカレイドブレイドを振り上げ、大地に殺到してきた。

『ふん! 返り討ちにしてくれる!』

迎え討つデイヴオイドが一斉に蹴りの姿勢を取って身構えるが、途中で違和感に気付いたデイヴオイドはその異常を訝しんだ。

デイレイドの落下軌道は、九体のデイヴオイドのどれも狙っていないのだ。

『なに!?!』

『遅い!』

デイヴオイドが何を言う暇もなく、落下してきたデイレイドの全体重を載せた蹴りが、カレイドブレイドが大地に炸裂した。

『!?!?』

大地が、爆発した。

デイヴオイドにはそう感じた。いきなり直下から吹き飛ばされながら。

地面に沈み込んだヒビキオンゲキコは今や大地そのものを鼓と成していた。

それがデイレイドの打撃によってとてつもない威力の音撃を噴出させたのだ。

『おおおおおお!?!?』

窪地一帯が有り得ないような大地震に見舞われ、九体のデイヴオイドがまるで鍋の中のポップコーンのように跳ね回る。

こうなつてはクロックアップも意味がない。駆け回るべき地面が振動しては素早い動きなど不可能だ。

そこへ、先ほどから飛び上がっていた「鬼」たちがようやく殺到してきた。

各々の武器を、蹴り足を構えて次々とデイヴオイドの仮面ライダーを打ち倒してゆく。

『くおおおおお!?!?』

さらにその他大勢の「鬼」たちが、今や音撃鼓となった大地を次々と蹴り付け、さらなる激震がデイヴオイドに追い討ちをかける。

湧き上がる轟音の中、次々と爆発が巻き起こった。

銀のオーロラを粉々に破りながら飛び出してきたデイヴオイドがころころとアスファルトを転がる。

『ちっ! くそっ!』

ようやく止まったデイヴオイドが悪罵を吐きながら身を起こしたところで、いきなり顎に衝撃を受けて仰け反った。

『!?!?』  
さらに背後から、横から、あらゆる方角から痛撃を叩き込まれキリ舞いする。

『くっ! 「カブトの世界」か!』

《クロックアップ!》

即座に己の右腰を叩いて加速空間に突入する。

そこでデイヴオイドが見たものは、この港の倉庫を取り囲むおびただしい数のマスクドライダーの姿だった。

それらが皆、各々チャージアップを施してタキオン粒子変換エネルギーの輝きを放っている。

『お!? おおおおお!?』

慌てて九体に分身するが、既に彼らの攻撃は解き放たれている。

《ライダーシューティング!》

《ライダースラッシュ!》

《ライダーチャージ!》

《ライダーカムシン!》

《ライダーチャージ!》

《ライダーテンペスト!》

諸々の認証音声があちこちから唱和し、斬撃が、光弾が、あるいは蹴りやパンチによる突撃があらゆる方向から襲いかかった。

『がっ!? ぐああああああ!』

回避行動を取るも避けきれるものではない。次々と破壊され、立て続けにデイヴオイドは爆発した。

次の階層の仮面ライダーがすぐに出現するが、そこにも光弾の攻撃が襲いかかり、デイヴオイドは己の分身を消費するばかりで動くことすらできない。

『えええい! ふざけている!』

たまらずデイヴオイドは別次元の方向へ転がり込んで逃げた。

逃げ込んだ先は「電王の世界」。

広大無辺の砂漠の真ん中に転び出たデイヴオイドは電王を探すべく慌てて周囲を見回した。

そしてそのまま硬直した。

『……な!?!』

周囲を、既に無数の「時の列車」が取り囲んで周回していたのだ。それも空中にも線路を敷設できる「時の列車」のこと、デイヴオイドを取り囲む半径を維持したまま、無数の列車たちが縦に平行して旋回している様はまるで列車の竜巻の中にいるかのようなのだ。

だがその暴風は、外側へではなく、内側に向けて今まさに牙を剥いているところだった。

全ての「時の列車」の砲頭が展開され、それら全てが円の中心にいるデイヴオイドを狙い定めている。

『撃つて!』

その中の、一際長いエクリスエクスプレスのフロントノーズに仁王立ちしたデイレイドが叫んだのを合図に、「時の列車」の武装が一斉に光を放った。

『……お、うおおおおお!?!』

地上を、空中を周回する無数の「時の列車」が描く円の中心に幾重もの光条が突き刺さり甚大な爆発が巻き起こった。

デイヴオイドは分身して狙いを逸らそうと試みたが、そもそもギガンデスを倒す為の大口径・高威力の巨大兵器の砲撃である。スケール差があり過ぎてはもはや躲すとかそういうものではない。

すさまじいエネルギーの奔流に、デイヴオイドの仮面ライダーは再出現する端から次々と蒸発させられ指一本動かすことすらできずに蹂躪される一方。

『っがああああああ!』

破壊的な確率干渉の嵐の最中の、断続的な砲撃のほんの僅かなの間隙を目敏く捉えたデイヴオイドはこの宇宙から離脱し「キバの世界」へ転がり込んだ。

『くっ!?!? くそっ!?!?』

悪罵を繰り返し、どこかの谷底の土の上を歩く。

そこに突如火球が飛来し、激突した地面を大きく抉り飛ばして爆発した。

「!?？」

射線を見切って見上げれば、デイヴオイドがいる谷底を囲むように、崖の上にはずらりとファンガイアが、グレートワイバーンの群が待ち構えていた。

「かかれ。」

一番奥に泰然と構えているキバの号令で、それらが一斉に襲いかかってきた。

「ちっ！」

「響鬼の世界」の時とは「鬼の大軍」が「悪魔の大軍」に変わっただけのおびたたい数の暴力に、慌てて九体に分身して身構える。ところがやはりここは「キバの世界」。

「ひ!? き、キング!?」

「違う! そいつは敵だ!」

乱戦に巻き込まれたデイヴオイドのうち、キバの姿がファンガイアの判断力を鈍らせたのだ。

「邪魔だ!」

「ぎゃああっ!?」

怯んだ隙を逃さず、キバの身体の前にいるファンガイアを蹴散らしてゆく。

ところがデイヴオイドのキバの横面を、この場に飛び込んできたデイレイド・カレイドフォームの膝蹴りが貫き吹き飛ばしていった。

もんどりうって転がったデイヴオイドのキバにグレートワイバーンの吐いた火球が炸裂し、たちまち焼き尽くして爆発させてしまった。『ぐっつ!?!』

無数のファンガイアと入り乱れて戦っていた残りのデイヴオイドが途端に苦鳴を漏らして体勢を崩すと、その姿が掻き消えて別の場所に一体となったデイヴオイドが出現した。

『……き、きさま、貴様あつ!?』

『ふん。予定してた理不尽な攻撃にはもうちよつとだね。』  
立ち上がったデイレイド・カレイドフォームは、冷たい声で吐き捨てる。カレイドブレイドの刀身の溝に描かれたライダーズクレストに指先を触れ、順になぞり上げ始めた。

《クウガ・アギト・リュウキ・ファイズ・ブレイド・ヒビキ・カブト・デンオー・キバ・ディケイド!》

認証の音声と共に、剣に埋め込まれたデイレイフォンのディスプレイに、それぞれのライダーズクレストが表示されてゆく。

そしてベルトのバックルを掴み、横に振り払って回転させた。

《ファイナルアタックライドウ・カレイド!》

『だから、まだまだ終わんないよ!　っやああああああ!』

『!?』

黄色い光となったデイレイド・カレイドフォームのまるで流星のようなタツクルが、身悶えしてたたらを踏むデイヴオイドを一瞬で宇宙の外まで吹き飛ばした。

その瞬間、九つの宇宙がデイレイド・カレイドフォームを介して部分的にひとつに重なった。

## 九つの世界

『あの傍迷惑な唐変木にやあ苦労させられたけどな。それでツッコミ入れていいのも俺だけなんだよ』

静かに語るアギト・シャイニングフォームは既に、河原の中程で水平に開いた両腕を改めて引き絞り、腰を落として半身に構えていた。

『それを、前に差し出して殺させただあフザケたコトしやがって!』  
小気味の良い音を立てて額のクロスホーンが展開する。

『生きてんのが神のボーナスだつてのによ!それを横から掠め取るなんざあ許しちやおけねえ!』

次元の彼方から飛ばされてきたデイヴオイド目掛け、アギトは溜めに溜めた力を解放して鋭く跳躍した。

『てめえムカツクんだよ！ オラアツ！』

宙で回転したアギトのまるでサッカーのシュートのような蹴りが炸裂し、デイヴオイドの身体は大きな爆発と共に吹き飛ばされた。

『透も、確かに俺たちのチームだった！』

左右反転したミラーワールドの、無人の街の道路の真ん中で龍騎サバイブが叫んだ。

『それが、こんなヤツのせいで殺されただなんて！』

真司の脳裏に、所属する雑誌社の編集長が殺された、かつて土が関わった事件のことが思い出された。

あの事件は、真司の仕事の相棒でもある羽黒 蓮がもたらした「タイムベント」のカードを真司が行使したことで事件ごと「なかったこと」にされ編集長も死ななかつたことになったが。

『だけど！透はもうどうやっても取り戻せない！』

絶叫した龍騎は既にバイクモードとなった赤き無双龍・ドラグランザーに跨っており、フロントカウルが巨大な顎を開いて立て続けに火球を吐き出してデイヴオイドを火達磨にして打ち落とした。

『うりゃあああああ！』

数発が着弾して目標が地面に転がるや否や、後輪を急回転させたドラグランザー・バイクモードは僅かに上体を浮かせて急発進し、デイヴオイドを轢き飛ばしていった。

『あんなにまつすぐに使命を遂行できる透徹した意志を、羨ましいと思っただよ。』

流星塾の裏手の山裾の森で立つファイズ・ブラスターフォームが、小脇に抱えたファイズブラスターを弄びながら呟いた。

『神楽見さんに言ったら「そういうんじゃない」って呆れられたけど。でも、信頼できる人だったと思う。』

かつての戦いを思い出し、巧はファイズブラスターを持ち上げゆっくりと正面に向け構え直した。



『由里ちゃん以外はどうでもいいって思ってたけど、世界丸ごと潰されるかもしれない危機だって言うし。』

呟きを続けながら、指先がファイズブラスターのグリップを囲む赤い円環に設置されたエンターキーを押し込んだ。

たちまちブラスターの砲身が溶け崩れるように変形して巨大なフォトンブラッドの刃と成す。

その振り上げた赤い刀身が、数倍に膨れ上がった。

『今は、僕の行動の根拠に透さんが理不尽に殺された怒りを加えてもいいと思う』

土を蹴散らして転がり込んできたデイヴオイドを見据え、僅かに足の位置を変えて体勢を整えたファイズはフォトンブレイカーモードを肩に担ぐと、その漆黒の身体を裂帛の息吹と共に赤い刃のフルスイングで彼方に打ち上げた。

『ホント、冗談じゃねえぜ』

採石場跡の真ん中でブレイドは深い怒りに震えていた。

『俺のダチをよくも殺してくれやがって！』

吹き飛んできたデイヴオイドを見上げ、ブレイドは叩きつけるようにブレイラウザーを投げ捨てた。

『世界平和！？今はんなモン知るか！テメエのオトシマエつけさせてやるよ！』

叫ぶや否や飛んできたデイヴオイドを地面でバウンドするほど殴りつけ打ち落とした。

『オラアッ！』

跳ね返って浮いたデイヴオイドの身体に飛びかかってさらに上から拳を叩きつけ、着地ざまに蹴り付け、そして捻った上体が後ろを向くほど右腕を大きく引き絞る。

ブレイドの後方には、カリスが控えている。静かに風を操り、辺りで渦を巻き鳴動させ。

『く だ け ち れえええええっ！』

のたうつ無数の電光と共に、押し寄せる津波のような渾身の拳が突

進する。

同時にカリスが解き放った暴風がそれを後押しし、稲妻と嵐を纏ったブレイドの右拳がデイヴオイドの身体に叩きつけられた。

『透さんは、僕を「響鬼」と呼んでくれた。』

緑深い山中で、両手に音撃棒を掲げ響鬼は静かに立っていた。

『明らかに子供にしか見えない僕を「響鬼」と呼んで、なんの疑問も挟まずに協力してくれた。協力させてくれた。』

その気配を振り向き、身を「く」の字に折って後退ってくるデイヴオイドの背中を見遣った。

『魔化魍ではないお前に対しては、僕の中には透さんを殺された私怨しかない。せめてこれを最後に僕は僕の中の「鬼」を殺す。だから』

振り上げた二本の音撃棒を拝み打ちに振り下ろしてデイヴオイドを打ち倒す。

地面に激突して跳ね上がったデイヴオイドに駆け寄り、横薙ぎに二度打ちつけ、さらに蹴り付けた。

『魔化魍でないお前に音撃は通じないけど、だからこれで燃え尽きる！』

若干の集中のち裂帛の息吹と共に巻き起こった膨大な炎が、ふらつくデイヴオイドを飲み込んで荒れ狂った。

『友の無念を思うと、この鋼の胸もさすがに痛むわ。』

ビルの上の真ん中に立った巨大なマスクドライダー　クライプ・ライダーフォームが沈鬱にうめいて頭を振った。

『つまらぬ甘計を謀るものよ。デイケイドを始めとする「世界を渡る者」の危険性は承知していたが、あの青いのはともかくデイレイドに悪意はなかった。それくらいは見れば分かる。』

炎に巻かれて転がるデイヴオイドを睨み据え、クライプは拳を強く握りしめた。

『だが、その裏の貴様の存在まで見通せなかったのは我が不徳。決して雪げる罪ではないが、せめて後始末は請け負おう』

岩塊のような巨大な拳で真正面からデイヴオイドを殴り倒すと、やおら屈み込んでその脚を掴んだクライプは苦もなくデイヴオイドを持ち上げ、麻袋のように軽々と振り回すと辺りのコンクリートの床のあちこちに漆黒の身体を叩きつけ始めた。

『むっむっむん！』

背後の床、そして前の床に叩きつけられる度に砕かれたコンクリートが飛び散る。

さらに水平に振ると、ぐるぐると振り回し途中で手を離して投げ飛ばした。

『ぬっむっむりゃあああああ！』

その上あるうことかクライプは自らが投げ飛ばしたデイヴオイドに走って追いつくと、さらに蹴りを喰らわせて地平の彼方まで吹き飛ばしてしまった。

『……………』

虹色の空の下、広大無辺な荒野の一角に、堅牢な城塞のごとき重甲冑のような装甲を纏うエクリス・カイロスフォームが槍を携えて立っていた。

その数メートル先の地面に脈絡なくごろごろとデイヴオイドの黒い姿が転がり出ても、エクリスはたいした反応を見せなかった。

『……………』

ただ、ワンテンポ遅れてエクリスガッシャー・グレイブモードを前に突き出した。

『……………！』

無言の気合いで振り下ろして叩きつけ、引き戻した槍を頭上で旋回させゴルフのようにデイヴオイドを殴り飛ばした。

そのままのしと歩んで間合いを詰め、ファイナルアタッククライドの効果で既に充填されていたエネルギーを解放しフルチャージアタックを発動させた。

槍を構えてその場で一回転したエクリスを中心に全方位へと衝撃波が迸り、薙ぎ払われたデイヴオイドの身動きが封じられる。

肩越しに背後から振り上げられたグレイブモードが電光に包まれ、巨大な稲妻を伸ばして天を突いた。

『……クタバレ』

初めて恭也はそれだけを眩き、やがて長大な電光の柱がダイヴオイドのいる場所へと叩きつけられなにもかもを粉々に吹き飛ばした。

『私の仲間たちを穢した罪は重いぞ、「悪魔」。』

錐揉みして落下してきたダイヴオイドの身体に、幾重もの糸が絡み付き、地上で待ち構えていたウィブの方へ引き寄せられてゆく。

『キングを始め、我らファンガイア族と人間と……』

ダイヴオイドを激しく蹴り上げると、絡めた糸を掴んで引き戻す。

『翔一のバカと透の唐変木と瞳子のことを苦しめた報い！』

鋭い蹴りが突き刺さり、再び吹き飛んだダイヴオイドの身体は今度は空中で不自然に静止した。

張り巡らされた「糸」が構成した網に捕らわれたのだ。

『思い知れええええ！』

素早くターンしたウィブが跳ね上がり、瞬時に周囲を夜闇に包むと背後に青白い月を浮かべて突撃しダイヴオイドを夜闇の向こうへ蹴り飛ばした。

『おかえりダイヴオイド』

『……グッ、グガガ……』

ダイレイド・カレイドフォームの冷徹な声にもダイヴオイドはもうまともに返答することもできないようだ。

それはそうだろう。「九つの世界」の総攻撃に晒されたダイヴオイドの身体は全壊寸前。折れ曲がった腕脚にあちこち脱落した装甲、砕けたセンサー。

もはや、まともに動き回ることなどできはしない。

ここは何もない、宇宙と宇宙の狭間の空間。

第四階層の平行世界を一周するほど吹き飛ばしてやったダイヴオイドに、ダイレイド・カレイドフォームが静かに迅速に肉迫した。

『さあ。もうそろそろ終わりだよ。 えーと、宇宙の狭間に放逐して欠片も残さない、だったっけ。 今からそうしてあげる。 ルーティンワークで消却して、そのまま忘れてあげるから。』  
かつての買ひ言葉をつまらなそうに吐き捨てたデイレイドが、カレイドブレイドをまるで鉄パイプのようにぞんざいに振るってデイヴオイドの腹を思い切り殴り付けた。  
耳障りな破砕音を立ててベルトのデイヴオイドライバーが粉々に砕け散った。

u n k n o w n s p o t

喰い潰されていた宇宙が復元してゆく。

ぽっかりと空いていた「無」を、次々と伸びてゆく光の枝がいくつもいくつも分岐を重ねて瞬く間に埋め尽くしてゆく。

先にくくほど細くなってゆくが、その分無数の小枝がまるで毛細血管のように伸び続けてゆく様を、瞳子と震が並んで眺めていた。

「あの枝の末端の、あの辺があんたの故郷だったんだね。」

デイヴオイドに真つ先に潰されたであろう最下層の宇宙域を眺めて言う瞳子の言葉に、震は答えなかったが、どこか晴れやかな顔で復元されてゆく宇宙を見つめていた。

「……礼は言わないぞ。」

「別に。私もただのついでだっただけだから。」

同じ方向を眺めたまま、互いに目を合わせずに言う。

「鳴滝のボンクラは、未だに恨みが解消できずにデイケイドを追い続けるらしい。」

「まあ、好きにすればいいんじゃない？ むしろマスターライダーに目を付けられなきゃいいけど。」

同時に、微かに鼻から息が抜ける程度の笑みを漏らす。

やがて、宇宙の復元はあらかた完了したようだった。

「ではな。」

「うん。」

自らの故郷の宇宙域に向かって歩き出した震に瞳子も気安くうなずいた。

震は途中で立ち止まると、僅かに逡巡した様子を見せてから、肩越しに唇を開いた。

「礼は言わないが、……すまなかった。前のデイレイドの代わりに、

お前に。」

「悪いのはデイヴオイド。それで全部。」

ふっ、と微笑むと、今度こそ震は自身の宇宙へと消えていった。

> i17174—538 <

## ライダー大戦の世界

ディレイド・カレイドフォームは、「ライダー大戦の世界」に降り立った。

多元宇宙が復元された以上、歪んだ融合箇所であるこの「ライダー大戦の世界」は、宇宙としてはもう大して経たずに消え去る残りカスに過ぎない。

ディレイドの認識がなくなれば、たちまち完全に消滅してしまうだろう。

と、突如ディレイドの身体が黄色く輝きを放ち始めた。

「……なに？」

データリンクの接続を感じた瞳子は、システムが何をしようとしているのかを見定めて軽く喫驚した。

外部からの要請を受けて稼働を始めたのは、ディレイドのシステムとしての本分の部分「フォローバックアップ」だった。

ディケイドがパートナー設定を施した存在が、ディケイドを復元しようとしているらしい。

それにディレイドのシステムが呼応したのだ。

さすがに本来の機能を阻害することも、阻害するつもりも瞳子にはない。

己の中のシステムがディケイドのデータをアップロードしてゆくのをただ黙って見送った。

誰だか知らないが、ディケイドは真に幸運だ。世界を復元させる為に消滅してなお、戻ってきて欲しいと願う者がおり、そしてディレ

イドというバックアップがあつたのだから。

やがてデイケイドを復元させたデータリンクの残滓である光の粒子を見送つて、瞳子は寂しげに溜め息を吐いた。

『……良かったね。生き返ることができて。』

でも、デイレイドには、透には「透のフォローバックアップ」が存在しないし、かつて透が「九つの世界の瞳子たち」に施したバックアップは、世界消滅と同時に消滅してしまっている。本人たちが復活しても、その設定だけは消滅したきりなくなってしまうた。

『結局、透だけが……』

うつむき、ぼつりと呟いて瞳子は、デイレイド・カレイドフォームは前を見上げた。

その先には、実体を失って音もなく立ち尽くす縦線の影となつたデイヴォイドがいた。

喰われていた全ての階層の仮面ライダーを解放し、デイケイゴンのシステムに組み込まれていた震をも解き放つた今、デイヴォイドは完全にブランクの状態となつていた。

『多元宇宙は完全に復元され、デイケイドが復活して自らを「システム・デイケイド」から切り離して完全に独立した。もう、水先案内がないお前はどこにも行けないよ。』

デイヴォイドは反応しない。

厚みを感じさせない白と黒の縦縞の影は揺らぐこともなく、頭部の目にあたる部分の「」型に切り抜かれた部位も、特に反応を示さない。

これは、元々こういうものだった。

『さ。あんたを完全に消すよ。』

言つて、デイレイドはすたすたとデイヴォイドの前まで歩いていった。

そして無造作にカレイドブレイドをその縦縞の影の胸に突き立てた。デイヴォイドに、苦悶の反応はない。

瞳子もそれは分かっている。



だがどうでもいい。

瞳子は、「デイヴオイドを消す手段」を実行した。デイレイドの身体から黄色い粒子が立ちのぼり、デイヴオイドへと流入してゆく。

やがてデイレイド・カレイドフォームの拡張機能が解除され、自動でカレイドブレイドから排出された黄色い携帯電話デイレイフォンがデイスブレイをたたむと粉微塵に分解し、粒子化してデイヴオイドに流れ込んだ。

続いてデイレイドベルト・カレイドサーキットも。同様に結束が外れると砕けるように粒子化し、たちまちデイヴオイドへと流れ込んでゆく。

これが、デイヴオイドを消滅させる方法。

同じ容積の土を詰めてやれば、空いた穴は塞がる。

すなわち、他の「システム・デイケイド」とデイヴオイドで対消滅させるのだ。

その為に、瞳子は「デイレイド」を構成する全てをデイヴオイドに注ぎ込んでいる。

やがて、水平に突き立てているデイレイドライバー・カレイドブレイドまでもが粒子化を始め、末端から溶け崩れると先端からデイヴオイドに吸い込まれてゆく。

手の中のグリップの感触がなくなると、デイヴオイドもだいぶ色が薄くなっていた。

ドライバーが消失したことで変身が解除され、無数のドット柄のノイズに包まれて全ての装甲が消え失せた後には瞳子の姿が残った。

「……さて。」

呟いた瞳子は、今度は掌を己の胸の中心に当てると、ゆっくりとそれをはなしてゆく。

すると、その動作につれ瞳子の胸の中心から黄色いカラーアクリルの角材が生えてきた。

デイレイドのシステムとしての中核、ライドピラーだ。

「透のこと、忘れないから。」

手に握るライドピラーにそっと語りかけると、瞳子はそれをデイヴオイドの胸に突き刺した。

たちまちデイヴオイドの体内に飲み込まれてゆくライドピラー。

黄色い塊の角が見えなくなるのと同時に、デイヴオイドも完全に色を失い消滅してしまった。

完全に、消却<sup>デリート</sup>された。

「……………」

達成感はない。

ただ、どうしようもない寂寥感だけが残った。

「透……………」

つい、呟いてしまう。

しばらくは泣き暮れるのだろう。

だけど、絶対に忘れない。

あの唐変木の迷惑暴走超特急のこと。

やがて、大地が微かに揺らぎ、風景の色が薄くなってきた。

今、残存する唯一の「システム・デイケイド」となったデイケイドが、この「ライダー大戦の世界」から離脱したのだろう。

唯一の宇宙認識者がいなくなったことで、この脆弱な世界は存在確率を失い消え去ろうとしているのだ。

瞳子の周囲の空間も歪み始めた。

宇宙の復元作用が働き、宇宙の異物を排除し、瞳子の本来の世界へ戻そうとしている。

還らねばならない。

瞳子は激しく鳴動しながら薄れてゆく世界を眺めながら、圧倒的な復元作用の流れに身を委ねた。

> i 1 7 1 7 5 — 5 3 8 <

「仮面ライダーの世界」から分岐したこの「九つの世界」の宇宙域

は、第四階層以降の階層が全て正常に復元され、全ては元の有り様に戻った。

「デイケイド」が浸食する以前の姿に。

t r a c k ・ 8 1   g e t   o v e r   w i t h (後書き)

今回は、劇場版完結編の、土復活のシーンと連動しています。  
デイレイドのおかげだなどとおこがましい事を言つつもりはありま  
せん。デイレイドは、あくまでデイケイドの装置の一部。土を蘇ら  
せたのは、真に土の仲間たちの願いなのです。

次回、最終回です。

final track 約束の岸辺

unknown spot

全ての色の光を含むが故の目映い白に満たされた空間を、瞳子はひとり、歩いていった。

足場の感触は確かで見下ろせば自分の身体は見えるのだが、足下には影もなく、周囲を見回しても白、白、白ばかりで広大無辺なのかそうでもないのかも判然としない。

「おい。ディレイド。」  
「?」

それは唐突に現れた。

横から無遠慮に声をかけてきた男を、瞳子はゆっくりと振り向いた。放埒な濡れ髪の下から覗く、面白がるような鋭い目つきとどこか拗ねているように見える唇を歪めて立つその長身の男には見覚えがあった。

ただし、本人に直接会うのはこれが初めてだが。

「あらディケイド。」

素っ気なく呼び返した瞳子は平淡な顔のままそちらに歩み寄り、やおら拳を振りかざすといきなり殴りかかった。

「ばし。と軽い音を立てて呆気なく男の片手に受け止められてしまったが。」

「ちょうど良かった。一発殴らせなさいよ。」

「悪いがこんなちゃちいパンチじゃあ殴られてやれないな。」

握った拳を軽く揺すってその男は皮肉げに笑った。

「それに俺は礼を言いに来たんだ。ありがたく聞いておけ。」

「あんたの話なんか知ったこっちゃないのよ。礼なんかいいから一発殴らせなさい。」

にやにやと笑うディケイドの人間態に対し瞳子は平淡な顔のまま腕

に力を加え続けていた。

> i17565—538<

「やれやれ。俺の方のシステムは壊れてるからな。お前のアップロードを受けている今だけなら記憶も復帰してこうして接触もできるから、わざわざ礼を言いに来てやったのに。」

「そりやどーも。分かったからいいから一発殴らせなさい。」

瞳子の拳とそれを握るデイケイドの掌はぶるぶると震えながらも拮抗していると言うのに、微笑むデイケイドの笑顔も半眼の瞳子のかめつ面も、僅かも表情を崩すことがなかった。

「お前はそれしか言えないのか？ありがたく拝聴させて頂きますつて言え。」

「他に用なんか何もないから。いいから一発殴らせなさい。」

「お前な。この俺が礼を言うなんざ宝くじの一等連発するよりもレアなありがたいありがたいことだぞ。聞いておけば御利益があるかもしれない。」

「そんな感謝の気持ちを疑うような確率のお礼なんかいららないからいいから一発殴らせなさい。」

「俺のお礼を聞いて、トモダチに差を付けてみないか？」

「もう色々と間に合ってるからいいから一発殴らせなさい。」

「やれやれ交渉決裂だ。」

「ぼい、と拳を横に放り、男は瞳子の死角の方へ死角の方へと回り込みながら周囲を歩き回る。」

「残念だな。これでお前は俺のお礼を聞き損ねた。」

「最初から言う気なんかなかったんじゃないの？」

巧みに瞳子の間合いを外しながら周囲を歩く男を、瞳子は油断なく見据えて追いながら立ち位置を探る。

白の空間を互いに首を横に向けながらぐるぐる回る様は、もし他にこれを見る者がいたなら非常に滑稽に思う光景だろう。

「それに、だ。ちんけなパンチを喰らってやれない前に、お前には俺を殴る理由がないぞ。」

「なによそれ」

その時、一定の軌道を旋回していたデイケイドが唐突に後退して離れていこうとする。

「！ 待ちなさい！」

「使命の遂行、ご苦労だった。デイレイド。」

その言葉を最後に、男は消え去り瞳子の拳は空を切った。

## 瞳子の世界

はっ、と、唐突に我に返った。

「あ……あれ？」

変な感じがした。まるで長い夢から醒めたような。

瞳子は目を瞬いて周囲を見回した。

「……………」

煉瓦敷きの遊歩道。その一方は掘り返された土が露出した広い広い荒野。

この辺の工事はまだ始まったばかりだと聞いた。

都市開発計画により区切られた場所で、平らに拓かれた荒野の遙か彼方には隣町の高層ビルの群が建ち並んでいるのが見える。

「……………あれ。私、なんで、ここに…………？」

イラストの作業やアイデアが行き詰まった時に良く来ていた町外れのお気に入りの遊歩道ではあるのだが、専門学校の卒業を間近に控えた今の季節には用のないはずの場所でもあった。課題もないのだから。

「……………え？ あれ？」

きよろきよろと辺りを見回す。

前後の脈絡が思い出せない。

卒業間近にしてその後の進路が確定していないことで焦っていたと思うのだが、それでなぜここに来たのかが分からない。

さすがに悠長に散歩できる気分でもなかったから。

「……帰る。」

頭を抱えて状況の理解を放棄した瞳子は、眼鏡の位置を直し、踵を返してアパートの方へと歩き出した。

それなりに人生の重大事だが、無意識に放浪するほどのことでもないだろうに。

ぶつぶつと自分に愚痴りながら帰途を歩く。

と、その時、瞳子の頭上を大きな影がよぎった。

「!?!」

びっくりして思わず屈みながら背後を振り返ると、ちょうどそこにカラスが着地してきたところだった。

「……もう。びっくりさせないでよ」

八つ当たりぎみに文句を言って再び歩き出す。

やがて、専門学校に通う為に二年ほど住んだアパートへ戻ってきた。鉄筋の小洒落た外観ながら比較的安価なアパートの、コンクリートの階段を上がってゆく。

二階の中程の自分の部屋の前まで来た瞳子は、ポケットの中の鍵をまさぐりながらドアノブを掴んで怪訝な顔になった。

「あれ？」

開いてる。

ノブが呆気なく回転したドアが、僅かに隙間を開けていた。

「……あつぶな。鍵締めなかったっけ」

不用心を後悔しつつ首を傾げながらドアを開けた瞳子は、玄関にそれを見つけて得心した。

「なんだ。兄さん、来てたんだ」

玄関には、大きめの男の靴が置かれていた。

見覚えのあるそれは、間違いなく兄の靴。丁寧にそろえて置かれ兄の性格を物語っていた。

兄はしばしば瞳子の元を訪れる。

「兄さん？」



入ってすぐのドアを覗くと、台所のコンロの前に立つ長身の男の後姿があつた。やはり兄だ。

「来てたんだ。」

「瞳子。」

なんとなく繰り返し返す瞳子に、兄はコンロを見下ろしたまま振り返らずに応えた。

ガスが燃焼する音が聞こえる。棚を見れば、唯一やかんがない。兄はお湯を沸かしているらしい。

「瞳子、鍵が開けっぱなしだったぞ。用心だ。」

「まあね。別に盗られるものもないからいいんだけどさ。」

素っ気ないいつもの口調に、瞳子もあっけらかんと応えた。

そっか、やっぱ締め忘れてたのか。

胸中でこっそりと舌を出しながら。

「それは良くない。いつも言っているだろう。施錠ひとつ、大した手間でもあるまい。」

「はいはい。今度から気を付けますって」

やがてやかんの中が沸き立ち、しゅんしゅんと沸騰の気配を主張し始める。

「あ、兄さん、やかん、もういいんじゃない？」

「いや、まだだ。」

兄には妙な悪癖がある。

やかんでお湯を沸かす際、沸騰を示すやかんの笛を、しばらく鳴らしっぱなしにする癖があるのだ。

本人曰く、「やかんのお湯は、鳴ってからもしばらく加熱した方が茶が美味くなる」のだそうだが。

(そんなワケあるか)

友人知人そろって否定しているが、兄はそれをやめようとはしない。ぴーーーーーーーーーーーーーーーー

とうとうやかんが鳴り始めたが、コンロの前の兄は、まるで聞こえていないかのようにじっとやかんを見下ろしている。

「だから兄さん、やめなつて。ご近所に迷惑だし。」

「まあ、待て。もう少しで美味くなる。」

「だから」

—————

唐突に笛の音が止んだ。

ようやく聞き届ける気になったのか。

珍しいこともあるものだと思って兄の背中を見直すが、瞳子はその光景に違和感を覚えた。

(……………え？ あれ？)

どういうことだろう。

瞳子はそれを訝しんだ。

その異常に気付き、不快な冷たさが膝から腰に這い上がる。

そんな馬鹿な。

これはおかしい。

瞳子には兄などいない。

(……………！？)

ふと気が付くと、消えている音はやかんのものだけではないことに気が付いた。

気に障る冷蔵庫の駆動音がない。

窓の外の木のざわめきがない。

まったくの無音。

(……………！？)

そう言えば、やかんの音はゆっくりと静まるのではなく、唐突に途切れた感じだった。

『瞳子。』

無音の世界の中。

目の前の男の後ろ姿が唐突に声を発した。

「…………とお、る…………？」

上擦った声で、そいつの名を、呼んだ。

『うむ。久しぶりだ。瞳子。』

長身の後ろ姿がゆっくりと振り返り、懐かしい顔が記憶にあるのと全く同じ調子の平淡な表情でこちらを向いた。

> i 1 7 5 6 6 — 5 3 8 <

「透っ!?!」

『うむ。瞳子。』

思わずその胸に飛び込んだ。

「透、なんで!?! どうして!?!」

だって、バックアップは全部消えちゃって、復元はもう絶対不可能だったのに!?!

まさか、奇跡?

『奇跡などではない。』

あっさりと、透が思いつきを否定してきた。

「って言うか、思考を読まないでって言ってるでしょ」

『そうは言っても、今の俺は、お前の中に残った僅かなメモリを介して話しているのだがな。』

私の、中の?

『そうだ。だがそれは言わば「残りカス」で、すぐに消えてしまう。今のお前も、一時的に戦いの記憶を復帰させているが、この「残りカス」の消滅と共にその記憶も消えてしまうだろう。』

「そんな…………!?!」

そうだ。思い出した。透と一緒に戦ったこと。九つの世界で戦いを手伝ったこと。透を失ってアリスと一緒に戦い続けたこと。

それがどうして、何事もなかったかのように生活しようとして、拳げ句、居もしない「兄」の立場に透が収まっているのか。

「ってゆーか、なんで私のお兄さんのよ。」

抱き締めていた身体を離して腕を掴み、半眼で睨み付ける。

死んだはずの透が、なんでこんなところにいるのか。

『うむ。最初に偽装用の立場を設定する為に、お前の名字を名乗り、兄ということにしておこうと言っただろう。』

それは覚えてる。さんざんツッコんだものだけど、今となっては懐かしい。

『そして話が前後するが、俺はあの時、完全に「デイレイド」として死亡した。』

「うん？」

唐突な話の転換に疑問符が浮かぶ。

『敢えて人間の例えで話を進める。今の俺は人間のことをよく理解しているからな。』

「どの口が言うかな」

無表情なのに、どこか得意げに言う透がおかしかった。

『死んだ俺は、言うなればその後、「地獄」に落ちたのだ。』

「は？」

なんで、地獄？ なにが？

『人間の定義では、死後、生前の行いが悪かった者は、地獄に落ちて永劫の苦しみに見舞われるのだろう？』

「……はあ。まあ、そうかな。」

『ここは地獄のようだぞ。認識は極端に狭いし、行動にも非常に制限が多い。「九つの世界」の仮面ライダーたちは、こんな不自由な環境下でもあれほどの戦闘力を発揮できていたのかと感心する。』

「……えーと、」

なんか、いまいち話が見えない。

こいつ、相変わらず脈絡をぶっ飛ばしてるな。

『ふむ。ならば簡潔に結論から言い直そう。俺は、高次元知性体としてのディレイドとしては破壊され、膨大な認識と能力を全て失い、階梯としては遙かに下のこの三次元にまで落ちてきて、ただの人間に成り下がったのだ。そして、最初に設定した「瞳子の兄という運命」に組み込まれた。』

「なにそれっ!？」

えーと、「全知全能」な神様が地上に落ちてきて能力を失い、「一知一能」の人間になっちゃった、とか言う嘸を思い出したけど、そう言いたいのか!？」

『うむ。それも正しい例えだ。』

「フザケンなっ!？」

思わずフルスイングで透の頭をしばき倒した。ごとん、と重い音を立てて透が倒れ伏す。

「……………あれ?」

『……………もう俺は「ディレイド」ではない。加減をしないともう一回死ぬぞ。』

透が、渋面で頭を押さえながら起き上がった。

あの透が、痛そうに頭を押さえて……………

「……………つぶっ!?! つあはははははははっ!?!」

『なにがおかしい。』

「あははははははははは!?!」

おかしい。笑いが止まらない。

あの透が、ちゃんと人間になった!

芽生えかけてたあの時の透の気持ちは、消え去ってはいなかったんだ!

こんなに嬉しいことはない!

「良かった! 良かったよ透!」

『良くない。』

笑い転げる私の前で、透は未だ頭をさすりながら不機嫌に呟いた。

『良くないが、悪くない気分だ。』

「あはははっ！「気分」て！透が「気分」て！あはははは！」  
良かった！本当に良かった！  
すごい奇跡だ！

『だから、奇跡などではないと言っただろう。』

「なによ！せつかくの奇跡に水差さないでよ！」

『奇跡ではない。偶然だ。』

「え……？」

珍しく食い下がる透の言葉に、思わず笑いが引っ込んだ。

『奇跡など存在しない。運命とは、事実と結果の繰り返し。そしてその積み重ねたる歴史。過ぎ去った過去の幸せを見ては喜び、不幸を見ては嘆く。所詮、済んでから語ることしかできないもの。』  
真摯に語る透を、黙って見つめた。

『全ては偶然だった。俺が瞳子をパートナーに決めたことも、俺だけでは対処が不可能だったはずのデュアルビーイングを前に瞳子がスクエアフォームを発現できたことも、破壊から復元された時に瞳子から情操の基礎を得たことも、情操が熟成してマスターライダーに反抗したことも。』

確かにそうだった。

語られたそれらは、透の、ディレイドのコンピュータのような完璧な思考だけでは潜り抜けられなかっただろうことばかり。

本当に、ぎりぎりですりかしてきたようなものだった。

『強いて言えば、瞳子。お前が成し遂げた結果ではあるだろう。』

だから瞳子。奇跡などではない。お前が掴み取ったお前の勝利だ。』

「透……」

らしからぬ透の言葉に、思わず胸が熱くなる。

でも、私は首を振った。

「……私ひとりだけじゃないよ。「九つの世界」の私がいだし、「九つの世界」の仮面ライダーとか、みんながいてくれたから頑張れたんだ。」

どの世界に行っても半人前な私のそばに、必ず導いてくれる仲間が

いた。

世界ひとつ背負って戦う仮面ライダーがいてくれたから、ここまで戦って来れたんだ。

「だから、世界も、仲間も、透も取り戻せたのは、みんなが頑張ったから、だよな」

『ふむ。そうだな。』

あごに手を遣った透が、至極あっさりと同意した。

「もう。分かってんの？ できればみんなにお礼を言わせたいところだよ？」

『生憎と、それは無理だがな』

分かってる。ディレイドの能力を失いワールドスライドができない今となっては、全ての世界が無事だということを互いの無事だと思っしかない。

『だが、今のこの一瞬だけ、「九つの世界」の瞳子と接続が復帰しているはずだ。』

「え？ そうなの？」

『一瞬だけだ。俺と会話したお前の感情のニュアンスが、どれだけ他の瞳子に届いているかは分からない。』

良く分からないが、充分だ。

そんな気がする。

『さて。そろそろお前の中に残されていたメモリが消滅する。』

「え！？」

『これ以降はこの世界停止以前から続く歴史に戻り、戦いの情報もなかったことになり、俺たちは互いにただの人間としてこの世界で生きていくだろう。』

そんな。せつかく思い出したのに、この記憶も、頑張ったことも、全部、さつきみたいに何もなかったふうになっちゃうの？

『そんな顔をするな。俺たちは、何も無くしてはいない。そうだろうっ？』

「……………それは……………」

それは、そうだ。

けど……

『失われるかもしれないなかった世界が復元され、自分の世界を取り戻した。その結果を生きているのだ。問題ない。俺はまあ、おまけのようなものだ。』

「そんなことないよ」

そうだ。

私はちゃんと取り戻せた。

それで充分だ。

『うむ。 瞳子。ありがとう。』

「……うん。」

透から出てきた感謝の言葉に驚きながら、これを驚けることを忘れてしまうことを惜しみながら、私も言った。

「ありがとう。透。」

……いいいいいいいいいいいい！！

はっ。と瞳子は覚醒し、目を瞬かせた。

突然笛の音を聞かされたような気がして瞳子は軽く混乱し頭を振った。

そんな馬鹿なことがあるはずがない。やかんの笛の途中で呆然とするなど、できるはずがないではないか。

やけに今日はぼおつとすることが多いなと思いつつ、瞳子は鳴りっぱなしのやかんの前に立つ兄の背を見直した。

「兄さん。もついいんじゃない？」

「うむ。」

だが兄は、それからたっぷり二呼吸は経ってからコンロのレバーに手を伸ばした。



『いぎやーっはっはっはまたやってら！ 透ー！ やかんづるせーぞー！』

その時、玄関の外から罵声が聞こえてきた。

耳障りなその罵声を聞いた途端、瞳子が洗面になった。

「げ。なんであいつが来んの？」

続いて、こん、こんとドアをノックする音が聞こえてくる。

『さ・て。我らが唐変木のお湯のおまじないが済んだのなら、とつとと出てきてくれないか』

同様に、玄関の外からもう一人の声が呆れたように呼びかけてくる。

「ちよつと兄さん。なんであいつらがここに来てんの？」

「うむ。これからあいつらと出掛ける予定だった。その前にここで茶の一杯も飲んでから行こうと思っていたのだがな。せつかちな奴がいるらしい。」

ようやくコンロの火を止めて、兄が平淡にぼやいた。

「仕方ない。このお湯はお前にやる。」

「そりやどーも。」

コンロの前から離れた兄は、道を譲った瞳子の前を横切って居間のソファの背もたれにかかった上着を取り上げた。

「ところで瞳子。お前、今後の進路はどうする」

「え？」

問われて、瞳子は虚空を見上げ、頭を掻いた。

「ん〜。まだ決めてないけど。 どうしょ。」

なぜか不思議な気分だった。

ついさつきまで、将来が不安で絶望していたような気がするのだが、今はなんだか、なんでもできるような気がして、特に不安はない。

「とりあえず仕事探そうかな。」

「イラストのか？」

「ううん。絵はいつでも描けるから。まずは何か、できることで働こうかなって。」

上着に袖を通した動作の途中で動きを止めた兄が、怪訝な顔で瞳子

を見つめた。

「いや、ほら、プロのイラストレーターだったって、何もかも好きに描けるワケじゃないし、好きに描きたいだけなら、趣味でやっててもいいかなって思ってる。」

「ふむ。そうか。……そういうことなら」  
上着を着た兄が、再び瞳子の前を通り過ぎながら言った。

「あとで一緒に相談しよう。お前向きの仕事があるか分からんが、俺の知り合いに紹介することもできる。警察、弁護士、郵便局、雑誌社、それから……」

「それ全部、今からじゃ無理じゃん」

兄が数え上げる職業に苦笑してはたばたと手を振った。

「まあでも、なんだってやってみるよ。」

「うむ。前向きで結構だ。」

靴を履きながら、兄の背中が応えた。

「瞳子がしっかり考えているようで安心した。用が済んだら、また来る。」

「うん。いつてらっしゃい。」

立ち上がった兄に、軽く手をひらひらさせる。

「それから、あいつに「死ね」って言つといて。」

「うむ。行ってくる」

そして兄は玄関を出ていった。

兄が忠実に伝言したのだろう、外の通路から「うるせえクソ女！」という罵声と鈍い打撲音が聞こえてきた。

「……やれやれ。」

兄とその悪友とやらの遣り取りに溜め息を吐いた瞳子は、やかんの始末のために台所に向かった。

歩きながら、兄の怪訝な顔を思い出す。

もしかしたら、兄は自分の進路を心配して今日ここに来たのだろうか、ふと思いつく。

確かに、自分の心変わりには自分でも驚いている。

なぜかは分からないが、ちゃんと世界と向き合い、世界のことを良く知ろうと考えている自分がいる。

（なんでかな。）

呟くも、答えは出さず。

だが、いま求めるべきは明日の道行き。

瞳子は、兄が沸かしたやかんを取り上げた。

> i 1 7 5 6 7 — 5 3 8 <

D e l a y e d   m i s s i o n   c o m p l e t e . . .

final track 約束の岸辺（後書き）

かくてデイレイドは使命を全うせり。  
略してDMC。

DMC！ DMC！ DMC！

ようやく終わりました。松山ケンイチの演技は素晴らしかったですね。

「小説家になろう」に出会って長いこと書かせて頂いていますが、実はこれが鉄槻がまともな完結させた二作目の作品になります。

他の作品はどうしたかと言いますと

ですがこの作品のおかげで、小説の書き方の良い勉強になりました。ちようどポメラを使い始めた時期でしたので文字数を意識できるようになったりとか、テレビでの場面転換を参考にシーンを分割できるようにになったりとか。

それらをさて置いたとしても、とにかく書いて楽しい作品でした。セミアリジナルとして作品世界をお借りしましたが、原典にも登場した「九つの世界」のリイマジネーション仮面ライダーのキャラクターにも大いに助けられました。

と言っても彼らの人格設定には鉄槻の解釈が多分に混じってますが。

と、言うところのデイレイドマスカークレイド登場人物人気投票の結果。

二十位まで発表致します！

第一位・神楽見 瞳子！ 真の主役の貫禄で走り抜けました！

第二位・神楽見 透！ こんな唐変木に票を寄せて頂いてありがとうございます！

第三位・相川 初ちゃん！ 三強は揺らぎませんでした！

第四位・芦河 翔一！ 鉄槻解釈の一番の被害者な気がしますが、受け入れて頂けてありがたいことです！

第五位・双葉 恭也・音無 美穂・尾上 巧！ 借用キャストの美穂さんが、同列五位に並びました！もふさんありがとうございまして！

第八位・葵 遥！

第九位・台場 和馬！ 鉄槻オリジナル勢にも得票頂きありがとうございます！

第十位・相模原 修二！ なぜか票の伸びが凄かった。暑苦しいのに、愛されてるなあ。

第十一位・剣立 一真！ 彼の真摯な態度が伝わったのでしょうか。それともドツキっぷりが良かったのでしょうか。

第十二位・デイシエッド！ 悪役なのにたくさん票を頂きました！ 気に入って頂けて嬉しいです！

第十三位・辰巳 真司！

第十四位・天堂 総司！ 原典出身の彼らの表現が、きちんと伝わっていたということでしょうか？

第十五位・糸矢 僚！ キャラの表現にかなり苦心したんですが、受け入れてもらえたようですね！

第十六位・竜胆寺 良男！ 「男」を見せてからの追い上げが凄かった。ごめんね格好良くて。

第十七位・騎端 勇治・甲斐 当麻！ まさかの理事長先生と、元・デイエンド。出番少ないのに健闘しました！

第十九位・アリス！ 後半、頑張ったもんね！

第二十位・ザ斬鬼・魚虎 鏡慈！ ザ斬鬼はまあほぼ斬鬼さんなんです。魚虎も、忌々しいけど嬉しいよ！

ほか、全てのキャラに得票を頂きました！

彼らが彼らであることに反応を頂けたことは本当にありがたいことでもあります。

瞳子のランキングにつきましては、

- 第一位・ウエイトレスの瞳子！
- 第二位・音撃道見習いの瞳子！
- 第三位・学生の瞳子！
- 第四位・ヴァイオリニストの瞳子！
- 第五位・旅人の瞳子！
- 第六位・郵便局員の瞳子！
- 第七位・雑誌記者の瞳子！
- 第八位・警察官の瞳子！
- 第九位・弁護士 of 瞳子！
- 第十位・絵描きの瞳子！
- 第十一位・ネガの瞳子！ ネガ世界じゃしょうがない！

という結果になりました！  
各世界での書き分けが通じていたと思つてよろしいでしょうか？  
十一の瞳子と、登場した全ての彼らを気に入って頂いて、ありがとうございます！  
うございました！

長いことかかってしまいましたが、感想や評価、拍手でのコメントなど大いに心の励みになりました。ちんたらしていましたが、ようやく終わりに辿り着きました。  
また、キャラを貸して下さった「なるう」作家の皆様におきまして、大変助かりました。話の展開が思わぬ方向に転がったりという良い刺激になりました。  
そして、こんな長つたらしい物語にお付き合い下さいました読者の皆様に、多元宇宙を渡るほどの大きな感謝を。  
本当に、ありがとうございます！

それでは次回作「俺がこんなに可愛いわけがない！」でお会いしましょう。  
ただし忠告しておきますが、くれぐれも真に受けないうつ気を付け

てください。俺がこんなに可愛いわけがないですから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8037h/>

---

ディレイドマスカークレイド 仮面ライダー ディケイド外伝 仮面ライダー

2011年3月8日20時20分発行